

戦国†恋姫X 犬子と九
十郎

シベリア！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は『犬子と九十郎』の物語である。

世界史はやたら詳しいが、日本史はぶつちやけ疎く、剣術バカで、バッファローマンのような体格の九十郎が、戦国時代で安寧な生活を目指す物語。

そんな九十郎が前田犬子利家と出会い、共に生き、共に悩み、共に戦う物語。
犬子と九十郎の物語である。

こちらのページではR-18描写が無い回のみを掲載しています。

話数が飛ぶ箇所は、R-18描写がある回で、犬子と九十郎（エロ回）に投稿してい

ます。

URL『<https://syosetu.org/novel/107215/>』
pixivにも同じ作品を投稿しています。

目次

戦国十恋姫X 犬子と九十郎第1話

『ヤツちまつた』 1

犬子と九十郎第2話『竹千代』 18

犬子と九十郎第3話『初陣』 45

犬子と九十郎第4話『筭』 61

犬子と九十郎第5話『稻生の戦い(前編)』 75

犬子と九十郎第6話『稻生の戦い(後編)』 90

犬子と九十郎第7話『突然の死』 110

犬子と九十郎第8話『好きになっても良

いよね?』 138

犬子と九十郎第9話『邪風発迷』

167

犬子と九十郎第10話『練兵館』

190

犬子と九十郎第11話『ウインチェス

ター・ライフル』 219

犬子と九十郎第12話『パートタイム森

一家』 243

犬子と九十郎第13話『ナイチンゲール

に土下座しろ!』 271

犬子と九十郎第14話『縁談』 287

犬子と九十郎第15話『決裂』 310

犬子と九十郎第17話『出会い(前編)』

334

犬子と九十郎第27話『九十郎死す』

462

犬子と九十郎第21話『呑気な連中』

犬子と九十郎第28話『早雲』

485

350

犬子と九十郎第22話『狩りの時間』

犬子と柘榴と九十郎第29話『神道無念流くださいっす!』

513

365

犬子と九十郎第23話『約束』

犬子と柘榴と九十郎第30話『おビール様!』

531

犬子と九十郎第24話『あっぱれ!天下御免』

犬子と柘榴と九十郎第32話『ハーバー・ボツシユ法』

552

犬子と九十郎第25話『大江戸学園御前試合』

犬子と柘榴と九十郎第33話『頭痛・幻聴』

573

犬子と九十郎第26話『敗北の記憶』

犬子と柘榴と九十郎第36話『葛尾城攻略戦(前編)』

595

443

423

443

略戦(前編)』

595

- 犬子と柘榴と九十郎第38話『葛尾城攻
略戦(TAKE2)』————— 617
- 犬子と柘榴と九十郎第39話『井伊直政・
通称ニート』————— 631
- 犬子と柘榴と九十郎第41話『そうだ、京
都に行こう』————— 653
- 犬子と柘榴と九十郎第42話『エンカウ
ント』————— 675
- 犬子と柘榴と九十郎第44話『茶会と酒
宴』————— 692
- 犬子と柘榴と九十郎第46話『犬子達の
戦いはこれからだ!』————— 720
- 犬子と柘榴と九十郎第47話『光璃と九
十郎がひたすらいちやつくだけの話その
1』————— 742
- 犬子と柘榴と九十郎第49話『信虎襲来』
————— 765
- 突発ネタ 朱里と鈴々と九十郎 ———— 785
- 犬子と柘榴と九十郎第50話『腹ペコ忍
者、段蔵ちゃん』————— 791
- 犬子と柘榴と九十郎第51話『純然たる
怪異』————— 812
- 犬子と柘榴と九十郎第55話『女の子押
し付けられました!』————— 825
- 犬子と柘榴と九十郎第56話『前田利家
終了のお知らせ!』————— 854

犬子と柘榴と九十郎第57話『I lo ve you、I want you』	883	犬子と柘榴と九十郎第65話『官兵衛』	1001
ネタバレ満載 設定メモ	904	犬子と柘榴と九十郎第66話『金ヶ崎の 戦い』	1048
犬子と柘榴と九十郎第60話『お母さん』	916	犬子と柘榴と九十郎第69話『ただしそ れは、善意によつて舗装された地獄への 道』	1071
犬子と柘榴と九十郎第61話『この日、雫 は混乱していた』	937	犬子と柘榴と九十郎第70話『夜会話の お時間』	1099
犬子と柘榴と九十郎第62話『黒田官兵 衛うっかり誘拐事件』	958	犬子と柘榴と九十郎第71話『来ちゃつ たんだぜ』	1123
犬子と柘榴と九十郎第63話『熱烈歓迎 ！ 小寺官兵衛様！』	979	犬子と柘榴と九十郎第72話『春日山城』	
犬子と柘榴と九十郎第64話『似ている』			

- 奪還作戦』—— 1149
- 犬子と柘榴と九十郎第75話『美空、怒る』—— 1174
- 犬子と柘榴と九十郎第76話『歴史を變えろ』—— 1195
- 犬子と柘榴と九十郎第79話『ハイワナセカイ』—— 1216
- 犬子と柘榴と九十郎第80話『レイズ』—— 1232
- 犬子と柘榴と九十郎第81話『復活の半兵衛』—— 1249
- 犬子と柘榴と九十郎第82話『それはきつと死に至る病』—— 1273
- 犬子と柘榴と九十郎第84話『英雄も、所詮は人間』—— 1300
- 犬子と柘榴と九十郎第85話『忘却と情愛のルーン』—— 1327
- 犬子と柘榴と九十郎第86話『初めましてじゃないし』—— 1351
- 犬子と柘榴と九十郎第88話『逃走中く捕まったら即孕ませレイプく(その1)』—— 1366
- 犬子と柘榴と九十郎第92話『サキユバスの爪痕』—— 1384
- 犬子と柘榴と九十郎第93話『呑牛の術』—— 1403

犬子と柘榴と九十郎第94話『死闘』

1421

犬子と柘榴と九十郎第95話『54年早

い真田丸』

1442

犬子と柘榴と九十郎第96話『前哨戦』

1462

犬子と柘榴と九十郎第97話『空の夢、空

の理想』

1485

犬子と柘榴と九十郎第98話『姫野』

1510

犬子と柘榴と九十郎第99話『美空の思

惑、綾那の思惑、一二三の思惑』

1535

犬子と柘榴と九十郎第100話『犬子襲

来』

1559

100回記念突発ネタ企画『カミサマは

言いました』

1576

犬子と柘榴と九十郎第101話『前田利

家だから出会った、前田利家だから愛さ

れない、ただの犬子とは思われない』

1584

犬子と柘榴と九十郎第102話『決着の

時』

1610

犬子と柘榴と九十郎第105話『4分の

3くらい九十郎が悪い』

1633

犬子と柘榴と九十郎第107話『表裏比

- 興と書いてクソヤロウと読む』—— 1652
 犬子と柘榴と九十郎第109話『それは普通に児童虐待だ』—— 1667
 犬子と柘榴と九十郎第110話『美空、出荷される』—— 1691
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第111話『今日も一二三は平常運転』—— 1713
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第112話『雫、またもや失言する』—— 1738
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第115話『雫、キレル』—— 1760
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第116話『それぞれの身の振り方』—— 1783
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第117話『やっぱり似ている2人』—— 1803
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第119話『今明かされる衝撃の真実』—— 1826
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第120話『悪魔が囁いた』—— 1852
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第121話『迫る決戦の時』—— 1872
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第123話『しばらくよろしく』—— 1893
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第126話『只今裏切り準備中』—— 1915
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第127話

- 『裏切者』—— 1935
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第128話
- 『遅刻』—— 1955
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第129話
- 『それはそれ、これはこれ』—— 1977
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第130話
- 『元氣万倍』—— 1998
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第131話
- 『九十郎、やつと気づく』—— 2024
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第132話
- 『あんた誰?』—— 2042
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第133話
- 『乱戦、混戦』—— 2060
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第143話
- 犬子と柘榴と一二三と九十郎第135話
- 『巨星が墜ちた日』—— 2077
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第136話
- 『第二次これからどうしようか会議』
 2095
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第138話
- 『蘭丸の策』—— 2120
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第140話
- 『春日山城炎上』—— 2140
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第141話
- 『我は武田信玄、明日この世界を肅清す』
 2160
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第143話

- 『劍丞には聞かせられねーわ』—— 2180
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第144話
- 『失言』—— 2203
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第145話
- 『母子の会話』—— 2227
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第148話
- 『スターは取得できるので問題ありません』—— 2252
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第149話
- 『成敗』—— 2280
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第151話
- 『本多忠勝+小刀||死亡フラグ』—— 2308
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第152話
- 『劍丞隊全滅（前編）』—— 2328
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第154話
- 『獣化の術』—— 2347
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第156話
- 『じゃあ犬子は逃げるから後は頑張つてね』—— 2365
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第157話
- 『開戦』—— 2393
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第158話
- 『グングニル』—— 2411
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第164話
- 『怒りの拳』—— 2434
 犬子と柘榴と一二三と九十郎第166話

『駆け付けた者達』

2460

犬子と柘榴と一二三と九十郎第170話

『立て、撃て、斬れ』

2482

犬子と柘榴と一二三と九十郎第172話

『大乱交のあとしまつ』

2504

犬子と柘榴と一二三と九十郎第172話

『大乱交のあとしまつ』

2529

犬子と柘榴と一二三と九十郎第173話

『エンド・オブ・リバーズ』

2554

犬子と柘榴と一二三と九十郎最終回『こ

こから先の物語にあえて名前をつけるの

ならば』

2579

完走した感想

2600

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ2

『省略された幕間シリーズ・鳥の場合(前

編)』

2605

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ4

『省略された幕間シリーズ・光璃の場合』

2626

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ6

『省略された幕間シリーズ・天草四郎の場

合』

2649

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ7

『省略された幕間シリーズ・柘榴の場合』

2683

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ10

『省略された幕間シリーズ・一二三の場合

(後編)』

2714

孔明と九十郎おまけ11 『忙しい人のための超ダイジェスト孔明と九十郎』

2733

戦国†恋姫X 犬子と九十郎第1話『ヤツちまった』

今、俺の眼前に半裸の前田利家が横たわっている。

改めて状況確認をしたら訳が分からない事になっているが、残念ながら現実だ。

3つ年下の後輩、桂と買物をしていたら、暴走トラックが突っ込んで来た。

咄嗟に桂を突き飛ばしたが、俺は逃げ遅れて轢かれた。

自称転生を司る神が現れ、まだ殺す予定じゃなかったのに手違いで死なせました。

お詫びに戦国時代に転生させます。

貴方は特典無しでも十分過ぎる程にチートだから、転生特典はあげません。

とか何とか言つて……気がついたら戦国時代に生まれた赤ん坊になっていた。

でだ……

「九十郎……」

あの有名な前田利家が、日本史に疎い俺ですら名前を知っている前田利家が、槍の又左が……俺より数えて2つ分幼く、非常に可愛らしくしかも巨乳の女の子でもある犬子

が、硬直する俺を不安げに見上げている。

見事なおっぱいだ、大事な事なので2回言うが、実に見事なおっぱいだ。

俺は唾をごくりと飲み込んだ。

「犬子……」

少女の名を呼ぶと、その肌がピクンと跳ね、頬が赤らんだ。

服ははだけ、肌は上気し、割と大きめの胸は完全に露出して、下着は……下着は僅かに、しかし確実に湿気を帯びていた

その視線から不安と期待の入り混じった感情が見えた。

俺が犬子を抱くのかどうか、俺が犬子を女として見ているかどうかを、犬子は知りたがっている、確かめたがっている。

だが……だが俺は……

「犬子……俺で……俺で良いのか？」

犬子は大きく一回頷いた。

迷うそぶりは一切無かった。

「俺は……俺は苗字すら無いただの極貧農家の子で……お前は荒子城主の……」

「勘当されちゃったから、今はただの犬子だよ」

犬子は少し不機嫌そうにそう漏らす。

確かに今、犬子は織田信長……何故か女の子になつて信長の異母弟を殺害し、勘当されてしまつてゐる。

もつとも、勘当された原因を作つたのは俺だが。

(作者注) 違います。

そつと犬子の髪を飾る、小さな筈に手を伸ばす。

犬子が元服した日に送つたプレゼントであり……犬子が勘当された原因になつた忌まわしき物品だ。

あの事件があつてから、犬子はその筈を肌身離さず……本当に1分1秒の例外すら無く身に着けている。

もう2度と離さない、これは私の逆鱗だ、私の魂だと言わんばかりに。

その事実が、俺にとってはひたすら重かつた。

「俺は……」

俺は戦国時代で生き延びるべく必死になつて前田利家に取り入ろうとした。

前田利家は織田信長と豊臣秀吉……天下人一步手前と天下人に重用され、長生きをして、最後は畳の上で死んだ事を知つていたから……ただそれだけの理由でだ。

確かに俺は必死になつて犬子に気に入られようとしていた。

していたが……将来的に犬子を娶るつもりであつたかと問われれば、それは無いと答

えるだろう。

前田利家はまつという名の嫁を貰い、まつのを助けを得て出世をしたのだと聞いた事がある。

俺が犬子を妻にしたら、歴史の流れが変わるのではないかと心配しているのだ。

「九十郎じゃなきや、ヤダよ」

犬子はそう宣言した。

確かな意志と決意を籠めた声でそう宣言した。

それは俺にとって、歴史の否定以外の何物でもない。

俺の指先が、筭に触れる。

俺以外の誰が触っても、まるで逆鱗に触れた龍が如く吠え、比喻表現でなく噛み付く犬子であったが……今の犬子は穏やかだ。

かつて桂は言った。

『先輩、歴史には分水嶺というべき場所があります。

明智光秀における本能寺、ガイウス・ユリウス・カエサルにおけるルビコン川、

呂奉先における董卓暗殺、マハトマ・ガンジーにおける罪の告白……

キリが無いのでこの辺にしておきますが、トラック転生モノでは、

案外簡単に、そして大きく大きく歴史を書き換える事ができる瞬間があるものです』

あくまで流行りのネット小説の話であるが、今の俺の状況に笑える程に合致する。

『そういう重要な場面でBACCANO!できたらきつと楽しいですよね!』

いつそ今すぐこの場に乱入して来てくれと俺は願っていた、祈っていた。

「……………ここが俺のルビコン川なのか?」

静かにそう呟いた。

「るび……………こん……………カエサル……………」

脈絡のない呟きを聞き、犬子がさらに不安そうな眼差しを向けてくる。

迷っていられる時間は無い、すぐに決断しなくてはならない。

股間の肉棒はビンビンに隆起していた。

犬子に欲情し、今すぐにでも抱きたい、挿入したいと叫んでいるかのようだった。

最初に会った時に比べて、出る所は出て、引つ込む所は引つ込んだ、女らしい体つきになっていった。

身長は伸びる気配が無いが、胸はでかい。

何ともまあ……………俺好みの体つきになっていった。

「九十郎の……………大きくなってるね……………」

犬子が股間の肉棒を凝視していた。

クリクリとした純真で幼い瞳が俺の欲望を見据えていた。

見据えた上で、理解をした上で……犬子喉がごくりと鳴り、両脚が僅かに広がった。それは無言の意思表示であった。

俺の欲望を、願望を受け入れる……いや、このまま結ばれる事を望んでいると告げていた。

「犬子……」

「九十郎……」

名前を呼び合う。

ただそれだけで胸が高鳴る、両肩に力が入る。

額から、両手から、止めどなく汗が流れる。

何が犬子をこうにまでさせたのかはまるで見当もつかないが……いずれにせよ今の犬子は、抱こうとすれば抱かれるだろう、孕ませようとすれば孕むだろう、そして……娶りたいと言えば、喜んでその身を差し出すだろう。

抱けば恐らく情が沸く。

俺は童貞だ……前の生でも、今生でも。

だから決めないといけない、犬子を抱くのか、一線を引くのかを。

俺の脳内では、水木一郎が炎の笑顔で熱唱している。

今すぐ、この場で……決めないといけない。

何が悪かったのか、何をすべきなのか。

俺の脳裏には、前田又左衛門犬子……いや、前田犬千代との日々が蘇ってきていた。

……

……

……

「九十郎！ 覚悟おーっ!!」

1人の少女が長棒を片手に、むしろを編んでいる少年に殴りかかっていた。

少女の名は前田犬千代……後の前田犬子利家である。

相対するのは犬千代より2つ年上の少年九十郎……苗字は無い、ただの九十郎。

極普通の極貧農村マンである筈の少年九十郎は、まるで襲われる事が分かっていたかのように慌てず、騒がず、そして淀み無く傍らに置いてあったお手製の武器に手を伸ばす。

「10年早いっ!」

「ぎゃわーっ!」

そしてあつという間に、九十郎が竹刀と呼ぶ竹を束ねた模造刀により、犬千代は叩きのめされた。

まともに当たれば頭蓋骨が粉碎される勢いで振るわれた長棒は、九十郎に掠り傷一つ

付けられずに宙に舞った。

これがいつもの2人の風景……もう3年近く、毎日毎日続けられている2人の日常風景だ。

背後から襲った時もあった、食事中に襲いかかった時もあった、真夜中の時も、早朝の時もあった……結果は全て同じであった。

得物が長ければ有利かと思ひ、ここ最近の犬千代は三間半の長棒で九十郎に挑む。

自分だけ武術の心得が無いのは不利かと思ひ、数か月前から犬千代は、尾張荒子城主であり、2000貫の知行を有する武士でもる母・前田縫殿助利昌に頼み込み、馬術や槍術の手ほどきを受けている。

そうした努力の甲斐あつてか、それとも彼女に才があつたのか、犬千代はメキメキと実力を伸ばしつつある。

……それが九十郎の狙い通りである事に、犬千代は気づいていない。

「とりあえず、座れ」

九十郎は小さな襲撃者に短くそう告げると、竹刀を置いて作業に戻る。

犬千代はすつ飛んでいった長棒を拾い上げると、近くにあつた切り株にちよこんと腰掛けた。

どちらが言いだした事でもなかつたが、負けた方は勝つた方の言う事を1つ聞く……

そういう暗黙の了解が2人の間にはあった。

もつとも、今の所九十郎は百戦百勝、毎回毎回犬千代の側が、全く同じ頼み……いや、話を聞く事になっていた。

「見ろ犬千代、少し前から薪割りの合間に作っていた」

九十郎は昨日完成したばかりの船の模型を犬千代に見せた。

「この間見せたガレオン船とは少し形が違うだろう？」

「バーク型船と呼ばれている船だ」

「ばあく……？」

いきなり訳の分からない事を言われ、犬千代は頭の上に何個も何個も『？』マークを浮かべだす。

「バーク型船は元々石炭の運搬に使われていた船だ。

ずんぐりとした形状で堅牢な造り、積載量の多さと安定した航行が長所。

その代わり少々速度が出ない。

その辺りを改良したクリッパー船は、仕事の合間に作っている途中だ」

「り、りろんは知ってる……」

また九十郎の馬鹿話が始まったよ、こうなったら長いんだよなあ……口には出さないが、犬千代はそう考えている。

こういう学術的な話を聞くよりも、剣や槍を振るい、馬を駆り弓矢を射る方が犬千代の性に合っているのだが……九十郎は気づいていない。

「キャプテンクックが一回目の探検航海に使った船『エンデバー』はこのパーク型だ。クックの話は覚えているか？」

「え、えつと……キャベツの酢漬けで、かい……かい……何かの病気を治した人」

「壊血病の予防法を発見した人だ。オーストラリアとハワイを発見した人物でもある」

なお、九十郎はまだ気づいていないが、キャプテンクックは西暦1728の生まれ、早い話が未来の人物だ。

この男、日本史はうろ覚えなので、今が西暦換算で何年にあたるのかを理解していないのだ。

「そうそう、快傑病」

「何だそのズバつと参上しそうな病気は……？」

「いやしかし、どうも船乗りの話はウケが悪いな。」

クリストファー・コロンプスも話したが、あまり覚えていない様子だったし……」

「いんでいあんを沢山殺した酷い人！」

「他には……」

「えっと……あの……西に向かって船を出した人？」

「合つてはいるが本質はそこじゃない。」

ううん……今日はクツクの最後を話すつもりだったが、予定変更するか。

犬千代、今日は軍記を話そう」

「本当?!？」

犬千代の耳と尻尾がピクンと跳ねる。

無論、尻尾は作り物の装飾品だが……犬千代の感情は、尻尾に出やすい。

九十郎はそんな犬千代の様子を見ながら、自分の知識の中から面白そうな戦争話を検索する。

「さて……カエサルは話したよな？ アレキサンダーもチンギス・ハーンも粗方語ったし、

ナポレオン……は、砲兵の運用を説明するのが面倒だな。

アメリカ繋がりでジョージ・ワシントン……

あれは語ると長くなるな、犬千代の集中力が保つか？」

なお、九十郎はまだ気づいていないが、ナポレオン・ボナパルトは西暦1769年生まれ、つまりは未来の人物だ。

「九十郎！ アレキサンダーの話もう一回聞きたい！」

「同じ話を2回も3回も繰り返したくは……」

ああそうだ、ハンニバルの話はやってなかったな。

紀元前219年にローマとカルタゴ起きた、

第2次ポエニ戦争で活躍したカルタゴの將軍だ」

「ろおまつて、確かカエサルが居た国だったよね？」

「ああそうだな。ただしカエサルは紀元前44年の生まれで、

第2次ポエニ戦争が起きた時には生まれてすらいない」

「カエサルつて、ろおまが大変な時に限って居ないね……」

「人の一生は長いようで短いからな。そしてローマ帝国の寿命は異様に長い。

ローマ帝国の最後をどこにするかについては諸説あるが……

オスマン帝国によるコンスタンティノープル侵攻の年とするなら1453年、

西ローマ消滅の年と考へても476年、都市国家ローマ成立が紀元前753年だから

……

短く見積もつても1200年続いているな、カエサル1人じゃどうにもならん」

「西……ろおま……？」

「395年、時のローマ皇帝であったテオドシウス1世の死去がきっかけになって、

ローマ帝国は東西に分裂している。広大な領地を東と西で分け合うようにな」

「南北朝みたいに？」

犬千代が母に教えられたばかりの歴史の知識を持ち出した。

いつもいつも九十郎に言われるままであった彼女であったが、たまには少し背伸びをして、自分が話をする側に回りたいと思う時もあった。

「南北……中国の話じゃないよな、日本の方は……」

ああ、すまん犬千代、その辺は良く分からん

だがしかし、この男の日本史知識は小学生と同レベルである。

南北朝時代に関する知識等、そういう名前の時代区分があったな程度のものでしかない。

「ふふくん、そしよがないなあ九十郎は。」

それじゃあ今日は犬千代が九十郎に教えてしんぜようじゃないか〜

自慢げに鼻を鳴らして、犬千代がガバツと立ち上がる。

犬千代は元来、活動的で同じ場所ですっとしていられない性格の少女だ。

勝負に負けた結果とはいえ、他人の話を黙って聞いているだけというのは割と苦痛だったのだ。

「では拜聴しよう。南北朝とはどんな効果だ、いつ発動する」

九十郎は少し意地悪そうに口角を上げ、犬千代に話の続きを促した。

彼の脳裏には、犬千代が次に発するであろう言葉が明確に予想できていた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、南北朝とは……南北朝つてのは……ええと……」

今の犬千代に南北朝時代を他人に能力は無い。

親の話も、九十郎の話も、基本話半分で聞き流していたからだ。

「よ、吉野……の……いや、吉野で……後醍醐天皇が……」

足利の將軍と喧嘩して……喧嘩してた時代？」

「他には？」

「えと……あの……あうう……」

九十郎はそれ見た事かと、先程以上に口角を上げた。

「少しばかり身体を動かそうか」

言葉を詰まらせる犬千代に対し、九十郎はむしろ編みを中断し、竹刀を握る。

極貧農家の倅として、長時間作業を滞らせるのは良くないと分かっているのだが……

かと言って犬千代にとって退屈極まる話を延々と続け、犬千代が九十郎から離れられる

のは困る。

それはつまり、将来における安泰な生活が遠のくのと同義である。

「……吠え面かいても知らないよ」

「やってみろ」

竹刀を両手で握り、剣先を相手の目に向けて構える。

正眼の構え……剣道においては最も基本的で、最も隙の少ない構えだ。

「犬千代の強い所、今日という今日こそは九十郎に見せてやるんだから！」

実際の所、犬千代は強い。

同年代では負けなしだ……九十郎さえ居なければ。

九十郎が犬千代の前に現れなければ、少女はここいら一帯のガキ大将になっていただろう。

だがしかし……前の生において、九十郎は剣術馬鹿と呼ばれていた。

道場の運営に命を懸けていたとか、竹刀だけ振っていれば幸せな男とか呼ばれていた。

その九十郎が、生まれてから10年も経っていない小娘に負けるなど、

ありえない話であった。

「とりやあああああ……っ!!」

「面っ！」

パァン!! と、小気味良い音と共に、犬千代のデコが叩かれる。

大怪我をしないように手加減はされているが、少女の額はヒリヒリと痛む。

「うう……」

「そら、今日は気が済むまで付き合つてやる。

一度や二度叩かれた程度で諦めるつもりか？」

「まだまだあつ!!」

犬千代が長棒を握り直し、九十郎に向かって突進する。

「ぬるいつ!」

鋭い突きを掻い潜り、九十郎は竹刀を犬千代に叩きつける。

手加減はされているが、少女の脇腹がズキズキと痛んだ。

「真つ直ぐ突つ込むだけなら猪にでもできる。

腹に力を籠めろ、腋を締めろ、前を向いて顎を引き、呼吸を整えろ」

「そんな事……そんな事、言われなくなつて」

「来い」

「たああああつ!!」

「甘いつ!」

長棒による薙ぎは……ギリギリの所で届かず、犬千代が再び構え直すよりも早く肉薄し、その脛を蹴手繰った。

「剣先にはかり注意を向けるな、見るべき場所は末端よりも重心、

剣先指先よりも肩と腰だ」

「分かってるってばー！」

身体中に纏わり付く土埃も気にせず、転んだ拍子に擦りむいた膝も気にせずに、犬千代は長棒を拾って立ち上がる。

「来い」

「でやあああああーっ!!」

全身がズキズキと痛んでも、犬千代はこの瞬間が大好きであった。

少しずつ、少しずつ、自分が研ぎ澄まされていく感覚が好きだった。

少なくとも、良く分からないろおまの話や、航海の話の黙って聞いているよりは。

こうした犬千代と九十郎の毎日は、天文20年、西暦換算で1551年、犬千代14歳、九十郎16歳（数え年）、犬千代が織田久遠信長に小姓として仕えるようになる日まですり続いた。

九十郎が未来の知識を有する者である事、前田利家の信頼を得て、安泰な生活を確保してくれるわあ……等と考えている事を、犬千代はまだ気づいていない。

犬千代が……いや、前田犬子利家が九十郎からそれを告げられるのはもう少し後……犬子が初めて九十郎に抱かれる日の事、九十郎が散々葛藤した挙句、結局堪え切れずにヤツちまった日の事である。

犬子と九十郎第2話 『竹千代』

……朝日が眩しい。

目がしばしばして、頭はズキズキする。

足元はふらつき、小鳥の鳴き声さえも煩わしい。

たぶん原因は寝不足だ。

「……犬子、大丈夫か？」

「すごく痛かったよ、九十郎。」

それにお股の所、何か挟まってる感じがする……」

俺に手を引かれ、歩く少女は内股だ。

昨晩は夜遅くまで、男と女の情欲をぶつけ合い……まあ端的に言つてエロい事をしていた訳だ。

結局、俺は欲望と衝動に負けてしまった。

歴史を変える選択、俺にとってのルビコン川を渡ってしまった。

一度初めてしまえば、前の生でも今生でも童貞であった俺に、自重だの抑えだの効く筈も無く、一晚中……一生分の精をブチ撒けるかのような交合を演じてしまった訳だ。

おまけに俺が未来の知識を持っている事とか、前の人生でどんな事をしていたのかとか、洗いざらいブチ撒けてしまった。

「歩けそうか？」

犬子の唇にむしやぶりつきたい、乳首を吸い、乳房を揉みしだきたいという欲求を必死に抑え、俺は最低限文化的な対応を捻り出す。

これ以上時間を浪費したら追手に捕捉される、ハッキリ言つて自殺行為だ。

「ど、どうにか……どうにか歩けるけど……ちよつと辛いかも……」

ハジメテの痛みに、ゴツゴツしてジメジメしていた洞窟で一晩中激しくシタ負担、逃走劇による疲労、負傷、寝不足、そして関節痛……案の定と言うべきか、残念ながら当然と言うべきか、犬子のコンディションはかなり悪い。

「日が出ている間に少しでも距離を稼ぐぞ。」

今は一日でも早く三河から……松平元康の勢力圏から離れる」

「そうだね」

犬子が何度もよろめきながら、服や手荷物、刀を拾い集める。

万々に備えて用意していた路銀も保存食も残り少ない。

ここまでの逃避行で、俺も犬子も疲労困憊、身体中が傷だらけ、泥だらけ、汗まみれだ。

今の状態ではどう頑張ってもあの本多忠勝には勝てやしない……いや、仮に万全であつたとしても、万に一つの勝ち目も無い。

つまり、追手に追いつかれれば本気で拙い事になるという事だ。

捕まれば犬子が人質に取られて半強制的に元康に仕える羽目になるか、あるいは2人纏めて幽閉……最悪、殺されるだろう。

「周囲に人の気配は……無いな。犬子、急ぐぞ」

「う、うん……」

犬子は不安そうな表情で付いて来る。

不安そうに俺の腕をぎゅつと掴み……少しだけ頬が緩んだ。

「えへへ、くじゅくろお〜」

いや、少しどころか盛大に、これ以上無い程に緩みきつていた。

決死の逃避行をしているとは思えない、幸せいっぱい、希望でいっぱいといった顔だった。

そんな顔で犬子は、俺の名前を呼んでいた。

「……あまり引つ付くな、歩き辛い」

そんな事を言いながら、俺は犬子を振り解けなかった。

頬が緩み、口角が上がり、顔が熱くなるのを抑えられなかった。

どうしようもなく追い詰められているというのに、今が幸せだと感じていた。

「だつてさ、九十郎に好きって言えたんだよ。」

だつてさ、九十郎に好きって言つて貰えたんだよ。

嬉しすぎてニヤけちゃうし、幸せすぎて引つ付きたくなるよ」

同感だと言いたくなるのを、必死の思いで堪える。

今、俺が感じている幸福感をまた味わうため、2人の安寧な生活を確保するため、一刻も早く逃げなくてはいけない。

全く、まさか自分が前田利家と恋仲になろうとは思つてもみなかった。

「今は我慢しろ」

「ええ〜」

不満そうに頬を膨らませる少女の頭に手を置いて、わしやわしやと撫で回す。

たったそれだけで、犬子は本物の犬のように気持ち良さそうに息を漏らす。

そんなちよつとした仕草を可愛らしいと感じてしまう俺は、相当駄目な男なのだろう。

「日が落ちるまで我慢しろ、野宮の支度までしたら……また、な……」

この状況下でまた犬子とシたい、犬子を貪り、愛し合いたい等と考え、それを口にする俺は……口にするどころか、濃厚で熱烈なキスまでしてしまう俺は、相当な駄目男か

もしれない。

「ん……んちゅ……うんっ！ 約束だよ九十郎！」

つい先程まで顔色が悪く、ヨロヨロとした動きになっていた犬子が途端に元気になる。

現金な女だと嘆くべきなのだろうが……嬉しいと感じてしまう俺は、かなりの重傷だ。

「しかし……あの竹千代が領主になるとは、誤算だったな……」

もしも元康が、日本史に疎い俺でも知っている位に将来性のある大名であつたなら、こちらから土下座をしてでも家来にしてもらい、歴史知識と剣道で磨いた技をフル活用して仕えるのにな……等と、ありえない妄想に浸ってしまう。

（作者注）松平元康は、後の徳川家康です。

「あれ？ そう言えば本多忠勝って、徳川家康の家来だったような……」

何で元康なんか仕えているんだ？ 歴史が変わったか？

それとも後で何かあつて主替えをするのか？」

「そんな事、犬子に言われたって分からないよ」

（作者注）松平元康は、後の徳川家康です。

様々な考察や妄想を振り払い、深く深く溜め息をつく……まあ、良い。

いまさら後悔をしても始まらない、考えていたって分からない。

「何にせよ、もうじき沈むと分かり切っている船に乗せられてたまるかってんだ」
（作者注）沈みません。

「目指せ！ 犬子と一緒に安寧な生活うっ!!」

「目指せ！ 九十郎と一緒に幸せな生活うっ!!」

2人で気合いを入れ直す。

天下国家なんて論じる気は無い、松平の行く末は……歴史に名が残っていない以上、おそらく悲惨な末路を辿るだろうが、興味も無い。

（作者注）天下人として歴史に名前を残します。

「好きだぞ、犬子」

抱いた勢いとか、成り行きとか、吊り橋効果とか、そういうのはどうでも良い。

俺は心の底から犬子を愛している、その一点だけは誰に対しても断言できる。

「大好きだよ、九十郎」

朗らかに笑う犬子を見て、俺は心の底から嬉しくなる、幸せを感じる。

俺はただ、惚れた女と一緒に安寧な生活がしたいだけだ。

そのためには松平元康ではない、将来性のある主君に仕えるべきだ。

（作者注）自ら将来性のある就職先を蹴り、自ら安寧な生活を放り投げています。

俺は少し先を歩く犬子を追い、歩き始める。

竹千代……松平葵元康と初めて出会った日、元康に目を付けられる原因、元康の部下達に追いかけられる原因を自ら作ってしまった日を思い出しながら……

……

……

天文18年、西暦換算で1549年の事である。

「……さて、今日は火砲の発展について話そうと思う」

今日も今日とて襲撃してきた犬千代を軽く叩きのめし、無理矢理近くに座らせて歴史談義を始める。

犬千代は現在11歳、この時代の武家の娘は早ければ12歳、遅くとも16歳位で陣に出る事を考えれば、犬千代を鍛えるために使える時間は残り少ない。

しかし、九十郎に焦りは無い。

九十郎から見れば、犬千代はまだまだ未熟だ。

もう何年かすれば九十郎を遥かに上回るのではと感じる程、光る剣才が見えてはいたが、今はまだまだ未熟者だ。

しかし、犬千代は日々進化成長を続けている。

自分が関与しなかった時の犬千代よりも強くなっているのだから、史実よりも悪い状況にはなるまい。

そんな根拠希薄な樂觀論があるが故に、九十郎は焦っていないなかった。

危機感が無かった、全く無かった。

自らの安寧な生活を確保するために、もう少し犬千代と仲良くなっておこう……今この時点では、それだけのために。

九十郎の意識が変化するのは、もう少し後の話である。

「ぜつ……ぜえ……はあう……ちよ、ちよつと待つて……」

犬千代は乱れ切った息で、3間半の長棒を杖代わりにして立ち上がる。

犬千代が長期戦に耐えられるかを試そうと、九十郎はあえて決定的な一撃を入れずに長々と打ち合いを継続したため、いつも以上に気力体力の消耗が著しかった。

「待てんよ。時間はいつだって有限で、

有事は何時何処でどのように起こるか分からないからな」

そう言いながら九十郎は昨晩完成したばかりの木工細工を犬千代に投げ渡し、自らは犬千代の襲撃によって中断された巻割りを再開する。

もつともらしい事を言っているが、本心は昨晩完成したばかりの模型を見せたくてたまらないのだ。

いくら犬千代を鍛えたいとはいっても、今の九十郎は極貧農家の息子、あくせくと働かなければ普通に飢え死にする身の上だ。

それを理解しているからこそ、犬千代は1日1回以上、九十郎に対する不意打ちを行おうとしなかった。

「何……これ……？　竹筒？」

車輪の付いた竹筒……少なくとも犬千代にはそのように見えた。

「そう言いたくなる気持ちは分かるが、竹筒ではない。

それはカルバリン砲だ、模型だがな」

「かる……かるい……」

「カルバリン砲、砲身3 m、口径13〜16 cm、有効射程は1800 m。

かのフランシス・ドレイクがスペイン艦隊を打ち破った、

アルマダの海戦で使われた事で有名な砲だな。

カノン砲よりも口径が小さく威力が低い、射程が長く弾道が安定していた」

なお、九十郎は気づいていないが、アルマダの海戦は1588年、未来の出来事である。

この男、日本史はうる覚えであったために、今が西暦換算で何年なのか分かっていないのだ。

「可能砲……?」

「カノン砲な。可能砲なんて妙ちくりんな名前の砲、ナポレオンだって使わないぞ」
「ナポレオンって誰?」

「ナポレオン・ボナパルト、1769年にコルシカ島で生まれた偉大な將軍、
一時期はフランス皇帝にまで上り詰めた歴史上の偉人だよ」

なお、九十郎は気づいていないが、ナポレオンも未来の人物である。
「強かったの?」

「フランス革命直後で国中がぐしゃぐしゃだった状況で連戦連勝する程度には強い。
全盛期のフランスとその同盟国、衛星国の広さは凄まじいぞ。」

まあ、ロシアの冬將軍には惜しくも敗れたがな。

砲兵・騎兵・歩兵の連携によって敵を打ち破る三兵戦術を確立した」

「おぉ〜!」

「しかしまあ、火砲の発展や役割について解説してからじゃないと、

ナポレオンの活躍について語るのは難しいので、火砲の話に戻すぞ」

犬千代はココクコクと頷き、その場に正座する。

少女の興味を引けた様子を見て、九十郎は心の中でガッツポーズをした。

「カルバリン砲では威力不足でな、後の時代ではカノン砲が海戦の主流になる。」

そしてこっちはナポレオン砲、アメリカ南北戦争で最も使われた事で有名な火砲だ。砲身167・6cm、口径12cm、実体弾、榴弾、榴散弾、ぶどう弾を発射可能な事が特徴、

射程は砲弾によって変わるが、実体弾で1480m、榴弾で1188m」

なお、九十郎は気づいていないが、南北戦争の開始は1861年、未来の出来事である。

「犬千代、分かるか？」

「だいたいわかった」

「その顔は分かかってない顔だなあ……」

実際の所、九十郎は自分の語る西洋歴史談義や技術談義の持つ価値を見誤っていた、早い話が過小評価していた。

ちよつとした無駄知識、無駄話の類……図書館か何かで少し調べれば、すぐに集められる情報だと思っていた。

前田利家は将来武将になるのだから、聞いた事の無い戦争話を聞かせれば気を引けるかもしれないというのが半分、単純に九十郎がこの手の無駄知識、無駄話を語るのが好きだったというのが半分、たったその2つだけの理由で語って聞かせていた。

この時犬千代は、早く話が終わってもう一回チャンバラができれば良いなど考えてい

たし、九十郎は一目でそれが分かるのだが……だ。

「火砲の発展は戦争を大きく変えた。

城の形は射線を通すために五芒星、六芒星に似たものになり、時代が進めば廃れていった。

歩兵は密集させての運用ができなくなり、数名の小隊を分散させて運用させる事になる。

木材の軍船は消え、鉄張りの軍船が浮かぶようになり、

帆船は消え外輪船、船尾スクリュー船が戦場の花形となっていく。

この辺りの話は調べだすと中々面白いだよ」

九十郎は犬千代以外の者にこの手の話は滅多にしない。

別に秘匿しようと思っていた訳では無い、単に手間と労力をかけてまで仲良くしたいと思った人が居なかっただけだ。

もつとも、今までは一度も無かったが、乞われれば九十郎は喜んで無駄話をし始める。

それが未来知識、未来技術の話であると気づきもせず……だ。

その意味で九十郎は、非常に危うい状態ともいえた。

「かるばりん……？ 五芒星の城……？ すくりゆー……？」

そんな時、九十郎はどこかからぼそぼそと小さな声が聞こえたような気がした。

聞き耳をたて、良く目を凝らし……近くの茂みの奥に、犬千代上に小さな女の子が居る事に気がついた。

「そこに隠れている子供、怒らない、追いつかないから出てきなさい」

九十郎がそう告げると、犬子の背後にあつた茂みがガサリと揺れ動く。

7歳か8歳か……その位の年齢らしき、小さな小さな女の子がそこに隠れていた。

少女の目尻には、涙の痕があつた。

「あ、あれ……この子……竹千代？」

犬千代が首を傾げながらその少女の名前を呼ぶと、少女の肩がビクンと震え、顔が一気に蒼褪めた。

「犬千代の知り合いか？」

九十郎の日本史知識の中に『竹千代』という名前は存在しない。

やむなく竹千代を知つていそうな犬千代にそう尋ねた。

「お隣の三河の領主さんの娘だよ。」

人質として織田家が預かつてるって聞いてるけど……

ちよつと前に久遠様のお屋敷にお呼ばれた時に、そういう話があつて……」

「人質……ね……」

後で匿つたとか脱走の手引きをしたとか、そういう因縁をつけられりやしないかと九

十郎は考える。

この男、豪胆そうに見えて案外ビビリである。

「外出の許可なら頂いております。

屋敷に籠つてばかりでは気が滅入るだろうと、久遠様から」

「そうなのか？」

そう言われても九十郎は信長と面識がない。

目の前の少女が言った事が真実かどうか、判別ができず……やむなく九十郎は信長と

何度か会った事がある犬千代に助けを求める。

なお、久遠というのは織田信長の通称である。

諱を軽々しく口にするのは縁起が悪いという事で、元服する時に付けられるのだ。

「竹千代さん、久遠様のお気に入りだからね。」

名目上は人質って事になってるけど、事実上は放し飼い同然だって」

「放し飼い？ 犬猫じゃあるまいに……」

「い、犬千代が言ってる訳じゃ無いって！

ただ……久遠様の事、うつけだつて言う人が多くて……竹千代さんの事も色々

……」

3人の少年少女達は微妙な沈黙に包まれる。

織田久遠信長の素行の悪さは有名で、織田家の次期頭領として不適格ではないかと公然と言いつ放つ者は後を絶たない。

「まあ、良いか……」

九十郎が沈黙を破る。

織田信長が天下統一手前にまで行きつく事は、日本史に疎い九十郎でも知っている。

それ故に、家督相続問題がどれ程荒れようとも、なんやかんやでどうにかなるだろうと、九十郎は樂觀していた。

この男、慎重そうに見えて案外考え足らずである。

もつとも実際の所、久遠は……この世界の織田信長は、なんやかんやでどうにかするのだが。

「さっきの話の続きを聞きたいなら、茂みの中からじゃなくても良い、

その辺で座って聞いている。貧乏なんて茶は出せんが、追い払う気はねえよ」

何故涙を流していたのかは知らないが、自分の話が気晴らしになれば良い、どうせ趣味のTRPGの合間に友人達から教えてもらった無駄知識だ。

この少女が放し飼いの同然であるならば、日が暮れる前に織田信長の屋敷に帰せば大きな問題にはなるまいと考え、九十郎は警戒を解き、薪割りを再開した。

「大丈夫……なのかな？ 後で母様か久遠様から叱られたら、九十郎も一緒に謝ってよ」

「わかったわかった。それよりもさつきの話の続きをするぞ。

竹千代、何か分からない事があつたら質問しても良いからな」

竹千代はコクコクと頷いた。

「火砲の製法は時代によつて変わる。犬千代、さつき渡した模型を一旦返してくれ。良いか2人とも……さつき渡したカルバリン砲だが……」

九十郎は竹千代の目の前で、砲身に付けられた竹筒の節のような物体を取り外す。すると2人の少女達の眼前で、カルバリン砲がバラバラになる。

「このように、タガを外すとバラバラになる……この模型は木製だが、実物は鉄だ。製造砲が主流になる以前では、このように鉄の板を組み合わせて筒状にして、それをタガで束ねて砲身にする。

どうしても砲身に隙間が出来て威力が削がれ、弾道が安定せず、

しかも強度の面でも劣るから、製造砲が世に出回ると廃れていった製法だな」

九十郎の解説を、犬千代は退屈そうに、竹千代は鬼気迫る表情で見つめている。

「ナポレオン砲は青銅製の製造砲……」

製銅砲の時代から鋼鉄砲の時代に移り変わる時期に作られた火砲だ。

製造砲は高熱の炉で金属をドロドロに溶かし、型に流し込む方法で作成する。

昔は大砲を作るだけの鉄を溶かす熱量を生み出す事ができなくてな、

反射炉が実用化されるまで、火砲は青銅で作られていた」

この程度の話は他の大人に聞けばすぐに分かるだろうに……等と九十郎は考えている。

反射炉が工業用の鉄鋼の溶解に用いられるようになったのは1690年代、早い話が未来の技術である。

「カルバリン砲……ナポレオン砲……反射炉……」

犬千代は気づいていないし、九十郎も気づいていない。

だがしかし、竹千代は気づいた。

九十郎とは逆に、少女の心中は不安で一杯、危機感で一杯であったからだ。

犬千代は知らないし、九十郎も知らない。

つい先日竹千代の母にして松崎城主、松平広忠が家臣に刺されて死んだ事、主無き松崎城が今川勢に占拠され、城も領地も残らず召し上げられた事、つまり……竹千代は、松平家はこれ以上無い程に詰んでしまったのだ。

竹千代は現在、織田の人質の身……どうにかしなければならぬ事は分かっている、どうする事もできない、どうしようもない。

織田久遠信長の厚意により、遠乗りをする程度の自由は認められているが……それだけだ。

そんな焦りが、不安が、危機感が……ある意味で竹千代の視野を狭め、九十郎の骨董無形な無駄話が、確かな拠り所のある実利の話であると気づかせたのだ。

「これは……これはもしかして、本当に……」

竹千代は小さくそう呟いた。

無我夢中になって馬を走らせ、悲観と絶望の涙を流し続けていた彼女であったが、九十郎の話が聞こえてきた瞬間、涙は一気に引つ込んだ。

今川に臣従する弱小豪族を束ねなければならない身の上、織田の人質としていつ殺されるか分からない身の上でなお心が折れず、毎日命懸けで鍛え、毎日命懸けで学び、毎日命懸けで考え続けている少女は気づいた。

九十郎は今現在の日ノ本では実用化されていない技術について語っているのだと。

それ故に竹千代は、命懸けで隠れ、命懸けで聴き取り、命懸けで覚えようとした。故郷三河で自分の帰りを待つ家臣達のために、松平家の未来のために……

「あの……先程何度か仰っていた、めえとるとは……う？」

だから知らなくてはならない、少しでも多く、理解し無ければならない、少しでも深く。

奇跡でも起きない限り今川に擦り潰されるであろう松平の未来を変えるために、故郷で自分の帰りを待つ三河侍達を守るために。

竹千代は必死であつた。

そんな竹千代の必死さを気づきもせず、九十郎は手元にあつた比較的真っすぐな一本の木の枝を鉦で寸断する。

「目算で悪いが、大体この棒の長さが1mだ」

「いえ、十分です……2めえとるが、1間……いえ、1間よりも少し短い位でしょうか？」

「カルバリン砲の有効射程は1800m、二分の一で3150間になるか。」

最大射程は6300m、二分の一で3150間になるか。

ナポレオン砲が1480mで、740間になるな」

それを聞いた瞬間、竹千代は絶句した。

九十郎の話が真実なのだとすれば、弓矢や鉄砲の10倍以上の距離から一方的に攻撃を加えられるという事になる。

もしも火砲を実戦運用する事ができれば、最早槍も弓矢も……馬も鉄砲も……ただの案山子になりかねない。

「おおっと、射程が短いからと言ってナポレオン砲が劣るなんて思うなよ、

鑄造砲はタガで固めている砲よりも頑丈で弾道が安定する上に……

ここを見るも2人とも、砲耳が付いている。ここが画期的なんだ」

そう言う九十郎は砲耳と呼ばれる突起を始点に、ナポレオン砲の模型を上下に振って見せた。

「大砲は基本、こういう形の専用の荷車で運ばれる。

左右に付いた車輪で横方向の向きを変え、砲耳を支点にして上下方向に向きを変える。

そうしてより素早く、より小さな力で目標に狙いをつける事が可能なんだ」

「反射炉があれば、そのナポレオン砲が手に入るのですか？」

「さっきも言ったがナポレオン砲は青銅製だ、作るのに反射炉は必要無い。

ただ……より性能と生産性が高い火砲が欲しいなら反射炉が必須だな。

個人的にはアームストロング砲がお気に入りだ。

強度と技術的問題さえ解決できるなら、前装砲より後装砲の方が実践的だからな」

「前装……？」

「弾と火薬を銃口から詰めるか、銃口の後ろの方から詰めるかの違いだ。

閉鎖機の完成度が低いと暴発事故が頻発するが、連発がしやすい」

九十郎は心の中で、完成度高けーなオイと呟いた。

年下の女の子2名が居る所で下ネタを言うのを避けるだけの分別はある。ただし1855年完成の未来兵器を話題に出さない分別は無い。

この男、基本的に日本史はうろ覚えで、しかも考え足らずなのだ。

「反射炉は内部が高熱になるために普通の建材ではあつという間に倒壊する。

そこでまずはロウ石を集め、耐火煉瓦を作る。

ロウ石は岡山県と広島県で算出してた筈だ……確か」

「岡……山……？ それに広島……？」

聞いた事のない地名に、竹千代が首を傾げる。

「ああすまん、絵で説明する……日本列島が大体こういう形で……」

岡山県はこの辺り、広島県はこの辺りにある。

ロウ石が出る場所までは流石に覚えていないな」

どちらも三河とは遠く離れている……竹千代は僅かに落胆するも、すぐさま気合を入れ直す。

今迄何をどうすれば良いのかまるで分からない状態だったのだ、不可能が困難になり、奇跡が辛うじて手の届く場所にまで降りてきたのだ、落胆するなんて贅沢が過ぎると。

「ロウ石を砕いた物を粘土に混ぜ、直方体にして焼く……

比率とか混ぜ方とか焼き方とか積み方とかは細かくなるから省くが、
いずれにせよそれで耐火煉瓦ができる。

耐火煉瓦を……流石に反射炉の模型は用意していないから絵で説明するが、
おおよそこういう形状に組んで、炉を作る」

反射炉の模型までは用意していなかったため、九十郎は薪の切れ端を使って地面に簡単な図面を描く。

それは犬千代にとつても竹千代にとつても未知の建造物……犬千代はそれを見て、これさえ無ければ九十郎もいい人なのになあと、竹千代はそれを見て、九十郎の言葉には確かな裏付けがあるのだと確信した。

「作れ……ますか……？」

竹千代は震える声でそう尋ねた。

目の前にある希望が画餅であるのか、それとも必死になって手を伸ばせば届くかもしれない未来予想図であるか……彼女にとつて最も重要な事を尋ねた。

「以前作った事がある……夏休みの自由研究でな。」

ああ、模型ではないぞ、ちゃんとした製鉄ができる本物の反射炉だ。

その時に内部構造は嫌という程に頭に叩き込まされた。

耐火煉瓦さえ用意できれば、もう一回作る事は十分可能だろう」

九十郎は力強く断言した。

竹千代は地獄に仏を見た気分になった。

どん底であつた気分が吹き飛び、暗雲しか無かつた未来に光が差し込んだように思えた。

「では、火砲も……」

「作つたな、内部構造もしつかりと頭に叩き込んでいる。

ただし榴弾の作成は諦めろ、あれは素人が手を出して良い代物じゃない。

火薬の調合をミスるか、雷管の誤作動を引き起こして爆死するのが関の山だ」

俺のセカンド幼馴染は、昔榴弾を作っていたな……と、九十郎は思ったが、残念ながら戦国時代にセカンド幼馴染は居ない、居る筈もない。

「後はスクーターも……」

ああ、17世紀頃北アメリカで広く使われていた輸送船だが、それも昔作つたな。

最初は学生のやる事じゃねーだろとか、剣教える方が楽しいだろとか、

何しれつと参加してんだ北町奉行、止めるよとか思つたが、凝りだすと楽しいんだよな」

ファースト幼馴染が言いだし、セカンド幼馴染が作り方を考え、九十郎が肉体労働を

担当させられる……大江戸学園では良くある光景である。

反射炉、刀剣、大砲、台場、榴弾、そしてスクーター……平和的な物は日本酒とパン焼き窯位しか思い浮かばない辺り、九十郎のダブル幼馴染は頭がイカれていたとしか思えなかった。

九十郎がそんな事を考えていると……薪割りが終わった。

「ありや、思ったより早く終わったな。早めに戻るか……いや……」

九十郎は持ち運びやすくなるよう薪を束ねると、先程犬千代を叩きのめした竹刀を拾い、正眼の構えで向き直る。

「その顔を見るに、いい加減に退屈になってきた所だろうか？」

少しばかり相手になってやる」

その言葉を聞くと、待ってましたとばかりに犬千代は飛び上がり、長棒を水車の如く振り回す。

「今日こそ……今日こそ犬千代が、勝あつっ!!」

そう叫び、九十郎に飛び掛かる。

猟犬のように俊敏に、狼のように獰猛かつ狡猾に、犬千代は同年代の誰よりも洗練された動きで九十郎を追い詰めにかかる。

しかし……

「小手えっ!!」

しかし、今はまだ九十郎の方が強い。

「多少はフェイントを使えるようになってきたか。

2手目、払うと見せかけて突きで来たのは悪くなかった。

もう手筋の少し切り替えを素早くできるようなればなお良しだ」

「ふえ……ふえにつくす……?」

犬千代はとりあえず知っている単語を口にした。

「偽の動きで騙して、姿勢を崩した所を攻める事だ。　こーういう風になっ!」

「あだあっ!」

右肩狙いの袈裟……と、見せかけた足払いを受け、犬千代がすっ転ぶ。

しかし、1度や2度叩き伏せられた程度で犬千代の闘志は萎えない。

少女は正直興味の無い火砲の話を延々と聞かされていた頃の2倍……いや、10倍は瞳を爛々と輝かせ、再度九十郎に挑んでいった。

「仙人……様……?」

竹刀と長棒をぶつけ合う2人を食い入るような目で見つめながら、竹千代は小さくそ
う呟いた。

九十郎は強かった。

その技は誰よりも……誰よりも誰よりも研鑽され、洗練されていた。少なくとも竹千代の目にはそう写った。

戦国時代の人間の目から見れば、現代人の……それも人生を投げうたんばかりに鍛錬を重ねた剣術馬鹿の太刀筋は、洗練されて見えるのだ。

「間違い……ない……間違い、あれは仙人様。

仙人様が降りてきて、私を助けに来て……そうなければ説明がつかない……」

全くの見間違い、勘違いである。

だがしかし……そんな見間違いを信じさせる程、竹千代は幼く、追いつめられ、憔悴していた。

九十郎と言う名の藁切れに縋りたくなる程、竹千代は溺れていたのだ。

「もし……もしもあの方が私を助けてくれたのなら、今川だつて、織田だつて、

いえ……この乱世を糺し、天下泰平の世を築く事すら……」

笑える程滑稽な話であったが、竹千代の目は全く笑っていないかった。

竹千代は本心からそう信じ切っていた。

九十郎はまだ気づいていない。

竹千代が後の徳川家康である事も、今日の出会いが後々彼と犬子を苦境に立たせる事も。

もしも竹千代の半分……いや、10分の1も危機感や用心深さを抱いていれば、竹千代が目つきがおかしくなっている事に気づけていただろう。

だがしかし……九十郎は気づいていなかった。

犬子と九十郎第3話『初陣』

たった6ヶ月……九十郎と竹千代の交流は、たったの6ヶ月で終わってしまった。

竹千代は時間の許す限り、馬術の訓練と称して織田の屋敷を抜け出し、九十郎の歴史談義、技術談義を聞き続けた。

時折木刀を持ち、犬千代と共に九十郎に挑んでいった。

竹千代はそんな毎日を一生忘れる事は無いだろうと確信していた。

「実在した……仙人様は実在した……九十郎様こそ、仙人様……」

今川領、駿府屋敷に向かう輿の中で、竹千代はそう呟いた。

織田家と今川家との抗争の中織田信秀の子、織田信広が今川方の捕虜となった。

そして交渉の結果、竹千代は信広の身柄と引き換えに、駿府に送られる事となったのだ。

つまりは人質交換である。

竹千代は織田の人質から、今川の人質になる……彼女にとって、状況は全くもって好転していない。

だがしかし、彼女の顔は明るかった、希望に満ちていた。

彼女の母・松平広忠の訃報を聞いた時、松崎城が今川勢に占拠され、城も領地も残らず召し上げられたと聞いた時の何十倍……いや、何百倍も明るかった。

「あの御方さえ……九十郎様さえ得られれば、松平家は蘇る。必ず、きつと……」

九十郎は竹千代や犬千代に比べれば強かったし、九十郎の知識は竹千代にとつて未知のもので、やりようによっては有益なものだ。

だがしかし……それだけだ。

九十郎の剣に、知識に、織田や今川を全滅させ、戦国の世を制するだけの力は無い。

九十郎を知る者が竹千代の抱く過度な期待を聞けば、腹を抱えて笑い出すであろうし、後日光璃に笑われる。

しかし、竹千代はまだ数え年で8歳の童女なのだ。

8歳の童女が、人質という形で故郷を離れ、いつ殺されるかも分からない立場となり、親の訃報を聞き、御家存亡の危機を知り……あらゆる意味で孤独だったのだ。

そんな時にひよっこり現れた希望に対し、仙人様と呼び、信仰にも近い想いを抱いたとしても、誰が責められようか。

既に彼女の頭の中は、どうやって独立するかで一杯になっていた。

今川にどう仕えるか、どうやって役に立つか、どうやって忠誠を示すかではなく……

今川をどう裏切るか、どうやって足を引つ張るか、どうやって忠臣と誤認させるか一杯になつていた。

「とにかく1日でも早く独立する事。

1日でも早く独立して、九十郎様を迎え入れる事ね。

織田よりも早く、今川よりも早く、私以外の者が九十郎様の知見に気がつく前に」

桶狭間の戦い……今川義元の死まで、あと11年。

……

……

……

天文20年、西暦換算で1551年。

前田犬千代は織田久遠信長の小姓となつた。

特に面白味も無く、何の波乱も無く。

犬千代は那古野城下に移り住み、九十郎と会う事はほぼなくなつた。

九十郎は未来知識を他人に語らなくなつた、木工細工の模型を作る事もなくなつた。

元々、犬千代に興味を持ってもらうために話であり、犬千代と会わなくなつた以上、話す必要性を感じなかつたというのが理由の半分、竹千代に懇願されたという

のが残りの半分だ。

九十郎様の身に危険を招きかねないので、軽々しく他人に語らないでくださいと、真剣な眼差しで……聞き入れなければ割腹自殺でもするのではと心配になる位、真剣な真剣な真剣な眼差しで、竹千代は懇願したのだ

結構語りたがりの九十郎が、地味いゝにフラストレーションを溜めながらもその助言を聞き入れたのは、竹千代のドン引きする位真剣な眼差しがあつたからだ。

実際の所、犬千代以外に語つてドン引きされたり、可愛そうな人を見る目になられた事も数回あつた。

天文21年、西暦換算で1552年。

犬千代15歳、九十郎17歳、竹千代11歳、桶狭間まであと8年の頃……久遠の母・織田弾正忠信秀が急死する。

久遠が毒殺したという噂がどこからともなく流れたが、正秀に死なれて一番驚いたのも、一番悲しんだのも、一番被害を被つたのも久遠である事は明記しておくべきであろう。

家中に不穏な空気が流れる中、織田久遠信長による家督相続が行われ……直後、鳴海城主・山口教繼、清州城の実権を握っていた守護代家老・坂井大膳が今川方に寝返つた。久遠は即座に坂井大膳討伐を決断した。

後に『萱津の戦い』と呼ばれる戦いが勃発したのである。

「初陣か……」

戦場に立つ犬千代の脳裏には、九十郎との日々が走馬灯のように蘇っていた。

結局、どんなに力を尽くしても、どんなに知恵を絞っても、九十郎から一本を取る事は叶わなかった。

頭に、喉に、胸に、背中に、わき腹に、肩に、肘に、指に、腰に、膝に、足首に……九十郎の竹刀は、犬千代のあらゆる部分に叩きつけられた。

もし九十郎が竹刀ではなく、真剣で反撃をしていたのなら……既に1000回以上犬千代は死んでいる。

その事実が、犬千代の心に恐怖を呼び起こしていた。

「だ、大丈夫かな……」

この日のために用意した3間半の長槍が嫌に頼りなく見えた。

傷一つ、汚れ一つ無いピカピカの鎧が、嫌に頼りなく見えた。

毎日毎日寝る間も惜しんで鍛えた肉体が、磨いた武技が、嫌に頼りなく思えた。

「鍛えた身体は己を裏切らん、磨いた技も己を裏切らん。」

案ずるな、恐れるな、鍛え続け、磨き続けた犬千代は強いぞ」

そんな犬千代の背後から、懐かしい声が……1年前までほぼ毎日聞いていた声、九十郎の声がした。

「く、九十郎っ!? なんでも……ここ戰場だよ!」

「兵役だよ。うちの村からも何人が割り当てられてた、

俺は良い年齢の男で体格も良い、だから来た」

「あ……そっか……そうだよね」

この時代、平時の農民と有事の雑兵はイコールで結ばれている場合が多い。

極貧農民の子としてこの時代に生まれた九十郎が戦地に立っている事は、当然予想されて然るべき事である。

望外の幸運だ……九十郎は本心からそう思っていた。

犬千代には才能がある。

その才能が十全に開花するのは5年後か、10年後か分からないが……今はまだ自分よりも弱い。

自らの安泰な生活のため、必要に応じて犬千代を助けに行ける場所に居続けたかったのだ。

そこで自分が死ぬ可能性に思い至らない辺り、この男は非常に能天気である。

それにもう一つ、九十郎が自ら望んで戦地に来た理由がある。

「こっちに来た理由はもう一つある。

戦国時代の人間相手に、自分の剣がどこまで通用するのか、少し興味があった。

道場剣法は実戦では通用しないと良く言われるが……本当なのかなと。

早い話が腕試しに来たんだよ、俺は」

それもまた、九十郎の偽らざる本心であった。

前の生では、人生を投げ打つ覚悟で打ち込んだ剣道が、現代では取るに足らない無駄技能である剣道が、戦国時代であっても取るに足らない無駄技能であるのか……それが知りたかったのだ。

命懸けになろうとも、確かめたかった。

自分が投げ捨てた青春時代が、ただの時間の無駄であったのか……と。

数時間後、道場剣法は実戦で通用しないと良く言われる理由を、九十郎は身をもって味わうのだが、基本的に能天気で楽観的なこの男は気づかない。

「あれ、九十郎って道場なんて行つてたの？」

この辺に剣を教える先生なんて居たっけな……」

「神道無念流だ、昔修業をしていた」

「しんとー……？」

「知らないか……学園じゃ結構有名だったんだが、こつちじゃマイナーなのかな？」

昔、福井兵右衛門嘉平って人が開いたらしい剣術だ」

なお、九十郎は気づいていないが、神道無念流が創始されたのは1751年から17

64年頃だ。

早い話が未来の剣術であり、犬千代が知らないのも当然の話である。

「でも、九十郎ならきつと手柄を立てられるよ。正直犬千代より何倍も強いし……」

「今はそうかもしれないな。だが犬千代は将来、きつと俺よりも強くなるぞ。

向上心がある、剣才もある、だからお互い生き延びよう」

なお、この男は数時間後に死に掛け、犬千代に助けられるのであるが、基本能天気であるためそんな可能性はチラリとも考えない。

「う、うん……そうだね……」

犬千代は笑ってみせた。

その笑みが無理をして作っている事、本当は不安で一杯である事が一目で分かったのだ……

「大丈夫だ、いざとなったら俺が助けに行く、俺が犬千代を守る」

少しかがみ、年若い少女に視線を合わせ、九十郎は笑った。

必ず助ける、必ず守ると……犬千代は信じた。

ただし数時間後、九十郎はみつともなく逃げ回っている所を犬千代に助けられる。

「そしてもう一つ。

もし将来、犬千代が家来を持つ身になったら……その時は喜んで家来になろう」

「え……？」

犬千代がぼかん……とした表情で固まる。

唐突な提案、完全に予想外で、完璧な不意打ちであった。

今まで考えもしなかった事が、絶対に言いそうにない人物からされたのだ。

それは犬千代の将来性を見込んでの提案であり、九十郎の腹の中はコールタール以上に真っ黒であったが、幼き少女は気づいていなかった。

「家来つて……九十郎が犬千代の？ 逆じゃなくて？」

「何故逆になる？」

「だって九十郎は年上だし……正直犬千代よりも強いし……」

「年上で、自分よりも強い者を家来にしてはならん法でもあったか？」

「大事な事は当人同士が納得するかどうかだろう。犬千代はどう思う、俺を家来にしたいか？」

犬千代はブンブンと大きく、勢い良く首を縦に振った。

尻に着けている犬の尻尾を模した装飾品は、彼女の驚愕と歓喜を示すかのようにピョコピョコと揺れていた。

「よおおーしいっ!! 手柄立てるぞおっ!!」

そんな犬千代の様子を見て、九十郎は心の中でガッツポーズをしていた。

是非とも手柄を立てて俺を家臣にして安寧な生活を提供してくれ……なんて、九十郎は割とゲスな事を考えていた。

……

……

……

戦いは、面白味も何もなく推移していた。

結果だけ言えば、戦いの結果は史実における萱津の戦いと同じで、織田信長の勝利に終わる。

敵の総大将坂井甚介は柴田壬月勝家の手で討ち取られ、死亡する。

そして前田犬千代は敵陣に真っ先に突入し、大暴れをして、信長の目に留まる。

ただし……

「ま、拙い……かな……」

ただし九十郎は、戦場の隅っこで人知れず死に掛けていた。

ゲスで楽観的で能天気な男が、人知れず因果応報の理にブチ当たっていた。

傷ついていた、心身に疲弊していた、手足が鉛の様に重く感じる程に。

この男、自分が死に掛けるなんて全く思っていなかった。

勝ち戦なら敵兵を2〜3人斬ってお茶を濁し、負け戦なら犬千代を守りながら逃走す

るつもりでいた。

前の生で、人生を投げ打つ勢いで劍の腕を磨いていた自分が、そこいらの雑兵に負ける筈がないと思っていた。

だがしかし、現実問題として九十郎は死の危険に晒されていた。

ぐるぐると回る視界、吐き気、怖気……今、この男の体調は最悪であった。

体調は最悪であったが、敵は一切手加減してくれそうにない。

「死ねやあつ!!」

敵の雑兵が怒声を上げながら襲い掛かってくる。

それは九十郎より、犬千代よりも遙かに弱い敵だ。

武術の心得が欠片もなく、本能の赴くままに槍を突き出す素人戦法……にも関わらず、九十郎は苦戦していた、死に掛けていた。

「死んで……死んで、たまる……かあつ!」

槍の一突き一突きを、必死になって躲していく。

普段の身体のキレは、洗練された身のこなしは、全くと言って良い程に消え失せていた。

無様に無様に逃げ回っていた。

死にたくない、死にたくない、死にたくない……そう強く念じて、必死になって己を

奮い立たせようとするが、九十郎の精神状態は悪化の一途を辿っていた。

それもその筈……

「人間一人殺すのが……こんなにも重いなんて……」

……九十郎はつい先ほど、人間を一人殺したのだ。

槍衾の中心、比較的良さそうな鎧を着ていた者にアタリをつけ、槍を掻い潜り、足首を切断し、喉に刃を突き立て……殺したのだ。

刃を突き立てた瞬間に気づいた、目の前に居るのが生きた人間である事に。

死んだ瞬間に気づいた、返り血の感触を。

刃を抜いた瞬間に気づいた、背骨を伝うように感じる怖気を。

刃を首にあて、掻き切り、生首を一つ作った瞬間に気づいた……自分が何をしたのかを。

この男、ゲスで能天気で楽観的だが、人殺しをして平気でいられる程、凶太い神経を
してはいなかったのだ。

「割り切れよ九十郎！　じゃないと死ぬぞー！」

そう自分に言い聞かせたが、効果は全く無かった。

次の瞬間、九十郎は全身の骨という骨が歪み、全身の神経が痺れ、全身の筋肉が硬直したかのように感じ……全く普段通りに動けなくなっていたのだ。

戦場のど真ん中だ。

甘く見ていた。

剣を振るい、人を斬る事の重さを、人間の命の重さを。

はしやいでいた。

戦国の世に生まれ、剣の道で身を立てられる事への可能性に。

軽く見ていた。

腰に繋いだ、顔も知らぬ名前も知らぬ人間の首の重みを。

人間の死は九十郎が思う程軽くは無かった。

斬られれば悲鳴を上げ、斬られれば血が出て、斬られれば死にたくない泣き叫び、そ

して……物言わぬ屍となる。

それが現実の人間であった。

「馬鹿か俺は!? 簡単に……そんな簡単に斬れる訳がねえだろうがっ!!」

そんな簡単に殺せる筈がねえだろうがあっ!!」

自分自身を叱責するが、闘志は萎えたまま、足腰は震え、視界は廻り、吐き気は収まらない。

九十郎は目の前に居る雑兵よりも遥かに強い。

ただしそれは、まともな精神状態ならばであった。

「うおおおあああああーっ!!」

「くそっ……がああつ!!」

どちらかと言えば糞は九十郎の方である。

槍の切っ先が徐々に九十郎の身体を捉えるようになってきた。

普段の彼ならば鼻歌交じりにいなせる、技とも呼べぬ素人槍術が九十郎に出血を強いていた。

「死……ぬ……のか……?」

明確の死の予感が、九十郎を取り囲みつつあった。

人殺し……戦国時代に生きる者にとっては軽すぎる、現代人にとっては重すぎるその三文字が、九十郎を縛っていた。

一步踏み込み、剣を振るう……そうすれば斬れる、それだけで勝てる、生き残れる。

ただしそれは、目の前で槍を振るう人間を殺す事に他ならない。

そこに……

「九十郎に何するんだあああああーっ!!」

そこに犬千代が飛び込んで来た。

全身を返り血で真っ赤に染め、腰に2つの生首を下げた少女が憤怒の表情でやってきた。

情けも容赦も躊躇も一切無い槍の一撃で、九十郎に槍を突きつけていた雑兵は瞬時に絶命した。

「ようし！ 今日の犬千代絶好調！」

犬千代が穂先を喉に突き立て、トドメを刺すその姿を、九十郎は腰を抜かし、XXXを漏らしながら眺めていた……犬千代は無邪気に笑っていた。

雑兵の首はさして価値の無い物であり、荷物が増えるのを嫌って避ける者も多い。

犬千代は倒れ伏す遺体の首は取らなかった。

九十郎はその程度の相手に殺されかけたのだ。

「九十郎っ！ どうしたのこんなのに苦戦して!？」

「い、いや……人殺しは……初めてでな……」

「犬千代も初めてだけど、大丈夫だったよ」

「そ、そうだった……か……」

犬千代に手を引かれ、九十郎は立ち上がる。

声が震え、腰も震え、腕も震えていたし、汚物の匂いもしていた。

自分よりも2歳も若く、自分よりも一回りも二回りも弱く、小柄な少女に助け起こされていた。

全くもって情けない……典型的な新兵の姿であった。

「な、情けねえ……なあ……」

道場剣法は実戦では通用しないと良く言われる理由を、九十郎は身をもって味わった。

人殺しの重さ、死の予感に揺るがない精神性を持たなければ、戦場で剣を振るう事ができなくなるだ……と。

九十郎は決意した。

このまま情けないままではいられない、次はこうはいかない。

次の戦まで、磨き直し、鍛え直しだ……と。

犬子と九十郎第4話『筭』

萱津の戦いから一ヶ月後……

「お屋敷だーっ!!」

「お屋敷だーっ!!」

2人の少年少女が一軒の空き家の前でハイタッチを交わす。

「元服だーっ!!」

「元服だーっ!!」

前田犬千代……改め、前田犬子利家が、新品の戦装束を身に纏い、屋敷の前で可愛らしくポーズを決め、九十郎は拍手でそれを称える。

「そして家来1号だーっ!!」

「おっすオラ九十郎、いっちょやってみつか」

犬子は主君織田久遠信長に勇猛さを認められた事に、九十郎は目論見通り前田利家の家来ポジションに収まった事により満悦の表情だ。

「と言う訳で、犬子の住居が集合住宅から一軒家になりましたわんっ!」

「そして屋敷の管理や炊事洗濯、武器の手入れその他諸々の雑務のため、正式に犬子様に雇われましたわんっ！」

「九十郎……その口調きしよい……」

「ははは、うちの御主人様は鏡にブーメラン投げつけるのが趣味だったか」
「犬子は良いんだよっ！」

九十郎みたいな腕や肩がゴツゴツしてるのが言ったらきしよいけど」

犬子の言う通り、九十郎は無駄にマッチョである。

「まあまあ、俺も正式に犬子様の家来になった訳だからな。」

「これから俺の事は犬と呼ぶが良い」

「絶対やだよっ！ それと様づけもいらさないよ、なんかおへその辺りがムズムズするか
ら」

「今夜はお前と俺でダブルわんこだからな」

お前はどこの本郷猛だ。

「九十郎……存在そのものがきしよい……」

「流石に泣くぞ」

2つ年下の少女に泣かされる男の姿は、非常にきしよかった。

「まあ、ちっちゃなお屋敷だけど、今日からは独り立ちしなきゃね。」

これからはお母さんにもお姉ちゃんも頼れないんだから」

「なあと万事任せておけ、はつきり言つて俺は役に立つぞ。 何せ俺は英検一級だ」

「えいけん……?」

「英語が喋れる」

「おお! 言葉の意味は分からないけどとにかく凄い自信だ!」

九十郎は気づいていないが、戦国時代では無駄技能である。

「しかも俺は、オランダ語も喋れる」

「す、凄い……のかなあ……?」

たった今犬子が気づいたが、戦国時代では無駄技能である。

それにしてもこの男、無駄に多芸である、無駄に。

「そういうえげさ、九十郎って元服はしないの?」

「ははは、うちの御主人様は極貧農家の倅に、

幼名だの元服だの考える余裕があると思つていたのか」

「やつてないんだ……」

「やつてる者もいるがウチではやらん。俺は生まれてから死ぬまでただの九十郎だ

よ」

「ただのじゃないよ、犬子の家来1号の九十郎だよ」

「ははは、うちの御主人様は部下をおだてるのがお上手だ」

なお、この男は後に犬子の夫にランクアップする事になるのだが、この時点の九十郎はチラリとも考えない。

この男、基本的に対女性関係に疎い上にマイナス志向なのだ。

「おだてるって……そうじゃないよ、犬子の本心だよ」

犬子の方は……時折、チラリチラリと妄想する程度だ。

だがしかし、武家の娘は家柄や政略と無関係に婚姻を結び、交わり、子を産む事はま
ずできない。

家柄どころか系譜も苗字も無い極貧農家の倅である九十郎が、荒子城主の娘である前
田犬子利家と一緒にいる事はまずありえない。

それこそ主君の勘気を買ひ、勘当され、織田家や前田家と絶縁関係にならない限り
……犬子も九十郎も、そんな可能性はまずないだろうと思っていた。

「それじゃあ犬子から家来1号に最初の命令！ 犬子と戦えーっ！」

ありえない妄想を、案外居心地の良い雰囲気振り払うかのように、犬子は普段武術
鍛錬に使っている長棒を構える。

お互い幼子だった頃から何度も何度も挑んでいるが、未だに一度も勝てぬ相手……既
に意地の領域にまで至った闘志を胸に、犬子は九十郎に挑みかかる。

「いきなりそれか……ははは、うちの御主人様は想像以上に脳筋らしい」

九十郎もまた即座に竹刀を出し、構える。

屋敷に呼ばれた時から、なんとなくこういう展開になるような気はしていたのだ。

なお、九十郎は未だに自覚していないが、この男はこれでもかという程の剣術馬鹿である。

そして……

「ううう……全然、全つ然勝てない。

何で？ どうして？ 九十郎はこの間の戦いで手加減でもしたの!？」

元服前と変わらず、いつものように返り討ちにあう犬子であった。

吐き気を我慢しながら戦っていたからだよ、人間を殺した時の自己嫌悪に抗いながら戦っていたからだよ……九十郎は心の中で呟いた。

今はまだ、九十郎は犬子よりも数段強い。

そして精神的に追い詰められていない限り、犬子はまだまだ九十郎に敵わない。

「だがな犬子、今日は少々ヒヤつとしたよ。

実戦を経験したからかどうかは分からないが、犬子は以前より数段強くなっている。

次も勝てるかどうか……」

「本当っ!？」

「ああ本当だ、自信を持って。 犬子には才能がある」

だがしかし、それもまた九十郎の偽り無き本心からの言葉だ。

九十郎は本心から、犬子は近い将来自分よりも強くなると確信していた。

この男は基本能天気で考え足らずであるが、他人の剣才を見抜くのは得意な方だ。

「うう、そんな事言っただって全然勝てる気がしないよ……」

ええいつ!! もう一本っ!!」

「その意気だ、さあ来い」

今日はメフメト2世によるコンスタンティノープル攻略作戦の話でもしようか……
等と考えながら、九十郎は竹刀を構える。

本人は自覚していないが、竹千代が尾張から去って以降、歴史談議ができずに少し

……いやかなりのフラストレーションが溜まっていた。

「精が出るな」

……ただしその欲求は、第三者の介入によってお預けとなった。

竹千代に頼まれた手前、約束をした手前、犬子以外の人間の前で歴史談議をするのは
控えざるを得なかった。

「……壬月様?! わわっ! み、見てたんですか?!」

犬子も、九十郎も気づかぬ内に庭先に立っていた女性は、柴田壬月勝家……織田家最

強の猛将と名高い頼れる中間管理職、犬子の上司である。

九十郎は中間管理録トネガワを思い出し、笑いを堪えるので必死であった。

「あ、あの……いつから、見られて……」

「お屋敷だーっ！ の辺りからだな」

「げえっ!? 最初からあっ!?」

上司に失態を見せた事に絶望し、犬子がヘナヘナと崩れ落ちる。

九十郎は指を差して笑いたい気分になったが……数秒後、自分が望んで止まない安寧な生活、言い換えれば犬子の出世が遠のいた事に気づき、表情が凍った。

「面白い夫婦漫才が見れたよ」

「夫婦じゃねーよっ!!」

「まだ夫婦じゃありませんよおっ!!」

2人の反論に微妙な温度差があった事を、犬子も九十郎も、壬月も気づいていなかった。

「まあ何だ、次代の織田を担う若武者は思っていた以上に筋が良い……心強い、実に。

それよりも気になるのは……孺子、確か九十郎とかいったな。どこの流派だ?」

柴田壬月勝家は……織田家最強と畏れられし猛将は、たった数合の戦いで九十郎が単なる素人剣法ではなく、それなりの流派の下で修業を積んだ者である事に気づいたの

だ。

「神道無念流だよ」

「神道無念……聞かん名だな……？」

壬月が聞かないのも当然の話である。

神道無念流は戦国時代にはまだ創始されていない流派なのだから。

そうとも知らず九十郎は、やっぱりこの時代ではマイナー流派なのかなあ……と、地味にシヨックを受けていた。

「その剣は？」

「これは竹刀だよ、稽古中に怪我をしないように工夫した、訓練用の模造刀。

大石種次っていう昔の人が考案したらしい」

なお、九十郎は気づいていないが、大石種次は1797年生まれで、未来の人物である。

「大石……？」

壬月が知らないのも当然の話である。

知っていたら予知能力者か、九十郎と同じ未来人かのどちらかである。

神道無念流、竹刀、そして大石種次……聞いた事の無い情報を聞き、考え込む壬月を前にして、九十郎は脳内で柴田勝家に関する情報を検索する。

確か信長が本能寺で死んだ後、豊臣秀吉との仲が拗れて、戦争になって、負けて殺された人だったよなあ……等と九十郎は考えている。

九十郎の頭の中では、壬月く犬子という非常に失礼な不等号が描かれていた。

日本史に疎い九十郎にしては中々正確な知識であったが……スゴイ・シツレイである事だけは疑いようの無い事実であった。

一方犬子は九十郎が非常に失礼な事を考えているとは露知らず、織田家の重鎮、織田最強の猛将を前に緊張していた。

城主の娘とはいえ、四女である犬子が前田家の家督を継ぐ可能性は非常に低い。

高々50貫……吹けば飛ぶような最下級武士である犬子は、本来壬月と面と向かって話ができるような身分ではないのだ。

「して、柴田勝家様が何故このようなむさ苦しいあばら屋に？」

……しかし、九十郎は全く臆さない。

この男の中では、既に壬月く犬子という非常に失礼な不等号が描かれてるのだ。

「ああ、元服祝いだ」

壬月は九十郎のスゴイ・シツレイな言動を意に介さない。

彼女は腕つぶし一つで戦場を駆け、名を上げてきた柴田壬月勝家だ。

一端の武人……神道無念流なる剣術を修めた九十郎に対して、一定の敬意を抱いてい

る。

それに礼儀だの作法だの建前だの、そういうまだるっこしいものを好む性格でもなかった。

「槍や鎧は中々の物を用意していた様子だが、

腰に佩く太刀がみすばらしくては恰好がつかんと思つてな」

そう言いながら、壬月は一振りの太刀を取り出した。

それは知行50貫の最下級武士の収入では100年かかっても買えないような、立派な太刀であつた。

「え……えええつ!? こんな立派な物、貰う訳には……」

「良いから持つていけ。無数の槍袢を掻い潜り、

真つ先に敵将に挑みかかつていったあの雄姿は中々のものだったぞ。

犬子の将来に期待して……という所だ」

「あ、ありがとうございませす!! この剣に恥じぬよう、立派に努めます!」

「ああその意気だ、久遠様を良く支えてくれ。

あの御方は……少し危うい所があるからな……」

感動的なシーンであるが、九十郎はほんの少し不機嫌になつていた。

実を言うと、この男も元服祝いを用意していた。

ただし壬月が用意した太刀に比べると幾らか……いや、大分シヨボい物である。

「あく……犬子、ちよつと良いか？」

額をポリポリと掻きながら、九十郎はバツが悪そうに犬子に話しかける。

「うん、どうしたの九十郎？」

「いや……俺も、な……犬子の元服祝いを……」

いや、危うい所を救ってもらった礼も兼ねて……こう……」

基本失礼なこの男にしては珍しく、九十郎何度も何度も言葉を詰まらせながら、懐から一本の筭を取り出す、そして手渡す。

実際の所、それは何でも無い物であった。

九十郎にとっては……貧乏農家の倅にとっては非常に高い買い物であったが、たった今壬月が犬子に贈った太刀に比べれば、安い安い贈り物であった。

「この間の戦いで、足軽頭の首一つ取っただろう。その報奨金で買って来た」

「え……良いの？ これ、結構高そうな……」

高そうと言っても、極貧農家の倅が用意したにしては立派というレベルだ。

犬子にとっては、少し無理をすれば普通に手が届く程度の価値しかない。

「報奨金を全額ブチ込んだよ」

犬子は愕然とした表情になり、壬月は苦笑した。

「ぜ、全額!」

「ああすまん、半額は実家に入れたな。」

俺の取り分として受け取つてる部分は全部つて意味だ。

まあ、アレだ……命を救つて貰つた札だ、遠慮せずに持つていつてくれ」

それはつまり、命を賭けて戦場に立つた対価を全て費やしたという事だ。

その筈は、壬月から受け取つた太刀の半分……100分の1の価値すら無い物であったが、犬子にとっては太刀の10倍も20倍も素晴らしい贈り物ように思えた。

犬子はまだハッキリと自覚してはいなかったが、惚れた男が文字通り命懸けで用意した贈り物なのだから……

「あ、あり……ありがとね……九十郎……」

犬子は顔を真っ赤にして、もじもじと指先を交えながら礼を言った。

犬子の頬が赤らんでいたのを、尻尾状の飾りがパタパタと揺れていたのを、九十郎は気づいていなかった。

犬子が目の前に立つ家臣第1号を男として意識しつつあるのを、九十郎は気づいていなかった。

男に惚れた女の顔に、視線になりつつあったのを、九十郎は気づいていなかった。

「良かったじゃないか、大事にしろよ。その筈も、九十郎もな」

壬月もまだ気づいていない。

幼き主従の、微笑ましい光景程度にしか思っていない。

それを察するのは……後にこの筭が原因になって刃創沙汰が起きた日にだ。

後にこの筭は、犬子が織田久遠信長に勘当される原因を作る事になり、九十郎は筭を贈った事を死ぬ程後悔するのだが……九十郎も壬月も犬子も気づいていなかった、思いもしなかった。

そして……

……

……

……

弘治2年、西暦換算で1556年8月……尾張にまたもや激震走る。

何度走れば気が済むんだと久遠は涙目になって頭を抱えていたが、とにかく激震走る

「前門の壬月様、後門の森一家……終わった、犬子の人生終わった……」

「織田最強の武闘派が敵に回り、織田最狂の戦バカが味方と……」

ははは、うちの御主人様の御主人様は相当人望が無いらしいな」

織田信長軍700人、織田信行軍1700名、これがそのまま2人の人望の差を表していた。

九十郎は『ダブルスコアつけられてるじゃねーかつ！』とでも叫びたい気分であつた。「どうしてこうなつた」

そう犬子は呟いた。

しかし、どうしてこうなつたと一番叫びたいのは久遠である。

後の世に言う、稲生の戦いが始まろうとしていた。

犬子と九十郎第5話『稲生の戦い（前編）』

天分23年（西暦換算で1554年）、尾張に激震が走る。

武田晴信、北条氏康、そして今川義元が同盟関係になったのだ。

四六時中殺し殺され、謀り謀られていた3人が手を握る等、だれが予想しようか。

この盟により、武田晴信は宿敵長尾景虎との戦いに、北条氏康は関東一円の切り取りに、そして今川義元は上洛に、それぞれ背後を脅かされる事無く集中できる。

武田晴信は内心、目の前の問題が片付いたら裏切つてやろうと考えており、氏康と義元は、どうせ晴信は後で裏切るつもりだろうなと考えていたが、戦国時代の……いや、武田晴信の信義や同盟などその程度である。

実の母親を追放して頭首の座に就き、妹婿であった諏訪頼重を東光寺に幽閉、自刃させ、挙句の果てに志賀城に3000人分の生首を並べた少女は、いつか絶対に裏切るという意味で呂奉先と同レベルの信頼があった。

いずれにせよ確かな事は、今川義元は一刻も早く……具体的には景虎がぶちつと潰されるよりも早く、上洛を完遂させねばならなくなった。

それはつまり、今川家上洛ルート上に存在する織田家は、近い内に今川と戦うか土下座するかしなければならなくなったという事でもある。

跡継ぎ問題でグダグダになっている織田家では、正攻法で戦えばぶちつと潰されるのが関の山。

織田久遠信長は隣国の斎藤利政と手を結び、共同して今川の上洛を妨害する作戦を立てる。

天分18年に利政の娘帰蝶（通称結菜）を娶ったり、天分22年に正徳寺で会談をしたり、前々から色々やってるのではあるが……いずれにせよ、時間は織田の味方、今川の敵。

しばし時間を稼げば景虎をぶちつと潰した武田晴信が今川に牙を剥くだろう、そうすれば義元は上洛どころではなくなるだろう。

故に時間を稼ぎ、家内を纏め、国を富ませ、兵を養うのだ……久遠はそう考えていた。

例えば景虎が潰される前に今川義元が動いたとしても、遠征が長引けば同盟国（笑）の武田に背後を脅かされる関係上、織田と斎藤がガツチリと手を結び、ただひたすらに遅延戦術を繰り返せば、今川を撃退する事は十分可能と計算していた。

弘治2年（西暦換算で1556年）4月、尾張に再度激震が走る。

斎藤利政改め斎藤道三死亡。

上司の寝首を掻く事にかけては天下に並ぶ者がいなかった女は、実の娘に寝首を掻かれてあつげなく死んだ。

跡継ぎ問題で親子仲が拗れに拗れたのだ。

これにより織田斎藤同盟は自然消滅、共同して今川に対抗するプランは早くも瓦解した。

しかも長尾景虎はぶちつと潰されるどころか、戦略、政略の両面において晴信相手に互角以上の戦いを演じ続けていた。

晴信はありとあらゆる手段……およそ人間が考えつくであろうありとあらゆる外道で非道な手段をもつて景虎を攻撃した。

しかし景虎は耐え続け、耐え抜き、時に晴信に痛撃を与えてすらいた。

長尾景虎は率直に言つて超頑張っていた、自らの寿命をも削らなばかりに頑張つてい

たが、久遠にとっては良い迷惑だ。

景虎の飲酒量は日を追う度に増え、厠で吐いた回数は数知れず、零した涙も、守り切れなかった命も数知れず、睡眠時間はガリガリと削られ、過労と寝不足とストレスと深酒で早死にするんじゃないかと、部下達から本気で心配される程に頑張っていたが、久遠にとっては良い迷惑だ。

晴信は暗殺者をダース単位で送り付けていたが、暗殺者達は1人残らず加藤段蔵の御家流・呑牛の術の餌食になっていた。

人知れず活躍する段蔵を景虎は全く評価していなかったが、久遠にとっては良い迷惑だ。

その後晴信は古典的だが有効な手……段蔵に対し離間と引き抜き工作に走る。

歩き巫女と呼ばれる間者達をダース単位で越後に送り付け、段蔵の悪い噂を流させ、同時に段蔵に対しては長尾よりも好待遇で迎え入れるから武田に付けと囁くのである。

それは確かに有効な手であったが、一朝一夕で効果が出る類の手では無かった。

いずれにせよ、長尾と武田の泥仕合めいた戦は延々と続き、武田が今川に襲い掛かる気配……というか余裕は全く無い。

今川義元はニンマリと笑い、久遠と晴信はどうしてこうなったと頭を抱えていた。

正直な所全部景虎が悪いのだが、景虎は景虎で『好きで戦ってる訳じゃないわよっ!!』

と反論するだろう。

こうして織田久遠信長は前門に今川、後門に斎藤という名の敵に囲まれ、武田晴信という名の時限爆弾は長尾景虎に抑え込まれ、しけた不発弾と化した。

絶体絶命の窮地に立たされる事になったのだ。

そして同年8月、尾張にまたもや激震走る。

何度走れば気が済むんだと久遠は涙目になって頭を抱えていたが、とにかく激震走る

「前門の壬月様、後門の森一家……終わった、犬子の人生終わった……」

「織田最強の武闘派が敵に回り、織田最狂の戦バカが味方と……」

「ははは、うちの御主人様の御主人様は相当人望が無いらしいな」

織田信長軍700人、織田信行軍1700人、これがそのまま2人の人望の差を表していた。

九十郎は『ダブルスコアつけられてるじゃねーかつ！』とでも叫びたい気分であった。「どうしてこうなった」

どうしてこうなったと一番叫びたい者は久遠である。

「信長と信行の姉妹仲が拗れに拗れた結果だろうに。」

実の母親の葬儀に半裸で出て来て、焼香の灰ブン投げたんだろ？

織田の知恵袋としていろんな人から慕われていた平手のお婆様はショックで寝込んで、

その後割腹自殺……そしてこうなったと」

半裸の信長、見てみたかったなくと九十郎は考えている。

生来巨乳好きの九十郎は、生おっぱいを見るチャンスがあれば目の色を変え、チャンスを逃せば本気で悔しがる。

久遠のスタイルは九十郎にとって十分過ぎる程にストライクゾーンに入るし、妄想の中でパイズリをさせた事も何度かある。

ゲスな男である。

「久遠様……前々から思ってたけど人望無すぎだよお……」

九十郎も犬子も、平手政秀が残した遺書に直接目を通した訳では無いが、その内容はいくらか漏れ伝わってきている。

一言で要約すると『いい加減にしろよお転婆小娘』だったそうだ。

その噂もまた織田家の姉妹仲を拗れさせ、重臣達が信行待望論を語る理由になってい

た。

唯一の救いと言わなければならない事、丹羽麦穂長秀……通称織田家の癒し杵が信長を見捨てなかつた事であろうか。

もし彼女まで久遠を見限つていたとすれば、ダブルスコアどころかトリプルスコアをつけられていたであろう。

跡継ぎ問題で親子仲が拗れ、娘と殺し合う羽目になつた道三、跡継ぎ問題で姉妹仲が拗れ、妹と殺し合う羽目になつた久遠……ある意味では似た者義母娘であつた。

「しかしあれが森可成か……予想通りと言うべきか、予想以上と言うべきか……」

九十郎は森一家の先頭に立つ、半裸の……半裸としか表現できない、戦場に立つ者としては軽装過ぎる女性に視線を移す。

『たびびとのふく』よりも防御力低そうじゃねえか、せめて『かわのよろい』位は着て来いよとか考えながら、九十郎は溜め息をつく。

見るからに危うい……まるで破裂寸前の核弾頭のような危うさを感じていた。

その胸はかなり豊満であつたが、流石の九十郎も揉みたいとか吸い付きたいとか挟みたいとか考える気になれなかつた。

確か戦国DQN四天王の1人で、人間シューティングゲームをやつたり、死んだ時に味方が祝杯をあげるような危険人物で、森蘭丸のお兄ちゃんだったか……よし、なるた

け近づかないようにしよう……なんてスゴイ・シツレイな事を九十郎は考えていた。

「あれで子持ちだつて言うんだから恐ろしいよな」

「会った事ないけど、その娘も物騒な性格に育つてゐるつて噂だよ」

胸も育っているのか……と、言いそうになるのを九十郎は寸前で抑えた。

流石の九十郎も多少は世間体を考えているのだ。

ちなみに森勝蔵の胸は九十郎が憐れみを覚える程に貧相だ。

「母娘二代でヒヤツハーか……あんな想像したくない凶面だよな」

「犬子もそう思うよ」

なお、九十郎は気づいていないが、本物の戦国DQN四天王は森長可、森可成ではなく森可成の子供の方である。

この男、日本史は基本うろ覚えなのだ。

丹羽長秀と聞いて『あゝつと行つた〜！ 五郎左が行つた〜！』程度の事しか思い浮

かばず、木下藤吉郎秀吉と聞いて『天下人になるが、晩年は孫仲謀と同レベル』、滝川一益と聞いて『進むのも退くのも得意な人』、佐々成政と聞いて『誰そいつ?』、竹千代と聞いて『誰そいつ?』としか感じないない辺り、ハッキリ言つて筋金入りと言えよう。

前田犬千代と聞いて『加賀百万石の大名になる人』とピンと来たのは奇跡的といえよう。

ただしこの男、加賀がどこの事なのかは全く理解していないし、百万石がどの位凄いかも全く理解していない。

もつとも……

「犬子、槍構えろ。始まるぞ……」

「う、うん……」

もつともこの男、日本史はうろ覚えであつても殺意には敏感だ。

戦場に渦巻く殺意……それが弾ける瞬間を、九十郎は確かに察知していた。

案外ヘタレでビビリなのだ。

「第一陣……かかれえいいっ!!」

直後……織田久遠信長の号令と同時に、信長軍は一斉に駆け出す。

信行軍の何倍もの勢いと必死さで、一直線に突撃する。

信長軍が信行軍よりも勇猛だから……ではない。

少しの時間差を空けて後ろから駆けてくる森一家に追いつかれると死ぬからだ。

「……つてコレ督戦隊じゃねーかあつ!!」

こんな真似ばかりしてるから人望無くなるんだよっ!!」

九十郎は叫びたい気分であつた……と言うか叫んでいた、感情の赴くままに叫んでいた。

「九十郎！ 喋つてる暇あつたら走つて走つて!!」

森一家もうそこまで来てるからあ!!」

「早あつ!!? あいつらめつちや足早あつ!!?」

不幸中の幸いと言うべきか、周りは今を生きる事に必死であつたため、九十郎の不敬極まりない叫びを聞く者はいなかつた。

「弓隊、放てえいっ!!」

前方の柴田勢から矢が飛んでくる。

自分達を阻もうと、殺そうという意思が籠められた戦国時代のメインウエポンだ。

犬子は槍で、九十郎は太刀で矢を払い除けながら走る、走る、走る……前方からも後方からも迫りくる死の予感を振り払うべく、ただひたすらに前進する。

九十郎の隣や後ろを走る戦友達が次から次へと絶命する。

ある者は足をもつれさせ、森一家に踏みつぶされた。

ある者は柴田勢の放つた矢が突き刺さり、倒れ伏した。

「くそがあつ!!、こんな所で死んでたまるかあつ!!」

それは森一家を除く信長軍全員の共通認識であつた。

九十郎が悪態をついた直後、犬子の槍が槍袢を構成する足輕の顔面に突き刺さつた。

「九十郎!!」

「分かつてる！ 足は止めずに……」

「うん、突き進むよっ!!」

犬子の槍が、九十郎の剣が、信行軍を文字通り切り開いていく。

剣を振るう度に人が死に、人が死に、人が死に、人が死に、人が死んだ。

九十郎は……吐き氣と怖氣を必死に嘔み殺しながら戦った。

まだ人殺しに慣れていないのだ。

「死んで……たまるかつー!」

九十郎は叫んだ、吐き氣と怖氣に耐えながら叫んだ。

それはきつと、人殺しなんて一生考えずに生きられる時代、人を殺さなければ生き残れない状況なんて一生遭遇しない時代……現代二ホンを生きた九十郎の叫び声であった。

九十郎は能天気で楽天的で屑であったが、それでもなお他人の命を虫けらのように踏みにじれる程、ズ太い神経はしていなかった。

いや……死にたくない、生き延びたいと、戦場に立つ誰もが心の中で叫んでいた。

こんなくだらない姉妹喧嘩なんぞで死んでたまるかと。

ただし森一家はヒヤッハーしていた。

そんな名も無き雑兵達の声にならぬ叫びを誰よりも理解していた者は……久遠と壬

月だ。

2人はどうしてこうなったと心の中で叫びながら、忸怩たる想いで死に逝く將兵達を見つめていた。

「全く……たかが姉妹喧嘩に森一家を投入した上に、

開戦直後に全軍を一直線に突撃させるとは……

何を考えているのだ久遠様も麦穂も！ 何人死ぬと思っっている！

織田家が傾き、斉藤や今川に付け込まれるのが分からんのか!？」

信長軍の必死の突撃を……想像を遙かに超える、あまりにも必死過ぎる突撃を目の当たりにして、柴田壬月勝家は人知れず悪態をついた。

こうしなければ勝てないというのは理解したが、ここまでして勝たなければならぬ戦いだっただのかと叫びたかった。

正直な話、壬月は戦鬪になるとは思っていないかった。

兵を挙げ、清州城を囲い、自らが織田家当主として認められていない事、望まれていない事を悟らせ、久遠を隠居させるつもりであった。

久遠は世間一般で言われる程愚鈍では無く、乾坤一擲の大博打をしなければ信行に勝てない事は理解すると思っていた。

理解すれば、織田家の将来のため潔く身を引くと思っていた。

だがしかし、壬月の予想、壬月の思惑は見事に外れた。

久遠は乾坤一擲の大博打をしなければ勝てない事を理解した上で、乾坤一擲の大博打をして勝ちに来たのだ。

「そこまでして……勝つ気なのか!？」

壬月は悟った。

久遠は折れないと、折れる気が一切無いと。

久遠を織田家当主の座から引きずり降ろすためには、自ら身を引くのを期待するなんて生ぬるい手では不可能だと。

その首を掻き取り、この世から退場させる以外に無いと……

「いずれにせよ……いずれにせよ短期決戦しかあるまい、迷っている時間も無い。

長引けば長引く程、斉藤や今川に付け入る隙を与えてしまう」

二倍以上の兵力差がある、半包围をして時間をかけて擦り潰すのが最適手だ。

だがしかし、それは敵味方双方の死人を増やし、勝つても負けても詰みかねない、戦略的には最悪手なのだ。

「突撃する! 織田久遠信長の……首を獲る!!」

気づくのが遅すぎたが……それでもなお、やらなければならぬ。

躊躇えば殺される、殺さなければ殺される。

空を覆う矢の雨に、信長軍が次々と倒れ伏し……僅かに綻びができた瞬間、壬月の瞳が鋭く細まる。

「柴田隊いつ!! つ・づ・けえええええええーっ!!」

壬月が吠え、柴田隊は雄叫びをあげ、駆けだした。

せめて1秒でも早く敵本陣を陥落させる、せめて1秒でも早く久遠の御首を頂戴する。

それ以外の方法は何も思い浮かばなかった。

それは猪と猪が、薩摩示現流の使い手と薩摩示現流の使い手が、あるいはバツファローマンとガンマンが正面衝突しているかのような、凄惨で壮絶な殺し合い、潰し合いであった。

作戦も何もあつたものではない、ノーガードの殴り合い、削り合い……どちらが先に敵の総大将を討ち取るかを競う、障害物競争のような戦いであつた。

時間と共に数え切れない程の将兵が落命し、それを一刻も早く止めんがために両軍はさらなる全身を続け、勢いを増して殺人を繰り返す……まるで血を吐きながら続ける悲しい馬拉ソンであつた。

「く、九十郎! 壬月様が来るよつ!」

「正念場だあつ! 腹括れ犬子おつ!!」

「うんっ!!」

押し寄せる人の波、断末魔の波、殺意の波が犬子と九十郎の眼前にまで迫る。

そのむせ返るような血の臭い、死の臭いに九十郎は吐き気と頭痛を感じていた。

手足が重くなり、目の前が暗くなり、普段通りの動きができなくなっているのを感じていた。

腹を括る必要があるのは、どちらかと言えば九十郎の方であった。

それでもなお……戦わなければ、剣を振るわなければ殺される。

それが純然たる事実であった。

「そこをどけ小童共おっ!!」

「てめえこそどけよ勝家ええっ!!」

「み、壬月様……お覚悟おっ!!」

壬月が、九十郎が、そして犬子が戦場で相對……激突した。

犬子と九十郎第6話 『稻生の戦い（後編）』

「そこをどけ小童共おおっ!!」

「てめえこそどけよ勝家ええっ!!」

「み、壬月様……お覚悟おっ!!」

壬月が、九十郎が、そして犬子が戦場で相對……激突した。

こんな雑魚共に構っている暇は無い。

一刻も早く久遠の下へ辿りつき、一刻も早くこの馬鹿げた殺し合いを終わらせるため……初撃で2人纏めてあの世に送る。

そんな壬月の迷惑を、九十郎は踏み越えた。

全力で駆ける勢いと、裂帛の氣勢、必殺の信念を籠めた一撃を、九十郎は見事に受け止めて見せたのだ。

「い………孺子、こいっつ!」

「技は千葉、位は桃井なら、力は俺だあっ!! パワー比べなら負けやしねえぞおっ!!」

まるでフリーザと戦っている時のピッコロのような台詞であるが、九十郎と壬月の腕

力は確かに拮抗していた。

一瞬の驚愕……しかし、九十郎の剣がミシリと嫌な音を立てたのを壬月は聞き逃さなかつた。

このまま腕力で押し切れると、壬月は即座に判断する。

「九十郎大丈夫っ!?!」

「ぶつ刺せ犬子おっ!! 戦場に卑怯もラツキヨウもねえっ!」

まるでウルトラマンタロウと戦っている時のメフィラス星人二代目のような台詞であるが、犬子はその言葉に素直に従った。

「う……うんっ!」

繰り出された槍の一突きを、壬月はギリギリの所で躲す……本当にギリギリの所であつた。

「くっ!」

今この瞬間だけは敵味方に分かれているとはいえ、共に織田に仕える者同士で争う事への忌避感、上司に槍を向ける事への遠慮、2人で1人に対し襲い掛かる事への気後れ……武家の娘として生まれ、武人として育てられてきた犬子の一瞬の迷い、それが無ければ壬月は死んでいた。

「勝家えっ!」

「離れる糞餓鬼いつ!!」

次は避けられない、このままの体勢では危うい、そう壬月が判断した次の瞬間……壬月の蹴りと九十郎の蹴りが同時に胸倉、腹に当たり、鏝迫り合いになっていた2人の身体が離れる。

「……名乗りは要らんよな?」

胸倉に付いた泥を払いながら、九十郎が剣を構える。

「お互いそんな暇ではあるまい」

ぷつと地面に唾を吐き、壬月が戦斧を構える。

今この瞬間にも織田家の将兵達が摩耗し続けている。

それに森一家のヒヤツハーヒヤツハー煩い声がすぐ近くにまで迫っていた。

呑気に自己紹介をしている時間は、お互いに無い。

九十郎の構えを改めて観察し……壬月は2人を雑魚と侮った自分を恥じた。

この男も、前田犬子利家も、年は若くとも一角の武士であると悟ったのだ。

鬼柴田の御家流は溜めの時間が必要であるため、接近戦では使えない。

それに既に敵味方入り乱れての乱戦になってしまっているため、仮に使えば味方も多数巻き込んでしまう。

そして今更逃げ出す事もできない……実力で押し通る以外の選択肢は、既に無いの

だ。

「かかれ柴田に引き佐久間、米五郎左に木綿藤吉……

槍の又左と退くも進むも滝川……全く、しよっぱなからビッグネームが出てきやがつて」

九十郎はこの戦いで柴田勝家を殺したら歴史変わるんじゃないやねえかな、できればなああであれ済ませたいけど殺す気マンマンじゃねーかどうしよう、なんて事を考えていたが、とりあえず神道無念流の剣の冴えは本物である。

なお、この男は丹羽長秀が何故『米五郎左』と呼ばれているかは知らないし、佐々成政の名前はそもそもインプットされていない。

「九十郎、犬子と……犬子と一緒に戦って」

胸の内から湧き上がる不安と恐怖を必死に噛み殺しながら、犬子は九十郎にそう頼んだ。

槍には僅かな震えが見えた。

「何を今更、俺達は最後の最後まで一蓮托生だよ」

九十郎はさつきからヒヤッハーヒヤッハー煩い連中に、勝家を押し付けて逃げられねーかなと考えていたが、とりあえず犬子を見捨てて逃げる気は一切無い所だけは本気であ

そんな事をすれば今迄の苦勞が水の泡になり、安寧な生活の確保が遠のくからだ。

九十郎の頭の中はどこまでも自分本位であったが、九十郎の言葉は誰よりも真剣であった。

故に犬子の槍の震えが、膝の震えが、冷や汗が……止まった。

「うおおおおおっ!!」

「どおりやああああっ!!」

「ていりやああっ!!」

……再度激突。

壬月の戦斧が、犬子の槍が、九十郎の剣が唸りを上げ、鎬を削る。

「……って、何で戦国時代で柴田勝家とチャンバラしてんだ俺はあっ!!」

久遠の居る場所に向かう最短距離に2人が居たからである。

尻尾巻いて逃げりや良かったかと九十郎は心の中で後悔したが、それをした場合高確率で犬子が死ぬので、九十郎は逃げるに逃げられない。

「そもそも何で柴田勝家が敵に回ってるんだ!？」

織田信長の右腕的存在じゃなかったのかよ!？」

九十郎は勘違いをしているが、この時点における柴田勝家は、織田信行の家老である。

織田の家に仕える者ではあるが、信長と直接の主従関係がある訳ではないのだ。

「久遠様では織田が保たん!!」

「わかるわー」

「分かつちや駄目だよ九十郎!!」

三者三様の武芸が、意地と誇りがぶつかり合う戦い……約一名ななあで済ませたいなど心の底から願っていたし、いつそ勝家と一緒に信長を斬りに行ってやろうかと本気で検討していたが、とにかく戦いが続く。

「2人とも退けい! 久遠様への義理立ては十分であろうが!」

いや……壬月もまた、ななあで済ませたいと思っていた。

前途ある若武者達を1人でも多く生き残らせたいと願っていた。

「犬子は……犬子は久遠様を信じる! 久遠様を守る!」

「違うな勝家、信長はお前が思うより強かですぶといぞ。」

少なくとも今川義元よりはな」

しかし、2人は退かない。

2人は織田久遠信長こそが尾張の正当なる主であると、織田久遠信長ならば今川にも斎藤にも負けない……いや、勝てると信じていた。

まあ、同時に九十郎は犬子と一緒に逃げ出してしまいたいとも考えていたが。

「この……分からずや共がつ!!」

だがしかし、悲しいかな九十郎は極貧農家の倅である。

磨き上げられた技術においては壬月に匹敵するも、この男には一流の武芸者同士の戦いに耐えられるような剣を用意する金は無かった。

3人の中で唯一、強度も切れ味も心許無い、質の悪い数打ち刀しか用意できなかった。ものの数分もしない内に……九十郎の剣には無数の亀裂が奔り、刃は零れ落ち、今にも折れそうな程にポロポロになっていった。

「……くそが」

九十郎は静かに悪態を吐いた。

刀の強度に氣遣いながら戦える程、刀が折れる前に決着を付けられる程、壬月は弱くない。

刀の状態に氣づかない程、壬月は抜けていない。

その証拠に壬月は、その剛腕に任せた重い一撃を、何度も何度も九十郎に叩きつけるようになっていた。

もうじき刀が折れる……そうと分かっているながら、九十郎にはどうする事もできなかった。

こんな事になるのなら、筈ではなく刀を買っておくべきだったと後悔した。

そして九十郎の予想通り、壬月の思惑通り……刀は無残にも碎け散った。

「……まずっ!？」

予備は無い、そんな物を用意する金は無かった。

神道無念流は剣を振るう技術、素手では実力の半分も発揮できない。

九十郎は即座にその辺に転がっている死体から刀を奪おうとしたが、それを素直に許す程、壬月は優しくはない。

「ならば織田のために……ここで死ぬ孺子おっ!」

振るわれる戦斧……素手の九十郎ではとても防げない、回避もできない明確な死……それが九十郎に迫る……

「九十郎おっ!!」

振るわれる殺意を、犬子が寸前の所で妨害する。

だがしかし、今の犬子は壬月より、九十郎よりも数段弱い。

2人がかりでどうにか均衡を保っていられた相手に1人で戦って無事で済む筈も無い。

2撃目、3撃目……みるみるうちに犬子は劣勢になっていく。

九十郎は新しい剣を拾うべく周囲を見渡すが……一番近い死体まで5m程度の距離がある。

行つて戻つて来るまで犬子1人で大丈夫なのか? そう九十郎が思った瞬間……

「ぎゃわんっ!?!」

犬子の身体が血で染まった。

壬月と九十郎の身体に、返り血がべつとりと付着する。

壬月の戦斧で……ではない。

戦場を飛び交う流れ矢の一本が、運悪く犬子の右目や下の所に突き刺さったのだ。

不運と言えば、明らかな不運……だがしかし、壬月はそれを見逃す程優しくはない。

「く……おおおおっ!!」

ほんの僅かな良心の呵責……才気溢れる若武者を殺す事への忌避感を瞬時に噛み殺し、壬月は戦斧を振り下ろす。

「九十郎……」

飛び散った血で、犬子は前が見えなくなっていた。

見えなくなっていたが、自分の死がすぐそこまで迫っているのが理解できた。

どう足掻いても避けられない一撃が、すぐそこまで迫ってきているのが……

「……逃げたえっ!!」

……そう叫んでいた。

本当は助けてと叫びたかった。

助けてと叫ばなかったのは、生まれてからずっと教え込まれてきた、戦場に立つ武家

の矜持であろうか……だがしかし……

「さ・せ・る・かあああああーっ!!」

……だがしかし、九十郎は犬子を助けに行つた。

その手に握るのは犬子の太刀……数年前に犬子が壬月から贈られた太刀、九十郎が今日持っていた刀よりも何倍も何十倍も質の良い太刀であつた。

咄嗟に、無我夢中に、間に合うかどうかなんて全く考えずに、九十郎は2人の間に割つて入り、犬子の腰に履く太刀を引き抜いたので。

「九十……郎……?」

「……さつきも言つただろう、一蓮託正だ」

……そして間に合つた。

この男、自分一人ならば尻尾を巻いて逃げる事を躊躇しないチキン野郎であつたが、犬子を見捨てて逃げる気は一切無い。

今まで必死こいて育ててきた金の卵を産むガチヨウを失う羽目になるからだ。

この男、どこまでも自分本位である。

そんな九十郎の極めて欲深い内心には気づけなかつたが、犬子は目の前の男が、命懸けで自分を守ろうとしている事だけは理解した。

「立て犬子おっ! 大丈夫だ、その場所は致命傷じゃない、何時間でも守り続ける!」

それとさつき犬子に矢を射た奴！ てめえのツラ覚えたからなあ！

後で後悔させてやるから覚えてろよおコンチクショウがあつ!!」

再び振り下ろされる戦斧を受け止めながら、九十郎は叫ぶ。

犬子は必死になってふらつく両脚に活を入れ、槍を杖代わりにして懸命に生き足掻く。

「矢はまだ抜くなつ！ 素人が力任せに抜いたらかえつて悪化する！」

5度、6度、7度……幾度となく振り下ろされる致命の一撃を前にしながら、九十郎は崩れない、太刀も折れない。

ここで退けば犬子が死ぬ、ここで敗れば犬子が殺される……九十郎の吐き気や悪寒は引つ込んでいた。

そしてまともな剣を持ちさえすれば、まともな精神状態であれば、九十郎は鬼柴田とすら互角に戦える程の優れた剣士なのだ。

このレベルの使い手がゴロゴロ居る辺り、大江戸学園は魔境である。

「……何者だ貴様？ ただの農民が何故これ程までに戦える？」

壬月は驚愕し、思わずそう尋ねていた。

武技も、気迫も、その辺に居る雑兵とは一線を隔していた。

大江戸学園は本当に魔境である。

「神道無念流剣士、齋と……じゃねーや、ただの九十郎だ」

「おいちよつと待て孺子、今齋藤と言わなかったか？」

「い、言つてねーよ、ただの九十郎だよ。 極貧農家の倅の九十郎だよ」

それに対して九十郎は、うっかり前の生での苗字を言いそうになり、慌てて口を噤んだ。

「何故目を逸した!? 孺子本当にただの農家の倅なのか？」

神道無念流なんて聞いたの事の無い流派を何処で修めた？

まさか……まさかとは思うが、齋藤家所縁の……」

「ち、違うからなっ!! 一応念のために言っておくが、

美濃を治めている齋藤家とは全然関係ねーからなあっ!!」

「九十郎、齋藤の人だったの!？」

「だから違うつってんだろ!!」

九十郎は真実を述べている。

前の生でも今生でも、九十郎は美濃の齋藤家とは縁も所縁も無い。

ただし、壬月も犬子もその言葉を思い切り疑っていた。

「なら、神道無念流を何処で学んだ」

「ええつと……撃剣館の、岡田師匠から……ですよ、うん……」

撃劍館も岡田師匠もこの時代には無いだろうなあ……とか考えながら、九十郎は答えた。

珍しく九十郎の読みは正しかったが、その発言態度が拙かった。

視線を逸らし、盛大に冷や汗をかきながら答えたのでは、いくら真実を述べていたとしても誰も信じない。

撃劍館も岡田師匠も、壬月や犬子にとつては聞いた事の無い名であるなら尚更だ。

「九十郎、荒子にそんな場所無かったと思うんだけど、どこにあるの？」

「ど……どこだったかなあ……」

案の定犬子にツッコまれ、九十郎は盛大に視線を逸らす。

この男は戦闘中である事を覚えているのであろうか。

「こ、此奴は……何者……なんだ……？」

「ク、クジユウロウダヨー……」

壬月も九十郎も手が止まっていた。

壬月は得体の知れない剣士の正体を必死に探ろうとして、九十郎はどうやって壬月を誤魔化そうか必死に考えて、互いに冷や汗を流しながら頭をフル回転させていた。

微妙な膠着、微妙な沈黙が3人を包みつつあったそんな時……

「壬……いいいいいいいい……っ!!」

ヒヤツハーヒヤツハー煩い森一家の頭領、森桐琴可成が雪崩れ込んできた。

「……ちいつ、桐琴か!？」

「とうとう来たか戦国DQN!! 待っていたよ戦国DQN!! ありがとう戦国DQN !!」

九十郎は後で上物の酒を桐琴にプレゼントしようと思いついた。

壬月にとつても、犬子と九十郎にとつても、できれば会わずに済ませたい戦バカの乱入により、瞬時に膠着状態が解消される。

微妙な空気が流れていようが無関係。

森桐琴可成にとつて、森一家にとつて、重要な事はヒヤツハーヒヤツハー叫びながら暴れる事だけだ。

なお、九十郎は気づいていないが、本物の戦国DQNは森桐琴可成ではなく、娘の森長可の方である。

この時期はまだ生まれてすら……いや、一体何が歴史の歯車を歪めたのかは不明だが、生まれてはいる。

とはいえ、実戦に参加するにはまだ若すぎるのでお留守番中である。

……

……

.....

結局、この日の戦い……後に稲生の戦いと呼ばれる戦いは、佐々成政（通称和奏）の姉・佐々孫介が討ち死にし、総大将織田久遠信長が最前線で刀を振るう羽目になる程の接戦になった。

「敵將林美作！ 織田久遠信長が討ち取つたりいーっ！」

織田信行軍の将が、久遠の手によってその首を落とされた。

泥に塗れ、汗に塗れ、返り血も浴び、槍が刺さり矢が刺さり傷だらけになって、腕があげられない程、膝が震えて止まらない程の疲労もあつたが、久遠は最後の最後まで戦つた、戦い抜いたのだ。

戦場全体に響き渡る程に大きく、そして猛々しい声が聞こえた瞬間、信行軍の勢いは目に見えて衰える。

いや……信行軍の雑兵達は敗北を悟り、蜘蛛の子を散らすように逃げ始めていた。勝負あり……である。

この時代において、戦いに参加している者は大部分が名も無き農民である。

主君のために命を投げ出そうとする者は殆ど無く、戦況が劣勢になればあつという間に逃げ始める。

後に久遠は農兵から常備兵への転換を目指し、四苦八苦する羽目になるのだが……少

なくとも今この段階では、大半がただの農民である。

主の為に命懸けで剣を振るい、どれだけ劣勢になろうとも、どれだけ強敵が現れようとも、どれだけ卑怯で見苦しい真似をしても、最後の最後まで主を護って生き延びようと本気で考えている九十郎は例外的存在なのだ。

「……それじゃあ、矢を抜くぞ。」

痛みと出血が激しくなるから、できるだけ力まないようにしてくれ」

「うん」

戦場の片隅で、九十郎がべたんと座り込む少女の頬に突き刺さる矢を握る。

既に勝敗は決し、掃討戦に入った今、2人に襲い掛かろうとする者は無かった。

矢は九十郎が心配するよりも簡単に抜け、犬子が心配したよりも傷や出血は小さかった。

九十郎は手際良く水筒の水で傷口を軽く洗い、傷口を手拭いで縛り、止血をする。念のために作っておいたドクダミや弟切草の葉で作った化膿止めも塗っておいた。

現代人である九十郎にとって、こんな民間療法に頼るのは気が引けたが……極貧農家の倅に過ぎない九十郎には、他の手段は用意できなかった。

「九十郎、薬の作り方なんてどうやって知ったの？」

「んん？ ああ……昔、ちよつとな……」

まさかTRPGの合間に友人から聞いた無駄知識だ……とは言えず、九十郎は曖昧に濁した。

犬子はそんな九十郎の態度を追求しなかった……いや、追及できなかった。

本当は斎藤所縁の者なのではないかという疑問も、口には出せなかった。

言えば九十郎は自分から離れて行ってしまふのではと思つたからだ。

九十郎が傍に居ない毎日を想像し……犬子は恐怖に震えた。

「首級……一個も挙げられなかったね」

逃げる信行軍、追う信長軍を遠くに見つめながら、犬子は呟く。

2人とも、追討戦に参加する元気は残っていない。

犬子も九十郎も、身を守るので……敵味方を巻き込みながら暴れ回る桐琴と森一家から逃げるので精いっぱいであった。

特に犬子は遥か格上の壬月と矛を交え、右頬に矢が突き刺ささり、逃げ回る間に10箇所以上の切り傷、刺し傷を受け……失血と心身の疲労でフラフラになっていた。

九十郎が肩を貸さなければ、立ち歩く事すらできなくなっていた。

九十郎も何度か斬られたが、犬子に比べれば軽傷だ。

「俺は一つ頂いて来たぞ」

「え……い、何時の間に……？」

言われて初めて気がついたが、確かに九十郎の腰には人間の生首が一つ、括られていた。

後に分かる事であるが、これは柴田壬月勝家に使える小姓頭・宮井勘兵衛の首であった。

「犬子に矢を射った奴の顔、覚えていたからな。」

森一家が乱入してきた時にまだ近くに居たから、ダツシユで追いかけて斬った」

人を一人斬り殺したというのに、不思議と九十郎の心は安らかだった。

嫁入り前の女の子の顔に傷をつけるような奴だったからかも……と、九十郎は思った。

今はまだ、九十郎は特に恋愛感情を感じた事は無かったが、それでもなお、犬子を大切な存在だとは思っていた。

なおこの男、壬月……嫁入り前の女性相手に剣を振るった事を見事に柵に上げていく。

それどころか、後で迷惑料とか言つて勝家のデカ乳を揉みだけねえかなとか考えており、はつきり言つて屑そのものであった。

どちらかと言えば、迷惑をかけたのは小姓頭を討ち取った九十郎の方である。

「ね、ねえ、九十郎……」

「どうした、犬子？」

「逃げなかつたよね、犬子が壬月様に襲われても、矢が当たって怪我をしても」

「ははは、うちの御主人様は俺の事を腰抜けだと思つていたらしいな」

軽く笑い飛ばすように言うが、九十郎は例外的存在だ。

下男として最低限の給金しか払っていないのに、九十郎は戦場までついてきた、犬子の隣で剣を振るつた、犬子が負傷しても守り続けた、励まし続けた、犬子に矢を射た者を討ち取り、戦いが終われば傷の手当までした。

それが犬子にとつてどれだけ大きな衝撃を与えたか、どれだけ大きな救いであつたか、九十郎は全く気づいていなかった。

「うん……ごめん、途中で逃げると思つてた……」

「悪いと思つているなら、俺が逃げても問題無い位強くなつてくれ」

そして俺に安寧な生活をプレゼントしてくれと、九十郎は最低な事を考えた。

この男、逃げてても犬子は死なないと思つたら、迷わず逃げるチキン野郎である。

犬子は今すぐこの男をクビにするべきだ、物理的に。

「犬子、もつと頑張るからね。それと……」

……今、自分が生きているのは九十郎のおかげだ。

犬子はそう思つていた。

だけど今、犬子は自分が抱いている感情が何なのか、判別ができなくなっていた。無関心ではない、それだけは断言できる。

しかし友情なのか、感謝なのか、親愛なのか、不安なのか、あるいは……愛情なのか。自分の心中に渦巻く感情の波が、犬子の心臓を圧迫していた。だから……

「あり……がとね……」

今の犬子には、俯いてそう呟くのが精一杯であった。

ただし九十郎は、なんだ案外戦えるじゃないか神道無念流は……なんて極めて楽観的な事を考え、犬子の複雑な心境に全く気付いていなかった、これがこの男の平常運転である。

犬子が九十郎への恋心を自覚するのは、もう少し後の事。

九十郎が犬子に対し愛情を抱くようになるのは、かなり後の事である。

犬子と九十郎第7話『突然の死』

永禄元年、西暦換算で1558年、浮野の戦い勃発。

犬子はいこれまでの鬱憤を、九十郎に対する微妙な心境を晴らすかの如く大暴れをし、『槍の又左衛門』と畏敬を籠めて呼ばれるに至る。

九十郎は戦が終わった直後に吐いたし震えたし漏らしたが、とりあえず戦闘中は殺人への忌避感を堪える事が出来た。

活躍？ 居ないよりマシレベルでしたが何か？

そして……

「赤母衣衆キタ——、(。▽。)ノ——(。)ノ——()ノ——(▽。)ノ——、(。▽。)ノ——
 「赤母衣衆来たあ——っ!!」

少し大きく立派になった前田犬子利家の屋敷の前で、2人の少年少女が歓喜の雄叫びをあげた。

グルグルと回転しながらはしやぎまわっている少年の名は九十郎……前の生では齋

藤九十郎、今生ではただの九十郎。

少女の名は前田又左衛門利家・通称犬子。

この館の主人にして、つい先日新設された織田久遠信長直属の親衛隊、赤母衣衆に抜擢された者だ。

「しかも100貫も加増されたよ、凄いでしょ九十郎!!」

「ははは、御主人様の出世に俺も鼻高々だな」

加増により、犬子の知行は150貫になった。

単純計算で3倍もの収入増に、犬子も九十郎もホクホク顔だ。

しかしこの男、稲生の戦いが終わって以降ほぼ何もやっていない。

精々武具の手入れに屋敷の管理、炊事洗濯に家計簿と、ただの専業主夫と化していた。それでも犬子が出世した事による恩恵はしっかり受け取る気である辺り、相当なクズ

男と言えよう。

「はっはっはっはっ、もつと犬子を褒め称えるが良いー!」

「凄いで強いぞカツコイイ! 天下無双の槍又左!」

そんな九十郎の思惑に気づきもせず、犬子はたわわに実ったおっぱい……もとい、胸を張る。

身長伸びは止まったものの、女性らしい部分の成長著しい少女の姿に、九十郎が

悶々とした気分になったのは一度や二度では無い。

指摘しても本人は頑なに否定するだろうが、この男は巨乳好きで、物静かな文学系少女より、エネルギーシユな体育会系の女性を好む。

前田犬子利家は九十郎の好みのタイプであった。

しかしこの男、上司を強姦して処刑とか洒落にならんだろ……という理由で必死こいて我慢して、時折久遠や壬月のあられもない姿を妄想して発散しているのだ。

なお後日、九十郎は愛する嫁達をオナネタにされていると知った剣丞に殴られ、美空に股間を蹴り上げられ、光璃に風林火山を叩き込まれ、犬子に頭を齧られる。

自業自得である。

実際の所、今この瞬間に犬子を押し倒したとしても強姦にはならないのであるが、九十郎がそれに気づくのはもう少し後の話である。

あの前田利家が……加賀百万石、槍の又左衛門、歴史に名を残すような優れた英雄が、自分如き屑を好きになる筈が無い……この男は心のどこかでそう思っている。

基本的に楽観的で能天気な男であったが、対女性関係については割と悲観的でマイナスイ志向なのだ。

「……でも正直、あんなクソ目立つ格好で戦場に行きたくねえよなあ」

九十郎の視線の先には、犬子が久遠から贈られた全身真っ赤な当世具足、そして巨大

な赤提灯モドキ……赤母衣と呼ばれる旗指物があった。

自分が着る訳では無いが、着ると言われたら辞退したいデザインであった。

「何を言ってるのさ九十郎、目立つために着るんだよ。」

目立たなきや武功をたてても誰も覚えていてもらえないじゃない」

「それは知ってるけどなあ……」

母衣が大將側近の近習や使番だけが着用を許される名誉の装飾具である事は理解している。

しかし、九十郎は名を売るために戦っているのではなく、犬子が死ぬ可能性を減らし、場合によっては恩を売るために戦っているのだ。

目立たずしごとく泥臭く生き残る上で、全身真っ赤な戦装束は邪魔にしかならない。

九十郎はシャア・アズナブルでもジョニー・ライデンでもないし、そうなりたいとも思っていないのだ。

「やはりこれからの時代はギリースーツだぞ、犬子。」

見ろ、このこれでもかかってくらい隠密性を。

街中で着るとむしろ目立つし、夏場に着るとクソ熱いのが難点だがな……」

そう言う九十郎は物置の奥からお手製のギリースーツを取り出した。

この男、日々の作業の合間に何か作る事が半ば趣味となっている。

「皆が鎧着てる中で一人だけこんな着こんでいたら、逆に目立ちそうだね」

戦国時代に紛れ込んだモリゾー的物体を想像し……見る者を恐怖させるか笑い転げさせるかはともかく、相手の戦意を喪失させるのには役に立つかもしれないと、九十郎は思った。

ちなみに九十郎は笑い転げる方だ。

「ははは、誰がこんなモジャモジャ着て正面突撃するんだ。」

これはあくまで単独行動用の装備だよ」

後日、光璃はギリースーツ狙撃銃部隊『夢がライフリング隊』なるものを組織するのだが、全く目立てない恰好、目立てない戦法であるが故に家臣からの評判は芳しくなかった。

けらけらと笑い転げながら喜んだのは武藤一二三昌幸位である。

「まあ何にせよ、今夜はお祝いだね」

「応とも、今夜はパーティだ、サタデーナイトフィーバーだ」

「言葉の意味は分からないけど、とにかくお祝いだあーっ！」

犬子の尻尾飾りがパタパタと喜び、飛び跳ねる。

ちなみにお祝い用の料理を用意するのも九十郎の役割だ。

料理の評判はかなり良い。

フェルディナント・マゼランの世界一周話に比べ、何倍も何十倍も喜ばれる。

その事に気づいた瞬間、九十郎は『解せぬ』と悔しそうに呟くのだが。

「ああ、そうだ九十郎、今日はひよ子も呼んで良いかな」

「え、あいつ呼ぶのか」

犬子の提案に、九十郎は露骨に嫌な顔をする。

この男の中で、木下藤吉郎秀吉……通称ひよ子の評価は高くない。

孫仲謀と同レベルの晩年って事は、外征に出る度に負けて国力擦り減らすとか、疑心暗鬼になって功臣や世継ぎ候補を次々と処刑するとか、そういう事だろう。

桑原桑原、関わり合いになりたくないね……とか考えている。

おまけに貧乳、巨乳好きの九十郎としてはかなりのマイナスポイントだ。

必要に応じて土下座もするし、靴も舐めようとは思っているが、自分から積極的に交友しようとは思えないのだ……下手に仲良くなると後が怖いので。

「良いじゃない、ほらこの間、ひよ子も久遠様の轡取りに昇格したし、

そのお祝いも兼って事にしてさ」

「分かった分かった、今日のメシは3人分な。 となると一回買い出しにでないとな

……」

ただしこの男、主君に逆らうだけの度胸は無い。

地味にヘタレであった。

「ひよ子〜！ 聞こえる〜！ 今日はお祝いするから一緒においで〜！」

「ひよ子〜っ！ メシ奢つてやるから買物付き合え〜っ！」

2人で呼びかける。

ひよ子は前田利家の屋敷のお隣に住んでいるので、在宅中ならば直接声をかけられるのだ。

それにしても、後の関白にこんな口を叩けるのはこの男ぐらいである。

「はいは〜い、今行きま〜す」

そんな声が隣から聞こえてくると、ひらりと軽い身のこなしで、1人の少女が屋敷と屋敷を隔てる塀を飛び越えてくる。

笹食つてる場合じゃねえ……と、九十郎は心の中で呟いた。

本人に言うのとぷりぷりと怒り出すが、ひよ子の挙動は猿のようであった。

「ひよ子、犬子は今日から赤母衣衆だよ」

「おめでとうございませう、犬子さん。」

私も先日、念願かなって久遠様の轡取りに任じられました」

「知ってるよ、おめでとうひよ子」

犬子とひよ子が抱き合いながら互いの出世を寿合う。

この2人、理由は不明だが割と気の合う友人同士だ……たぶん久遠の無茶振りを聞き続けた苦勞人同士の共感故なんだろうなと、九十郎は非常に失礼な事を考えた。

「犬に猿……と……」

犬猿の中という諺を九十郎は知っているが、少なくとも犬子とひよ子には当てはまつてはいない様子だ。

九十郎は前の生で出会った『桃太郎』の異名を持つ女性を思い浮かべる……金棒を振り回してバスをバラバラに粉碎できる危険人物だが、不思議と周りから慕われていた。

おまけに九十郎好みの豊満おっぱいでもあった。

それがある日突然、転校生に搔つ攫われ……心臓がズキリと痛んだので九十郎は考えるのをやめた。

「鬼退治桃太郎先輩ときて、犬と猿……この先、雉と鬼でも出てくるんじゃないかねえ……」

後の関白を見ながらこんな失礼な事を考えられるのもこの男ぐらいである。

天罰とでも言うべきか、この男は後日鬼に襲われて死にかける。

「九十郎さん、今凄く酷い事を考えませんでしたか？」

「カンガエテナイヨー」

咄嗟に誤魔化そうとしたが、九十郎は嘘が苦手なタイプであったし、ひよ子は僅かな

仕草から他人の感情を読み解くのが得意な方だ。

「九十郎さん、ひつどいですよ〜!」

案の定と言うべきか、ひよ子はぷりぷりと怒りだした。

何に対して怒っているのかひよ子自身も分かっていないが、世の中には知らない方が幸せな事もある……特に九十郎の真つ黒い腹の中身は。

「ははは、今日は奮発するから今すぐ許せよ」

「食べ物で釣られると思つたら大間違いですからね!」

「ははは、タダ飯と聞くと千里の道をも踏破しかねん、ちやつかり娘が何を言うか」

「失礼な、生活の知恵と言つてください」

後の関白にこんな口を叩けるのはこの男ぐらいである。

「一発屋には流石に負けるだろうが、それなりの物は食べさせるよ。」

荷物持ちと値引き交渉は頼んだぞ」

自分は筋肉隆々のくせして、少女に荷物持ちをさせようとする男がいた。

「九十郎、お酒もよろしくね。今日は犬子、ガンガン呑むからさ」

「ははは、酔い潰れた後の介抱も含めて承知したよ御主人。」

ビール……は、この間全部飲んじまつてたよな。ひよ子、最初に酒屋に行くか」

「はい、分かりました」

舌先三寸で丸め込むのはひよ子の得意分野だが、後の関白にこんな事をさせようとするのはこの男くらいである。

そしてこの男、仕事の合間にビールやシャンパンを醸造している。

麦はともかく、ホップは手に入らないので味はイマイチだと九十郎は考えていたが、少なくとも犬子とひよ子からは好評だ。

「確か土蔵で作っていたチーズがそろそろ食べ頃だったよな。」

前に作ったパン粉の残量もあるから……

よし2人とも、今日はハンバーグにするぞ、チーズ入りのやつだ」

「ちいず入りはんばあく!!」

「チーズ入りハンバーグですかあっ!?!」

途端に、犬子とひよ子の瞳が爛々と輝きだす。

安い端肉を使っているのに味は極上と、2人からチーズ入りハンバーグは大好評なのだ。

なお、九十郎は気づいていないが、ハンバーグは18世紀頃のハンブルグで生まれた料理であり、未来の料理である。

「と言う訳でひよ子、ネギと端肉、後は適当な葉菜を調達するぞ」

「はい! もう今日は張り切っちゃいますからね!」

「九十郎！ 御飯を炊くのは犬子がやつとくから、早く帰ってきてね！」

「ははは、うちの御主人様は俺達に山盛りのオコゲを馳走したいらしいな」

「昔の話を持ち出さないでよ！ 同じ失敗を何度も繰り返す犬子じゃないってば！」

「おいひよ子、うちの御主人様がまともに飯を炊けているか賭けようぜ」

自分の主の失敗をネタに小銭を儲けようとする男、その名は九十郎である。

「水が多すぎてお粥になる方に30文」

「そう来たか、ならば俺はオコゲと白米の割合が5：5に30文といこう」

「九十郎っ！ ひよ子おっ！」

顔を真っ赤にしながら怒鳴り散らす犬子を尻目に、九十郎とひよ子は財布と買い物籠を手に走り出す。

基本楽天的な九十郎は今後の自分と犬子は安泰であると信じ切っていた。

もう少し犬子が出世したら、こっちでも道場建てようかな、等と能天気な事も考えていた。

その内手痛いしつぺ返しが飛んで来るなんて思いもせず……

なお、その日の夜30文がひよ子の懐に収まった。

……

……

………

永禄2年、西暦換算で1559年……織田久遠信長の居城・清洲城内を、げんなりとした表情進む1人の少女が居た。

「はあ……働けど働けど減らぬ仕事……むしろどんどん増えていく……」

少女の名は佐々成政、通称は和奏。

尾張国春日井郡比良城の城主・佐々成宗の娘、そして稲生の戦いで討ち死にした佐々孫介の妹。

九十郎の琴線にびくりとも触れない貧乳娘である。

そして後の桶狭間の戦で姉、佐々政次を喪い、急遽佐々家の家督を継ぎ、比良城の主となってしまう不幸な人である。

しかも織田久遠信長直属の親衛隊、黒母衣衆に抜擢されるといふオマケ付きだ。

「そりゃあ、一日でも早く一人前の武士になりたいって毎日言ってたけど、

よりにもよってこんな形で実現する事はねえじゃんかよ……」

稲生の戦いの翌日、生首になって戻ってきた姉・佐々孫介の姿を思い浮かべ、和奏は一人涙を浮かべる。

孫介は桶狭間で戦死する佐々政次と共に、三河の支配権を巡る織田家と今川・松平連合との戦い『小豆坂の戦い』で武功をたて、小豆坂七本槍と畏れられた勇将であった。

そんな優れた姉の代わりが自分に務まるのだろうか、うつけ者、激情家で知られる織田久遠信長に仕えて大丈夫なのかと……和奏は不安だったのだ。

「大丈夫大丈夫、何か粗相をしても雛がちやくんと尻拭いをするからさあ」
「わひゃううっ!?!」

音も無く背後数c mに立っていた少女に驚き、和奏は天井に頭をぶつけんばかりの勢いで飛び上がる。

少女の名は滝川雛一益、悪戯好きで有名な織田の若武者であり、九十郎が鼻で笑うレベルのつるぺたである。

「いきなり音も無く背後に立つなよ！　びっくりするだろっ!」

「びっくりさせたいから立つんだよ。それより和奏ちゃん久しぶりだね、元気だった?」
「喪に服す余裕も泣いてる暇も無い位に忙しいよ、そっちは?」

「極秘任務かな。御家流の連続使用記録に挑んだり、今川の忍者に追いかけて回されたり、

いやあ本当に大変だったよ。久遠様に時間外労働手当請求したい位」

そんな事を言っただけだが、久遠は十分すぎる程に高額な特別報酬を雛に支払っている。

明らかに格上の存在である今川義元を返り討ちにし、上洛を頓挫させるべく、織田久

遠信長と武田光璃晴信が考え出した決死の策『邪風発迷』。

それは成功すれば義元が死に、しくじれば久遠と光璃が死ぬ、命を賭けた半丁博打……その一端を雛は担っていたのだ。

「そつちも大変みたいなんだな。ボクはボクで姉ちゃんが討ち死に、急に権限と責任が増えてあつちに行ったりこつちに行ったり……」

本当に悲しむ暇もありやしなかつたよ」

なお、桶狭間で政次が死亡した後は、その権限と責任は一気に10倍以上になる。

和奏は相次ぐ姉との死別を悲しむ間も無く仕事漬けになるのだが……それは別の話である。

「まあ〜ウチは何かと戦力不足の人材不足だからねえ。

そろそろ今川が上洛する気配があるし、若いとか経験不足とか言ってもらえない訳だよ。

ちよつとでも芽がありそうな人が居たらドシドシ出世させる方針だから、

和奏ちゃんも頑張ろう」

「あれだけ身内と殺し合い続けてたら嫌でも人材不足になるだろうって話だろ。

姉ちゃんだって……それであんな事に……」

「う〜ん、身内での戦いはこの間の戦いでもうおしまいだと思うけど。」

もう尾張は久遠様一色で大体固まつてるし……

ああでも、今川の調略がどの位進んでるかは気になる所かな」

久遠の母・織田信秀の急死から延々と続いた身内同士の殺し合いの背景に、今川による調略があつた事はある程度まで調べがついている。

雖は今日まで忙しく飛び回っていたため、その辺りに関与していないが……海道一の弓取りとまで畏れられている今川義元が、

上洛という大一番で調略の手を緩めるなんて事は、まずありえない話であつた。

「何にせよお互い大変ですな、和奏さんや」

「そうですなあ、雛さんや」

そこに一人の少女が何やら楽しそうにスキップしながらやって来た。

「おや雛殿に和奏殿」

この少女の名は拾阿弥、織田家で召し抱えている同朋衆……武将の側近として仕える僧であり織田久遠信長のお気に入り茶坊主、数分後に犬子に斬られて死ぬ運命にある人である。

「うげ、拾阿弥か……」

正直な所、和奏は拾阿弥が好きではなかつた。

拾阿弥は口が悪い上に悪知恵が働き、プライドが高くて他人を妬む性格で、本人が居

ない所で陰口を叩くのが趣味の少女だ。

いずれその性格が災いして問題を起こすんじゃないかなろうかと思っていた。

「おや拾阿弥ちゃん、楽しそうだね。何か良い事あった？」

対して、雛は拾阿弥を嫌ってはいない。

雛も拾阿弥も生来の悪戯好きで、時折自分がしでかした事を自慢し合う仲なのだ。

「ええ、ええ、それはもうっ！　ここ数日は珍しく久遠様の機嫌が宜しく、

それに個人的にとても面白い見世物が見れましたので」

「見世物……？」

「見世物……？」

和奏はまた悪趣味な悪戯をやらかしたんだらうなと考えながら、雛は悪戯好きとしての好奇心で聞き返す。

「じゃあくん！　どうですかこの筈！」

「筈……あれ？　それって犬子がいっつも持ち歩いてる筈じゃないか？」

なんで拾阿弥が持つて……と言うか、そのどこが面白いんだ？」

「いえねえ、用事でもあったか厠にでも行つてたか、

溜まり間に犬子殿の刀がぼつくと置いてありました。

それでこの拾阿弥めの悪戯心が騒いだのですよ……

この筈を隠したらあのイヌっころがどれだけ滑稽に踊り狂うかと」

その言葉を聞いた瞬間、雛の胸中で半鐘が大音量で鳴り響く。

雛の直感が危機的状況を察知したのだ。

拾阿弥は知らなかった、悪戯というものは、見た目程簡単ではない事を。

怒らせてはいけない人物を怒らせれば、嗤ってはいけないものを嗤えば、壊してはいけないものを壊せば、逃げなければならぬ場所が進み、謝らなければならぬ場所で挑発すれば……命が軽い戦国時代だ、あっさりと死ぬ。

笑って済ませられる悪戯をするためには、その辺りの見極め、換言すればエアリーディング能力が不可欠なのだ。

雛はその辺りをキツチリと見極めながら悪戯をしている。

雛は引き際を見誤らない、止め時を見誤らない。

その努力と慧眼はあまりにも鮮やかで……鮮やか過ぎて拾阿弥の目に拾えぬものだったのだ。

「拾阿弥ちゃん、ちよつと雛、お話が……」

雛は飄々とした態度を崩さず、何でもない立ち話のような軽さでそれを指摘しようとした。

それが悪かった。

雛の危機感は全く拾阿弥に伝わらなかつた。

「そこから先がもう可笑しくて可笑しくて！ 城中の箆筒やつづらをひっくり返すわ、御堀や茂みに飛び込んで泥まみれ葉っぱまみれになるわ、

近くを歩いていたら下人を締め上げるわ、

挙句の果てに厠や馬小屋に落とされたのかもとか叫んで……なあんと全身糞塗れえつ

！

いやあ、たかが箆一つでこんな大騒ぎになるなんて、楽しいですなあ！」

「いや全然楽しくないし笑えないよ」

和奏が冷ややかな視線を拾阿弥に浴びせる。

「一步間違えたら刃傷沙汰になるんじゃないか、巻き込まれたくないなあ……なんて事を考えていた。」

「しかも天井裏にあったなんて教えたら真に受けて！」

あの娘清洲城の天井裏を駆け回って、埃まみれの蜘蛛の巣まみれ、

おまけに屋敷の警護をしていた者達が曲者と叫んで大騒ぎに！

いやあこの拾阿弥、久しぶりに腹を抱えて大笑いしましたとも！

天井裏で見たなんて嘘、少し考えればすぐにおかしいと分かるでしょうに！

あの知恵足らずのイヌっころはこれだから滑稽です！」

拾阿弥はどんどんヒートアップして犬子を嘲笑う。

普段は本格的に道を踏み外す前に拾阿弥のフォローに回っていた雛であるが、ここ最近『邪風発迷』の策の下準備のため長く尾張から離れていたため、拾阿弥の悪戯が際限無くエスカレートしてしまっていたのだ。

「うん、その後返り血で真っ赤に染まるんじゃないかなあ。拾阿弥ちゃんの血で……」
こりやあバレたらアバラの5く6本じゃ済まないかなあ……そう心の中でため息をつきつつ、雛は頭をフル回転させ、どう穏便に話を終わらせるかを考え始める。

しかし……

「……あ」

「……やばあ」

雛と和奏が同時に息を呑み、瞳を見開く。

2人の視界に入ってきた人物に、拾阿弥は気づかない。

刺すような視線、怖気を感じるような殺意に、雛と和奏が同時に身を縮める。

2人が感じ取ったものに、拾阿弥は気づかない。

雛と和奏は、たった今拾阿弥が自慢げに語っていた内容を、一言一句たりとも聞き逃さなかったのだろうなと思ったが、そんな2人の心境すらも拾阿弥は気づかない。

「な、なあっ！ やっぱそういうの良くないって！ 今すぐ返して謝った方が良いぞ！」

「ひ、雖も和奏ちゃんに賛成かなく、やっぱり世の中笑えない悪戯もあるものだし」

「何を言っているんですか、あの臆病者のイヌっころにはお似合いではないですか！

知っていますか、あいつ貧農の子に御守りをしてもらわないと、

戦場にも行けない腰抜けなんですよ。この筈だつてそいつから頂いた物だとか

……

「おんな安物の筈を後生大事にするなんて、底が知れますねえ！」

……殺意が強まった。

『臆病者』という言葉は、戦場で生きる武人にとつてかなり強烈な侮辱である。

少なくとも過去に一度も従軍した事の無い拾阿弥が口にして良い言葉ではなからう。

「……なあ、雛」

「何かな和奏ちゃん」

「ボクもう逃げて良いかな？ いや逃げてても良いよな？」

「和奏ちゃんは薄情だね、古馴染みの拾阿弥ちゃんを見殺しにするなんて」

「久遠様のために命を張るならともかく、拾阿弥のために命を賭けたくない」

「奇遇だねえ、雛もそうだよ」

「……お二方、さつきから何を（こそ）（こそ）と相談しているのですか？」

「（こ）（こ）からが（こ）の話を面白い所だというのに」

「拾阿弥、後ろ見ろ」

「拾阿弥ちゃん、後ろ後ろ」

「へ……………」

2人に促され、拾阿弥がゆっくりと振り返る。

そこには…………

そこには全身煤まみれ、埃まみれ、泥水まみれ、葉っぱまみれ、蜘蛛の巣まみれの前田犬子利家がにこにここと笑いながら佇んでいた。

一晩中一睡もせず、駆け回っていたためか、唇は紫色になっており、目の下にはドス黒い隈ができていた。

茂みや馬小屋にまで飛び込んでいったためか、所々に切り傷や擦り傷があり、背中には馬に蹴られた痕さえあった。

口元は笑っていたが…………目は座っていた、血走っていた。

次の瞬間、雛と和奏は気づいた。

拾阿弥はたった今、虎の尾を踏んだのだと。

拾阿弥はこう思った。

織田久遠信長の同朋衆である自分を、保護者同伴でないと戦場に立つ事すらできない
イヌっころなんぞに斬れる筈がないと。

「拾阿弥、筈返せ」

犬子にはこやかに笑いながら……雖と和奏が本気で死を覚悟する程の笑みを浮かべ
ながら、短くそう告げた。

今すぐ素直に返したら、何も聞かなかつた事にしてやる……それは犬子にとって最大
限の譲歩であり、同時に最後通告でもあった。

「他人にものを頼むのなら、それなりの態度があるでしように。」

臆病者のイヌっころは……お願いしますが抜けていますよ、犬子殿」

お願いだから素直に返してくれと全力で祈っていた雖と和奏の希望に反して、心のど
こかで素直に返してくれるなど願っていた犬子の希望の通りに、拾阿弥は最後通告を
蹴った。

……次の瞬間、犬子は太刀を抜いた。

「ひいっ!!」

瞬時に拾阿弥は腰を抜かす。

戦場に立った経験の無い少女が、本気の殺意を向けられた際に見せる反応としては良
くある光景だ。

「その筈は、証なんだ」

「証い？ 何の証だと言うのですか？ こんな安っぽくて小汚い筈が」

なけなしの勇氣……あるいはちっぽけな自尊心を振り絞って拾阿弥は反論しようとする。

「九十郎が命を賭けた証、命懸けで戦って、勝ち取って来た証、

そんな大事な物を犬子に預けてくれたんだ……だからっ!!」

犬子の太刀が、拾阿弥の喉元に突きつけられる。

過去に10を越える人間の首を掻き取ってきた、血塗られた刃だ。

「それを横から搔つ攫うつもりなら……拾阿弥にも命を賭けてもらおう」

犬子の鋭い視線から、溢れんばかりの殺意が迸る。

萱津の戦い、稲生の戦い、浮野の戦いにおいて、常に一番の激戦区に飛び込んでいた前田犬子利家……槍の又左衛門と、客人に茶を点てるのがお仕事で、武術を知らず、戦場に立った事も無い拾阿弥とでは役者が違う。

本気で殺す気だ……和奏も、雛も、そして拾阿弥も、本能的に確信した。

「お、おい犬子……流石に筈一つ盗られた位で斬るのは……」

「じゅ、拾阿弥ちゃん……雛は、今すぐ土下座して謝った方が良いと思うなあ……」

和奏は犬子に、雛は拾阿弥を説得し、どうにかこうにか穏便に事を納めようとする。後日、引き際を見誤らない事で有名になる少女、滝川一益の読みは正しい。

もしここで拾阿弥が笄を返還し、すみませんでしたと言いなから頭を下げていれば、2、3発殴られ、顔面に青痣を作る程度で事は納まつていたであろう。

「わ、私は悪くないですよ……」

青褪めた顔で、今にも腰を抜かしそうな程に震える膝で、拾阿弥はそう言い返す。

次の瞬間、犬子の殺意が何倍にも膨れ上がり、雛の脳裏に最悪の事態が浮かび上がる。

「拾阿弥ちゃん意地張ってる場合じゃないって！ 早く謝って!!」

「ふ、ふんっ!! 暇さえあれば貧農の子に尻尾を振って！

毎回毎回守ってもらってるワンちゃんに怒っても怖くないですよ！

こんな貧乏臭い笄を後生大事に持ち歩いて！ ああ気色悪い気色悪い!!」

ああ、もう土下座して命乞いしても許してくれないな……と、雛は直感した。

後に引き際を見誤らない事で有名になる少女の読みは、今度も当たっている。

故に……

「殺す」

「ひひひひひひひひ!!」

故に犬子は深く静かにブチ切れ、拾阿弥は脱兎の如く逃げ出した。

……

……

……

織田久遠信長は茶室で一人、茶を点でていた。

最近、茶の湯に嵌りだしたのだ。

「平和だな……」

久遠の心は安らいでいた。

母信秀の急死、傳役の平手政秀の切腹、妹殺し、そして今川の躍進……これまで片時たりとも安らぐ事の無かった久遠の心が、珍しく安らいでいた。

今川義元を返り討ちにするための策『邪風発迷』は徐々に……だが確実に形になりつつある。

100%死ぬバンザイアタックが、1割くらいなら成功の目がある大博打になっただけだが、久遠にとっては大きな大きな希望である。

かつては下手くそだった茶の点て方も、少しは見れるようになってきた。

今まで一人でコソコソと練習を続けてきたが、嫁の結菜になら披露できそうだ。

そんな中で……どかあんっ!! と襖を蹴り破り、蒼褪め、冷や汗をかき、血相を変え

た茶坊主の拾阿弥がそこに飛び込んで来た訳だ。

久遠は泣いても良いだろう。

「く、久遠様助けてください！ あのワンちゃん何もしてないのに急に怒って!!」

大嘘である。

しかし事情が全く分からない久遠には、そして基本的に身内には甘い久遠には、自分のお気に入りの同朋衆である拾阿弥の嘘を見抜けない。

「な、何事か騒々しい!」

こんな突然の出来事に対し、久遠は全く驚く事無く、動揺する事も無くすつくと立ちあがる。

この少女、突然の不幸にはもう慣れてしまっているのだ。

「前田犬子利家ですよ!」

大事な筈を盗ったとか盗らないとか因縁をつけて、刀もって襲ってきたんですよ!!」

「な、犬子がか!?!」

拾阿弥がさらに言い訳をしようとするも、さらなる乱入者……完全に頭に血が上っている犬子が文字通り飛び込んで来て、寂れた茶室内は途端に剣呑とした空気に包まれる。

「貴様何をやっているのだ前田犬子利家えつ!」

城内での抜刀はともかく理由を言えいっ!!」

即座にこの反応ができた久遠は褒められても良いだろう。

だがしかし、犬子は既に他人の話聞ける状態ではなくなっていた。

「処罰は覚悟の上、斬首でも切腹でも甘んじて受け入れます……だけどそいつだけは!!」

犬子は太刀を振り上げる。

拾阿弥はひいっと小さな悲鳴をあげて全力で後ずさるも、狭い室内では後退もままならない。

「ま、待て犬子……この諍いは久遠信長が預かる! 剣を納めよ!」

咄嗟に久遠はそう叫び、直後……

「死ねっ!!」

……直後、犬子の剣が煌めき、血飛沫と共に拾阿弥の首が宙に舞った。

幼少の頃より武芸を磨き、幾度かの修羅場を潜り抜けた武人の剣は、意図も容易く久遠お気に入り茶坊主の首を斬り落としたのだ。

「あ……拾……阿弥……?」

呆然と口を開け、縁側に転がる生首と胴体を眺める……

久遠の身内が何の前触れも無く突然死ぬのはいつもの事だ。

基本的に情が深い久遠にとって、別離の痛みと悲しみは何度経験しても慣れる事は

きなかつた。

この日、心の中で久遠は叫んだ『どうしてこうなったあつ!!』と。久遠は泣いても良いだろう。

同じ頃、九十郎はセコセコと脇差をスペツナズ・ナイフに改造していた。

犬子と九十郎第8話 『好きになっても良いよね?』

犬子が拾阿弥を斬殺して、一夜が明けた頃……清洲城の一室で処分の言い渡しを待っている犬子の元で、九十郎が盛大に罵声を浴びせていた。

「馬鹿なの!? お前馬鹿なの!? 死ぬの!? 一体何を考えてんですかねえ!」

馬鹿馬鹿と連呼しているが、この男の大江戸学園での渾名は『ジェットストリーム馬鹿』、あるいは『馬鹿三連星のマツシユ』である。

「でも、九十郎の筈が……」

「それは知っている、おおよその事情はひよ子から聞いた。

だがな犬子、俺があれを贈った時、何を言ったかは覚えているのか?」

「う、うん……萱津の戦いで、犬子が九十郎を助けた御礼だと言ってたよね……」
「命を救われた礼にと贈った物が、恩人が命を落とす原因になったら、

贈った奴はどう思う? どう感じる?」

「あ……」

それを聞いた瞬間、犬子は頭をガァン! と殴られたかのような衝撃を感じた。

九十郎が命を賭けた証を護るため、自分も命を賭けたのだと思つてした行為が、何よりも九十郎の想いを穢し、疎んじるものだど気づかされたのだ。

「九十……ろ……」

「拾阿弥つてのは従軍経験も無い茶坊主だったんだろ？」

犬子なら殴り倒して笄を取り上げる事もできただろうに、何故わざわざ刀を抜いた」

「ち、ちが……違わない……けど……でも……」

「どうしても殺したいなら真夜中に屋敷に忍び込んで殺すね、俺なら。」

最近は改善の兆しがあるとはいえ、まだまだ尾張の治安は良くない。

押し込み強盗なんて珍しくも無い、DNA鑑定も指紋照合も不可能。

事件を迷宮入りさせる事なんてそう難しくはない……」

合理的かもしれないが、この男の思考は外道極まりなかった。

「それなのに誰かさんはわざわざ清州城内主君の眼前で、

犯人は私でございと叫びながらぶつた斬った訳だ」

外道な上に厭味つたらしい男である。

「で、でも……そんなの……武士らしく……」

「ははは、うちの御主人様は笄を盗られた怒りで、

茶坊主を斬り殺すのが武士らしい態度だと言ひ張りたいたい様子だな」

「うぐつ……」

今にも消え入りそうな細かい声で反論しようとしていた犬子であったが、とうとう何も言えなくなってしまう。

「怒りにまかせて斬れば自分がどうなるのか、俺が何を思うのか、

斬る以外に方法は無いのか……何一つ、思い浮かばなかつたのか？」

犬子は両目に涙を一杯に溜め、大きく一度頷いた。

「……馬鹿なのかお前は？」

静かに、吐き捨てるように言う……本当に厭味つたらしい男である。

拾阿弥も口が悪い少女であったが、九十郎には負けるだろう。

言うだけ言うと、九十郎はふうう……と大きく深く溜め息をつく。

失望した、見損なつた……そんな感情を、犬子はあるありと感じ取つた。

短気で短慮、不出来な主と見限られるのだと……そう思つた。

そう思つた瞬間、犬子の心が真つ暗になつた。

心が真つ暗になつて、涙がぼろぼろと零れ落ちた。

死ぬのは怖くない、切腹を命じられても悔いは無い、九十郎の筈が軽んじられるのを黙つて見ているよりは何十倍もマシだと昨日は思つていた。

だがしかし、それこそが九十郎の想いを最も軽んじ、踏みにじる事だつた……それに

気づけなかった自分が情けなかった、悔しかった、吐き気がした。

今になって死にたくない、命が惜しい、切腹なんて嫌だと考えてしまう自分が、誰よりも醜く思えた。

ちなみに九十郎の腹の中は犬子の千倍も万倍も醜い。

さつきから延々と説教を続けているが、この男の内心に犬子に対する真心など一切無い。

あるのは失望、落胆、軽蔑、そして……こつちの幸せな未来予想図を見事にひっくり返しやがってコンニャロウメ、ここまで御膳立てしてやったんだから歴史の通り順当に出世しろよという、逆恨みにも似た怒りである。

なお、九十郎は全く知らない事ではあるが、日本史における前田利家も拾阿弥を斬つて信長の怒りを買っている。

「犬子」

もう何千回、何万回と聞き続けた九十郎の声が、今日だけは地獄行きを宣告する閻魔の声のように聞こえてきた。

「えぐっ……ぐす……くじゅ……くじゅうろお……」

犬子は大粒の涙をぼたぼたと畳に零していた。

何かを言おうとしてみても、頭の中がぐしゃぐしゃで、口も思うように動かなかつた。

様々な感情がドロドロに溶け合って、犬子は咽び泣いていた。

「泣くな、うつとおしい」

この男は少女の涙を何だと思っているのだろうか。

「うぐつ……ごめん……さい……ごめ……」

「俺に謝ってどうするんだよ、謝るならせめて久遠に謝れ」

謝った所でどうにもならんだろうかと、九十郎は心の中で付け加えた。

この男は本当に少女の涙を何だと思っているのだろうか。

「う……ぐすつ……ごめ、ごめん……役に立たない……」

出来の悪い主で……わ、犬子は……犬子はあ……凄い馬鹿で……」

流石に口には出さなかったが、九十郎は本当に役に立たない御主人様だよと考えて

いた。

この男は後日鬼の軍団と戦う羽目になり、何度も何度も死に掛けるのだが、この男の

精神性は鬼以上に鬼であった。

ただ……

「泣くな、うつとおしい」

先程と全く同じ言葉、だが声のトーンが明らかに異なっていた。

侮蔑軽蔑の色が薄れ、ほんの僅かな優しさがあつた。

心底面倒臭いとは思っていたが……同時に犬子を氣遣っていた。

「九十郎……?」

俯いていた犬子が顔を上げる……直後、犬子の視界が塞がれる。

自分が九十郎に抱き締められているのだと気づくまで、そう長い時間は必要無かった。

「泣くんじやない犬子、それ以上泣かれると……俺が困る」

この上なく自分本位の理由であつた。

だがこの男にしては珍しく、本当に本当に珍しく……何の得にもならない人助けをしていた。

「落ち着くまでこうしてやる。何時間でも、日が暮れようとも」

恰好良い事を言っているようだが、日付が変わる前に落ち着きますようと、九十郎は自分本位な事を考えていた。

「あ……う、うん……」

筋骨逞しい外見の九十郎が、年齢以上に幼い見た目の犬子を抱きしめる光景からは、何とも言えぬ犯罪臭が醸し出されていたが……それでも犬子は、自分を包み込んでいた混乱と罪悪感と孤独感が薄れていくのを感じていた。

「あ、ありがと……」

もう何度目のありがとうだろうかと、犬子は思った。

自分は九十郎から受け取ってばかりだ、受け取ってばかりで……何も返せていないと犬子は思った。

この少女の中では、先程までの罵倒は叱責であったと脳内補完されていた。酷い勘違いである。

「死にたく……死にたくないなあ……」

そう口にした瞬間、犬子は自分が嫌いになった。

その言葉は紛れも無く本心……九十郎に何も返せないまま死にたくないという想いからくるものであった。

しかし、自分がこれから死ぬのは自分の落ち度、身から出た錆……それを九十郎に言っただけなのだから、どうなるのだと自己嫌悪した。

「そうか、そうだよな……死にたくないよな……」

俺も死にたくねえ、いつだっただけでそう考えているよ」

しかし、九十郎は犬子を罵倒しなかった、犬子を責めなかった。

ゆつくりと優しく、犬子の言葉を肯定した。

それで良いんだ、死にたくないなんて誰でも思っている事だと……

「犬子……大丈夫、大丈夫だからな……俺が付いているからな……」

そう言いながら九十郎は犬子の頭をぼんぼんと撫でる。

客観的に見て、何の根拠の無い言葉であった。

だけど今の犬子にとっては、何よりも強く確かな言霊に思えた。

「あいつも昔、こうやって泣き止ませてたかな……」

九十郎が言う昔とは、この男に人並みの良心が存在していた頃の話である。

意外に思える方も居るかもしれないが、この男は大江戸学園に入学するまでは多少は可愛げがあつた。

「あいつ……?」

犬子が思わず聞き返す。

全身が密着している筈なのに、九十郎が嫌に遠くに感じた。

さつきまで早鐘のように震えていた心臓が、スーッと静かになっていくのを感じた。

「俺の幼馴染の片割れだよ。」

虫の声も、車の音もしない静かな夜は、時々布団の中で泣き出すんだよ。

1人は寂しいよ、妹に会いたいよ……なあんて言つてなあ……」

あれ? そういやあいつ一人っ子だったような? 妹つて誰だ?

桃園で誰かと何かを誓い合つたのかな……なあんて事を考えながら、九十郎は犬子の肩を抱き続ける。

「あいつもガキの頃は可愛げがあつたのになあ……」

一体誰の影響であんな鬼畜外道に育つたんだか……」

蛙の子は蛙だっただけである。

犬子はそんな呟きを聞いて、やはり九十郎は自分に言っていない過去がある、隠し続けている何かがある……そう気づく。

すると無性に寂しくなり、無性に悲しくなり、九十郎の背に回した両腕にぎゅううつと力を籠めた。

「その人、今どうしているの？」

「んん……いや……そうだな、どこで何をしてるんだろうな……」

……嘘だ。

本当はどこで何をしているかなんて分かり切っている。

今もなお大江戸学園……現代日本で毎日をエンジョイしているだろうと思つている。

あの卑劣様以上に卑劣で外道なクソ女が、自分が死んだ程度の事で生き方を変えたりはしないだろうと思つている。

だけど九十郎は嘘をついた。

九十郎は生来、嘘が苦手な性質だ。

犬子は生来素直で、純真で、割と騙されやすい性格であつたが……それでもなお、九

十郎を見続けてきた時間だけは誰よりも長い。

それ故に犬子は気づいた、九十郎は嘘を言っていると。

気づいていながら……犬子は何も言えなかった。

きつと自分は数日もしない内に切腹が命じられる。

故に今日が九十郎と会える最後の日、今日が九十郎と話ができる最後の日だと分かっているながら、犬子にはそれを追求する勇気が無かった。

「大丈夫だ、俺が居る、俺が付いている、俺が助ける、俺がどうにかする。

だから泣くな、安心して笑っている」

九十郎は犬子の耳元で、そう囁いた。

それはかつて……前の生にて、寂しさに涙を漏らすファースト幼馴染対して言った言葉と同じであった。

一言一句変わらずに同じ台詞であった。

この台詞をファースト幼馴染に言い、しかもそれを録音された事で言質を取られ、

九十郎は反射炉やスクーター船の建造に駆り出される羽目になったのだが……この男、全くもって成長が無かった。

そして……どれだけの時間そうしていたのか、いつの間にか犬子の涙は引いていた。

密着していた身体と身体が離れる時、犬子の手が名残惜しそうに九十郎の方へ伸びか

かり……空中で止まる。

「もう十分だよね……これ以上欲しがったら、もう駄目だよね……」

「何の話だ？」

「九十郎の話」

「何のこつちゃ？」

「分からないなら良いよ、墓場まで持つて行くから」

「良く分からんが……まあ、良いか」

九十郎は持ち込んだ風呂敷包みの中から小箱を取り出す。

その中には筆に炭、白粉に剃刀、髪飾り……それは女性の持つ美しさを引き立たせるための道具、武家の娘として生きてきた犬子にとっては馴染みの無い道具、化粧道具であつた。

「犬子、今から化粧をすろぞ」

「え……？ お化粧？」

「こんな事もあるうかと、前々から買つたり作つたりしていたんだよ。

鉛の入つていない白粉を自作するのは地味に大変だったぞ、

ラーメン作つてた頃のTOKIOみてえに土造りからやる羽目になつてな」

「い、いいよお化粧なんて！ 犬子は武家の娘だよ！」

「良い訳があるか、ホレ顔出せ、顔」

「う、うん……」

死に化粧かな……そう考えて、犬子は九十郎の目の前にぺたんと座り、されるがままになる。

薄く白粉を振り、口には紅を、眉を少し削り、炭を塗って形を整え、髪を梳き、纏め上げ……犬子の身だしなみを整えている間、2人は終始無言であった。

犬子は数cmにまで接近した九十郎の顔を、まるで戦場に立っているかのように真剣な眼差しを凝視しながら、暴れ狂う心臓音に翻弄されていた。

『大丈夫だ、俺が居る、俺が付いている、俺が助ける、俺がどうにかする。』

だから泣くな、安心して笑っている』

先程九十郎から言われた言葉が、何度も何度も犬子の脳内で再生され続ける。

その度に顔が赤くなり、頭がかああと熱くなり、心臓がバクバクと跳ね上がるのだ。まるで九十郎の手で女の子に作り替えられているかのような感覚があった。

武家としての……前田利家としての自分が消え、ただの犬子になっていくかのような……そんな幸せな感覚に酔いしれていた。

そして……

「最後にカツラを被せて……うん、こんなものかな」

差し出された鏡を見て、犬子は大きく目を見開いた。

雪のように白い頬、黒く艶やかな眉、上質なシルクのように輝く長髪……まるで良家の子女のように品のある美しさがそこにはあった。

本当に別人に変身してしまったかのように犬子は感じた。

「わ……別人みたい……」

弦巻マキのコスプレ……は、流石に自重した。

戦国時代で弦巻マキの恰好をさせるのは、目立つ事この上ないからだ。

巨乳だし、声質も近いし、似合うんじゃないかとは思っていたが。

「当然だ、別人に見えるように徹底的にやったからな」

そんな犬子の感想をよそに九十郎は、俺ってメイクアップアーティストになっても食っていきけるんじゃないのか、なんて能天気な事を考えていた。

この男、無駄に器用である。

「九十郎、ありがとうね……」

……最後に素敵な、幸せな思い出ができたよ。

きつと犬子は地獄に堕ちるだろうけど、きつと犬子は胸を張って死ぬるよ。

犬子はそう続けようとした。

しかし……

「よし、逃げるぞ」

「…………え!？」

その予想外の提案に、犬子は思わず素っ頓狂な声を出してしまう。

幸せな気分は一瞬にして吹き飛んでしまっていた。

「何を呆けた顔をしているんだ? 武士道だか騎士道だか北海道だか知らんが、

お上に腹切れなんて言われて、はいそうですねって言えるか、言わせてたまるか」

尤もらしく語っているが、戦国時代では無茶苦茶な理屈である。

「ほ、本気で言ってるの!？」

「当たり前だろう、何のために虎の子の変装セットを持ち込んできたと思っている。

それにここに来るまで、

脱出の邪魔になりそうな見張り役を3人も殴り倒してきているんだぞ」

「殴り倒したあつ!？ さ、3人もつ!？」

これだけ大騒ぎをして、化粧なんてしているのに誰も見に来ないのは、九十郎があらかじめ見張り役を気絶させていたからである。

「安心しろ、手加減はした。しかも逃走資金も携帯食料も逃走経路もバツチリだ」

この男、無駄に有能である。

ただし犬子が逃走を潔しとしなかった場合どうするかを全く考えていない辺り、この

男は基本的な所で考え足らずである。

「本気で……本気で犬子と一緒に逃げる気なの……？」

だがそんな無茶苦茶な理屈が、今の犬子には輝いて見えた。

そんな無茶苦茶な理屈が、今の犬子には福音に聞こえた。

「いや当たり前だろう、今更何を言っているんだ犬子は」

ちなみにこの男、数刻後に当たり前じゃない事に気がついて頭を抱える。

「九十郎……犬子と一緒に……犬子と一緒に逃げてくれるの？」

九十郎にとって、今の犬子は助ける価値の無い無能な主だ。

九十郎にとって、今の犬子は従う意味の無い駄目な主だ。

それは犬子自身が一番良く分かっていた。

それなのに……

「おう逃げるとも、地獄の底まで……というのは流石に御免だが、

蝦夷地だろうが琉球だろうが、ロシアだろうが、イギリスだろうが、アメリカだろうが、

地の果てまで逃げ続けてやるよ」

それなのに九十郎は、一瞬も迷わずキツパリと断言した。

ただしこの男、数刻後にこの宣言を死ぬ程後悔する。

「犬子は地獄に堕ちる事になっても、九十郎と一緒になら怖くないかな」

驚く程すんなりと、犬子はそう言った。

まるで九十郎と一緒に死ぬ事こそが自分の幸せだと、魂そのものが理解して納得しているかのように思えた。

「ははは、うちの御主人様は俺を地獄の道連れにする気らしいな。」

死ぬまでは付き合う気だが、流石に死んだ後までは責任はとれんよ」

「そっか、じゃあ……九十郎、犬子と一緒に逃げて。犬子が死ぬまで傍に居て」

「ああ良いとも。俺は犬子が死ぬまで離れやしない」

なお、2人とも犬子が死んだ後も九十郎はしぶとく生き残っている事を前提にしているが、先に死ぬのは九十郎の方である。

ただし、九十郎は死ぬまで犬子と共に生き続けた。

犬子は九十郎が死ぬまでも、死んだ後も、九十郎とその子供達を愛し続けた。

それだけは確かな事実である。

……

……

……

犬子と九十郎が蓄電逃亡を決意した頃……織田久遠信長は眉間に皺を寄せ、一睡もせ

ず、何故このような悲劇が舞い込んだのか、犬子をどう取り扱うべきかを考え続けた。

城中での抜刀、そして主君の眼前での刃傷沙汰……常識に照らせば、どちらか片方だけでも切腹は免れず、2つ合わされば打ち首でもおかしくない大罪である。

しかし犬子の勇猛さは織田家臣団でも随一と言つても良い。

今川との決戦を控えた今、槍の又左衛門の武名と武勇を喪うのは非常に痛い。

それに何より、久遠は既に犬子を身内と考えている。

妹の信行のように真つ向から反旗を翻した者を斬つた時ですら、心臓が引き裂かれるような痛みと悲しみに襲われたのだ。

怒りに任せた凶行で、たった一度の過ちをもつて殺すというのは……どれ程自分を痛めつけるだろうか。

それ故に久遠は悩んでいた。

それ故に久遠は悩み苦しんでいた……

そこへ久遠の胃薬……もとい、久遠の精神安定剤……でもなく、久遠の嫁・結菜が部屋の中に入ってくる。

「久遠、今朝助命嘆願書が届いたわよ。 2通、壬月と……桐琴からみたい」

「……デ、アルカ」

全知全能が人殺しに特化し、四六時中殺したり殺されたりしている森一家の頭領からの助命嘆願……およそ想定し難い異常事態だというのに、久遠は上の空だ。

「こら久遠！ 何をそんな辛気臭い顔をしているのよ！」

同朋衆が目の前で死んで落ち込みたくなる気持ちは分かるけど、起こってしまった事は仕方がないじゃないの」

「う、うむ……それは分かっている。だがな……だが拾阿弥は、良い奴であつた」
「え？」

結菜は心底意外そうな顔で久遠を覗き込んだ。

「良い奴……だったの？」

そう言いながら結菜は久遠に対し、それはひよつとしてギャグで言っているのかとでも言いたそうな視線を浴びせた。

「結菜も何度か顔を合わせていようが。」

良く気が利き、忍耐強く、謙虚で、いつも笑顔が眩しく……」

「犬子の話？」

「拾阿弥に決まっておろうが！」

「え？」

「……何やら、話がかみ合っておらぬな。まあ良い、まず助命嘆願書を読むとしよう」

久遠は壬月の書いた嘆願書を開く。

『前田犬子利家は幼少の頃より才気に溢れ、勤勉かつ勇猛である。

次代の織田家を支える柱石となりうる人材といえる。

城内での抜刀、主君の眼前での刃傷沙汰は重罪なれど、

たつた一度の過ちでその命を絶つというのはあまりにも惜しい。

聞くところによれば拾阿弥が犬子を挑発したのを見たという者もあり、

犬子にのみ落ち度があるとは断言できぬ所。

この権六めが責任をもって犬子を監督し、立派に更生させるので、格別の慈悲を願う。

もし助命が叶えば、犬子は自らの犯した罪を恥じ、

織田久遠信長から受けた恩義に報いんがため、これまで以上に忠勤に努めるだろう』

……おおむねこういう内容であった。

続いて久遠は、桐琴が書いた嘆願書を開く。

『棄てるならくれ』

……原文ママである。

結菜は思った、犬子を犬猫か何かと勘違いしてるのではなからうかと。

久遠は思った、犬子を森一家にブチ込むくらいなら、いつそ切腹させた方が楽なので

はなからうかと。

「しかし……拾阿弥が犬子を挑発か……俄かには信じられぬ話だが……」

「それはひよつとして冗談で言っているのかしら?」

「さつきからどういう意味だっ!」

「強いて言うなら久遠の目が節穴だつて事かしら。」

あの拾阿弥つて娘、評判良くなかつたわよ」

「な、なんだとおつ!」

「なんだとつて気づいてなかつたの!」

……今度は久遠の方が心底不思議そうな顔になった。

「え、何……? 冗談でも何でもなく素で気づかなかつたの?」

あの娘の評判最悪だつたわよ。

洒落じや濟まない悪戯も何度かあつたし、口は悪いし、

何で久遠に重用されているのか全く分からないつて言つてた人とか、

尾張の結束を乱すために送られてきた今川の間者だつて言う人も多くて……」

「いや、その話ならば我も何度か聞いています。

いずれも根も葉もない噂話、根拠の無い中傷であつたと調べがついているぞ」

「どうやって調べたの?」

「本人から話を聞いた」

「誰が？」

「我が直々にだ」

「他は？」

「十分であろう」

「その後どうしたの？」

「うむ、濫りに流言を放ったとして謹慎、あるいは降格処分にな……」

結菜は久遠の人望の無さの原因の一端を悟った。

久遠は博役を切腹させる程に追い込んでしまった事、妹殺しをしてしまった事を何度も何度も……何度も何度も何度も悔やんで嘆いていたが、実は身から出た錆なのではなからうかと思ひ始めた。

「久遠、そこに座って」

「さつきから座っておろうに」

「正座よ！　せ・い・ぎあつ！」

「お、おう……」

あまりの気迫に、久遠は慌てて姿勢を正す。

「部下の忍耐強さを鍛えるためにあえて用いているだとか、

殺す予定の味方の接客を拾阿弥に担当させて、謀反を誘発させているとか、

そういう風に思っている人がいる事は知っていたの?」

「そんな事がっ!?!」

なお、前者は麦穂、後者は他ならぬ結菜である。

美濃の蝮と呼ばれ、息をするよりも気安く謀反を行う悪女に育てられた少女の脳内は、中々に剣呑であつた。

「家中で犬子よくやつたとか、スカツとしたとか、

犬子が斬つてなければ自分が斬つていたとか言つてる人がいる事は?」

「そこまでなのかつ!?!」

最初のは和奏、二番目は桐琴、三番目は壬月である。

正直な所、拾阿弥の死を悼んでいるのは久遠と雛くらいである。

ちなみに織田家で最も……下手をしたら日本一怒りの沸点が低い幼女、森勝蔵（後の森小夜叉長可）曰く『拾阿弥つて誰だ?』である。

遭遇したら確実に血の雨が降ると察した桐琴が、清州城に近づけないようにしていたのだ。

桐琴自身も、拾阿弥と顔を合わせると殺意を抑えるのが大変なので、よつほど重大な用事がある時以外は清州に近づかないようにしていた。

「おいちよつと待て! いくら結菜の言葉でも俄かには信じがたいぞ!」

「拾阿弥は我が元服する前から長く助けてくれた得難い臣である」

その辺の事情を久遠が全く気付いていなかった事に対し、結菜は眩暈を覚えた。

「ここは一つきつめに脅しておこうかと考え……」

「久遠、犬子を切腹させたら謀反が起きるわよ……」

いえ、むしろ私が先頭に立って謀反を起こすわ。

敵は清洲城にあり！ とでも叫びながら焼き討ちね」

にこやかに笑いながらそう言い放った。

蝮と呼ばれた悪女に育てられた少女の脳内は、笑える程に剣呑である。

ただし何度も何度も謀反をおこされ、年中謀反の心配をしている久遠にとっては全く

笑えない発言だ。

「お、おい結菜……流石に冗談……」

「興入れの時に持ってきた薙刀、どこに仕舞ったかしら？」

「うむ分かった、切腹は無しという事にしよう」

結菜の迫力に圧され、とうとう久遠は白旗を上げた。

と言つても、元より一度身内と認めた者にはひたすら甘い久遠の事だ、結菜や壬月からの説得が無かつたとしても、犬子を切腹させる気は無かつた。

「とは言え……清洲城内での抜刀、我の眼前での人斬り、いずれも決して軽いものではな

い。

知行は全て没収、無期限の出仕停止が妥当であろうが……」

「もう一声、槍の又左衛門の勇猛さは来る今川との戦で必ず役に立つ、

そう言っていたのはどこの誰だったかしら?」

「分かっている、追放しては今川との戦で使えぬ。

であれば……知行を以前の50貫に戻し、赤母衣衆からも外す事にするか」

「まあその辺りが落とし所じゃないかしら。

自らが犯した罪は、自らの槍働きの雪いで貰いましょう」

「デアアルナ」

ふと気がつけば、肩の力が抜けていた。

ふと気がつけば、両肩の重荷が消えていた。

ずうくと重苦しい気分が軽くなっていった。

拾阿弥の死を悼む気持ちは無論あるが……それと同じ位、犬子を喪いたくないと思っ
ていたのだ。

自分は案外、簡単な事で思い悩んでいたのだなと久遠は思った。

そんな性格だったから拾阿弥は凶に乗ったのだが、久遠がそれに気づくのはもう少し
後の事だ。

いずれにせよ拾阿弥の過去の悪行や、今回犬子があれ程までに激高した経緯に関しては、第三者の手を借りながら再調査すべきか……そう結論づけ、久遠は俯き気味であった顔を上げる。

「誰かあるっ!」

久遠は人を呼ぶ。

たった今決まった処分を犬子に伝えるために……そしてドタドタと迫力のある足音が自分の部屋に向かってくるのを聞いた。

「……無性に嫌な予感がしてきた」

久遠は直感的に身構えていた。

また突然の不幸がやってきたのではなからうかと……

「殿お! 一大事にございます!」

離れにて謹慎していた前田犬子利家殿が……犬子殿がどこにもおられませぬっ!!
久遠は心の中で叫んだ『どうしてこうなった!』と。

そしてこの瞬間、久遠の胃薬のサービス残業が決定した。

全部九十郎が悪い。

……

……

.....

逐電逃亡は、驚く程にあっさりと上手くいった。

久遠は正直犬子に厳罰を下す気は無かったため、逃走に失敗していた方が犬子にとつても、九十郎にとつても、久遠にとつても幸せだったかもしれないが、とにかく2人は無事に逃げおおせた。

平素から仕事の合間にセコセコと逃走経路を調べ、いざという時のためにへそくりを貯め、変装道具にギリースーツ、保存食を用意していた九十郎の努力と執念の勝利と言えよう。

この男無駄に高性能である、無駄に。

九十郎に手を引かれ、徐々に遠く小さくなっていく清洲城を振り返り、犬子は思う。

九十郎を好きになったのはいつからだろうかと。

子供の頃、自分は天下無敵だと思っていた。

荒子の里に犬千代に勝てる者は居なかった。

同年代の子供達はもちろん、大人達も犬千代の敵では無かった。

小さな子供の、小さな小さな天の下で、これ以上無い程に増長しきっていた犬千代に冷や水を浴びせたのが九十郎だった。

自分は最強無敵で、誰にでも勝てると思って挑み、いとも容易く叩き伏せられた。

何度挑んでも勝てなかった、何度挑んでも跳ね返された。

なにを負けるか、負けっぱなしでいられるか……あの頃の犬千代は、ただそれだけで九十郎の傍に居た。

それがいつからか……

「ん……あれ……ちよつと待てよ、何で俺は犬子を助けたんだ……？」

犬子がそんな事を考えていた頃、九十郎はハタと気づいた。

もう犬子が……前田家が織田の下で出世する可能性は0なのではと。

自分の安寧な生活を確保するためには、むしろ犬子から離れて他の重臣達、最悪でもひよ子辺りに媚を売った方がよっぽど早いのではと。

この男、凄まじいまでのクズ、しかも短絡的に考え足らずであった。

「ねえ、九十郎」

ドドメ色の未来予想図に戦々恐々としている時、手を引かれて走る犬子が九十郎に声を掛ける。

九十郎に返事をする精神的余裕は無かったが、犬子は構わず話を続ける。

「もう……もう、しょうがないよね……？　好きになっても良いよね？」

これだけ色々してもらって、何度も助けて貰って、

沢山沢山受け取って、もう好きになってもしょうがないよね。

好きにならなくちゃ、おかしいよね……? 好きに……なっても……良いよね?」
興味ねえよ! 好きにしろよ! 一瞬そう言いそうになったが、九十郎はギリギリで堪えた。

ここでキツパリと興味が無いと叫んでいたら、犬子と九十郎は今回が最終回になっていた事だろう。

それが九十郎にとつて幸せな事かどうかは不明だが、犬子の方には間違いなくより幸せな未来が待っていた事だろう。

「犬子が誰を好きになっても、誰を嫌っても構わんよ。俺が口出しする事じゃない」
正直言つて興味無いからな……と、九十郎は心の中で付け加えた。

今の九十郎はそれどころでは無かった。

「好きだよ、九十郎。 犬子は……前田犬子利家は、九十郎が大好きだよ」

「そうか、ありがとな」

九十郎は適当に返事をした。

そして5秒後には犬子の言葉を忘却の彼方に追いやった。

この男は乙女の純情を何だと思つているのであろうか。

九十郎は気づかなかつた。

犬子が言う『好き』が『LIKE』はななく『LOVE』の方である事を。

これからどう動くのかを考えるので一杯一杯で、犬子の表情を見る余裕が無かったし、この男は心のどこかで、あの前田利家が自分のようなクズに惚れる訳が無いと思いついていた。

九十郎が犬子の想いを正しく理解するのも、九十郎が犬子に愛情を抱くのも、それを自覚するのも……もう少しだけ後の話だ。

犬子と九十郎第9話『邪風発迷』

光璃「義元を殺そうと思う」

久遠「デアルカ、していつ殺す？」

光璃「意外と驚かない、武田と今川は曲がりなりにも同盟国」

久遠「たわけ、貴様が同盟関係程度の事で尻込みするような性格か。

このまま義元の上洛が完遂されれば、

第13代征夷大将軍の足利義輝は將軍の座から引きずり降ろされ、

義元自身はその座に納まろう」

光璃「御所（足利將軍家）が絶えれば吉良が継ぎ、吉良が絶えれば今川が継ぐ、

今川は数名謀殺すれば征夷大将軍職の継承権を得られる名門中の名門……

上洛が成れば武田も織田も義元の命に従わざるを得ない、逆らえば逆賊になる」

久遠「その通りだ。故に我と貴様は上洛完遂前に義元を殺すか、

義元の走狗に甘んじるか、そのどちらかしか生きる術は無い」

光璃「今川の走狗となれば、義元は無理難題を突きつけて武田を潰す。

下僕として使うには、武田光璃晴信は悪鬼外道の名を広げ過ぎた」

久遠「私もそうだ、織田久遠信長は跳ねつ返りのうつけ者の名を広め過ぎた。

狡兎死す前に纏めて煮られるのは火を見るよりも明らかだ」

光璃「故に義元を殺す、それ以外に武田が生き残る術は無い」

久遠「故に義元を殺す、それ以外に織田が生き残る術は無い」

久遠「デアルナ、していつ殺す？」

光璃「尾張に入った時、緒戦はあえて勝たせ、油断させ、奇襲で殺す」

久遠「ふむ、貴様も我と同じ考えか……しかし言う程簡単な事ではないぞ、

あの海道一の弓取り、今川義元が問者や物見を使わぬ筈が無かろう」

光璃「問者と物見は光璃がどうにかする」

久遠「歩き巫女を動かすのか？」

光璃「そうだけどそれだけじゃない。山本晴幸、そして飛び加藤」

久遠「相変わらず油断も隙もあつたものではないな貴様は。

どんな手を使った？ 噂の甲州金とやらか？」

光璃「……」

久遠「だんまりか……まあ良かろう。

何にせよそれならば、今川の動きもかなり詳細に把握できるか。

しかし……それでも少々厳しい賭けになるぞ」

光璃「今川の陣に穴を空ける、それならば可能？」

久遠「やれなくもない、しかしどうする？」

武田はいつか必ず裏切ると、義元から警戒されていよう」

光璃「確かに、湖衣を引き入れたとは言え、大規模な軍事行動を行えば察知される。だから警戒が不十分な者に協力させる、義元に信用されている者……

今川の武将を引き込む」

久遠「一歩間違えばこちらの目論見が筒抜けになるぞ」

光璃「危険な博打を打たなければ勝ち目は無い」

久遠「デアルナ、では少し伝手を当たってみるか」

葵「やります」

久遠「そ、即答だどっ!? お、おい竹千代!

働きかけた我が言うのも何だが、もう少し躊躇とか葛藤とかは無いのか!」

葵「それで、いつ殺しますか？」

光璃「上洛途上、尾張に入った時を狙う」

葵「では私の役割は内側から今川の陣形を乱す事ですな」

久遠「こら貴様らあっ!! 我をそっちのけで話を進めるなあっ!!」

葵「久遠様、今川では上洛に向けて相当具体的な準備が進められています。」

躊躇葛藤している時間はありません。

それと今は松平葵元康と名乗っておりますので、葵とお呼び下さい」

久遠「尾張に居た頃と性格が違っておらぬか？ 今川で虐められでもしたのか？」

葵「いえ全く、次代の家老候補として雪斎禅師直々の教育を受けさせて頂きましたし、

鞠様はまるで十年來の親友、あるいは実の姉妹のように接して頂いております」

久遠「それで良く裏切る気になるな」

光璃「呂奉先も裸足で逃げ出す不義理ぶり」

久遠「美濃の蝮でもここまではやらんだらうに。あと光璃、貴様にそれを言う資格

は無い」

葵「母様が不慮の死を遂げた時、城も領地も纏めて接收した事、

まだ忘れていませんし許してもいません。

おかげで国に残した家臣達がどれ程苦労したか……」

久遠「デアルカ」

光璃「気持ち分かる」

久遠「実母を追い出し、妹婿を誘き出して切腹させ、

挙句の果てには志賀城に3000の生首を並べた貴様がそれを言うか」

光璃「分かっている、光璃にそれを言う資格は無い。

光璃はたぶん、ロクな死に方をしない」

久遠「……すまぬ、失言であった。我が至らぬばかりに博役を切腹させ、妹を殺し

……

我也またロクな死に方ができぬだろうな」

葵「ならば、あれ程気にかけてくださった雪斎禅師を裏切り、

鞠様の母を喪わせる手助けをする私も、きつとロクな死に方をしないでしようね」

光璃「我等は皆、邪なる風に迷う者」

久遠「人人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり。

一度生を享け、滅せぬもののあるべきか……

どうでロクな死に方ができぬのならば、最後の最後までロクデナシを貫くとしよう」

葵「人の生は、重き荷を背負い長い道を歩むもの……

ならば義元公の死も、鞠様の嘆きも悲しみも背負って生きる事といたします」

久遠「やるか」

光璃「やる」

葵「やりましょう」

光璃「細かい段取りは久遠に任せる。こちらは裏から……しかし、全力で支援をす

る」

久遠「まずは大々的に籠城の準備をし、

我が既に破綻している遅延戦術に固持していると思わせよう」

光璃「承知した、歩き巫女を使つて流布させる」

葵「では私は義元公がそれを信じるよう、それとなく話題を誘導します」

久遠「露骨にやり過ぎるなよ竹千代……ではなく葵、この作戦の要は貴様なのだからな」

葵「ご心配には及びません、もう10年以上も続けてきた事ですので、

おそらく私と三河勢は先鋒を申しつけられると思いますので、

上手く負けて頂きますか」

久遠「丸根砦、鷲津砦は捨てる。それと佐々政次を敗死させる予定だ」

葵「小豆坂七本槍を緒戦で使い潰すつもりですか!？」

久遠「既に本人の了解は得ている。

妹の佐々成政に家督を継がせ、重く用いる事を条件にな」

光璃「大胆な事する」

久遠「相手は海道一の弓取り、あの今川義元だ。

その位やらねば、油断させるためにあえて負けたと感づかれよう。

葵、もし三河勢が政次を討ち取ったなら、首級は丁重に取り扱ってくれ」

葵「はい、お約束いたします」

久遠「頼む。対面もできぬ、葬儀もできぬというのでは、和奏があまりにも哀れだから」

葵「義元公が死去した後、三河勢は独立を狙って動きまます」

久遠「あい分かった、織田はそれを妨害せん」

光璃「武田の狙いは安倍金山と海、可能なら氏真の身柄。」

三河まで手を伸ばすつもりは無い、今はまだ」

葵「鞠様をどうするおつもりで？」

光璃「今、葵が考えているような事をする」

葵「……本当にロクな死に方ができませんよ、私も貴女も。」

それはそうと、適当な所で織田、武田と同盟を結ばませんか？」

久遠「今川に対する明確な裏切りになるぞ？」

駿府館には葵の家臣達の家族が多数人質として預けられていると聞くが、

危険ではないのか？」

葵「義元公ならばともかく、鞠様がそれを是とする性格とは思えません……」

最悪、全員斬られる事も覚悟しています」

光璃「同盟があつても攻める時は攻める、光璃はそういう性格、それでも？」

葵「構いません」

久遠「承知した、末永く頼りにさせてもらう」

光璃「分かった、殺すのは氏真の後にする」

久遠「葵、武田の動向から絶対に目を離すなよ。」

氏真の後に殺すと約束したな、あれは嘘だとか普通に言い出しかねんぞ」

葵「当然です、いつ一方的に同盟破棄して襲ってくるか分かりませんから」

久遠「ああそれと、先日前田犬子利家が当家より出奔したのだが、

どうやら三河の御油という場所に居着いているらしい。

悪いがそれとなく便宜を図って貰えぬか？」

葵「ぶっつぶおあつ！」

久遠「葵？ どうした？」

葵「ななななな何でもありませんわ久遠様！ ええ全く何でもありませんとも！！

未だ駿河の地から離れられぬ身の上ですが、

故郷の三河衆を通じて最大限の便宜を図る事にいたします」

久遠「そうか、それは助かる。」

いずれ当家に帰参させるつもりだが、流石に今すぐと言う訳にもいかんからな」

葵「かつふおっ!!」

久遠「お、おい葵!? さっきから反応がおかしくないか!？」

葵「い、いえ何でもございませぬ! いずれ帰参ですぬ、いずれ帰参!

どうかその前に独立して……とところで、その……九十郎様も犬子様と一緒に……」

久遠「九十郎? 誰だそれは?」

葵「いえいえ、分からないのでしたらそれで構いません。」

尾張に居た頃に2、3言葉を交わした程度の関係ですのう」

久遠「そ、そうか? なら良いが……」

なお、話を分かり易くするためにこの部分だけ台本形式にしたが、以上の会話は全て密書による連絡であり、この3人が直接会話をした場面は無い。

雛は褒められても良いだろう。

そして後日、織田松平同盟の詳細を詰めるため、雛は尾張と三河を何度も往復する羽目になる。

少しでも有利な条件を引き出すべく、細かい文言にまでひたすら拘る葵相手に、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も……

雛は褒められても良いだろう。

邪風発迷の謀は、妹の夕霧、武田四天王筆頭の馬場春日信房にも内密に進められている。

その全貌を把握しているのは、光璃と山本湖衣晴幸のみだ。

その謀を、武田の起死回生を賭けた秘中の秘を、今日夕霧に伝えようとしていた。

「義元を殺そうと思っている」

「また同盟破りでやがりますか。姉上も飽きないでやがりますな」

武田の今後を左右する重大事を前置きも無く話したというのに、夕霧は狼狽えない。

前科が大量にあるのだ……姉妹にも家臣にも内緒で事を進め、実行寸前でいきなり伝えてくるのが、いつもの光璃なのである。

「……意外と驚かれない」

「いつもの姉上でやがりますからな。」

姉上は同盟の意味を一回考え直すべきでやがります」

「戦国の世、下剋上の世で、仁義八行を馬鹿丁寧を守っている余裕は無い」

「夕霧もそう思うでやがります。ただ……今までそれを蔑ろにし続けてきた事が、

長尾との戦いで劣勢になっている原因の一つである事もまた、

疑いような事ではやがります」

「武田だけは信用ならない、武田と組むのだけは嫌だ……」

そう言つて武田から離れ、長尾に付いた豪族は少くない」

「長尾美空景虎は、その辺りは馬鹿正直、馬鹿丁寧にやつてるでやがりますからな。

武田との対比もあつて随分とマトモに見えるでやがります。

最近では葛尾城主の村上義清が怪しい動きをしやがつて……」

「警戒は怠れない。それに景虎は元僧侶、寺社勢力や信心深い民衆からの人気も高い」

「……おかげで、一向一揆も頻発してるでやがります」

2人が顔を突き合わせながら、はああつと深いため息をついた。

裏切りも、謀略も、残虐非道な殺戮も、必要だからやつたまでだ。

自ら望んで悪鬼外道の行いをした事は一度も無い。

だがしかし、その時々々の最善の行動が、回り回つて現在の光璃の首を絞めつつあつた。

「いつそ光璃も出家する？　そうすれば一向一揆を抑えられるかもしれない」

近所にある長禅寺住職の岐秀元伯を導師に、戒名は『徳栄軒信玄』にでもしようか……

半ば思い付きに等しい考えであつたが、最近思いついた対長尾の策の中では相当効果的なのではない始める。

金欠に苦しむ今の武田が、金をかけずに寺社勢力の機嫌を取れる妙手なのではと……

「姉上は今までに焼いた寺社仏閣の数を覚えてるでやがりますか？」

「10から先は数えていない」

「姉上は今までに殺した僧侶や神官の数を覚えていてやがりますか？」

「100から先は数えていない」

光璃は残虐性、異常性においてはディオオ以上である。

「出家した程度に誤魔化せる悪名じゃないし、

むしろ逆撫でする危険が大きいでやがります!!」

「……残念」

「残当でやがります」

光璃は頭の中で、景虎に対抗して出家する案をくしゃくしゃに丸め、ゴミ箱にダンクシュートした。

「まあ冗談はその位にして……」

「本気だった」

「冗談はあつ！ その位にいつ！ しゃがれでやがりますっ!!」

光璃はこくと頷いた。

九十郎がこの場に居たら、どっちが姉か分かったもんじゃねえなど笑う事だろうし、後日似たような光景を見て実際に笑う、指を差しながら腹を抱えて笑う。

実際の所、頭の回転は速いがどこか常識知らずな所がある光璃に対し、常識人であり者の夕霧や、御淑やかで包容力のある薫……光璃のもう一人の妹・武田薫信廉は、ま

るで光璃の姉であるかのようにフォローや世話をする時が多々ある。

「それで、今回は何を考えて同盟破りを？」

「必要に迫られて」

「成程、いつもの事でやがりますな。」

正面から？ それとも搦め手から殺すでやがりますか？」

「搦め手でいく、表向きには尾張の織田久遠信長にやらせる。」

武田はそれを裏から支援する」

「卑劣な術でやがりますな、いつもの事でやがりますが」

もし光璃が穢土転生の術を使えたなら、戦国の世に阿鼻叫喚の地獄絵図が展開されていた事であろう。

光璃の性格上、躊躇無く連発する。

「勝算はあるでやがりますか？」

「ある。まずは物見と間者を始末する。湖衣と飛び加藤に手伝ってもらおう」

「姉上、正気でやがりますか？ 湖衣は名目上こそ武田に仕えてやがりますが、

実質は姉上の動向を監視するために送り込まれた今川の間者、

飛び加藤に至っては長尾が雇っている忍でやがりますよ」

「引き抜いた」

「そんな大根じゃあるまいし……」

もし湖衣か飛び加藤が義元に裏切りを報告したらどうする気でやがりますか？」

「その時は光璃の負け」

「今川の間者や物見を始末するなんて簡単に言うでやがりますが、

1人でも殺し損ねたら異変が義元に伝わっちゃうでやがりますよ」

「その時も光璃の負け。次に今川の布陣に穴を開け、義元の居所を織田に伝え、

久遠にそこを衝いてもらう。これは松平葵元康にやつてもらおう」

「そんな事が可能でやがりますか。あの義元が気づかないとでも？」

それに松平元康は義元と氏真のお気に入りである、裏切る理由がねえでやがるよ。

松平が裏切ったふりをしてこちらを騙そうとしてるのでは？」

「その時も光璃の負け。最後に奇襲して義元を討ち取る、久遠が頑張る」

「本陣を固めるのは今川の精鋭中の精鋭でやがりますよ。」

尾張の弱卒にそれが抜けるでやがりますか？ 取り逃がしでもしたら……」

「その時も光璃の負け」

夕霧は一瞬、意識が遠のいた。

「ちよつと待つでやがります姉上っ!! さっき勝算はあるって言ったでやがりますが、自分がどれだけヤバイ博打をしようとしてるのか理解してるでやがりますかっ!!」

「相手は海道一の弓取り……万分の一の勝算でも十分過ぎる。」

それに葵も久遠も夕霧が思う程無能じゃない、成功の目は確かにある」

数秒間、夕霧は光璃の顔を親の仇のようにじいじと睨みつけ、はあくつと深く溜め息をついた。

「こんな重大事を今までずっと隠してきたのは、

情報が漏れるのを防ぐためでやがりますか？」

「そう」

正面から……つまり兵を挙げての戦であれば、武田御一門衆として夕霧も関わらざるを得ない。

しかし搦め手……権謀術数でもって状況を操作する戦いでは、夕霧はむしろ足手纏いになりかねない。

人間、向き不向きというものがあるのだ。

「にしても、今回の同盟破りは随分と早かったでやがりますな」

「長尾の……ううん、長尾美空景虎の実力を過小評価した、光璃の落ち度」

甲相駿三国同盟が成立してからの無様な戦いを思い出すと、光璃は自分が情けなくて頭が痛くなってくる。

既に3度、光璃と美空は川中島で対峙しているが、いつもいつも決着はつかずに痛み

分け。

そして引き分けを演じる度に、周囲の豪族達は武田も大した事がないと侮り、長尾の実力を認め、頼るようになっていった。

三国同盟成立から3年以内にぶちっと潰す予定であった長尾は、5年経った今でもまだ健在……それどころか、5年前よりも勢力を増していた。

「甲斐の黒川金山は枯渇しつつある。甲州金は武田の力、武田の生命線。

武器も、兵糧も、馬も、鉄砲も甲州金で仕入れている。

武田の諜報網も甲州金が支えている。黒川金山が尽きた時……武田は終わる」

「甲州金の質が下がっているという噂は聞いてるでやがりますが、

黒川の産出量はそんなに酷い有様でやがりますか？」

「金山奉行の今井兵部が、あと4〜5年で産出量が半分になると言い残して腹を切った」

「病死じゃなかったでやがりますかっ!？」

「今明かされた衝撃の事実、夕霧はあんぐりと口を開ける。

「長尾を潰し、佐渡の金山と海を手に入れてから今川義元と対峙する予定だった……

だけでももう限界、黒川金山は枯渇寸前、今川の上洛も目前。

そこで長尾の前に今川を潰し、安倍金山と海を掌握し、長尾と雌雄を決する」

光璃は何でもない事のようにさらりと云ったが、バラモスが思っていたよりも強い

で先にゾーマを殺しに行くのと同じ位の暴挙である。

ゾーマ殺すには『ひかりのたま』……もとい新しい金山が必要なのだが、その辺は久遠と葵を上手く利用して無理矢理殺す気である。

「義元が上洛したら、現將軍を廢して自分が將軍の座に……で、やがりますね」

「義元ならやりかねない」

「で、やがりますな」

そしてそうなった場合、今川は国力と大義名分の双方を備え、武田も織田も順当に擦り潰される……その点に関しては光璃と夕霧の共通見解になっていた。

「いっそ今川に降服する線は」

「不可能」

一言でバツサリと切り捨てた。

いや……

「正確に言うなら、光璃が武田の頭領である間は不可能」

そう付け加えた。

「姉上、それはどういう……」

不穏な空気を感じ、その言葉の真意を質そうとする夕霧を遮るかのように、光璃は夕霧の眼前にある物を突きつける。

それは光璃愛用の軍配……武田の頭領・武田晴信がここぞという場面にのみ持ち出す物、光璃にとつての決意の証だ。

「……どういう、意味でやがりますか?」

夕霧は息を飲み、もう一度尋ね直す。

目の前に居る人物は、既に自分の姉では無い。

武田家当主・武田晴信……必要とあらば実母を追放し、妹婿を騙し討ちし、数え切れぬ程の寺社仏閣を焼き、志賀城に3000の生首を並べる悪鬼外道である。

必要になれば、きつと眉一つ動かさずに自分の首を刎ねるだろう……問い一つ投げかけるのも命懸けだ。

「さつき夕霧が言った通り、これは分の悪い賭け。負けた時の事も考えざるを得ない。

故に織田がしくじった時は、武田晴信を追放し、武田信繁が頭領になる。

そして義元にはこう告げる……姉が勝手にやった事、自分は何も知らなかった。

変わらぬ友好の証として、姉を人質として送る……と」

「なっ!?!」

夕霧が絶句する。

それはつまり、かつて2人が実母武田信虎に対して行った非情の策の再現に他ならぬい。

「今川の走狗として生きるのであれば、武田の頭領は武田晴信よりも武田信繁の方が良い。」

義元の信を得るには、光璃は悪名を重ね過ぎたから」

「姉上を隠居させろと？」

「隠居だけでは足りない、最低でも追放、場合によっては首にして差し出してほしい」

「夕霧に姉上を殺せとっ!？」

そう抗議しようとする夕霧の喉元に、軍配が突き出される。

「武田の頭領として命じる……やれ」

氷のように冷たい声であった。

血を分けた妹に……生まれた日からずっと信じ合い、助け合ってきた妹に対する言葉では無い。

人殺しの、悪鬼外道の、戦国大名の言葉であった。

「夕霧に生恥を晒せと!？」 姉上を見殺しにして無様に生き延びろと!？」
「恥だの何だの言う暇があつたら戦え。」

膝を屈し、誇りを捨て、それでもなお生き足掻け。 武田を……守れ」

否とは言わせぬ、言えば殺す……そんな無言の迫力があつた。

「姉……上……」

嘘だと言ってくれ、間違いだと言ってくれ、冗談だと言ってくれ……そんな懇願にも似た想いと共に、夕霧が掻き消えそうな声で言う。

「もう一度命じる、やれ。 3度目は無い」

光璃は一切聞く耳を持たない。

志賀城の石垣に降伏した将兵の首を並べろと命じた時と同じであった。

「……御意」

夕霧はそう答えるしかなかった、答えざるを得なかった。

光璃と共に実母信虎を追放した日を思い出し、それを自分一人で、敬愛する姉である光璃に対してやるのかと想像して……吐き気と震えがした。

「2つ、約束してほしい」

「な、何を……で、やがりますか?」

軍配は降ろしている。

言葉の節々が穏やかなものになっている。

光璃は武田の頭領としてではなく、夕霧の姉として、伝えたい事があった。

もしかしたら今日が、最後の別れになるかもしれないのだから……

「一つ、光璃が死んでも仇討ちは考えない事、光璃が人質になっても動じない事」
動じるなど言うのはつまり、何かあったら躊躇無く見捨てるという意味だ。

夕霧は何かを言おうとして、何かを叫ぼうとして……心底悔しそうに口をつぐむ。今、彼女が頭に思い浮かべた言葉の口にすれば、武田家頭領武田晴信にも、夕霧の姉の光璃にも背く事になるのだから。

「二つ、何があつても諦めない事、自棄にもならない事。

光璃が死んでも、人質になつても、武田四天王を喪つても、何個城を奪われても、躑躅ヶ崎館を奪われても、御旗盾無しが焼け落ちても、領地が無くなつても……武田の血統を継ぐ者が一人でも残っている限り、

最後の最後まで諦めないで戦い続けて、抗い続けて」

夕霧は唇を噛み、血が滲む程に拳を握り締め……大きく一回頷いた。

ふざけるなど言いたかった、認められるかと叫びたかった。

「だけどそれじゃ……それじゃあまるで……遺言みたいに聞こえ……」

そう言うのが精一杯であつた。

「違う夕霧、これは遺言。」

どれだけ入念に準備をしようとも、邪風発迷の策は9割失敗する大博打。

失敗すれば光璃は死ぬ、良くても今川の人質になる。だから今の内に遺言を残す」

気がつけば夕霧の頬に涙が伝つて落ちていた。

光璃はそんな妹をそつと抱き寄せて、涙を拭つた。

普段はあまり姉らしい事ができていない光璃であったが……今この瞬間だけは、光璃は確かに夕霧の姉であった。

「例え光璃が死んで、夕霧が武田を継ぐ事になったとしても、

晩年の孫仲謀みたいな真似は敵に慎むように」

「姉上……そ……姉上……そ孫伯符みてえな死に様は晒すんじゃねーでやがりますよ」

嗚咽を漏らしながらも、夕霧は軽口で返す。

姉に心配をかけまいと、何が起ころうと武田家を守ると……そう伝えるために。

麗しき姉妹愛と、感動的なシーンと言いたい所だが、もし孫伯符と孫仲謀がこの場に居たらこの2人をしこたまブン殴っていた事だろう。

他愛も無い軽口をたたき合いながら、光璃は思う。

自分のような屑はきつと、ロクな死に方ができないだろうと。

光璃が斎藤九十郎と出会うのは、まだ大分先の話である。

犬子と九十郎第10話 『練兵館』

三河国・御油……尾張織田領から東端から約50km離れた地であり、今川の勢力範囲内でもある小さな村にて、犬子と九十郎は2通の書状を目にしていた。

配達人は後の関白……現織田久遠信長のパシリ1号こと、木下藤吉郎ひよ子秀吉である。

「勘当ねえ……」

「勘当かあ……」

その内片方、織田久遠信長からの書状を要約すると『知行全没収、無期限出仕停止』、早い話がクビである。

カツとなつて拾阿弥を斬つた犬子、切腹を恐れて逃げ出した九十郎に非があるとはいえ、それでもなお、これまでの苦勞が一気に無に帰すその処分に、2人は少なからず衝撃を受けていた。

「はい……久遠様、カンカンに怒っておられました。

いきなり怒って拾阿弥を斬つた拳句、挨拶も無く逃げだすとは何事かーって」

「馬鹿野郎、俎板の上の魚が料理人に挨拶なんてするものかよ……って、

信長に伝えておいてくれ、ひよ子」

「殺されちゃいますよっ!!」

「馬鹿野郎の部分も含めて伝えてくれ」

「だから殺されちゃいますってえ!!」

この男、ゲスで失礼な上に、しれつとひよ子を闇に葬ろうとしていた。

怒った信長が軍勢を差し向けてくる可能性、その後の歴史が修正不可能なまでに捻じ曲がる可能性を考慮しない辺り、この男は全くもって考え足らずである。

そしてこの時の発言を、後に九十郎は死ぬ程後悔する事になる。

人を呪わば穴二つ……良い気味である。

「九十郎、わざわざ敵地にまで処分を伝えに来てくれたひよ子に無茶言っちゃ駄目だよ」

「分かっている分かっている、ほんの冗談だ」

ひよ子は思った、冗談だと言う割には目が本気だったと。

「それともう一通は荒子城の前田縫殿助利昌様からです、

犬子さんにだけ見せるようにって」

「母様から? 何だろ……」

九十郎がその手紙の中身を知るのは大分後……前田犬子利家と九十郎が祝言を挙げ

る日の前日になるが、概ね以下のような内容が書かれていた。

『荒子前田家はお家を挙げて久遠様に味方をするつもりです。』

しかし知つての通り今川は強大、根切りにされる事も覚悟しなくてはなりません。

万一の際、前田の血筋が絶えぬよう、犬子はしかと励むように。

最早贅沢を言える状況でもないのです、この際夫が誰でも構いません。

親としてロクに面倒も見れませんでしたが、いつでも貴女の幸せを願っています』

励むというのは、早い話が子作りの事である。

親兄弟というだけあつて、前田家の者達の大半は犬子が九十郎に本気で惹かれつつあるのを感じていたらしい。

「おいひよ子、こいつ手紙見ながらニヤニヤしてるぞ。」

熱中症か何かでおかしくなったのか？」

「いや、私はお手紙の中を見ていませんので何とも……まあ大体は想像がつかますけれど」

「と言つと……」

「……私からは何とも申し上げられません」

「ケチ臭い奴め、あんまりケチケチ言っていると二宮になると」

「ほつといてください、あと二宮って誰ですか？」

「ザ・農村マン」

「全然分かりません」

分かったらそいつはキン肉マン二世の読者である。

この男はその説明が戦国時代の人間に理解されるとでも思っているのだろうか。
「夏茄子と秋茄子の味の違いが分かる」

「ケチなんですか？」

「すげーケチだ、毎朝本読みながら通学するし、

文句を言うとおもむろに断食を始める面倒臭い奴だ。

うちのダブル幼馴染のお気に入りだが、俺は正直苦手だったね」

なお、後日犬子はひよ子の千倍ケチ臭くなる。

それにより九十郎は二宮が増えたと頭を抱える羽目になるのだが、良い気味である。

「それにしてもひよ子、良く犬子達が三河に来てるって分かったね。」

変装して移動したり、わざわざ関所や街道を避けて獣道を使ったりしてたのに」

「久遠様にお仕える前は、行商をしながら諸国を巡っていましたからね。」

知り合いの商人さんから、自分の事を犬子って呼んでる女の子を見たって聞きました

て」

「あっ!？」

「やっべ……」

それは盲点だったと言いたそうな顔で、2人は顔を見合わせる。

この2人、肝心な所でポンコツである。

「あの……もしかしてうつかり……」

「も、もちろん全部計算づくだよっ!!」

「全部計算づくでござるでしよう!!」

何がござるでしようだ。

この2人、ある意味似た者同士である。

空気を読んでひよ子は追及しなかったが、2人ともどんな計算をしたのかは絶対に答えられない。

「それにしても、凄いな商人ネットワーク」

「そ、そうだね九十郎、凄いな商人ねっとわあく」

咄嗟に追従したが、犬子はネットワークの意味を分かっていない。

「ネットワークって何の事ですか?」

「商人同士の横の繋がりだよ。正直に言ってひよ子の顔の広さを甘く見ていた」

「あはは、私ってそれ位しか取り柄がありませんから」

本人はそう言っているが、豊臣秀吉の取り柄は顔の広さだけではない、断じてない。

そうでなければ後日、毛利元就、御子柴……ではなく長曾我部元親、そして島津チー卜四姉妹を纏めて捻り潰す何て真似ができる筈が無い、できよう筈が無い。

黒田孝高・通称雫を過労死寸前にまでコキ使った事を考慮に入れても……西方の3巨頭は顔の広さだけが取り柄の少女に縊り殺される程甘くはない、断じてない。

「時にひよ子、お前の顔の広さを見込んでちよつとした頼みがあるんだが」

「お金なら貸せませんよ」

「違う、紹介状を書いてほしいんだ。自活のためのネタは前々から用意していたんだが、

「この辺で商売するには座長とかいう奴の許可が必要らしくてな」

「誰でも自由に商売できる市は、まだまだ少数派ですからね……」

「一回手土産を持って挨拶しに行ったんだが、よそ者……」

特に今川様と敵対している尾張から来た者にそう簡単には許可は出せんと言われた。

「そこで……」

「そこで紹介状ですね」

「その通りだ、ひよ子。お前のような勘のいい娘は大好きだぞ。」

「さっきの台詞から察するに、この辺で商売をしている商人に知り合いがいるんだろう？」

その伝手を利用してもう一度説得してみようと思っている」

「ご心配無く、御油の座長さんとも知り合いです」

「マジかよ!?! 手間が省けるなそりゃあ」

「その代わり、自活のネタって何があるのか教えてくださいよ。」

ハンバーグでも作って売るんですか?」

「いや、原状この国では食肉の為の家畜がほぼいない上に、肉つてのは基本足が速い。

ハンバーグを主力商品にするのは難しいだろうな」

この時代に肉が食えるのは、農耕用の馬や牛が怪我をしたり年老いたりで働けなくなつた時だけである。

「じゃあ何を売るんですか?」

「とりあえず燻製台とパン焼き窯を組んで、魚肉の燻製とパンでも売ろうと思つている。

運良く牛や豚の肉が調達できた時はジャーキーかベーコンを作る。

保存性があるからハンバーグを商品にするよりは売り易いだろう。

さらに灰と油で石鹼も作るつもりだ」

「燻製? パン? 石鹼?」

「肉や魚、あと卵なんかを煙で燻した物だと思つてくれ。

木材を細かく砕いて火を着け、煙を密封した容器に充満させる。

食材に煙の滅菌成分が浸透して、水分が減るから保存性が大きく向上するし、香りづけにもなる。うちのファースト幼馴染の好物で、何度も作らされたよ」

九十郎は『保存食を出来た傍から食っていくなあっ!』とか叫びながら、ファースト幼馴染と將軍Yとうっぴかりの頭を一発ずつひっぱたいた時の事を思い出す。

自分や將軍E、副將軍の分まで残らず平らげられた直後の事とはいえ、女に対して躊躇無く手を上げるとは見下げ果てた男である。

「美味しいんですか?」

「美味しいぞ、しかも食うのに手間がかからん。

そしてパンは西洋の主食で、小麦粉をこねて発酵させて焼く。

バターやチーズを乗せて食うと美味しいし、硬めに焼けば握り飯よりも保存がきく。

大航海時代における船上食と言えば乾パンにビール、

バター、チーズと塩漬け肉と相場が決まっている」

あつという間に太りそうなラインナップであるが、この時代の人々は現代人よりも遙かに運動量があるため、デブはほぼ居ない。

ちなみにこの男、金が溜まり次第乳牛を調達し、チーズやバターの生産も始めるつもりである。

まるで牧場物語、そうでなければTOKIOだ。

「大航海時代……ですか……？」

「ずっと昔、ポルトガルやスペイン、フランスやイギリスといった西洋諸国が新たな航路、

新たな交易品や新たな植民地を求めて世界中に船を出していた時代があったんだよ」

なお、九十郎は気づいていないが大航海時代は15世紀中ばから17世紀中ばまで、今は西暦換算で1558年なので、大航海時代は昔の話でもなんでもない。

「パン祖なんて不名誉なあだ名で呼ばれているセカンド幼馴染程、

俺は上手く焼けないんだが……いざとなったらパン屋を開ける程度にはいける。

幸いな事に、ここいらでも原料の小麦粉は調達可能だし、最悪米粉でも作れんでもない」

なお、パン祖を不名誉なあだ名と思っている脳筋剣術馬鹿は九十郎だけである。

「んで石鹸は、頑固な汚れを綺麗に落とす素敵アイテムだな。

風呂にも洗濯にも皿洗いにも便利だ。後思いついたのは……こいつだな」

九十郎は懐から小さな竹細工を取り出す。

「何ですかそれ？ 竹串……じゃあないですよね？ 扇子の一種ですか？」

「こいつは竹トンボと呼ばれる……まあ、子供の玩具だな。

作るのも飛ばすのも比良賀が一番上手いんだが……よっ!!」

九十郎が勢い良く扇子モドキ……竹トンボを回すと、クルクルと2枚の羽を回転させながら宙を舞う。

「わあ……」

初めて見る光景にひよ子は瞳を輝かせるも、九十郎は少し不満そうだ。

「ううむ、やはり飛ばんな……」

「えっ？ もっと飛ぶんですかあれ!？」

「犬子も何回かやってみたけど、九十郎みたいに上手く飛ばせなかつたよ」

「何回か？ 何百回かの間違いだろくに」

「細かい事は気にしちや駄目だよ、九十郎」

「ははは、不器用さんめ。肩に力を籠め過ぎなんだよお前は」

九十郎が無駄に器用なだけである。

「あの、私も一回やってみても良いですか？」

「構わんで、一回と言わずに何度でも。何なら1本持つて帰るか？」

そう言いながら九十郎はさつき飛ばしたのとは別の竹トンボをひよ子に渡す。

ひよ子は瞳を輝かせ、興味深々といった様子で手の中の竹細工を見つめる。

「あの……本当に良いんですか？ こんな凄い物を」

「凄いかこれ？ 見りや分かると思うが単純な構造だぞ、

少し観察すればすぐに真似できる」

「思いつくのが凄いですよ、こういうのは」

「なるほど、コロンブスの卵か」

「何の話ですか？」

「ゆで卵は下を潰せば立たせやすいという話だよ、ひよ子」

犬子がドヤ顔で説明をするが、ひよ子は『コロンブス』が誰なのか全く知らないので、何の説明にもなっていないかった。

まあ、犬子もインドの人達を大勢殺した人程度の知識しか無いのであるが。

「まあ良いや……追求していったらキリが無さそうだし……よつとー」

ひよ子が見よう見まねで竹トンボを回す……竹トンボはくるくると回転しながら宙を舞い、近くの塀にぶつかってあえなく墜落した。

「ありや、残念」

「練習すればもつと上手く飛ぶよ」

「犬子ですら10回やれば3回は飛ぶようになったからな」

「九十郎っ!!」

九十郎はにやにやと笑いながら先程飛ばした竹トンボを拾い上げ、もう一度勢いをつけて回転させる。

天高く舞う竹トンボを見上げながら、ひよ子は小さく呟いた……

「あの2人、絶対にもうの凄く掘り出し物だと思っただけだなあ……」

久遠様、どうして勘当なんてしちゃったんだろ？」

犬子が拾阿弥を斬ったからだ。

正直な話、切腹を申しつけられなかっただけでも温情である。

そんなひよ子の呟きに、犬子も九十郎も気がつく事は無かった。

……

……

……

それから1ヶ月、率直に言つて九十郎の生存戦略は見事に当たつた。

市場で李を5つジャグリングしながら玉乗りをして、そのまま李を犬子に投擲、犬子は得意の槍捌きで空中で串刺しにするというパフォーマンスで人を集め、そのまま燻製肉や魚、卵、それにパンと石鹼を売りまくつた。

それにしても無駄に器用な男である、無駄に。

残念ながら竹トンボはあつという間にパクられて売れ行きが低下したが、それ以外の商品は珍しさと実用性から飛ぶように売れた。

特にヤキソバパンの売れ行きは好調であつた。

燻製もパンも石鹼も、犬子とひよ子以外には誰にも製法を教えていないし、商品を観察した程度ではコピー品を作れるようになる訳でもないため、九十郎の商売は実に安定していた。

前田利家に養ってもらうために今迄必死こいて犬子に媚びていたのに、気がつけば自分が前田利家を養う羽目になっていた事とか、前田利家を出世させるために今迄必死こいて犬子の護衛をしていたのに、

前田利家がクビにされた直後に収入が安定した事に対し、思う所はないでもないが……九十郎が望んでいた安寧な生活がそこにあつた。

そんなある日の朝……

「おおい犬子お〜！ もうすぐメシ出来るぞお〜！ 手と顔洗つて来お〜い！」

いつものように朝食を用意した九十郎が、まだ寝ているであろう犬子に声を掛ける。

この男、すっかり主夫業が板につき、自作のピンクのエプロンが似合うようになってしまつていた。

いつもならばまるで飼い主の帰宅を喜ぶ座敷犬の如くすつ飛んでくる犬子の声が、足音が、いつまで待っても聞こえてこなかつた。

「……おい、犬子？」

現在2人が住んでいる家は、ハッキリ言つてプレハブ一歩手前のボロ家である。

声が聞こえていないなんてありえない。

九十郎はふうと溜め息をつき、すぐ隣の部屋……犬子と九十郎が寝起きをしている部屋に入る。

普段は掛け布団を蹴つ飛ばし、時に上下反対になるまで寝返りをうってガースカ眠っている犬子は、今日は起きていた。

布団を片付け、髪や衣服を正し、静かに正座をしていた。

「何だ、もう起きていたのか。スープが冷めるから早く来い」

その声をかけるが、犬子はピクリとも動かない、動こうとしない。

「九十郎」

普段の気安さ、能天気さは欠片も感じられない声であった。

九十郎はスープが吹き零れる前に終わるかなあと考えながらも、犬子の前にどつかと座る。

「犬子さ……前は商売を始める前の大道芸、手伝ってたよね？」

「ああ、そうだったな。いや、流石は槍の又左衛門と感心したものだ」

「でも最近は、大道芸やるまでもなくお客さん、沢山来るよね」

「楽で良いよな」

「犬子、何か役に立ってる？」

「うん……？」

そう言われて、九十郎は犬子の過去の所業を思い返す……

炊事……暗黒物質大量生産。

皿洗い……割る。

洗濯……破く。

掃除……壁に穴を空ける。

家計簿……全部九十郎がやっている。

槍……戦にならないと役に立たない。

『邪魔だから座つてろ』と言った回数……100回以上。

「まあ、ぶっちゃけ役立たずだよな」

だから貴様は九十郎なのだ。

犬子は奥歯を噛み締めた。

自分が情けない、不甲斐ない、悔しい、悲しい……そんな感情を渦巻かせながら、ぎりりと顎に力が籠められる。

「九十郎はどうしてそうまでして犬子を助けてくれるの？」

「そりゃあ……」

加賀百万石の大名、前田利家に取り入って安寧な生活を得るため……それが九十郎の

偽らざる気持ちだ。

そのために九十郎は前田犬千代……前田犬子利家に近づいた。

だがそれを馬鹿正直に伝えたらドン引きされるであろう事は、流石の九十郎でも理解できる。

「そりゃあ、お前が前田利家だからだよ」

結局そうやって九十郎は言葉が濁した。

嘘は言っていないが、真実は述べていない。

九十郎にとって重要な事は、犬子が前田利家である事ではなく、前田利家が将来的に加賀百万石の大名になる事である。

だがしかし、九十郎は嘘が苦手な方だ。

注意深く表情を観察していれば、割と簡単に嘘や隠し事をしてしていると判断できる。

だからこそ……犬子は悲しかった、犬子は悔しかった。

「九十郎は……九十郎はさ、犬子を捨てて一人で生きた方が、楽だったんじゃないの？」
「まあ、確かにそのの方が楽なんだが……」

実を言えばこの男、犬子を放り出して一人で自活するという事も何度か検討した。

既に犬子……前田利家が織田信長の下で出世をし、加賀百万石の大名となり可能性はかぎりなく0に近いと九十郎は考えている。

純粋な損得勘定で考えれば、犬子を養うメリツトは既に消失している。

だが……

「放つておくとどつかで野垂れ死にしそうなんだよなあ……今のこいつ……」

もしも犬子が放置しても逞しく生き抜きそうなバイタリテイがあつたなら、九十郎は間違い無く犬子を放り捨てて一人で生きていた。

だがしかし、放置したら死にそうな知り合いを見殺しにできる程、九十郎は腐つていない。

知らん間に野垂れ死にしたら心が痛むだろうと思う程度には、九十郎は犬子を気に入っているのだ。

しかし、九十郎の言葉をしっかりと聞いていた犬子は、静かに両手を握り締める。

「いいから黙つて養われてろ。俺がそうしたいからそうしているだけだ」

それは九十郎の紛れも無い本心であつたが、犬子を納得させるには余りにも言葉足らずであつた。

「こんなに九十郎に助けて貰つたのにき、犬子は九十郎に何も返せていないよ。

犬子……犬子は、何もできなくて……」

犬子の心の中には『役立たず』という言葉が……他ならぬ九十郎からの言葉が何度も何度も反芻されている。

役に立たない、役に立てない……それが悔しかった、何よりも悔しかった。

そしてこの時点になってようやく、九十郎は先程『役立たず』と言った事を後悔した。この男、実に考え足らずである。

「犬子なんでもするよ。九十郎がしてほしい事、何だつてやるよ」

一瞬、じゃあそのデカ乳でパイズリしてくれと言いそうになるのを、九十郎は必死こいて我慢した。

言えば普通にやってくれそうだという事は基本鈍感な九十郎にも分かったが、

流石にこの空気の中でギャグは挟めない。

いや、この状況下でそんな事を言ったら洒落にならない事になりそうであった。

「いらん」

九十郎は一言で斬って捨てた。

それは九十郎の内心を率直に言ったものであったが、隠し事をした時以上に犬子の心を蝕んだ。

犬子にとっては、お前は何の役にも立たないんだと言われたも同然……今の犬子にとつては、パイズリをしろだとか、俺の子を産めだとか、そういう事を言われた方がよっぽど有難かった。

「それだと犬子の気が済まないんだよ。やりたい事とかないの？」

犬子が九十郎のためにできる事、何も無いの？」

やりたい事はないでもないが……と、九十郎は心の中で呟いた。

九十郎も健全な男で、奉公のために屋敷を空けていた事も多かつた頃と違い、ここ1ヶ月は四六時中犬子が傍にいるために自慰行為すらできていない。

思考が多少エロスに向くのもやむを得ない事である。

「……と、言われてもな。特に何も思い浮かばばんで」

……が、流石の九十郎も空気を讀んだ。

何の意味も無く空気を讀んだ。

だから貴様は九十郎なのだ。

九十郎は過去の記憶、前の生で得た知識や経験を漁り、何か犬子にできそうな事は無いだらうかと考え込む。

そして……突如として、天啓のような閃きが九十郎の脳裏に奔る。

「ああ……いや、待てよ」

やりたい事があつた、確かにあつた。

自分1人ではできない事、犬子と2人ならできる事……神道無念流を他人に伝授する事。

戦国時代に来てまでやる事ではないが、この男にとっては安寧な生活を確保する事と

同じ位重要な事なのだ。

「竹刀は……全部尾張に置いてきたけど、また作れば良いよな。

防具……面以外は鎧で代用できるか、面だけ自作。

後は場所だ、場所さえ確保できれば……最悪青空教室……いやそれはなあ……」

九十郎は頭脳をフル回転させながら、ぶつぶつと何かを呟く。

ハッキリ言つて変質者一步手前である。

「九十郎……?」

「なあ犬子、ここ最近伸び悩んでいないか?」

「し、身長のこと?」

「違う、槍の腕だ」

「う……」

犬子は数秒固まつて……やがて観念したかのように頷いた。

「よし、ならば犬子お前には……」

その先を言おうとした時、家中に響き渡る声で……めつき狭い家なので、普通に喋つても家中に聞こえかねないのであるが、とにかく声が聞こえてきた。

「頼もう!」

………来客だ。

九十郎は念のために刀を佩き、玄関へと向かう。

信長が暗殺者を送り着けてきた可能性や、商売敵による妨害の可能性も考慮しての事だ。

この男、地味にビビリである。

「こんな朝っぱらから誰だ？」

九十郎がオンボロ長屋から顔を出すと、黒髪長髪の女性がペコリと頭を下げる。

珍しい日本のな女性だなと九十郎は思った……こいつが居るのは一応戦国時代なのだが。

「はい、私は松平家に仕える者で、名を榊原康政、通称を歌夜と申します」

……松平。

それはかつてここ三河を支配していた豪族であり……今は今川に従属する弱小勢力の名だ。

かつては織田に、今は今川の人質となっている松平葵元康が属する家だ。

「失礼ですが、前田利家様と、九十郎様でいらつしやいますでしょうか？」

「あ……ああ俺が九十郎だ。 んでこつちが犬子、前田犬子利家だ」

「は、初めまして、前田利家です、通称は犬子です」

犬子と歌夜がペコペコと何度も何度も頭を下げあう。

「榊原康政……ねえ……」

九十郎は思った、誰こいつと。

この男は、後の徳川四天王の内、本多忠勝と井伊直政は辛うじて名前だけ知っているものの、酒井忠次と榊原康政は全く記憶に無い。

さらに九十郎は松平家の現当主・松平葵元康が、かつて尾張に人質として来ていた竹千代である事は知っていたが、それが後に徳川家康と改名し、天下人となる事は知らない。

つまり九十郎にとって、松平家はその内潰れる泡沫勢力と同義なのだ。

「九十郎、松平元康って今川方の武将だよね」

「ああ、つまり敵って事か」

九十郎が腰に佩く刀の鯉口を切る。

相手が松平となれば容赦はしない……短絡的で血の気の多い男である。

「いいえ！ 私はもちろん、

我が主、松平葵元康様もお2人方を害するつもりはございません！」

「なら何をしに来た？」

今川はもうすぐ潰れると知っているため、九十郎は強気である。

なんて小さい男だろうか。

「はい、織田から勘当され、苦境に立たされるお2人を見過ごせぬと、

三河国額田郡にお招きするようにと命じられました」

額田郡とはかつての松平の本拠地、岡崎城のある場所だ。

城そのものは松平広忠の死亡に伴い、今川に接収されてしまったものの、今もなお松平家に仕える家臣達の多くが額田郡に居を構えている。

歌夜もその1人である。

「苦境って、別に苦勞はしてないけどな……」

「むしろ収入増えたかも、犬子は全然役に立ててないけど……」

正直な話、犬子と共に戦争に行っていた頃の方がよっぽど危険も氣苦勞も多かった。

「しかし、主元康は尾張でお二方に大変世話になり、

是非とも恩返しをしたいとも仰っていました。

このまま帰っては私が叱られてしまいます」

予想外、想定外、そして身に覚えのない言葉を聞き、思わず犬子と九十郎が顔を見合
わせる。

「犬子達、何かやってたっけ？」

「元康ってたぶん竹千代の事だろ、ええつと……」

竹刀で殴ったり、大砲の発展について教えたり……」

「両方とも正直に言つて拷問だよね、お礼参りに来たのかな？」

九十郎は心の中で『解せぬ』と呟いた。

前者はともかく、後者は割と本気で面白い話だと思つていたので。

「そうだ犬子、こいつ簀巻きにしてとんずらしようか」

「いえ、お礼参りではありません!!」

葵様は貴重で興味深い話を伺えたと、九十郎様や犬子様に変な感謝をしてもらいました。

決して、決してお二方に危害を加えるような事は致しません!」

九十郎はじいっと歌夜の表情を観察する。

殺意は無い、害意も無い、嘘を言っている様子も無さそうだ……少なくとも九十郎はそう感じた。

「む……まあ正直、住む場所と商売する場所さえ確保できるなら、

どこに住んでも構いはしないのだが……」

いや待てよ、岡崎城に近い方が今川の情報が得やすいか」

「では……」

九十郎はチラリと犬子に視線をやる。

犬子は黙つて首を縦に振る……全部任せるという意味だ。

「なら、そうだな……条件が2つ」

身を乗り出してきた歌夜を片手で制し、九十郎は額田郡へ移住する上での条件をつきつける。

今から世話になるというのに、何様のつもりなのだろうか。

「勘当されたとはいえ、こちらは心情的には織田寄り、そして松平は今川方。

状況次第では戦場で敵として会う事になるかもしれないが、それは承知してもらおう」

「昨日の友が敵になり、昨日の敵が盟友となる、悲しい事ですが戦国の習いです。

承知いたしました。後日戦場で相見える事となろうとも一切の遺恨は抱きません、

恩を着せて何かを要求するような真似もいたしません」

「条件2つ目、道場が欲しい」

「道場……ですか……？ 失礼ですが、僧侶の方でしたか？」

なお、道場とは仏道修行の場を意味する言葉だ。

それが屋内稽古場としての意味を持つようになったのは、江戸時代に入ってからである。

「道場が分からののか……俺も犬子も僧侶じゃないし、信心深い方でもないよ。

要は屋内稽古場だ、剣を振り回せる広さのある建物があれば、こっちで適当に使う」

「ああ、それでしたらご用意できます」

「ようし犬子、メシ食ったら引越しするぞ。歌夜も一緒に食うか？」

野菜スープとベーコンエッグ、売れ残った昨日のパンだがな」

「べえこん……何ですか？」

歌夜は九十郎達がベーコンやジャーキー、それにパンと言う珍しい食べ物を作って売っている事は知っていた。

しかし、さすがにベーコンエッグにまでは調査が及んでいない。

「ベーコンエッグだ、ベーコンの切れっ端と卵を、バターを引いたフライパンで焼く」

「凄い美味しいよ」

「卵は完全栄養食だ、ビタミンCと食物繊維以外の栄養素が全て採れる」

「びた……みんし……？」

「ビタミンC、欠乏すると壊血病になる。」

長期航海をする際はザワークラフトをお忘れなくだな」

「ざわ……ええと……？」

次から次へと聞いた事の無い単語が出てきて、歌夜が混乱していく。

失礼の無いようにと葵から厳命されていなければ、九十郎を可哀想な人認定をしてい
た事だろう。

「……まあ、百聞は一見に如かずと言う。まずは一口食ってみると良い、美味しいぞ」

そう言つて九十郎はスープやパンを囲炉裏に並べていき、少し冷め気味の朝食が始まる。

「ねえ九十郎、道場つて何に使うの？」

「さつきお前、なんでもするつて言つたよな？」

質問文に対し質問文で答える、会話が成り立たないアホがひとり登場した。

「うん、言つたけど……」

「本格的にお前に神道無念流を教えようと思う。

全力で教えるから、全力で覚えろ」

「神道無念流を？」

「ああそうだ、俺は今までずっとお前に神道無念流を教えなかつた。

たぶんだが……理由は槍の又左衛門のイメージが強すぎたからだと思う。

生兵法は怪我の元、槍が得意なお前に中途半端に剣を振るう鍛錬をさせたら、

逆に枷になるんじゃないかと考えていたからだと思う」

「九十郎……犬子が槍の又左衛門つて呼ばれるようになったの、

半年位前にあつた浮野の戦いからなんだけど」

「……細かい事は気にするな」

「う、うん……」

全然細かくないと思うけどなあ……そう思いながらも、犬子はそれ以上深く追及できない。

この距離が今の犬子と九十郎の距離だ。

「剣術指南役は柳生新陰流に奪られちゃったが……」

それでも大江戸学園三大道場って呼ばれる程度には流行っていたんだぜ。

技は千葉、位は桃井、力は斎藤ってな」

「九十郎、大江戸学園って何？」

「魔境だ、ニホンの誇るトップエリート共が、

その有り余る才覚を全力でゴミ箱にダクシユートして、

俺はここだけ一足お先と、光の速さで明後日の方向へダクシユする魔境だ」

他人事のように語っているが、九十郎もそんな大江戸学園のノリに染まり切っている一人である。

「ごめん九十郎、全然想像できない……」

歌夜も口にもそ出さないが、大江戸学園のイメージが全く湧かずに困惑している。

「俺や柴田勝家より確実に強いって断言できる奴が3人居る。

いや、柳生は例のアレがあつてから行方知れずだから2人か」

犬子と歌夜は思った、もつと想像できなくなつたと。

渋い表情をする2人の前で、結局輪月殺法一回も見切れなかったなあとか、あいつら人格と実力が反比例してるからなとか、比較的マシだったのは南町奉行と火盗くらいだったよなあとか、訳の分からない事をぶつぶつと呟き続ける。

なお、この男もまた大江戸学園の実力者であり、人格は実力と反比例して層である。

「まあ、細かい事は気にするな」

そして結局、こう納める訳だ。

犬子と歌夜は思った、全然細かくないと。

「まあ、何にせよ……」

九十郎はその辺に落ちていた板切れを拾い、墨と筆で文字を書く……食事中心だということに汚い男である。

『練兵館』

それは前の生で九十郎が館長をやっていた神道無念流道場の名だ。

「やはり俺は『こう』でなくてはいかん、やはり俺は『これ』がなければ始まらない。

俺は剣術馬鹿、俺は師範であり教育者、俺は神道無念流道場・練兵館の館長だからな」
九十郎の表情は、今までに無い程に生き生きとしていた。

犬子と九十郎第11話『ウィンチェスター・ライフル』

かつて、転生を司る神（自称）が言った。

『貴方は能力を付加しなくても十分過ぎる程にチートですね』と。

九十郎は無駄に多才で、無駄に器用だ。

剣の腕だって一流……いや、準一流と呼べる領域にある。

日本史の知識をうろ覚え極まりないが、西洋史の知識は高い。

銃や大砲、船舶の知識も豊富だ。

性格は正直に言って利己的で短絡的で能天気で巨乳好きな屑であるが。

しかしこの男の本質は、この男の一番の長所はそこにはない。

この男には、大江戸学園の誰にも真似できない長所がある。

戦国時代を生きる数多の英雄、勇将、智将でも及ばない長所がある。

万人に一人の適性、本人の気質、積み重ねた経験、そして現代スポーツ医学の知識……

その全てが合わさる事により完成された才覚。

九十郎の剣の腕は、その長所を磨く上で一緒に磨かれた副産物に過ぎない。

九十郎という男は……神道無念流道場・練兵館の主、斎藤九十郎は……剣を教えるのが上手いのだ。

その一点だけは大江戸学園の誰も敵わない、戦国時代の誰も敵わない。それが九十郎の才なのだ。

……

……

……

ここからはダイジエストでお楽しみください。

テテテテ・テツテツテ

わんこはレベルがあがった。

かよはレベルがあがった。

テテテテ・テツテツテ

わんこはレベルがあがった。

かよはレベルがあがった。

テテテテ・テツテツテ

わんこはレベルがあがった。

わんこは『算盤計算』をおぼえた

あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった。
九十郎「二宮が増えた……」

テテテテ・テツテツテ

わんこはレベルがあがった。

かよはレベルがあがった。

かよは『複式簿記』をおぼえた。

あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった。

犬子「大正義複式簿記！」

歌夜「大正義複式簿記！」

九十郎「ファースト幼馴染が増えた……」

テテテテ・テツテツテ

わんこはレベルがあがった。

わんこは『銃剣格闘術』をおぼえた。

かよはレベルがあがった。

かよは『銃剣格闘術』をおぼえた。

あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった。

九十郎「……って、お前ら銃剣知らねえのかよ!？」

そもそも銃を握った事が無い!? しかたねえな、作るか」

テテテテ・テツテツテ

わんこはレベルがあがった。

かよはレベルがあがった。

あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった、あやなはレベルがあがった。

あやなは『神道無念流』をきわめた。

九十郎「正直、綾那に教えられる事がもう無いんだが……

てか何で俺、東国無双に剣教えてるんだ」

そして……

……

……

……

パァン!! と、竹刀が面を叩く音がする。

「面あり! 一本!」

審判役をやらされている歌夜が、決着を宣言した。

1対1だと色々と勝手が違って調子が出ないとか何とか抜かす九十郎により、半ば無理矢理練兵館での鍛錬に参加させられた可哀想な少女である。

主君松平元康から命じられた事とはいえ、九十郎に関われというのはそれだけで罰ゲーム極まりない。

ちなみに歌夜は胸の大きき的にも性格的にも九十郎の好みから外れている。

九十郎は生来巨乳好きで、3歩下がって男を立てる女性よりも、自分を振り回してくるエネルギーシユな問題児の方を好むのだ。

「これで10連敗と……もう完全に勝てなくなつたな、犬子にも、歌夜にも」

やれやれと呟きながら、あつという間に弟子2名に抜き去られた無様な負け犬……もとい九十郎が面をとる。

「お師匠様、綾那はどうですか？」

「お前は最初から最後まで俺より強かつただろうが」

「むう、彩那も強くなつたですから、褒めてほしかったです……」

「へのつっぱりはいらんですよ」

「おお、言葉の意味は分かりませんが褒められたのです！」

綾那は喜んでいるが、全く褒めていない。

そして歌夜は思った、絶対に褒められていないと。

この歌夜は剣の腕と共にエアリーディング能力も鍛えられていた。

綾那は最初から最後まで徹底して剣術だけ覚えたが。

「九十郎……くじゅ……ろお……」

先程九十郎に勝利した少女が、面をとる。

少女……前田犬子利家の瞳が潤んでいた。

「全く、俺程度に勝った位でいちいち泣くな。この泣き虫さんめ」

そんな事を言っているが、九十郎も内心うるつと来そうになつていた。

なんやかんやで愛弟子達（綾那を除く）の成長が嬉しかったりするのだ。

「しかし、タイムリミット前に実戦に使えるレベルにまで仕上げられたのは僥倖だな。

今の犬子と歌夜なら、野生の本多忠勝にでも出くわさない限り遅れは取るまい」

「九十郎さん、綾那を何だと思っているのですか？」

「俺の自信ってやつを粉々に打ち砕いたクソガキ」

そのクソガキに最後まで神道無念流を教え続けたこの男はツンデレさんである。

「まあ何にせよ、今日の……いや、最後の稽古はお終いだ。」

ありがとな歌夜、お前が生活の面倒を見てくれたお陰で、

この1年は好きだけ神道無念流ができたし、犬子の不器用さも多少は改善できた」

「いえ、御礼には及びません。私は主君の命に従っただけですの。

しかし、最後……ですか？」

犬子が少し寂しそうに、悲しそうに頷き、九十郎の言葉を肯定する。

歌夜と綾那は、とうとうこの日が来てしまったかと……しばし瞑目し、厳しくも楽しかった鍛錬の日々を思い返す。

「その辺も話そう、少し呑みながらな。犬子は道具片せ、俺は酒と肴を取って来る」
「……わん」

犬子にも普段の元気が無い。

別れの瞬間が、近づいていた。

……

……

……

「ウイスキーである」

「うい……？」

「……好き、ですか？」

「九十郎が歌夜と綾那に告白した……犬子だってまだ好きって言われた事無いのに……」

「違あうつ!! この酒の名前がウイスキーって言うの! ビール蒸留して作ったの!

こんな貧乳のちんちくりんに俺が惚れるとかありえねえからなっ!!」

綾那は九十郎を殴っても良いだろう。

「九十郎様、蒸留とは何の事でしょうか？」

「酒を一旦沸騰、気化させて集める事でアルコール度数を……」

「要は酒精の強さを上げるんだよ」

「歌夜と綾那が恐る恐る杯に口をつける。」

「これは……」

「おおっ！ 初めての味です！」

「美味いだろ？ こいつは犬子にもひよ子にも飲ませていない、

蒸留装置が完成したのがつい最近だからな。俺も味見に飲んだ一杯だけだ」

「そんな貴重な物を私達に……」

「貴重でも珍しくもないと思うぞ、蒸留装置さえあればいくらでも作れる」

犬子と九十郎もまた、杯を煽る。

「前々から決めていた事とは言え……それを歌夜と綾那に伝えるのは、中々に心苦しいものがあつた。」

基本屑な九十郎であつたが、今日だけは珍しくしんみりとした空気を纏っていた。

「……明日、出立する」

九十郎はそう告げた。

その瞬間、場がしゅんと静まり返る。

今川義元の上洛作戦がいよいよ決行され、歌夜達を含めた三河侍に招集がかかった。織田と今川の命運を賭けた戦いが始まろうとしている。

そんなタイミングで出立する……それはつまり、織田と今川の戦いに介入するという事だ。

「ならば、明日からは敵同士……そうなりますね……」

犬子が、歌夜が、綾那が、沈痛な面持ちで視線を落とす。

たった1年……されど1年、同じ釜の飯を食い、共に剣の腕を磨き合った3人だ。

戦国の習いとはいえ、覚悟はしていたとはいえ、織田と今川に別れて戦う事に対し、やるせない思いで一杯になる。

九十郎もまた、手塩にかけて育ててきた歌夜が死ぬかもしれないと思うと、自然と奥歯に力が籠る。

なお、綾那の心配は全くしていない。

正直強すぎて死ぬ所が全く想像できないのだ。

「織田に来る気は？」

歌夜と綾那が首を横に振る。

「勝つのは織田だ、今川義元は討ち取られる。織田は栄え、今川は滅ぶ」

「お師匠の言う事でも、流石に信じられねーです」

この時点で今川が動員できる兵は4万5000、それに対して織田はどう頑張っても5000が限界。

武田や北条に対する備えを加味したとしても、織田の敗北は目に見えている。

総大将が討ち取られる程の惨敗に終わる等、普通はありえない。

ミキサ―大帝がキン肉マンに勝つと同じ位、ありえない話であった。

「私も歌夜も、代々松平に仕える家の者、主君を裏切る事は出来ません。

それに葵様の身柄は今もお駿府……私達が織田に走れば、葵様がどうなるか」

なお、この場に居る全員が久遠、光璃、葵の3人が裏で繋がっている事を知らない。

同盟国と従属国が揃って裏切り、どう考えても勝ち目が無さそうな織田と組むなんて

事、普通は思いつかない。

仮に思いついたとしても、普通は実行に移さない。

それを思いついて、しかも実行に移す所が光璃と葵のヤバイ所だ。

「九十郎様と犬子様こそ、松平に来るつもりはございませんか？」

出仕停止を申し渡された身、織田に義理立てする必要があるのですか？」

「負ける方に付きたくはないな」

しかも松平、たぶん今川と一緒に沈没するだろうし、そもそも次郎三郎なんてギャグみたいな名前の奴に仕えるとか有り得ないし……と、九十郎は心の中で付け加えた。

九十郎は気づいていないが、松平元康は後の徳川家康だ。

「久遠様は勝つよ！ ……たぶん」

「そこは言い切っても良いぞ犬子。」

この戦いは織田信長が勝つ、間違い無く勝つ」

互いに譲る気が全く無いのを確認し、歌夜と綾那は悔しそうに顔を伏せた。

「できれば師匠達と戦いたくないのです」

「俺だつて嫌だよ！ 戦国時代で本多忠勝とチャンバラつてどんな罰ゲームだ!？」

宮本武蔵と戦えつて言われた方がまだマシだつてのっ!!」

同じ事を言っているように聞こえるが、綾那は戦いたくない、九十郎は死にたくないという想いからの台詞であり、凄まじいまでの温度差がある。

しかし、何気なく宮本武蔵の方がマシだと言ったが、この男は宮本武蔵と戦つて無事で済むとも思っているのではあるうか。

「まあ、なるたけ松平とぶつからない戦場を選ぶ事にするさ。」

幸いにして出仕停止の身の上だ、参加する戦場を選ぶ自由はある」

「名付けて！ 犬子と九十郎のしれつと参陣大作戦！」

説明しよう。

『犬子と九十郎のしれつと参陣大作戦』とは、織田と今川の戦いに勝手に参加し、最初か

ら居ましたよという顔をしてしれつと織田家臣団に混ざってしまう作戦である。

犬子と九十郎を屋敷に招いた頃から、歌夜の腕前が急に上がっている事に気づいた綾那が、しれつと練兵館での稽古に参加するようになったのを見て思いついた作戦だ。

「ははは、そんな荒唐無稽な作戦を思いつくのも実行に移すのも犬子くらいだよな」

「え……？　もしかして九十郎、やらないの？」

「いいや、やるとも。何せあの前田利家の思いつきだ、案外馬鹿にできんかもしれん」
「案外つて……」

ちなみにこの男、久遠はもう放置して他の主人（松平元康以外）を探そうぜと勧めている。

実に薄情な奴である。

「それはそうとして……犬子はともかく、

歌夜とついでに綾那に剣を教えられるのは今日限りになるかも知れん。

帰参が許されたらそのまま尾張に移住するつもりだからな」

「綾那はついでですか」

「強すぎて教えてるって感覚が全然しねえんだよっ！」

「でもお師匠から剣を教わってから、綾那ぐぐうくと強くなったですよ」

「剣の振り方や間合いの取り方といった技術的な所は最初から最後まで完璧だったよ。」

たぶんだが、お前の役に立ったのはむしろ体作りと栄養学の方だろうな」

技は千葉、位は桃井、力は斎藤という言葉が示す通り、玄武館、土学館に比べ、練兵館では健康的な肉体作りも力を入れる。

最新のスポーツ医学や栄養学に精通した九十郎の指導は、学園内でもかなりの評判があつた。

おかげで前の生では、ダイエット目的で練兵館の門を叩く者が後を絶たなかつた。

そして女の園になつていた道場を眺めながら、九十郎は『解せぬ』と呟くのだ。

「師匠のおかげで歌夜のお弁当の味が上がったのです」

なお、本多忠勝の料理の腕は壊滅的だ。

天は二物を与えなかつた。

「人間の身体は、無意識の内に自分が必要としている栄養を欲するように出来ている。

栄養バランスを考えた食事つてのは、考えてない食事より美味いんだよ」

九十郎はドヤ顔でそう言うが、割と口から出まかせである。

「それは良い事を聞いたのです」

「筋トレも欠かすなよ、お前が今までやってたやり方滅茶苦茶だったからな。

苦しい思いをすれば強くなるなんてのは、漫画の中だけだ。

教えたやり方を守って、自己判断で増やし過ぎないようにしろ」

「もちろんなのです！ お師匠の教えは全部全部覚えていてのです！」

絶対……綾那は絶対に忘れたりしないのです！」

「ふん、教え甲斐のないチンチクリンの糞弟子が。」

「お前みたいなのを弟子にするのはこれで最後にしたいね」

「この男は本多忠勝みたいなのが2人も3人も居るとでも思っているのだろうか。」

「じゃあ綾那が一番弟子ですか」

「強さだけなら間違い無く一番だよ、残念な事にな。ホレ受け取れ」

九十郎が一枚の紙を放り投げる。

「神道無念流皆伝の免許状……そこには確かに本多綾那忠勝の名が記されていた。」

「か、皆伝!? 綾那皆伝ですか?!」

綾那は瞳を真ん丸にしながら飛び跳ねる。

「もう教えられる事が何一つ思い浮かばんからな、遺憾ながら認めざるを得ん。」

「正直な話、こいつを最初に渡すのは犬子にしたかったよ」

「ご、ごめんね九十郎。犬子物覚え悪くて……」

「馬鹿野郎、お前と歌夜の剣才も相当なものだよ。」

「ただちよつと……綾那が本多忠勝だったただけだ」

「この男は本多忠勝を何だと思っているのだろうか。」

「んで次は歌夜、お前にはこいつをやる」

一枚の紙を歌夜に渡す。

「こちらは神道無念流師範代の免許状だ。

「わ、私が師範代ですか!?!」

「流石に皆伝とまでは言えんが……俺に代わって指導できる程度には磨いたつもりだ。

「お前は綾那と違って教えるのが上手いからな」

綾那の説明は擬音語が入り過ぎて余人には理解し難いのだ。

「弟子をとる事も許す。俺達が居なくなつた後、練兵館をどうするかは歌夜が決める。

潰しても良い、新しく弟子をとって存続させるも良い。

前者はともかく後者を選ぶなら、この免状が必要になるだろう」

「ですが、私が弟子をとるなんて……」

「指導する事で見える境地もあるぞ、嘘だと思ふなら一度やってみろ」

良い事を言っているように聞こえるし、綾那と歌夜は少し涙ぐんでさえいるが、九十郎は神道無念流がマイナー剣法な状態をどうにかしたいだけである。

「綾那、お師匠の教え、絶対に忘れないです」

「例え敵味方に別れようとも、私達はいつまでも九十郎さんの愛弟子です」

「歌夜、綾那、それに犬子……練兵館道訓、言ってみろ」

「兵は凶器といえ、その身一生持ちうることなきは大幸というべし」

「兵は凶器といえ、その身一生持ちうることなきは大幸というべし」

「兵は凶器といえ、その身一生持ちうることなきは大幸というべし」

「これを用うるは止むことを得ざる時なり」

「これを用うるは止むことを得ざる時なり」

「これを用うるは止むことを得ざる時なり」

「わたくしの意趣遺恨等に決して用うるべからず。これ、すなわち暴なり」

「わたくしの意趣遺恨等に決して用うるべからず。これ、すなわち暴なり」

「わたくしの意趣遺恨等に決して用うるべからず。これ、すなわち暴なり」

この1年間、稽古を始める前に必ず斉唱させられた道訓だ。

酒を飲んでいようが忘れる筈が無い……特に一時の感情に流され、拾阿弥を斬り、久遠に勘当されるに至った犬子にとっては、絶対に忘れてはならない言葉であった。

ちなみに、この道訓を一番頻繁に破っているのは九十郎である。

「上出来だ、愛弟子2名に糞弟子1名」

九十郎は満足気に頷いて、杯の中のウイスキーをゆらゆらと揺らす。

なお、九十郎の指導で一番強くなったのは糞弟子である。

「さあて湿っぽい話はこの位にしよう、飲むぞ」

九十郎が杯を掲げる。

「この4人で、再び酒を飲み交わす日が来る事を願って……」

歌夜が九十郎に習い、杯を掲げる。

「うん、この4人でまた呑もう。今は敵と味方でも、いつか肩を並べて戦う日が来る

……

なんとなくだけど、犬子そう思うよ」

「なら、綾那もその日まで絶対に生き延びてみせるです、

お師匠から教わった神道無念流で、沢山活躍して殿さんに褒められるのです」

犬子と綾那もまた杯を掲げ……頭の上で軽くぶつけ合う。

「乾杯」

「乾杯」

「乾杯」

「乾杯」

戦国時代の日本に、乾杯の習慣は無い。

しかし何時からか、この4人で飲む時は乾杯をするようになっていた。

無論、言い出しつべは九十郎である。

4人がそれぞれ杯に口をつける。

「蒸留酒は度数が高い、一気に呑むと悪酔いするから気をつけるよ」

「あら、女性を酔い潰して手籠めにでもなさるおつもりで？」

「ははは、八岐大蛇みたいバラバラに引き裂いてやろうか？」

「お師匠、八岐大蛇と戦うですか？ その時は綾那も呼んでくださいです！」

「いや戦わねえよ！ 仮に戦う羽目になったら綾那に押し付けて逃げるわい！」

八岐大蛇相手に槍一本持つて突撃する本多忠勝……そんな地獄絵図を想像してしま
い、九十郎は密かに吐き気を覚えた。

「や、八岐大蛇かあ……犬子も昔より強くなったとは思うけど、

流石に八岐大蛇に戦いを挑みたくはないかな」

「まずはしこたま吞ませて酔い潰すです」

「ははは、いくら蛇でも同じ手に何度も引つかかるかよ。」

俺が素戔嗚なら大砲並べてバカスカ撃ちまくるね」

それが最も勝率の高い戦い方かもしれないが、なんとも夢の無い神話になりそうであ
る。

「八岐大蛇に大砲は通用するのでしょうかねえ」

「分らないな、少なくともゴジラやガメラには通用せん……んじゃちよつときついかな
？」

「綾那の蜻蛉切りならやれるです！」

「ははは、否定できねえのが怖いな」

4人で笑い合い、杯を傾ける。

度数の高い酒故か、今までに呑んだ事の無い酒故か、もうじき戦争が起きるとは思えない程に陽気に笑い合っていた。

「また……また呑めると良いよね、本当に」

「なあに、前田利家と本多忠勝がそう簡単にくたばるものかよ。」

ただ、個人的に心配なのは歌夜なんだよなあ……誰だよ榊原康政って」

後の徳川四天王である。

「九十郎さん、私はそれ程頼りないですか？」

「歌夜は綾那が守るので大丈夫です！」

「ちよつと綾那!？」

「ねえ歌夜、兎の後脚つて幸運の御守りになるつて九十郎から聞いてるんだけど、持つてた方が良いんじゃない？」

「犬子さんまでっ!？」

「ははは、兎の脚持つてた程度で人の運命が変わるものかよ。 あんなのは迷信だ、迷信。」

渡すなら防弾チョッキとか、ギリースーツとかもつと実践的な……

ああそうだ、アレも今渡しとくか」

なお、稽古を始めたばかりの頃ならともかく、今の歌夜は九十郎よりも数段強い。

それなのに何故か九十郎は自分は死なないと無邪気に信じていた。

酔って気が大きくなっている訳では無い、これが九十郎のデフォルトだ。

それはそうと、九十郎は金属音をカチャカチャと鳴らしながら、物置から何かを2本持つて来る。

「稽古の合間に作っていたんだが……流石の俺でも5挺しか用意できなかったよ。

このうち2挺は歌夜と綾那に渡しておく。 餞別代わりとでも思っておいてくれ」

心配していないと言いつつも綾那の分まで渡すあたり、この男は酷いツンデレである。

「い、これ……」

それを見た瞬間、歌夜と綾那の目が大きく……本当に大きく見開かれる。

酔いが一瞬で引き、女の子がしてはいけない顔になっていた。

それは斎藤道三や織田信長、武田晴信等の名だたる大名達が競って買い求めている最新鋭兵器、今川から派遣された代官によって生かさず殺さず、限界ギリギリまで搾取されている三河侍達には絶対に手が出せない高級品……

「て……鉄砲……」

「あ、綾那初めて見たです」

「言つとくが銃剣の訓練に使つてた模型では無いぞ、ちゃんと弾丸を発射できる本物だ。試し撃ちも何回ややつてある」

まるで大根か長芋でも渡すかのようにほいと2人に渡していく。

綾那と歌夜の腕は震えていた。

「にしてもこの時代、硝石クツソ高いよな。もう少し今川が動くまで時間があつたら、

信長がやつてた方法で硝石も自作するんだが」

なお、九十郎が言っている『信長』とは、織田久遠信長ではなくドリフターズという漫画の登場人物である。

後日この話は葵に伝わり、ありもしない硝石生産法の秘密を探るべく、ダース単位で密偵を送り付け、当然のように無駄足に終わる。

九十郎はハタ迷惑な存在である。

「ああ言つておくが、その銃には普通の玉と火薬は詰めるなよ。

火縄も火打石も付けてないから、雷管のある弾しか使えん」

「ら、雷管……?」

「これが雷管付きの弾丸、後ろを撃鉄……」

そつちの銃に付いている小型の金槌で叩くと発射される。

要は火薬に点火するための機構だと思ってくれ。

可能なら薬莖は回収しておくように、作り直すのは面倒だ」

そう言つて九十郎は歌夜と綾那に銃弾を渡す。

まるで子供に小遣いでも渡すかのような気安さであるが、銃弾もこの時代では貴重品である。

そして雷管の発明は1865年、アルフレッド・ノーベルによつてなされる。

またもやこの男は未来の技術をそうと知らずに放出したのだ。

「あ、あの……本当に頂いても、宜しいのですか？」

「くだらない事を考えるな、良いに決まつてるだろうが。」

1年近くも衣食住の世話をして貰った礼だと思つてくれ」

酔つて気が大きくなつている訳ではない。

重ねて言うが、これが九十郎のデフォルトだ。

「いえ、あの、お礼にしては高価過ぎるのではと……」

滝のような冷や汗をかきながら歌夜は、どうして茶坊主を1人斬つた程度の事で、こんな人が勘当したりするんだと頭を抱えたい気分になつていた。

あらゆる意味で剣呑なこの時代だ、鉄砲を自作できるといっただけでも高禄で召し抱えようとする大名家は多い筈だ。

鉄砲の有用性にいち早く気づいた織田家ならば尚更の事だと……

「良いから持つてけ、この……」

なお、歌夜はこの銃の使い方を実演された時、驚きの余り腰を抜かしてしまふ。

茶坊主を100人斬つたのだとしても手放してはいけなйдらうと叫びたくなつた。

連発可能な鉄砲なんて代物、公方も今川義元も持つていないのだから。

「このウインチェスター・ライフルをな」

ウインチェスター・ライフルの発明は1873年。

未来の銃である。

犬子と九十郎第12話『パートタイム森一家』

結論から言えば、桶狭間の戦いは織田の勝利に終わった。

織田久遠信長は少数の兵を率い、松平葵元康がこつそりと空けた陣と陣の隙間を潜り抜け、田楽狭間で小休止をしていた今川軍を奇襲した。

今川の間者や物見達は武田光瑞晴信の手の者によって闇から闇に葬られていたため、松平の裏切り、織田の奇襲に気づくのが遅れてしまった。

それが致命傷になった。

今川義元は死んだ。

海道一の弓取りと呼ばれた女傑であろうとも、同盟国と従属国が同時に裏切り、どう考えても負けるに決まっている織田に付くなんて思いもしなかった。

武田はそのうち裏切るだろうとは思っていたが、葵が裏切るとは全く考えていなかった。

面従腹背は葵の……後に徳川家康と呼ばれる少女の得意分野なのだ。

仮に呂奉先が戦国時代に生まれていたならば、『騙されるな久遠！ 葵こそが一番の

食わせ者であつ!!』とでも叫んでいただろう。

基本的に身内に甘い久遠の事だ、叫んだ直後に呂奉先を縛り首にするであろうが。何にせよ義元は死んだ、織田は勝った。

後日今川家に仕える宿老・朝比奈泰能は、敗戦の混乱に乗じて松平が独立、無断で織田と同盟を結んだと聞いた際、血が滲む程に唇を噛みしめ、『してやられた! 葵が描いた絵か! 何故気づけなかつた!? 何故見抜けなかつた!? 何たる……何たる不覚かあつ!』と叫んだ上、2く3日寝込んだそうだが、それは些細な事であろう。

そして田楽狭間の天人・新田劍丞が天から舞い降り、織田久遠信長の夫となった。

これはそんな波乱に満ちた桶狭間の合戦で起きた、本筋から離れた枝葉の物語……

……

……

……

「松平勢の行軍が速すぎると思わぬか?」

今川が放った物見が、そう呟いた。

「少しでも多くの手柄をたて、旧領を取り戻したいのであろう。 健気な事だ」

もう1人の物見がそう返事をす。

2人の視線の先には、先鋒として丸根砦に進む松平葵元康と、それに付き従う三河侍

達がいる。

「何か……何か違和感を覚えぬか？」

「いや、特には」

「少し探ってみぬか？」

「我らの御役目は織田の伏兵への備えだぞ」

「それ故に、松平の真意を調べるべきだ」

「元康に二心があるとでも？」

「その可能性を排除すべきではない」

「不要と思うがな……」

茂みの奥で、2人の物見が互いに睨み合う。

10秒、20秒と沈黙が続いた頃……

「……ほほう、それは興味深い」

……2人の背後より、第三者の声がした。

「……何奴か!？」

姿を隠し、息を潜めていた2人の物見が同時に草陰から飛び出し、同時に刀を抜いて背中合わせになる。

どの方向から攻撃されても対応できるように、どちらか片方が倒れても義元の元へ情

報を届けられるように、2人が神経を研ぎ澄ませる。

そんな2人の前に、1人の少女がへらへらと笑いながら、全くの無防備、全くの無警戒で姿を現した。

その姿を見て、物見の1人は警戒を解き、もう1人はさらに警戒を強めた。

「段蔵ではないか、驚かせるな」

「長尾に雇われている密偵が、何故ここに居る？」

少女の名は加藤段蔵。

飛び加藤と畏れられる凄腕の忍者である。

「おおっと勘違い召されるな、某は今川と事を構えてはならぬと厳命されております故。

某がこの場に來た理由は、織田と今川の戦いの行方を見てこいと命じられたが故で」

「今の内に今川の手の内を知っておこうという事か」

「今川と長尾は持ちつ持たれつ。」

長尾が勢いづけば武田は弱り、武田が弱れば今川は背後を気にせずに戦える……

しかしその蜜月が永久に続くとは誰も断言できぬが故に」

「気に入らぬ、全くもって気に入らぬ……が……飛び加藤と戦えば我らが危うい」

「そうでしょうなあ、しかし某にとつても同じ事……今川と事を構えれば長尾が危うい。

「この場は相互不干渉という事に致しますか？」

「……ふん」

そして2人が刀を納め……段蔵に対し背中を向ける。

「……呑牛の術」

加藤段蔵が静かに呟いた。

加藤段蔵の存在を認識しながら、自らの意思で加藤段蔵に対し背中を見せる……それが彼女の御家流・呑牛の術の発動条件だ。

次の瞬間、2人の物見は段蔵に喰われた。

抵抗する間も無く、声も無く、音も無く、一片の肉片も、一滴の血も、骨の一つも残さずに喰われた。

比喩表現ではなく、誇張表現でもなく……2人の人間が、1人の少女に喰われたのだ。「……なあって話は全部嘘で、この度武田に鞍替えをする事になりましたが故に、

ちよっと手土産になつてください」

少女は今日だけで既に10を超える人数を喰っている。

その中には彼女よりも大柄な者も居た、小柄な者も居た、男も居たし女も居た、年若い者も年老いた者も……だがしかし、まだまだ食べ足りない、まだまだ腹八分目にすら至っていない。

「それにしても、おなか……すきましたねえ……」

段蔵の腹が、ぐううと鳴った。

少女はにかあつと噛い、次なる手土産……いや、食事を求めて歩き出した。
食べても文句を言われない人間を求めて……

……

……

「犬子おっ!!」

「わんっ!」

「小夜叉あつ!!」

「おっしやあ!」

「俺達やパートタイム森一家あつ! 行くぜえつ!!」

「行くぞおっ!!」

「ヒヤツハアツ!!」

「……の、前に状況を整理しようか」

盛大な肩透かしをくらい、犬子と小夜叉……森一家頭領・森桐琴可成の娘、森小夜叉
長可がずっこける。

なお、パートタイマーは犬子と九十郎だけであり、残りの面子は全員森一家の正規メ

ンバーだ。

「おいこら九十郎おっ！ 敵が目の前に居るつてのにそれは無いんじゃねえのかよっ！」

小夜叉は昨日元服し、今日が初陣というペーペー武者だ。

その割にやたらと好戦的なのは、たぶん育った環境が環境だったからだろう。

「しかしだな小夜叉よ、森一家鷲津砦救援隊……」

つまり俺達の指揮系統をどうするかって話をした時、お前なんて言ったか覚えてるか？」

ちなみに桐琴は森一家丸根砦救援隊の方に参戦しているため、この場には居ない。

「……そういう面倒臭い事は全部犬子に任す」

「なんだ覚えてるじゃないか。さて犬子、俺達の目的は何だ？」

「今川勢に囲まれて孤立している鷲津砦の味方を助ける事！」

織田久遠信長が丸根砦、鷲津砦から再三に渡る援軍要請を無視し続けていたため、業を煮やした森一家が無断で救援に向かっている所だ。

決してじっと待っているのに飽きた訳ではない、断じてない。

「その通りだ、それで鷲津砦はどうなってる？」

「炎上しています。あと勝鬨も聞こえてきてます」

「マモレナカッタ……なんて冗談を言ってる場合じゃないか。

どうやらこちらが思っていた以上に早く陥落したらしい」

なお、後で分かる事だが、鷲津砦がこの短時間で攻略された原因を作ったのは九十郎である。

「でだ、こつちの人数は……」

「50人だね」

「結構な人数が脱落してるじゃねえか、全力で走るんじゃないかな……」

犬子と九十郎が各々望遠鏡（自作）を覗き込み、戦場の様子を伺う。

「2000……ううん、3000人位は居るかなあ……」

「50人で突撃したら流石に死ぬよなあ」

「……だね」

「いっそ回れ右して帰るってのはどうだ？」

「それだと久遠様、帰参を許してくれないんじゃないかな。

先手の大将……井伊直盛か朝比奈泰朝を討ち取れば大手柄だけど……」

「殺すなら井伊直盛の方にしようぜ」

「どうして？」

「井伊って苗字が気に入らん」

「何か恨みでもあるの?」

「ある」

なお、九十郎が言っている恨みは前の生での恨みであり、井伊直盛は全く関与していない。

待てども待てども突撃命令が出ない事にパートタイムではない森一家……特に小夜叉が苛立ち始めた頃。

「……ああつ!？」

「……むっ!？」

犬子と九十郎の視線の先で、鷲頭砦に変化が起きる。

砦の裏手から十数名の鎧武者達が血相を変えて飛び出してきたのだ。

「陥落はしたが、まだ全滅した訳ではなかったか……犬子、誰だか分かるか?」

「あの旗は横木瓜……たぶん砦を守っていた飯尾定宗さんか、その一族の人だよ」

なお、これも後で判明する事であるが、この時脱出を図ったのは飯尾定宗の子、飯尾尚清である。

「放置したら死ぬかな?」

「間違い無く追いつかれて殺されると思うよ」

鷲津砦の生き残りが脱出を図っている事に気づいた今川の将兵達が、まるで飴に群が

る蟻のようにわらわと集まっていくのが見えた。

考えている時間はあまり無さそうだ。

「幸いにして射線は通っている、やるか」

「うん、やろう」

犬子と九十郎が同時に望遠鏡を懐に仕舞う。

「やっと相談が終わったか、んでどこに向かつて突撃するんだ？」

「小夜叉、鉄砲は何丁持って来ている？」

「あ？　ねえよそんなもん」

「なら、鉄砲を撃った事がある奴は何人居る？」

小夜叉が追従してきた森一家のモヒカン……もといチンピラ共を見渡すが、全員が全員揃って首を横に振った。

「オレー人だけみてえだな」

役に立たないモヒカン共だと九十郎は思った。

口に出したら袋叩きにされるような気がしたので、黙っていたが。

「じゃあ消去法で、俺と犬子と小夜叉でやるしかないか……」

小夜叉、レバーアクションライフルは使えるか？」

「れば……何だって？」

九十郎は未だに気づいていないが、ウインチェスター・ライフルは未来の銃である。使えるどころか、見た事も聞いた事も無いのが当然である。

「こいつはお前にやる。弾込めはもうやってあるから、

一発撃つたら下に付いているレバーを下げて戻せ。それで次の弾が撃てるようになる」

「はあ？ こんな時に何を言ってるんだ？」

「3人で射撃、怯んだ所に突撃、それで味方が離脱するまでの時間を稼いで……」

適当な所でスタコラサツサだな」

小夜叉がそう聞き返すのを無視して、九十郎は3本目のウインチェスター・ライフルを放り渡す。

なお、九十郎は未だに戦国DQNを森長可ではなく森可成……現在丸根砦救援隊を率いてヒヤツハーしている桐琴の方だと思っ込んでいる。

そうでなければこの男は、小夜叉にウインチェスターを渡すなんて真似はしない、流石に。

さておき、犬子と九十郎は混乱する小夜叉を意識から外し、呼吸を整え、精神を集中させ、照星と今川の将兵達を重ね合わせ……

「射程距離内に……入ったぞ！」

……2人が同時に引き金を引いた。

ズドドンツ!! と銃口が火を噴き、逃げる飯尾尚清を追い回す雑兵が血を吐いて倒れる。

ウインチエスターの銃弾がいつも容易く鎧を貫通し、肺に風穴を開けたのだ。

逃げる織田勢も、負う今川勢も、突然の出来事に動揺が走る。

だがしかし、織田勢も、今川勢も、小夜叉も、数秒後さらにさらに驚愕する事になる。

「犬子、雑兵は良い！ できるだけ良い装備をしている奴を狙え！」

1発目を外したくせに偉そうな口を叩く男がここに居た。

「わ、分かってるよ！」

直後、再び戦場に銃声が鳴り響き、今川の騎馬武者が派手に落馬する。

小夜叉は思わず周囲を見渡した……犬子と九十郎以外の誰かが撃つたのだと思ったからだ。

しかし、鉄砲が連発できる筈がないという認識、思い込みが誤っていたと気づくのみで、そう長い時間は必要無かった。

3度目、4度目……銃声は途切れない。

ガチャリと2人がレバーを下げる度に硝煙の臭いを纏う金属筒……薬莖が排出され、弾込めをする事なく次弾が発射される。

九十郎は起こしてはいけなナニカを起こしてしまったのだ。

この男、とことんまで傍迷惑な存在である。

「何だ!? どこから撃ってきた!?!」

「ひいっ!! 何だあつ!? いきなり死んだぞっ!?!」

「お、落ち着けっ!! ええい静まらぬかっ!!」

「何人で撃ってるんだ! 何で銃声が途切れないんだあつ!?!」

眠れるDQNが開眼し、レッツツゴーククゴークな感じでゴ・ゴ・ゴ・ゴーストを大量生産していると、撃たれている今川の追撃部隊の恐怖と混乱は酷いものになっていた。

ウインチェスター・ライフルの発射速度はこの時代の鉄砲の10倍以上。

3人が作り上げる弾幕は、本来30人以上の鉄砲隊を集めなければ成し遂げられない。

それに勝ち戦の直後、気が緩んでいた時に、銃声が途切れる事無く聞こえ続け、次から次へと同砲が死んでいく光景が眼前に広がったのだ。

その恐怖は、その驚愕は、その絶望は……どれ程のものであろうか。

特に……

「てめえがあつ!! 大将首かああああーっ!!」

……特に混乱の收拾を図るべく、喉も枯らさんばかりに叫び続けていた先手の大将・

井伊直盛が撃たれ、落馬したとあつては。

「ヒヤツハアツ!! 命中だあつ!! おい九十郎見てたか？」

騎馬武者を一人撃ち殺したぜえつ!!」

一番体格の良い馬に乗り、一番良い鎧を着け、何人もの護衛らしき武者達に囲まれ、誰よりも必死に声を張り上げていたのだ……小夜叉の目には、撃つてくくださいと大声で宣傳しているように写っていた。

「九十郎っ! 井伊直盛が死んだよっ!!」

「この人でなし!」

「いや人でなしって、九十郎もバカスカ撃つてたよね」

「うるせえな、こういうお約束なんだよ。マジレスするなよ」

「犬子、時々九十郎が分からないよ……」

犬子と九十郎がしばし手を止め、望遠鏡を覗き込みながら漫才を繰り広げる。

「……あ、助け起こされてる。生きてたみたい」

「しぶといな井伊のクソ野郎……よっしや! ちよつと井伊の首奪つて来る」

クソはどちらかと言うと九十郎の方である。

九十郎は背中のホルスターにウインチェスターを固定し、抜刀する。

別れ際に、榊原歌夜康政が九十郎に持たせた打刀……後に歌夜の手に渡る名刀・式部

正宗には遠く及ばないものの、当時歌夜が所持していた刀の中では一番の業物である。連発可能な鉄砲なんてオーパーツ極まりない存在をポンと渡された歌夜としては、この位の業物は渡さなければ武士の沽券を、榊原家の品格を乏しめてしまいかねなかったのだ。

「何だ、突撃か?! ようやく突つ込んででも良いのか?!」

「この人数で突つ込むなんて無茶……いや……」

犬子の視線の先には混乱と絶望の極みに達し、逃げ纏う者達や、腰を抜かして命乞いの言葉を叫ぶ者達の姿が見えた。

好機だ……前田利家の、槍の又左衛門の経験と勘がそう告げていた。

「前言撤回、やるなら今しかないね」

犬子もまたウインチェスターをホルスターに収める。

その言葉を聞き、九十郎と小夜叉がニカアくと笑う。

「パートタイム森一家あつ!! 突撃だあつ!!」

「パートタイム森一家あつ!! 突撃だあつ!!」

九十郎は歌夜から受け取った打刀を、小夜叉は愛用の十文字槍・人間骨無を天高く掲げ、雄叫びをあげる。

森一家の兵達が歓喜……いや、狂喜しながらヒヤッハアツ!! と叫ぶ。

なお、パートタイマーは犬子と九十郎だけである。

「ちよつと九十郎！ 葉莢はどうするのさ!？」

「後にしろ、後に！ 何だつていい！ 井伊にトドメを刺すチャンスだ!!」

九十郎の肩つぷり、そして後先の考えなきにはミストさんも敵わないだろう。

大江戸学園での恨みを戦国時代で晴らそうとしているこの男は、江戸の敵を長崎で討つよりも迂遠な事をしていると気づきもしない。

「ああ、もう……先に行ってて！ 犬子は葉莢を拾ったら追いつくから！」

「了解、行くぞ小夜叉あつ！」

「そつちこそ遅れんなよ九十郎おつ！」

セコセコとその辺に散らばった葉莢を拾い集めている犬子を尻目に、小夜叉と九十郎、そして森一家の面々は一直線に直盛へと殺到する。

なお、九十郎は数分後、犬子を置き去りにして駆け出した事を死ぬ程後悔する。

というか犬子を置いて行つたせいで死にかける。

今川の将兵達は混乱の極みに達しており、僅か50名のBAKA共の突撃を食い止める事ができない。

直盛は小夜叉に腰の辺りを撃ち貫かれ、自力で馬に乗る事はもちろん、立つ事すらできない状態であった。

九十郎は1人斬り、2人斬り、3人斬り……そして部下に肩を貸してもらい、びっこを引きながら後退しようとしていた直盛に斬りかかる。

「死ねや赤鬼いいいいいいーっ!!」

なお、赤鬼と呼ばれていたのは大江戸学園に居る方である。

全然関係無い人を赤鬼呼ばわりした天罰と言うべきか、この男は後日、鬼に襲われて死にかける。

直盛はここまでかと覚悟を決め、瞳を閉じ……

「直盛様！ 御退きくださいー!」

……直後、1人の若武者が割って入り、九十郎の剣を受け止めていた。

神道無念流は、斎藤九十郎の剣は力の剣。

生半可な力では受け止めるなんて事は不可能だ。

それを可能にしたのは……

「え……おま……歌夜？」

「く、九十郎……さん？」

それを可能にしたのもまた、神道無念流の力の剣であった。

2人の男女が鏝迫り合いの体勢で見つめ合う。

1年近くも一つ屋根の下で暮らし、同じ釜の飯を食い、同じ道場で修業をした仲だ、互

いに顔を見間違える筈も無い。

互いに無言であったが、その目が雄弁に胸の内を語り合っていた。

1年近くも一つ屋根の下で暮らし、同じ釜の飯を食い、同じ道場で修業をした仲だ、互い何を考えているのか、手に取るように理解できた。

即ち……

「(何で歌夜がこんな所に!?)」

「(どうして九十郎さんがこの場所に!?)」

……そんな声にならない叫びが、混乱が、2人の脳裏を駆け巡っていた。

歌夜と綾那の主君、松平葵元康は今川の先鋒として、丸根砦攻略に乗り出している事を事前に調べてあった。

それ故に犬子と九十郎は桐琴に頼み込み、鷺津砦救援部隊に潜り込んだのだ。

しかし、犬子と九十郎の予想に反して、歌夜と綾那は鷺津砦の方に来ていた。

「(主君放り出して何やってんだよお前えっ!?)」

「(ど、どうすれば……)」

しかし、そんな微妙な膠着状態も長くは続かない。

原状、松平家の立場は非常に微妙な状態であり、何代にも渡って松平に仕え続けている榊原家の者が、織田勢相手に手心を加えていた等と中傷されれば、それを理由に葵に

どんな難癖をつけられるか分からない。

そもそも、少し前まで織田家に仕えていた犬子や九十郎を家に招き、食客として衣食住の面倒を見て、共に剣の稽古をしている時点でギリギリなのだ……葵からやれと命じられたからやった事だが、やれと命じられていなければ絶対にやらない、できない、危険極まりない行為だったのだ。

それ故に歌夜にできる事は、会いませんようにと祈る事のみ。

出会ってしまったからには斬らなければならぬ、全力で。

もしも周囲に他人の目が無かったなら、九十郎に刃を向けるような真似は絶対にしなかつただろうが……歌夜にとって葵は、九十郎を斬つても守らなければならぬ主君なのだ。

「はあああああつ!!」

……瞬間、歌夜は全ての邪念を振り切った。

全ての思考を斬る事だけに集中させ、その他すべてを削ぎ落とし、研ぎ澄ませる。
「ちいっ!!」

九十郎は辛うじて反応が出来た、辛うじて防ぎ……いや、左胸が大きく切り裂かれた。
致命傷ではない。

致命傷ではないが、出血が激しい。

ギリギリで身体を捻り、ほんの僅かに傷を浅くした……九十郎にできたのはそれだけであった。

速すぎる、そして強すぎる。

一瞬で九十郎は認識した……いや、再確認した。

今の歌夜は九十郎よりも数段強いのだと。

こんな事になるのなら歌夜に剣を教えなければ良かったと九十郎は後悔したが、今となつては後の祭りである。

「……」まった。ちよつとかてない……」

冗談みたいな台詞を呟くが、心の中で鳴り響く警鐘は最大音量だ。

歌夜の実力は完全に九十郎を凌駕していた。

今すぐ歌夜を撒いて井伊にトドメを刺しに行きたかったが、逃げるどころか致命傷を避けるだけで精一杯であった。

一太刀、また一太刀と、九十郎に生傷が増えていく……

「つたく、強くなりやがって……」

俺の想像以上に強くなりやがってコンクショウがあつ!!」

愛弟子が自分を越えてくれた事を喜ばしいと感じる部分もあるにはあるが、流石にここで死にたいとは思わない。

九十郎は悪態を吐きながらも、切り札……歌夜にも、綾那にも、犬子にすら教えていない隠し武器へと手を伸ばそうとする。

しかし……

「このまま……押し切らせて貰います！」

「ちいつ!？」

……九十郎が腰に手を伸ばす余裕すら無いと気づくまで、そう長い時間は必要しなかった。

歌夜と九十郎の実力差は、既にそれ程までに開いていたのだ。

このまま押し切れると歌夜が考え、このままでは殺られると九十郎が考え、2人はさらにさらに剣戟を加速させていく……

そんな中で九十郎は、パタパタいう足音が一直線に近づいてくるのを聞いた。

チャラチャラという金属音が……小袋の中で薬莢と薬莢がぶつかり合う音が一直線に近づいてくるのも聞いた。

九十郎が歌夜の剣を防ぎながら、心の中で数を数えた。

……3……2……1……0!!

「九十郎おっ!!」

「交代だ犬子おっ!!」

……九十郎が真後ろに跳び、犬子がそこに割って入る。

完璧なタイムリングで行われた交代劇を、歌夜は阻めなかった。

歌夜と犬子……榊原康政の剣と前田利家の剣が、神道無念流の剣と神道無念流の剣が空中でぶつかり合い、火花を散らす。

それにしても自分より年下の少女に庇ってもらうとは、何と情けない男であろうか。

「九十郎を斬るって言うのなら、歌夜が相手でも手加減はしないよ」

「松平再興のために……例えば犬子さんが相手であろうとも、退く訳には参りません」

「だったらあつ！」

「いざっ！ 尋常にい……」

「勝負っ!!」

「勝負っ!!」

剣と剣が火花を散らす。

比喩表現でも何でもなく、火花が散る程の速度、剣圧で2人の少女達が刀を振るっていた。

練兵館での修業が始まった直後では、僅かに歌夜の実力が上回っていた。

しかし、今の犬子と歌夜の実力は全くの五分。

千を越える回数行われた試合稽古における勝敗もまた、全くの五分。

そして今、真剣を向け合う2人の趨勢もまた、全くの五分であった。
「……………くそが」

九十郎や森一家の面々が手出しできない程の激しい斬り合い、殺し合いが眼前に繰り広げられているのを見て、九十郎は静かに憤る。

犬子と歌夜の実力は全くの五分……それ故に、どちらが勝ったとしても残る一方も無傷ではあるまい。

せつかくここまで磨き上げ、鍛え上げた愛弟子が1人死に、残る1人も恐らくは……
そう考えると九十郎は頭の中がドス黒くなっていくのを感じていた。

「……………つち、躊躇無くあちこち斬りやがって、足がふらつくな」

九十郎の鎧や服が紅く染まっていた。

10以上の場所が斬り付けられ、失血が激しかった。

戦闘の興奮で痛覚は麻痺していたが、一息ついたら急激に全身が痛くなってきた。

ふと周りを見渡せば、森一家の兵達が1人、また1人と討ち取られている。

ウィンチエスターによる一斉射によって生じた混乱が収まりつつあるのだ。

「拙いな……………そろそろ潮時か……………」

九十郎は今すぐ撤退するべきだと考えていた。

だがしかし、犬子は今なお歌夜としてのぎを削っており、一瞬でも背を見せれば即座に

斬られる事は明白であった。

それに考えてみれば、綾那もこちらに向かつて可能性もある。

本多綾那忠勝は文字通り別格、桁違いの強さを持つ少女だ。

犬子と歌夜と九十郎が同時に斬りかかったとしても、瞬時に全員あの世に送れるレベルだ。

きゆうきよくキマイラと戦えと言われた方がまだマシだと思える程に強かった。

この状況下で綾那まで来たら、間違い無く皆殺しにされる。

それは火を見るよりも明らかな事であった。

「……手柄首いっ！ 森小夜又長可が奪ったああああーっ！！」

……そんな中、鷲津砦にそんな声が聞こえてきた。

一瞬、綾那と九十郎の視線が声の方に向く……そこには全身を血塗れにして、高笑いしながら井伊直盛の首級を天高く掲げる小夜又の姿があった。

「しまっ……」

「好機っ！ 歌夜おっ！！」

九十郎が歌夜の名を叫びながら、腰に佩く脇差を抜く。

歌夜は既に一流の武芸者で、1年近くも九十郎の下で修業を積んだ者でもある。

それ故に一瞬で見抜いた、九十郎の間合い……脇差の長さ、九十郎が一息で詰めら

れる距離の合計を。

ここはまだ九十郎の距離では無い……そう結論付け、歌夜は九十郎から意識を逸らした。

「……許せよっ!!」

……それが致命的な隙になるとも知らずに、歌夜は意識を逸らしていた。

スペツナズ・ナイフ……柄に仕込まれたスプリングによつて刀身が発射されるナイフ。

九十郎は以前、脇差をスペツナズ・ナイフに改造していた。

それは知つていれば簡単に躲せるが、知らなければ回避困難な隠し武器、犬子にも、歌夜にも、綾那にも教えていない切り札であった。

頼むから急所に刺さつてくれるなよ……心の中でそう叫びながら、九十郎は柄に隠されたスイッチに力を籠める。

「あ……」

気がついた時には既に手遅れになっていた。

脇腹がじわあゝと紅く染まり、鉄の冷たさと裂傷の熱さが同時に襲いかかり、吐き気がする程の激痛が脳髓に叩き込まれていた。

そして間髪入れずに犬子の太刀が歌夜の額をカチ割らんと、凄まじい勢いで迫る。

……避けられない。

一流の武芸者であるが故に歌夜はそれが理解できた。

「退くぞ犬子おっ！ 小夜叉あつ！ 潮時だあつ!!」

九十郎の怒号によって、歌夜を断ち切らんとする刃は眼前数cmの所で静止した。

「ああん!!? 何言つてんだよ、これからが楽しいんじゃねえかつ!!」

「良いから撤退だつ！ 既に目的は達したつ！

それにきゆうきよくキマイラよりもヤバい存在がこつちに迫つて来てるんだよつ!!」

「きまいらだあ!!」

「逃げるよ小夜叉！ これ以上ここに留まったら包み込まれて逃げ場が無くなつちゃう

！」

「うう……」

犬子と九十郎から同時に撤退を進言され、小夜叉が返事に窮する。

兵の指揮なんて面倒臭い事は犬子に任せると言った手前、指示を真つ向から無視して

ヒヤツハーするのは気が引ける。

それに森一家の手下共が次々と落命している事にも気がついてしまった。

「じゃあねえ、従つてやらあつ!!」

そして犬子が、小夜叉が、九十郎が元来た道をダツシユで引き返す。

大将を討ち取られ、呆然自失の状態になってしまっていた井伊直盛の家来達も、負傷した歌夜も、パートタイム森一家達を追いかける事ができなかった。

犬子と九十郎第13話『ナイチンゲールに土下座しろ!』

桶狭間の戦いは、織田、武田、松平の邪悪友情パワー全開によって今川義元が死に、織田の勝利に終わった。

織田と今川にはミキサ―大帝とキン肉マン位の地力の差があったが、なんやかんやで勝利した。

正直な所、武田と松平が裏切り、織田を支援しなければ、久遠は今川ドライバーでバラバラに砕け散っていた事だろう。

正当防衛で戦った久遠はともかく、同盟国と従属国としての立場をかなぐり捨て、悪辣としか言いようなない手段で足を引っ張った光璃と葵は、義元に崇られ、今川鞠氏真に恨まれても文句を言えまい。

少なくとも今川家に仕える宿老・朝比奈泰能は怒っているし恨んでいる。

その後、岡崎城……かつての葵の母、松平の居城であり、松平勢の本拠でもある地を抑えていた今川の城代・山田景隆が城を捨てて逃走。

松平葵元康は手勢を率い、空き家同然の状態になっていた岡崎城に入った上で、今川

義元の仇討ちを名目に兵を挙げ、旧領の回復を図る。

さらに葵は義元の仇討ちをしない事を理由に……自分は義元の仇を討つ気は全く無いどころか、むしろ積極的に義元を討つ手伝いをした事を盛大に棚に上げ……義元の跡を継いだ今川鞆氏真に対し絶縁状を送る。

同時に織田、武田と同盟を締結……悲願であった独立を勝ち取る事に成功した。

信義も人情もあつたものではない行為だが、戦国大名なんてそんなもの、負けた側、弱みを見せた側が泣くのが当然の世の中なのだ。

一方、武田は今川との同盟関係を一方的に破棄、安倍金山及び駿河館の制圧……今川の次期当主氏真の身柄確保ため兵を挙げた。

武田勢は安倍金山の制圧には成功するものの、北信濃を治める村上義清が長尾と組み、手薄になっていた甲斐を狙っているとの情報が入る。

やむなく光璃は兵を2つに分け、自身は先手を打ち村上義清の出城・砥石城を攻め、妹の武田夕霧信繁らに駿河館の制圧をさせる事にした。

当初は砥石城での戦いも駿河での戦いも武田側優勢で推移していたが、突如砥石城に出現した鬼の襲撃を受け、1000人近い死傷者を出す程の被害を受ける。

さらに光璃や夕霧の母・武田信虎の手勢が一足先に駿河館を襲撃、混乱の中で鞆が行方をくらませてしまったため、駿河館の制圧は断念せざるを得なかった。

鞠にとっては傍迷惑な極まりない親子である。

そして……

……

……

……

田楽狭間での奇襲作戦が行われてから2週間が過ぎた。

先程は桶狭間の合戦後の松平、武田、そして今川の顛末を書いたが、現状、葵は岡崎城周辺の掌握、武田は安倍金山制圧作戦の準備をしている最中であり、今川への絶縁状送付、砥石城での敗戦、織田、武田、松平の三国同盟は起きていない。

そんな頃……

「たっだいま〜」

「おいす〜。歌夜、彩那、戻ったぞ〜」

犬子と九十郎は岡崎城下にある練兵館に戻ってきていた。

桶狭間のドサクサに紛れて討ち取った今川勢の首級3つを手土産に帰参を願い出たが、残念ながら久遠の怒りは納まらなかったのだ。

もつともその原因の何割かは、あまりの緊張で気が動転し、久遠の眼前で『馬鹿野郎、俎板の上の魚が料理人に挨拶なんてしませんよ』なんて台詞を吐いた犬子にあるのだが

……むしろその場で殺されなかっただけ寛容と言えるかもしれない。

九十郎はその台詞を教えたのが自分である事を柵に上げ、5く6発の拳骨を罵声と共に犬子に見舞ったが。

「……あれ？」

「……ん？」

一向に返事が無く、それどころか人が動く気配も無い事に、2人が同時に訝しむ。

「留守……なのかな？」

「どうもそのようだな、この時間なら歌夜か彩那が稽古をしていると思っただが……」

「岡崎城を抑えてから日が浅いからね、きっと色々忙しいんだよ」

「行ってみるか、岡崎城」

「いきなり行っても門前払いされちゃうよ、

戦争が終わったばかりでピリピリしてるだろうし」

「ならとりあえず歌夜の屋敷に顔を出すか、もう一回居候させてくれて頼みに」

しれつと言いつつ放ったが、女にタカって生活をしようとは何と図々しい男であろうか。

犬子が門を閉め、榊原の屋敷に向かおうとした時……ほんの僅かな物音を聞いた。

「あれ、今何か……ねえ九十郎、もしかして泥棒かな？」

「どうだろうな、盗めるような物なんて何も無いと思うが……」

せいぜいウィンチェスター・ライフルの設計図と試作品、そして予備の銃弾位……九十郎は気づいていないが、どちらも盗まれたらエライ事になる物品であった。

「一応、確認だけはしておくか」

「そうだね」

そう言つて2人が再び門を開け、玄関を、廊下を通つて道場に入ると、眼前に広がるは仏像、仏像、仏像、仏像、仏像、仏像、仏像、仏像、そして仏像……山のように積み重なつた木彫りの仏像があつた。

「あ、綾那……?」

そこには100軽く越える仏像を彫りながら、1人泣きじやくる本多忠勝が居た。

何とも凄まじい状況に、思わず犬子も九十郎もたじろいでしまう。

「うぐつ……ぐす……か、歌夜……歌夜お……」

「綾那……何やつてんの……?」

「千羽鶴か何かかコレは?」

にしてもお前仏像彫るの上手いな、武将辞めてこつちで食つていつたらどうだ?

犬子は恐る恐る綾那に話しかけ、九十郎は才能の無駄遣い極まりない提案をした。

この男は本多忠勝を何だと思つているのであろうか。

「え……あ……お師匠! 犬子! 歌夜があ!!」

泣きじやくり、鼻水を垂らしながら綾那は九十郎に飛びついた。

心の中では汚ねえなおいとか考えながらも、九十郎はしっかりと抱き止める。

本人はあまり認めたがらないが、一応、綾那も九十郎の愛弟子なのだ、赤の他人に比べれば数倍から数十倍、対応が優しくなる。

「どうした、歌夜に何かあったか？」

「歌夜が……歌夜が怪我して……熱が出て、顔色も悪くて、もう起き上がれない位に……」

もう助からないかもって……覚悟を決めないといけないって……それで、それで……」

泣きじやくりながら、何度も何度もつかえながら、歌夜は九十郎に窮状を訴える。

もう散々手を尽くした後……神仏の加護を祈りながら阿弥陀如来の像を彫る事位しか思いつかなくなる程、綾那は手を尽くした後なのだ。

九十郎が何かができるだなんて、幼馴染にして親友の榊原歌夜康政を救えるだなんて思っていないかった。

「つまり、傷の治りが悪かったのか？」

綾那は大粒の涙を床に落としながら、大きく何度も頷いた。

あれ、もしかしてあの時の傷の事か？

もしかして俺が刺したスベツナズ・ナイフが悪化したのか？

もしかしてこれで歌夜が死んだら俺が殺したって事になるのか？

うっかりで愛弟子と斬り合う羽目になって、勢い余って殺しちゃう師匠とか最低最悪じゃねえか。

もう二度と師匠を名乗れなくなるぞオイイツ!!

なんて事を考えながら、九十郎は盛大に冷や汗を流していたが、犬子も綾那も気づいていなかった。

「あ、彩那が……彩那が突出し過ぎて、歌夜と途中ではぐれたから……」

だからこんな事に……」

なお、はぐれていなかったらパートタイム森一家は全員纏めて彩那に斬られて死んでいた。

九十郎と出会う前ならばいざ知らず、今の綾那は犬子と小夜叉と九十郎が全員同時に襲い掛かったとしても、瞬時に斬り殺せる程の実力者なのだ。

「九十郎、どうしようか？」

「どうするも何も、俺は医者でも魔法使いでもないんだぞ。」

「どうする事もできんだらうさ……ただまあ、遺言位は聞いてやりたいとは思うけどな」

「お見舞い……行くうか？」

「そう……だな……」

犬子の提案に、九十郎は静かに頷く。

薄情そうに見え……いや実際の所、基本的に薄情な男であるが、それでも愛弟子の死に対して思う所があるらしい。

歌夜を刺したのが九十郎でなければ、感動するシーンかもしれない。

「綾那、歌夜は屋敷か？」

「は、はいなのです……」

「じゃあお前も来い、こんな所で泣きながら仏像を彫ってるよりはいくらか建設的だろう」

「そうなのですか？」

「ああそうだ、病は気からって昔から言うだろう？」

「親しい友人や家族からの励ましつてのは、病状を緩和させる効果があるんだよ」

「そう言つて3人は仏像だらけになった道場を出て、榊原家のお屋敷に向けて歩き出す。」

「徒歩10秒程度の距離を歩き、居候として1年近く生活した屋内を歩き、歌夜が横たわる部屋に入り……」

「馬鹿じゃねえの!? 馬鹿じゃねえの!? バツカじゃねえのおつ!!?」

直後、屋敷全体に九十郎の罵声が響き渡った。

この時、九十郎が見た光景がいかなるものであったか、歌夜の看護状態がいかなるものであったかについて、あえて詳しく描写しない。

『クリミア戦争未満の衛生概念』『てめえら全員ナイチンゲールの墓の前で土下座しろ』『悪化して当然』『自殺志願者か』『刀舟斎が怒鳴り込んでくるレベル』『石鹼を使え』『傷口は清潔にしろ』『加持祈祷で病気が治る訳ねえだろ常識で考えろ』

九十郎はそんな罵声を歌夜と綾那に浴びせた事だけは明記しておこう。

なお、フローレンス・ナイチンゲールの生誕は1820年であり、現在は永禄3年、西暦換算で1560年……ナイチンゲールはまだ生まれてすらいない。

よって世界中を探してもナイチンゲールの墓なんて見つかる訳がないのだが、例にもよって九十郎は気づいていない。

そして2時間後……

「……で？ 何か言うべき事は？」

部屋の掃除と換気、傷口の消毒と膿の除去、服や下着、包帯の交換を終えた九十郎が、溢れんばかりの怒りの形相で綾那を睨んだ。

「ごめん九十郎、犬子たぶん半分も理解できてないと思う。

まさかそんな理由で石鹼と蒸留酒作ってたなんて……」

「綾那は10割理解できてないのです」

「胸張つて言う事かこのクソ弟子いつ!!」

「あ、あはは……九十郎さんも、犬子さんも、相変わらずのご様子ですね……」

熱にうなされ、気力と体力を消耗し、苦しそうな表情であった歌夜が、もう何日ぶりかも分からない笑顔を見せた。

死ぬ前に剣の師と友人に会えただけでなく、もう諦めかけていた生存の望み僅かに蘇ったのだから。

「とにかく当面は安静にしていろ歌夜。出来るだけの手は打ったが、傷口の化膿が酷い。」

今無理をしたら本当に死にかねんぞ」

「はい……」

そう言われて、歌夜はそつと瞳を閉じる……不十分な手当によって感染症を引き起こし、酷く発熱し、酷く消耗してしまった少女には、長く会話を続ける気力すら残っていなかった。

そこへ、静かな足音が聞こえてくる。

また新たな来訪者だろうか……今にも途切れそうな意識の中で、歌夜が微かに瞳を開け、襖の方を覗き込むと……

「あ、葵さ……!?!」

足場固めに奔走している筈の主君、松平葵元康が来訪していた。

歌夜が慌てて起き上がり……起き上がるよりも早く、葵が第一声を発するよりも早く、血走った眼をした九十郎がアイアンクローをかけた。

九十郎もまた、来訪者の顔をしっかりと覚えていたのだ。

「おうそうか、てめえが責任者か?」

ドスの効いた声であった。

犬子は思った、ああこの声は本気で怒ってる時の声だと。

……後日、葵はこう語った。

逆らったら殺されると思った、比喻表現でもなんでもなく握り潰されると思ったと。

この時、頭蓋骨がギリギリと音をたてて軋んでいた。

ちなみに九十郎は素手で林檎を握り潰せるし、タウンページを真つ二つに引き裂ける。

無論、小細工無しで……この男のマッシブな肉体は見せ筋では無いのだ。

そんなパワーで女の子の顔を掴むとは見下げ果てた男である。

「九十郎さん、やめてください! その御方は松平葵元康様……私と綾那の主君です!」

「知ってるよ、知ってるからこうしてるんだろが……」

九十郎は苛立ちを隠そうともせず、葵の頭をギリギリと締め上げる。

「久しいな竹千代。ああ今は葵か、最後に会ったのは何年前だ？」

国主だの城主だの大名だの独立だの何だか知らんが……

ちよつと目を離している間にクソ外道に育ちやがって。

アレがためえの為に命懸けで剣を振るつた部下の扱いか？

アレが怪我人に対する扱いか？ ああんっ!？」

なお、葵と歌夜の名誉のために付け加えておくと、傷口の消毒なんて概念はこの時代には存在しないし化膿のメカニズムも説明されていない。

そして怪我や病気の対応が加持祈祷である事もこの時代では良くある事だ。

三河は熱心な一向宗（真宗本願寺派）の信徒が非常に多い地域であるため、病人を診るのは医者では無く坊主である場合が圧倒的に多い。

医学的な知見を持つ坊主も中には居るのだが……まあ、歌夜の周りには居なかつたよ
うだ。

「てめえら全員ナイチンゲールに謝ってこい！」

そう言つて九十郎は葵を突き放すように解放する。

とりあえず九十郎は東照宮で徳川家康に土下座して謝るべきだ。

この時代に東照宮はまだ無いが。

「ちよつと九十郎、いくらなんでもやりすぎだよ!」

「なんだ犬子、葵の肩を持つのか?」

「愛弟子がくだらない理由で死にかけてたんだ、拳骨1く2発位は見逃せ」

「なお、死にかけた原因を作ったのは九十郎である。」

「九十郎が時々言ってる、ないちんげえるって人の看護方法、他で聞いた事が無いよ。」

「あんまり有名じゃないやり方なんじゃないの?」

「マジかよ!?! ナイチンゲールってこつちじや無名なのか!?!」

「無名どころか生まれてすらいない。」

「も、申し訳ございません……」

「名前すら聞いた事が……」

「綾那は正直聞き流してたです」

「ははは、このクソ弟子は本当に剣術以外覚える気が無いらしいな」

「葵と歌夜が心底申し訳無きそうに頭を下げ、綾那は何故か胸を張る。」

「ちなみに実は犬子も8割方聞き流しているのだが、九十郎がそれに気づくのはもう少し後の事だ。」

「だがな葵、今のお前は人質じゃなくて松平の当主なんだろう?」

「人を率いる立場になった訳だ。それなら傷の手当位は知っておくべきだぞ。」

松平では負傷した家臣を死ぬまで放置するなんて噂が流れてみる、良い人材は来なくなるだろうし、戦場では誰も真面目に戦わなくなるだろうさ。

最初は強く当たって後は流れでって感じで集団サボタージュさ」

「はい、九十郎様の仰る通りでございます。」

是非この無知蒙昧な私に、知識を授けて頂きたく」

正直な所、九十郎を無礼討ちにしても問題無いような状況であつたが、あえて葵は頭を下げた。

松平元康……後の徳川家康が無知蒙昧なのだとしたら、九十郎は何だと言うのであるか。

しかし徳川家康は、転んでもタダでは起きないが故に、徳川家康なのだ。

いきなりアイアンクローをかけられた程度でいちいち刀を抜くような性格であつたのなら、葵は今日まで生きてこれなかつた。

そして長年の人質性格で磨かれた……磨かざるを得なかつた洞察力は、九十郎の教えたがりな性格を瞬時で見抜いた。

「まず傷口は清潔にしろ。」

汚れた手で触らず、清潔な水で洗つて、可能なら酒を吹きかけて消毒する。

病室は適度に換気して、包帯は1日1回交換する、使った包帯は毎回洗え。

それと精進だか願掛けだか知らんが、療養中の食事制限は逆効果だ。

もつと鉄分とたんぱく質を摂取しろ」

なお、この時の教えがきつかけで葬は趣味と実益を兼ねて薬学の本を読み漁り、岡崎城の近くに植物園を作つて自ら薬の調合を始めたり、川上シロンペロン家臣、柏木源卜ツに撃たれて瀕死の重傷を負つた井伊直政を生還させたりする。

直政生還の報を聞いたら、井伊嫌いの九十郎は地団駄を踏んで悔しがつたのだろうが、幸か不幸かその時既に九十郎は死んでいた。

「んで、次に傷口に塗る薬だが……つち、実演しようにも材料切れてたな」

「この間の戦い、あの森一家ですら無傷じゃ済まなかつたからねえ」

「しゃあねえ今から材料を採りに行くぞ、犬子、綾那、お前らも手伝え」

「はいはい、了解」

「力仕事なら綾那に任せるのです」

そうして3人がドカドカと足早にその場から去ろうとすると、縋り付くかのように葵が九十郎の手を引っ張つた。

「あのっ！ その作業、是非とも私にも手伝わせて頂けませんかっ！」

「いや、お前までここを離れたら誰が歌夜の身の回りの世話をするんだよ」

しれつとこの男は、足場固めに非常に忙しい国主を病人の世話に回そうとしていた事

を暴露した。

この男は葵が暇だとも思っているのだろうか。

「なら、犬子が見てようか？」

「ううむ……そうするか、よし葵もついて来い。」

歩きながら解熱と沈痛に効く野草の特徴を教えるから、ちゃんと聞いておけよ」

「はいっ!!」

……結局、この日葵は日が暮れるまで野山を駆けまわり、泥だらけになる羽目になった。

独立から日が浅く、一日も早く足場固めをしなければならぬ身の上で、譜代の臣とはいえ、部下一人のために一日を潰すなんて狂気の沙汰だ。

それに九十郎は情け容赦無く葵を馬車馬の如くコキ使ったため、翌日は酷い筋肉痛で仕事にならなかつた。

腹心の部下、本多悠季正信にネチネチと嫌味を言われる羽目にもなつた。

だがしかし……葵の瞳は最初から最後まで輝いていた、希望に満ち溢れていた。

さながらクレイジー・Dに殴り倒された直後の岸部露伴のように、こんなに優れた知識が向こうから転がりこんでくるなんて運が良いなあ……なんて事を考えている顔であつた。

犬子と九十郎第14話『縁談』

九十郎が歌夜の看護状況に対し理不尽にブチ切れた日から一週間が過ぎた……

「これがウインチェスター・ライフル……なのですね？」

岡崎城の一室で、城主松平葵元康が、腹心の部下である本多悠季正信に声をかける。

その手の中には、歌夜から借り受けたウインチェスター・ライフルがあった。

「駿河で初めて種子島を見た時、腰を抜かしてしまいましたよ。」

あの音、あの衝撃、そして火薬の臭い、世の中にこれ程怖い存在があるものかと。

しかし、その種子島もコレに比べれば玩具も同然

かつて悠季は鷹匠として、今川の人質となっていた葵と自由に接触できる立場にあり、良く言えば愚直で律儀、悪く言えば脳筋な三河侍達の中では珍しく、機転が利き、先見性を有する若侍である。

そして行動の自由や三河の松平家家臣団達との連絡が制限されていた葵にとって、ほぼ唯一の相談役、ほぼ唯一の味方となっていた。

そのため、葵が久遠や九十郎との会話では常に心掛けていた敬語が無い……悠季は葵

にとつて、肩の力を抜ける数少ない例外的存在なのだ。

「正直に言つて、怖くてたまらない、恐ろしくてたまらないわ。

もしも敵がこれを持ち、我が方にこれが無いとすれば……」

「数にもよりますでしようが、まず負けるでしような。

知らずに見た目通りの存在と……一般的な種子島と誤認して戦えば間違い無く全滅。

であれば我等がいち早くこの銃の存在を知る事ができたというだけでも、

望外の幸運というもの」

「量産の用途がつけば、さらに幸運なだけけど？」

「現状では難しい……と、言わざるを得ません」

……葵はウインチェスターの量産を目論み、秘密裏に動いていた。

独立のため、そして御家の存続のため、面従腹背を貫き通し、義元を殺した葵だ。

ウインチェスターの……前代未聞の連発可能な銃の量産を思いつかない筈は無く、思

いつけば実行に移さない筈も無い。

良心は痛むが……それで止まる葵であれば、今川を裏切ったりはしない。

既に立ち止まれない所にまで来てしまっているのだ、葵は。

「その理由は？」

冷たい……氷のように冷たい視線を悠季に向ける。

冷徹になれ、冷酷になれと何度も何度も心の中で繰り返しながら。

「弾を交換する機構の構造は概ね掴めました。」

部品の多さ故に種子島の2倍か3倍の手間と費用を要するでしょうが、複製は可能です」

「種子島の2倍か、3倍……」

それで種子島の10倍の速度で14発の銃弾を連射できる銃が手に入るのならば安い……むしろ安すぎるとすら葵は思った。

安すぎるからこそ、恐ろしいと葵は思った。

「しかし……雷管がどうしても再現できません。」

そしてこの銃は、雷管を使った弾以外は発射できないようです。

火縄も火打石も使われておりませんので」

「それでどうやって火薬を破裂させるのよ？」

「聞く所によればハンマー……」

銃の後に付いている小さな金槌で叩く事で着火しているようです。

雷管は言うなれば、火打石の代わりに火薬に着火する仕組みのようで」

「それが再現できないの？」

「はい……どうしても……無論、八方手を尽くせば可能性はありますが、

ウインチェスターの存在が漏れる危険性を鑑みますと、どうしても手筋は限られ
ます」

「そう……当面は秘匿性を優先させ、研究を続けて」

なお、葵はまだウインチェスターが森小夜叉長可の手に渡っている事を知らない。

いくらなんでもこんな危険物をそうホイホイ他人に渡しはしないだろう……と、葵は
考えていた。

ただし九十郎はウインチェスターを危険物だとは思っていないし、小夜叉を危険人物
だとも思っていない。

「では薬莖は？」

「筒状に丸めた金属板です、量産は簡単ですよ。」

九十郎殿が回収を求めたのは、単に作り直すのが面倒だっただけでしょ」

「なら……弾の入れ替えができる構造はそのままに、

火縄か火打石を使って点火する銃に改造はできないかしら？」

「雷管を作るよりは簡単にできるかもしれませんが。」

しかしご存じの通り、火縄は引き金を引いてから発射されるまで時間が開きます。

元のウインチェスター程の連射はできないでしょう」

「それでも、手作業で弾込めをするよりも何倍も早い筈よ」

「ですな、やってみましよう」

悠季の瞳が妖しく輝く……今、彼女の頭の中で正道、非道、外道を問わない様々な打ち手が超高速で交差している。

松平の謀臣は、本多悠季正信は、こういう裏向きの謀を考えている瞬間、本当に生き生きする。

それとは対称的に、葵の心は暗く沈んでいる。

『我等は皆、邪なる風に迷う者』……かつて見た武田光璃晴信の言葉が胸に突き刺さる。九十郎の異常な知識、化外の技術を吸収する……そのために竹千代は九十郎に近づいた。

そのために歌夜に命じ、九十郎を岡崎に招いた。

それだけだ、ただそれだけだと……葵は自分に言い聞かせた。

「やはり、九十郎様を他国に渡す訳にはいきませぬね」

「特に織田には」

「ええ、久遠様は誰よりも早く鉄砲の有用性に目を付けた方。

九十郎様の知識と技術を知れば、誰よりも貪欲に求める筈よ……

いくら近いうちに同盟する予定とはいえ、

力関係の隔たりが大きくなれば、必ず臣従を求められる」

「逆らえば撃つ……と……」

「それが戦国の習いというものよ、悲しい事に……」

故に織田にウインチェスターは渡せない、武田にも今川にも長尾にも渡せない、飯に渡つたとしても松平はより多くのウインチェスターを有していなければならぬ。

「そのために……」

「信用のおける者を厳選し、九十郎殿の監視と包围をさせております。」

「とはいえ防諜の事も考えますと、やはり本職の手を借りた方が良いかと」

「そうね、ならば伊賀忍軍との交渉を急ぎましょう。それと縁談の方も……」

葵は奥歯をぎりいつと噛み締めた。

「……情の面から九十郎様を松平に近づける策も、進めておくわ」

「これは策だ、生き延びるための手段に過ぎないと、葵は自分に言い聞かせた。

「本当、きつと私はロクな死に方ができないわね」

「なに、死に様はどうあれ、死後は極楽へ逝けるでしょうさ。」

「こう見えて私、朝晩の念仏と写経は欠かしておりませんので」

「念仏を唱えれば何をしてても良いって考え方、やつぱり好きになれないわ」

「葵様は一向宗を誤解されておられますな、あれは何も進んで血を求めている訳では

……」

……

……

……

葵と悠季が密談を交わしている頃……歌夜は少しずつ、しかし確実に快方に向かいつつあった。

犬子と綾那と九十郎は交代しながら歌夜の身の回りの面倒を見ていく事にし、この日は九十郎が当番の日であった。

「前々から博識だとは思っておりましたが、

九十郎さんが医学の知識を修めていたとは思いませんでした」

今にも土砂降りの雨が降りそうな、どんよりとした黒雲を見上げながら、歌夜はぼつりと呟いた。

「こんなもん医学でもなんでもない、ただの一般常識だよ。

これを医学と言いつ張つたら高野に笑われて、刀舟齋にはドツかれるだろうさ」

「一般常識では無いと思います、断じて」

「そうかねえ？ できれば抗生物質も用意してやりかっただが、

残念な事に抽出方法を忘れてしまつてな……

結局、用意できるのは民間療法極まりない熱止めと痛み止めだけだ、情けない」

歌夜は思う……もしこれが一般常識であるのなら、もし九十郎がこれを一般常識と思ふような環境で生まれ育つたのだとすれば……今自分の目の前に居る人物は何者なのだろうか。

日の本よりも遥かに文明が進んだ異国の生まれか、下界に降りてきた神仏の類か、あるいは……と。

「何故……こうまでして助けるのですか？」

歌夜はそう問わずにはいられなかった。

聡明な九十郎が、自分の持つ知識や技術の価値を知らない筈がない。

それなのに九十郎はウインチェスター・ライフルを、乾パンやベーコンといった保存食に、ウイスキーなる新しい酒、複式簿記、神道無念流……そして今、命を救われた。

たった一年間衣食住の世話をし、道場として使える建物を提供した程度で受け取つて良い見返りとはとても思えなかった。

「こうまでつて、大した事はしてねえよ。」

俺の愛弟子にくだらない理由で死なれてたまるか……だから手当をただけだ」

九十郎はそう答えた。

そもそも愛弟子を刺して重傷を負わせたのは九十郎である。

基本屑な男ではあるが、多少はその事を気にしているのだ。

ちなみにこの男、ウインチェスターにも複式簿記にも保存食にも、大した価値は無いと思っている。

どれもこれも当然この時代にも存在する物だと思ひ込んでいる。

未来に技術、未来の知識だとは欠片も思っていない。

だからポイポイと他人に渡せるのだ。

歌夜に渡したものの途中でこの男が価値を認めているのは……ただ一つ、神道無念流だけだ。

「私は我が身可愛さに大恩ある師に剣を振るつたというのに……」

「俺も我が身可愛さにナイフぶつ刺したからおあいこだな」

歌夜は主君のため、御家の存続のためだが、九十郎は完全なる我が身可愛さである。

しかも2人が遭遇した理由は九十郎の判断ミス……間違ってもおあいことは言えない。

しかし、九十郎は本気であおいこだと思っていた。

「私は……この御恩にどうやって返せば良いのですか……?」

「くだらない事を考えてないで怪我治せ」

決意と覚悟、矜持と信念の込められた声を、九十郎は意にも介さない。

「それでは私の気が済みません」

「阿保な事を考えてる暇があつたら怪我治せ」

再び九十郎は歌夜の言葉をバツサリと斬つて捨てた。

ただ……

「こんな糞みてえな時代だ……死ぬなどは言わんし、言えんよ」

九十郎がそんな言葉を呟いた。

「だが……くだらない理由で死ぬな、くだらない理由で命を賭けるな、剣を振るうな。」

剣を振るうなら神様にだつて胸を張れる理由で振るえ、

死ぬ時は地獄の閻魔にだつて胸を張れるような理由で死ぬ」

その言葉はいつもの軽口では無く、適当でいい加減な生返事でも無く、九十郎の本心からの言葉であつた。

九十郎が歌夜に……自分の愛弟子に求めている、唯一のものであつた。

見返りを要求できると聞いて思い浮かんだ、たった一つのものであつた。

歌夜が巨乳だつたら生おっぱいを揉ませてくれと要求していたかもしれない所が、この男の限界であるが。

「歌夜を……松平元康が臣、榊原康政を娶る気はございませんか」

「……はっ」

思わぬ言葉に……決意と覚悟を秘めた言葉に、九十郎は一瞬、呆けていた。

「おいちよつと待て、誰が誰を娶るって？」

「九十郎さんが、私をです」

「何のためにつ!？」

「私にはもう、他に差し出すものがございません……源義康を祖先とする、三河榊原家。それを九十郎さんに……」

「馬鹿野郎、俺は貧農の子だぞ、家が全く釣り合わん」

「しかし私は……いえ、榊原はそれだけのものを受け取っているのです。

これだけ大きなものを受け取り、恩義を受け、

何も返せないとすれば祖先の名を穢してしまいます」

「んな大した物を贈った覚えは無いんだがな……」

2人の表情が暗い、空気が異様に重たい……まるで葬式だと、九十郎は感じた。

まるで言いたくもない事を無理矢理言わされているかのようだ……

「葵に……お前の主君にそう言えと言われたのか？」

……瞬間、歌夜が息を呑んだ。

息を呑んだ事を、九十郎は見逃さなかった。

一瞬でも喜びそうになった自分が馬鹿だったと、九十郎は陰鬱そうに頭を抱える。

前の生でも今の生でも全くモテなかった自分が、ここにきて急にモテ始める訳が無い……犬子の愛の告白を忘却の彼方に追いやっている九十郎はそう考えた。

「あんにやろう、松平元康の分際で一丁前に他人の嫁の心配か？」

どうせ俺は非モテでございますよコンチクショウめ……」

怒りと憎しみと八つ当たりの意思を込めた声で呟く。

しかしこの男は松平元康を何だと思っているのだろうか。

「い、いえ！ 確かに葵様に勧められましたが、それを受け入れたのは私の意思です！」

「はいはい、ワロスワロス」

九十郎は盛大に不貞腐れながら歌夜に背を向ける。

もう話を聞く姿勢では全くなくなっていった。

「あ……」

歌夜の瞳から涙が零れ落ちていた。

想いが受け入れられなかったから、本気にされなかったから……ではない。

歌夜は九十郎を好いてはいないし、男性としても愛していない。

全く、全然、一切、欠片も、これっぽっちも愛していない。

ゴツゴツとした筋骨逞しい見た目も、割とナチュラルに他人を見下す性格も、胸が豊

かな女性を見ると露骨に視線で追うスケベさも、歌夜の好みに合わなかった。

そんな男を本気で好きになる女は、よつぼどのゲテモノ好きか人格破綻者なのではな
かろうか。

今、歌夜の心を覆う感情は恐怖と絶望。

脳裏に浮かぶ光景は、自分と九十郎との幸せな結婚生活では断じて無く、ウインチェ
スターの斉射を受けて散っていく戦友達、焼け落ちる岡崎城、数多の銃弾を全身に受け
て死ぬ主君……九十郎が他国に渡った場合に起こりうる可能性だ。

歌夜がウインチェスターを初めて使った瞬間に怖気と共に思い浮かんだ光景だ。

九十郎を松平から離れさせる訳にはいかない、例え内心ではどう思おうとも……自分
は九十郎を好いていると思わせなければならぬ。

自ら望んで九十郎と結ばれるのだ……そんな思惑が早くも崩れてしまった。

武家の娘として生まれた以上、個人の好悪で結婚相手を選ぶ事はできない。

それでも……いや、だからこそ、どんな男に嫁ぐ事になろうとも笑っていないければな
らない。

そんな幼い頃から受け続けてきた教えを、覚悟を、信念を、こんなにも簡単にしくじつ
て、裏切ってしまった。

あるいは、自分も犬子のように純粋に男性として……ただの九十郎を愛していたので
あれば、

今この場で真心を込め『お慕いしています』告げる事ができればと思つたが……歌夜にはその言葉がどうしても出せなかつた。

……歌夜は涙が止まらなかつた。

「うう……ぐつ……うああ……」

泣き止め、泣き止め、早く泣き止め、これ以上無様を晒すな、御先祖様に申し訳が立たないぞと、何度も何度も自らを叱咤するが、歌夜の瞳から涙が次から次へと溢れていた。

視界がぐにやりと歪み、頭が揺さぶられているかのような感覚も覚えた。

「歌夜……俺はお前を泣かすために弟子にした訳じゃない。

お前を嫁にするために神道無念流を教えた訳でもない」

「は、はい……分かつて……うぐ、分かつています……」

怖かつた、恐ろしかつた。

「歌夜には目の前に座る男が、腕の一薙ぎで三河全土を焦土に変えられる怪物に見えた。

九十郎はふう……と、深く深く溜め息をついた。

「……とりあえず、今は余計な事を考えずに怪我を治せ」

襖を開け、九十郎は廊下に出る。

後ろは振り向かない……いや、振り向けない。

九十郎自身、自分が何を考えているのか、何を望んでいるのか分かっていないのだ。それ故に、歌夜に何を言えば良いのかもまるで分からない。

「お前を娶る娶らないの話は、怪我が治った頃にもう一度しよう。

その時まで……その時までには俺も考えを纏めておく」

……そう言うのが精一杯であった。

そう言うのが精一杯で、それだけ言うと九十郎は逃げ出すかのように屋敷を後にした。

なんとというヘタレ男であろうか。

「困い込みか？ 困い込みだよなあ……葵の奴、西洋白磁を完成させて幽閉された、

ヨハン・フリードリッヒ・ベトガーみたいにしようつてののか？」

当てもなく岡崎城の城下町を歩きながら……いや、全力で走りながら、九十郎は今まで歌夜と綾那に渡した物、見せた物を思い浮かべる。

九十郎にとっては、どれもこれもが西洋白磁と同レベルの高級品には見えなかった。

どれもこれもがありふれた物……いや、価値の無い物に見えていた。

走って、走って、走って……走り疲れて、九十郎は止まった。

ペース配分もあつたもんじやない、吐き気がする程にめちやくちやに走っていた。

目の前には乙川が流れていた。

石投げに興じる子供達、水汲みをする女達、そして……

「あ、犬……子……？ お前、どうしてこんな所に？」

背後にある小屋の方から頭だけをちよこんと出して、犬子が自分を覗き見ているのに気がついた。

「え、ええと……その……」

犬を模した耳飾りと尻尾飾りをゆらゆらと揺らしながら、犬子は盛大に視線を逸らす。

九十郎はそんな犬子の様子に苦笑して……傍へ行き、手を繋いだ。

「帰って……いや、少しその辺を2人で歩こうか。」

流石に今から戻るとなると、少し気まずいからな」

「う、うん……」

犬子は俯きながらも、九十郎の後について歩く。

右に曲がり、左に曲がり、右に曲がり、左に曲がり……ふらふらと歩きまわった。

2人は無言のまま歩き、歩き、歩き……

「犬子はさ……別に、側室でも、妾でも構わないよ」

ある時、犬子はそう呟いた。

「誰が？ 誰の？」

九十郎はいきなり何を言っているんだコイツは、とでも言いたげな表情で犬子を見返す。

「犬子が、九十郎の」

「いきなり何言っているんだお前？」

九十郎は犬子が何を言っているのか全く理解できなかった。

「犬子は傍に居られるだけで幸せだから」

「誰が？ 誰の？」

「犬子が九十郎の傍にだよ」

「いやちよつと待て！ 俺が何時お前を妾にしたいつて言った!？」

「さつき……」

「いや言つてねえよつ!! チラリとも考えてねえよつ!!」

それはそれで酷いのではなからうか。

「さつき歌夜が言つてた事だよ」

「う……」

そう言われて、ようやく犬子が何を言わんとしているのかを理解した。

歌夜は松平譜代の臣で、今の犬子はただの素浪人……常識的に考えれば、歌夜を娶る

という事は、歌夜を正妻に据えるのと同義である。

歌夜と犬子を同時に娶るのであれば、犬子の立場は妾か側室だ。

そこまでは理解できた。

しかし……何故犬子がそんな事を言い出したのかは全く分からなかった。

だから貴様は九十郎なのだ。

「さっきの話を聞いていたのか？ 俺が歌夜を娶る娶らないの、くだらない世迷言を」

「うん……ごめんね、何か盗み聞きしたみたいで……」

洗濯物を渡しに行こうとしたらさ、たまたま聞こえてきて……

九十郎がお屋敷を出て走り出したら、思わず追いかけて……」

犬子と九十郎が同時に頬を掻く。

「気まずい……本当に気まずい……犬子と九十郎の心は一致していた。

「なあ、さっき……誰が誰の側室になるって？」

沈黙に耐えかね、混乱する頭で、九十郎は先程言ったのと同じ事を質問する。

「犬子が、九十郎のだよ」

当然、返答も先程と同じだ。

しかし、九十郎の脳内の混乱具合はさっきの2倍……いや、10倍以上であった。

「何がどうなったら犬子が俺の側室になる話になるんだ？」

「犬子が九十郎の事が好きだからだよ」

……瞬間、九十郎の頭が真っ白になった。

「だ……だだだだっ！ 誰があっ?! 誰をおっ?!」

そしてまた同じ質問……学習しない男である。

「犬子が九十郎をだよっ!! ねえ九十郎、犬子前にも好きって言ってたと思うんだけど」

「言ってねえよっ!! 聞いてねえよっ!!」

言っているし聞いている。

九十郎が忘却の彼方に追いやってただけだ。

犬子が黙り、九十郎も黙って向き合おうと……九十郎の顔がみるみる内に赤くなってい

く。

汗がダラダラと流れ落ち、呼吸は荒くなる。

犬子が……あの前田利家が俺を好きだと? そんな事がありえるのか?

そんな疑問が、疑念が、浮かんでは消え、浮かんでは消え……何度も何度も繰り返す。

九十郎はこの期に及んでもなお、犬子の言葉がとても信じられなかった……いや、とても信じられない言葉を信じざるを得ない状況に追い込まれ、混乱していた。

本気なのか……そう告げようとして、やめた。

九十郎を見上げる犬子の瞳が、本気で言っているのだと何よりも雄弁に物語ってい

た。

犬子の頬が真つ赤になっていくのを見て、自分の心臓が破裂しそうな程に膨らんでいくのを感じ、九十郎は反射的に犬子の人通りのない裏路地へと引つ張っていた。

小柄な少女を裏路地に引つ張り込む筋骨隆々の大男……通報モノである。

九十郎はトマトか何かのように真つ赤な顔で、同じ位真つ赤な顔をした犬子の両肩を掴み、向き合う。

本当に俺を好きなのか？ 嘘じゃないのか？ 冗談じゃないのか？

何かの間違いじゃないのか？ 犬子を口説いた覚えなんて無いぞ。

今までずっと非モテ男だったんだぞ……そんな考えが次から次へと沸き上がっていた。

そして気がつけば、九十郎は犬子の胸を揉みしだいていた。

混乱の余り自分でも何をしているのか分からなくなっていた。

「あ………ん………」

犬子の口から艶やかな声が漏れる。

自分が何をしているのか気がついた瞬間、九十郎はブン殴られるかと身構えた……しかし犬子は殴らない、それどころか無抵抗で自分の胸を差し出していた。

「犬子………その………」

「犬子の胸、変じやないかな？ ほら……九十郎さ、

時々じい〜って犬子の胸の辺りを凝視するから、ちよつと不安だったんだよ」

「いや……柔らかくて、暖かくて、なんだか安心するよ」

世が世ならセクハラで即逮捕される台詞である。

「あ、あはは……良かった……」

犬子の耳飾りが、犬子の尻尾飾りがピクンと跳ね、のたうつように上下する。

まるで少女の歓喜の叫びを代弁しているかのようにだった。

今度は服の裾を捲り、そこから内部に手を入れる……

「ん……」

犬子は恥ずかしそうに俯き、尻尾飾りをピョコピョコと振り……やはり九十郎の手を振りほどかなかった。

九十郎が夢見た……過去に何度も何度も妄想したが実行には移せなかつた生乳の感触があった。

双丘の張りが、しつとりと汗ばんだ肌の感触が、犬子の息遣いが、九十郎をさらなる行為に誘っているかのようだった。

……現行犯逮捕モノである。

「……犬子、良いか？」

「九十郎……うん、良いよ。九十郎になら、何をされても良いよ」

九十郎が恐る恐る犬子に顔を近づけていく……この男はこの期に及んでもなお、犬子に拒絶されるのではないかと、本当は自分なんか好きでも何でもないんじゃないかと怖がっていた。

顔が近づくと……犬子は拒まない。

顔が近づくと……犬子は離れない。

顔が近づくと……犬子は嫌悪しない。

犬子は瞳を閉じ、そっと背伸びをして、唇をつき出す……2人の唇が重なる。

2人の心臓が過去に無い程に高鳴っていた、2人の体温が過去に無い程に熱くなっていた。

2人が口づけを交わす中、犬子は蕩けそうになる程の幸福感に包まれ、恍惚とし……逆に九十郎は急速に冷静さを取り戻していった。

「(どうやら……後をつけていた奴は犬子だけではなかったようだな。

葵の奴、本気で俺と犬子を囲い込むつもりらしい)」

九十郎は基本能天気と考え足らずな九十郎だが、自分に向けられた敵意には敏感だ。

そして九十郎の監視をしていた者は、本職の密偵……忍者ではなかった。故に気づけた、監視者の存在に、二重三重に構成されている包囲網に。

犬子と九十郎第15話 『決裂』

あの時……俺が犬子の胸に触り、唇を奪ったあの時、監視者の存在に気づけて本当に良かったと思ってる。

そのおかげで女の色気に熱に上げてしまっていた自分を落ち着かせる事ができた。

あれがなければ、たぶん俺はそのまま犬子を押し倒し、最後の一线を越えていたと思う。

あのまま勢いのままに犬子を犯してしまっていたと思う。

取り返しのつかない事をしてしまったのだと思う。

冷静になって考えてみれば、あの前田利家が俺のような屑を好きになる筈が無い。

犬子の言葉はきくと、心にもない嘘で俺をからかっているだけだ。

そうでなきゃあ一時の気の迷い、吊り橋効果か何かで感じた胸の高鳴りを、本物の恋

心と勘違いをしているだけだ。

時々忘れそうになるが、犬子は前田利家だ。

俺を好きになるなんて、絶対にありえない。

だって考えても見ろよ、前田利家だぞ。

槍の又左衛門なんて呼ばれる程の剛の者で、加賀100万石とかいう広い領地を任せられる程に天下人たる豊臣秀吉から信任が厚くて、歴史に名が残るような偉大な人間だ。

それに比べて俺は非モテ……女にモテた事なんて前の生でも今の生でも一度も無い、超の付く非モテ野郎だ。

全身に筋肉がついて、顔も体もゴツゴツして正直言つてブサメン、体臭もキツイ、性格だつてかなり利己的で自己中心的、その上巨乳好きのスケベ野郎だ。

たった一つ、取り柄として自慢できるものと言えば、神道無念流だけ。

あれだけは俺の自慢で、あれだけは心の底から楽しめて、あれだけは誰にも負けないと胸を張れて、あれだけは信念を持つて取り組めた……だが女にモテるような取り柄では無い。

剣道着つて正直臭いしな。

そんな俺があの前田利家に好かれる筈が無い、愛される訳が無い。

価値の無い男が、価値のある女を得られる筈が無い。

だからこれ以上踏み込んじやいけない。

犬子はきつとそのうち、前田利家を愛するに足る立派な男と出会うだろう。

俺なんぞよりもずっと良い男がだ。

唇を奪った事は悪いと思うが……まあ、事故にでも遭ったと思って我慢してもらおう。

俺も良い夢を見させてもらったとでも思つて、スッパリと諦めよう。

あのビックおっぱいを堪能できないというのはかなり残念だが……まあ、良い。

それが一番良い事なんだ……俺にとつても、犬子にとつても……

……

……

……

2人は手を繋ぎ……しかも恋人繋ぎで道を行く。

犬子はこの世の幸せが全部いつべんに押し寄せてきたかのような顔で、九十郎は奥歯に魚の骨でも引つかかっているのを我慢させられているかのような顔で。

犬子は魅力的な少女だ。

九十郎もそこは疑いなく認めている。

魅力的な少女と唇を重ね、手を繋ぎ歩いているというのに……好意を告げられたというのに、九十郎の心中に喜びは無かった。

あるのは罪悪感だ。

心の中、奥深くにへばりつくヘドロのような罪悪感だ。

魅力ある少女を、魅力の無い自分が汚してしまったのだと、価値のある女を、価値の無い自分が乏してしまったという……無根拠な思い込みだ。

いや、根拠はあるかもしれない、だってコイツ屑だし。

「さて、周囲に人影無し、人の気配も無し……悪くない条件だ、ここでやるか」
九十郎が辺りを見回しながら、指をポキポキと鳴らす。

「え!? ココでするの?」

「ああ、ココが良い。そのためにココに来たんだ。」

さつきからずっと、そのための場所を探していたんだ」

人里からやや離れ、視界の開けた原野……狐とか狸とかがひよつこりと顔を出しそうな場所である。

「ひ、人に見られたら流石に恥ずかしいし……その、犬子初めてで……」

で、でも外するのもそれはそれで興奮するかも……」

九十郎の言う『やる』と、犬子の考えている『する』とは、かなり根本的な食い違い

があるのだが、2人は気づいていなかった。

なんとも察しの悪い、デリカシーの無い男である。

「うん、九十郎が犬子としたいんなら……犬子としても、その……」

頬を真っ赤にして、いそいそと上着をはだけさせ……次の瞬間、冷や水を浴びせられたかのように硬直した。

九十郎が刀を抜いたのだ。

「え……？」

そして浴びせられる明確な害意、鋭い刺すような殺意……九十郎のような他人の殺意に敏感なタイプで無くとも感じ取れ、震えあがり、腰を抜かしてしまうような強烈な殺気であった。

槍の左衛門の異名を持つ、一流の武人であるが故に、犬子は耐えられたが……常人ならば数秒と耐えられない程の気迫であった。

「く、九十郎……」

自分は九十郎に斬られるのかと、犬子は思った。

何の説明も無しに人気の無い場所へ連れ出され、いきなり剣を抜き、強烈な殺気を浴びせられたのだ……犬子が殺されると思うのも当然の話だ。

ついさつきまで抱いていた幸福感は一瞬にして吹き飛んでいた。

しかし……心は不思議と平静であった。

幾度となく修羅場を潜り抜けてきたが故の慣れもあつたが、九十郎に対する想いも大きかった。

「うん、良いよ……九十郎に斬られるなら、犬子はそれでも良いや……」

元々、九十郎が居なかつたら何度も死んでいる命だもの」

九十郎になら斬られても構わない、九十郎になら殺されても構わない……狂気の領域に片足を突っ込んでいるような愛情が、全幅の信頼が、犬子の心を鎮めていた。

「少し黙っている、気が散る」

九十郎はそんな犬子の想いを全く気にせず、しかもこの期に及んで何の説明も無かつた。

犬子はこの男を斬っても良いのではなからうか。

犬子は静かに瞳を閉じ、最後の瞬間を待つ。

九十郎は肩に力を籠め、両目が血走らせ、気を高め、気を高め、気を高め……

「……喝っ!!」

……その瞬間、地面が揺らぎ、鳥が一斉に飛び立つ程の氣勢が放たれた。

周囲はしいんと静まり返り、犬子と九十郎の呼吸音だけが……否……

「……居るな、やはり」

僅かに漏れ出た自分以外の殺気を、九十郎は直感的に感じ取った。

「うん、居るね」

犬子もまた見逃さなかつた。

ここにきてようやく、犬子は九十郎が刀を抜いた理由をはつきりと理解した。

自分達からは死角になっている場所から、気配を殺しながらこちらの様子を窺っている者がいたのだと。

そいつは突然殺気が放たれた事に驚き、戸惑い、咄嗟に身構えてしまったのだと。

「昔、伊賀の影丸を読んで覚えた追跡者の察知方法。

実際に使うのは3回目だが……初見の相手には効くな」

そんなものを本気で実行に移そうとするのはこの男位である。

そんなものが成功したのは、ひとえに小波が不在だったからだ。

仮に服部半蔵正成・通称小波が九十郎の監視の任に就いていたのだとすれば、このような子供騙しに引つかかるような事は無かつた。

墓も葵で伊賀衆との交渉が終わり次第、小波を九十郎の監視に充てるつもりであつた

……もう遅いが。

「九十郎、何時から気づいてたの」

「さつきお前の胸を揉んだ時」

「あの時かあ……もつと早く教えてほしかったよ、期待するだけさせといて……」
「すまん、この埋め合わせはいずれするよ」

そんな事を言つてはいるが、犬子が期待するような埋め合わせをする気は0である。
何か適当な小物を作るか買うかしてお茶を濁そうと考えていた。

「気配の位置からすると、2人……3人か？　かなりの手練れが居る様子だな」
「誰が送つてきたんだろ？」

「たぶん葵だろう。」

今になって思えば、歌夜が生活の面倒を見るとか言い出した事からして怪しかった。
どうやら葵にとつて、前田利家の存在はかなり魅力的に写つたらしい」

「九十郎の方じゃないの？　犬子、正直そこまで取り柄無いよ」

「ははは、俺の取り柄なんて神道無念流位だよ」

なお、この時の葵は神道無念流を刺身の上に乗ったタンポポ程度の価値しか感じていない。

それを知った時、九十郎は『解せぬ』と呟くのだが……それは後の話である。

「犬子も、歌夜も彩那もぐぐくと強くなつたからさ、

他の三河侍達にも神道無念流を教えさせたかつたんじゃないの？」

「……む、その発想は無かつたな。」

松平家武術指南役……中々良い響きじやあないか。ただ……」

東京武道館並みに巨大な道場を思い浮かべ、一瞬だけ乗り気になりかけるが、九十郎はすぐにその考えを改める。

「ただ、松平はなあ……」

九十郎が尻込みする理由は2つ。

葵とは何度か会って話した事があるが、流石にそこまで神道無念流を買っている様子はなかった事。

そして九十郎は松平家や松平元康についての知識が全然無いという事だ。

それはつまり、松平葵元康が歴史に名を残せなかつたという事であり、戦国時代のどこかで悲惨な末路を辿つた可能性が非常に高いという事でもある。

松平に仕えれば、その悲惨な最期に巻き込まれる危険があり、いづどんな形で松平が滅びるのかを知らない九十郎は、それを回避する術が無い。

沈むと分かり切っている船に乗りたくない……つまりはそういう事だ。

「……やっぱ逃げるぞ犬子」

それ故にこうなる。

この男、逃げると決めたら躊躇をしない性格である。

「歌夜と綾那には……」

「当然、黙って逃げる」

「だよね……はあ、せっかく仲良くなれたのにな」

「綾那は放っておいても死にはしないだろう。」

「歌夜はちと心配だが、本格的にヤバそうになったら助け舟を出す事にしよう。」

「葵は……謹んで冥福を祈る」

「死ぬ事前提なの!?!」

「なお、九十郎は未だに松平元康が後の徳川家康だと気づいていないし、榊原康政が徳川四天王だという事にも気づかない。」

「気づいていたならば逃げるなんて選択をする筈がない。」

「とにかく、今夜逃げ出すぞ。 すぐに戻って夜逃げの準備だ」

「うん、わかったよ」

……

……

……

草木も眠る丑三つ時、背中に大きな風呂敷包みを背負った2人の男女が、そろりそりりと榊原家の廊下を歩いていった。

泥棒……ではなく、夜逃げを決意した犬子と九十郎である。

「忘れ物は無いな？ 犬子」

「うん、大丈夫だよ。大丈夫だけど……ねえ九十郎、やっぱり歌夜には一言……」

「駄目だ、駄目だ。むしろ歌夜が怪我で寝込んでいる今が絶好の好機だぞ。」

「一つ屋根の下で暮らしている歌夜の目を誤魔化しながら逃げ支度をするのは骨だからな」

「これからどうするの？ この前桐琴さんが、

行くところが無くなったら頼って良いって言ってたから、また森一家のお世話になる？」

「それもアリって言えばアリなんだが……」

「正直な話、1日2日ならともかく、長期間戦国DQNの元で暮らしたくはないな」

「じゃあ、前みたいにならんで自活する？」

「それが無難だろうな。もう少ししたらひよ子が墨俣で城造りをする筈だから、

今度はそれにしれつと参加して手柄を立てて、もう一度織田家帰参を目指すとしてしよう。」

名付けてパートタイム蜂須賀党大作戦」

「こんな奴らが転がり込んで来たら、蜂須賀小六・通称転子の胃は三日と保たずに粉碎

！ 玉碎！ 大喝采！ であろう。」

「九十郎、墨俣って斎藤の勢力圏内だよな？」

「何がどうなったらひよ子がそんな所で城造りする事になるのか分からないんだけど」
「その辺の事情は全く覚えていないから何とも言えんが、

まあ色々あったんだろ、たぶん、きつと、メイビー」

もう何度も書いた事だが、この男の日本史の知識はうる覚え極まりない。

「犬子、時々九十郎が分からなくなるよ……」

そして2人が草鞋を履き、息を潜めながら玄関門を開き……

「どこに行くおつもりで？」

……屋敷をずらつと取り囲む集団と目が合った。

20人程の屈強な三河侍達、葵の腹心の部下本多悠季正信……そして本多綾那忠勝が居た。

2人の逃亡を防ぐために、円形に武装した侍達が取り囲んでいたのだ。

「げえっ!? 本多忠勝っ!？」

九十郎は横山光輝の漫画の如く叫んだ。

九十郎にとって重要な事は、本多忠勝が……犬子と九十郎が全力で斬りかかっても、カスリ傷一つ付けられずに瞬殺されるレベルの剣鬼が眼前に立ちはだかっている事だ。

九十郎にとっては赤壁の戦いに大敗し、張翼徳とか趙子龍とかに追われながら敗走に

敗走を重ね、疲弊し切った状況下で関雲長に出会ったのと同じ位絶望的な光景であった。

「お師匠、犬子……本当に彩那と歌夜を捨ててどこかに行っちゃいますか？」

「え？ い、いや……いや違うぞ彩那、俺はただちよつと夜風に当たりにだな……」

九十郎は露骨に動揺している。

「その割には随分と大きな荷物を抱えておられるようですが？」

「き、筋トレだよ筋トレ！ 重い物を背負って走ると効率が良いんだよ！」

「九十郎、その言い訳は流石に苦しいんじゃないかな……」

「犬子てめえどつちの味方だ!？」

犬子が気まずそうに視線を逸らす。

「今ならばこちらも手荒い真似はいたしません。戻って……頂けませんか？」

悠季がにこやかに……少なくとも表面上はにこやかにそう告げる。

周囲を固める三河侍達が威圧的に鯉口を抜く。

逆らえば斬る、つまりはそういう事だ。

「何故逃げると思った？」

「昼間の殺気……あれで監視を気取られたかと思ひまして。

今夜あたり何かするのではと、普段よりも嚴重に張っていたのですよ」

「……少し迂闊だったかな、確認なんかせずに黙って逃げていれば良かったよ」
「そうそう漫画のように上手くいくものか。」

この男、基本考え足らずである。

「ではやはり、三河から去るおつもりでしたか？」

「まあな、松平の家臣扱いされちゃ困る」

三河侍達の視線に殺気が帯びる。

頑固一徹を地でいく三河の気風が、主君に対する侮辱ともとれる九十郎の言葉を聞き逃せなかったのだ。

「そ、それは……どうしても、ですか……？」

屋敷の奥から、歌夜が現れる。

肌の色、ふらつく足元、掠れる声……誰の目からも、無理をして立ち上がっている事は明らかであった。

「無理をするな歌夜、お前は怪我人で、ほんの少し前まで半死半生だったんだぞ」

「答えてください、九十郎さん。」

どうしても三河に留まる事はできないと……そう、仰るんですか？」

愛弟子の問いに、九十郎はしばし無言で佇み……

「……ああそうだ」

「私では貴方の妻として不足ですか？」

その言葉に、事情を知っている犬子と悠季、そして九十郎以外の全員がざわめく。何代にも渡つて松平に仕えてきた榊原家の娘が貧農の子に嫁ぐ等、ありえない話なのだ。

「悪いな歌夜、お前は良い女だ、その一点に関してはお世辞でなく断言できる。

お前を嫁にした男は幸せ者だろうし、お前を嫁にすれば、

俺が欲してやまなかつた安寧な生活が手にできたかもしれないと思う。 だがな……」

そう言つて九十郎は傍らに佇む犬子を見る……不安そうに己の指先を握る少女を、何を血迷つたのか、自分のような価値の無い男を好きだと言いだした歴史上の偉人を。

九十郎は一瞬……一秒にも満たない短い時間、瞑目する。

自分と歌夜との結婚生活が浮かび……すぐに消えた。

その光景はどうもしつくり来なかつたのだ。

故に心を固めた。

「だがな歌夜、俺は前田利家を側室か妾にして、お前を……」

どこの馬の骨とも知れん榊原康政を正室に添えるなんてできん。

後はまあ……単純に好みの問題だな」

そう言つて九十郎は誤魔化した。

その言葉自体は嘘ではない。

生来の巨乳好きである九十郎にとって、貧相……とまでは言い切れないものの、やや痩せ型である歌夜よりも、青少年の何か危ない豊満ボディの犬子の方が好みのタイプだ。

だがしかし、この男にとってより重要な事は、松平がそのうち滅ぶ泡沫勢力であると思ひ込んでいる事だ。

それは単なる思い込み、単なる知識不足に過ぎないのであるが、九十郎がそれに気づくのは大分先の話である。

「く、九十郎……さ……」

歌夜の声が震えていた。

今にも倒れそうな程にふらつき、今にも気を失いそうな程に蒼褪めていた。

傷が治りきつていないのに無理をして立ち歩いているからではない、絶望的な未来予想図が……松平の将兵達が、次々とウインチェスターにより射殺されていく光景が脳裏に浮かんであるが故に、歌夜は蒼褪めていた。

何か言わなければいけない、何としても引き止めなければいけない。

それが分かっているながら……歌夜は何も言えなくなっていた。

自分の想いが、感情が、ただただ純粹に、一人の女として九十郎を愛する犬子と比較して、酷く醜く見えてしまったのだ。

「そこをつ!!。そこをどうか……伏してお願ひ申し上げます！」

何卒三河に留まつて頂けないでしょうか! どうかつ!」

悠季が土下座をした。

歌夜を除けば、ただ一人九十郎が他国に渡つた時の危険さを理解している悠季は、躊躇なく恥も外聞もプライドも投げ出した。

九十郎が望むのであれば、娼婦のようにこの身を差し出す事になつても構わない……この時、悠季はそれだけの覚悟と決意をもつて喋つていた。

歌夜と綾那に、そして三河侍達にどよめきが起きる。

主君・松平葵元康の片腕とも言うべき重臣が、貧農の子を引き留める為に大地に額を擦りつけたのだ。

「……ごめん、誰……いつ?」

……が、初対面の九十郎には響かない、届かない。

「腐れワレメです」

しかも親戚の綾那から腐れワレメ呼ばわりをされた。

ふざけるな、足を引っ張るな、余計な口を挟むな、松平の興廃がこの説得に懸かつて

いるのが分からないのか……悠季は頭の中で松平の脳筋侍共を罵った、何度も何度も罵りながら、血が出る程に強く強く額を地面に押し付けた。

なお、悠季は気づいていないが、九十郎もこれでもかかって位に脳筋である。

「そうか……葵に何を言われたのか知らんが、頑張れよ。」

生きていればたぶんおそろきつとメイビー良い事もあるさ」

届かないどころか、変な同情を買っていた。

悠季がこの時、何を思ったのかは不明であるが……この日を境に、悠季と綾那の中はさらに険悪になった。

ただ……滅多に無い怨敵、もとい親戚兼同僚が頭を下げる姿を見て、綾那も少しは思う所もあつたようだ。

「お師匠……」

綾那が口を開く……綾那なりの想いを、綾那なりの言葉で。

「綾那も……綾那からもお願いするです。」

お師匠からはまだまだ教えて欲しい事がたくさんあるですし、

犬子と一緒に走ったり、剣を振ったりするのは楽しかったです。

歌夜を助けてもらったお礼だつて全然できてないし……だから……」

「む……いや、そう言われるとこっちとしてもだな……」

九十郎が怯む、たじろぐ。

ほぼ初対面だった悠季の土下座は全く心に響かなかつたものの、愛弟子の頼みはそれなりに響く……九十郎はそういう性格だ。

「だから……だから……綾那は悠季や歌夜みたいに頭が良くないから、

上手く言えねえですけど、こんなお別れは嫌です。

もつと……もつとたくさん楽しい事をして、もつと良い思い出を作つて、それで……」

それは悠季にも、歌夜にも言う事ができなかった打算抜きの言葉、純真な言葉だ。

ある意味で我欲に塗れた、犬子と九十郎の気持ちや全く無視した言葉ではあつたが、この場にいる誰よりも犬子と九十郎を揺るがせる言葉であつた。

「綾那……その……だな……」

九十郎は苦虫を噛み潰したかのような顔で1歩引き、ゆっくりと腰に手を伸ばす……

綾那は……本多忠勝は最強の武人である、武術の天才である。

万人の一人の剣才と、長き時の流れの中で研鑽され続けてきた神道無念流、そして最新スポーツ医学に基づくとレーニングが混じり合い、最早誰にも手が付けられなくなる程の強さを得ている。

桶狭間の戦いの当時、鷲津砦に詰めていた約400人の将兵を、たった1人、しかも全くの無傷で全員斬殺できるレベルの強さである。

味方がドン引きするレベルの強さである。

……そんな事をしていたから歌夜と逸れたのであるが。

今の綾那ならば、関雲長と張翼徳、ついでに劉玄徳が同時に襲い掛かってきたとしても瞬殺できるし、犬子と九十郎が100人ずつ居たとしても軽く皆殺しにできるだろう。

つまり今の状況は、犬子と九十郎にとって限りなく詰みに近い状況だ。

だから……だから九十郎は奇襲に頼る。

「綾那避けてえっ!!」

九十郎の指先が脇差に触れた瞬間、歌夜が血相を変えて叫んだ。

スぺツナズ・ナイフ……内蔵されたバネにより刃先を射出できるよう改造された脇差、

まだ綾那に見せた事が無い九十郎の切り札、限りなく詰みに近いこの状況を打破できるか細い可能性。

「わわっ!?!」

直後、綾那は真横に跳んだ。

人間サイズの飛蝗かと思う程の速度と勢いでブツ飛んだ。

歌夜が……幼き頃より苦楽を共にし、練兵館で共に武芸を磨き合い、全幅の信頼をお

く親友が叫んだが故に、榊原康政が警告を発したが故に、綾那は跳んだ。

全力で、後先考えずに……九十郎の狙い通りに大ジャンプした。

「馬鹿めえいつ!?!」

九十郎が目標を変え、悠季に刃先を向け、スイッチを押す。

既に歌夜から飛び出す脇差の存在を聞いていた悠季は、咄嗟に身を翻し……飛んできた刃体をギリギリで躲す……そう、躲せたのだ。

武術よりも智謀、武者働きよりも調略を得意とする本田正信にすら、不意を衝かれなければ回避できる代物だ。

本多正信の1000倍は強い本田忠勝に通用する筈がない……歌夜が叫ばなければ。

九十郎は近くの土蔵に頭から激突する綾那を尻目に、思い通りだと心で笑う。

最初から歌夜に警告させる事が目的だったのだ。

「逃げるぞ犬子おっ!!」

「う、うんっ!!」

「覚えとけ歌夜っ! これが真のフリーリシカザンだ!」

偉そうな事を言っているが、絶対に違う。

そもそもこの男は、忍殺語を理解できる人間がこの時代に1人でも居ると思っ
ているのだろうか。

「いけない、止めなさい！」

犬子と九十郎は綾那が跳んだ方向とは逆方向に脱兎の如く走り出す。

悠季の指示に従い、三河侍達が慌てて2人の前に立ちはだかるが、練兵館での修行により一回りも二回りも強くなっていた犬子を止められる者は居ない。

「九十郎さん！ 待つて……お願いです！ 待つてください！ どうかつ!!」

「悪いが断るつ!! 道場は頼んだぜ歌夜！」

「ごめんね歌夜！ 綾那！ 犬子は九十郎と行くけど……元気でねつ!!」

歌夜の呼び止めにも一切耳を貸さず、2人は包围網を抜け、そのまま駆け続ける。

綾那や悠季、三河侍達が2人を追い走る。

「お師匠……犬子……」

……いや、綾那は走らなかった、走れなかった。

万一強行突破を図ったのなら、殴り倒してでも止めると悠季から言われていたが、綾那にはそこまですて2人を三河に留める事が、正しい事とは思えなかったのだ。

「九十郎、追いかけてくるよ！」

「しつこい連中だな……犬子、右の道だ！」

「ええつ!!? あつちは川だよ!!?」

「それで良いんだよ！」

「飛び込んで逃げるの?」

「良いから黙って足を動かせ!」

犬子と九十郎が逃げる。

悠季と三河侍達がそれを追う。

地の利は松平の側にあり、2人の体力も無限にある訳じゃない。

綾那がサボタージュをしているとはいえ、どこかで追手を撒かなければ捕まるのは時間の問題だ。

「犬子、走りながら上着を脱げ」

追手達に聞こえないよう声量を抑えながら、九十郎はそう犬子に伝えた。

「どうするの?」

「こんな時のために用意をしておいたんだ。上着を脱いだら俺に貸せ」

「わ、分かったよ」

2人が走り逃げる、三河侍達が追う。

2人が走り逃げる、三河侍達が追う。

2人が走り逃げる、三河侍達が追う……そして辿り着く、岡崎城の近くを流れる矢作川へ。

九十郎が事前に用意していた逃走経路へと。

……ざぶんっ!!

深夜の三河に水音が木霊した。

悠季達の視界に、矢作川を泳いで逃げる犬子と九十郎の姿が写った。

「飛び込んだぞっ!？」

「川下に泳いでいる! 先回りしろっ!!」

2人を追い、三河侍達が川下に走る。

それがこんな事もあるうかと九十郎が用意した人形だと気づきもせず……

「名付けて、孔明を喪った蜀軍、尻尾を巻いて司馬仲達から逃げ出す作戦……てね」
遠ざかっていく喧噪を耳にしながら、九十郎はにまあつと笑う。

本物の犬子と九十郎は、木人形に被せておいたギリースーツを身に纏い、ダンゴムシのように丸まって息を潜めていた。

重ねて言うが、服部小波正成が不在だった事は九十郎にとって幸いだった。

小波なら、人形を川に投げ込むなんて古典的な手は誤魔化されないだろうし、犬子と九十郎の体温や呼吸音を見逃すような事も無かった。

それが2人にとって幸運で……ある意味では不幸であった。

犬子と九十郎第17話『出会い（前編）』

「目指せ！ 犬子と一緒に安寧な生活うっ!!」

「目指せ！ 九十郎と一緒に幸せな生活うっ!!」

雲一つない青空の下で、犬子と九十郎が気合いを入れ直す。

「好きだぞ、犬子」

九十郎が犬子の耳元でそつと囁く。

犬子の心中は幸せで一杯であった。

九十郎の心中には一抹の不安……前の生で秋月八雲によって刻まれた特大のトラウマ、いずれ破裂する時限爆弾があるだが、それが物語に関わってくるのはもう少し後の事、九十郎が日ノ本一の超イケメン・新田劍丞と出会った後の話である。

「……で、これからどうしようか?」

その一言で夢のような時間が過ぎ去り、現実が戻ってきた。

2人で安寧な生活を勝ち取らんと誓い合ったのは良いが、その方針はまるで立っていないなかった。

「やっぱ就職活動だな、とりあえず」

この男、地味に就活は初体験である。

前の生では就活戦線が本格化する前に事故死したし、今生では割とアツサリと犬千代の世話役ポジションに収められたからだ。

だがしかし、就活はお前が考える程簡単なものじゃないぞ、九十郎。

「犬子は、前みたいパンやお酒で商売するのも良いと思うけど」

「あれはあくまで緊急の事、お前と信長の仲を修復するまでの一時凌ぎのつもりだよ。

どこかでかい大名の庇護下に入っておかないと、

戦争が起ころるたびに逃げ隠れする羽目になるだろ」

「だったらさ、尾張に戻って久遠様に頭を上げて……」

「ははは、悪くないアイディアだな、葵がそれを予測してなければの話だが」

「え……ああ、そっか、尾張に向かう道に見張りが居るかもしれないね」

「とりあえず居る事を前提に考える。尾張に向かうのは下策だろうな。」

さて、そうするとどこに仕官するかが……真つ先に思い浮かぶのは毛利か島津だ

が

「遠くない？」

「尾張よりさらに西にある長州や薩摩まで移動するのは流石に現実的じゃないよな。」

三河より東の大名というと、伊達政宗、武田信玄、上杉謙信、北条氏政……

ううむ、これ以上は思い出せんな」

「九十郎、北条の人以外聞き覚えが無いんだけど」

「武田信玄は武田晴信つてのが出家した時に改名した名前だった筈だ。」

札束ビンタ以外で一向一揆と仲良くしなきゃいけないようになって出家したつて、俺のファースト幼馴染が言っていた」

「ああ、晴信つて人なら分かるよ。 甲斐武田家の頭領だね。」

札束ビンタつてのは良く分からないけど……」

「賄賂、あるいは資金援助」

「……武田が甲州金を使って一向宗を裏から操つてるつて噂、本当だったのかな」

それは特に何の証拠も無い噂話に過ぎないが、その噂を耳にした時、

織田久遠信長も、松平葵元康も、今川義元も、長尾景虎も同じ事を考えた。

晴信ならやりかねない……と。

「伊達政宗は子供の頃に病気で片目が失明した人、戦国DQN四天王の比較的マシな人。」

伊達何とかさんと最上なんとかさんの間に、奥州の辺りで生まれて……

ああそうだ、横山光輝が漫画を描いていた」

なお、この男の伊達政宗に関する知識は9割が横山光輝の漫画に由来する。

しかもこの通り、うろ覚えである。

「ううくん……ごめん、分かんない。

でも出羽国の米沢城は、伊達輝宗って人が城主をしているって話は聞いたことがあるよ。

ええと……従四位下、左京大夫だったかな？」

「じゃあだぶんそこだ。俺の記憶が正しければ政宗はひよ子より大分年下だ、

もしかしたらまだ生まれてないのかもな」

「じゃあ今からそこに仕官するの？」

「いや、それは最後の手段と考えよう。

1日や2日ならともかく、戦国DQNと長時間付き合い続けるのは骨だ」

「じゃあ武田晴信さんの所に行く？」

「信長と戦って負けて滅びるから駄目」

なお、織田徳川連合軍に敗れて自害したのは武田晴信ではない、晴信の子の勝頼である。

「北条は？」

「ひよ子と戦って負けて滅びるから駄目」

「ごめん九十郎、何がどうなったらひよ子が北条と戦う事になるのか分からないんだけど。

ひよ子に勝ち目あるの?」

「むしろ秀吉の圧勝だった」

「ますます訳が分からないよおっ!?」

これで分かったら予知能力者か未来人のどちらかである。

「と言われてもこれ以上説明できんぞ、正直その辺の事情はうる覚えなんだ。

ひよ子が歴史に名を残すレベルで出世する事と、

武田北条が負けて滅亡する事だけは覚えてる」

「久遠様やひよ子に剣を向けるのは、できれば避けたいんだけど……」

「それに関しては同意するよ、あいつらは天下人一步手前と天下人だからな。

当然、人材は揃っているし天運も持っている。

戦うとなれば相当危険が大きいと考えるべきだろう、よって武田北条は除外する」

「消去法で上杉……ええと、誰さんだっけ?」

「上杉謙信、酒の飲み過ぎで体を壊し、厠で糞まみれになって死んだ人。

死因の情けなさではアッティラに並ぶな。

死んだ後に後継者争いが起きる所までソックリだ」

鼻血で窒息して死ぬ方が、厠で糞まみれになって死ぬよりもマシな死に方ではなから

うか。

なんにせよ長尾美空景虎が……後に上杉謙信を名乗る事になる少女がこの台詞を聞いていれば、まず間違いなく九十郎を張り倒していただろう。

「九十郎、その人大丈夫なの？」

「ただし、アツティラと違って後継者争いは致命傷にはならなかった。

ええと確か……景虎と景勝が戦って、景虎が勝ったんだったかな？」

勝つのは景勝の方である。

「その後、上杉は関ヶ原で家康に喧嘩を売ってもしぶとく生き残り、

戦国時代終結まで滅ばなかった。

後継者争いでうっかり負ける方に付かなければ安泰だと思うぞ、俺は。

しかも俺の記憶が正しければ、上杉は信長ともひよ子とも戦っていない」

なお、九十郎は覚えていないが、上杉謙信は天生5年、西暦換算で1577年に起き

た手取川の戦いで信長軍を打ち破っている。

この戦いで羽柴秀吉は勝手に戦列を外れ、後日柴田勝家との仲が拗れる原因を作っている。

「ああそうだ思い出した、豊臣秀吉……つまりひよ子が天下を獲った時、

五大老っていう5人の有力大名に国家の運営をやらせたんだよ。

俺の記憶が確かなら、前田利家と上杉景虎はその時に五大老に抜擢されていた」

なお、五大老になるのは上杉景勝であり、景虎は五大老が成立する前に死んでいる。

「ひよ子が天下人になるのも驚きだけど、犬子が五大老って……」

「信長に仕え続けていればの話だな」

「ご、ごめん九十郎……犬子がカツとなつて拾阿弥を斬つたせいで……」

「過ぎた事をウジウジ悩んでも仕方があるまい。」

最善が採れんのなら次善を採るべし……上杉謙信に頭下げて家臣に加えてもらうぞ」

なお、家臣に加わる具体的な手段はノープランである。

「そうだね、仕方ないよね……で、上杉謙信さんつてどこに居るの？」

関東管領の上杉憲政つて人なら知ってるけど、

武田や北条に圧されてるせいで、かなり弱まってるって聞いているよ」

「上杉謙信も出家した時に改名した名だったと思う。」

昔は苗字も名前も全然違つて……なあ犬子、誰かいないのか？

北陸を縄張りしている実力者で、武田信玄……いや今は晴信か、

武田晴信と川中島の辺りで4回も衝突している大名を」

「長尾景虎！ きつと長尾景虎さんが上杉謙信に改名するんだよっ!!」

あの人は信心深く、家臣同士の仲が険悪になった時に出家しようとしたっていう

し、

武田晴信と川中島で3回も戦ったんだよ！

跡継ぎに自分が使ってた名前を名乗らせるってのも良くある話だしさ！

「そうか、間違いないそいつだ！ そいつが上杉謙信だ！」

「じゃあ行こうか九十郎、長尾景虎さんの本拠地、春日山城に」

「おうっ!!」

そして2人が精液臭い洞窟から出て、1歩踏み出した瞬間……2人同時に足の裏に違和感を覚えた。

何か棒状で柔らかい物を踏んだのだ。

「うん？」

「え？」

2人が同時に足元を見る。

「しめ縄……？ これ、しめ縄だよね？」

「ああ、しめ縄だな……何だか猛烈に嫌な予感がしてきたぞ、厄ネタの臭いだ」

「こ、怖い事を言わないでよ」

九十郎が後ろに振り向く。

年月が経ち、風雨に晒され、千切れたしめ縄の切れ端が洞窟の入り口に残っていた。

「これアレだろ、封印された魔物とか妖怪とか、

そうじゃなきゃ土着の神様とかがこの洞窟に居ましたって事だろ？」

俺たちそんな所であんな真似したんだろ？」

ははは、ホラー映画じゃ真つ先に殺されるパターンじゃねーか」

「ほらあ映画が何なのかは知らないけど、呪われそうな気配がするって事だけは分かるよ」

「どうする犬子、全速力で逃げるか？ それとも洞窟に戻って調べてみるか？」

「うう……急にそんな事を言われても……」

「ウ……アア……」

犬子と九十郎の肩がビクンと跳ね上がる。

まるで亡者の呻き声のような底冷えする音が聞こえてきたのだ。

「ね、ねえ九十郎、今のって……」

「役満じゃねーか、100%厄ネタじゃねーか、

しかも逃げそびれたじゃねーか、どうすんだよおい」

2人は息を呑み、身構えながら、恐る恐る周囲を見渡す。

「グ……オオオ……」

洞窟の奥の暗闇から、寒気がするような呻き声が聞こえてくる。

どうじにズル、ズル、という何かが這う音も……

「く、く、く……九十郎お……」

「ま、待て、慌てるな……これは……これはきつと孔明の罠だ……」

九十郎はガタガタと震えながら青褪めている。

大の大人が、なんとも情けない姿である。

「孔明つて、もうずつと昔に死んだ人だよ」

「ははは、死せる孔明、生ける仲達を走らすつて名セリフを知らないのかよ」

「知ってるけど今言う言葉じゃないよねっ!？」

そして……2人の前に……

「うわっ!？」

「な、なんだアレ!？」

ミイラのように干からび、全身が皴だらけになった遺体が這っていた……いや、信じられない事にそれは生きていた。

干眠状態のニトロ口かと見間違ふような状態で、何故生きているのか疑問に思う程にやつれているというのに、その物体は確かに生きていた。

「メ……メシ……腹……減ッタ……」

確かに生きて、食料を求めていた。

犬子と九十郎を見つめて、手を伸ばし、2人に助けを求めている。

「ど、どうしよつか……九十郎……」

「い、いや、食い物は多めに持つてきてるが……」

だが助けても助けなくても特大の厄ネタになる臭いがプンプンするぞ」

後に九十郎は『一生の不覚』『あの時殺しておけば良かった』『過去に戻るなら、あの日に戻ってトドメを刺したい』と語る。

九十郎がソレを殺すタイミングは、確かにこの瞬間しかなかった。

……

……

……

戦国の世は悲惨だ、そんな事は嫌という程に分かっていた。

戦争は悲惨だ、そんな事は吐き気がする程に知っていた。

負け戦は悲惨だ、そんな事は……分かっていたつもりだった、分かった気になっただけだった。

……少女はそんな事を考えていた。

「そつちだ、そつちの方に逃げているぞつ！」

「回り込めつ！ 逃がすんじゃないぞつ!!」

そんな声が聞こえてくる。

少女は必死に足を動かすが、声や足音はどんどん近づいてくる。

少女は手負いだった。

少女は飲まず食わずで走り続けていた。

少女はもう何日もまとまな休息をとっていなかった。

少女の持つ刀や槍は、血糊や刃毀れによってボロボロだった。

少女は……武将であった。

「女だ！ しかも若いぞ！」

「捕まえろっ！ 武田の糞外道共に目にももの見せてやるんだっ！」

少女は武将で、敗軍の将……しかもあちこちから恨みを買っている、武田の将であった。

必死に、死に物狂いで足を動かしながら、少女は志賀城の石垣に3000の生首を並べた時の事を思い出していた。

アレをやった時から北信濃の豪族や大名達は武田を憎みに憎み、上田原での大敗、板垣信方、甘利虎泰を喪う原因となった。

そして今、少女を追う者達がいままで追走を止めない原因にもなっている。

「諦めて……死んでたまるかなんだぜ……」

少女は小柄な身体で、傷つき疲れ切った身体で、生き抜くために、逃げ切るために走り続けていた。

砥石城攻略戦は、武田方の大敗に終わり、少女は殿軍を任された。

戦国時代における雑兵は、ほぼ全員が農民だ。

敗戦の気配が濃厚になればすぐに戦意が萎え、すぐに逃げだす……鬼に襲われるなんて異常事態が発生すれば、猶更だ。

「い、生きて……生きて甲斐に……御屋形様と、約束したんだぜ……」

蜂の巣を突いたかのような騒ぎの中で、誰も彼もが恐慌し、混乱する中で、まともに戦えるだけの士気と統率を保っていたのは、武田の精鋭、赤備えだけであった。

それ故に少女は残った、赤備えは残った。

残って戦い、味方が引く時間を稼いだ。

そして部下共々ズタボロにされた。

鬼は辛うじて撃退したが、武田勢の混乱を知ってやって来た村上の追撃部隊には敵わなかった。

連戦による疲弊、異常な敵を退けた事による安堵、背を向けた状態で敵を迎撃する困難さ……武田の精鋭・赤備えといえど人間であり、無敵ではなく不死身でもなかったという事だ。

「逃げられぬか……こうなれば斬り死にするまでよ」

「粉雪様、ここは我等が時を稼ぎます。お一人でも逃げ延び、どうか御屋形様の元まで」

「全員腹くくれえっ!! 最後のござ奉公じゃあ!!」

度重なる追撃により散り散りとなって、わずか10名程度しか残っていない少女の部下達が、覚悟を決めて刀を抜いた。

全員が少女と同じく傷つき、疲弊し、槍も刀も鎧もボロボロであった。

全員が少女と苦楽を共にした仲間達であり、少女が手塩にかけて磨き上げ、鍛えぬいた教え子達であった。

そんな仲間達が……武田の精鋭、赤備え達が、少女の目の前で成す術もなく蹂躪されていた。

駆け続ける少女の背後から、断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

「ちく……しょう……ちくしょう……」

少女の臉に涙が滲んでいた。

何晚にも渡る撤退戦で、喉はカラカラに乾いていたというのに、少女は涙を止める事ができなかった。

やめてくれと叫びたかった。

自分を生き延びさせるために捨て石となつた部下達にも、手塩にかけて磨き上げた部下達に情け容赦無く襲ひ掛かり、殺し、捕らえ、鬻り……女性であればそのまま強姦もしている落ち武者達にも。

しかし、叫べば自分の居場所が知られ、部下達の捨て身の献身が無駄になる、主君との約束を踏みにじる事になる……叫ぶことはできなかつた。

「う……くう……ううああ……」

負け戦は悲惨だ……少女は今まで、それを分かっていたいなかった。

身を裂かれるような苦痛……少女は今まで、それを味わつた事がなかつた。

同胞を撫で斬りにされる悲痛……少女は今まで、それを知らなかつた。

『絶対に死なないで……貴女一人居れば、貴女一人生き延びれば、赤備えは立て直せる。』

光璃は待つている、信じて待ち続ける』

あの時、少女は約束した。

軽々しく約束した、必ず生きて戻ると。

それ故に少女は滲む涙を拭い、齒を食い縛りながら走り続ける。

しかし……

「あ……」

近くの茂みから黒い影が飛び出した。

それが隠れて機会を窺っていた人間だと気づくよりも早く、少女の視界が反転し、暗転した。

犬子と九十郎第21話 『呑気な連中』

安倍金山……かつて今川義元の大躍進を財政の面で支え、今川の宝と謳われたそこは、義元討死の報により生じた家中の動揺を衝かれ、あっけなく武田に制圧された。

武田の裏切りにより、武田今川同盟は跡形も無く消滅したが……そんな事は武田光璃晴信にとつては些細な事だ。

義元の後継者、今川氏真・通称鞠は、剣術家としては超一流と呼んで良い腕前を持っていた。

しかし政治家、あるいは軍人としてはまだ若く、経験も浅く、家臣達からの信望も決して厚いとはいえない。

故に義元に代わり、武田の襲来に対し毅然と立ち向かう事はできなかった。

狼狽する家臣達、空転する評定、しれつと独立した松平葵元康の間で、ただただ時間だけを浪費するばかりであった。

……とりあえず鞠は光璃と葵を殴っても良いだろう。

そして……

「光璃お姉ちゃん、大丈夫なのかな。

兵のほとんどをこっちに残していつて」

安倍金山にたなびく武田の旗、武田の陣幕の内で、一人の少女が空を見上げる。

この少女こそ武田家当主、武田光璃晴信……ではなく、その妹の武田薫信廉、姉とそっくりの見た目をしているが、姉と違って戦国時代向きの性格をしていない。

鳥の囀り、花の香り、春の日差しに安らぎを覚える、心優しい少女だ。

姉と違って戦国時代向きの性格をしていない少女である。

光璃ではなく薫が武田家当主だったなら、鞠も枕を高くして眠れただろうし、美空の飲酒量は減って胃痛も無くなり、寿命も大幅に伸びていた事だろう。

「越軍が出しゃばってくる前に素早く決着をつける必要があったでやがります。

行軍速度を考えると、大勢は連れていけないでやがるよ」

薫の呟きに、小柄な少女が答える。

名は武田夕霧信繁、光璃の妹であり、後に九十郎を蛇蝎の如く毛嫌いする少女である。

2人の姉、武田光璃晴信は、村上義清が駿河遠征の隙を伺っているとの情報を得て、手を率い、村上にとっての要衝地、砥石城の襲撃に向かっている。

武田は四方八方の豪族から恨みを買っており、村上の動きを放置すれば武田恐れるに足らずと豪族達が決起するだろう。

しかし武田の重要な資金源、黒田金山は枯渇しかけており、今川の安倍金山を手中に

納める機会を逃す訳にはいかず……結果、光璃の率いていった兵は非常に少ない。

「それは分かつてるけど……」

それ故に、薫は光璃の安否を心配しているのだ。

「まあ、村上義清の勢力はそう大きいとは言えないでやがりますし。

粉雪と心、それに武田の赤備えが姉上を守ってるでやがる。

そうそう遅れを取るような事は無いでやがるよ」

「うん……そうだよね……そうなんだけど、何か胸騒ぎが……さ……」

薫が空を見上げる。

武田光璃晴信が戦っているであろう、北の空を……薫は何故か、嫌な予感がしてならなかった。

「ねえ、夕霧お姉ちゃん。 やっぱり私達も一度戻った方が良いんじゃないかな。

光璃お姉ちゃんは、金山を奪った後で駿河館を襲撃するかどうかは、

私達で決めろって言っていたけど」

「どうするでやがるか……金山の制圧は思ったよりも簡単に終わったでやがる。

兵の負傷も疲労も少ない、今を逃せば今川氏真は家中を立て直すかもしれない……」

夕霧としては、この機会にもう少し今川の勢力圏を削っておきたい所ではあった。

氏真の当主としての手腕、力量は未知数、あつという間に今川を立て直すかもしれない

いし、長い間グダグダと泥沼の御家騒動を続けるかもしれない。

しかし、今この瞬間、今川が混乱して、組織だった防戦が困難になっている事だけは確かである。

「そろそろ偵察に出した湖衣が戻ってくる頃合いでやがる。」

春日と一三三の意見も聞いてから決めるでやがるよ」

……だがしかし、夕霧はそんな自分の判断、自分の計算を信じ切れない。

光璃が残していった、武田の勇将にして武田四天王筆頭、馬場春日信房に、晴信の眼と謳われる武田家きつての知患者、武藤一三三昌幸の意見を聞こうとする。

それは光璃と夕霧の格の違いか、自信の違いか、背負う物の違いか……そうではない、薫と同じように、夕霧も何日か前から何か嫌な予感がしてならなかったのだ。

「嘘なのらっ！　れ鱈目を言うなのらあっ!!」

そんな時、陣幕の外から、まるで悲鳴のような声が聞こえてきた。

武田四天王の一人、高坂兎々昌信の声であった。

「落ちつかんか兎々！　伝令にあたってでも仕方がなからう！」

「こいつが適当な事を言うのが悪いのら！」

粉雪と赤備えがそう簡単に負ける筈がないのら!!」

「拙とてそう思っている、しかし……」

そんなただならぬ気配に驚き、夕霧と薫が駆けつける。春日と兎々が2人に気づき、姿勢を正す。

「典厩様、つい先ほど、早馬がこちらに到着いたしました。

その者の報告によれば……砥石城にて、味方が敗れたそうでございます。

御屋形様は負傷、粉雪と赤備えは撤退の刻を稼ぐために殿を引き受け……

生存は絶望的と」

……直後、もたらされたのは信じがたい報告であった。

「な……!?!」

「嘘……光璃お姉ちゃんが……ま、敗けたの!?!」

薫と夕霧が絶句する。

甲斐の虎と呼ばれ、畏れられた危険人物……もとい、戦国大名であった武田晴信の敗

北、そして武田随一の武芸者である山県昌景、武田の最精鋭・赤備えの喪失。

真昼だというのに、薫と夕霧は血の気が引き、目の前が真っ暗になったかのように感じた。

「村上に姉上を上回る戦上手が居たとでもいうでやがるか!?!」

それとも長尾の策略に引つかかったとでも!?!」

直後、夕霧は掴み掛かるかのような勢いで春日に詰め寄っていた。

「拙には何とも言えませぬ。

しかし誤報なのか、何かの暗喩なのか、それとも事実を端的に示しているのか、拙には判断しかねますので、そのままお伝えします……

鬼に襲われた、と聞いております」

「鬼……？」

「鬼ってどういう意味でやがる？」

「そんなのれ鰭目に決まってるのら！ 長尾の流言か、味方の裏切りなのら！」

「兎々、そう言いたくなる気持ちは拙にも分かる。

しかし、人智や常識を超えた怪異がこの世には存在する事は、

我らが一番良く分かっている筈であろう」

「お館様の御家流……」

「然り、古来から武田の御旗を護り続けてきた祖先達の靈魂を呼び寄せ、使役する。

あの恐ろしくも神々しい能力こそ、超常の存在を示す証左であろうが」

「うう……それは、そうかもしれないのらける……」

兎々が複雑な心境で頷く。

春日の言いたい事は理解できる、しかし納得はしかねている。

あの鬼のように強い赤備えが、あの悪鬼羅刹のように戦上手な武田晴信が敗れるなん

て。

考えたくない、信じたくない事であった。

「夕霧様、薫様、撤退を具申いたします。

お館様は甲斐武田家のため、必要不可欠の御方、喪う訳には参りませぬ。

それに……それに粉雪と赤備え達も、可能ならば助けておきたいと、拙は思慮いたします」

『可能ならば』……その言葉の裏には、武田四天王筆頭、馬場信房もまた、9割方粉雪の生還を諦めている事を意味していた。

兎々も、薫も夕霧も、それが痛い程に理解できた。

理解できたからこそ、辛かった、苦しかった、悲しかった、何かの間違いだと喚びたかった。

「金山はどうするでやがるか？」

「金山の確保は急務である故、ここの抑えは必要でありましょうが、

残りは急ぎ甲斐に戻り、態勢を立て直すべきかと。

お館様が負傷されておられるのであれば、薫様のお力が必要となりましょう」

薫は武田家当主・武田光璃晴信と瓜二つの外見をしており、労咳の療養や外交等、光璃がどうしても手が離せない時に、光璃に代わって武田の頭首としての仕事を行う事が

度々あった。

もしも光璃が立ち上がれない程に弱っていたのだとすれば、それを補い、助けるのは薫の役目である。

「……偽情報の線はないでやがりますか」

「知らせはお館様の側近、百足衆からのものでした。信用はできません」

ふう……と、夕霧はため息をつく。

今朝から感じていた嫌な予感こそコレであったかと、彼女は妙な納得をしていた。

『鬼』の正体はまだ不明だが……それでもなお、行動しない訳にはいかなかった。

「物見に出している一三三と湖衣を呼び戻すでやがる。」

抑えの兵を残して、甲斐に戻るでやがるよ」

「御意」

「ぎ、御意なのら」

夕霧が命じる。

春日と兎々が応じ、陣内が慌ただしく動き始める。

誰もが主君と同朋達の無事を祈りながら……

……

……

.....

……同じ頃、犬子と九十郎は呑気に歌いながら山道を歩いていた。

歌詞を書くのは色々アレなので省くが、要約すると島津チート4兄弟の歌……であると同時に、影が薄い歳久を思い切り馬鹿にした内容の歌だ。

「四人目はどこにいったんだぜっ!？」

生存は絶望的と思われる粉雪がツツコミを入れた。

「いや、ぶつちやけ四人目影薄いし、俺自身も名前覚えてねえし」

「犬子も四人目の名前、知らないし」

「もう少し四人目に優しくしてやれなんだぜ」

なお、その四人目が放った矢により、後日ひよ子は生死の境を彷徨うような重傷を負う。

九十郎の『四人目は影が薄い』という発言のため、四人目に対する警戒心を僅かに……ほんの僅かに薄くしてしまったのだ。

たまたま近くに居た雛が自分を引っ掴んで逃げ出さなければ、たぶんトドメを刺されていただろう……と、後にひよ子は語る。

……閑話休題。

「全く、いつどこから襲ってくるか分からないってのに、呑気な連中なんだぜ」

既に3回、九十郎達は落ち武者狩りに遭遇し、撃退している。

出会った日の一件は数に含めずに……だ。

その度に犬子と九十郎は剣を振るい、粉雪とついでに虎松を守った。

粉雪は走る事も、弓を引き、槍を振る事も満足にできない自分に齒がゆさを感じながらも、頼もしさ、心強さも同時に感じていた。

「本当に……本当に呑気な連中だけ……」

……犬子と九十郎が傍にいる、守っている。

それを嬉しいと感じている自分もまた、呑気な連中なのだと、粉雪は自戒する。

特に九十郎の言葉一つ、表情一つで胸を高鳴らせている時の自分は……と。

「大丈夫ですよ、九十郎は勘が鋭いですから」

「鍛えられたからな、何度も何度も鍛えられたからな。」

いきなり道場に押しかけてきて、反射炉作ろうぜって言いだすファースト幼馴染とか。

いきなり道場に押しかけてきて、鮎の友釣りやろうぜって言いだすセカンド幼馴染とか。

いきなり道場に押しかけてきて、開墾して菜種油作ろうぜって言いだす農村マンとか。

いきなり道場に押しかけてきて、エロ本の密輸手伝えて言いだす北町奉行とか。

いきなり道場に押しかけてきて、北町奉行を探すのを手伝えて言いだす岡っ引きとか。

いきなり道場に押しかけてきて、捕物やるから手を貸せって言いだす火盗の長官とか。

いきなり道場に押しかけてきて、

御前試合に向けて鍛えなおすから手伝えて言いだすド貧乳ヘビメタ狂……

いや、あれは良いか、基礎体力作りを指導するのは嫌いじゃないしな。

後はいきなり道場に押し……」

「分かった分かった！ 分かったからそれ以上言わなくても良いぜ」

「あのクソ女共め、俺に何か恨みでもあるのか。

俺は神道無念流だけやってれば幸せだったのに……

ああ桂よ、お前だけが俺の癒しだった。

神道無念流やらせてくれるし、胸は大きいし、

スクーター作るの手伝ってくれたし、胸は大きいし、

おおナイスでっばい、あれこそまさにメロンエナジーアームズ」

何がメロンエナジーだ。

この男は呉島貴虎に土下座するべきである。

そして九十郎が、自分の知らない女性に言及した時……粉雪は少し、苛立ちを感じた。

「九十郎、胸の大小で人を評価するのはどうかと思うよ」

「少しは慎ましい胸にも優しさを分けてやれなんだぜ」

『慎ましい胸』の中に、山県粉雪昌景の胸も入ってるんだらうなと思うと、粉雪は少し虚しい気分になった。

ちなみに、北町奉行と岡つ引きと火盜長官は、ある日突然大江戸学園に転校してきた秋月八雲と恋仲になり、九十郎の心に特大のトラウマを植え付けている。

女性が目の前に居るのに『ナイスでつばい』だの、『メロンエナジー』だの叫ぶのが問題なのではと思うが、九十郎は気づかない。

だから貴様は九十郎なのだ。

「クズロー、オレハ？ オレハ？」

小さな背丈で、ぴよんぴよんと跳ねながら、虎松が九十郎に尋ねる。

「いや俺はって何だよ？ お前はウチの学園に居なかつただろうに」

「エ？ ア……ソウダツタ」

「ああ、だがな……」

九十郎が心底嫌そうな顔で、しばし沈黙する。

九十郎が知る大江戸学園の馬鹿共の中でも、最も大きなストレスを与えた存在を思い出しているのだ。

「お前に似て若白髪なクソ女が一人いたかな。

井伊つて奴なんだが、あいつのせいで二回も道場が炎上してなあ……

やれ脱走した高野を匿っただけの、吉田を脱走させる計画を立ててるだの、

訳の分からねー言いがかりをつけやがって、道場建て直すの大変だったんだぞ」

丸太と鋸と釘と金槌でトンテンカンと道場を再建させるこいつもこいつである。

ちなみに高野の逃亡を助けたり、吉田奪還計画を立てたりしていたのは九十郎ではない、桂だ。

「向コウノオレ……不器用過ぎ……クズロー、完全二敵視シテル……」

そんな九十郎の恨み言を、虎松がげんなりとした表情で聞いていた。

虎松がふと漏らした呟きを、聞く者は居なかった。

「しかもあいつ、ナチュラルに俺の事を屑呼ばわりするしなっ!!」

何を言っている、お前はナチュラルに屑じやないか。

「ソレ、タブン、クズローノ名前、呼び辛カッタカラ……」

「ははは、あいつの呼び方には悪意があつたぞ絶対」

「ソレ、タブン、タダノツンデレ」

「ははは、ツンデレなんて二次元にしか存在しねえよ」

「オレ、クズロー、好キダゾ」

「お前に好かれても嬉しくもなんともねえよ、この白髪ツルペタイカ腹幼女が」

「向コウノオレ、コツチノオレ、ドツチモクズロー、好キダゾ」

「向ここの俺ってなんだよ!? 6つ子か? 6つ子なのか!?

やっぱりお前もニートになるのか!?

虎松という名前だけで6つ子だのニートだのを連想できるのはこの男くらいである。

「九十郎、犬子は側室でも妾でも良いって言ったけど、

虎松に手を出すのは流石にどうかと思うよ」

「出さねえよ! おれがこんなツルペタイカのイカ腹幼女に手を出す訳ねえだろ!!」

「少しは慎ましい胸にも優しさを分けてやれなんだぜ」

「いや胸の大きさは問題じゃねえだろ!!」

「ほ、本当か!?

「本当かって……おいちよつと、身を乗り出してくるな粉雪! 近い近い近い!!

虎松ためえ何さりげなく肩にしがみついてんだよ!? 重いだろ!

おい犬子、ちよつと助け……」

「わんっ!!」

「ブルータステめえもかあああああーっ!!」
呑気な連中である。

本当に呑気な連中である。

そんな呑気な道中も、呑気な日々も……もう間もなく終わる。
目的地はもうすぐそこであった。

犬子と九十郎第2話『狩りの時間』

ある日、小さな小さな……名前すらも定かでない小さな村で、一人の子供が行方不明になった。

戦国時代では良くある事だ。

その子の家族、その子の親戚が探したが、見つからなかった。

戦国時代では良くある事だ。

その日の晩……紅い髪の鬼が出た。

「何ヲシテイル」

冷たく濁ったその瞳が見つめる先に、近くの村で行方を眩ました子供と、一匹の蜘蛛が居た。

ただし子供は気絶をして、大蛇のような太さの異様な糸で全身を縛られていた。

蜘蛛は人間よりも大きく、まるで牛か馬のような体格をしていた。

そして虎に似た顔をしていた、巨大で鋭い牙を持っていた。

その蜘蛛は化外の存在であった。

「駄目ダ、化外、人襲ウ、人喰ウ、駄目ダ」

直後、巨大な蜘蛛が糸を吹き付けた。

紅い鬼の両腕に、両足に、胴体をあつという間にグルグル巻きにして……燃えた。

紅い鬼の全身から炎が噴き出て、蜘蛛の糸を瞬時に焼き尽くし、燃えカスに変えてしまった。

「オレ、鬼ノ子、オレノ方、強イ。諦メロ、ソノ子置イテ、ドコカへ行ケ」

直後、巨大な蜘蛛が牙を剥いた。

蜘蛛が紅い鬼に飛び掛かり、刃物の様に鋭く尖った牙を右腕に食い込ませた。

皮膚が切り裂かれ、肉に食い込み、血管が切断され、周囲に夥しい量の血が飛び散った。

「モウ一度言ウ……」

紅い鬼が蜘蛛の顔面を掴み、ギリギリと握り、締め上げる。

ミシリミシリと蜘蛛の頭がひしゃげ、苦悶の声と共に牙が鬼の腕から離れた。

そして……

「ドコカへ……行ケエツ!!」

……そして蜘蛛が吹き飛んだ。

まるでホームランボールの様に巨大な蜘蛛が空中に射出されて、そのまま遙か彼方へと落下していった。

紅い鬼はそれを見届けると、子供を……正確には、子供を縛り上げる蜘蛛の糸を睨みつけた。

子供の身体がひとりでに浮き上がり、ぶちり、ぶちりと、糸が切断されていく。

「起キロ」

紅い鬼の瞳が虹色に輝く。

深く深く……まるで泥のように眠っていた子供が、ゆつくりと目を開く。

紅い鬼と目が合った瞬間、その目をカツと開き、まるでマネキン人形のように全身を硬直させる。

「才前、家、ドコダ？」

子供がぶつぶつとうわ言を呟く。

紅い鬼がそれを聞き……安堵の息を漏らす。

「全部忘レロ、家ニ帰レ」

子供は虚ろな目で、まるで夢遊病患者のようにふらつきながら、

自分が住んでいる村がある方向に歩き始めた。

紅い髪の鬼は子供が視界から消えるまで見送ると、ふうつとため息をついた。

「人ハ人、化外ハ化外……人ノ世、良クナル、人ノ才陰。 人ノ世、悪クナル、人ノセイニ

化外、関ワル、イケナイ。 人、化外、悪役ニスル、人ノ世、悪イノ、化外ノセイニ

スル」

鬼の髪が白くなる。

鬼の肌が青白く、張りが失せていく。

まるで風船が萎んでいくかのように、まるで植物が枯れていくかのように、鬼の発する異様な迫力が、生命の迸りが消えていく。

やがて鬼は、ガリガリに痩せた白髪の幼女……虎松になった。

「間ニアツタ、良カツタ……化外、人殺ス、良クナイ。」

人ニトツテモ、化外ニトツテモ、良クナイ。

人ノ世ニ化外、必要無イ、化外二人、必要無イ……コレデ良イ、コレデ……」

ふらあ……と、虎松の身体がよろめいた。

念動力と、発火能力、それに催眠術……超能力を使った事で、ただでさえ弱っていた身体にさらに負担が生じてしまったのだ。

虎松は鬼子だ。

半分は鬼であるが故に、常人を遙かに超える身体能力と、数々の超能力を備えている……しかし半分は人で、肉体を持ち、物理法則に囚われる存在であるが故に、エネルギーを使つただけ食べなければいけないのだ。

「ウウ……腹減ツタ……半分人、腹減ル、不便……」

ぐうう……と、虎松の腹が鳴った。

失われたエネルギーを取り戻すため、虎松の身体が栄養を欲していた。

半分は鬼であるが故に、物理法則を踏み越え、超常現象を引き起こすことができる。

半分は人であるが故に、物理法則に囚われ、生命活動を維持するために食事や睡眠を必要とする。

九十郎達に遠慮をして、虎松は生存できるギリギリの量しか食べていないのだ。

……

……

……

「狩るぞ」

次の日の朝、九十郎は唐突にそんな事を言い出した。

「狩るって……何をなんだぜ？」

粉雪がそう尋ねる。

「食材だよ、食材。 甲斐にたどり着くまでギリギリ保つと思ってたが、

虎松がバカス力食いまくるからたぶん足りなくなる」

虎松は目を逸らした。

普段以上に血色が悪く、目の下に隈まであるのは、昨晚寝床から抜け出し野生の土蜘蛛

蛛と戦っていたからだ。

数々の超能力を有する鬼子でも、人智を超えた怪異を相手に戦えば、無傷では済まない。
い。

そして受けた傷を急速に治癒させるのにも、超能力を行使するのにも、多大な気力と体力とカロリーを消耗させてしまうのである。

「正直な所、この糞餓鬼を放り出して3人で旅を続ける方が楽だし、

追手の事を考えると余計な事をしている暇に少しでも距離を稼ぎたいんだが……」

「まあまあ、その分犬子が頑張って色々獲ってくるからさ」

「そういう訳で不本意ながら……」

本当に不本意ながら虎松を放り出すのは最後の手段にする。

悪いが何日か到着が遅くなるぞ」

最後の手段とか言っているが、九十郎は隙あらば虎松を放り出そうと虎視眈々と機会を窺っている。

薄情な男である。

「分かった、あたいも手伝うぜ」

「傷の方は大丈夫なのか？」

「まだ完全とは言えねえけど……獣仕留める位はどうにかするぜ。」

働かざる者食うべからずって昔から言うだろ」

「ああ、言うな」

九十郎が現状何の役にも立っていない虎松に視線を向ける。

「クズロー、ゴメン……オレ、人ヨリ、早く腹減ル……」

正確に言うならば、『超能力を使うと腹が減る』なのだが、虎松は舌足らずなため、九十郎はただの食い盛りだと判断した。

「ごめんと思ってるならナチュラルに俺を屑呼ばわりするのやめろ」

「クズローノ名前、呼び辛イ」

「ははは、甲斐に着いたら簀巻きにして埋めてやろうかなこの糞餓鬼」

この男は後日有言実行した。

首から上は外に出す程度の良識はあったし、虎松は埋めた程度でどうこうできる存在でもなかったのだ、全くの徒労に終わったが。

「それで、どうやって狩る気なんだぜ？ 弓矢は持ってないし、流石に素手じゃ厳しいぜ」

「木の上から飛び降りながら首に短刀をぶつ刺すとかどうよ」

「そんな事するくらいなら、メシ食うのを我慢して先を急いだ方がまだマシだと思っぜ」

あまりに現実離れした提案に、粉雪が呆れ果てる。

そんな芸当ができるのはアサシンクリードの中だけである。

「まあ、流石に現実的じゃないよな。」

だから昨晩寝る前に簡単な罠を設置しておいた、くくり罠猟つて奴だ。兎とか狸とか、夜行性の小動物が引つかかってくれば儲けものだな。

それと……こういう物も作っておいた」

九十郎は粉雪と虎松に、紐で括られた3個の小石を見せる。

「これってどこかで見たような気が……ああ、微塵だぜ!? 草が使う隠し武器の」

「……クラツカーヴオレイ?」

「ボーラだ、回しながらぶん投げて、紐を動物に絡ませる。」

イヌイットは野鳥を獲るのに使ったらしい。

狙った所に飛ばすのにやや慣れがいるが……まあ、素手でやるよりいくらかマシだろう。

後、思いつくのは定番のガチンコ漁かな。

昨日くくり罠を作っていた時に、魚が泳いでいる川を見つけてある」

ガチンコ漁とは、岩と岩をぶつけて、衝撃波で魚を一瞬気絶させて魚を捕る方法である。

現代ニホンでは法律により禁止されている漁法であるが、今は戦国時代で九十郎は遵

法精神が高い方ではない。

「クズロー、オレノ頭デガチンコ漁、ヤロウトシテナイカ？」

虎松が九十郎の方をじとくつと見つめながらそう尋ねる。

なお、ガチンコ漁法は断じて人間の頭を岩に叩きつける漁法ではない。

「カーフ・ブランディング漁なら」

カーフ・ブランディング漁とは、魚そつちのけで憎いアンチクシヨウの後頭部にフライング・ニーキックを叩き込み、そのまま勢いをつけて顔面を地面に叩きつける事である。

もはや漁法でもなんでもない。

なお、流石のこの男でも、カーフ・ブランディング漁は有言実行しなかった。

この時点では虎松を普通の子供だと思っていたので、岩肌目掛けて脳天を叩きつけたら普通に死ぬと思ったからだ。

鬼子はカーフ・ブランディングを喰らった程度で死ぬようなタマではないし、その辺に転がっている岩を使った方が楽に魚が獲れるので、仮に実行に移したとしても全くの徒労に終わるのだが。

「九十郎、魚獲るの？ 犬子、昔久遠様と一緒に魚獲った事あるよ。」

木の棒の先を尖らせて、泳いでる魚にぎくつてやって」

「銚突き漁か、凄いな犬子」

「ふふくん、犬子だつていつまでも子供じゃないのだよ」

「未だに背はちっちゃいがな」

犬子と粉雪の小柄コンビが同時にスネをけたぐり、九十郎は悶絶した。

……

……

……

「5つ設置して、成功したのは1つと……まあ、素寒貧よりはマシかな」

スベツナズ・ナイフに改造された脇差で九十郎が野兎の腹部を切り裂き、びくびくと苦しもうにもがくのを力づくで押さえつけ、手をつつこんで内臓を引っ張り出し、手早く耳を切り落とし、革を剥いで逆さ吊りにする。

残忍な行為だが、食料不足の中では四の五の言つてはられない。

「随分手馴れてるんだな」

「昔取った杵柄つてヤツかね、色々あつたんだよ」

「クズロー、オレ、腹減ツタ、喰ツテ良イカ？」

「もう少し我慢しろ、勝手に食つたら今後一ヶ月は吉音2号つて呼ぶぞ。」

肉は後で纏めて燻すとして……内臓は足が早いから今日中に食うか。

今夜はモツ煮込みだな」

「モツ煮込み!! モツ煮込み!!」

虎松がびよんぴよんと飛び跳ねながら九十郎に調理をせがむ。

「虎松てめえ、誰のせいでこんな面倒くさい事をやる羽目になったか理解してるのかよ」

「テヘペロ」

「Fuck Youぶち殺すぞゴミめら」

「ファックスルカ? クズロー、ファックシタイノカ?」

「ははは、Dカップになって出直せよ幼児体型」

現代ニホンなら間違いなくセクハラな発言である。

「Dカップって何の事だろうな、何故か妙に腹が立つんだが」

「たぶんおっぱいの大きさの事だと思えますよ、粉雪さん」

粉雪はそつと犬子と自分の胸部を見比べ……富める者と貧しき者の格差を感じた。

「こつからは2手に分かれるぞ。」

落ち武者狩りと遭遇する可能性があるから、戦える俺と犬子は分けて……

そうだな、犬子と虎松は川へ洗濯に、俺と粉雪は山で芝刈りにというのはどうだ?」

九十郎はさりげなく苦手な虎松の世話を犬子に押し付けた。

「大きな桃がどんぶらこ、どんぶらこって流れて来たらどうしようか?」

「その時は拾つておいてくれ。 桃太郎と一緒に鬼退治というのも悪くない、財宝をたんまり強奪して甲斐に凱旋しようぜ」

「冗談でもそういうのやめてくれねえか。 もう二度と鬼退治なんて御免なんだぜ」「クスロー、ソレ、タダノ押し込ミ強盗」

しかし、粉雪と虎松にはウケが悪かった。

「先に桃太郎の話題を出したのは犬子だ！ 俺は悪くねえっ！」

「九十郎!? ちょっと犬子が悪いみたいにいわないでよ!？」

「行くぞ粉雪！ 時は金なり善は急げだ！ 犬子、集合はさつき決めた通りで頼むぞ！」
そう言うや否や、九十郎はお手製のボローを片手にそそくさと逃げ出した。

怪我人かつ護衛対象の粉雪を放置して。

「も、物凄い責任転嫁、露骨な話題転換なんだぜ……」

ああ、おい！ 九十郎置いてくんだぜ!!」

粉雪もそれと追い、慌てて駆けだす。

犬子は苦笑しながら、がさがさと落ち葉を踏む音と共に遠ざかる2人を見送り……

「じゃあ虎松ちゃん、犬子達も張り切つて行こうか」

「オレ、張り切ルゾ」

「えいえいおーっ!!」

「オーツ!!」

……

……

……

その日の昼下がり、河原から香ばしい匂いが漂ってきていた。

河原の石を積み上げて作った即席の燻製器から、兎と川魚の肉が焼け、油が滴り落ちる匂いがするのだ。

「ウウ……犬子、良い匂イ、美味ソウナ良い匂イ……」

虎松が瞳を爛々と輝かせ、何度も何度も腹を鳴らし、涎をぼたぼたと垂らしながら燻製器を見つめていた。

「勝手に食べたら駄目だよ、吉音2号って呼ばれちゃうよ。」

吉音さんってどんな人か知らないけど」

「ウウ……吉音2号ハ、ヤダ……デモ、食イタイ……デモ吉音2号……ウウウ……」

虎松が燻製器を前に葛藤するのをよそに、犬子が小刀で魚の腹を切り裂き、内臓を引つ張り出し、川の水で洗い流す。

内臓が取り除かれた魚に軽く塩を振り、紐で吊るして、燻製器の中へと放り込む。

御油で自活していた頃は壊滅的だった料理の腕は、今は人並程度にまで改善されてい

る。

かつては何度も何度も失敗した。

魚と一緒に自分の指を切り裂いてしまった事、塩を振り過ぎて食べにくくなった事、燻し過ぎて炭化させてしまった事、逆に燻す時間が短すぎて生焼けになつていた事、火を強め過ぎて燻製器を駄目にしてしまった事もあつた。

だが今の犬子は危なげない手つきで作業をしていた。

慣れつて大事である。

「懐かしいなあ……昔もこうやつて、川魚を獲つたんだよ。

吉法師様と一緒に草笛を作つたり、山奥に秘密基地を作つたりとかもしたな」

そして獲れた川魚で暗黒物質を生成し、吉法師を悶絶させた。

吉法師は内心『どうしてこうなつた!』と叫び、滝のような冷や汗を流していたが、表面上は笑顔で『実に美味である』と言つていた……子供の頃から可哀想な人である。

吉法師とは、織田久遠信長の幼名だ。

犬子……当時は犬千代と呼ばれていた少女と共に、野山を駆け、領民に悪戯をして、うつけだのかぶき者だのと呼ばれていた。

「あの時、犬子がもう少し冷静だつたらな……九十郎の筈を盗られて、

臆病者の犬つころなんて言われてカツとなつて……あれがなければな……」

そして犬子はその日の大失態を思い出し、ずずくと沈み込む。

長尾景虎の下に仕官するという方針に異を唱える気は無いが、久遠に対し未練が無いと言えば嘘になる。

「ドンマイ」

一瞬たりとも燻製器から視線を逸らさず、虎松がぞんざいに励ます。

今の彼女の内心は99%が食欲だ。

「うぐ……」

「し、死ぬかと思った……せ……せ……」

そこに何故か全身ポロポロになっている粉雪と九十郎がやって来た。

九十郎は額から血を流し、粉雪に右肩を貸し、左手で猪の死体を引っ張りながら歩く。

鍛え上げられたマツチョマンの九十郎であっても、流石に辛そうだ。

「九十郎!? え、何があったの!」

「ああ、ボーラで猪に立ち向かおうとするのは危ないという事が分かった」

「……マジで死ぬかと思ったぜ」

むしろ何故ボーラで猪に勝てると思ったのだろうか。

「えつと……猪に襲われたの?」

「九十郎がよせば良いのに猪に飛び掛かっていったんだぜ」

「すまん、ちよつと調子に乗つてた」

「お陰でせつかく集めた野草や野鳥も放り出して、2人で逃げ回る羽目になつたぜ」

「クスロー、粉雪、怪我、無イカ？」

心配しているような台詞だが、虎松の視線は相変わらず燻製器に釘付けだ。

「怪我はあるよ、坂道から転がり落ちた時の擦り傷だろ、

木の枝が脚に当たつてできた切り傷だろ……」

「転がり落ちた時に頭も打つたぜ」

「うわあ……2人とも、良く無事だったね？」

「芸は身を助けるとは言うが、最後の最後に神道無念流の立居合が俺を助けてくれたよ」

キン肉ドライバーの特訓中に猪に襲われた時のキン肉マンのような必死さであった。

「九十郎の居合、速くて鋭かつたぜ」

「マジか!? 分かつてくれるか粉雪!？」

神道無念流に天敵など存在しないって事かな、はっはっはっはっはっはっ!!」

九十郎は得意げに胸を張るが、

この男はついさつきまで怒れる猪から必死こいて逃げ回っていた。

「ねえ九十郎、神道無念流に居合つてあつたの？ 犬子今まで一回も見た事無いんだけ

ど」

「一応はある。滅多に使う機会が無いから今まで教えてなかったがな」

そう言う九十郎は、立居合を教えてないのに綾那に皆伝を出してしまった事に気が付き、密かに頭を抱えた。

そして綾那から文句を言われるのを避けるため、一生この事は隠しておこうと密かに決意した。

自分のうっかりから全力で目を逸らす、肝っ玉の小さい男である。

「とりあえず、俺と粉雪は傷の手当てをする。悪いが猪の解体を頼めるか?」

「うん、分かったよ。これも全部燻製にしちやう?」

「ちようど昼飯時だ、一部はウサギの内臓と一緒に煮込んで今食おう。」

それと肝臓は捨てないでおいでくれ、鉄分やビタミンが豊富で、傷の治りを良くするんだ」

「うん、分かった」

以前壬月から贈られた太刀を使い、猪の腹をぎくりと切り裂く。

内臓を取り出し、丁寧に毛皮を切り離していく……贈った太刀がこんな使われ方をすると、壬月は予想だにしていなかったであろう。

「傷口から細菌が入ると拙い、傷を軽く洗って止血するぞ」

「お、おお……」

九十郎に言われるまま、粉雪は服を捲り、肌を晒す。

傷の深さでは九十郎の方が上だったが、それでも九十郎は粉雪の手当てを先にした。最初に会った日に、自ら素っ裸になったのを思い出す……

露出はあの時の半分以下であるというのに、粉雪は妙な気恥ずかしさを覚えていた。

「あ、あの……なあ、九十郎……」

そんな気恥ずかしさを隠すためか、誤魔化すためか、粉雪は口を開く。

「うん、どうした？　痛むのか？」

「あ、いや……その……」

聞かれて気づいた。

話しかけたのは良いが、話すべき内容は全く考えていなかったと。

粉雪は何度も目を泳がせ、何度も口ごもりながら、必死に頭を回転させて……

「さつき……そう、さつきさ……あたいが転んで、猪に踏まれそうになった時、

猪の前に立ちはだかつて、あたいを守ってくれた……よな？」

「まあ、今の俺は粉雪の用心棒だからな」

なお、猪に襲われた原因も九十郎である。

「……格好良かったぜ」

そう、消え入りそうな声で言った。

氣恥ずかしさを消すために言った筈なのに、何故か粉雪は余計に氣恥ずかしくなり、耳や頬がかあつと熱くなつていくの感じていた。

犬子と九十郎第23話『約束』

山を飛び谷を越え、途中4回程落ち武者狩りの連中とチャンバラをして、犬子と粉雪と虎松と九十郎の一行は、誰一人欠ける事無く目的地へと辿り着いた。

甲斐の国、武田晴信の本拠地である躑躅ヶ崎館が見えた瞬間、門番が顔色を変えた。

そして血相を変えながら館の中へと駆けていき……

「粉雪様ご帰還!! 山県粉雪昌景様、ご帰還です!!」

そんな叫び声をあげた。

途端に館中が蜂の巣をつついたかのような騒ぎになった。

そして……

「ごちゃん!! 良かった! 本当に……本当に良かった……」

大粒の涙をぼろぼろと零しながら、力一杯に粉雪を抱きしめる戦友、内藤心昌秀を見つめながら、粉雪は思った。

……ああ、この旅もこれで終わりなのかと。

「ああ……今、戻ったぜ……」

1人、また1人と傷つき、倒れていく部下達。

倒しても倒しても、逃げてでも逃げてでも追いかけてくる追手の姿。

決死の防戦、地獄の敗走劇が始まった時は、一日も早く、一刻も早く甲斐に戻りたい、主君や戦友達と会いまみえたいと願っていた筈なのに、粉雪は今、旅の終わりを落胆していた。

「さて、俺達の出番はここまでかな。じゃあな粉雪、お前との旅路、悪くなかったぜ」

「粉雪さん、元気でね」

「粉雪、マタ会オウナ」

親友同士の涙の再開を背に、犬子と九十郎が立ち去る……しれつとついて来ようとしている虎松を撒く為、全速力で立ち去ろうとする。

虎松はダツシユで逃げた程度でどうにかできるような存在ではないが。

粉雪は咄嗟に九十郎の袖を握り絞め、去るのを引き留めた。

「……どうした粉雪、まだ何かあるのか?」

「その……何だ……ええと……」

粉雪は自分が何故九十郎を引き留めたのか、理解できなかつた。

いや……理解はできていたが、その願望を行動に移してしまった自分に驚いていた。「あのっ! こなちゃんをここまで送ってくれた方ですか? すぐに宿を手配します。」

是非とも御礼を致したいので、今日はこちらで休んでいってください!」

そんな粉雪の心情を察したのか、心もまた九十郎達を引き留めにかかる。「悪いが断る、路銀も食料も正直心もとないんだ。」

急いで目的地に向かわないと途中で野垂れ死にしかねん」

……が、九十郎はバツサリと切り捨てる。

武田四天王にして、天下の副将と謳われる内藤昌秀の歓待に興味が無いと言えは嘘になる。

しかし、九十郎はこれから上杉謙信に……武田と敵対関係にある大名に士官を乞うつもりなのだ。

下手に武田家中の者と親密になれば士官を断られる危険が生じるし、情が湧けば、戦う事になった時にやり難くなってしまう。

それなら最初から粉雪を助けるなよと言いたくなるかもしれないが、助けた時点ではそこまで考えが至っていなかった。

「御礼……そうだ。御礼がしたいからさ。今夜は泊まってくれないか？」

粉雪は自分の顔が真っ赤になっているのが分かった。

胸がドキドキと高鳴っていくのも分かった。

断られたらどうしようとか、嫌われたらどうしようとか、呆れられたらどうしようとか、そういう事次から次へと浮かんできた。

「いや、だから泊まれて言われてもな……用心棒の謝礼なら十分受け取ったし……」

正直これ以上関わって情が湧くのも困るし……と、九十郎は心の中で付け加えた。

「命救つて貰つて紙切れ一枚じゃこつちの気がすまないんだよ！」

良いからこつちを助けると思つて！ なあ、頼むぜ！」

「うう……おい犬子、何とか言つてくれないか」

「良いんじゃないの？ もうすぐ日が暮れるし、出発は明日にしても」

「宿代がな……」

「一晩や二晩の宿代位なら、こちらで持ちますよ」

九十郎がどうしたものかと犬子に視線を向ける。

「そうだね……今日はお世話になつたら？」

もう昼過ぎだし、今から出発したら山の中で夜を過ごすことになりそうだよ」

「む……」

九十郎が空を見上げる……太陽は西の空に輝き、あと3〜4時間もすれば沈みそうな角度だ。

「それもそうなんだが……」

「よし！ 決まりだな！ 決まりなんだぜ！ 決まりつて事で良いな！

あたいはすぐに報告したり報告されたり当面の指示をだしたりするから、

ちよつと待つてくれ！　どんなに遅くとも日没までには戻るからな!!」
「お、おう……」

それでもなお悩み渋る九十郎を、粉雪は勢いで押し切った。

粉雪は自分の胸が高鳴っているのを感じていた、心が躍っているのも分かった。

「ハハハハ…… 悪いけど宿の手配を頼むぜ！」

それだけ言い残し、粉雪は主君・武田晴信の下へ走り出す。

この日、この時、粉雪はハッキリと自覚した。

自分は今、恋をしていると。

自分は今、一日でも、一刻でも長く、九十郎の傍に居たいと。

九十郎の声を聞き、顔を見て、臭いを嗅ぎ、できる事なら体温を感じたいと。

……自分は九十郎を好きになつてきているのだと。

……

……

……

……その日の晩。

内藤心昌秀が手配した宿の廊下を、一人のマツチヨメンが歩いてた。

髪はしつとりと濡れ、湯気と石鹸の匂いを漂わせ……手には土と返り血がへばり着い

たスコップが握られていた。

「いやあ食った食った……まさか内藤昌秀が料理上手だったとは見抜けなかった、

この九十郎の目をもつてしても。

それにまさか内藤昌秀のサインまで貰えるとは、今日の俺は運が良いな」

徳川四天王は2人しか覚えていないのに、武田四天王は全員覚えている男、九十郎。

日本史に疎いこの男が武田四天王を名を覚えたのには深い訳が……無い、全く無い。

単にこの男がファースト幼馴染と呼ぶ少女が、武田四天王の大ファンだっただけである。

一番最後まで歓待を受けるのに難色を示していた九十郎だったが、一番バクバクと食いまくったのも九十郎だ。

隣に座っていた虎松の料理を容赦無く強奪しながら……食い意地の張った男である。

「屋根と壁だけあれば上等だと思ってたが、まさか風呂まで用意してくれるとはな……」

そんな独り言を呟きながら、九十郎は用意された部屋の襖をがらつと開く。

「ありや……粉雪？　なんでお前までこの部屋に？」

一人部屋と聞いていた、部屋に敷かれていた布団の数も一人分、それなのに何故か粉雪が部屋で待っていたのだ。

「ああ、いや、その……」

「さつき飯食った時、あんまり元氣無かったな」

「ああ……あたいの部下達、無事戻ってこれたのは半数未満だったよ。

残りは消息が分からなかつたり、酷い怪我で……」

「そう……か……」

それなのに九十郎の下へ行くとき、九十郎が来るのを待っていた時、心臓を高鳴らせていた自分が少し嫌になっていた。

「ちよつと……ちよつと飲まないか……ぜ？」

「うん？　まあ、そうだな……さつきは唇を湿らす程度にしか飲んでないが……」

是か非かで問われたなら、是と答えようか」

九十郎にとって顔も知らぬ、声も知らぬ赤備え達の死はそれほど心が痛まない。

非情な男である。

「と言うかお前、妙に薄着だな。　そんな恰好で寝たら風邪ひくぞ」

しかし九十郎は、目の前に居る女性が風邪をひくのは心を痛める。

知ったからだ。

粉雪という名の少女の顔を、声を、何を喜び、何を悲しみ、どんな食べ物を好み、どんな時に怒るのかを知ったからだ。

だから九十郎は懸念する……長篠を、山県昌景が死ぬ戦いを。

「あたいなら大丈夫だぜ。 医者が驚いていたよ、完璧に手当てがされてるってさ。」

手当てが早かったから、怪我の治りも早いだろうって」

「そうか？ あんなのはただの応急措置、素人のなんちゃって医学だぞ。」

あれで完璧なら、刀舟齋は完璧・無量大数軍だ。

刀舟齋が完璧・無量大数軍なら異名は何になるんだろうか……

『完治』？ いや『完傘』？ いっそ『完チビ』？ 『完乳』はねーな」

『完屑』の九十郎がぶつぶつと独り言を言う。

完璧・無量大数軍と書いて、パーフェクト・ラージナンバーズと読む。

当然、戦国時代の人間である粉雪にとっては理解不能な単語である。

そんな訳の分からない事を言う九十郎に……

「惚れた……って、言ったら信じるか？」

粉雪はそう告げた。

「うん？ 誰が誰に惚れたって？」

「あたいが……あたいがその、九十郎に……」

粉雪は視線を泳がせ、小さな声でそう告げる。

「ははは、信じる訳ねえだろ、俺のどこに惚れる要素があるんだよ」

粉雪の告白を九十郎が笑い飛ばす。

自分は醜男のマッチョマンで、利己的で知恵の浅い屑、取柄と言えば神道無念流位……山県昌景のような歴史上の偉人が、価値のある女が惚れる筈がないと。

「色々考えたんだけどな、あたいつて誰かを守った事は結構あるけど、だれかに守られた事つてあんまなくてさ……」

姉上は居たけど、あまり話はしなかつたし、何の相談も無しに謀反を起こすし……」

「1度や2度守った程度で女が男に惚れるものかよ、どんなチヨロインだ」

「あたいつて、魅力……無いか？」

卑怯な聞き方だと、粉雪は思った。

面と向かつて魅力が無いかと聞かれて、はい貴女には魅力がありませんと答えられる人間がどれ程居るだろうかと。

「もうちよつと胸がでかければな……」

……だから貴様は九十郎なのだ。

「もう少し控えめな胸にも優しさを分けてくれなんだぜ」
「知らんのか粉雪、でっばいには……」

「夢と希望だろ。そんでちっばいには嘆きと絶望」

「ありゃ？ 俺この台詞粉雪に言った事あったかな……」

「へ……」

そう言われて、粉雪は自分が九十郎の台詞を聞いた場面を思い出し……あの日見た光景も、翌日の晩に見た淫夢も思い出し……

「いいいい、いやいやいやいや!! ななな何でも良いんだぜ!!」

「気にすんなぜえっ!!」

「……お、おう」

顔を真っ赤にしてガクガクと九十郎の首を前後に揺さぶる。

脳裏に浮かぶのは犬子と九十郎の情事だ。

「……話を元に戻そうぜ」

「お、おう」

たっぷり10分は混乱した挙句、粉雪は肩で息をしながらそう提案する。

「……で、俺達何の話してたっけ?」

「忘れんなだぜ! あたいが九十郎に惚れてるって話だよ!」

「ははは、ナイスジョーク。 山県昌景が俺なんぞに惚れる訳がないだろ」

「山県昌景は関係ないだろ」

「あるんだよ、俺にとつては非常に重要な事なんだよ。」

山県昌景は……何と言うか、結構重い名前なんだ」

……山県昌景みたいな歴史上の偉人が、武田を支えた猛将が、俺のような屑を好きに

なる筈がない。

山県昌景のような価値のある女が、自分のような価値の無い男に惚れる筈がない。

九十郎は相変わらず、恋愛方面ではひたすらネガティブであった。

「なら……ならさ！ 甲斐に残っちゃくれないか？」

今回の一件で人手不足なんだ、九十郎と犬子みたいに、

腕が立って信用できる奴が一人でも多く欲しいんだ！ だから……」

「悪いが断る」

「九十郎達、浪人なんだろう？ 仕官先を探して旅をしてるって、だから……」

だから、さ……ああそうだ、待遇ならあたいが保証するぜ、織田に仕えてた頃よりも

……」

「もう一度言う、断る」

……取りつく島が無かった。

冗談じゃない、沈むと分かり切っている船に乗せられてたまるか。

武田は長篠で大敗して滅ぼされるんだぞ、そんなのに巻き込まれたくねえよ。

九十郎はそんな事を考えている。

そして同時に……粉雪に死んでほしくないよなとも、思っていた。

案外女々しい男である。

「粉雪は……」

……粉雪は武田から離れる気は無いのかと続けようとした。

しかし、九十郎は最後まで言葉を続けられなかった。

山県昌景が……飯富虎昌が謀反した時も、自らは武田信玄への忠義を捨てなかった武田の柱石が、そう簡単に武田を捨ててる筈が無かった。

そして九十郎は、粉雪に武田から離れてほしい理由を説明する事もできなかった。

「死んだら本気で悲しくなるだろうなって程度には、俺は粉雪を気に入ってるぞ」

……結局、九十郎はそれを伝えるのが限界だ。

「なら……なら、もう少しだけ……もう少しだけで良いから、傍に……」

ああ、女々しいな……そう思いながら、粉雪は九十郎に傍にいてほしかった。

そう願わずにはいられなかった。

「……悪いが断る」

……だがしかし、九十郎は頑なだった。

犬子よりも先に粉雪と出会ったならば、九十郎が身軽な身であったならば、あるいは粉雪の望みに応じていたかもしれない。

武田の滅亡という未来を覆すべく、全力で抗っていたかもしれない。

だがしかし、今の九十郎には犬子がいる。

失敗すれば自分だけではなく、犬子も死ぬ……それが九十郎を慎重に、臆病にしていた。

「そう……か……」

粉雪は俯いた。

俯いて、何も言えなくなった。

少女の瞳には、涙が浮かんでいた。

……九十郎にはマジックワードがある。

どんなに嫌がっていても、あつという間に言う事を聞かせるマジックワードが。

九十郎のファースト幼馴染はそれを知っている、知つての上で利用している。

そして手伝わせた、反射炉造りも、スクーナーも、パン焼き窯も。

粉雪がもし、九十郎のマジックワードを知っていたのなら、それを口に使っていたのなら、

九十郎は二つ返事で甲斐に残っていただろう。

そんな九十郎のマジックワードが判明するのは、もう少し後の事である。

……

……

……

そして翌朝。

「じゃあ今度こそお別れだ、元気でな粉雪」

「また会いましょうね、粉雪さん」

「ああ、またな」

言葉とは裏腹に、できれば再会したくないなど2人は思っていた。

これから長尾景虎に……粉雪の主君、武田晴信と血で血を洗う抗争を続けている者と会い、士官を願い出るつもりなのだ。

再び会う事があるとすれば……たぶん戦場だ。

「粉雪」

「ああ、何だぜ？」

名前を呼ばただけで、粉雪は自分の顔がぱあつと明るくなるのが分かった。

暗く重い心が急に軽くなる気分になった。

現金な奴だな……と、粉雪は少し自己嫌悪をした。

「粉雪が危なくなったら、その時は助けに行く……約束する」

九十郎は唐突にそう告げた。

脳裏に浮かぶ光景は、前の生で見た歴史物のドラマ……長篠の戦いで、織田の鉄砲隊に射殺される山県昌景の姿だ。

九十郎の記憶が正しければ、その時織田の鉄砲隊を指揮していたのは前田利家だ。

粉雪が全身に銃弾を受け、倒れ伏す姿を想像し……九十郎は暗い気分になった。

「武田に仕官する気は無いがな、それでも粉雪がヤバいって思ったら助けに行きさ。」

一回助けて後は放置つてのは後味が良くねえし……

まあアレだ、アフターサービスつて奴だな」

この男は、放置すると死にそうな奴には案外有情である。

会った事の無い武田晴信や他の四天王に関しては、迷わず成仏してくれとか考えているが。

「あふたあさあびすつてのは良く分からねえけど……でも、ありがとな。」

心強いし、嬉しいぜ」

九十郎の心中を知らず、史実における山県昌景の末路も知らず、粉雪は嬉しそうにはにかんだ。

現金だなあとと思ったが、にやける口元を留める事はできなかつた。

「それと、こいつはお前にやるよ」

九十郎がそう言つて、粉雪の頭に何かを被せた。

「こ、これ……何だぜ？」

「魔理沙っぽい帽子、夜番をしている間暇だったから、作つてたんだ。」

お前に似合うかもなつて」

自分のために用意した……ただそれだけの事なのに、粉雪は飛び上がりそうになる程に嬉しかった。

世間一般に人々にとって、魔理沙っぽい帽子は奇怪な形状の頭巾でしかないが、粉雪にとつては何よりも嬉しくて、尊くて誇らしい『特別』である。

「だ、大事に……する……ぜ……」

気が付けば粉雪は、涙を零していた。

緩む頬を引き締める事はできなかった……消えると思っていた繋がりが、惚れた男との繋がりが途絶えなかった事が嬉しかったのだ。

「約束だぜ……本当に約束して良いんだな？」

あたいが危なくなったら助けに来てくれるんだな？」

「ああ約束だ、必ず助けに行くよ」

そう言つて九十郎は帽子ごと粉雪の頭を撫でる。

粉雪の方が年上なのだが……それを気にする者は誰もいなかった。

「じゃあ、元気でな粉雪」

「ああ、またな……また会おうぜ、九十郎」

そして歩き出す、犬子と九十郎が。

今度は誰も引き留めない、そのまま立ち去る。

その2人の姿を、粉雪はいつまでも見送り続ける……

「九十郎、そんな事約束しちゃって大丈夫なの？ 犬子達ってこれから……」

犬子と九十郎は、これから武田と血みどろの抗争を繰り広げている長尾に仕官するつもりだ。

「どうにかなるだろ」

九十郎はノープランだ。

ノープランだが、長篠の戦い……織田と武田が戦い、武田が惨敗し、山県昌景が死ぬ戦いが起こりそうになったら、どんな手を使ってでも粉雪一人は助け出すつもりであった。

「まあ犬子としては九十郎のそういう所も含めて好きになったんだからさ。」

その時は手伝うよ、もちろん」

「ありがとな犬子、悪いが頼りにさせてもらおう」

そして2人は旅を続ける。

長尾景虎の居る越後へと……

その頃、虎松は躑躅ヶ崎館の片隅に首から下を埋められていた。

後頭部には涙目のルカのようなスコップ型のへこみ……下手人は九十郎である。

虎松は殴って埋めた程度でどうにかできるような存在ではないので、九十郎の涙ぐま

しい努力は単なる徒勞に終わるのだが……まあ、いつもの事である。

去りゆく犬子と九十郎を見送りながら粉雪は思った、犬子が羨ましいと。

粉雪は気づいていない、犬子と粉雪の立場は似通っている事を。

犬子も気づいていない、犬子と粉雪の立場は似通っている事を。

山県昌景だから助けた、山県昌景だから愛せない、ただの粉雪とは思えない。

前田利家だから助けた、前田利家だから愛せない、ただの犬子とは思えない。

犬子と九十郎は何度も何度も体を重ねているが、その度に九十郎の心に何か黒いものが積み重なり、のしかかってきている事にも気づいていない。

秋月八雲によって作られ、新田劍丞によって扱られる九十郎のトラウマにも気づいていない。

自分のような屑が前田利家に愛されるはずがないと思っっている事にも気づいていない。

犬子がそれに気づくのは、九十郎の爆弾が派手に爆発した後の事である。

犬子と九十郎第24話『あっぱれ！天下御免』

……大江戸学園。

「……九十郎、見つけた」

広い広い大江戸学園の敷地内を当てもなく徘徊する不審者の傍らに控える剣魂から、そんな少女の声が出てくる。

がらがらどん3号とは九十郎が持つ山羊型の……トロールすらもバラバラに引き裂けそうな程にマツチヨな山羊型の剣魂の名だ。

がらがらどん3号は、がらがらどん1号、がらがらどん2号と通信を行う事ができるのだ。

「場所はどこだ？」

「がらがらどん1号に誘導させる」

「坦庵には？」

「もう連絡した」

「わかった、現地で合流しよう」

「……状況は切迫している、急いで」

「おうよおっ!!」

マツチヨが走る、ダツシユで走る、ドタドタと音を立て、土煙を舞わせながら走る……見る人が見れば通報案件であるが、今日の九十郎は珍しく学園の正義と平和のために走っている。

大江戸学園……ニホンの誇るトップエリート共が、その有り余る才覚を全力でゴミ箱にダンクシュートして、俺はここだけ一足お先と、光の速さで明後日の方向へダツシユする魔境である。

今日も今日とて、大江戸学園に弱者の嘆き、悪漢達の高笑いが響き渡る。

そして……

「太陽ジャンプ!」

そして馬鹿が出た。

馬鹿3名が無駄に洗練された無駄の無い動きで同時にジャンプし、空中で交差し、悪漢達の近くに揃って着地する。

「バルイーグル!」

どじゃ〜ん! と、本人的にはカッコイイポーズを決める少女は、大江戸学園甲級二年は組、武田光留。

情報収集に特化した山羊型の剣魂・がらがらどん1号の使い手であり、九十郎が

ファースト幼馴染と、坦庵が我が妹分と呼ぶ少女……好きなスーパー戦隊はマジレンジャー。

「バルシャーク！」

ノリノリでポーズングを決める少女は、大江戸学園甲級三年い組、江川坦庵。

情報分析に特化した山羊型の剣魂・がらがらどん2号の使い手であり、九十郎がセカンド幼馴染と呼ぶ少女……好きなスーパー戦隊はジュウレンジャー。

大江戸学園生徒会執行部員、歴史ある名家の生まれである。

本名は別にあるらしいが、あまりにも女の子らしくないという理由で、名乗りたがらない。

「バルパンサー！」

きしよい位にキレのある動きでポーズングを決めるマッチョは、大江戸学園甲級二年い組、斎藤九十郎。

戦闘に特化した山羊型の剣魂・がらがらどん3号の使い手、好きなスーパー戦隊はゴーオンジャー。

坦庵からは我が弟分と呼ばれている。

そして人々はこの3人……光璃と坦庵と九十郎を、大江戸学園のジェットストリーム馬鹿と呼ぶ。

「輝け、太陽戦隊……」

「サンバルカンッ!!」

2人の少女達と1人のマツチヨメンがビシッとポーズを決めた瞬間、光璃のスマホから太陽戦隊サンバルカンのオープニングテーマが流れ出す。

悪漢達はぼか〜んとしている。

この瞬間、シリアスさんは爆発四散したが、大江戸学園ではよくある光景である。

なお、このポーシングの意味は全く無い。

やりたくなかったからやっただけ、ノリと勢いに身を任せただけである。

「やはり3人ではポーシングの幅が狭まる。」

サンバルカン、ハリケン、アバレン、ゴーバス……」

「ゴーンもいけるだろ」

そして光璃と九十郎は悪漢達をそっちのけでひそひそと相談を始める。

シリアスさんに対する熱い死体蹴りである。

「……盲点だった、確かにゴーンジャーも3人戦隊、ただし第1話だけ」

「でもやっぱ5人揃えてえよな……」

「いつそ詠美と長谷河あたり巻き込んで5人戦隊やってみるか?」

火盗長官の威厳とか、執行部の威光とかが粉微塵になつて死ぬ。

「ポジションは？」

「どうせお前からレッドとブルーしかやりたがらないんだろ。」

消去法で範人と軍平じゃねえのか、断られたら3人だ」

その場合、マツチヨな大男がゴーオンイエローの台詞を喋りながらポージングをする、ある意味阿鼻叫喚の地獄絵図が権現するのだが、この男はそこまで頭が回っていない。

九十郎は今生でも、戦国時代に転生した後でも基本考え足らずなのだ。

後日、光璃はスカート姿のまま、転校してきた秋月八雲の前でゴーオンレッドの名乗りシーンを再現し、下着を思い切り覗かれて赤面する……最早恒例行事である。

「我が妹分、そして我が弟分よ、戦隊談義はその位にして前を向きたまえ。」

向こうはやる気のようにぞぞ

バルシャーク……もとい担庵がそう告げる。

先程ノリノリでバルシャークのポージングを決めた事からも分かる通り、この少女も相当な戦隊好きである。

「て、てめえら一体何の用でい！ こっちは今重要な話をだな……」

「た、助けてください!! こいつら酷いんですよ！ 全く身に覚えがないのに、

お前は金を借りたまま返していないんだって急に押しかけてきて！

返せないなら店をこっちに明け渡せなんて言い出すんですよ!」

「うるせえ!! 借用書にはてめえの印が押されてるんだよ!」

今日中に返せ! さもなきやあてめえの店は俺達のもんだ!!」

「そ、そんな……苦勞して苦勞して、やっと経営が軌道に乗ってきたというのに……
だいたい、たった一日でそんな大金を用意できる訳がないじゃないですか!

それに私はお金を借りた覚えなんかありません!」

「だつたらこの借用書にある店の印はなんだつてんだ!! ああんっ!!」

「ひいつ! そ、そんな事を言われても……知らないものは……」

悪漢共のリーダーらしき男が凄み、怒鳴り散らし、哀れな店主が脅えて縮む。

「きみ、いいからだしてるね。 練兵館にはいらんかい?」

そんなやり取りを一切無視して、九十郎はおもむろに勧誘を始めた。

悪漢達も、哀れな被害者も、啞然とした表情で互いに顔を見合わせる。

「お、お前……もしかしてふざけてるのか? おちよくつてんのか?」

「ふざけてねえしおちよくつてもいねえよ。」

そんな糞みてえに下らねえ事に時間と体力使つてる暇あつたら、

神道無念流で健康的な汗を流そうぜ。 朝のランニングとか気分良いぜ!」

常人にとつてはおちよくつてるとしか思えない台詞だが、九十郎は100%マジで

言っている。

「入る訳ねえだろ！ 頭にウジでも湧いてんのか!?」

ウジが腹を壊しそうな話である。

「今なら入館者全員サービスで、手作りのお皿をプレゼントするぞ。

もちろん見学や体験入館も大歓迎だ」

「是非とも入館しないでくれたまえ、余った皿は私が貰う事になっているのだ。

我が弟分が焼いた皿は実に来客が良くてね、結構人気があるのだよ」

「坦庵、物事は正確に言うべき。坦庵が半分、光璃が残りの半分」

作り過ぎた新弟子用の贈答品の処理は、いつだつてこの2人の役割だ。

毎回それなり実用性の高い物が貰えるため、質屋に持っていけば小遣い稼ぎになる。

「てめえらに渡す皿なんて一枚も残らねえからな!!」

神道無念流なめんなよコンチクショウ!!」

強がってはいるものの、毎回毎回半分以上が余り物になる。

基本的に楽観的で考え足らずのため、いつもいつも多く作り過ぎるのだ。

「……いい加減にしろおっ!!」

用がねえならとつとと帰りやがれ!! 見せもんじゃねえんだぞ!!

……当然、怒らせる。

「用ならまだあるさ……てめえらは文書偽造、詐欺、恐喝、不動産侵奪、

強盗致傷の容疑で指名手配がされている」

だがしかし、怒っているのは九十郎も同じだ。

先程神道無念流をやらないかと勧誘したのは、心置きなく殴れる相手かどうかを確認する意味もあつた。

数多くの被害者を出した事に対する義憤と、何の気兼ねも無く神道無念流をやれる時間を減らした事に対する私怨を、念入りに叩きつけても構わぬ相手かを確認していたのだ。

「つまり暴れすぎたという訳だ、火盗が動く程にね。

叩けばまだまだ埃が出そうだ……と、長谷河殿も言っておられたが」

「今日の俺達はパートタイム火付盗賊改方だからな、てめえらを探し回つてた訳だ」

「そこは外部協力者と言ってもらいたいね、我が弟分よ」

「ジャツジメントですの」

「妹分、これ以上シリアスさんに蹴りを入れるのはやめて差し上げろ」

3人の馬鹿共が刀を抜く。

「学生であるが故に歯止めがされた刀であるが……学生同士の喧嘩では十分すぎる凶器だ。」

「……ふん、馬鹿共が、この人数に勝てるでも思ってるのかよ」
悪漢達もまた刀を抜く。

その数20名……おおよそ7倍の戦力差。

「関係無い、そしてシリアスになるだけの理由も無い。

既にそこは風林火山の射程距離……全員纏めて病院送りにできる位置、一人も逃さな
い」

「デリート許可だ、やっちまえ光璃」

「ロジャー、武田家御家流……風林火山。裁くのは光璃の『スタンド』だ」

その瞬間、光璃の背後に半透明の騎馬武者達がずらりと並ぶ。

武田家御家流・風林火山……それは戦死した武田の武人達の魂を呼び出し代わりに戦
わせる、やや他力本願なサイキックパワー的存在である。

また他人の身体能力を底上げする、やや他力本願な小技もできる。

そう、武田光璃は超能力者なのだ。

開幕風林火山ぶっぱ。

討ち漏らしは九十郎が処理。

担庵と3匹のがらがらどん、見てるだけ。

結局、高々20人でこの3人に戦いを挑むのは無謀であったという事だ。

「ゴツチュー、これにて一件コンプリート」

「大江戸学園は日本晴れってか？」

「違うないね、私としてはお風呂でのんびりといきたい所だ。

我が妹分よ、長谷河殿には連絡をしたのかね？」

「抜かりはない」

20人の勇敢な悪党共は全員纏めて火盗に引き渡され、謝礼として九十郎は火盗の新人りに剣術を教える権利を得て、ホクホク顔になる。

「しかし我が弟分よ、こんな苦勞をしよい込んで、

その対価が剣術を教える事と聞いたが、君は損しかしていかないのではないかね？」

「神道無念流を学園中に広めるためにやってるんだよ。

今年の剣術指南は柳生新陰流に奪われちまったが、

来年こそは柳生も、千葉も、桃井も抑えて、神道無念流が天下を獲るのさ」

追記、斎藤九十郎は剣術馬鹿である。

神道無念流だけやっていれば幸せな男である。

「ありがとうございます！ 本当にありがとうございます！」

皆様に助けて頂けれなければ、大事な店が奪われてしまいました。

本当になんと御礼を申し上げれば良いのやら」

「御礼してくれるってんなら、ポスター貼らせてくんねえか？ 練兵館は新弟子大歓迎、今なら無料体験コースもやっていますって感じのヤツなんだけどよ」

基本的に神道無念流をやっていたら幸せな男である。

そんな九十郎に転機が訪れる。

そんな九十郎に、一生癒える事の無い深い深いトラウマが刻まれる。

秋月八雲が転校してきたのだ。

……

……

……

それから少し時は流れ……練兵館強化合宿。

毎年行われる御前試合に向けて、練兵館メンバーのレベルアップを図るために毎年行われるこの行事に、徳河詠美が参加していた。

本土……江川担庵の実家、伊豆韮山の地で、詠美と九十郎が竹刀を構え、相対する。

「……先に言っておくがな、神道無念流は力の剣だ。

今まで詠美が積み重ねてきた戦い方とは合わない可能性が高い」

「承知しているわ、それを承知の上で参加したの。

力の剣を理解するには、自分自身が力の剣を修めるのが一番有効。

そして大江戸学園の中で、力の剣を教えるのが一番上手いのが貴方、だから来たの」

「嬉しい事を言ってくれるじゃないか。吉音に勝ちたいか？ 詠美」

「勝ちたいわ、狂おしい程に」

「御前試合まであまり時間が無い、中途半端な修行じゃ逆効果になりかねんぞ」

「全力でやって頂戴、私も全力でついて行くから」

「……手加減なしでやって良いのか？」

「時間が勿体無いわ、同じ事を2度も言わせないで」

詠美の鬼気迫る表情を見て、九十郎はにかあ〜と笑みを浮かべた。

「そうだよこれだよ、俺はこういうのがやりたくて神道無念流をやってるんだよ、九

十郎は心の中で何度も何度も頷いた。

口元がニヤけるのを止められなかった。

「光璃、担庵、俺は今回の合宿中、詠美につきつきりになる。

他のメンバーの面倒は任せる」

道場主のくせして弟子を他人に丸投げする恥知らずな男がいた。

「承知したよ、我が弟分。私がまっとうな戦い方を……」

「光璃が武田家に代々伝わるダーティファイトを仕込む。目指せテリーマン越え」

「頼んだぞ2人共。西居には悪いが、今年の優勝も練兵館で頂く。」

そして神道無念流の知名度をガッツリ稼ぐのだ。

ああそれと、八坂がトンチキ戦法に走らないように注意して見張っててくれよ」

「任せてくれたまえ」

「頑張る、ご褒美のために」

なお、担庵と光璃の努力も虚しく、八坂平和はトンチキ戦法に走って自爆した。

そして御前試合一騎打ちの部は、詠美と吉音が戦っている時に起きたアクシデントにより中止。

九十郎は剣を振るう機会すら与えられなかった。

それを聞いた九十郎はこう呟くのだ『解せぬ……』と。

「やるぞ詠美、今日の俺は徳河詠美専属トレーナーだ」

「お願いしますー！」

そして詠美にとつては地獄のような2泊3日が、九十郎にとつては至福の2泊3日が始まる。

「新弟子は筋トレと基礎体力からつてのが俺の流儀だが、今回は時間が無いので省く！」

今日は体力の限界までひたすら打ち込むから、全部躰すか受け止めろ！」

「はいっ！」

宣言通り、九十郎は風呂とトイレ以外の全ての時間を費やして詠美に力の剣を叩き込

んだ。

初日は力の剣の防ぎ方、二日目は力の剣の振るい方、三日目は立ち回り……僅か三日間の特訓であつたが、九十郎は一切手抜きをせずに教えた。

詠美も全身全霊を傾けて学んだ。

指導は訓練前後のストレッチ、マッサージのやり方、近代栄養学に基づいた食事の選び方、調理方法まで及び、詠美をちよつとだけ健康にさせた。

御前試合当日の九十郎は、もしも詠美が次期將軍になつたら、コネクションフル活用して神道無念流を広めてやるぜ、げっへっへっへっへ……とか下種な事を考えていたが、少なくとも合宿中は詠美に剣を教える事だけを考えていた。

「自分よりもパワーのある奴を相手にする時は、徹底的に力比べを避けるべし。

無理して相手の土俵で勝負しても疲れるだけだからな。

詠美の場合、できるだけ力を入れずに受け止めて、

受け止めた瞬間に半歩退くと上手く体力の消耗を抑えられると思うぞ」

「は……はい……」

……そして日がどつぷりと暮れた頃、一日中九十郎から、遠慮無し手加減無し容赦無し
の攻めに晒され、詠美の息が大きく乱れていた。

「でだ、俺が見る限り吉音はお前よりも体力がある。」

チャンバラ経験の数が段違いだし、飯もお前より何倍も食ってるからな。

試合が長期化したら、詠美だけが息切れ吉音は元気一杯という状況も普通にある。

そういう場合にどう対応すべきか？」

「長期戦にさせない事ね」

「そうだ、それが最善。しかし今回は百戦錬磨の吉音が相手だ、

腕前が拮抗している以上、それをさせてくれない事も想定しておくべきだと俺は思う」

「ならばどうすれば良いの？」

「俺が詠美の立場なら、いつそ相手を先に疲れさせる。

人間、自分の長所だと思っている部分を狙われるとは考えないものだから、

嵌ればかなり有利に戦える筈だ。

俺が見る限り、吉音は戦っている時にあまり合理性とか、効率とか、

ペース配分とかを考慮していないように思えるんだ、だからこっちは徹底的に……」

「お話し中の所悪いが、詠美殿、弟分、追加の経口補水液を持って来たぞ」

「おう、悪いな」

垣庵が2Lペットボトル入りの経口補水液を担ぎ、光璃が水の入ったバケツ、近くの

コンビニで買ってきた花火詰め合わせを持ち、詠美と九十郎の下へとやってきた。

「九十郎、そろそろアレの時間」

「ありや、もうこんな時間だったか。」

「すまん詠美、俺とした事がちとオーバーワーク気味にやっちゃった。」

「少し休憩を入れるぞ」

「え、また休憩なの？ もう御前試合まで時間が無いのよ」

「根性出して練習多くすれば強くなれるなんて考えてる間は絶対に勝てんぞ。」

「言いたかないが吉音はお前より何倍も何十倍もチャンバラを経験している。」

「経験値で張り合っても無駄だ、さっき言っただろ、相手の土俵に付き合うなって」

「でも……」

「詠美殿、我が弟分を信じたまえよ。」

「弟分は剣術馬鹿だが、剣術を教える事にかけてはそうそう外さんよ」

「まあ、俺は神道無念流だけやってれば幸せな男だからな」

「自慢げに言うが、他人に自慢できるような事では断じてない。」

「九十郎、あれやって」

「はいはい、毎年恒例のあれな。こっち来い」

「うん」

九十郎が草むらの上にとっかど座り込み、胡坐かく。

そして九十郎の足を座布団代わり、胴体を背もたれ代わりに、光璃がちよこんと座り込んだ。

「光璃、方向はどっちだ？」

「あつち」

光璃が指さす方向に……一見すると何も無さそうな夜空に担庵と九十郎が視線を向ける。

「詠美殿、休憩がてら君も向こうの空を見ていと良い。面白い物が見られるぞ」

「向こうに……？」

詠美もまた空を見上げる。

「5秒前……3……2……始まるぞ」

担庵がそう告げる……その直後、ドンッ！ という足に響く破裂音がして、夜空を彩る大輪の花が現れた。

「た〜まや〜」

「か〜ぎや〜」

光璃と九十郎が空に向かって賞賛の声を上げる。

「……花火？」

「その通り。如何かね、練兵館強化合宿の恒例行事は」

担庵が自慢げに笑みを浮かべていた。

「発射装置は担庵が組んだんだよな」

「いや、今年は花火そのものの作成にも関わった」

「おいおい、花火の密造は犯罪だろうに」

「ビールの密造をやっている弟分には言われたくはないな」

「やれって言い出したのは光璃だよ」

「その言い訳が通じるならば私も無罪になるな。最初に言い出したのは我が妹分さ」

担庵と九十郎がゲラゲラと笑い合う。

頭の上で自分に全責任を擦り付ける相談がされているというのに、光璃は瞳を輝かせて次々と打ち上げられる花火だけを見つめていた。

「……詠美」

そんな中、光璃が独り言でもしているかのように詠美の名前を呼んだ。

九十郎の上に座ったまま、小さく手招きをした。

「武田さん? 何か……」

詠美が光璃の手が届く距離に近づくと、突如詠美の手をぐいと引つ張り、強引に自分の隣……九十郎座布団に座らせた。

「きゃ!? ちょっといきなり何をするんですか!？」

「座って、少し話がある」

「おいこら光璃、2人はキャパオーバーだ、重いし狭いからどくかどかせるかしてくれ」
九十郎が文句を言う。

この男の膝の上はかなり窮屈な状態になっていた。

「すぐに済む、我慢して」

「へいへい、分かったよ……」

九十郎が光璃と詠美を乗せたまま、夜空を見上げる。

「……負けても、死ぬ訳じゃない」

そして光璃はそう告げた。

視線は夜空を彩る花火に向けたままだが、その言葉は確かに詠美に向けたものであった。

「どういう意味ですか？」

「言った通りの意味、これは負けても誰も死なない戦い。」

勝つても負けても詠美の人生は続く、吉音の人生も続く」

「だから吉音さんに勝ちを譲れとでも言うつもり？」

「人というのは、成功や勝利よりも失敗から学ぶことが多い。」

負けても死なない、負けても人生が続くというのは、物凄く恵まれている事。

物凄く贅沢な事……そんな世の中を求めて、誰もが血反吐を吐く場所も存在する、誰もが血反吐を吐いていた時代も存在した」

「貴女に何が分かるんですか……」

「親に認められたいという悩みは、光璃にとっては贅沢な悩み。

光璃にそんな事を考えている余裕は無かった」

その言葉は、平和な時代を生きる武田光璃としての言葉ではない。

戦国時代に生まれ育った、武田晴信としての言葉であった。

「この場所は光璃の特等席。

この場所から花火を見ると、いつもの3倍花火が奇麗に見える。

そしてポップコーンとコーラ、幸せな気分になれる。

最高の贅沢……豊臣秀吉も、徳川家康も味わえない物凄い贅沢」

「太るぞ、妹分」

「今日は沢山運動した、大丈夫」

「花火なんてどこで見ても同じよ」

「そうじゃない、詠美はとても重要な事を見落としている。

とても重要な事から目を逸らしている……視界に入れないようにして無理をしてい

る。

負けても死なない、負けても人生が続く、でもそれはそれとして勝利は貰えば良い。
ゲラゲラ笑って馬鹿になれば良い、馬鹿になつて馬鹿っぽく戦えば良い。

この学園はそれが許される場所……とても幸せな場所、恵まれた場所」

光璃はそれだけ言うと、黙って花火鑑賞を再開した。

詠美はその言葉の意味を半分も理解できなかつたが、それは光璃なりの激励の言葉であつた。

犬子と九十郎第25話『大江戸学園御前試合』

大江戸学園最強は誰か？

学園の者に尋ねると、ある者は『柳生十兵衛』と答える。

ある者は『眠利シオン』と答える。

ある者は『鬼島桃子』と答える。

斎藤九十郎は『俺』と答える。

しかしその後、全員が全員こう付け加える。

『何でもアリなら武田光璃が最強だ』と。

なお、光璃は『仲村往水』と答える。

『奴隷は持たざる者。 猶予のない虐げられし者。』

しかし、その何も持たぬ……劣悪な環境であるがゆえに王を撃つ』

……だそうだ。

褒めているのか貶しているのかまるで分からない理由だが、光璃的には……戦国武将・武田信玄としては最大級の賛辞だ。

担庵も九十郎も光璃の発言を丸つきり理解できかったが、光璃が御前試合乱取りの部

に参加するにあたって、一番警戒していたのは仲村往水であった事は事実である。

最も、当の本人が乱取りに参戦した事は一度も無いが。

御前試合当日、乱取りの部……一騎打ちの部に参加できない生徒でも祭りに参加できるようにという配慮から設けられた、学園都市全体を使った情け無用のサバイバルマッチ。

武田光璃と江川担庵、そして200名の練兵館門下生が参加していた。

そして斎藤九十郎は不参加……強すぎるので一騎打ちの部に回されているのだ。

「我は武田信玄、明日この世界を肅正する」

戦国時代で武田光璃晴信が言いそうにない事コンテストを開催したら、一等賞を狙える台詞が飛び出した。

愛菜もドン引きするレベルのドヤ顔であった。

台詞はアレだが、光璃は気合十分だ。

勝利の栄冠を掴むため……ではなく、優勝後のご褒美を得るために。

「恰好つけている所に悪いが、どうするかね我が妹分よ。

ベトコントラップ殺法は今年から禁止になったぞ。

ナチスガス室殺法は昨年禁止になったし、水水攻め殺法は一昨年に禁止になった、それに長篠三弾撃ち殺法は3年前から禁止だ」

戦国生まれの人間はやる事がエグい。

「あれも駄目、これも駄目、大江戸学園は融通が利かない」

「妹分が出場禁止になつていないだけ有情だと思つて、私はね」

光璃を出場禁止にさせないよう、執行部員としての地位と権限とコネと裏取引をフル回転させている少女がぼそりと呟く。

普通の神経の持ち主ならば、剣術大会に銃火器を持ち出した4年前の時点で永久出場停止にする。

暴徒鎮圧用のゴム弾を使用し、死人が1人も出なかつた事を考慮したとしてもだ。

「仲村往水が参加していませんのであれば問題は無い、今年も練兵館が勝つ」

「仲村殿は甲級三年、出場資格は元々無いのだぞ。」

それにそもそも、言いたくはないが仲村殿に王を撃つ甲斐性があるのかねえ……

さておき、勝算はあるのかね妹分よ？」

「小細工は不要、今年は普通に勝つ」

光璃は武田家に伝わる軍配……ではなく、手作りの扇を天高く掲げる。

大江戸学園の入学式の日には九十郎から贈られた、何の仕掛けも由来も無い普通に扇

……17年の人生で山のように増えた光璃の宝物の一つだ。

光璃は入学してから毎年毎年この乱取り試合に参加しているが、試合中に刀を抜いた

事は一度も無い。

そもそも光璃はがらがらどん1号を使う時以外に刀を抜いた時は無いのだが。

何にせよ、ただの一度も刀を抜く事無く、ただの一度も敗走する事も無く、光璃は練兵館チームを勝利に導き続けている。

なお御前試合乱取りの部は剣術大会である、一応は。

「魚鱗の陣！」

光璃がそう告げた瞬間、200名の練兵館門下生が瞬時に、淀みなく迷いなく動き、一つの陣形を形作る。

かつて武田信玄が徳川家康を破った際に使用したといわれる陣形。

どの部署が敗れてもすぐさま後詰が穴を埋め、決して本陣に近づけぬ必勝の陣形……それが魚鱗の陣である。

「さあさあ！ 今年の練兵館勢はどんな卑怯殺法を披露するのか!？」

今年も練兵館勢が大人げない戦い方で勝利を収めるのか、収めてしまうのか!？
それとも番狂わせが起こるのかあっ!？」

大江戸学園御前試合、乱取りの部が今スタートだあっ!!」

実況役を任せられている比良賀輝がノリノリでマイクを握る中、乱取り戦開始の合図が学園中に響き渡る。

そして……

「決着ウウー……ッ!! 御前試合乱取りの部は練兵館勢が優勝を飾ったあつ!!」

大人げないぞ神道無念流! そこまでして勝ちたいか練兵館!

今年も番狂わせは起きず、練兵館勢の5連勝に終わったあああああ……ッ!!」

武田信玄大勝利! 希望の未来へレディ・ゴーツ!!

「やったぜ」

練兵館勢以外の参加者が全滅した後、練兵館勢同士で行われた優勝決定戦で普通に負けた武田光璃が、九十郎に向かってぶいサインを送る。

団体による談話が禁止されていないこの乱取り戦、戦国時代に生まれ、歴史に名前が残る程に戦上手であった武田信玄に勝てる者はどこにもいない。

それこそ雪合戦にナポレオン・ボナパルトを投入するようなものである。

誰も勝てない、誰も止められない、誰も敵わない……王は平民よりも強いが故に。

結局、武田光璃が出場停止になっていない時点で、武田光璃を擁し、しかも集団戦が可能な程度に組織力がある練兵館の勝利は約束されているのだ。

仲村往水が参加していれば……捨て身の奴隷が王を刺す奇跡が起これば、あるいは大番狂わせも起きる可能性もありうるが、往水は今年も乱取り戦に参加していない、そもそも興味を抱いていない。

唯一集団戦を挑める西居葉蔵率いるグループは、数を頼みに馬鹿正直に突撃し、光璃の包囲殲滅作戦に見事に引つ掛かって磨り潰された。

秋月八雲とじごろう銀次は武田家御家流・風林火山の餌食となった。

そして佐東はじめは参加を見送った。

リスクとリターンが釣り合っていないと判断したからだ。

甲級3年の最上級生は乱取り戦に出場できない決まりになっていたため、光璃が出場できるのは今年で最後……大江戸学園にとって悪夢のような5連勝であった。

そして翌日からは一騎打ちの部が始まる。

選ばれた人間による演武のようなものとされているが……神道無念流の人気と知名度アップを狙う九十郎にとっては何よりも大事な試合だ。

「よくやった光璃、一騎打ちの方は俺に任せておけ」

「観覧席から応援する。頑張って、九十郎」

パアン！ と、光璃と九十郎がハイタッチを交わす。

なお、一騎打ちの部に優勝だの勝ち抜きだのといった概念は存在しない。

実力の近い者同士がマッチングされ、戦うだけだ。

「九十郎、あれやって」

光璃がそう言って、首を傾げるように頭を向ける。

「ほいほい、わしゃわしゃわしゃわしゃーっ！」

九十郎は差し出された頭を鷲掴みにして、髪の毛をぐしゃぐしゃにしながら乱暴に撫でまわした。

他の人間にやったら確実に通報される行為だが、光璃は満足そうだ。

「九十郎、あれは？」

「優勝のご褒美な、一騎打ちが始まる前に用意しておくよ。弁当は何が良い？」

「ローストビーフ、九十郎の手作りが良い」

「分かった分かった、そっちも用意しておくよ」

……

……

……

そして翌日……大江戸学園御前試合、一騎打ちの部が始まろうとしていた。

第一戦は徳川詠美と徳河吉音の一騎打ち……

「フレアー！ フレアー！ え・い・みいつ!! 頑張れ！ 頑張れ！ え・い・みいつ!!」

学ラン姿の馬鹿が叫んでいた。

馬鹿の名は斎藤九十郎……詠美と吉音の試合の後、一騎打ちの部に参戦する予定の男である。

男塾名物・大鐘音……それは戦国時代、武田信玄が上杉謙信との合戦に於て、どうしても援軍に行けず苦戦に陥っている遠方の味方の兵を励ます為に、自陣の上に一千騎の兵を並べ、一勢に大声を出させ檄を送ったという故事に由来する。

その距離はおよそ二十五里、キロに直すと100キロ離れていたというから驚嘆の他はない……余談ではあるが、昭和十五年の全日本大学野球選手権のW大応援団のエールは、神宮球場から池袋まで聞こえたという記録がある。

「ピイッ！　ピッ！　ピ・ピ・ピイッ!!」

乱取りの部、練兵館勝利の立役者である武田信玄……もと武田光璃が学ランを纏い、ホイッスルで練兵館門下生達を指揮し、一斉に旗を振らせる。

『頑張れ詠美』『負けるな詠美』『俺達がついている』『新なんてぶっ飛ばせ』『練兵館のシゴキを忘れるな』『詠美バンザイ』『詠美ちゃんぺろぺろ』思い思いのメッセージが描かれた旗が、一斉にスタジアムを彩った。

「あつたよ、応援旗があつた!」

担庵がそう告げる……何の意味も無く彼岸島風に。

直後、総重量300kgの巨大応援旗が10人がかりで運ばれてきた。

「応援旗でかした!」

九十郎がそう答える……何の意味も無く彼岸島風に。

もしも詠美が次期将軍になったら、コネクションフル活用して神道無念流を広めてやるぜ、げっへっへっへっへっへ……とかなんとか下種な事を考えた九十郎が、徹夜で作り上げた巨大応援旗だ。

「みんな丸太は持ったな！ 行・く・ぞおおおおおーっ！！」

丸太と見間違えう程の太さの巨大応援旗を九十郎が両腕で掴み、抱え……そして持ち上げた。

神道無念流で培われたパワーが、絶え間ぬ努力から生み出されるパワーが、バッファローマンかと思間違える程のマツシブな体格によるパワーが、丸太のような太さ、総重量300kgの応援団旗を持ち上げ、大きく左右に振るといふ奇跡を成り立たせた。

『徳河詠美応援団』と金糸で彩られた見事な刺繍（九十郎作）の応援団旗がたなびいたのだ。

「勝てよ詠美iiiiiiiiiiっ！！ 負けるな詠美iiiiiiiiiiっ！！」

頑張れ詠美iiiiiiiiiiっ！！ 強いぞ詠美iiiiiiiiiiっ！！」

そして馬鹿が叫んだ。

喉の奥から叫んだ、会場中に響く渡る程に大きな声で叫んだ。

完徹している癖に元気な男である。

「やっぱり……やっぱり詠美ちゃんは凄いな……」

徳河吉音が静かに微笑んだ。

「へへっ、九十郎の奴、粋な真似をするじゃないか。

オレはこういうの、嫌いじゃないぜ」

「全くあいつは……変わらないな、変わらないよな、何年経つても……」

会場の警備をしていた遠山朱金が、長谷河平良が静かに微笑んだ。

詠美の人望を再確認した吉音、九十郎の良い意味での馬鹿さ加減を再認識した朱金と平良が……

「馬鹿……本当に馬鹿……何を考えているのよ！

大事な時なのに！ あの人が見ているというのに！」

一方、詠美はあまりの恥ずかしさに全身を真っ赤にして、プルプルと震えていた。

父親が……詠美が心の底から認めてほしい、認められたいと願って止まない存在が、今この瞬間を見ているのだ、聞いているのだから。

「良いのかい八の字、黙ったまんまで」

九十郎の無駄にデカイ声援を聞きながら、PKフリーンカザンで呼び集められた武田の祖霊達に袋叩きに遭い、全身ポコポコにされたじごろう銀次がそう呟く。

「いえ……俺は……」

イチカバチか指揮官狙いの奇襲を試みたものの、風林火山で強化された魚鱗陣を破れ

ず、あえなく敗退した八雲がそう答える。

「試合の邪魔をしちゃいけないとでも考えているのかい？」

そいつは要らん心配ってヤツさ八の字。

向こうにやあんなデカイ声の応援が付いてるんだぜ、

このまま黙って見ていたらむしろそっちの方が不公平さ」

その時ふと八雲が顔を上げると、試合場の吉音と目が合った。

『頑張るよ、だから見ていてね』そう言いたげに笑みを浮かべ、再び八雲に背を向けて試合場に歩みを進める。

「あ……新あああああ……っ!! 頑張れよおおおお……っ!!」

気が付けば、八雲もまた席を立ち、大声で吉音に声援を送っていた。

練兵館門下生に思い切り殴られた傷は痛むが、立たずにはいられなかった、叫ばずにはいられなかった。

九十郎の無駄にデカイ声にくらべれば微々たる声援であつたが……

「うわあ……どうしよ、□元が緩んじやうよ」

吉音の耳にはしっかりと届いていた。

吉音の心にはしっかりと伝わっていた。

徳河吉音は思う。

八雲の事を考えると、自分の心が温かくなっていくのを感じると、心が弾み、自分の全身に活力が漲っていくのを感じると。

自分は秋月八雲に恋をしているのだと。

徳河詠美は思う。

やはり斎藤九十郎は馬鹿だと。

江川担庵や武田光璃のような才女が、何故九十郎を評価し、九十郎の傍を離れようとしないのかまるで分からないと。

そして馬鹿丸出しの顔で、血管を浮き出させながら自分に声援を送る筋肉馬鹿を、何故自分は視線を逸らせられないのかと。

吉音が、詠美が、刀を抜いた。

それぞれを応援する声を聞きながら。

……

……

……

御前試合から数日が過ぎた……

「あばれてアツパレ！ アカニンジャーー！」

「とどろけ八雲！ アオニンジャーー！」

「きらめきの凧！ キニンジャー！」

「ひとひら風花！ シロニンジャー！」

「揺らめく霞！ モモニンジャー！」

「彩の星！ スターニンジャー！」

「忍なれども忍ばない……」

「忍びなれども……パーリナイツ!!」

「二二二手裏剣戦隊！ ニニンニンジャー!!」

「忍ぶどころか、暴れるぜっ！」

赤、青、黄、白、桃、金……大音量で響き渡る主題歌ソングを背に、6色の珍妙な格好をした忍者達が各々武器を構え、悪役とチャンバラを始めた。

戦国時代の人間にこれを忍者だと言い張った場合、きつと正気を疑われるだろう。

「頑張れ……頑張れニンニンジャー……」

「いけーっ！ やっちまえーっ!! ぶっ飛ばせーっ!!」

しかし、光璃と九十郎のテンションは最高潮に達していた。

その瞳はキラキラと輝いていた。

戦国時代の武田光璃晴信を知る人物が見たら卒倒するであろう光景である。

「……で、何なのこれ？」

……半ば無理やり連れてこられた詠美のテンションはダダ下がりだ。

ここは東京ドームシティ、シアターGロッソ。

ニンニンジャーなる子供番組のキャラクターによるヒーローショーが行われていた。

「九十郎、私の記憶が確かなら、

御前試合があんな結果に終わって落ち込んでいる私を励まそうとしていたのよね」

詠美と吉音の一騎打ちは、不完全燃焼の幕切れに終わった。

詠美が放った剣魂が貴賓席に飛んでいき、危うく大江戸学園筆頭理事……詠美の父に

大怪我をさせそうになり、試合は中止。

そのまま御前試合自体がお流れになってしまったのだ。

「楽しいだろ」

九十郎は真顔で答えた。

「いいえ、全く」

詠美も真顔で言った。

そして呆れていた、盛大に。

「私は今、忙しいのだけけど。」

御前試合があんな……あんな事になって、関係各所への謝罪や事後処理があるのよ」

「副将軍とセカンド幼馴染が任せておけて言っただだろ、なら問題ないさ」

光璃や九十郎と馬鹿をやっている印象が強いが、担庵も生徒会執行部の中枢に籍を置く者である。

徳河や水都に匹敵するとまでは言えないが、由緒ある家柄の跡継ぎでもある。

だからこそ九十郎はパートタイム火付盗賊改方なんて無茶ができるし、執行部が忙しい時は手伝いにも駆り出されるし、詠美とも出会った。

「丸投げになんてできる訳がないでしょう、元はと言えば私の落ち度なのよ」

「落ち度はねえよ、あんなの事故だろ事故。　　と言うか謝罪するなら俺にまず謝れよ。」

お前が派手にやらかしたせいで俺の試合がお流れになったじゃねえか。

神道無念流を派手に宣伝するチャンスだって張り切ってたのによ」

この男は謝らせたのか励ましたのかどちらなのだろうか。

それにこの男は応援旗や揃いの学ランを徹夜で用意した上、後先考えずに300kgの旗を振りながら叫びまくったせいで気力と体力を使い果たしていた。

戦ったら戦ったで無様な負け姿を晒していただろう。

九十郎はむしろ詠美に感謝するべきである。

「……ごめんなさい、謝るわ」

やや釈然としない気持ちを抱きながらも、詠美は頭を下げた。

「よし許す。　　許したから最後までニンニンジャーの活躍を楽しもうぜ」

「はあ……本当にこんな事をしている時間なんて無いのに……」

やや釈然としない気持ちを抱きながらも、詠美は黙って前を向く。

そして……

「さてと……ニンニンジャーショーは見た！ 昼飯も食った！」

「あ・そ・ぶ・ぜ……止めてみな！」

「ははは、誰も止めねえよ。元とれるくらいに遊び倒すぞ」

九十郎が早起きして作ったお弁当を残らず平らげた光璃が、キョウリユウレットっぽいボーリングをしながら一日フリーパス券を握りしめる。

戦国時代の武田光璃晴信を知る者が見たら卒倒するような光景である。

「美味しかった、美味しかったのだけでも……」

何かしら、この何とも表現しがたい敗北感は……」

同じく九十郎の手作り弁当を残らず食べ切った詠美が、釈然としない思いを抱きながらもはしやぐ2人を追いかける。

「九十郎の特製ローストビーフは至福の味。

一度でも食べれば魂魄まで虜になり、二度と学食や購買に行けなくなる」

「そんな大げさな……」

その瞬間、脳裏に絶妙焼き加減のローストビーフの味が甦る。

完成して半日も経っているというのに、口に入れた時の触感はずっと瑞々しさすら感じてしまふ。

さらに濃厚な肉の旨味を凝縮したソースも完成度が高く、肉の味を引き立てながら口の中で弾ける旨味の爆発力、破壊力は、名家に生まれ舌の肥えた詠美をも唸らせるものであった。

「さらに一緒に持ってきたクロワッサンはパン祖江川担庵が今朝焼き上げた物。売りに出されれば5分で完売する超人気の味。

かの生徒会副將軍すらも脱帽させる至高のパン」

「あ、あれが噂の……どうりで味も触感も普段食べているものと全然……

確かに、大げさでもないかもしれないわね……」

この男も担庵も無駄に器用である。

「それで、どうして本土でヒーローショーを見る事になったのかしら？」

「光璃に言えよ、ここが良いって言いだしたのは光璃なんだからな」

なお、九十郎もノリノリで賛同したので同罪である。

「乱取り優勝のご褒美。

他人のお金でニンニンジャーショーとアトラクション1日フリーパス、

特製ローストビーフ弁当おいしいです」

「光璃が毎年優勝をもち取ってくれるおかげで、

御前試合の後は入館希望者が続々と集まるんだよ。

往復の運賃と観覧券、フリーパス代なんて安いもんだ」

「なら、私の分は払うわよ」

「いらんいらん、無理矢理連れ出したのは俺、

それに最初に言った詠美を励ますためっていうのも嘘じゃない。

金のことは心配せずに今日は遊ぶがいいさ」

「でも悪いじゃない」

「良いから素直に楽しめよ、ほら最初は何に乗りたい？」

九十郎が指差す先に、東京ドームシティアトラクションズ……かつて後楽園ゆうえんちと呼ばれていた場所に鎮座する遊具の数々があった。

「そんな事を急に言われても、どれが何だかまるでわからないわ」

「なら直感で行け、直感で。 何でも良いから指差してみろ」

「ええと、それなら……」

詠美は恐る恐る、比較的安全そうな遊具……ピクシーカップを指差した。

「ああピクシーカップか、あれは遊園地につきものコーヒークップの亜種のようなものだ。」

中々面白い物を選ぶじゃないか」

九十郎がニヤニヤと笑いながら詠美の手を引き、係員にチケットを見せてカップ内に乗り込む。

「九十郎、あれやって」

「ふっふっふ……任せな」

光璃と九十郎の手がコーヒーカップ中央に備えられたハンドルをガツシと掴んだ。

「ま・わ・す・ず・ぜ……」

長年の修行によって身についた超パワーに、武田家御家流・風林火山による強化が乗った。

詠美は猛烈に嫌な予感がした。

「ちよ、待って……手加減をし……」

まるで命乞いをするかのような声が2人の耳に届く前に……

「止めてみなあつ!!」

……光璃と九十郎はハンドルを全力で回転、カップは超電磁スピントと見間違う程に回った。

2人の邪悪友情パワーによって生じる真空状態の圧倒的破壊空間は、まさに歯車的砂嵐の小宇宙!!

何度もやって慣れている光璃は平然とした顔で楽しんでしたが、詠美は三半規管を揺さぶられ、危うく吐きそうになった。

犬子と九十郎第26話『敗北の記憶』

……ここは魔境・大江戸学園。

秋月八雲が転校してきたり、天狗党が暴れたり、由比雪那が学園の変革を求めて頑張ったり、平良賀輝が大魔神を作ったり暴れさせたりして、大江戸学園は揺れに揺れた。

そんな大騒動に斎藤九十郎は……ガッツリ関わっていた。

天狗党が暴れた時は、パートタイム火付盗賊改方としてチャンバラをして。

天狗党事件後もパートタイム火付盗賊改方を続行、残党狩りに奔走し。

巨大賭博騒ぎの時は、光璃と担庵と組み、がらがらどん1号2号と武田の祖霊を利用したイカサマで大金をせしめ……たのだが、後で平良に事が露見し、金は全部没収、しばらく無償でパートタイム生徒会執行部員として詠美の仕事を手伝う羽目になり。

金を没収された腹いせにと、和マンチ共の巣窟と畏れられる練兵館ソード・ワールド会に無理矢理詠美を参加させ。

御前試合の時は、練兵館強化合宿に詠美を参加させ、乱取りの部は光璃が戦いの年季の違いを見せて大人げなく勝利。

一騎打ちの部では徳河詠美応援団を結成し、会場中に響き渡る大音量のコールを叫ん

だり、神道無念流で鍛えたパワーで超巨大応援旗を持ち上げて詠美を赤面させ。

御前試合で派手にやらかした詠美を元気づけるべく、光璃と共に本土の遊園地に連れて行き……シアターGロッソで2人して瞳をキラキラと輝かせながら全力で声援を送り、詠美を盛大に呆れさせ。

ピクシーカップを大回転させて詠美にゲ……気分を悪くさせ。

光璃が北条早雲所縁の地を訪ねたいと言い残して音信不通になり。

怪盗猫目捕縛作戦の時は……特に何もせず、執行部の手伝いや練兵館での指導をして。

猫目に見事にしてやられた朱金真留コンビをゲラゲラと笑い。

パートタイム執行部員として真夜中の不審船の調査につき合わされた挙句、遠山朱金の罵声と、詠美の未練がましい視線を背に、大量に印刷されたエロ本の押収・焼却処分する羽目になり。

五人組と校長が色々やっていた時は、自分の無力さを嘆く詠美を引つ張り出し、ビール（自作）を無理矢理流し込み、酔わせて愚痴を引き出し……事件の解決に何ら寄与していないどころかむしろ邪魔をして。

由比雪那が頑張っていた時には、またもやパートタイム火付盗賊改方となり、詠美、平良共々偽手紙の罠に見事に引つ掛かり、過労で倒れた詠美を担いで一晩中逃げ回り。

柳生十兵衛が雪那の身辺警護をしていると聞いた後は、『合法的に柳生十兵衛を抹殺するチャンスだぜヒヤツハアーツ!!』とか何とか叫びながら突撃して普通に負けて。

由比雪那事件の後、担庵や朱金と共に一度本土に戻り、表向きは事故で死んだ事になってる尚齒会メンバー達の墓に花を添え……

そして執行部による圧政が開始されると、またまたパートタイム火付盗賊改方となり、『てめえの弱点なんざ何年も前から知ってるんだよ遠山あつ!』とか何とか叫びながら人質作戦を実行し、配給所の打ち壊しをしていた遠山朱金を捕縛し。

心労が祟って倒れた詠美の看病をし。

遠山朱金、越後屋山吹の公開処刑決行……しようとしたが失敗し、朱金真留コンビにしこたまブン殴られ。

そして……

「ドーモ、秋月八雲Ⅱサン、徳河吉音Ⅱサン、

パートタイム火付盗賊改方改め、パートタイム執行会室警備員の齋藤九十郎デス」
そう告げながら九十郎は、八雲と吉音に剣先を向ける。

飛鳥鼎の意向を受け、生徒大將軍に就任した徳河詠美は、吉音との様々な確執、因縁を清算すべく、大江戸城へと呼び寄せた。

そして来た、八雲と吉音が。

「今の状況から言うと、徳河詠美応援団の団長様だと名乗った方がしっくりくるかな。いや大変だったぞ、この部屋でチャンバラできる位のスペースを作るのは。」

書類に机、PCが大量にあったのに、使える人手は2人分しか無かったからな」
九十郎は半ば無理矢理執行会室に居残った。

詠美と吉音の一騎討ちを邪魔されるのを防ぐために……そして十中八九吉音と共に執行会室に乗り込んでくるであろう秋月八雲を殴る為に。

つい先日、朱金真留コンビにボコボコにされた担庵は寝込んでいるというのに、同じようにボコボコにされていた九十郎は割と元気そうだ。

無駄に頑丈な男である、無駄に。

「あたしは、詠美ちゃんと話し合うために来たの。邪魔をしないで」

吉音が告げる。

普段の大食いで能天気な表情は既に無い……確かな決意を籠めた、剣士の顔だ。

矛盾をするようだが、吉音は今、真剣に話し合いを望んでいた。

「貴女はそうでも、私は話し合いで済ませる気なんてないわ」

「詠美は吉音と戦うために、俺は八雲を殴る為にここに居る。」

今更なあなあでは済ませられんよ、止まれんよ」

「これ以上誰かが傷つくなんて……あたしはそんな事のために来たわけじゃない……」

「俺は吉音や八雲の言ってる事、やってきた事よりも、

詠美がやってきた事、詠美がやろうとして居る事の方が正しいと思う。

担庵もそうだ。それにたぶん、ここには居ない光璃もそう言うだろうさ。

情よりも効率、政治つてのは須らく結果責任だからな」

「でも……それで尚齒会は……」

「それでもだ。一番辛い筈の担庵が文句を言っていないんだ。

俺や詠美がどうこう言う資格は無い……

まあ、あいつらが世を無駄に騒がす悪餓鬼共だったのは事実だったしな」

「だからってあんな横暴な事が！」

「ははは、どっちを指してるのかは知らんが無理無茶無謀は承知の上、不平不満も覚悟の上」

しかし、情報統制を行い、同じ学園の生徒を公開処刑するのはやりすぎではなからうか。

この男は基本的に屑である。

唯一の救いは、自分が屑である事を自覚している所であろうか。

「そうよ、それが私と九十郎の選択、私と九十郎の出した結論。

傲慢と呼ばれようとも、誰もが笑顔になれる方法ではないにしても……」

「まあ理解してくれとは言わん。 10年後20年後に評価されれば御の字さ。

子供番組のようにやりたいと誰もが望みながらも、

子供番組のようにはいかんのが世の中だ……」

「だからっ!!」

「私達の邪魔をしないで！ 吉音さん！」

「詠美の邪魔はさせんぞ！ 秋月いつ！」

詠美もまた剣を抜き、八雲と吉音に突きつける。

それが彼女の決意の証、彼女の魂だ。

「そして勝つたら来年の剣術指南には神道無念流を推してくれ」

……台無しである。

「……少しでも貴方を見直しそうになった私が馬鹿だったわ」

呆れたようにため息をつくが、詠美は知っている。

酉居が次期剣術指南役なれるよう働きかけてやると言った時、九十郎は断った事を。

裏取引で得たり喪ったりするトロフィーに価値を見出せなかつたのである。

もし詠美が次期將軍になり、剣術指南役を推薦すると言ったとしても、九十郎は断る。

だからこそ、詠美は九十郎を信頼しているのだ。

それはそれとして神道無念流を広めるのにコネを活用する気は満々な所が九十郎な

のだが。

「ありがとう、頼りにしているわ」

短い言葉であったが、それは詠美の本心だ。

感謝をしていた、頼りにもしていた。

詠美にとって九十郎は支えであった。

「気にするな、我欲100%だ」

詠美は一瞬、何かを言いかけて……やめた。

当の本人がどう思っているかはともかく、詠美は我欲で九十郎がこの場に残ったとは思えなかった。

「これからも頼りにしても良いかしら」

だからそう尋ねた。

聞くまでも無い事だとも思ったが、それでもちゃんとした言葉が欲しかったのだ。

「ははは、この戦いの後、お前がどんな詠美になろうとも、俺は徳河詠美応援団の団長だよ。」

構う事は無い、やっちなまえ。そしてなっちなまえ、暫定將軍（笑）じゃない、本物の

將軍に」

「また遊園地、連れて行ってくれるのよね」

「ああ、良いぜ。今度は富士急ハイランドにも行こうか」

「来年も花火、見せてくれるのよね」

「来年は垣庵が卒業してるだろうから、どうなるか分からんが……」

まあ、花火をやる事になったら詠美も誘うよ」

「そう、分かったわ」

この約束は果たされない。

九十郎が早死にするからだ。

だがしかし、今この瞬間……詠美は信じた、九十郎を。

そして笑った、詠美は万人の味方を得た気分であった。

「今日は私が勝つわ、吉音さん！ 私を信じてくれる人のために、

私を支え続けてくれた人のために、私を応援してくれた人のために……」

そして何より、私自身のためにも！」

刀を握る手に力が籠る。

負けたくない、負けられない……詠美は今、心の底から吉音に勝ちたいと思っていた。

そして思った、吉音が秋月八雲を愛しているのと同じように……否、それ以上に、自分
分は齋藤九十郎を愛しているのだと。

基本的に屑で、ブ男で、外道で、ダメ人間で、神道無念流だけやってれば幸せな剣術

馬鹿の九十郎と共に歩みたいと、共に生きたいと願っていると。

詠美は男の趣味が悪いのではなからうか。

「勝ったら、お話ししてくれるんだよね……なら!」

徳河吉音が剣を抜いた。

決意があつた、何があつても詠美と話をするのだという決意が。

愛があつた、秋月八雲と共に歩みたい、共に生きたい、愛し合いたいという願いがあつた。

「勝負!」

「勝負!」

2人の少女が叫ぶ、そして激突する……これまで一度も衝突した事の無い2人が、一度も喧嘩をした事の無い2人が、本音をぶつけ合い、魂を削り合う戦いを始める。

「秋月いいいいいいーっ!!」

……そんな2人を尻目に、斎藤九十郎も剣を振るっていた。

敵は九十郎に一生癒えないトラウマを刻んだ男、ある日突然大江戸学園に転校してきて、あつというまに学園中の美女達を落としていった超のつくモテ男、秋月八雲。

「……貴方程の人が、どうしてこんな事に手を貸すんだ!」

「てめえを殴る為に決まってるだろうが!! このリア充があ!!」

「まさかの私怨!」

否、ある種の防衛本能である。

「羨ましいぞ! 妬ましいぞこのリア充!

どうしてお前ばかりがモテるんだコンニャロウ!」

「え? ちよつと、さつきと言ってる事が違ってないか!」

「それとこれとは話が別だあつ!!」

それとも何か、戦う理由が2つ以上ある奴は剣を振るうなつてか?

大人しく俺の神道無念流サビになりやがれコンニャロウ!」

そう叫びながら、喉の奥から血を噴き出さんばかりに叫びながら、九十郎はぶおん!

ぶおん!! と剣を振るう。

刃止めがされた刀ではあるが、鍛え抜かれた九十郎のパワーをまともに喰らえば、良

くて骨折、悪ければ内臓が破裂する。

そして今の興奮しきった九十郎の頭の中に『手加減』の文字は存在しない。

「わっ!! ととと、危なあつ!? ちよ、おい手加減してくれつて!」

「ほお避けるかあ! 受け流すかあ!

ちよつと前までヒョロガキだった癖に、やるじゃあねえかあ!!」

「逃げ回るので精いっぱいだよ!」

八雲が逃げる。

逃げて避けて受け止めて、必死こいて生き延びる。

この男は暇さえあれば身体を鍛え、剣を振るっている剣術馬鹿。

剣を教える事は超一流、剣の腕そのものも準一流……眠利シオンや鬼島桃子のような怪物クラスの剣鬼相手にも、ある程度までは善戦できる腕前を持つ。

テガタナーズが世界五大災厄に挑んだ時レベルの善戦が精一杯であるが。

普段の九十郎ならば、八雲を瞬殺できる。

数秒もあれば叩き伏せられる……まともな精神状態であれば。

「……くそが、胸が軋む、頭が捻じれる、腕も足もまともに動いちやいない。

どうなっちゃまってるんだ今日の俺は!?!」

九十郎の心が悲鳴を挙げていた。

イタイ、イタイイタイ、イタイイタイイタイと叫んでいた。

「……うぐつ、力比べじゃあ負ける……だけど……」

剣と剣が何度もぶつかり合う。

その度に八雲が力負けし、弾き飛ばされ、傷つき疲弊していく。

「筋肉達磨が動きが遅いってのは、ゲームの中だけなんだよ!」

パワーがある奴はスピードも速い! 剣術はパワーだぜえっ!!」

勇ましく九十郎が雄たけびを上げる。

優勢なのは九十郎だ、それは間違いない。

秋月八雲は数段上の実力者を相手に、ギリギリの所で食い下がっているにすぎない。しかし、どんなに劣勢になろうとも、秋月八雲は折れない、諦めない。

しかし逆に、戦いが長引けば長引く程、九十郎の魂が痛みを訴えていた。

「長谷河平良！ 遠山朱金！ 銭形真留！ 大岡想！」

水都光姫！ 八辺由佳里！ 八坂とゆかいな仲間達！

鬼退治桃太郎先輩！ 刀舟斎かなう！ 五十嵐の妹！ 秋月の夜の玩具！

剣を振るうスピードが速まる、力が籠る。

秋月八雲が追い詰められる……しかし、九十郎を襲う痛みも増していく。

「……俺が把握できたのはここまでだがな、探せばまだまだ出そうじゃねえか。

全員が全員お前に惚れて、全員が全員お前の恋人だ、違うかあっ!!」

「俺の夜の玩具って誰の事だよ!？」

「佐東はじめ」

「下級生の女の子になんて綽名つけてんだアンタは!？」

夜の玩具と揶揄されるような行為に及んでいる事は否定しなかった。

「やった事は認めんだなこのロリペド超人!!」

しかも路地裏とか倉庫街とか普通に通報案件の場所ですよ!!」

「ロリペドって、1コ下だよはじめは!」

「顔とか胸とか腰とか胸とか性格とか胸とかがロリっぽいじゃねえか!」

この男、胸胸言い過ぎである。

「うっ……ああそうだ! それがどうしたって言うんだ!!」

「お前ばかりが何故モテる!? それも全員美人! 巨乳も多いっ!!」

「俺が知るかよ!」

「美人ばかり侍らせやがって! 大した腕も無いヒヨロガキのくせにつ!」

御前試合乱取りの部で、光璃に成す術も無くボコられたヤツの癖にいいっ!!」

「馬鹿野郎! 勝てるかあんなのにつ!!」

光璃に……武田晴信に御家流・風林火山を使わせ、思い切りが良かったと褒められる程度には善戦したのだから上出来ではないだろうか。

それに光璃が部隊を率いて戦った場合、九十郎でも成す術も無くボコられる。

「佐東の奴、目隠し取ったら普通に可愛いじゃないか!

羨ましいぞコンニャロウ! 妬ましいぞコンチキショウ!!」

そんな事を叫びながら、九十郎は八雲への攻撃を再開する。

「長谷河と遠山の拗れた仲、どうやって修復した!

俺だつてどうにかしたかった！ どうする事もできなかつたのに!!」
「俺は何もしていない!」

「嘘つけこの野郎!! 何もしていない奴に、長谷河と遠山が揃つて惚れるものかよ!!
それも……それも奉行所で3Pするまで……そんな関係になるものかよ!!」

「げ……み、見てたのか……?」

「見てたよ! 俺がパートタイム火付盜賊改方やつてんの、てめえも知ってるだろ!
探してたんだよ長谷河をよ!

そして……長谷河が、あんなに幸せそうに笑つて、喘いで、跨つて……それで……
眩暈がした、吐き気がした、視界がグルグルと回つていっているように感じた。

自分の言っている事が、醜い男の嫉妬だという事は理解できていた。
だがしかし……言わずにはいられない、吐き出さずにはいられない。

そうでなければ前に進めない。

「何故だ秋月、何故お前ばかりがそんなにモテる。 何故俺は全くモテる気配が無い。
顔か?! やっぱり男は顔だったのか?!」

とりあえず九十郎はマッチョなブ男である。

「い、いや……顔じゃないと思うぞ……俺は……」

八雲は露骨に視線を逸らした。

「その上、徳河吉音はてめえとべったり、最近は詠美とも真夜中の逢引きを重ねて……

てめえのモテっぷりに際は限は無いのか？ 1人くらい分けるコンニャロウ！」

「女性を分ける分けないだなんて言うんじゃない！」

ハッキリ言つて屑の言動である。

九十郎がモテない最大の原因はそこにあるし、本人も自覚している。

「はっ！ おモテになる人は言う事が違うねえっ!!」

てめえみたいな奴が女を10人も20人も独占するから、

非モテは何年たつても非モテなんだよ！」

「他人のせいするなっ!!」

八雲が反撃した。

「分かつてるよ！ 他人のせいにしても何にもならねえ事位はなあつ!!」

でも辛いんだよ、苦しいんだよ！ 何でこんなに辛いんだよ！

答えろよ秋月いいいいいいーっ!!」

九十郎が叫んだ。

叫び、吠え、心の痛みを誤魔化しながら剣を振りかぶつた。

自分が屑だと思つた、秋月八雲は価値のある男だと、自分よりも上位の存在だと思つた、自分ではどうあがいても勝ち目の無い存在だと、どう頑張つても敵わない存在だと

……それを認めたくない、信じたくない、そう心が叫んでいた。

それを認めてしまえば、信じてしまえば、自分は本当に本当に無価値になってしまう気がした。

今の九十郎は大振りで、隙だらけだった。

「……愛するさ、全員纏めて。 全身全霊で」

一瞬、何を言えば良いのかと迷った……迷った上で、それしか言う言葉が見つからなかった。

そして反撃した。

秋月八雲の特技……真っ直ぐな突きが吸い込まれるように九十郎の喉に突き刺さった。

「くそが」

九十郎の巨体が大きく後ろにふっとんだ。

まともな体調なら、まともな精神状態なら軽く躲せるその突きを、九十郎は全く反応できずにまともに喰らった。

「結局、正義は必ず勝つって事か……」

俺のような屑が格好つけて頑張った所で、全部無駄だったって事か……

無意味だったって事か……」

そして九十郎が沈んだ。

朱金に殴られた所が、真留の投げ銭が当たった所が、そしてたつた今八雲に突かれた所が、ズキズキと痛んだ。

「結局……俺が価値の無い男だっただけか……」

秋月八雲は価値のある男だった、それだけの事か……遠山や銭方が、それに長谷河が……

あいつらが価値の無い男に惚れる筈……ないものな……」

九十郎の筋肉は、突きの一発で参る程ヤワな鍛え方をしていない。

立ち上がろうと思えば立ち上がれた。

だがしかし……既に九十郎の心が折れていた。

自分のような屑は何をやっても秋月八雲には敵わない。

価値の無い男がどう頑張ろうと、価値のある男に勝てる筈が無い。

九十郎はそれを魂に刻み込み……

「悪いな詠美、負けちゃったよ」

未だ吉音と剣戟を交える詠美に対し、そう告げた。

詠美は吉音と戦いながら九十郎への愛を叫んでいたのであるが、九十郎は気づかなかった。

自分がやってる事が屑の所業だという事は理解していた。

理解してなお、これが正しいと思つてやった、これが正しいと信じて戦つた。

詠美を支えようとしていた。

戦つて、戦つて、戦つて……今日、九十郎は負けたのだ。

……

……

……

惚れた女がいた。

惚れた女は雌の顔をして、秋月八雲に跨つていた。

ダチ公がいた。

ダチ公は雌の顔をして、秋月八雲に跨つていた。

惚れた女とダチ公は喧嘩をしていた、どうにかしてやりたいと思つていた。

秋月八雲が2人の仲を修復した。

詠美がいた。

助けてやりたい、支えてやりたいと思つた、そのために外道に手を染めた。

詠美のためだ、学園の未来のためだ、これが正しい事だと自分に言い聞かせてやった。

秋月八雲に否定された。

詠美もまた、秋月八雲の女になった。

せめて剣だけは、せめて神道無念流だけはと思い、秋月八雲に挑んだ。
負けた。

そして斎藤九十郎は歪んだ。

自分は屑だと、自分に価値は無いと信じた。

価値のある女は、価値のある男に惚れるものだと思じた。

自分ごときがどう頑張ろうが、どう足掻こうが、価値のある男には勝てないのだと信じた。

それは根拠の無い思い込みであったが……斎藤九十郎にとっては、確かな真実であった。

犬子と九十郎第27話『九十郎死す』

「九十郎！ 九十郎！ 九十郎！ しっかりしなさい！ 帰ってきなさい！」

大江戸スカイタワーのヘリポートで、徳河詠美が九十郎の胸を押す。

必死の表情で、吉音との戦い、キュウビとの戦いで傷つき、疲弊した体を押しして。

何度も何度も、何度も何度も、何度も何度も何度も……

そして倒れ伏す九十郎の胸に耳を当てる。

「……駄目!? まだ心音が聞こえない！」

そして再び詠美が九十郎の胸を押す、力一杯に押す……停止した九十郎の心臓を動かすために。

エヴァ・ヨーステンが用意した最強最悪の剣魂・キュウビとの戦いの中、ねずみ屋三姉妹を庇い、九十郎は強烈な電流を浴びた。

その時、九十郎の心臓が停止してしまったのだ。

キュウビを倒し、エヴァを拘束し、スカイタワーから落下した吉音と八雲が無事に救出され、ほっと一息つき……直後、ヘリポートの隅で転がっていた九十郎が地味に死に掛けている事が判明し、慌てて救命措置がとられていた。

「しつかりしなさい！ 神道無念流を学園一にするのでしよう!？」

吉音さんとの戦いが終わっても、私の応援団長をやってくれるのでしよう!？
学園祭では凄い事を計画しているのでしよう!？

来年の御前試合では神道無念流の強さを学園中に知らしめるのでしよう!？
来年も私に花火を見せてくれるのでしよう!？

一緒に肝試しをしてくれるのでしよう!？

また遊園地にも連れて行ってくれるのでしよう!？」

心臓マツサージをしながら、詠美が九十郎に呼びかける。

喉も枯らさんばかりに叫ぶ、大粒の涙が零しながら叫び続ける。

しかし、詠美の叫びも虚しく九十郎の心臓は止まったままだ。

少しずつ、少しずつ……しかし確実に、九十郎の体温が失われていく。

命の感触が消えていく、九十郎に死の足音が近づいてくる。

「お願い、お願い……戻って来て！ 帰って来てえっ!!」

心臓が停止して10分が過ぎたらもう助からない。

仮に助かったとしても、心停止から3分を過ぎたら脳に重大な後遺症が残ってしま
う。

九十郎がキュウビの電撃を浴びてからの時間は分からないが……もしかしたら既に

3分を過ぎているかもしれない、既に10分も過ぎているかもしれない。

もしかしたらこのまま死んでしまうかもしれない……

詠美の心は恐怖と後悔で一杯になっていた。

九十郎を喪いたくないという恐怖。

そしてキュウビと戦っている間、キュウビを倒した後、九十郎を放置してしまった事への後悔だ。

「死なない……で……お願い！ 死なないで！」

私は……私はまだ貴方に何も言っていない！ 何も伝えていない！

私は貴方が！ 貴方の……貴方の事が……」

詠美は懇願した。

心の底から、過去に無い程に強く強く懇願した。

そして祈った、九十郎の回復を。

しかし……祈りや懇願で人は治らない、人は帰らない。

「AEDを持ってきました！」

そこにねずみ屋の長女……子住結花が飛び込んでくる。

手にした機械はAED、自動体外式除細動器である。

「貸して！」

ひつたくるようにして機械を受け取り、すぐさま九十郎の身体に取り付ける。使いは保健体育の授業で習っていた。

だがしかし、実際に使うのは初めての事であった。

九十郎の身体に電流が流される。

そして再び心臓マッサージ……それでも九十郎の心臓は動かない。

「動け……動け……動け……お願いだから動いて……」

祈りながら、渾身の力で九十郎の胸を押す。

しかし九十郎の心臓は動かない。

体温が急激に下がっていく……九十郎の死が近づいてくる。

「そん……な……」

詠美の心が絶望に染まりかけていた。

もう本当は駄目かもしれないと、もう二度と九十郎は目覚めないかもしれないと思い始めていた。

「……………はっ」

……ある時、唐突に九十郎の心臓が動き始めた。

虫の息と呼べるような細かいものではあったが、止まっていた呼吸も戻った

「死にかけの怪我人は……かあああああ……っ!!」

直後、薬箱を背負った刀舟齋かなうが飛び込んできた。

九十郎が死に掛けているという連絡を聞き、全速力で階段と梯子を駆け登って来たのだ。

かなうはすぐさま九十郎の救命措置を引き継ぐ。

その間、詠美はずっと九十郎の手を握り続けた。

握り続けて、祈り続けた。

祈りが通じたのかどうかは不明だが、幸いにして九十郎は辛うじて一命をとりとめる。

何力所かに残った火傷痕を除けば後遺症も無く、無事に完治する。

心の中に消えない傷を、巨大な不発弾を、トラウマを残して……ではあるが。

……

……

……

エヴァ・ヨーステン事件は無事に終結し、大江戸学園に平和が戻った。

エヴァが立てこもった大江戸スカイタワーのエレベーターが4人乗りだったので、エレベーターで八雲、吉音、詠美、そして柳生十兵衛を送り込み、九十郎は階段と梯子でスカイタワーのヘリポートまで登るに羽目になった。

九十郎が剣術馬鹿のマツチヨであるとはいえ、朱金真留コンビにボコられ、八雲と戦い、さらに全速力でタワーを登ったのだ。

ヘリポートでキュウビと対峙した時点で、既に九十郎の体力は尽きかけていた。

そのためキュウビとの戦いでは身体を張った肉盾要員、ねずみ屋三姉妹がキュウビの力を弱めるまでの時間稼ぎ程度の事しかできなかった。

そしてキュウビの電撃を浴び、無様に気絶した……

全てが終わり、病院で目覚め、事の顛末を聞いた九十郎は呟いた。

『俺、居なくても勝てたんじゃねえのかな』と。

詠美はそんな事は無いと言ったのだが、何度も何度も伝えたのだが、九十郎はその言葉信じられなかった。

朱金真留コンビに負け、秋月八雲に負け、キュウビとの戦いでは無様に気絶……拭い難い敗北の記憶が九十郎の自信を粉々に打ち砕いていたからだ。

詠美と吉音は2人で同格の生徒大將軍に就任した。

相変わらず悪漢達が跳梁跋扈する魔境であったが、それがいつもの大江戸学園であった。

斎藤九十郎が長谷河平良に告白し、見事に玉砕した事、九十郎が以前程頻繁にパートタイム火付盗賊改方をやらなくなった事、そして柳生十兵衛が消息を絶った事を除け

ば、大江戸学園は平穩そのものであった。

「九十郎、学園祭の三日目、時間空いてるかしら？」

ある日、詠美はそう尋ねた。

普通の人にとっては何気ない会話の様に聞こえる内容であったが、詠美にとっては一大決心が必要な重要な内容であった。

詠美の心臓はバクバクと音を立てていた。

キユウビとの戦いの直後、九十郎が心停止で地味に死に掛けていた時、詠美はハッキリと自覚をした、自分が九十郎をどう想っているのかを。

しかし、詠美はまだそれを伝えていない。

次は言おう、次こそ言おうと、次こそは絶対に言おう、次が最後だと、何度も何度も先送りを繰り返して今に至っていた。

「ははは、暇な訳ねえだろ馬鹿野郎」

詠美からの問いかけを、九十郎は爽やかな笑みで切つて捨てた。
だから貴様は九十郎なのだ。

「忙しいの？」

「忙しいに決まってるだろ。」

良いか詠美、柳生十兵衛が例の一件以来消息を絶つてるのは知ってるだろ」

「ええ、知っているわ」

「つまり大江戸学園剣術指南役の座を柳生新陰流から奪取するには絶好の機会って事だ。

しかし、我が神道無念流には強力なライバルが2つ存在する。

北辰一刀流の玄武館、そして鏡新明智流の土学館だ」

「それも知っているわ」

「そうそして学園祭だ！ もうじき学園祭が開催される！

北辰一刀流と鏡新明智流を引き離し、神道無念流一強の時代を作る大チャンスだ！

そこで俺は考えた、神道無念流の人気と知名度を一気に高める素晴らしい策をなあつ

！」

「それで忙しいって事なの？」

「そうだよ、既に学園祭中のスケジュールはビッシリだ、お前と遊んでいる時間は無い。

五十嵐の妹を大江戸学園に編入させようぜプロジェクトが進行中だな、

その辺の準備とか諸々手伝わされて忙しい」

「五十嵐さんを？」

「そうそう、文つて言ったかな。俺は射命丸より樵派だが……まあとにかく、

あいつ届出だの手続きだの学費だの諸々全部すつ飛ばしてこつちに来たから、

色々と混乱があるんだよ。本土じや行方不明者として捜索願が出てるんだぜ。

正直面倒臭いが、副將軍と垣庵に頼まれたんじや仕方ねえ……仕方ねえんだが……

どうも学園祭にギリギリ間に合うか間に合わないかのタイミングになりそうなんだよ」

「そう……」

それを聞いて、詠美がしゅん……と沈んでしまう。

生来生真面目な性格の彼女だ、他に用事があるのに予定を開けるとは言いにくい。

「後はアレだ、最近ハートタイム保健委員もやってるんだよ。

キュウビに取り込まれてた元將軍のリハビリでな、

長い事昏睡状態で監禁されてたせいで筋力落ちてるんだよ。

それで学園一筋トレのやり方に詳しい俺が適任って事で駆り出されてな。

流星の俺も病み上がり筋トレさせるのは初めてでな、色々と苦労している」

クズズ・ブート・キャン普開催中。

それにしてもこの男、権力に阿る事にかけては右に出る者が居ない。

かつては西居がギリギリ対抗できていたが、今は失脚中のため九十郎の独走状態である。

「思ったよりも九十郎って忙しいのね。

最近執行部の手伝いに来てくれないから、てつきり時間があるのかと思つていたわ」

「学園祭を楽しみたいなら俺なんかより秋月を誘えよ、秋月八雲をさ。」

詠美もあいつの恋人なんだろう」

「違うわよ！ 違うつて何度も言っているでしょう！」

……瞬間、九十郎は声が聞こえた。

遠山朱金の声で『お前に価値は無い』と。

銭方真留の声で『貴方は屑です』と。

長谷河平良の声で『どう頑張った所で、秋月八雲には敵わない』と。

そして徳河詠美の声で『私が貴方ごときを好きになる訳が無い』と。

それが幻聴である事はすぐに分かった。

しかし九十郎は、目の前の少女は内心そう思っているに違いないと感じた。

「隠すな隠すな、エヴァ事件の時に何度も真夜中の逢引きしてるし、

最近は生徒会の仕事で一緒になる事も多いじゃないか。

美男美女カップルだって色々有名だぜ」

皮肉るように言うが、九十郎の心に余裕は一切無い。

今すぐ逃げ出したい気分になっていた。

朱金真留コンビにボコられ、秋月八雲に負け、キュウビとの戦いでは参戦直後に電撃

を浴びて無様に気絶……積み重ねてきた敗北の記憶が九十郎を苛むのだ。

八雲に抱かれ、幸せそうに微笑む長谷河平良と遠山朱金の姿が、否応無く脳裏に焼き付いたその光景が、九十郎を蝕み、苦しめるのだ。

「逢引きって……何度か周りに隠れて会ったけれど、

彼氏彼女の関係にはなっていないわ！」

「ははは、秋月みたいな超イケメンと夜中に2人きり……

何もなかったなんて事、ある訳が無いだろ、常識で考えろ」

そう言った時、八雲の突きを喰らった喉元が痛んだような気がした。

どうしても脳裏に浮かんでしまう、八雲に抱かれる長谷河平良と遠山朱金の姿が。

欲しい欲しいと願いながら、自分では手が届かなかった光景が……

だから九十郎は思うのだ。

きつと詠美も八雲が良いと思うに違いないと。

きつと詠美も八雲が好きに決まっていると。

自分のような屑よりも……

「そんな言い方……」

「斎藤先輩、道場の出し物なら私と江川先輩でどうにかしますよ。

1日くらい出し物の事は忘れて、学園祭を楽しんでも良いんじゃないですか？」

見かねて、一緒に買い出しに出ていた九十郎の後輩・桂が助け舟を出す。

「いや、だが道場主の俺が居るのと居ないのとじゃ……」

「斎藤先輩は詠美先輩の応援団長なんじゃない？」

それなら1日くらい詠美先輩のために時間を作りましょうよ」

「う……いや……」

九十郎は頭の中で神道無念流と詠美を天秤にかける。

普段ならば躊躇無く神道無念流を優先させる歪な天秤であるが……詠美の不安げな視線を感じ、放置したら拙いかなとか、エヴァ事件の時にずっと詠美応援団団長をやると言った手前とか、そういう様々な事が頭をよぎる。

「分かった、分かったよ……3日目だな、どうにか調整するよ。」

「なんで俺みたいな屑を呼びつけるのか知らんがね」

嫌々ながら……そんな態度を隠そうともせず、九十郎は了承した。

だから貴様はいつまで経ってもモテないのだ、だから貴様は九十郎なのだ。

「本当に!？」

「詠美の方こそ予定は空くのか? 学園祭だぞ、生徒大將軍が暇だとは思えんが」

「どうにかするわ! 絶対に!」

「そんなに心配なら、」

いつもみたいにパートタイム生徒会執行部やってあげれば良いじゃないですか」

再び助け船……乙級2年の桂さんは空気が読める良い子なのだ。

「はいはい、分かったよ……詠美、仕事が忙しいなら連絡しろ、

助っ人ぐらいならやってやるから」

「分かったわ。頼りに……頼りにするわよ、本当に。」

ああそれと、この間借りたDVD、全部見たから今度返すわ」

「見たか、どうだったシンケンジャーは？」

侍戦隊シンケンジャー……5人の侍と寿司屋が外道衆なる悪霊的存在と戦う、かつて光璃や九十郎が毎週欠かさず見ていた子供番組の名前である。

將軍に何を見せているのだろうか、この男は。

「オーブニングは良かったわ」

サイキッククラブの楽曲は詠美の琴線に触れたらしい。

「中身は？」

「……ゴーオンジャーよりは楽しめたわね」

「解せぬ」

炎神戦隊ゴーオンジャー……7人の人間と12の炎神達が比喻表現でなく力を合わせ、地球を汚す悪い奴らを退治する番組、斎藤九十郎イチオシのスーパー戦隊である。

將軍に何を見せているのだろうか、この男は。

「まあ良い、今度はゴセイジャーを持って詠美の家に行こう。

シンケンジャーはその時に返してくれ」

天装戦隊ゴセイジャー……5人の天使とグランディオンヘッダーが飛田展男を4回やっつける番組である。

將軍になんつうもんを見せようとしているのだろうか、この男は。

そして九十郎と桂が詠美に別れを告げ、買い出しに戻る。

詠美はそれを見送り、ウキウキとした気分で……ではなく、少し憂鬱そうに城に戻ろうとする。

「やっぱり、壁を作られている感じがするわね……」

そう、呟いた。

エヴァ事件が起きる前と起きた後で、九十郎の態度が僅かに変わっているような気がした。

会って話をしている時は、前と同じ態度のように見えた……まるで無理をして演技をしているかのような、節々のぎこちなさを除けばであるが。

顔を合わせる回数が明らかに減った。

まるで避けられているかのように。

そして詠美は秋月八雲と付き合っていると言う。

何度否定しても、何度否定しても、話を聞こうとしてくれない。

まるでそう思い込もうとしているかのよう。

「今度の学園祭で、その辺をどうにかできれば良いのだけれ……ど……」

そこで、物陰に隠れながら詠美を覗き込む徳河吉音の姿に気がつく、そして目が合う。

「……ほん！」

多少赤面しながらも、大きく一回咳払いをする。

人目を気にせず浮かれすぎたと、自己嫌悪をしながら吉音の下へと歩みを進める。

「……吉音さん、仕事はどうしたのかしら？」

「だってほら、詠美ちゃんと九十郎の仲、

エヴァとキュウビの事件があつてから全然進展してないじゃん。

あたしとしてはちよつとだけ心配かなつて」

「嘘おつしやい！ 野次馬根性の癖して！」

「ありや、やつぱバレてた？」

「バレルに決まつてるでしょうが！」

そして気がつく、八雲堂の店主、秋月八雲も苦笑しながらこちらを見ている事にも。

「八雲、何か用かしら？」

言葉に棘があった。

自分の苦勞の何割かが八雲のせいなのではと……そんな八つ当たりじみた感情があった。

「いや、たまたま目に入ったというか……普通に接客してただけと言うか……」
「うぐ……」

ぐうの音も出ない反論だった。

八雲堂は秋月八雲が経営している茶店だ。

いくらなんでも八雲堂で接客していたのを咎める訳にもいかない。

どちらかと言えば咎められるべきは、路上であんな事をしていた自分の方だと、詠美は少し反省する。

「他人の恋愛をどうこう言つて、吉音さんは随分と暇のようね」

「あたしは良いんだよ、八雲と毎日毎日いちやいちゃラブラブつて感じで……感じて……」

いけたら良かったんだけどね。　ゴメン、正直將軍のお仕事ナメてたかも。

「ここしばらく八雲と一緒にの時間全然少ないよ……八雲分欠乏症になっちゃうよお……」

「はあ……それでこんな所でサボってたのね……」

「そういう事」

「えばつて言うんじゃありませんっ!!」

「それでさ、詠美ちゃんもう告白はしたの?」

「まだよ、まだ……」

九十郎は、詠美と八雲が彼氏彼女の……いや、男と女の関係になっていると思いでいた。

詠美が何度否定しても、まるで聞く耳をもたない。

だから詠美は伝えられないのだ、己の本心を。

「詠美ちゃん可愛いからさ、九十郎もきつと喜んでOKすると思うけど」

「誰のせいでこんな苦労をしていると思っっているのよ、誰のせいで……」

詠美が吉音に食って掛かろうとしたその時……

「そういうえは昨日さ、執行室でおもちやのロボット拾ったんだけど、

詠美ちゃん誰のか分からないかな? 一昨日遅くまでお仕事してたでしょ」

「……え?」

瞬間、詠美が硬直する。

「なんていう名前だったかな、あたしが子供の頃に見てた番組の……

シユリケンジャー? じゃなくて、ハリケンジャーだったっけ?」

忍風戦隊ハリケンジャー……地球忍者と宇宙忍者の血で血を洗う抗争を描いた子供番組の名前である。

カクレンジャーやニンニンジャーと混同する人が後を絶たない。

「俺に聞かれてもなあ……」

八雲はその辺の知識が乏しい様子だ。

そして……詠美の脳裏に電流が迸る。

思い出したのだ、ゲキアツダイオー……6人の忍者が凄い勢いでカツ飛んでいく姿がツボに嵌り、ついつい手が伸びてしまった事を。

一昨日はうっかり鞆の中に入れてまま、執行部室に来てしまった事を。

咄嗟に執行部室の奥の棚に押し込み……回収するのを忘れていた事を。

「……詠美ちゃん？ どうしたの、顔が青いよ」

「べ、別になんでもないわ。 それよりも吉音さん！」

貴女こそ執行室に持ち込んだガンダムは片づけたの」

詠美は全力で話題を逸らそうとした。

「詠美ちゃん、あれはガンダムじゃないよ、ダブルオーライザーだよ。

G NソードⅢ装備の最終決戦仕様の」

「違いが分からないわ」

「ダブルオーライザー飾つてると元気出てこない？」

「元気貰えると言うか、勇気が湧いてくると言うか、ガンバルゾーって気分になると言うか」

「ならないわ、全く」

詠美はぼつさり切り捨てた。

「詠美ちゃん詠美ちゃん、エクシアが好き？」

「ライザーが好き？ それとも……ク・ア・ン・タ？」

「どれがどれでも同じじゃないの」

「あたしはやっぱエクシアかなあ。ライザーもクアンタも好きだけど」

「正直どうでも良いわ」

「俺がガンダムだっ!!」

吉音が唐突に刹那・F・セイエイの声真似を始める。

吉音の声は榊原ゆい似なので、声優・宮野真守の声を出すのは相当無理がある。

「意味が分からないわ」

「俺達がガンダムだっ!!」

「勝手に巻き込まないで貰えないかしら」

「共に歩む気は無いと……分かり合う気は無いのか!？」

「無いわ」

「これがラスト・ミッション！ 人類の存亡を賭けた対話を開始するっ!!」

「その前に私と対話してほしいのだけでも」

「詠美ちゃんってどのシリーズが好き？」

あたしはやっぱり〇〇だけど、Xも捨てがたい……」

「……ちよつと前にムービー大戦に出てたのかしら？」

詠美が思い浮かべているのはガンダムではなく深海開発用カイゾーグである。目が2つあつてアンテナが付いていれば何でもガンダムと言い張れるため、詠美が思い浮かべるXをガンダムだと言い張る事も不可能ではないが……サテライト・キャノンもビームソードもハモニカ砲も付いていない事は確かだ。

「おお、詠美ちゃんX分かるんだ!?! 恰好良いよね」

「まあ、それは同意しなくてもいいわ。本編は見た事ないのだけだ」

「それは勿体無いよ、Xはストーリーも凄いんだからさ」

そして吉音は認識のズレに気づきもせず話を続けようとする。

しかし、この時詠美は気がついた、ゲキアツダイオーを持ち込んだのが自分だとバレたら、今自分が吉音に向けているのと同じ視線が浴びせられるのではなからうかと。

「ごめんなさい、急に用事を思い出したから、失礼させてもらうわ。」

吉音さん、サボりも程々にしておくのよ」

「はあい……もうちよつとしたらあたしも執行部に行くから、待つててね詠美ちゃん。

Xの話もその時について事で……そうそう、Xつて映画にも出てたんだね。

知らなかったよ、今度どんな映画だったか教えてね」

へらへらと笑いながら、ひらひらと手を振つて見送る吉音を尻目に、詠美は大江戸城、

執行部室……置き忘れたゲキアツダイオーがあるであろう場所へと急ぐ。

なお、映画に出ていたのはカイゾグの方であつて、ガンダムではない。

いずれにせよ、最近でできた新しい趣味を誰かに知られる前に、何としても回収しなければ……そんな事を考え、詠美は走り出そうとした。

……その時である。

「桂あああああ……っ!!」

……その時、詠美は異様な叫び声を聞いた。

慣れ親しんだ九十郎の声であつたが、今まで聞いてきたどの声とも違つていた。

詠美は嫌な予感がした、猛烈に嫌な予感がした、背筋が凍るような思いをした。

「……九十郎？」

詠美が振り向く。

視界に入ってくるのは、携帯電話を放り投げて走る九十郎の姿、その少し先に九十郎の後輩・桂、そして……猛スピードで走るトラック。

「あ……」

そんな光景を前に詠美は何もできなかった。

指一本動かせず、声一つ発せられなかった。

「危ない！ 逃げて！」

吉音が叫ぶ、そして走り出す。

四六時中学園島内を忙しく走り回り、常人離れた体力を有する吉音であったが、桂と九十郎が居る場所までは遠く、暴走するトラックは余りにも速い。

追いつけない、間に合わない、どうしようもない。

そして……九十郎が潰れた。

バツファローマンのような体格のマツチヨが、トラックとぶつかり2つに千切れ飛んだ。

内臓が飛び散り、首も腕もあらぬ方向に折れ曲がり、腰から下がタイヤの下敷きに

なった。

誰がどうみても即死だった。

「う……………そ……………？　こんな……………あ……………ああ……………」

詠美はそれを、呆然と眺める事しかできなかつた。

「な……………何も無い空間から……………トラックが出てきた……………」

トラックと衝突する寸前、九十郎が全力で突き飛ばしたため、ねずみ屋の扉に頭から勢い良く突っ込んだ桂が、そう言つて気絶した。

この日、2人の少女が泣いた。

1人は武田光璃、もう1人は徳河詠美。

犬子と九十郎第28話『早雲』

……誰かに甘えたい。

光璃が、自身にそんな欲求があつたと気が付いたのは、2度目の生を受けてからだつた。

「なんだ、また寝れないのか？ ほら、こっちに来いよ。」

おれが子守唄を歌ってやるからさ、泣きやめよ」

九十郎はそう言つて光璃を布団に引つ張り込んで、覚えてばかりの子守唄を歌つた。

その頃、九十郎はまだ6歳の幼子だつた。

その頃、光璃は肉体こそ6歳の幼子であつたが、精神は戦国武将のままであつた。

光璃には母親に甘えた記憶が無かつた。

光璃には母親に抱かれた記憶が無かつた。

光璃には母親に悩みを打ち明けた記憶が無かつた。

光璃には母親に泣き言を漏らした記憶が無かつた。

光璃には母親に頭を撫でられた記憶が無かつた。

あるのは、母親に殴られた記憶。

「ねむれ、ねむれ、とつとねむれ、おれもねむてくんだよ、こんにやろう」
下手くそな歌が光璃を包む。

歌詞は最低最悪の内容だったが、声には温かみがあった。

九十郎の小さな手が、同じくらい小さな武田光璃の頭を撫でていた。

泣きはらす光璃を見て、九十郎は少しも嫌な顔をしなかった。

光璃はその日……童女のように涙を流し、九十郎の腕にしがみついた。

怖い、苦しい、不安だ、誰か助けて、妹に会いたいと叫んだ。

子供のように泣きわめき、子供のように喚き散らしていた。

その間ずっと、九十郎は光璃の頭を撫で、抱きしめ続けてくれた。

そして安らぎを感じていた、母親に抱かれる赤子のように。

戦国時代の武田光璃晴信が心の奥底で切望し、死ぬまで得られなかった多幸福感に身を委ねていた。

その日から光璃は、九十郎に沢山沢山我儘を言った。

戦国時代の武田光璃晴信には決して許されぬ甘い甘えを言った、泣き言も言った。

我儘を言えば言う程、戦国時代の武田光璃晴信が消え、心が幼子に戻っていく気分であった。

「九十郎、反射炉を作りたい」

九十郎は苦笑しながら頭を掻き、仕方ねえなと言った。

「九十郎、マジレンジャーの映画を見に行きたい」

九十郎は苦笑しながら頭を掻き、仕方ねえなと言った。

「九十郎、ハーバー・ボッシュ法をやってみたい」

九十郎は苦笑しながら頭を掻き、仕方ねえなと言った。

「九十郎、眠れない、眠くなるまで頭を撫でて」

九十郎は苦笑しながら頭を掻き、仕方ねえなと言った。

「九十郎、スクーターを作ってみたい」

九十郎は苦笑しながら頭を掻き、仕方ねえなと言った。

「九十郎、紅茶が飲みたい」

九十郎は苦笑しながら頭を掻き、仕方ねえなと言った。

「九十郎、あれやって」

九十郎は苦笑しながら頭を掻き、仕方ねえなと言った。

「九十郎、大好き」

九十郎は苦笑しながら頭を掻き、俺も好きだぜと言った。

何度我儘を言っても、怒鳴られなかった。

何度我儘を言っても、殴られなかった。

何度我儘を言っても、疎まれなかった。

何度我儘を言っても、見限られなかった。

何度我儘を言っても、殺意を向けられなかった。

何度我儘を言っても、九十郎は受け入れてくれた。

光璃は母にも、妹達にも、家臣達にも見せられない弱さを表に出せた。

我儘を言う度に、自分が九十郎に依存していくのを感じていた。

我儘を言う度に、自分が戦国武将でなくなっていくのを感じていた。

我儘を言う度に、自分が武田晴信ではなくなっていくのを感じていた。

それでもなお、光璃は九十郎を求め続けていた。

……

……

……

「……困った」

九十郎が買い出しに行っている頃、練兵館にて、武田光璃が唐突にそう漏らした。

「お困りかね、我が妹分よ。頼れる姉貴分に相談するというのはどうだろうか」

「17年前に好きだった男の子を、今はそれ程好きじゃないと言ひ出す女の子は薄情者

？」

「普通に薄情者だろうさ」

「担庵はばつさり切り捨てた。」

「この少女も割と屑である。」

「17年間一度も会ってない……」

「電話はしたのかね？」

「電話も通じない、手紙も出せない場所に居る……」

「少し興味があるな、写真があるなら出したまえ」

「持っていない」

「ううむ、妹分をからかうネタが増えるかと思っただが……」

……と、そこまで言っただけで担庵ははたと気づく。

「……冷静になつて考えてみれば。17年前の妹分は幼稚園にすら入っていないな。」

「てつきり妹分の初恋の話かと思つたが、違う人の話か。」

「いや待て、妹分ならベビーベッドの上で初恋を……うむ、流石にありえんか」

「酷い想像、非常識過ぎる光景だが、あいつならやりかねないといついつい考えてしまう」

「所が、光璃の恐ろしい所である。」

「初恋……うん、初恋だった……」

「初恋は基本的に実らぬものだよ、妹分。」

連絡もとれん男の事など気にせず他の男に走るが良いと伝えたらどうかね」

「会いに行く方法があるかもしれない」

「ならばとつとと会いに行くが良い。」

そしてヨリを戻すかきつぱり切り捨てるか選ぶが良いさ。

久々に会ってみれば、案外つまらぬ男だったと落胆するかも知れぬがな」

「やる気が出ない」

「そうかそうか、構う事は無いケツを引つ叩け」

担庵はだんだんイライラしてきていた。

「17年前はその事ばかり考えていた。」

劍丞に会いたい、妹達に会いたい、春日に、粉雪、心、兔々、湖依、それに一二三……
数えきれない位に居た大切な人達の下に帰りたいと考えていた。

この場所が……この場所が、あまりにも居心地が良いから」

「ええい面倒だ、何が何だか分からんし興味も無いが、

今すぐそいつの名前と元カレ殿の住所を教えたまえ妹分。

今から私と弟分で簀巻きにして連行しようではないか」

「九十郎は巻き込みたくない」

「ほう？」

坦庵の口角が吊り上がる。

弟分と呼ぶ少年をからかうネタが飛び込んできそうだという期待からだ。

「九十郎と剣丞を会わせたくない、九十郎には何も知らせずに全てに片を付けたい」
「何故かね？」

「……嫌われたくない。実は既婚者だったなんて言いたくない、教えたくない」

「まさかの熟年離婚の危機!? おいちよつと待ちたまえ！」

弟分が好きとか嫌いとか、男と女のホニヤララとか、そういう話なのか!?

その御婦人と弟分の年齢差はいくつなのだ!?

「同い年」

「わけがわからないよ」

思わずQBの台詞が出た。

「そうさな、とりあえず……うむ、とりあえず押し倒せとでも伝えておくが良い。」

我が弟分は現在長谷河殿にフラれて参っている状態だ、

押しまくればコロつと転ぶだろう。

弟分は巨乳好きだが、それに関しては今からではどうにもなるまい」

「分かった、今夜押し倒す。」

九十郎が持っているエロ本には全て目を通して、好みのシチュエーションは予習

「済」

幼馴染のエロ本を盗み見る武田信玄が居た。

戦国時代の武田光瑞晴信を知る者が聞けば、卒倒するような発言である。

「そうかそうか、では明日の朝はお赤飯だな。」

弟分のチェリー喪失をゲラゲラ笑いながら盛大に祝うとしよう」

話が終わり、担庵は持ち帰ってきた執行部の仕事の書類に目を落とす。

「そういえば最近、詠美殿が弟分にご執心じゃないか。」

アレの顛末はどうなるのだろうか？

その御婦人は詠美殿と恋のライバルという奴になるかもしれない」

「九十郎は家柄を気にするタイプ。九十郎にとつて、徳河の名が持つ意味は重い。」

2人がくつつくには、詠美の方から歩み寄りが不可欠……

歩み寄ってくる前に勝負をかける」

「秋月殿のように、恋人が複数という結末にはならんかね？」

「ありえなくもない、その辺りは九十郎の判断に任せるつもり」

「まあ、詠美殿が一夫多妻を認めるかどうかは別口であろうが……

案外、すんなりと落ち着くかもしれない」

両者共に話す事が無くなり、自然と無言になる。

担庵は無言で書類に目を通し、光璃は無言でエンジンオーG12（九十郎の私物）を組んだりバラシたり、炎神ソウルから音を鳴らしたりをして……

「徳河創雲は、北条早雲なのかもしれない」

そこに光璃が唐突に爆弾をブチ込んできた。

「我が妹分よ、エイプリルフールはとつくの昔に過ぎているぞ」

五十嵐妹を大江戸学園に編入させようぜプロジェクトの資料を手に、担庵がそう答えた。

光璃の戯言に付き合うのに疲れてきたのだ。

「エヴァの一件、光璃は殆ど関われなかった。

その間ずっと、光璃は本土で調べ物をしていた」

「ああアレかね……全部が全部終わってからひよっこり戻って来たな、妹分は。

君が居ればもう少し色々とできたというのに」

「由比雪那の件、執行部の件は知っていた、戻る事はできた。

でも……戻るべきじゃないと思った」

「何故かね？」

「光璃のやり方では血が流れ過ぎる。光璃が居たら、また志賀城のようにやる……

光璃は今でも、あれは正しい事と思っているから」

「大江戸城に生首3000個並べるとでも言うつもりかね？」

「光璃ならやる。西居も、詠美も、雪那も手ぬるい、生ぬるい。

でも……そんなやり方は学生らしくない」

余談だが、光璃はゴム弾ではない本物の銃火器がある場所に隠し持っている。

普通に銃刀法違反だが、武田晴信がそんな事を気にする訳が無い。

催涙ガスではない、致死性の毒ガスも隠し持っている。

殺傷能力を備えた本物のベトコントラップの作り方も知っている。

そして必要ならば、人間に向けて引き金を引く、民間人が何人いようが毒ガスを散布する、無関係な者を巻き込もうがトラップを使う。

戦国時代に……弱ければ殺され、弱ければ奪われるのが当然の時代に生まれ育った人間は、殺人に対する忌避感が薄いのだ。

「……流石の君でもそこまではやらんだろう」

「やる。光璃は……光璃は武田信玄だから」

それは紛れもなく、武田光璃晴信の本心であった。

しかし同時に、平和な時代に……人が人を殺す必要の無い時代に生まれ育った、ただの光璃になりたい、ただの光璃でありたいと願う気持ちもまた、彼女にとっては紛れもない本心であった。

「妹分、エイプリルフルは半年以上先の話だぞ」

「本気」

再度担庵は計画書から視線を外し、光璃の方に向きなおる。

なお後日、光璃は校長を人質に取った相手をどうするかの話し合いの席で、校長ごと殺そうとノータイムかつ真顔で言い放ち、やはり周囲をドン引きさせる。

戦国時代の人間は、人質に対する扱いがシビアだ。

切り捨てる時は躊躇無く、そして容赦も無く切り捨て、襲い掛かる。

そうでなければ生き残れないのだ、戦国時代では。

三真は光璃案に反対してくれた大岡想に感謝するべきである。

危うく屋敷にマスタードガスを散布されて死ぬ所であったのだから。

「エヴァが大江戸学園の生徒を人質にして、ニホン政府と交渉していた事件……」

あのニュースが流れた頃、光璃は本土に居た。

急いで戻ろうとしたけれど間に合わなかった。1時間後には全部が終わっていた。

迂闊だった、油断していた……九十郎を喪っていたら、光璃は一生悔やんでいた」

「では何故徳河創雲は北条早雲だと思つたのかね？」

「本土で手記を見つけた。早雲の手記」

「どちらの？」

「北条早雲の物、古いお寺に安置されていた……だけどその内容が異様。

それを説明するための仮説……北条早雲は、徳河創雲だったのかもしれない」

光璃の手には古びた書物があつた。

担庵がそれを受け取り、ペラペラと頁をめくる……紙や墨の感触は、確かに古い物だと感じられた、しかし……

『駄目だ、ヤツは聞き耳をもたない。何度直談判をしても同じ結果だ。

正直な話、織田信長や豊臣秀吉、徳川家康や武田信玄がどうなろうと知った事ではない。

この国がどうなろうとも、何人死のうが知った事ではない。

しかし、ヤツは朔夜と十六夜までもターゲットにしている。

私はそれを容認する事ができない。

ヤツの計画は既に進んでいる、放置はできない、どうかして止めなければ」

「……現代語ではないか!!」

担庵がツツコミを入れた。

「おい妹分、北条早雲が現代語を使っている上に、

生まれてすらいない織田信長や豊臣秀吉を話題に出しているぞっ!

これを書いた奴は時代考証を丸つきり放棄している!

それと誰だね朔夜と十六夜というのは!?

私は咲夜よりパチュリーの方が好きなのだが!」

「光璃は咲夜よりフランドール派」

九十郎は咲夜より紅美鈴派である。

『駄目だ、強すぎる、勝ち目が無い。』

ヤツを倒すどころか、ヤツの下に辿り着く事すらできなかつた。

武器が必要だ、ヤツとヤツの護衛と戦うための武器が。

ヤドリギではいくらなんでも勝ち目が無い。

だから作つた、ヤツの魔法に対抗する武器、ヤツの護衛を傷つける武器。

私はこの武器を剣魂と名付けた』

「……やつぱり現代語ではないか!」

担庵が再度ツツコミを入れた。

「おい妹分! エイプリルフルのつもりか!」

戦国大名がこのような文章を書く筈があるか!

しかも魔法がどうだの、剣魂を作つたとかも書いてあるぞ!」

「真面目」

「北条早雲がどうやって徳河創雲になれるというのだ!」

年代がまるで違うではないか!? 不老不死か何かかね!?

「光璃は武田信玄。戦国時代で死んで……気がついたら、この時代に生を受けていた。

同じような現象が起こったのかもしれない」

「妹分? もしかして……もしかして、本気で言っているのかね?」

「マージ・マジ・マジロー」

「マージ・マジ・マジカ、信憑性が一気に減ったぞ、妹分」

担庵が頭痛を感じながらも、ペラペラと頁をめくっていく。

出てくる話はどれもこれも荒唐無稽なものばかり……成程、この内容を馬鹿正直に説明しようとするれば、北条早雲Ⅱ徳河創雲なんて珍説をでっち上げる以外に無いだろうなと、担庵は思った。

『成功だ、全て私のシナリオ通りだ。』

大江戸学園が乗っ取られるリスク、学園島が破壊されるリスクを承知の上で、

あえてエヴァ・ヨーステンを泳がせた甲斐があった。

徳河吉音は私の想定通り、いや想定以上に理想的な性格になった。

今の彼女ならば喜んで身を投げ出し、喜んで死ぬだろう。朔夜と十六夜を救うため

に。

吉音がヤツに勝てばそれでよし、吉音が死ねば、イエヤスの最終プログラムが起動す

る。

いずれにしても朔夜と十六夜は守られる』

「しかもエヴァ・ヨーステンや吉音殿の名前まで出ているではないか。

いくらなんでも……」

「……え？」

光璃が顔色を変える。

この本を最初に発見し、何度も何度も、穴が開く程に見ていた筈の光璃が。

『馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な、こんな事はあつてはならない、こんな事はありえない。

何故詠美は斎藤九十郎に惹かれるのだ、詠美は秋月八雲と結ばれる筈なのに、

そうなるように仕向けたのに、そうならなければならぬのに、

それが計算の結果なのに、それが確定した未来の筈なのに。

駄目だ、何度計算をしても揺るがない、何度計算をしても止められない、

このままでは詠美は八雲ではなく九十郎と結ばれてしまう。

学園祭の3日目、バンドライブの時に結ばれる。

前提が覆る、計画が止まってしまふ、私のシナリオが崩壊してしまふ。

何としても食い止めなければならぬ、何としても。

この世界の鬼子を喪ったのが痛い、鬼子を使えばいくらでも処置ができるのに』

「おいおい、今度は我が弟分が出てきたぞ……」

「貸して！」

光璃が本をひったくる。

そして頁を見つめ……青褪める。

『斎藤九十郎をシナリオに盛り込む事はできない。九十郎は自己中心的な性格だ、

朔夜と十六夜のために死ぬと言われて、素直に頷く筈がない。

吉音を今の性格にするためにどれ程苦労したと思っている。

何度失敗を重ね、何度失敗作を処分し、やり直し、

何人の人間を殺害し、どれだけの人生を歪めたと思っている。

吉音を調整するために、どれだけ血が流れ、どれだけの死人が出たと思っている。

そもそも、再び大規模な調整を行う事は不可能だ。

鬼子は既に喪われ、ヤツの計画が発動するまでの時間も少ない』

「なんともきな臭い話だ。調整だの人生を歪めたの……」

まさかとは思うが、吉音殿の両親を殺したのは自分だとか書いてあったりはするまいね。

「だとしたら悪趣味が過ぎるぞ」

「坦庵が笑い飛ばす。」

笑い飛ばすが……何故か冷や汗が出てきた。

果たして我が妹分は、このような悪趣味な悪戯をするような人間だったのだろうか。

この手記の内容は笑い飛ばして良いものではないのではと。

『妙案が浮かんだ、一石二鳥とはこの事か。押し付けるのだ、ヤツのシナリオに。

九十郎には計算を狂わせ、未来を歪ませる能力があるのかもしれない。

仮にそうだとすれば、九十郎をあの世界に送り込めば、

ヤツのシナリオが歪み、破綻するかもしれない。

そうすれば詠美は九十郎と結ばれない、詠美は問題無く八雲に惹かれ、八雲と結ばれる。

そうすればまだ大丈夫だ、まだ私のシナリオは十分修正ができる、

大江戸キャノンは問題無く機能し、ヤツを討ち果たせる。

詠美はきつと泣くだろうが、決定的な破綻にはなりえない。

そして万が一、億に一つでもヤツのシナリオを歪ませる事ができれば、

吉音と詠美を危険に晒す事無く、殺す事無く、朔夜と十六夜を救えるかもしれない。

なあと失敗しても屑が消えるだけで、私のシナリオを歪ませる屑が、私に損は無い』

「……、今度は大江戸キャノンとききたか……」

なんとと言うか、ウチ学園ならキャノンの一つや二つ用意されていそうで怖いな」

「知らない……こんな頁は知らない……気が付かない筈が無い……」

光璃は震えていた。

何か異様な状況が起きていると、認めざるを得なかった。

「……妹分？ どうしたというのだ、震えているぞ」

担庵もまた、光璃の様子がおかしいと気づいた、気づかざるを得なかった。

そして思った、確信した……この文章は、悪戯やドッキリカメラの類ではないのだと。

『時空間の歪を上手く利用できれば、織田信長の幼少期に送れるかもしれない。』

ヤツのシナリオは織田信長が中心になっている。

織田信長の人格形成に影響を与える事ができれば、その後の歴史も大きく歪む筈だ。

成功するかは分からない、歴史が歪めば朔夜と十六夜にも影響が出るかもしれないが、

どうせこのままではヤツに根こそぎ収奪されてしまう、やってみる価値はありそう
だ。

こちらの世界の鬼子は既に喪われたが、あちらの世界ではまだ健在だ。

九十郎が邪魔になれば、すぐに処理ができる。

こちらの世界の鬼子のように、私を裏切らなければだが』

「織田信長の幼少期に送る……」

光璃の脳裏にある光景が浮かぶ。

前の生での出来事、死の間際に見た光景……

『考えてみれば、こちらの世界の鬼子は何故か九十郎に執着をしていた。

何かに気づいていたのかもしれない、私が気づけなかった何かに。

遠山朱金と江川太郎左衛門が余計な真似をしさえしなければ、

鬼子を密かに回収する事もできたというのに、捨てる必要まではなかったというのに。

仇討ちだのケジメだの、不合理な理由で突つ走る馬鹿共が、よけいな真似をしなれば』

「なんだこれは、今度は私と遠山殿の名前まで？」

私の本名は我が弟分妹分と、遠山殿、西居殿にしか教えていないというのに。

いや……戸籍や学籍を調べれば知る事はできるだろうが……

それに鬼子？ 鬼子とは一体……？」

「鬼子……鬼……まさか……？」

2人がさらに頁をめくる。

『あれは鬼子の自害だったのか。本来自害ができない鬼子が自らの命を絶つたために、

あえて遠山朱金を挑発し、あえて江川太郎左衛門の盟友を踏みにじったのではない

か。

いくら剣魂の援護があつたとはいえ、ただの人間に鬼子を殺せる筈が無いのだ。九十郎を守る為に、私の目を九十郎から逸らすために。

調査が必要かもしれない、向こうの世界の鬼子を、予定よりも早く目覚めさせるのだ。そして調べさせるのだ、斎藤九十郎を』

「おい、今度は頁が……馬鹿な、何も無い空間から新しい頁が浮き上がってくるだど……？」

「これは……」

光璃と担庵が震える手で頁をめくる……新しく表れた頁を……

『私は決めたのだ、何としても朔夜と十六夜を守ると。』

どんな手を使ってでも、誰を切り捨ててでも、あらゆるものを利用して守ると』

『邪魔はさせんで、武田晴信』

……その文字が2人の視界に入った直後、本が消えた。

まるで煙のように、まるで夢でも見ていたかのように、まるで最初から本など存在していなかったかのように消えた。

「消え……た……!?!」

「今の消え方、剣魂に良く似て……妹分! 今の本はナノマシンだったのか?!」

「わ、分からない………光璃にも……」

2人の少女が数秒、あつげにとられ……直後、携帯電話に手を伸ばす。

アドレス帳を呼び出し、『斎藤九十郎』の番号をプッシュする……

コール音が2人の耳に届く……2回……3回……4回……5回……

心臓が凍っていくかのような思いであった。

「何の用だセカンド幼馴染」

6回目のコール音の後、九十郎の不機嫌そうな声が聞こえてきた。

「弟分! 無事かね!」

「いや無事に決まってるだろうが!」

「買い出し一つで何で心配されなきゃいけないんだよ?! 小学生か俺は!」

「今どこに居るのだ!」

「八雲堂とねずみ屋の傍だよ、何でそんなに声を荒げてるんだ?」

「よし分かった、そこを動くんじゃないぞ。」

今すぐ私と妹分がそっちに行くからな、絶対に動くんじやないぞ！」

「いやふざげんなよ！ 学園祭まで時間が無いんだぞ！ 今すぐ準備を始めないと……」

「頼むから動くな！ 動いてくれるな！」

私も妹分もまだ全部を理解した訳ではないが、抜き差しならぬ状況なのだ!!」

「話にならねえな……光璃は居るのか？ 近くに居るなら代わってくれ」

「くっ……妹分、頼む」

担庵が光璃に携帯電話を渡す。

光璃は覚束ない手つきでそれを受け取り、少し震えながら耳元に近づける。

「……九十郎」

声が震えていた。

だがしかし、基本能天気な九十郎は異常事態に気づけない。

「光璃、担庵はどうしたんだ？ 買い出ししてるってのに急に動くなとか言い出して……」

ああそうだ、今日の夕飯何が良い？ ついでだから食料も買ってから……」

「お……お願い……無事でいて……」

光璃の瞳には涙が滲んでいた。

「……訳が分からん。 分かった分かった、動かないから早く来いよ」
「うんっ！」

「弟分、通話はそのままで。 何か異常を感じたらすぐに教えてくれたまえ」

「電話代とか大丈夫なのか？」

「そんな事を心配できる状況ではない!!」

そして2人の少女達が走り出す、九十郎が居るであろう八雲堂に向かい……いや、向かおうとして練兵館から飛び出した直後……

「桂あああああぁぁぁーっ!!」

……2人の少女達の耳に、九十郎の叫び声が聞こえてきた。

「九十郎っ!!」

「弟分っ!!」

2人が同時に携帯電話に声をかける。

返事はない……しかし、何か異様な喧騒が聞こえてきた。

事故だとか、人が轢かれたとか、医者を呼べとか、助け出せとか、同心を呼べとか……

「九十郎！ 九十郎おっ!!」

「返事をしろ弟分！ 頼むから返事をしてくれえっ!!」

君まで……君まで喪つてしまえば、私はどうにかなつてしまう……

どうにかなつてしまふではないか……」

……返事はない。

返事をする者は……斎藤九十郎は、この時既に絶命していた。

即死だった。

治療の施しようがない、一瞬で死亡していた。

この日、2人の少女が泣いた。

1人は武田光璃、もう1人は徳河詠美。

光璃は言った、『無事でいて』と。

その日初めて、九十郎は光璃の我儘を聞かなかつた、叶えなかつた。

だがしかし、九十郎が裏切つたとは思わなかつたし、思えなかつた。

人は想像以上に簡単に死ぬものだと、死ぬ時はあっさりと思ひ出した。

そして泣いた、だから泣いた、自分はもう2度と九十郎と触れ合う事はできないのだと。

同じ頃、1人の少女が決意した。

「徳河創雲、北条早雲……どちらでも構わん。

我が弟分に手をかけ、我が妹分を泣かせた事、必ず後悔させてやるからな。

必ず……必ずだ、覚えておくが良い……」

血が滲む程に拳を握り締め、唇を噛み締め、怒りと悲しみと絶望と憎悪の入り混じった鬼気迫る表情でそう決意した。

……

……

……

……そして、戦国時代。

誰もが死んだと思っていた九十郎は生きていた。

いや、大江戸学園の斎藤九十郎は確かに死んだ。

自称転生を司る神の手により、斎藤九十郎の魂が戦国時代に……正確に言うならば、別の並行世界へと送り込まれた。

今この場にいるのは大江戸学園の斎藤九十郎の記憶と人格を受け継いだ、ただの九十郎だ。

「どうしたの九十郎、さっきから何度も後ろを確認してるけど」

越後へ向かう旅路の中で、前田犬子利家がそう尋ねた。

「いや……さつきすれ違つた連中の中に、ファースト幼馴染が居たような気がしてな……」

「九十郎の幼馴染さんが……？」

でも確か九十郎って、未来の世界……で、生きてたんだよね？」

「ああ、あいつが戦国時代に居る訳がないんよな……」

たぶん他人の空似って奴だろうと思うんだが」

九十郎の予想は当たっている。

九十郎が目撃した人物は武田光璃ではない、武田薫信廉だ。

見た目が光璃に似ているだけの人物、他人の空似である。

「九十郎の、ええと……ふああすと幼馴染って人、どんな人だったの？」

「唐突に道場に押しかけてきて、やれ反射炉造りたいたいの、

大砲造りたいたいの、スクーター造りたいたいの言いだして、

無理矢理俺を肉体労働担当として引つ張り出す糞女」

酷い言われようである。

しかし、ノリノリでサンバルカンやゴーオンジャーのポーリングをやる程度には仲が
良い。

名前は……武田光璃。

そんなファースト幼馴染の事を思い出し……

「そっぴゃあいつら、あの時何の用で電話かけてきたんだろうな……

今にして思えば、何か様子がおかしかったような……」

そんな事を呟いた。

犬子と柘榴と九十郎第29話 『神道無念流くださいっす

!』

ここまでの物語は『犬子と九十郎』の物語であった。

ここから先の物語は『犬子と柘榴と九十郎』の物語である。

秋月八雲によって刻まれ、新田劍丞によって抉られるトラウマを心に抱える男、九十郎。

犬子をただの犬子と思えなくなった男、九十郎。

そんな九十郎が、犬子に力の限り『I love you』を叫ぶ物語。

そんな九十郎が、柘榴に魂を籠めて『I want you』を叫ぶ物語。

犬子と柘榴が、そんな九十郎にありつたけの愛を注ぐ物語。

この物語は、九十郎が柘榴の力と想いを糧に、自らを蝕むトラウマを乗り越え、犬子をただの犬子として愛せるようになるまでの物語……『犬子と柘榴と九十郎』の物語。

……

……

……

甲斐から越後へ向かう旅路は、拍子抜けする程に平穩無事に終わった。

途中、躑躅ヶ崎館の裏に簀巻きにして埋めた筈の虎松がしれつと合流してたり、九十郎が虎松を文字通り千尋の谷から突き落としたりしたが、それ以外は平穩無事な旅路であつた。

虎松は千尋の谷から突き落とされた程度でどうこうできる存在ではないので、九十郎の儂く涙ぐましい抵抗は徒労に終わるのだが……それはさておき。

「越後国主、長尾景虎、通称は美空……美空と呼んでちょうだい」

今、犬子と九十郎とダツシユで追いかけてきた虎松の3人の目の前に上杉謙信……もとい長尾美空景虎が座っていた。

「……このパターンは正直想定外だったよな」

「うん、そうだね……まさか……」

「普通に会えるとは」

基本能天気で考え無しで行き当たりばつたりな九十郎はともかく、犬子はアポ無しコネ無しで仕官を求めたため、普通に門前払いをされると覚悟していた。

粉雪から受け取った金子で暫くの間春日山城下に滞在し、長尾景虎についての情報を収集しながら士官の道筋を考えようと思つていた。

正直な話、最初のアプローチでいきなり会えるとは思つていなかった。

「タイム!」

「た、たいむ……?」

会つて早々意味の分からない言葉を投げかけられ、美空が首を傾げる。

第一印象は最悪である。

「横文字は分からないよ九十郎! すみません美空様、ちよつとだけお時間をください!」

「良く分からないけど、早く済ませなさいよ」

ジト目の美空を尻目に、犬子と虎松と九十郎が部屋の隅に集まって小声で作戦会議を開始した。

第二印象も最悪である。

「どういう事だ犬子!」

大名つて貧農の子が簡単に会える存在じゃないだろ常識的に考えて」

片腹痛い事に、日本史に疎い九十郎が常識を語っていた。

「ううくん、誰かの紹介つて訳じゃないし、

今の犬子は加賀百万石どころかただの素浪人だし、

犬子も九十郎もそこまで名が売れてる訳じゃないし……

「ごめん九十郎、犬子にも全然分かんないよ」

「騙して悪いがとか何とか言つて斬りかかつて来たりしないのか」

「か、考えすぎなんじゃないの？ 今の犬子達殺しても何の得にもならないよ。

恨みとかも買つてないよね？」

「うちのファースト幼馴染は普通にやるんだよ。

仲良くしようとか和解しようとか言つてニコニコしながら近づいて、

不意打ちして一網打尽つてヤツを。 山内一豊殺法つて名付けてたかな」

「大丈夫だ、クズロー。 向コウ、敵意無イ、畏、考エテナイ。

興味ト好奇心アル、オレ達、ワクワクシテ観察シテル。

チヨット、ウキウキシテル」

「何で分かるんだよそんな事」

「心読ンダ」

「ははは、何言つてんだこいつ」

読心も含めて虎松の言葉に一切の嘘偽りは無かったが、九十郎は全く信じていなかった。

虎松の見た目はガリガリに痩せた白髪幼女であるが、虎松は人間ではない。

虎松は鬼子、半分は人間、半分は鬼、半人半魔の怪異生物だ。

それ故に、精神を集中させれば他人の心を読むのだが……今の所、犬子も九十郎も

虎松を普通の子供だと思っている。

「……で、いつまで私は放置されるのかしら?」

美空が朗らかに微笑みながらそう尋ねる。

顔は笑っていたが、言葉がやや刺々しかった。

「クズロー、チョット苛立ッテル」

「言われなくても分かるよ。犬子戻るぞ、虎松は隅っこで大人しくしてろ」

「う、うん!」

「分カツタ」

これ以上面接官兼代表取締役社長の機嫌を損ねちゃ拙いと、犬子と九十郎が部屋の真ん中に戻って正座をし、虎松は部屋の隅で体育座りになった。

「前田犬子利家です!」

「九十郎です! 間違っても屑郎ではありません!」

犬子と屑が深々と頭を下げる。

屑郎は血筋や家柄を結構気にするし、権力者に媚びるのを躊躇しないタイプの屑である。

「元気があってよろしい。私が長尾景虎、通称は美空、美空と呼んで頂戴」

仕切り直りという意味も込め、美空はさつき言った自己紹介を繰り返す。

「本日は御面会を許して頂き、恐悦至極でございます」

「俺の事は犬とお呼びください！」

「九十郎！ 犬子のあいでんていていを奪わないですよ！」

「あいでん……？ 貴女、随分と愉快な男を連れているのね、苦勞しないのかしら？」

犬子は同情された。

実際の所、九十郎は滑稽で愉快である意味哀れな男ではある。

「時々苦勞はありますが、それ以上に恰好良くて頼りがいがあつて素敵なお人です！」

そして犬子が力強く断言する。

犬子の言葉は100%本心からのものだ。

だがしかし、九十郎はそれを信じ切れていない。

リップサービスか一時の気の迷いのどっちかだと思つている。

フラッシュバックのように長谷河平良を、遠山朱金を、そして秋月八雲を思い出し

……吐き気にも似た嫌悪感を覚えた。

「はいはい」馳走様。それはさて置き、仕官希望だったわね。

貴方達が門番に渡した紙……『履歴書』と言つたかしら？ 一通り目は通しておいた

わ。

尾張の織田信長の小姓から、赤母衣衆に抜擢、その後出奔……

経歴は悪くないわね、槍の又左衛門の勇猛さは越後にも聞こえてきているわ」

「ほ、本当ですか!？」

「で、そつちの……九十郎だったわね、」

美空は露骨にできれば触れたくないな〜という顔をした、そして美空は『特技・イオナズン』の記載を華麗にスルーした。

彼女の直感がそれに触れても疲れるだけだと告げていたのだ。

「パートタイム火付盗賊改方、パートタイム執行部員、前田利家のエサやり係、

パートタイム森一家、臨時日雇い用心棒……

まあ素敵、書いてある事が半分も理解できないわ」

美空は表面上は笑っているものの、内心ではどう扱ったものかと考えている。

しれっと前の生での役職を書いているが、この男は戦国時代の人間に火付盗賊改方や執行部員が通じるとでも思っているのだろうか。

「ええと……その……九十郎の言ってる事は犬子にも時々分かりませんが、

剣の腕は凄いです、あと優しく頼りになって手先が器用です」

「言葉が通じるって素敵な事ね、有難くて涙が出そうよ」

九十郎とは対照的に、美空の犬子に対する好感度は鰻登りだ。

美空は織田信長が今川義元に殺された後、目ぼしい将を引き込もうと考えて、前々か

ら尾張に密偵を放っていた。

全力で武田晴信と戦いながら急速に勢力を拡大している長尾家は人材が枯渇気味であり、一軍を任せられる指揮官、敵に切り込み戦功を挙げる武芸者、銭や兵糧の収集や管理、領地の運営ができる文官……ありとあらゆる人材を切実に求めている。

人材を貪欲に求めなければ生き延びられない常況にあるのだ。

そして槍の又左衛門こと前田犬子利家は、尾張の将兵の中でも見所があると美空が密かに注目していた人材であった。

前田利家が仕官を求めて春日山城にやって来たと聞き、美空は手を叩いて喜んだ。だから公務を一時中断して時間を作り、面会に応じたのだ。

九十郎という予想外のおまげが付いていたのだが……

「ところで、そつちの子は何なの？」

「飯やったら懐かれてついてきてるだけだ。」

邪魔なら放り出すぞ、いやむしろ邪魔なんで放り出させてくれ
「ちゃんと最後まで面倒を見なさいよ。」

尋常じゃない痩せ方してるけど、ちゃんと食べさせてるの？」

「毎食毎食バカスカ食ってるよ。おかげで我が家のエンゲル係数は酷い事になってる。」

とつと就職先を見つけないと3人揃って行き倒れになりそうだよ」

「えんげるけいす……そうね、えんげるけいすね、当然知っているわ、大変そうね」

「えんげる係数です、美空様。 えつと……俸禄と言いますか、お給金と言いますか……」

とにかく、家計の収入の何割が食事に使ってるかを表す数で……ええつと……」

派手に最低で、しかも戦国時代の人間には理解困難な言葉が次から次へと飛び出す。

美空の九十郎に対する好感度は、マイナス方向にコストしそうになっていた。

「なんとか追い返せないかしら……いっ……」

前田利家と仲が良さそうだし、下手な事を言つて機嫌を損ねて、

やっぱり仕官やめますなんて言い出されたら最悪だけど……」

そして九十郎が居るが故に、美空は頭を悩ませていた。

前田利家は欲しい。

武田との抗争が勃発する度に勇猛果敢な者から順に討ち死にし、敵陣に切り込み、最前戦で敵と斬り結べる人材が枯渇しかけていた。

粉雪と精鋭部隊赤備えが毎回毎回眩暈がするようなキルスコアを叩き出しているからだ。

いっそ自分が切り込み役をやればとも思うのだが、それをやると直江景綱・通称秋子に怒られるのだ。

だから前田利家は欲しい……率先して激戦区に飛び込む勇敢さと、槍の又左衛門の異名を得るまでに磨かれた武術を持つ利家が欲しい。

しかしこの珍妙な言動の男が付いてくるのはできれば遠慮しておきたい。

まあそれも……

「まあ、無理して追い出すのも……仕方ないわね、2人とも召し抱えますか」

……『できれば』遠慮したいであつて、『絶対に』避けたい訳ではない。

美空はふうとため息をつき、珍妙な言動の男を抱える覚悟を決めた。

美空の調査によれば、尾張の猛将・柴田勝家と槍を交え、引き分けに持ち込んだという稲生の戦いの際、前田利家を守った名も無き小物が居たらしい。

そして美空は、九十郎の無駄にマツチヨな体格を観察し、こう考える……この男の筋肉は普通じゃない、並大抵の鍛え方では造れないと。

もしかすると、この男が利家を守った小物なのではなからうかと。

犬子と九十郎が力を合わせて柴田勝家と戦い、引き分けに持ち込んだのではないかと。

もしそうだとすれば、前田利家だけを召し抱えて九十郎を放り出す事は、前田利家の魅力を半減させかねない。

「2人の仕官を認めるわ。　俸禄は……確か、織田では450貫で召し抱えていたのよ

ね?」

「あ、はい! そうです!」

「では倍の900貫を出すわ。積雪が多くて稲作に向いた土地が少ないから、

俸禄は土地や米じゃなくて金子で支払う事になると思うけど、そこは我慢して頂戴」

「ほ、本当ですか!?! 有難き幸せでございます!」

犬子……じゃない、私はまだまだ若輩者ではございますが、精一杯奉公致します!」

「若輩者はお互い様よ。私もまだ28歳……国主やつてる連中の中じゃ若い方よ。」

お陰で威厳が無いとか言われるし、国人衆は言う事を聞かないし、人も中々集まらないし」

「く、苦勞されてるんですね……」

犬子は一瞬、うつけ者だの若造だの当主失格だの色々言われながら、次から次へと襲い来る逆境に苦しみながら、

必死に尾張を守ろうとあがく久遠の姿を幻視した。

7歳で春日山城下の林泉寺に入門。

13歳で当時の越後長尾家の当主にして美空の母・長尾為景が死去、14歳で為景の跡を継いだものの、あまりの残念っぷりで越後豪族連合が揃って見限った、姉・長尾晴景から長尾家当主の座を奪う為に担ぎ出され。

基本的に言う事を聞かない豪族達を血を吐き胃を痛めながら少しずつ従えていき、19歳で長尾家相続、21歳で越後国主になり、ようやく苦難の日々も終わるかと思つたら武田晴信と殺し合う羽目になり。

多大な犠牲を払いながら、血を吐きながら続ける悲しいマラソンを延々と続け。

今川義元と裏で手を組み、村上義清とも影で手を結び、どうにかこうにか武田とまともに戦えるだけの国力を得たと思つたら義元死亡……端的に言つて苦勞しているのだ。

久遠の苦勞と美空の苦勞、どちらがより大きな苦勞を強いられているのかは分からないが、久遠も美空も負けず劣らず苦勞人なのだ、犬子は思つた。

できれば支えたいなと、助けられれば良いなと……犬子はそう思つた。

「まあ何にせよ期待しているわ。

とりあえず当面の住居や食事を用意させるから、まずは旅の疲れをとると良いわ」

そして和やかに会談が終わろうとしていた。

犬子と九十郎は想像していた以上に就職面接が上手く進み、ほっと胸を撫で下ろす。

美空は久々に無理難題を押し付けられた怒りと悲しみと心労を肴に飲むヤケ酒ではなく、降つて湧いたような幸運を肴に飲む祝い酒ができると笑みを浮かべた。

そこに……

「……つすか御大将おー……っ!!」

美空の腹心の部下、長尾が誇る最精鋭黒備えを率いる勇将、頼れる切り込み隊長……にして、数えきれない程に存在する美空のストレス源の一つが部屋に飛び込んできた。

「……犬子、人生って何なのでしょうね？」

美空が虚ろな目でそう呟く。

話しを聞く前から嫌な予感しかしなかった。

「美空様、頑張ってください。一生懸命お仕えますから」

美空の犬子に対する好感度は鰻登りである。

「何の用かしら、柘榴？今は来客中だと聞かなかったの？」

「その来客が問題なんすよ！」

「問題って……どういう意味なの？」

武田辺りと通じている間者か暗殺者だとも言うつもり？」

犬子は内心焦った。

もしかしてちよっと前に武田四天王・山県粉雪昌景を助けて、甲斐までの護衛を買っ

て出たのがバレたなか……と。

九十郎は俺のファンかな？サインでも欲しいのかな？

などと非常に能天気な事を考えた。

この男の平常運転である。

「九十郎って人、居ないっすか？」

「俺が九十郎だが……」

「神道無念流くださいっす！」

飛び込んできた女性が九十郎に向け、そう叫ぶ。

率直に言つて唐突かつ理解不能な発言であろう。

しかしそれが逆に九十郎の琴線に触れた。

前の生で武田光璃が九十郎を上手く利用したい時に使っていたマジックワード……それが今の発言に思い切り重なっていたのだ。

「あんだ、名前は？」

「七手組一番隊隊長！ 柿崎景家！ 通称は柘榴っす！」

「先代の頃から長尾に仕えてくれているうちの切り込み隊長よ」

目元を抑えながら、美空が柘榴の説明を補足する。

「そうか……さつき長尾に仕えさせてくれと言ったばかりでアレだが、前言撤回する」

「はあっ!?!」

予想外の展開に美空と犬子が同時に目を真ん丸に見開き、上ずった声を出す。

「俺は柿崎家の家臣になる！ 家臣が駄目なら下僕でも犬でも居候でもこの際構わん

！」

「九十郎! いきなり何を言ってるの九十郎!?

時々意味不明だったけど今回はいつもにも増して意味不明だよ!!」

せつかく上手くいきそうだった仕官話をぶち壊しかねない爆弾発言に、犬子は顔を真つ青にする……最悪手打ちである。

「とりあえず客分ではどうつすか?」

「乗ったあ!」

ノータイムであった、迷うそぶりは全く無かった。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!」

長尾景虎の家臣になりたいって願い出て頭下げた矢先に何を言ってるのよ!?

長尾が良いって言った舌の根も乾かないうちに柿崎でも良いって貴方!?

「馬鹿野郎、柿崎『でも』良いじゃない! 柿崎『が』良いだ!」

そんな事を言っているが、九十郎は柿崎景家がどんな人物なのか、何を成したのかを全く知らない。

ステーキを食い損ねた上、バリアーに押しつぶされて死にそうな名前だとか考えている。

この男は全国の柿崎さんに土下座して謝るべきである。

今、九十郎をこうまで突き動かすものは、『思う存分神道無念流ができるぜヒヤッハ』

！』という想いだけである。

「光荣つす！ 嬉しいつす！」

「柘榴も無邪気に喜んでるんじゃないわよ！ 説明しなさい！ 説明を！」

「御大将、知らないつすか？ 最近三河の辺りで名が売れ始めた剣術つすよ」

「神道無念流よね、一応、名前くらいは知っているわ。」

三河の本多忠勝が刀一本持つて鷲津砦に一人で乱入、

そのまま単独で砦を落としたつていう胡散臭あゝい噂よね」

「そうつす！ そしてその強さの秘密こそが神道無念流つて噂つす！」

「相当尾ひれが付いた話だと思いうわよ、たつた一人で砦を落とすなんて非常識じゃない」

「でも本多忠勝が恐ろしく強い武人つて事と、

神道無念流が強さの秘訣つて所は間違いないつす」

「分かつた、分かつたわよ。百歩譲つて神道無念流が凄い剣術だつたとして……

それが九十郎とどう関係があるの？」

「九十郎さん……三河の本多忠勝と榊原康政に神道無念流を教えたつて本当つすか？」

「ああ教えたが」

「なら柘榴にも神道無念流を教えてほしいつす！」

柘榴が九十郎の腕をがしつと掴んだ。

その瞳はシイタケの如くキラキラと輝いていた。

「超任せろ!」

九十郎が柘榴の腕をがしつと掴み返した。

その瞳は努力マンの如くメラメラと燃え盛っていた。

「え……? ちょっと九十郎? もしかして本気で柿崎さんの所に行くつもりなの?」

「犬子、俺がこの世で一番好きな言葉を教えてやろう……」

「い、一番好きな言葉……」

九十郎の妙な迫力、妙な威圧感に、犬子は思わず唾を飲み込む。

「神道無念流凄いですねだ!」

……犬子にとつても、美空にとつても予想外にしようもない言葉だった。

それはかつてファースト幼馴染が九十郎を上手く調子に乗らせ、自分の思う通りに動

かそうとする時に使うマジックワード。

基本神道無念流だけやっていれば幸せな斎藤九十郎にとって、何よりも嬉しく、何よ

りも気分を高揚させる台詞なのだ。

パタリ口の小銭の音を聞かせるのと同じくらい効果覲面なマジックワードなのだ。

もし粉雪がこのしようもないマジックワードを知っていたら、九十郎は甲斐に残っていた。

まず間違いなく残って粉雪に全力で尻尾を振っていた。

そして葵がマジックワードを知ってたら、九十郎は三河から出奔しようとしなかった、石に噛り付いてでも三河から出ようとしなかった。

いずれにせよ確かな事は……この日、犬子と九十郎は柿崎家の客将待遇で迎え入れられた事、そして美空は今日も涙の味がする酒を飲んだという事だ。

頑張れ美空、負けるな美空、明日はきつと良い事があるさ……たぶん。

犬子と柘榴と九十郎第30話 『おビール様!』

九十郎にとって美空は長尾景虎……後に上杉謙信に改名する歴史上の偉人である。

柘榴はただの柘榴……バリアーの暴走から逃げそこなって死にそうな名前だなあ位にしか思っていない。

九十郎は日本全国の柿崎さんに土下座して謝るべきである。

松葉はただの松葉……ロツズ・フロム・ゴッドとか撃ってきたり、喉が枯れ果てるほどに人間賛歌を歌い始めたりしたらやだなあ位にしか思っていない。

九十郎は日本全国の甘粕さんに土下座して謝るべきである。

秋子はただの秋子……ナルコレプシー発症しそうだなあとか、何の脈絡も無くやつほー、筋肉筋肉とか言い出しそうだなあとか、謎ジャム食わせてこねえかな位にしか思っていない。

九十郎は日本全国の直江さんと秋子さんに土下座して謝るべきである。

空はただの空……その内後継者争いの中で死ぬ可哀想な人、素直で良い子だし可能なら助けてやりたいけど、歴史を大きく変えたらこつちの身も危ういし、どうするかなあ位には思っている。

なお、後継者争いで死ぬのは上杉景勝ではなく上杉景虎の方である。

愛菜はただの愛菜……クソうざいガキ位にしか思っていない。

現状、九十郎からの好感度は綾那や虎松に匹敵する程に低い。

九十郎は日本全国の直江兼続ファンに土下座して謝るべきである。

名月は北条景虎……後継者争いに勝利して五大老にまで上り詰める凄い人と思っ
ている。

なお、後継者争いに勝利するのも五大老になるのも景勝……つまり空の方である。

沙綾はただの沙綾……ゲラゲラ笑いながら酒を飲むノリの良い奴。

貞子はただの貞子……ゲラゲラ笑いながら竹刀をぶつけ合えるノリの良い奴。

そして犬子は前田利家だ。

最初に会った時からずっと、相も変わらず前田利家のままだ。

九十郎は未だに犬子をただの犬子だとは思っていない、思えない。

そんな九十郎は越後に辿り着き、犬子共々柿崎家の客将待遇で迎え入れられた。

かかれ柴田に引き佐久間、米五郎左に木綿藤吉、槍の又左と退くも進むも滝川……右
を見て左を見て偉人だらけの尾張に居た頃に比べると、のびのびと働ける職場で
あった。

実は誰がどんな事をやって有名になったのかとかあんまり知らないのだが、とりあえ

ず戦国時代に名を馳せた、歴史上の偉人だという事だけは知っていた。

それ故に順応するのにも早かった。

のびのびと、いきいきと練兵館を建て（今生で2回目、前の生を含めると5回目）、柘榴パワーアップ計画を遂行しつつ弟子を募って竹刀を振っていた。

今日も今日とて、春日山城下に佇む剣道場・練兵館で竹刀がぶつかる音が響く。

面をつけたマツチヨと少女が向かい合い、剣の腕を競い合っていた。

「くそ、これで3勝7敗……今日も負け越しか。

たまにはこつちに花持たせろよな」

「ふふくん、まだまだ長尾最強の座は明け渡せませんからね。

空様のためにも、アレのためにも」

「けつ、いつか絶対吠え面かかせてやるからな、覚えてろよ……貞子」

マツチヨと少女が一礼し、面を脱ぐ。

一方はこの道場の主・九十郎。

もう一方は美空の信頼厚い古参の剣士・小島弥太郎貞興、通称は貞子。

呪いのビデオとも迷惑メールとも関係が無い、ただの貞子である。

「いやあ、良いですねえ、そそりますねえ……」

ちよつと前までは竹の棒で鍛錬なんてと思いましたが。

殺さない事を考えずに腕を競えるというのは実に面白い、心地良い」

貞子は九十郎から手渡された手ぬぐいで額を拭い、満足そうに、嬉しそうに笑った。

越後でも……いや、日ノ本でも有数の武芸者である彼女にとつて、九十郎との立ち合いは中々刺激的で興味深いものであった。

「ああ、先人達の発想力には脱帽する他ないよな。

神道無念流は稽古中に略打、寸止めはしない。

防具と竹刀が無いと訓練する度怪我人増えるね、ぼぼぼくんつとなつちまう」

「ぼぼぼくん」

「そう、ぼぼぼぼくんだ」

貞子がケラケラと笑い、九十郎がゲラゲラと笑う。

何がどう面白いのかは余人には理解し難いが、ノリや波長のような何か合致したのかもしれない。

「それにしても九十郎殿はお強いですねえ。

今日は運良く勝ち越せましたが、力比べに持ち込まれたら押し切られますし、

力比べになるように立ち回るのもお上手で……」

貞子が九十郎を賞賛する。

正確に言うならば、賞賛しているのは九十郎と言うよりも九十郎が身につけた神道無

念流であるのだが、九十郎的には自分が褒められるよりも神道無念流を褒められた方が嬉しい。

長い年月をかけて洗練された立ち回りや、剣や重心の動き、筋肉のつけ方……参考にすべきポイントが何個も何個も発見できた。

「練兵館は筋力と体力の向上も視野に入れた鍛錬をしているからな。

筋力で上回っているなら筋力で勝とうとするのが定石さ」

そう言つて九十郎はふふくと胸を張る。

自分で編み出した訳でもないのに偉そうな男である。

「敵の弱みと強みを冷静に見極める眼力も、強みを殺し弱みを攻める精神性も、

不利と思えば迷わず退く度量も……いやはや、怖い怖い」

なお、実戦での九十郎は自分より強い相手が見えたら躊躇無く逃げ出すチキン野郎である。

もつとも、その臆病さがあつたが故に稲生や桶狭間での合戦や、三河での逃走劇を掻い潜れたのであるから、良し悪しと言えるかもしれない。

「そ・れ・よ・り・も……九十郎さあん……」

直後、貞子の瞳が妖艶に輝く。

蠱惑的な仕草で、艶めかしく九十郎に詰め寄る。

健全な成年男子であり、しかも巨乳好きである九十郎が思わず前かがみになるエロさであった。

「今日も私の勝ち越しですねぇ……約束通り『アレ』をお分けして頂けるのですよねえ……」

「あ、ああ、アレか、アレだな……いつも通り裏庭の井戸で冷やしてあるから持つていけよ」

肉棒プチ込みてえなあとか不埒な事を考えつつ、それを悟られまいと視線を逸らしながら九十郎が答える。

このエロ男は死んだ方が越後……いや、日ノ本は平和で健全になるかもしれない。

「おビール様！ 今参ります!!」

バビュン！ という擬音と共に、貞子が裏庭にカツ飛んで行った。

剣士モードは完全に消え去っていたが、貞子はいつもこんな感じである。

「おビール様と聞いて！」

バアン！ という擬音と共に、長尾の宿老・宇佐美沙綾定満が練兵館に飛び込んできた。

「沙綾様！ おビール様をお連れいたしました！」

「おビール様か！」

「おビール様ですー!」

「おビール様!! おビール様!!」

2人のテンションは最初からクライマックスであった。

最早言葉は要らなかつた。

「……お前ら、つまみは何が良い」

「柿。ピーお願いしますー!」

「無論柿。ピーじゃー!」

……前言撤回、おつまみの要求だけは必要だつた。

追撃の柿。ピーでテンションが天元突破する。

「全く、現金な連中だよな全く……ほれ柿。ピー持つて来たぞ。」

ピーナッツはアメリカ原産で手に入らなかつたから、炒つた大豆で代用してるがな」

「やめられない!」

「止まらない!」

「何のために生まれ、何をして生きるのか……そう、それはきつとおビール様に出会うため」

「こんな素晴らしいおビール様を貰える私は、きつと特別な存在なのだと感じました」

2人の女たちがケラケラとハイテンションに笑いながらビール……もとい、おビール

様を飲み干す。

ぐびつ、ぐびつ、ぐびつと豪快に飲み干し……

「美味いっ!!」

口に泡ひげをつけながら、満面の笑みを浮かべた。

「あゝあ、早く犬子と柘榴が帰ってこないかなと……」

口では文句を言いながらも、九十郎は2人を追い出そうとはしなかった。

1人道場に残されて暇だったというのもある。

しかしそれよりも重要な事は案外単純……ゲラゲラ笑いながら酒を飲む連中が結構好きなのだ。

メソメソと泣き言を言いながら酒を飲む連中や、ウダウダと文句や恨み言を言いながら酒を飲む連中に比べれば、百倍も千倍も好ましいと思っっている。

ビールの一本や二本、くれてやつても惜しくないと思える程度には好ましく感じている。

そして思い出す……前の生でのダチ公、遠山朱金の事を。

そして思い出す……遠山朱金と長谷河平良が、秋月八雲の前で顔を赤らめ、服を……

「……早く戻って来いよ、犬子」

九十郎がこめかみを抑えて視線を伏せていた。

頭が痛かった、心臓が痛かった。

何故痛いのか、何が辛いのか、必死に視線を逸らしながら。

それに気づく者は誰もいない。

犬子も気づいていない、美空も気づいていない、葵も歌夜も粉雪も、誰も……
「ただいまっすーっ!!」

「九十郎、ただいま〜!」

……否、たった一人だけ、薄々ではあるが感じていた者がいた。

「こら、また辛気臭い顔してるっすね。」

九十郎はニヤニヤしながら竹刀振ってる時の方が男前っすよ」

「そんな事はないですよ柘榴様。」

九十郎は何時でも何処でも男前です、犬子は断言しちやいます」

「あはは、あばたもえくぼってこういうのを言うんすかね」

「いやまあ、惚れた弱みってのはあるかもですけど……」

たった一人……柘榴だけは薄々感づきつつあった。

前田利家ではなく、上杉謙信でも、山県昌景でもなく……ただの柘榴だけが察していた。

九十郎の心を傷つけ、今なお蝕み続ける何かがあると。

「いきなり背後から抱き着く柘榴、胸が当たってるぞ胸が」

「顔をにやけさせながら言っても説得力が無いよ、九十郎」

「九十郎を笑わすにはこの手が一番つすからね」

「ああそうさ嬉しいさ！ ああそうさ巨乳好きだよ！ おっぱい大好きでございますよ
！」

俺に胸を押しあてた程度で勝ったと思うなよコンチキショウが!!」

色々な意味で酷い男である。

「へえ、巨乳好きですか？」

ビール臭い貞子が九十郎の背中に胸を押しあてる。

九十郎はガタイがでかいので、柘榴1人が背中全体を占有できていない。

空いたスペースにもう1人潜り込むのは余裕であった。

「聞きましたよ、九十郎殿、巨乳好きの方でしたか？」

「……何の事かな？」

「今更誤魔化すなんて無理ですよ。」

ほらほら、気持ち良いですか？ 柔らかいですか？」

酔っ払いがニヤニヤと笑いながら、男にしなだれかかり、胸を上下左右に揺さぶりながら押し当てる。

九十郎好みのナイスでっばいが背中に柔らかな感触をプレゼントし……

「ははは、この俺の鋼の意志がその程度で陥落するとてもビールもう一本どうですか」
ノータイムで巨乳の感触に屈する男が居た。

「沙綾様、追加のおビール様をお連れしました〜!」

「かっかっかっ、でかしたぞ貞子」

貞子はノータイムで九十郎から背を胸、酒飲みーズ再起動、おビール様を堪能していた。

「……解せぬ」

九十郎の眩きが虚しく掻き消える。

「わ、私は九十郎の事大好きだよー」

「柘榴も結構気に入ってるっすよ」

「ありがとな、犬子、それに柘榴……」

「それにしても柘榴殿は羨ましいですね。」

こんなに美味しいおビール様を毎日味わえるなんて。

私は毎回毎回おビール様と弟子入りを賭けて勝負を挑まなければならないのに」

「嬉しい誤算っすね。それで九十郎、今日の戦績はどうだったっすか?」

「3勝7敗、今日も負け越しだよ」

「貞子の練兵館入りの日はまだまだ遠そうっすねえ」

「ふんっ！ 俺を倒した程度で勝ったと思うなよ貞子！

犬子は俺よりも強いんだからな!!」

「ねえ九十郎、その台詞情けなくならないの？」

「犬子は練兵館で神道無念流を学んだ者、

犬子が勝つて事は俺の教え方が上手かったという証拠……

つまり神道無念流の勝利と言う事だ」

「九十郎的にはそれで良いんだ……」

九十郎は自らの勝利より、むしろ神道無念流の勝利の方が嬉しい男である。

「いや、楽しいわね自転車つての。 思わず春日山城下を一周してきちゃったわ」

そんな中に、新しい玩具……もとい自転車で遊び、気分良く汗をかいている美空が

入って来た。

「……て、酒臭あつ!? 何よこれ、道場よねここ!?

練兵館よね!?! 私入る所間違えてないわよねっ!?!」

即座に道場らしからぬ光景にツツコミが入る。

「間違いなく練兵館っすよ、御大将」

「今は吞兵衛共の溜まり場になっているがな、不本意ながら」

「また貞子とお酒賭けて試合をしたの？」

「あんたもうちよつと頑張りなさいよ、このままだと道場が飲み屋になるわよ」

「毎回毎回惜しい所まで行くんだがな……明日はきつと勝つー!」

「とかなんとか言いながらも、九十郎はバーカウンターと赤提灯を増設して、おでんとか焼き鳥でも売り出したら入門希望者が増えるんじゃないかなとか考えてる。」

「こういう行き当たりばったりな思いつきで入門勧誘キャンペーンを開始し、作り過ぎた景品を泣く泣く光璃と担庵に差し出すのが九十郎という男である。」

「基本的に能天気で後先を考えない男なのだ。」

「明日のおビール様も楽しみにしていますよ、九十郎殿」

「場合によっては犬子をけしかける」

「他力本願な男である。」

「試合かあ……犬子達今、向こう数年分の収支を整理したり、

柿崎家の貸借対照表を作って忙しんだけどなあ……」

「犬子に抜けられたら作業が止まっちゃうっす! 断固反対っす!」

「だがしかし、本人は乗り気ではなかった。」

「くそそう、簿記なんて教えるんじゃないかな」

「超役に立ってるっす! 柘榴が帳簿の中身を理解できたのは生まれて初めてっすから

「！」

「こら柘榴！ 自慢げに胸を張るんじゃないわよ！」

……で、簿記とか貸借対照表って何の事かしら？

もしかして柘榴に理解させられる帳簿の書き方の事かしら？」

「ええつと……簿記は1年の収入と支出を纏めて、

自分が今どのくらいの財産を持っているかを明らかにするための帳簿の書き方で、
貸借対照表は財産目録のような物です」

「分かりやすいの？」

「超分かりやすいっす!!」

「ねえ犬子、ちよつと……」

美空がにこやかに笑いながら犬子を手招きした。

「駄目っす！ まだ柿崎家の帳簿整理が終わってないっすから！」

しかし、付き合いの長い柘榴は気づいた。

美空の目は獲物に飛び掛かるタイミングを計る肉食獣の目に似ていたと。

「良いじゃないのちよつと位！ 国主命令で無理矢理引つ張るわよ！」

「犬子はもう柿崎家の家族っす！ いくら御大将でも譲れないっす！」

今月だけで2件も不正蓄財を検挙できたっすし！」

「不正蓄財!? 何よそれ、簿記を使うと不正蓄財が見つけれられるの!?

ちよつと柘榴いくらなんでもそれは聞き捨てならないわよ、詳しく教えなさい!!」

「ええつと、損益計算書と貸借対照表は、

ちやんと作れていれば貸方と借方の合計が一致するんですけど、

どこかに嘘の報告とかがあると……」

「犬子それ以上言っちゃ駄目です!」

御大将は首に縄付けてでも連れて行くこうとするつすよ!」

「柘榴! 良い所で話を遮らないで!」

「だから駄目ですよ! せめて柿崎家の帳簿整理が終わるまで待つてほしいつす!」

「犬子、柿崎家の事よりも越後全体の事を考えるべきよね! ねえ!」

「ええ!? いや、あのう……」

「犬子の主君は柘榴つす! 御大将と言えども頭ごなしに命令はさせないつす!」

「ちよつとだけ話を聞くだけよ! ちよつとだけ! 先つちよだけえつ!!」

「話を聞いたら絶対に実践させようとするつす!」

御大将の性格は良く分かつてるつす!!」

美空と柘榴が犬子の頭の上で睨み合う。

今にも取っ組み合いが始まりそうな雰囲気の中で、犬子がオロオロと視線を動かす。

「……いつそ両側から腕を引っ張り合って決めたらどうだ」

そこに九十郎が不穏な言葉を投げ込んだ。

それはかつて大岡想がある紛争を解決するために提案した方法だが、九十郎はその話のキモの部分までは覚えていない。

普通にどちらかが諦めるまで引っ張らせるつもりであった。

「それよ!」

「それっす!」

美空と柘榴が即座に反応する。

そして美空が犬子の左腕を、柘榴が犬子の右腕をがっしと掴んだ。

冷静になって考えれば不合理極まりない決め方だが、今の美空は冷静ではないし、柘榴は基本ノリと勢いで生きている。

「え? ちょっと柘榴様、本気ですか!」 美空様ももう少し冷静に……

九十郎も変な事言っていないで止めてよ!!」

「レデイ、ファイッ!!」

「ファイッ!!」

「ファイッす!!」

「いだだだだだだーっ!! ちょ、待って……痛い痛い痛いですーっ!!」

美空様あ！ 柘榴様もやあくめえくてえく……」

……

……

……

……15分後。

「自転車、私の分も作りなさいよ」

本気で痛がる犬子が可哀想になつて手を放し、犬子争奪戦に敗北した美空が、ぶすゝつと不機嫌そうな顔をしながら九十郎に言う。

「嫌だ」

「何で？」

「めんどい、そんな時間があったら柘榴を鍛えてたい」

九十郎は神道無念流だけやっていれば幸せな男である。

当然、神道無念流をやる時間が減るような提案にはおいそれとは乗ってこない。

「良いじゃないの、私は越後の国主よ。」

主君の主君なら主君も同然じゃない」

「なんだそのアニメ版聖闘士聖矢理論は。」

父親の父親は父親じゃねえ、ただのおじいちゃんだ」

「おじいちゃんの言う事も聞きなさいよ！」

「お小遣いもくれないおじいちゃんを敬う理由なんてないね」

無茶苦茶な理論である。

「……気持ちは分からなくもないわね」

幼少の頃に林泉寺に預けられ、越後が血生臭くなるまで延々と放置され続けた美空がぼそつと呟く。

おじいちゃんからお小遣いを貰った事も無ければ、親兄弟と遊んだ事も無い。

彼女として人の子だ、親に甘えたい時もあったし、兄弟を頼りたくなつた時もあった。親とは死ぬまで対面が叶わなかったし、姉は自らの手で失脚させたのだが。

「分かったわ、国主うんぬんは持ち出さない。ならせめて作り方くらいは教えなさいよ」

「見りや分かると思うが結構単純な構造だぞ。

バラして観察すればあつという間に作れるさ」

「柘榴の持ち物を取り上げて分解するのちよつと躊躇われるわ」

「じゃあ諦めろ」

「嫌、諦めたくないわ」

「御大将、九十郎に頼み事をする時は背中におっぱいを当てるつすよ」

「え、本当に? どれどれ……ってそんなはしたない真似ができるかっ!!」

美空はギリギリの所で理性と慎みを思い出した。

「よし、じゃあ揉ませろ。そしたら自転車作ってやるよ」

「さつきより悪化してるわよ! できるかそんなはしたない真似も!」

「パイズリ」

「言葉の意味は分からないけど断固拒否するわ!」

「融通の利かない上杉謙信だな」

「私は長尾よ! な・が・おっ!! あんた何回他人の名前間違えたら気が済むのよ!」

「しよすがねえだろ、上杉謙信のイメージが強すぎるんだから」

「そもそも上杉謙信って誰よ!? 知らないし聞いた事も無いわよ!」

「お前だ」

「……ちよつとこつち来なさい」

美空は九十郎の手を引き、道場の隅っこへ連れて行つた。

そして周りに聞こえないよう小さな声で話しかける。

「ここ何年か関東管領を引き継ぐために上杉憲政の養子になる計画進めてるけど……」

もしかして柘榴から聞いているのかしら?」

「いや、初耳だが」

「何にせよ、その辺の事情を何時頃公表するかは検討している所だから、私の事を上杉呼ぶのは本当に止めなさい。」

どこに武田や北条の間者が潜んでいるか分からないのよ」

「分かった分かった、長尾だな。長尾……何だっけ？」

「長尾景虎よっ!! か・げ・と・らあつ!!」

美空が怒りに任せて九十郎の後頭部をペチペチと叩く。

グウで殴らない辺り、まだ冷静さを残していると見えなくもないが、九十郎の言動は手打ちにされても文句を言えないレベルの無礼である。

「深く傷ついたわ、謝罪と賠償の意味も込めて自転車を作つて献上しなさい」

「めんどい」

「ちよつとは言う事を聞きなさいよ! 本気で首に縄を付けて引つ張るわよ!!」

そのまま縛り首にしたら世の中は平和になるのではなからうか。

どうしたものかと考え込む美空の下に、柘榴が寄つて来て……

「御大将、ヒソヒソヒソ……」

……何かを耳打ちした。

「私も練兵館に弟子入りするわ」

「弟子の頼みとあつちや仕方ねえなあ。」

明日の夜明けまでに完成させて届けるから待ってるよ」
マジックワード炸裂。

九十郎はノータイムで手のひらを返し、2台目の自転車を作る為に練兵館を飛び出していった。

犬子と柘榴と九十郎第32話 『ハーバー・ボツシユ法』

九十郎は前の生でも今生でも、基本的に好き嫌いの激しい男である。

例えば徳河詠美が練兵館に訪ねて来たら……

『よく来たな詠美、執行部の手伝いか？ それとも神道無念流やつてくか？』

と、にこやかに笑いながら応対するが、これが吉音だったら……

『とつとと帰れクソガキ』

と、即座に追い返そうとする。

例えば酉居葉蔵が練兵館に訪ねて来たら……

『よう酉居、元気そうじゃねえか。また俺の神道無念流が必要になったか？』

まあ立ち話も何だ、今紅茶を用意するから上がって待っててくれ』

と、にこやかに笑いながら応対するが、これが鬼島桃子だったら……

『何の用だ鬼退治桃太郎先輩。用事が無いならとつとと帰ってくれませんかねえ、

あんたが居るといつ道場がぶつ壊れるか冷や冷やするんだよ』

と、即座に追い返そうとする。

例えば五十嵐光臣が練兵館に訪ねて来たら……

『おお五十嵐か、久しぶりだな。 珍しいじゃないかお前がこっちに来るなんて。』

今度はどんな無理無茶無謀をやらかす気だ？ 手伝ってやるから話していけよ』

と、にこやかに笑いながら応対するが、これが五十嵐文だったら……

『五十嵐なら来てねえよ、早く帰れ貧乳』

と、即座に追い返そうとする。

例えば比良賀輝が練兵館に訪ねて来たら……

『平良賀じゃねえか、今度はどんな悪巧みだ？』

それとも面白そうなネタでも見つけたか？

おっと玄関じゃ話せないよな、とりあえず応接室に上がっていけよ』

と、にこやかに笑いながら応対するが、これが仲村往水だったら……

『ぶぶ漬けやるから帰れ』

と、即座に追い返そうとする。

例えば長谷河平良が練兵館に訪ねて来たら……

『良く来たな長谷河、出入りか？ 捕物か？ 俺の神道無念流が必要なのか？』

ふつつつつつ、そうまで言われちゃ仕方ねえな、

ゴーカイジャーよりも派手に暴れてやろうじゃねえか』

と、にこやかに笑いながら応対するが、これが佐東はじめだったら……

『用事はなんだ？ 聞いてやるから早く言つて早く帰れマセガキ』
と、即座に追い返そうとする。

例えば遠山朱金が練兵館に訪ねて来たら……

『遠山か、ちようど今は暇だった所だ、

博打でも覗きでもバツティングセンターでも付き合うよ……

何、エロ本密輸するから手伝えだど？ お前も好き者だな……で、俺は何をすれば良い？』

と、にこやかに笑いながら対応するが、これが逢岡想だったら……

『よくぞここまで辿り着いた、南町奉行……だがしかあしっ!!』

ここには漢達と遠山の夢が！ 希望が！ そしてエロスが詰まっているのだあつ!!

この俺、斎藤九十郎が！ 練兵館が！ 神道無念流が！

夢と希望とエロスを護る最後の砦となつてくれるぜえっ!!

さあかかつてこい大岡あつ！ 貴様のはらわたを喰らい尽くしてくれるわあつ!!』

と、即座に追い返そうとしてついてきていた吉音にボコられる。

馬鹿は死ななきや治らないという言葉はあるが、そんな九十郎の性格は一度死んで戦国時代に生まれ変わっても変わらなかつた。

九十郎の朝は早い、東の空が白み始めるよりも早く起き、顔を洗い歯を磨き、朝の鍛

鍊の準備を始める。

「来たつすよ、九十郎」

準備が終わった頃に、柿崎景家・通称柘榴が練兵館を訪ねてくる。

「良く来たな柘榴、今日も柔軟と筋トレから始めようか」

と、にこやかに笑いながら応対する。

「何やってんだ柘榴、早く上がれて……何？ おはようのキスをしろだ？」

お前な……まあ良いか、もうちよつとこつち寄れ」

ちよつとした無茶振りがあつても、ちよつと苦笑しながら対応する。

当の本人も満更でもなく……まあ、基本的に九十郎はエロエロ野郎だ。

その後、明け方まで鍛鍊。

基本的に神道無念流だけやっていれば幸せな九十郎にとって、至福の時間が流れる。

朝の鍛鍊が一通り終わると、九十郎は3人分の朝食を用意し、犬子を起こす。

「犬子、起きろ」。今日の朝メシはスクランブルエッグだぞ」

今日はややぞんざいな起こし方だったが、とにかく起こす。

犬子は毎日毎日、穴だらけだった柿崎家の収支管理を整理整頓する作業に駆り出され、最近は寝不足気味、過労気味なのだが、情け容赦無く起こす。

しかも時々セクハラを交えつつ、犬子を起こす。

「九十郎……もうちよつと寝かせてよ……」

「ファースト幼馴染みたいな事を言うなよ。早く起きないとおっぱい揉むぞ」

なお、この男はファースト幼馴染の胸も情け容赦なく揉んでいた。

実は既婚者とも、実は武田信玄だとも気づいていなかったものの、それはそれとして普通にセクハラ、普通に通報案件である。

その後、犬子と柘榴に朝食をとらせ、着替えを手伝い、2人が春日山城に向かうのを見送る。

柘榴は柿崎城、猿毛城の城主であるので、本来なら春日山城ではなく柿崎城に出勤して仕事をすべき立場であるのだが……柘榴は正直内政向きの性格ではないのと、上杉の軍事の要と言いうる存在であるので、特別な用事が無い限り春日山城に詰めているのだ。

1人練兵館に残った九十郎は、掃除に洗濯、食器洗いといった家事をこなし、余った時間を趣味の小物作りに費やしていく。

「おはようございます、九十郎さん」

「おお空か、よく来たな。紅茶飲むか？ 昨日スコーン焼いたから一緒に食おうぜ」

練兵館に来た空に対し、九十郎はにこやかに対応する。

紅茶もスコーンも九十郎の手作りだ。

茶葉を良い感じに発行させるのは地味に大変で、最近になってようやく普通に飲める物が完成したのだ。

「こらーっ！ 空様にまたあんな泥水を飲ませようとしてますなーっ!!」

「何だ愛菜か、お前も来てたのかよ。」

泥水じゃねーよ紅茶だよ、紅茶を泥水だなんて呼んだらヤン・ウエンリーに叱られるぞ。

俺は緑茶より紅茶派なんだ」

なお、紅茶が流行り出したのは18世紀頃なので、今ヨーロッパに行っても誰も紅茶を飲んでいないのだが、九十郎は全く気付いていない。

「また海に向こうの話をして煙に巻こうとして……」

空様、九十郎の出す物に迂闊に口をつけてはいけませんぞ！

この間みたいに二日酔い三日酔いになるやも……

越後きつての義侠人、樋口愛菜兼続は見過ごせませんぞ！」

なお、先日の騒動で一番ダメージがかかったのは、前後不覚になる程に酔った愛菜に酒瓶で殴られ、そのまま気絶した秋子であり、二番目は二日酔いで最悪の体調の中、秋子にクドクドクドと説教された愛菜であった。

全部九十郎が悪い。

「分かった分かった、お前には何も飲み食いさせねえから早く帰れクソガキ」
そう言つて九十郎は小虫を追い払うかのようなジェスチャーで愛菜を帰らせようとする。

基本的にこの男、好感度が低い相手には辛辣である。

「九十郎の出す食べ物空様にだけ食べさせられませんぞ！ この越後たつての義侠人、

樋口愛菜兼続が文字通り盾となつて空様をお守りするのです！ ドーン！」

なお、愛菜は先日の大宴会の際も似たような事を言い出したのだが、一番多く酒を呑み、一番質の悪い酔い方をして、一番鬼太郎袋のお世話になり、一番長くお説教をくらつたのは愛菜である。

「九十郎さん、先日のお話の続きを聞かせてほしいのですが」

「ああ、カール・マルクスの生涯の話だったっけか。

あれはこの間のやつで大体出尽くしたんだよな……

ウラジミール・レーニンの話でも良いか？」

「はい、お願いします！」

後の上杉景勝……九十郎にとってはただの空が笑顔を見せる。

なお、この時の話が原因で、後日越後が（共産主義的な意味で）赤く染まりかけ、経

濟政策の方針を巡り、空と菜月が血みどろの抗争を繰り広げるのであるが、それは後の話である。

「クズロー、腹減ツタ！」

紅茶の匂いを嗅ぎつけ、どこからともなく虎松がやってくる。

つい数分前まで野山を駆け巡り、泥だらけになった白髪の幼女が九十郎に飛びつく。

「そのまま回れ右して帰れ糞ニート」

九十郎は即座に追い払おうとする。

現状、この男の虎松に対する好感度はマイナス方向にカンストしている。

「あつこら！ 勝手に入ってくるなよ、道場が泥だらけになるだろ……」

ええいくそ！ 身体拭いてやるからこつち来い！」

叫ぶように虎松を呼ぶと、白髪の幼女がぐるりと向き直り、体当たりをするかのような勢いで九十郎に飛びつく。

「て、てめっ！ こつちの服にも泥がつくじゃねーかこの野郎！」

九十郎は気づいていない、泥の中に僅かに血が混じっていた事を、虎松が怪我をしている事にも、虎松が夜な夜な悪魔や妖怪といった超常の存在と対峙し、時には血みどろの死闘を繰り広げている事にも。

「クズロー、オレ、野郎違ウ、オレ、女ダ」

「その台詞はもうちよつと胸が膨らんでから言いやがれ」

「九十郎殿、胸のあるなしで人を判断するものではないですよ！」

ほら空様も言つてやつてくだされ！」

「え、私？ ええと……」

「ほらっ！ 空様もこう言つていますぞ!!」

「いやまだ何も言つてねえよ！ てめえの耳はどうなつてんだ?」

愛菜と九十郎が唾を飛ばしながらギャーギャー言い合う。

愛菜は九十郎が嫌いだったし、九十郎も愛菜が嫌いだったが、空の目には仲が良さそうに見えていた。

空は微笑みながら、愛菜と九十郎を眺めていた。

「オレ、半分八人、デモ、半分八人、違ウ……」

虎松が苦笑しつつぼそつと呟いたが、ヒートアップしつつある周囲の騒音に紛れ、誰の耳にも届かなかつた。

基本好き嫌いが激しい九十郎は、なんやかんやで楽しくやつていた。

その頃……

……

……

.....

その頃、春日山城の一室で、美空は眉間に皺を寄せながら、深くため息をついた。
「非常に拙いわ」

日本各地の情報を得る為に組織した諜報機関『軒猿』からの報告書に目を通す、それは武田晴信が駿河の安倍金山を制圧した報告だ。

「どうにか阻止しようと思つて、村上をけしかけたけど……無駄だったか。」

こつちの想像以上に行動が早い、やるわね晴信」

なお、後日村上をけしかけた事で要らぬ苦勞が舞い込んでくるのだが、美空はまだそれを知らない。

「褒めている場合ですか、美空様。これで武田は息を吹き返しますね」

「秋子、その認識は正しいけれど、不十分だわ。」

私が今までずっと進めてきた武田晴信抹殺作戦が根底から覆つたわ」

「そ、そうなのですか……」

「秋子、武田の泣き所はどこ？」

「金欠ですか？」

「その通り、もう少し正確に言うなら立地よ。」

甲斐は攻めるに難く守るに易い天然の大要塞。

ただし農業も交易もロクにできない上に頻繁に水害が起きるクソ立地。

主な産業は他領からの略奪と黒川金山」

「酷い場所ですよね」

そんな酷すぎる立地であるのに、武田晴信は戦国の巨獣、甲斐の虎とまで畏れられている。

もしも晴信に金山以外のまともな財源があつたなら……例えば肥沃な土地、例えば良港、例えば交通の要所があつたのなら、自分とはつくの昔に叩き潰されていた。

それどころか、武田は今川よりも先に上洛を実行し、織田を踏み潰して朝廷も征夷大將軍も手中に納め、今頃天下を握っていたのではないかと美空は思う。

それ程までに、美空にとって武田晴信は……光璃は恐るべき難敵なのだ。

「主な産業が略奪だから、兵は精強、百戦錬磨。

天然の要害に立て籠もれるから、無理矢理潰そうとしたら大損害は免れない。

向こうは好きな時、好きな場所に略奪に行けるのに、

こっちはいつ、どこに来るのか分からない武田に常に備え続けなければならない。

その上、国主は有能で抜け目のない武田晴信、傍迷惑極まりない連中よ本当に」

ゲッターチームとウザーラに襲撃されている時のブライ大帝のような心境であつた。

少なくとも、全力を出した時の光璃のエグさはゲッターチームにも劣らない。

「では、武田晴信抹殺作戦とは？」

「要は兵糧攻め、要害に立てこもる相手に対しては定番の手でしょ。」

北を長尾、東は北条、南は今川で抑えて、他領からの略奪を徹底的に封じる作戦。

3方から固めている間、武田の資金源は黒川金山だけになるわよね。

国を維持するために人をどんどん増やして、凄いい勢いで掘削して……

金山が枯渇して自滅するのをひたすら待つ作戦」

「い、意外と気の長い作戦ですね……」

「それでもないわよ。……何年か甲州金の質が落ちてきていたし、

金山奉行の今井兵部が謎の病死……私はある、自害じゃないかと疑っているのよ。

だから限界はもう少し……後ほんのチョッピリだったと私は思うわ。

流石の武田晴信でも、何も無い土地から金子を生み出す事はできない……

向こうもそれが分かっていたから、比較的潰しやすい長尾に猛攻をかけたたり、

水害を防いでまともな農業ができるよう、堤を築いたりしていたようだけど……

まあ、そっちは焼石に水だったわね。

ええ……本当にあと少しだったのよ……それなのに……」

「桶狭間と、安倍金山の制圧ですね」

それは織田、武田、そして松平にとつては起死回生の大勝利。

今川、長尾にとっては悪夢のような悲報である。

美空個人の心情としては足利寄りであったので、義元による上洛……將軍篡奪作戦が失敗に終わったのは朗報ではある。

しかし、越後を護る国主としての立場としては、間違いなく悲報……頭の痛い立場である。

「上洛について、思うところは無くもないけど……」

何にせよ、義元はともかく、氏真は協力関係を結ぶにしては頼りなさすぎるわ。

今川の大敗と、これから始まるであろう没落によつて、対武田の戦略は根底から覆える。

そしてこれからは今川からの裏援助無しで戦わなければならない。

正直に言つて頭が痛いわ、田舎に引き籠つて写経でもして過ごしたいくらい」

「やめてくださいいしんどします」

かつて美空が隠居して出家するとかいう書置きを残し、春日山城から姿を消したことがある。

その時は越後のみならず、周辺諸国をも巻き込んだ大騒動があり、秋子は胃と心臓がキリキリと痛むのに耐えながら事態の収束に奔走したのだ。

正直な話、あの騒動の時に越後長尾家が無事だったのは奇跡に近く、同じ事をもう一

回やれと言われたら秋子は泣く、そして胃に穴が開いて咯血する。

「あくあ、何が悲しくて国主なんて貧乏籤極まりない立場にならなきゃいけないのよ。

豪族は言う事を聞かないし、武田は隙あらば襲ってくるし、

幕府は弱体著しくて全然頼れないし……一日中酒を飲んで写経をして過ごしていたいわ」

「お気持ちはお察しします……ようやく武田との抗争が一段落ついたと思つたら、

今川公は討ち死に、武田は金山を得て、その上九十郎さんが来て……

私に気が休まる日は来るのでしょうか？」

「秋子は九十郎の事、嫌いだったっけ？」

「嫌いですよ、あの人は目つきが厭らしいです。

基本的に女性の胸ばかりに視線が行きますし。

この間は春日山城を酒と吐瀉物で汚して、掃除するのが大変だったんですよ。

愛菜の教育上も良くないですし、長尾の品位を乏しめかねません。」

「あらそう？ 私は結構気に入ってるのだけれど。

あいつつて嫌いな奴への対応と好きな人の対応が全然違うし、違いも分かりやすい。

裏表が無くて気安く付き合えるわ」

「アレが起こす騒動の尻ぬぐいをする立場にもなつてくください」

「気持ちには分からなくもないわね、でも神道無念流もやってみると案外楽しいわ。柘榴も最近、急に腕を上げてきてね。私もうかうかしてられないわね」

「はあ……本当に気が休まる日が来るのでしょうか……」

秋子が深く深く深あくくため息をついた。

陰鬱な気分であつたし、できれば今からでも九十郎を追い出したいとすら思つてい

た。
「御大将、お裾分けに来たつすよ」

そこへ、柘榴が米一俵分ぐらいの大きさの麻袋を背負つて部屋に入ってくる。

「あら柘榴、ちょうど良い所に来たわね。」

この間貴女の家来になつた筋肉男についての話が……て、貴女何を持って来たのよ？」

「ええつと、作りすぎたから御大将の所に持って行って九十郎が言つてたつす」

「あいつ、しれつと自分の主君を遣いつ走りにして……」

「松葉ちゃんの口に酒瓶を突つ込む男に何と言つても無駄だと思ひますよ」

「まあ良いわ、物は何かしら？」

柿_{ピー}かおビール様だつたら私としてはとても嬉しいのだけれど」

「硝酸カリウムつす！」

そう言うのと柘榴は大きな胸をどーんと張って、袋の口を開けて見せる。

袋には白く輝く粉のような、あるいは小石のような物体がみっちり詰まっている。

「ええと……硝酸……？」

「か、かりうむ……？」

美空と秋子は顔を見合わせる。

お互い硝酸カリウムなる物体を見た事も無ければ、名前を聞いた事も無かった。

「作り過ぎたから持ってけて、今朝九十郎に渡されたつす」

「いやこんな物いきなり渡されたって、使い道無いわよ！」

「木炭と硫黄と混ぜたら黒色火薬になるって言ってたつすよ」

「え……？」

「こ、黒色火薬……それって玉薬の別名じゃ……」

玉薬とは、鉄砲の弾を撃ち出す為に使われる火薬である。

木炭10〜20%、硫黄15〜25%、硝酸カリウム60〜70%。

木炭と硫黄は日本国内で採る事ができるが、硝酸カリウム……通称硝石は国内に鉱脈が無く、基本的に外国からの輸入に頼っている。

そして硝石は高い、とてつもなく高い。

日ノ本最大の貿易都市である堺から遠く離れた、甲斐や越後では特に高価だ。

美空や光璃が鉄砲の価値を認めながらも、今なお少数しか導入できていないのは、硝石が笑える程に高く、派手に使うと国の財政が傾きかねないからである。

それが……

「待って……その袋の中身、全部硝石って事？」

柘榴貴女、それだけの量の硝石を買ってきたの？

柿崎家が傾く……いえ、破産するわよ!!」

「美空様？ どこからも買ってきてないっすよ？」

「じゃあ強奪してきたの!? 一体どこから!?」

「九十郎が作ったつす、うっかり作り過ぎたから御裾分けしてこいつて」

「はあっ!? 作っただあっ!? しかもうっかり作り過ぎたあっ!?」

美空と秋子の常識を崩壊させる台詞だった。

美空と秋子にとって、硝石は作れる物ではないし、御裾分けなんて軽い扱いをして良
い存在でもない、普通に戦略物資だ。

「秋子、今すぐ硫黄と木炭を用意して、コレ使って玉薬を作っておきなさい。」

私は柘榴と一緒に練兵館に行くわ」

「は、はいー!」

「柘榴行くわよ、チャリで!」

「御伴するつす、チャリで！」

戦国時代らしくない光景である。

……

……

……

「おお、柘榴に美空じゃないか。

今ちようどドライゼ銃の試作第1号が完成して、試射する所だったんだ」

九十郎がにこやかに対応する。

愛菜と虎松を追い返すのに成功した九十郎はご機嫌であつた。

空も一緒に帰ってしまったているが……プラスマイナスで言えばプラスに傾いていた。

「おお、ついに完成したつすか！ 楽しみにしてたつすよー！」

「ちよつと待ちなさい、何の事ドライゼ銃って」

「1841年にプロイセン軍に採用された軍用小銃だよ。

個人的にはボルトアクションライフルより、

レバーアクションライフルの方が好みなんだが、故障が少ない、手入れが楽、

おまけに匍匐姿勢のまま装弾できる利点もあるから、今回はこつちを作った」

「……1841年？」

美空が呆然としながらそう呟く。

「九十郎、その……でらいぜ、だったかしら？」

その見た目からして、鉄砲の一種なのかしら。それを試射する所、私にも見せなさい」

「でらいぜじゃない、ドライゼだよ。まあ、別に構わんが……柘榴も良いか？」

「柘榴は構わないですよ」

「分かった分かった、道場の中じゃできないから裏庭に出るぞ」

九十郎の後に続き、柘榴と美空が外に出る。

「硝石を作ったって本当なの？」

途中、美空が九十郎にそう質問する。

正直に言つて、美空は九十郎が硝石を作ったなんて話を信じていない。

信じていないが……まさか、もしやとも思つてしまう。

「ああ、作つたよ。ドライゼ撃つのに使うんだが、こつちじゃ硝石が笑える程高いからな。」

最初は硝石丘法でいこうかと思つてたんだが、うんこや小便集めるの臭いし面倒だし、

5年くらい待たねえと使えねえから、手っ取り早くハーバー・ボツシユ法でいく事に

した」

「はーばー……?」

「ハーバー・ボツシュ法、お前まさか知らないのかよ?」

フリッツ・ハーバーとカール・ボツシュが1906年にドイツで開発、

ノーベル賞が獲れるレベルの大発見だぞ、普通知っているだろう」

松平元康が徳川家康だと知らない男の言える台詞ではない。

「知らないわよ、全然……それに、1906年? 1906年って……?」

「マジで知らないのかよ。意外と知らねえ事が多いんだな、上杉謙信って」

九十郎は意外そうな顔をしていたが、知っていたらそいつは上杉謙信ではない、未来

人か予知能力者である。

「あんたまた名前間違えて!! 私は長尾だって何度言えば……」

名前を……間違え……ま、間違え……間違えて……ないとしたら……

九十郎は本気で私を上杉謙信と思っているのとしたら……

1841年、1906年……もしかして九十郎は……」

美空がぶつぶつと独り言を呟く。

美空の頭の中で、恐るべき推論が、信じられない仮説が組み立てられていた……

そして……ズドン! ズドン! ズドドンツ!! と、練兵館に銃声が響いた。

ドライゼ銃の試射……戦国時代の常識ではありえない鉄砲の連続発射という光景を目の当たりにした美空は、自分の推論が正しいのではないかと思いついて始めた。

「九十郎、さつき言ってた1841年とか、1906年とかいうのは、海の方こうで使われてるっていう暦の事？」

マジックを見た子供のようにはしやぎ回る柘榴をよそに、美空がそう尋ねる。

「ああ、西暦だが……それがどうかしたか？」

「西暦ね……西暦っていうのは、西洋の聖人……」

えるされむで、めしあだか何だかかかか生まれてから何年目を数えてる……

この認識は正しいかしら？」

「何言ってるんだお前、正しいに決まってるだろうが」

そして……

「今は西暦1560年よ」

……次の瞬間、九十郎の顔が硬直した。

そして美空は確信した、九十郎は未来を知っていると。

犬子と柘榴と九十郎第3話『頭痛・幻聴』

「はあ……」

夜の練兵館で、マツチヨが深あくため息をついた。

夜の鍛錬（エロ的な意味ではない）が終わり、柘榴を屋敷に帰し、犬子と九十郎は手分けして胴着や竹刀を片づけている所だ。

「ど、どうしたの九十郎？ 今日のため息が多いんじゃない」
「分かってくれるか犬子。」

俺は今、西暦1560年という名の現実に打ちひしがれてる所だよ……」

「えつと……今って西暦1560年だったんだね、犬子も知らなかったよ」

「しかしまさか……まさか1560年だったとはな……」

フローレンス・ナイチンゲールもアルフレッド・ノーベルも生まれてねえし、クリミア戦争もアメリカ独立も当分先か……ああしまった、

ちよつと前にクリミア戦争以前の衛生概念じゃねえかって墓を罵っちゃまった。

悪い事したな、怒ってるかな、たぶん怒ってるよな……

よし、当分三河には近づかないようにしよう」

屑が珍しく反省していた。

この反省も明日には忘れるし、後先を考えない九十郎の性格も治らないのだが、とにかく珍しく反省していた。

なお、葵は衛生概念の件で罵られた事を全く怒っていないし、むしろ感謝をしている。九十郎がノコノコと三河に近づいて来たなら、万歳三唱して出迎える。

そして拉致監禁して二度と三河から出しはしまい。

「ああそうそう、柘榴だが、近い内に隣に引越して来るって言ってたぞ」

「柘榴様が!?! 何で!?!」

「俺の防諜とか護衛とか諸々見直すんだと。」

でも俺が重要人物だって事はなるたけ隠したいから、

壁やら見張りやらを増やす言い訳として、

お隣に柿崎城主の屋敷を持って来るって美空が言っていた」

「何か、急に話が大きくなってきたね」

犬子が苦笑する。

「今にして思えば、歌代や腐れワレメさんが俺達を引き留めようとした理由、ウインチェスターを見せたからだだったのかもな。」

ウインチェスター・ライフルの完成は確か1873年だったから……

単純計算で313年後の銃って事になるんだ」

悠希は腐れワレメさんなんて不名誉な覚えられ方をしていた。

とりあえず九十郎は悠希に土下座して謝るべきである。

「ハーバー・ボツシユは1906年だろ……346年後か。

改めて考えてみたらやべえな俺、世界を346年分も縮めてるぞ。

マルサスの限界を346年も早く越えたら歴史が変わるぞ」

「ねえ九十郎、はあばあぼしゅ……て、何の事？」

「水素と窒素からアンモニアを生産する方法だ」

「それ……何の役に立つの？」

「空気と水から火薬と肥料を生み出せる」

「空……気……？」

「人間が毎日吸ったり吐いたりしているのが空気だよ」

「へえ、空気と水が火薬に……なにそれこわい」

犬子はドン引きした。

「ここ最近、朝から晩まで柿崎家の帳簿と格闘している犬子には、火薬……玉薬がどれ程高価で、どれ程調達困難なのかを理解していた。

「じゃあ肥料って何？」

「要は田畑に撒く肥しみたいな物だよ。

ハーバー・ボツシュでアンモニアを作った後、白金触媒で加熱して一酸化窒素を作る
だろ。

一酸化窒素は酸素と結合して二酸化窒素になるから、水に溶かして硝酸にする。

その後、飽和食塩水を作りそこにアンモニアを溶かして、

炭酸水素ナトリウムが析出したらろ過して取り出す。

この時にできる塩化アンモニウムが肥料になる訳だな。

んで、炭酸水素ナトリウムを加熱して炭酸ナトリウムにして、

硝酸と炭酸ナトリウムを反応させて硝酸ナトリウムにするだろ。

塩化カリウムと硝酸ナトリウムを反応させて塩化ナトリウム……

つまり塩が析出して、硝酸カリウムになる。

硝酸カリウムの別名が硝石、黒色火薬の原料になる訳だ」

犬子は再びドン引きした。

化学知識を持たない者には理解困難……いや、全く理解不能である。

ましてや戦国時代の人間にとっては、魔法の呪文に等しい謎ワードである。

「そんなややこしい方法、何で知ってたの？」

「大江戸学園の学生が乙級から甲級に進級する時、

進級試験も兼ねて、卒業論文みたいなのを書いて学園に提出するんだよ。

それで、俺とファースト幼馴染が共同で書いた論文が、

『戦国時代に手に入る材料でハーバー・ボッシュ法を実行する方法』だったんだ」

「九十郎の幼馴染だった人って……何て言うか、凄い人だよな」

「まあな」

犬子も九十郎も気づいてはいないが、前世は武田晴信である。

戦国時代生まれの人間はやる事が突拍子もないし、それに文句無しの合格点を与える

大江戸学園の魔境っぷりも大概であろう。

そして2人の会話が途切れる。

夕食も終わり、片付けも終わり、布団も敷いた、戸締りも確認した。

今日はもう寝るだけだ。

「ねえ、九十郎……その、さ……キ、キス……してほしいんだけど……」

「ああ良いぞ」

ちよつと照れてる犬子を抱き寄せる。

若い男女が一つ屋根の下で暮らしているのだ、こういう雰囲気にもなる。

2人にとっては頻繁に起こる情景だ。

2人の距離が近づく、九十郎の視界が犬子で一杯になる、そして……

「……つう!？」

唇が重なった瞬間、九十郎は強烈な痛みを感じた。

脳髓に錐でも差し込まれたような痛み、頭蓋骨がギリギリと締め上げられたかのような鋭い痛みだ。

いつも通りの行為が、九十郎に耐えがたい苦痛を生じさせた。

そして聞こえた、幻聴が。

『お前は屑だ、お前のような屑が前田利家と釣り合う筈が無い』

そんな幻聴が、九十郎に聞こえた。

それが幻聴だという事はすぐに分かったが、九十郎にはその言葉を否定する事が出来なかつた。

「う……ぐう……!？」

九十郎は反射的に犬子を突き飛ばした。

「ど、どうしたの九十郎？ 顔……怖いよ……」

激痛に顔を歪ませる九十郎を、犬子が心配そうに覗き込む。

『心配しているぞ、心配させているぞ、お前のような屑を前田利家が心配しているぞ』

瞬間、九十郎はそんな声が聞こえたような気がした。

瞬間、九十郎は頭痛が何倍にも、何十倍にも増したような気がした。

「だ、大丈夫だ……心配すんな……」

声が震えていた。

唇を動かすのも、肺から空気を押し出すのも苦痛であった。

「全然大丈夫そうに聞こえないよ!? 怪我でもしたの? それとも……病気!?!」

「うるさいっ!! 黙ってる前田利家えっ!!」

九十郎は叫んだ。

幻聴を振り払うために……

「利家……? 犬子だよ……」

そんな九十郎の叫びを聞いた時、犬子は底知れぬ不安に襲われた。

九十郎が目の前から消えてしまうのではないのかと……そう思った。

直後、九十郎は酷い自己嫌悪に襲われた。

お前は屑だ、お前は屑だ、お前は屑だ……そう罵られているような感覚に陥った、他ならぬ自分自身にだ。

「す、すまん犬子……少し頭が痛い。先に休ませてくれ」

「う、うん……分かった……分かったよ……」

少しふらつきながら寝室に向かう九十郎の背中を、犬子は見送った。

九十郎は震えていた、激しい頭痛と幻聴のせいだ。

犬子も震えていた、言葉では説明できない、底知れぬ不安と恐怖で。犬子は前田利家だ。

九十郎は、犬子をただの犬子だと思つた事は一度も無い。

九十郎は、犬子を前田利家として見ている、見続けている。

今までも、これからも……故に九十郎は苦しんでいた。

自分のような屑に、前田利家をどうこうする権利がある筈が無いと。

……

……

……

「九十郎……お、おはよ……」

次の日の朝、珍しく犬子が九十郎よりも先に起床した。

悪夢を見て目が覚めてしまったのだ。

九十郎が犬子を捨てていずこかへと去っていく悪夢を……

「ああ、おはよう……犬子」

気絶するように意識を手放し、一晩中泥のように眠つた……そのお陰か、九十郎の頭痛は消えていた、幻聴も無くなっていた。

だがしかし、今日の九十郎は、犬子にセクハラをする気になれなかった。

犬子の胸を揉む気にも、唇を重ねる気にもなれなかった。

気まずい空気が流れる、気まずい沈黙が2人を包む。

犬子も九十郎も、目の前の相手に何を言えば良いのかまるで分からなかった。

「九十郎〜！ 柘榴が来たつすよ〜!!」

そこに、空気を読まない元気な声が聞こえてくる。

昨晚の件を全く知らない、全く関係が無い柘榴の声だ。

そんないつも通りの柘榴の声が、犬子と九十郎をいつも通りの日常へと引き戻した。

「……やべえっ!? 柘榴がもう来やがった!」

まだ鍛錬の準備何もしてねえし、今日の内容も考えてねえぞ!」

「ちよつと九十郎! そんな恰好で出ちゃだめだよ! ああ、待つてせめてもう一枚

……」

2人してどたばたと玄関に走る。

「九十郎、犬子、おはよ……お……お……あ、朝から元気つすね」

九十郎の股間のゾウさんが柘榴の前でぶらぶらと自己主張をしていた。

過去にソレが自分を女にした事を思い出し……柘榴は赤面していた。

相手が柘榴でなければ打首モノであるし、現代二ホンでも通報案件である。

いや……

「う、うわあ……」

「……朝から酷いモノを見た」

柘榴のすぐ後ろに、長尾美空景虎と甘粕松葉景持が立っていた。

しかも揺れ動く九十郎のアレに視線が集中していた。

方や越後の国主、上司の上司、もう片方はほぼ初対面、そして2人とも女性……戦国時代でも通報案件である。

「ぞ、柘榴様ごめんなさい！ 犬子達ちよつと寝坊しまして！

九十郎！ 早く何か着てよ！」

犬子が慌てて出てきて、九十郎を奥へと引つ張っていく。

「す、すまん犬子……す、すぐに朝の鍛錬の用意をしてくるから待っていてくれ」

「あはは、柘榴は気にしないっすよ。人間たまには寝坊もするっす」

「朝の鍛錬も良いけど、何個か連絡事項があるから少し話をさせなさい。」

「連絡ねえ……先に聞いておくか、どうした？」

「まず一つめ、ここに居る松葉も練兵館に通わせる事にしたわ」

「……よろしく」

九十郎は無言でサムズアップする。

そして九十郎は心の中で叫んだ、ナイスでっばいと。

「九十郎、視線が胸に釘付けになつてゐるわよ」

「いつもの九十郎です、美空様」

「犬子、貴女も苦勞してゐるのね……」

美空の犬子に対する好感度は鰻登りだ。

逆に松葉の九十郎に対する好感度は冷え切つていた。

「松葉か、確か名前は……」

「甘粕景持」

「ああそうだ、甘粕さんだ。」

前に一度簡単に挨拶した覚えはあるが、話をするのは初めてになるかな」

九十郎は酔つた勢いで松葉の口に酒瓶を突つ込んだ事をすっかり忘れていた。かつて意識が混濁するまで吞まされた松葉がこくりと頷く。

そして値踏みをするかのように九十郎の顔をじいっと見つめる。

沈黙、沈黙、沈黙、気まずい沈黙……だれも何も喋らない謎の時間が過ぎる。

九十郎は思った、やべえ何を喋りや良いのか分からねえと。

同時に思った、土下座したら胸揉ませてくれねえかなと。

「……御大将」

そんな九十郎のエロ目線、エロ思考に気づき、微妙に恨みがましい視線を向けつつ、松

葉が美空に声をかける。

「気持ちには分からなくもないけど、我慢なさい」

当然、美空も気づいている。

九十郎は思考が表情に出やすいタイプなのだ。

しかし、美空はそういう欲望にストレートな所が嫌いじゃない。

「やれやれ、弟子入り希望者かと思つたら強制か。

そういうの俺、好きじゃないんだけどな。

それにこの松葉つての……大丈夫なのか？

ロツズ・フロム・ゴッドとか使つてこないのか？」

九十郎が美空の耳に接近し、ひそひそと耳打ちをする。

そんな心配をしているのは九十郎だけである。

「ろつず・ふろむ・ごつどつてどういう意味よ？　どこの言葉？」

「英語だよ、アメリカ……は、まだ無いから、イギリスで使つてる言語。

意味は……天からふりそそぐものが全てをほろぼす、とかかな」

微妙に合っているようで全然違う。

九十郎の英語の成績は常に赤点スレスレである。

世界史は常に満点だが。

「えげれす……だいぶ前に聞いた事があるわね。

確か……確か、紅毛人が住んでいて、えすばにあと覇権を巡って争っているとか」「えすばに……ああ、スペインの事か。

1560年だとインカとアステカが減んで、マゼランの艦隊が世界一周した辺りかな。

フランスス・ドレイクが海賊やったり無敵艦隊を潰したりするのはもう少し先か。

戦国時代つて案外昔の話だったんだな……」

この男は戦国時代を何世紀の事だと思ったのだろうか。

「コロンブスがくたばったのは1506年だから、とつくの昔に死んでるか。

会ったら2〜3発ブン殴っておきたい所だったんだがな」

この男はどうやってコロンブスに会いに行くつもりだったのだろうか。

「ああでも、ドレイクの没年は1596年だからまだ生きてるよな。

世界一周が1577年から1580年だから、今から頑張れば会えなくも無いか。

運良く会えたらサインでもねだっておこうか」

この男はフランスス・ドレイクが、素直にサインを書いてくれるかとも思っているのだろうか。

「ジェームズ・クックは……駄目か、まだ生まれてねえな。

確か生年が1728年だったから、168年後か、流石にそこまで長生きするのは難しいよな」

この男は生まれた直後の赤子にサインをねだる気なのだろうか。

「まあ何にせよ、松葉も今日からこっちに通わせるから、適当に鍛えてやって頂戴」
「分かったよ。 神道無念流の奥深さを魅せてやろうじゃないか」

「期待する、少しだけ」

松葉は観念した様子で九十郎に頭を下げる。

あまり気が進まない様子だ。

「それと、私もできるだけこっちに来るようにするわ。

自転車作ってもらった時に弟子入りはしたけれど、

仕事もあつて片手で数えられる程しか来れなかったわよね」

「仕事に支障が出るような鍛錬はしないしさせない主義だよ、俺は。

ワーク・ライフ・バランスって大事だからな」

九十郎的には『神道無念流Ⅱ人生』である。

犬子と共に戦場に行った事も、柘榴に自転車やドライゼ銃を渡した事も、心置きなく神道無念流ができる時間を確保するためのお仕事だ。

「で、仕事は大丈夫なのかよ？ 国主って案外暇なのか？」

「暇な訳がないでしようが。」

柘榴の屋敷を移転させるまでの暫定措置よ、私と松葉、

それに柘榴が出入りするのであれば、護衛や見張りが増える違和感を誤魔化させるでしよ」

「そうかそうか、まあしやあねえな」

「……反発するかと思っただけれど、意外と素直ね」

「そりゃ300年以上先の銃を見せりやそうもするさ。」

それに上す……じゃない、あの長尾景虎がそう判断したんだ、正しいだろうさ」

「悪いわね、この埋め合わせは……」

「神道無念流やろうぜ！」

九十郎はビシッと親指を立ててニカツ笑う。

爽やかでも何でもないブ男フェイスに、松葉は軽く嫌悪感を覚えたが、美空はこういうノリが嫌いじゃない。

九十郎の顔は美空の好みから見事に外れているが、裏表が無くて分かりやすい性格は、美空の好みと合っている。

「じゃあ埋め合わせは神道無念流で返しましょうか。」

竹刀はある？ 朝の運動でもしましょう」

「あるに決まってるんだろ、ここは道場だぜ。」

長尾景虎と一緒に神道無念流がやれるとは嬉しいぜ、柘榴と松葉も参加するよな？」

「もちのロンっす！」

「……お手柔らかに」

柘榴は元氣良く、松葉はちよつと顔を引きつらせながら挙手をした。

これからずつと九十郎のスケベ目線に晒され続けるのかと、松葉は憂鬱だった。

九十郎は鍛錬のどきくさ紛れに美空と松葉の胸を揉めねえかなと最低な事を考えていた。

『神道無念流Ⅱ人生』であるが、それはそれとして巨乳好きの男である。

……

……

……

その日の晩。

鍛錬を終え、夕食も取り、美空と松葉、柘榴が帰り、ようやく練兵館に静寂が戻った。

犬子と九十郎が、2人きりで1つの布団に入っていた。

「九十郎……」

犬子の手が、そつと九十郎に触れる。

指先と指先が絡み合う。

九十郎が犬子の手を握り返す。

普段の九十郎ならば、そのまま犬子の胸にしゃぶりつき、若さと情欲のままに犬子を抱いていた。

頭痛は無い、幻聴も無い……だが、何故か性欲は湧かなかつた。

「犬子……その、何だ……今日は、な……」

誤魔化すように、犬子に告げる。

「そ、そう……そうだね、今日は色々あつたから、九十郎も疲れてるよね」

少し寂しそうに、少し無理をして笑顔を作る。

九十郎の心が重くなる。

「思えば、長い付き合いだよな」

「うん、そうだね……犬子が物心ついてすぐだから、もうかれこれ20年くらいになるかな」

「ああ、そうだな」

前田利家……それが九十郎の心を重くしていた。

前田利家だから出会った。

前田利家だから助けた。

そして今、前田利家が九十郎を好きだと言っている。

九十郎はそれが信じられなかった。

どうしても素直に受け取れなかった。

自分は屑なのだから、前田利家のような価値のある女が惚れる筈が無いと思つて
た。

ただの犬子とは思えなかった、どうしても。

「利家……じゃない、犬子はどうして俺が好きになつたんだ？」

「え？ それは……ううん、改めて考えると難しいな……たぶんだけど、

傍にいてほしい時に傍にいて、支えてほしい時に支えてくれたからじゃないかな」

「そか……」

九十郎はそんな犬子の言葉も信じられなかった。

かつて……前の生での長谷河平良のように、遠山朱金のように、気がついたら別の男
に跨つて、腰を振つて、喘ぎ声を立てるのではないかと思つてしまう。

前田利家は価値のある女だから、価値のある男に惚れるのではと思つてしまう。

自分を捨てて、他の男の下へ行くのではないか、他の男に奪われるのではないかと
思つてしまう。

「犬子は……」

「うん？ どうしたの九十郎？」

お前は俺を捨てて、他の男の下へ行くんじゃないのかと尋ねそうになった。

しかし、尋ねられなかった。

嘘を言われるのが怖かった。

心にもない愛してるを言われるのが怖かった。

犬子が離れるのが……怖かった。

「愛しているぞ、犬子」

そして思った。

自分と一緒にいる限り、犬子は……前田利家は幸せにはなれないのだろうと。

前田利家のような価値のある女は、秋月八雲のような価値のある男と一緒にになり、幸せになるべきだと。

「大好きだよ、九十郎」

犬子が笑った。

幸せそうに笑った。

九十郎は思った、この笑顔は自分に向けられるべきものじゃないと。

自分のような屑が向けられて良い笑顔じゃないと。

犬子は気づかない、九十郎の内心に、九十郎のトラウマに。

犬子が九十郎のトラウマに気づくのは、九十郎の爆弾が必殺スーパーダイナマイトよりも派手に爆発した後……戦国一のモテ男、誑し免状を持ち、信長も秀吉も黒田官兵衛も嫁にした男、九十郎が思う価値のある男、前田利家にふさわしい男、自分のような屑と違い前田利家を幸せにできる男……新田劍丞が2人の前に現れてからである。

2人が無言で肩を寄せ合い、全く別々の事……ある意味では正反対の事を考えていたその時……

「ただいまっす〜!」

空気を読まない馬鹿……ではなく、柘榴が勢い良く襖を開け、ズカズカと寝室に入ってきた。

「柘榴?!」

「柘榴様?!」

突然の乱入者の姿に2人が狼狽える。

「お前……こんな真夜中に何しに来た!?!」

「何って、帰って来たっすよ、今日の分のお仕事を終わらせて。」

今言ったっすよね、ただいまっす」

「ただいまっす……言ったけどよ……」

「今日から柘榴もここに住むっす!」

「はいいつ!?!」

「ええっ!?!」

突然の引つ越し宣言に2人が再度狼狽える。

「御大将みたいな重要人物が練兵館に出入りして、

不自然さを出さないように警護を増やす作戦つすよ。

一番警戒しなきゃいけない夜中だけガラガラなんてありあえないつす。

そこで柘榴の屋敷を建て替えるまでの間は、

柿崎城主にして長尾家の特攻隊長たる柿崎景家がこつちで寝泊まりするつす」

「いや、ちよつと待て……変な噂とか立てられたらどうするんだよ!?!」

年頃の女が、男の家に毎晩毎晩外泊つて」

「当然、その辺もすっかり考えてあるつすよ」

柘榴が微笑み、九十郎を抱き寄せ……呆氣にとられる犬子の眼前で、唇と唇を重ねた。

「……いつそ事実にしちやえれば良いつす」

まるで小悪魔の様に、そう宣言した。

犬子は気づいていない、九十郎の内心に、九十郎のトラウマに。

九十郎が心に闇を抱えているとか思ってもいない。

しかし……柘榴は少しづつ、しかし確実に勘づきつつあった。

九十郎の自己評価が低い事に、心に傷がある事に、犬子に対して壁を作っている事に、だから来た。

だから柘榴は練兵館で寝泊まりする事にした。

九十郎をもっと深く知るために、九十郎の心の闇を知り……できる事ならば、それを癒すために。

「諸々、宜しく頼むつすよ、九十郎」

柘榴は未だに事態を飲み込めていない2人の前で、持って来た布団を広げた。

犬子と柘榴と九十郎第36話 『葛尾城攻略戦（前編）』

「犬子おっ！」

「わんっ！」

「柘榴おっ！」

「気合十分っす！」

「よっしやあ！ 俺達やパートタイム越軍先手組！ 気張って行くぜえっ！！」

「おおーっ！！」

「おおーっす！！」

犬子と柘榴と九十郎が剣を天高く掲げる。

柘榴率いる先手組がそれに倣って各々武器を掲げ、鬨の声を上げる。

なお、柘榴はパートタイマーどころか先手組の大將であり、犬子と九十郎も正規雇用だ。

九十郎はパートタイムという語感の響きが気に入っている。

自分の本分はあくまで剣を教える事、神道無念流を広める事であって、戦場で剣を振るうのはそのための手段に過ぎないと考えているからだ。

だから九十郎はいつまでもいつまでもパートタイムを名乗り続ける。
虎松はおいてきた。

ハッキリいつてこの戦いにはついていけないと犬子も柘榴も九十郎も考えているからだ。

虎松は鬼子で、恐るべき超能力を使う超生物だ。

それ故に3人が束になっても軽く蹴散らされるのだが、その事について3人とも気づいていない。

そこで空と愛菜に足止め……もとい遊び相手を要請しておいたのだ。

「……できれば九十郎にはついて来てほしくなかったのだけど」

そんな先手組の姿を、長尾の総大将であり越後の国主でもある長尾美空景虎が不安そうに見つめていた。

「ははは、俺が合法的に神道無念流を振るえるチャンスを逃す訳がねえだろ」

「貴方自分の価値を理解しているの？ 貴方は私の描く戦略に必要不可欠なのよ」

「今回、相手は鬼とかいう魔化魍だか外道集だかみたいな存在なんだろう？」

人間相手じゃ切った時の気分が最悪だから丁度良い」

「まあ素敵、こいつ状況を全く把握していないわ」

いつもの九十郎である。

「それに……粉雪を酷い目に遭わせた連中なんだ、

神道無念流がたっぷり御礼をしてやるのがスジってもんだろ、」

「いやどんなスジよ!? そんなの聞いた事が……」

ちよつと待ちなさい、粉雪つてもしかして山県昌景の事かしら?

武田四天王、精鋭赤備えを率いる山県昌景かしら?」

「ああ、そうだが」

「……柘榴」

「柘榴も初耳つす」

「その辺の事情、これが終わったらしつくり聞かせてもらおうわよ……」

美空が今後の九十郎の扱いに関して頭を悩ませながら、ゆっくりと剣を抜き、自信の超能力……長尾家御家流・三味耶曼茶羅を発動させるべく、精神を集中させる。

「行くわよ新技……ロツズウ! フロムウツ!! ゴオオオオオオー……ツドオ!!!」

戦国時代に人間には理解不能な技名を叫び、美空の御家流……今まで使っていた御家流を変化させて編み出した新技が発現した。

護法五神を真上に呼び出し、真下に向かって突撃させる新技は、今までの三味耶曼茶羅の2倍……いや、10倍の威力がある。

美空の超能力が、まるで障子紙のように葛尾城の城門を破砕した。

「スカツとするわね、この新技」

「……護法五神が目を回している」

美空の後ろに控えていた松葉がツツコミを入れた。

猛スピードで地面に叩きつけられた護法五神が全員揃って気絶するという、いつもの2倍の仏罰が下りそうな光景がそこにはあった。

「しかも半数以上が大外れつすよ」

珍しく柘榴もツツコミを入れた。

何の意味も無く護法五神が叩きつけられ、未来に向かって……具体的には明後日の方向にクレーターを作るといふ、 2×2 で、いつもの4倍の仏罰が下りそうな光景がそこにはあった。

「回転は加えたのか？」

「加えたわ、いつもの3倍の回転を加えて1200万パワーになるようにつて」

「美空様、毘沙門天様が、その……上半身が地面にめり込んで、

バタ足みたいにもがいているんですけど、助けなくて大丈夫ですか」

犬子が恐る恐る美空に尋ねる。

きりもみ回転をしながら地面にめり込み、犬神家のような状態にさせられた毘沙門天の心境はいかなるものか…… $2 \times 2 \times 3$ で、いつもの12の仏罰が下りそうな光景がそ

ここにはあった。

バツファローマンのロングホーンも叩き折れるのではなからうか。

「あんまり連発はできそうもないわね、この新技」

毘沙門天達が怒って殴りかかってこないだけ有情である。

「まあ、それはそれとして……突入つすうーっ!!」

「何だつていい! 神道無念流を振るうチャンスだ!」

「柘榴様! 九十郎! いきなり飛ばし過ぎだよおっ!!」

葛尾城城門を粉碎するのと引き換えに気絶した護法五神達を踏み越え、馬鹿2名と前田利家が葛尾城に突撃する。

「あ、ちよつと、一番死なれちゃ困る奴が一番先頭を走るんじゃないわよ!

松葉追うわよ、最悪張り倒してでも止めなさい!」

美空と松葉がそれを追う。

そして……城門をくぐった瞬間、夥しい数の異形の存在が九十郎達を出迎えた。

百か、二百か、もつとか……視界の全てに鬼の姿がひしめいていた。

「この人口密度……宇宙怪獣かよてめえら。」

まさかとは思ったが、マジで戦国時代で鬼とチャンバラする事になろうとはな。

鬼退治桃太郎先輩でも呼んできたい気分だぜ」

「九十郎、犬子、ハラくくるつす。こいつは……思つてたよりヤバ感じつす」

九十郎にとつて……いや、村上義清を除いた、その場にいる人間全てにとつて生まれて初めての鬼との遭遇、鬼との戦いが始まった。

事の起こりは、今から2週間前まで遡る……

……

……

……

美空がドライゼ銃とハーバー・ボツシュ法による武田晴信抹殺作戦を考案し、ドライゼ銃と火薬、そして重火器に使用する良質な鉄鋼の生産を開始した頃、東南の方角から落ち武者の群れが現れた。

全員が全員、見るからに傷だらけで、見るからに空腹で、見るからに疲弊し切つていて、見るからに倒れ伏す寸前の状態でヨロヨロと春日山城を目指していた。

そんな怪しげな団体を、春日山城の屋根の上から見下ろす、紅い髪の鬼がいた。

「動イタカ、エインヘルヤル……目覚メタカ、尊治……」

紅い髪の鬼が、激化するであろう戦いの予感に、揺れ動くであろう情勢に想いを馳せ、静かに闘志を滾らせる。

「負ケンゾ、オレハ負ケンゾ……オーデイン」

葛尾城のある方角へ……悍ましき化外の気配がする方角を睨みながら、紅い髪の鬼がそう告げた。

そして今度は尾張の方角……物語の鍵、オーデインの進める計画の要となっている人物である、新田劍丞がいるであろう場所を見る。

「ユックリ来イ、新田劍丞、出来ルダケ、ユックリ……早雲ノ計画、時間カカル。」

オーデインヲ討ツ作戰、時間カカル……切り札ハマダ、未完成ナノダカラ……」

オーデインは無数と言つても過言ではない数の魔法を使い、限りなく完璧に近い未来予知を行う。

オーデインの未来予知を破るか、予知されていても避けようのない武器を用意しない限り、戦つた所で勝ち目は無い。

そして北条早雲が考案し、鬼子が作り上げた武器は……まだ完全ではないのだ。

しかしその武器は、早雲の作戦は、徳河吉音の死を前提にした非道で非情なものであったが。

……

……

……

その日の午後、練兵館で耐火煉瓦の試作品を焼いていた九十郎が、美空に呼び出され

た。

「何の用だ美空？」

「反射炉の設計図なら明日あたり完成するからもう少し待てて、伝えたと思うんだが」

「それとは別件、未来知識を借りなきやいけないかもしれないから、

ちよつと付き合ってもらえるかしら？」

「未来知識ね、まあ別に構わんが……」

「これも前に言ったと思うが、俺は日本史はうる覚えだぞ。

「何にも有益なアドバイスが出来なくても恨むなよ」

「構いはしないわ。一応、名目上は私の太刀持ちって事で同席させるから、

私が発言を促すまで発言は控えて、何か気になる事があつたら……」

「そうね、太刀を持つ手を少し後ろに下げて頂戴、会談中に時々確認するわ」

「了解だ。しかし太刀持ちってのは護衛も兼ねてるんだら、

「向こうが襲つて来た時はどうする？」

「相手の性格から言つて無いと思うけど……でもその時は絶対に応戦しようとしなくて、

現状、越後に私の代わりができる人は居るけれど、貴方は替えがきかないわ。

「最悪、私が盾代わりになっても逃がすから、逃げなさい」

「弟子兼主君の主君が襲われてるのに尻尾撒いて逃げれるかよ。」

「そんなんじゃ胸張って師匠でございって名乗れねえだろ」

「駄目。本当に私の為を思うなら、生き延びて空や名月を守りなさい」

「そう思うならもう少し長生きする努力をしろよ」

「禁酒なら断固拒否するわ、例え廁で糞塗れになって死ぬ事になろうともね」

「ははは、こやつめ」

なお、かつて美空は林泉寺から呼び戻された際、御仏に対し不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の5つの戒めを誓っているのだが、数えるのが億劫になる位頻繁に人を殺しているし、必要なら略奪も戦術の一つとして躊躇わないし、

殺人や略奪の後は大抵酒を？んで泣いているし、剣丞が来た後は姦淫も普通にするよになる。

「まともを守ろうとしているのは不妄語……嘘は言わない、守れない約束はしない、一度した約束は死んでも守るといって誓いだけだ。」

「真面目な話、死ぬ前に跡目の事は決めておけよ。」

どうせ放つておいても生き残る名月はともかく、空が跡目争いで死んだ俺は泣くぞ」
なお、放置したら死ぬのは景虎……名月の方である。

「分かっているわ、空も名月も私の可愛い娘よ、むぎむぎ殺させはしない。

そう遠くない内に上杉憲政の養子になって、関東管領を引き継ぐ計画が実現する。

そうしたら……私が上杉謙信を名乗る日が来たら、まず最初に跡目を決める」

「だったら……」

「禁酒なら断固拒否するわ、例え山内上杉家を継ぐまでの一時的なものであつてもね。

お酒が無くて何が人生よ」

「ははは、こやつめ」

「何にせよ、空を少し気にかけておいて。何かあつても……方が一、

たった一人誰にも頼れない状況になつてもしぶとく生き延びられるよう、

武芸の一つでも教えてもらえるかしら」

「否とは言わんよ、俺は神道無念流大好きマンだからな」

「あと夜逃げのやり方も教えておいて」

「ははは、てめえ俺の事なんだと思つてやがる」

後日、空は共産主義志向、演説扇動能力、変装能力、蓄電逃亡能力、そして神道無念流を兼ね備えた恐るべきレッドモンスターに成り果て、越後を……いや列島全体を、共産主義革命の名を借りた狂気と混乱とレッドフォールの渦に叩き込む事となる。

これに対し、新田劍丞は……

『そうか……斎藤弥九郎と江川太郎左衛門が全力で弟子を育てるとああなるのか……』

正直甘く見てたよ、維新志士つてのを……

そして忘れていたよ、あの2人が桂小五郎の御師匠様だつて事を』

……と、死んだ魚のような濁つた眼をしながらそうコメントした。

傍迷惑な男である

「せめて塩を舐めながら一人で飲むなんて真似だけはしないでくれよ。

アレは普通に飲むよりも健康に悪いし、何かあつた時に助けられん。

寝ゲロが氣道に詰まってあの世行きとか、普通にありうるからな」

「お酒で思い出したのだけど、ウイスキーとかいう美味しいお酒造れるつて噂、本当なの？」

「造れるけどお前にはやらん」

「何だよ!? 柘榴や貞子には吞ませて私には吞ませられないつて言うの!?!」

「お前は酒飲むペースが速すぎる。

度数の高い蒸留酒を渡したらあつという間にアル中になるぞ」

「あるちゅ?」

「急性アルコール中毒、一気に酒を吞むと人は死ぬようにできてるんだよ」

「へ〜」

「ははは、その顔は信じてねえ顔だな」

「良いから吞ませなさいよウイスキー！」

柘榴に吞ませて私に吞ませないとか許されないわよ！」

「だから危険が危ねえって言ってるだろうが！」

上杉謙信になつて跡目決めるまで断固として吞ませねえぞコンニヤロウ！」

そしてどうとう掴み合いになり……

「お酒お酒おさあさあけえ〜!!」

「駄目だ駄目だだあ〜めえ〜だあ〜!!」

ついには取つ組み合いにまで発展する。

2人とも、この場に集まつた理由をすっかり忘れ、いつまでもいつまでも喧嘩を続け

……

「いつまで待たせんだあーっ!!」

……ついに隣の部屋で待たされていた来客がブチ切れた。

突然の乱入者……いや、乱入した方にとっては突然でもなんでもないのであるが、乱

入された方にとっては突然の乱入者に驚き、目を丸くする。

「こんな真昼間から！ 若い男女が密室で！

しかもおっぱい丸出し！ 不潔だろうがあー!!」

乳繰り合うのは私の用事を聞いてからにしろつつつてんだらうがあーっ!!」
そして再度来客がブチ切れる。

「乳繰り合つてないわよ! 誰がこんなスケベ心丸出し男なんかと!」

「悪いが俺も御免だね、前田利家だけでも持て余してゐるつてのに、

上す……じゃない、長尾景虎までなんて冗談じゃない」

「……それはそれで腹立つわね。何よ、長尾景虎じゃ不満だつて言うの?」

「逆だ、俺が見劣りして胃が痛くなつてくる」

「何それ? どういう意味?」

「長尾景虎には一生理解できん感情だろうさ、理解してほしいとも思わんが」

美空が九十郎の顔を覗き込む、九十郎が目を逸らす。

美空が九十郎の前に回り込む、九十郎が身体の変えを。

美空が九十郎の前に回り込む、九十郎が身体の変えを。

美空が九十郎の前に回り込む、九十郎が身体の変え……

「おい、いい加減に無視するのやめてくれませんかね!」

そろそろ泣きますよー、泣いちゃいますよー、大の大人がわんわん泣きますよー」

……来客、とうとう拗ねる。

「……久しぶりね村上義清、何で貴女が越後に居るのよ?」

「ああ、やっと気づいたんですか、そうですか……」

来客……村上義清と呼ばれた女性が、疲れ切った表情で肩を落とす。

「葛尾城城主の貴女がどうしてここに？」

「そりゃあ武田晴信っていう共通の敵がいるから普段から仲良くやってるけど、単身春日山城に来るような仲じゃなかったわよね？ 招いた覚えも無いし……」

そして……

「お城奪られちゃいました、助けてください」

「きゃびびびび〜！ というお寒い擬音語が聞こえてきそうな笑顔と共に、村上義清はそんな事を言い出した。

「お城ってどの城よ？」

「全部」

「全部う!? 何やってるのよ貴女!？」

「貴女が押さえてる城って天然の要害に築かれた難攻不落の城塞ばかりじゃないの!!」
美空が村上義清に掴みかかる。

「正直な所、対武田の防波堤として村上は非常に優秀であったため、こんな所で潰れられたら非常に困る。」

それに主な産業が略奪である武田が村上の領地で色々やって元気になられても非常

に困る。

「村上義清……どこかで聞いたような、村上、村上……」

そんな騒ぎをよそに、九十郎が考え込んでいた。

記憶の隅にあるとつかかり……何時、どこで、何をできてきたとつかかりなのかを、必死になつて、頭を捻つて思い出そうとしていた。

そして……思い出す。

「なあ、砥石城つて所で、粉雪……」

山県昌景と赤備えを破つたのつて、確か村上義清つて名前じゃなかったか？」

そんな九十郎の問いかけに、村上義清と呼ばれた女性は盛大に盛大に渋い顔になる。

「ええ、そんな事もありましたね……そんな事もありましたねえ……」

できれば思い出したくもないですよあんな出来事、アレさえ無ければこんな事には

……」

「そう言えば、武田が安倍金山を狙つてるつて情報得た時、

後ろからちよつかいかけて妨害してつて頼んだのだつたわね」

「ええそうですよ！ 頑張りましたよ私は！ あの死ぬ程怖い武田晴信相手に、

あの小使ちびりそうになる位強い精鋭赤備え相手に戦いましたよ！

そして勝ちましたよ！ でもその結果こうなつたんですよ、責任取つてください!!」

「勝ったからこうなつたつてどういう意味？」

「というか勝つてたの貴女、むしろそっちの方が驚きなだけけど」

「勝つたのつて、叩けつて言つたのてめえだろうがあーっ！」

「何で勝つて驚かれるんだあーっ！」

「ぶつちやけ負けれると思つてたもの」

「貴女とは一度話し合いをする必要があるようですね。」

とにかく！ 私は……村上は必死になつて戦つて勝ちました！

その結果城を奪われました！ 責任を取つて奪還を手伝つてくださいー！」

「奪われたつて、誰に奪われたのよ？」

そう尋ねられた村上義清は、数秒間バツが悪そうに視線を逸らし……ふうつとため息をつく。

「……鬼」

そして小さく小さく、か細い声で独り言のように告げた。

「それは何かの暗喩？ それとも越後にまで来て私をおちよくつてるのかしら？」

「冗談でも何でもなく、そして比喩表現でもなく、鬼が私の城を奪つたのですよ」

「鬼に城を奪われたねえ……そんな世迷言が通じるとでも？」

「助けてあげなくもないから本当の事を言いなさい」

「本当です！　本当に鬼に奪われたんです！」

「鬼がどこから出てきて、どう襲われて、どう奪われたのよ？」

「異人です。　金山奪取に動いた武田を牽制するために、出陣の準備をしていた頃、

黒装束で覆面の異人が現れて、奇妙な丸薬を私に渡してきたんです」

「丸薬ってどんな？」

「誰も見た事の無い、奇妙な丸薬です……」

それを飲めば、武田の赤備えを蹴散らせるだけの膂力が備わると言っていました。

武田晴信が砥石城に攻め込んだという知らせを受けたのは、その直後の事でした」

「それで？」

美空は話を聞きながら村上義清の表情を見ている。

鬼気迫る表情で、緊迫した目つきで、声は迫真に迫っていた……これが演技だとした

ら大した物だと、美空は思った。

「私は砥石城の救援するべく、すぐに兵を纏めて葛尾城を出ました。

砥石城を囲う武田と戦い……見事にしてやられました。

晴信は私が救援に出る事を予想して、あらかじめ罾と伏兵を用意していたのです。

このままでは全滅する、このままでは砥石城も葛尾城も陥落する……

やむなく私は家臣達に命じました、異人が持つて来た丸薬を飲めと」

「それで？」

美空は努めて平静を装い、話の続きを促した。

「家臣達が鬼になりました、鬼になって暴れ出しました、そして勝ちました。

鬼に変わった者達は、異人の言う通り、精鋭赤備えを打ち破る程に強くなりましたか
ら」

「あら、良かったじゃない」

「赤備えを打ち破り、晴信が甲斐に逃げ帰るまでは良かったのです。

その頃までは辛うじて人語を解する事ができました、

辛うじて敵と味方を区別してくれました。

しかし……10日もすれば、家臣達は心まで怪物になってしまいました。

武田も村上も無い、兵も民草も関係無い、目につくもの全てを襲い、殺し、壊し、奪
い、

喰らい、そして犯す本物の鬼に変わってしまいました」

「で、その鬼に城を奪われたの」

「そうです……逃げるのが精一杯でした、城も、町も、民草も全て見捨てて」

「何を考えてそんな怪しすぎる薬に手を出してるのよ!!」

「まともに戦ったら私が晴信に勝てるわきゃ無いだろーがあつ！

どんな手を使つても晴信の金山制圧を食い止めるとか、ケツ持ちは必ずやるつったのはどこのどいつだあーっ!!」

「私よ！ 私が言つたわよ確かに！」

でも飲むと鬼になるヤバイ薬飲んで戦うとか予想つくかあっ!!」

「と・に・か・くうっ！ 私は貴女の要請に従つて武田を攻撃したんです！」

金山制圧は阻止できませんでしたけれど、

武田晴信と山県昌景は負傷、精銳赤備えを相当数討ち取る被害を出させました。

長尾の要請に依じて被害が出たのですから、長尾は村上を助けるべきです！」

「うぐ……」

スジは通っている。

美空はそう思った、思わざるを得なかった。

通すべきスジは通す、守るべき信義は守る。

長尾景虎は今までそうやって生き、そうやってのし上がってきたのだ。

今ここで村上義清を見捨てるのは悪手だ。

それをすれば、今までコツコツと実績を積み上げ、貧乏籤を引き、胃を痛め、睡眠時間を削り続けて築き上げた長尾景虎の長所が無くなってしまうからだ。

「ドライゼ銃が揃うまで、派手な軍事行動は控えたかったのだけど……」

四の五の言ってる場合じゃないか……」

村上義清に聞こえないよう、小さく呟き、小さくため息をつく。

既に美空の心は8割方決まっている。

「九十郎、どう思う？」

「悪いが何とも言えん、美空が決めてくれ。俺は長尾景虎の判断に従うさ」

「そう……義清、家臣が鬼に変わったって話、

鬼が領民を襲っているって話、嘘偽りは無いのね？」

「誓って」

「対価は出せる？」

「長尾景虎を主と認めます。」

貴女がどのような天下の絵図面を描いているのかは知りませんが、それに従います」

「……再び足利一強の時代に戻す」

「分かりました、今後は貴女の思い描く天下を実現するため、身を粉にして働きます。

ですから……ですからどうか、民草を救い、悪鬼と化した我が臣を止めて頂きたい」

村上義清が深々と頭を下げる。

悔しい悔しい悔しい……そんな表情をしていた。

自分が武田の待ち伏せを見抜けなかったせいで、異人の怪しい薬に安易に頼ったせい

で、家臣達の魂を汚し、民草を理不尽な暴力に晒した事を、そしてそれを止めるために、他人に土下座をしなければならぬ事を、心の底から悔やんで恥じていた。

その表情を見て、美空は思った。

村上義清の言葉に一切の嘘偽りは無いと。

荒唐無稽過ぎて今一現実味が湧かないが、村上義清の家臣達は、確かに鬼に変じてしまったのだと。

故に美空は決断した。

兵を挙げると、そして村上を助けに行くと。

「……助けるわ、必ず」

美空はそう告げた。

かつて美空は毘沙門天に誓った。

不妄語……嘘は言わない、守れない約束はしない、一度した約束は死んでも守ると誓ったのだ。

犬子と柘榴と九十郎第38話 『葛尾城攻略戦（TAKE

2）』

『クズロー、ゴメン……マタ、守レナカッタ……』

向こうの世界の虎松が、最後にそう呟き、絶命する。

並行世界を繋ぐテレパシーの交信が断絶する。

「……コツチハ、上手クヤル」

頬を伝う涙を拭い、我が身を引き裂かれるかのような深い悲しみを噛み締め、虎松は再び別の世界へとテレパシーを繋ぐ。

「コツチハ、必ズ、上手ク、ヤル……デナケレバ……」

自分の死は無駄にはしない、決して犬死にはしない、させない。

そして自分が死ぬ時も、必ず犬死だけはするまいと決意して。

『ソツチ、ドウダ……？』

『ソツチ、ドウダ……？』

『ソツチ、ドウダ……？』

『ソツチ、ドウダ……？』

『ソツチ、ドウダ……?』

……

……

……

「犬子おっ!」

「わんっ!」

「柘榴おっ!」

「気合十分っす!」

「よっしやあ! 俺達やパートタイム越軍先手組! 気張って行くぜえっ!!」

「おおーっ!」

「おおーっ!」

犬子と柘榴と九十郎が剣を天高く掲げる。

柘榴率いる先手組がそれに倣って各々武器を掲げ、鬨の声を上げる。

ここまででは先日虎松が見た、別の世界の光景と……犬子達が鬼に襲われ、敗北し、凌辱された世界の光景と全く同じである、しかし……

「……で、何でてめえまで来てるんだ虎松?」

九十郎がじとくという不審人物を見る目を虎松に向ける。

虎松を引き留めようとした空と愛菜を催眠術で眠らせ、こつそりと兵糧運搬用の荷車に忍び込んでいたのだ。

「クズロー達、心配ダツタ」

虎松が端的に自分の心中を述べる。

その言葉に一切の嘘偽りは無かったが、見た目ガリガリに痩せた幼女が言うのでは説得力に欠ける。

「いや心配ってお前、お前を守りながら戦うの大変なんだよ！

何で大人しく待ってねえんだよ！」

「心配ダツタ」

別の世界では、虎松が遠く離れた場所に居たために、救援が間に合わなかった。

九十郎の危機を察知した頃には、既に虎松一人ではどうしようもない状態になってしまっていた。

最初から九十郎達と一緒に戦っていれば、あるいは……と、別の世界の虎松が死の間際に伝えてきた。

どうか迂闊で不甲斐ない自分の分まで、九十郎を守ってくれと叫びながら。

「……それを言うのなら、できれば九十郎にはついて来てほしくなかったのだけだ」

そんな先手組の姿を、長尾の総大将であり越後の国主でもある長尾美空景虎が不安そ

うに見つめていた。

「ははは、俺が合法的に神道無念流を振るえるチャンスを逃す訳がねえだろ」

「貴方自分の価値を理解しているの？ 貴方は私の描く戦略に必要不可欠なのよ」

「今回、相手は鬼とかいう魔化魍だか外道集だかみたいな存在なんだろう？」

人間相手じゃ切った時の気分が最悪だから丁度良い」

「まあ素敵、こいつ状況を全く把握していないわ」

いつもの九十郎である。

「それに……粉雪を酷い目に遭わせた連中なんだ、

神道無念流がたっぷり御礼をしてやるのがスジってもんだろ、」

「いやどんなスジよ!? そんなの聞いた事が……」

ちよつと待ちなさい、粉雪つてもしかして山県昌景の事かしら？

武田四天王、精鋭赤備えを率いる山県昌景かしら？」

「ああ、そうだが」

「……柘榴」

「柘榴も初耳つす」

「その辺の事情、これが終わったらじつくり聞かせてもらおうわよ……」

美空が今後の九十郎の扱いに関して頭を悩ませながら、ゆつくりと剣を抜き、自身の

超能力……長尾家御家流・三味耶曼茶羅を発動させるべく、精神を集中させる。

「九十郎とその子の護衛、頼んだわよ。それじゃあ行くわよ新技……」

ロツズウ！ フロムウツ!! ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

戦国時代に人間には理解不能な技名を叫び、美空の御家流……今まで使っていた御家流を変化させて編み出した新技が発現した。

護法五神を真上に呼び出し、真下に向かって突撃させる新技は、今までの三味耶曼茶羅の2倍……いや、10倍の威力がある。

美空の超能力が、まるで障子紙のように葛尾城の城門を破碎した。

「スカツとするわね、この新技」

「……護法五神が目を回している」

美空の後ろに控えていた松葉がツツコミを入れた。

猛スピードで地面に叩きつけられた護法五神が全員揃って気絶するという、いつもの2倍の仏罰が下りそうな光景がそこにはあった。

「しかも半数以上が大外れっすよ」

珍しく柘榴もツツコミを入れた。

何の意味も無く護法五神が叩きつけられ、何の意味も無くクレーターを作るという、2×2で、いつもの4倍の仏罰が下りそうな光景がそこにはあった。

「回転は加えたのか？」

「加えたわ、いつもの3倍の回転を加えて1200万パワーになるようにって」

「美空様、毘沙門天様が、その……上半身が地面にめり込んで、

バタ足みたいにもがいているんですけど、助けなくて大丈夫ですか」

犬子が恐る恐る美空に尋ねる。

きりもみ回転をしながら地面にめり込み、犬神家のような状態にさせられた毘沙門天の心境はいかなるものか…… $2 \times 2 \times 3$ で、いつもの12倍の仏罰が下りそうな光景がそこにはあった。

「あんまり連発はできそうもないわね、この新技」

「神様ニ敬意、アツタ方、良イゾ。」

神様ニ喧嘩売ル気ノオレガ言ツテ良イ事カ、分カランガ」

「分かった分かったわよ！ 封印するわよこの新技！」

毘沙門天達が怒って殴りかかっただけ有情である。

「まあ、それはそれとして……突入つすうーっ!!」

「何だっついていい！ 神道無念流を振るうチャンスだ！」

「柘榴様！ 九十郎！ いきなり飛ばし過ぎだよおっ!!」

馬鹿2名と前田利家が葛尾城に突撃する。

「あ、ちょっと、一番死なれちゃ困る奴が一番先頭を走るんじゃないわよ！

松葉追うわよ、最悪張り倒してでも止めなさい！」

美空と松葉がそれを追う。

そして……

……

……

……

「……御大将、鬼どころか、人っ子一人見つからないっす」

その日の夜、1日かけて葛尾城周辺を走り回った柘榴が疲れ切った表情でそう報告をした。

「義清、私に何か言うべき事は無い？」

「お、おかしいですね……私が最後に見た時は、凄い数の鬼が居たのですけれど……」

村上義清は正座したまま、冷や汗を滝のように流して視線を逸らす。

「貴女が嘘を言ったとは思っていないわよ。」

城内にも周辺の村にも人が居ないなんて異常な事、そうそう起きはしないわ」

「刀傷、銃痕、折れた柱、壁の穴、血痕、精液の匂い……何かがあった事は確実。」

傷の新しさと臭いの強さ……そう昔の事ではない」

美空と共に城内を確認して回った松葉がそう告げる。

「問題は、この惨劇を引き起こしたのが鬼なのか、それとも人間か……」

武田辺りがやった事なのかが分からないって事よね」

「武田と言えば、駿河に軟禁されていた武田信虎が行方を眩ましたって報告、来てたつすね」

「ああ、光璃に背かれて領地からたたき出されたアレの事？」

流石に関わってはいないと思うけれど……」

ねえ義清、貴女本当に鬼を見たの？」

野生動物を見て勘違いをしたとか、その辺の山賊が妙な仮装でもしていたとか……」

「確かに見ました！ 私の目の前で家臣達が鬼に変わったのです！」

あの黒装束の異人が持つて来た奇妙な丸薬を飲んで……」

「……信憑性が無い」

必死の弁明を松葉がバツサリと切り捨てる。

「喧嘩売ってんのかこらあーっ！」

義清が松葉に食って掛かる。

「それにしてもこの時代、随分とサイキッカーが多いんだな」

「さいきつか……何それ？ 外人？ 歌？」

九十郎の眩きに美空が反応する。

「九十郎、横文字は通じないって」

「分かってるよ、サイキッカーってのは……説明しようとするの難いな。

つまり念的な何かで超常現象を引き起こす才能がある人間の事だよ。

さつきロツズ・フロム・ゴッドとか何とか叫んで城門をぶっ壊しただろ」

「ああ、御家流の事？」

「そうそう、俺は前の……」

「ごほん、俺やセカンド幼馴染は昔から便宜上サイキッカーって呼んでる。

確か柴田勝家とか、丹羽なんとかとか、滝川クリステルとかも使えたんだっけな」

「九十郎、たぶんそれは丹羽長秀様と、滝川一益の事だと思うよ」

九十郎は麦穂と雛に土下座して謝るべきである。

「実は柘榴も御家流、使えるっすよ」

柘榴がそう言つてふふくとたわわに実つた胸を張る。

「マジかよ!? やっぱサイキッカーが多いな戦国時代は。」

人間追い詰められると新たな能力が開かれるとかそういう感じなのかな。

宇宙に進出した人間がニュータイプになったみたいにな」

「九十郎が前にいた時代にも、御家流を使つた人がいたのかしら?」

「井伊の糞女と、俺のファースト幼馴染が使ってたな。

人格と能力が反比例でもしてたのか、結構厄介な能力だったよ」

人格と能力が反比例するのなら、今頃九十郎は念力で山をも砕けるようになってる。

「チツ、警戒シタカ……」

そんな中で、虎松が常人離れた視力と聴力で周囲を探っていた。

彼女の能力をもつてしても、屍食鬼……武田晴信や村上義清が鬼と呼ぶ怪異の姿を認できていない。

「デキレバ、ココデ削レルダケ、削リタカツタガ……」

虎松がため息をつくが、どうしようもない。

平行世界の虎松と対話する能力は確かに便利であるが、気力と体力の消耗が激しく、対話をしている間は無防備になる上、既に絶命した虎松や、呑気に会話をしている状況ではない虎松からは何も聞き出せないという弱点もある。

葛尾城で屍食鬼に襲われ、揃って強姦、凌辱された世界の虎松は、こちらの世界の虎松に状況を伝えきる前にトドメを刺されたため、この世界との差異を十分に把握できていないのだ。

「しかし……あれだけいた鬼がどこへ行ったのか……」

「少なくとも見ても10000はいたと思うのですが」

「義清がそんな疑問を抱く。」

「そんな数の丸薬、作るのも運ぶのも配るのも一苦労じゃないの?」

「丸薬の数は1000です。」

「ただ……良く分からないのですが、気が付いたら増えたと言いますか……」

「何故増えたのかも分からない、どこに消えたのかも分からないと」

「はい……」

「まるで大型台風でも過ぎたかのようにボロボロになった葛尾城を見直し、

美空と義清はため息をつく。

「まあ……今は考えても仕方が無いわね。」

「今夜はここに泊まらせてもらって、明日周囲を調べましょう。」

「鬼はどうなったのか、領民が無事なのか、色々と気にかかるもの」

「物見を放つつすか?」

「いえ……下手に分散はせず、大物見でいきましょう」

「時間かかるつすよ」

「葛尾城の確保ができたなら、急ぐ理由はもうあまりないのよ。」

「首尾良く武田が出てくる前のようだし」

「ラジャーっす」

「御意」

柘榴と松葉が連れてきた兵達に明日の予定を伝えに行く。

こうして長尾家御一行の葛尾城奪還作戦は何の面白みも無く終わった。

虎松……こちらの世界の虎松が懸念した、鬼の襲撃は起きなかった。

犬子と柘榴、美空や松葉が鬼に敗れ、凌辱され、児を孕まされる事も無かった。

しかし……

「全く……駿河を鬼で埋め尽くせと言ったかと思えば、

やはり越後の長尾景虎をやれと言ひ、葛尾城に向かう景虎を襲えと言ったかと思えば、

やはり止めにしろと言ひ……随分と指示の変更が多い御方だ」

1000以上の鬼を従えた鬼……いや、人間が葛尾城を眺めながらそう呟いた。

葛尾城に鬼をしこたま詰め込み、ノコノコとやって来た所を襲撃する作戦は、鬼の力を……あらゆる人間を蹂躪する力と引き換えに、彼女を従えたある人物の指示により、急遽中止になった。

彼女の名は武田信虎。

美空達が凌辱された別の世界では、さらなる力を求め、美空達の目の前で鬼へと変貌

した信虎であったが、こちらの世界ではまだ人間のままで。

「ドライゼとハーバー・ボツシユがそれ程恐ろしいか……」

どんな代物かは知らんが、鬼の力と言うのも案外大したものでは無いか……」

信虎は今迷っていた、考えあぐねていた。

あの御方……吉野の御方が言う、鬼の力が人間を遥かに超越するものだという事は理解している。

しかし、『ドライゼ』だの『ハーバー・ボツシユ』とかいう良く分からない物を怖がり、何度も何度も作戦変更を強いられる程度の力でしかないのではないかと……

「我が欲するのは最強の力だ。何者であろうとも恐れる必要が無い、

何者に対しても媚びる必要の無い、誰にも何も奪われぬ、逃げる事も無い最強の力だ。

ドライゼやハーバー・ボツシユを恐れて逃げ回るような力では……な……」

そう言つて信虎は、薬籠に入っている丸薬を見つめる。

吉野が自らしつらえた特別製の物……人としての思考を喪う事無く、鬼の能力だけを引き出せる丸薬、信虎が欲した力を得るための片道切符である。

それを信虎は……飲めなかった。

鬼の力に疑問を抱いたからだ。

それを信虎は……鬼となる選択肢を完全には捨てられなかった。

それでもなお、強大な力を欲しているからだ。人間を遥かに超越する力を欲しているからだ。

「さあ、どうするか……」

こちらの世界の信虎は今、迷っていた。

その迷いが、信虎をどう行動させるのか……それが分かるのは、もう少し後の話である。

犬子と柘榴と九十郎第39話 『井伊直政・通称ニート』

美空達は無人の葛尾城と砥石城を確保し、方々を探し回って散り散りになっていた村上の家臣団や領民を掻き集め、美空の求める天下の絵図面……再び足利一強の時代に戻す構想への協力と引き換えに、城や領地を村上義清に返還した。

それから幾許かの時間が過ぎた。

九十郎はドライゼ銃とハーバー・ボツシユ法による硝酸カリウムの量産計画を進めていた。

武田や北条に情報を抜かれないよう、細心の注意を払いながら……少しずつ少しずつ計画は進められていた。

「さらば齋藤龍興、謹んで冥福を祈る」

「蝮の孫のあつけない最後だったつすね」

最新の織田久遠信長情報を聞き、九十郎は静かに龍興の冥福を祈った。

「九十郎、まだ齋藤龍興さんは死んでないよ。」

久遠様に負けて、美濃から逃げ去ったつすねだけで

犬子が苦笑しつつ補足する。

「死んだも同然だろ」

「それは……それはまあ、否定できないかも知れど」

「俺も昔は斎藤姓だったから思う所が……いや、無いな、全く無い」
薄情な男である。

「九十郎って、斎藤姓だったっすか？」

「昔はな、と言つても前の生での話だが」

「未来の……ええと……」

「大江戸学園」

「そう、それっす。大江戸学園で生きてた頃の話しっすか？」

「九十郎って実は結構良い家の生まれだったりするっすか？」

「あ、それは犬子も気になるかも」

「セカンド幼馴染はかなり歴史のある家の生まれだったらしい。」

だが俺は前の生も今生も、歴史も権威も全然無い普通の家庭の生まれだよ」

ファースト幼馴染の方は武田信玄の生まれ変わりなのだが、九十郎は全く気付く様子
が無い。

「そうっすか……それじゃあ一旦どつかの養子にする必要があるかもっすね……」

「養子って、誰が？ どこに？」

「九十郎の話つすよ、どこにするかはまだ検討してるところつすけど」

「何で俺が養子に行かなきゃいかんのだ」

「夫婦になるには家の格に隔たりが大きいつすから。昔から良くある手つすよ」

「……俺が？ 柘榴の？」

九十郎がちよつと意外そうな顔をする。

この男が柘榴を抱いた回数は既に10回以上になるのに、九十郎は無意識の内に『結婚』の2文字を頭の隅に追いやっていた。

「そつちが柘榴を九十郎色に染めたつすよ。」

正直な話、もう九十郎抜き的人生とか考えられねえつす。

だから名実共に柘榴の家族につて……考えてるつすけど、九十郎は嫌だつすか？」

「嫌じゃねえさ、嫌じゃ……だが……」

九十郎は言葉を濁し、犬子の方を覗き見る。

柘榴を娶る事に関しては、九十郎的に異存は無い……それどころか、あのエロボディを合法的に好き勝手にできるとか最高じゃねえかげつへつへつへつ、とか何とか考えている。

とことんまでゲスい男である。

ただ、それを言うと犬子も……歴史上の偉人である前田利家も一緒に娶らないといけないような気がするので、今まで考えるのを避けていたのだ。

「犬子は、その……九十郎が嫌じゃなきやだけど……」

「側室でも妾でもつて話だろ。」

いや……だが、前田利家を妾にするって、結構度胸がだな……」

「度胸って……言いたくないけど、今の犬子は加賀百万石でも何でもないんだよ。」

あんまり気にしなくて良いと思うけど」

「俺は気にするんだよ」

「何言ってるっすか九十郎、当然犬子も一緒につすよ！」

「いや、だがな……ところで、さっき言ってた養子の話、どういう感じで進める気なんだ？」

追い詰められた九十郎は露骨に話題を逸らした。

「応仁の乱以降、中央に税を納める大名なんて数える程しかないから、

名門貴族様は揃ってド貧乏っす。

それなりに金を積めば適当な家の養子にするなんて簡単で、官位だつて……

まあ、そういう所が中央の権威を下げてるつて話もあるっすけど」

「地位と名誉が金で売り買いされるようになったらお終いだぞ。」

そういうのは万国共通だからな」

「そつすね……御大將は取り返しがつかない位に権威が崩れる前に、

権威と釣り合いのとれる位の實力を備えさせたいって言ってるつすけど」

「んな面倒な事する位なら、いつそ上杉謙信が將軍になつちまえば良いんじゃないのか？」

「それを考えて、実行に移そうとしたのが今川義元つすよ。

御大將も、やり方は賛成できないけど、目的は正しいって常々言ってたつすから。

義元公が討たれて、天下太平は100年遠ざかったつて……」

「心配するな、その辺はひよ子がどうにかするさ」

ひよ子がどうにかした場合、その後待つのは朝鮮出兵と関ヶ原である。

「ねえ九十郎、犬子は正直、ひよ子が戦乱を納めるつて話、今でも信じられないんだけど」

「日本史は正直疎いから、ひよ子がどうやって天下を取ったかは説明できん。

墨俣に一夜城を作ったのも、ひよ子じゃなくて新田劍丞つて奴の手柄になつてたしな」

「でも、ひよ子と蜂須賀小六さんつていう野武士の人が参加してたんでしょ？」

「そこは九十郎の言つてた通りだったよ」

「しかしなあ……新田劍丞、新田劍丞……駄目だ、やっぱり思い出せん。」

誰なんだ新田劍丞って？」

「織田信長の夫になったって噂っすね」

「空から光と一緒に降りて来たって噂もありますよ、柘榴様」

「ははは、異世界転生もののラノベか何かかよ……」

と言いたい所だが、前世の記憶がある俺がそれを言う資格は無いか」

「新田劍丞もハーバー・ボツシユ法を知ってるっすかね？」

「新田劍丞が俺と同じ未来人なら、もう少し色々動くと思うがな。」

それに戦国時代で調達できる材料でハーバー・ボツシユ法を実行する方法なんて、現代社会では何の役にも立たない知識を知ってる奴、

俺とファースト幼馴染以外にいるとも思えん」

そんな頭のイカれた知識を追い求め現代人なんて、武田信玄くらいのものである。そんな事を話していると……

「クズロー、名前、ツケテクレ」

いつの間にやら練兵館に入り込んでいた虎松が、九十郎にそう告げてきた。

「……誰が誰の名前をつけるって？ てかお前どこから入って来た？」

「普通二、玄関カラ」

「おい柘榴、お前今朝戸締りしたか？」

柘榴は視線を逸らした。

「お前な……」

九十郎が呆れた顔を柘榴に向ける。

「クズロー、ソレヨリ、名前ツケテクレ」

「名前って、何で俺がそんな面倒臭い事をしなきゃいけないんだよ」

「必要だ。名前……クズローニ、ツケテホシイ」

九十郎が心底面倒臭そうに頭を掻く。

正直、突っぱねて帰らせたい気分だったが、虎松はこうなると梃子でも動かない事を経験上知っている。

「メキシコに吹く熱風という意味で……いや、それじゃ面白みが無いから……」

結局、九十郎は素直に虎松の名前を考える事にした。

とつとと終わらせて、とつとと帰らせようという魂胆だ。

「名前って、どういうのが良いっすか？」

「通称デ良い、オレノ呼び名、必要。他ノオレト、違ウ名、区別ノ名……必要」

「ああ、通称で良いのか。んじゃ適当に……ニートで良いんじやね」

九十郎は適当極まりない通称を押し付けた。

「ニート？」

「そうそう、ロクに役に立たなくせに飯だけは食いまくるお前にピッタリだ。

漢字だと……そうだな、新しいに、戸棚の戸でニートって事で」

酷過ぎる名前である。

誰が聞いても酷過ぎると感じる名付け方であったが……それでもなお、虎松は笑った。

「ソウカ……新戸カ、新戸ナンダナ、オレハ……オレハ新戸デ良インダナ……」

心の底から嬉しそうに笑った。

これで自分は『新戸』だと、他のどの自分とも違う、たった一人の『新戸』なのだ

……

そして……

「超おおおおおくくく絶うっ!! し・ん・かああああーっ!!!」

次の瞬間、虎松が爆発した。

ウルトラマンガイア最終回、バーストストリームを叩き込まれたゾグ第2形態のように、まるで体の内側に火薬でも満載していたかのように、爆音と爆炎を伴って虎松の身体がバラバラになった。

犬子も、柘榴も、九十郎も驚きのあまり大きく目を見開いた。

虎松が突然爆発四散したためではあるが、それだけではない……もうもうと立ち込め

る煙の中に、虎松とは違う人影が見えたからだ。

虎松と同じ、白銀の髪をした女性がいた。

骨が浮き出る程にガリガリに痩せ、いつも餓死寸前かと見間違うまでにやつれていた虎松と違い、肌や髪に艶があった。

幼児体型の虎松と違い、スラツとした長身の女性であった。

ただし、誰が見ても分かる位のド貧乳であった。

「ふふふ……ふふははは……ふはあーはっはっはっはっはっはっはっはっ!!」

はあーはっはっはっはっはっはっはっはっ!!」

そして高笑いをしていた。

マツパなのに高笑いをしていた。

その声は虎松の声に良く似ていたが、虎松と違って活舌が良かった。

「え……あれ……誰なの、あの人？ 虎松ちゃん？ 虎松ちゃんなの!？」

「いや、柘榴にも何がなんだか……」

人間がいきなり破裂して、中から別の人間って、訳が分かんねーっす」

犬子と柘榴は、純粹に混乱していた。

人間が爆発して、謎の全裸が高笑い……混乱しない方がおかしいだろう。

だがしかし、九十郎はその全裸に見覚えがあった。

故に驚いて、戸惑っていた。

あいつが戦国時代に居る筈がないと……

「て、てめえは……井伊の糞女……」

そう……かつて大江戸学園の斎藤九十郎が運営していた道場、練兵館を2度も破壊し、九十郎をナチュラルに屑呼ばわりし、尚齒会事件にガツツリと関わり、最終的に遠山朱金と夕暮れの河原で殴り合い……勢い余って殴り過ぎたらしく、そのまま死亡した筈の糞女であった。

「何でてめえがこっちに居るんだ糞女あつ!! 死んだ筈だろてめえつ!!」

今にも斬りかからんばかりの勢いでそう詰め寄る。

「いきなりご挨拶だな屑」

「他人をナチュラルに屑呼ばわりする所はあの糞女そのままだな!」

「とと、いけないいけない、つい癖で……これじゃ向こうのオレの二の舞になる。

く、くずろ……くじゆ、くじゆ……クジユロ」

「何だそのイントネーションは、俺はバジエロか!」

「クジユロ、くじゆ、く、くず……妥協して屑郎じゃ駄目か?」

「駄目に決まってんだろ!」

「お前の名前、言にくい」

「犬子も柘榴も普通に呼んでるぞ」

「発声器官が人間と少し違う、言いにくい言葉があるのも仕方がない」

「ははは、その言い訳は斬新だな。斬新すぎてぶった切りたくなる」

「九十郎、流石に可哀想だよ。虎松ちゃん……虎松ちゃんだよね？」

裸のままじゃ風邪ひいちゃうからさ、服を持つてくるから着なよ」

「いや、虎松じゃないぞ」

「え、違ったの？ じゃあ、えつと……なんて呼べが良いのかな？」

「名前を得て、進化を果たした今のオレは井伊直政……通称は新戸だ」

全裸の女性が、そう言つてニヤリと笑つた。

「井伊……直政……？ 徳川四天王の一人、あの糞女のご先祖じゃねえか!？」

「先祖ではないぞ、対外的には先祖で通してただけだ。」

数千年も老いもせずに生き続ける人間はいないからな」

「良く分からんが……何でも良いからとつと服を着ろよ服を。」

公然わいせつでとつ捕まるぞ」

九十郎がドヤ顔の新戸の後頭部をどついた。

「屑郎、痛いぞ……」

新戸の顔は、少しニヤけていた。

……

……

……

とりあえず練兵館の奥に引きずり込み、服を着せた。

全裸の女性に長々と居座られると世間体がアウトになりかねないからだ。

「つまり、今までの話を総合するとだ……」

今までずっとサナギマンだったと、そういう事か？」

九十郎が頭を押さえながら、虎松……改め、新戸からの話を思い返す。

端的に言って意味不明な話であった。

「さっきまでのオレは、休眠に適した身体をしていた。

身体機能をギリギリまで削って、長期間飲まず食わずで眠り続けるためにだ」

「……そういえば最初に会った時、木乃伊みたいにカラカラに乾いていたよね」

SANチェックが入りかねない光景である。

「目覚めてからオレは、削ぎ落としていた機能を戻すために身体の構造を作り変えていた。

それは昆虫がサナギになっている時、自分の身体を一度ドロドロに溶かし、

それを材料にして成虫の身体に作り変えるように……」

「要はサナギマンになってたって事だろ」

「屑郎がそう言うのなら、それで良い。」

とにかくオレは、身体を作り変えるのにエネルギーの殆どを費やしていた。

だから超能力の種類も制限されていたし、出力も燃費も悪かった」

「今は大丈夫って事っすか？」

「完全じゃないが、改善はされた。オレは本来、もう少し後に目覚める予定だった。

後醍醐……優れた才能があつたばかりに狂ってしまった可哀想な奴が、

森小夜叉長可に斬られて死んだ後に目覚めるつもりだった。

中途半端な時期に無理矢理活動を再開したから、身体のアチコチにガタがきている。

だからオレは、他の世界のオレよりも、少しだけ弱い」

「他の世界にもてめえみたいなのが大勢いるってか？」

大江戸学園の糞女がゴキブリみてえにウジャウジャいるとか想像したくねえな」

「いいや、一つの世界に一人ずつだ。」

あつちの……大江戸学園のオレも、今ここに居るオレも、同じオレだ。

並行世界の同一人物という関係になる」

「だからあの糞女と瓜二つなのか」

「ああ、そうなる」

「俺の道場も2回もぶっ壊した糞女とは別人になるか」

「名前も違う。こつちのオレにはオレだけの名前がある、ついさつき名前を貰った。

新戸という名前がある、他の世界のどのオレとも違う、オレだけの名前だ」

「そうかそうか、そいつは大変だな」

憎き仇敵とは別人と分かり、九十郎は急速に新戸への興味を失いつつあった。

「とりあえず燃費が改善されたって事は、

今後はウチの家計を逼迫させる勢いで食う必要は無い訳だな？」

「そうだ。だけど、食事を恵んでもらうのは続けてほしい。」

オレは他人から恵んでもらった食事以外は食えない、身体が受け付けない」

「なんだそりゃ？」

「そういう生感、そういう体質だ。自分でも面倒臭いと思っている」

「ははは、つまり今までとほぼ変わらねえって事じゃねえかふざけんな」

「超能力って、どんな事ができるっすか？」

「色々だ」

「色々だな、こいつデイツク牧みてえに色々使えるんだよ」

「おお、言葉の意味は分からないっすけど、それは凄そうっすね」

「言っておくが、戦争に超能力を使う気は無いぞ。」

化外は化外、人は人、化外が人の世をどうこうするのも、化外が人に力を振るうのも良くない。

人が自分の都合を化外に押し付けるのも、良くない」

「ありや、武田やつつけるのを手伝って……とか、駄目っすか？」

「鬼が出たら戦う、化外は化外、人の世に関わらせない。

後は、屑郎に敵意ある奴を排除する、1人や2人の死人はやむを得ない。

他は期待しないでほしい。オレの能力で人の世が変わるのは、良い事じゃない」

「それなら、美空様には黙っていた方が良くいっすね。

あの人の性格上、使える物を使えないのは面白くないって絶対言うっすから」

難儀な性格であるし、それは本人も自覚している。

しかし、今までずっと胃をキリキリと痛め、数えきれない程の犠牲を払いながら武田晴信と凄惨な殺し合いを続けてきた美空にとって、使える者をあえて使わないのとは、今までの犠牲者達に対する侮辱のように感じてしまうのだ。

「さらに屑郎から名前を貰って進化したオレは……

そうだな、例えば……こういう事ができる」

新戸が何も無い壁を見つめる。

九十郎達3人が視線を追うが、何度見返しても壁があるだけに見える。

「おいこら糞二ト、何の冗談だ？」

「少し静かに……射程距離ギリギリ、近く範囲ギリギリにいる……」

精神を集中させないと……」

死んで腐ってしまった魚の目のような濁り切った瞳がルビーのように紅く輝く。

新戸の老婆のような白い髪が鮮血と同じ色に染まり、木々がざわめき、空気が揺れた。

「何言ってるんだお前、中二病か？」

能天気な九十郎が呆れ顔でそう問いかけるが、新戸の顔は真剣そのものであった。

そして……

「捕まえ……たあつ!!」

きやつ! という少女の驚きと戸惑いの声が出た。

ずぎぎぎぎぎあーっ! という人間が地べたを引きずられる音が出た。

どがあんつ! という大きな音を立て、少女が格子窓を突き破り、練兵館に飛び込んで来た。

「ぎゃあああああーっ!! 俺の道場があつ!!」

女の子が突っ込んで来た事よりも、道場が壊れた事を気にする男がいた。

「九十郎、驚く所そこじゃないでしょ!! この娘……小波さんだよ!」

「へ? えつと……おお、小波じゃねえか、何やってんだお前?」

「え……いえ、あの、これはその……ち、近くを通りがかったので様子を見に……」

戸板を突き破り、練兵館に飛び込んで来た少女……犬子と九十郎は、その顔に見覚えがあった。

かつて三河で歌夜と綾那を相手に神道無念流をやっていた頃、はす向かいに引つ越してきて、時々夕食の御裾分けとかをしたりされたりした少女……小波であった。

「……透視と、念動力だ。以前よりも射程も精度も上がっている。

どうだ屑郎、少しは見直したか？ 褒めても良いんだぞ」

「小波を実験台にするなよ、この馬鹿！」

九十郎は新戸の後頭部を思い切りドツいた。

「新戸ちゃん、通りすがりの子に酷い事をするのは駄目だよ」

「通りすがりじゃない、こっちの知覚範囲ギリギリ、しかも木の上から様子を伺っていた」

「……は？」

「へえ、もしそれが本当なら、まるでどこかの間者のような行動つすね」

柘榴と九十郎が疑念の目を小波に向ける。

「小波さん、そうなの？」

犬子は信じられない、信じたくないといった表情で、小波を見つめる。

「い、いいえ、誤解です。私はただ……」

小波がそんな弁明の言葉を述べ、それが終わらぬうちに……

「させんっ!!」

……新戸の念動力が再び小波を捉え、浮遊させ、弾丸ライナーのような速度で練兵館の神棚に頭から突っ込ませた。

「ぎゃあああああーっ!! 俺の道場があっ!!」

九十郎はいつも通りである。

「新戸ちゃん!」

「今、こいつは超能力を使おうとした。こいつはテレパスだ。」

精神を集中させて、何か情報を伝えようとした」

「だからっていきなりアレは酷いよ!」

九十郎が壊れた道場に頭を抱え、犬子が新戸に抗議する中……柘榴は腰に掃く刀を抜いた。

「今、壁に叩きつけられる寸前に、受け身をとったつすね?」

ただの町娘にしては動きに迷いが無かったつす。あんだ、何者つすか?」

柘榴だけが小波を知らなかった。

柘榴だけが小波の一瞬の防御反応を見逃さなかった。

ゆつくりと、ゆつくりと、最大限の警戒をしながら倒れ伏す小波に歩みを進める……
「……………くうっ!!」

直後、小波が起き上がり、柘榴と新戸に向けて手裏剣を投擲する。

「やっぱり間者だったつすか!!」

高速で飛来する手裏剣を柘榴が斬り払い、練兵館に火花が飛び散る。

直後、小波は服の下に隠した短刀を抜き、全速力で走る。

2度に渡って小波を掴んだ不可視の力場、それに対抗する手段が思いつかない、

今は勝てない、今は逃げるしかない……逃げて情報を持ち帰るのだ。

故に走った、先程自分が練兵館に突っ込んでいった際にできた穴に向かって……しかし。

し。

「……………遅い」

……3度不可視の力場に、新戸の念動力に捉えられる。

半人半魔の超生物の視界から逃れられる程の速度が出なかった、だから捕まった。

「う、動け……な……」

全身が硬直していた。

まるで身体中が隙間無く石で包まれたかのように、生き埋めにでもされたかのように、全く動けなくなってしまう。

「御家流を使おうとするなよ。」

オレには分かるし、思念を飛ばされる前にお前の首を振じ切る事もできる」

硬直したまま、小波の身体が浮かび、九十郎達4人の前まで連れてこられる。

どうにか拘束から逃れようと、小波は全身に力を籠めるが……無駄な無力な抵抗であつた。

「知ツテイル事、全テ話セ」

新戸の灰色に濁っていた瞳が、血のように紅く、ルビーのように妖しく輝いた。

その言葉が、小波の魂を槍のように刺し貫いた。

小波の意識が遠のく、遠のく……抵抗しようという意思が消え、新戸の言葉に従い

……

「……ぐうっ！ あああっ!!」

……咄嗟に唇を噛み締めた。

血が噴き出る程に強く噛み、激痛で意識をハッキリとさせた。

そうしなければ、そのまま意識を失い、自分の全てを語ってしまったっていた、主君・松平葵元康を裏切ってしまった……小波はそんな気がした。

「抵抗した、か。 流石のオレでも、テレパスの心までは読めない。 どうするか……」

新戸がどうしたものかと考えを巡らせる。

目の前の人物が服部半蔵……松平に仕える優秀極まりない忍者である事は、かつて別の世界の自分から教えて貰った。

それ故に知っている、そう簡単に懐柔できるような人物ではないと。

「おい糞ニート、お前さつき、人の世に関わりたくないとか何とか言っただけか？」

「こいつは片足を人外の領域に踏み込んでいるからセーフだ」

「意外と融通効くんだな」

「屑郎を守るためならな」

「それでどうする気ですか？ 他国の間者は、見つけ次第殺すのが定石ですよ」

「え……？ 殺しちゃうんですか、柘榴様。」

小波さん、結構優しくて良い人だから……その……」

「間者相手に下手な情けは禁物ですよ」

「く、九十郎……」

犬子が助けを求めするように九十郎の名前を呼ぶ。

「いや俺だって小波を殺したいとは思ってねえよ。」

だが……柘榴の言う事も間違っちゃねえと思うぞ……」

「そうだけど、そうかも知れないけど……」

殺すしかないのか……そう犬子と柘榴と九十郎がそう考えた時……

「屑郎、マジカルチ○ポに興味無いか？」

新戸が小波の豊満な胸を……九十郎が好みそうな女体を見つめながら、その瞳を紅く輝かせながら、そう告げた。

九十郎がごくりと唾を飲み込んだ。

犬子と柘榴と九十郎第4 1話『そうだ、京都に行こう』

「ええ、できねえのかよ」

尾張、劍丞隊の長屋で、森長可・通称小夜叉が不満げに頬を膨らませていた。

「いえ、ですからね……私も昔は諸国を渡り歩いてきましたけど、

流石に鉄砲の中身までは知らないと言いますか、教えてくれなかったと言いますか……」

ぶった斬られるんじゃないかとヒヤヒヤしながら、木下秀吉・通称ひよ子がそう告げる。

「ころちゃん、その……昔の伝手とかで直す方法が分かったりとか……」

「いや急にそんな事言われても困るよ、ひよ。そもそも……」

いきなり押しかけて来た小夜叉の応対をするひよ子と転子の視線が、鉄の筒に集まる。

「……そもそも、弾を籠めずに連発できる鉄砲なんて聞いた事無いんだけど」

小夜叉が持ち込んだ鉄の筒は、名を『ウインチェスター・ライフル』と言った。

かつて九十郎が小夜叉に渡した未来の銃、時代考証に真正面から喧嘩を売るオーパー

ツである。

「いや、鉄砲を直せだなんて一回も言っただろ。」

オレはこの鉄砲に合う弾を調達したいんだよ」

「鉄砲に合う弾……ですか？」

「ここに……えっと、

確かレバーっていう部分を下げると、次の弾が撃てるようになるんだけどよ、九十郎が持ってた弾しか入らねえんだよ。」

「お前、九十郎の知り合いだったら、どこから弾を手に入れていたのか知らねえか？」
「なお、ウインチェスター用の弾丸は、全て九十郎の手作りである。」

製作は全て三河でやっていたので、ひよ子は調達先も製造方法も知らない。

しかし、それを正直に言ったら斬り殺されかねない。

「そ、そうだ！ 剣丞様なら何か知ってるかも！」

ひよ子は上司を生贄に捧げた。

剣丞にとっては災難な事であるが、責任者とは責任を取るために存在する。

「ちよ、ひよ?! それは拙いって！」

「大丈夫！ それでも剣丞様なら……それでも剣丞様なら何とかしてくれる……!!」

「い、いくら剣丞様でも、連発できる鉄砲は知らないんじゃないかな……」

2人がそんな事をヒソヒソ声で語っていると……

「それ……もしかして、ウインチェスター・ライフル？」

噂の人物の声が、小夜叉の後ろから聞こえてきた。

天から舞い降りた天人、織田久遠信長の夫、ひよ子と転子の上司、そして墨俣に一夜城を築き、竹中重治・通称詩乃を引き込み、稲葉山城攻略戦でも大きな活躍した男……新田劍丞の声だ。

「見た事の無い形の鉄砲ですが……劍丞様、何か知っておられるのですか？」

劍丞と共に散歩をしていた詩乃が、奇妙な形状の銃をまじまじと見つめる。

美濃一の知恵者と謳われた彼女であっても、ウインチェスターは見た事が無い、聞いた事も無い。

「ああ、たぶんこれはウインチェスター・ライフルだと思う。

秋蘭姉さんがこういうのが好きで、家に何個もコレクションしてるんだよ。

だから見た事が……」

そこまで言っただけ、劍丞は気づく。

基本能天気と考え無し九十郎と違って、劍丞は気づく。

「……何でウインチェスター・ライフルが戦国時代にあるんだ？」

戦国時代にウインチェスターは無い筈だと。

……

……

……

小波催眠洗脳強姦快樂墮ち（未遂）事件から1週間……

「蘭丸、蘭丸、蘭丸……ううくむ……」

もう二度と腸内の洗浄せずにアナルパールは使うまいと固く誓った男、九十郎が頭を捻っていた。

道場の掃除が大変だったのだ。

「どうしたの九十郎？　悩みでもあるの？」

「おっぱいでも揉むっすか？」

犬子と柘榴が心配そうに九十郎の顔を覗き込んだ。

最早九十郎の巨乳好きはこの3人の共通認識になっている。

「柘榴様、それで元気になるのは九十郎だけです……ああそうか、九十郎だったっけ」

「おお、犬子も言うようになったっすね」

「ふふくん、いつまでも子供のままではいられませんから……って、違う違う。」

蘭丸って確か、この間虎松ちゃん……

じゃなくて、新戸ちゃんがちよつと話に出してた人の事だよな？」

「どうも……どうにも引つかかるんだよな。どこかで見た事があるような無いようなな。」

「確か戦国時代関係の本だったような気がするんだよな……」

「うーん、犬子はちよつと心当たりが無いけど……柘榴様はどうですか？」

「柘榴も特に心当たりがねえっすね」

「あの話を聞く限り、催眠だの洗脳だのに特化したサイキッカーって事だろ？」

「流石にちよつと気になるんだよ」

「気になるなら、新戸ちゃんに聞いてみたら？」

「最悪、それも考えてるよ。とは言っても、あいつここ最近顔を出してこねえんだよな」

「あ」

「心配だよね」

「俺は心配してねえけどな、あいつ井伊の糞女の同一人物で、超強力なサイキッカーだろ。」

「ガチでやりあつて勝てるのなんて遠山くらいのもんさ」

「遠山って人、そんなに強かつたっすか？」

「武術の腕前って意味なら、眠利や鬼退治桃太郎先輩程じゃねえよ。」

「だが喧嘩慣れって意味ではアレの右に出る者は居ないね。」

タクシーのドアに顔面を挟んだり、金網で顔面を摩りおろしたり、歩道橋から投げ落したり、その辺に落ちてた謎の薬品を口に突っ込んだり、コンビニの電子レンジに頭突っ込ませて温めよろしくとか言い出すタイプだな」そんな人物が普通に北町奉行をやっている所が、大江戸学園の魔境たる所以である。「一回、手合わせしてみたいっすね」

「やめとけ、やめとけ、あいつはむしろ戦った後が怖いんだよ」

地獄のお白洲送り……遠山朱金の無敵の必殺技を破った悪漢は一人もない。

光璃、坦庵、九十郎トリオもかつてそれを喰らい、学園中のトイレ掃除をする羽目になったのは笑え……忌むべき記憶である。

「それより今思い出したいのは蘭丸だ、どつかで聞いたような覚えがあるんだよな。」

ううむ、戦国DQNの関係者……だったような……」

「伊達政宗さん？ 森一家？ それか……」

「蘭丸は鬼子だ。オレと同じ鬼の子、半分は人、半分は鬼の超生物、神話生物だ」

3人でうんうん唸っている所に、虎松……改め、井伊直政がひよっこりと戻ってくる。

「ああ、ちょうど良い時に戻って来たな。」

鬼子……てのが何なのか知らんが、蘭丸つてのもお前と同じサイキッカーなのか？」

「オレと同じ鬼子で、オレと同じサイキッカーだ。」

オレよりも能力の数が少ない、力も強くない、普通に戦えばまず間違いないオレが勝つ」

「なんだ弱いのか」

それでも屑郎よりは強いぞと言いかけて、新戸が口を閉ざす。

そんな事を教えたなら神道無念流ナメンなくとか何とか叫びながら、一人で突撃しかないからだ。

「……アレはある一つの方向に能力が特化している。」

普通に戦えばオレが勝つが、その能力はオレにも通用する」

「ワンチャンはあると。で、その特化した能力が催眠って事か？」

新戸は平行世界の虎松達からの警告と、その時に見た悪夢のような光景を思い出し、深くため息をついた。

そして同時に、この世界ではあんな光景を再現させてたまるかと、一人静かに決意した。

「精神操作、記憶操作、催眠術、洗脳……強制発情……」

「ひでえラインナップだな」

そんなひでえ超能力を小波に使わせようとした男が言える台詞ではない。

「昨日の小波さんみたいにされるって事？」

「蘭丸なら、もつとずつと上手く、もつと手際良くやる。

蘭丸は精神操作の能力を使う時、セックスをして頭を快楽に染める。

頭の中が快楽に染まれば、精神操作に対する抵抗力が無くなってしまふから」

「エグいなおい」

そんなエグい超能力を小波に使わせようとした男が言える台詞ではない。

「悔しいが、オレはセックスが上手くない。

セックスをしながら精神操作に抵抗できる程器用でもない。

蘭丸とセックスするような事になれば、間違いなく負ける」

現に負けた、数多の平行世界のオレ達が……新戸は九十郎達に聞こえないような小さな声で、そう呟いた。

「その……蘭丸さんって人？ いや鬼なのかな？

今どこで何をしてるとかって分かる？」

「今はまだ、生まれていない。この世界に蘭丸が生まれるかも分からない。

だが……森可成が鬼とセックスするような事態になれば、生まれてくる可能性がある。」

「セックスして、アレの事だよね……男女の営みと言いますか……」

ううん、桐琴さんが鬼に負けたり、抱かれたりするなんて事あるのかなあ……」

「いや、ねえんじやねえかな……」

犬子と九十郎には、桐琴が……鬼より怖い森一家の頭領が鬼に敗れ、犯され、まぐわう姿がどうしても想像できなかつた。

一方、新戸はかなり明確にその光景を想像できていた。

平行世界の他の虎松達からのテレパシーの中には、その光景が何度も何度も登場するからだ。

そしてその後、並行世界の虎松と多数の戦国武将達が犯され、精神操作を受け、蘭丸の操り人形のようになってしまふ光景も……何度も何度も見た光景だ。

蘭丸に犯され、精神を掌握され、自我が完全に消滅する寸前の抗いがたい喪失感、無力感、そして吐き気がする程に強烈な享楽の奔流……並行世界の自分から送られてくる断末魔のようなテレパシーは、何度受けても慣れる事が無かつた。

オレはもう駄目だ、他の世界のオレよ、どうかオレのようになってくれるな、どうか迂闊で無様なオレの分まで、屑郎を守ってくれ……そんな祈りを込めたテレパシーを受ける度に、新戸は胸を締め上げられるような痛みを感じるのだ。

「そういえば、さつき言つてた戦国どきゆんつて何の話だつたつすか？」

伊達の所にどきゆんさんがいるつすか？」

「ああ伊達政宗か、そいつは……クツキング大名になる」

九十郎は心底どうでも良い情報をドヤ顔で言い放った。

「くつき……九十郎、料理は武将の嗜みっすよ」

「そして横山光輝が漫画を描く」

九十郎は横山光輝ファン以外には欠伸が出る程にどうでも良い情報をドヤ顔で言い放った。

「そりや凄いつすね。ウチの御大将は漫画になつてゐるつすか？」

「武田信玄は書いていたな、だが上杉謙信は書いてない」

「それ、御大将には聞かせられねえつすね……」

そんな事を話していると……

「へえ、横山光輝は武田信玄を書いても上杉謙信は書かないの……」

3人はぞくりと、背中からT H E・不機嫌な気配を感じ、ゆつくりと後ろに振り返る。「別にねえ、400年後の歴史作家にどう思われてようが私は気にしないけど……」

全然、全く、これっぽっちも気にならないけどねえ……

そうなの、武田信玄は描く気になるけど、私は描く気になれないの……ふうくん……ここにこと笑っていたが、目は全く笑っていなかった。

「お、御大将……」

「美空様、これはその……」

「ぶっちゃけ死に方が情けねえからじゃねえの」

美空が無言で九十郎のスネを蹴たぐった。

九十郎は無駄に頑丈なのであんまり効かなかったが。

「御大将、何かあつたつすか？」

「あつたと言えばあつたわね。ちよつと遠出をするからお供しなさい。」

紅茶の茶葉と、淹れるための道具も持ってきて」

「柘榴は別に構わないつすけど、秋子には伝えてあるつすか？」

「大丈夫大丈夫、その辺はキツチリやつてあるから。犬子と九十郎も同行してもらわ」

「犬子もですか？」

「ああ護衛か、俺の神道無念流が必要なのか。それじゃあ仕方ねえな」

九十郎がニヤニヤしながら剣を鏗鳴らせる。

こういう荒事は九十郎的には大歓迎なのだ。

「必要なのは神道無念流じゃないのだけど……まあ、その辺は道中で話すわ。」

とにかく、今から京都に行くわよ」

……

……

その後……

「レエエエエエエー！ パジャアアアパーリイイイイイー！
ある日の夜、京都に向かう道中にて、やたらハイテンションなマツチヨが雄たけびを上げる。

「マジャーマアパーリイー！ なの！」

小柄な少女がハイテンションでそれに乗っかる。

「ねえ、犬子……こういう時、どういう顔をすれば良いのか分からないわ」

引率の先生……もとい、長尾美空景虎は乾いた笑いをしていた。

「諦めましょう、美空様。犬子はとつくの昔に諦めました」

「パジャーマアパーリイーっす!!」

「柘榴しつかりしなさい！ あの謎空間に吞まれちゃ駄目よ！」

「御大将、肩まで浸かってしまえば、案外心地良いつすよ」

「柘榴、私は貴女程割り切れないわ」

「国主って大変つすね」

「いえ国主とか関東管領とか関係無しに」

正直な話、九十郎の持つ独特のノリは嫌いではなかったが、それに肩まで浸かる勇氣

までは無い。

「鞠、今回の旅路の目的、忘れた訳じゃないわよね？」

やむなく美空は鞠……駿河今川家を継ぐ者、今川氏真に声をかける。

「大丈夫、覚えているの。 将軍様にごめんなさいするの」

「そうよ。 義元……この間戦死した貴女のお母さんは、軍勢を率いて京へ押し入り、

将軍足利義輝とそれに連なる者達を全員殺すか拉致して、

自分が将軍になり替わろうとしていたわ」

「うん……鞠はその話、反対してたの……」

「聞く所によるとそうらしいわね。 だからと言うかどうかは知らないけれど、

義元は自分に万一の事があった時の備えも兼ねて、貴女を駿河に残していた」

「うん、そして生き残ったの……」

「あのやり方が良くないとは思っていたし、私も反対だつて手紙を送ったわ。

ただで義元は義元なりのやり方で、

こんな屑しかいない糞みたいな時代をまだマシな方向にもつていこうとしていた。

そこだけは忘れちゃいけないわ。

一葉様と双葉様を殺すか拉致監禁するつてやり方はどうしても気に入らなかつたけ

ど」

少なくとも我欲100%で無差別に殴りかかってくる(と、美空は思っている) 武田に比べれば、10倍も20倍も好感が持てる人物であった。

「そうかもしれないの、でも……」

「じゃあ貴女が義元の立場だったらどうしていた？」

「え……それは……」

そう言われ、鞠は考える。

自分ならどう乱世を……糞みたいな時代をどうにかするかを。

考える、考える、考える……

「必死になって考えているのは評価するわ。

でもね……国の主というのは、大将というのは、言われてから考えるのではないの。
の。

常に考え続けなければいけない、自分はどうするべきかを。

言われてから初めて考え始めるのは、本当は良くない事なのよ」

「う……」

そう言われ、鞠は気づいた。

義元のやり方……兵を率いて上洛し、現將軍を殺す案を良くないと非難しておきながら、自分ならどうするかを考えた事が無かったと。

「殺すのではなくて、話し合つて……」

咄嗟に、そう答えた。

「そう、まず誰と話をするの？ どんな話を持ち掛けるの？」

美空は即座にそう尋ねた。

鞠が苦し紛れの思いつきを口にしてしている事なんてお見通しだと言わんばかりに。

「え、えつと……それは……いろんな人に……」

「天下の諸侯を一堂に集めて説得するの？ 喧嘩は良くないつて？」

天下の諸侯つて何人いるの？ 来てくれつて頼んできてくれる人は何人？

どこに集めるの？ 護衛はどのくらい必要？ 費用は誰が出すの？

どうやって集めるの？ そもそも誰にどれだけの税を課しているのか把握している

？」

「う……ええつと……」

次から次へと出てくる疑問、質問に対し、鞠はたじろぐ。

母・今川義元ならば、どんな問いかけがあろうともたじろぐ事は無かった。

何が起ころうと、どんな事があろうとも、堂々としていた。

少なくとも、鞠の記憶に残る母の姿は、そういうものであった。

「おい美空、あんまり鞠を苛めるなよ」

「苛めじゃないわよ。」

「この娘の教育係から頼まれたの、道中で党首の心構えを教えてくれって」

「柘榴も柿崎家の主っすけど、そんな細かい事まで気にしてねえっすよ」

「鞠、柘榴の言う事は全部無視しなさい。」

部下としては裏切りの心配が無くて安心できるけど、党首としては致命的よ」

「大丈夫っす、柘榴は頂点奪るような器じゃないっすから」

「頂点を奪る器じゃない……」

「こらあーっ！ 鞠に変な影響が出るからそれ以上言うんじゃないわよおっ！

鞠！ 本気にするんじゃないわよ！ 朝比奈泰能が泣くわよー！」

「考えておくの。鞠は……鞠はまだ、未熟者だから」

「自分が死んだ後の事を考えていないのは、義元の失策だったわね」

「織田に負けて討ち死にとか普通予想しないっすよ」

「そりやそうだけどね」

久遠の桶狭間で見せた奇襲殺法は、戦国時代に生きるあらゆる人物の予想を覆し、その計算を多かれ少なかれ狂わせている。

それが良い事なのか、悪い事なのかは……今はまだ、語るべき時ではないだろう。

「それより今日はパジャマパーティーだ。野暮な事は無しにして遊ぼうぜ」

「あんたねえ……」

「その辺、一朝一夕じゃ身につかないっすよ。」

焦らずゆっくり昼寝でもするのが健康の秘訣っす」

「あんたらねえ……」

「將軍に遊んでもらおうと思つてバトルドームを持つて来たんだ。」

せつかくだから5人で遊ぼうぜ」

「ば、ばとるどおむ……？ また妙な単語が出てきたわね……」

正直あんまり聞きたくないけど、一応聞いておくわ、何よそれ？」

「バトルドーム!! ボールを相手のゴールにシューウウツ!!」

超! エキサイティン!!」

そんな戦国時代の人間にとつては意味不明で理解不能な台詞を言いつつ、九十郎は手作りの玩具を鞆から取り出した。

バトルドーム……それはかつて武田光璃が、テレビCMの妙なテンションが気に入つて衝動買ひしてきた子供向け玩具である。

戦国時代に手に入る材料で作れなくも無いので、出発の前日に夜なべして作つておいたのだ。

「楽しそうなの!」

「私は頭が痛くなってきたわ……」

「犬子達と空さんで一回遊んでみたんですけど、楽しかったですよ」

「あんたら他人の養女に何をやらせてるのよ!」

「まあまあ、御大将も一回遊んでみると良いです。超エキサイティングですよ」

そんな事を言いながら、柘榴は美空を、九十郎は鞠をバトルドームの傍に座らせた。

「一回戦は俺と柘榴、美空と鞠の4人でやるか。最下位になった奴は犬子と交代。」

そこからは適当にローテーションさせながら遊ぶぞ」

「今日は負けないですよ、九十郎! 猛特訓で編み出した柘榴の必殺技を見せてやるつす」

「くつくつくつ……この齋藤九十郎がバトルドームにおいて、

貴様なんかとは年季が違うって事をこれから思い知らせてやる」

バトルドーム如きにマジになる大の大人がいた。

「鞠も負けないの!」

「はいはい、全く……少しだけ付き合ってあげるわよ」

その日、今川鞠氏真は第一回バトルドーム大会の覇者という称号を得た。

途方も価値のない錆びた偽物の金塊と同レベルの無価値で無意味な称号であったが

……鞠にはキラキラと輝く宝石よりも得難いものに思えた。

「ところで……九十郎、貴方鞠に対して全然遠慮とか配慮とか無いわよね。

歴史上の人物に対しては遠慮するタイプだつて前に言つてなかつたかしら？

あの娘、ああ見えて従四位下、治部大輔……

私が従五位下だから、私よりも官位では格上なの」

バトルドームをガシャガシャと操作しながら、美空が九十郎に尋ねる。

無論、鞠には聞こえないような声量で。

「そりゃ俺だつてな、前田利家とか、山県昌景とか、上す……長尾景虎とか、服部半蔵とか、

そういう有名所にはそれなりに委縮するさ」

なお、九十郎は柿崎景家……つまり柘榴は歴史上の偉人と思つていないし委縮もして
いない。

「じゃあ何で鞠には無反応なの？」

「戦国蹴鞠ーガー相手に委縮する奴なんていねえよ」

九十郎はへつと笑つてそう答えた。

九十郎のイメージ的には、『まろの華麗な足技とくと見るでおじやる！』とか言いなが
ら蹴鞠をする武力1、統率1の雑魚である。

とりあえず九十郎は鞠に土下座して謝るべきである。

「じゃあ貴方、鞠と手合わせしてみなさい」

バトルドームの操作をピタリと止め、美空がにやりと笑いながらそう言った。

……

……

……

「……馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な!?」

この俺が!? 神道無念流が!?

まさか……まさか戦国蹴鞠ーガー如きに敗れるとは……」

5分後、戦国蹴鞠ーガーに無様に敗れるクソ雑魚ナメクジが倒れ伏していた。

「九十郎、相手を過小評価し過ぎです。普段の半分も動けてなかったつすよ」

「今のが実戦でなくて良かったわね。実戦だったら死んでいたわよ」

柘榴と美空から辛辣なコメントが飛んで来る。

その位、今日の九十郎は無様な負けっぷりであった。

「えっと……その……大丈夫だよ! 九十郎は一度や二度負けたって恰好良いから!」

「あ、あの……腕力は凄かったの、隙だらけだったけど」

柘榴と美空がケラケラと笑い、犬子と鞠が必死になって微妙にフオローになってない

フオローをする。

端的に言つて混沌とした光景である。

「ふ、ふ、ふ……潔くこの場合は俺の負けを認めよう、

所詮は戦国蹴鞠ーガーと侮っていた俺の不明を詫びよう……だがしかし！

この俺に勝つた程度で神道無念流を制したと思うなよおっ!!」

負け犬が遠吠えを始めた。

「おめえの出番だぞ、犬子!!」

貴様はどこのカカロットだ。

「はあ、しようがないなあ……負けても怒らないでよ、九十郎」

犬子は表面上は平静を装いながらも、内心ではウキウキしながら竹刀を握る。

久々に愛する人に……九十郎に頼られたのだ、嬉しくない筈が無い。

そして心の中で決意していた、絶対に負けられないと。

「うん、確かに……強い、恐ろしく強い」

鞠は犬子の立ち振る舞いを見て、筋肉の付き方を見て、即座に理解した。

相手は実力者だと。

ほんのひとかけらでも油断すれば瞬時に敗れると。

全身全霊を傾けて挑んだとしても、なお劣勢であると。

格上の存在だと……

「勝負っ!!」

「参るのっ!!」

一方、九十郎は戦国蹴鞠―ガー以下という現実には打ちのめされ、隅っここで体育座りをしていた。

犬子と柘榴と九十郎第4 2話 『エンカウト』

大江戸学園の斎藤九十郎が死んだ。

暴走トラックに轢かれて死んだ。

遺体は学園島から本土に運ばれ、葬式が行われた。

暇さえあれば問題を起こしてチャンバラを始める大江戸学園の馬鹿達も、この日ばかりは皆神妙な顔つきをしていた。

そして少くない数が、涙を流していた。

「……意外でした」

そんな光景を、三度笠を被った少女、五十嵐文が不思議そうに眺めている。

服を着るも買える程裕福ではないとはいえ、今の彼女の格好は普通に浮いている。

「意外って何が？」

喪服の少女……大江戸学園生徒大将軍の片割れである、徳河吉音が聞き返す。

「あの人が死んで、大勢の人が涙を流している事です。

兄さんが……私を妹としか見てくれなかったあの兄が、

今日だけは辛そうで、悲しそうな眼をしていた事も」

「筋肉さん、仲良かったからね」

文の兄、五十嵐光臣が喪服を着て、焼香をしている。

基本研究以外の事に興味を抱かず、妹すらも『妹』以外の意味を見いだせない男が、九十郎の葬儀に出席した事自体が、研究以外に時間を割いた事自体が、文にとって天地がひっくり返るような大事件である。

「九十郎さんは、どういう人だったんですか?」

「あんまり話した事、無かったよね」

「ええ、私はこの学園に来てから日が浅いですから」

「あたしは、そうだなあ……」

嫌いな所もあつたけど、それと同じくらい好きな所があつたかな。

全部ひつくるめると、結構良い感じの人ってイメージ」

「あの筋肉お化けのどこに良い所があるんですか?!」

地味に酷い事を言われているが、文と似たような感想を抱く者は少なくない。

九十郎は基本屑で、一度嫌つた相手には基本辛辣だ。

そしてその嫌つた相手に、文も吉音も含まれている。

だから理解に苦しむのだ、顔を合わせる度に露骨に嫌悪感を示し、即座に追い返そうとする人間に良い所があるのだろうか。

「政治は政治ができるヤツがやれば良い、知らない、知ろうともしない、考えた事も無い連中が手出し口出しするもんじゃないって考え。

あれは最後まで納得できなかったよ。

普通の人が幸せになるための方法が政治なんだから、普通の人が……

世の中を普通に生きている人こそ……ええと、つまり……みんなで考えるべきだと思う」

「一種の選民思想ですか。 全く……」

「ううん、熱量の問題だって言ってた。

熱を持っていれば、いつかはできるようになるって言っていた。

鳥居とか、詠美ちゃんとかは、熱を持つてるから……

詠美ちゃんが賢くて、あたしなんかよりよっぽど政治に向いてるって所は納得だけ
ど、

鳥居はどうなんだろうね」

「大魔神に放り込まれていた人でしたっけ？」

「そうそう、その人。

文はあんまり接点無かったと思うけど、色々と意地悪をする人だったんだよ」

情報操作や公開処刑を意地悪の範疇に含めるのは魔境・大江戸学園だけである。

「まあ、デリカシーが無い所とか、すぐにおっぱいに見線に向く所とか、輝とか越後屋さんと一緒に悪巧みするのが多いとか、

相手の家柄で態度が変わったりとか、色々と幻滅する所は多いよ。

それでも、あたしはあの人、良い人だと思う」

「何故ですか？」

「最初から最後まで詠美ちゃんの味方でいた所」

それは幼い頃から詠美を見続けていた吉音にとつて、幼い頃から詠美の友になりたいと願い続け、ついこの間まで叶わなかった吉音にとつて、強い強い羨望を抱くのに十分な理由であった。

「ただ思考停止しているだけではないのですか？」

「違うよ、筋肉さんはちゃんと詠美ちゃんを見て、詠美ちゃんを考えて、

詠美ちゃんを認めて、その上で詠美ちゃんの味方でいよつて決めてた人だよ。

あたしはずつと……

ううん、あたしもずつと詠美ちゃんを見てきたから、なんとなくわかるんだ。

だから……」

吉音はそう言うと、少し離れた場所に座っている徳河詠美の方をチラリと見た。

普段通りの表情で、普段通りの立ち振る舞いで、静かに座っていた。

「……だから、今詠美ちゃんが悲しんでるって事も分かるよ。

詠美ちゃんが九十郎の事、大好きだった事も」

吉音は知っている。

九十郎の訃報を聞いた時、詠美がどれだけ泣き叫んだかを。

今、表面上の平静を保つために、どれ程の心労が伴っているかを。

「まだ……早すぎるよ……悲しすぎるよ、こんなの……」

詠美ちゃんはまだ、九十郎に好きって言っていないのに、デートも何もしていないのに……」

吉音は思う、もしも自分の愛する人が……秋月八雲が急死したら、自分はどうなってしまうのだろうか。

文は思う、何故兄や徳川詠美が九十郎に惹かれるのだろうか、九十郎に惹かれた理由を考えた事があつただろうかと。

今までずっと、考えるのを避けていたのではなからうかと。

「後で……兄と話をします。九十郎という人がどんな人だったのかを聞きに」

吉音と文がそんな事を話している頃……

葬儀場の片隅で、遠山朱金が力無く開かれた自らの右手をじっと見つめていた。

かつて九十郎が井伊の養女と呼ぶ少女を、九十郎をナチュラルに層呼ばわりする少女

を殴り倒した自らの右手を……

『ありがとう……これで屑は生き残る……』

朱金は、そう言つて息絶えた少女の事を思い出す。

手加減はしていた。

自身の剣魂・ハナサカの力を借りていたとはいえ、死人が出るような殴り方はしなかつた筈だつた。

それなのに、少女はまるで自壊をするかのように息絶えた。

遺体は残らなかつた。

まるで真っ白になるまで焼いた炭のように、ボロボロに崩れ降り、風に舞つて飛び散つてしまった。

その様子を見た者は、朱金一人であつた。

そして少女の自宅から、手書きの退学届が発見された。

だから朱金は殺人者と呼ばれなかつた、ただの失踪事件として扱われた。だがしかし……朱金の心に、決して小さくない傷と疑念が残っていた。

「真留、何も無い所からトラックが出現した……桂は確かにそう言っていたんだな？」

遠山朱金が……大江戸学園を守護する北町奉行が、部下である岡つ引きにそう問いかける。

「はい、未だ出所は特定できていませんが、

学園島の外から剣魂の制御システムがハッキングされた形跡があるそうです」

「剣魂システムを悪用した殺人事件か……」

トラックの進行方向に居たのは、桂である。

九十郎が咄嗟に突き飛ばして救出しなければ、暴走トラックに轢かれて死んだのは桂だった。

だがしかし、朱金には今回の件が、始めから九十郎の命を狙ったもののような気がしてならなかった。

「あいつは昔から、咄嗟に自分の身体を盾にする癖があつた。

危ないと思つたら何も考えずに飛び込んで、何度も怪我をしていた。

キユウビの電流を受けた時も、今回の一件もだ。

あるいは……あるいは最初から九十郎を狙っていた可能性もある……」

とてもとは言えないが論理的な話ではない。

真留はそう感じたし、朱金自身もそう思っている。

それは幾度となく難事件、怪事件に挑み続けてきた北町奉行の直感だ。

「警察が動いています、町奉行や岡っ引きが対応するような案件ではありません。ですが……」

それでも何か自分達にもできる事がある筈だ、打つべき手がある筈だと、真留の瞳が雄弁に物語っていた。

決意の視線、決意の瞳であった。

朱金はいつだつてこの熱い瞳に助けられてきた。

「ああ、オレ達もオレ達の方法で調べるぞ。

何かある……あいつの死には、何か大きな秘密がある、必ず」

遠山朱金には、北町奉行には……ダチ公の死を悼む時間は許されていなかった。

長谷川平良と、武田光璃、江川太郎左衛門は葬儀に姿を現さない。

3人とも九十郎と特に親しかったのだ。

それが意味する事を察せない程、朱金は呆けていない。

武田信玄が、火付盗賊改方が、北町奉行が、南町奉行が動く。

そして八雲堂の用心棒兼將軍も……魔境大江戸学園を体現する馬鹿筆頭が躊躇無く首を突つ込む。

九十郎の死をきっかけに、大江戸学園が再びキナ臭くなってきた。

……

……

……

前田利家対今川氏真の対決は、お互いに自分が負けたと認識する微妙な結果に終わった。

「……ま、また負けた」

「ふう……ふう、はあ……か、勝ったの……でも……」

「連射が利く御家流なんて……は、反則……がくつ」

鞠の御家流・疾風烈風砕雷矢を叩き込まれた犬子が、そう言い残しバタリと倒れた。
「チツ、あの犬子のうすのろ野郎。」

これで奴との師弟関係もご破算、この次はオレ自身が氏真をたおしてやる!!」
九十郎がそんな酷過ぎる言葉を呟く。

貴様はどここのロビンマスクだ。

「その台詞、犬子に対して辛辣過ぎない？ あと一步の所まで追い詰めてたわよ」

「大丈夫つすよ御大将、九十郎も本気で言ってる訳じゃないつすから」

「な、なら良いけど……」

それにしても、鞠相手にあそこまで戦えるとは、正直予想外だったわ」

「剣の勝負では、完全に圧倒されていたの……」

「剣術はパワーだぞ、鞠」

貴様はどここの霧雨魔理沙だ。

「立ち回りが上手かったの。力比べになったら負けるって分かっていたのに、気が付いたら力比べになっていたの……」

「パワーで勝ってるならパワーで勝てるように立ち回るべきだろう、常識的に考えて」「言う程簡単な事じゃないの」

「つまり御家流とかいうサイキック・パワーを使わせた時点で、

神道無念流の勝利という事だな、はっはっはっはっはっはっは」

犬子をけしかけるといふ他力本願極まりないやり方で勝利した九十郎が、胸を張って勝ち誇る。

自分は侮って油断してあっさり負けた癖に、格好悪い男である。

「とはいえ、理想を言えばサイキック・パワーを使われても勝てる方が良いんだけどな。

後で犬子に対サイキッカー用の戦い方を教えておくか」

「え？ 御家流に対策があるの!？」

「それ、本当なの!？」

「興味津々つすよ!」

九十郎の独り言に、御家流を使う3人が反応する。

「セカンド幼馴染の誕生パーティの出し物をどうするかでファースト幼馴染と揉めたんだ。

その時に使った手が変われば刀がらすきーっていう技なんだが、

単純な手だがサイキッカー相手だと結構効果的だな」

「その技、後で教えて貰えないかしら」

「鞠にも教えて欲しいの！」

「分かった分かった、後でな」

なお後日、その対抗策のあまりのしようもなさにも美空が呆れかえる。

「まだまだ上には上がっているの、修行あるのみなの」

「修行をするなどは言わんが、仕事はちゃんとやれよ。」

孫悟空じゃあるまいし、修行以外何もしない二ートになったら家族が泣くぞ」

「……ちよつと陰鬱なの」

「大人になるってのはそういう事よ、好むと好まざるとに関わらずに。」

まあ、貴女には義元の遺臣がまだまだ残ってるから、どうにかするでしょ」

目ぼしいのは桶狭間で討ち死にしたけど……と、美空は心の中で呟いた。

正直な話今の鞠の立場は、代わってくれと言われたら全力でご遠慮したい状況ではあった。

当主としての心構えを可能な限り教えておいてほしいと、今川の老臣朝比奈泰能から頼まれているし、美空自身も可能な限り助けてやりたいとは思っている。

しかし、越後の民を守り導く責任があるが故に、損得抜きの手助けはできない。美空は美空で、色々迷いや苦悩が多い立場なのだ。

「そういうえば、上す……じゃない、長尾と今川の当主が揃つてゐるのに、

護衛が少なすぎるんじゃないのか？ 俺と犬子と柘榴だけなんて」

貴方は護衛じゃなくて護衛対象なのだけ……と、美空は心の中で呟いた。

九十郎がドライゼ銃やハーバー・ボツシユ法を知っているとバレると面倒なので、その話は鞆には決して明かせない秘密である。

「軒猿も何人か連れてきてゐるつすよ」

「ありや、そうだったか？ 全然気づかなかつたな」

「そう簡単に気づかれるようじゃ草として役に立たないじゃないの。」

まあ、護衛を最小限にしている事は確かだけど」

「いざとなつたら鞆も戦うの」

「万一があつたら今川と戦争になりかねないからやめなさい」

「くつくつくつ、俺の神道無念流も忘れて貰っちゃ困るぜ」

「うん……期待してゐるわ……ええ……」

未来知識が喪われると取り返しがつかないから、できれば戦わずに逃げてほしいな」と美空は思った。

「美空様、犬子が頑張りますから。その、一生懸命御守りしますから」

「精根尽き果て倒れ伏しながらも、犬子がそう言つて美空を元気づけようとしていた。ありがとう犬子、本当に心強いわ」

自分が求められている役割を自覚しているということがこれ程までに有難いのかと、基本他人の話を聞かないし血の気も多い越後の豪族達の顔を思い出しながら、美空は密かに涙した。

美空は普段から、フオロ方十四フオローもドン引きするレベルで豪族達のやらかしの尻拭いをしているのだ。

「それはそうとして、今回は義元がやろうとした軍勢を率いての強行上洛じゃなくて、人数を最小限にしたお忍びの旅なの。」

「だから護衛も腕が立つて信用できる少人数に抑えてるわ」

「つまり俺の神道無念流が期待されているという事か」

「將軍が紅茶飲みたいつて手紙に書いてたから連れてきただけよ」

「茶葉とティーポット持つて来いつて言ったのはそういう事かよ、期待させやがつてコンニャロウ」

「紅茶？ 紅茶つて何の事なの？ 美味しいの？」

ただ一人紅茶を見た事も聞いた事も無い鞠が、興味津々といった表情で九十郎の顔を

覗き込む。

「美味いぞ、飲んでみるか？」

「飲んでみたいの！」

「ははは、鞠みたいな素直な奴は嫌いじゃねえぞ。 良いよな、美空？」

「将軍に献上する分は残しておきなさいよ」

「俺がそんな初歩的なミスをするものかよ」

「柘榴も九十郎の紅茶、飲みたいっす！」

「あ、えつと……わ、犬子も欲しいです……」

「分かったよ、美空も飲むか？」

「そうね、頂こうかしら」

「4人分だな、お湯を沸かすからちよつと待っててくれ」

九十郎が大柄な体格に合った巨大なバツクバツクから紅茶を淹れるための道具を取り出し、火打石で手早く火を燃やす。

「もう少しで京に入るわ。 皆、自分の役割は覚えているかしら？」

「犬子は旅芸人です！ 傘の上で升を回します」

「柘榴も旅芸人っす！ 傘を回してる相方に升を投げるっす」

「犬子は肉体労働専門！」

「柘榴は喋るだけー」

「それでギヤラは同じっ!!」

練習してきた向上が見事に揃い、犬子と柘榴がハイタッチをする。

無駄にノリノリの2人である。

「旅芸人なの! ディアボロでジャグリングするの!」

無駄に器用な戦国蹴鞠ガーが、ディアボロ（スタンド使いではない方）と言う名の新しい玩具を片手に張り切っていた。

「旅芸人だ、回転投げをしてからローリングクレイドルの体勢で真上にジャンプ、

空中でパイル・ドライバーの体勢になり相手の脳天を地面に叩きつけた後、

トドメに釣り天井固めをかける」

無駄に器用なマツチヨがドヤ顔で自分の芸を示す。

しかし、その内容はただの風林火山（御家流ではない方）である。

「旅芸人の座長をするわ。護法五神を呼び出して火の輪くぐりをさせるわ」

凄まじく他力本願な上に仏罰が下りそうな芸である。

「やっぱり旅芸人作戦、やめましよう。」

目立たずに町に入るための変装だけど、かえって悪目立ちするような気がするわ」

……ちよつと冷静になった美空が、この作戦の根本的欠陥に気がついた。

柘榴程ではないが、美空も結構ノリと勢いで突っ走るタイプである。

「美空様、そりやないっすよ！」

「そうですよ美空様、犬子の長年の努力を否定する気ですか!？」

傘の上で升を回すのつて大変だったんですよ！」

「お客さんに話しかけながら呼吸を合わせて升を投げるのも大変だったっす！」

努力の方向音痴である。

「美空ちゃん酷いの！ 横暴なの！ この日の為に徹夜で練習したのに！」

「嘘おっしやい！ 貴女は徹夜で遊んでいただけでしょう！」

「超えきさいていんだったの！」

なお、メンコもベーゴマも百戦百勝であり、道中の暇つぶしにと九十郎が作っておいた分は残らず鞠の手中に収まっている。

「ははは、お前らそろそろ紅茶を淹れるぞ」

「わあ、良い匂いな！」

そんなこんなで、5人（+軒猿数名）の旅路は続く……

……

……

……

そして、美空達が京の街に入ったその日。

「犬子か？」

「く、久遠様……？？」

遭遇した、前田犬子利家と織田久遠信長が、かつての主従が。

犬子と柘榴と九十郎第44話 『茶会と酒宴』

久十郎が夜なべして、ノコギリ、釘、トンカチでトンテンカンと作った椅子とテーブルに、越後から持って来たティーカップが並べられていた。

茶室の畳の上に洋風の椅子やテーブルが無造作に置かれるという光景は、中々お目に掛かれるものではないだろう。

「これぞウォーズ・レッグ・ブリーカー……じゃなくて、九十郎特製の紅茶でござい」
そして椅子とテーブル以上に茶室に似合わないマッチョメンがドヤ顔で紅茶を淹れていた。

まだイスの偉大な種族の方が茶室の雰囲気マッチ……しないか、流石に。

なお九十郎には、生徒大將軍（吉音の方）にロメロ・スペシャルをかけた前科がある。
掛けられた側がケラケラ笑いながらコブラツイストで反撃したため、大事にはならなかったが、戦国時代で同じような事をすれば即座に切り捨てられる。

……大江戸学園は本当に魔境である。

「こっちは昨日焼いたスコーンだ、紅茶と一緒に食ってくれ」

「ほほう……これは、麩を固めたような……初めて見る食べ物じゃな」

第13代征夷大將軍・足利義輝が興味津々といった様子で紅茶とスコーンを見つめて
いる。

「紅い茶とは珍しい、烏龍茶に似た物かと思いましたが……この香りは……」

知恵者で知られる細川藤孝・通称幽も興味深いと息を漏らす。

「ははは、良い感じに発酵させられるようになるまで苦労したんだぜ」

「発酵？ 発酵とはなんじゃ？」

「微生物がアルコール、有機酸、二酸化炭素などを生成する過程。」

まあつまり食い物をあえて腐らせて加工する事だな。

「酒とか納豆とか鰹節とか紅茶とか……上手く使えば色々できる」

「成程、やはり烏龍茶の親戚でござったが」

「烏龍茶は半発酵、こっちは完全発酵、」

どっちが好みかは人によるが俺のファースト幼馴染は紅茶派だった」

「ではまず某が毒見を……」

幽がティーカップの取っ手を持ち、慎重に紅茶を口に含む。

「紅茶は回し飲みするもんじゃねえんだけど……」

「これもお役目でありますが故に」

「まあ、止めやしないが」

幽が紅茶とスコーンの香りを、舌触りを、味を、そして何より毒があるかを慎重に確かめ……

「毒は無いようですな」

そう言つてニコリと笑う。

付き合ひの長い一葉には、美味かつたのだな……と、分かつた。

「では、余も頂くとするか」

一葉も幽が一口ずつ口をつけた紅茶とスコーンを賞味する。

遅効性の毒を盛られたらアウトであるが、基本堪え性の無い上に、最悪双葉が將軍をやれば良いやとか考へている一葉は、気にせず未知の味を楽しんだ。

「ふむ、これが遥か西方の茶の味か、悪くない。

双葉も連れて来れば良かったのう」

「ははは、征夷大將軍様に気に入ってもらえて何よりだよ」

隣でハラハラしながら見ていた美空も、そつと胸を撫で下ろす。

ノリで將軍相手に喧嘩を売つたりしやしないか少し心配だつたのだ。

「主、名は何と言う？」

「齋と……いや、ただの九十郎だ、決して屑郎ではない」

「屑……？」

「九十郎殿、今の一言は藪蛇というものでは」

「私と初めて会った時も似たような事を言っていたわね。

言わなきや屑なんて言葉連想しなかったのに」

九十郎から屑郎を連想する人物なんてそうはいない。

「うむ、今日から汝の渾名は屑郎じゃな」

「ナチュラルに屑呼ばわりすんなよ糞將軍!!」

3人がクスクスと笑い、屑が喚き散らす。

「あの……公方様……」

そんな時、ずっと黙っていた鞠が、おずおずと口を開いた。

「一葉で良いぞ、ここは公的な場では無いからの」

「では、一葉様」

「今一堅苦しいな……まあ良い、どうした？」

「母様は、その……一葉様を……」

「なんじやまたその話か、昨日ハッキリと許すと云ったばかりであろうが」

「あんなにアツサリ許されるなんて思っていなかったの」

「義元に上洛し、現將軍を排して成り代われと唆したのは……余だからな!」

ドヤ顔でそう言い放ち、一葉はその豊満な胸をドーンと突き出した。

あまりにもあんな真実を告げられ、鞠は硬直した。

美空は昨日、鞠と一緒に土下座をした時の事を思い出し、とんだ無駄土下座だったと愚痴りたくなつた。

幽はせめて一言相談してほしかったとため息をついた。

九十郎は一葉にパイスリさせてえなとか無礼極まりない事を考えた。

九十郎は一葉の事を信長に幽閉されたお手紙將軍位にしか思っていないため、あんなに委縮する事は無い。

なお、お手紙將軍は妹の双葉の方である。

「おい鞠、考えようによっちゃこの將軍お前の母さんの仇なんじゃないのか」

「うくん……お母さんはお母さんで、自分で上洛しようって決めたのだし、

公方様もお母さんを殺そうとして上洛を促した訳じゃないの」

「ギルティ・オア・ノットギルティ?」

「のつとぎるていな」

「オーケー、オーケー、お前がそう言うならそれでよしだ」

「の、のつて? のつと? きる……?」

いきなり外来語を使われ、幽が意味も分からず困惑する。

なお、もし鞠がギルティと言っていたら、九十郎は一葉に斎藤キックを見舞うつもり

であつた。

この男に征夷大將軍に対する敬意は一切存在しない、なんとも恐れ多い男である。

「一葉様……じゃなくて、一葉ちゃん」

「おう、どうした？」

「ちやんと言つて欲しかったの」

「義元は寡黙であつたからの、色々を抱え込む奴でもあつた。

大方、この国の未来を大きく左右させる謀に主を巻き込みたくなかつたのだらうて」

「それでも……それでも、行つてほしかつた、教えてほしかつたの、お母さん……」

一葉が、幽が、美空が……故今川義元の人柄を知っている3人が、各々思いを馳せる。

「それにしても、美空といい久遠といい、中々面白い男を連れ歩いておるのじゃな」

「久遠？」

「織田三郎信長の通称よ、義元を討つた奴だ。 2日前に御所に来たぞ」

「へえ、何しに？」

「まあ、色々と荒唐無稽な夢を語つておつたよ。そして面白い男も連れておつた」

「面白い男ねえ……」

「悪漢に襲われる手弱女を救うため、剣を振るえる良い男であつた。

それに端整な顔立ちであつたな、思わず見とれてしまう程であつた」

「その手弱女が公方様でなければ、良き美談になっていたのですがな」
「何、貴女また辻斬り斬りをしていたの？」

危ないからやめときなさいって前に言ったじゃないの」

「余と一緒にあって辻斬り斬りや追剥ぎ剥ぎをしていた美空に言えた義理はあるまい」
「ほお、某に隠れてそのような事を？」

「あ、馬鹿！ バラすんじゃないわよ！」

「長尾景虎殿、その辺の事情、後でゆうくつくり聞かせて頂きたいものですな」
幽が笑う。

口元は笑っていたが、目元は一切笑っていないかった。

「私は無罪よ！ そこにいる將軍に唆されていただけなの」

「いけないなア、將軍のことを悪く言っては」

ビツクボデイのようなマツチョがノリで美空を非難した。

さつき一葉に齋藤キツクを見舞おうとした男に言える資格があるのであろうか。

「こ、こら！ 余に全責任を押し付けようとするな！」

汝も普通に共犯であつたであらうが！ むしろ余よりもノリノリであつたであらう
が！」

「あら、貴女誰だつたかしら？」

以前会った貧乏旗本の三女さんと似ているけど、初対面だったわよね」

「今更何をしらばつくれるか！ 普通に正体を見抜いておつたらうに！」

「あの日將軍と一緒に辻斬り斬りをしていたのは通りすがりの水兵服美少女戦士よ！

私じゃないわっ!!」

「正体を隠す気だったのなら仮面の一つでもつけてこんかつ！」

「その言葉そっくりそのままお返しするわ！ 自称貧乏旗本の三女様！」

そうして、征夷大將軍と越後守護の醜い責任の押し付け合いが延々と続き……

「ぶ、ふふふ……」

鞠は思わず笑いだしてしまった。

昨日一葉の前に立った時、今日茶室の中に入った時、鞠はガチガチに緊張していた。

だが今は、肩の力が抜けていた。

まるで十年來の親友の前に立っているかのような気分だった。

一方、九十郎は一人、昨日ナンパ中に会った超イケメン男……新田劍丞の事を考えていた。

一葉が言う面白い男が、その新田劍丞であるとは思ってもせず……いや、もしかしたら新田劍丞の事かもしれないと思いがながら。

……

.....

.....

「そうして、なんやかんやで和やかで賑やかな紅茶賞味会が終わり……」

「さて、これで私達が京に来た理由の一つは達成……という事で、良いわよね鞠」

「うん、ちゃんと公方様にごめんささいって言えたの。　　ありがとうございましたなの」

京の町を、鞠と美空と九十郎が歩いていた。

「私は役に立ったのかしらね」

「公方様と……ううん、一葉ちゃんと直接お話ができて良かったの」

「公方様をちゃんづけなんて、畏れ多いとは思わないのかしら？」

「全然、むしろちゃんづけで呼ばないと失礼なの。」

「とつても楽しくて、とつても大きな公方様だったの」

「そう……まあ、私が初めて一葉に会った時も、今の貴女と似たような気分になったわ。」

「なんと言うか憎めないのよね、どうしても」

「そんな事より、俺達はどこに向かっているんだ。」

「犬子達が待つてる宿とは反対方向だよな」

「今から挨拶回りするの、もう少し付き合いなさい」

「また紅茶でも淹れるのか」

「そうね、必要になるかもしれないわ」

「何のために？」

「そう九十郎が尋ねると、美空と鞠がちよつと悪そうな顔でふつつつと笑い始める。」

「長尾が蓄えてきた金と……」

「今川が培つてきた人脈で……」

「九十郎の家柄をどうにかしましょう大作戦！」

「九十郎さんの家柄をマシにしよう大作戦なの！」

美空と鞠がガツシと腕を握り合う。

九十郎は若干引き気味だ。

「悪いわね、私つて若い頃はお寺で写経ばかりしてたから、

その辺の機微には疎いのよ」

「公方様にごめんなさいした時、一緒に頭を下げてくれてありがとうなの。」

御礼しなきゃだから、気にしなくて良いの」

「蓋を開けてみたらとんだ無駄土下座だったけれどね……」

「お母さんも、一言言ってくれば良かったの……」

今川義元に対する不平不満を心の中で10も20も並べ立てながら、美空と鞠は京の

町を進む。

「早い話、以前柘榴が言っていた家柄ロンダリングか……全く、どうなる事やら……」
そう言いながらも、九十郎はちよつとわくわくしながら2人について行つた。
前の生、光璃や担庵、輝らと一緒に悪巧みしていた時を思い出しながら……

……

……………

「劍丞様は凄いですよ。」

頼りになりますし、氣遣いもできますし、勇気があつて機転も利いて……

本当に本当に凄い人なんですよ」

「はいはい、ひよ子、その台詞もう10回は聞いたよ」

一方その頃、ぐでんぐでんに酔っぱらつたひよ子が犬子に絡んでいた。

「しがな野武士だった私を認めてくれて、

墨俣に拠点を築くなんていう重要な役割をくれて、

しかも夢だつた土官の道も開いてくれて、」

「はいはい、劍丞様はすごいっすね」

ぐだぐだに酔いどれた蜂須賀小六・通称転子が柘榴に絡んでいた。

なお、美空や貞子、沙綾との付き合いが長い柘榴にとって、酔いどれに絡まれるのはいつもの事である。

越後から持って来たスピリタスを飲み、普段飲んでる酒とは比喻表現でなく桁違いの度数によって酔わされていたのだ。

「ひよ子、転子、あまり羽目を外し過ぎるな」

一方、久遠はスピリタスに口をつけていない。

刺激ばかりがきつくて味も香りも無く、久遠の好みと外れていたからだ。

「だって！ 剣丞しゃまなんれすよおっ!!」

「そおくれす！ 剣丞様なんれすっ!!」

「分かった分かった、剣丞は凄いな」

久遠が呆れた顔でそう返す。

だが内心、久遠は喜んで、嬉しいと思ってる。

自分が惚れた男が褒められ、認められてると考えるだけで、心が明るくなる。

全く度し難いとも思ったが……久遠は顔がにやけるのを止めるので精一杯であった。

「剣丞、剣丞隊の頭目として何とかせい」

「え、俺が？」

久遠は剣丞に事態の收拾を命じた。

劍丞は現在、スピリタスによって一発KOされ、部屋の隅で寝込んでいる詩乃の看護をしている。

「け、劍丞様の膝枕……ひ、膝枕……」

詩乃は顔を真っ赤にして麗されている様子だが、自身の破壊力に無自覚なイケメンが後先考えずに膝枕なんぞしているせいであつて、決してスピリタスのせいではない事は明記しておこう。

そしてひよ子と転子がさつきから凄まじいペースで飲んでいるのも、自分も酔いつぶれたら膝枕してもらえるかも……なんて考えている事も明記しておこう。

「あの、ひよ子、それに転子、あんまり飲み過ぎると後が辛いからその辺で……」

「とにかく、劍丞しゃまはしゅごいんですよ、」

「すぐおおく恰好良くてえ、とにかくしゅごいんですよ」

ひよ子は聞く耳を持たなかつた。

「あはは、そうだね、劍丞様は格好良いね」

とりあえず九十郎よりは十倍……いや、比べる事すらおこがましいレベルで顔が整っている。

犬子も柘榴も九十郎が好きであつたが、劍丞見た目が九十郎よりも良いという点だけは、認めざるを得なかつた

犬子は思った。

ひよ子がこうまで褒めるのだから、きつと劍丞様という人は凄い人なのだろうと。犬子は素直な性格なので、昔からの顔馴染みであるひよ子の言葉を素直に信じた。

一方、柘榴は思った。

何か嫌な予感がすると。

柘榴もまた、ひよ子や転子が嘘を言っただけで騙そうとしているとは思っていない。

だがしかし……嫌な予感がしたのだ。

柘榴自身も理由は説明できないが、嫌な予感がしたのだ。

「九十郎と新田劍丞って人、会わせない方が良いかもつすね……」

柘榴がそう呟いた。

だがしかし、彼女の思いとは裏腹に、既に九十郎は劍丞と会っていた。

劍丞と会って……自身のトラウマ、敗北の記憶に苛まれていた。

「なあ、犬子……」

その時、ちびちびと舐めるようにスピリタスを飲んでいた久遠が、口を開く。

「どうしました、久遠様？」

「戻ってくる気は……無いかな？」

久遠が小さな声でそう尋ねた。

「そう仰つて頂けるのは嬉しいのですが、犬子は今、柘榴様にお仕えしてまして」「それは知つておる、だが……だがそこを曲げて、頼む」

そう言うのと久遠は、犬子に向かい深々と頭を下げた。

久遠が自分に対して頭を下げるなんて、犬子にとつて初めての経験であつた。

「久遠様……」

尾張に戻り、再び織田久遠信長に仕える……今まで何度も考えた事だ。

できる事なら、幼い頃に一緒に野山を駆け回つた人の下で戦いたい……そう考えた事は何度もあつた。

だがしかし……

「ごめんなさい、犬子は柘榴様から録を受けています。

いくら久遠様のお誘いでも……私は、恩知らずにはなれません。」

だがしかし、柘榴や九十郎の傍を離れるのもまた、抵抗があつた。

「犬子く、そう言つてくれるつて信じてたつすよ」

感動の余り、ほろ酔いで頬を紅くしている柘榴が犬子に抱きついた。

「わわっ、柘榴様痛いですが、それとお酒臭いですよ」

犬子が柘榴の腕の中でジタバタともがいていると……

「私がない間に、随分派手にやつてゐるみたいねえ」

「みんな、ただいまなの」

美空と鞠と九十郎が……九十郎の家柄をどうかしようぜ大作戦を遂行してきた3人が戻って来た。

「おかえり、九十郎！」

犬子が飛びつくような勢いで九十郎に抱きついた。

「おかえりつす、九十郎、御大将、それと鞠さん。首尾はどうだったつすか？」

「結婚という名の人生の墓場に放り込まれそうだよ俺は」

「無事家柄の格差は解消できそうよ」

「本当つすか!? 恩に着るつすよ御大将！」

「今日だけで百回は頭下げたわね、昨日は無駄土下座をする羽目になったし、

佐渡の砂金をこれでもかかってくらいバラ撒いたし」

「マジで感謝するつす、この恩義は槍働きで返すつすから」

「期待しているわよ、ウチの戦闘隊長様……それはそうと柘榴、誰なのこの連中？」

美空が自分の知らない連中……織田信長と愉快な仲間達に怪訝な視線を向け、尋ねる。

「犬子の知り合いみたいなんで、秘蔵のスピリタスで酒盛りしてたつす」

「すぴりたす?! まだ私も口をつけた事が無いお酒じゃないの!？」

柘榴貴女そんなの隠し持ってたの!？」

「消毒とか、寒さ対策とか、

いざとなつたら火炎瓶とかで色々役に立つからって持たされてたつすよ」

「他はともかく……火炎瓶? 何なの火炎瓶って、物騒な名前だけど」

「火をつけて投げると激しく燃え上がる瓶の事つす。」

スピリタスは火が着くくらい強い酒だから、火炎瓶を作れるつすよ」

「え、強い酒って火が着くの……?」

衝撃の事実に美空が一人戦慄する。

今まで美味しく呑んでいた酒が、途端に危険な代物のような気がした。

その時……剣丞と九十郎の目が合った。

「新田劍丞か……なんで俺の留守中に犬子と会ってるんだ?」

犬子を口説きにでも来たか?」

そう言いながら九十郎は劍丞を睨みつけた。

犬子を喪うかもしれない、犬子が自分の元から離れてしまうかもしれないという、大きな大きな不安を押し殺しながら。

「いや、俺はただ……」

「いきなり何を言ってるのさ九十郎、犬子は口説かれてなんかないし、普通に失礼だよ」

劍丞が何かを言うよりも早く、犬子が九十郎を諫める。

「口説かれてない……か……」

九十郎はどう見ても劍丞に惚れているっぽい豊臣秀吉と蜂須賀小六と竹中半兵衛を見る。

久遠が……織田信長が、かつて遠くから見た時よりも、艶やかな雰囲気になっているような気がした。

女性は恋をすれば奇麗になるという話を思い出し……なんとなく九十郎は、久遠が劍丞に恋をしているように思えた。

昨日会ったエーリカも……明智光秀も、劍丞を憎からず想っているような気がした。

「前田利家は、前田利家にふさわしい男に……って事なんだろうな、きつと……」
九十郎の脳裏に、絶望的な光景が浮かんでいた。

犬子と劍丞が見つめ合い、そして愛し合う光景が浮かんでいた。

九十郎が奥歯をぎりりと噛み締めたのを、柘榴は見逃さなかった。

「犬子、知り合いつてどういう知り合いなの」

「はい、こつちで酔いつぶれてるのは、

尾張で暮らしていた時のお隣さんだった、ひよ子です。

名前は木下藤吉郎秀吉で、あちらは久遠様です、犬子の以前の主君です」

犬子が久遠の方を指し示し、久遠と美空の視線が交差する。

久遠が口を開き、自己紹介でもしようかとしたその瞬間……

「これはまあ、仮定の話。 たぶん絶対に無いであろうもしもの話なだけど……」

美空が久遠の言葉を遮った。

そして親の仇でも見るかのような鋭い視線で久遠をキッと睨みつけ……

「一葉様を幽閉したり、比叡山を焼き払ったりしたら、殺すわ」

瞬間、場の空気が凍り付いた。

柘榴にとつては過去何度か体感した、その他の者にとつては初めて感じる、美空が……長尾景虎の本気の殺意を浴びたからだ。

なお、美空も九十郎も勘違いをしているが、信長に色々利用されるお手紙將軍は一葉ではなく妹の双葉の方である。

言葉はごく短いものであったが、その声を聴き、その目を見た誰もが思った。

美空は本気で久遠を殺そうとしているのだと。

「そのような蛮行をするつもりはない」

だがしかし、織田久遠信長とて、幼少の頃から修羅場を潜り抜けてきた英傑だ。

目の前で殺意を向けられた程度でいちいち狼狽えたりはしない。

少なくとも表面上は、震え一つせず、冷汗一つ流さずにそう返した。

美空が言つた事、ちらりとも考えなかつたと言えば嘘になる……そんな事を考えながら。

「へえ……ふう……」

「何が言いたい？」

美空が値踏みをするかのような視線を久遠に向ける。

久遠は毅然とした態度で睨み返す。

ただし内心では『どうしてこうなった』と頭を抱えたい気分であつた。

そこへ……

「オイコラ美空、何いきなり織田信長に喧嘩売ってるんだよ」

ベコーん、と唐突に現れたマツチヨな大男が美空の後頭部を思い切りドツいた。

本人的には手加減をしているらしいが、久遠や剣丞がドン引きするレベルの痛撃である。

「痛いじゃないの！ 貴方もう少し主君の主君に敬意を払いなさい」

「安心しろ、上す……長尾景虎に敬意を払いながらぶつ叩いたからな」

「今の叩き方は敬意を持った叩き方じゃなかったわよ」

「心の中で合掌して一礼してからブン殴った」

「分かるか！ そんなもん！」

美空がむきーつと腹を立てながらスネをけたぐるが、ガタイの良い九十郎にはまるで効いていない。

「悪いな信長、美空はこう言っちゃいるが、殺しにいこうぜーつ、肅清だーつ、

とか何とか言い出したらはり倒してでも止めるから安心してくれ」

マツチヨなブ男がそう言いながらにこやかに笑う。

この男は美空をガンマンの親戚か何かと勘違いしているのではなからうか。

「むしろ推奨するね、是非ともやってくれ、將軍暗殺とか、比叡山焼き討ちとか、

鏝にうんこ塗ったり、井戸にうんこ投げ込んだり、うんこから火薬作ったり」

そしてびしつとサムズアップしながらひどく物騒な事を言い出した。

この男は自分と自分の関係者が巻き込まれなければ、どれだけ凄惨な虐殺がされようと心を痛めない層である。

「誰がやるかっ!!」

「やらせてたまるかっ!!」

久遠のツツコミと、美空のツツコミが綺麗に重なった。

その瞬間、久遠は美空が苦労人だと、美空は久遠が苦労人だと理解した。

「……長尾景虎、美空と呼んで頂戴」

「……織田三郎信長だ、親しい者は久遠と呼ぶ」

美空と久遠はアイコンタクトでお互い苦労しているようねと言い合った。

「まあ、初対面でいきなり殺すだのなんだのと言ったのは悪かったわね。

そこは謝罪するわ」

「安心せい、子供の頃からやれうつけだの、やれ無能だの、

やれ死んだ方が尾張のためだの言われ慣れておる」

「信じて良いの、さつき貴方が言った『誰がやるか』って言葉を」

「さてな、自分で考えろ」

「ならどうしたいの？」

「天下布武。そちらはどうする気だ？」

「再び足利一強の時代に戻す」

「それでは繰り返しになるぞ」

「私が死んだ後の事は、私の子孫が責任を持つべきよ。

繰り返しになるのはそっちの方じゃないの。」

織田で良いなら武田でも北条でも良いじゃない」

「我よりも天下の主にふさわしい者がいたのなら、潔く道を譲るさ」

「ふうん……」

美空がもう一度、久遠の目をじっと見つめる。

正直な話、今でも久遠が比叡山を焼き討ちにするんじゃないかと疑っているが……

「まあ、これ以上は釘を刺しようも無いか……」

そう呟き、美空は久遠の傍に置いてあったスピリタスの杯を拾い上げ、一気に？み干した。

その日の晩、一人厠で美空強く強く決意した。

もう二度とスピリタスの一気飲みなんてするまいと……

……

……

……

「お姉様、紅茶のお味はいかがでしたか？」

美空がスピリタスの一気飲みというTHE・自殺行為を慣行してした頃、征夷大將軍が妹の膝枕の上でゴロ寝をしていた。

満点の星空を眺め、美空から献上された茶菓子を頬張りながら、妹の体温や息遣いを

感じ……妹と延々と殺し合いを続けた久遠や、姉を追放してしまった美空にとっては、発狂しかねない程に幸福そうな光景であった。

「中々美味であった。それに紅茶を入れた者は中々に愉快であったよ。」

野獣のような顔立ちの大男でな、腕も指もゴツゴツと角ばっているのに、実に繊細な手つきで茶を立てていた」

そんな言葉とは裏腹に、一葉の目が険しかった、眉間に皺が寄っていた。

片や長い間奈良の興福寺一乗院に預けられ、片や征夷大將軍……行動の自由が極端に制限され、ごく最近まで面会も叶わなかった姉妹であったが、それでもなお、なんとなく双葉には、一葉の表情から、考えている事が理解できた。

「あまり、良い茶会にはなりませんでしたか？」

「いや、面白い男と出会った。」

久遠が連れてきた、新田劍丞……は、双葉も以前会っていたな。

それと美空が連れてきた、九十郎……さつき言った、器用に紅茶を淹れる男だ」

「面白い方だったんですか？」

「ああ、見た目は少々不細工であったが、あれは一角の人物に間違いあるまい」

一葉の眼は節穴である。

「まあ、そうでしたの。一度お会いしてみたいです」

会わない方が幸せである。

「いずれ会う機会もあるだろう。何せ美空は、再び足利一強の時代に戻して、

この乱世を終わらせるのだと息巻いておったからの」

「では、美空様がこの乱世を？」

「いや……美空には悪いが望み薄だ、だから余はこんなにもしかめっ面をしておるのだ」

「何故ですか？」

「義元は、全てオレがなんとかしますと胸を張って断言していたぞ。

天下の篡奪という悪名も背負うと、

天下の騒乱を望む輩は誰であろうと斬って捨てると断言した。

だから將軍の地位をオレによこせと言った……

余の目を、真つすぐに力強く見つめながら。まあその結果は桶狭間のアレだった

が」

一葉が故人を思い出し、ふうつとため息をつく。

義元になら斬られても良い……あの時、一葉は確かにそう思ったのだ。

だが……

「美空は越後の主としてはこの上ない、だが天下の主には不足だ。

なんと言うか、抱え込み過ぎる。

越後だけならどうにか抱えられるだろうが、それが限界であろう。

天下を抱えれば……潰れるか、道を見失うかのどちらかであろう」

「なら、久遠様が語っていた、天下布武では？」

「久遠は……少し危ういと、我は感じた。

死んでいった者達に手足を掴まれ引つ張られておる……

それは妹なのか、守役の家老なのか、道山なのか、あるいは義元か……全員かも知れん。

久遠はおそらく、殺した者を忘れられぬ性格だ。

あれでは乱世を収める前に精神を病んでしまいうだろうな、誰かが支えてやらねば

……」

そこでふと、一葉は新田劍介の事を思い出す。

まるで絵に描いたような、まるで物語の登場人物のような好青年であった人物を、その声を聞き、その腕を掴んだ瞬間、不覚にも胸の高鳴りを抑えられなかった男を。

「新田劍丞が久遠を支えるのであれば、あるいは……いや……」

そこでもう一つ、思い出す。

久遠が天下布武とは別の方法で乱世を終わらせる方法を語った事を。

正直に言つて絵空事だと笑い転げたくなるような方法であつたが、新田劍丞ならば

……まるで伝記の主人公のような男であつた彼ならば、あるいはと思つてしまう。

「のう双葉」

「なんですか、お姉さま？」

「劍丞は好きか？」

その言葉を聞いた瞬間、双葉の顔がほつと赤くなる。

幼い頃からずつと寺に押し込められ、男性に対する免疫が無い双葉であつたが……劍丞に対する反応は、特に明瞭であつた。

「惚れたか、劍丞に」

「いえ！ あの一！ その……そ、それは……」

「隠すな隠すな、余には分かるぞその気持ちだ。姉妹だからな」

自分もまた劍丞に惹かれて、恋い焦がれて、また会いたいと、叶うならば共に生きてみたいと願つていると、一葉は自覚した。

流石は姉妹、惚れる男が似ているな……と、一葉は何故か楽しくなつてきた。

「天下の諸侯が、皆揃つて劍丞の嫁になり、家族になる。」

そして乱世を収める……そういう未来があつたらどうする？」

「え？ それは……」

ありえない、双葉は一瞬、そう答えようとした。

だがしかし、新田劍丞ならば……思わず見とれてしまう程に朗らかに笑うあの青年ならば、そんなありえない未来を手繰り寄せてしまうのではないかと、双葉は思った。

「それは……素敵ですね……」

「ああ、そうだな……そうなればきつと素敵で、きつと毎日が楽しいだろう」

一葉が双葉の膝の上で、そつと瞳を閉じた。

今はもう、眉間に皺が寄っていない。

とても安らかな笑みを浮かべ、静かに寝息を立て始めた。

犬子と柘榴と九十郎第46話 『犬子達の戦いはこれからだ!』

「ありがとう……ありがとう……これで……屑は助かる……わ……」

夕暮れ時の河原で、胸に大きな風穴を開けられた少女がバタンと倒れ伏す。

真紅の髪、真紅の瞳、二本の角……少女は鬼の子であった。

まるでウルトラマンエースにブン殴られたドラゴリーのような惨状であった。

「ふざけるな……ふざけんなっ! 何で今避けなかった!？」

何で無防備に殴られたっ!? 何で……何で、身体が崩れていくんだっ!？」

少女をブン殴った者……遠山朱金がそう叫ぶ。

念動力によって無数の石をぶつけられ、全身を壁に叩きつけられ、

自然発火能力で腕を焼かれ、ボロボロの状態であった。

一瞬のチャンスに賭け、最後の力を振り絞り、焼かれた腕を思い切り振りぬいた。

自身の剣魂、ハナサカの力も借りて渾身の力でブン殴った……だが、殺すつもりで

殴ったつもりは無かった。

まるでプリンにスプーンを突き刺したかのように、抵抗無く紅い髪の少女に腕が吸い

込まれ、貫通したのだ。

「剣魂……」

朱金が、ちらりとハナサカを見る。

他者の身体能力を一時的に増強させる能力を持った、彼女の相棒を。

「剣魂……? ハナサカの事か? ハナサカが何だってんだ!」

「剣魂は、北条早雲が……」

貴女達が徳河創雲と呼ぶ人物が、オーデインを討つために作ったもの。

鬼や悪魔、妖怪、神や天使と戦うために作られた道具。

私は……私は鬼子、半分は鬼、半分は人の超生物……

だから剣魂による攻撃に耐えられなかった、それだけの事……だから……」

「北条早雲が徳河創雲? おいどういう意味だ!」

北条早雲って戦国時代の話だろ!」

「お願い……どうかこの先、屑に……クジユロに危機が迫ったら、助けてあげて……」

お願い、遠山朱金……遠山金四郎景元の魂を持つ……貴女なら……」

「パジエロ? じゃないよな……クジユロって九十郎の事か?」

いやそれよりも金四郎ってどういう意味だ!?! 遠山金四郎って誰なんだ!?!

オレの親戚にやそんな名前前の奴はいねえぞ」

「い、この……学園は……オーデインを討つ……ために……」

北条氏政と、北条氏直を守る為に……つ、作られ……た……北条早雲は……

遠山景元のような……え、英雄の魂を……」

少女の身体が朽ち堕ちていく。

指先から、肘が、膝が、身体の末端

「北条……おい、さつきから何を……英雄の魂つて……」

「早雲の……け、計画は……徳河吉音を……吉宗の、魂を……」

声がどんだんか細くなっていく。

少女の身体が崩れ落ちていく。

朱金はその言葉を聞き逃さんと耳を近づけ、全神経を集中させるが、すでに虫の羽音よりも小さくなってしまった声を完全に聞き取る事はできなくなっていた。

「トクガワ……ニウム……投げ銭……さ、三千世か……い……」

そこまで言つて……少女の身体が完全に崩れ落ちた。

まるで長い年月を経て劣化したコンクリート片のようにボロボロになって、全身が崩れ落ちて死んだ。

「吉音が……何だつて……？」

朱金は基本能天気なように見えて、案外繊細な性格だ。

平良との関係をウジウジ悩んで年単位の時間が過ぎたり、学園の変革を訴える由比雪奈を殴るべきか見逃すべきかをウジウジ悩んでる間に、下級生の真留が根性を見せて解決一歩手前にまで持っていったりした事が普通にある。

「訳が分からねえ、意味が分からねえ、いったい何がどうなってるってんだ!」

そんな朱金の叫びを聞く者は誰もいなかった。

この奇妙な死も、奇妙な遺言も誰にも話せず……そして忘れる事もできないまま、月日だけが過ぎていった。

遠山朱金がその言葉の意味を知るのは、1年近く後の事……秋月八雲が大江戸学園に転入してきて、秋月八雲と恋仲になり、エヴァ事件が終結し、斎藤九十郎が事故死した後の事である。

……

……

……

九十郎が犬子との……いや、前田利家との婚姻を拒絶した日から数日後。

その日、犬子の元に一通の手紙が届いた。

差出人は織田久遠信長、その内容は尾張に戻ってきてほしい、というものだった。

数日前の犬子なら、迷いなく……という訳でもないが、それなりに迷った末に、越後

に残ると決断しただろう。

幼馴染の久遠を助けたいという気持ちは確かにあるが、物凄い苦勞人である美空を支えたいという気持ち、同じ男性を好きになった柘榴と共に歩みたいという気持ち、そして何よりも、誰よりも、大好きな九十郎の傍に居たいという気持ちがあるからだ。

しかし……

「行けよ、やっぱり前田利家は、織田信長と一緒にするのが一番だろ」

しかしその九十郎が、犬子に尾張に戻れと、織田信長の元に帰れと勧めるのだ。

「九十郎も一緒に来てくれる？」

祈るように、縋るように、半ば答えの分かっている質問を投げかけた。

「いや、俺は最後の残るよ。せっかく建てた道場を置いて行きたくはないし、

柘榴に神道無念流を教えるって約束、まだ半分しか叶えててねえし、

柘榴以外の弟子もそれなりに増えてきたし……

それを抜きにしても、柘榴や美空を残してどっかに行くつても、気分良くねえ」

九十郎は当然の事のように、当たり前前の事を言うように簡単に……犬子にとっては、九十郎と離れ離れになるといっても重大な事を口にした。

犬子にとって絶対譲れない一線を踏み越えるものであった。

「犬子は……私は、九十郎が好きだよ」

その言葉を告げるのは、もう何度目になるか分からない。

「ああ、そうか」

「私は、九十郎の事が好きだよ」

もう一度告げた。

「だが俺は……いや、俺も好きだよ、犬子が」

九十郎は少し迷いながら、独り言のように呟いた。

九十郎は目の前に立つ少女を……犬子を見てはいなかった。

九十郎が見ているのは、意識しているのは、ただの犬子ではなく、前田利家であった。

「結婚したいよ、九十郎と子供を作って、家族になりたいよ」

「俺は……」

九十郎は暫し目を瞑り、考え込む……脳裏に浮かぶのは、長谷川平良と遠山朱金が秋

月八雲に抱かれる光景、そして犬子と粉雪が新田劍丞に抱かれる光景だった。

「俺じゃあ、犬子を幸せにできやしないよ」

「そんな事は無いよ! 九十郎の傍に居られるだけで犬子は幸せなんだよ!」

「新田劍丞じゃないと駄目だよ」

「どうして!?!」

「お前は前田利家なんだ」

それは九十郎にとって重要な事、重い名前。

ただ犬子にとつては取るに足らない些細な名前。

犬子と九十郎の想いは、すれ違う。

「それが何の関係があるの？」

「前田利家は……価値のある女は、価値のある男と一緒にいるべきなんだ」

「好きでなつた訳じゃないっ!!」

……犬子が激高した。

何で分かってくれない、どうして信じてくれない、何故愛してくれない。

そんな行き場の無い想いが膨らみ、破裂し、犬子は声を荒げていた。

「犬子は……犬子は好きで前田利家になつた訳じゃないよ!」

前田利家なんて辞めてしまいたいよ!

九十郎に……九十郎と離れ離れになる位なら……いつそ辞めてしまいたいよ……」

目尻に涙が滲んでいた。

視界が涙で歪んでいた。

前田利家、前田利家、前田利家、前田利家、前田利家……犬子にとつては自分を示す記号以上の意味の無い文字列が、彼女が愛する人物を苦しめているのは理解できた。

理解できてはなお、犬子はどうすれば良いのかまるで分からなかった。

「いつそ前田利家を辞めてしまおうかとも考えたが、前田利家を辞める方法なんていくら考えても思いつかなかった。」

「お願い、九十郎、犬子を見捨てないで。」

犬子を傍に置いて……犬子は九十郎の為なら何でもするよ、何でもするから……」
ポロポロと、次から次へと涙が零れ落ちていた。

惨めだった、悔しかった、悲しかった。

何度も何度も襲い来る自己嫌悪で死んでしまいたい気分になっていた。

「九十郎は、犬子が嫌いなのか？」

九十郎は何も言わなかった、何も言えなかった。

好きか嫌いかで言うならば、好きだと断言できる。

好きだからこそ、自分のような屑と一緒にするのはいけないと思うのだ。

そして同時に信じられないのだ、前田利家が自分のような屑を好きになる筈が無いと。

「織田信長が許して迎え入れるって言っているんだ、尾張に戻れよ。」

やっぱ前田利家にはそれがお似合いだ。

そうすれば正直諦めかけてた加賀百万石つてのに届くかもしれない。

それに……新田劍丞もいるしな……」

「劍丞さんが何の関係があるの?」

「お前は……前田利家は、新田劍丞と結ばれるべきなんだ。」

たぶんあいつは、この物語の主人公だ。

有名な戦国武将達に愛される宿命なんだ……その方がお前も幸せになれる」

「言っている意味が分からないよ九十郎!」

「分かるんだよ、あいつはどこか秋月八雲に似ている。」

だから……だからお前もきつと、新田劍丞を好きになる。」

俺みたいな屑じゃなく、新田劍丞を好きになる……分かるんだよ」

「犬子には九十郎が言ってる事の意味が全然分からないよ」

「良いから戻れ! こっちは……こっちはこっちで、何とかやつてくから……」

言いたい事を散々言つて、犬子の心を散々描き乱して、九十郎は逃げるように立ち

去つた。

いや……逃げるようにはなく、逃げたのだ。

前田利家と向き合うのを拒絶して、その言葉を聞くのすら拒んで、逃げ出したのだ。

「嫌だ……嫌だよ九十郎……犬子の傍にいてよ……犬子を見捨てないでよ……」

犬子は一人、泣きながら懇願していた。

既に九十郎は立ち去っており、その言葉が九十郎に届く事は無い……たった一人で、

慟哭していた。

「九十郎がいなきや、生きていけないよ……」

犬子を見て、犬子を愛して、犬子を……犬子の、傍にいてよ……」

俯き、地べたに座り込み、さめぎめと泣く犬子を、少し遠くから眺めている人物がいた。

彼女の今の主君、柿崎柘榴景家と、主君の主君、長尾美空景虎である。

「何か……何かとんでもねー事になつてゐるみたいっすね」

「そうね、誰かさんが結婚拒否して、

他人が一生懸命後始末している間にとんでもない事になつてゐるわね」

長尾美空景虎が……遠方からわざわざ訪ねてきた結婚式の招待客達に、柿崎景家急病のため式は延期になったという事にして土下座しまくった少女がそう呟いた。

表面上は平静を保っているが、内心では怒りまくっている、柘榴には分かった。

「本当に申し訳無いっす。」

柘榴もまさか九十郎があんな事を言い出すなんて思いもしなかつたっす」

「柘榴は被害者よ、犬子だつて……全部九十郎が悪いわ。」

男なら惚れさせた責任を取りなさいよ全く」

それは美空の偽りなき本心である。

偽りなき本心であるが……それでも、ここまで拗れる前にどうにかできたのではないかと考えてしまう。

何かもつと……もつと犬子にとつても、九十郎にとつてもすんなりと話を進めるような何かがあつたんじやないかと考えてしまう。

美空はそんな事を考えて、自分の未熟さを恥じた。

もつとできる事があつたんじやないかと……

「さて、それじゃ何がどうしてこうなつたのか、説明してもらおうかしら」

越後の国主、長尾景虎は必死に虚勢を張りながら、柘榴に説明を求めた。

前兆はあつた、気づくことはできた、どうにかする事も……あるいはできたかもしれないと考えながら、表面上は平静を装つて説明を求めた。

「どうしてつて……どうしてと言われると困るっすけど……」

つまり……つまり九十郎にとつて、前田利家つてのは……」

柘榴がしどろもどろになりながら、どうにか論理立てて説明しようとする。

基本ノリと勢いで突つ走る女である柿崎景家にとつて、論理的な説明だの、他人の心を察しろだのといった方面は苦手分野である。

「前田利家は九十郎にとつて上杉謙信と同じくらい『重い』名前だつた……違う？」

「へ？ いや、それは……えつと……そりゃあ、

確かに九十郎は柘榴と犬子とじゃ扱いが違うって気はする時は結構あったんですけど」

「例えばね、柘榴、貴女が劉玄德に求婚されたと仮定しましょう」

「劉玄德って誰っすか？」

「皇帝でも王様でも將軍でも良いから、適当に歴史上の重要人物を思い浮かべなさい。

つまり……あんまり実感が湧かないけど、未来人にとって上杉謙信や前田利家つてのは、

歴史上の偉人なのよ」

「御大將は将来出世するって事っすか？」

「九十郎の態度を見てる限り、どうやらそうらしいみたいなのよね。

未だに実感が湧かないのだけれど」

「犬子も？」

「柘榴が想像した以上に出世するのでしょうかね、

具体的には加賀に百万石の領地を貰える位に」

「百万石って……相当凄まじい領地っすよ」

「私だっけそう思うわ。」

でも九十郎は犬子が将来的に相当凄まじい出世をすと思うっている、

思い込んでいる、重要なのはそこ……」

美空は自分が歴史上の偉人……具体的に誰かは述べないが、歴史に名を残すような偉人に求婚された自分の姿を想像する。

あまり想像していて楽しい光景ではない。

肩は強張り、脚は震え、声はつつかえる……そんな光景が想像できた。

九十郎が犬子を……前田利家を拒みたくなる気持ちは、少しだけ理解できた。

だがしかし、だがそれでも……

「だからって何で新田劍丞が出てくるのよ、

何で前田利家は新田劍介と結ばれるべきだなんて斜め上の発想が出るのよ……」

「劍丞って人とは少し話をしたっす。確かに九十郎とは比べ物にならない位に美形で、

真面目な好青年だとは思ったっすけど……九十郎がアレに劣るとは思わないっす」

そう言いながら柘榴は思い出す。

九十郎に抱かれた時の思い出を、九十郎と交わった時の思い出を。

自分が九十郎が好きだと気づいた瞬間を。

「言い方は変かもっすけど……」

お〇んこが九十郎を求めて、九十郎に屈服したって感じがしたっす。

柘榴愛してるって耳元で言われながら、ズンズンと奥を衝かれて、

ああ、柘榴はこの人の子供を産むために今まで生きてきたんだなって……

柘榴は九十郎に墮とされて、九十郎にとろとろに溶かされてるんだって感じて……

ただの柘榴として愛されてるんだって感じて、それが堪らなく心地良く感じたっす」

「はいはい、御馳走様。でも……でも、だからこそ腹が立つのよ」

それでもなお、釈然としない思いがあった。

美空は知っていた、犬子がどれだけ九十郎を愛していたかも、柘榴がどれだけ九十郎と結婚する日を楽しみにしていたのかも。

「ちよつと待つつす御大将、その長ドスは何に使う気つすか？」

「え？ コレをあいつの首筋に突きつけて、

犬子を惚れさせた責任を取れって言いに行こうかと」

「いやいやいやいや、流石に殺すのは拙いっすよ」

そう言つて柘榴は長ドスを持つ美空の腕を掴んで引つ張る。

美空は長尾景虎で、殺すと決めたら必ず殺す性格だ……それ故に柘榴は、もしかしたら美空は本気で九十郎を殺すかもしれないと思つていた。

九十郎は死んだ方が日本は平和になるのではなからうか。

「安心しなさい、半殺しで済ませるから」

「いやいやいやいや……」

「柘榴どきなさい、あいつ殺せないわ」

「気持ちには分からなくもないっすけど、殺さないでほしいっすよ」

美空が抜身の刃物を持ち出し、殺すだの殺さないだの半殺しにするだの押し問答を続けていると、1人涙を落していた犬子が、2人の気配に気がついた。

「美空様……柘榴様……？」

「へ……？」

「あ……？」

美空が長ドスを持ち出して柘榴を刺そうとしているかのような光景であった。

「あの……何をしているんですか？ 柘榴様が何か無礼な事をしたんですか？」

だとしたら犬子も一緒に謝りますから……」

「柘榴を無礼討ちにしたい訳じゃないわよ！ これは……えっと、九十郎に……」

「九十郎に!!」

やべ、失言したと美空が後悔するよりも早く、犬子が地べたに膝をつき、深々と頭を下げた。

「ど、どうか！ どうか九十郎を手打ちにするのは思いとどまってください！」

九十郎は時々酷い事を言う人ですけど、犬子は……

犬子は九十郎に何度も助けてもらって、犬子は九十郎に何も返せてなくて……

何より大好きだ人なんです！ 心の底から好きになれる人なんです！

だから……だから……」

反射的に、犬子は額を地面にこすりつけていた。

九十郎に死んでほしくない、九十郎とずっと一緒に居たい、犬子はただそれだけを思っていた。

その想いは美空にも通じ……通じたからこそ、美空は九十郎に対して腹が立った。

「全く、こんなに一途で可愛くて良い娘を想われてるのに、何が不満なんだか……」

「たぶんつすけど、一途で可愛くて良い娘だから苦しんでるつすよ、九十郎は。」

犬子は柘榴も溜息が出る位良い娘つすから」

「そ、そんな事は……」

「自覚して、理解しなさい。 犬子は……前田利家は良い娘で、良い女なの。」

そこを理解しない間は絶対に話が噛み合わないし、永遠に九十郎とは結ばれないわ」

美空は心臓が抉られるかのような思いでそう告げた。

美空は知っている、美空は分かっている、犬子が他人を気遣える良い娘だと、犬子が損得勘定抜きで美空の……長尾景虎の味方になりたいと思ってくれている人だと、そして心の底から九十郎を愛している事も。

犬子が良い娘だからこそ、九十郎が引け目を感じている……それを告げるのは、美空

にとつて辛い事であった。

「まず確認させて、貴女は九十郎と結ばれたいの？」

九十郎の妻になつて、九十郎の子を産んで、九十郎の家族になりたいと願っているの？」

「はい！ 犬子は九十郎の妻になりたいです！」

九十郎の子供を産みたいって心の底から願つてます！」

犬子は即答した。

見た目が多少悪かろうと、基本的に屑であつても、誰に何を言われようと……愛する九十郎に否定されようとも、自分が九十郎を愛しているという一点だけは信じて疑つていない。

「九十郎は貴女が良い女だから、自分とは釣り合わないって考えている。

考えられる手段は2つね。一つは九十郎が自信をつける事。

自分が歴史上の偉人に釣り合いがとれる人物だと思わせる事」

「自信のつけ方とか聞かれても分からねーっす」

「奇遇ね、私も全然わからないわ。

だから第2案、犬子か新田劍丞が自分と同じ人間だという事を分からせる事。

自分と同じように悩んで、傷ついて、苦しんでる事を理解させる……そして……」

「……3つ目の案、あるんじゃないっすか?」

そこで、柘榴が口を挟んだ。

「他に手があるのなら、是非教えてちょうだい」

「要は九十郎が犬子を好きになれば良いっすよ」

「嫌っている様子はまるで無いわよ。」

むしろ……むしろあいつは、前田利家を好きだから幸せになつてほしいと思つて、自分では幸せには出来ないと思つて、身を引こうとしているように見えたわ」

「そういう小難しい理屈がどうでも良くなる位、犬子にベタ惚れさせれば全て解決っす」

「ふむ……」

美空は顎に手を当て、しばし考える。

柘榴らしいノリと勢いに身を任せた暴論のように聞こえる。

小難しい理屈がどうでも良くなる位に惚れさせる方法なんて、言うのは簡単だが実行するのは困難極まりない。

だが……

「犬子、貴女が越後から離れ、九十郎から離れ、尾張に行くと言うのなら止めないわ。

だけでもし、越後に残り、九十郎の傍から離れたくないと言うのなら、

私は全力で貴女を支える、支えて助けたいと思つている。」

貴女の主君の主君として、越後の国主として、そして何より貴女の友として
「と、友……？」

「互いが互いを支えたい、助けたいと思っっているのなら、それは友と呼ぶべきじゃない？
貴女が私をどう思っているのかは知らないけれど、

私は貴女を支えたい、助けたい、そして幸せになつて欲しいと思っっているのよ」
その言葉を聞いて、犬子は涙を抑えられなかつた。

美空と初めて会つた日に、犬子は確かに美空を支えたい、助けたいと思つた。

久遠を支えたいという気持ちがあるのは確かな事実であつたが、美空を支えたい、助けたいといつ気持ちを抱いた事も、また確かな事実であつた。

「美空様……柘榴様……」

「様なんてつけないでも良いわ、友達でしょう」

「同じ男性に惚れた仲間つすよ、犬子と柘榴は」

美空と柘榴もまた、目頭が熱くなるのを抑えられなかつた。

この娘は幸せになるべきだ、幸せにならなきゃいけない、そんな思いで胸が一杯になつていた。

「どうにかするわよ、柘榴」

「柘榴と御大将が力を合わせれば、どんな困難だつて乗り越えられるつすよ」

「柘榴と私と犬子が……でしよう?」

「ああ、そうだったつすね。犬子、一緒に九十郎と結婚するつすよ」

「美空……柘榴……」

犬子はまた、涙を零していた。

悲しいからではない、苦しいからでもない。嬉しいから涙を零していた。

美空が、柘榴が……越後で出会った素晴らしい仲間が、心から自分を助けたいと思っていると分かったからだ。

「まずは九十郎をベタ惚れさせるつす」

「あいつに責任を取らせましょう、こんな良い女を惚れさせた責任を」

犬子が、柘榴が、そして美空が、互いに手を取り合った。

犬子が、柘榴が、そして美空が、互いに助け合おうと誓い合った。

乱世に……親兄弟で殺し合い、潰し合う糞みたいな時代の中で見つけた友の為に戦おう、支え合おうと誓い合ったのだ。

「それじゃあ一緒に考えましょうか。」

あの筋肉男にどうやって犬子の想いを伝えるかを。

あの筋肉男にどうやって前田利家に伍する自信をつけさせるかを」

「犬子は良い女つすよ。」

九十郎は顔こそアレっすけど、柘榴と犬子がベタ惚れしちまう位良い男っす。それを九十郎にタツプリ教えてやるっす」

美空と柘榴が犬子の手を引いて、立ち上がらせる。

犬子はもう一度立ち上がる。

絶望を振り払い、何かできる事はあるんじゃないかと考えを巡らせる。

「ありがとうございます、美空様、柘榴様」

2人には聞こえない小さな声で、犬子はそう呟いた。

……

……

……

「俺は……俺はどうすれば良い……教えてくれよ光璃、教えてくれよ坦庵。

俺は……俺は……」

一方、九十郎は一人でウジウジと悩み続けていた。

自分で犬子を拒んでおきながら、犬子を失う怖さに怯えていた。

かつて光璃と坦庵と九十郎は3人で1つであった。

光璃が寂しさに泣き出せば、坦庵と九十郎が背中を押して立ち直らせた。

坦庵が不安に押し潰されれば、光璃と九十郎がバカ騒ぎを起こして立ち直らせた。

そして九十郎が迷い、悩み、立ち止まれば、光璃と坦庵が舌先三寸で馬鹿を騙し……ではなく、助言を与えて迷いを振り払わせた。

もしも今、光璃か坦庵のどちらかが九十郎の傍に居れば、九十郎はここまでトラウマを拗らせず、犬子や粉雪を拒絶するような事も無かつただろう。

しかし今、この世界に光璃も坦庵もない。

九十郎を立ち直らせる方法を熟知する者がいない。

「助けてくれよ……光璃、坦庵……」

精神的に追い詰められた時に、どうすれば良いのかまるで分らなくなつた時に、光璃も坦庵もない……それは九十郎にとって、初めての経験であつた。

犬子と柘榴と九十郎第47話 『光璃と九十郎がひたすら
いちやつくだけの話その1』

ここは魔境・大江戸学園。

毎日毎日飽きもせず、馬鹿と馬鹿と馬鹿が今日もドツタボタン大騒ぎをする学園。

人工島であるが故にけものはいないが、のけものは掃いて捨てる程にいる場所。

ニホンが誇るトップエリート共がその溢れる才能をゴミ箱にダンクシユートし、俺は
ここだけ一足お先と光の速さで明後日の方向にダッシュする魔境である。

そんな大江戸学園のある暑い日に、2人の美男美女が……

「九十郎……暑い……」

「暑いのは俺も一緒だよファースト幼馴染。」

というかもう少し離れるよ、汗が引っ付いて気色悪いだろ」

……訂正、1人の美女と1人のブ男が全身を密着させていた。

その日は全身がバターのようにドロドロに溶けてしまいそんな暑さの日であった。

「やだ」

光璃はキツパリと拒絶し、九十郎に全身をさらにさらに密着させる。

鼻腔をくすぐる男の汗の臭いが、今の光璃には心地良さすら感じた。

光璃にとつては、九十郎の臭いは何よりも安心する臭いなのだ。

「やだつてお前……」

「ここにいれば九十郎が扇いでくれるからやだ」

光璃はその明晰な頭脳をフル回転させて適当な嘘を言った。

知略96の無駄遣いである。

「ははは、体良く俺を扇風機代わりにしてんじゃねえぞ駄目女」

そうは言いながらも九十郎は、自分を扇ぐついでに光璃も風を当てる。

なんやかんやで光璃には甘い男である。

「駄目でも良い、九十郎がお世話をしてくれるから」

「否定はしねえが最初からアテにすんな」

「ままー」

「誰がてめえのママだ!? 誰がっ!」

「九十郎の魂」

「そういう笑うに笑えない冗談言っているとアレだぞ、ミルク飲ませるぞ」

「お〇んちゃん、しゃぶる?」

そんな艶めかしく生々しい提案に、九十郎は一瞬だけ考え込む……光璃としては、九

十郎がしゃぶれと言ったら本当にしゃぶるつもりだ。

「よし分かった、この話はやめ。こうなりや実力行使でいかせてもらう」

生まれた日からの腐れ縁、兄妹同然に育った幼馴染にち〇こをしゃぶらせる不健全極まりない妄想を全力で振り払い、九十郎は光璃にアイアンクローをかけ、無理矢理引つpegがそうとし始めた。

「はあくなくれえろお〜！」

汗がひつつくしお前の体温が熱くて不快指数が急上昇してんだよお〜」

「う〜、う〜」

「そのうーうー言うのをやめなさい！」

「れみ・りあ・う〜」

「なあ〜にがれみあうーだ！俺は美鈴派だ！」

なお、光璃はフランドール派である。

光璃が全力で、身体全体でひつつくように九十郎に抱き付き、抵抗する。

服がはだけ、その豊満な胸が九十郎の身体に押し付けられる。

世の男性が揃って前屈みになり、遠山朱金が鼻血を流しながらサムズアップしそうな光景であるが、幼稚園児の頃から何度もじゃれ合った九十郎の性的興奮メーターはびくりとも動かない。

「いい加減に離れろ光璃、胸揉むぞ」

業を煮やした九十郎がドスの効いた声でそう脅す。

「やってみる、ちゅーするぞ」

しかし、戦国魔人武田晴信の生まれ変わりである光璃は少しも動じず、武田晴信らしからぬしょーもない脅し文句で反撃する。

脳みそが沸騰するかのような蒸し暑い部屋の中で、光璃と九十郎がじと〜つという視線を向け合う。

普段の九十郎なら、適当な所で折れて光璃にされるがままになる。

光璃がちゅーするぞと言ったら、本気ちゅーする気だという事は、今までの経験上これでもかって位理解している。

しかし、その日は暑かった。

エアコンも壊れていた。

熱中症が怖いので稽古もできない。

早い話、九十郎はイライラしていた。

「んんんんん〜〜〜〜〜!!」

「んぐ、うんん〜〜〜〜!!」

結果、炎天下の中、滝のような汗を流しながら唇を合わせ、舌先を絡ませ合いながら、

振り切り切らんばかりの勢いで両乳房を揉みしだく訳の分からない光景になり……
「えーかげんにせえーっ!!」

……弦巻マキ似の声のご近所さんがブチ切れた。

この魔境・大江戸学園の中でも特に優れた知性を持ち、その才能を盛大に無駄遣いし、日々常識という名の壁にロケツトドリルキックをかます少女……その名は平良賀輝。

五十嵐光臣に匹敵する知識と技術を持ち、ノリと勢いに身を任せて巨大ロボで級友達をぶちっつと踏み潰そうとする屑……早い話が、魔境・大江戸学園を体現する馬鹿の一人である。

屑同士惹かれあっているのか何なのかは分からないが、九十郎との仲は良好である。

「オイラにしちゃ珍しく仏心出して、

このクソ暑い中で一文の得にもならないエアコン修理に精をだしてらっつてのに、

隣で延々とイチャつかれたらあたいの胃がストレスでマツハだよ!

恋人居ない歴Ⅱ年齢の平良賀輝さんに対するあてつけかコンチキショー!」

「ははは、恋人でも何でもねーよ、ただの腐れ縁だよ」

「友達以上恋人未満……今はまだ……」

唇と唇が唾液の線で繋がった状態で2人が反論する。

しかし、説得力はまるで無かった。

舌を絡み合う程にキスをするのも、胸を揉まれるのも、光璃にとってはご褒美以外の何物でもないが故に、それが恋愛経験0、喪女まつしぐらな輝さんにすら理解できたが故に。

「全く、早くくつつけて皆思ってるよ」

九十郎は全力で見えて見ぬふりをしているが、九十郎が密かに惚れている女、長谷河平良も早くくつつけて思っている。

「そういう関係じゃねえよ、俺と光璃は。幼馴染で腐れ縁さ」

「知ってるよ……知ってるけどさ……」

輝は手にしたスパナとドライバーをカチャカチャと弄びながら、何か釈然としない気持ちで言葉を途切れさせる。

「んな事よりまだ直らねえのか、このままじゃ脱水症状になっちゃうよ」

「うくん……残念だけど、故障の原因がまだ分ってなくてさ、

もうちよつと時間がかかると思うよ」

「マジかよ……おい光璃、何かこの暑さを凌ぐアイディアとか無いのか？」

そう言われて、光璃は知略96の頭脳を回転させる。

中庭に水を撒くとか、ハッカ油を手足に着けるとか、図書館に行くとか、いつそ何故か学園内に点在するラブホでご休憩とか、そういった細々としたアイディアは浮かんだ

が……今は素直に真夏を快適に過ごす案を出すより、全力で九十郎と真夏を楽しむ案を出したい気分であった。

「暑い夏をブツ飛ばせ、熱々カップル大歓迎、ねずみ屋期間限定カップル専用パフェ」
ラブホでご休憩というピンク脳極まりない案をギリギリの所でこらえ、光璃が淡々と練兵館の郵便受けに入っていたチラシの内容を読み上げた。

「ああ、今年もそんな季節か。あの店毎年一回はカップル限定メニューを出すよな」
「行きたい」

「ははは、寝言は寝て言えよ。」

俺は彼女いない歴〓年齢で、お前も彼氏いない歴〓年齢だろうに。

どうやってカップル限定パフェを食う気だよ」

光璃は一瞬、前世も含めれば……と、言いかけた。

しかしいくら前世の事とはいえ、実は既婚者です、実は武田信玄ですと言つて九十郎に信じてもらえるのか、仮に信じてもらったとして、九十郎は前と変わらずに接してくれるのか……まるで確信が持てず、言い出せずにいた。

分かっている事は、齋藤九十郎によつて、武田光璃晴信は骨抜きにされてしまった事、齋藤九十郎がいなくなつてしまえば、光璃は駄目になつてしまう事、もしも齋藤九十郎が誰かに殺されでもしたら……光璃は怒りと嘆きと憎しみで頭がおかしくなつてしま

うだろうという事だ。

「問題は無い、確かにこのメニューはカップル限定。

だけど……いつカップルになったかは指定されていない。

極論、3秒前にカップルになったとしても条件は満たされる」

「限定メニュー提供は今日から2週間だから、

2週間以内に彼女ができれば大手を振って食に行ける訳か……

なるほど完璧な作戦だな、不可能って点に目をつむればだが」

黙っていれば普通に美女で、成績は常に上位1%をキープする才女で、学園内に密かにファンまでいる光璃はともかく、非モテ不細工マッチョの九十郎がたかが2週間で彼女を作れたら奇跡である。

……100人に1人の割合で武田晴信（知力97）より優秀な成績を叩き出せる人間がいる辺り、大江戸学園は本当に魔境である。

「二つだけ、今日、今すぐに、ねずみ屋のカップルパフェを食べに行く方法がある」

「ほう、どんな方法だ？」

光璃はすうーはあーと大きく深呼吸をし、額の汗を拭き、ゆつくりと九十郎の手を握り、九十郎の目をみつまめ……

「大好き、九十郎」

光璃は奇襲を仕掛けた。

前の生で実母信虎を騙し討ちにした時と同じくらい……いや、それ以上に光璃は緊張していた。

静かに、しかしはつきりとした声でそう告げた。

そう告げた直後、光璃は自分の心臓がどンドン早くなり、顔に血が上つていくのを感じた。

胸がぎゅうつと締め上げられ、息ができない程に苦しくなった。

そして輝が特に理由も意味も無く鉛筆を一本ヘシ折った。

「おい、気は確かか？」

たかがパフェのためにそこまでするかという意味で、九十郎は尋ねた。

「本気」

本気で九十郎が好きなのだ、と、光璃は告げた。

そんな光璃の思いを見事に見逃した節穴男はねずみ屋のチラシをじい〜と見つめ
……

「……甘党の長谷河にカップルパフェ美味かったって自慢してやるのも面白いかもな」
少女の愛の告白を聞いた直後に他の女の名前を出す男がいた。

率直に言って最低な所業である。

チクリと……光璃は胸に棘が刺さったような痛みを覚えた。

付き合いが長いので、ずっと九十郎を見続けてきたので、九十郎が長谷河平良に惹かれつつある事に気づいていた。

だがそれでも、決意と覚悟を決めてした告白の直後だというのに、他の女性の名前を出されるというのは、かなり辛いものがあつた。

「よし分かつた、今日一日の限定カップルだな。」

そうと決まりやさつさとねずみ屋に行こうぜ、ぶつちやけここ暑いし」

一日限定……要は本当に付き合うのではなく、ねずみ屋の限定パフェを食べるための方便だという事だ。

だがそれでも、光璃は嬉しかった。

たつた一日、されど一日、形だけでも九十郎とカップルに……恋仲になれるのだから。

「じゃあ今から、今日一日限定カップル。今日一日は、恋人らしい事をして良い？」
「構わんよ、この暑さで稽古中止になってて、どうせ暇だしな」

そう言う九十郎は光璃の肩を抱き寄せ……

「愛してるぜ、光璃」

……耳元でそう囁いた。

「ほぶっ!? く……み、耳が孕む……」

予想外の反撃に、想定外の大ダメージに光璃が慌てふためき、耳まで真っ赤にさせながら悶絶する。

奇襲に奇襲を被せるなんて、まる毛利元就だと光璃は感じた。

まあ、前の生でも今生でも、光璃は毛利元就と会った事も戦った事も無いのだが。

「斎藤ちゃん、顔はともかく、声だけはイケメンだからねえ」

民安ともえ似の美声の持ち主がコメントする。

心なしか、面白くなさそうな顔をしていた。

「……そんで、オイラはこのエアコン直るまで帰れまー１０しろって事かな？」

「いや、適当な所で切り上げても良いぞ、直せなきゃ業者に頼むか新しく買うさ」

「むむ、そいつはオイラに対する挑戦かな？」

学園一のメカマニアを自負する輝さんとしちや、

直せませんでしたでスゴスゴ引き下がるなんてできないねえ」

「いや妙なビックリドッキリメカとか取り付けられたら困るんだが。」

「ここは道場で、乙級の学生も通って来るって事を忘れんなよ」

「分かっているって、こうなったらトコトンまでやっちゃうから、期待して待っていてくんな

」よ

「悪いな平良賀」

「良いつて事さ、友達じゃないか。」

斎藤ちゃんには昔から色々世話になってるし、記事のネタも提供してくれてるし」

「俺の神道無念流が必要になったらいつでも呼んでくれ」

「オイラが喜びそうなネタがあったら、いつでも連絡してくれよ」

そうこうしている内に九十郎が身支度を整え、未だに顔を真っ赤にしながら悶絶している光璃をお米様だっこして練兵館から出ていく。

輝には合鍵を渡しているので、戸締りの必要は無い。

輝はニコニコしながら2人を見送り……

「あくあ……オイラに春が来るのはいつになるのやら……」

ホントに、こんな所で何やってんだか、新聞の編集も休んでさ……」

2人が見えなくなった直後、輝はそんな事を呟いてため息をついた。

そして1人クソ暑い部屋で壊れたエアコンの修理に戻る。

平良賀輝に春が訪れるのはもう少し先の事……ねずみ屋のお隣に学園一のモテ男、秋月八雲が引越してきてからの話である。

「でも、変だなあ……何度見直してもどの部品も正常なのに……」

ハードが無事って事は、もしかしてソフトの方に不具合でもあるのかなあ？」

……

.....

.....

「は〜い、カップル組ご案内〜」

結花姉、カップルパフェオーダー入ったよ」

ねずみ屋の三姉妹の次女と三女が、忙しなく店内を駆け回っている。

大江戸学園でも一二を争う人気の茶店、ねずみ屋は今日も人で溢れていた。

「今日のねずみ屋はいつも以上に甘ったるい感じがするな」

右を見ても左を見てもカップルカップルカップル……練兵館と違ってエアコンはしっかりと動いていたが、非モテの九十郎にとつて非常に居心地の悪い空間が広がっている。

「遠山曰く、美人三姉妹目当ての男共が結構いるみたいなんだがな……」

流石にカップル限定メニューが出てる日に美女鑑賞に来る気合の入った奴はいないか」

九十郎とて年頃の男であつて、美女のウエイトレスに鼻の下を伸ばし、ふらふら〜とカフェに入つてしまうタイプである。

しかし、ねずみ屋はホール担当の次女と三女がド貧乳なので、巨乳好きの九十郎が足を運ぶのは稀であつた。

「九十郎は甘い物、嫌い？」

ちやつかり冷房に近い席を確保した光璃が、彩り鮮やかなメニューを眺めながらそう尋ねる。

「大好きだよ、作るのも食うのもな。 じやなきやここに来る訳がねえじゃねえか」

「そう、良かった」

光璃はメニューに顔を埋め、赤い頬とにやける口元を隠す。

九十郎と2人でねずみ屋のカップルパフェを食べに行く事は、

光璃が密かに憧れ、夢見ていた事だった。一日限定カップルというのにはやや不満があるが……それでも、今日のパフェはいつも以上に甘く感じそうだと予感していた。

「それにしても、ここの隣は安定しないよな。」

この間はビデオ屋で、その前はPCショップだったよな、

さらに前はアクセサリー屋で……今は空き家と」

「呪われてるのかも」

「ははは、呪いなんて非科学的なモンがあつてたまるか。」

単に経営オンチが連続しただけだろうさ」

なお、九十郎は知らない事であるが、光璃は普通に霊魂が見える。

「次は何が来ると思う？」

「さてな、正直どうでも良い」

九十郎が窓から見える空き家を眺めながら、団扇で自分を扇ぐ。

その場所に秋月八雲が引越してくるのも、この場所で九十郎がトラツクに轢かれて死ぬのも、もう少し後の話である。

「早いもんだよな、あいつが……」

井伊のクソ女がくたばってから、もう一ヶ月になるんだよな……」

扇ぐ手を止め、どこまでも広がる青空を見上げながら、九十郎が呟いた。

「高野や、渡辺、小関が死んでから、もうずいぶん経つよな……」

九十郎はそう言つて、表向きは事故死したダチ公達の顔を思い浮かべた。

何もできなかったと塞ぎ込むセカンド幼馴染の顔も思い浮かべた。

基本屑な九十郎はセカンド幼馴染程深く悲しめはしなかったが……それでもなお、色々と感じる事はある。

「俺は……俺はもつと何か、やれる事は無かったのかな……」

結局俺は、全部遠山に押し付けて。一番辛くて痛々しい役目をあいつに……」

井伊のクソ女の顔を思い浮かべる。

病的なまでにガリガリに痩せた、若白髪 of 貧乳女を、二度も練兵館をぶつ壊した糞女を、ナチュラルに自分を屑呼ばわりする糞女を、幾多の能力を使いこなす恐るべき超能

力者だったが、超能力を使えなくなったら置物に等しいクソザコナメクジを……
「できれば俺の手で殺したかったよ。」

俺の手で殺すべきだったよ遠山に全部押し付けるんじゃないやなくて。俺の手で……」

そして思い出す、全てが終わった後、遠山朱金が……望まぬ人殺しに手を染めてしまったダチ公がボロボロと涙を零し、子供のように泣きじやくる姿を。

「人は死ぬ、必ず死ぬ」

光璃が……いや、戦国時代に生まれ育った武田晴信はそう答えた。

「どんなに死んでほしくないと願っていても、死ぬ時はあっさり死ぬ。」

人は……九十郎が思うよりも簡単に死ぬ」

光璃はかつて戦国時代を生きた。

殺して殺されて、殺して殺されて、殺して殺されて……それを延々と繰り返し続けた
冀みたいな時代を生きた。

かつて光璃は死んだ、長尾美空景虎に斬られて死んだ。

だから光璃は知っている、人はどれだけ簡単に死ぬのかを。

だから光璃は泣けなかった。

悲しいと思っていたのに、辛いとも思っていたのに、光璃の目に涙は浮かばなかった。
泣いても仕方が無いから……たったそれだけの理由で、光璃は泣けなかった。

「お待たせしましたー！ カップルパフェと、ダーズリン、アッサムでーす！」

そんなしんみりとした空気を吹き飛ばすかのように、ねずみ屋の三女が2人の注文を運んできた。

「おお……何と言うか、ピンク色だな。イチゴのムースが使われてるのか？」

ハート形のクッキーに、ブルーベリーとクランベリーに……

スプーンは一つと、あくんでもしあえつてか？」

「九十郎、食べさせて」

事前情報無しでここに来た九十郎と違い、光璃はあらかじめ下調べをして、パフェのスプーンが一つだけだという事を知っていた。

一個のパフェを2人で互いに食べさせ合う……光璃はそういう恋人らしい事がしたくて、九十郎をここに誘ったのだ。

「ほいほい、あくん……」

九十郎はパフェの一番上、イチゴのムースを一口分掬い取り、光璃の口に運ぶ。

幼い頃の腐れ縁であるが故に、今更恥ずかしがるような仲ではないと思っっているが故に、九十郎は少しも躊躇せずにあくんを実行に移した。

「あ……む。うん、甘酸っぱくて美味しい」

光璃は嬉しそうに微笑む、その心中は幸せで一杯だ。

武田晴信を知る者が見たら気が遠くなる程に、光璃の顔は緩み切っていた。

「交代だ光璃、俺にも一口よこせ」

地味に甘味好きなマツチヨが光璃にスプーンを手渡す。

「うん、あ〜ん……」

光璃が生クリームとブルーベリーを掬い取り、震える手で九十郎の口元に近づける

……

失敗したら恥ずかしいと九十郎の顔を凝視して、九十郎と視線が合う。

喉がごくりと鳴った、肩に力が入った。

何度も何度もイメージトレーニングをしていたつもりだったが、想像の中で描いたどの九十郎とも、目の前にいる九十郎は違って見えた。

『愛してるぜ、光璃』

直後、光璃は練兵館を出る前に聞いた九十郎の声を思い出した……否、思い出してしまった。

心臓が飛び跳ねたかと思った、本当に耳が孕むんじゃないかと思った、しばらく立ち上がれなくなる程に胸が熱くなった。

そんな破壊力抜群のイケボを思い出し、光璃の手にさらにさらに力が籠った。

結果……九十郎の顔にパフェの生クリームがべつとりと付着した。

「光璃、お前もしかして喧嘩売ってるのか？」

九十郎が光璃とは別に理由でプルプルと震えていた、額には怒り皺が浮かんでいた。

光璃はこの時、『笑うという行為は本来攻撃的なものであり、獣が牙をむく行為が原点である』という漫画で得た無駄知識を何の意味も無く思い出した。

「ん……………ぺろ……………」

光璃は咄嗟に席を立ち身体を伸ばし、無意識のうちに九十郎の頬にあつた生クリームを舐めとつた。

『おおっ……………』と、周囲がどよめいた。

光璃も九十郎も気づいていなかったが、大江戸学園でも有名な屑2名……………もとい美女とブ男がカップルカフェを食べている光景はそれなりに注目を集めていた。

「……………ちよつとしよっぱい」

光璃はそう言ったが、これでもかかってくらいカップルらしい行為を九十郎とできたので、さつき以上に心臓がドキドキして、さつき以上に幸せな気分になれていた。

「おいふざげんな、お前しかパフェ食べてねえじゃねえか、俺にもよこせよ」

美少女が頬を舐めてくるという非日常的な体験をしたというのに九十郎は塩対応であつた。

だから貴様は九十郎なのだ。

「あ〜ん……」

「あ〜……つむ。ふむ、これは……」

結構酸味が強い味付けだな、普段使ってるのとは別なイチゴを使っているのかな？

これはこれで悪くない……光璃、もう一口くれ」

「うん、あ〜ん……」

なんやかんやで、光璃は幸せだった。

光璃はこの幸せがずっと続くと思っていた、ずっと……

「ありがとうございました」

会計を済ませ、ねずみ屋の次女に見送られ、光璃と九十郎がねずみ屋から出る。

ドアをくぐった瞬間、むわあつとした熱気が2人を襲う。

「九十郎、暑い」

「俺だって暑いよ、あんまりくっつくな」

光璃は九十郎と腕を組み、肩をぴったりくっつけて歩いていった。

非常に目立つ美男美女……もとい美女と野獣カップルが歩く姿に、通行人が次々と振り返る。

「今日だけは光璃と九十郎はカップルだから」

「こんなクソ暑い日に腕組んで歩くななんてカップルだってやらねえよ」

そうは言いながらも、九十郎は光璃を振りほどかなかった。そんな九十郎の性格が、光璃には好ましく思えた。

九十郎は道端で携帯電話を取り出し、エアコンの修理をしているであろう輝に連絡をする。

しばしの間、何やら話をして……

「まだ終わってない、と……おい光璃、

練兵館のエアコンがハッキングされてたって言ってたが、何か心当たり無いか？」

「ハッキング……？」

光璃が首を傾げる、しばし考え……首を横に振った。

「最近のエアコンって、センサー付きが主流だろ。

平良賀曰く、センサーで得たデータが学園の外に送信されてたらしい。

その時にプログラムに一部バグができて、エアコンが動かなくなってたってよ。

全く、どこの誰だそんなアホな真似したのは……」

九十郎がぶつくさ文句を言いながら、別の暇つぶしを考える。

考えるが……このクソ暑い中では良い考えはまるで浮かばない。

「光璃、どっか行きたい所あるか？」

九十郎は早々と考えるのをやめ、光璃に決断を丸投げする。

この男は昔から、難しい事は光璃か担庵のどつちかに丸投げする癖がある。

「映画館」

「映画館……ああ、そういうえばギャラクシーラインSOS、まだ見てなかったよな。

よししよう、行こうぜ光璃」

九十郎はいつものように光璃の手を引き、歩き出そうとした。

そんな九十郎を、光璃が手を引いて止めた。

「どうした？」

「今日は……今日は恋愛映画が良い」

光璃がそう告げた。

心臓がどきどきと鳴っていた。

今日は一日中、九十郎にはドキドキさせられっぱなしだ。

「恋愛映画？」

珍しい事もあるもんだ、光璃はそういうのに興味が無いと思っていたんだがな」

「今日一日は、光璃と九十郎はカップルだから……駄目？」

不安そうな眼差しを九十郎に向けた。

九十郎はなんやかんやで光璃に甘い、こうやってお願いをされたら、なんやかんやで了承してしまう。

「俺は恋愛映画なんて見た事が無いぞ、どれが良い映画かなんて分らんぞ」

「九十郎と一緒に見たい。九十郎と一緒に、映画館に行つて、同じ映画が見たい。」

それが大事な事だから……」

「クソ映画を見る羽目になつても泣くなよ」

「その時は2人で泣こう」

「ははは、俺も巻き添えかよ……まあ良いや、光璃と一緒になら悪くない」

そして2人が映画館に向かい歩き始める。

1人は微妙に面倒臭そうに、もう1人は幸せそうに、腕を組んで男の肩に寄りかかりながら……

「大好き、九十郎」

光璃がそう呟いた。

独り言のように……しかし、隣を歩く九十郎の耳にはしっかりと届いていた。

九十郎はまだカップルの演技を続けるのか……と、面倒臭そうに頭を掻き。

「愛してるぜ、光璃」

少女の耳元でそう囁いた。

犬子と柘榴と九十郎第49話 『信虎襲来』

九十郎と結ばれたい、愛されたいという気持ちを確かめ、犬子が決意を新たにしたら、しばし時間が過ぎた……

表面上は穏やかな毎日が過ぎた。

鬼との戦いで手痛い損害を出してしまった武田が比較的大人しかったせいも、小さな小競り合いはあったものの、長尾と同格の大大名との正面衝突は一度も無かった。

だがしかし、決意だけで状況が好転するのであれば誰も苦勞はしない。

今まですつと戦ってばかりだった美空も、柘榴も、もちろん犬子も男女の機微には疎く、誰も良いアイディアを出せず、ただただ時間だけが過ぎていた。

そんなある日の事、柘榴が城主を務める城・柿崎城の一室にて、犬子が無言で、黙々と帳簿の整理をしていた。

九十郎とどう接するのか、どうやって自分に振り向いてもらうのか……考えても考えても良い考えが浮かばずに、視線と意識を逸らすかのように仕事をしていた。

「犬子、追加の資料持ってきたすよ」

柘榴が山のように膨大な量の紙束を抱えて来た。

領内のあちこちからかき集めてきた、柿崎家の収支に関する書類の束だ。

もつとも、収入も支出もいまままでフイーリングでやってたり、村長や代官に丸投げしたりしていた部分が多々あるので、書類毎に書かれている内容や体裁がまるで違う。

それどころか、そもそも報告書や帳簿の類を一切作っていない部署すらあった。

だからこそ、柿崎家の収支や資産状況を正しく把握し、複式簿記の形式に書き直す作業は途方も無く面倒で、途方も無く手間がかかり、途方も無く大変な作業であった。

だからこそ犬子は、その途方も無く大変な作業に没頭する事で、一時だけとはいえ九十郎の事を忘れる事ができた。

「少し休まないよ、そのうち倒れちまうっすよ」

「大丈夫です」

心配そうに見つめてくる柘榴に見向きもせず、犬子は作業を続けている。

「全然大丈夫っぽく見えないっす。上司として、無茶してる部下を放置はできねえっすよ」

犬子は少しだけ手を止め、少しだけ目を閉じ……

「お願いします、もう少しだけ……もう少しだけ続けさせてください。

横になって目を閉じると、色々考えちゃうんです。

犬子が……犬子はずっと、九十郎に守られていただけだって、

九十郎に何も返せていないって」

犬子は九十郎に捨てられ、別れを告げられる光景を思い浮かべてしまった。

ここ最近、仕事の手を止めると犬子はそうなってしまう。

「柘榴も、御大将も、犬子がどれだけ頑張つて、どれだけ優しくして、

どれだけ頼れるのか、ちゃんと知ってるっすよ」

「でも……」

「でもじゃねえっす、犬子は凄いい奴っす、それは柘榴が保証するっす」

「九十郎は、強くて、格好良くて、いつも犬子を助けに来てくれて……」

「顔は良くないっすけどね」

「それは……まあ、そうかもですけど」

九十郎が聞いたら拗ねて不貞寝しそうな台詞である、事実だが。

会話が途切れ、犬子は帳簿整理の仕事に戻る。

黙々と、黙々と、ただひたすらに九十郎から習った複式簿記の知識を総動員し、帳簿

や報告書の数字を整理して書き取っていく。

仕事をしている時だけは、九十郎に捨てられる恐怖を忘れられるから……

なお、もしこの場に斎藤九十郎を知り尽くしている少女、武田光璃がいたとすれば、このようなコメントをするだろう。

『最適解はダメ人間になる事。

斎藤九十郎は放置したら拙そうなダメ人間を見ると世話をしたくなるタイプ。

それはそう、ニートになった息子のために食事やジャンプを持つてくる母親のよう
な』

あんな筋肉質な剣術バカが根つこのところでオカンタイプだと気付けたのは、世界広しと言えど武田光璃ただ一人である。

……

……

……

犬子が陰鬱な気分で行事をしてる頃……九十郎も九十郎でとても健全とは言えない思考に支配されながら竹刀を振っていた。

いつものように美空や松葉に剣を教え、空に歴史上の偉人（アカい思想込み）の逸話を教え、愛菜や新戸を適当に追い払い、貞子を相手におビール様と弟子入りをめぐる賭け試合を行い……

「……面」

パンツ！ と乾いた音が響き、九十郎が振るう竹刀が吸い込まれるかのように貞子の防具を叩いた。

力任せに叩き斬るようないつもの剣戟ではなく、最小限の力で、撫でるかのようについていた。

九十郎らしくない剣の振り方で、それ故に貞子は対応が僅かに遅れてしまったのだ。

「これで4勝6敗……私の負けですね」

犬子と九十郎が越後に来てから、数十回はした賭け試合……貞子が負けたのは今日が初めての事だ。

「ああ、そうだな……」

普段の九十郎なら、ヒヤツハー勝ったぜえ！ これで神道無念流は安泰だあー！ とかなんとか叫びながら小躍りして喜ぶところだが……今日の九十郎は、神道無念流を考える余裕すらない精神状態だった。

「つまらない人になりましたね」

貞子がどこか寂し気にそう呟いた。

「そうか、つまらないか……いや、当然かな。俺は元々、取るに足らない男だからな

……」

そう言って九十郎が自晒する。

自分のような屑は秋月八雲のような、あるいは新田劍丞のような輝かしい男にはなれないと、九十郎は思っていた。

「ちよつと前に、またしましようねって言った事覚えてますか？」

「……ん？ ああ、そういえばあつたな」

「あれ、冗談でも社交辞令でもなかったんですよ。それなのに全然誘ってくれませんし。」

「ずつとずう〜つと待っていたんですよ、私は」

「色々忙しかったんだよ、鉄砲作ったり反射焔作ったり京に行つてたり」

「それに最近は剣を交えても全然面白くありません。全然胸が躍りません」

「そう……か……」

それは九十郎にとつても同じ事だった。

いつもの九十郎なら、神道無念流をやっている間はどんな悩みも忘れられた。

ただの剣術馬鹿になって、ゲラゲラ笑いながら竹刀を振れた。

相手の長所を潰し短所を責める、武田信玄直伝のゲス戦法が次から次へと思いついた。

だが今は……犬子の悲しそうな眼がチラついて、思考がまるで定まらなかつた。

ゲス殺法が思い浮かばず、気の遠くなるような反復練習によつて培つてきた基礎的、基本的な技に頼らざるを得なかつた。

それ故に今日、貞子に勝つた……九十郎は光璃程頭の回転が早くないので、『悪行超人

として残虐ファイト全開で行くぜーっ!』とかやっていると、かえって勝利が遠のく場合が時々あるのだ。

「どうすれば良いと思う?」

「ヒヤッハーとか、げっへっへっへっとか、

馬鹿みたいに笑いながら剣を振ってみたらいかがです?

今みたいに暗あゝい顔で情性みたいに剣を振っている貴方に比べれば、

万倍魅力的になりますよ」

少なくとも、新田劍丞とエンカウントする前の九十郎は輝いていた。

顔はブ男そのものであったが、その瞳をキラキラと輝かせながら神道無念流をしていった。

剣を振るうのが楽しくて仕方が無いという顔をしていた。

だから貞子は弟子入りを賭けて試合をして、一緒におビール様を飲んだ。

弟子入りするのも、抱かれるのも吝かではない、まんざらでもないと思った。

それどころか、九十郎の事を考える度に心臓がドキドキと跳ねていた。

だけども今は……九十郎の輝きが見る影も無い程にくすんで見えた。

胸が跳ねず、踊りもしなかった。

「弟子入りはします……約束でしたから。でも、またシマしようと言ったのは撤回し

ます。

今の九十郎殿は面白味がありませんから」

「そーなの、最近の九十郎はなんか暗いの」

道場の隅に座っていたピンク髪の少女が貞子の発言に追従する。

貞子の視線が少女の方に向き……九十郎に向き直る。

「九十郎殿、さつきから気になっていたので、どなたですかこの方は？」

「戦国蹴鞠ーガー」

「誰ですかそれ？」

その表現で目の前のピンクヘアーが今川氏真だと分かるのは現代人だけである。

「初めましてなの、今川鞠氏真なの。小島貞興殿の勇名はかねがね伺っているの」

そう言いながら、鞠がぺこりと頭を下げ、貞子も釣られて頭を下げる。

「ああ、これはご丁寧に。」

今川氏真殿ですか、まるで今川の現当主のようなお名ま……え……で……」

頭を90度下げた状態で貞子が硬直する。

まるで石化したかのように数秒……いや、十数秒も固まって、九十郎に視線を向ける。

「九十郎殿、よもやとは思いますが、この方今川の現当主殿で？」

「さつきも言ったろ、戦国蹴鞠ーガーだって。」

その表現で目の前のピンクヘアーが今川氏真だと分かるのは現代人だけである。

もつとも今回は、貞子は話の流れで今川の現当主だと当たりをつけた。

「何故今川の当主殿がこんな所に!？」

「こんな所とは何だ、練兵館ナメんなよコンニャロウ」

「駿河にいるべきでしょうに」

「いや、今なんか駿河で凄え面倒臭くてややこしい事が起きてる見てえでさ。」

解決のメドが立つまで預かっててくれって泰能さんって人から頼まれたらしいぞ」

「駿河に居るとかえって足手まといになるって言われたの……」

鞠は悲しみを背負い、目からハイライトが消え失せていた。

今なら無想転生すら使えそうである。

「あの……九十郎殿、大丈夫なんですか今川は？」

一家の頭首を2度も3度も他国に身柄を預けるなんて尋常な事ではありませんよ。

いくら美空様が騙して悪いがを使えない人だからって……」

貞子がひそひそ声で九十郎に尋ねる。

「詳しい事は知らんが、何人か粛清しなきゃならん段階まで来てるんだとさ。」

血生臭い所を見せたくないのと、万一失敗して逆襲されたとしても、

鞠だけは生き残ってれば再起が図れるって」

「承継問題つて大変ですね、特に先代が急死した時は」

「全くだな……後で美空に早く跡継ぎを指名しろつて言っておこうぜ」

「そうしましょう、明日は我が身なんて冗談じゃありません」

貞子と九十郎がそんな密談をしていると……

「たのもうっ!!」

……と、威勢の良い声が3人の元に届いた。

「来客のようですよ、九十郎殿」

「そのようだな。しかし誰だ? 聞いた事が無い声だが……」

「あれ……今の声……?」

「まあ誰でも良いか、俺が出てくる」

九十郎がのそのそと面倒臭そうに玄関に向かい、訪ねて来た人物を中に入れて戻り

……

「信虎おばさん!」

「む? お前は確か……義元の娘か」

武田信虎と今川氏真が、思わぬ再開に目を丸くした。

「今川殿、知っているのですか?」

「この人、武田信虎さんの。」

大分前に甲斐で、その……色々あつて、今川で預かる事になつてたの。

お母さんが討ち取られた少し後に行方が分からなくなつて……心配してたの」

「武田信虎……こいつが信玄ママン……？」

なお、九十郎にとつて信虎とは、若い頃の武田信玄に欺かれて追い出された間抜けである。

九十郎は信虎に土下座して謝るべきである、今すぐ、この場で。

「何が預かるだ、何が心配だ。その実態は軟禁以外の何物でもなからう。

急激に勢力を伸ばす武田晴信に対する人質としてな」

なお、光璃は信虎が煮殺されると聞いたら、満面の笑みを浮かべながら『よく茹で上がったならば、その煮汁を私にも一杯分けてくれ』とか何とか言い出しそうな雰囲気だったので、義元は死ぬまで信虎を人質として使えなかつた。

「鞠はそんな事……人質だなんて考えていないの」

「はんつ、貴様はそれでも周りはどう思つていたか……だから逃げさせて貰つた。

あの糞生意気な小娘の素っ首叩き落とすまで死ぬに死ねん」

「ははは、信玄……じゃねえや、晴信の奴思いつきり恨まれてるじゃねえか。

ちようどこつちも晴信をブチ殺す算段を建てようとしていた所だ。

「案外協力関係が結べるかもな、俺達は」

なお、九十郎はこの期に及んで全く気付く気配が無いが、この男のファースト幼馴染は武田晴信である。

「それにしても今川の小娘、何故貴様までここに居る？」

とうとう泰能に愛想を尽かされて追い出されたか？」

「……聞かないでほしいの」

鞠は再び悲しみを背負った。

「まあ、聞いてはみたがそれ程興味も沸かんな……」

それよりもだ、九十郎とかいう男は貴様だな？」

「ああそうだ、俺が九十郎……最近斎藤九十郎になった九十郎だよ」

「ドライゼ銃とやらを我に見せろ」

「あん？」

美空や柘榴が必至こいて秘匿している筈のドライゼ銃の名前を出され、九十郎の表情が変わる。

「どらいぜ……？」

「の、信虎おばさん？」

ドライゼ銃の情報が無い貞子と鞠は、何の話か分かりかねている様子だ。

「どこで知った？」

「吉野の御方より聞いた、アレは手こずると」

「誰だそいつは」

「屑尾城に鬼を呼び込んだ元凶だ。」

我が今川の監視から逃れる手助けをし、こいつを渡してきた者でもある」

そう告げながら、信虎は懐中より黒い奇妙な丸薬を取り出して見せた。

「それは……」

「人を鬼に変える丸薬……と聞いている。」

「これは特別製でな、鬼と化してもその者の人格は残るらしい」

「もう少し詳しい話を聞こうか」

「ドライゼ銃を我に見せろ、話はそれからだ」

「断つたらどうする?」

「今ここで鬼となり、貴様らを皆殺しにする」

九十郎と信虎が睨み合う。

一触即発の雰囲気の中で、貞子と鞠が静かに刀に手を伸ばす。

九十郎は信虎に秘匿技術であるドライゼ銃を見せるべきか、それとも秘密がバレる危険を覚悟の上で、鬼についての情報を得るべきかと考え……

「……良いだろう、見せてやる」

九十郎はそう答えた。

……

……

……

美空との約束を華麗にブッチした九十郎によるドライゼ銃実演会が終わり、鞠と信虎が震えていた。

「駄目……駄目なのこんな……こんな物を使ったら、人が沢山死んじゃうの……

大勢死んで、何も残らないの……」

鞠は恐怖に青ざめ、震えていた。

鞠はかつて、義元から鉄砲の有用性を教えられていた。

数はそう多くは無いが、鉄砲を撃ち、人を殺した時もあった。

鞠はかつて、塚原卜伝に新当流の剣術を学んだ。

戦場に出た事もあり、人を斬った事もある。

だから分かった、だから気づいた、今日の前にある武器が……ドライゼ銃がどれ程危険な代物なのかを。

「……これがドライゼだと……これは、なんという……」

一方、信虎は……

「……なんと素晴らしいっ!!」

一方信虎は歓喜に震えていた。

あるいはそれは信虎の初恋なのかもしれない。

一瞬にしてその咆哮の虜になり、視線が釘付けになってしまった。

吉野だか何だか言う優男に鬼の暴威を見せられた時も感動したし、その力を我が物にしたいと望んでいたが、今信虎を包み込む歓喜と感動はその2倍……いや、10倍を軽く超えていた。

絶頂し、股座を濡らさんばかりに感動していた。

「これさえ手に入れられれば、あの生意気な小娘を殺すのも容易い。

今度という今度こそ、我は何者にも屈さぬ力が、

何者にも奪われぬ力が手に入る……今度こそ……

ああ、コレさえあれば鬼の力になど未練は無い、あの狂人に力を貸す理由も無くなる」
「駄目……そんなの駄目なの！」

戦争にあんな物を使うようになったら、どれだけ酷い事になるか分からないの！」

引き金を引けば、遠くで人が死ぬ……簡単に、いとも容易く、良心の呵責を感じるまでもなく人が死ぬ。

人が人を殺すのを躊躇しなくなってしまう。だからこそ鞠は、ドライゼ銃を肯定する

気になれなかった。

「……ふざけんな」

その言葉に、信虎ではなく九十郎が反応した。

「え？」

「ふざけるなど言ったんだ、今川氏真。

こっちは命賭けてるんだ、俺だけの命じゃねえぞ、犬子と柘榴と美空、

貞子と紗綾と空、その他大勢の命が懸かってんだ。

まあ正直その他大勢の命は正直どうでも良いし興味もねえが、

俺が死んでほしくねえって心の底から願ってる連中の命が懸かってるんだ」

その他大勢をどうでも良いと切り捨てる、地味に最低な男である。

だから貴様は九十郎なのだ。

「でも……」

「死因・縛りプレイなんてまっぴら御免だ。俺は使う、使えそうな物はなんだって使

う」

「人が大勢死ぬの」

「その代わり、俺が守りたい人は生き残る」

「いつまでも隠してなんていられないの、きつと誰かが真似をして、

「この鉄砲で撃ち合う日がくるの！」

「その時はもつと強力な武器を作る」

「キリが無いの!!」

「ああそうだ、キリが無い。

血を吐きながら続ける悲しいマラソンだつてどこかの恒星観測員が言っていた。

それでもやるんだ、キリが無かるうが悲しかろうが、生きている限り、

死んでほしくない人が居る限り、いつまでもどこまでも続けるんだ」

「そんなの……そんなの、死ぬ人が増えるだけなの……」

「そんなの悲しすぎるの……」

「ならお前一人だけ石と棍棒で戦つてろ、その立派なダンピラを捨てて、

新当流の技も捨てて、御家流とかいうのも捨てて」

そう言い捨て、九十郎は鞠から背を向ける。

普段の九十郎なら、言いたい事を散々言い尽くしておしまいである。

しかし今日は……

「あるいは……あるいは鞠の方が正しいのかもしれない。

あるいは新田劍丞や秋月の言うような甘っちょろい事の方が正しいのかもしれない

……」

九十郎は思い出す。

秋月八雲と徳川吉音がまっすぐに自分を見つめながら、情報操作なんて間違つてるとか、学生が学生を公開処刑するなんて何を考へてるんだとか、そういった甘つちよろい事を言つてきた時の事を思い出す。

あの時、負けたのは九十郎の方だった。

あの時、間違つていたのは九十郎の方だった。

あの時使つた非常に卑劣な手段は、結局何一つ上手くいかずに終わってしまった。

だから思うのだ、もしかしたら今回も自分の方が間違つていないかと。

「だが俺は止まらない、今更止まるわけにもいかん。

美空と共に最後の最後まで突つ走る覚悟だ。

それが気に入らんと言うのなら……止めてみる、力づくで。

秋月と吉音のように、殴り込みでもかけて来い」

「な、殴り込み……」

「九十郎殿、それなりに友好的な関係を築けている今川の当主殿に、

よりにもよつて殴り込みをかけて来いと言うのは如何なものかと思ひますよ」

今まで沈黙を保つていた貞子が口を挟む。

パチン、パチン、と腰に佩く打刀の鯉口を何度も何度も鳴らしながら。

鯉口を鳴らす仕草は、彼女の機嫌が良い時に見せる癖のようなものである。

事実、貞子の口元は笑っていた。

貞子の目には暗あゝい顔で竹刀を振っていた時より、何倍も、何十倍も九十郎が輝いて見えた。

「まあ、今日から弟子入りつて事もありませんし。

本当に殴り込みに来たら守つてあげますよ、九十郎殿」

「さつき俺に負けた癖に偉そうな事を言うな。

その時は、神道無念流には天敵などおらぬことを教えてやるさ」

貞子と九十郎がにたあゝつと笑う。

訳が分からない状況であるが、訳がわからないまま、なんだか楽しくなってきたのだ。

「鞆は……」

鞆がどうしたものかと考えあぐねていると、今度は信虎が沈黙を破る。

「ドライゼ銃をよこせ」

「コレ作るの苦労したんだぜ、タダじゃやれないね。

どうしても欲しいのなら何かしらの対価を示せ」

「吉野の御方について知っている事を全て、それと武田の軍法ではどうだ？」

「乗った」

九十郎はノータイムで信虎の交換条件を呑んだ。

実際の所、遅かれ早かれ美空は武田晴信と戦う羽目になるのだ、九十郎には軍法だの兵法だのといったまだるっこしい事は分からないが、それでも、武田の軍法を……武田の手の内をしる者が居れば、助けになると思っていた。

なお、後日美空に勝手に決めるなど小一時間説教される事になるが、自業自得である。「の、信虎おばさん！ 駄目なの、あれは危険すぎるの！」

「危険だからこそ良いのではないか。危険だからこそ、アレを殺せるのではないか。

それにお前……こんな所で呑気に危険だの何だの言っていて良いのか？」

「ど、どういう意味なの？」

まるで日常会話のような、何気ない呟きだった。

普通だったら聞き逃してしまうような気安い言葉に……何故か鞠は嫌な予感をした。「こちらに来る前に少し小耳に挟んだのだが。」

吉野の御方は、やはり鬼の生産地は必要だと考えているようだな。

その第一候補が、義元の死の影響で隙が多い……駿河だったぞ」

信虎の言葉は、鞠に衝撃を与えるのに十分なものであった。

突発ネタ 朱里と鈴々と九十郎

昔々あるところに、たいそう仲の良い夫婦がいました。

「夫婦じゃねーよ、腐れ縁だよ。張翼徳と夫婦とかどんな罰ゲームだ」

訂正……昔々あるところに、たいそう仲が良い男女がいました。

女の子の性は張、名は飛、字は翼徳、真名は鈴々といいました。

男の性は斎藤、名は九十郎といいました。

九十郎はブ男で無駄にマツチヨで基本層で、しかも基本神道無念流だけやっていれば幸せな剣術馬鹿でしたが、本当に困っている人は決して見捨てない好漢として、ご近所さんからは慕われていました。

鈴々もそんな九十郎を気に入り、慕っている者の一人でした。

ある日の事、九十郎は生地を離れ、荊州に移住しました。

「劉表のお膝元なら、曹孟徳が出張ってくるまで比較的安全な筈。

長坂やら荊州争奪戦やらに巻き込まれるのは御免だが、

適当な時期に魏のどっかに移住すれば、

乱世に巻き込まれずに思う存分神道無念流ができるぜ、げっへっへっへっへっへ」

とか何とか言いながら、荊州の某所……司馬徽先生の私塾のはす向かいに神道無念流の道場『練兵館』を建てました。

わざわざ司馬徽先生の私塾を探し出し、ご近所に道場を建てたのは、このご時世にクソ真面目に勉強に励んでいる意識高い系を引っ張り込むためです。

九十郎は乱れた世の中をどうこうする気が全く無い屑でした。

最初は司馬徽先生の私塾に通う文系の人達からたいそう気色悪がりましたが、九十郎を追ってやって来た鈴々がたいそう強く、義も情も知る人であった事、私塾の生徒達が暴漢に絡まれた時……

「合法的に神道無念流が振るえるチャンスだぜヒヤッハア!!」

……とか何とか言いながら駆けつけて暴漢達を蹴散らした事もあり、私塾の生徒達からの警戒も薄れ、日を追う毎に練兵館に弟子が増えていきました。

練兵館はまさに順風満帆でした。

中央は汚職と腐敗に塗れ、地方では黄巾党を名乗る暴徒が現れるようになって、九十郎は我関せずと神道無念流をやり続けていました。

そんなある日の事……

「おい翼徳、関羽はどうした？」

「関羽って誰なのだ？」

……九十郎は頭を抱えました。

九十郎は歴史を変えまいと思っていたのに、自分のうっかりが原因で、歴史をガッツリ変えてしまいそうになっている事に気づいたのです。

「おいやべえよ、

もうすぐ黄巾の乱が始まりそうなのに張翼徳が関雲長と義兄弟になってねえよ。

というか面識すらねえよ。

どうするんだよ、翼徳がいなかったら玄徳が死ぬんじゃないのか、

そうだったら誰が蜀を獲って三国鼎立させるなんて身体を張ったギャグをやるんだよ」

そして九十郎は決意しました。

今からでも遅くはない、劉玄徳が旗揚げする前に張翼徳と関雲長を義兄弟にするんだと。

そして心置きなく神道無念流ができる環境を守るのだと。

九十郎は歴史の流れよりも神道無念流を続ける事を優先させる層でした。

「翼徳、旅に出るぞ、草の根を分けてでも関雲長を探すんだ」

「そんな人を探してどうする気なのだ？」

「お前と義兄弟になってもらう」

「ええ!? いくらお兄ちゃんの頼みでも、

そんな顔も名前も知らない人と義兄弟になるなんて嫌なのだ!」

「大丈夫だ、会えばきつと気に入る筈だ!

たぶんきつとおそらくメイビー気に入る筈だ!

というか気に入ってくれないとぶっちゃけ困る!!」

九十郎は嫌がる鈴々を無理矢理連れ出し、関羽探しの旅に出ました。

しかし、2人の旅は困難を極めました。

2人とも後先を考えたり、人の考えを読むのが苦手なタイプで、情報収集とかいう頭を使う作業ができませんでした。

関羽の情報はまるで集まらず、2人は大陸を当てもなく彷徨うばかりでした。

そんな2人の前に、素晴らしい助っ人が現れました。

「孔明、何故ここに居る?」

「追いかけてきました」

助っ人の性は諸葛、名は亮、字は孔明、真名を朱里といたしました。

司馬徽先生の私塾でも一二を争う優秀な生徒でした。

「いや、なんでだよ」

「昔危ないところを助けて頂いたご恩返しがまだできていませんので。」

それに……世が乱れ、人々が苦しんでいるというのに、

私だけ安全な場所であぐらしていているなんて嫌なんです」

「おいやめろ、お前が荊州から離れたら玄徳が死ぬだろ！ そうなったら一体誰が、

統率3武力5知力9政治4の屑を支えながら北伐する罰ゲームをするんだ!？」

屑はむしろ九十郎の方でしたが、とにかく必死こいて朱里を荊州に帰らせようと説得しました。

しかし、何度説得をしても朱里は首を縦に振りません。

「最近治安が悪い……」

ここから孔明1人で荊州に帰らせたら、途中で変なのに襲われかねんか。

翼徳は1日でも早く関雲長や劉玄徳に引き合わせなければ拙いが、

諸葛孔明が玄徳に必要なのはまだまだ先だし……

仕方ねえ、今は関雲長を探すのを優先させるか」

九十郎は仕方なく、断腸の思いで朱里の同行を認めました。

そして3人の旅が始まりました……朱里と鈴々と九十郎の長い長い旅路が始まったのです。

「雲長おおおおお……！ 頼むううううう……!!」

翼徳の義兄弟になってくれえええええ……!!

300円あげるからあああああ〜〜!!」

朱里と鈴々が蜀の滅亡という歴史に挑む長い戦いが……そして九十郎が北郷一刀という名の男に……主人公に挑む長い長い戦いが始まったのです。

「翼徳……孔明……頼む、俺に力を貸してくれ。」

あいつが秋月八雲じゃない事は分かっている。

あいつに勝つても秋月八雲に勝った事にならない事も分かっている。

俺が無様に失恋した過去が無かった事にならない事も分かっている。

だけど……俺はあいつに勝ちたいんだ。

北郷一刀に勝つて、曹孟徳にも勝つて、ついでに孫仲謀にも勝つて、

劉玄徳が天下を取るなんていうギャグみたいな世界を現実のものにしたい。

俺は……俺は……」

朱里と鈴々と九十郎の物語が始まったのです。

「翼徳、孔明、俺は胸を張ってお前達の真名を呼べる男になりたいんだ」

犬子と柘榴と九十郎第50話『腹ペコ忍者、段蔵ちゃん』

「くくく……はははは……」

駿河の国、かつて今川義元が治めた地で、一人の色白の男が不気味な笑みを浮かべていた。

全身に夥しい量の瘴気を帯び、この地に住まう人々を鬼に……鬼の紛い物に変貌させていた。

「信虎め……物の道理を解さぬ俗物が、力だけを求める野獣めが……」

この男は、信虎が吉野の御方と呼ぶ人物だ。

信虎に鬼の力を与えると告げ、己の手先として……ついこの間、より強き力を求める信虎に見限られた男である。

その吉野の御方が、今創り出している鬼によつて信虎を八つ裂きにする事を考えていた。

可愛さ余つて憎さ百倍という訳ではないが、一度頭を垂れながら裏切つた信虎に対し、吉野は並々ならぬ憎悪を滾らせていた。

「ソノ能力ハ二度ト使ウナ、オレハソウ言ツタハズダ」

そしてそこに紅い髪の毛が音も無く現れた。

「貴様は……おお、余の生き字引ではないか」

鬼の姿を見て、吉野はニヤア〜と笑う。

吉野は知っている、会った事があり、話した事もあるのだ、目の前の紅い髪の毛を。

「久しいな……尊治」

紅い髪の毛の姿が変わる。

すらつとした長身、貧相な胸、骨と皮だけのガリガリに痩せた体躯、白い髪……井伊

直政・通称新戸へと姿が変わる。

「その能力で創造できるものは、鬼ではない、オレのような鬼子ですらない。

お前が想像する鬼でしかない、鬼の力だけを真似た、紛い物しか生み出せない。

言うなれば……そう、屍食鬼」

「ああそうだ、コレで生み出せるものは生き字引が言う『本物の鬼』ではない。

その代わり、余が想う正しき民を作り出せる、本物の鬼よりも正しき存在をな」

「鬼を何だと思っている。

鬼はお前のコンプレックスを慰めるために生まれたのではない。

新田劍丞と戦国武将達の絆を深めるための都合の良い障害物でもない。

鬼はただ在るだけだ、鬼に何かを求めてはいけない、鬼を理由に何かをしてもいけな

い」

「鬼は余に利用されるために生まれてきた、余が利用するために生み出すものだ」
「……オレが比較的温厚な鬼子で良かったな。」

蘭丸が聞いたら何をされるか分からない……

いや、たぶん枯れ死ぬまで十二をされるんだろうが、とにかく酷い目に遭わされてたぞ」

天国に導かれるかのような顔で、キツチリあの世に送られるというのは、新戸にとつてかなり巨大なトラウマを刻まれる光景である。

「何がしたい、尊治」

新戸はその質問に対する答えを知っていた。

無数に存在する並行世界の別の虎松達から、吉野が何を考え、何をしたかを聞かされていた。

だがそれでも、あえて新戸は尋ねた。

何かの間違いでも、嘘偽りでも、別の吉野達とは別の答えを言うのではないかと……
そう願わざるを得なかった。

「世を正しき姿に戻す」

「その能力を使ってか？」

新戸が見る先には、瘴氣に包まれ、鬼を模した怪生物に変貌させられている人々がいた。

何の罪も無い、普通にこの時代を生きていただけの人々がいた。

「そうだ、この力で余の愛すべき民を取り戻すのだ、正しき民の姿へとな」

吉野の言葉は、新戸が予想した通りのものであった。

予想した通りのものであったが、それ故に新戸は深く深く落胆した。

「ならば……お前がその下らないお遊び、自慰を続けるならば、

オレはもうお前の力にはなれない。それを伝えに来た」

だから新戸がそう告げた。

「なんだと？」

瞬間、吉野の顔が歪んだ。

殺意と憎悪と狂気に満ちた表情に……狂人の顔になった。

「お前に能力の使い方を教えるべきじゃなかった。

お前の世の中への恨みと失望を軽く見た、オレが間違이었다よ」

「何を言うか！ 何を言うか！ これは天命！ これは天啓！ これは天祐！

山猿共に満ち溢れた世を正せと！ 正しき天下の姿を取り戻せという天の声だ！」

「違う！ それはお前の才能だ！ お前は優れた超能力者だった！

ただそれだけの話だ！」

「違わぬ！ 何も違わぬ！ 余にしかできぬ事だ！」

「オレはそんな事をさせたくて能力を引き出したんじゃない!!」

吉野と新戸が無言で睨み合う。

片方は狂気に満ちた顔で、片方はどこか悲しそうに……

「考え直せ尊治、今からでも遅くない。このままじゃお前は殺されるぞ。

お前がその才能を人の為に、人類の為に使うのであればオレは喜んでお前の力になる、

いくらでも知恵を貸す、助言もする。

オレは今でもお前が好きなんだ、屑郎の次にだが」

「余が誰に殺されると？」

「小夜叉に斬られ、お前は死ぬ」

「誰だそれは？」

「森小夜叉長可、お前にとって取るに足らない、炬端の石にも等しい小娘に斬られる。

オレはお前が惨たらしく殺されるのを見たくはない。

だからオレは……オレ達は、本当はもつと後になって目覚めるつもりだった」

「ならばその小娘、余が直々に引き裂いてやろう」

「やめとけ……アレは……」

新戸が何かを……他の世界の虎松が死の間際に送ってきた、とてもとても恐ろしい何かを思い浮かべ、震えた。

小夜叉の暴虐と蘭丸の淫靡が合わさったスベリオルドラゴン、あるいはゴジータ的存在……そしてさらに恐ろしい事にそれは、新田劍丞に全てを捧げるという狂気の盲愛に囚われ、日ノ元の全て……いや、世界の全てを飲み干そうとする恐るべき怪物に成り果てていた。

その世界の虎松や吉野をも含め、誰にも手がつけられなくなった怪物の姿を思い浮かべ、新戸は背筋を凍らせた。

「……アレはお前の手に負える存在じゃないぞ」

新戸は掌をぐっしりと濡らす汗を隠しながら、それだけ告げる。

全てを伝える事が、必ずしも状況を好転させるとは限らないと知っているから。

他の誰でもない、目の前にいる狂気的能力者によって学んだから。

「オレは屑郎に教えてもらった、お前にも教えてもらった。」

世の中は捨てたものじゃないと、世の中には面白くて楽しいものが沢山あると。

そして……人は鬼よりもずっと強く、ずっと残忍で、ずっと怖くて恐ろしいものだ。

血を吐きながら続ける悲しいマラソンこそが人の本質であり、

人は血を吐きながら悲しいマラソンを続けるが故に、美しいのだと」

「訳の分らぬ事を、世迷い事を……」

吉野と新戸が、しばし無言のまま睨み合う。

吉野の周囲に瘴気が満ちる……空気が淀み、水が濁り、醜い鬼が次から次へと起き上がる。

「その力をオレに向ける気か、尊治？」

「余の生き字引よ、お前の力は余の役に立つ。今ならば引き返せるぞ」

「断る」

「ならば……」

鬼達が俄かに殺気立つ。

腕を振り上げ、牙と爪を光らせ、新戸に突き付ける……

「ああ、そうか、やっぱりこの世界でもこうなるか……」

残念だよ尊治、オレは本当に本当にお前が好きだったのに……

お前が下らない自己満足を言い出しさえしなければ、

オレは本当にお前の力になりたいのに……」

「下らない、自己満足か……残念だ、世の生き字引よ。」

貴様程の女をわが手で引き裂かねばならぬとはな……」

一触即発の空気が流れる……そして……

「屑ウウウウウウウーっ!!!」

鬼達が襲い掛かる寸前になって、新戸が唐突にそう叫びんだ。

「すまん尊治、急用ができた、この話はまた今度だ」

それだけ言い残すと吉野を放置して駆け出した。

……

……

……

「と言う訳で、世界の果てまで……行ってQ!!」

「やって来ました駿河まで!」

馬鹿2名……もとい、貞子と九十郎駿河に立つ。

片や空の護衛という任務をすっぽかし、

片やドライゼ銃量産に必要な反射炉建設の任務を投げ出し、

鞆を駿河まで送り届けに来たのである。

「いやあ流石は義元公のお膝元、賑わっていますねえ、九十郎殿」

「空に土産買って帰ろうぜ」

「良いお酒が見つかるの良いんですが」

「ははは、空が美空みたいな呑兵衛になったらどうする気だ。

もつと別の物を探すぞ。木刀とかどうだ？

柄に何の意味も無く『洞爺湖』って刻んでもらおうぜ」

この男は完全に修学旅行気分であった。

キヨロキヨロと周囲を見回しながら、貞子はその瞳を輝かせ、パチン！ パチン！と何度も何度も刀を抜き差しする。

見た目は辻斬りの対象を物色する危険人物である。

しかし何故かTHE・危険人物な貞子を注視する者も、バッファローマンのような体格の九十郎を注視するも、駿河を治める領主である鞠を注視する者もない。

誰もかれもがいつも通り、生活をしていた……気味が悪いくらいにいつも通りに暮らしていた。

「2人とも、もつと緊張感を持ってほしいの……」

鞠がげんなりとした表情でため息をつく。

駿河を鬼の根拠地にするなんて話を聞き、泰能から渡されたお小遣いを残らず貞子と九十郎に差し出し、今日まで必死になって走り続けた……が、駿河はこれでもかかってくらしい平和だった。

「信虎おばさん、この間教えてもらったお話、本当だったの？」

「我が貴様らを騙して何の得がある？」

九十郎によって半ば無理矢理引つ張つてこられた武田信虎が、不機嫌そうに鼻を鳴らす。

彼女にとつて、駿河がどうなるうが知つた事ではない、こんな下らない事をしている暇があつたらドライゼをよこせと、その態度で雄弁に物語つていた。

「まあ、命令変更が好きなら御仁だったからな。

大方なんやかんや良く分かん理屈でまた命令変更をしたのではないか？」

「くそう、神道無念流を合法的に振るえるチャンスがフイになるな……」

「久々にマトモな九十郎殿が見れると思つたのに……」

この男がマトモだった時期が一瞬でもあつただらうか。

「まあ何にせよ、護衛代はキツチリ取り立てさせてもらうからな。

救い料一億万円頂戴、ローンでも可つてな」

見た目幼女から容赦無く金と取り立てようとする屑マッチョがいる。

この男は自分が情けなくならないのであろうか。

「い、一億万円つて永楽銭何枚分なの……？」

「最初に言つてた額より高くなつていませんか？」

「神道無念流ができる機会が一回も無かつたから、その分増額した」

「普通逆じゃありません？」

「荒事が多かったり危険があったりすると多めに取るものだと思いますけど」
「俺は神道無念流やるついでに護衛をしてるから良いんだ」

無茶な理屈である。

「と、とりあえず泰能の屋敷まで行くの。手持ちのお金じゃ足りないから……」

「全く、今川の現当主は小遣い制か……聞いていて情けなくなってくるな」

鞠が自身の股肱の臣、朝比奈泰能の元へと小走りで向かう。

鞠に護衛料をせびっている貞子と九十郎はもちろん、信虎もなんやかんやで付いていく。

全員が全員、駿河は平和そのものだと思っていた。

全員が全員、駿河は平和そのもののように見えていた。

「泰能く」

4人が泰能の屋敷の門をくぐり、敷居を跨ぎ、玄関に入り……

瞬間、世界が色を変えた。

4人の視界が赤く染まる。

屋敷の床、壁、天井……視界に写るありとあらゆる場所に血と肉片と内臓がへばりついていた。

そして同時に、むせ返りそうになる血の匂いに包まれる。

まるで地獄の門をくぐったようだとすら思える、強い強い血の匂い。

「どう思う、貞子」

「戦場の匂い……いえ、これは戦いの匂いではありませんね、一方的な殺戮でしょう」
「どつちにしろ尋常じゃねえぞこの状況。」

「どうやら危険地帯に足を踏み入れちまったみたいだな」

「良かったじゃあないですか、九十郎殿。思う存分神道無念流ができますよ」

「鞠に割り増し賃金を請求する理由も無くなるよな」

状況をまるで理解できない鞠をガードすべく、貞子と九十郎が各々剣を抜く。

この2人と今何がどうなっているのかまるで理解していないが、それはそれとして
剣士の直感が我が身に迫る危険を察知したのだ。

「信虎、どう思う?」

「聞かれても分らん、何が起きたのか……」

「や……泰能っ!!」

鞠が屋敷の奥に向かって駆け出した。

何が起きたのか、屋敷の奥がどうなっているのかはまるで分らなかったが。

尋常でない血の匂いが、死の気配が、鞠の大切な家臣の死を連想させ、居ても立つてもいられなくなったのだ。

「あ、ちよつと今川殿、1人じゃ危ないですよ」

「貞子追うぞ! 死なれちゃ目覚めが悪い!」

鞠を追って残った3人も走る。

広い屋敷を……そこら中に血と肉片と内臓が飛び散る広い屋敷を走り、臭いがどんどんきつくなり、死の感覚が次第に強くなり……

「げ……」

「あ……ああ……や、泰能……」

その先に居た。

ぐしやぐしやに潰され、引き裂かれ、山積みになされた無数の遺体。

遺体の山の上に座り、人の腕らしき物にかぶりつく女の忍者が居た。

遺体の山の中に、今川の老臣、朝比奈泰能。

全身がバラバラに引き裂かれ、顔は恐怖に引きつり、物言わぬ屍となった泰能の姿が

……スノーゴンと戦った時のウルトラマンジャックのようにバラバラにされていた。
「おい信虎、ありや何だ？」

「知らん、見た事も聞いた事も無い」

「どう見てもこの惨状引き起こしたのアイツだよ……特級の厄ネタじゃねーか。
役満の上に裏ドラまで乗ってるぜ全く」

そう呟いた九十郎が、人の腕にかぶりつく女の忍者と目が合った。

「こんにちは」

忍者は背筋がゾクリとする程に普通に笑った。

普通に笑い、普通に挨拶をした。

「アイサツは欠かせないよな、古事記にもそう書かれている。

ドローモ。 ハジメマシテ、サイトークジュウローです」

得体のしれない恐怖を噛み殺し、九十郎は精一杯の虚勢を張った。

護衛対象の鞆が近くにいる手前、弱気な所を見せられないのだ。

「泰能を……泰能殺したの？」

「殺しましたよ。 殺さなければ食べられないが故に」

忍者はなんでもない事のようにそう答えた。

その忍者の口元は真っ赤に染まっていた。

その忍者の両腕は真っ赤に染まっていた。

血がべつとりとついていた。

その忍者は……その手で人を引き裂き、その口で人を食べたのだ。

「某は……特異体質であるが故、他の食べ物も身体が受け付けないのですよ。

食べられる物は、人間の肉だけ……他の物は決して食べられない、

無理矢理口の中に押し込んでも、味もしない、満腹もできない……

それ故に殺しました。空腹で、空腹で空腹で空腹で、殺さなければ食べられないが

故に」

「加藤殿……ですか？」

その時、貞子がようやく目の前にいる忍者に見た事がある、会った事があると気づいた。

「なんだ、覚えているじゃあないですか、貞子さん。

さつき挨拶をしたのに返事がなかったが故に、忘れられたのかとヒヤヒヤしてました

よ」

「おい貞子、知り合いか？」

「加藤段蔵殿です……桶狭間の頃まで越後で雇い入っていた密偵の……」

「ええ、ええ、長尾ならば戦争の機会も多いだろうって、

人間を殺し、食べる機会も多いと思つたが故に……いつぞやはお世話になりました。結論から言えば期待外れでしたが故に、すぐにお暇させて貰いましたか」

「泰能を食べる気なの？」

「ええ食べますとも。殺したからには食べなければ、勿体ないが故に……」

そして忍者……加藤段蔵は無造作に尻の下に敷いた遺体の一つを手に取り、まるでパンをちぎるかのように無造作に引き裂き、口の中に放り込んだ。

「そんな事させないのっ!!」

そんな光景を見た鞠が、反射的に剣を抜き、段蔵に向けた。

「鞠は……鞠はこれでも、今川の当主なの。」

今川の当主として、家臣を食べさせる気は無いの」

正直な所、鞠は怖かった。

怖くて怖くて、いつそ逃げ出してしまいたかった。

だがしかし、泰能を……自分のような未熟者を必死になつて教え、導き、支えてくれた人を惨殺され、尻に敷かれ、そして喰われると思うと、尻尾を巻いて逃げ出す気になれなかった。

怒りと、悲しみと、憎しみでどうにかなつてしまひそうだった。

「んん〜」

段蔵はそんな鞆を見下ろし、自分のお腹をさすり……

「……あと4人分くらいは入りますか」

せつかくの死体を……美味しくて貴重な食べ物を無駄にしなくてすむ。

段蔵はそんな理由で、鞆達4人を殺すと決めた。

「良かったですね九十郎殿、神道無念流ができますよ」

「相手が化け物じゃなけりや素直に喜べただけだな」

貞子と九十郎も剣を段蔵に向ける。

信虎は旗色が悪くなったら九十郎だけ連れて逃げてやろうとか考えながら、仕方なしに剣を抜いた。

直後……

「たあーっ!!」

ぶっつん……と、段蔵の首が飛んだ。

いとも容易く、なんとも呆気無く、加藤段蔵は鞆によって切り捨てられた。

「え……あれ……勝った……の……？」

斬った本人が不思議に思う程、無抵抗で段蔵が斬られた。

しかし……異変はすぐに起きた。

まず4人が感じたのは、吐き気がするような腐臭であった。

真夏に何日も野外で放置した魚の匂い……それを何倍も何十倍も濃縮したような嫌な臭いが周囲を覆う。

そして段蔵の身体が溶けた。

まるでアイスキャンディーのように溶け、液化し、赤黒いスライムのようになって遺体の山を包み、肉塊となって一体化した。

その奇妙な肉塊に人間の口に似た何かが開いた。

何個も、何個も……何個も何個も何個も何個も。

そしてその無数の口が一斉に開き、喋った。

「食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、

食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ

イ、

食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ

イ、

食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ

イ」

一斉に開いた口が、一斉に同じ言葉を喋りだした。

そのおぞましい肉塊から、おぞましい食欲を感じ、4人は思わず背筋を振るわせた。

「な、なんだこれは……鬼ではない、我が知る鬼ではないぞこれは」

「鬼じゃねえのは見りや分るよ！ 構える信虎、来るぞ！」

肉塊から何かが飛来する。

鞠は咄嗟に真横に飛び、転がり、飛来した物体を避ける。

それは肉塊の歯……ではなく、釘のような形状をした、手裏剣であった。

『屑ウウウウウウーっ!!』

直後、4人の脳裏に声が響く。

頭蓋骨内が直接音波に晒されたかのような独特の感覚……テレパシーを受けたのだ。

「この声、糞ニートか!? 何の用だ、今それどころじゃない！」

『何ヲヤツタ屑郎!? ドウシテ段蔵ガ戦闘態勢ニ入ツテイル!』

「知らねえよ、いきなり攻撃されてんだよ！ 今まさに攻撃されてんだ！」

赤黒い肉塊から数本……いや、数十本もの手裏剣が飛んでくる。

走り、飛び、伏せ、切り払い、必死こいて逃げ回る。

「く、九十郎殿、今聞こえてきた声は一体!？」

「井伊直政っていう、前世から腐れ縁のサイキツカード」

「さ、さいきつか？」

『イイカラ早く逃ゲロ！ 距離ヲトレ！ 段蔵ト戦エバ全員喰ワレルゾ!』

「反撃するなってか？」

『剣魂力御家流デナケレバ有効打ニナラン！』

イエローテンバランスノヨウニ食イツカレ、骨マデシヤブラレル！

諦メテ奴ノ能力ノ射程距離外ニ逃レロ！」

「触つたらヤバイって事かよ!?!」

「そ、それだと私と九十郎殿がただの置き物になるような……」

人斬り包丁を振り下ろす以外能の無い貞子と九十郎が焦る中、再度赤黒い肉塊から手裏剣が放たれる。

「おい糞ニート、何だっつてんだ!?! あいつも鬼子か？ サイキツカーなのか?」

『違ウっ!?! 鬼子ジャナイ！ 半人半魔ノ超生物ジャナイ！』

超能力者デモナイ！ アイツハ生物デスラナイ……」

『アイツハ……加藤段蔵ハ……純然タル怪異ダツ!!』

「OK、とりあえずあいつが化け物だって事だけは理解できたよ」

新戸の警告を聞き、うじゆるうじゆると蠢く肉塊を目にし……九十郎は今日、久々に本気で死の予感がした。

犬子と柘榴と九十郎第51話 『純然たる怪異』

「おい糞ニート、何だつてんだ!? あいつも鬼子か? サイキツカーなのか?」

『違うつ!? 鬼子ジャナイ! 半人半魔ノ超生物ジャナイ!』

超能力者デモナイ! アイツハ生物デスラナイ……

アイツハ……加藤段蔵ハ純然タル怪異ダツ!!』

「OK、とりあえずあいつが化け物だつて事だけは理解できたよ」

新戸の警告を聞き、うじゆるうじゆると蠢く肉塊を目にし……

九十郎は今日、久々に本気で死の予感がした。

直後、眼前の醜悪な肉塊がぶるりと震えたかと思うと、数本……いや数十本もの棒手裏剣が九十郎達に殺到した。

「あ……あつ危ねえ!」

「九十郎殿!? 今川殿!? 無事ですか」

一流の武人である鞠と貞子はともかく、1・5流の九十郎や、転子と同レベルの信虎は避けきれず、少しづつ疲弊し、ついに飛来した手裏剣のうち一本が、信虎の左肩に突き刺さっていた。

「ぬ、ぐつ……」

「信虎、大丈夫か？」

「掠り傷だ、大事無い。」

「だが少しばかり戦地から離れすぎた、身体が思うように動いてくれん」

「年のせいじゃねえの」

「殺すぞ貴様」

信虎（67）が九十郎に殺意を向ける。

「だから貴様は九十郎なのだ。」

「御家流……信虎おばさん、下がっててなの！ 随波斎流……」

「鞠が負傷した信虎の前に立ち、静かに精神を集中させる……」

血のにじむような修練の果てに習得した鞠の御家流・疾風烈風サイバスター……もと

い碎雷矢は、精神集中による隙が少なく、消耗も小さいという長所を持つ御家流である。

しかし、その隙の少なさが今回は裏目に出た。

『ア、バカ、ソナナ事シタラ……』

新戸から焦ったようなテレパシーが届くよりも、鞠は自らの御家流を発現させてし

まった。

「紅と蒼の光弾が吸い込まれるかのように赤黒の肉塊に直撃し……」

「ウ……ゴツ……ガゴオツ!! オオオ……」

何とも形容し難いうめき声をあげ……そして破裂した。

まるでシャボン玉が割れた時のように、鼻の曲がるような臭いを出しながら肉塊が周囲に飛び散り、4人の着物を真っ赤に染める。

「え、あれ……倒せた? やっつけたの?」

撃った本人含め、醜悪な化け物のあつけなさすぎる最後に全員がぼか〜んと口を開ける。

『今スグソノ場カラ離レロオツ!! 喰ワレルゾツ!!』

直後、新戸のテレパシーが血相を変えて警告を発した。

「……呑牛の術」

飛び散った肉塊の一つから、そんな声が聞こえた。

……その声に反応したのは、反応できたのは九十郎だけだった。

「鞠っ!」

九十郎は咄嗟に鞠を強く突き飛ばした。

鞠が狙われると思った根拠は直感的なものだ。

御家流による攻撃をした鞠が一番狙われやすそうだという、それだけの理由だ。

だが、そんな九十郎の判断が鞠を救った。

不可視のナニカが鞆が居た場所を通り抜け……その場所の存在していた全てを消した。

床も、天井も、埃も、肉片も、血痕も、空気すらも……ありとあらゆる物体が瞬時に、音も無く消滅したのだ。

「マジかよおい……」

この時、九十郎は理解した。

こいつは空間を喰ったのだと。

空間ごと、あらゆる物質を喰うのがこいつの能力なのだ。

そして今、右腕を数cm程喰われただけで、軽傷で済んだのはただの幸運に過ぎず、一歩間違えたらヴァニラ・アイスに襲われた時のアブドウルのようになって死んでいた。

ぐじゆるぐじゆると奇怪な音を立て、鼻が曲がりそうになる程の異臭と共に、飛び散った肉塊から口が開く。

口が開き、それぞれが食ベタイ、食ベタイ、食ベタイと喋りだす。

「まるでザ・ハンドかクリームだなありや……おい糞ニート、対策はあるか、放置以外で」
『オレガ今ソツチニ向カツテイル、モウ少シダケ生キ残レ』

「肝心な時に役に立たねえよなお前はさあつ!!」

仕方ねえ逃げるぞ、こいつは神道無念流でどうこうできる状況じゃなさそうだ」
「そのようですね、逃げましょう九十郎殿」

「全く妬ましい、腹立たしい、我より強い奴がどうしてこうも多い……」

九十郎が即座に撤退を決意し、鞠の手を引き、肉塊に背を向け逃げ始めた。

「……呑牛の術」

「飛べえっ!!」

瞬間、九十郎はソワリと背筋に寒気を感じ、咄嗟に鞠を力任せにブン投げた。

鞠の小柄な身体が紙切れのように宙を舞い……鞠が居た空間が再び喰われた。

「貞子！ 信虎！ 今アイツが何をしたか見えたか!？」

「ぜ、全然です……」

「何が起きた、今のは何だ!？」

「分らんが避け損ねたらヤバそうだって事は確かだ!」

肉塊がゲラゲラと笑う。

食べたい食べたいと叫び、呑牛の術を……不可視の罅を発現させる。

何度も、何度も、何度も何度も。

その度に九十郎達は上下左右に飛び跳ね、ギリギリの所で回避する。

屋敷にいくつもいくつも大穴が空き、手裏剣も飛び、4人が追い詰められていく。

そしてついに……

「……呑牛の術」

「やっべ!？」

手裏剣を避け損ね、九十郎が体勢を大きく崩していた。

不可視の罽が音も無く九十郎に迫る……あらゆる物質を飲み込みながら……

「ああそうか、やはりコレは御家流なのだな」

しかし、その不可視の攻撃が……空間ごと喰い破る段蔵の超能力が九十郎を抉る事は無かった。

信虎が段蔵と九十郎の間に割って入っていた。

そして……奇妙な表現になるが、信虎が不可視の超能力を掴み、受け止めていたのだ。

「善用兵者 役不再籍 糧不三載 取用於國 因糧於敵 故軍食可足也

國之貧於師者遠輸 遠輸則百姓貧 近於師者貴賣 貴賣則百姓財竭 財竭則急於丘

役

力屈財殫 中原内虚於家 百姓之費 十去其七 公家之費 破車罷馬 甲冑矢弩

戟楯蔽櫓 丘牛大車 十去其六……」

……呪文が聞こえた。

漢文の成績が常に赤点スレスレの九十郎にとっては何の意味も無い単語の羅列、呪文

か何かだと思えた。

「違う……違うの、これは……」

故雪斎禅師より、考えられる最高の教養を与えられていた鞠は気づいた。

それが古の兵法書『孫子』の一説を諳んじているのだと。

「精神統一……ファースト幼馴染と同じように、精神を統一して……」

御家流を使おうとしているのか!？」

そして幼い頃から光璃を……武田家御家流風林火山を見続けてきた九十郎は気づいた。

武田信虎が御家流を使おうとしているのだと。

「故智將務食於敵……食敵一鐘 當吾二十鐘 忌梶一石 當吾二十石」

呑牛の術が……発動すれば決して逃れる事のできない必殺の術が止められていた。

人間を喰らう不可視の罠が止められていた……武田信虎が、それを受け止めていたのだ。

ありえない事に、武田信虎が超常現象をその手で掴み、受け止め、握りしめていたのだ。

「この男に今死なれては困る、まだドライゼ銃を受け取っておらぬからな。

そして九十郎よ、これは貸しだ。

食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、
イ、

食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、
イ、

食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、食ベタイ、
イ」

残った肉片の残った口が、再び醜悪な臭いと共に4人に向けて口々に叫ぶ。

しかし……

「む、先ほどよりも重苦しさが減ったか？」

「何かしらダメージは与えられたようだな、今のうちにスタコラサツサだ」

「九十郎殿に賛成です、逃げますよ今川殿」

「でも泰能が、皆があっ!!」

「さつき食べられちゃったでしょうが！」

私達まで怪物のご飯にされる前に逃げるんです！」

貞子が鞠を抱きかかえるように掴み上げ、そのまま肉塊に背を向け、ダツシユで玄關に向かう。

「……呑牛の術」

直後、壁にへばりつく肉塊の一つが不可視の罅を発現させるが……

「はっ、種が割れればこんな物は怖くもなんともない。」

私の御家流を知らずに挑んだ事が貴様の落ち度よ」

最後尾に居た信虎がすかさずその能力を受け止め、握りしめ……

「もう一発、喰らうが良いっ!!」

……投げ返した。

再び屋敷に大穴が空き、いくらかの肉片もそれに巻き込まれて消失した。

超能力者の天敵、御家流の天敵。

武田信虎の異能は、段蔵の能力を見事に防いでいた。

なお、この能力で光璃の風林火山を投げ返した場合、御家流が使えないと置物同然の光璃が、投げ返された風林火山の効果を得て、自力で信虎を殴り倒せるレベルにまでパワーアップするという珍事が発生するし、綾那や貞子のように普通に強い者が相手では何の役にも立たない。

さておき、4人が這う這うの体で屋敷から飛び出すと……

「なっ……!!?」

「一難去つてまた一難ですか……九十郎殿、神道無念流ができますよ」

「こういうのは鬼退治桃太郎先輩に投げたい所だがな……」

「そんな……こんなのも……」

鬼がいた。

1匹や2匹ではない、10か20か30か……数えるのが面倒になるような数の鬼がいた。

先ほどまでこれでもかって位に平和で、にぎわっていた城下町が、今は鬼の巣窟になつていた。

「どう思う貞子、さつきまで見ていた光景が幻覚か、今見てる光景が幻覚か、

それとも屋敷に入っていた間に住人が残らず鬼にされたか」

「今見てる光景が幻覚って線は無いんじゃないですかねえ。これが幻覚なら……」

鬼どもの視線が一斉に4人に向く。

そして近くにあった数匹の鬼達が、次々と九十郎達に飛びかかってきた。

「これが幻覚で、この人達が普通の町民だったのなら、

襲い掛かってくる訳がないですからねっ!!」

貞子が鬼の首を斬り飛ばす。

すぐ後ろにこの世のものと思えない奇怪な肉塊が迫っているのだ、躊躇している余裕は無いし、時間をかけて眼前の光景を確かめている暇も無い。

「か、硬い……!!? まるで甲冑か灯籠でも斬ったみたいな……」

「じゃあ普通に鬼でしたって事だろ！ 呆けてる暇は無いぞ鞠！ とつとと走れ！」
「わ、わかつたの！」

「全く、とんだ里帰りになったものだな！ 昔から駿河ではロクな事が起こらん」
残る3人も次々襲い来る鬼達に応戦をする。

「チキシヨウ、忍者の次は鬼とチャンバラするなんて聞いてねえぞ！」

「吉野の御方が鬼の駿河を集積地としようとしていると言ったはずだが」

「ははは、鬼が出るとか誰が信じるんだよ。」

「ここは戦国時代でクトウルフ神話でも何でもねえんだぞ。」

てかさっきの奴、絶対忍者じゃ無かつたよな！ クトウルフ神話的な奴だつたよな！

百歩譲つてもニンジャスレイヤーだつたよなあつ！！

「九十郎殿、訳の分からない事を言ってる暇があつたら真面目に戦つてください」

「鬼でも何でもかかつて来いやクソがあつ！ 神道無念流舐めんなあーつ！！」

九十郎がやけくそ気味に鬼を蹴散らしていく。

「鞠、逃げやすそうな方向はどつちだ!？」

「ええ!?! えつと……ええつと……」

「我についてこい！ こつちが一番追つ手を撒きやすい道だ!！」

「信虎おばさん!?!」

「我が何度駿河からの脱走を図って、何度義元に阻まれたと思う！」

「ここらの地形は何十回も、何百回も調査済みだ！」

「でかした信玄ママン！ 貞子逃げるぞ！」

「誰ですか信玄ままんって?! まあ逃げるって案には賛成ですけど」

信虎の先導に従い、4人がスタコラサッサと逃げ出した。

鬼の数は千を軽く超えるものであった。

しかし、年単位で逃走経路の調査・検討を重ねた信虎を止められる者なんて義元くらいだ。

そして今、鬼は統率者不在の状況……勝手気ままに動き、近づいた生物に作戦も何も無く襲い掛かるだけの連中に捕まる程、武田信虎は間抜けではないし、九十郎達は弱い。

「屑郎おっ！ 無事かーっ!!」

鬼子が……恐るべき超能力を自在に操る半人半魔の超生物が一行と合流した後は、ハッキリ言って消化試合に近かった。

九十郎達4人は誰一人として欠ける事なく、無事に駿河から脱出した。

「泰能……みんな……お母さん……鞆は、鞆は……」

ただし駿河は鬼の巣窟と化し、鞆の心に深い傷を残して……

犬子と柘榴と九十郎第5話『女の子押し付けられました』

屑御一行と川中島or長篠で死ぬカルテットによる温泉旅行2泊3日は、なんやかんやで終わりを迎えようとしていた。

初日に乱交パーティー一步手前にまでいくちよつとしたハプニングはあったものの、2日目以降は平和そのものであった。

「甲斐に戻る気はねーでやがるか？」

別れ際になり、夕霧が信虎にそんな事を尋ねた。

「我が甲斐に戻る日は、アレを殺す算段がついた時だ」

信虎が言う『アレ』とは、武田光瑞晴信……かつて武田の当主であった信虎に反旗を翻し、部下と結託して駿河に追い出した者、武田の現当主、夕霧の姉を意味する。

「姉上の事なら、夕霧がなんとかするでやがるよ、だから……」

「アレが我に頭を下げて許しを請うなら、考えてやらんでもないぞ」

「う……」

夕霧は姉が信虎に頭を下げる光景を想像する。

絶対にありえないと力強く断言できる光景であった。

「次郎、貴様こそ我についてくる気は無いか？」

「アレと薫は殺す、殺すが……お前を殺す気は今の所無い」

「それは……それはできねえ相談でやがる」

「そう……か……」

信虎は少し残念そうに、少し寂しそうに肩を落とした。

「では、次に会う時は敵同士だな」

「そうなるでやがるな」

「楽しかったよ、次郎」

信虎がふつと笑った。

いつも怒りか憎悪の表情しか見せない信虎にしては珍しく、険が取れた自然な笑みであった。

「その笑みを、どうして姉上や薫に向けなかったでやがるか」

夕霧はそう問うた。

「尋ねても仕方が無い事だと自分自身でも理解していたが、聞かずにはいられなかった。」

「それはたぶん、お前だけは武田の血が薄かったせいだ」

「……どういう意味でやがるか？」

「私の母もな、我に笑みは見せてくれなかった。」

我は結局、母の憎悪の顔以外、見なかった。

見せられなかったと気付いたのは、お前を産んでからだ」

「だからどういう意味でやがるか!？」

「出てくるんだよ、アレや薫の顔を見ていると……」

ドス黒い憎悪が、殺意が、次から次へと溢れてくるんだよ。

そしてどうしようもなく踏みにじりたくなる、アレの全てをな」

何を馬鹿など言いたかった、言い返したかった。

だがしかし、無表情に、淡々とそれを語る信虎の顔は、どこまでも真剣だった。

「それは……それはどうにもならない事でやがるか？」

「遠く離れても、どれだけ時間が経とうが、お前を想わぬ日は無かった。」

どうしようもなく、お前を愛さずにはいられなかった。

それと同じくらい、我はアレを殺す事を考えていた。

どうしようもなく、アレを憎まずにはいられなかった」

信虎はそれだけ言うと、夕霧の頭を軽く撫で、そして立ち去った。

「どうにもならねえでやがるか……どうしても……」

答えが返つてこないと分かつていた。

分かつていてもなお、夕霧はそう聞かずにはいられなかった。

……

……

……

「見れば見る程、精密で精巧に作られているな……」

その日、新田劍丞は小夜叉から借りた鉄砲を……この世界の常識に真つ向から喧嘩を売る連発可能な銃、ウインチェスター・ライフルを眺めていた。

「本当に……何度見ても本物のウインチェスターだ。完全に、完璧に再現している」
劍丞はこの銃がウインチェスターと知っていた。

かつて劍丞の姉的な存在である夏侯妙才……もとい秋蘭という人物が趣味で集めていた重火器の中に、ウインチェスター・ライフルが存在していたが故に、知っていた。

九十郎が完璧にウインチェスターを再現している事にも気づいた。

そして同時に知っていた、自分には……新田劍丞には同じ事はできないと。

新田劍丞はウインチェスターの外観や性能、大まかな構造を知っていたが、細部の部品の一つ一つの形状や材質、製造法まで完全に覚えている訳ではないからだ。

「あいつは歴史を変えるのに躊躇が無い……なら、どこまで知っている？」

どこまで再現できる？ ウィンチェスター以外にも何か作っているのか？

一体何を考えて、何をやろうとしているんだ？」

いくらなんでも戦国自衛隊のような……戦国時代に自衛隊レベルの装備を用意する事まではできないだろうと思っっている。

だがしかし、時代を変えるブレイクスルーはそれこそ星の数ほど存在し、その中には戦国時代でも再現可能なものがあるはずだ……

「何を、どこまでやる気なんだ？」

劍丞の思考は、富士の樹海よりも広大で難解な迷路に入り込みつつあった。

いっそ開き直って自分も考え付く限りの知識チートで対抗してしまおうかとも考えたが、それをやればまず間違いなく人が大勢死ぬので、どうしても決心がつかなかった。

「ならば教えてください、劍丞様が懸念している事の全てを」

思索する劍丞に声をかける者がいた。

以前劍丞に危ういところを助けられ、それ以来劍丞に仕えている少女……竹中半兵衛である。

「いや……それは……」

劍丞が言葉濁す。

劍丞は今迷っている。

九十郎が未来の知識と技術で何をするか、そして自分達もそれを利用するかべきかどうか……それを話すという事はつまり、詩乃に未来の事を話すという事だ。

「お願いします劍丞様、私に教えてください。」

貴方が知っている事全てを……知らなければ、策は立てられません。

何も知らず、何も分らず、目の前に迫る危機に何の手立ても打てないなんて、私は嫌です。

私は……私は劍丞様を喪いたくないですから」

迷う劍丞の前で、詩乃が膝をつき、深々と頭を下げる。

土下座をするかのように、劍丞に懇願する。

「だけど……」

だがそれでも、はいそうですかねと頷く事はできなかつた。

竹中半兵衛は若くして病に倒れる。

それが新田劍丞の知る歴史だ。

そして目の前の少女……詩乃は聡明で、鋭く他人の思考や感情を読み解ける。

未来の事を伝えようとすれば、言葉の端々に染み出る不自然さや、前後の流れから、ほぼ確実に自分が早死にする事を察してしまうだろう。

それで良いのか、伝えても良いのかと……劍丞は迷った。

「やはり……教えてはくれませんか？」

艶やかな前髪の奥で、詩乃は悲しそうに眼を伏せた。

劍丞が九十郎と会った日から、今日のようなやり取りをしたのは1度や2度の事ではない。

劍丞の答えはいつも同じ……沈黙だ。

重苦しい沈黙が2人を包む。

そして……

「けえ〜つんすつけ君!! あ〜そ〜ぼっ!!」

……馬鹿の声が聞こえてきた。

今現在2人の頭をこれでもかかってくらい煩わせている馬鹿の声、九十郎の声であった。

「えっと、この話はまた今度という事で……」

「仕方がありませんね、行きましよう劍丞様」

急ぎ声のする方へと向かうと、そこにはかつて京で見たマッチョと、本田平八郎忠勝・通称綾那、そして特に面識の無い3人の美女達がいた。

「よう劍丞、久しぶり……って程じゃないが、また会ったな」

「何の用だ、九十郎。それと一緒にいる人達は誰なんだ？」

「ああ、私は小島貞子貞興と申します、以後お見知りおきを、天人様」
「越後の鬼小島……!?!」

貞子の名を聞き、劍丞と詩乃が顔色を変える。

そして長尾景虎の元で勇名を馳せる武人が何故ここに居るのかと、一体景虎にどんな
思惑があるのかと、詩乃は思考を巡らせる。

今孔明と謳われた賢人と言えど、まさか九十郎共々ノリと勢いに身を任せ、主君長尾
景虎に少しも相談せずに勝手に飛び出したとは思えない。

「なんと綾那の弟弟子になるのです!」

「え? 弟弟子」

「そうなのです、お師匠は昔綾那と歌夜に神道無念流を教えてくださいましたのです」

そう言いながら、綾那は自慢げに胸を張る。

「本田忠勝に剣を教えていたのか!」

劍丞が目の中のマツチヨの評価を大幅に上方修正する。

「ええまあ、勝てばおビール様、

負けたら弟子入りという条件で賭け試合をして負けましたから」

劍丞は目の前のマツチヨの評価をちよつと下方修正した。

「我は故あつて名前を明かせん。

今回の話に加わる気も無いから早く終わらせろ」

さつきからやや不機嫌そうな信虎がそれだけ言っただけ言っただけを向く。

彼女は今、こんなくだらない寄り道をするくらいなら、一刻も早くドライゼ銃を与えろとか考えていた。

「鞠は今川鞠氏真なの！」

そして最後に鞠がそう名乗り、深々と頭を下げたお辞儀をした。

「……はい？」

直後、詩乃は自分の耳がおかしくなつたかと思つた。

今川の当主が何故か景虎の配下である筈の貞子や九十郎と行動を共にしていて。

しかも長久手に来て剣丞に会いに来るといふ訳の分からない状況に、詩乃の混乱がさらにさらに加速する。

「で、早速で悪いんだけど、ちよつとこいつ引き取つてくれねえか？」

「剣の腕と礼儀作法とバトルドームには自信があるの」

「はいっ!？」

詩乃は今度こそ自分の耳がおかしくなつたかと思つた。

九十郎は今川氏真という超のつく重要人物の身柄を、まるで犬猫でも預けるかのような気安さでこちらに渡そうとしているのだ。

なお、九十郎にとって今川氏真は戦国蹴鞠一ガ―であり、武力一知力一の雑魚……偉人だとか重要人物だとかは全く思っていない。

「あの……もう一回言っていただけませんか？」

詩乃が震える声で聞き返す。

「護衛でもメイドでも娼婦でもなんでもやるの！」

詩乃は考えるのをやめたくなった。

やめたくなったが考えるのをやめないのは、なんやかんやで彼女が軍師という名の生物で……異常な状況に置かれる程、思考が冴えわたってしまう性分だからだ。

クトウルフ神話TRPGでは真っ先に発狂するタイプである。

「理由を聞いても構わないか？」

思考停止寸前になって、知恵熱でぶすんぶすんと煙を立てつつある詩乃に代わり、劍丞が九十郎から事情を聞き出そうとした。

「いやなあ、この間駿河に鬼とか神話生物とかが出て全滅しただろ。」

シルバーブルーメに襲われた時のMAC基地くらい酷い事になってさ」

「ちよつと待て、初耳だぞ」

「んで鞆をこのまま面倒見続けるのも面倒になったから劍丞に押し付けようと思った」
放置しても死にそうにない奴には本気で薄情な屑が居た。

「いやちよつと待て、頼むから待ってくれ、話を何段飛ばしてらんだお前」

「んな事言われてもこれ以上嘯み碎けないぞ」

「駿河に何が起きたんだ!？」

劍丞が掴みかからんばかりに詰め寄り、声を荒げる。

この世界に流れ着いた時から幾度と無く戦いながら、その内実や目的はまるで分らない謎の存在……鬼。

その鬼が今度は駿河を全滅させたという話は、流石に聞き逃すことができなかつた。

「お師匠がいてもどうにかできなかつたですか？」

「いや、駿河には鬼とは別の妙な奴がいてな。」

なんて言うか、こう……女神転生のレギオンっぽい……

とにかく正直な話、尻尾巻いて逃げ出すのが精いっぱいだったよ」

「おお、鬼より手ごわいのが出たですか!？」 それは楽しみなのです!」

「ははは、お前は相変わらず脳筋だな」

「まあ何にせよ、少し鬼を見くびってた。」

一体一体は俺や貞子なら問題無く斬れるが、数を出されると流石に厄介だ」

「小谷で戦った鬼は、武器を使い、陣形を組んで戦っていた。」

最近鬼子なんていう強力な鬼も出てきている。

鬼は戦う度に少しずつ、でも確実に強力に、そして厄介になっている」

「マジかよ、面倒だな……分かった、今の話は美空にも伝えておく。」

まあそれはそれとして、今川はしつちやかめつちやかになつてゐるっぽいから、
鞠をしばらく預かつてくれ、

そしてできれば駿府に出た鬼やら何やらもどうにかしてくれ」

「そんな事俺の一存で約束できるかよ」

「そうか？ お前が一番適任だと思っただけだな……」

そんな押し問答が劍丞と九十郎で繰り返される。

路銀が尽きて行き倒れてたならともかく、いくら劍丞でも全然元気そうな今川現当主
を軽々しく預かるなんて言えやしない。

何度も何度も繰り返される今川氏真の押し付け合いに、このまま日が暮れんじやない
かと皆が思い始めた頃……

「劍丞様、どなたか来客でもいらしたのですか？」

状況を全く知らない松平次郎三郎元康・通称葵がやって来て……

「……九十郎様？」

「ありや、葵もいたのか？」

葵と九十郎の目が合い……

「確あ保おおおおおおおおおおおお~~~~~っ!!」

目の前にいるマツチヨが誰か理解した瞬間、葵は叫んだ。

有無を言わせぬ勢いであった。

この人こんな大声出せるのかと、劍丞が若干引くくらいの大声だった。

首筋に血管が浮き出るような勢いで叫んでいた。

直後、そこから中からドタドタと慌ただしい足音と声が聞こえてくる。

葵の声が届く範囲にいた三河侍達全員が集合してくる音であった。

あれよあれよという間に、九十郎達3人を武装した三河侍達が一重、二重に取り囲む。

「やれやれ、団体さんのお出ましか……」

「そのようなですね。 ひーふーみーと……」

40人くらいですか、1人あたり14人斬れば良い計算ですね」

「我を計算に入れるなよ。」

「言いたくないが我はその辺の足軽よりも弱いぞ」

「超能力が無いと置物かよ、ファースト幼馴染みたいな奴だなお前」
九十郎がため息をつく。

いくら貞子と九十郎が腕の立つ剣士であるとはいえ、屈強で知られる三河侍達を20人斬りできる程ではない。

しかも今回、3人と取り囲む敵の中には、綾那、歌夜、そして小波までいるのだ。

「積もる話がありますが……主命故、拘束させていただきます」

歌夜と九十郎が……かつての師弟の視線が合う。

歌夜が刀を抜き、綾那が蜻蛉切と呼ばれる名槍を召喚する。

「その様子だと、傷は完全に治ったみたいだな」

「はい、貴方に治療して頂いたおかげです」

「恩義を感じてるなら黙って逃がしてくれねえかな?」

「私が逃がそうとしたところで、他の皆は見逃しません。」

ならばせめて、無用な怪我をさせない内に、私の手で」

「全く、2回も弟子とチャンバラする羽目になるなんてな……呪われてんのか?」

「刃先が飛び出る小刀は既に見えています。あの時のような不覚はとりませんよ」

「その……正直に言つて、こんな事してる場合じゃねーとは思ってますけど、

「こんな大勢で3人に襲い掛かるとか綾那の趣味じゃねーですけど……ですけど……」

「もう逃げられません、逃がす気もありません。抵抗せずにこちらに降ってください」

歌夜が、綾那が、そして大勢の三河侍達がじりじりと九十郎達に近づいてくる。

「さあ、どうする……？ どう動く……？」

そして小波が……あの服部半蔵正成が九十郎達の挙動を注意深く観察し、奇襲や奇策の類に備えている……率直に言って、詰みとしか言いようのない状況である。

「どうします？ どう見てもタダで帰してくれそうな雰囲気ではありませんよ、九十郎殿」

「全く、糞二ートの言った通りになったよな」

「葵殿の性格から言って、たぶんこうなるぞって話でしたね。あの娘何者なんです？」

「実はその辺は俺にも良く分からん。分らんが……逃げるのは無理っぽいのは分かる」

「服部半蔵からは逃げられない、でしたっけ？」

「我もこの辺りの地勢は知らぬ、勘頼りの運任せでは逃げれる程甘くは無かろう」

「だよな、という訳で……」

「と、いう訳で……」

三河侍達が九十郎達に飛びかかろうとしたその瞬間、貞子と九十郎が大きく息を吸い込み……

「たまには働け糞ニートオツ！」

「出番ですよ！ ニート殿！」

……2人は力の限り叫んだ。

瞬間、劍丞の刀が……鬼をバターののように切り裂く謎の劍が光り輝く。何かに対応している、何かを感知しているのだと、劍丞には分かった。

「何だ!? 鬼が近くに……」

劍丞が慌てて綾那達に警告を出そうとする。

しかしそれよりも早く……

「サイキック・ウェイイブウツ!!」

直新戸の叫び声が響き、不可視の念動の力場が綾那の全身を包み、固定した。

「なっ!? う、動けねーです?」

「ヤレ屑郎オツ! 長クハ保タナイツ!!」

「サイキック斬……は、可哀そうだから斎藤キック!!」

九十郎の渾身のドロップキックが少女に叩き込まれ、小柄な綾那が空高く吹っ飛ぶ。

「うぎゃーっ!？」

情けない悲鳴と共に三河最強……下手したら日本最強かもしれない武人がリタイアした。

最強戦力のいきなりの脱落に葵達にどよめきが起きる。

そして飛び込んでくる、綾那にサイキック・ウエーブを叩き込んだ存在が。

白髪の少女……ではなく、紅い髪の鬼が現れた。

「お、鬼!？」

「鬼が……九十郎様、どうして鬼を!？」

「九十郎、お前……鬼を呼んだのか!？」

突然の鬼の乱入に、そして九十郎が鬼を呼んだ事に、歌夜が、葵が、そして劍丞が驚き戸惑う。

劍丞の刀は、過去にない程に激しく、眩く反応していた。

まるで剣が紅い髪の鬼を知っているかのように……

「馬鹿か! 馬鹿なのか!？」 お前何でそっち(鬼)の姿で来た!？」

だがしかし、一番驚いているのも戸惑っているのも九十郎であった。

「屑郎、流石のオレも本多忠勝相手に手加減はできないぞ。

、「ヨーイドンで戦ったら150%負ける」

、「1回負けて、再戦をせがまれてまた負ける確率が50%という意味である。」

、「出て来る前に人の姿に戻っておけよ！ 俺が鬼と結託してるみてえに見えるだろ!!」

、「九十郎！ お前は一体何を考えているんだ?!」

、「九十郎様！ 一体どういう事ですか!?!」

、「劍丞と葵がほぼ同時に九十郎に問いかける。」

、「たった今現れて九十郎を助けた紅い髪の鬼は何者なんだと。」

、「どうする屑郎、説明するか？ たぶん信じないと思うが」

、「説明する自信が無いから却下だ！ 予定通り全員蹴散らして帰るぞ!」

、「屑……もとい九十郎と貞子を取り囲む三河侍達に斬りかかる。」

、「く……取り押さえなさい！ 死んでいなければどれだけ傷を負わせても構いません

！」

、「葵の指示が飛び、三河侍達も刀を抜き、九十郎達に飛びかかる。」

、「剣と剣が火花を散らし、1人、また1人と斬り捨てられていく。」

、『信虎、後ア、天カラ、拳、落チテクル』

、「乱戦の中、新戸のテレパシーが信虎に送られる。」

、「御家流か？」

信虎が小さな声でそう尋ねる。

『御家流ダ』

「なら、それを投げ返すのが私の役目か……いいだろう、乗ってやる」

信虎は大きく深呼吸をし、そこから中で血と鉄の臭いがし、そこから中で怒声や断末魔の叫びが聞こえる鉄火場を見渡す。

貞子や九十郎に比べればクツソ弱い信虎であったが、血の臭いを嗅ぎ、断末魔の叫びを聞いた程度で動揺する程、幼くはない。

信虎はこの状況下で、誰よりも冷静であった。

「ハロー、ハロー、いくつかの世界におけるオレのご主人様よ」

「え……？」

そして大混戦の中で、紅い髪の鬼と葵の視線が交差する。

井伊直政と徳川家康が、この世界で初めて対面する。

「出合い方がもう少しマシだったなら、友と呼ばたかもしれない、

あるいは主君と認めたかもしれない……シレナイガ、ダ」

紅い髪の鬼が、その恐るべき念動力で人よりも大きな巨岩を10も20も浮かび上がらせる。

狙いは当然、群がる三河侍達が守らざるを得ない存在……葵だ。

「死ナナイ程度ニ死ネエツ!!」

ぶおんつという風切り音と共に、巨岩が葬目がけて殺到する。

「きやああつ!!」

咄嗟に葵を庇つた三河侍達7、8人をミンチに変え、余波で葵を吹き飛ばし近くの民家の壁に激突させ、気絶させた。

……そして同時に、数本の手裏剣が新戸の背に深々と突き刺さっていた。

「ちつ……この短時間でオレの弱点を見抜いたか、やるな小波」

念動力で突き刺さった手裏剣を抜き、熊すら即死させる劇毒を血管ごと引き千切つて体外に排出しながら、新戸はどこか懐かしそうに呟いた。

常人を遥かに超越する視力や聴覚で小波の姿を探るも、目標は影すら見せず、足音すら出さずに高速で移動をしており、新戸は反撃のきっかけを見出す事ができなかった。

「この世界でもお前が……お前ガオレノ天敵力アツ!! 小波イイツ!!」

新戸が超自然の発火能力を発現させ、小波が隠れやすそうな場所を次から次へと炎上させる。

何人かの三河侍達が巻き込まれ、炎上し、一瞬にて骨まで炭化して絶命する。

そして発火能力を発現させる瞬間を狙い、またも手裏剣が新戸に突き刺さり、肉体の一部ごと引き千切るかのように引き抜かれる。

数分もしないうちに新戸の全身に無事な所が無くなり、まるでエレメンタールチーズのように穴だらけになっていた。

当然、新戸は自らの細胞を活性化させ、傷を塞ごうとするが……小波からの攻撃は新戸の回復能力を上回っていた。

「小波が隠レラレル場所ヲ全テ灰ニスルノガ先カ、

オレノ回復力ガ限界ヲ迎エルノガ先カ……チキンレースダナ……」

小波と新戸が熾烈な戦いを繰り広げる中、九十郎は騒ぎを聞いて駆けつけてきた歌夜と切り結んでいた。

「九十郎さん、止まってくださいー！」

「悪いが断るー！」

歌夜と九十郎が真剣で斬り合うのは、これで2回目だ。

鷲津砦攻略戦の時、歌夜は少しだけ九十郎よりも強かった。

その後何度か修羅場を潜り抜けたせいとか、それとも越後で柘榴や貞子相手に気持ち良く神道無念流をしていたせいとか、今の歌夜と九十郎の実力は並んでいた。

「傷は完全に治ってるようだなー！」

「貴方の御蔭でー！」

歌夜の体調は万全だった。

療養中の歌夜を置いて逃げ出した時から、九十郎はそれなりに心配していた。

歌夜が元氣だと分かり、九十郎は少し嬉しかった。

「神道無念流の技も、錆びてねえようだな！」

「当然です!!」

歌夜が振るう剣は、確かにかつて九十郎が教えた神道無念流であった。

全力で鍛え、磨き上げた愛弟子が、今でも自分の教えを覚えていてくれる……九十郎はそれが嬉しくて仕方が無かった。

「楽しいなあ！ 歌夜！」

「楽しくありません！ 大人しく投降してください！」

九十郎は今、楽しかった。

自分自身でも不謹慎だとか、状況を考えろとか思わなくも無かったが、それでもなお、心の奥底からこみ上げる楽しさを……全力で神道無念流ができる楽しさを抑える事ができなかった。

しかし、歌夜と九十郎が互角の戦いを演じている間に、周囲では歌夜の戦友、あるいは同胞達が貞子に斬られ、小波と新戸の戦いに巻き込まれ、次々と倒れていた。

「くっ……早くなんとかしなくては……」

歌夜の心に焦りが生じつつあった。

そして……

「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前……」

新戸の耳に、そんな声が届いた。

無数に存在する並行世界の中で、数多くの虎松達がソレを見ていた。新戸はそんな虎松達から、ソレがどういふ存在なのかを聞いていた。

ソレは……：天空に浮かぶ巨大な拳は、服部半蔵正成の御家流・妙見菩薩掌。

「九十郎殿！　大きいのが来ますよ！」

「うげっ!?　なんじゃありゃ!?!」

貞子と九十郎が慌てて巨大な拳から逃れようと走り出す。

三河侍達も巻き込まれちゃたらんと逃げ始める。

しかし……

「コノ傷アハ……避ケラレナイ……」

その超上の拳は新戸の真上に浮かんでいた。

新戸には全身に20を超える数の大穴が開いていた。

特にその両脚は念入りに念入りに破壊されていた。

そして妙見菩薩掌が新戸目がけて一直線に落下した。

このままでは新戸は小波の御家流にぶちっと押し潰され、戦闘不能になると誰もが

思った。

ただし……

「マア……避ける必要は無いがな」

「ああつまり、我はコレを投げ返せという事だな」

ただし、当の本人と信虎はそう思っていないかった。

信虎が落下してきた超常の拳を片手で受け止め、静止させていたのだ。

「分かるぞ、今の我には良く分かる……」

この御家流を放ったのが誰か、どこにコソコソ隠れているのかもだ」

そして信虎はニヤアくとサデイスティックに笑い、遠くに見える小さな物置の裏で息

を潜める小波を見つめ……

「まぐなむ・しゅううううううーっとおっ!!」

九十郎がノリでつけた名前を叫びながら、受け止めた菩薩掌をブン投げた。

「きやあああつ!?!」

直後、小波が隠れていた物置小屋はバラバラに弾け飛び、破片と共に小波が吹き飛ぶ。

勝負あり……である。

「焦れたな小波、今日はオレの勝ちだ」

それを見届けると、紅い髪の鬼がふらあつとよろめき、崩れ落ちた。

「すまん屑郎、血を流しすぎた……少し休む」

松平衆は既に7〜8割が絶命、あるいは戦闘不能になっており、大の字になって寝転ぶ紅い髪の鬼に襲い掛かる余裕が無かった。

そのまま貞子が残った三河侍を2人斬り、3人斬り……

「……はい、貴女が最後ですよ、榊原殿」

最後に残った歌夜の首筋に鮮血が滴る剣をつきつけた。

「斬らないのですか？」

「いえ、私としてはバツサリと斬った方が良いかと思うんですけどね。」

九十郎殿は斬らずにすませたいみたいですし、天人殿が物凄い形相で睨んでいますし

……

この辺でやめにして、見送ってくださいませんか？」

歌夜が周囲を見回す。

動いている者は誰もいない……自分以外の全員が死ぬか気絶していた。

「……葵様をどうするつもりですか？」

主君を害するつもりならば、命懸けで抵抗するぞ……そんな決意を込め、歌夜が九十

郎にそう尋ねる。

「追いかけてこないなら正直どうでも良い」

九十郎はそう答える。

その言葉は九十郎の確かな本音であったし、それは歌夜にも良く分かった。ここで抵抗をしても死体が一つ増えるだけか……と、小さくため息をつき。「分かりました」

静かに剣を鞘に納めた。

「てな訳で劍丞後は頼んだ、俺達は逃げる。

さっきのでつかい拳で人が集まって来そうな気配もするしな。

おい新戸、そろそろ行くから起きろ」

刀にベツトリと付着した血糊を拭きながら、九十郎が劍丞達に別れを告げる。

「ちよつと待つてくれ、一体何がどうなっているんだ!？」

「葵の部下達だが、この糞ニートがやったミンチより酷えのはともかく、

半分くらいは今すぐ手当すれば助かりそうだ。

その辺含めて諸々頼むぜ、主人公様よ。

それと俺と葵の関係については説明に時間がかかるからまたの機会な」

酷い丸投げと共に、死屍累々とししか表現できない酷い空間を後にする。

「息災で、今川殿」

「全く、とんだ寄り道だったな」

走り去る九十郎を追い、貞子と信虎、新戸も走り出す。

「…………お前は、何者なんだ？」

離れていく九十郎達に…………いや、紅い髪の鬼に対し劍丞がそう声をかけた。

腰に佩く刀が、今もなお過去にない反応を示していた。

劍丞には、目の前にいる紅い髪の鬼が今まで見て、戦ってきた存在と同じだとは思えなかったのだ。

「新田劍丞…………お前は何故、その劍を持っている？」

お前はどこで、どうやってその劍を手に入れた？

教えろ、そうすればオレの名前、教えてやる」

その時、最後尾を走っていた紅い髪の鬼が立ち止まり、振り返り、そう尋ねた。

「この劍…………俺のおじさんの家に置いてあった劍で、

この世界に飛ばされた時に持っていたもので…………」

「おじさん？ 誰だそれは？」

「北郷一刀」

「北郷一刀…………例の一族か？ 何でそんな所に…………」

「君は何者なんだ!!? 教えてくれ!!」

「井伊直政だ、オレの名は井伊直政」

「井伊……直政……徳川四天王の……？」

「そう呼ばれている世界もある」

それだけ言うと、新戸は九十郎達を追い、再度走り始める。

「待ってくれ！ 君はこの剣を知っているのか!? この剣は一体何なんだ!？」

「トールギスだ!」

「と、とおるぎす?」

ガンダムWを見た事が無い劍丞がその言葉の意味を図りかねている間に、

新戸は凄まじい速さで逃げ去っていく。

新戸的には、全ての劍魂の原型になった試作機だという意味で言ったのだが、当然のように劍丞には通じていない。

「とおるぎす……何の事だ……?」

新戸が劍丞の視界から消えた瞬間、ピカピカと眩く輝いていた剣が沈静化した。

後に残ったのは、倒れ伏す三河侍達、状況についていけず、呆然とする詩乃……

「ああそうだ竹中半兵衛、お前に伝えなきやいけない事があるのを忘れていた」

劍丞と新戸が何やら喋っているのに気がついた九十郎が、全力で走りながら呆然とする詩乃に向かって叫んだ。

「千年巨人（ミレニアム）には気をつける!」

九十郎は何の意味も無くそう叫んだ。

なお、千年巨人とはかつてロンドンを無駄に震撼させたバネ足ジャックが、ノリと勢いに身を任せてでっち上げた組織の名……といっても某所の聖杯戦争スレの話だ。

当然ながら何の実態も無く、何の意味も無い。

「み、みれにあむ……みれにあむとは一体……う？」

盛大に混乱する詩乃と劍丞を背に、新戸と九十郎が視界から消える……

「九十郎、またね……なの。」

あの危ない鉄砲を作るのだけはどうしても嫌だったけど……でも、ありがとうなの」
そして九十郎達によってここまで送り届けられた鞠が、小さく小さく感謝の言葉を告げていた。

犬子と柘榴と九十郎第56話『前田利家終了のお知らせ』

「九十郎殿、ようやく懐かしの春日山城が見えてきましたよ」

「ちよつと駿河まで行つて戻つて来るだけのつもりだったのに、

随分長いこと歩き回つちまつたよな」

ある日の昼下がりの事、今までずうくつと国元を放置して駿河、甲斐、そして尾張を巡る大旅行をしていた貞子と信虎と新戸と九十郎の4人が、とうとう越後に戻つてきていた。

SAN値直葬されそうな怪物に襲われたり、温泉の醸し出すエロティカルな雰囲気、呑まれ、うっかり粉雪達と一線を越えそうになり、三河侍達とチャンバラをしたり……色々あつたが、なんやかんやで誰一人欠ける事無く旅は終わった。

「尾張の樂市で買ってきたお土産、気に入ってもらえるでしょうかねえ」
「たぶん大丈夫だろ、とりあえず練兵館に……」

一行がそんな風にこれからどうするかを話し合っていると……

「………ワウン」

九十郎はふと、誰かに見られ、誰かに呼び止められたような気がした。

「貞子、今何か言ったか？」

「へ？ いえ、特に何も……」

「じゃあ信虎か？」

「くだらん事を言っていないで、早く我にドライゼをよこせ」

「何も言っていないか……誰かに呼ばれたような気がしたんだが……」

九十郎が周囲を見回しても、その目に写る風景はいつもの城下町であつて、特に不自然な所は無く、九十郎達に注目している者も無く……一匹の子犬が尻尾をブンブンと振りながら、九十郎を足元から見上げているのみであつた。

「まさかお前が俺を呼び止めた……なんて事は無いよな？」

「ワンツ!!」

九十郎が話しかけると、子犬は嬉しそうに吠え、さつき以上に勢い良く尻尾を振りまくつた。

「よしよし、お前可愛い奴だな」

九十郎が足元の子犬を撫でる。

「クウーン、ウウ……」

子犬は気持ち良さそうに喉を鳴らし、九十郎の太くゴツゴツした指に身を任せていた。

「屑郎、たぶんそれは……」

新戸が何かを言おうとした直後……建物と建物の間を駆け、人込みを掻き分けながら、柘榴が九十郎達の前にやってきた。

「お〜い、急に走り出してどこまで行く気つすか〜!?」

そんな台詞を叫びながら九十郎達の前に立ち……

「ああ、やっと追いついたつす……急にどうしたつすか？」

いつもはもつと大人しいのに……て……」

柘榴と九十郎の目が合った。

「よう柘榴、元気にしてたか？」

「あ……ああ……く、九十郎……すか……？」

柘榴は一瞬泣きそうな顔になり……次第次第に怒りと憤りに満ちた顔になり……

「今まで一体どこをほつつき歩いてたつすかああああーっ!!」

九十郎をグーでブン殴った。

「へぶうっ!!」

九十郎がなんとも情けない呻き声をあげ、車田正美の漫画の如く空高く舞った。

残当である。

……

.....

.....

「2人とも、そこで正座しなさい」

春日山城に連行された屑一行を待っていたのは、めっさ怒っている美空であった。

「お、おい柘榴……」

九十郎は咄嗟に柘榴に救援を求めようとするが……

「今回ばかりは柘榴も怒ってるっすよ」

柘榴もめっさ怒っていた。

「……弁護士を呼んでくれ」

「言葉の意味は分からないけれどとにかく却下するわ」

「だよなあ、戦国時代の人間に弁護士とか通じる訳ねえよなあ……」

結局、春日山城の評定の間で九十郎、貞子、信虎、そして新戸の4人が正座する羽目になった。

「なんで我まで……」

信虎はぶつくさと文句を言っている。

ドライゼ銃という餌が目の前に釣り下がっていなければ即座に暴れ出していただろう。

「御大将、勢いで一緒に正座させたとすけど、この人誰つすか？」

「私も知らないけど……柘榴の知り合いじゃないの？」

「いや、初対面つすけど」

「こう……何か新しい力に目覚めたり何なりして急成長した鞠とか……」

神啓介も裸足で逃げ出す程のの大変身である。

「どこをどう成長したらあんなに目つきが悪くなるつすか。」

顔色変えずに万単位の間殺せる生粋の殺人者の目つすよアレ。

髪も真っ白になってるつすし」

「殺意の波動に目覚めて……」

「絶対ありえねーつす。誰がどう考えても、絶対」

「穏やかな心を持ちながら激しい怒りによつて目覚めた伝説の戦士に……」

「御大将は何が何でもアレを鞠だと言い張るつもりつすか？」

「いや、そういう訳じゃないけど……」

正座する3人の前でひそひそと美空と柘榴が密談をする……勢いで一緒に正座させたが、もしかして正座させちゃ拙い人だったんじゃないかと、急に不安になってきた。

「ごほんつ……失礼ですがどちら様でしょうか？」

美空が珍しく敬語を使い、正体不明の女性に誰何する。

今更取り繕っても火葬後の心臓マッサージ並みに手遅れであるが。

「我は武田信虎だ」

「信虎殿のようです」

「なんと信玄マママンだ」

信虎、貞子、九十郎の3人が口々に同趣旨の言葉を述べる。

美空と柘榴がそんな3人の言葉を理解するまでたつぷり10秒はかかった。

「ちよつと待って、お願い待って、なんでそうなったの。」

言葉の意味は理解できたけどなにがどうしてそうなったのか全く理解できないわ」

「晴信を殺すのにドライゼ銃が使えらと思つたので来た、それだけの話だ」

「ドライゼ銃やるって言つたらなんかついて来た」

「ウチの機密中の機密をきび団子みたいにホイホイ渡すなあっ!？」

美空、ツッコむ。

頭は混乱の極みにあつたが、彼女のツッコミキャラとしての本能がツッコミを放棄させなかつた。

嫌な本能である。

「銃だけ持つて行つてどうするつもりですか？ 晴信を狙撃する気ですか？」

「まさか、現実問題として、今の我では晴信は討てん。

アレは腹が立つくらい優秀だからな、護衛が途切れる瞬間は無い。

故に、晴信を討とうとしているどこかしらに潜り込むしかあるまい」

「屋敷に忍び込んでヘル・ストリンガーとかできないのか？」

「へるすとりんがとは何だ？　どんな効果だ？　いつ発動する？」

「それで晴信を殺せるのか？」

「いや、丈夫な紐で首をこう……キユツと絞めて、ぐいつと吊り下げて、

脊椎をゴキヤツてヘシ折るヒサツ・ワザ的な……」

「この男は信虎を何だと思っているのであるのか。」

「一瞬でも真面目に聞こうとした我が間抜けだった……」

晴信相手にそんな真似ができる奴がいてたまるか」

そんなリアルアサシンクリードみたいな真似ができる者が、複数人一般生徒として普通に通学している所が大江戸学園の魔境たる所以である。

多い時には週一ペースで悪人がヘル・ストリンガーされたり、エナジーピックされたり、ラスト・テストメントされたりしているのに、一向に悪人が減る気配が無い所も大江戸学園が魔境たる所以である。

他にも私の顔を見忘れたのとか、この印籠が目に入らぬかとか、この桜吹雪を忘れた

とは言わせねえとか、てめえら人間じやねえとかされたりしているのに、一向に悪人が減る気配が無い所も大江戸学園が魔境たる所以である。

どうなってるんだあの学園。

「つまりドライゼ銃を持って他国に走るつもり？」

そんな事を私がさせるとでも思っているのかしら？」

「それも考えたが、やめにした。

現状、私の見立てでは越後の長尾景虎が最も晴信を殺すのに適している。

長尾美空景虎、ドライゼ銃を扱う部隊を我に預ける、そうすれば我は晴信を殺す。

私の全知全能をつて必ず殺す、刺し違えてでも殺す。

どうだ？ 貴様にとって悪い取引ではあるまい

可能であれば甲斐を正当な主の元に……そう言いたいところではあるがな。

まあ、そこまでは求めんよ」

「それは晴信を殺すまで協力してくれると解釈して構わないかしら？」

「アレを殺した後は甲斐を取り戻すために動く。

長尾景虎に力を貸す事でそれが実現できるのであれば、殺した後も変わらず力を貸そ

う」

「分かった……ええ分かったわ、考えておく」

信虎をどう扱うか……一步間違えれば内側から食い破られかねない劇毒を呑むか吐き出すか。

美空はいきなり相当重い判断を迫られ、胃壁がガリガリ削られている気分になったが、表面上は平然とした態度で別の話題に移る。

「ところで……さつきから姿が見えないけれど、鞠は今どこにいるの?」

「劍丞のトコだろ」

「それは織田久遠信長の夫の新田劍丞の所にいるという意味かしら?」

「ああ」

九十郎は何当然の事を聞いてるんだ、大丈夫か? とでも言いたげな視線を美空に向けた。

美空も当然、その憐れみを帯びた視線に気づき、目の前の筋肉を絞め殺したくなった。いつそ絞め殺した方が美空は平穩に生きれるのではなからうか。

「何故、劍丞の所に?」

「届けた」

「というか、半ば無理矢理今川殿の世話を天人殿に押し付けましたよね」

「何やってるのよ貴方!」

「大丈夫だろ、主人公だし」

「貴方の新田劍丞に対する信頼は一体どこから来るのかしら……？」

いえ、それより……結局貴方達、何処に行つて何をしてきたのよ？」

美空は聞いた、とうとうその言葉を口にしました。

内心では胃壁がガリガリ削れるような話が飛び出るんじゃないかと思つていたし、できれば聞きたくない、聞くにしてもできるだけ後回しにしたいとも思つていた。

しかし、事ここに至つては聞かざるを得なかつた。

「信虎がさ、駿河に鬼が出るとか何とか言つて……」

「今川殿が今すぐに駿府館に戻るつて言い出したんですよ。」

放つておいたら一人飛び出しかねない勢いで」

「放置して野垂れ死にされたら目覚めが悪いし、美空に許可取る時間も無さそうだしで、

仕方ねえから俺と貞子で駿河まで護衛しようつて事にしたんだよな」

「有料で、ですけど」

「当たり前だ、俺が無償で人助けなんてするかよ」

本気で死にそうなのが目の前にいた時は、結構頻繁に無償の人助けをしているのだが、九十郎は無意識の内にそんな過去から目を背けた。

「まあ、鞠の護衛のために越後から離れるつてのは分からなくもないわ……」

それで貴方達、誰かに相談とか、伝言とか、書置きとか考えなかつたの？」

報連相は社会人の基本である。

そう問われた貞子と九十郎は顔を見合わせ……

「……言われてみれば」

「……忘れていましたねえ」

美空は自分の胃壁がガリガリと削れていく感覚に襲われた。

お前は自分の重要性が分かっているのかと叫びながら九十郎をブン殴りたい気分だった。

「で、いざ駿河に行ったら鬼だのS A N値削れそうな肉塊とかに襲われて、

命からがら逃げだしてきて」

「甲斐の典厩殿と一緒に温泉でゆっくり旅の疲れを癒して……」

「用心棒代が払えねえって言うもんだから、

腹いせに鞠を強姦して処女奪ってやろうとしたけど粉雪に止められて、

交渉の結果山本勘助のサインで手を打ったな」

「まあ素敵、ツツコミどころ満載の旅路ね、私を過労死させるつもりかしら？」

「別にツツコミ入れても良いんだぞ」

「ツツコミだけで日が暮れるわよ！ 何やってんのよあんたら!？」

他人が滅茶苦茶大変な目に遭ってるのに敵と温泉入ってるんじゃないわよ!!

鞠から用心棒代せびろうとするんじゃないわよっ！

しかも払えないから強姦するって何考えてるのよあんたあっ!!」

美空は叫んだ、ガオーツと吠えた。

喉が枯れ、血管が千切れ、心臓が破れんばかりに叫び、ツツコミを入れた。

そして美空は思った、自分の代わりにツツコミを入れてくれる人が居るのなら、三顧の礼どころか草履を舐めてでも迎え入れようと。

「そして今川殿を天人殿に押し付けに尾張に行きました」

「意味が分からないわ」

「あいつ主人公だし、あいつに任せりゃ穏当な所に行きつくだろう」

「だからその信頼はどこから……」

いえそれよりも、鞠を剣丞に明け渡す話、私に相談はしたの?」

そう聞かれると、九十郎は貞子を、貞子は九十郎の顔をじい〜と見つめ……

「貞子がノータイムで賛同してきたから、てつきり美空の了解があると思った」

「九十郎殿があまりにも自然に今川殿の身柄を渡すと言い出したので、

てつきり美空様の承認があるのかと思いましたが」

「何考えてるのよ馬鹿! 馬鹿あつ! この……ええと……馬鹿っ!!」

美空は再び血管が浮き出る程に叫んだ。

叫んでもどうにもならないとは理解しているが、美空のツツコミ魂が彼女に沈黙を許さなかった。

「そして三河の松平元康殿とチャンバラしてきました」

「俺にしては珍しく大勝利だったよな。」

開幕直後に本多忠勝を戦線離脱させたのが勝因かな」

「その後、榊原康政殿を抑えて頂けたおかげで、私は雑魚掃除に専念出来ました。」

大変だったでしょう？ あの人かなりの手練れでしたし」

「ははは、師匠つてのは弟子の前に立ち塞がる巨大な壁になってやらなくちゃだからな。」

綾那の奴はあつという間に飛び越えていきやがったが」

そんな事を言いながら貞子と九十郎がわっはっはっはと豪快に笑い合う。

2人の笑みとは対照的に、美空の顔はどんどん暗くなつていく。

「貴方……貴方達……私に何の相談も無しに戦端開いたの……？」

松平つて織田と同盟している所なのよ……」

「ご心配なく、先に襲つてきたのは向こうです」

「安心しろ、正当防衛だったからな」

「何をどう安心しろつてのよあんたらあつ!!」

美空は思った、このままではツツコミのしすぎで死ぬと。

血圧とかが高くなって死ぬと。

「……良おし！ いや全然良かないけど過ぎ去った事は仕方が無いわ。

未来の事を考えましょう、そうしましょう」

そして美空は唐突かつ強引に話を打ち切った。

これ以上ツツコミを入れたら血管が千切れて死にそんな気もしたし、現在、美空達には非常に重大な問題に直面しており、九十郎の力を必要としていたからだ。

「おい美空……何かあったのか？」

そんな美空の様子に違和感を覚えた九十郎がそう尋ねた。

「ねえ九十郎、過去の事をとやかく言うより、未来に向かって歩みを進める方が大事よね」

「……おい美空、何をやらかした」

九十郎は盛大に目が泳いでいる美空を問い詰めた。

いつそ清々しいまでに自分のやらかした独断専行を棚に上げていたが、この男の平常運転である。

「仲間というのは許し合う事から始まるものだと思わない？」

「何をやらかした」

「世の中不可抗力つてあるつすよね、九十郎」

柘榴がにこやかに……不自然な程ににこやかに笑ながら九十郎の肩に手を置いた。

「おいちよつと待て、柘榴お前も共犯か、何をやらかした」

美空と柘榴が物凄く物凄おしく気まずそうに視線を交わし、そのまま無言で見つめ合う。

「……犬子はどこだ？」

九十郎がそう言うと、美空と柘榴の肩がビクンと強張った。

そして2人は少し震えながら指さした……きつきからずくと九十郎に身体を擦り付けている子犬を。

「えつと……冗談はその辺にして、犬子はどこだ？」

九十郎は途方も無く嫌あくな予感をしながら、それから目を背けるかのように尋ねる。

美空と柘榴は視線を盛大に泳がせながら、再度子犬を指さし……

「……それよ」

「それが犬子つす」

九十郎が突き付けられた事実を信じられず、信じ切れず……無意識の内に子犬のお腹の辺りを撫でて、気持ちよさそうに鳴く子犬の瞳が、犬子のものに良く似ている事気がついだ。

「……マジかよ」

「マジよ」

「マジっす」

「うっっかり瑠璃丸を踏み殺しちゃったんで、

コスプレした近藤さんを瑠璃丸だと言い張る的なアレか？

そのネタが分かるのは銀魂の読者だけである。

「何の話だかわからねーっすけど、マジで犬子っす」

九十郎は信じられるかと怒鳴りつけたい気分になったが……基本ノリと勢いで生きる美空と柘榴といえど、こんな悪趣味な冗談は言わないだろうと思いなおす。

「詳しく話を聞かせろ」

美空と柘榴が視線を交わし、しばしどう説明したものかを考え込む……

「貞子と九十郎が急に姿を消してから、柘榴達で捜索隊を組んだっす。かなりガチな

奴を」

……長い躊躇の後、先に口を開いたのは柘榴であった。

「武田か北条にらちされたじゃないかって本気で心配したのよ。

軒猿達にもこの件を最優先で調べなさいって命令出して」

「おいおい、何でそこまでするんだよ」

「武田の歩き巫女や北条の風魔忍軍が関わってたら、

それくらいやらないと手も足も出ないのよ。」

それと貴方は自分の重要性を理解しなさい、替えがきかないって意味では私以上よ」

「小田原城とドライゼ銃が合わさったら手がつけられねえっすしね」

「武田の騎馬部隊にドライゼが合わさったら……あら、馬の上で銃って狙えるのかしら？」

「ああ、竜騎兵か……ぶっちゃけネタ装備だな、絵的に映える所くらいしか利点が無いぞ。」

騎兵の利点である突破力と、銃の利点である習熟の容易さが同時に消え失せる上に、発砲音で馬が驚いて暴走する危険もあって、しかもコストが凄まじい事になるからな」

「何にせよ、武田や北条にドライゼやハーバー・ボツシュが漏れる前に、

早急に九十郎を探し出さなければならぬと思つて、探し回つたのよ。
そりやもう必死こいて探し回つたわ」

「柘榴や御大将も頑張つたっすけど、一番必死になつて探したのは犬子だつたっす。」

不眠不休で、倒れちまうんじゃないかって心配になるくらいに必死に探してたっす」

「だけどそんな犬子の覚悟と決意をあざ笑うかのようにならな」

九十郎の情報はまるで集まらなかつたわ……」

「まあぶつちやけ、鞠と一緒になつて駿河に行つてゐるなんて思いもしなかつたからつすが」

「事情を話す余裕が無いくらい切迫した状況だつたつて思い込んでいたからね」

「お互い過ぎ去つた過去の事は忘れようぜ」

「そうね、忘れましょう。」

いつまでたつても有力な情報が集まらず、日に日に犬子はやつれていったわ。

このまま衰弱死してしまふんじゃないかつて本気で心配するくらいに……

そうしたらあの娘、ある日の夜、私と柘榴の前でこう呟いたのよ……」

「犬子が悪いんだつて……私が前田利家だつたから、九十郎が離れたんだつて……

見てて気の毒になるような、暗あぐい顔でそう言つてたつす」

「それで……それで、私と柘榴が、あの娘に何て声をかけようかつて、

どうやつて励まそうか考えて、考えていたら……」

「信じてもらえないかわかんねーつすけど、急に犬子の身体が縮んでいったつす。

身体が縮んで、全身の体毛がわしやわしやくつて伸びていったつす」

「そして気がついたら……」

犬になつていたの、確かに犬子は私達の目の前で犬に変わつていたの」

「そう……か……」

九十郎はそんな馬鹿とか、そんなのは嘘だとか、そういった事を言いたかった。言いたかったが……美空と柘榴の目は、真剣そのものだった。

嘘とか、冗談とか、そういった類が一切無いと確信できた。

美空と柘榴は、本当に見たまま、感じたままを自分に伝えているのだと……

「たぶん御家流の暴走だと思っただわ。」

能力が発現したばかりの頃って、時々本人の意図から外れた現象が生じる事があるから。

「だけど戻す方法は誰にもわからなかったわ」

「九十郎がいなくなったのがきっかけて発現したつす。」

だから九十郎が戻ってくれば、犬子も戻るかもしれないって……

いや、きつと戻るはずだって思っただつす」

「私達は九十郎を探したわ、必死になって……本当に本当に必死になって探したわ。まさか尾張で新田劍丞に鞠の身柄を渡したり、

三河勢と斬り合っていたりしてなんて思いもしなかったけどね」

「正直すまんかった」

「その……本当にすみません、反省します」

「九十郎が戻って来たって聞いて、本当に嬉しかったつすよ。」

武田とか北条に捕らわれてなかった事も嬉しかったつすけど、

これで犬子も戻るんじゃないかって思ったつすから。ただ……」

「ええ……」

その場にいる全員の視線が子犬に集まる……子犬は嬉しそうに九十郎に擦り寄り寄り寄り寄り、人間になりそうな気配は全く無い。

「戻ってないつすね……」

「ええ、戻らないわね」

「どうするつすか御大将、他に犬子を戻す手段なんて思いつかねーつすよ」

「私だつて手詰まりよ。人間が犬になるなんて状況、私だつて初めてなのよ」

「このまま死ぬまで犬のままなんて、犬子が哀れでならねーつす」

「そんな事は分かつてるわよ！ 犬子を元に戻したいのは私だつて一緒なのよ！」

「それは……それは柘榴だつて分かるつすけど……」

意気消沈といった様子で、美空と柘榴が言葉を詰まらせる。

犬子が無防備に、能天気な、そして無邪気に九十郎の体臭を嗅いでいる事が、かえつて美空達の心を重苦しくしていた。

「……冷静になつて考えたら、今回の一件、柘榴達何も悪くないつすよね。」

率直に言つて不可抗力つすよね」

「良く考えたらそうよね。」

間違い無く伝言も書置きも残さずに行方を眩ませた九十郎が悪いわよね」

「九十郎、早急にどうにかしなさい」

「九十郎、マジでどうにかしてほしいつす」

美空は高圧的に、柘榴はやや低姿勢になつて同じ事を九十郎に頼んだ。

九十郎としても、できれば犬子を元の姿に戻したいとは思つたが、今何がどうなつて
いるのかも分からない状況では、どうすれば良いのかも分からない。

「新戸、何か分からないか」

九十郎にしては珍しく、素直に新戸に助けを求めた。

「スタンド能力は無意識の才能だ……と、言ったのはジオルノ・ジョバーナだったか」

「初流乃……汐華……？ 何よそれ？ 外人？ 歌？」

「生命を生み出す御家流を使う奴だ」

「生み出した生物に攻撃を加えると跳ね返ってくるんだよな」

「なにそれこわい」

ただし漫画の話である。

「そして後でもっとヤバい能力に目覚める」

「真実に到達させない能力……もし戦う事があれば、

俺の神道無念流でも成す術も無く敗れるだろうな、戦う事があれば」

「なにそれこわい」

重ねて言うが、漫画の話である。

「そのおつかない能力の人が、犬子の事を何か言ってたつすか？」

「御家流も本人の無意識の才能という意味では、スタンド能力と同じだ。

本人の魂の在り様が、発現した能力を左右する事がある。

残虐な奴には残虐な能力が、冷たい奴には冷たい能力が、

臆病な奴には臆病な能力が発現する事が多い……例外はあるが」

「それってつまり……犬子は魂の在り方からして犬だったって事つすか？」

状況が状況とはいえ、酷い言われようである。

「いや、たぶん違うと思う。たぶんだが……強い願望が魂を歪めてしまったのだと思う。

犬子が犬に変わってしまったなんて、オレの……

いや、オレ達を知る限り、無かった筈だから」

「強い願望……」

「稀に魂を歪める程に強い強い願望が、御家流を発現させる事がある。

自分よりも優れた誰かに全てを丸投げしてしまいたいという願望を抱き、自分の上位互換ともいえる存在を呼び寄せる御家流を発現させた信長。

母親が欲しい、母親に甘えたいという願望を抱き、

先祖達の靈魂を呼び出す能力を発現させた晴信。

小波の場合は、生き別れになった妹ともう一度話がしたいと……」

「ちよつと待て、今お前なんと言った？」

そこで、今まで興味無しという態度を崩さず、ずっと黙っていた信虎が口を挟む。

「小波には姫野という妹が……」

「違う、その前だ」

「武田晴信が、母親が欲しいという願望を持っていた事か？」

「ぶふうっ！」

新戸がそう告げた瞬間、信虎が嘖き出し、そのまま腹を抱えて笑い出した。

「ふ……ふあつはつはは！ あはははははははつ!!」

は、母親だ?!? 母親が欲しいだ?!? アレがか!?

実の母親である我をその手で追い出したアレが!? ははははははははつ!!」

畳をバンバンと叩きながら大笑いする信虎に対し、美空達はそろってドン引きして

いた。

「御大将、あの人お母さんには向いてないっす、誰がどう見ても、絶対」

「私の母にも色々問題はあったけど、ここまで酷くは無かったわね」

「反面教師にでもするのが無難ではないでしょうか」

美空、貞子、柘榴は信虎の態度にドン引きである。

「つまり……犬子は何かしらの願望があつて、

自分自身を犬に変えちまつたつて事っすか？」

「ああ、そうだ」

「願望っすか……」

「自分の魂を歪めるような強い願望……それって、アレの事よね？」

「まあ、他に考えられねーっすよね。

九十郎が急にいなくなったのが切欠っすから……」

美空と柘榴が視線を交わす。

次に相手が言う言葉も、次に自分が言うべき言葉も分かっていた。

「前田利家をやめたい」

「前田利家をやめたい」

美空と柘榴の声が重なった。

九十郎は犬子が前田利家だからと結婚を拒否した。

その日以来、犬子は鬼気迫る表情で、自分を痛めつけるように仕事に打ち込んでいた……少し考えれば、すぐに分かる事だ。

そして2人が……いや、九十郎を除く全ての者が九十郎をじとくとした非難の色を含んだ視線を向ける。

お前が原因なんだから、お前がどうにかしろよという視線だ。

「そ……そもそも、犬になつたつて言つても実害はほぼ無いんだから。」

自然に戻るのを待つんで良いんじゃないかねえのか？」

九十郎は苦し紛れに最低な提案をした。

「駄目よ、実害は出ているわ」

「どんな害だよ？」

「現状、柿崎家の家計収支を正しく把握してるのが犬子1人つす。

このまま犬から戻らずに秋を迎えたら、年貢の把握と計算が途方も無く面倒臭いっす」

「我慢しろよその位、去年まで犬子抜きでやってたんだろ」

「犬子が来てから、去年までのどんぶり勘定っぷりが浮き彫りになつたつす。

今までのやり方をもう一度つてのは……」

「いやそれよりも重大で急を要する実害も出てるつすよ」

「犬になった犬子に噛まれると……噛まれた方も犬になるのよ」

「御大将は6回、柘榴は2回噛まれて犬にされたつす」

「いや犬になるって、今のお前らは普通に人じゃねえか」

「犬子が寝ると元に戻れるのよ」

「じゃあ大した実害無いじゃないか」

「大ありつすよ！ 御大将じゃなきゃできない仕事がある時に、

肝心の御大将が犬にされてたら普通に困るつす！

それに……それに、その……」

そこまで言うと、竹を割ったような性格の柘榴が、珍しく言葉を濁す。

顔が赤くなり、視線が泳ぎ、同じく顔を赤らめている美空の方をチラチラとのぞき見していた。

「……犬になっている間は、頭の中まで犬並みになるのよ」

しばしの沈黙の後、美空が眉間に皺を寄せながらそう告げた。

「しかも人に戻った時、自分が何をしでかしたかすっかりと覚えてるつすよ」

柘榴もまた、過去に見た事が無い程に真剣な表情でそう訴えかける。

「城下町を素っ裸でお散歩したつす。」

しかも行きつけの定食屋のおやっさんの目の前で、

片足上げてお〇んこを丸出しにして、放尿したつす。

もう二度とあの店に行けねえつす……それどころか、お嫁にも行けねえつす……」

柘榴が滝のような冷や汗をかきながらそう告白する。

「気にするなよ、その時は犬だったんだろ」

九十郎が珍しく優しい声をかけた。

「練兵館にも小便かけたつす」

「てめえ！ この野郎！ 俺の道場に何しやがる!!」

そして瞬間に掌を返した。

「何か……こう……柘榴が生きていた証的なもんを残したかつすよ!」

「他ので残せよ! 他ので! 何でよりもよつて小便で残そうとするんだ!」

「あの時はそういう気分だったつす!!」

「柘榴はまだマシよ……私なんて、近所のオス犬に種付けされかけたのよ」

……瞬間、空気が凍り付いた。

「ち〇こをおつ勃ててたオス犬が、

犬になってた御大将の尻を抱え込むみたいに上にのしかかったのを見た時は、

本気で心臓が止まるかと思つたつす」

「幸い柘榴がすぐに来てくれたから、アソコに挿られる前にどうにかできたけど……」

「一瞬でも気づくのが遅かったらマジでやばかったつす……」

「あと四半時（約15分）も遅かったら……」

ああ、駄目、考えたくないし思い出したくもないわ」

「犬になつてる間は、後先考えられなくなるつすよね……」

「ええ、そうね……あの時の私はどうかしていたわ……」

あの時の私、本気でこいつの児なら産んでも良いかな……とか考えていたのよ。

この私が近所の薄汚い野良犬……

比喩表現でも何でもなく野良犬の児を産もうとか考えてたのよ」

「しかもそれすらもしつかり覚えてるつてのが強烈つすよね……」

「人間に戻った瞬間、自害しようとしたわ……止められたけど」

「半狂乱になって暴れる御大将を取り押さえるのはマジで大変だったつす」

「空と名月が泣きながら止めてくれなかったら、今頃は……」

やめましょうこの話、精神衛生上良くないわ」

「犬に変わった人に嘯まれても犬になる所も凶悪つすよね」

「ねずみ算的に犬化した人が増えてった日は大変だったわよね。」

あの時は本気で越後最後の日になるかと思つたわ」

「ああ、御大将と柘榴が2人とも犬にされた日つすか。」

事情を知ってるのが全滅して、被害が際限無く増えていったつすね……」

「あはははははは……」

「あつはつはつは……」

そして美空と柘榴が笑い出した。

口元は確かに笑っていたが、目が死んでいた。

「九十郎、一刻も早くなんとかしなさい」

「九十郎、一刻も早くどうにかするつすよ」

美空と柘榴が口をそろえてそう告げてきた。

拒否したら殺されるんじゃないかと思うくらい、真剣な……いや、追い詰められた目であった。

「お、おう……」

犬になった犬子を戻す手段なんてまるで思い浮かばなかったが、九十郎はそう答えるしかなかった。

犬子と柘榴と九十郎第57話『I love you、I

want you』

犬になった犬子を連れて、柘榴と新戸と九十郎は練兵館に戻ってきた。

首輪もリードも着けていないが、犬子は九十郎の傍から離れようとしなない。

なお美空曰く、首輪をつけたら不機嫌になつて近づくと人全員を噛みまくり、しかも事情を知っている美空と柘榴が真つ先に犬にされ、事態を收拾させられる者がいなたせいで、越後崩壊一步手前になつたらしい。

それ故に、九十郎が首輪やリードをつけようとしたら全力で止められた。

「ただいまうつと、ここに戻つてくるのも久々だな」

「ワウン！」

練兵館はしん……と静まり返っていた。

いつもなら、犬子が九十郎を出迎え、お帰りなさいと言つてくれた。

しかし今、犬子は犬になっていた。

「てか、なんか散らかつてないか、微妙に埃とかも……」

「柘榴達をほつぽいてふらあうつとどつかに行った誰かさんのせいで大変だったつす

よ。

搜索隊組んだり、風魔忍軍とやりあったり、犬になつちまつた犬子を見張つたり、犬にされた御大将を追いかけて町中を駆けまわつて……

流石に道場の掃除にまで手が回らねーつす」

「うぐつ、す、すまん……」

すまんて済むなら火盗も北町奉行もいらぬ。

「でも……戻つてきてくれて嬉しいつす。」

一時は本当に死んだか誘拐されたかつて思つたつすから」

「お、お……」

割とストレートに安堵の表情を見せられ、九十郎が照れる。

今までずっと非モテだったので、こういうシチュエーションに耐性が無いのだ。

「それよりこいつ……本当に犬子なんだろうな？」

後でやつぱり別の犬でしたくなつて……クロマティじやあるまいしそれは無いか」
照れ隠し半分に、そんなこの話の前提を真つ向から否定するような事を言い出す。

だから貴様は九十郎なのだ。

「九十郎、柘榴を信用しないつすか」

「そうは言わぬが、現実逃避の一つもしたい気分なんだよ。」

昔っから犬っぽいとは思ってたけど、まさか本当に犬になるとはなあ……」

九十郎はエルドランに土下座したら元に戻してくれねえかなあ……とか考えている。元気爆発ガンバルガーの見すぎである。

「新戸、何か分からないか、戻し方とか」

九十郎は珍しく井伊の糞女とも、クソガキとも、糞ニートとも呼ばず、新戸を新戸と呼んだ。

都合の良い時だけ友達呼ばわりするのは、人間としていかなものだろうか。

「そうだな……」

新戸が過去にした他の世界の虎松との交信で得た情報を、走馬灯のように超高速で再生していく。

しかし……過去に交信したどの世界の虎松も、犬子が自分自身の魂を歪めるほどの強い願望を抱き、自分自身を犬に変えてしまうような異常事態に遭遇はしていない。

別の世界の虎松と交信し、本来知りえない筈の情報を得る能力も、限界は存在する。

100分の1、1000分の1以下の確立で起きるレアケースや、この世界とあまりにも状況が違い過ぎる世界の情報は、それを知る虎松に辿りつく前に気力と体力と集中力が尽きてしまうため、知る事ができないのだ。

「サンドスターを当てれば治るかも……」

……と、けものフレンズにドハマリした虎松から、布教と称して何度も何度も何度も本編映像やら、舞台版やら、アプリ版やら、漫画版やら、オーイシお兄さんの仮歌やらを強制的に見せられた新戸が呟く。

なお、サンドスターなんて不思議物質は世界のどこにも存在しないし、あつたとしても犬から犬のフレンズに変わるだけで何の解決にもなりはしない。

「もつと現実的な案を頼む」

「それなら……」

新戸は少しの間、黙り込む……犬子を元の人間に戻す方法はある、しかしそれを言うべきか、言わない方が良いか……それを考えたのだ。

「記憶を閉ざしてしまえば、たぶん元の犬子に戻せると思う」
迷った末にそう告げた。

新戸は少し、辛そうに告げた。

「催眠術か？」

「ああ、そうだ……蘭丸程上手くはないが、オレも催眠術は使える。

屑郎の事を思い出せないようにすれば、たぶん犬子は人の姿に戻せる……たぶんな」

「そう……か……」

以前の九十郎なら、二つ返事でやってくれと答えただろう。

そして鞠と同じように犬子を劍丞に押し付けて、二度と関わらないようにしただろう。

いや、今でも九十郎はこう考えている、犬子は……前田利家のような価値のある女は、新田劍丞のような価値のある男と結ばれるべきだと。

だが今は……

「それをやって、犬子は大丈夫なのか？」

「……屑郎との思い出は、犬子の人格形成に大きな影響を及ぼしている。

屑郎の記憶を封じたら、以前とは性格が変わる。

神道無念流のように、屑郎から教わった技術も使えなくなる」

「性格がか……」

九十郎は以前、新田劍丞が犬子と粉雪と愛し合う夢を見た。

夢の中の犬子は、少し性格が違っていたような気がした。

子供っぽいと言うか、能天気と言うか、無邪気と言うか……九十郎が知る今の犬子よりもむしろ、犬千代と呼ばれていた子供頃の犬子に似ていたような気がした。

もしかしたら、あれが本来の犬子の性格なんじゃないかと思った。

自分の存在が犬子を歪めてしまったのではないかと……

「どう変わるのかは、分かるか？」

「分からない、人の心は複雑だ。

何がどう影響するのかは、やってみなければ分からない。だから……」

「俺に関する記憶を消したら、その後犬子がどんな性格になるかも分からないか」

「……ああ」

「考えさせてくれ……少し、少しで良い……」

九十郎は今、迷っていた。

九十郎は犬子に一言も相談せず、犬子を置いて駿河に向かった。

駿河から逃げ去った後も越後に真つすぐ戻らず、甲斐で温泉に入り、そして尾張に劍丞に会いに行つた。

心のどこかで、九十郎は犬子を避けていた。

だから何かと理由をつけて、越後に戻る日を遅らせていた……その事を、九十郎はたつた今自覚した。

「全く……酷い奴だよな、俺は……」

物憂げな表情で、九十郎は呟いた。

自分の身勝手さに吐き気がした。

そして思った……犬子はいっそ、自分と出会わなかつた方が幸せだったんじゃないかと。

そして思った……犬子はきつと、自分と出会わなかった方が幸せだったと。

たとえ性格が変わるとしても、たとえ自分の事を忘れてしまおうとしても……と……

「屑郎……」

そんな九十郎の思考を、新戸は察した。

超能力で思考を読む必要は無かった、顔を見ればすぐに分かった。

九十郎は今、犬子の記憶を消してくれと言おうとしていると。

「九十郎、諦めるのはまだ早いっすよ」

しかし、九十郎はそれを口に出すより早く。

新戸と同じように九十郎の考えを察した柘榴が口を挟んだ。

「だがな、これが一番……」

「言いたい事、色々あるっすけどとりあえず3つくらい伝えるっす」

九十郎の言葉を遮り、柘榴はコホンツと少し気恥ずかしそうに咳をする。

「何があつても、柘榴は九十郎の味方っすよ」

そして柘榴はそう言いながら、九十郎の背中をドーンツと叩く。

「……俺が美空を騙したり裏切ったりしてもか？」

「九十郎はそんな事をしないって信じてるっすから、そんな事を想定する必要は無いっす」

「ははは、逃げやがったなコンニャロウ」

「何言ってるっすか、真面目に答えてるっすよ。」

九十郎は意味も無く御大将に弓を引いたりしない、万が一弓退く事があっても、きつと九十郎なりの考えがあつてやるんだつて心の底から信じられるっす。

だから御大将への忠義と九十郎への愛は両立するっす、たぶん、きつと、

良おし！ 自己弁護は完璧っす！」

割と無理がある理論である。

その証拠に柘榴の言葉の端々に自信の無さが現れている。

「で、本音は？」

「その時の状況次第っすけど、基本九十郎に味方するっす」

「ははは、こいつ5分と経たずに前言撤回しやがった」

「もう、九十郎は時々意地悪っすよ」

柘榴がぶんすかと頬を膨らませる。

九十郎は少し、肩の力が抜けていた。

「で、2つ目に言いたい事……この先どんな事があつても、柘榴は九十郎を支えるっす」

「その時の状況次第で、だろ？」

「違うっす、今度は本気の本気っすよ」

「じゃあ俺が美空を殺しに行ったらどうする気だよ？」

「九十郎が正しいって思ったら、一緒になって暴れるっす。」

九十郎が間違つた事をしてるって思ったら、引っぱたいでも止めるっす」

「それが支える内に入るのかよ？」

「何があつても、柘榴は知らない、関係無いって言つて放り出す事だけはしないっす。」

一緒になつて暴れる時も、引っぱたいで止める時も、柘榴は本気の本気でやるっす。」

何があつても柘榴は九十郎と本気で向き合うっす」

柘榴そう言うのとニカツと朗らかに笑つていた。

「そか……」

眩しいな……そう、九十郎は思った。

「柘榴は凄いな……前田利家でも、上杉謙信でも、山県昌景でもないのに。」

ただの柘榴なのに、どうしてそんなに眩しいんだか」

「愛の力っす！」

「何だそりゃ？」

「じゃあ、雑草魂っす。偉人ばかりが歴史じゃねえっす。」

柘榴みたいな無名の誰かが頑張つて、偉人を支えてるっすよ」

「そうか……うん、そうかもな……」

そして九十郎はすつくと立ちあがる。

腹を括つたのだ……犬子ともう一度向き合う覚悟を決めたのだ。

「なあ柘榴、さつき言つてた伝えたい事、3つ目は何だったんだ？」

「へ……そりやあ……」

急にそう聞かれ、柘榴はうゝんとか、えゝとか、何やら曖昧な言葉を繰り返し……

「やっぱ伝えたい事、2つでしたじゃ駄目つすかね？」

「ははは、こいつ数も数えられないのかよ」

ノリと勢いで発言しているだけである。

「つまり柘榴が言いたい事は……そう、つまり……えつと……そうつす！」

九十郎は細かい事は考えずに、九十郎らしい言葉をどーんとぶつけるつす！

要はそれを言いたかつたつす！

あ、この言葉を柘榴が言いたかつた事の3つ目にしても良いつすか？」

そして柘榴はノリと勢いで自らの綻びを誤魔化した。

九十郎にも、柘榴は誤魔化してるだけだと思つたが……それでもなお、柘榴が自分を

助けよう、支えようとしてくれてる事だけは理解できた。

嬉しくて、嬉しくて、有り難い……そう思つた。

「ありがとな、柘榴。愛してる」

だから九十郎は去り際に柘榴を抱き寄せ、耳元でそう囁いた。

「柘榴も九十郎の事、愛してるっすよ。犬子の事も愛してるっす。

だから……だから信じるっす、九十郎ならどうにかするって。

記憶を消しておしまいなんて悲しい結末にはならねーって」

「ありがとな、柘榴。じゃあ行ってくる、犬子と向き合いにな」

そして九十郎は一步踏み出し、歩き出す。

九十郎への想い故に犬にまでなってしまった少女の下と……

……

……

……

「しかし……こうやって向き合ったのは良いか、何もしたら良いか全然分からねえな

……

どーんと言えって言われても、何をどう言えば良いのか……」

1分後、土間に正座してじいーつと犬を見つめるマツチヨがいた。

率直に言つて意味不明の情況である。

柘榴に背中を押され、ここまでやって来たのは良いが、九十郎は全くのノープラン

だったのだ。

「愚痴があるなら聞くぞ、犬子」

とりあえずそう伝えてみるも……

「ワンツ！」

犬子は耳をピンツと立てて、元気良く返事をしたが、特に愚痴を言い出す事は無かつたし、人の姿に戻るような事も無かつた。

犬になっている犬子に『愚痴』という言葉の意味が分かっているのかも不明だった。

「犬子、おいで」

九十郎が犬子に対して手招きをすると、犬子は即座に立ち上がり、九十郎の隣へ駆け寄ってきた。

「ワウン……クウ……」

まるで頬ずりをするかのように身体を押しつけてきた。

「肉球があるし、全身モフモフしてるし、胸はべったんこになって、

乳首がひーふーみー……おお、10個もある。

凄えな、本当に身体の構造が変わってるぞ」

九十郎はかつて自分好みのナイスでっばいがあつた場所に指を這わせ、お腹を撫でながら、犬子の惨状……もとい現状を再確認する。

見れば見る程、触れば触る程、今の犬子は犬だった。

「さて、どうするか……かえるの王子だの、眠り姫だの、マジシャインだのだったら、口づけをかわせば元に戻るだろうが、まあそんなに都合は良くないか」

犬とマッチョなブ男がキスをする……放送禁止一歩手前の光景である。

「まあ、何だ……正直に言っつて、お前をナメてたよ。お前の言う『好き』を軽く見ていた」

九十郎は犬子を抱きしめながら、そう呟いた。

「自分の魂すら歪めちゃうくらい、好かれてたとは思わなかったよ……」

そもそも、俺が他人に好かれてるって事自体が、あまり信じられていなかった」

九十郎はぼつり、ぼつりと……自分の心を発露していた。

「お前の気持ちを知っておきながらさ……何度も何度も好きだつて言わせておいて、

俺はついさつき、俺に関する記憶を消せば全部解決するんじゃないかって思ったよ。

それが一番手っ取り早いし、お前も幸せになれるって、

俺みたいな屑を前田利家が好きになるなんて間違ってるって……本当に屑だよな」

屑そのものの台詞である。

犬子の想いを丸つきり無視して、否定する屑そのものの台詞であるが……それでも、九十郎は犬子の幸せを願っていた。

九十郎は……

「好きだよ、犬子。今更かもしれないが、俺はお前が好きなんだ」
そしてそこで、九十郎の言葉が止まる。

何かを言おうとして、何も言えなくて……それを何度も何度も繰り返した。
何かが足りない、このままでは犬子は救われない、救えない。

それでもなお、九十郎は次の言葉が言えない……どうしても……

犬子の気持ちに向き合えない、自分の心に向き合えない……

『何があっても、柘榴は九十郎の味方つすよ』

九十郎の頭の中で、柘榴の言葉がリフレインする。

『この先どんな事があっても、柘榴は九十郎を支えるつす』

九十郎の頭の中で、再び柘榴の言葉がリフレインする。

『つまり柘榴が言いたい事は、

九十郎は細かい事は考えずに、九十郎らしい言葉をどーんとぶつけるつす！』

柘榴の言葉が……柘榴の真心が、九十郎の背を押した。

柘榴にとってはノリと勢いで言っただけの言葉であったが、その言葉に嘘偽りは一切無かった。

九十郎は奥歯をぎゅうつと噛みしめ、拳を握り、そして……

「ええいくそっ!! 好きだよ犬子! 好きに決まってるだろ!

好きだから辛いんだよ！ 好きだから幸せになってほしくて！
好きだから俺よりもふさわしい奴がいるんじゃないかって……

何でお前は前田利家なんだよ！ どうして惚れた女がよりにもよって前田利家なんだ！

理不尽だろうがコンニャロウ！」

九十郎が叫ぶ。

訳も分からずに叫ぶ。

自分が何を口走っているかなんて全く考えずに……その代わり、自分の心を素直に言葉にしていった。

「ワウン……」

九十郎の感情の発露を前に、犬子が戸惑い一鳴きする。

御家流の暴走により犬になり、知能の犬並みになった犬子には、九十郎はいきなり訳もなく怒鳴り始めた変な人……その筈だった。

「俺は……俺が犬子が好きなんだ……どうしようもなく好きで……」

でも俺は……長谷河みたいに、秋月に……秋月八雲に……

犬子が剣丞の元に行ってしまうんじゃないかって思って、怖くて、怖くて……

怖いんだよ!! 怖いから逃げたんだよ！ 悪いかコンチキショウツ!!」

九十郎は泣いていた。

大の大人が、マツチヨな大男が泣いていた、号泣していた。

情けない男である、情けない姿である、だから貴様は九十郎なのだ。

だが……

「ウウ……」

犬子の心が熱くなっていた。

次第次第に心臓の鼓動が早くなり、脳に血液が渦巻くような感覚がした。

「分かっている、お前が長谷河じゃない事は分かっている。

遠山とも違うって分かっている。 剣丞も秋月じゃない事も分かっている。

それでも怖いんだよっ！ 怖くてたまらないっ!!

前田利家みたいな歴史に名を残すような女が俺なんかには惚れる訳が無いって！

俺が……俺が前田利家と一緒にいれるはずが無いって……」

そして九十郎は慟哭した。

嗚咽を漏らし、これでもかかって位に情けない姿を晒した。

「頼む……頼む、犬子……俺を……俺に信じさせてくれ。

犬子が本当に俺を好きだって事を……信じさせて、安心させてくれ……頼むから

……」

そして九十郎は犬になった犬子に懇願し始めた。

情けなく、本当に情けなく泣きながらそう懇願していた。

「九十……郎お……」

犬になった犬子の口から、人の言葉が漏れていた。

犬子が九十郎の名を呼んでいた。

自分の魂を歪めてしまう程の好きになった男の名を……

「教えてくれ、犬子……お前は……お前は俺が好きなのか……？」

そして九十郎は犬子にそう尋ねた。

「好き、好きだよ九十郎。犬子は本当に本当に九十郎が好きだよ。」

好きで好きで仕方がなくて、頭がどうにかなりそうな程に好きなんだよ」

犬子が人の言葉を喋り、九十郎に自らの想いを吐き出した。

犬子の頬に涙が伝っていた。

そして犬子の身体が徐々に大きくなり、骨格の形が変わり、体毛が抜け落ち……人の

姿に変わり始めた。

「犬子、俺は……俺は情けない奴で、女々しい奴で、ハッキリ言って駄目人間だ。」

それでも……それでも犬子は、俺を好きでいてくれるのか……？」

「九十郎に駄目な所があるなんて、とつくの昔に知ってるよ。」

それでも私は九十郎が好きなんだよ、もうどうしようもない位に九十郎が好きなんだよ」

気がつけば犬子は、完全に人の姿に戻っていた。

九十郎と同じように……いや、九十郎以上に涙を流し、九十郎に抱きついていた。

自分の想いが10分の1でも、100分の1でも伝わるようにと。

伝わってほしいと心の底から願いながら、祈りながら、犬子は止めどなく涙を流していた。

「信じるぞその言葉ー。信じて良いんだなその言葉ー」

前田利家が俺みたいな屑を好きになるなんてありえない台詞、

本当に信じても良いんだな!？」

「信じてよ! お願いだから信じてよ! 私は九十郎の事が大好きなんだよ!」

時々屑だけど、そこも含めて大好きになったんだよ!!」

そして……犬子と九十郎は笑いあっていた。

素っ裸の少女を全力で抱きしめながらにやけるマツチヨ……通報案件である。

「なんか……叫んでたら少しスカッとしたな」

「落ち着いたら色々思い出してきたよ……」

犬子、もしかして美空様や柘榴に物凄い迷惑をかけてたような……」

「その辺の野良犬に処女捧げかけたって言ってたな」

「い……言ってたね……犬子、土下座何回やったら許してもらえるかな……？」

犬子は蒼褪め、ガタガタと震えていた。

犬子には自分が犬になって、本能の赴くまま好き勝手やってた頃の記憶がしっかりと残っていた。

「切腹を申し付けられたらまた一緒に逃げようぜ」

「ええ、また……」

「信長から戻ってくれて言われてるんだろ」

「柘榴はどうするの？」

「海賊らしく頂いていく」

「いつ海賊になったのさ？」

「男の子ってのはいつでも心に海賊を抱えてるんだよ。」

「いっただって一繋ぎの大秘宝的アトモスフィアを求めて、」

大海原を漕ぎ出したってどっかで思ってるんだ」

どんなアトモスフィア（雰囲気）だ。

「2人で美空に土下座しに行く前に……一発やらねえか、犬子」

「ええ、今？　ここぞ？」

「長旅で溜まつてるんだ、良いだろ？」

「う、うん……」

犬子と九十郎の唇が重なる……九十郎の手が犬子の全身を余す事無く撫でまわす……

「……で、どこに行こうとしてるんだ、柘榴」

そろり、そろりとその場から立ち去ろうとしていた柘榴が、九十郎に声をかけられてピタリと歩みを止める。

「い、いや……何か良い感じの雰囲気だったすし、柘榴はお邪魔かなと……」

「邪魔な訳ねえだろ、むしろこの場に柘榴がいない事の方が問題だね」

「そ、そつすか……?」

「犬子も同じ気持ちだよ、柘榴」

「いや、でも……」

「ハッキリ言葉にしないと分からないかな……」

九十郎は面倒くさそうに……いや、恥ずかしそうに頭を掻き、視線を泳がせ、しばし口ごもり……そして告げた。

「俺には柘榴が必要なんだ、傍にいてくれ」

今まさに犬子を抱こうとしていた男が言って良い台詞なのかどうかはともかく。

九十郎は本気でそう思っていた。

「も、もう……：……しようがないっすねえ……」

柘榴がちよつと照れながら、いそいそと服を脱ぎ、足元に畳む。

あんなありきたりな台詞で嬉しいと感じてしまう自分をチヨロいと思つたが、そういう屈がどうでも良くなるくらい、柘榴は柘榴で九十郎に惚れていた。

その後始まるのは、この世界ではありきたりな光景……夫婦の営みだ。

九十郎はこの日、一步前に踏み出した。

無論、かつて秋月八雲によつて受けたトラウマが1日や2日で完全に癒える事は無い。

決意の1つや2つで、九十郎が犬子を前田利家ではなく、ただの犬子と思えるようにはならない。

ただし九十郎は、この日犬子の想いに向き合う事にした。

犬子の言う『好き』の言葉を、信じようと思つた。

ただそれだけの事だが……九十郎にとっては大きな前進である。

大きな大きな……：……本当に大きな一步前進であつた。

ネタバレ満載 設定メモ

前提

劍丞の刀は何だったのか？

何故劍丞とセックスすると瘴気が散るのか？

何故劍丞は戦国時代に来たのか？

鬼子とはどんな存在だったのか？

エーリカを操っていた存在は何か？

何故明智光秀でありルイス・フロイスでもあるトンチキな存在が生まれたのか？

何故小波は姫野の名前をすぐに忘れるのか？

徳河創雲とは何者なのか？

何故大江戸学園は魔境なのか？

大江戸キャンノンは誰が、何のために用意したのか？

何故大江戸学園は劍魂なんて危険な代物を学生にホイホイと渡すのか？

斎藤九十郎

主人公（笑）

斎藤弥九郎十層Ⅱ斎藤九十郎。

ネーミングの段階からして屑。

元々は銀魂世界にぶち込む予定で創作したオリキャラ。

紅桜持った岡田似蔵に襲われて瀕死の重傷を負っていた桂さんをうつかり助けたせいで、道場が攘夷志士の溜まり場になってしまった悲劇（笑）の主人公にするつもりだったが、良い感じのプロットが組みなかつたので挫折。

放置したら死にそうな人は助けるが、放置しても問題なさそうな人は放置、または主人公（剣丞or万事屋）に押し付ける性格。

光璃

我は武田信玄、明日この世界を粛清する。

戦国時代の武田晴信とは別人になつてゐる事を強調するため、意図的にぶつ飛んだ言動をさせてゐる。

こいつ武田信玄ですと書くだけであらゆる言動をギャグにできるのは非常に便利。

九十郎の幼馴染にして屑1号。

担庵

元々銀魂世界にぶち込む予定で創作したオリキャラ。

元ネタは江川太郎左衛門英龍、葦山反射炉やお台場を造って過労死した人。

九十郎の幼馴染にして屑2号にするつもりだったが、屑臭はかなり薄い気がする。

胸も薄い。

北条早雲

あつぱれ！天下御免の徳河創雲と戦国恋姫の北条早雲が同一人物だったら………という妄想から全てが始まった。

トラックを暴走させて殺した九十郎の魂を別世界に移動させた、自称転生を司る神。

ある意味ではこの物語の主人公なのかもしれない。

剣魂

早雲がオーデインと戦うために作ったスーパーメカ。

ナノマシンの集合体であり、内部でこれでもかかって位の退魔の儀式が機械的に再現されている。

鬼や悪魔、妖怪、神や天使といった幻想の存在に威力を発揮する。

大江戸学園は剣魂の実験場でもある。

一般生徒に渡すのは流石に危ないので、大江戸学園の剣魂には一部例外を除きリミッ

ターがかけられている。

大江戸学園

オーデインとの戦いに敗れたもののしぶとく生き残っていた早雲が、オーデインと再び戦う準備をするために作った場所。

剣魂の実験場であり、優れた剣魂の使い手を育てるための訓練場でもある。

実験データを得やすくするため、意図的に揉め事が起きやすい体制にしている。

また、英雄の魂を集めるというオーデインの習性を利用するため、徳川吉宗や遠山景元の生まれ変わりを学園内に匿っている

大江戸キャンノン

オーデインを倒すために用意された切り札。

全ての剣魂の能力を束ねてぶつける。

当たればオーデインでもイチコロ、当たればの話だが。

剣丞の刀

早雲がオーデインと戦う時に用意した武器。

バルドルのムテキ能力を突破できる。

エグゼイドのムテキ能力はたぶん突破できない。

大江戸学園の全ての剣魂の原型になった存在であり、ナノマシンの集合体。

性能は最新の剣魂に比べると数段劣る。

早雲とオーデインの戦いの際に破壊されたが、オーデインが残骸を回収し、修復した。鬼と戦わせるため、オーデインが剣丞に渡した。

倫理プロテクトを解除しない限り、人間は傷つけられないように設計されている。

剣丞を効率良く鬼をやっつけるヒーローに仕立て上げるため、オーデインの手によって鬼を呼び寄せる機能と、新田剣丞とセックスをした女性から瘴気を払う機能が付加されている。

動力は電池。

オーデイン

ラスボス。

神様、全知全能ではないが人間が挑んで良い存在じゃない。

作者のイメージとしてはウルトラマンと同程度の強さ。

ゴモラとかゴルザ程度ならぶちのめせるが、ゼットンとかガタノゾーアとかが出てきたらちよつと厳しい。

とりあえず人間が挑んで良い存在じゃない。

ルーン魔術と呼ばれる秘術を使い、様々な超常現象を引き起こす。

英雄の魂を収集する習性があり、北郷一刀や新田剣丞を利用して、後漢末期の中国、戦

国時代の日本の英雄達の魂を収集する計画を進めている。

グングニル

オーデインの切り札、そうポンポン連発できるものではない。

これを使うという事は、オーデインが本気になったという事である。

作者のイメージとしては、スペシウム線と同程度の破壊力。

回避は困難だが、スペシウム光線とかゼペリオン光線が直撃しても普通に反撃してくる奴は倒せない。

具体的にはゼットンとかガタノゾーアとか。

人間が喰らったら死ぬ、爆発四散して死ぬ。

鬼

剣丞と戦国時代の英雄達の距離を縮めるために用意された当て馬、あるいはやられる役。

剣丞は鬼と戦い日ノ本を守るヒーローになり、英雄達と心を通わせる。

十分な数の日ノ本の英雄達と心を通わせた時、剣丞ごと英雄達を収穫し、エインヘルヤルの材料にする。

吉野

剣丞と戦国時代の英雄達の距離を縮めるため、眠っている所をエーリカによつて叩き

起こされた当て馬。

エーリカ

明智光秀とルイス・フロイスの魂を使って創り出したエインヘルヤル。

常人の3倍の脚力がある。

劍丞を鬼と戦い日ノ本を守るヒーローに仕立て上げるため、オーティンが送り込んだ。

挽肉にされ、ハンバーグにされた肉が生きた牛や豚に戻せないように、明智光秀とルイス・フロイスを元の人間に戻す事は決してできない。

エインヘルヤル

英雄の魂を材料に創り出される神造兵器。

ラグナロクに備え、オーティンは世界中の英雄の魂を收拾し、エインヘルヤルを創り続ける。

その製造過程は、人間を生きたままカキ氷器にかけるのと同じくらいエグイ。

朔夜や十六夜をエインヘルヤルの材料にされるのを阻止する事が、早雲の目的である。

北郷に連なる者

チート一族。

後に発売された歴史シミュレーションゲームのプレイヤーの間では『例の一族』で通じる。

蘭丸

誑し（天然）vs 誑し（洗脳）を描くために創作したキャラ。

戦闘能力は転子にギリギリで勝てる程度だが、洗脳能力とセックスの巧さは作中随一。

基本的には女性だが、女性とセックスをする時だけはち〇こが生える。

孕むのも孕ませるのも可能。

特技はリアルサキュバスクエスト。

催眠能力の一種、相手の常識を改変して、何でもかんでもデュエルやボーグバトルで決着をつけようとする某アニメのキャラクター達のように、勝負の方法はセックスでしななければならないと思込ませる。

例えば夫がいようと、恋人がいようと、セックスで勝負しなければならないと思込ませる。

そんなチートキャラ相手に剣丞はどうやって立ち向かうのかは、作者がこれから考える。

超能力を除いた場合の強さは、転子にギリギリ勝てる程度。

加藤段蔵

忍者の皮を被った神話生物。

人肉以外は食べられない体質の人外。

普通は仲間にならないが、一定の条件を満たすと最終決戦間際で仲間になる隠しキャラ。

放置すれば無害だが、戦うと恐ろしく強くて厄介。

仲間にしたなら何度か戦う必要がある。

しかし、味方になると途端に弱体化するため、苦勞する価値があるかは微妙。

小波

伊賀忍者達の頭領。

幼い頃に謎の覆面集団に里を襲われ、妹が連れ去られてしまう。

妹を探しにいきたい、もう一度話がしたいという願望から、超能力が発現した。

しかし、このままでは一人で里を飛び出してしまいかねないと感じた先代服部半蔵によつて、妹に関する記憶を思い出せないようにされてしまう。

その日から小波は、妹の名前も、顔も思い出せなくなった。

そして妹の名前を聞いても、顔を見ても、即座に忘れる鳥頭になっている。

姫野

風魔姫野小太郎は改造人間である。

彼女を改造した風魔忍軍は、世界制覇を企む悪の秘密結社である。

風魔小太郎は、人間の自由と平和のために戦うのであった。

脳改造済みである。

自分に姉がいる事も、自分が改造人間である事に気づいていない。

風魔忍軍の恐るべき闇にも……

風魔忍軍

邪悪な忍者集団。

姫野も、朔夜も知らない闇の部分を持つ。

その闇が具体的にどんなものなのかは作者がこれから考える。

御家流

本作では、超能力と同義。

その人の魂の才能が具現化したもの。

自らの魂を歪める程の強い願望を抱くと、新しい御家流が発現する事が稀にある。

マグナム・シユート

武田信虎の御家流。

他人の御家流を掴み、受け止め、投げ返す程度の能力。

九十郎と会うまで名前は決めていなかった。

犬子の御家流

噛みついた相手を犬に変える程度の能力。

作者が良い感じの名前を思いつくまで名称未定。

自分自身を犬にする事も可能。

犬になった者が噛みついた相手も犬に変えられる。

しかも脳波コントロールできる、怖かろう。

弱点は、犬になった者は知能も犬並みになるため、複雑な命令をこなすのは難しい事。

犬子が寝るか気絶すると犬になった者は全員元の姿に戻ってしまう。

虎松

鬼子、半分は鬼、半分は人の超生物。

多種多様な超能力を使いこなす。

オーデインの計画を阻止するため、早雲に協力している。

並行世界の自分と対話する能力があるため、この行から上に書いてある事をほぼ全て

知っている。

作者のイメージとしては、デイク牧と同程度の強さ。

超能力を除いた場合の強さは、スーパースターマンにギリギリ勝てる程度。

ラスボスの情報を掴み、命と引き換えにメツセージを残して死ぬ、花京院、重ちー的ポジションのキャラ。

死ぬ時まで強キャラ臭を漂わせつつ、後で惨たらしくラスボスに殺される予定。

凌辱描写・NTR描写を別世界の出来事だからセーフと言い訳するキャラ。

仲村往水

普通の少女だった。

普通の出自、特殊な技能も特別な能力も無い、英雄の生まれ変わりでもない。

もしも彼女が普通の学校に入学していたのなら、普通に卒業し、普通に進学し、普通に就職し、普通に恋をして、普通の家庭を築いていただろう。

その方がたぶん、彼女にとって幸せだった事だろう。

だが大江戸学園。

犬子と柘榴と九十郎第60話 『お母さん』

「まあ、だいたいこんなところでやがるか。

以上が、夕霧が見た全部でやがる」

夕霧が光璃の秘蔵の酒を飲んだ事だけは信虎の単独犯という事にしたが、それ以外の部分は大体見たまま、聞いたままに伝えた。

「そう」

光璃の反応はそれだけであった。

喜んでゐる訳でもなく、怒っている訳でもなく、悲しんでいる訳でもなく、安心してゐる訳でもない。

夕霧はまるで木人形相手に喋っているような感覚がした。

長い付き合いだというのに、姉妹だというのに、夕霧は今の光璃が何を考えているのかまるで分からなかった。

ぞつとする位に、何も感じられなかった。

「そ、それだけ……で、やがるか……？」

夕霧が思わずそう尋ねると、光璃はぞつとする位に何も感じられない、虚無そのもの

のような瞳を向けて、しばらくの間静止し……

「母様は殺す」

……そう告げた。

まるで昨日の天気の話題のように、軽い口調で告げた。

だが夕霧は知っている、分かっている。

光璃と薫にとつて、『武田信虎』の名がどれ程重いのかを……どれほど重苦しく彼女達の人生の伸し掛かっているのかを。

「交渉の余地はあると、夕霧は見てるでやがる」

だがしかし……いや、だからこそ夕霧は嘘を言った。

信虎の心中に滾る憎悪と殺意の炎をあえて無視した。

しかし光璃は無言だ。

何の反応も示さない。

夕霧は本当に木偶人形を相手に喋っているかのような思いをした。

背筋が凍るような思いであつた。

「母上に対して弓を引く事に抵抗を覚える者は、決して少なくないでやがる。

それに母上は武田の軍法を知り尽くしてるでやがる。

越後の長尾景虎と手を結ばれるのは、どうしても避けるべきでやがります」

夕霧は話を続ける。

無意識の内に早口になってしまっていた。

首筋につう……と汗が流れ落ちていた。

しかし……それでもなお光璃は無言だ。

何の反応も示さない。

「夕霧が見た限り、母上に昔のような危うさは無くなってるでやがる。

今更母上を甲斐の主に戻すのは論外としても、多少の譲歩は……」

「嘘」

……光璃が独り言のように呟いた。

途端に夕霧は言葉を止めた……止めてしまった。

これでは自分から嘘だと自白してるようなものだと思っただが、彼女はどうしても口を

開く事ができなかつた。

光璃に気圧されてしまっていた。

「母様は殺す」

もう一度、光璃はそう告げた。

何も感じられない瞳を夕霧に向けながら、何も感じられない声でそう告げた。

「そ……それは早計でやがる！

姉上だって本当は、母親を殺したくないに決まってるやが……」

夕霧はそこで言葉を詰まらせてしまった。

殺意を感じたのだ……濃密でドス黒い殺意を、よりにもよって実の姉から。

「夕霧には分からない」

光璃がそう告げた。

声に、視線に、殺意の色が混ざっていた。

「ど……どうという意味で……やがるか……？」

震える声で、夕霧が尋ねる。

「夕霧は武田の血が薄い、だから分からない」

光璃はそう告げる。

夕霧は汗が止まらなくなっていた、震えも止まらなくなっていた。

怖気がして、悪寒がした。

その話の続きを聞きたくないと思ったが、夕霧は逃げ出す事すらできなくなっていた。

「光璃と母様の間にあるものは、殺意だけ」

ぞくりと……夕霧は背筋が凍った。

志賀城に3000の生首を並べた時と同じ表情をしていた。

寒気がする程に濃密な死の匂いを漂わせていた。

怒りとも、悲しみとも、憎悪とも違う……人間らしい感情が読み取れない、純粋な殺意の表情であつた。

「何故……で……やがるか……？」

怖い、恐ろしい、逃げ出したいという表情になりかけ、それを必死に押し殺しながら夕霧は尋ねた。

「親子でやがるよっ!! この世にたった一人しかいない母親でやがる！」

どうしてそんな簡単に殺意だけだなんて言えるでやがるか！

母上が死んだら！ もう本当に取り返しがつかないでやがる!!」

「母親は我が子を愛さずにはいられない。そういう風に作られている」

「そうでやがる！ その通りでやがる!! だから姉上も、母上も、きつと……

きつともう一度手を取り合う事だつてできるでやがるよっ!!

夕霧はそう信じた……いや、信じるでやがる！」

「夕霧には分からない、分かる筈も無い」

「どうしてでやがる！」

「夕霧は武田の血が薄い、だから分からない」

「何が分からないと言うでやがるか!？」

「武田の女は、我が子を殺さずにはいられない。

武田の女は、己の母を殺さずにはいられない。

そこに親子の情愛は無い、あるのは殺意だけ」

「そんな事は無いでやがる!!」

夕霧がさらに語気を荒げる。

掴みかかるかのような勢いで光璃に詰め寄る。

「夕霧は例外、奇跡のような偶然。それを大事にしたいのなら、それでも良い……

だけど、光璃と母様の間にあるのは殺意だけ」

「そんなの……そんなの、分からねえでやがる……」

やはり夕霧には分からなかった。

言っている事の意味は理解できたが、まるで実感が湧かなかった。

夕霧にとって、信虎は母親なのだ。

どうしようもなく母親だったのだ。

「母様には夕霧がいた。光璃には夕霧がいなかった。

だから母様は風林火山を使えない、だから光璃は風林火山を使う事ができる。

母様は最後の最後で踏みとどまった」

「ふ、風林火山を……?」

気がつけば夕霧の周りに、武田の祖霊達が立っていた。

甲斐武田家の……光璃や夕霧の祖先達と、それに付き従い、散っていた武者の魂だ。

光璃の御家流、風林火山はそうした武田の祖霊達を現世に呼び出す能力なのだ。

「母を愛したい、母に愛されたい。」

我が子を愛したい、我が子に愛されたい……そんな渴望が風林火山の必須の条件。

母様には夕霧がいた、奇跡のような偶然で貴女が生まれた。

故に母様は風林火山の条件を超えられず、風林火山が使えなかつた。」

そして夕霧は、恐ろしく悍ましい気配を感じた。

空気が歪んで見える程の殺気を、武田の祖霊達が発していたのだ。

「ひっ」

夕霧は思わず腰を抜き、その場にへたり込んでしまった。

目の前にいる姉が、そして武田の祖霊達が、まるで自分とは別種の存在……あらゆる

意思疎通が不可能な怪物のように見えてしまったのだ。

「光璃は母様を殺す、それは変えない、変えようもない」

光璃がそう告げる。

光璃の目は殺気で満たされていた。

武田の祖霊達もまた、殺気で満ちていた。

「それは……どうしようもない事でやがるか……」

夕霧は思わずそう尋ね返した

「それが気に入らないのであれば、越後にでもどこにでも行くと良い」

ぞくりと、再び背筋が凍った。

夕霧は腰が抜けそうになると、寸での所で堪えた。

その時、光璃が見せた視線は、目つきは、夕霧が過去に何度も何度も見たものだった。しかし、その視線が夕霧に向けられた事は、過去に一度も無かった。

その目は『殺意』の目であった。

その視線は『敵』に向ける視線であった。

……

……

……

その頃、織田、武田から良くも悪くも警戒され、注目されている人物は……練兵館にいた。

「くう……すう……」

武田信虎が、軒先で昼寝をしていた。

九十郎の膝を枕代わりにして、暖かな日差しを浴び、心地良さそうに眠っていた。

「全く……俺はいつまでこの体勢でいなけりやいけねえんだ……」

九十郎は少々……いや、かなり不満そうな顔をしていたが、信虎を起こそうとか、こっそり逃げ出そうとかはしていない。

九十郎自身、らしくない事をしていっていると思っっている。

しかし……

「こいつの寝顔、どっか光璃に似ているような気がするんだよ……」

信虎の寝顔に、信虎の寝息に、この男のファースト幼馴染……武田光璃と良く似た匂いのようなものを感じ、なんとなく跳ね除ける気になれないのだ。

「九十郎、いる?」

そんな時、九十郎にとっては主君の主君にあたる、長尾美空景虎が練兵館を訪ねてきた。

「……て、信虎じゃない、何をやってるの?」

「見て分からないか、昼寝だよ。」

さつき急にやって来て、昼寝するから膝を貸せと言ってきたんだよ」

「へえ、あの武田信虎がお昼寝ねえ……ちよつと意外と言うか……」

美空が信虎の寝顔をまじまじと覗き込む……

「意外と綺麗な顔……」

「ケツも中々そそる」

「いきなり何言ってるのよ」

「この間こいつと一緒に風呂に入ってな……勃ったな、ビンビンに」

「誰がアンタの下半身事情に興味を持つか!？」

美空のツツコミは今日も絶好調である。

「柘榴や犬子と結婚したばかりの貴方に言うのもアレだけど、

無計画に手を出して刺されるんじゃないわよ」

「ははは、俺がそんなにモテるかよ」

「貞子が最近ぶーたれてるわ、全然手を出してくれないーって」

「ここしばらく忙しかったからな。ほら、例の部隊の……」

「そうそう、今日はその部隊の件で来たのよ。来たのだけど……」

そう言うとき美空は、もう一度比喻表現でなく安らかに眠る信虎を見下ろす。

とても気持ち良さそうに眠っており、基本善人の美空には起こす気になれなかった。

「これじゃちよつとねえ……」

「まあ、そうかもな」

美空と九十郎がため息をつき合う。

すると……

「母……さん……」

そんな時、信虎が寝言を言った。

小さな声で……それでも、九十郎達の耳にはしつかり届くような声量で、信虎は『母さん』と言った。

「母さん……？」

「今……母さんって言った……言ったわよね？」

美空と九十郎が信じられないといった表情で顔を見合わせる。

「笑っちゃいかん……笑っちゃいかんとは分かつてるが……ぶ、くくく……」

やべえ、これ破壊力半端じゃねえ……」

「ちよ、笑っちゃだめよ九十郎。そりゃあ、普段の雰囲気と合わないって思うけれど

……」

「母……さん……母さん……嫌だ……嫌だよ……母さん……」

信虎がうなされていた。

うなされながら、寝汗をかきながら、眉間に皺を寄せながら、九十郎の指を掴んでいた。

「全く、俺はお前のお母さんじゃないぞ」

九十郎は信虎の手を払いのけようとして……やめた。

信虎の姿が、光璃の姿に重なって見えたからだ。

時々……いや、かなり頻繁に母様、母様とうなされる、1人の少女の姿が重なったからだ。

「ねえ、九十郎……お母さんって、どうすればなれるのかしら？」

そんな光景を見て……美空は独り言のように呟いた。

頭の中に空と名月を思い浮かべていた。

自分の養子である2人を、お腹を痛めて産んだ子ではないが、それでも美空なりに母子の関係になりたいと思う2人の姿を思い浮かべていた。

「空と名月との接し方が分からないのか？」

美空はしばしの間、迷い、考え込み……ゆっくりと頷いた。

「そうかも……いえ、そう、分からないわ」

「何でそんな事を俺に聞かぬえ？」

「それは……それはたぶん、貴方がお母さんっぽいと言うか……」

美空はもう一度信虎の顔をのぞき込む。

信虎はやはり、うなされていた。

うなされながら、無意識に何かに……九十郎につかまろうとしていた。

必死になって、九十郎の指先を握りしめ、話そうとしなかった。

九十郎もそんな信虎を振り払おうとしていない、信虎の行為を容認しているようであつた。

そんな2人の姿が……何故か母子の姿のように見えていた。「分からないわ、なんとなく聞きたくなつただけよ」

だがしかし、美空はそれを素直に認める気になれなかつた。

ゴツイマッチョのブ男を母親っぽいと感じただなんて、認めたくなかつた。とりあえず九十郎は死ぬべきである。

「認めてやる事なんじゃねえのか」

九十郎はそう答えた。

まるで当然の事のように、まるで考えるまでもない事のように、自然な姿で即答した。「お前は生きていても良いんだって。

お前はここに居ても良いんだって言ってやって、受け入れてやる事じゃねえのか」そしてそう続けた。

九十郎の声が届いたのか、驚かされていた信虎の顔が、再び安楽なものに戻っていた。その瞬間……美空はストンと腑に落ちたような気がした。

何故犬子と柘榴、そして貞子が九十郎を好きになつたのかを。

何故信虎がこうも無防備な寝顔を晒しているのかを。

「織田の天人は誑しの名人だつて噂だけど。 貴方もそういう資質、あるんじゃない」

美空はそう呟いた。

無意識の内に、美空は笑みを浮かべていた。

無性に楽しくて、嬉しい気分になっていた。

かつて美空は、犬子が越後に来て、自分に仕えてくれる事を喜んだ。

九十郎は犬子のついで程度としか思わなかった。

だけど今は、九十郎が自分を主と思ってくれている事が、嬉しくてたまらなかった。

「美空、それはそれとして何しに来たんだ。

神道無念流がやりたいなら、こいつ叩き起こすが」

「いえ、そのままが良いわ。 例の部隊の人選が終わつたつて伝えに来ただけだから」

「例の……ああ、ニホン初のドライゼ銃部隊か」

「そうよ、絶対にドライゼの持ち逃げとか、

買収とかされないつて断言できる者だけを集めたわ。

武田と戦う日まで、アレの性能が漏れるのは困るから」

「反射炉の火入れも成功して、鋼鉄の量産の目途も立った……」

武田滅亡までマジック点灯つて所だな」

「まじつくつてのが何なのかは分からないけど、大体そんな感じよ」

九十郎は戦国時代の人間にマジック点灯が通じるとでも思っているのであろうか。
「んで指揮官はどうするんだ？」

前にも言ったと思うが、俺は戦略だの戦術だのといった事には疎いぞ」

「ああ、その事なんだけど……」

美空が何かを言おうとしたその時……

「我にやらせろ」

九十郎の膝枕に頭を乗せたまま、信虎がそう告げた、

「あら、いつから起きていたの？」

「ついさっきだ、だが話は大体聞いた。」

「ドライゼ部隊を我に預けろ、そうすれば晴信を殺してやる」

「だとよ、どうする美空」

信虎は元々、ドライゼ銃を与える事を対価として、越後に来て、美空達に協力している身の上だ。

美空としては、信虎にドライゼ銃部隊の隊長を任せるのはやや抵抗があるが……

「ここで嫌ですとか言うのと、信虎はドライゼを何丁かパチツて他国に走りそうな予感がするのだ。」

「まだ今一つ信用できないけど……」

信虎、貴女を今度新設されるドライゼ銃部隊の指揮官に任じます」

「謹んで承る」

信虎は眠そうな目で、九十郎の膝枕から起き上がろうともせずには答えた。

言葉の上では謹んどてか言っているが、態度は全く慎んでいない。

「柘榴にやらせるか貴女にやらせるか、最後の最後まで迷ったわ。

貴女がどおしくしてもやりたいって言うから、

九十郎がどおしくしてもやらせたいって言うから、

あんまり気は進まなかったけど、しかたなくやらせてあげるんだからね。

ちゃんと任務を全うしなさいよ。

それと貴女に預けるドライゼはウチの機密中の機密だから、

勝手に横流しするんじゃないわよ」

美空が念入りに釘を刺す。

実を言うと、本当にヤバイ技術はドライゼ銃ではないのだが……美空はその秘中の秘

を信虎に打ち明ける気はさらさら無い。

「その話は耳にタコができる程に聞いた。

安心しろ、晴信を殺す日まで、我は貴様らを裏切らんよ。

必要だからなら、アレを殺すのにドライゼ銃が」

「晴信を殺すのを優先させて命令無視とかやめなさいよ」

「貴様が晴信を殺すのを完全に放棄した場合、考えさせてもらおう」

美空は頭がギリギリと痛くなった。

そして胃がキリキリと痛くなった。

いつそ事故死か病死してもらって、別の誰かにドライゼを任せてしまおうかとも思ったが、武田の手の内を知り尽くしている信虎の有用性と、基本善人で、頼られると見捨て難い美空の性格故に、実行は躊躇われた。

結局いつものように……腹立たしい事に、長尾美空景虎にとってはいつものように、いつ裏切るのかとヒヤヒヤしながら信じて用いるしか無い訳だ。

彼女の飲酒量がとんでもない事になっていて原因の何割かは、いつ裏切るかとヒヤヒヤしながら使っている部下がダース単位で存在するためである。

「信虎、とりあえず部隊の名前を決めておきなさい」

「ドライゼ隊ではいかんのか？」

「駄目じゃないけど、味気無いじゃない。もうちょつと勇ましいのにしない？」

「それを我に考えろと？」

「そりゃそうよ、貴女が隊長の部隊なのよ」

「名づけは苦手なのだが……」

信虎はしばしの間考え込み、『げろしゃぶ』だの『フーミン』だの『めそ』だの、およそ勇ましきとは無縁な単語を何個か呟き……

「母さ……九十郎、お前が考えろ」

ちよつと致命的な言い間違いをした。

当然、その声は美空にも九十郎にも届き……2人をハトが豆鉄砲を喰らったかのような表情にさせる。

「九十郎、今母さんって……」

「言っていないっ!!」

信虎ががばつと起き上がり、唾がかかりそうな程の距離にまで美空に近づき、その胸倉を掴み上げた。

「いや、俺も聞いたぞ。 母さんって……」

「だから言っていないっ!!」

今度は九十郎に掴みかかった。

顔を真っ赤に染め、眉間に皺を寄せ、手に血管を浮かばせながら言っても説得力は0である。

「観念しなさい、しつかりと聞いたから」

「ははは、信虎にも可愛いところがあるじゃねえか」

「き、貴様ら……覚えて……いや、忘れろ……」

恥ずかしさで顔から火が出せるのであれば、越後全体が燃え尽きる程の羞恥を感じていた。

自分より年下の、マッチョなブ男を母と呼ぶなど、あつてはならない事である。いつそ今すぐ2人に土下座して、忘れてくださいと懇願したい気分であった。

「まあ気にしなくて良いわ、言い間違ひなんて誰にでもあるし、

私は言いふらす気なんて無いから」

「そうそう、気にすんなって」

美空と九十郎がヘラヘラ笑いながら信虎の肩をぽんつと叩く。

口ではそう言うが、機会があればからかってやろうと瞳が雄弁に物語っていた。

今土下座したら、からかうネタを1つ増やすだけか……と、信虎は思った。

「……認めて、受け入れてもらった事には、感謝している」

だからなのかは分からないが、信虎は九十郎に向かってそう告げていた。

さつき美空や九十郎に詰め寄った時以上に顔を赤くし、視線が泳いでいた。

恥ずかしさで顔から火が出せるのであれば、日ノ本を焼き尽くす程の羞恥を感じていた。

「ええいくそっ!! 我の代わりに部隊の名を考えておけっ!!」

そして信虎は逃げた。

ダツシユでどこかへと走り去っていった。

そんな様子を、美空と九十郎はぼかぐんとした表情で見送った。

「……で、どうする？ 神道無念流やってくか？」

たつぷり3分は硬直してから、九十郎は美空にそう尋ねた。

「あ……いえ……今日中にやらなきゃいけない事が残ってるから、戻るわ」

美空も我に返り、信虎と同じように練兵館を出ようとする。

ただ、別れ際に……

「また家族サービスする時が合ったら、言いなさいよ」

「なんだ、また飛び入り参加でもする気か？」

「そうよ、悪い」

「悪いとは言わんがな」

「空も名月も楽しかったって言ってたわ。だから……」

美空はそれだけ言うと、さっさと九十郎に背を向けて走り去ってしまった。

長尾家当主である美空には、ドライゼ銃部隊新設以外にも仕事も山盛りで、のんびり

と歩いている暇は無い。

だけど……

「第七騎兵团にするよ！」

美空の背後でそんな声があった。

ただそれだけで、美空の心臓はドクンと飛び跳ねた。

「新しい部隊の名前、第七騎兵团にする！ 勇ましくて格好良いだろう！」

美空はそんな呼びかけに對し、何も言わず、何も答えずに走り去った。

今九十郎に声を掛けたら、今九十郎に顔を見られたら、自分の真つ赤な顔がばれてしまいかもと思ったからだ。

空も名月も楽しかったと言っていた。

それは嘘じゃない、間違いじゃない。

だけど……

「ああもうっ！ もうっ！ 訳が分からないわ！ 意味が分からないっ！！

私が、私が……あんな筋肉質なブ男に膝枕されたいだなんて考えるなんて！

信虎が羨ましいだなんて考えるなんてえっ！！」

チャリを立ち漕ぎし、全速力で春日山城に戻りながら、

美空はそんな台詞を叫んでいた。

顔が真つ赤で、額に汗が浮かんでいるのは、チャリを漕いでいるからではなかった。

犬子と柘榴と九十郎第6話『この日、雫は混乱していた』

この日、雫は混乱していた。

播磨小寺家家中随一の……あるいは日ノ本全体で見てもトップクラスの知恵者である小寺官兵衛が混乱をしていた。

10年後の彼女であれば、慈母のような笑みを浮かべながら『あらあら、まあまあ……』と軽く流せたかもしれない。

しかし数え年で15歳、大江戸学園で言えば子住唯、八辺由佳里と同年代の彼女に、そんな余裕ある対応は不可能であった。

恐るべき事に、銭方真留や大江戸探偵団よりも下である。

それは彼女の人生の中で初めての体験で、こんな時どんな事をして、どんな事を言えば良いのか、今までに読んだどんな書物にも、今までに聞いたどんな話にも無かったからだ。

そう……

「二万年と二千年前から愛してましたあああああ~~~~っ!!」

マツチヨなブ男……つまりは斎藤九十郎が目の前で雫に對し、愛を叫んでいるのだ。「え……求婚？　これ求婚なんですか？　え、だつて……私、まだ未婚ですけれど……」

初対面の男にいきなり求婚されるなんて経験、雫には無かつた。

小寺政職の近習となつてから、約1年……正直な話、周りは敵だらけであつた。薬屋の娘、成り上がりだのと陰口を叩かれ、手柄を立てる機会すら与えられなかつた。なにくそと勉学に励み、主君に獻策をしても、まともに取り合つてくれた事も皆無だつた。

まだ幼い故に仕方が無い事だと理解しているが、それでも混迷を極める世の中で、明日をも知れぬ世の中で、鬱屈した思いが自分に広がっているのが分かつた。

そして同時に、彼女は過去に誰からも求愛された事が無かつた。

今現在の状況のような熱烈な求愛は、想像した事すら無かつた。

それ故にこの日、雫は混乱していた。

……

……

……

三条館の惨状……もとい戦いが終わり、しばしの時間が経つた。

將軍足利義輝の救助に成功した久遠は、手始めに小谷周辺の鬼を討伐すべく、三河の

松平葵元康、近江の浅井眞琴長政と合流し、京を発……発つていなかった。

大体の世界では三条館の戦いから数日後には京を発っているのだが、この世界では少し準備に時間をかけていた。

理由は2つ。

犬子が織田から長尾に移籍したせいかどうかは不明だが、久遠の想定よりも戦いで生じた損害が大きくなった事。

これから鬼の巣窟となつているのであろう、小谷に向かわなければならぬため、怪我人を大勢連れたまま移動はできないのだ。

そしてもう1つの理由は……連発できる銃を戦国時代にブチこんだ馬鹿をどうするか、決めかねていたからだ。

「結婚しました……か……」

少し前に越後から送られてきた犬子からの手紙を眺めながら、織田久遠信長は少し物憂げに息を漏らす。

同封されていた妙に精密な結婚式の絵には、とても幸せそうに微笑みながら、マツチヨに寄り添う犬子と柘榴の姿があった。

手紙は結婚を報告するだけであつたが……たぶんもう、犬子が越後の長尾景虎の元から離れる事は無いだろうと久遠は思った。

「次に会う時は敵同士かもしれないが……幸せになればよ、犬子……」

そして久遠は犬子への……幼い頃の遊び仲間、前田犬千代への想いを振り払う。

今の久遠には、やるべき事、やらなければならない事が多い。

いつまでも幼い頃の記憶に浸って居られる程、暇ではない……暇であつてはならないのだ。

「ま、間違いない……写真だ……」

一方劍丞は戦慄していた。

戦国時代なのに写真があるという事実には、そしてそれを結婚報告でほいっと外部に流出させる事に驚き戸惑っていた。

「ほう……それはつまり、劍丞様はこの異様に精巧な絵を見た事があるのですね」

詩乃が劍丞に対し、じとくとした不信感溢れる視線を向ける。

結局、劍丞は未だに天の知識……つまり現代日本の知識を出し渋っているのだ。

「この、しゃんという物は天の……いえ、未来の世界ではありふれた物なのですか？
劍丞様は作り方を知っているのですか？」

「い、いや……それは……」

言うべきか、言わざるべきか……劍丞は迷った。

少なくとも劍丞は、九十郎と違って写真の作り方を知らない。

生まれた時からあつて当然の物であつて、作り方に興味を持ち、調べ、自らの手で再現しようなんて考えない。

武田光璃の幼馴染として生きた斎藤九十郎とは違ふのだ。

「まるで見た光景をそのまま絵にしたかのような技術……」

はつきり言ひましょう、異常です。

無論、これ一枚にかかる費用や手間、時間にもよるのでしようが、

使い方によつては、これ一枚でどれ程多くの情報を伝達できるかわかりません。

地形や、城塞の構造、密書の写し取り、どれだけの事ができるか……」

「なんと、そのような事もできるのか!？」

「いや、昔の写真つて一枚撮るのに時間がかかるから、そこまで便利じゃ……」

久遠が身を乗り出し、咄嗟に劍丞が訂正する。

久遠と詩乃の視線が同時に劍丞に向き……劍丞はしまったと言いたげな顔になつて

額をおさえた。

「……ちなみに、黙秘権は?」

「知らない」

「いい加減に諦めて話してください」

久遠と詩乃が劍丞に詰め寄る。

ちよつとやそつとじゃ退いてはくれそうもない様子であった。

「劍丞、歴史を不用意に変えたくないというお前の考えは実に立派だ。しかしだ……」

「おそらく、この先の歴史は私達にとって不都合なものもあるのでしよう。」

しかしです……」

「向こうは使う気だ、歴史がどうだのと言っただけでいられる状況ではない」

「知らなければ対策がとれません」

「千年巨人（ミレニアム）とやらもまるでわからん。」

劍丞、これについても何か心当たりがあるのではないか？」

なお、千年巨人とはかつてロンドンを無駄に震撼させたバネ足ジャックが、ノリと勢

いに身を任せてでつち上げた組織の名……といっても某所の聖杯戦争スレの話だ。

聖杯戦争スレなんて全然見ない劍丞には、当然のように何の心当たりも無い。

「い、いや……それに関しては本当に心当たりが……」

「本当か？」

「本当なんですか？」

しかし、今の久遠や詩乃は納得しない。

「だいぶ昔、この男を見た事がある。」

「我や壬月の胸を凝視する不快な男……あの時の印象はその程度であったな」

写真の男……斎藤九十郎を指差しながら、久遠がそう呟く。

「不快なつて……」

「まず間違いない、頭の中で我を犯して穢している視線であつたよ。

いつそ切り捨ててしまいたい程に不快だつたが、

我にそういう視線を向ける男は何人もおつたからな、

いちいち怒つていられる程暇では無かつたが故、捨て置いた」

そこで切り殺しておけば、世界は平和だつたのではなからうか。

犬子は……当時犬千代は泣くだろうが、コラテラル・ダメージの範疇であろう。

「……何か腹が立つてきたな」

劍丞がむすくつとした表情になつていた。

所詮想像の中での事とはいえ、自分の嫁さんがオナネタにされているというのは面白い話ではない。

「……ふふつ、妬くなよ劍丞、身が持たんぞ。」

お前はこれから、日ノ本中の大名達を嫁にする……かもしれないのだからな」

珍しい劍丞の子供っぽい表情を見て、久遠はちよつと嬉しそうだ。

「しかし、話を聞く限り、九十郎という人はどうやら巨乳好きのようですね」

「しかし、話を聞く限り、九十郎という人はどうやら巨乳好きのようですね」

ロリ巨乳とポイン美女を侍らせ、鼻の下を盛大に伸ばしているマツチヨの写真をジト

くつと睨みながら、詩乃（貧乳）が状況分析する。

彼女は今、巨乳美人を餌にすれば色々聞き出せるのではなからうかとか考えていた。では、その辺も含めて諸々聞いてみようじゃないか……なあ、葵」

さつきからずくつと、隅つこで正座していた葵がビクンと震えた。

「詩乃と劍丞から話は聞いた。目と目が合う瞬間、確保ーつと叫んだそうじゃないか」「ええ、見事な叫びっぷりでした。すぐにピンとききましたよ、あの銃を知っている……と」

現場にいた詩乃が久遠を言葉を補足する。

「我が知る限り、お前と九十郎に面識は無い筈なのだがな」

「どこで、どうやって知ったのでしょうかね」

「……うぐう」

久遠と詩乃の追及に対し、葵は何も言い返せない。

こうなるのが嫌だったから、葵は今まで九十郎の事を一度も話題に出さなかったのだ。

「そういえば昔、犬子が織田から出奔したと聞いた時の反応がおかしかったな。

私の知る限り、犬子と葵……竹千代の接点等無かった。

どうしてあんな妙な反応をしたのかと思っていたが……

そうかそうか、反応していたのは九十郎の方か」

「…………ぎくり」

葵の視線が露骨に泳いだ。

それを見逃す程、詩乃も久遠も抜けてはいない。

「さあ吐け、キリキリ吐け、アレは一步間違えれば日ノ本を沈没させかねん劇薬だ」
「戦うかどうかはまだ分りませんが、あの危険すぎる技術と知識……」

知らずに挑めば全滅は必至です。手をこまねいて漫然と進む事は自殺と同じ」

「さあ、さあ、さあ、さあっ!!」

「う…………その…………それは…………」

詩乃と久遠が葵に詰め寄る。

目と目が遭う瞬間確保と叫んだ手前、何も知りませんとは言えない。

「あのう…………お取込み中の所すみませんが…………」

困り果てた葵の前に救いの声ももたらされる。

「ああ、雫殿ではありませんか。火急の用ですか？ 火急の用ですよ？」

火急の用と言ってください！ 300文あげますからっ!!」

ドケチで有名な徳川家康にしては大盤振る舞いである。

そしてここで都合良く助けが来る辺りが、徳川家康の徳川家康たる由縁である。

「来てます、その……話題の齋藤九十郎殿が……」

「え……？」

全員の視線が集まる。

まず来訪者に向き、次に久遠の持つ写真に向き、再度来訪者に向く……

「九十……郎……？」

「それに……犬子……？」

全員が呆然としていた。

雫が連れて来た来訪者は、確かに写真の人物、犬子と九十郎であったのだ。

「はろはろ〜」

「やつほ〜」

「犬子と九十郎で〜す！」

マツチヨとロリ巨乳（新婚）が突然現れて能天気で意味不明気味な挨拶をしてきた。

さつきまでのシリアスな空気がブチ壊しである。

「千年巨人って何の事だとか、この間の赤鬼は何だったんだとか、

色々聞きたい事はあるけど、とりあえず……何しに来た、九十郎」

劍丞が恐る恐るそう尋ねる。

現状、犬子と九十郎は明確な敵ではない。

明確な敵ではないが……ちよつと前に葵が唐突に襲い掛かったり、少し前に久遠と美空が剣呑な雰囲気になったりで、ちよつと味方とは言い難い関係だと思っていたのだ。

「小寺官兵衛を出せ!!」

犬子と九十郎がハモった。

謎のポージング……いわゆるジョジョ立ちをしながら同時に官兵衛を要求する。

ハッキリ言つて意味不明な出来事である。

「え……わ、私……?」

全員が全員、多かれ少なかれ混乱していたが、急に自分の名前が力いっぱい告げられた雫が困惑は、誰よりも大きい。

雫には自分と九十郎達との接点が全く思い浮かばないのだ。

「すまん、意味が分からないんだが」

「とぼけんじゃねえよ剣丞、長尾の優秀なスパイ網は既に掴んでるんだ。

お前の剣丞隊に小寺官兵衛が仲間入りしたつてよ」

「それ聞いて、犬子の御家流まで使つて全速力で駆けつけてきたんだよ」

「夜を徹して走り続けたぞ。」

最短距離を進むために、街道とか全部無視して獣道を突つ走ってきたぞ」

「いや、確かにいるけど……そこまでして来るつて事は、何か恨みでもあるのか?」

犬子と九十郎の背後で、雫が『心当たりがありません』とジャスチャーをしていた。
「大ファンなんだ！」

「大ファンなんです！ 九十郎が」

犬子と九十郎が再度ハモる。

謎のポーピングがビシツと決まる。

意味不明な光景パート2である。

「そうかそうか、大ファンか……」

何で俺達はこんな奴の対策を糞真面目に考えていたんだろうな……」

劍丞は何か色々と馬鹿馬鹿しくなった。

千年巨人（ミレニアム）の事とか、紅い鬼の事とか、その辺も含めて全部馬鹿馬鹿しくなってきた。

「その……何だ……結婚おめでどう、犬子」

「ありがとうございます！ 久遠様。」

でも……久遠様は良いんですか？ 鬼と戦う人は全員劍丞様の嫁だなんて……」

「賭けではある、無理無茶無謀と笑われるような賭けだ。だが我は劍丞に賭けた。」

劍丞に日ノ本全てを包み込むような大きな器があると信じ、賭けた……ただそれだけだ」

「えっと……だから、聞いてるんですけど……」

「四の五の言つてられる状況ではないという事だ。

鬼の浸食は私の想定よりもずっと早く、広い。

貴様こそどうなのだ犬子、あの男は助兵衛だぞ」

「それも含めて好きなんです」

犬子は少しも迷わず、胸を張りながらそう答えた。

「全く、お互い良い男に惚れたようだな」

「そうかも、ですね」

久遠と犬子が笑い合う。

だがしかし、九十郎は基本層である。

「何か………どんどん空気がほんわかしてきているような……」

「この間襲い掛かった事、恨んでいない様子ですね………なら今からでも……」

「葵様、流石に笑えませんし見過ごせません」

妙な感じになりつつある中で詩乃と葵が各々頭を抱える。

この2人は九十郎の知識の危険さを全く忘れていないし、いつそ今ここで殺すか、拉致して座敷牢か何かに監禁した方が世の為なんじゃないかとすら思っていた。

「それで劍丞、小寺官兵衛はどこにいるんだ？」

「会ってどうする気だ？」

微妙に身構えながら劍丞は聞き返す。

雫は絶体絶命のピンチに駆けつけてくれた恩人で、今は劍丞隊の仲間でもある。

もし不埒な真似をしようとしてるなら……と。

「とりあえず顔が見たい！ できれば握手とかしたい！」

サインが貰えたら飛びあがって喜ぶぞ俺は！」

しかし、そんな劍丞の考えはすぐさま否定された。

九十郎の顔は能天気そのもので、とても悪事を企んでいそうな雰囲気ではなかった。

「ああ、うん……本当にただのファンかよ……」

劍丞はもう本当に警戒する気が無くなり、そつと九十郎達の背後に立つ少女を指差した。

「君を……まで連れて来た娘が小寺官兵衛さんだよ」

犬子と九十郎の視線が少女に……雫に向く。

雫が緊張した面持ちで九十郎を見上げて、目が遭った。

直後……

「二万年と二千年前から愛してましたあああああ……っ!!」

九十郎は唐突かつ全力で愛を叫んだ。

「え……求婚？ これ求婚なんですか？ え、だって……私、まだ未婚ですけれど……」

「落ち着いてくれ雫、たぶんアイドルの追っかけ的な意味で愛してるだけだから」

「あ、あいどる……」

「つまり憧れてるって事だよ」

「憧れ!? 憧れって、私にですか!?!」

雫の混乱がさらに加速する。

小寺官兵衛は無名だ。

今孔明と謳われる竹中半兵衛と比類する程の智謀を有する彼女であるが、今はまだ無名だ。

自分が誰かを……例えば竹中半兵衛、例えば織田信長、例えば新田劍丞に憧れる事はあっても、自分が誰かから憧れられるとは思っていなかった。

蔑まれ、疎まれる事はあっても……だ。

「てか普通に可愛いじゃないか、胸は残念だけど」

「女の子を胸で判断するなよ、可愛いのは認めるけど」

「しかも……か、可愛い……」

雫が赤面する。

彼女はまだ、自分の容姿を褒められるのに慣れていないのだ。

「んで劍丞はもう官兵衛に手を出したりして居るのかな？

ハーレム入りさせたりしてるのかな？

ズツコンバツコン大騒ぎしてるのかな？」

「な、なんの話だっ!？」

「鬼と戦う気があつたら誰でもウエルカムだったか？

ある意味漠らしい宣言じゃねえか、ウチの総大将もゲラゲラ笑つてたぞ。

てかその定義だと犬子も柘榴も果ては美空までてめえの嫁にされるじゃねえか。

俺の嫁と美空に手を出したらブチ殺すぞゴミめら!

美空の場合は和姦ならOKだが、強姦だったらブチ殺す!」

とか何とか言ってるが、この男は今でもなお、本当は劍丞の方が前田利家の夫にふさわしいのではなからうかと考えている。

「あれ？ 良く考えたら鬼と戦うと犬子も劍丞様のお嫁さんにされちゃうの？

それだったら鬼と戦うの嫌だな……」

「そういう趣旨で言つた訳じゃないから!

もう相手がいる人を無理矢理娶らせるとか考えてないから!」

「いや待てよ、柘榴はともかく、犬子はむしろ……」

「九十郎、そこから先を言つたら嘯むよ」

九十郎はぼそりとそう呟き、安堵のため息を漏らした。

「間に合った……とは……？」

「あなたに劍丞ハーレム……要は劍丞の嫁軍団の中に入られるのは嫌だ。

だから一生懸命突っ走ってここまで来たんだよ」

「え……」

……それはやっぱり、求婚なのではなからうかと、雫は思った。

男女交際の経験が皆無な雫は、さつき以上に混乱していく。

「とりあえず握手してくれ、そしてサインしてくれ。」

そうしてくれろと俺は非常に嬉しい。そして……」

「え、えつと……あ、握手……とは……」

「手を握ってくれ！」

「あ、は、はい……そのくらいなら……」

九十郎の勢いに圧され、おろおろしながら雫が九十郎と握手を交わす。

「俺はもうこの手は二度と洗わねえええええーっ!!」

九十郎は感激していた。

これ以上ない程に分かりやすく、単純に感激していた。

誰の目にも演技には見えなかった。

「おい、犬子……あれは浮気の範疇には入らんのか……」

「九十郎、前々から黒田……じゃなくて、小寺官兵衛さんが一番好きだって言ってたけど、

まさかここまで好きだったとは……犬子も少し驚いています」

「お前も大変だな、犬子」

「あはは、久遠様程じゃないですよ。 劍丞様つて、色んな人から慕われてるんでしょ」

「もう諦めてるよ、我も結菜も」

久遠は乾いた笑いをした。

犬子は思った、この人はいつでもいつまでも苦勞性だなくつと。

「それと……」

そんな中で、九十郎が真面目な顔で……基本ふざけているこの男にしては珍しく、真

面目な顔で雫に向き合う。

「越後に来てくれないか、官兵衛。」

もし来てくれるなら、1万石で迎え入れると美空が言っている」

「いちまつ……!?!」

雫が絶句する。

小寺家の所領は約10万石、雫の実家である黒田家は5000石程度、大した実績も

無い雫個人をいきなり一萬石で迎え入れる事は、破格の待遇と言って良い。

「お、おい犬子!? 本気なのか!？」

「すみません久遠様、犬子達は本気で言っています。

ちよつと事情があつて理由は話せませんが、

本気で官兵衛さんに越後に来てほしいと思つています」

先程までのほんわかとした空気が一瞬にして雲散霧消した。

そして全員の視線が雫に集まる。

雫は……混乱する頭が急速に冷えていくの感じていた。

剣も槍も弓矢も使われていないが、この場は戦地だと理解した瞬間、彼女の脳漿に血が巡り、戦闘モードに入っていた。

お断りします……そうやってきつぱりと断るのは簡単だ。

雫はつい先日、將軍足利義輝に頭を下げさせ、剣丞の元で働けるようになったばかりだ。

義輝のメンツを二度もぶつ潰すなんて恐れ多い事はできないと言うのは簡単だ。

一葉の前で、『剣丞様の下で死にとうござります』と宣言したばかりだ。

その舌の根も乾かぬ内に鞍替えはできないと言うのは簡単だ。

簡単だが……それが最善なのかと……斎藤九十郎の秘密を直で探れる好機を投げ捨

てるのが最善かと問われれば……最善だと断言できない自分がいた。

そして何より、目の前で喉も枯れ果てんばかりに自分を愛していると叫ぶ九十郎の姿に、自分に1万石を与えても惜しくないと評価してくれる長尾景虎に、嬉しいと感じてしまう自分もいた。

「私……は……」

どうすれば良い、どう答えれば良い……どうすれば最も新田劍丞の役に立てるのかを考えていた。

犬子と柘榴と九十郎第62話 『黒田官兵衛うつかり誘拐事件』

「劍丞様、私を越後に行かせてください」

ある意味漢らしいダイナミック愛してる発言とダイナミック引き抜きから半日……もうすっかり暗くなった頃に、雫は劍丞にそう告げていた。

「……それは、どうしても必要な事なのか？」

ごく短い期間ではあるが、劍丞隊の仲間であつた雫と別れなければならない。

劍丞にとってそれは、あまり歓迎できる事ではない。

「必要な事です。私も……詩乃さんもそう考えました」

「詩乃もか？」

雫と共に劍丞の元にやってきた詩乃が、深く静かに頷いた。

「俺が天の国の知識を話すのを拒んでいるからか？」

「天の国の……知識……？」

「そういえば雫にはまだ説明していませんでしたね。」

劍丞様はこの国に降り立つ以前は、写真やういんちえすた銃がある場所にいたので

す。

いたの……ですよね？」

詩乃が微妙な表情で劍丞に確認する。

劍丞としても今更とぼけようがないのは理解しているため、素直に頷いた。

「写真はともかく、ウインチェスターと同じ銃は滅多にないかな。古すぎるから」

「ういんちえすが古い!? あ、あれが古すぎる……」

「え……ういんちえすたつて、あの次の弾を込める機構がある、あの画期的な銃ですよね

?

あれが古い……あれが古いつて……」

そして詩乃と雫が地味に戦慄する。

戦国時代で生まれ育った2人に、1873年に完成したウインチェスター・ライフル

よりも新しい銃を想像する事はできない。

できたらこの2人は秀吉の参謀としてではなく、レオナルド・ダ・ヴィンチやニコラ・

ステラ、アルフレッド・ノーベルのような偉大な発明家として名を残していただろう。

「そ、それはどれ程猛烈な勢いで弾を込めるのでしょうか……?」

「えつと……89式は毎分650から850発で……」

今の火縄銃はだいたい1分弱で1発だから……今の銃の650倍くらい?」

「それはもう1人で万の軍勢にも勝てるのではないですか？」

「たった1人で桶狭間を再現できるのではないですか？」

「いや、装弾とか、持ち歩ける弾の数とかもあるから、そこまでは……」

「隊列を組んで戦おうとすれば一瞬で皆殺しになれるのでは……?」

「散兵だけで戦えと? どうやって兵の逃亡を防げと!」

「単独行動させても逃亡しない程に訓練を……」

「いやでも、農閑期の領民を集める今のやり方では絶対に……ああつ!」

「もしや久遠様が進めている兵農分離とはこれを見越して!」

「……考えすぎである。」

いくら久遠に先見の明があつても、毎分650から850発の銃弾を撃つ銃なんて想像すらできないし、現にしていない。

「劍丞様! はちきゆう式はどのように作れば!」

「どこで手に入りますか!」

詩乃と雫が劍丞にずいっと詰め寄る。

ここで89式の製造法について語れば恰好良かったのだが……流石の劍丞でも、1989年に完成した銃の作り方なんて知らないし、話せない。

九十郎でも無理だ。

「いや……うん……その……」

「やはり、越後に誰か派遣しなければいけませんね、雫」

「そうですね……あのういんちえすたを作ったという九十郎さんが、

より強力な武装や技術を使える可能性は否定できませんから……」

「あ、ちよつと……詩乃さん、雫さん、あからさまにがつくりしないで……

無視しないで、泣いちゃうぞー」

「何ですか、肝心な事は何一つは話そうとしない癖に、

ちよつと話したとおもったら全然役に立たない事しか言わない劍丞様？」

「がふっ」

劍丞は血を吐いて倒れ伏した。

「あの、詩乃さん……劍丞様倒れちゃいましたよ。

倒れながら劍丞様さめざめと泣いてますよ……」

「良いんです雫。この期に及んで歴史がどうだの危険が何だのと言って、

なくんにも喋ってくれないご主人様の扱いなんてこの程度で十分です。」

「うう……すまん……だが……詩乃が心配している事は分かっている。」

それでもやつぱり、強い武器で延々と殺し合う事が正しい事だなんて思えないんだ

……

俺は……俺は……それでも俺は……」

「はあ……」

詩乃が盛大にため息をつく。

呆れた……という表情ではあったが、失望したという表情ではない。

「分かっているのですか、劍丞様。」

貴方のその意地っ張りのせいで、私達の誰かが死ぬかもしれないですよ」

「……分かっている」

「分かっているのですか、劍丞様。」

貴方のその意地っ張りのせいで、雫はよけいな苦勞を背負い込むですよ」

「分かっている」

「はあ……」

詩乃は盛大に盛大にため息をつく。

この期に及んでもなお、劍丞を見限れない自分が情けなかった。

この期に及んでもなお、劍丞が好きで好きで仕方が無い自分が情けなかった。

それでもなお彼女は、新田劍丞が好きで、新田劍丞を支えたかった。

「雫に一言、謝ってください」

「すまん、雫。迷惑をかける、苦勞をかける」

詩乃に言われるまま、劍丞は雫に対し深々と頭を下げた。

「いいえ苦勞だなんて思っていないません、むしろ胸を張りたい気分です。」

劍丞様の為に、日ノ本のために、私にしかできない事があるのですから」

雫がそう言つて劍丞を元気づけようとする。

「……すまん」

そんな雫の言葉が、むしろ劍丞の罪悪感を増大させる。

「目的は2つ。1つは齋藤九十郎の持つ知識と技術が無秩序に拡散するのを防止する事。」

劍丞様が懸念している通り、

日ノ本を危険な武器で延々と殺し合う地獄に変えてしまう危険がありますから」

「はいー」

雫が力強く頷く。

「2つめの目的は、齋藤九十郎の知識と技術を可能な限り私達に伝える事。」

劍丞様の懸念は尤もですが、

それに固執して私達が全滅してしまつては意味がありませんから」

「はい！ 分かっています！」

雫が力強く頷く。

「……………うぐう」

劍丞の良心に1000のダメージが入った。

本当は劍丞も伝えたいのだ、知っている限りの事を洗いざらい。

竹中半兵衛が病死する事とか、織田信長が本能寺で謀反に遭って死ぬ事とか、羽柴秀吉と柴田勝家の殺し合いの事とか、朝鮮出兵とか……その辺も含めて全て話してしまいたいのだ。

しかし……それをすればその後の歴史がどうなるのか分かったものではないから、二の足を踏んでしまっているのだ。

その辺の配慮というか、後先を考える能力が致命的に欠如している所が、九十郎の九十郎たる所以である。

「雫、織田の天人様はこんな感じですよ。」

世間の噂では色々と言われているようですが、一皮剥けばただの人間です。

私達と同じ人間です。悩んで、迷って、苦しみながら生きている人間です。

幻滅したのなら、今からでも姫路に帰っても良いのですよ」

「幻滅なんてしませんっ！」

むしろ一層決意が固まりました、劍丞様を命懸けで支える決意が」

そんな雫の言葉に嘘は無い。

断じて嘘は無い。

しかし……

『一万年と二千年前から愛してましたあああああ~~~~っ!!』

しかしその時、雫の脳裏に浮かんだのはそんな九十郎の叫びであった。

あの時九十郎は、確かに雫に愛を叫んでいた。

暑く苦しく叫んでいた、首筋に血管を浮き上がらせながら叫んでいた。

それは雫にとって生まれて初めての、熱烈な求婚の叫びであった。

「正直に言つて、私が何故九十郎さんに好かれているのかまるで分りませんが……

好かれているという事実は、それはそれで利用するべきだと思います」

雫はそう告げた。

その言葉にも嘘は無かったが、そう告げた瞬間、何故か胸の奥が少し痛んだ。

「はつきりと申し上げて、雫は優秀です。

何故小寺家では評価されないのかが不思議なくらい、聡明で、先を見ています。

故にこの任務には最適……いえ、雫以外の誰にも遂行はできません」

「やってくれるか……雫」

「はい! やらせてください!」

雫が力強く頷いた。

しかし、劍丞は気分が良くない。

詩乃が指摘した通り、劍丞がいらん意地を張っているせいで、雫にいらん苦勞を背負い込ませている所が多々あるからだ。

もう一度謝りたい気分だが……それはむしろ、雫の決意を乏すような気がした。

「しかし劍丞様。

私はこれから、越後の龍と謳われる、長尾景虎に信用されなくてはなりません。

織田と長尾……いえ劍丞様と長尾を天秤にかけて、

私が長尾を取ると思わせなければなりません」

「それはつまり、本当に必要な時以外は、

劍丞様や久遠様に不利益な事もしなければならぬという事です」

「できる限り従順に振る舞わなければなりません。

長尾景虎や九十郎さんに好意を抱いているように振る舞うなければなりません。

あまり考えたくない事です……抱かれる事も想定しなければなりません」

雫と詩乃が重苦しくそう告げる。

同時に雫は、昼間の九十郎の熱烈な求婚を再度思い出す。

あの勢いのまま迫られたら……任務云々を抜きにしたとしても、自分は拒めるだろう

かと。

「そんなのは駄目だっ!!」

劍丞が反射的にそう叫ぶ。

九十郎に押し倒され、ヒン剥かれ、犯される雫を想像し、気分が悪くなった。

劍丞の見立てでは、九十郎は雫を……いや、小寺官兵衛をアイドルか何かのように好んでいるだけだ。

天和、地和、人和トリオの追っかけと似たような匂いを感じていた。

それ故に一歩間違えれば、暴力的な手段で無理矢理手を出そうとする質の悪い連中に早変わりしかねない。

九十郎が雫に迫り、無理矢理男女の関係になろうとする光景を、劍丞は自然に想像できた。

『黒田官兵衛おんこにナマ中出しできるとか最高だぜ! げっへっへっへっへっ!』とか何とか言いながら雫を手籠めにする九十郎を想像できた。

その光景は十分ありうるものだと思った。

いくら作戦上必要だからといって、劍丞はそんな悲惨な事を容認できる男ではなかった。

「これはあくまで、最悪の想定です。巨乳好きのようですし、あの人は」

「ですが無いとは断言しかねます……私も、雫も」

「女の子が軽々しく抱かれるだなんて言うんじゃない！」

「軽々しくはありません！ 皆の命が懸かっています！」

日ノ本の未来も懸かっています！ 私が雫の立場でも、抱かれます。

私がかかぬ男に抱かれるだけで愛する貴方を助けられるのなら、何度だって……」

「詩乃っ!!」

劍丞が詩乃の両腕を掴み上げた。

詩乃の言葉に嘘は無いと思つたし、正しいとも思つた。

感情のままに詩乃を掴んでもどうにかなるとも思つていなかった。

感情の赴くままに、行動していた。

「……何度だって抱かれます。それが貴方を助ける事になるのなら」

「そんな事を言うな、言わないでくれ、詩乃……」

大多数の世界線と異なり、劍丞は既に1度、詩乃を抱いている。

既に詩乃は生娘ではなく、詩乃と劍丞は男と女の関係になっている。

久遠と劍丞が結ばれるタイミングが早まった事で、詩乃と結ばれるタイミングも少々

前倒しになったのだ。

「劍丞様……」

「詩乃……」

詩乃と劍丞が潤んだ瞳で見つめ合う。

息と息が交わる程の至近距离で、見つめ合っていた。

「で……ええと……犬も食わない話はその辺にして、任務に行っても良いでしょうか？」

今現在、劍丞の妻になっていないし結ばれてもいない雫は完全に蚊帳の外である。

「いや、良くない。好きでもない男に身体を差し出せなんて言っちゃいけない」

「分かりました、では抱かれる、抱かれたいは自己判断で行きます」

「じゃあそれで……いや、良いのか良くないのか分からないけど、

本当に無理をしちゃ駄目だからな」

そして……

……

……

……

「本日はお招きいただき、ありがとうございます。九十郎さん」

犬子と九十郎の宿の部屋で、雫が深々と頭を下げる。

「マジで来たよ、マジで来たよ、マジもんの黒田官兵衛だよ。

たぶん来ねえだろうって思ってたのに……」

九十郎があからさまに動揺している、視線が泳いでキョドっている。

部屋には雫と九十郎しかいない。

：今日九十郎は紅茶でも飲まねえかと誘ったのだ。

正直断られると思っていた……九十郎は過去（前の生含む）100回以上ナンパを敢行しているが、2人でお茶にまで進展させられたのは、うっかり詠美をナンパしてしまつた1回だけだ。

ナンパ成功率1%未満の自分が、黒田官兵衛をお茶に誘えるだなんて全く思えなかつたのだ。

「紅茶、ご馳走してください。」

公方様も楽しまれたという芳醇な香り、楽しみにしていたのですよ」

「マジかよ!? ようし、官兵衛に期待されてちや手を抜く訳にはいかねえな。」

すぐに淹れてくるから待つてくれ!

お茶請けにスコーンとジャムを用意しているからそつちも食べていつてくれ」

「はい、ありがとうございます」

雫は畳の上に正座しそうになり……慌てて用意されていた椅子に座る。

木苺をつかつた鮮やかな赤色のジャムが、見るだけで雫を楽しくさせる。

こういう小器用な事ができる割に、後先を考える能力が欠如している所が九十郎である。

しばし待つと……九十郎は紅茶を3人分淹れて戻って来た。

「……美味いか？」

「ええ、とても良い香りです」

雫は思わず笑みを零していた。

演技とか、任務とか、その辺の事情を思わず忘れ、純粹に紅茶の味と香りを楽しんでいた。

「官兵衛が俺の淹れた紅茶を美味いと……やべえ、俺は今、猛烈に感動している」
安い男である。

「それで……この間の話なのですけれど」

「この間……ええつと……？」

「私を越後にお招き頂いたお話です。あの時は返事ができませんでした……」

「ああ、あの話か。それはちよつと待つてくれねえかな。」

もうそろそろ来るって聞いてるんだけど……」

「来る……？」

雫が首を傾げた直後、部屋の襖が急にガラツと開き、外から1人の女性が飛び込んでくる。

「九十郎お〜！ 会いたがったつすう〜！」

そしてその女性が九十郎に飛びつき、力一杯ぎゅぐつと抱きしめてきた。

「貴女は……!?!」

雫はその人物と会った事が無い、その声を聞いた事も無い。

しかしその顔は知っていた、故に誰だかすぐに分かった。

つい先日、久遠に送られてきた写真に写っていたからだ。

「アンタが小寺官兵衛さんですか？ 自分は柿崎景家、通称は柘榴。」

越後の長尾景虎の家臣で、九十郎のお嫁さんもやってるつす、以後よろしくつす」

「は、はい、存じ上げています。」

長尾の七手組一番隊長で、勇猛果敢な将と聞いています」

「おおつ！ 柘榴の事知ってるつすか!?! そりゃあ嬉しいつすね」

「柘榴、お前の分の紅茶、淹れておいたぞ。本題に入る前にちよつと休んでいけよ」

「おお、良いつすか?」

いや、例のアレの準備のために一日中走り回ってたつすから、喉乾いたつすよ」

柘榴が九十郎の淹れた紅茶を一息に飲み干す。

淹れてからちよつと時間がかかってぬるくなっていたが、今の柘榴にとつては甘露と

言つて良い。

「……さて、これでこつちの準備はできたと。官兵衛、さっきの話の続きを聞こうか」

「正直に言います……迷っています。何の実績も無い若輩者である私に、

1万石なんて高値をつけてくださった方を袖にしても良いものかと……」

雫があらかじめ考えていた言葉を述べる。

金で釣られる軽薄な者と思われるのは良くないが、あまり話を長引かせて向こうを諦めさせる訳にもいかない。

できる限り自然な流れで、自分が九十郎と共に越後に行けるように話を誘導しようと、雫は慎重に言葉を選ぶ……

「悪いっすけど、まだるっこしい条件闘争に付き合う気は無いです。

裏工作の時間を与える気も無いっすよ」

柘榴から、さっきまでのほんわかとした空気が消えていた。

その言葉は今日の晩飯の話でもしているかのような軽さであったが、言葉の重みは戦場を駆ける武将そのものであった。

雫の表情が崩れ……いや、崩れない。

自分の考えを当てられたかと、動揺はした。

しかし、1度や2度考えている事を当てられた程度でいちいち狼狽えていては、軍師だなんて難儀な生き方はできやしない。

「どういう……意味ですか……？」

演技を続けながら、雫は机の下で小波から受け取った御守りをぎゅつと握り、異常事態を伝えようとする。

しかし……小波からの応答が一切無い。

「先に言つとくつすけど、服部半蔵の御家流は既に封じさせてもらつてゐるつす。

てればすつて言つたつすか？ 音も立てずに声を伝える能力は地味に厄介つすから

ね」

雫は知らない事であるが、柘榴と共に武田信虎が京都に来ていた。

そして御家流を受け止め、投げ返す能力で雫が発する念波を明後日の方向に捻じ曲げていたのだ。

「な、何の話ですか……？」

雫の表情がほんのわずかに引きつった。

知られている筈の無い、劍丞隊の切り札……小波の御家流、口伝無量が知られている事は、そしてそれを封じられている事は、雫にとつて想定外の事である。

「悪いな官兵衛……アンタが好きだつて気持ちにや嘘は無いし、

できればもつと穏当な手段を使いたかつた。

だがそれ以上に、アンタが劍丞ハーレムの中に入られちゃ困るんだよ。

最後の思い出とか何とか言つて、官兵衛が劍丞に抱かれる可能性が以上、

長期戦はできねえんだよ」

「は、はあれむって……?」

「早い話、あんたが劍丞の女になるのは嫌なんだよ」

「わ、私はまだ劍丞様に手を出されては……」

「犬子、準備OKだ! やっちまえっ!」

「犬子、準備はバッチシっすよ! やっちまうっす!」

慌てて弁明しようとする雫の前で、柘榴と九十郎が犬子に合図を送った。

「わううっ!!」

直後……部屋の隅に置いてあつた葛籠がガバツと開き、中から一匹の犬が飛び出した。

「……なっ!?!」

「がぶっ!!」

雫が何かを言うよりも早く、雫が身構えるよりも早く、飛び出した犬が雫の腕に噛みついていった。

「痛ったあ……九十郎さん、何をっ!?!」

「良おくし犬子、良い奇襲だったぞ。後で好きな物なんでも作ってやるからなく」

「わうん!」

腕から血を滴らせながら、雫が抗議の声を上げる。

しかし九十郎は雫を襲った犬を犬子と呼び、喉を撫でていた。

「聞いているのですか九十郎さん！ 柘榴さんも！ それに……その子、犬子って……」
そして気づく、今自分を襲った犬が、前田犬子利家がつけていた三文銭の髪飾りと同じ物をつけている事に。

色合いも、大きさも、小さな傷跡すらも良く似て……いや、全く同じだという事に。

「その子……まさか、本当に犬子さん……？」

雫がそんな事を考えた直後……異変が起こる。

「な、何で……足が、ふらついて……」

何故か足がぐらぐらと揺れ、立っていられなくなっていた。

気が付けば両手両足がどんどん短くなり、指もどんどん短くなり、全身の体毛が深くなっていく、全身の骨格がゴキゴキと音を立てながら変形していく。

「ひぎつ……ぐう……!? や……だ……身体が……ああつ！ がぐつ、あぐう……!!」
苦痛は一切無い。

苦痛が一切無い所が、むしろ雫の恐怖を増大させていた。

自分が別種の生物に作り替えられていく恐怖を……

「だ、誰か……剣丞様あつ!!」

「逃げちや駄目つすよ、もうちよつとで終わるつすからね〜」

四つん這いになりながら逃げ出そうとする雫の胴体を踏みつけ、柘榴が逃亡を妨げる。

やっている事は悪役そのものであるが、柘榴に罪悪感は一切無い。

「ひ……ひぐつ……い、嫌あ……嫌だあ……ああ……」

非力な雫には柘榴を跳ねのける事はできず、全身が作り替えられる恐怖の中で手足を弱々しくばたつかせる事しかできず……

「ほい、一丁上がりつす。ハマるとめつちや強力な御家流つすよね、犬子つて」

3分も経つ頃には、柘榴の足の下には小寺官兵衛はおらず、1匹の子犬がいるだけであつた。

犬子の御家流によって身体も、知能も犬に変えられた子犬に変えられた、小寺官兵衛だったものがあるだけであつた。

「しかも脳波コントロールできる、絶妙に便利な能力だよな」

「犬並みになった知能でも理解できる簡単な命令だけつすけどね。

でもまあ、伊賀者の目を欺くには十分つすよ」

「わんっ!!」

犬になつて犬子が、任せろつても言いたげに鼻息を鳴らし、九十郎に尻尾を振つた。

「それはそうと柘榴、逃げ支度はできてるよな？」

「モチのロンっすよ。いくら伊賀者が見張っていても、いくら服部半蔵が優秀でも、

人間一人連れ出すのは難しくても……犬一匹連れ出すのはそう難しくないっすから」
そう言うのと柘榴はすっかり大人しくなっている子犬に手早く首輪を着ける。

そして雫が着ていた衣服をぱんつに至るまで剥ぎ取って、くしゃくしゃと丸めてさつきまで犬子が隠れていた葛籠の中に放り込んだ。

「そうか、これで……これで劍丞は助かる訳だ、良かった良かった」

そして九十郎は安堵のため息を漏らした。

九十郎は放置しても問題なさそうな奴には基本辛辣だが、放置したら死にそうな者、あるいは洒落にならん事になりそうな者には案外優しい。

それは相手が主人公であろうが、新田劍丞であろうが変わりは無い。

そう、この日九十郎は、この日の九十郎の行動は……新田劍丞は助けるためのものだったのだ。

しかしそれはそれとして、動機がどうであれ……今日の九十郎の行動は、断じて主人公がやって良い行動では無いだろう。

だから貴様は九十郎なのだ。

犬子と柘榴と九十郎第63話 『熱烈歓迎! 小寺官兵衛

様!』

黒田官兵衛うっかり誘拐事件から数日……何故『うっかり』なんて不名誉な単語が付くのかはそのうち語るとして、劍丞隊の面々は少なからず衝撃を受け、各々が思い思いの方法で雫を探し始めた。

「ご主人様、申し訳ございません。」

今日も雫様の手がかりを見つける事は叶いませんでした」

最近劍丞隊の一員になった服部半蔵正成、通称小波が深々と頭を下げながら劍丞に報告をする。

越後では危うくマジカルち〇ぼで洗脳されかけ、尾張では信虎に御家流を投げ返されて失神、そして今、彼女は連日寝る間も惜しんで駆けまわり、突如として姿を晦ましてしまった雫を探し続けているが、まるで成果が得られない……九十郎と関わるようになってから、彼女は敗北続きの不連続きである。

全部九十郎が悪い。

「そう……か……」

劍丞が暗い顔でうなだれる。

劍丞隊の皆が、思い思いの方法で雫の行方を捜していた。

だがしかし、そんな彼ら、彼女らの必死の努力を嘲笑うかのように、誰も何も掴めていない。

分かった事は2つ……雫が失踪する前後に、越後の長尾景虎が操る密偵、軒猿が何やら不穏な動きを見せていた事。

そして雫が失踪すると同時に、京に来ていた筈の犬子と九十郎もまた姿を消した事だけだ。

「長尾景虎の手の者によって連れ去られた……そう考えるのが自然ですが……」
詩乃がそう呟く。

だがしかし、彼女自身もその推測が正しいとは断言できない。

何故ならば……

「お、お言葉を返すようですが……」

雫様にも、九十郎殿達にも、複数の伊賀者が張り付いていました。

いくら軒猿が手引きをしたとしても、全員の目を欺きながら京を出るなど不可能です」

小波が頭を下げたままそう告げる。

「そうですね……ええ、そうですね……いくらんでも……」

詩乃は俯きながら思索に耽り、何かをぶつぶつと呟き続ける。

いくつもの可能性が浮かんでは消え、浮かんでは消える。

そして何度も何度も同じ答えに辿り着く……情報が足りない。

斎藤九十郎なる男が何を考えているのかが分からない。

何ができて、何ができないのかまるで分からないと……

「い、伊賀者の目を欺く御家流とか……」

「劍丞様、御家流はそうポンポン生えてくるようなものではありませんよ」

「すまん……」

後で分かる事だが、実はこの時の劍丞の発言は正解している。

いくら伊賀者が優秀でも、人間を犬に変える程度の能力までは想定していない。

事前に久遠や雛といった尾張に居た頃の犬子を知る人物達から、犬子は御家流を使えないという情報が伝えられていた事が、かえって小波を含めた伊賀者達の目を曇らせていたのだ。

「私や雫は、九十郎殿は劍丞様に敵意を持っていないと見ました。

むしろ劍丞様に好意を抱いているのでは……そう見えました。 劍丞様はどうですか？」

「いや……俺も同じだ。 あいつは俺達を敵対しようとしていない……そう感じた。小波はどう思った？」

「私は遠目で見ていただけですが……そうですね、裏表が無い方のように見えました。嘘が苦手と言いましたどうか、考えている事がすぐに表情になると言うか……」

ですが最近、何故かあの方の顔を見ると寒気がして、

それでいて下腹部の辺りがキユンとして……」

後半部分はマジカルお〇んぼ（未遂）の後遺症である。

新戸の超能力で記憶を消されているが、身体が人外の快楽に屈服しかけた事を覚えているのだ。

「……はっ!? ち、違いますよ! 年中発情している訳じゃありませんからっ!!」

誤解しないでください剣丞様あっ!!」

「分かってる、小波はしっかり者の良い娘だっつて分かってるから」

「九十郎殿が下手人でないとすれば……」

あまり考えたくない事ですが、何者かに……鬼に襲撃されて、犬子さん共々……」

「……殺された、か」

剣丞が拳にぎりつと力を籠める。

「僅かではありますが、雫様が剣丞殿と面会した部屋に、血痕と争った跡がありました。」

血痕は数滴しかありませんでしたから、人が殺された現場とは考えにくいのですが

……

その、私も噂で聞いただけですが、鬼の中には人を丸呑みにするものもいるとか」

「丸呑みに……」

劍丞が鬼に呑み込まれる雫達の姿を想像する。

マツチヨな九十郎を丸呑みするのはちよつと苦しそうだが……それでも、あの九十郎が雫を拉致する光景に比べれば、いくらか現実味があつた。

ちなみに正解は、噛みつくと人を犬に変える程度の能力に目覚めた犬子が、不意を突いて雫に噛みついた……である。

「齋藤九十郎という方が劍丞様と敵対する意思が無いのなら雫を攫うとは考えにくい、

ああも分かりやすく雫に好意を持っている以上、九十郎殿が雫を殺したとも考えにくい。

劍丞様、以前九十郎殿は、千年巨人（ミレニアム）に気をつけろと言っていましたね」

「ああ、確かに言っていた」

「あるいは……我々の知らない脅威が迫っているのかもしれない。」

九十郎殿はそれに気づいていたから、始末された……

そう考える事はできないでしょうか」

「千年巨人（ミレニアム）……一体どんな敵なんだ……？」

なお、千年巨人（ミレニアム）とはかつてロンドンを無駄に震撼させたバネ足ジャックが、

ノリと勢いに身を任せてでっち上げた組織の名……といっても某所の聖杯戦争スレの話だ。

当然ながら何の実態も無く、何の意味も無い。

でっち上げた話がこうも大事になるうとは、基本後先を考えない九十郎はまるで予想していなかった。

短慮な男である。

「いずれにせよ、もう出立の日も近いです。

雫の搜索はこの地に残る者に任せて、私達は鬼との戦いに赴かなければなりません」

「そうだな……心配だけど……」

「腕利きを残し、雫様の搜索に当たらせませす。

必ず……必ずや、手がかりを掴んで見せませす」

その後、織田久遠信長は近江近辺の鬼を一掃すべく軍を起こす。

大体の世界線で地中から奇襲されるという想定外の事態により、大敗を喫する金ヶ崎の戦いが幕を開けようとしていた。

たまあくに地中に潜った鬼が勢い余って温泉を掘り当て、火傷や窒息で半死半生の状態で久遠達と戦う羽目になり、当然のように久遠達にボコられて負けるというギャグのような事態が発生するし、逆に敗走中の劍丞隊が逃げる方向を間違えて全滅し、

劍丞の嫁達が全員纏めて鬼に凌辱され、シナリオが崩壊したとエーリカが頭を抱える場面も発生する……そんな金ヶ崎の戦いが始まるうとしていた。

この世界での金ヶ崎の戦いはどうなるのか……それは後に語るとしよう。

……

……

……

一方その頃、九十郎達は越後の春日山城まで来ていた。

おおよそ常識では考え難い超スピードの旅路である。

犬子、柘榴、九十郎、そして雫の4人が犬に変わって最短距離で突っ走る……それによつて常識外の速さと隠密性を両立したのだ。

犬にも持てる程度の重量になるまで荷物を減らさなければならなくなる事や、犬子が寝ると雫が人に戻つてしまうため、休憩する際はいちいち雫に足枷を着けなければならぬ事、そして普段から鍛えている犬子と柘榴と九十郎はともかく、基本モヤシっ娘の雫は数日間筋肉痛で悶絶するのが難点であるが、とにかく常識外の速さと隠密性を両立

したのだ。

伊賀者達は雫を拘束し、駕籠に乗せるか海路を進んでいると思つていたため、そんな常識外の誘拐を見抜けなかったのだ。

「あの……何故九十郎さんは、私を攫つたのですか？」

寝不足と全身筋肉痛でダウン中の雫はそう尋ねた。

「俺が官兵衛を攫つた理由か？」

「はい、それと……こうやって甲斐甲斐しくお世話をしている理由も……教えてください」

割烹着を着て、まるでオカンのようにダウンした雫の世話をしている九十郎にそう尋ねた。

征夷大將軍足利義輝、尾張国主にして、東海一の弓取りである今川義元を破つた織田信長、今孔明を評される当代随一の知恵者竹中半兵衛……新田劍丞を取り巻く綺羅星のような英雄、英傑達の中から、何故自分が選ばれたのかと。

その問いに対して、九十郎は少し考えこみ……

「黒田……じゃない、小寺官兵衛が好きだった。

凄い奴だから傍に置きたかったのが半分……」

その言葉は小寺官兵衛にとって何より嬉しい言葉であつた。

小寺官兵衛は誰かに認められたかった。

誰かに凄い奴だと言われたかった。

能力を、あるいは頑張りを褒めてほしかった。

その言葉を聞いた瞬間、小寺官兵衛は胸の奥がキューンと締め付けられるような思いをした。

「残りの半分はアンタを劍丞の女にしたくなかったからだよ」

その言葉は雫にとって何より嬉しい言葉だった。

薬屋の娘とさげすまれ、誰からも見向きもされなかった雫には、魅力的な女性だと言われた経験が無かった。

密かに憧れていた、情熱的な求愛を受ける事を。

そして同時に諦めていた、自分は男性受けをしないのだと。

誰からも求愛なんてされっこないと……

その言葉を聞いた瞬間、もう一度雫は胸の奥がキューンと締め付けられるような思いをした。

「本気……ですか……?」

小寺官兵衛は、雫は、思わずそう聞き返していた。

信じられない、でも信じたい、でも信じられない、でも信じたい……心がメトロノ

ムのように左右に揺れ動いていた。

「本気だよ」

九十郎は少しも迷わずにそう答えた。

小寺官兵衛の、雫の心がビクンと震えた。

嬉しくて嬉しくて堪らなかつた、胸の中が歓喜で一杯になった。

「ああそうだ、お前にこれをやる。」

劍丞の元から無理矢理引きはがした迷惑料だと思つてくれ」

そして九十郎は雫に対して、お椀の形をした珍妙な兜を渡した。

「素敵……」

それを見た瞬間、雫はうつとりと見とれ、そう呟いた。

1000人が見たら1000人共ヘンテコ兜だと思ふそれだが、雫には何よりも素敵なデ

ザインの兜に思えた。

銀白檀塗合子形兜……九十郎が黒田官兵衛にはお椀みてえなヘンテコ兜がお似合い

だと、そんな軽い気持ちで夜なべして作った兜である。

少なくとも九十郎には、この兜に詫びの印以外の意味を持たせていない。

だがしかし……

「私……私をそんなに欲しがって……」

合子とは身と蓋が一对で成立する容器であり、夫婦の間柄を表したもの……雫にとつては、合子の形の兜を渡す事は、何よりも素敵な求愛の印、求婚の印だと思えたのだ。今、雫の心が盛大に揺れ動いていた。

なお、九十郎は黒田官兵衛の兜の由来なんて知らないのです、この兜が雫の目に求愛と求婚の印に写っているなんて想像すらしていない。

だから貴様は九十郎なのだ。

「おーい、屑郎、ちよつと〜」

そんな時、襖に少しだけ隙間を作り、部屋の外から手招きをしていた。

「うん? 何だ糞ニート」

突然の求婚（誤解）に顔を真っ赤にしてる雫を置いて、九十郎は部屋から出て新戸の元へ向かった。

「例のマジカルチオポ、ヤルのなら手伝うぞ。ただ……」

「ただ、何だよ」

「小波と違って、雫には特に恨みも辛みも無いから……」

問答無用でマジカルチオポは流石に心が痛む、小波と違って」

なお、恨みも辛みも並行世界の別の虎松の話である。

「お前、服部半蔵に何の恨みがあるんだよ」

「オレの死因ランキング1位は川上シロンペロン家臣、柏木源トツ何だが……
2位は小波なんだ」

「そういうの江戸の仇を長崎で討つていうんだよ。」

「てか柏木源トツって名前は何だ？ そんな名前の奴がいるのかよ」

「あいつの名前は言い難い」

「言ってみろ」

「гентトツウ……ゲンドウ……ゲンデイ……гентトウウ!!」

「何だそのイントネーションは、そいつはガブティラか何かか？」

ガブティラ獣電池をガブリボルバーにセットした時のようなイントネーションであつた。

とりあえず人間の名前を呼ぶ時のイントネーションではない。

「で。どうする屑郎、サクツとヤツておくか？」

「やらねーよ。前田利家……犬子1人だけでもヒーヒー言ってるんだ。」

この上黒田官兵衛の面倒まで見られる訳がねえだろうが」

「だがな屑郎、劍丞は誑すぞ。誰彼構わず、女であれば誰でもすぐに誑す。」

大体の世界線で、雫は劍丞に惹かれて、劍丞の嫁になっている」

それを言い出すなら犬子と柘榴も大体の世界線で劍丞の嫁になっているだが……九

十郎のトラウマが大爆発して再起不能になりかねないため、新戸はあえて口を噤んだ。
「……それは困る」

九十郎は深刻な表情で呟いた。

九十郎は本気で、心の底から雫が劍丞ハーレム入りさせたくないのだ。

何故ならば……

何故ならば九十郎は、黒田官兵衛が……雫が梅毒持ちだと思っっているのだ。

信長と秀吉と將軍とその他大勢の戦国時代の英雄達が、全員揃って梅毒になったら二ホン終わるぞとか考えていた。

だから九十郎は小寺官兵衛が劍丞の元に身を寄せたと聞き、慌てて行動を開始したのだ。

だから九十郎は雫を誘拐し、無理矢理劍丞の元から引きはがしたのだ。

「ぷっ……くっ……くっ……くっ……くっ……」

そんな九十郎の思考を読んだため、新戸は笑いを堪えるのが大変だった。

他の世界の虎松から聞いているため、新戸は知っている。

この時期の雫はまだ梅毒に罹患していない事を。

雫が梅毒を患うのは、荒木村重に足の健を切られ、一年以上もの間、乞食や浮浪者達の肉便器として使われていた時期であると。

早い話、九十郎は杞憂と早とちりで雫を誘拐したのだ。

馬鹿そのものである。

「いや待てよ、良く考えたら俺が官兵衛とヤツたら俺に感染するんじゃないのか。

いくらニホンの未来が懸かってるって言っても、そこまで犠牲になる気はねえぞ」

「大丈夫だ屑郎、一回ヤツた位なら100%感染する訳じゃない」

「大丈夫でも何でもねえよそれ！俺はそこまでチャレンジャーじゃねえよっ!!」

「抱く前と抱いた後に石鹼で全身を洗えば多少は緩和できる。

キスとフロラとクオニは厳禁だな」

「だからチャレンジしねえって言ってるだろっ！

一歩間違えたら犬子と柘榴も道連れ地獄だからなっ！」

新戸はニヤニヤしながら九十郎の反応を楽しんでいた。

雫が梅毒だなんて一言も言わないが、梅毒じゃないと教えない所がポイントだ。

新戸はこうやってあえて誤解を招く表現をして他人の反応を楽しむ悪い癖がある。

だから九十郎から糞女と思われるのだが……性分というものだろう。

「じゃあ、100%感染しないって分かってたらヤルのか?」

「ヤラねえよっ! 黒田官兵衛を抱くとか胃もたれするわっ!!」

九十郎は即答した。

この男の頭の中に、自分が黒田官兵衛を嫁にするという選択肢はハナっから存在しない。

それでもこの男は基本後先を考えない性格なので、ノリと勢いと雰囲気と性欲に背中を押されてうっかり抱きかねない。

「ぶっ……くく……そうかそうか……」

雫も大変だなあ……と、雫が求婚されたと誤解した事をしつかりと察知した新戸は、対岸の火薬庫をニヤニヤしながら観察する気満々である。

「九十郎、小寺官兵衛殿歓迎会の準備できたっすよ」

「秋子さんの手料理、凄く美味しそうだったよ」

そうこうしている内に、雫と同じくほぼ不眠不休で京から走り続けたというのに、まだまだ元氣一杯な犬子と柘榴がやってくる。

「そうか、じゃあ行くか」

……

.....

九十郎は突然の求婚で悶々としていた雫を連れ、城の広間へと向かった。

そこで雫を待っていたものは……

「熱烈歓迎！ 小寺官兵衛様っ!!」

『Welcome to ようこそ春日山城』の垂れ幕、大量のデコレーション、越後の名産をふんだんに使用した料理の数々、そしてクラッカーを鳴らしながら雫を出迎える長尾家当主長尾景虎の姿であった。

「え……これは……」

「初めまして小寺官兵衛殿、私が越後の国主、長尾美空景虎。

そしてこれは貴女の歓迎会よ。

無理矢理攫ってきて気を悪くしているかもしれないけど、

それはそれとして貴女が私に仕えてくれると非常に嬉しいから全力で歓迎するわ。」

無茶な理屈である。

「そ、そうですか……」

なんとも予想外の展開に、雫は目を白黒させている。

今まで自分の誘拐は九十郎の独断だと思っていたのだ。

「歌と踊りでも見せましようか? 最近名月がヴァイオリンに凝ってて、

最初は下手だったけど、今ではお客さんに聞かせられるくらいの腕前になってるのよ」

「名月……あの、もしかして養子にされた景虎殿ですか?」

「そうよ、私の自慢の娘。とおくつても可愛いのだから」

美空が子供のように笑う。

その屈託の無い笑みが、雫の警戒心を幾許は薄れさせていた。

「お酒は飲めるかしら?」

「ええ、はい……嗜む程度ですが」

「ならとりあえず呑みなさい。これは今越後の名産にしようとしているおビール様よ」

そう言いながら、美空は雫の席にある杯に黄金色の液体を注ぐ。

「え、これ……お酒……なんですよね?」

「美味しいわよ。私は一口飲むだけで気に入ったわ」

「初めて見る泡のある得体のしれない酒に、雫はしばし警戒するが……意を決して口に含む。」

「ぶふっ!? けほっ、いほっ……」

……が、しかし、炭酸のシユワシユワする感触に驚き、吹き出してしまった。
「あれ？」

「御大将、おビール様は、初めては驚く」

「そうですよ、やっぱり清酒の方が良いですって」

「ええ、私は最初から楽しめたわよ。しゅわしゅわして美味しいじゃない」

「御大将が怖い物知らずなだけです」

「あるいは……鈍感？」

「松葉貴女私の事鈍感だっと思ってたのね」

松葉と秋子がふうっとため息をついて、代わりの杯を雫に差し出す。

今度は普通のお酒が入っているのを見て、安心して飲み始めた。

「貴女を攫うって話、最初に言い出したのはその筋肉達磨だけだ。」

その話を聞いてやれって指示したのは私。まあ、恨むなら私を恨んで頂戴な」

「恨むだなんて……あの、何故私を？」

「ぶっちゃけね……ウチ、人材不足なのよ」

瞬間、秋子と柘榴と松葉の視線が盛大に泳いだ。

「え？」

余りにも予想外な台詞に、雫が硬まる。

九十郎が京都に現れた時以来、予想外、想定外の出来事ばかりだ。

「え? じゃないわよ。」

ちよつと甲斐の武田晴信に仕える者で主だった者を挙げてみなさい」

「ええつと……御一族の典厩信繁殿に、武田信廉殿、武田四天王筆頭の馬場信房殿、武田の精鋭赤備えを率いる勇将山県昌景殿、天下の副将内藤昌秀殿、

逃げ弾正こと高坂昌信殿、

まるで千里眼の如く先を読む事から武田の眼と畏られる武藤昌幸殿……」

雫は立て板に水を流すが如く、次から次へと人物の名を挙げていく。

「うんうん、良く知っているわね。」

それで越後にいる人材の中で今挙げた人物に匹敵する人は?」

「えつと……ええつと……」

雫はしばらくの間考え込み……

「まず長尾景虎殿」

「いきなり私いつ!? もうちよつと頑張つて! お願いだから、悲しくなるから……」

「では……勇猛さでは山県昌景にも引けを取らないと言われる柿崎景家殿、

常に冷静沈着、自らに課せられた役割は絶対に果たす名将甘粕景持殿、

あとは……えつと……内政、外交、軍事のあらゆる場面で活躍する直江景綱殿……

あと……それと……劍の腕前が優れている小島貞興殿……あとは……」
そして雫は言葉を詰まらせる。

これ以上越後の名将、智将、勇将と呼ばれる人物が思い浮かばなかったのだ。

「ねえ雫、私がここぞという戦では、8000の兵を率いるのは知っているかしら？」

「ええ、はい……そのように聞いていますが……」

「何故だと思う？」

「え……それは……」

できないから……そんな言葉が一瞬出かけて、雫は慌てて口を噤んだ。

「今、貴女が言おうとした言葉を当ててあげるわ。

信頼できる部下が少なすぎて、大軍を率いれない。違うかしら？」

雫は思わず息を呑んだ。

他人の考えを言い当て、気色の悪いガキと怖がられた雫であったが、逆に他人に自分の考えを当てられたのは初めてであった。

「ぶっちゃけね、ウチって小さな豪族達の寄り合い所帯だから、

皆越後のため、長尾の為に命かけてくれないのよ。

ちよつとも旗色悪くなったらさっさと引き上げかねない連中しかいないから、

一個読み違いがあると負けるようなギリギリの戦には連れていけないのよ」

「そ、それは……大丈夫なのですか……?」

「ははは、大丈夫な訳ないじゃないの」

美空は笑いながらそう告げた。

いや……口元は笑っていたが、目は全く笑っていないかった。

絶望的な状況の中で、やけっぱちになった人のような目だ……と、雫は感じた。

「かれこれ3回、川中島で武田晴信と戦って、なんやかんやで生き延びてるけど……」

あれ奇跡だから、自分でもどうやって生き延びたのか覚えてないから、

もう一回やれって言われたら絶対に死ぬって断言できるから、

第四次川中島があつたら絶対に全滅するって確信してるから」

第四次があつてもなんやかんやで生き延びそうな所が長尾景虎の恐ろしい所である。

100%死ぬだろうって状況、ラスト5秒で奇跡の逆転を起こす力……人それを『火事

場のクソ力』と呼ぶ。

「統率91、武勇60、智略99、政治91……」

どこまでアテになるか分からないけど、本気でアテにしなきゃいけない位、

ウチは人手不足なのよ」

「何ですかその数字?」

「信長の野望……と、言っていたわ、九十郎が」

「信長の……久遠様の、野望……？」

なお、九十郎が覚えている信長の野望のステータスは、武田信玄と黒田官兵衛のものだけである。

「貴女のためになら1万石を出しても良い……」

それは嘘でも誇張表現でも無いから、少し考えてみて頂戴な」

九十郎からの熱烈で情熱的な求婚（誤解）、そして美空からの熱烈歓迎（誤解じゃない）……雫は今、揺れ動いていた。

犬子と柘榴と九十郎第64話『似ている2人』

「……一度、状況を整理しましょう」

練兵館の一室で、雫が大きく深呼吸をする。

ここしばらく、色々とあり過ぎた。

小寺官兵衛の聡明な頭脳をもってしても、処理しきれない位の情報が次から次へと押し寄せてきて、雫は今若干混乱気味である。

「最初に考えなければならぬ事は……やはり、九十郎さんの事ですよね」

そして雫は思い出す、初対面の九十郎から熱烈な求愛を受けた事を、素敵なデザイン
の兜を貰った事を……

『一万年と二千年前から愛してましたあああああ〜〜〜っ!!』

そんな九十郎の叫びを思い出す度に、雫は胸の奥がきゅゅんと締め付けられるような
感覚がした。

雫は男性から求愛を受けた事は初めての事であった。

「や、やっぱり……あれは私と結婚したい……と、いう事ですよね……どう考えても
……」

もしこの場に九十郎が居たらこう言うだろう……『そんなつもりは一切無いっ!!』と。雫は顔を真っ赤に染め、九十郎から受け取った御椀の蓋のような形状のヘンテコ兜を弄る。

小寺官兵衛の美的感覚にドストライクなその兜を……

「銀白檀塗合子形兜……夫婦和合の象徴……」

私と夫婦（めおと）になりたい、そういう意味ですよね……そうですよ……」

もしこの場に九十郎が居たらこう言うだろう……『そんなつもりは一切無いっ!!』と。

九十郎は黒田官兵衛がどんな形の兜を被っていたかは知っていたが、その由来までは知らなかったのだ。

実に中途半端な知識である、生兵法とはまさに九十郎のためにある言葉であろう。

いずれにせよ確かな事は、雫は今、本気で九十郎から求婚されていると思っただ。だ。

それが単なる誤解、単なる早とちりだと思ってもせずに……

「つんつ！ あつんつ！ あふわつああ……く、九十郎……激しいつすよ……」

ああつんつ！ ふわつあつああつ！

「もう、柘榴早く代わってよ。犬子も頑張ったんだから、ご褒美欲しいよ」

さつきからずっと、隣の部屋からは柘榴の喘ぎ声か聞こえてきていた。

練兵館は突貫工事で建てられたため、壁が微妙に薄く、防音性が良くないのだ。

「その気になつたら混ざれつて事でしようか……」

いやでも、会つて数日で身体を開くなんて……はしたない気も……」

雫が顔を真っ赤に染めながら、指をもじもじさせる。

もしこの場に九十郎が居たらこう言うだろう……『そんなつもりは一切無いっ!!』と。

「えと、その……抱かれる覚悟をしていたのですから……」

その、やっぱり私も行った方が良いでしょう……」

一目見た時から好きになりましたとか、情熱的な求愛に惹かれましたとか言つて

……」

理屈の上では、自分は九十郎に身体を差し出して、寵愛を得て、異形の知識の秘密を探るべきだと思つた。

九十郎の知識を探つて、新田劍丞の役に立つべきだと思つた。

しかし、雫は身体が動かなかつた。

今九十郎に抱かれたら、心の底から九十郎が好きになつてしまひそうだったからだ。

命懸けで仕え、支えると誓つた新田劍丞の事を忘れてしまひそうだと思つたからだ。

もしこの場に九十郎が居たらこう言うだろう……」

『黒田官兵衛と生セ〇クスとかどんな罰ゲームだよっ!!』と。

九十郎は梅毒患者（誤解）との生セオクスを全力で避けたがるヘタレである。だから貴様は九十郎なのだ。

「劍丞様は、やっぱり心配しているでしょうか……」

私が死んだら、私のために涙を流してくれるでしょうか……」

劍丞の周りには織田信長、竹中半兵衛を始めとした、日ノ本の英雄達が数えきれない程にいる。

小寺官兵衛よりも何倍も魅力的で、何倍も有能な美女達が何人もいた。

自分のような取るに足らない小娘の為に、新田劍丞が涙する所を想像できなかった。

『一万年と二千年前から愛してましたあああああ〜〜〜っ!!』

雫はもう一度、斎藤九十郎の熱烈な求愛の叫びを思い出した。

あの叫びを聞いた瞬間、顔が火のように熱くなり、心臓が締め付けられるような感じがした。

あるいは自分は、あの瞬間恋に落ちたのではなからうかとすら思った。

九十郎は正直に言つてブ男であったが、その言葉には熱気があった。

小寺官兵衛が一度も聞いた事も無い、熱気の籠った叫びであった。

逆に新田劍丞は、顔は端正で、間違い無く雫の好みであった。

何と言うか、誰もを平等に愛するような、小寺官兵衛だけを熱烈に愛し、求めるよう

な性格ではないような……そんな感じがしていた。

「まあでも、美女は三日で飽きる、醜女は三日で慣れると昔から言いますし、良く見れば愛嬌のある顔のようで……」

そして気づく。思考が盛大に横道に逸れていると。

さつきから全然生産的でも建設的でもない方向の事ばかりを考えていると。

「は、ほん……一度状況を整理しましょう、そうしましょう」

顔を真っ赤にしながら、雫は咳払いをして呼吸を整える。

心臓はまだバクバクしているが、多少は頭の中がスッキリした。

「裏切り、内通の調略は戦国の習い。私一人が長尾に走つたとしても、

国元に残した母上の風当たりが今以上に強くなる事は無いでしょう。

元々風当たり良くなかったですし。

劍丞様に九十郎さんがやっている事、やろうとしている事を伝える目的のためには、

今の状況は決して悪くありません。」

雫が自分の置かれた状況を改めて確認する。

入念な下調べと事前準備を行つてから九十郎の誘いに乗り、越後に向かう計画は頓挫

したが、それでも状況は悪くない。

下準備がまるまでできなかつたため、劍丞に情報を流す手立てが現状無いのは問題だ

が、

誘われてから越後に来るまでの時間が極端に短いため、怪しまれる機会が減ったともいえる。

「とにかく、今は九十郎さんに信用される事を最優先させましょう。

未来の知識の一端でも掴めれば、劍承様や詩乃さんを助ける事に繋がる筈です。

日ノ本の危機をどうにかするためにも……責任は重大ですね」

尤も……雫が美空からの一万石を与えるとの話を請けるには、あるとてつもなく大きなハードルを乗り越えなければならぬのだが……

「ところで……」

……と、そこまで考えた所で雫は、意図的に意識から外していた事象に目を向ける。

「ふわっ……んふわっあふわっんっ！ んううう！ イクう……イグウウツ!!」

そう、隣の部屋から全く途切れる事無く聞こえてくる女の喘ぎ声に。

「いったいいつまで続くんですかあれ……さつきから全然眠れない……」

雫は泣きそうな顔になりながら、布団を自分の頭を覆ってみる。

しかし、その声はその程度の小細工で防げるような音量ではない。

「兵は国の大事、死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。

故に五事を以て之を計り……」

まるで不眠症の者が真夜中にひつじを数えるかのように、隣から聞こえてくる淫らな声を聞くまいと、雫は孫氏の一節を呟く。

しかしその声はその程度の小細工で防げるような音量ではない。

そして……

「ふわっああつああつあつふわっあんんっ！ んんうーっ！」

一際大きな声が響いたかと思うと、ようやく雫が待ち望んでいた静寂が訪れた。

「あ……声がやみましたね、これでやっと眠れ……」

……が、しかし。

「九十郎、今度は犬子の番だよね」

隣の部屋からそんな声が……男女交際の経験が無い雫にも一瞬で理解できるほど、蕩けきり、発情したメスが男を誘う声でした。

「あ、嫌な予感……」

雫が再度布団を頭から被った直後……

「うっ！ くっうっ！ えへへ、九十郎のお〇んぼだ……」

再び、隣の部屋から淫らな声が聞こえ始めた。

「ま、またですか!?! また延長戦なんですか!?!」

「い、いったいいつになったら眠れるんですか……」

雫は布団を被り、どうか少しでも早く終わってくださいと神に祈った。
そして同時に……

「あのお2人の後は私の番……と、いう事でしょうか……？」

寝ている所にやって来て、服を力任せに破かれて……それで、それで……」

同時に雫は、目をグルグルと回しながら淫らな妄想の世界に入り込んでしまっていた。
た。

「こんな……いけない事なのに……んっ、うっ……」

気が付けば雫は、自らの秘所に指を這わせていた。

自慰の経験すらない彼女であったが、この日は彼女の中に眠るメスの本能が呼び起されていた。

下着がぐしゅぐしゅになり、ワレメが緩み、蕩け切っていた。

今この瞬間にも、男根を受け入れられる程に。

「駄目……指、止まらない……あうっ、んふっ……」

頭の中で、自分が九十郎に押し倒され、肉棒を突き立てられる姿を想像していた。

自分の子宮がかき混ぜられ、クリを指で弄るよりも何倍も、何十倍も気持ち良くなる自分の姿を想像していた。

九十郎の妻に……いや、九十郎の女にされる自分の姿を想像していた。

「うん、あつ……」

いつまでもいつまでも、隣から聞こえてくる男女の交わりの音は途切れず、いつまでもいつまでも、雫は股の突起を摘まんで振じる自分の指を止められなかった。

雫は思った、今夜は一睡もできないかもしれないと。

……

……

……

「事ここに至つては、認めざるを得ないわね……私と九十郎は似ていると」
「ま……そうだな、認めたくねえが俺も認めるか。」

俺と美空には似てる所があるつてな」

「私と九十郎は、ノリと勢いで突つ走る癖がある」

「俺のファースト幼馴染は、絶対にノリじゃ動かねえんだよな。」

気まぐれに生きているように見えるけど、

よく観察すると俺と違って後先考えてからじゃねえと動かねえタイプ」

なお、本人は未だに気づいていないが、この男の幼馴染は武田信玄だ。

いくら光璃が隠そうとしていたとはいえ、生まれた時から腐れ縁だというのに気づけないとは、察しの悪い男である

「雫や秋子もそういう感じよね、良く分からないものが眼前に出てくると硬直するの。実は最近、晴信もそうなんじゃないかって思うのよ。」

こつちが頭をパーにして突っ走つてると、稀に一瞬……

本当に稀で、本当に一瞬だけだけど、指揮が硬直する時があるのよ。」

なお、武田晴信相手に戦場で頭をパーにして突っ走れる馬鹿は美空だけであるし、頭をパーにして突っ走つてゐる総大将に追隨できるのは柘榴や松葉だけである。

そして頭をパーにして突っ走りながら敵陣に生じたほんの僅かな硬直を敏感に察知し、生じた隙に的確に痛撃を与えられる馬鹿も美空だけである。

「まあともかく、俺と美空は似た者同士という事のようにだな」

「うん、見解が一致したようで何よりね、九十郎」

「ははは、最高の御主人様に恵まれて最高の気分だけ、美空」

「まあ素敵、部下に恵まれて私も嬉しいわ。」

貴方がもう少し顔が整つて女心に理解があつたらキスしたいくらいよ」
顔が整つて女心に理解がある九十郎は九十郎ではない。

ただの弥九郎である。

「はっはっはっはっはっはっ」

「あっはっはっはっはっはっ」

しばしの間、美空と九十郎は大きさに笑い……

「まさか黒田官兵衛が領地経営できないとは……」

「まさか雫が領地経営できないとは……」

2人同時に頭を抱えて崩れ落ちた。

「どういう事よ九十郎っ！ 知略99に政治91なんでしょ!？」

最大値が100で、91ってかなり優秀な部類なんですよ!？」

1万石くらい軽うしく掌握できるって思うわよね普通!？」

「俺だってそう思ってたよコンチキショウ!!」

「どうするのよ九十郎!? もうあちこち駆けずり回って頭下げて、

買いたくもない恨みとか妬みとか買って、雫に渡すための領地確保しちゃったのよ!

今更やっぱりやめました何て言えないわよっ!」

「馬鹿かお前! 馬鹿なのかお前! それでも上杉謙信かよ!

断られたり俺が拉致するの失敗したらどうする気だった!？」

「考えてなかったわ」

「ははは、最高の御主人様に恵まれて最高の気分だぜコンチキショウ」

「だって拉致までして引き抜き工作するのよ!

目の玉が飛び出る位の待遇用意しないとただの悪者になるじゃない!

てか一万石でも少ないかな〜って思ったくらいよ!」

「向こうが承諾してから用意しろよって言ってるんだよ俺は!」

「まだ用意してませえ〜ん、口約束でえ〜す、ぶつちやけ用意できるかどうか微妙でえ〜す、

でも部下になつてくださあ〜い、人手不足なんでえ〜す……

なんて恥ずかしくて言えるか馬鹿あつ!!」

「馬鹿はお前だろ馬鹿! マツハ級馬鹿! メガトン級馬鹿!

ええつと……とにかく馬鹿つ!!」

どつちもどつちである。

「馬鹿つて言う方が馬鹿なのよ! この馬鹿! 馬鹿あつ!!」

「その理屈でもお前が馬鹿だろうが! この馬鹿女あつ!!」

「馬鹿馬鹿馬鹿あつ!!」

「しつこいぞ馬鹿つ! いい加減に認めろ馬鹿つ!!」

そんな馬鹿馬鹿合戦が永遠に続くかと思つたその時……

「んんんんん〜つ!!」

「んうんん〜つ!!」

突如として美空と九十郎の顔と顔がまるで頭突きをしあうかのように急接近、そのま

ま唇と唇が重なり合い、舌と舌が絡み合った。

突然2人の間に愛が芽生えた……という訳ではない。

さつきから黙って聞いていた柘榴が、不毛すぎる言い合いを止めるために2人の後頭部をがしつと掴み、力任せに接近させたのだ。

「落ち着いたつすか?」

そして柘榴は悪びれもせずそう聞いてきた。

「柘榴……柘榴貴女……何を考えて……」

怒りからか、照れからか、あるいは唇を奪われた事へのショックからか、美空は顔を真つ赤にしながら問い詰めようとする。

「御大将がさつき、顔が整ってて女心に理解があつたらキスしたいって言ったつすから」
柘榴は真顔でそう返す。

「うわあ、この娘マジで九十郎の顔が整ってて女心に理解があると思ってるわ」
「自慢の旦那様つすから」

柘榴はそう言いながら豊満な胸を張る。

信じがたい事かもしれないが、柘榴は本気で九十郎を自慢の旦那だと思っている。
「う、上杉謙信とキスしちまった……俺、明日死ぬんじゃねえのか……」

一方、九十郎は顔を暗あくくさせながらそんな事をぶつぶつ呟いていた。

九十郎的には、脇役またはやられ役の自分が、上杉謙信のような主役級とキスするなんてありえない事なのだ。

前田利家を何度も抱き、その上嫁にまでしている時点でもう手遅れであるが。

「ちよつと九十郎、他人の唇奪つておいて死ぬんじゃないか？ 無いはないか？ じゃないの？」

もつとこう……か、感想とか言いなさいよ！ 良かったとか、悪かったとか……」

「す、凄え柔らかかった……」

「そ、そう……それなら良いのよ、それなら……」

美空と九十郎が茹蛸のように顔を赤くし、心臓がバクバクいうのを感じながらお互いの唇を凝視する……さっきの馬鹿馬鹿合戦とは全く違う雰囲気であるが、さっきの馬鹿馬鹿合戦と同じくらい、議論が進まない時間である。

「まつ、似てるかもしれないねえっすね。 御大将と九十郎は。」

どっちも根っこはオカンっぽい感じっすし」

「誰がオカンだ誰が!？」

「誰がオカンよ誰が!？」

美空と九十郎が同時に同じ台詞を叫ぶ。

そして心底気に入らなさそうな視線を互いに向け合った。

「ほら、やっぱり似てるっすよ」

そう言うのと柘榴はふふくんと自慢げに鼻を鳴らした。

「そう……似てるのね……」

「そうだな、そうかもな……くそ、上杉謙信ならもつと上杉謙信らしくしろよな……」

「貴方の言う上杉謙信らしいってどういうのよ？」

「そりゃあ……それはだな……何だろ？」

上杉謙信らしさを問われると、九十郎は言葉を詰まらせる。

いい加減な男である。

「まあ、良いわ。おかげで少しは落ち着いたから、雫を……」

と言うより雫に渡す予定だった領地をどうするか考えましょう」

「指摘しなかった柘榴も悪かったっすけど、

やっぱ〇〇歳に1万石は無理難題だったっすよ」

（この物語の登場人物は全員20歳以上です）

「そうなのよね……ええ本当にそう。」

統率91、武勇60、智略99、政治91に踊らされて、舞い上がっていたわね」

「数えて〇〇歳か……満年齢換算で〇〇か〇〇って事は、八坂や銭形と同年代かよ……」

冷静になって考えてみれば、

いきなり1万石はいっと渡されて領地経営しろとか無理ゲー極まりないよな……」

(この物語の登場人物は全員20歳以上です)

要するに雫は、うっかり手を出したら口〇コンのレットル貼り不可避の幼女だったという事である。

そんな雫に1万石をぽんつと与えようとした美空は相当なうっかりさんであろう。

(くどいようですが、この物語の登場人物は全員20歳以上です)

「とりあえずの解決策としては、経験のある代官を貸すつてどこつすかね」

「まあ、それが一番無難よね。」

あの娘も親の伝手を辿ってみるとは言っていたけど、

親は元薬屋であんまり期待できないみたいだし、

下手に外部の人間を迎え入れたら防諜の面で不安だわ」

「人選はどうするつすか」

「秋子にやらせるしかないわね」

「ははは、何だ意外と簡単に落とすどころが見つかったじゃねえか」

「九十郎、簡単でも何でもないわよ。人選びっていうのは結構神経使う仕事なの。」

また秋子に嫌な役目押し付けてしまうわ。」

「そういうものか」

「そういうもの、全く誰かさんが雫の年齢を見落としてなければねえ……」

「ははは、誰かさんが統率91、武勇60、智略99、政治91に踊らされてなければな……」

美空と九十郎はしばらくの間、互いを見つめ合い……

「馬鹿」

「馬あゝ鹿」

……と、全く同じタイミングで言い合った。

「意外と似ているわね私達、あまり認めたくはないけど」

「そのようだな美空、俺も認めたくはないが」

「2人共、喧嘩するならもう1回ちゅーさせるっすよ」

「はいはい、心配しなくても仲良しよ私達は。」

それよりも雫を見てどう思った？ 私は一目見て気に入ったわ。

1万石ぼんつと渡しても惜しくないかもって本気で思った」

「奇遇だな、俺も似たようなものだ」

「いつそ結婚でもしてみる？」

「官兵衛とか？ それとも上杉謙信とか？」

どっちでもお断りだよ、前田利家だけでもひーひー言ってるんだからな」

「いつそ両方娶るってのはどうっすか？ 柘榴はイケると思うっすけど」

「柘榴馬鹿てめえ俺をストレスで殺す気か!? てかそれやったら梅毒で全滅するぞ!」
「ばいどく……? ばいどくって何っすか?」

聞きなれない単語を耳にし、柘榴が思わず首を傾げ、聞き返す。

「いや、それは……お前は知らなくても良い事だよ」

九十郎が慌ててごまかそうとする。

しかし一瞬、しまったという顔になったのを美空も柘榴も見逃さなかった。

「九十郎、今すぐ洗いざらい吐くつす」

「ばいどくって何の事? 私か雫のどっちかが全滅させるような何かを持つてるって事?
?

結婚すると全滅するって事は性病か何かかしら?

それとも嫉妬で刃物を持ち出すような性格とか?」

「いや、その……それは……だな……」

九十郎が冷や汗を流しながら後ずさる。

この時、この男は決意した。

黒田官兵衛の名誉を守るため、必ず梅毒の話は隠し通そうと。

「さあ観念して言うつすよ!!」

「九十郎! まさかとは思うけれど、私が性病だつて言うんじやないわよね!」

嫉妬は……嫉妬はちよつとするかもだけど、犬子や雫を刺す程イカレちゃいないわよ
！」

「御大将、その言い方だと柘榴は刺されるみたいっすけど」

「柘榴は刺された程度じゃびんびんしてるから大丈夫よ！」

「御大将酷いっすよ!?!」

「それはさておいて九十郎言いなさい!」

「さておかないでほしいっすよ御大将!」

そして美空と柘榴が九十郎に詰め寄る。

その執拗な追及に押し負け……5分後、九十郎は全てを白状した。

不名誉かつ事実無根な話を流された雫は、とりあえず九十郎を殴つても良いだろう。

……

……

……

「キスをして、抱きしめてほしい……」

そう言ったらあいつ、どんな顔をするんでしょうね……」

その日の夜、日課の1人晩酌をしながら、美空はそつと呟いた。

もしこの場に九十郎が居たらこう言うだろう……

『お断りだよ、前田利家だけでもひーひー言ってるんだからな』と。美空にはそれが容易に想像できた。

そして美空には、犬子のように前田利家を辞める覚悟はできていない。

犬子のように、自らの魂を歪める程強く強く九十郎を求め事はない。

越後なんてどうなっても良い、上杉謙信の名と立場をぽいと捨てられる……そんな事を叫ぶには、美空は色々なものを背負い過ぎた。

「上杉謙信だって誰かを好きになつて、恋しくてたまらなくなる時もある……

そう言つたらあいつ、どんな顔をするんでしようね……」

美空はそう眩くと、九十郎が作つてくれたおビール様を口に運ぶ。

もしこの場に九十郎が居たらこう言うだろう……

『ははは、そんな台詞聞きたくなかったよ俺は』と。

美空にはそれが容易に想像できた。

「柘榴に嫉妬してる……本当にそのうち刺しちゃうかもって思うくらいに。

そう言つたらあいつ、どんな顔をするんでしようね……」

もしこの場に九十郎が居たらこう言うだろう……

『んな事俺に言うなよ、本人に言えよ』と。

美空にはそれが容易に想像できた。

柘榴は九十郎にとって、最初からただの柘榴だった。

上杉謙信ではなく、前田利家でもなく、ただの柘榴だった。

ただの柘榴として九十郎に受け入れられ、愛されていた。

前田利家がただの犬子になるためには、自らの魂を歪める程の覚悟が必要だった。

上杉謙信をやめる覚悟が無い美空は、ただの美空にはなれやしない……それ故に美空

は九十郎に受け入れられない、愛されもしない。

「……妬ましいわ、本当」

美空はドスの効いた声でそう呟くと、酒瓶に残っていたおビール様を一気に飲み干した。

良くない呑み方をしている事も、明日の朝には酷い二日酔いになる事も、ヤケ酒は寿命を縮める事も分かっていたが、美空は飲まずにはいられなかった。

「部下の夫に横恋慕なんて、典型的な駄目君主じゃないの。

早く諦めて、早く忘れて、別の恋を探しなさいよ美空。

でなきや殷の紂王みたいになるわよ。

あんな……あんな基本屑の不細工男のどこが良いのよ」

そうやって自分に言い聞かせながらも、美空の頭は九十郎の顔や声を浮かべるのをやめられなかった。

そして自分の部屋にある酒瓶全部空になっている事を確かめると……
「……………んっ」

くちゆり、くちゆりと……美空の部屋に卑猥な音がし始めた。

昼の感触を思い出しながら。

今なお舌と唇に残る九十郎とのキスの感触を何度も思い出しながら……

犬子と柘榴と九十郎第65話 『官兵衛』

仮に、貴方の目の前に諸葛孔明がいたとしよう。

あくまで仮定の話である。

子供が遊びで話す『スタローンとジャン・クロード・バンダムはどっちが強い？』そのレベルの話である。

仮に貴方の目の前に諸葛孔明がいたとして、貴方は諸葛孔明を口説く事はできるだろうか？

無論、三顧の礼を示し、力を貸してほしいと懇願するという意味ではなく、ただの女の子、ただの朱里として口説けるだろうか？

貴方は諸葛孔明をただの女の子と認識できるであろうか？

北郷一刀なら『YES』と言う。
どうか言った。

新田劍丞も『YES』と言う。

たぶん秋月八雲も『YES』と言うだろう。

そして斎藤九十郎は『NO』と言う。

諸葛孔明の名の大きさに気圧されて、口説くどころではなくなる。そもそも口説くという発想自体が浮かばない。

『朱里』とは呼ばず、いや呼べずに、『孔明』と呼び続けるだろう。

万が一、いや億が一にでも諸葛孔明から好意を示されたとしても、孔明のような価値のある女は、秋月八雲のような価値のある女と結ばれるべきと思ひ、全力で逃げ出そうとするだろう。

よつほどの事が無い限り、九十郎はそんな態度を崩さないだろう。

それこそ、自らの魂すら歪める程の強い意志を込めて『大好き』と叫ばない限り。

だから貴様は九十郎なのだ。

……

……

……

ある日の夜、美空と九十郎は2人で酒を飲んでいた。

美空の趣味は1人酒だが、九十郎に対する自分の気持ちを自覚してからは、時々寝所に呼び、晩酌の相手をさせるようになった。

心のどこかで、先に酔った勢いで九十郎に口説かれたりしないだろうかと期待しながら。

一夜だけでも九十郎の女として扱われないかと期待しながら。

万が一にも抱かれて、孕まされでもしたら、ポン刀片手に責任を取って嫁にしろと詰め寄つてやろうとか考えながら……当然、九十郎はそんな美空の期待に全く気づかない。

美空の顔が赤いのは、飲酒のせいだけではない事にも。

美空が普段より薄着で、身体のラインを出やすくしている事にも、下着はいつもより念入りに洗濯してある事にも気づかない。

だから貴様は九十郎なのだ。

「ぶつちやけた話しな、抗生物質は前々から用意していたんだ」

「抗生物質？ 何それ？」

「万病に効く万能薬……つてのは流石に言い過ぎだが、

細菌やウイルスの類で起きる病気にはだいたい効く薬の事だ」

「何よそれ!? え、本気で言っているの!？」

さいきんとか、ういるすとか、良く分からないけど……

下手したらハーバー・ボツシュよりもヤバいわよそれっ!!」

「残念ながら今用意できるのは、青カビをろ過したなんちゃって抗生物質だよ。

仁っていうドラマ見ながら担庵と一緒に作つた奴だ」

「担庵？」

「俺のセカンド幼馴染、前の生での腐れ縁だよ。」

悪い奴じゃなかったが、俺が弟で、ファースト幼馴染を妹だと言い張る変な女。

今になって思えば、あいつ本気で俺達を弟と妹だと思っていたんじゃないかな」

「ふう〜ん」

美空がちよつと頬を膨らませ、目を細くしているのに、九十郎は全く気づかない。

だから貴様は九十郎なのだ。

「ちゃんとした抗生物質さえあれば、官兵衛の梅毒は完治する。」

完治するんだが……あのなんちゃって抗生物質を官兵衛に飲ませるのは抵抗がある」

「人体実験がしたいなら、私がどうにかするわよ」

「いや……」

九十郎がしばし考え込む。

死因・舐めプなんて真つ平御免だというのが九十郎の持論だ。

しかしそれでもなお、なんちゃって抗生物質を人体に投与する事には抵抗を覚えた。

きつと前の生での友人の刀舟齋かなうなら、『てめえら人間じゃねえ!!』とか何とか言
いながら怒鳴りこんでくるだろうなと思った。

「当面はネズミで試そうと思っている。」

ネズミなら放っておいても増えるし、どれだけ残酷な実験をしても心が痛まないからな。

幸いと言って良いか悪いか分らんが、黒田官兵衛は関ヶ原が始まるまで……

つまり犬子とひよ子が寿命でくたばるまで死んでなかった筈だ。

入念に準備をするだけの時間はある」

「そう……」

美空は少し、本当に少しだけ悲しそうな顔をした。

その事に九十郎は気づかなかった。

少しだけ、ほんの少しだけ、九十郎に心配されて、助けようとされている雫が羨ましくて、妬ましかったのだ。

少しだけ、ほんの少しだけ、自分が九十郎の役に立てない事が悔しかったのだ。

良くない恋の仕方をしているなど、美空は思った。

そうは思ったが、美空にはどうする事もできなかった。

本当はキスして、抱きしめてほしいと思っていた。

そうは思っていたが、美空はそれを口にする事ができなかった。

結局、この日も九十郎は美空を口説こうとはしなかつたし、美空に手を出す事もしなかつた。

「物凄く物凄く物凄おろつく呑み込みが速いです」

慌ただしく物々しい出陣前夜の空気の中で、美空の側近である直江景綱、通称秋子がそう告げた。

美空はそんな秋子の言葉を、少し上の空で聞いていた。

昨晚、2人きりでおビール様を飲みながらした、九十郎との会話を思い出していたのだ。

「そう、それは良かったわ……と、言いたいところだけれど、

ごめんなさい、何の話だったかしら？」

美空はその台詞が出てくるまでの話が思い出せず、仕方なしにそう聞き返した。

「雫さんの事ですよ！ 正直に言って、いきなり小寺政職の近習を拉致してきて、

1万石の知行を与えるって言い出した時は乱心したかと思いましたが……

あんなに優秀な娘だとは思いませんでしたよ」

「ああ、雫か。 凄いでしょう彼女、何せ智略99、政治91なのだから」

「なんの話ですか？」

「信長の野望の話」

「意味が分かりません」

信長の野望の意味が分かるのは現代人だけである。

「安心しなさい、私も意味は分かっているから。」

確かな事は、雫は超優秀な軍師になりうるって事よ。

何せ太閤殿下が重用したって話なのだから」

「太閤……殿下……？ あ、誰の事でしようか？」

「信長の所にいる娘よ。 犬子曰く、とっても良い娘だつて」

秋子はまたもや話についていけず、頭の上に何個も？マークを並べる。

早い話がひよ子の事であるが、今のひよ子を後の関白と言って信じられる者は皆無であらう。

「えつと、良く分かりませんが雫さんの話に戻しても良いですか？」

「ええ構わないわ。」

確か領地管理ができるよう色々と教えてあげてって頼んだのだったわよね」

「はい、それが本当に優秀で……一を聞いて十を知るとはまさにあの人を指す言葉です。

まだ教え始めて数日ですけど、呑み込みが速くて……」

「1年もしたら教える事が何も無くなるんじゃないかって思う程です」

「そう、流石は黒田……じゃなかった小寺官兵衛といったところね」

「ええ、本当に凄いな娘です、本当に……」

「ところで……九十郎さんがその雫さんに求婚したって話、本当なんですか？」

「……は？」

瞬間、美空の声色が変わった。

目が座り、声に重苦しい殺意にも似た色が混ざった。

「誰が？ 誰に求婚をしたって？」

嫉妬をしてる……美空にはそれが良く分かった。

美空は今、彼女自身も驚く程に黒く濁った思考をしていた。

悔しい、羨ましい、妬ましい……そんな気持ちが美空の胸を包んでいた。

「いえ、ですから、九十郎さんが雫さんにです。私も噂を聞いただけですけど……」

「黒田官兵衛なのには？」

「黒田？ 小寺ですよ」

ある意味では予想外すぎる報告を耳にし、美空が目を白黒させている。

何故九十郎が雫に……そんな疑問が美空の頭を駆け巡る。

「ええ、ですから、雫さんに会うなり、

一万年と二千年前から愛してましたあつ！ と男らしく叫ばれたとか」

「九十郎が!？」

事実である。

但し九十郎は雫に求婚したつもりは全く無い。

「あと……夫婦和合の印っていう兜を雫さんに渡してて、

雫さんが凄く嬉しそうに眺めたり磨いてたり……

ええ、雫さんも満更でもない様子だつて噂ですよ」

「九十郎があつ!？」

全くの事実である。

そして九十郎は雫に求婚したつもりは全く無い。

「あの……美空様、先ほどから声が上ずっておられるような……」

「べっ!？ べべべ、別に好きでも何でもないわよあんな筋肉達磨はあつ!!」

結婚したいとか、キスしたいとか、そんな事全然考えちゃいないわ!」

美空が慌てて否定する。

しかし、声は裏返り、頬はリングゴのように赤くなり、視線は盛大に泳いでいて、聞かれてもいないのに唐突に結婚やキスの話が出てきていた。

少なくとも秋子には、とても平静な状態ではないなと思った。

「ま、まあ、そうね……あいつが土下座しながら、どうか俺の妻になってください、

お願いします美空様とでも言ってきたら、嫁になってあげなくも無いけど……
そ、そんな事まずあり得ないからね!

要は私があいつの嫁になる可能性は全く無いという事よっ!!」

「え? 土下座してきたらお嫁さんになるおつもりなんですか?」

秋子が思わず聞き返す。

越後の龍、長尾美空景虎の勇名は既に日ノ本中に轟いており、美空を嫁にしたいと言ってきた男なんて、10人でも20人でも秋子には挙げられる。

その中には当然土下座して頼み込んできた男だっていた。

そしてその時に美空が発した言葉を、秋子は覚えている。

『丁重にお引き取り願いなさい』である。

そんな美空が、今まで見た事が無い表情で……

とても愛らしい表情で、結婚の事を話題に出してた。

相手が九十郎でさえ無ければ、万歳三唱したい気分だったろうにと秋子は思った。
「あの……恐れながら申し上げますが、私は九十郎さんが好きになれません。

あの人が凄い知識と技術をお持ちだという事は理解しますが……」

「だからならないって言ってるでしょうが!」

あいつが私に求婚してくるなんてあり得ないわ!」

美空は言っていて悲しくなってきた。

「何故そう言い切れるのですか？」

「それは……それは私が……う、上杉謙信だからで……」

「あの、時々話題に出てくる上杉謙信さんってどなたですか？」

美空様また改名なさるおつもりですか？」

「またって何よまたって!？」

毎回毎回思い付きで改名してる訳じゃないわよ！ やむにやまれぬ事情があるのよ

！」

「はあ……まあ、改名はともかく、あの人を夫に迎え入れるお話は反対させてもらいます」

「分かったわよ、分かっているわよ。心配しなくてもそんな事はあり得ないわよ」

そう、そんな事はあり得ないのだ。

美空が上杉謙信である限り、九十郎が美空に求婚してくる事はありえない。

自分は屑で、上杉謙信のような価値のある女は、新田劍丞のような価値のある男と結ばれるべきだと考えている限り……絶対にありえない。

そして美空には犬子のように、魂すら歪める勢いで上杉謙信をやめると宣言する事もできないのだ。

だから……そう、だからあり得ないのだ、九十郎が美空に求婚するなんて事は絶対に。なのに……なのに何で黒田官兵衛には求婚できるのよ。

何で黒田官兵衛には求婚できるのよ。

私の方がおっぱいも大きいし、九十郎の事を理解してるし、おっぱいも大きいし、九十郎の事が好きだし、おっぱいも大きいし……不公平じゃない」

おっぱいおっぱい言い過ぎである。

「そういうおっぱい大好きな所も私は嫌いなのですが」

「おっぱいおっぱい言わない九十郎なんて九十郎じゃないわ」

「はいはいそうですね、美空様はおっぱい大好きな九十郎殿が大好きですものね」

「大好きじゃないわよ！ 嫌い……嫌いじゃ、ないけど……」

美空が顔を赤くしながら、もじもじと指と指を絡ませ合う。

秋子はちよつとイラつとした。

「分かりました、分かりましたから話を雫さんに戻しますよ。

それと……それともう一つ、あの娘、たぶんこちらから情報を抜き出す気ですよ」

「それは確証があつての話？」

「いえ、今はまだ当て推量の域を出ません。

ですが、あんなに芯のしつかりとしている娘が、1万石で転ぶだろうかと思って思うんで

す

「そう……」

それは美空も考えた事ではある。

それ故に美空は、雫を拉致した。

織田や小寺に九十郎が持つ未来知識や技術を渡す下準備をさせないために……本当にヤバイ技術は念入りに秘匿しているとはいえ、雫が密書か何かを使って外部に情報を流す可能性は当然のように想定している。

「武田は潰す、織田は恐怖で縛った後、手を握る」

「はい？」

だがしかし……進んだ技術はどう隠そうとしてもいずれ外部に漏れ、広まる。

全く無防備になるのは生き過ぎだが、気にし過ぎて自らの手足を縛るのも良くないと美空は思っている。

ぶつちやけた話、武田晴信を殺す日まで秘匿できれば上出来だとすら思っていた。

「今はまだ獲らぬ狸のなんとやらに過ぎないけど、私はそういう絵図面を描いているわ。

一葉様に妙な真似したり、比叡山を焼き討ちしたりしないのであれば、

天下布武大いに結構、織田の天人様を柱にした大同盟も大いに結構。

私は日ノ本から戦争を無くしたいのであって、信長を殺したい訳じゃないわ。

もつとも、私は新田劍丞の嫁になるなんて御免だけど、土下座されたって嫌よ」

「そんなに上手くいきますかねえ？」

「連中の脳天にドライゼを突きつけてやるのよ。」

そしてこう言うの……無体を働けば撃つと。

そのためには、ドライゼが怖あゝい物だつて分からせなければいけない。

そのために……武田晴信を殺すわ、できるだけ無慈悲に、できるだけ残虐非道なやり方で、

晴信とその血縁は一人も逃がさず、血の一滴すらも残さずに滅び尽くすわ。

そして分かせてやるの、日ノ本全土にドライゼの恐ろしさを」

「成程……武田以外にならドライゼの存在が割れても問題は無いと」

「その後は適当に信長の尻を叩いて天下布武を完遂させて天下泰平、簡単でしょ？」

ドライゼの存在も製法も、どう隠していてもそのうち他にも出回るわ。

優位性だつてそう長持ちはしないでしょうから、

武田を根絶やしにする時だけドライゼを使う、

後は基本的に脅しに使うつてのが私の構想になるわね」

まあ本当にヤバい技術はドライゼでは無いし、そう簡単には流出させるつもりも無いのだけど……そう美空は呟いた。

秋子にも聞こえないような声量で、小さく小さく呟いた。

「それはそうと、本当に求婚をしたの？ 九十郎が？」

勘の鋭い秋子の意識を逸らすため、美空は話題を強引に変えた。

好きじゃないならどうしてそこまで気にするんですか……そういう言葉が喉まで出
かかりながら、秋子は抑えた。

「そういう噂は流れていますよ」

美空がうくと考え込む。

今の心境としては、半信半疑といった感じだ……

「ちよつと練兵館に行つてくるわ」

そう言うとき美空はガバツと立ち上がる。

こういう時、美空は即断即決するタイプだ。

美空が武田晴信と戦つて今日まで生き延びてこれたのは、この判断の速さが武器と
なつたからだ。

「ええ!?! ちよつと美空様!?!」

まだ確認していただきたい事が沢山残つてるんですよ!?!」

そしてこういう時、振り回されて尻拭いに奔走する羽目になるのは、いつも秋子で
あつた。

……

……

……

一方その頃、噂の雫と九十郎は練兵館の縁側で茶を飲んでいた。

九十郎が試行錯誤の末に完成させた、良い感じに発酵させた紅茶である。

「いやな、美空から金になりそうな技術や知識があつたら教えてくれって言われてたんだ。

だから暇な時に色々試してた。そして今日、試作品第一号が無事完成した」

九十郎は雫に何かキラキラした小さな装飾品を渡す。

「これが試作品ですか……？」

雫が自らの指に……よりにもよって左手の薬指に嵌められた輪っかをまじまじと見つめる。

先端に取り付けられた小さな宝石が、太陽の下でキラキラと光り輝いていた。

「指輪だ、先端にカットした宝石を付けて売る。そのための試作品。」

今付いてるのは、アクアマリン……たぶんアクアマリンだと思う、たぶんな。

流石に宝石の見分け方までは知らないから、

もしかしたら色とかが似てる違う石かもしれない。

「しかしまあ、何度かの失敗と試行錯誤をしたおかげで、良い感じにカットできた」
「綺麗……」

今まで見た事が無い輝きに、思わず目を奪われていた。

間近で見える雫も……物陰からこつそりと覗き込んでいた美空と貞子も。

「指輪の試作品……ねえ……全く、私が頼んだのよ、私が石を調達させたのよ。」

「真つ先に私に知らせて、私に渡しなさいよ……」

そう、春日山城からチャリをかつ飛ばして来た美空と、途中でたまたますれ違った貞子の2人は、雫と九十郎の熱愛疑惑を確かめるべく、こつそりと練兵館に忍び込んでいたのだ。

「美空様、良く聞こえますねこの距離で」

九十郎のお手製の双眼鏡を覗き込みながら、貞子が小さな声で質問する。

「三昧耶曼荼羅のちよつとした応用よ」

貞子が感覚を研ぎ澄ませてじいっつと周囲を観察すると、親指姫サイズの毘沙門天が軒下で聞き耳を立てている事に気づいた。

罰当たりな御家流の使い方だと貞子は思ったが、いつもの美空であったので特にツツ

コミは入れなかった。

「でも……綺麗ですねえ、指輪。ここからでも分かりますよ」

貞子がほうつとため息をつく。

思わずため息が出る位、きらきらと煌めいていた。

「本当に綺麗よね、ええ本当に……あいつ、手先が器用だから」

美空は九十郎を自慢に思い……同時に、美空は物凄く不快な気分になった。

相変わらず自分に何の相談も無く勝手に動く九十郎と、雫が羨ましいと感じてしまう自分自身に憤っていた。

「こんなにキラキラ輝く石なんて、初めて見ました。一体どうやったのですか？」

雫は自分に課せられた任務を忘れて、純粋な興味と好奇心からそう尋ねた。

「カットに秘密がある。その石の屈折率に合わせた適切な角度で磨くと、

石の内部で光が反射して、まるで石自体が光ってるかのように見えるんだ。

良い感じの角度を見つけるのは意外と大変でな、

越後に来てから100回以上チャレンジしてたんだが、今朝ようやく上手くいったよ」

九十郎がウキウキとした顔と仕草で喋りまくる。

大々に売り出せば遅かれ早かれ知れ渡る事であろうが……

今周囲に知れ渡つたら真似をされて大儲けのチャンスがパアになりかねない。

「ああもうっ！　ホイホイ教えてんじゃないわよあの馬鹿っ！

雫が他所に漏らしたらどうする気よっ!!」

物陰の美空がぶんすかと怒っていた。

九十郎は後先考えない性格で、しかも教えたがりな性格なので、

無自覚の技術流出に危険を常に孕んでいる。

これまでは犬子か柘榴のどちらかがそれとなく話題を誘導したりしていたのだが、今日の練兵館には犬子も柘榴もいなかった。

「かつとに……凄いい！ 凄いいです！ 本当に光っているみたいです！」

雫が年相応の少女のように、瞳をキラキラとさせて、同じ位キラキラ光る宝石をのぞき込む。

右に傾け、左に傾け、輝きの変化を楽しんでいる。

「ははは、トパーズっぽい石とか、エメラルドっぽい石とか、美空の伝手で入手してるから、

職人にカットのコツとか原理を教えて、量産して大儲けだ。

石ごとに輝く角度が違うから、最初は失敗作が多く出るかもしれないがな」

尊敬する黒田官兵衛が喜ぶの見て、九十郎はご満悦な様子だ。

「へえ、ふうくん、私には何も贈らないのに、雫にはあんなにホイホイ渡すの……

あんなに嬉しそうにして……雫も九十郎も……」

「何か面白く無いですねえ。」

いえ、別に九十郎殿なんて全く気にしてませんが、全然好きでも何でもありませんが。またしましようにねって言ったのに、いつまで経っても手を出さないし、

温泉で良い感じの雰囲気になったのにお預けして、

そのままずう〜と放置する人なんて好きになれる訳ないですが……」

「不愉快ね」

「不愉快ですね」

双眼鏡を握る美空の手に、力が籠っていた。

貞子は腰に佩く打ち刀を何度も何度も抜き差しし、カチャンツ、カチャンツと物騒な音を周囲に響かせていた。

「これは独り言ですけど、あの人はじっと待つだけじゃ何もしちゃくれませんよ」

貞子がそう呟く。

「これは独り言だけど、

せつかく収まりの良い所に収まった柘榴達の関係を壊したくないのよ」

「今正妻は誰でしたっけ？」

「柘榴よ」

「それじゃ躊躇もしますねえ……」

「貴女もしばらく手を出すのを控えなさい。」

「いつまた発作が起きたり、犬子が犬になって越後が崩壊するか分からないわ」

「前田殿が犬になった話ですか。そういえばいつの間にもやら解決してましたねえ」

「柘榴と九十郎が色々頑張ったらしいわよ、聞いた話じゃ。」

「だからこそ、下手につつつきたくないのよ」

「美空様つて、いつもいつも難儀な選択ばかりしますねえ」

「そういう性分なのよ、悲しい事に」

「そしていつもいつもお一人で深酒して、そのうち身体を壊してしまいますよ」

「分かっているわ、それは私が一番良く分かっているから」

「そんな事を言い合いながらも、美空と貞子の視線は雫の指輪に釘づけである。」

「……指輪、欲しいですねえ」

「貞子がはあ……とため息をつく。」

「認めたくないけれど……ええ、認めざるを得ないわね……」

「美空もまた深くため息をついた。」

「物陰に隠れて、双眼鏡で凝視して、手の届かない輝きを求めながらも何も行動を起こさない、起こせない自分達が惨めになった。」

「今度、素直に伝えてみますよ。九十郎殿の作った指輪が欲しいって」

「そう……私は……」

美空は一人静かに、九十郎から指輪を渡される姿を想像する。

たぶん嬉しいだろうと思つた、きつと飛びあがる位に嬉しいだろうと思つた。

しかし同時に……自分が女として九十郎に愛される事は決して無いだろうと思つた。

自分は上杉謙信なのだから。

ただの柘榴ではなく、ただの貞子でもなく、犬子のように自らの名を投げ捨て、自らの魂を歪める程の覚悟がある訳でもないのだから……

「私はやめておくわ。きつとそれをしたら、余計に惨めな気分になるだけだもの。」

余計に羨ましくなつて、余計に空しくなるだけだもの」

そう呟いた直後……美空はある事に気がついた。

「ならば何故、九十郎は雫にあんな真似ができるの？」

雫は黒田官兵衛で、九十郎が一番好きな戦国武将で、天下人に仕えた知恵者で……

ただの柘榴じゃ無ければ、ただの貞子でも無いのよ」

そして気づいた。

九十郎は雫の事を『雫』と呼んだ事が一度も無い事に。

九十郎は最初からずっと『官兵衛』と呼び続けていた事に。

前田利家は『犬子』と、上杉謙信は『美空』と、山形昌景は『粉雪』と呼んでいると

いうのに……雫に対してだけはそれすらもしていない事に。

「もしかして……もしかして九十郎は、雫の事を女の子と見ていないのではないの？」

いえ、それどころか……人間だとすら思っていないんじゃないじゃ……」

いくらなんでも考えすぎだ、見当違いだ、そうであつてほしいと美空は思った。

「私……猛烈に嫌な予感がしてきたわ……」

……

……

……

一月にも満たない僅かな時間であつたが、雫は九十郎の性格を掴みつつあつた。

「あの人の……九十郎さんの本質は剣士じゃない。

軍師でもなければ、将でも君主でもない、研究者でもなく、職人でもなく……

あの人の本質はきつと、教育者だ。

たぶんあの人は、他人に何かを与える事に喜びを見出す人……」

キラキラと光るアクアマリンの指輪を空にかざしながら、雫はそう呟いた。

短い期間であつたが、雫が聞いた事に対し、九十郎はなんでもかんでもペラペラと

喋つた。

口を開かせるために身体を差し出そうなんて考えたのが馬鹿馬鹿しくなる位だつた。

「連発可能な銃、ドライゼ銃を配備した部隊……第七騎兵団……」

身を伏せながら何度も撃てるあの銃が戦場に現れれば、どれだけの効果が出るか……」

雫の冷徹な軍師としての思考が、ドライゼの恐るべき性能を割り出していった。

アレを使えば、10倍の数の敵と互角に戦える……いや、圧勝できるとすら思った。

少なくとも、今の剣丞隊が第七騎兵団と戦えば、まず間違いなく一方的に殺されるだろうと思った。

「幸い、今はまだ九十郎さんも美空さんも久遠様や剣丞様に敵意を持っていない……」

なら、どうにかしてドライゼの製法を剣丞様に伝えなければ。

それと、ドライゼに対抗する手段を考え付くまで、織田と長尾の衝突を防がないと……」

そこまで言つて……雫は思い出す、九十郎の熱烈な求婚の言葉を。

『一万年と二千年前から愛してましたあああああ〜〜〜っ!!』という言葉を。

「指輪……確か海の向こうでは、婚姻をする時、夫は妻に指輪を渡すのでしたっけ……」

九十郎から渡されたアクアマリンの指輪が、キラキラと光り輝いていた。

九十郎から渡されたお椀型の兜は、ピカピカに磨かれていた。

どちらも雫にとっては、求愛と求婚のための贈り物に見えた。

「できる事ならば劍丞様の隣で死にたい……一葉様の前でそう誓った筈なのに……」

雫は自分の心臓がどンドン高鳴っていくのを感じていた。

顔は正直好みではないが、真つすぐな好意をこれでもかかとぶつけてくる九十郎に、惹かれつつあると思った。

演技だとか、必要やむなくとか、そういうのではなく……雫の中にある女の部分が、九十郎の妻になりたいと思いつつあるのを感じていた。

「私……どうすれば良いのでしょうか……」

雫は1人静かにそう呟いた。

この時、雫は気づいていない。

九十郎は全く雫に求婚しているつもりが無い事に。

九十郎は雫の事を女の子だと思っていない事に。

九十郎は雫の事を、そもそも同じ人間だとすら思っていない事に。

犬子と柘榴と九十郎第66話 『金ヶ崎の戦い』

金ヶ崎……新田劍丞と織田久遠信長にとって痛恨の敗北があった。

無数に存在する並行世界の中で、大体の世界で散々な目に遭う戦いである。

大体の世界で、劍丞と久遠は生き延びる。

鬼を裏から操っているエーリカ……正確にはそれを支配するオーデインの目的が、劍丞と戦国時代の英雄達を適度に追い詰めて、目ぼしい英雄達が全員劍丞の嫁になるよう仕向ける事なので、ほぼ全ての世界で劍丞と久遠は生き延びる。

金ヶ崎で死亡してもオーデインの計画への影響が少なく、オーデインにとつてもそこまで優先順位が高くない人……具体的には犬子とか、柘榴とか、和奏とか、雛とか、麦穂とか、歌夜とか、雀とか、その辺の人達はそれなりの確立で討ち死にしたり、鬼に凌辱されたり、追い詰められて自害したりするのだが、ほぼ全ての世界で劍丞と久遠は生き延びる。

ギリギリまで追い詰めつつも、ギリギリ生き延びられるようにするのが目的だからだ。

吊り橋効果で英雄達と劍丞の距離を縮め、恋仲にさせるのが目的なのだから……

なお、うっかりやり過ぎて久遠やひよ子といった、オーデインにとって喉から手が出る程に欲しいSランク英雄を殺してしまった世界とか、うっかり派手に動きすぎ、黄泉津大神・通称イザナミに計画が察知され、『貴様のような者がいるから、一日千人以上の人が死ぬのだからアツ!』とばかりに、イザナミとそれに与する無数の悪霊、怨霊達がヴァルハラ宮殿に殴り込みをかけ、オーデインが比喩表現ではないあの世に送られる世界がたごくまあくにある。

エーリカは基本しつかり者なのだが、それでも100回に1回くらいは失敗するのだ。

とはいえ、それは非常に稀なケースなので、虎松達も知らない事である。

そしてもう一つ、この金ヶ崎の戦いはかなりの確率で桐琴が討ち死にする戦いでもある。

虎松達の体感では、死ぬ確率はおおむね35%程度。

スーパーロボット大戦を一度度でもプレイした人であれば、35%がどれだけ恐ろしい確率かは理解してくれるだろうか。

そしてその35%の確率で、あらゆる世界の虎松達にとって背筋を凍るような恐ろしい事が起きるのだ……

……

……
……

「ぜえ……ぜえ……はあ……ぐっ、うう……」

桐琴が戦っていた。

愛娘である小夜叉を守るために。

自らが惚れた男であり、娘も少しずつ惹かれつつある男……新田劍丞を守るために、この地獄のような撤退戦から生き延びさせるために、桐琴はたった一人で戦っていた。

彼女はここで死ぬつもりだ。

ここで死んでも構わないと思っていた。

「くそ……が……し……死ねよっ！ 貴様らあっ!!」

気力だけで身体を支え、槍を振るい、鬼達を地獄への道連れにしていく。

既に彼女の体力が限界に達し……いや、既に限界を超えていた。

本当に最後の気力で、最後の力を振り絞っていた。

そんな桐琴に対し、数えきれない数の鬼達が群がり、その容赦無く爪や牙をつきたてる。

「ぐ……あが……放あ……せえっ!!」

右肩に噛みつく鬼の眼球を抉り、顎を砕き、無理矢理引きはがす。

噛み痕から血が流れ落ちる。

既に大小100を超える数の傷がつけられていた。

その内何個かは、即死してもおかしくない程の深手であった。

「もつとだ……もつと寄つて来い畜生めがっ!!」

それでもなお、桐琴の心は折れない、萎えない。

命に代えても、この身に代えても娘と劍丞を守るのだと固く決意しているが故に。

しかし……

「目が……霞む……」

それでも、彼女の身体は限界を超えていた。

気力だけでどうこうできるような傷では無かった。

血が流れ過ぎていた。

「あ……」

そしてついに、彼女の愛槍が曲がり、吹き飛んだ。

素手になってしまった桐琴目がけ、何匹もの鬼が飛びかかる。

それを躲す気力も、それを振り払う体力も残っていなかった。

桐琴は成す術も無く鬼達によって押しえつけられてしまった。

既に精も根も尽き果てていた。

戦う力は残っていないかった。

「う……腕が……動かん……」

両腕の骨がぐしゃぐしゃにされている事に、桐琴は今更になって気がついた。

彼女の愛槍・蜻蛉止まらずもグニャグニャにひしゃげ、原型をとどめていない程に壊れていた。

桐琴の指も愛槍と同じくらいに曲げられていて、もう槍どころか箸すらも持てそうになかった。

そして周囲には無数の……どんなに少なく見積もっても100を超える数の鬼達がいた。

もう戦う事はできない、逃げる事もできない、そして当然、今から自分が死ぬまでの間に助けが来る事も期待できない……森桐琴可成の命運は、これ以上無い程に確実に尽きたのだ。

「あ……ぐう……お……」

鬼の拳が桐琴の右腕にめり込む。

ごきやり、と嫌な音がして、骨がぐしゃぐしゃに砕けた。

そして吐いた。

逃げながら口に放り込んだ陣中食と胃液と血反吐の混合物をポロポロと大地にブチ

撒けた。

鬼の爪が桐琴の背中を引き裂く。

夥しい量の出血が大地を染め、激痛に桐琴の顔が歪む。

倒れた桐琴の左手を、鬼が踏み抜く。

桐琴の左手首がぐしゃっと潰れ、まるで内側から破裂したかのようにズタズタになる。

「ぎっ……ぐう……あ、が……」

それから先も、鬼達は何度も何度も……何度も何度も何度も……何度も何度も何度も……何度も何度も……何度も何度も何度も……立ち上がる力すら無い桐琴を痛めつけた。

そしてある時、鬼達による集団リンチが止まり……気がつけば桐琴を囲む鬼達が興奮していた。

息を荒げ、目を血走らせ、大きく肩を上下させていた。

その興奮は、桐琴を包む衣服が一枚、また一枚と引き千切られる度に大きく強くなっていた。

命を賭けた死闘による興奮とはまた違う……発情の興奮であった。

「こいつら……儂と交わろうてか……」

覚悟はしていた。

劍丞達から離れ、1人足止めをしに残ると言い出した時から……いや、初陣の日からずっと、桐琴は既に覚悟を決めていた。

敵に敗れ、無残に殺される覚悟も。

敵に囚われ、力づくで犯される覚悟も。

「ふん……儂が今更、異形に犯される程度の事で怯むものか」

怖気はあつたが、桐琴は即座にそれを飲み込んだ。

そして桐琴はあえて、発情し興奮する鬼達に対し足を大きく広げて見せた。

桐琴のお〇んこが外気に晒され、鬼達の発情しきつた視線に晒される。

「気が済むまで犯すが良いさ」

桐琴は、鬼に犯される自分の不運を呪い……いや、呪わなかった。

むしろ彼女は、幸運とすら思っていた。

彼女は惚れた男と愛娘を死地より脱出させるため、命を捨てる覚悟であつたから。

1匹でも多く、一瞬でも長く、鬼達を引き付けよう……そのためには何だつてしよう。

命が尽きる瞬間まで足掻き続けよう。

そう決めたのだから。

自分のお〇んこが鬼の足止めに使えるならば、喜んで使おう。

桐琴は今、そう考えていた。

「グルウ……グウオオツ……」

およそ人間の言語には聞こえない呻き声と共に、一匹の鬼が桐琴にのしかかった。

桐琴は拒まない……もつとも、武器を喪い、両腕を砕かれた彼女に鬼の膂力に抵抗する事は不可能であるが。

そして鬼が己の醜悪な逸物を、桐琴の秘唇に宛がった。

恐怖はあつた。

異形の怪物に犯される、女としての本能的な恐怖があつた。

だがその恐怖を、桐琴はすぐに飲み込んだ。

『見セテクレ……教エテクレ……本当ノ愛ハドコニアル……』

桐琴の脳裏に、何故かそんな声がよぎった。

そして……

「うっ、ああ……」

……

……

……

一方その頃、桐琴が命懸けで……いや、命を捨てて助けようとしていた剣丞もまた、苦

境に立たされていた。

桐琴が命と引き換えに、後方から迫る鬼達を足止めしてくれていたが、前方や側面から回り込んできた鬼が、劍丞隊に襲い掛かってきていた。

数や強さはそれ程でもなかったが、連戦に次ぐ連戦で疲弊しきつた劍丞隊にとっては、鬼一匹切り捨てるのにも凄まじいまでの負担があった。

「み……皆、大丈夫か？」

光る剣を携え、劍丞が肩で息をしながら皆に呼びかける。

大丈夫な筈が無い、全員満身創痍で、ギリギリだと分かっていたが、そう問いかけていた。

「綾那はまだまだいけるのです！」

……前言撤回、本田忠勝以外は全員満身創痍だと分かっていたながら、劍丞は大丈夫かと問いかけていた。

「劍丞様……」

詩乃は一瞬、もう駄目ですとか、もう限界ですとか、もう耐えられませんか、

そんな弱気な言葉を出しそうになった。

いや、詩乃だけではない、綾那を除く弱音を吐きたい気分であった。

劍丞ならば、織田の天人である新田劍丞ならば、この絶望的な状況をひっくり返す何

かがあるのではないかと……かつて絶望の淵に立たされた詩乃を救った時のように、劍丞ならどうにかしてくれるのではないかと……そう思ってしまった。

そして全員の心に絶望が湧き始めたその時……

「総員、かかれえいっ!!」

「犬子お！ 柘榴おっ！ 俺達も行くぞおっ!!」

「おおーっ!!」

「気合十分っす!」

……助けが来た。

およそ800名の兵達が鬨の声を挙げ、苦戦を続ける劍丞隊の元へとやって来た。

連中は銃の先に小太刀を付けた奇妙な武器を手にして、そして劍丞隊を襲っていた鬼達を次々と斬り捨てていく。

あつと言う間に、視界に写る限りの鬼達は1匹残らず討伐された。

その先頭を走る者は、犬子と柘榴と九十郎だ。

「九十郎……何で……?」

「何でって……助けに来たんだが」

劍丞と九十郎がキョトンとした表情を向け合った。

劍丞は九十郎を敵か、そうでなくても油断のならない相手だと思っていた。

劍丞はこの状況下で、トドメを刺しにくるならともかく、助けに来るとは思っていない。か。

九十郎は劍丞を主人公で、万一死んだらバッドエンド直行だと思っていた。

ひよ子は豊臣秀吉で、久遠は織田信長で、死なれでもしたら後の歴史が滅茶苦茶になると思っていた。

だから軒猿から苦境に立たされているという知らせが入ると、即座に助けに向かおうと言いだした。

「ひよ子、大丈夫!? 怪我とかしてない!？」

「犬子さん……ええ、私は大丈夫です。この通りピンピンしてますよ」

「織田の天人はしぶといっすね、間に合わないんじゃないかって心配してたっすよ」

犬子にも柘榴にも、もちろん九十郎にも、自分達を殺しにきたような素振りが無かった。

「劍丞様! ご無事ですかっ!!」

「雫……?」

京で出会い、突如として行方を眩ませ、ずっと心配していた雫の姿もあった。

雫が心配そうに劍丞に駆け寄ってきていた。

もしも九十郎達が敵で、もしも九十郎達が自分達を殺しに来たのであったなら、雫は

何らかの方法で警告してくる筈だ。

だからとりあえず、劍丞は九十郎達を信じる事にした。

そもそも、この新たな乱入者達が敵であったなら、自分達は成す術も無くハチの巣にされるのだしと。

「ああ、俺はまだ大丈夫だよ。 だけど……」

雫が何故九十郎と行動を共にしてるんだとか、久遠とはぐれて、どうなっているか分からないとか。色々と言いたい事はあった。

だが、今緊急に言わなければならない事と言えば、と考え……

「頼む、九十郎！ 力を貸してくれ！」

劍丞は地面に手をつき、そう叫んだ。

「あ、ああ……分かった、とりあえず美空と合流できるように……」

「そうじゃない！ それだけでも助かるし、有難いけど、そうじゃないんだ！」

「ソーラン節でも踊るか？」

「いらないよっ!!」

この男はそこら中に鬼が湧き、そこら中で銃声とか断末魔がする状況下で、何故ソーラン節が求められていると思っただけであろうか。

「劍丞様、落ち着いて話してください。 何があつたのですか？」

雫から話の続きを促され、劍丞はすーはーと深呼吸をする。

一分一秒を争う事態だが、だからこそ一旦落ち着いて、手短に事態を伝えないといけない。

「桐琴さんが一人で残って、鬼達の足止めをしている。

今すぐ戻れば、もしかしたら助けられるかもしれない。だから頼む、力を貸してくれ。」

俺達だけじゃ助けに行く事ができないんだ」

『優しくあれ。だが厳しくもあれ。そして皆と共に生きていけ』

そう言い残して、たった一人で鬼の大軍に向かっていった女性を、劍丞は助けたいのだ。

「桐琴……って、確か小夜叉のお母さんだったよな。」

森可成っていう、戦場でも半裸の……」

「稲生で起きた戦いでお世話になった人だよね」

ある意味犬子と九十郎の命の恩人だが、当の本人はヒヤツハーと叫びながら首を刈り取っていただけである。

九十郎は思った。

森可成って戦国DQN四天王の一人だろ、つまり伊達政宗と同レベルのクソヤロウっ

て事だ。

積極的に殺しに行く気までは無いけど……あんまり助けに行きたくないなあ。

「おい劍丞、母は自分の命の使い方を自分で選んだんだって言ったばっかだよな。」

森一家はオレが引き継ぐってついさっき言ったばっかだよな。

それで……舌の根も乾かねえうちにやっぱ助けに行きますか？」

小夜叉が横から口を挟む。

「おう、久しぶりだな小夜叉。元気が……いや、あんまり元気そうじゃねえな。」

小夜叉は良く納得したな、結構仲が良い親子だっただろ」

「納得してる訳ねえだろっ!!」

劍丞の前で、小夜叉が怒鳴り声を挙げた。

X歳（この作品に登場する人物は全員20歳以上です）の子供が、母親が自分達を逃がすために死にましたと聞き、そう簡単に折り合いをつけられる筈も無い。

戦場だから、武家の娘だからと、無理矢理感情を抑え込んでいるだけなのだ。

本当は……

「本当は母の隣で戦いてえに決まってるだろうがっ!!」

命張るなら、オレも一緒だって言いてえに決まってるだろうがあっ!!」

もう一度、小夜叉が叫んだ。

「そうか、じゃあ行くこうぜ。俺と犬子と小夜叉で、パートタイム森一家再結成だ」

そして九十郎は、放置しても問題なきような奴には厳しいが、放置したら死にそうな者には案外優しい。

できれば放置したい、できれば見捨てておきたい桐琴であろうとも……小夜叉が泣くなら、助けに行くのも仕方ないかと思っていた。

「良いのか!? 本当に力を貸してくれるのか!？」

「お前が行けって言ふなら、行くさ。何せ主人公様の言う事だからな」

劍丞からの問いに、九十郎はそう答えた。

命懸けで戦ってまで桐琴を助けに行きたいとは思わないが……主人公で、価値のある男である新田劍丞が行けと言ったのだからと、九十郎は快諾する。

九十郎は、自分のような屑の判断よりも、新田劍丞のような主人公の判断が正しいに決まっているとハナから決めつけているのだ。

「……何故?」

「……どうして?」

そんな九十郎の言葉と態度に、詩乃と雫が同時に違和感を覚えた。いくらなんでも、即断即決が過ぎると。

まるで自分で考える事を放棄しているようだと感じた。

「劍丞様！」

「九十郎さん！」

詩乃と雫が同時に声を出す。

今ほとにかく、九十郎の性質を利用するしかないと詩乃は考え。

今ほとにかく、九十郎の性質を利用させてはいけなないと雫は考えた。

しかし……

「おい……今誰を残したと言った？」

瞬間、その場にいる全員がゾクリと悪寒を感じた。

九十郎の隣にいた白髪の少女が静かに……しかし、異様なまでに強烈な殺意と共にそ

う尋ねてきたのだ。

「もう一度聞くぞ、新田劍丞。」

今、お前は、よりにもよって誰を残して逃げ出したと言った？」

瞬間、劍丞の刀が光を放った。

強烈な光であった。

過去に1度も見た事が無い……いや、紅い髪の鬼が綾那達を蹴散らしていた時を除け

ば、1度も見た事が無い反応であった。

そして同時に、劍丞と詩乃は目の前にいる娘の声が、あの紅い髪の鬼に良く似ている

事に気がついた。

「き、君は……?」

「井伊直政だ、この姿で会うのは初めてだな。だがそんな事はどうだって良い。

お前は今、よりにもよって桐琴を残したと……桐琴を捨て駒にしたと言ったのか?」
劍丞が頷く。

元より嘘をついたり、誤魔化したりする気は無かったが、その有無を言わせぬ迫力に
圧されていた。

「だからっ!! だからお前は嫌いなんだ新田劍丞えっ!!」

いつもいつも……いつもいつもいつもオレの邪魔ばかりするっ!!

小波の次に嫌いなお前はあっ!! 小波の次にオレ達の邪魔ばかりするっ!!」

そして激高した。

白い髪の少女が……いや、紅い髪の鬼が、鬼子が激高した。

ゴキリッ、ゴキリッと筋骨が変形する音がして、新戸の姿が醜い化け物へと変わって
いた。

怒りの余り、動揺の余り、自らの外観を人に似せるのを忘れてしまったのだ。

「落ち着け糞ニート、桐琴が残ると何が困るんだ?」

「蘭丸だ! 蘭丸が出てくる! 非常に拙い!」

「蘭丸……?」

「蘭丸だつて!」

劍丞と九十郎にとって、その名前は聞き覚えのあるものだった。

織田信長の小姓で、本能寺で信長と一緒に死んだ人……九十郎の知識はその程度だ。劍丞はそれに加えて、森可成の子で、森長可の弟である事も知っていた。

森蘭丸の生年は1565年、桶狭間の戦いは1560年、

蘭丸は本来、生まれてすらいない筈の人物だ。

だから森蘭丸と会った事が無いのだと劍丞は思っていた。だから森蘭丸の話題が全く出ないのだと思っていた。

本来1561年生まれの筈の井伊直政が目の前にいる時点で気づくべきだったのだ。

本来は15XX年生まれ、桶狭間時点でX歳の小夜叉が、普通に戦場で槍を振るっている時点で気づくべきだったのだ。

(この作品に登場する人物は全員20歳以上です)

歴史書にある生年月日や時系列なんて当てにならないのだと。

「おい糞ニート、蘭丸が出てきて何が困るんだ? 正直俺は別にどうでも良いんだが」

「蘭丸は鬼子だ! 桐琴と鬼が交わり産まれる鬼子だ!」

「そうかそうか、お前と同じ鬼子か。それの何が問題なんだ」

「あいつは……あいつは……あいつは、ヤバイんだ……」

「はいはい、そりや良かったな」

今一危機感の無い九十郎にどう説明しようかと新戸が頭を抱える。

しかしその時……

「あ……!?!」

それが新戸の耳に……鬼子の超感覚に届いた瞬間、彼女は蒼褪めた。

「今度はどうした糞ニート?」

「き、聞こえた……」

「聞こえたって何が?」

「拙い、拙いぞ、なんて事だ、始まってしまった、間に合わない……」

「おい、まさか……」

その言葉を聞いた瞬間、剣丞は心臓を掴み上げられ、振じられるかのような感覚になった。

「クズロー! 俺は先に行く! 1人でも行く! 助けてくれる気があるなら来てくれ

!

直後、紅い髪の鬼が人を掻き分け、木々を掻き分け、あつという間にその場から走り去った。

走り去った方角は、少し前に桐琴と劍丞達が別れた方角……

今この瞬間、桐琴が鬼達に凌辱されているであろう方角だ。

「信虎！ 第七騎兵団の半数を連れて、俺は桐琴を助けに向かう！」

残りの半数で劍丞を美空の所まで護衛してくれ！」

「第七騎兵団、聞いていたな！ 甲から戊班は九十郎に続け！」

己から癸班はこれより尾張の連中を護衛しつつ本隊と合流するぞ！」

信虎は即座に承諾する。

犬子と柘榴は九十郎が心配だからと勝手についてきた部外者であり、一応、第七騎兵団の指揮官は信虎という事になっている。

しかし現状、信虎は九十郎の言葉に反対する気が無く、九十郎は九十郎でやたらと上から目線で信虎にあれこれ指図するため、第七騎兵団の事実上の意思決定権は九十郎に委ねられている。

大丈夫だろうかこの部隊。

しかし何はともあれ、第七騎兵団が……史上初のドライゼ銃を配備した戦闘部隊が桐琴救出に動き始める。

「よし、それじゃあ。パートタイム森一家再結成と行こうか。」

犬子、小夜叉、準備は良いな？」

「犬子と九十郎は運命共同体。　　そうでしょ?」

「当然、オレはいつでも行けるぜ!」

「柘榴はどうする?」

「おおつと、そこは柘榴も入れてもらわないと困るつすね。

九十郎と一緒にひと暴れさせてもらおうつすよ」

今から死地に飛び込むというのに、犬子も柘榴も全く気負う様子が無い。

2人とも、九十郎の隣で戦う事を当然と思っているようであった。

「これなら……助けられるかもしれない……」

劍丞は思った、桐琴を見捨てずに済むかもしれないと。

たぶん桐琴からは、何故戻ってきたと怒鳴られるだろうが、それでもなお、劍丞は桐琴を助けに行きたかった。

「九十郎!　俺も一緒に行くぞ!」

だから思わず、劍丞は自分も行くと言った。

ポロポロになっている自分の身体も顧みず、自分の重要性をすばつと忘れて。

「あほ抜かせ、お前に万一の事があつたらこの国がどうなるか分かつたもんじゃねえだろ」

「おい劍丞、母の覚悟台無しにするような真似したらブチ殺すぞ」

しかし、小夜叉と九十郎から冷静かつ的確なツツコミが入る。

「だけど……」

「それにお前、顔色が悪いしふらついているぞ。」

ここに辿り着くまでにケガをしてるって事くらい、一目で分かる。

かえって足手纏いになるから、今すぐ美空と合流しろ。

悪いようにはしないから」

それでも……と、劍丞は言いたかった。

九十郎に桐琴救出を任せきりにして、自分だけ逃げるなんてできない……そう言おうとした。

「劍丞様、今の私達では足手纏いにしかなりません。」

ここで口論をしている時間があれば、

少しでも遠くに逃れた方がかえって桐琴さんの救出が早まります」

しかし、詩乃の言葉が劍丞の発言を遮った。

その眼には強い強い意志と覚悟があった。

聞き入れなければ今すぐこの場で自害する……劍丞には、そう思える程の迫力を感じた。

「官兵衛、信虎、劍丞を頼んだぞ」

「はい！ お任せください！」

「善処はしてやろう」

「犬子、柘榴、それに小夜叉、行くぞ！」

「わんっ!!」

「合点つす！」

「任せとけっ!!」

「ああそれと劍丞！」

官兵衛が可愛いからって、俺の見てないところでキスとかするんじゃねえぞっ!!」

そんな訳の分からない捨てセリフを残して、九十郎は新戸が走り去った方向へと向かった。

「く、九十郎さん……こんな時に……」

雫にとってその言葉は、雫は俺の女だと高らかに宣言したように聞こえた。

いつどこから鬼が襲ってくるかわからない状況ではあったが、雫は心臓が高鳴り、頬が赤くなるのを抑えられなかった。

もつとも、そんな雫の考えとは裏腹に、九十郎が心配しているのは、粘膜の接触による梅毒（誤解）の感染だけである。

犬子と柘榴と九十郎第69話『ただしそれは、善意によって舗装された地獄への道』

「お前ら、何かあつたのか？」

「……色々あつたよ」

九頭龍川沿岸の陣で合流した九十郎は、最初にそう尋ねた。

詩乃や雫の着衣が乱れていたり、綾那が上半身裸で、しかも髪が白濁液でギトギトになつていたり、劍丞がやつれて、肌が土気色になつたりしていったのだ。

「俺が目離れた隙に官兵衛の服が破れてるんだが。」

おい劍丞、まさかとは思うがためえ……」

「だ、大丈夫です！ 私と劍丞様とは何もありませんでしたから！

その……えつと……道中に、妙な鬼が現れまして……」

「劍丞に押し倒された訳じゃないのか。なら良いか」

最悪の想像が外れたと知り、九十郎がほつと胸を撫でおろす。

「（こ、これって……嫉妬されてるんですよね……」

私が劍丞様に取りられるんじゃないかって……）」

そんな九十郎の仕草を見て、雫は自分が愛されているのだと思う。自分が愛されているのだと思い、胸が熱くなるのを感じる。

九十郎から貰った素敵な指輪にそつと手を添える。

眞実は新田劍丞が梅毒（誤解）に感染しやしないかとヒヤヒヤしているだけだが、恋愛経験に乏しい雫はそれに気づくことができない。

なお、100%誤解である。

「そつちこそ、井伊直政さんが……その……」

「老いてるだろ、あいつは超能力を使い過ぎるとああなるんだよ。」

心配すんな、一週間くらい栄養のある物食って安静にしてりや元に戻るから」

一方、新戸は超能力の使い過ぎで虫の息であった。

頬はこけ、肌はシワだらけになり、髪からは艶が消えていた。

その見た目は完全に死にかけて老女のようにであった。

「く、クズロー……腹減った……」

「分かった分かった、後で好きなかだけ食わしてやるからな、ニート」

「すまん、クズロー」

「今日は良いよ、基本ニートのお前にしちゃ良くやつてくれた。」

どんなボンクラでも、露出狂でも、半裸の変態でも、殺人趣向でも、

パツキンのチャンネーでも、戦国DQN四天王でも、子には親が必要だ。

小夜叉をあの手で親無しにするってのは、あんまり気分が良くないからな。

死ぬ一步手前まで能力を振り絞って桐琴の手当てをしたお前には、感謝してる」

とりあえず桐琴は九十郎を殴っても許されるだろう。

「桐琴さんは無事なのか？」

そんな剣丞の質問に対し、新戸と九十郎は目を見合わせて……

「まだ、分からない」

「まだ分らん」

全く同じタイミングで、同じような返答をした。

「分からないって……？」

「できるだけの手当はした、後は本人の生命力しただい」

「まあ、ディグダグみてえに破裂してたからな、思いつきり。

新戸が手当てしたつても、ありや助かりや奇跡だ」

「そうか……」

「まあ、昔から言うだろ。奇跡ってのは、起きないから奇跡って言うんですよってな」

無神経な九十郎の発言に対し、剣丞はイラっとした。

しかし九十郎が言ったセリフは、死病に冒されながら奇跡的に回復したヒロインをも

じつたものであり、九十郎的には激励の言葉である。

九十郎にしては珍しく他人を気遣っている所は評価すべきかもしれないが、配慮が分
かり難い所が九十郎である。

「助からなくてもオレを恨むなよ。オレはできるだけだけの事をしたぞ」

「恨まないよ、絶対だ。希望が残ったんだ、感謝しないと」

「それより劍丞、そつちはそつちで何があつたんだ。」

明らかに分かれた時と見た目変わつてるだろ、特に……」

「きえんしゆけしやみやゝ、しのはあく、しのはあく、

とおおおおおくくくつても、きえんしゆけしやみやに甘えたいのりえすうゝ」

「特に詩乃の性格が変わつてるだろ」

詩乃が壊れていた。

下半身だけマツパで、まるで泥酔でもしているかのように呂律が回らぬ様子で、幼児
退行してるのかと思うような口調で劍丞に抱きついていた。

「きえんしゆけしやまゝ、けんしゆきえしやみやゝ」

恍惚とした表情で、詩乃は劍丞にべたべたと触っていた。

明らかに異常な状態だった。

「逃げてる途中に、変な鬼……鬼だよなアレ？」

もしかしたら鬼じゃないかもしれない、変なのに出会ったんだ。

「そいつが、その……詩乃を犯そうとして、それからこうなってるんだ」
「どう思う、糞二一ト」

「蘭丸に人格と魂を溶かされている。

あと一秒助けるのが遅かったら、手遅れになっていた。

人格と魂を完全に溶かされて二度と戻らなくなっていた」

「なら、詩乃は元に戻るのか？」

「安心しろ、一ヶ月くらい放置すれば戻る。人間の魂は案外しぶとい。

完全に壊されたり、原型を留めない位に歪められてなければ戻る」

「そうか、そりや良かった」

「ああ、安心したよ」

剣丞と九十郎がほっと胸をなでおろす。

正直、一生戻らなかつたらどうしようかと考えていたのだ。

「ただしその間、ストレスがかかるような事はするなよ。

戦の話の間かせるとかは厳禁だぞ」

「それをやるとどうなるんだ？」

「運が良ければ歪んだ状態で戻る。」

足の骨が折れた時に、歪んだ添え木で足を固定した時のように」

「二度とまともに歩けなくなるな。運が悪いとどうなる？」

「死ぬ」

その言葉に、全員が同時に血の気が引く感覚を覚えた。

「……マジか？」

「頭がおかしくなって死ぬ。そうでなくとも廃人になる。

蝶やカブト虫はな、サナギの時が一番死にやすいんだ。

自分の身体を一度ドロドロに溶かして、それを原料に成虫の身体を作っている。

だからちよつとしたシヨックですぐに死ぬ。

ミュータントロボだの、デスパ―怪人と殴り合うなんでもつての他だ」

「そうか……」

「じゃあ、詩乃が剣丞にずっとベタベタしてるのはどういう理由だ？」

「人格の書き換えはな、まず一旦相手の魂をドロドロに溶かしきらないといけない。

そいつがどうでも良いと思ってる部分程、速く溶ける。

そいつが大事だと思ってる部分、そいつがどうしても捨てたくない、

手放したくないと思ってる部分は中々溶けない……溶けるのは、一番最後になる」

「大事な……部分……」

劍丞が自分に寄り添い、気持ち良さそうに微笑む詩乃に目を向ける。

「きえんしゆけしやみやく、らあいしゆきりえすよおく」

心の底から、魂の底から劍丞を求めていた。

なんとなくだが、劍丞にも、九十郎にもそれが分かった。

「やっぱお前、主人公だよ」

「主人公……？」

「皆がお前を中心に回ってる。」

織田信長も、豊臣秀吉も、竹中半兵衛も……やっぱ凄いな奴だよ、新田劍丞は」

「そんな事は無いよ、皆が助けてくれなくちゃ……」

今回に関して言えば、九十郎が助けに来てくれなかったらどうしようも無かった」

「そうか？ 俺が居ても居なくても、なんやかんやでどうにかしたと思うぞ、俺は」

「詩乃やひよ子から愛されているって時点で、色々お察しだろ。」

「世界は新田劍丞を中心に回ってるって」

「そんな事は無いと思うぞ」

「いずれにしてもだ、魂に干渉しない、催眠術の類でもな。」

「そいつがどうでも良いと思うてる事を忘れさせたり、操ったりするのは楽だが、」

「逆に大事に思っている事を忘れさせたり、捨てさせたり、操ったりするのは難しい。」

心が抵抗するんだ、そういう事をしようとする」と

「心が抵抗……か……」

劍丞はずっと自分に擦り寄ってくる詩乃の姿をもう一度眺める。

もし詩乃が心の底から、魂の底から自分を大事に思ってくれるなら、最高に嬉しいなと……そんな事を考えた。

「あの鬼は、本当の愛がどうか言っていたけど……」

あれはどういう意味だったんだろうか……？」

「あいつの言う本当の愛は……」

自分の洗脳や、催眠術を跳ねのけるような『愛』を探したいという事だよ」

「洗脳、催眠術を跳ねのける愛……か……」

「だけどそれは、ただの無茶ぶりだ。」

蘭丸の洗脳能力に対抗できる人間なんて、いる訳が無い」

「あれは……森蘭丸なのか？」

「ああそうだ、俺と同じ、特別な鬼子の森蘭丸だ」

「特別な鬼子？ 君と同じって……君も鬼子なのか？」

「さっきは鬼みたくない見た目になってたけど」

「普通の鬼子は、超能力は使えないし、生まれる時に母親の子宮を破裂させたりしない。」

俺も蘭丸も特別な鬼子だ」

「そういうもの……なのか……?」

一気に新情報が詰め込まれて、劍丞が少し混乱する。

こういう時に頼りになる劍丞の片腕とも言える存在は、現在魂を溶かされて幼児退行中であつた。

「何かさつきから色々と分からない話ばかりしてるけど、

すとれすつてどういう事を言うのかしら?」

ずっと黙つて話を聞いていた美空が、柘榴にそつと耳打ちをする。

「ストレスつてのは、御大将がヤケ酒飲んで、ゲロ吐いたりしたくなるような状況つすよ」

柘榴もひそひそ声で美空からの質問に答える。

「要は精神的に辛い状態と……」

柘榴、貴女覚えておきなさいよ、わざわざそんな例え方した事」

「御大将はいつも色々溜め過ぎつす、もう少し柘榴達を頼るつすよ」

「……考えておくわ」

考えはするが、考えた結果一人で抱え込む……それがいつもの美空である。

「御大将おおおおお……つ!!」

た、た、た……大変ですっ！ 一大事ですっ!!」

そんな時、美空の陣幕に1人の女性が血相を変えて飛び込んできた。

「……例えば、こういう状況がすとれすなのよね」

「……そつすね」

美空と柘榴が同時にため息をつく。

秋子がこういう表情、こういう口調で、おっぱいぶるんぶるんと胸を震わせながら美空の元に駆け込んでくる時は、たいてい美空が頭を抱えたくなるような面倒毎が舞い込んできた時なのだ。

そしてしばらくの間、美空の酒量とゲロの量が増えるのだ。

「秋子、何が起きたか知らないけど、

すとれるかとかいうのがあるかと危ない娘がいるから……」

「か、春日山城が落とされました！

御大将の留守を狙って！ 長尾春景様が謀反を起こしましたあつ!!」

「聞けよオイ」

「し、しかも……落城の折に、空様と愛菜が拉致されてしまいましたあつ!!」

そんな秋子の悲鳴のような叫びが陣幕に響き渡った。

当然、詩乃や劍丞の耳にも届く。

「まあ素敵、これがすれすなのね。これ以上無いくらいに理解できたわ」

美空は胃が痛くなる状況……つまりはいつもの事に深く深くため息をつく。

なんとという事は無い、どうという事は無い、いつもの事だ。

いつものように……美空にとつて悲しむべき事にいつものように、何度も何度も血反吐と共に味わったいつものように、いつ裏切るかヒヤヒヤしながら使っている者の一人が裏切っただけなのだから。

しかしその直後、異変が起きた。

魂を9割方溶かされ、まともな思考ができない筈の詩乃が突如……

「うううーっ!! ふうく、ふつく……ぐうううーっ!!」

……突如として奇声を発し、近くにあった机の角に自らの額をガンガンとたたきつけ始めたのだ。

「わっ!!? おい誰か止めろ! 本気で死ぬか廃人になるぞっ!!」

「し、詩乃! 大丈夫だから! 大丈夫だから落ち着け! 落ち着いてくれえっ!!」

剣丞が慌てて取り押さえにかかると、詩乃は凄い力で抵抗し、何度も何度も自らの頭を机に叩きつける。

彼女の額がパツクリと割れ、顔が血で真っ赤に染まる頃、戦々恐々とした様子で詩乃に釘付けになっていた雫の両肩をがっしと掴んだ。

「ひっ!!」

雫は思わず肩を強張らせ、リモネシアの外務大臣のような声を漏らした。

ちよつとSつ気がある九十郎は思った、官兵衛可愛いなコンチキショウト。

この男はこの非常時に何を考えているのだろうか。

「ひ……一月……」

そんな雫や九十郎の反応を気にも留めず……気に留める余裕も無く、詩乃は鬼気迫る表情で声を出す。

「ひ、一月……だけ……代役を……雫……」

詩乃には余裕が無かった、必死だった。

雫が今、形の上では劍丞隊から離れている事をスパツと忘れていた。

魂が9割方溶かされて不安定になっている今の詩乃には、そこまで考えを及ぼせる力すらなかった。

今の自分では劍丞の力にはなれない、だから力になれそうな人に託そう……雫ならばきつとそれができる。

いやむしろ、雫以外の誰にもできない。

今、詩乃が考えている事は、考えられた事はそれだけだった。

辛うじて溶け残った人格や思考では、それが精一杯であった。

「はい……分かりました、任せてください。どうかにかします、きつとどうかにかしますから」

雫は詩乃にそう答えた。

詩乃の異様な迫力に圧倒されたからではない。

そもそも雫は、たとえ額に銃口を突き付けられようとも動じはしない。

心臓に毛が生えていなければ、戦国時代では生きていられない。

今自分が置かれている立場を考えに入れてもなお、詩乃の代役を引き受けたのは、その聡明さ故に分かったからだ。

詩乃がどれだけ剣丞を愛しているのかを。

魂が溶かされてもなお、詩乃は剣丞への想いだけは守り切ったのだと。

「大丈夫です、私がきつとどうにかします。」

貴女の分まで、きつと剣丞様をお守りします。

だから安心して、今は休んでいてください」

雫がそう言うのと、詩乃の顔からあらゆる表情が消え、まるで電池が切れたロボット玩具のようにその場に倒れ込んだ。

限界だった……いや、気圧だけで限界を超えた反動が来たのだ。

「詩乃!? 大丈夫か!」

「大丈夫な筈があるかつ！　今すぐ運び出せつ！

余計な声が届かない所に安静にさせるんだつ！

次に余計なストレスを与えたら本当に死ぬからなつ!!」

劍丞と虎松がギヤーギヤー騒ぎながら詩乃を陣幕の外へと運び出す。

そんな光景を眺めながら、雫は思った。

自分は劍丞が好きだ、確かに劍丞に惹かれている。

だけど自分は、自分が胸に抱いている新田劍丞が好きだという気持ちは、詩乃の半分

も……いや、10分の1にも届かないのではないだろうか。

むしろ自分は、と……

「できる事なら劍丞様の隣で死にたい……あの言葉に嘘は無かったというのに。

劍丞様を支えたい、お仕えしたいという気持ちも失せてはいないのに。

詩乃さんに任せてくださいって言ったばかりなのに……

どうして私は、九十郎さんの事を思い浮かべるのでしょうか」

そんな事を呟きながら、雫は九十郎から貰った指輪に視線を落とす。

指輪が視界に入るだけで、胸がぼかぼかと温かくなるような気分になった。

心地良くて幸せな気分であった。

「どうして私はあの時、九十郎さんの名前を呼んだのでしょうか……」

あと少しで鬼に犯されそうになった時の事を思い出す。

あの時、詩乃は劍丞の名前を呼んだ。

あの時、自分は九十郎の名前を呼んだ。

嬉しかったのだ、播州ではぶつちやけ成り上がり者の日陰者だった自分に、何度も何度も熱烈な求愛をしてくれた事が。

未だ大した実績も無い自分を求めて、遠く京までやってきて、強引に拉致してくれた事も。

そして自分と劍丞との仲に嫉妬してくれた事も。

雫は嬉しかったのだ、自分が女として求められている事が嬉しかったのだ。

だから……

「好きになるのも……貴方の妻になりたいって思うのも、仕方が無い……」

そう思ってしまう自分がいます、九十郎さん……」

そんな独り言を言うと、雫は九十郎から貰った兜に一回、左手の薬指にはまったアキラマリンの指輪に一回、そつとキスをした。

たぶん自分は九十郎に恋をしているのだと。

新田劍丞に臣として支えたい、自分の英知の全てを捧げたい……そう思う気持ちがあると同時に、九十郎の傍に居たい、共に生きたいという想いがあるのだと思つた。

だからこそ……

「もしもこの先……剣丞様と九十郎さんを天秤にかける時が来たら……」

自らに問いかけたその質問に対し、雫は何の答えも用意できていない。

……

……

……

その日の夜……

「やっぱり、皆疲れ切っているな。怪我人も多いし、矢も玉薬も無い……

これからどうなるかな……」

剣丞隊や森一家、八咫鳥隊の生き残り達の様子を見て回っていた剣丞が、一人思いを巡らせる。

「桐琴さんと詩乃は倒れて、変な鬼子は出て、長尾で謀反……

俺達はこれからどうすれば良い……どうすればもう一度、久遠に会える」

今日会った感触からすれば、美空や九十郎は自分達に敵意を抱いていないように見え
た。

しかし、九十郎はともかく、美空は一国の主だ。

いきなり攻撃されるとは思わないが、損得勘定抜きで自分達を助けてくれるとまでは

考えにくい。

そして久遠達が無事に鬼の襲来から逃げ切れたのかも分からない。

もう一度生きて会う事ができるかも……

「頼む……頼むから無事でいてくれ、頼むから……久遠……」

劍丞は不安だった。

不安で仕方がなかった。

彼の愛する嫁達が……久遠や結菜を始めとした、彼と想いを重ね、身体も重ねた女達が鬼に襲われ、殺されているのではないかと、あるいは……あの異様な美しさを持つ鬼子と出会ってはいないかと……

「あの鬼は何だったんだ？ それに九十郎と一緒に行動していた鬼の娘、

井伊直政って名乗っていたけれど、あの娘は敵なのか？ 味方なのか？」

劍丞がそう呟くと……

「オレはお前が嫌いだ」

劍丞の真後ろからそんな声が聞こえてきた。

「わわっ!!? き、君は……」

「井伊直政、通称は新戸、前にも名前を教えたと思うが……」

この姿で会うのは初めてだな」

新戸は超能力の使い過ぎで、ヨボヨボの老婆のようになっていた。

だがそれでも、劍丞には目の前の人物が井伊直政だと理解できた。

その声が、謎の美鬼に襲われて、どうしようもなくなった時に自分達を助けてくれた声と同じだったからだ。

「その……まずはお礼を言わせてくれ。 助けてくれてありがとう」

「詩乃には悪い事をした。

もう少し早く気づいていれば、もう少し早く助けてやれた……

桐琴の治療に全神経を集中させていたから、気づけなかった」

「桐琴さんの具合はどうなんだ？」

鬼の子を産んで、お腹が破裂したって聞いているけれど」

「できる限りの手当てはした。 バラバラになった皮膚や内臓はできるだけ集めて、千切れた血管や神経はできるだけ繋いだ。

だが失血が多い、さつきも言ったが助かるかどうかは本人次第だ、断言できない」

「そうか、ありがとう、本当に……」

「このまま桐琴が目を醒まさなかつたとしても、オレやクスローを恨むなよ」

「恨まないよ、俺達だけじゃ何もできなかった。

桐琴さんを見捨てて、逃げ出すだけしか……

いや、第七騎兵団が助けに来なかつたら、逃げ出す事すらできなかつたと思う」

「それはどうだろうな……」

新戸は知っている。

劍丞が金ヶ崎で死ぬケースは物凄いレアケースである事を。

エーリカがうっかりやり過ぎてしまう世界でしか、劍丞は死なないと。

だが今の所、新戸はそれを劍丞に教える気は無かつた。

「今なら、どうにでもできるぞ」

その代わりに、新戸は劍丞にそう声をかけた。

「どうにでもって、何が？」

「詩乃だ。魂を溶かされて不安定になっているが、それはデメリットばかりじゃない。

今なら魂に働きかけて、好きなように人格を弄れる」

「人格を……？」

「溶けた金属を型に入れるようなものだ。オレにはそれができる。

劍丞が好きだという部分だけはどうにもできないが……そこ以外はどうにでもできる。

どんな性格にもできる、何を好み、何を嫌うかも好きに弄れる」

劍丞はそんな鬼か悪魔のような提案を聞き……

「やらない」

即答した。

迷いは一切無かった。

「それはやらない、しちやいけない」

劍丞の目は真つすぐだった、どこまでもどこまでも真つすぐだった。

腹が立つくらい、反吐が出るくらい、吐き気がするくらいに真つすぐだった。

「……つまらない男だ」

新戸はそう言つてため息をついた。

「詩乃は詩乃だから良いんだ、詩乃だから好きになつたんだ」

「ふん、詩乃がどうしようもない性格だったとしても、お前はやらないと言うだろうに」

「まあ、そうだろうね」

「だからつまらないと言つたんだ」

「つまらなくても結構だ」

「さつきクズローにも同じ質問をしてきた。どう言つたと思う？」

「お前……まさか詩乃に何かしたんじやないだろうな!？」

「いや、オレもクズローも何もしていない。クズローは言つていたよ。」

竹中半兵衛にそんな真似ができるかって」

「そ、そうか……」

一瞬だけよぎった悍ましい想像が外れたと知り、劍丞がほっと胸を撫でおろす。

「劍丞、気づかないのか？ クズローは決してやらないとは言っていないぞ。

相手が竹中半兵衛だったからやらない、相手が服部半蔵だからやらない。

他の人間が相手ならやるんだ、クズローは」

「人の人格を自分の思うように歪めるなんて、やっちゃいけない事だ」

「ああそうだ、やってはいけない事だ。

お前はやっちゃいけない事は、死んでもやらないだろう。

お前は正しい、クズローは間違っている、それはクズローも理解している。

だがな……クズローはこうも言う、舐めプで死んでたまるかと」

「舐めプ？」

劍丞がむっとした表情で聞き返す。

詩乃の人格を歪めるという悪行が、まるで遊びか何かと同列に語られているかのよう

で、腹が立った。

「もう一度聞く、新田劍丞。」

お前がやっちゃいけない事と言った事は、本当にやっちゃいけない事か？

お前が一瞥たりともしなかつた選択肢は、本当に唾棄すべき禁忌だったのか？」
「やつちやいけない事だ」

それでもなお、劍丞は即答した。

即答しなきゃいけないと思つた。

一瞥たりともしちやいけない選択肢だと思つた。

「ああ正しい、お前が正しいよ新田劍丞。だがそれ故に与しやすい、扱しやすい。

だからオーデインはお前を主人公に選んだんだ」

だが……それを聞いた新戸は、少し悲しそうな顔をした。

「曹操はな、どの世界でも多かれ少なかれ偏屈な奴を好む。

だからあいつの周りにはいつだって変人奇人でひしめいている」

「偏屈つて……」

またも唐突な話題転換がされ、劍丞が眉間に皺を寄せる。

「知らないか？ 変人偏屈の条件を？ だったらオレが教えてやる。

変人偏屈な人は、その行為が人々に「希望」と「安心」を与える魅力が無くてはなら

ない。

もつとも曹操は犯罪者でも普通に受け入れる、この条件はさほど重視しない。

変人偏屈な人は、その行為を一生やり続けていなくてはならない。

一時の目立とう精神や、人生の途中でやめた人は本物ではないニセ奇人なので、尊敬に値しない。そして何より重要な事、変人偏屈な人は、敵に勝利している」

「あゝ……」

その言葉を聞いて、劍丞は自分の大勢いる姉の1人を思い出す。

確かあの人の愛読書に書いてあった定義そのままだったなと。

「それって、変人偏屈列伝？ 華琳姉さんが何度も何度も読み返してた」

「そうかそうか、お前のいた世界でもそうだったか」

「俺の世界……？」

「気にするな、気が向いた時にでも教えてやる。」

「だけど今、お前に言うべき事は……」

「お前の叔父、北郷一刀はこれでもかって位の変人偏屈男だったという事だ」

「叔父さんを知っているのか!？」

「オレは知らん、だが知っているオレと話をした事がある。」

「北郷一刀と曹操が出会った世界では、必ず曹操は本郷一刀に惹かれるのだと」

「……叔父さんと曹操が出会うシチュエーションが今一想像できないんだけど」

「今お前が置かれている状況と大体一緒だ」

「俺と……？」

「お前が華琳と呼ぶ女は、曹操孟徳なんだ」

「はい!？」

今明かされる衝撃の新事実……

というか、あまりにも突飛な発言に対し、劍丞は声が上がった。

「桃香は劉備玄徳、蓮華は孫権仲謀なんだ」

「いきなり何を言っているんだ君は!？」

俺の姉さんたちが、三国時代の英雄だとしても……」

「安心すると良い、新田劍丞。」

お前がその正しさを持ち続けているのであれば、お前はじきに元の世界に戻るさ。

この世界、この時代で想いが通じ合った、沢山の嫁達と一緒に、

かつての北郷一刀と同じようにな……」

「質問に答えてくれ! どういう意味なんだ!？」

「ただしそれは、善意によって舗装された、地獄への道に他ならないがな」

劍丞はゾクリと寒気を感じた。

新戸の顔が、新戸の声が、ハッキリと劍丞を否定していた。

オレはお前が嫌いだと、態度で示していた。

「その劍、しばらく使いな」

困惑する剣丞に対し、新戸はまたもや話題を変える。

「やっぱり君は、この剣がどんな物なのかを知っているのか」

「前にも教えた、トールギスだと」

「トールギスじゃ分らないんだ！」

「……ガンダムWを見た事は？」

「名前だけは知ってる、でも俺は一回も見た事が無い。

そもそも何で井伊直政がガンダムを知っているんだ!？」

「オレは見えないが、吉音の影響でガンダムにハマったオレがいてだな……

いやそれよりも、もっと分かり易く説明する。

その剣は剣魂だ、かつて北条早雲が神々と戦い、神々を討つために作り上げた武器。

早雲が作った最初の剣魂で、千を超える剣魂の原型になった一振りだ。

だからオレはそれをトールギスと言った」

「トールギスってのは何の事は分からないけど……」

北条早雲が、神様と戦ってたってのか？」

「そうだ、それがどういう訳かお前の手に渡っている。

そしてその剣は精神操作の類から持ち主を守る機能がある」

「あの時、俺と小波だけが動けたのは……」

「その剣が劍丞を守っていた。

小波の場合は素で耐性があった、あいつはテレパスだからな。

ただしそれは蘭丸が至近距離から、全力を出せば抜ける防御だ、過信はするな。

それに……蘭丸の精力収奪からお前を守るために、無理をしていた。

オーバーロードを起こして、劍魂を構成しているナノマシンがボロボロだ」

「な、ナノマシン……?」

「劍魂はナノマシンの集合体、今その剣は全機能を自己修復に回している。

今の状態では精神操作から防御してくれないし、

無理に使うとしたら修繕できない程、完膚無きまでに壊れてしまう。

だから使うな、表面のヒビが完全に消えるまで……少なくとも一月は使うな、絶対に」

劍丞が腰に佩く剣に視線を落とす。

以前は新戸が近づく度に光輝き、過敏な反応を見せていたそれは、今は全く反応を示さない。

それこそ、死んでしまったのかと思う程に静かであった。

あの恐ろしく美しい鬼とセックスをしていた時、射精と同時にまるで自分の命そのものが吸われているかのような感覚があった。

剣に走ったヒビが増えれば増える程、鬼と交わる快樂も、射精の回数も、命が座れる

感覚も増していった。

あの時、この剣が守ってくれたのかと……剣丞はそう思った。

「なあ、他にも色々と聞きたい事が……」

剣丞が剣魂の事とか、曹操の事とか。色々と聞き出そうとした時……新戸は無言で俯き、滝のような汗を流しながら顔を歪めていた。

「うぐ……あ……もう来たか……」

「だ、大丈夫なのか？」

「筋肉痛……み、みたいなもの……だ……しばらく……休めば……」

新戸の声が震えている。

剣丞には新戸に何が起きているのか分からなかったが、目の前にいる女の子が辛そうにしている事だけは分かった。

「肩を貸すよ、どこか休めそうな所は……」

「いらんっ！ お前も死にかけだぞっ！」

「俺は大丈夫だから」

そう言うくと剣丞はやや強引に新戸の身体を抱き寄せて歩き始めた。

新戸は一瞬だけ、剣丞を振り払って逃げようかとも考えたが……超能力を限界以上に行使したために起きた強烈な不快感があつて、考えた事を実行できなかつた。

「…………ふん」

劍丞は心底不快そうな顔をする新戸と共に歩き続ける。

そうする事が正しいのだと思つたから、迷わずそうした。

九十郎なら迷わず放置しただろうが、新田劍丞にそんな選択肢は存在しない。

存在しないからこそ、新田劍丞なのだ。

存在しないからこそ御し易く、操り易く、オーデインの計画の鍵に選ばれたのだ。

日ノ本の英雄達の恋人になり、根こそぎその魂を収奪する計画の……吐き気を催す程に邪悪な計画の鍵にされてしまったのだ。

「お前が…………いづつ、ぐう…………お前が被害者だつて事は…………わ、分かつてるつもりだが…………」

新戸はそう呟いた。

「喋らなくて良いよ、今は…………今は少し、休もう。お互いにね」

新戸の意図は全く分からなかつたが、劍丞はそう言つた。

老女のようにシワシワになつた身体は、そして今彼女が苦痛に喘いでいる理由は、桐琴を助けるためにギリギリまで超能力を使った結果だと、劍丞には分かつたから……

犬子と柘榴と九十郎第70話 『夜会話のお時間』

「雫……良いだろ、なあ……」

マツチヨな大男が、ニタニタと下卑た笑みを浮かべながら、幼い少女に迫っていた。

「く、九十郎さん、やめてください。私には心に決めた人が……」

小寺官兵衛・通称雫が後ろに下がりながらそう告げる。

その目は恐怖で一杯で、目尻には涙すら浮かんでいた。

「新田剣丞の事なんかすぐに忘れさせてやるよ」

雫の目の前で九十郎が袴を脱ぎ、下履きも脱ぎ捨て、ぼろんとアレを露出させる。

「きやつ……ほ、本当にやめてください！ 困りますから！」

「嫌い！ お前が可愛いのが悪いんだ！ 俺をその気にさせて！」

逃げ出そうとする雫の腕を掴み、そのまま引き倒す。

固い床板に背中を叩きつけられ、痛みに悶絶する。

「剣丞なんかには絶対に渡さねえ、雫は俺のものだ……」

「だ、駄目……駄目です、放してください……」

九十郎が雫の衣服を破り捨てる。

一枚、また一枚と……彼女の身体を覆う布切れが取り払われていく。雫が一糸纏わぬ姿になるまで、そう時間はかからなかった。

「さあ、挿れるぜ」

男が女に、狂気にも似た視線を向ける。

目の前の女を自分のモノにしたい、支配したい、そんな想いで一杯であった。

そして……

「やめて、駄目……ああっ!!」

……

……

……

「なんて事になっていませんでしたかっ!？」

「……なってません」

雫は何とも言えない微妙な顔でそう答えた。

雫と蒲生梅賦秀……XX歳とX歳のガキンチョコンビが、情報共有も兼ねて旧交を温めていた。

(この物語の登場人物は全員20歳以上です)

その中で、突如として行方不明になっていた雫が、何がどうなって九十郎と行動を共

にしていたかの話になったのだ。

「もう一度言います、なつてません」

「あら、そうでしたの？ あのブ男、私の胸とか、一葉様の胸とか、麦穂さんの胸とか、いやらしい視線を向けていましたから、てつきり……」

「あの人が大きなおっぱいの女性を好んでるのは一目瞭然ですけど……」

あの、私のここを見てもう一回聞きますけど、手を出されると思えますか？」

雫が自分の胸に手を当てる。

梅が自分の胸と雫の胸を交互に見比べる……そこには夢と希望の詰まった豊満な果実と、嘆きと絶望しか無い悲しき絶壁があった。

「……なつていない？」

「なつてません、全然、全く、毛ほども、」

私の目の前であんな大声で愛してましたって叫んだのに」

雫はX歳のくせにメロンのように育った早熟おっぱいを親の仇のように見つめてい
る。

(この物語の登場人物は全員20歳以上です)

梅は雫の半分も生きていなくせに、雫の倍以上の胸部装甲を装備していた。

当然、梅が九十郎の視界に入っている間、ずっといやらしい視線が向けられていた。

全ての胸を愛すると公言して憚らない劍丞の元に居た時はさほど気にはならなかったが、巨乳好きで、ナイスなおっぱい（梅を含む）を見ると鼻の下を伸ばし、嫁2人が揃って巨乳で、雫に熱烈な求婚行為を繰り返す九十郎の元に居る現在では、どうしてもどうしても気になってしまふのだ。

「あら、意外と紳士ですね」

「そうでもないですよ。」

京に来てた時は我慢していたみたいですけど、越後では人目も憚らずに……

その……接吻をしたり、胸やお尻を触ったり……それどころかそれ以上も何回か……」

雫の脳裏で犬子や柘榴が九十郎に跨り、腰を振り、いやらしく喘ぎ声を漏らす光景が再生される。

とりあえずXX歳の情操教育上良くない光景である事は確かである。

（この物語の登場人物は全員20歳以上です）

「本当に大丈夫ですか？ 本当はあの筋肉男に何かされて……」

「いえ、何も！ ああ、いえ、あの……その……」

何かされたという意味では、色々されてるのですが……」

「色々とおっ!？」

基本耳年増な梅が、顔を真っ赤にした。

今、彼女の脳裏にはマツチヨなブ男が雫に襲い掛かり、覆いかぶさり、ヘコヘコと腰を上下させる光景が広がっていた。

それは顔が醜い男は心も醜いという先入観に基づくものだったが、九十郎は基本屑だし、小波をレイプ一步手前まで行った事があるので、実はあんまり的外れな想像という訳でもない。

「雫さん、良くぞ打ち明けてくれましたわ。

今すぐあのブ男を成敗して参りますから、少しお待ちになつててください」

「へっ、成敗!」

「ええそうですね、うら若き乙女の純潔を腕づく、力づくで散らして奪ったのですもの。友として黙って見過ごせませんわ。全くけしからんですわっ!」

まず粗末な男根を切り落として、八つ裂きにして、首級は…」

「ま、待つてくださいい! やめてくださいい!」

ポン刀片手に長尾の陣幕に押し入ろうとしている梅を、雫が血相を変えて引き留める。

九十郎はなんやかんやで美空からの信任が厚く、梅が斬りかかって行ったり、うっかり成敗なんてしようものなら、織田と長尾の全面戦争待たなしである。

「雫さんがそう言うなら仕方がありませんね。」

耳の穴から手を突っ込んで奥歯ガタガタいわす程度で許して差し上げますわ」
「そういう事はされてませんからっ!!」

ちよつと誘拐されただけで、それ以外は乱暴な事はされてませんから!!」

「なら、先程仰つていた色々とは何ですか?」

「え、いえ……それは……」

そう言われて、雫は九十郎から受けた数々の仕打ちを思い出す。

『一万年と二千年前から愛してましたあああああ~~~~っ!!』

そんな衝撃的な愛してる発言から始まった、数々の求愛、求婚の行為（誤解）を……

「指輪……指輪を頂きました……」

雫は顔を真っ赤にし、もじもじしながらそつと梅に左手を見せる。

薬指にはキラキラと輝く宝石がついた指輪がはめられていた。

「……な、なんて神々しい」

幾度も試行錯誤を重ねた上に完成されたカットが、見た事が無いような輝きを實現させていた。

梅が思わず神々しいと呟いてしまうような輝きで会った。

「これを頂いたのですか?」

「ええ、九十郎さんの手作りだとか……しかも手づから私の左手の薬指に……」

「左手の……薬指……っ!？」

梅が絶句する。

こんなに素晴らしい輝きの宝石を贈られるだけでも驚きだと言うのに、つけた場所がよりにもよって左手薬指と聞き、大きく驚愕する。

「雫さん、以前宣教師様から聞いたのですが……」

「梅さんも知っていましたか。」

海の方こうの風習ですが、男性が女性に対し婚姻の証として指輪を贈るとか。

「それもたしか……」

「左手の薬指……」

「左手の薬指……」

そう、西洋では左手の薬指は心臓に最も近い指、永遠の愛と絆を意味すると言われる場所なのだ。

そしてそれを、宣教師達から海外の話をよく聞いていた梅と雫は知っていた。知っていて、密かに憧れていたのだ。

「し、しかし、あの人がそれを知ってるとは限らないのではなくて?」

「たまたま一致して……」

「……兜も頂きました」

「兜？」

雫がさつき指輪を見せた時以上に顔を赤らめ、手荷物の中から赤いお椀のような物体を取り出した。

兜だと言われなければ兜だの気づけないようなその物体を手に取り、まじまじと見つめ、しばし考え込み……気づく。

「……夫婦の和合？」

「うう……や、やっぱりそう思いますよね……そうとしか解釈できませんよね……」
雫が恥ずかしさの余り、頭巾で顔を隠してします。

「間違いありません！ 間違いありませんわ！」

間違いなくこれは、雫さんと夫婦になりたいという意味の表れですわっ!!」

梅は力強く断言するが、ただの勘違いである。

少なくとも九十郎は、黒田官兵衛を自分の嫁にしようという気は一切無い。

黒田官兵衛を抱きたいという気はもつと無い。

九十郎は黒田官兵衛を一人女性としてではなく、戦国時代という名の物語の登場人物として愛しているだけなのだ。

「それで、雫さんはどうするおつもりなのですか？」

受け入れるのですか、それともお断りするのですか？」

「そ、それは……その……」

雫が言いよどむ。

織田と長尾、劍丞と九十郎は、いつ敵同士になるか分からない関係だ。

そして自分は、劍丞の持つ不可思議な知識を探り、織田と長尾が正面衝突しないようにそれとなく誘導し……万一の時は、九十郎を後ろから刺す役割を持たされているのだ。

今回の詩乃の不調、唐突な軍師代行要請によつて、任務が果たせるかどうか不透明になつているが、それでもなお、今ここで九十郎に惹かれていたりとか、九十郎の嫁になりたいとか言えば、自分を信じてくれる者達にどう思われるか……と……

「いえ……やっぱり、何も言わなくても良いですわ。雫さんを困らせてしまうもの」

しかし、顔を真っ赤にして、愛おしそうに九十郎から貰った兜を握り、唇を噛む雫の姿を見て、梅は察した。

その洞察力を10分の1でも九十郎に向けていれば、雫と結婚する意思は全く無い事に気づけたかもしれないが……とにかく、梅は察した。

「……すみません」

「何を仰るんですか。私と雫さんは、一緒に懺悔室をやった仲ではありませんか」

「ですが、ですが私は……」

新田劍丞と齋藤九十郎を天秤にかけるような時、劍丞と取れるかどうか、自信が無い……雫はそう言おうとした、そう告げようとした。

それは梅を初めとする劍丞隊の面々にとつて、裏切り以外の何物でもない。

「雫さん、私はダーリンに……新田劍丞様に恋をしました。」

そしてほんの数日前に、女として愛して貰いましたわ。

胸が熱くなつて、きゅーつと締め付けられるみたいで、とても幸せでしたわ」

梅が雫の言葉を遮り、うつとりとした表情でそう告げる。

それは間違い無く惚気そのものだが、それだけではない。

「恋つて、どうしようもないのですわ。」

駄目だ駄目だと思つたら、余計に熱く激しく燃え上がるものでもありますわ。

だから雫さんには、好きなように恋をしてしまえば良いと思います」

「その結果、私と梅さんが殺し合う事になつても……ですか……」

「大丈夫、きつとどうにかかりますわよ」

そう言ううと梅は、雫をぎゅつと抱きしめた。

「劍丞様の誑しは凄いですから。」

きつと九十郎さんとも、美空さんとも争わずにすむ方法を考えますわ」

そんな梅の言葉は無根拠で、突拍子も無いものであったが、奇妙な信頼感があった、奇妙な説得力があった。

「あはは、そうですね……ええ、本当にそうですね……」

軍師としては、常に軍師でありたいと考えている雫にとつては、恥ずべき思考かもしれないが……それでもなお、雫は信じたくなくなった。

新田劍丞ならどうにかすると。

新田劍丞ならば、自分が腹の底から、心を込めて、九十郎に愛を叫んでも大丈夫なようにしてくれると。

『一万年と二千年前から愛してましたあああああ〜〜〜っ!!』

そんな衝撃的な愛してる発言よりも大きな声で、愛を叫びたいと思った。

なお、何度も言うが、九十郎は雫に求婚したつもりは一切無い。

全ては雫の勘違いである。

……

……

……

一方その頃、一葉と美空の2人も、それぞれの置かれた状況の確認も兼ねて、旧交を暖めていた。

金ヶ崎での敗走、見た事の無い能力を使う鬼子の登場、そして春日山城の占拠……そんな非常時だというのに、いや、そんな非常時だからこそ、2人は越後から持ってきた酒を片手に無駄話をしていた。

今この瞬間だけは、2人は戦の事も、鬼の事も、政治の事も忘れていた。

「ちよつと見ない間に、随分と破天荒な婿取りしたじゃあないの、一葉」

「ふふん、羨ましかろう」

「いいえ全く、全然、これっぽっちも。アレの妻になる位なら、まだ九十郎の方がマシね。

最悪と底辺一歩手前の程度の低うゝい争いだけだ」

「九十郎か、アレも一廉の男と思うが、流石に主様には及ばんと思うぞ」

「一廉お!? 一葉、貴女目が曇ってるんじゃないの!？」

次から次へと問題起こすし、すぐにどっかへ行つて私をハラハラさせるし、

たまあくに恰好良くて、たまあくに優しいけど、普段は駄目駄目だし」

「だから惚れておるのだろう?」

「全然、全く、これっぽっちも。」

まあ目の前で土下座して、どうか私の妻になつてくださいつて懇願してくるなら、

しかたなく、しかたなあゝく嫁になつて……いえ、検討してあげなくも無いけど」

「では主様が土下座したらどうする?」

土下座してどうか私の妻になってくださいと懇願してきたら

「蹴っ飛ばす」

「どっちの意味でだ？」

「話と顔面の両方」

「はっはっはっはっはっ、そうかそうか、それは大変だな！」

きつぱりと断言した美空の顔を見て、一葉は一気に上機嫌になる。

久々……という程久々ではないが、遠く離れた越後の地で慣れぬ国主の仕事に四苦八

苦している友人が、意外と乙女であつた事を再発見しかからだ。

征夷大將軍といえど、他人の恋話は楽しいものだ。

特にそれが、いわゆる対岸の火事であるなら。

「まあ、しかし、友として応援はしよう。その恋が実る事を」

「恋なんてしてないわよっ!!」

「はっはっはっはっはっ!!」

友人が無様にうろたえる様を見て、一葉は満足げに笑う。

一葉は薄々感づいている。

美空は完全に自覚している。

美空は九十郎に惹かれていると。

土下座なんて必要無い、ただ一言、俺の女になれとでも告げられれば、美空はすぐにも首を縦に振ってしまふ事にも。

ただ一言、股を開けとか、お〇んこを使わせるとか、俺の子を産めとか言われれば、美空は即座に頷いてしまふ事にも。

だがしかし……

「無理よ、私が九十郎と結ばれる事は決してないわ。

私は上杉謙信で、ただの美空にはなれないもの。

犬子のようにもなれないもの……」

同時に、美空には分かつていた。

自分が上杉謙信である限り、犬子のように、上杉謙信を捨てる覚悟を持ってない限り、自分は九十郎と結ばれる事は無いのだと。

「上杉……？ お主は長尾であろうが」

「色々あるのよ、色々」と

「まあ、主様の誑しに純朴な娘が引つかからずにはすんだと安心するべきか。

それとも越後の龍殿と盟を結ぶ機会が失われたと嘆くべきか」

「盟なら結ぶわよ、織田信長の態度次第では。

新田劍丞との婚姻とは全く無関係に。盟って本来そういうものでしょう？」

「そうか、本気のお前と斬り合えるかと思つてワクワクしていたのだがな」
「冗談はやめてもらえらる。」

勝つたら双葉様が悲しむし、負けたら空と名月が悲しむじゃないの」
「違ういな」

「ええ」

「お互い、色々背負つたものだ」

「本当に」

一葉と美空がそう言いながら、各々の杯に入つた酒をぐいつと呷る。

「一葉様を幽閉するな、比叡山を焼くな……」

織田久遠信長に突き付ける条件はそれだけにするつもり。

それを呑む限りは、盟を結んでも良いわ。

戦国の世に嫌気が差しているのも、鬼を放置できないのも一緒なもの」

「ふん、余が大人しく幽閉されるようなタマか？」

「双葉様を人質にすれば簡単よ。貴女つて意外と甘いもの」

「叡山のクソ坊主共が、大人しく寺社が焼かせるものかな」

「もつと簡単よ、連中には危機感が足りないわ。」

自分達には仏がついている、無限の信仰と信徒があり、権威がある。

だから自分達を敵に回す事は民を敵に回すと同義……

あそここの屑坊主共は心のどこかで、自分達は誰にも襲われないと信じているわ。血みどろの戦いを知らないわ。そんな連中を皆殺しにするのなんて簡単よ」

「お主なら、叡山の屑坊主は百害あつて一利無しと言うと思つておつたのだがな」

「百害はあるわ、でも利だつてある。御仏を心の支えにしている人は多いわ。

苦しい時、辛い時、悲しい時、人は祈らずにはいられないわ。

たとえ叡山の坊主共の9割が便器に吐き出されたタンカス以下だと知つていても、

1割の尊敬できる人達を否定したくないし、

御仏へ祈りを捧げる名も無き人々も否定したくない。

何もかもを消し去つてしまうのは……乱暴すぎるじゃないの……」

「なら、どうする？」

「ゆつくりやれば良いじゃない。

戦国の世を終わらせてから、ゆつくり、じっくり、1人ずつ屑共を血祭りにあげてい
けば」

「悠長な事だな」

酒を口に運びながら一葉は思った。

美空はまだ、叡山の屑共のしぶとさを知らない。

「……皆殺しよりは良いじゃない」

美空と一葉が、しばし無言で星空を眺める。

ほんの少し前まで壮絶な戦いがされたとは思えない程に辺りは静かで、綺麗な虫の鳴き声と、木々のざわめきだけが2人の耳に入ってくる。

「それで、何故無理だと決めつける？」

……一葉が沈黙を破り、そう尋ねた。

「なんの話？」

「何故始めもしない、挑みもしないで、無理だと決めつける？」

「だから何の話よ？」

一葉は少し視線を逸らし、小さくため息をつき、重症じやなと呟き……

「色恋の話だよ」

……そう答えた。

「別に誰にも惚れちゃいないわよ、私は」

「お前の色恋とは言っておらんが」

「はっ……話の流れでなんとなくそう思ったの！ 悪い!?」

「成就すると分かり切っていないければ恋も出来んのか？」

「それではあまりにも面白みが無かろう」

美空は顔を真っ赤にして、奥歯を噛みしめ、肩や指先に力を籠める。

「他人事だと思つて！ 成就しないと分かり切つてる恋程惨めなものはないのよ!!」

酒の勢いもあつての事か、美空と一葉の目が座る。

明らかに最初の方の和やかな空気が消え去る。

「少し見ない間に軟弱になつたな、親友」

「わざわざ助けに来てくれた相手にありがとうの一言すら無いのかしら、親友」

互いにじと〜つと睨みつけながらそう言い合う。

今この瞬間にも真剣での斬り合いが始まりかねない程に険悪な雰囲気である。

「親友と思うから言つていゝのではないか、とつとと押し倒せと」

「事情も知らない癖に、知つたような口をきかないで」

「余にはお前がへタレてるだけに見えるのだがな」

「……その喧嘩、買つたわ」

そして……

「三・千・世界いーつ!!」

「三味耶曼茶羅あーつ!!」

……うなつた。

……

.....

.....

「良いんじゃないか」

「駄目だな」

その話を聞いた新戸と九十郎は、全く正反対の反応を、全く同じタイミングで示した。新戸と九十郎が同時に顔を見合わせ、こいつ大丈夫かとても言いたげな失礼な視線を向け合った。

「クズロー、気は確かか？」

「確かに決まってるんだろ、馬鹿にしてんのか糞二一ト」

美空や一葉のように、今にも殴り合いが始まりそうな程に険悪な雰囲気になる。

何の話かと言うと.....

「俺が春日山城から空ちゃんって娘を助けに行くって話、やっぱり駄目かな？」

新田劍丞が助けられた礼にと、九十郎達に力を貸すと言い出したのだ。

「空が捕まってるんだぞ、今は一人でも手が欲しい所だろうが。」

あんまし認めたくねえけど、綾那や鞠は腕利きだし、小波なんて服部半蔵だぜ、服部半蔵。

是非とも力を貸してくださいって、こつちから頭を下げるべきだろ」

春日山城に四斤山砲が10門程隠してあるの、武田にバレると拙いしな……と、九十郎は劍丞達に聞こえないようにぼそつと呟いた。

なお、四斤山砲とは、対武田晴信用に用意している秘密兵器の名だ。

別名はナポレオン砲、口径は86.5mm、最大射程2200m……齋藤九十郎が特に気に入っている野戦砲である。

反射炉が完成し、良質の鋼鉄を製錬できるようになったために完成に漕ぎ着けた、オーバースペック極まりない新兵器だ。

「話を逸らすな、それだけじゃないだろ、クズロー」

「……新田劍丞が力を貸すって言ってるんだ、心強いだろ」

「そこだ、オレが問題にしてるのはそこなんだ」

新戸がそう言いながら、劍丞の顔をピシッと指差す。

「クズロー、劍丞の顔を見て何か思わないか？」

九十郎が劍丞の顔をまじまじと見つめる……肌は土気色で、唇はカサカサで、目の下には隈があつた。

「……最近、寝不足か？」

「違う！ 蘭丸に生気を吸われて死にかけてるんだっ！」

詩乃や桐琴程深刻じゃないが、お前も安静にしてないと駄目なんだっ!!」

「大丈夫だろ、人間そう簡単に死なねえよ。 劍丞みたいな主人公なら猶更にな」

今一深刻さが分かっていない九十郎がへらへらと笑いながらそう告げる。

この男は心のどこかで、劍丞は死なないと思いついていた。

劍丞は負けないし、失敗もしないと思いついていた。

「無茶は承知だよ。 だけど、辛いのは皆一緒だし、

詩乃や桐琴さんにゆつくり休んでもらうためにも、戦いを長引かせたくない」

劍丞が少しふらつきながら、無理矢理笑顔を作つて見せる。

新戸にはそれが明らかかな強がりだと分かっていたが、それを指摘してもどうしようもない事も知っている。

新戸はふう……と、ため息をついた。

「先に言つておく、この戦いにオレは関わる気は無い」

「何でだ？」

「この戦いに鬼は全く関わつてない、全然無関係に起きている。

オレの超能力は、人対人の戦いに使うべきじゃない。

オレは今回の一件には関わりたくない、本当は助言も出したくない」

「融通の利かないニートだな」

「煩いぞクズロー。 だがその上で言わせてもらおう。」

劍丞、お前は今死にかけだ、もうしばらくは安静にしている」

「でも、俺だけ寝ている訳には……」

「全然元気そうに見えるけどな」

「駄目だ、アトランティスと戦った直後のキン肉マンと同じ位消耗している。

休まないと死ぬ。本当ならレッグラリーアートをしても寝かせたいくらいだ」

分かりにくい例えである。

「心配してくれるのは有難いけど、俺は本当に大丈夫だからさ」

劍丞がそう告げると、新戸は深く深くため息をつく。

「劍丞、だからオレはお前が嫌いなんだ」

「それじゃあ……犬子はどう思う？」

九十郎が唐突に犬子に話を振る。

「うくん……犬子は、劍丞様なら大丈夫だと思うかな。

ひよ子が凄い人だっと思ってたし、何か恰好良いし」

「そうそう、イケメンだよな劍丞は」

「うんうん、言いたかないけど九十郎より何倍もイケメンだよな」

「ははは、俺よりイケメンだよな。イケメン無罪！」

「ただしイケメンに限る！」

酷い理論である。

酷い理論であるし……犬子が劍丞をイケメンだと言う度に、九十郎の心がちくり、ちくりと痛んでいた。

そんな九十郎の小さな小さな痛みに犬子は気づいていない、九十郎も自覚してない。

犬子はもう、十分すぎる程に伝わっていると思っていた。

自分が九十郎を愛しているという事は既に伝わっていて、当然の前提になっていると思っていた。

だが本当は、九十郎は今なお疑っている。

前田利家が自分のような屑を好きになるなんてあり得るのかと。

前田利家のような価値のある女は、新田劍丞のような価値のある男と結ばれるべきではないかと。

前田利家は、本当は新田劍丞のような主人公に惚れているのではないかと。

前田利家は、本当は新田劍丞のような主人公に惚れるべきなんじゃないかと。

前田利家が自分のような屑を好きになるなんて、何かの間違いなんじゃないかと。

「だろ、良しじゃあ賛成さ、反対で劍丞案可決、この話おしまい」

だがそんな疑念をおくびにも出さず、九十郎はヘラヘラと笑いながら劍丞案を押し通

した。

「劍丞が死ぬとも、劍丞が失敗するとも思っていないかった。

「……オレは止めたぞ、止めたからな」

新戸が不機嫌そうに頬を膨らませるのを、当然のように九十郎は気に留めなかった。

犬子と柘榴と九十郎第71話 『来ちやつたんだぜ』

長尾の陣幕の中、傷病者の收容のために作られた簡易療養テントにて、森桐琴長可が……小夜叉の母が静かに、規則正しく寝息を立てていた。

「母……」

小夜叉が小さな声で呼びかける。

親に似て粗暴に見えて、親に似ずに思いやりがある娘だ、他の怪我人、病人が休めなくなるような大声を出すような真似はしない。

「母、まだ起ききれねえのか……?」

桐琴は何も答えない。

何の反応も示さない。

あの金ヶ崎の敗走から3日が経つが、桐琴はまるで目覚める気配が無かった。

新戸ができる限りの手当てをしたとはいえ、桐琴の身体はズタボロだった。

生きているのが不思議な位、ズタボロだった。

「起きてくれよ……頼むから起きてくれよ……なあ、母……」

小夜叉が桐琴の手を握る。

異様な程に冷たかった、異様な程に脈が弱々しかった。

まるで死人の手を握つてゐたみたいだと、小夜叉は思った。

もしかしたらもう、母は死んでしまつてゐるのではないかと、母は二度と目覚めないのではないかと、小夜叉は思った。

「オレを一人にしないでくれよ、母……助けに行つた事は、謝るからさ。」

母の決意と覚悟を踏みにじつた事は、謝るから……だから……」

小夜叉が桐琴の手を握りしめながら、強く強く握りしめながら、懺悔の言葉を吐き出していく。

この場に雫か梅がいれば、詰みは許されましたと言うだろうが、桐琴は何も言わない……許すとも、許さぬとも言わない、何も言わない。

まるで死人のように、何も言わなかつた。

「行かなきゃな……」

そして東の空が徐々に白み始めた頃、小夜叉はそつと桐琴の手を放す。

一瞬、これが今生の別れになるんじゃないかと思ひ、背筋が凍るが、それでもなお小夜叉は手を放す。

「いつまでもめそめそしていたら、母に叱られるからな……」

小夜叉が立ち上がる。

彼女にはやらなければならぬ事があつて、行かなければいけない場所があるのだ。

「オレは今、ばあとたいむ森一家なんだ。」

ばあとたいむつてのは、実は良く分かつてねえんだけど……

犬子と九十郎に、でっかい借りを作つちまつた事だけは分かつてる。

母を助けに向かうのを手伝わせておいて、

オレが何も手助けしねえのは不義理だつて事は分かつてる。 だから……」

小夜叉が近くに立てかけておいた愛槍・人間無骨を背負う。

そして同じく立てかけておいた、九十郎から贈られた銃・ウインチエスターを背負う。

九十郎から替えの弾薬をたつぷりと渡された、この時代ではオーバースペック気味の

殺人兵器である。

「行つてくる、春日山城に。 待つてくれよな、母」

……

……

……

「ハイ、と言う訳で、おきらくらくしよー、敵情視察いつてみよー」

九十郎が服部半蔵の前でそんな訳の分からない台詞を言う。

半蔵……小波は意味が分からず、首を傾げるばかりである。

「相変わらずノリが悪いな小波は……」

「の、のり……ですか……？」

なお、お気楽忍伝ハンゾーのネタが戦国時代で通じると思っているのは九十郎だけである。

マイナーすぎて、大江戸学園でも数える程の者にしか通じない。

「つまり早い話がだ、長尾春景とかいう赤影の親戚みたいな奴のどつ捕まった空と、

正直あんまり助けたくねえけど愛菜もついでに助けるため、

今の春日山城の状況を調べましようって事だ」

「ついでってお前……」

「ついでと言ったらついでだ。

俺は別に、愛菜の事なんて全く、全然、これっぽっちも心配なんかしてないんだからな」

九十郎がツンデレっぽく言う。

しかし、口ではこう言っているが、実は多少は愛菜の事も気にかけている。

多分死んだら美空や空が悲しむだろうなどは思っているから、空を救出した後、余力があれば助けに行つてやろうか程度には考えている。

その口調から、九十郎の本心を察した劍丞は……

「(やっぱり九十郎の事、敵って感じに見れないんだよなあ……)」

……なんて事を考えている。

犬子も犬子で、九十郎の本心を察してにやにやと笑っていた。

「まあ愛菜の事はともかくだ。 劍丞、ここから先は二手に分かれるぞ」

「分かっている、俺と小波、それと転子の3人と……」

「俺と見た目幼女共の5人で、各々情報収集だ」

「どっちが先に空の居場所を探せるか、競争なのです！」

「頑張るの！」

「わんっ！」

「こういううちまぢました話は苦手なんだけどもなあ……四の五の言ってはられないか」

九十郎と見た目幼女共……綾那と、鞠と、犬子と、小夜叉の4人は気合十分といった様子だ。

ちなみに見た目幼女共とは、犬子、小夜叉、綾那、鞠の4人の事であり、戦闘力はクツソ高い癖に童顔だったり貧乳だったり身体のラインが細かったり、ぶつちやけ幼女にしか見えない連中を指す。

無論、小夜叉と綾那は実年齢も幼女と言っても良いのであるが、基本大雑把な九十郎は全員一括りにして見た目幼女と呼んでいる。

だから貴様は九十郎なのだ。

「劍丞様、あつちの班ですけど、正直情報収集に向いてなさそうに人しかいないような……」

その……み、見た目からして奇怪と言いますか……」

「転子が生ひそひそと劍丞に耳打ちをする。」

「それもその筈、見た目幼女共は腕つぶしだけで選考したのかとお言いたくなる位、
隠密行動には向いてなさそうな者ばかりなのだ。」

「なあ、九十郎……何で犬子は、あんな恰好なんだ？」

劍丞が九十郎にそつと尋ねた。

劍丞の言う通り、犬子は今かなり奇怪な恰好をしていた。

顔全体に白粉をこれでもかかって位につけて、真っ白になった顔に赤い隈取りを……まるで歌舞伎役者か何かのようなメイクをしていた。

しかも実戦で使うには明らかにデカ過ぎるだろとツツコミを入れたくなるような、三間半（約6m30cm）の槍を担いでいた。

「犬子はお城を占拠した人達に面が割れてますからね。　こうやって変装してるんですよ」

九十郎に代わって、犬子が劍丞の疑問に答えた。

「いや、でもそれ、かえって目立つと言うか……かなり浮いてると言うか……」

劍丞が心配する通り、道行く人々が全員露骨に一行を避けて歩いており、時々周囲からひそひそと何か話している様子も伺えた。

劍丞達は今、春日山城から空を奪還するための作戦を練るべく、現地調査に来ているのだが……この目立ちようでは調査どころではない事は明白であった。

「それにもう一個、利点がある」

「そうそう、もう一個利点があるんですよ、劍丞様」

そう言うときと犬子と九十郎が目の前でくるりと回転し……

「恰好良いっ!!」

「恰好良いっ!!」

声を揃えて頭が痛くなるような事を口走った。

「うん、そうか……恰好良いのか……」

劍丞は理解しがたい状況に硬直しつつ、どうにかこうにかそれだけ返事をした。

「つまりわざと目立って注意を引くって目的もある訳だ、

俺は別に弦巻マキスタイルでも良かったんだけどな」

「この間こすぶれえっちした時に使った衣装？」

あれ、結構気に入ってるから、あんまりお仕事に使いたくないかな」

この男は前田利家を何だと思っっているのだろうか。

「それで歌舞伎役者スタイルになった訳だ」

「うんうん、犬子的にはこつちが良いかな、気分が引き締まる感じ」

「俺は見た目幼女共を連れて派手に行くから。」

劍丞は小波や転子とかと一緒に目立たず静かに色々調べておいてくれ」

「……責任重大だな」

「……ですね」

九十郎達の班にはとても頼れないぞと、劍丞と転子がげんなりとした表情で肩を落とす。

軒猿と呼ばれる、長尾が抱える諜報機関も裏で動いてくれているとは聞いているが、この調子ではあんまり頼れそうにないなとも考えてしまう。

「目指せ1000人斬りなのです！」

「斬ってどうすんだよ！」

「友達1000人できるかな！　なの！」

「友達作りから始める気か!？」

小夜叉がツッコミに回る程の珍妙な集団を背に、劍丞達は足早に立ち去る。

一刻も早く空の居場所を突き止めなければという思いもあるが……正直、関係者と思

われたくないという思いも確かにあった。

そんなこんなで……

……

……

……

「おめでとおくございまあゝつす!!」

「いつもより余計に回っておりまゝすつ!!」

「犬子は肉体労働専門っ！ あつちは喋るだけえつ!!」

「それでギヤラは同じっ!!」

天下の往来でこんな事をして盛大に目立って……

物陰からそんな5人を覗き込む謎の影に気づかず、能天気染之助・染太郎の芸だとか、

ディアボロのジャグリングだとか、神道無念流の居合芸だとかを披露し……

……

……

……

「んぐっ!? お、おい何を……うわわっ!」

見た目幼女共の1人が謎の巨漢に背後から襲われ、物陰に連れ込まれ……

「ひゃつ！ や、やめろ……脱がすな！ この……」

男と女の体格さ、力の差で押さえつけられ、槍も鉄砲も衣服も無理矢理剥ぎ取られ、下着すらも残らず失い、一糸纏わぬ姿にされ……

「はあつあ、ああ！ 馬鹿、この……離せよ……」

抵抗も空しく、顔に白いモノを塗りたくられ……

「……おい、何でオレはこんな格好をさせられてるんだ？」

気がつけば見た目幼女共の1人……森小夜叉長可は、顔じゆうに白粉を塗りたくられ、さつきまで犬子が着ていた着物を被せられ、カツラも被せられ、胸には詰め物までされて遠目から見れば変装した犬子にそっくりの見た目になっていた。

小夜叉も抵抗はしたのだが、いくらなんでも本多忠勝、今川氏真、前田利家が3人がかりで来られては、どうする事もできかった。

ぶっちゃけ呂布でもどうにもできない面子である。

「ごめんね小夜叉、犬子はちよつと寄らなきやいけない所があるからさ」

しれつと小夜叉の衣服を奪い取って交換している犬子が、

顔の白粉とふき取りながら謝ってくる。

小夜叉の服は前面が大きく開いたデザインのため、巨乳の犬子でも問題なく入りそうなのは、不幸中の幸いであろうか。

「だからつて何でオレがこんな目に……胸にこゝんなに古紙押し込んでよ……」

「特徴的なメイクと髪型、長槍、そしてもつと特徴的な巨乳を似せれば、

細部がちよつと違つても同じ人物に見える。

映画のスタントシーンで使つてる手だよ」

「小夜叉ちゃん、とつても可愛いのに！」

「可愛いのです！」

「へーへー、そーかいそーかい。

おい九十郎、俺の骨無とウインチェスター、粗末に扱つたら後でブチのめすからな」
鞠と綾那が口々に小夜叉を褒めるが、小夜叉は今一機嫌が良くない。

いきなり理由も言わずに襲い掛かつてきて、素っ裸にされた事への怒りもある。

素っ裸にされた上、訳の分からない珍妙な格好を押し付けられた事への怒りもある。

自分と犬子の胸囲の格差社会を見せつけられた事への憤りもある。

だが何より重要なのは……

「(やべえな……足が震えてやがる……)」

これでもかかってくらいに白粉を塗りたくられていたため、周囲は気づいていなかったが、小夜又の顔は少し青かった。

隈取りメイクのために周囲は気づいていなかったが、小夜又の表情は僅かに引きつっていた。

小夜又の母、森桐琴可成と同じように、無理矢理押し倒され、無理矢理身体を開かれ、そして犯され、孕まされ、そして……

……ばんっ!!

そんな背筋が凍るような音が、小夜又の耳に届いたような気がした。

それは単なる思い込み、幻聴の類であったし、小夜又自身もそうだと気づけたが……小夜又は怖くて怖くてたまらなかつた。

おしめをしていた頃から戦場を渡り歩き、おねしよが止まる前に100を超える人殺しを繰り返してきた小夜又にとって、男が怖い、他人に肌を晒すのが怖いなんて事、初めての事であった。

「(畜生、何だつてんだ……)」

小夜又は自分が震えている理由から目を逸らす。

自分が感じている苛立ちからも目を背ける。

金ヶ崎で、桐琴を助けるために戦っていた時は、こんな恐怖は感じなかった。必死だった、死に物狂いだった、

今戦わない母が死ぬと思った、今戦えないと母が死ぬと思った。

だから戦ったし、戦えた、恐怖は感じなかった。

だけど戦いが終わり、現実を認識すると……

「オレも……母みてえに……」

桐琴は小夜叉の目の前で破裂した。

新戸が必死になって応急処置をしたために辛うじて一命は取り留めていたが、未だに目を覚ましていない。

もしかしたら、もう二度と目を覚まさないかもしれない……だから……

「くそっ！ くそおっ!! オレがショックしねえといけねえのに……」

母にもしもの事があつたら、オレが森一家の頭領にならねえといけねえのに……」

小夜叉は震えていた。

怖くて怖くて……怖くて怖くて怖くて怖くてたまらなくなつて、人知れず震えていた。

「おい糞弟子、気づいてるか？」

そんな小夜叉をよそに、九十郎が隣を歩く綾那に小さく声をかける。

「当然、気づいてるですよ」

「思ったより分かり易いの」

鞠と綾那が、周囲に漏れぬよう小さな声で返答する。

表面上は普通に歩いているように見えて、その視線は背後にいる小夜叉……

ではなく、さつきから4人を尾行している人物に向けられていた。

天賦の才能と神道無念流が悪魔合体した綾那も、

抜けているようで意外と抜け目ない鞠も、見た目より小心者の九十郎は、

追跡者にしつかりと気づいていた。

「……なんか、色々隙だらけなの」

「慣れてない感じがするのです」

「長尾春景だったか、意外と人手不足なのかもなあ。」

まあ良い、人気の無い所まで誘導してブチのめして情報を抜くぞ」

「らじやくなのです!」

「任せるの」

「……おう」

九十郎達4人があらかじめ決めておいた襲撃場所へと歩みを進める。

九十郎は最悪強制わんわんセックスの刑にでも処してやろうかと下種い事を考えながら。

歩いて、歩いて、歩いて……

「九十郎、何か変なの」

「変って、何がだ？」

「何かこう……挙動不審なの。」

「あちこちキョロキョロして、あからさまに物陰に隠れて、しかも全然隠れてないの」

「まるで見つけてくださいって言ってるみてーです」

「……無関係な奴だったら拙いかな。一応、ブチのめす時は適度に手加減しておくか」
途中、何やら変だなくつという感じもしたが、とにかく歩き……

「斎藤ニーブロックツ!!」↑ノリノリ

「忠勝ボンバー!!」↑ノリノリ

「氏真チョップなのつ!!」↑ノリノリ

「長可バスター!!」↑ヤケクソ

「ぐわっ!!」な、何だいきなり……

本多忠勝、今川氏真、森長可、ついでに斎藤九十郎の、

同時に相手をするのは呂奉先でも無理なカルテットに襲われ、謎の尾行者は成す術も無くブチのめされた……

一応、大怪我はさせないように手加減はされたが。

「ぜえ……はあ……い、意外と粘ったなこいつ……」

「タイムンだったらやばかったか……」

「忠勝スペシャルからお前が抜けたのはお前が初めてです。

使ったのも初めてだったですけど」

忠勝スペシャルとは、綾那の天賦の才をゴミ箱にダンクシュートして放つ釣り天井固めである。

マッチョな大男の眼前で、長可バスターと忠勝スペシャルをくらい、大股開きにさせられた謎の尾行者の羞恥と混乱はいかほどのものであろうか。

「お前もまさしく強敵（とも）だったの」

「んんんっ!! んんんんんんっ!!」

さておき、まるで勇なまシリーズの魔王の如く簀巻きにされ、猿轡も噛まされた追跡者から、目深にかぶった帽子を剥ぎ取り……

「あれ? この帽子どっかで見えたような……」

九十郎がようやく気付く、追跡者の帽子が霧雨魔理沙が被っている特徴的な三角帽に

良く似ている事に。

そして霧雨魔理沙が持っている八卦炉に良く似た小物入れも持っている事に。どちらもかつて、九十郎がこの世界で作り、ある人物に贈った物で……

「あれ……粉雪……? な、なんでここに粉雪が!？」

そこには、本来ここにはいない筈の、いちやいけない筈の人物が立っていた。

鞆が唾然とした様子で猿轡を外す。

「その……来ちゃったんだぜ……」

粉雪が物凄くバツが悪そうに言った。

それはまるで悪戯がばれて、どう誤魔化そうかと必死に思考を巡らせる子供のようであつた。

「いや来ちゃったんだぜじゃねえよ。 何しに来た!？」

ここは上す……じゃない、長尾の勢力圏内だぞ。

武田四天王のお前が見つかったらやばいだろっ!」

「典厩様から、信虎様の様子をそれとなく探つて来いって言われて。

そういうのは苦手だつて言つただけだな、

信虎様が長尾の食客になつてる話をまだ広めたくないからつて、

どうしてもあたいにやれて……で、仕方なく……」

「典厩様って誰だ？」

「温泉の時に一緒だっただろ!？」

「ああ……言われてみればいたな。」

温泉の時に会ったちびっ子か、確か武田晴信の妹って言った」

「ねえ、粉雪ちゃん。」

もしかして、美空のお城が奪られちゃったのって、武田が何かしたの？」

「それは違うんだぜっ！ いや……あたいや典厩様が知らないっただけで、

お屋形様がなにかしたって事はあるかもだけど……少なくともあたいは知らないぜ」

「本当かよ?」

「信じてくれよっ！ 春日山に来たら何か変な騒ぎになってるし、

九十郎はどこにもいないしで、もう訳が分からねえんだぜっ！

だから……だからその……」

粉雪が恥ずかしそうに目線を伏せ、ちらちらと九十郎を覗き見る。

頬が赤くなり、少し汗が出ていた。

そして……

「あ……会いたかった……ぜ……」

そう告げた。

簀巻きじやなかったら恋愛ドラマのワンシーンのような光景である。

「お…………おう…………」

九十郎は不覚にも、可愛いと感じてしまった。

相手が山県昌景で、歴史上の偉人と分かっていたが…………それでもなお可愛いと思ってしまうた。

「粉雪、少し時間はあるか？」

だからこそ九十郎は、普段の九十郎ならやりそうもない提案を持ちかける。

「あるぜ！ まだ信虎様の居場所も分かってないからな」

微妙に食い気味に、粉雪が答える。

「そんじゃまあ…………特等席で信虎の様子を確認させてやるよ」

九十郎がげっへっへっへと悪役笑いをした。

……

……

……

…………その日の夜。

「美空様、春日山城の隠し部屋、まだ誰も入っていないみたいです。」

出入り口や戸棚に仕込んでおいた柘榴の髪の毛は、一本も切れてません」

一足早く長尾の本陣に戻って来た犬子が美空にそう報告する。

「そう、それは朗報ね。設計図はちゃんと始末してくれた？」

「ちゃんと全部燃やしておきました。それに……」

犬子の懐から、鋼鉄製のネジや釘が何本か出てくる。

「こんな感じで、部品を何個か抜き取っておきましたから、

無理して撃とうとしたら爆発します」

「素晴らしい、これで万一四斤山砲が見つかっても撃たれる心配はなくなったわね」

美空は正直、城に隠していた四斤山砲が敵に利用されたり、武田に情報が流れたりすることを心配していた。

そのため、犬子の報告は美空にとってかなりの朗報だ。

「美空、空って娘が捕まってる場所がわかったよ」

二番目に本陣に戻って来た、新田劍丞が美空にそう報告する。

「本当に!?!」

「直接見に行けた訳じゃないが……」

春日山城の最奥、直江さんの御屋敷に監禁されているらしい」

「人質は最奥部……いえ、当然と言えば当然の話ね。」

流石の春景姉様もそこまでポケちゃいないか……」

予想はしていた事とはいえ、空と愛菜を助け出す事が相当困難な事であると分かり、美空は陰鬱な気分のため息をついた。

「拙いわね……下手に攻撃を加えたら、逆上して危害を加えられるかもしれない。」

でも時間をかけて交渉をしようにも、武田が何をするか分からないし……」

四斤山砲が武田や北条に渡つたら……と、美空は最悪の事態を考える。

長尾春景はたぶん、部品が抜かれた四斤山砲を欠陥品か未完成品と考えるだろう。

だがしかし、武田の北条の連中が見れば、あの武器が今までの攻城や海戦の常識を一気に覆すような、画期的な新兵器だと気付くかもしれない。

美空はそれが怖いのだ。

そして同時に、もしかしたら自分は空と愛菜を見殺しにして、

四斤山砲の秘密を守る事を優先させかねない……そう思っていた。

「その事なんだが……俺に一つ、考えがあるんだ」

「考え……?」

「後ろの崖を登り、屋敷に直行する」

「はあっ!？」

美空は一瞬、劍丞の正気を疑った。

「貴方自分が何を言ってるか理解してる?」

それともあの崖を実際に見ないで言ってるのかしら？」

「いや、実物は見てきた、その上で可能だと思ったから言っているんだ」

「……本気なの？」

「本気だよ。美空達は正面から攻める、

俺達は相手の注意が正面に向いている間に背面から侵入する」

「貴方がそれをるって言うの？」

「ああ、やる」

「失敗したら死ぬわよ」

「必ず助けて見せる」

美空が劍丞をギロリと睨みつける。

しかし、劍丞は少しも怯まずに見つめ返す。

命懸けは覚悟の上だと、美空には分かった。

「主人公、か……」

美空は何となく、嫌な感じがした。

劍丞を見て、まるで物語の主人公のようだと感じた、頼もしいと思った。

織田久遠信長や、足利一葉義輝が惚れこむのも無理は無いかと思った。

それに美形だと思った。

目と目が合うだけで、思わず頬が熱くなるような超のつく美形だと思った。

ブ男の九十郎とは比べる事すらおこがましいと。

だがしかし、だがそれでも……

「九十郎の方が頼もしいし、恰好良いわよ……絶対……」

美空は少し悔しそうな顔をして、小さく小さく呟いた。

「まあ、どんぐりの背比べみたいだな争いだけだ。」

九十郎が恰好良いって言ってもそこまでじゃないし、

私が気にかけるようなものでもないけど。

剣丞に比べればいくらか……ほんのちよっぴりだけマシってただけだけだ。」

そして誰かに言い訳をするかのように付け加えた。

「美空、何かぶつぶつ言ってるけど、どうしたんだ？」

「いえ、なんでもないわ。それより貴方の作戦、やってみましょう」

そして……

「美空、通りすぎりの霧雨魔理沙さんが助太刀してくれるってよ」

「通りすぎりに霧雨魔理沙だぜ、腕つぶしには自信があるぜ、任せろなんだぜ」

三番目に戻って来た九十郎がそんな事を報告してきて、魔理沙っぽい帽子と、魔理沙っぽいエプロンドレスを着こんだ自称霧雨魔理沙がびしつとサムズアップした。

「…………え？」

だがしかし、自称霧雨魔理沙はどう見ても山県昌景であった。

この男は粉雪をどこに連れて行く気なのだろうか。

「九十郎、ちよつと……」

美空が九十郎の手を引つ張り、物陰へと移動させる。

1 人目の報告は胸が安らぐ朗報であった。

2 人目の報告は胃がギリギリするような話ではあったが、希望もまた残されていた。

3 人目の報告は美空の胃壁をゴリゴリと削りながらも、何の希望も見いだせない、救いようの無いものであった。

とりあえず美空は九十郎を殴っても良いだろう。

「何考えてるの！ 何考えてるの！ 本当に何考えてるのアンタはあつ!!」

「えつと……空とついでに愛菜を助けに行く事」

「ええそうね、それは大事な事よね、

でもだからって武田四天王連れて来る馬鹿がどこにいるのよおつ!!」

「俺だ」

「馬鹿やつてる自覚あんなら自重しなさいよこの馬鹿あつ!!」

美空のツツコミは今日も絶好調である。

「ねえ貴方人の話聞いてた？ 武田晴信抹殺用に用意してるアレとかソレとかコレとか、

武田と北条にバレたら困るって何度も何度も言ってるわよね」

アレとはドライゼ銃、ソレとは四斤山砲、コレとはハーバーボツシユ法を意味する。決して忍者の最終奥義では無いし、宇宙忍群ジャカンジャが狙うような代物でもなく、邪悪な意志でもない。

「劍丞達抱え込んでる時点で今更だろ」

「織田と松平は良いのよ！ 武田を殺した後で教えるつもりなんだから！

でも武田を殺す前に武田に知られたら作戦の前提が崩れるし、

北条にバレたら絶対色々要求してくるじゃないのおっ!!

それを……それをよりもよって武田四天王!?

絶対に情報が流れるじゃないの馬鹿あつ!!」

美空が九十郎の首をブンブンと揺さぶりながら訴える。

そのまま首を叩き落とした方が美空は平穏な毎日が送れるのではなからうか。

「だが、今回の戦じゃドライゼ使う気無いんだろ？」

「……まあね」

「なら問題あるまい、撃たなきゃドライゼは変なレバーくつついた普通の鉄砲だよ。」

それに今は猫の手も借りたい時だし……粉雪はそこらの猫より強いぞ」
美空は遠くで待つてる山形正景を……自称霧雨魔理沙に視線を向ける。

ちよつとソワソワして、何度も何度も帽子の角度を直している少女を見つめる。

なんとなく美空は、彼女も自分と同じく、九十郎に恋をしてるのではと思つた。

山県昌景だから出会つた、山県昌景だから愛されない、ただの粉雪には決してなれな

い。

上杉謙信だから出会つた、上杉謙信だから愛されない、ただの美空には決してなれな

い。

なんとなく美空は、自分と粉雪の境遇が似ているような気がした。

だから……

「……認めるわ」

だから美空は、粉雪を追い出す事ができなかつた。

馬鹿な事をしていてという自覚はあつたが……失礼な言い方になるが、粉雪が哀れに
思えたのだ。

犬子と柘榴と九十郎第72話 『春日山城奪還作戦』

「よっ、ほっ、よっと……」

「よっこいしよ、どっこいしよっと……」

マッチョ1名と美男美女3名が崖登りをしていた。

犬子と小波と劍丞と九十郎が趣味のボルダリングを楽しんでいる……という訳ではない。

春日山城の奥深くに囚われている空と愛菜を助けに行くため、セコセコと城の裏手にそびえる険しい崖に挑んでいるのだ。

「大江戸タワーよりも登り難いな……くそ、点検用のハシゴとかねえのかよ……」

九十郎はぶつくさと文句を言いながら手足を動かす。

そんな物があつたら侵入され放題である。

「劍丞、辛くなつたら言えよ。」

お前の体格なら、1人や2人くらい背負つて登れるならな俺は」

「俺なら大丈夫だよ、それより急ごう」

「ああそれと、犬子の事はさんなんて付けずに、呼び捨てでお願いします。」

劍丞様は久遠様の旦那様なんですから」

「俺も屑郎以外の呼び方だったらなんでも良いぞ」

「え？ 九十郎って何か他の呼び方あったの？」

「色々あったぞ、マツチヨとか、マツスルとか、筋肉だけ立派とか、声だけイケメンとか、屑とか、神道無念流野郎とか、劍術馬鹿とか、斎藤仮面とか」

半分以上はただの悪口である。

「ぶっ……って、わわあつ!!」

崖登り中に斎藤仮面の姿……仮面ゴキブリリーダーブラックRXみたいな感じの姿を想像してしまった劍丞が、足を踏み外して落ちそうになった。

「け、劍丞様大丈夫ですか!! しっかり掴まっついてください!!」

「わ、悪い……だ、大丈夫だ、なんとか」

「おいおい気をつけてくれよ劍丞、こっから落ちたら普通に死ぬぞ」

劍丞が落下しかけた原因を作った男が他人事のように注意を促す。

そんな事だから貴様はモテないのだ。

「ところで……何で九十郎達はこっちに来たんだ？」

「へ？ お城の中を歩いた事がある人がいないと、道に迷うかもって思ったからですよ」

犬子がそう答える。

「いや、犬子が来てくれた事は有難いんだけど……」

九十郎は金ヶ崎の後で美空から怒られてただろ。

アンタは替えがきかないから危ない事するなーって」

「黙って出て来た」

つまりいつもの九十郎である。

とりあえず美空はこの男を殴り倒しても良いだろう。

「良いのかなあ……」

やや釈然としない思いを抱えながら、劍丞達は崖登りを再開する。

美空が無茶だと言うだけあって、春日山城裏手の地形は険しく、手足のとつかかりになる場所も、途中で休憩できそうな場所も無い。

「しかし……まだ、先は長いな……」

下を見ると、眩暈がするような光景が広がっている。

こんな状況で無ければ絶景かなと言いたくなるような景色だが……今は人質の命が懸かっている。

そんな時……

「劍丞様、聞こえましたか？」

「ああ、聞こえた」

遠くの方から、鬨の音が聞こえて来た。

城の方から殺気、あるいは殺意、そしてどよめきの気配が一気に強まる。

……戦闘が始まったのだと分かった。

「おいおい、美空の奴もう始めたのかよ。」

劍丞が空を確保するまで仕掛けないって段取りだろ」

「春景さんの方が打って出たのかもしれないよ、九十郎」

「どっちにしろ時間が無い。小波、先行してくれないか」

「分かりました、状況は口伝無量で随時お伝えします」

そう言うくと小波は先程までとは比べ物にならない程の超スピードで崖を駆け上がる。

まるで平地を走っているかのようなその動きは、劍丞にすら到底真似できないものである。

「うわ、速いな。もう頂上に行ったぞあいつ……やっぱ服部半蔵だなあ」

「ドン引きしてる時間は無いよ、九十郎。犬子達も急がないと」

「分かってる。劍丞、こつちも少しペースを上げるから、しつかりついて来いよ」

「ああ、行こう」

……

……

………

「向こうは打って出たか。思ったより早く釣られたわね。」

できれば空と愛菜を取り戻すまで戦いは避けたかったけど……

こうなつては仕方が無いわね」

美空がふうつとため息をつく。

空が死ぬかもしれない、九十郎が死ぬかもしれない……そんな嫌な想像を振り払い、美空は気合を入れ直す。

敵が当初の想定から外れた行動をとつた程度で揺らぐ程、長尾景虎もそれに付き従う。越軍も弱くは無い。

「松葉！ 遠巻きに牽制するのはここまで！ 全軍に攻撃命令を出さない！」
「御意」

春日山城を遠巻きに取り囲んでいた長尾勢が動き始める。

少し先の話になるが、春日山城の戦いはぶつちやけた話特に問題無く美空が春景を下し、自らの居城を取り戻して終わる。

そもそも、美空と春景では踏んできた場数が違うし、美空は春日山城に数々の隠し通路や隠し部屋、隠し武器に罠を仕込んでいたが、春景はその1割も把握していない状態で戦っていた。

唯一の懸念点であった、人質……空と愛菜の2人も、新田劍丞が春日山城裏の切り立った崖をよじ登るといふ荒業によって見事に奪還。

後はもう消化試合に等しかった。

この辺の流れはいくつもある並行世界における、割と良くある劍丞の活躍の一つである。

ただし、変わっていた事はいくつかある。

「左翼が薄いか……飯富の妹おっ！ 勝負所だ！ ブチ破れっ！」

「今のあたいは通りすがりの霧雨魔理沙なんだぜ！」

「どっちでも良いから早く行け、あの男に良い所を見せたいのだあろうが。」

「一番槍は譲ってやろう」

「へっ……それを言われちゃしようがねえな……」

「しゃあっ!! 春景とかいう不義不忠の輩に武田の怖さを教えてやるぜえっ!!」

「第七騎兵団の精鋭達に告げる！」

馬鹿1名が道を切り開く、こじ開けるのは貴様らの役目だぞ！」

そんなこんなで山県昌景……自称霧雨魔理沙がダツシユで春日山城の城門へと駆けしていく。

「ま、拙い、城門を閉め……」

「ま、待てっ！ 味方がまだ外で戦ってるんだぞ！」

城門近くを守っていた敵兵が迫りくる三角帽子に気づき、門を閉めようとするが……
「判断が……おそおいつ!!」

自称魔理沙の脚力が、春景勢の予想を遥かに上回っていた。

閉じるか、閉じないかでモメていたほんの僅かな時間で、中途半端に開いていた門の隙間に潜り込み……即座に死体の山を築いていく。

「武田四天王ナメんなあああああーっ!!」

最早正体を隠す気ゼロな雄叫びと共に、白刃が煌めき、腕が飛び、首が飛び、周囲に血や脳漿がばら撒かれる。

戦いが始まった頃は黒かった魔理沙っぽい帽子や、魔理沙っぽいエプロンドレスは血で染まり、すぐに真っ赤になっていた。

「随分と張り切るな、飯富の妹……」

「感心してる場合じゃねーっすよ。 1人で突出しすぎっす。

アレじゃそう遠くない内に囲まれて討ち取られるっす。

まあ、後の戦いを有利に進めるって意味では、討ち取られてもらうってのもアリっすけど」

「当然、援護は出ささ……第七騎兵团っ！ 何をぼさっとしてる！」

向こうは動揺しているのが分からないか！ さっさと押し込めえっ!!」

美空が厳選に厳選を重ねただけであり、第七騎兵団の面々は信虎の指示に即応し、敵の陣形に生じた綻び目に向かって突き進む。

「全く……いちいち言ってやらなければ動けんのかあいつらは……」

「この戦いが終わったら鍛えなおしだな」

「できたばかりの部隊っすよ、ある程度はしゃーないっす」

「柿崎、アレをやるぞ」

「前に練習したアレっすか、アレは武田と戦うまで隠しとけて言われてるっすけど」
「晴信相手では、城攻めにはならんよ。」

話くらいは聞いているだろう、人は城、人は石垣、人は堀……」

「率直に言つて頭イカレてるっすよ」

「甲斐は貧しい、貴様らが考えているよりもずっと貧しい。」

だから城を造る金が無い。

それに城の籠るような戦い方をすればあつという間に日干しになってしまふ」

「まあ、そういう事なら協力しなくも無いっすけど……」

「それにな柿崎、我もあの筋肉男に良い所を見せたいのだ」

「……それを聞いちや、力を貸さない訳にはいかねーっすね！」

柘榴は九十郎の妻っすから！」

柘榴が美空からの指示をまるつきり無視して、精神を集中させる……

御家流は基本的に、強力である程、有効射程が短くなる。

そして距離が離れれば離れる程、狙った場所に当てるのは難しくなる。

いくつかの例外はあるが、柘榴の御家流はそんな例外的存在ではない。

柘榴の御家流は地面から巨大な槍が飛び出し、敵を斬りつける「昇竜槍天撃」。

鬼も城壁も石垣も豆腐のように切り裂く柘榴の切り札だが、美空や一葉の御家流とは異なり、遠距離には届かないという難点がある。

「柘榴の御家流……信虎に託すつすよ」

「任せろ、我が有効に活用してやろう」

柘榴の御家流が、信虎の両腕に宿っていた。

御家流をあえて信虎に向ける事で、信虎の能力の発動条件を満たしたのだ。

「即席合体奥義……」

「マグナム・シユートオオオオオーッ!!」

信虎の叫びと共に、本来遠距離に飛ばせない筈の柘榴の御家流が飛んだ。

銃剣を手に敵兵と対峙している第七騎兵団の頭上を飛び越え……春日山城の城壁がズタズタに切り裂かれ、

その余波で狭間から矢を放っていた敵兵が何人もバラバラの肉片になって吹き飛んだ。

「おおつ、あんな距離にまで届いたつすか!？」

「この威力、悪くないな……自称魔理沙あつ！」

貴様が惚れている筋肉男はその奥だ！ 早く行ってやれいつ!!」

「おう、助かるんだぜ！」

自称魔理沙が周囲の敵をさらに斬殺し、奥へ奥へと進んでいく。

それにしても、完全にマグナムシユート等と言うふざけた名前が定着しつつある事に、信虎は疑問を覚えないのであるうか。

「本当、呆れる位に強いわねあいつ……何で武田にばかり人が集まるのやら……」

そんな獅子奮迅の活躍を眺めながら、美空は頭を抱えていた。

ドライブに、四斤山砲、ハーバー・ボツシュ法といった秘密兵器は用意しているが、それでもなお、勝てるのだろうかと考えてしまう程の活躍であった。

「ああ、春日山城の城壁にあんなに大きな穴が……」

あれを直すのにいくらかかるのやら……」

そして柘榴と信虎のやらかしによって秋子が頭を抱えていた。

……

.....

.....

そしてこれが変わった点その2……

「アトミック・ドロップ!!」

「ぎゃわあああああーっ!!」

筋肉男が幼女を抱え上げ、アトミックドロップを見舞った。

率直に言つて通報モノの光景である。

「九十郎やりすぎだよっ!」

「いや、小波を不審者だと勘違いした悪い子にはこのくらいやらないと。

駄だよ、し・つ・け」

九十郎はしれつと言うが、目と口元が明らかに笑っていた。

「うう……尻が……尻が割れたのですぞ……」

自称越後きつての器量人こと直江愛菜兼続が、膝を叩きつけられた尻を抑えながらゴロゴロと転がって悶絶する。

多少の手加減はされていたとはいえ、自分の3倍以上の体格の大男からのアトミック・ドロップは普通に痛い。

「あの、九十郎さん、その方達は?」

さつきまで春景の兵達に軟禁されていた空が、柱の影に隠れながら、おずおずと尋ねてくる。

「ああ、こいつは小波、聞いて驚け服部半蔵だ」

「服部……ご、ごめんさい、存じません」

「そしてこつちは新田劍丞、織田信長の夫で、超イケメンだ」

「織田の天人様だよ、空ちゃん」

「い、いけめんさん……ですか？」

「いや、紹介してくれるのは有難いけど、イケメンって紹介の仕方はどうなんだ？」

「いけめんは服部……言葉の意味は良く分からんですけど、とにかく怪しいですよ！」

「そうかそうか、それじゃあこのクソ面倒臭い時にクソ面倒臭い事を言うクソガキには、

タワー・ブリッジでもいつてみようか」

「お、脅しには屈しないでくださいねーっ!」

愛菜が慌てて物陰に隠れる。

タワー・ブリッジがどんなものかは知らなかったが、語感から言ってロクなもんじやないと直感的に理解したのだ。

「九十郎、あんまり脅かしちゃ駄目だった」

「はいはい分かったよ。」

とにかくだ空、それと愛菜、美空が心配してるから今すぐ脱出するぞ」

「はいー」

「……その2人、本当に信用できるのですか?」

空は九十郎の言葉を信用して、すぐに立ち上がる。

一方愛菜はまだ微妙に警戒心を抱いている様子だ。

「信用できるよ、少なくとも俺よりはな。何せ主人公様と、服部半蔵様だからな」

「うう……空様はこの越後きつての義侠人、

樋口愛菜兼続が必ずお守りしますぞおっ!!」

「分かったから早く来い」

そうしてなんやかんやで6人が屋敷を出る。

「ご主人様、どうやら本隊が攻撃を開始したようです。」

巻き込まれない内に離脱しましょう」

「犬子が愛菜ちゃんを担ぎますから、劍丞様は空ちゃんをお願いします」

「頼むぜ主人公、俺と小波で先導する」

「ああ、わかった。空ちゃん、しっかり掴まってくれ」

「お、お願いします」

劍丞が空を背負い、あらかじめ決めておいた脱出経路へと向かおうとしたその時……

「あ……れ……」

ゆらりと劍丞の視界が歪んで、傾いた。

劍丞が自分の足がふるふる震えているのに気付いた直後……おんぶしようとしていた空共々、どさりと倒れてしまう。

「劍丞……?」

「ご主人様!」

「劍丞様!?! どうしたんですか!?!」

急に倒れた劍丞を心配する九十郎達の声は、劍丞には届かなかった。

その時、まるで電機コードを抜かれたオモチャのように、劍丞の意識は闇に沈んでいた。

蘭丸によって死の一手手前まで精力を収奪された影響は、劍丞が思っていたよりも深刻で……さつきまでしていた崖登りで、体力の限界を迎えてしまっていたのだ。

「ちよ、おい劍丞しつかりしろ!」

てかマジかよ!?! いくら俺でも劍丞と空と愛菜抱えてあの崖降りれねえぞ!」

「九十郎、いつそぶらんBを使うってのは?」

「駄目だ犬子、アレを使っても劍丞が気絶してるって所は全く変わらねえ。」

「気絶した劍丞を担いで動かせなくなるから、かえって逃げ難くなるぞ」

なお、プランBとは、空と愛菜と潜入メンバー4人を犬子の御家流で犬に変え、こっそりと逃げ出す作戦である。

ただし小波と劍丞に犬子の御家流の存在がバレるため、最後の手段にするようにと美空から厳命されている。

「あ、あの、もしかして私が重かったせいで」

「空様は全然重くないですぞっ！」

むしろ軽すぎるくらいで、もつとたくさん食べて欲しいくらいですぞっ！ どやっ！」

「ドヤ顔になってる場合かよ!? どうするんだ!?!」

「大声を出さないでください！ 人の気配が近づいて……皆さんどこかに隠れて！」
想定外の事態に、九十郎達が慌てふためいていると……

「九十郎殿、こんな所で何をなさってるんですか?」

地獄に仏とも言うべきか、タイミング良く貞子がやって来た。

遠巻きに春日山城を取り囲んでいた美空達が攻撃を開始し、本格的にきな臭い空気になつてきたため、空の身を案じて様子を見に来たのだ。

「貞子、愛してるぜ」

「貞子さん大好きだよ!」

「ふあつ!? ええつ!? あ、いえ……わ、私も愛してますが……」

とりあえず犬子と九十郎は貞子に愛を告げた。

安い愛である。

「愛してるから空か愛菜のどつちか背負って崖から降りてくれ」

「貞子さん! 大好きだからお願いします!」

「……はい、分かってました。」

九十郎殿がそういう方だつてのは知っていました、ええ分かってましたとも」

貞子は空を背負って崖から降りた後、九十郎のアゴに見事なアツパーカットを決めた。

……

……

……

そして変わった点その3。

九十郎達が空と愛菜を救出した日の翌日……

「う……ん……」

金ヶ崎の戦いからずっと昏睡状態であつた桐琴が目を覚ました。

「母……? 母あつ!? お、おい大丈夫か? 生きてるのか!」

他に用事がある時以外、ずつとつきつきりで見守っていた小夜叉の顔がぱつと明るくなる。

このまま目覚めないんじゃないのか、このまま死んでしまうんじゃないかと、ずつと不安と恐怖で一杯だったのだ。

「母、オレが分かるか？ 目は見えるか？」

「う……………儂は……………まだ、生きて……………」

「ああ生きてる、生きてるぜ！ ちゃんと生きて……………生きて……………」

小夜叉がぼろぼろと大粒の涙を零しながら、痩せ細った桐琴に抱き着く。

体温は低くて、脈は弱くて、肌もガサガサだったが……………それでも、確かに生きていた。

それが小夜叉には嬉しくて仕方が無かった。

「……………馬鹿が、儂を助けるためにわざわざ戻ったのか」

「すまねえ、母。 でも……………でも、それでも……………」

助けたかったんだよ、見捨てたくなかったんだよ……………オレは……………」

「馬鹿が、この馬鹿が……………大事と小事を見誤りおつて」

桐琴が悪態をつきながらも、小夜叉の手を握り返す。

子供のように泣きじゃくる娘を殴りつけ、私情で戦線から離れた事を叱責するべきとは思ったが……………腕に力が入らず、視界が滲み、桐琴には小夜叉を殴る事すらできなかつ

たし、怒鳴り声を出す事すらできなかつた。

「腹が爆ぜた所までは覚えてる。あれからどうなった？」

「ああ、オレももう駄目かと思つたよ。

「ただあの時、新戸っていう鬼みたいな奴が母を助けてくれたんだ」

「……………どうやってだ？」

「えつと……………それは……………何か、御家流みたいなのを使って、母の手当てをしたつて……………」

小夜叉があゝの非常識な光景をどう説明したものかと悩みだす。

「あーでもない、こーでもないと言葉を選んでいるうちに……………桐琴の腹がぐううつと鳴つた。」

「ハラ減つてるよな、寝てる間ずっと何も食つてなかつたからな。」

「すぐに何か持つてくるから、待つてくれよ」

「ああ……………いや、その前に一つ聞かせい。 劍丞は無事だな？」

「え……………えつと……………」

小夜叉の視線が泳ぐ。

直感的に、桐琴には小夜叉が何かを隠そうとしているとすぐに分かつた。

「鬼に襲われたか？」

「いや、そうじゃなくて……………オレも良く分からねえんだけど、

変な鬼が出て来たんだ、本当の愛がどうかかって……

それで、劍丞は今寝込んで……でも、命を落とすような状態じゃねえって、ちよつと寝込んでるだけだつて」

「そう……か……」

『本当の愛』という言葉を聞いた時、桐琴は僅かに顔色を変える。

鬼に犯されていた時、そして胎が膨らみ、鬼子が産まれそうになった時に聞こえていた声が……『本当の愛はどこにある』だったからだ。

桐琴にはどうしても、あの時間こえた声が、ただの幻聴だとは思えなかった。

「こうしてはおられんか……うぐっ」

立ち上がろうとした時、桐琴の顔が苦痛に歪む。

足を動かすと同時に、まるで骨が軋み、筋肉が千切れたかのような激痛に襲われたのだ。

「母っ！ まだ動いちゃ駄目だろ！」

「この場所はどこだ？ 一体何日寝ていた？」

「後でゆっくり説明するから横になっててくれ！」

すぐに何か食べそうな物を持ってくるからな！」

小夜叉はそれだけ言つてドタドタと騒々しい足音と共にどこかへと走り去つてしま

う。

桐琴はもう一度立ち上がれないかと試してみたが、やはり両足はいう事を聞いてくれなかった。

「ぐっ……あ、歩けん……か……いや、当然か……」

胎が破裂し、骨と内臓が飛び散り、足は両方とも千切れて吹き飛んでいた。

あの時、自分は間違いなく死ぬと思った。

それがどんな奇跡が起きたのか、生きて娘とまた会えた、また話せた。

それだけでも感謝するべきだとは思う。

だが……

「もう、戦えんかもな……」

桐琴は戦場で生きた女だ。

生まれた時から死ぬ瞬間まで、戦場を駆け、槍を振るい、首を討ち、そして誰かに討ち取られて死ぬだろうと思っていた。

戦場以外の場所で生きる方法を知らなかった。

それ故に愛娘にだって、戦場での生き方以外何も教えられなかった。

「儂は……どうすれば良いのだ……」

もしかしたら、もう二度と戦場に立てないかもしれない。

今まで想像すらしてこなかった事実を突如として突きつけられ……桐琴は人知れず
慟哭した。

……

……

……

「……うげ、何だこりゃ!?!」

戸を開けた瞬間、小夜叉の視界が真っ白になった。

舌や鼻がぴりぴりする強烈な刺激臭を浴びせられ、思わずたじろいでしまう。

そしてその煙の奥で、モクモクと煙を立ち昇らせるパイプを加えた白髪の少女の姿が

あった。

その煙の臭いは何なのか、小夜叉には分からなかったが……それが健康に悪そうだと

いう事だけはすぐに分かった。

「おい新戸! ここに居るんだろ! 母が目を覚ましたんだよ!」

小夜叉は煙の奥に向かってそう呼びかける。

金ヶ崎の戦いが終わってから、ずっと姿を消していた新戸を探していたのだ。

「ああ……誰かと思つたら……小夜叉か……」

戸を全開にして、内部の煙は少し薄くなった。

小さな掘つ建て小屋の奥で尋ね人が……虚ろな視線を宙に浮かせていた。明らかにヤバそうな状態だった。

下手をしたら数時間前に目覚めたばかりの桐琴や、蘭丸とかいう鬼にやられた影響で寝込んでいる劍丞と詩乃より拙い状態なんじゃないかと、小夜又は思った。

「おい、大丈夫なのかよ？」

「阿片だ……痛み止めに使っている……」

超能力を使い過ぎると……頭が痛む……から、な……」

「超能力……？　もしかして、母を助けるために無茶をしたのか？」

新戸はそうだとも違うとも言わずに、阿片の煙をすばあつと吸い込んだ。

「そ、そうだ、劍丞が昨日、急に倒れちゃったんだよ」

「……あの状態で崖登りをしたのか？」

「ああ、そう聞いてるぜ」

それを聞くと、新戸は阿片が満載したパイプを口に咥えながら大きく息を吸い、ふううつと陰鬱そうに息を吐いた。

「オレは止めたんだけどなあ……」

「この世界の新田劍丞も、幾多の並行世界の新田劍丞達と同じように、自分の言う事を全然聞かないと再確認した。」

「なあ、劍丞はどうなんだ？ 何かヤバい事になってねえのか？」

そして新戸が何かを考え、何かを言おうとした瞬間……

「イタイ……」

ぼそりと呟き、新戸がぶるぶると震え始める。

「イタイイタイツッ！ イタイイタイイタイイタイイタイツッ！！」

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイイイイイイーっつっ！！

新戸が突如、狂ったように頭を掻きむしり狂気の叫びをあげる。

ポリリポリと頭を掻き……いや、引っ掻き回す。

指と髪が血で染まる程に強く強く引っ掻き続ける。

あつという間に、新戸の顔と指は血で真っ赤に染まってしまふ。

「お、おい大丈夫かよ!?」

小夜叉が心配そうにそう尋ねると、新戸はピタリと動きを止め……

「超能力は……御家流は強い意志で物理法則を捻じ曲げる事だ……」

リスク無しでは……何の代償も無く使える力じゃない……

使い過ぎれば皆こうなる……小夜叉もこうなる……

オーデインすらも、あの恐るべきルーンマスターですらも避けられない……」

そして何かをぶつぶつと喋り始める。

小夜叉は一瞬、自分に話しかけているかのように思ったが、すぐにそれは間違いだと気付く。

新戸の視線はどこにも向けられていなかった。

まるで虚無そのものが浮かんでいるかのような、虚ろな瞳であった。

「阿片で痛みだけは和らぐ、痛みだけは……」

痛みだけだ、痛みだけ……脳と神経にかかる負担は誤魔化せない……」

「おい、阿片って大陸で手に入るヤバイ薬だろ!？」

使いすぎたら身体をボロボロにしちまうって……」

そして小夜叉の目の前で、新戸は阿片の煙を大きく吸い込む。

超能力の反動を少しでも和らげるために。

身を引き裂くような激痛を少しでも和らげたために。

小夜叉にはそんな新戸の姿を見ると、どう見たって健康的な使い方をしているとは思えなかった。

「小夜叉……九十郎には、言うな……」

そして朦朧とする意識の中で、新戸は小夜叉にそう告げる。

「九十郎に……情けない所……見せたくない……」

「あ、ああ……」

小夜叉がコクコクと頷くと、新戸は意識を手放して、深い深い眠りについた。

失神するかのよう……いや、新戸は阿片の吸い過ぎで失神し、眠りに落ちた。

「ああ、くそ……結局、聞きたい事は何も聞けなかったな……」

新戸が完全に意識を失ったのを確認すると、小夜叉ははあつとため息をついた。

少しだけ、頬を叩いて起こしてやろうかとも思ったが……

「こいつ……こんなになるまで御家流を使つて、母を助けてくれたんだよな……」

少なくとも、新戸がいなければ、新戸が自らの身体を蝕む程に超能力を使わなければ、

自分の母親は間違いなく身体を破裂させて死んでいた事だけは分かった。

「ごめんな、それと……ありがとな」

だから小夜叉は、自分の服を一枚脱いで気絶した新戸にかけて、せめてもの感謝の気持ち告げた。

外はまだまだ肌寒く、サラシ一枚では風邪をひきそうだと思つたが……それでもなお、こんなになるまで頑張つて自分の母を助けてくれた恩人を放置する気にはなれなかった。

犬子と柘榴と九十郎第75話 『美空、怒る』

「俺が官兵衛を好きになった理由？」

「教えなさいよ。上杉謙信より、前田利家よりも好きなのでしょう」

「そんな事聞いてどうする気だ？」

「私が知りたいだけ」

「ふ〜ん」

「……何かの参考になるかもしれないじゃない」

美空はそう小さく呟く。

「今ほそつと何か言わなかったか？」

「なんでもない！ 何も言っていないわよ！」

「まあ、そうだな、理由はいくつかあるんだが……」

あの豊臣秀吉の軍師、参謀、助言役。そう聞くと何やら凄そうだって思うだろ？

現に俺は凄そうだと思った」

「私は豊臣秀吉の凄さを全然知らないから、良く分からないわ」

「劉邦みたいなもんだ。晩年のボケっぷりは秀吉のが上だろうか」

「人豚でもやったの？」

「たぶん人豚はやってねえんじゃないか。」

確か後継問題拗らせて、養子にしたのを三族皆殺したとか、海外に出兵したら補給線切られて散々な目に遭ったとか、色々あるらしいぞ」

俺はそこまで詳しくねえがと付け加える。

なお、人豚とは両手両足を切り、目耳声を潰し、廁に投げ落とし、心優しい皇帝をストレスで早死にさせる残虐技である。

美空は子供の頃に林泉寺住職の天室光育から借りた本から、九十郎は横山光輝の漫画からこの恐るべきフェイバリットを知っている。

「海外出兵を強行できる程度の権勢ね、多少は分かったわ。」

でも凄そうだから好きになった訳でもないでしょう」

「黒田官兵衛はな、やる事なすことが一々笑えるんだよ」

「……うん？」

何やら話の雲行きが怪しくなり、美空が無意識のうちに身構える。

「信長を裏切った奴を説得に行ったら捕まって監禁されたり、

捕まってる間に信長に子供を殺されかけたり、捕まったせいで足を悪くしたり、

信長が死んだ時にうっかり天下を取るなら今だくなんて失言して秀吉に警戒されるし、

秀吉に警戒されてるからどれだけ活躍しても領地は増えないし、

それで関ヶ原やつてる間に九州で地盤固めてしまおうとしたら、

関ヶ原が半日で終わって失敗するし、おまけに梅毒だし」

「ひ、酷い人生ね……」

梅毒という言葉が性病の一種と九十郎から聞いていた。

それ故に美空は九十郎の語る雫の生涯を『酷い』としか言いようが無いと感じた。

そして思った、せめて私くらいは雫に思い切り優しくしてあげようと。

「酷くて笑えるだろ」

九十郎がニヤニヤしながら言う。

しかし、他人の失敗エピソードばかり覚えるこいつも十分すぎる程に酷い男である。

「初めて聞いた時は笑い転げたね。」

しばらくは思い出し笑いが出てきて大変だったよ。

先生、斎藤くんが授業中にニヤついてまゝす、なんて言われた事もあったな」

「思い出し笑いつて、笑っちゃいけない時である程、堪えるのが大変よね。」

お葬式とか、軍議とか」

「ははは、理解してもらえたようで何よりだよ。

だが……俺は黒田官兵衛が笑えるから好きになった訳じゃないと思う。

いや、もちろん笑える所が好きなのは確かなんだけどな」

「へえ、どんな所？」

「諦めが悪い所……ああそうだ、諦めの悪い所だな」

九十郎は気恥ずかしそうにそう言った。

「関ヶ原が終わり、官兵衛の娘が徳川家康に手を握られたんだよ。

味方になってくれてありがとう、貴女の働きの戦に勝てた……てな。

それを聞いた官兵衛はこう言った、その時左手は何をしていたんだ……と。

関ヶ原に勝って、天下を握るのがほぼ確実視されてた相手にだぜ」

「そう……黒田官兵衛は、天下への野心を捨てられなかったのね」

「だがこんな逸話が残ってる辺り、絶対失言癖あるよな、官兵衛って」

「まあ、そう考えるのが自然でしょうね」

「ああ笑える。 凄いな奴なんだけど、ここぞという時にポンコツで、笑える。

だけで最後の最後まで諦めない。

俺が黒田官兵衛を好きになった理由は、その辺だと思う」

「ふうん……」

美空は少し、面白く無かった。

黒田……ではなく、小寺官兵衛が越後に来たら虐めてやろうかとも考えた。

考えるだけで実行には移せない所が美空の美空たる所なのだが。

そんな美空だからこそ、柘榴も松葉も秋子も、美空に頭を垂れ、美空に従い、美空の為に死のうとしているのだ。

「九十郎、出立の準備ができたよ」

そんな2人の所に、旅支度を整えた犬子がやってきた。

持っている荷物は、御家流で犬になっても背負えるよう、ギリギリまで軽量化された背負い袋が2人分。

これから2人は、犬子の御家流を使い、犬になって京都まで突っ走るつもりなのだ。

「ああ、ありがとな犬子。柘榴の方はどうだ？」

「柘榴なら先に出てるよ。官兵衛さんを越後に連れてくる準備がいるって」

「了解だ。それじゃあ美空、ちよつと黒田官兵衛を拉致してくるよ」

九十郎はちよつと買い物に行ってくる的なのりで言う。

「ええ、どうにかして越後まで連れてきて頂戴。」

最初は説得、説得に応じない場合は拉致よ、順番を間違えないでね。

拉致の場合は犬子の御家流を使う事も許可するわ。

そこから先、官兵衛を説得するのは私がどうにかするから」

「おう、任せとけ」

九十郎はニカツつと笑い、犬子と共に越後を去った。

九十郎達が小寺官兵衛・通称雫を拉致して越後に戻ってくるのは、そんな会話があつた日から僅か7日後の事である。

……

……

……

「また、やつちやった……」

九十郎による衝撃の『え、やだよ』発言の後、雫は近くの飲み屋で暗く沈んでしまつていた。

周囲から聞こえてくる、楽しそうな酔っ払い達の声が、余計に雫を惨めにさせていた。どうやら美空が春日山城を取り戻した事を祝い、戦いに参加した兵達が集まっているらしかった。

「またしても失言……気をつけてるつもりですけど……」

予想外の事態が生じると、思考が硬直してしまう。

思考が硬直すると、とりあえず何でも良いから喋らなければと考えて、とんでも無い

事を口走つてしまう。

それは昔からの雫の悪癖だった。

雫はその癖を直したくて、子供の頃から色々な事を学び続けているのだ。

世のあらゆる学問を修め、あらゆる未来を想定し、予想外の事態にぶつかる事を減らそうとしているのだ。

だが……

「九十郎さん、怒っているでしょうね……」

だがそれでも時々雫の悪癖は出てきてしまう。

先程雫は、思考が纏まらぬまま、『酷すぎますっ！ 女の子を……私を何だと思ってるんですかっ!!』と叫び、九十郎の頬を力一杯叩いてしまったのだ。

今でも九十郎を叩いた右手がヒリヒリ痛む程、強く強く叩いてしまったのだ。

「明日から九十郎さんに、どんな顔で会えば良いんでしょう……」

雫は頭を抱えながらそう呟いた。

ああもはつきりと拒絶されながら、激高して九十郎を叩いたというのに、それでも九十郎の妻になる方法が無いものかと考えてしまう自分が嫌いだった。

「そういえば……どうして九十郎さんって、私だけ官兵衛と……」

そして気づいた。

九十郎が雫の事を官兵衛と呼び続けている事に。

「雫、官兵衛、雫、官兵衛、雫、官兵衛……」

何度も何度も自分の名前を呼び続ける。

雫と官兵衛、そこにどんな違いがあるか、何故九十郎は自分を官兵衛と呼び続けるのかと考え続ける。

「愛していると叫んで、兜を渡して、指輪を渡して、どうして求婚ではないと思った？」

私が未婚の女と知っているなら、当然……間違いないく求婚だと思う筈で……」

考える、考え続ける。

考え続ける事こそが軍師の生態で、考え続ける事だけが軍師にできる全てなのだから

と……

「未来の……知識……!？」

その瞬間、雫の中で一つの仮説が完成した。

「九十郎さんは……私を人だと思っていない？」

それは突拍子も無い仮説であった。

突拍子も無い仮説であったが、雫はそれが真実に近いような気がした。

「九十郎さんは、私を小寺官兵衛だとしか……」

未来の知識にある、歴史書の人物としか思っていない……」

そんな事を呟いた瞬間、雫は震えが止まらなかつた。笑ひ飛ばして、忘れてしまいたかつた。

だが軍師の生息故、一度出した仮説は反証がされない限り捨てられなかつた。

例えるならそれは、名画に美しい額縁を付けるのと同じ事、例えるならそれは、名画が人に求愛するも同じ事、増してや九十郎は、小寺官兵衛を梅毒だと思つて居るのだ。

そう考えると、今までの九十郎の言動がいつぺんに説明できてしまう。

雫がそんな事を考えていると……

「……陣太鼓の音？」

店内が騒めいていた。

ついさつきまで気持ち良く祝賀酒を飲んでいた長尾の兵卒達の会話が止まっていた。

そして聞こえて来た、陣太鼓の音が。

「緊急招集……一体何故……!?!」

雫にはそれが緊急招集の合図であるとすぐに分かつた。

「親父さん！ お勘定はここに置いていきます！ おつりは結構ですのぞ！」

雫は懐にある財布を逆さに振って中身を机の上にブチ撒けると、一目散に外へと……

陣太鼓の音がする方向へと駆け込んだ。

……

.....

.....

「い、これは……!?!」

大騒ぎになっていている春日山城下を走り回り、ようやく美空の姿を見つけ出した雫を待っていたのは、信じがたい光景であった。

劍丞隊と桐琴以外の森一家、松平勢が一か所に集められ、1000を超す銃口が突き付けられていた。

劍丞隊に銃を向ける連中には第七騎兵团も……あの恐るべき連発銃、ドライゼ銃を持つ兵達も多数混ざっていた。

銃口と劍丞隊らを妨げる物は一切無く、周囲は隙間なく囲まれている。

もし取り囲む兵達が一斉に引き金をひけば、間違い無く劍丞隊も、森一家も、松平勢も皆殺しにされると分かった。

360。隙間無く取り囲んでいる状態で銃をぶつ放せば同士討ちになる危険があるが……兵達は残らず殺気立っており、同士討ちの危険も顧みずに劍丞隊らを射殺しかねない雰囲気であった。

そんな中で、美空と一葉が抜き身の刀で斬り合っていた。

いや、斬り合っていない……怒りと悲しみと殺意を滾らせた美空が、感情に任せて

白刃を振るっている。

一葉は何度も何度も振るわれる凶刃に晒されながら、必死にそれを防いでいるのだ。

「なっ……美空様！ 何をされているのですか！ おやめください！」

事情はまるで理解できなかつたが、それでも詩乃から代役を頼まれた責任がある。

劍丞隊を守るべく、雫は無我夢中で叫び声をあげた。

「外野は引つ込んでなさい！」

美空は聞く耳を持たず、血走った目で抜き身の刀を振り下ろす。

何度も何度も、何度も何度も、叩きつけるように剣を振るう。

その視線の先には一葉が……いや、一葉に守られている新田劍丞がいた。

「いい加減に頭を冷やさぬか！ 美空っ！」

美空と劍丞の間に、一葉が立っていた。

一葉が美空と剣を交え、一進一退の攻防を続け、必死に劍丞を守り続ける。

だがしかし、美空は神道無念流を学び、身体を鍛えなおし、かつてとは比べ物にならない程に強くなっている。

まるで岩石が叩きつけられているかのような強い衝撃を何度も受けて、一葉は少しずつ、少しずつ追い込まれている。

「(ま、拙い……拙いぞ……ここで余が崩れるような事になれば……主様が……)」

腕が痺れ、思うように動かない。

美空は落ち着く心配がまるでない。

このままでは、自分も新田劍丞も美空に殺されてしまう……一葉は今、窮地に立たされている。

何が起きたのか、一葉にはまるで分からないが、美空が怒って悲しんでいるのは分かった。

そして今、一葉達が生きていられるのは、美空が自分の手で劍丞を斬ろうとしているからだ。

長尾の鉄砲隊は……先端に小刀が、側面に小さな突起が付いた奇妙な銃を構える部隊は、既に劍丞達の脳天に狙いを定めている。

美空が撃てと命じれば、引き金を引けと命じれば、あっという間に皆殺しにされるだろう。

「公方様！」

「来るな！ 来てはならんっ!!」

幽が加勢に来そうになったのを見て、即座に一葉は叫び、制止する。

美空は一葉よりも強いが、所詮は一人の人間だ。

幽や綾那、鞠といった荒事担当が一葉に加勢すれば、美空を圧倒する事は可能だ。

しかし……美空を複数人で取り囲んで鬻り殺しにするような真似をしたら、劍丞隊らを取り囲み、銃を向ける兵達が何をやるだろうか。

主の『まだ撃つな』という命に背いても、主を守ろうとするだろう。

それはつまり、劍丞達の死を意味する。

「いい加減に冷静にならぬか！ 話を聞け！」

「私は冷静よ！ そいつの首をよこしなさい！」

そうすれば皆殺しは勘弁してあげるわ！ そいつだけは……そいつだけは許せない

！

銃殺なんかじゃ収まらない、この手で切り刻まないと気が済まない！」

「そうはさせん！」

一葉にとつて、劍丞は惚れた男であり、日ノ本を守る希望だ。

この国を侵食しようとする鬼を打ち払い、世に平穩をもたらす救世主だ。

それをむざむざ殺される訳にはいかない。

「貴女も貴女よ一葉っ！ 何であんなのに誑し免状を与えたあつ？」

何で犬子を寝取るような屑男を庇い立てするのっ!？」

屑はどちらかと言えば九十郎の方である。

「信じられんな、主様がそのような事をするものか」

あるいは、美空を本気で怒らせるような何かがあったのかもしれない。

だがしかし、そんなのはきつと何かの間違いか、誰かの陰謀だと一葉は思う。

一葉は信じている、心の底から信じている、新田劍丞の身の潔白を。

そして免状を楯に無体を働くような男ではないと信じていた。

「柘榴が嘘を言っていたとでも!?」

美空の心に怒りの炎が燃え上がる、さらに熱く、激しく燃え上がる。

それを見て、それを感じた一葉は……

「(このままではジリ貧か……ならば……)」

一葉は賭けに出る事にした。

どんな汚い手を使ってでも劍丞は守ると決断した。

そして……

「そうでなければ犬子とやらの股が緩かったただけであろう」

……そして一葉は、あえて親友をもっともつと怒らせた。

一葉の後ろで幽が言い方つてもんがあるでしょうよと言いたげな顔になったが、一葉は全く気づかない……いや、薄々感づきながら敢えて無視した。

「……犬子は今、泣いてるのよ」

美空は自分の心がドス黒いものに包まれていくのが分かった。

今の自分なら、かつて友と思つた一葉すらも切り殺せそうだと思つた。

「ノリノリで不貞を行つておきながら、バレると涙を流して本意じゃなかつた、愛してるのは貴方だけと叫ぶ女……良くある話であろう。

むしろ被害者は主さ……」

……瞬間、美空はブチンツ！ と切れた。

美空は九十郎が好きになつた。

だけど身を引くつもりだつた。

犬子だから身を引こうと思つた。

自分の魂を歪める程、強く強く好きだと叫べる犬子だから、敵わないと思つた。

相手が犬子でなければ、誰が身を引くものかと激昂した。

お前に犬子のなに分かると激昂した。

「殺す」

そして美空は感情の赴くままに刀をフルスイングした。

劍丞を殺す事を諦めた訳でも、忘れた訳でも無いが、それ以上に目の前の一葉を殺して、切り刻みたかつた。

ぶおんっ！ ぶおんっ！ と劍圧が周囲の空気を巻き込んで、まるで竜巻のようであつた。

だが……

「(狙い通り……太刀筋が読み易くなった……)

これなら凌げる、反撃の隙も見えた……見えたが……)」

一葉は心の中でほくそ笑んだ。

美空と一葉の実力は数年前の時点で同等だった。

ここしばらく、九十郎から神道無念流の手ほどきを受けていたため、今現在の美空は一葉より数段上の実力があつた。

怒りに怒って我を忘れてでもくれない限り、時間稼ぎすらも難しい実力差だったのだ。

「死ねっ！ 死ねえっ！ 死んでしまえっ！ 貴女に何が分かるの！

貴女に犬子の悲しみが！ 犬子の好きが分かるって言うのっ!!」

「誰にでも股を開くユルユル女の都合など知るものかっ!!」

「一葉あああああーっ!!」

美空がさらにさらに激高する。

太刀筋がさらに大振りになり、柄を握る手に力が入る。

当然、全身に無駄な力が入った分だけ疲れも早くなる。

このまま疲れるまで待てば勝てる……一葉はそう思った。

だけど……

「(……勝てば助かる訳ではないのが悩み所じやな)」

依然として、周囲は無数の兵が取り囲み、1000を超える銃口が一葉達に向けられている。

こんな状況で下手に美空に危害を加えれば、即座に八千の巢にされるだろう。

「待つてくください美空様！ おやめください！ 相手は上様ですよ！」

雫が叫ぶ。

やはり事情は今一理解できなかったが、それでも美空を止めなければと思い、叫んだ。

「そうじゃぞ美空、よもや余の顔を見忘れた訳ではあるまい」

「上様がこのような所にいるはずがないわ！ こいつは上様の名を騙る不屈き者よ！」

美空が刀で一葉を指しながら言う。

しかし、その台詞は大江戸学園では死亡フラグである。

「であえい！ であえい！ まで口にしたら100%ブチのめされてお白州行きである。」

「劍承様にいかなる咎があると言うのですか!？」

「そいつはあつ！ 犬子を泣かせたのよおつ！」

「たったそれだけの事でっ!？」

「たつた？ それだけの事？」

瞬間、美空の身体から発せられる強烈なプレッシャーが増した。雫は腰を抜かして失禁しそうになるのを寸で堪え……思った。

「(あ……拙い……また失言しちやつた……)」

美空が漆黒の殺意全開で雫につかつかと近づき、白刃をきらめかせ……

「待つてくれ美空っ！」

劍丞の叫びが聞こえ、美空がピタッと止まる。

美空は思い出した。

雫を殺すよりも、一葉を殺すより先にやらねばならない事が……殺さなければならぬ人間が一人いる事を思い出した。

「俺は……俺は確かに犬子を抱いたんだ、ついさつきまで。

信じちやもらえないと思うけど、俺は……俺は忘れていたんだ。

彼女が人妻で、絶対に手を出しちやいけないって事を」

その言葉は確かに、劍丞の中での真実だ。

だがしかし、怒りの余り冷静さを失った今の美空には通じない、届かない言い訳だ。「ふざけないで……ふざけるなあっ!! そんな言い訳をする位なら……」

そんなふざけた言い訳をする位なら！ 黙って私に殺されなさいっ！」

そして美空は、左手を天高く掲げた。

その目には殺意の光が宿っていた。

「もういいっ！　もういいわっ！　」

劍丞の首一つで納めてあげようと思つたけれどももういいっ！

信長とも盟を結んであげようと思つてたけれど願ひ下げよ！

あんなふざけた男を夫にして喜んでる奴！　頼まれたつて手なんて結べないわっ！！

「総員っ！　狙えいっ！！」

美空の泣き叫ぶかのような声と、信虎の号令が夜の闇の中に響き渡る。

兵達が一斉に銃を構え、引き金に指をあてた。

「なっ!?　や、やめてください美空様っ！　」

お願いですから短慮をなさらないでくださいっ！！

雫が咄嗟に劍丞の前に立ちはだかり、大きく手を広げる。

今兵達が銃を撃てば、雫も一緒に射殺される場所に入り込んだのだ。

「今すぐどきなさい雫、貴女も死ぬ事になるわよ」

美空は数秒、止まった。

数秒止まり、雫に逃げ出す時間を与えた。

だが……

「そう……所詮貴女もその男に誑された女か……なら望み通り一緒に死なせてあげるわ」

雫が退く様子が無い事を確かめると、美空は冷たい声でそう告げる。

「(公方様っ!)」

「(イチかバチか、御家流で防げるだけ防ぐ……幽、主も頼む)」

「(しかし、この数では……)」

「(無茶でも何でもやるしかあるまいっ!!)」

アイコンタクトで意思疎通を図り、一葉と幽が御家流を発現させるべく、同時に精神を集中させる……

一葉も幽も優れた超能力者ではあるが、いくらなんでも1000を超す銃兵隊からの一斉射を防ぎ切る事は不可能だ。

半分は守り切れない、10分の1も守り切れない、たぶん助けられるのはそれよりもっともっと少ない数だ。

だがしかし、だがそれでもと、一葉と幽が懸命に精神を集中させる。

そして美空は、高く掲げていた左手を……

「やめろ美空っ！ やめてくれっ!!」

そんな叫び声が聞こえてきて、美空の左手は途中で止まった。

美空にはその声の主が誰か一瞬で分かった。

一瞬で分かったからこそ、戸惑うのだ。

「九十……郎……？ な、なんで貴方が……？」

美空の目の前に、土下座するマツチヨがいた。

美空と劍丞の間に割って入り、手を広げて立ちはだかる雫のすぐ隣で何度も何度も土下座を繰り返す斎藤九十郎がいた。

犬子と柘榴と九十郎第76話 『歴史を変えろ』

「やめろ美空っ！ やめてくれっ!!」

そんな叫び声が聞こえてきて、美空の左手は途中で止まった。

美空にはその声の主が誰か一瞬で分かった。

一瞬で分かったからこそ、戸惑うのだ。

「九十……郎……？ な、なんで貴方が……？」

美空の目の前に、土下座するマッチョがいた。

美空と劍丞の間に割って入り、手を広げて立ちはだかる雫のすぐ隣で何度も何度も土下座を繰り返す斎藤九十郎がいた。

「頼む美空、俺はどうなっても構わない。

だから頼む、劍丞を殺さないで、劍丞だけは殺さないでくれ。頼む美空、頼むから

……」

「何言ってるのよ……何を言ってるのよおっ!!」

そいつに何をされたのか分かつているのっ!？」

美空は九十郎に掴みかかる。

無理矢理頭を上げさせられてもなお、九十郎は言葉を止めない。

「もう二度と勝手な事は言わない! 美空の言う事を何でも聞く!」

どんな事でも必ず従う! 俺に差し出せる物なら何でも差し出す!

流石に命は勘弁だが、他のものなら何でもだ!

だから頼む……頼むよ美空、劍丞だけは助けてくれ」

九十郎は美空に懇願する。

情けなく情けなく懇願する。

「九十郎……なんで……?」

そんな九十郎の姿を、劍丞は茫然と眺めている。

殴られると思った、殴られても仕方がない事をしたと思った。

だけど九十郎は劍丞を殴らなかつた。

殺されるかと思つた、実際に美空が殺しに来た。

どうすれば良いか分からなくなつた劍丞を助けたのは、一葉と九十郎だつた。

今回の騒動に全然関係が無い一葉と、今回の騒動で一番怒っている筈の九十郎だつ

た。

一葉は命懸けで美空との間に割って入り、ワザと犬子を口汚く罵り、ワザと美空を怒らせて、買わなくても良い恨みを買った。

そして九十郎は劍丞の命を守るために、美空の目の前で土下座をしていた。

「なんで……何でよっ！ 答えなさい九十郎！」

何でも言う事を聞くなら答えなさい！

何で貴方はそうまでして劍丞を助けようとするのっ!？」

「劍丞は主人公なんだっ!!」

九十郎は少しも迷わずに叫んだ。

一瞬の迷いも無く、それが彼にとつて疑いのような無い真理だとも言うかのように。

「劍丞は主人公だ！ 俺みたいな屑とは違う！」

俺と違って価値のある男で、生きていなければいけない奴なんだよっ!!」

「……また……また、それ？」

だがそれは、美空をさらにさらに苛立たせる言葉であった。

「二言目には主人公！ 主人公っ!! 主人公おっ!!」

貴方がそう言うのは侮辱だつて事分かってるのっ!？」

「侮辱……? 正当な評価だろ……」

九十郎はキョトンとした様子でそう聞き返す。

美空には分かった、九十郎は本気で、心の底から自分を屑だと思ってるのだと。

「それが侮辱だつて言ってるのよ！」

「劍丞は主人公なんだ。俺みたいな屑とは違う、主人公なんだ。」

だから駄目だ、こんなくだららない事で死んじやいけない奴なんだ」

「くだらないっ!? 犬子が犯されるのがくだらないつて言うの!?!」

「俺みたいな屑が前田利家と結ばれるのがそもそも間違いだつたんだよっ!!」

そんな九十郎の叫びを聞いた瞬間、美空は全身から力が抜けていくのを感じた。

まるで魂が抜けて、全身の体温が凍り、心臓すらも止まったかのように感じた。

「ふざけないでっ!!」

美空はついに手にした刀を九十郎の喉元に突き付けた。

「ふざけないで! ふざけないでよっ!!」

貴方が劍丞を主人公つて言う度に私達がどんな思いをするか分かってるの!?!」

「知らねえよそんな事! 事実を言つて何が悪い!」

「私は貴方が好きなのよっ!!」

美空は叫んだ。

その場にいる全員の耳にしつかりはつきり聞こえるような声量で叫んだ。

そのあまりにも唐突な愛の告白により、辺りがシーンと静まり返った。

「……何の冗談だ?」

しかし九十郎には届かない。

新田劍丞のようなイケメンの主人公ならばともかく、自分のような屑に上杉謙信のよ
うな歴史上の偉人が惚れる筈が無いと思ひ込んでいた。

「これは……もしかして……」

そんな九十郎の言葉と態度を見て、雫は思った、

もしかしてさつき思いついた突拍子の無い仮説は正しいのではないかと。

もしかしたら九十郎は、自分達を本気で歴史上の人物だと思っているのではと思っ
た。

「冗談じゃないわ! 私は貴方が好きよ! 上杉謙信は斎藤九十郎の事が好きなの!

惚れてしまつて! 好きで好きで仕方が無くてえっ!!

今すぐ貴方に抱きしめられたいと思つてる! 好きだと言われたい!

抱かれたい! 貴方との子を成したい!

そして何より、貴方とキスがしたいのよっ!!」

「やめろ……やめろ美空……惨めになるだろ……」

「何が惨めよ!」

「やめろと言っているだろう! 変な同情しやがって!」

「同情じゃない! 私の九十郎に対する好きは、断じて断じて同情なんかじゃないわ!」

「お前だっけどうせ! 劍丞惹かれるんだろ!」

どうせお前だっけ劍丞が好きになって! 俺みたいな屑は捨てられるんだ!」

「そんな事しないわ! 絶対にしない!」

「長谷河も! 遠山もそうだったんだ!」

「誰よそれ!? 知ったこっちゃないわそんな話!」

「犬子だっけそうだっただろうっ!!」

再び周囲がシーンと静まり返る。惚れた女が他の男に抱かれる光景を二度も目撃した九十郎にとって、今叫んだ事は絶対の真理であった。

だがしかし、そんな九十郎の真理は、ただの思い込みに過ぎないと美空は思った。

だから……

「私は断じて新田劍丞に惚れたりなんかしないわ!」

美空は高らかに宣言する。

だがしかし、その発言は別世界の美空に深々と突き刺さるブーメランである。

「あんな顔が良いだけの優男なんか惚れるなんて絶対にありえない！」

美空は高らかに宣言する。

だがしかし、その発言は劍丞の嫁になり、所構わずイチャつき続けている別世界の美空に深々と突き刺さるブーメランである。

「信じなさい九十郎！ 私は決して貴方以外の男には靡かない！」

犬子もそう、柘榴だってそうよ！ 皆貴方が好きで、貴方が良いって思っているの！」
美空は高らかに宣言する。

だがしかし、新田劍丞が戦国時代にやってくる世界では、ほぼ確実に犬子も柘榴も美空も劍丞に惚れて、劍丞の嫁になっている。

今度のブーメランは、犬子と柘榴と美空に同時に突き刺さる特大ブーメランであった。

ブーメラン投げ大会であろうか。

「あたいだってそうであつ!!」

直後、騒ぎを聞きつけて集まって来ていた野次馬共をかき分けながら、霧雨魔理沙っぽい三角帽を被った少女が駆け寄ってきた。

「あたいだってそうだ！ あたいだって九十郎に惚れたんだ！」

あの時……もう駄目だつて思ったあの瞬間に、助けに来てくれた九十郎が好きになつたんだ！」

そして自称霧雨魔理沙、本名山県昌景、通称粉雪は大きな声でそう叫びだした。

この日集まつた将兵や野次馬達の中には、武田の勇将山県昌景の顔を知っている者もおり、群衆にどよめきが起きる。

「あたいが惚れたのは九十郎だ！ 新田劍丞じゃねえ！ 新田劍丞じゃねえんだぜつ！！」

衆人環視の中で、粉雪は高らかにそう宣言した。

彼女は九十郎のトラウマについて理解している訳ではない。

今何が起きているのか、何故美空が怒っているのかも分かつていない。

だがしかし、美空が愛を叫んだ瞬間、自分も言わなければ……叫ばなければならぬような気がしたのだ。

「九十郎」

次に口を開いたのは、第七期兵団を率いる武田の元頭領、武田信虎であった。

美空や粉雪程大きな声ではなかったが、ハッキリと通る声であった。

「お前は……私の母になつてくれるかもしれない男だ。

だから守るさ、命に代えても、この身に代えても」

信虎が不機嫌そうにそっぽを向きながらそう告げる。

信虎は今、耳まで真っ赤になっていた。

「わ……私は大っ嫌いですよっ!!」

次に叫び声を上げたのは、貞子であった。

「そんな泣きそうな顔をして! 情けない顔をして!

全然楽しくなさそうな九十郎殿なんて大っ嫌いですよっ!!

視界に入れるのも嫌って位、大っ嫌いですよっ!!」

そう貞子は叫んだ。

それは先の3人の叫びと異なり、九十郎が嫌いだと言う叫びだ。

そしてそれは、貞子の間違いなく本心からの言葉だった。

だが……

「だから……だから戻って来てくださいよっ! 優しいけど意地悪で!

大好きなのにヘタレで! 筋肉ばっかりなのに手先は器用で!

いつもゲラゲラ笑いながら剣を振って!

一緒におビール様を飲むととっても楽しい! 一緒に剣を振っていると凄く面白い!

気がついたら目で追ってて、気がついたら私の胸をぽかぽかとさせる、

私の大好きな……大好きな九十郎殿に戻ってくださいよっ!!」

その叫びもまた、貞子の本心からの言葉である。

そして貞子の叫びが終わり、場に静寂が戻った時……松平元康・通称葵が何かを言うとした。

葵もまた、九十郎に対する想いを叫ぼうとした。

だが……

「声が……出ない……!?」

息が詰まった。

唇が動かさず、喉が震えなかった。

まるで金縛りにあったかのように全身が硬直していた。

「(私では……熱気が足りない……?)」

葵はそう分析した。

葵はかつて、確かに九十郎を欲した。

九十郎が持つ未来の知識を求めて、祖国の独立を取り戻すため、故郷に残した家臣達を守る為という不純な動機ではあったが、それでも葵は九十郎を求めた。

だがしかし、美空の、粉雪の、信虎の、そして貞子の叫びが、そんな不純な動機を持つ葵をはねのけるような感じがした。

『お前に舞台上に上がる資格は無い』

言外にそう告げられたような感じがしたのだ。

「私……私……」

それでも……と、葵は思った。

不純な動機からではあったが、かつて葵は確かに九十郎を求めていた。かつて葵は確かに九十郎を欲していた。

その想いは決して嘘では無かった。

だが……

「私は……諦めませんからねっ!!」

葵が意を決して想いを告げようとした瞬間、別の場所から別の声がした。

「一度や二度失敗した位じゃ諦めませんからねっ!!」

その叫びの主は葵ではなく、雫であった。

犬子を除けば一番九十郎との付き合いが長い葵ではなく、一番九十郎との付き合いが短い雫であった。

「え、やだよなんて酷い事を言われましたけど!」

頭にきてひっぴたいちやいましたけど!

それでもっ!! それでもまだ諦めちやいけませんからねっ!!」

叫びながら雫は、自分の頭に血が上っていると思つた。

叫びながら雫は、いつもの失言癖が出ているような気がしていた。ただ雫は、口を閉じる気にはなれなかった。

「私の事が好きだと言って言っておきなから酷い言葉でフラれて！」

酷い人だと思っていました！ どうしてこんな目につて思いました！

でも……」

雫は思った、今すぐ言葉にしなければ伝わらないと。

今すぐ想いを叫ばなければ、ここで終わってしまうと思った。

美空、粉雪、信虎、そして貞子と同じ舞台には決して立てなくなってしまうと思った。

もう二度と九十郎の隣に立てなくなってしまうと思った。

だから……

「でも、それでも好きです！ それでも諦められません！」

私……私は……一回好きになった人を、そう簡単には諦められませんからねえっ!!」

だから雫は叫んだ。

ありつただけの想いと熱量を籠めて、お腹に力を籠めながら叫んだ。

自分は諦めが悪いのだと高らかに宣言した。

「(ああ、言っちゃった……ああ、こんなに大きな声で叫んじやった……でも……)」

叫んだ瞬間、雫は自分の失言癖が出たのだと理解した。

普通に考えたら、冷静になって考えれば、よくも騙したとか、よくも自分の純情を弄んだと怒って、恨んでも良いと思った。

普通はそうだと……だが……

「まあ、なるようになりませうか……」

何故か雫は後悔の気持ちよりも、スカっとした気分の方を強く感じていた。

何も言わずに、何も言えずに終わるより、ずっと良い事をしたように思えた。

「あ……」

葵は言葉を失った。

雫の叫びを聞き、想いを聞き、それに比べて自分は……と、思ってしまった。

もう自分には何も言えないと思ってしまった。

今の自分が何を言っても、虚しいだけだと思ってしまった。

「ほら見なさい、皆貴方が好きなのよ」

「私は大嫌いですからねっ！」

今の暗あくくて、情けなあく顔をしてる九十郎殿なんて！

「お、俺は……だが、俺は……」

九十郎には目の前の状況が理解できなかった。

前の生を含めて生まれてこの方非モテだったこの男にとって、普通に美人である美空

達に好きだと言われるのは想定外の事であった。

それに美空は上杉謙信で、粉雪は山県昌景で、信虎は信玄ママンだ。

そして雫に至っては黒田官兵衛だ。

誰そいつレベルの無名人物（九十郎視点）の柘榴や貞子とは違う、本物の歴史上の偉人、価値ある女なのだ。

自分のような屑に惚れるなんてあつてはならない人物達なのだ。

故に九十郎には、目の前の光景が信じられなかつた。

まるで脳が理解するのを拒絶しているかのようであつた。

「……おい、私にいつまでこんなバカ騒ぎの見物をさせるつもりだ？」

そして混乱する九十郎の前に次に次に現れたのは、明らかに苛立っている様子的美女であつた。

その美女は美空と九十郎をギロツと睨みつけており、とりあえず九十郎に好意を抱いていない事だけは誰の目にも明らかであつた。

「……美空、誰だこいつ？」

「北条綱成殿よ。さつき北条からの使者として来てたけど……」

「北条綱成……知らんなあ……」

九十郎の日本史知識がガバガバなだけである。

「えっと、まだ帰ってなかったの貴女？」

「貴公が話の途中でどこかに走り去ったただけであろうがっ!!」

「あれ？ そうだったかしら？」

「まさかとは思うが、何の話をしていたかまで忘れた訳ではなからうな」

「大丈夫大丈夫、ちゃんと覚えてるわ。」

ドーナツに穴を開けると開けないのとどっちが好きかって話よね。

私は穴が無い方が……」

「誰がわざわざ越後にまで来て西洋菓子の話をするか!？」

なお、ドーナツの話は臙が来る直前まで松葉（穴あり派）としていた馬鹿話である。

「……何の話をしていたっけ？」

美空がぼそっと呟いたのを、臙はしっかりと聞いていた。

「跡継ぎの話だっ!」

そう指摘され、美空はようやく臙との話を思い出す。

突然飛び込んできた柘榴から、劍丞に犬子が強姦されたと聞いた瞬間、頭が沸騰して記憶が飛んでいたのだ。

「ああ、とつとと名目を跡継ぎだと宣言しろって話？」

そうじゃないと北条は長尾を切るって？」

「……否定はせん」

「全く、この面倒臭い時に、また面倒臭い話を持ち込んで……」

四斤山砲を小田原に並べてやろうかしら……」

美空は一瞬、自分の苛立ちをぶつけるために小田原城に攻め込んでやろうかと考えた。

実際の所、この時代から考えればオーバースペック極まりない四斤山砲の力を使えば、この時代では最高峰の堅城である小田原城すらも陥落可能と思つた。

だがそれをすれば、武田に間違い無く情報が洩れる。

長尾はオーパーツのような超兵器を多数用意している事を。

そして武田の情報網が全力を出した場合、四斤山砲やドライゼ銃、ハーバー。ボツシユ法の秘密を守り切る事はできない。

「……そうだ」

どうしたものかと美空が考えていると、突如として妙案が浮かんだ。

北条からの無茶ぶりと、九十郎の自信の無さ、そして新田劍丞を殴りたいという自分の欲求も同時に満たせる妙案であつた。

「九十郎、貴方歴史を変えなさい」

美空はさも名案だとしても言いたげな顔でそう告げる。

「……うん？」

しかし、何をどうしろというのか全く理解できない九十郎は、ただ首を傾げるばかりである。

「何呆けてるのよ、今の話の流れで分からない？」

「いや、全然」

「劍丞を殺さないなら、何でも言う事を聞くって言ったわよね？」

「ああ、言ったが」

「北条の使者殿、要はとつと跡継ぎを決めろと、じゃないと同盟を白紙にするぞ。」

「そっちの用件はそうよね？」

「……まあな」

「なら決めるわ、今すぐに。丁度良い機会ですもの」

「ほう……」

「空と名月に、長尾景虎の跡継ぎの座を賭けて競わせます。」

方法はまだ考えちゃいないけど、2〜3日中には決めるわ。

そして……」

美空は劍丞の方をギロリと睨みつける。

「名月が勝った時は、長尾美空景虎は新田劍丞の妻になるわ。」

そして織田とも盟を結ぶ。五分と五分なんてしみつたれた事は言わない。

こつちが下でも構わない」

「……え？」

「……は？」

「……何だつて？」

劍丞と臈、そして九十郎の顔が同時に変わる。

何を言っているんだこいつはと言いたげ表情になる。

「いや、俺は人妻には手を出さないように……」

「人妻じゃないわ、私はまだ未婚よ」

「いや、でも……」

「鬼と戦う気がある者なら誰でも良いのでしょうか？　なら四の五の言わずに受けなさい」

「できる訳が無いだろう！」

「劍丞、貴方に拒否権は無い。　誑し免状はそういうものよ」

「うっ……」

美空の言う通り、誑し免状はそういう内容だ。

鬼と戦う者であれば誰であろうと新田劍丞は受け入れる。

誑し免状の本質はそこで、久遠が一番気にしていた部分もそこなのだ。

そこに新田劍丞の意思は全く無い。

「さあ、九十郎……さつき貴方は言ったわよね？ 何でも言う事を聞くなって」

美空はうつすらと笑みを浮かべながら九十郎に尋ねた。

「お……俺に何をさせる気だ……？」

九十郎は冷や汗が止まらなかった。

空と名月が跡継ぎの座を巡って戦う、名月が勝てば美空が劍丞の嫁になる……

九十郎は名月が美空を継ぐのが歴史の正しい流れだと思っている。

そして美空のような価値のある女は、新田劍丞のような価値のある男と結ばれるべき

だと思っている。

つまりこの戦い、名月が勝つ方が間違い無く良いのだ、少なくとも九十郎の価値観で

は。

だが……

「名月と戦って、劍丞と戦って、勝ちなさい。そして歴史を変えるのよ」

美空はそんな九十郎の考えを知りながら、名月が越後を継げば、戦国時代が終わるま

で上杉が残ると聞いていながら、あえて美空はそれを阻止しろと告げた。

歴史なんて変えてしまえと告げたのだ。

なお、美空も九十郎も勘違いをしているが、本来美空の跡を継いだのは上杉景勝……空の方である。

「お前……俺に名月と……いや、俺に劍丞と戦えつて言うのか……？」

美空は賭けた。

九十郎の可能性に賭けた。

惚れた男に賭けた。

頭を空つぽにして突つ走つた。

斎藤九十郎は新田劍丞よりも素晴らしい男だと信じた。

斎藤九十郎こそ、自分の夫になるにふさわしい男だと信じた。

だからこそ……

「劍丞に勝つて、歴史を変えなさい、九十郎」

だからこそ美空は、九十郎にそんな無茶ぶりをしたのだ。

「あれ？ 名月に勝つて歴史を変えろつて……この間助けに行つた空つて娘が景勝で、会つた事無いけど名月つて娘が景虎だつたような……」

一方、劍丞は名月に勝つたらむしろ本来の歴史……空（景勝）が名月（景虎）を倒して後継者になる本来の歴史に近くなるのでは……と、思った。

しかし、そんな疑問を言い出せそうな雰囲気ではないので黙つた。

真相は九十郎が日本史うろ覚えだったため、名月（景虎）が空（景勝）が後継者争いを行い、名月（景虎）が勝って上杉を継いだと思っただけである。

当然、九十郎以外に未来の知識を得る手段が無い美空も……と、いう事だ。

いずれにせよ、九十郎は間違っただけで覚えられた上、この騒動に全然関係無いのにとばかりを受けた空と名月に土下座するべきである。

……

……

……

「そんな大荷物を抱えて、どこに行く気ですか、犬子？」

柘榴達の我が家は逆の方向ですよ」

「ぞ、柘榴……」

九十郎が歴史を変えろと無茶ぶりをされていた頃、犬子と柘榴は人気の無い小道で対峙していた。

犬子と柘榴と九十郎第79話『ヘイワナセカイ』

ある雪の降る晩の事……

「……女子寮の門限はとつくの昔に過ぎてると思ふんだけどな」

大江戸学園生徒会執行部の仕事を手伝っていたために、帰宅が日付変更ギリギリになつてしまつた斎藤九十郎を待つていたのは、戸締りをしていた筈なのに何故か開きつぱなしの玄関ドア、楽しみに取つておいたのに勝手に食われているプリン、押入れの奥にしまつてあつたのに引つ張り出されている忍者戦隊カクレンジャーのDVD、そして1つしかない布団を占拠する女の子の姿であつた。

「何やつてるんだこんな時間に、奉行所の連中に叱られても知らんぞ俺は」

「奉行所が怖いんじや夜更かしはできないよ」

「さよけ」

九十郎が布団を占拠する女の子をとりあえず放置し、制服を脱いで寝巻に着替え始める。

少女の……精神年齢はさておき、肉体年齢上は少女である人物を前でおもむろに着替え始めた九十郎であるが、この2人は互いの全裸を何度も何度も見た仲であるため、今

更遠慮とか羞恥心とかは生じない。

少女はすぐ近くで着替えるマツチヨを無視して、子泣き爺と死闘を繰り広げる忍者戦隊カクレンジャーの姿を凝視していた。

「うっかり歴史に名を残すと大変だにやー」

九十郎の着替えが終わった頃、少女はそんな事を呟いた。

「カクレンジャーの話か？」

「それもあるね。あの佐助がねえ、あんなカッコ可愛い男の子になっちゃってさ。

本人が聞いたらビックリするよきつと。

才蔵と清海入道もコレを見たらどんな顔をするんだか」

「……で、このプリン食ったのはお前か？」

「ご馳走様でした」

「ご馳走様じゃねえよ勝手に食いやがって！」

「まあまあ、その分今夜はサービスするからさ。」

パイズリでもフェラチオでも、それともアナルセオクスとか？」

「プリン一個で股を開くなドスケベ女」

「しかし一方、ドスケベにしたのは君だよ」

そう言う少女は、服の胸ポケットから新品のコンドームを取り出して、ぴらぴらと

振って見せる。

部屋の隅に転がっているごみ袋の中には、キュツと結ばれた使用済みコンドームが何個も詰められている。

それらは全て彼女が九十郎のモノにハメて、自分のナカに挿れて、九十郎の孕ませ汁を受け止めた使用済みコンドームである。

「それとも今晚はナマでスルかい？ 私は構わないよ」

「学生だろ、今の俺達は。ガキなんて抱えられるかよ」

「どうにでもするさ、退学でもなんでもして」

「女にそんな真似させられるか、恰好悪いだろ」

「……いけずさんめ」

「いけずで結構だ」

「戦国時代生まれとしてはさ、早く産みたいし、沢山産みたいんだよ。」

「こうも毎日平和じゃ、それくらいしかヤル事が無いしね」

「卒業まで我慢しろよ。あと一年ちよつとだろ」

「いつそ乱れる天下！ 崩れる平和！」

「ははは、洒落にならねえ事を言ってるじゃねえよ」

「もしも今、天下泰平か再び乱世かを賭けた戦いが起きたら、

喜んで乱世側に行くだろうね、そして真田丸とか作っちゃうかも」

「マジで洒落にならねえからやめろよ」

「孕ませたくないの？ ナマで私のお〇んこを掻き分けて、

一番奥にビューツ！ ビューツ！ って中出ししてさ。

昔は何度も生でシたのに、こっちに來てからは全部避妊で」

何度もつて言える程してねえよとか、その他諸々を言いかけて……やめた。

「歴史上の偉人をさ、無理矢理組み伏せて、押しさえつけて、

ワレメに固あ〜いお〇んぼを突き立てて、がつつんがつつんと腰を振って、

お前は俺の女だ〜つて言いながらゲラゲラ笑うの、興味無い？」

「そういうのは性分じゃねえよ、俺は劍丞とは違うんだ」

九十郎がバツサリと切り捨てる。

九十郎の言い訳は、少女が予想した通りにものであった。

予想した通りのものであったから……少女は深くため息をついた。

「うっかり歴史に名を残すと大変だにや〜」

ため息をつきながら、少女はそう呟いた。

「カクレンジャーか？」

「それもああるよ、それも……」

テレビ画面には、カクレンジャーにブチのめされた子泣き爺が巨大化する光景が写さ
れている。

戦国時代を生きる者にとっては意味不明な光景であろうが、スーパー戦隊シリーズで
は毎年……もとい、毎週恒例の光景である。

「君は私の事、どう思ってるのかな？」

少女が呟く。

「幸村ママン」

九十郎は少しも迷わずに即答した。

「セフレとは思ってくれないの？」

「思えるかつ!!」

「いつ無責任種付けセックスしても全く問題無い都合の良いおOんこだとは？」

「もつと思えるかつ!!」

そんな九十郎の悲鳴のようなツツコミを聞き……少女はふうつと悲しそうに視線を
落とす。

「……だから君は九十郎なんだよ」

「どういう意味だこらあつ!! 犯すぞてめえつ!!」

「え? 良いよ」

「デコピンするぞてめえっ!!」

「あ、ヘタレた」

九十郎がぶつくさと文句を言いながら、途中のコンビニ（驚くべき事に24時間営業）で買ってきた弁当をちやぶ台に広げる。

店舗内レンジで温めてからそれなりの距離を歩いたために、暖かかくもなく、冷たくもなく、なんとも食欲をそがれる温度になっている。

「やっぱり、手料理ができた方が良いのかな?」

ちくわの天ぷらをひよいと摘まみ食いしながら、少女がそう尋ねる。

「あん?」

「君の好みの話、手料理はできた方が好みかい?」

「さてね、俺の周りにいる女はどいつもこいつも大飯喰らいの料理下手だったからな。

その辺の感覚は良くわからん」

「でも、こんなに美味しい物を毎日食べているのだから、

ちよつと練習した位じゃどうしようもないと思うけど」

「幸村マママンに飯炊きなんてやらせられねーよ」

「そりゃあ昔はそれなり大変だったさ、昔は。

でもこの時代では火を起こすのも、火加減の調整もスイッチ一つなんだよ。

本を読みながら料理ができるなんて、私にとっては衝撃的だったさ」
「それでもな、ああ、それでもだ」

九十郎がそう言うと、少女は頬をぷくーつと膨らませた。

「そうそれ、それだよ。その厄介な性分こそが問題なのさ」

「俺の何が問題だって」

「私を幸村ママンと呼ぶその神経さ。私はまだ誰の児も産んでいないんだよ」

「だがお前は真正正銘、真田幸村の母親だろうに」

「そうなる可能性があった、ただの一二三とは思えないのかい？」

「思えないね、全く」

少女は九十郎のそんな言葉を聞くと、またもや頬をぷくーつと膨らませる。

「……だから気に入った」

そしてある時にかつと笑い、そう告げるのだ。

「岸部露伴は動かない、気に入ってるのか？」

「曹操殿や御屋形様が気に入るだけの事はあるね、あれは良い物だ」

「あの壺をキシリア様に届けてくれってか？」

「ガンダムかい？ あれも見ただけど、私はあまりしつくりこなかったねえ」

「ははは、吉音が聞いたら泣くな、その台詞」

「ビームライフルとかバズーカで戦争するって感覚が今一つなんだろうね、きっと」
「かも……………」

少女と九十郎がしみじみと昔を思い出す。

槍と弓矢と鉄砲で人と人が殺し合いを続ける時代を……後半部分は鬼と戦ったり、北欧神話の神々と戦ったりしたが。

「早いものだね、あの戦いからもう1ヶ月だよ」

「エンド・オブ・リバーズの事を言ってるなら、ありや戦いなんてもんじゃないだろう」
「エンド・オブ・リバーズ……それはオデュッセアという名の架空の巨大ロボの武装の一つ。」

九十郎はあの恐るべきオーデインとの戦いの事を、いつもそう呼んでいた。

その理由は……今はまだ語るべきでは無いだろう。

「あんな戦いは古今例が無いという所は同意するよ」

「あつてたまるかあんなもん」

「私達は勝った、英雄の魂を兵器へと作り替える企みは打ち砕かれて、
こうして欠伸が出るくらい平和な大江戸学園で過ごせるのだから。

まあ、世界の平和を願うのも、世界の平穏を祈るのも結構だけど、

そのために他人の魂をアテにするのは迷惑千万って話だね」

「平和……大江戸学園が平和かなあ……」

なお、大江戸学園で悪漢に襲われる確率は150%、一回襲われてまた襲われる確率が50%という意味である。

「あの時代に比べれば平和さ、とても……夢みたいな話だよ。」

鳥肌が立つて悪寒がして、反吐が出る位に平和だよ。

こんな平和過ぎる時代で、

私みたいな人殺ししかできない女がどうやって生きれば良いのかまるで分からない
……

その位平和だよ」

「そうだな、確かに夢みたいな話だ。」

あの幸村ママンと机を並べて一緒にお勉強する日が来るなんて思いもしなかった」

「御屋形様とはずっと昔から一緒にお勉強をしていたのだろうか？」

「昔は光璃が武田信玄だなんて思ってたんだよ。だからノーカンだ、ノーカン」

「時々……時々思うよ……もしかして本当に夢なんじゃないかって……」

本当は全部夢で、何かの間違いで、本当は今でも乱世が続いてるんじゃないかって。

乱世が続いてくれているんじゃないかって」

少女が少し俯きながらそう呟く。

その瞬間、九十郎は何故か背筋がゾクリとした。

「お、おいやめてくれよ。今までの俺達の苦勞を台無しにするような話はよ」

「ああ、ごめんごめん、流石に冗談だよ、冗談。

でも……でも何か……ありえなくってさ……

こんなに幸せで、こんなに戦争とは無縁の世界で生きるなんて。

ありえないから、不安で恐ろしいんだよ」

「ああ……ああ、そうだな……夢みたいだよな……」

九十郎は何故かそんな少女の言葉を否定できなかつた。

馬鹿みたいな話だと笑い飛ばせれば良かった。

だけど少女が言う通り、戦国時代の英雄、後漢末期の英雄達と共に戦い、オーデインをブチのめした挙句、幸村ママンとあの大江戸学園に通う……確かに荒唐無稽な話であつた。

オーデインの魔法で夢を見せられているのではと。

オーデインの魔法で幸せな夢を見せられ、本物の戦国時代の英雄達は魂を収奪され、今まさに神造兵器エインヘルヤルへと改造されようとしているのでは……そんな事を本気で考えたくなくなるくらい、荒唐無稽な夢のような話であつた。

何しろオーデインは世界最高のルーン魔術の使い手なのだ。

その気になれば現実と区別がつかないような夢を見せる事ぐらい、簡単にできそう
だ。

「ねえ……シよつか？ お腹も膨れた所でさ」

まるで胸をよぎった不吉な想像から目を背けるかのように、少女は艶めかしく身をよ
じりながら擦り寄ってきた。

気がつけば九十郎が買ってきた弁当が綺麗に無くなっている。

「他人の夕飯半分以上強奪すりゃ腹も膨れるだろうよ」

「半分とは失礼な、3分の1くらいさ」

「ちくわ天はお前が食っただろ」

「そうだねえ」

「白身魚のフライもお前だ」

「うんうん」

「ミニコロツケ」

「実に美味だったね」

「焼きそば」

「あれを最初に作った人は天才だと思う」

「きんぴらごぼう」

「ごちそうさまでした」

「どう考えても半分以上食ってるじゃねえかてめえっ!!」

「君はもう少し物事の本質を見るべきだと思っよ」

「ほう？ そのころは？」

「海苔弁当と呼ぶからには、一番の要は海苔だろう？」

「海苔と白米しか食ってねえんだよこっちはっ!!」

九十郎は激おこぶんぶん丸状態である。

たかが海苔弁如きで、小さい男である。

「ヘイ提督！ 紅茶が飲みたいネー！」

「金剛の声真似をしたって淹れんぞ今日は」

「御屋形様はこう言えば淹れてくれるって言っていたけれど」

「時と場合によるんだよ、今日は疲れてるんだ。」

エンド・オブ・リバースの後片づけはまだ全然終わってねえし、

当分は終わる気配もねえんだよ」

「まあまあ、良いじゃないか人助けだと思って」

「正直俺はブチ切れても良いと思うんだがな」

「だってねえ、私は今朝からずうっとこの部屋に籠ってDVDを見ていたのだから。」

そりやあ冷蔵庫のプリンに手が伸びるし、

目の前に美味しそうなお弁当があつたら箸を伸ばす。

それに紅茶の一杯も貰いたくなるよ」

「しれつと授業フケてんじゃねえよ!？」

九十郎が唾を飛ばしながら怒鳴りつける。

しかし、この男もこの男で無断欠席常習犯である。

常に真ん中より上の成績を維持しているので文句を言われた事は無いが。

しかし、怒り露にするマッチョを無視して、少女は男のズボンに手を這わせ、舌を這わせる。

唾液のシミがアソコにできる。

ただそれだけの事なのに、九十郎のアレは臨戦態勢へと移行しつつあった。

「じゃあさ……下のお口に……馳走してもらおうかな」

夕飯をかつさらわれたというのに、相手はあの真田昌幸……あの有名な真田幸村の母親で、本人もチート婆の一人として歴史に名を残した人物と知っているのに、なんやかんやで勃起してしまう自分の性欲にやや呆れてしまう。

思えばこの性欲さえなければ、自分は前田利家を抱かずに、その後の面倒臭い出来事にも遭わずに済んだだろうと思う。

だが……

「……避妊はするぞ、いつものように」

「子供がデキたら、鶴姫と名付けようかな」

「他人の話聞いてたか」

「まあまあ、ゴムを着けてもピルを飲んでも、絶対確実という訳でもないのだろう。

軍師という人種はね、絶対確実であつたとしても『もしも』を考えてしまう人種なのさ。

そう例えば、もしも真田昌幸さんが避妊戦士コンドムに穴を空けていたらとか」

「マジでやめろよてめえ！ シヤレにならんからなっ!! 退学モノだからなっ!!」

「大丈夫だよ、証拠は残さないから」

「さつき自白しただろ」

「ここは戦国時代じゃないんだよ。自白だけじゃ有罪にできないって、

日本国憲法38条3項にも、刑事訴訟法319条1項にも書いてあるじゃないか。

本当に吐き気がするくらいお花畑な法律だよねコレ」

「くそ、無駄に理論武装しやがって……」

鶴姫以外にしようぜ、DQNネームは就活に不利だつて聞かぜ」

「じゃあ、良い名前を考えてほしいな」

「幸村じゃあ駄目なのか？」

「幸村だけは嫌かな。」

他の名前ならどんなDQNネームでも構わないけど、幸村だけは絶対に」

「なんでまた？」

「だって、うっかり歴史に名前を残したりしたら、可哀そうじゃないか。

それに私自身も自信が無いよ、この娘を使って世界を再び乱世に……

とか考えてしまいそうだ」

「心配し過ぎのような気がするがな」

「君は幸村なんて名前の子供、素直に愛せるのかい？」

「それは……」

『愛せる』と、九十郎は言おうとした。

言おうとしたが、喉まで出かかったが、言えなかった。

前田利家だけでもヒーヒー言っている自分が、前田利家よりも知名度が高く、前田利家よりも色々な意味でやらかしている真田幸村を、素直に我が子として愛せるような気がしなかった。

「やっぱり避妊はしようぜ、とりあえず今は」

今の九十郎には、それだけ告げるのが精一杯だった。

「はいはい、着けてあげるよ、いつものように。」

さつきはああ言ったけど、穴は空けてないからさ」

少女がスカートのポケットから戦国時代には存在しない薄いゴム製の避妊具を取り出した。

これを九十郎のモノに被せるのは今日で10回目だ。

最初は戸惑って、手こずっていた少女であったが、今では全く迷い無く、淀み無くアレを舐めてじゃぶつて勃起させ、ゴムを被せる。

しっかりと被せられているのを確認すると、九十郎は少女を畳の上に押し倒した。

……押し倒してから、忍者戦隊カクレンジャーのDVDを再生しているビデオデッキの電源を切った。

「(そういえば俺……何でこいつとこんな仲になったんだっけ……?)」

そんな事を考えながら、九十郎は少女に突き挿れた。

犬子と柘榴と九十郎第80話『レイズ』

「犬子、もう大丈夫ですか？」

長い夜が明け、東の空が白み始めた頃、柘榴は犬子にそつと尋ねた。

「全然、大丈夫じゃないよ……大丈夫じゃないけど、

一晩中泣いたらちよつとは落ち着いたよ。ありがとう、柘榴」

目を覚ましてから犬子は泣いた。

「ごめんなさい、ごめんなさいと何度も何度も懺悔の言葉を呟きながら、ぼろぼろと涙を零し続けた。

自分の心の中にある九十郎が好きだという気持ち信じられなくなった。

九十郎の事を忘れて剣丞に抱かれただけでもシヨックだというのに、蘭丸の催眠能力にはまるで抵抗できず、あつという間に発情して柘榴の足を引っ張った……その事が犬子の心を苛んでいた。

「ごめんね柘榴、本当にごめんなさい。何度も何度も迷惑かけてるよね。

犬子と九十郎が越後に来てから、本当に迷惑しかかけてないよね」

「気にしなくても良いですよ。家族っすから。」

それに犬子には色々助けられてるっす、お互い様っすよ」

そして夜が明けるまでずっと泣き続けている犬子に、柘榴は何も言わずに胸を貸し続けた。

どんな情けない泣き言も黙って聞き続けた。

犬子にとって何よりも有難かった。

有難くて、それに比べて自分が情けなくて涙が漏れてきたが、それすらも柘榴は受け止めた。

「もう、出ていくなんて言ったら嫌っすよ」

「もう言わないよ……ううん、言えないよ。」

犬子のためにここまでしてくれる人を置いてどっかに行くなんて、絶対にできないよ」

それを聞くと柘榴は感極まって、ちよつと目を潤ませながら犬子をぎゅうつと抱きしめた。

「ごめんね……ごめんなさい、柘榴……」

一晩中泣いたというのに、涙が枯れる程に泣き尽したというのに、犬子は目尻に熱いものが溜まっていくのが分かった。

自分が情けなくて、そんな自分を家族と呼んでくれる事が有難くて、頭がどうにかな

りそうだった。

「謝るんじゃねーつすよ、もう家族なんつすから」

「うん、そうだね。 そうだったね」

「絶対に忘れるんじゃねーつすよ、犬子」

「うん、絶対に忘れないよ。 もう二度と……絶対に……」

それでも……と、犬子は思う、思ってしまう。

あれだけ好きだった九十郎を、一時とはいえ忘れてしまった自分なのだから……と。

そして犬子がどんな事を考えているのか、柘榴には分かった。

「昨日出た鬼に何かされた……そう考えるのが自然つすよね？」

犬子が九十郎の事を忘れるなんて、何度考えてもありえねーつすから」

一度体験したからこそ、柘榴には分かる。

蘭丸の精神操作は気合や根性で耐えられるようなものじゃないと。

そしてたぶん、襲われたという記憶を失わせる事もできるだろうと。

「(柘榴の家族を泣かせた事、必ず後悔させてやるつすよ)」

柘榴はそう決意した。

「(それと……剣丞は冤罪だったかもつすね、後で謝つとくつすか)」

それと同時に、理不尽に怒りを向けてしまった剣丞に対して、少し申し訳なく思っ

いた。

柘榴がそんな事を考えていると……

「ふっざけんなあああああーっ!!」

渦中の人物……九十郎の叫び声が2人の元に届いた。

「行くっすか、柘榴達の愛する旦那様の所に」

柘榴はふつと笑ってそう言った。

美空か九十郎が何か騒動を起こして、それに翻弄されるのは柘榴にとつての日常そのものだ。

柘榴はそんな下らない事が何よりも愛しく思っていた。

「そうだね。犬子が泣いてる間に、色々あったみたいだし」

「昨日の時点では、舐めた真似した劍丞をとちめるんだらうって、

御大将カンカンに怒ってたっすけど……あの後どうなったんっすかね？」

「……なんでだろ、何か嫌な予感がするよ」

「奇遇っすね犬子、柘榴もっす」

そして2人が声のした方へと駆けていくと……そこでは怒りや混乱、驚愕、何とも言い難い複雑な表情をした九十郎が美空に掴みかかっていた。

「ちよつと!! 九十郎何やったの!!」

「御大将、今度は何やらかしたつすか!？」

犬子と柘榴が止めに入る。

犬子は九十郎が原因と思ひ、柘榴は美空が原因だと思ふ辺りに2人の信賴の程が現れてゐる。

九十郎はこの時代における常識が無いし、美空は美空で時々頭を空っぽにして突つ走る悪癖があるのだ。

「……美空がな、空と名月を戦わせるつて言つてるんだよ。

勝つた方に美空の跡継ぎをやらせるつてな」

「ああ、そうだったんだ。何で今……とは思ふけど、それは悪い話つて訳じゃないよね」

「んで、俺は空に、劍丞には名月に加勢しろつて話になつてる」

「……御大将、あの人達部外者つすよね。

他所から手を借りて跡継ぎになりでもしたら、後々厄介な事にならねーつすか？
今でさえ名月は北条の紐付きなんすよ」

「相対的に北条の影響力を減らせるでしょ」

「ああ、成る程。今後織田と組んで動く気なら、悪くねー選択肢かもつすね」

「それと、名月が勝つたら私は新田劍丞の妻になる事にしたから」

「おお、御大将もついに人生の墓場行きっすか、謹んで御冥福を……て、え?」
「ああ、ご結婚おめでとうござい……て、え?」

犬子と柘榴がその唐突な爆弾発言を理解するまでたつぷり10秒はかかった。

犬子が祝辞を、柘榴が弔辞を述べる辺りに、2人の信頼の程が現れている。

「ええーっ!!? 御大将気でも狂ったっすか!?

何でよりもよつて新田劍丞に嫁ぐっすかあつ!?

「鬼と戦うなら誰でも嫁になれるって言ってたでしょ。」

私も鬼をどうにかしないとイケないって点は一致してるからね」

「嫁ぐ嫁がないはともかく、理由を言うっす!」

「柘榴……今までずっと黙っていたけど。私は九十郎の事が好きだったのよ」

美空はちよつと指をもじもじさせながら、彼女にとつての秘中の秘を告げる。

「知ってたっす」

……だがしかし、それを柘榴はバツサリと切り捨てた。

「え、知ってたの!?! 何で!?! どうやって!?!」

「見てりや普通に分かるっすよ、御大将分かり易いっすから」

「………本当?」

「大まじっす」

「すといれすだわ……ええ、本当にすといれすつて奴ね」

意識『酒飲んで泣きたい』。

「飲み過ぎは身体に悪いっすよ、御大将。」

それより何で御大将が劍丞に嫁ぐなんて事になるっすか？」

「私が九十郎を世界一の男だと信じるからよ」

「九十郎なら劍丞に負けないって？」

「そう！ その通り！ 九十郎なら絶対に劍丞に勝つわ！ 絶対に！」

「だから負けたら劍丞の嫁になるって？」

「そうそう」

「率直に言つて頭おかしーっすね、御大将」

「おかしくないわよっ!!」

そこまで話を聞いて、柘榴は美空の最大の長所であり最大の悪癖……頭を空っぽにして突っ走っている状態だと察した。

そして美空がこういう状態になった時、柘榴がやる事は決まっていた。

「なら逆に空が勝つたら、御大将は九十郎の嫁になるっすか？」

「その通り……と、言えたら良かったんだけどね」

「俺は嫌だぞ。 何が悲しくて上杉謙信を嫁にせにやならんのだ。」

犬子だけでもヒーヒー言ってるってのに」

「まあ、私だけが嫁になったら、貞子達に悪いしね……」

「貞子達？」

「ああ、言つてなかつたかしら？ 貞子と、山県……いえ、粉雪と信虎、

それと雫も九十郎が好きだつて劍丞の前で叫んでたのよ」

「柘榴の旦那様はモテモテっすね」

「柘榴の旦那様は天下一でしょ？ 天下一の旦那様は放つてはおかれないものよ」

「いつそ全員嫁にっつてのはどうっすか。柘榴は問題ねーっすけど」

「断固拒否する」

九十郎は即答する。

そこで柘榴がしばし考え込む。

九十郎は正直気乗りしていない様子だ。

九十郎の性格から……時々妙に卑屈になって、妙に新田劍丞を持ち上げようとする性格上、上杉謙信は新田劍丞の妻になるべきだとか考えているような気がした。

柘榴としても、美空には幸せになって欲しいし、できる事ならば九十郎と結ばれて欲しいと思つている。

そして同時に、美空が劍丞の嫁になるなんて絶対に拒否したいと思つている。

九十郎が乗り気でない現状、名月が勝つ可能性はかなり高いと感じていた。

それに何よりも美空が頭を空っぽにして突っ走っている時、柘榴がやるべき事は決まっている。

それは……

「……なら、空が負けた時は柘榴も劍丞の嫁になるっす」

……それは突っ走る美空の背中を追って、どこまでもどこまでも突っ走る事である。

それ故に柘榴は掛け金を上乗せ（レイズ）した。

頭を空っぽにして、たぶん今の自分が用意できる一番価値のある物を上乗せ（レイズ）した。

「柘榴っ!?!」

「お、おい!?!」

「ちよ!?! ええっ!?! 柘榴何言ってるの!?!」

瞬間、柘榴を取り巻く3人が目を丸くした。

特に九十郎の動揺は激しかった。

率直に言つて気でも狂つたかと思われるような発言であつた。

そして同時に、微妙にやる気が薄い九十郎の逃げ道を全力で塞ぐ発言でもあつた。

「ぎ、柘榴……ほ、本気で？ 俺に……俺が不満なのか!」

心のどこかで、柘榴はずつと自分の傍にいてくれると信じていた。

前田利家ではなく、山県昌景でもなく、上杉謙信でもない、ただの柘榴だからこそ、九十郎は柘榴の言う『好き』を信じられたのだ。

そんな柘榴が他の男の妻になる……九十郎にとって、その光景は何よりも何よりも見たくない、想像したくない光景である。

「何言つてるっすか。 柘榴は九十郎を心の底から愛してゐるっす。

世界一の旦那様だつて信じてるっすよ」

「だつたらどうして!」

「九十郎は決して剣丞に負けないっす。 絶対に絶対に負けないって信じてるっす。

もつともそれは……本気で戦えばの話っすけど」

その言葉を聞いた時、九十郎はどきりとした。

正直に言つて、自分が新田剣丞に勝つ姿が全く想像できなかつた。

それどころか適当に戦つて適当に負けて、美空を剣丞に押し付けてしまおうかとすら

思っていた。

だから貴様は九十郎なのだ。

「……俺に、やる気を出せと？」

「嫌だつて言うなら勝負の結果を待つまでもねーつす。

今すぐ離婚して劍丞に股開いてくるつす」

その瞬間、九十郎は想像した……想像してしまった。

柘榴がいやらしく股を開き、新田劍丞を誘っている姿を。

柘榴が九十郎の肉棒を銜え込み、腰を上下に揺さぶる姿を。

そして……そして柘榴のナカに……

それは吐き気がする光景だった。

それは腹の底から怒りが湧く光景であった。

「柘榴は俺の女だ、誰だろうが手出しはさせねえ」

その時、九十郎に芽生えた感情は怒りだった。

譲ろうとか、諦めようとか、傍観しようとか、そういう考えは確かに存在したが、それと同時に怒りが湧いた。

九十郎はこの時、初めて新田劍丞に対する敵愾心が芽生えたのだ。

もつともそれは、まだ小さな火であったが、どこまでも高く燃え上がる可能性を秘め

た火であつた。

「九十郎……」

……そんな九十郎の感情の動きが、犬子には分かつた。分かつたからこそ悔しくて、悲しくて、情けなかつた。

九十郎は劍丞に抱かれる犬子を見た時、劍丞を殴れなかつたのだから。

「本気なの柘榴？ 柘榴まで付き合う必要無いのよ。」

正直な話、単に私が意地を張つてるだけなのだから……」

「柘榴にも意地はあるつす。それに御大将が頭を空っぽにして突つ走つてる時、

柘榴が追従しなかつた事、一度でもあつたつすか？

柘榴はいつだつて、どこまでだつて、御大将に一点賭けつすよ」

「無い……無いわね……はあ……」

美空はため息をついて、柘榴の説得を諦めた。

柘榴は自分と似て、意地つ張りで頑固な所があると知っていた。

「その話い！ あたいも乗つたんだぜえつ！！」

「右に同じいっ！！」

……直後、襖をがばつと開けて粉雪、貞子、信虎と雫が雪崩のように乱入してきた。

その4人は昨晚、劍丞の目の前で九十郎が好きだと叫んだ4人だ。

「貴女達!? 聞き耳立ててたの!」

「まあなっ! だがそんな事はどうでも良いんだぜ!

空が負けたら劍丞の嫁になるって話! あたいも乗るんだぜ!」

「はあっ!?! 粉雪貴女……これは長尾の問題なのよ!

部外者の貴女がそんな真似する必要ないじゃないの!」

「部外者なんかじゃないんだぜ! あたいだつて九十郎に惚れた女なんだぜ!

そのあたいがこんな所で尻込みできるかってんだあつ!!」

「一応言っておきますけど、私も同じ気持ちですよ、美空様。

私は旗揚げの頃から美空様と一緒に戦つて来たのですから、部外者じゃないですよ

?

それに正直、空様に勝つてほしいですし」

「いや、それは……でも……」

「では決定で。九十郎殿、私も賭けに乗りますから、頑張ってくださいね」

貞子が粉雪に追従する。

貞子もまた柘榴と同じように、突つ走る美空と共に走り切る覚悟であつた。

「信虎、雫、まさかとは思うけど貴女達まで同じ気持ちなんて言わないわよね?」

「我はやらんぞ。貴様らが誰の嫁になろうが興味が無い」

信虎がきつぱりと美空の想像を否定した。

そもそも信虎は美空や粉雪、貞子と違つて普通に既婚者である。

「ああそう、少し安心したわ」

「ところで景虎、早急に探してもらいたい人と調達してもらいたい物がある。

我と背格好が似た者10名と、私の鎧兜に似せた武器と旗印を10名分だ」

「貴女思いつきり参戦する気じゃないの!!」

「我が惚れた男の顔に泥を塗つたのだ、しかるべき報いを与えなければなあ。

血反吐を吐かせ、泥を舐めさせ、その上で惨たらしく斬殺してやらねば気が収まらん」
なお、信虎が求めているものは、信虎がガチで勝ちに行く時に使う必殺の戦法に使う

ものだ。

御家流を投げ返す程度の能力を最大限に發揮する戦法の為に使うものだ。

「私は……いえ、私は粉雪さん達と同じ気持ちです。

九十郎さんが負けた時は、潔く劍丞様の妻にでもなんでもなりましょう」

そんな中で、雫もまた自らの覚悟を示す。

正直雫は劍丞の方が九十郎よりも良い男だと思っている。

知恵があつて、勇気があつて、顔も良いと思つている。

思つているが、それでもなお九十郎に恋をしている。

雫は自らの魂が叫ぶ恋を嘯みしめ、九十郎と共に戦おうと決意したのだ。

「私も一緒に戦います、劍丞様と……」

そして稀代の名軍師、今孔明と謳われる竹中半兵衛と」

敵は強大であると、この中の誰よりも理解していた。

誰よりも理解していたが、それでもなお雫は、戦う決意を示した。

それが心の底から憧れた新田劍丞と、心の底から尊敬する竹中半兵衛との決別を意味するのであったとしても……

そして……

「……犬子も信じるよ、九十郎が勝つって」

……犬子がぼつりと呟いた。

それは小さくか細い声であったが、その場にいた全員の耳に届き、全員の注目を集めた。

「犬子までこんな馬鹿げた賭けに乗る必要無い……って言っても、聞きそうに無い顔ね」

「はい。 柘榴だけ劍丞様に嫁いでお別れなんて、嫌ですから」

「そう……」

犬子の様子を見て、美空は少し危ういと思った。

これで九十郎が負け、柘榴共々劍丞の嫁になる羽目になったら、犬子は壊れてしまう

のではないかと思った。

だが……

「じゃあ、勝ちに行きましようか」

今の美空はブレーキの壊れた暴走車両のような状態だ。

美空はここぞという場面で、意図的に自分の頭の中からブレーキペダルを取り外す。

そして頭を空っぽにして突っ走るのだ。

そんな今の美空に、逃げるとか戻るとか謝るとかいう道は残されていない。

「……その話、私も混ぜてもらおうかな」

そして美空と同じく、ここぞという時に頭を空っぽにして突っ走れる女がそこに現れた。

全員が同時に怪訝な表情になる。

全員が誰この人？ とでも言いたげな表情になる。

「お前……何でここに……？」

いや、粉雪だけは唯一、彼女と面識があった。

「粉雪が参加できるなら、私も参加できるといふ認識で良いかな？」

「貴女……誰だか知らないけど、こっちは遊びでやつてる訳じゃ……」

「当然、私も賭ける。 斎藤九十郎は新田劍丞に勝利すると。」

賭けに負けた時は、私も一緒の織田の天人殿の嫁になろうじゃないか」

「貴女……何者……？」

美空は直感的に理解した。

目の前にいる人物もまた、自分と同じようにブレーキペダルを取つ払つて突つ走つて
いると。

武田光璃晴信にはそれができない。

武田光璃晴信には、自らの頭にあるブレーキペダルを取り外し、頭を空っぽにして
突つ走る事は決してできない。

故に光璃は彼女を重用する。

故に光璃は彼女を『武田晴信の眼である』とまで評し、全幅の信頼を寄せる。

故に光璃は、長尾美空景虎に勝利するためには、彼女の知恵と力が必要不可欠だと思
うのだ。

その名は……

「武藤喜兵衛昌幸……通称は一二三。以後よろしく」

あの有名な真田幸村の母として、あるいは上田城に立て籠もり、徳川秀忠の軍勢を足
止めした智将として名を残し……生涯に何度も何度も裏切りを繰り返し、あの屑 of 屑
こと武田晴信に並ぶ屑と名高い真田昌幸の若き日の姿である。

犬子と柘榴と九十郎第81話 『復活の半兵衛』

「ああ……美味しくない……」

その日、加藤段蔵は鬼の肉片をぺつと地面に吐き捨てながらそう呟いた。

「お腹は膨れるんですよ、お腹は。そして栄養が身体に巡る感覚もあります……」

あの吉野とか何とかかっていう超能力者は、人の死骸を材料に鬼を造っているが故に、人の死体しか身体が受け付けない私のお腹は膨れます。

でも美味しくない！ 全くもって美味しくありません！

どうやったらこんなに不味く加工できるんだって思う位に！」

段蔵が……新戸をして『純然たる怪異』あるいは『放置すれば無害』と評する怪物が、人肉以外のあらゆる食物を身体が受け付けない怪異生物がそんな事を言いながら、山積みになった鬼の肉片を周囲にバラまいた。

段蔵の怪異としての能力で消滅を免れていた鬼の肉片が、地面につくと同時に煙のようにならなくなっていった。

「はあ……人攫いなんてしなくても、戦争のお手伝いなんてしなくても、

安定して食べ物が手に入るって言ったが故に手伝ったのに……」

こんなんじやあ某、やる気が起きませんよ。

報酬が不味いが故に、ととても不味いが故に」

見ただけでS A N値が減りそうな肉塊が人間の……それも年頃の美女の姿に変わる。そして近くに畳んで置いていた愛用の忍び装束を身に纏った。

「ああ、これからどうしましょうか……」

長尾は駄目でしようねえ、桶狭間の時に思い切り武田に寝返ったが故に。

それに武田も駄目でしようね、

今川さんの所を襲った時からずっと音信不通にしているが故に。

そうなるともまた死体漁りか、人攫いですか……はあつ、こんな事になるのなら、

もう少し晴信さんのお世話になっていた方が良かったですよ、本当に」

段蔵のお腹がぐううつと鳴った。

鬼の死体を食えば多少はマシになるだろうが、あまりにも不味いので口にする気が起きなかった。

「吉野さんって、美味しいんですかねえ……」

お腹をさすりながら、段蔵がそう呟く。

「いや、絶対に美味しいですよねえ、200年モノのお肉でしょう、きつと身も円熟して……」

どれだけの旨味を蓄えてるか……ああ！ 想像するだけで涎が出ますねえ！

某は空腹が故に！ とてもとても空腹であるが故につ！！

とてもとても不味いモノを食わされたが故にいつ！！」

段蔵が吉野の御方……今現在日ノ本に鬼をバラ撒いている張本人の味を想像する。

そして狂気に満ちた笑みを浮かべる。

今の彼女には、吉野の御方すらもただの食べ物……それも極上の食べ物のように見えた。

駿府館を襲った時に食べた朝比奈泰能は美味かった。

きつと吉野とかいう超能力者はその何倍も、何十枚も美味いに違いないと想像し、涎を流し、腹を鳴らした。

「ああでも、駿河で会った鞠って娘……あれも美味しそうでしたねえ。

きつと血統書つきですよアレ、きつと身も柔らかくて、良い匂いがしますよきつと。

もうちよつと熟成してればもつともつと好みですけど、

お腹が減っているが故に、もう待てませんよねえ」

今度は鞠の味を想像して涎を流し、腹を鳴らした。

そして決断した……

「よし、越後に行きましょう、そうしましょう。」

吉野さんも、鞠つて娘も、今は越後に行っているが故に。

2人共美味しく美味しく頂きましょう、とてもとてもお腹が減っているが故に」
段蔵のお腹がくううつと鳴った。

……

……

……

世の中には、何が何でも勝たなければならない戦いがある。

そこにはルールの範疇で正々堂々と……しかし、持てる力の全てを使って戦う戦いもある。

一方、一切のルールも禁止事項も無く、裏切り、無法、残虐、非道、どんな汚い手を使つても貪欲に勝利を求める戦いもある。

しかし逆に、うっかり勝ちでもしたらアカン事になる戦いもまた存在する。

「つまり……勝つたら俺は美空と犬子と柘榴と貞子さんと粉雪さんと雫を嫁にすると……」

美空から渡された書状……いわゆる交戦規定を読みながら劍丞は思った、勝つたらアカン事になると。

劍丞が上手く波風を立たせずに負ける方法を考えていると、隣の部屋がにわかに騒が

しくなった。

「復ッ活ッ！」↑綾那

「竹中半兵衛復活ッ!!」↑歌夜

「竹中半兵衛復活ッ!!」↑小夜叉

「竹中半兵衛復活ッ!!」↑鞠

「竹中半兵衛復活ッ!!」↑一葉

「竹中半兵衛復活ッ!!」↑雫

「……」竹中半兵衛復活ッ!!「……」↑全員

「すいません何の儀式ですかコレ」↑詩乃

ただの悪ノリである。

「……何やってるんだ、あれ」

範馬刃牙を読んでいない新田劍丞が、のそのそと隣の部屋に顔を出す。

そこには蘭丸にやられた（誤字に非ず）影響で幼児退行状態になっていた詩乃が、しっかりと2本の足で立っていた。

快復した直後に訳の分からない儀式をされて若干困惑気味ではあったが、とにかく詩乃は完全に復調したのだ。

なお、幼児退行現象中の詩乃の言動については、彼女の名誉のためにバツサリとカッ

トする。

読みたい方は感想欄に『わっふるわっふる』とでも書き込んでほしい。

「あ、劍丞様。これは一体何事ですか？ まさか劍丞様の差し金ですか!？」

「いや、俺は何も……」

「快復祝いのお作法なのです!」

訳も分からず詩乃と劍丞が戸惑う中で、綾那が胸を張りながらそう答える。

「か、快復祝い……これが?」

「そうなの、皆で詩乃ちゃんが元気になったお祝いをしてたの」

「歌夜が元気になった時にやったのです」

「ちよつと恥ずかしかつたけど……やる側に回ると、何だか楽しいですね」

「それと、母が目覚めた時もやったぜ。まあその時はオレ一人だったけどな」

劍丞の脳裏にさっきの無駄に騒がしい快気祝い（笑）を前に苦笑する桐琴の姿が浮か

んだ。

「劍丞様、この謎儀式を迫及するのは後にして、

私が寝ている間に起きた事を聞かせてください」

「ああ……そうだな、そうしよう」

詩乃と劍丞の見解が一致する。

多分九十郎が何か吹き込んだのだろうな〜という所までは辿り着いていたが、それ以上追及するのは面倒臭かった。

「じゃあ、綾那達はちよつと特訓してくるのです」

「鞠も特訓なの！」

難しい話が始まりそうな所で、綾那と歌夜、鞠と小夜又の4人が退散しようとする。

「こういう難しい話が始まると、自分達が足手まといになる事を彼女達は理解していた。」

「分かった、俺達はちよつと今後の事を話し合うから」

「難しい事はお任せするのです！」

「それはそれでどうかと思うけど……」

新戸殿がえすばあとの戦い方を教えてくださるとの事ですから

「あの娘が？」

予想外の言葉を聞き、劍丞が思わず聞き返す。

かつて三河侍達を相手に鬼の姿になって大暴れしたかと思えば、金ヶ崎では桐琴を助けに行ってくれたり、蘭丸に全員纏めてヤラれそうになった所を助けてくれたり、元の世界の姉達が三国志の英雄だと言ってきたり……劍丞にとって新戸という名の少女は、敵か味方も分からない謎の少女なのだ。

「そうなのです！」

森のお母さんも助けに来てくれたし、きつと新戸は鬼は鬼でも良い鬼なのです！」

しかし一方、綾那は既に全面的に新戸を信用している様子である。

「それは違う綾那。 良い鬼子なんてものはこの世のどこにも存在しない」

そこに、話題の人物……もとい鬼子である井伊直政・通称新戸が音も無く現れた。

「新戸さん、どうしてこちらに？」

「遅いから迎えに来た」

「ああ、すみませんお待ちさせて」

「もう少し危機感を持つてくれ。 蘭丸は危険だ、危険なんだ。」

一歩対応を間違えればオレ達全員が洗脳されて手籠めにされる程、危険なんだ」

無数に存在する他の世界の虎松達と対話ができるが故に、何十人分、いや何百人分も

の敗北の記憶を受け継いでいるが故に、非常に実感の籠った言葉を告げる。

「それは、長尾の御家騒動をしている場合ではないという趣旨ですか？」

少しでも情報を引き出そうと、詩乃がやや強引に話に割って入る。

彼女の頭の中では、新戸を良い鬼子とは思っていない。

謎の能力を持ち、謎の知識を備えた、敵か味方かも微妙な鬼だ。

少なくとも、警戒を怠って良い存在ではない。

「人間同士の戦いには参加しないし、助言もしない」

「私が聞いている事は、鬼との戦いの話ですよ。井伊直政殿」

「詩乃らしい屁理屈だな、だが答えてやる。」

必要な事なら今すぐ始めて1日でも早く終わらせてくれ。

一昨日の晩、蘭丸に深手を負わせた。傷が癒えるまで時間の猶予ができた……

その代わりオレはとんでもないものを盗まれたがな！」

新戸の処女膜（プライスレス）である。

「深手ですか？」

「当分は動けん。だがオレも消耗した。しばらくはお互いに静かにしかいられん」

「分かりました。」

鬼の事が無かったとしても、長引かせるのは悪手である事には同意します。

戦において拙速は遅巧に勝るといふ言葉もある事ですし」

「助かる、詩乃は劍丞と違って物分かりが良い」

「それはどうも。」

ですけど、劍丞様がそういう性分だったからこそ私は劍丞様と出会いました。

そして私は劍丞様を愛して、全てを捧げる覚悟を決めました」

詩乃は真つすぐに新戸の目を見ながらそう告げた。

力強く、何の迷いも無く劍丞を愛していると宣言していた。

「オレはやはり、劍丞が嫌いだよ」

「私はそれでも、劍丞様を支えます」

詩乃と新戸がじろおくつと互いに睨み合う。

劍丞は頑固者で、無鉄砲で、どこか現実離れして、常識外れな所がある。

それを新戸は困った性分だと思ひ、それを詩乃は魅力的だと感じている。

ある種の価値観の違いが、2人を見事に隔てていた。

「良い鬼子なんてものはこの世のどこにも存在しない……とは？」

どうせ分かり合えないのだからと、詩乃はさっさとこの話を切り上げる。

「オレ達鬼子は人間の醜い所、汚い所をドロドロになるまで煮詰めた存在だ。

良いか悪いかを言うなら、間違いなく悪いの方に属するさ」

「でも君は、俺達の味方をしてくれているように見えるよ」

「それは勘違いだ、お前の味方はしていないぞ新田劍丞。

良い鬼子がいるだなんて幻想、早めに捨てた方が良い。

変な希望を抱いて裏切られるのは、辛いからな」

それだけ告げると、新戸はまるで煙のように姿を消した。

テレポーテーション……ではなく、単に念動力の応用で自分の身体を飛ばしただけ

だ。

その一瞬の出来事を目で終えた者は、本多忠勝ただ一人だけだ。

「あつ!? き、消え……た……?」

「跳んだだけですよ、歌夜」

綾那には新戸の言葉が、照れ隠しのように思えた。

他の鬼子の事は知らないが、綾那には新戸が良い鬼子のように思えて仕方が無かつた。

「じゃあ劍丞様、綾那達はえすばあとの戦い方を勉強してくるのです」

「分かった、頑張ってきてくれ」

色々と新戸に聞きたい事はあつたが……劍丞はそれを飲み込んだ。

「私達の力が必要になりましたら、すぐに言ってくださいね」

「頑張ってくるの!」

「……行ってくる」

綾那、歌夜、鞠、小夜叉の脳筋カルテット……もとい、腕つぶし担当組がどたとと新戸の後を追って駆けだした。

劍丞も、詩乃も、綾那も歌夜も、ついこの間蘭丸という新手の鬼子に為す術もなくヤラれかけたばかりだ。

自然と肩や腕に力が入る。

後に残ったのは劍丞、詩乃、一葉……劍丞隊の中樞ともいえる3人と、かつて劍丞隊と共に戦った小寺雫官兵衛である。

「さて……ようやく静かに話せるといった所かの」

「そうですね。まずは雫、代役の任、務めてくれてありがとうございますございました」

「いえ、私は何も……」

「普通の状態ではなかったとはいえ、

既に長尾に仕えていた貴女に劍丞様の手助けをしろと言つてしまい、

申し訳ありませんでした……本当に助かりました」

「あの、本当に私は何もしていませんよ」

「いえ、長尾の真つただ中に飛び込んで、大きな軋轢無くここまで過ごせた事自体、

そうそう簡単な事ではありません。

分かつています、貴女が陰ながら力を貸してくれていた事は」

「……あんまり褒めないでください、照れますから」

「ありがとう雫、本当に助かったよ」

「うむ、我等は右も左も分からん状態だったからな」

「あうう……」

劍丞と一葉が追撃し、雫の頬が真っ赤になった。

元よりあまり褒められ慣れていないのだ、彼女は。

「それに、私は諦めませんですからね……でしたっけ？」

聞いているこつちまで恥ずかしくなるような告白でしたよ、雫」

「へ……？ き、聞いていたのですか!？」

「そりやあ聞こえますよ、あの時既に例の不調はだいたい治っていたのですから」

「むしろ聞くなど言う方が無理な話であろう。あれだけ大きな声で叫ばれてはな」

「えつと……お幸せについて言えば良いのかな？」

今回の騒ぎの元凶になった俺にそれを言う権利があるかどうか分からないけど」

あの恥ずかし過ぎる告白が目の前の人3人に思い切り聞かれてしまった事を知って、雫の顔がさつき以上に真っ赤になって、額や頬がかあくつと熱くなつていくのを感じた。

「……で、何でその雫が俺の嫁になるなんて話になったんだ？」

「え？ なりませんよ」

雫の顔が一瞬にして真顔に戻る。

「え、でもこの手紙では、空ちゃんが負けた時は美空と一緒に君もつて……」

「劍丞の手の中にある書状には、美空と柘榴と犬子と粉雪と貞子と雫と一二三が、全員纏めて新田劍丞の嫁になるなんて非現実的極まりない文面がある。」

一二三つて誰だよってツツコミを入れたい気分だが、そんな事は些細な事だ。

重要な事は、ほんの数日前に劍丞の目の前で齋藤九十郎が好きだと叫んだ女達が、揃いも揃って劍丞の嫁になると宣言している事だ。

何かの冗談なんじゃないかと、何かの間違ひなんじゃないかと、そう思いたくて仕方が無かった。

「負けませんから、九十郎さんは」

「ええ……」

しかし雫の返答は、劍丞の微かな希望を完膚無きまでの打ち砕いた。

劍丞は思った……うっかり勝ったりでもしたらエライ事になると。

「へえ……」

「ほほう……」

一方、自信に満ちた表情で九十郎が勝つと……新田劍丞が負けると断言したのに対し、詩乃と一葉は興味深そうに、あるいは面白そうにその眼を見開いた。

「では聞きましょうか、何故勝てるのかと？」

「私が勝たせます」

雫はもう一度力強く断言した。

雫が九十郎への想いを叫んだ日と同じ、強い意志が籠った目であった。

「その意気や良し。しかし勝つのは劍丞様です」

「え、勝つのか？」

そんな雫に対し、詩乃がそう告げる。

もつとも、その発言に一番驚いたのは肝心の新田劍丞であるが。

「どのように勝つのですか？」

「私が勝たせます。まあ、具体的な話は当日まで内緒としますが」

詩乃が先程の雫と同じ……いや、それ以上の決意と覚悟と共に雫に告げる。

雫は斎藤九十郎の方が新田劍丞よりも良い男だと思っっているかもしれないが、それは違う。

新田劍丞こそが天下一の男で、新田劍丞が斎藤九十郎に劣る筈が無い……前髪の奥に隠れた詩乃の目には、そんな意思が宿っていた。

そんな意思が雫にも、一葉にも伝わってきていた。

「いや勝たせないでくれよ、うっかり勝ったら明らかにヤバいだろコレ」

なお、肝心の新田劍丞は思わずそんなツツコミを入れてしまっていた。

少なくとも劍丞にとって結婚とは男女が互いに愛し合っただけのものであって、断じて戦の勝ち負けで決めるような事ではない。

それが九十郎が好きだと叫んだ娘達ならば猶更だ。

「……ズレておるの」

「そこが劍丞様の良い所ですけれどね」

「痘痕もえくぼというヤツか？」

「かもしれない。ですがそれはお互い様でしょう」

「違うの」

詩乃と一葉がそつと目を伏せる。

彼女達が再認識したように、新田劍丞はズレている。

そもそもこの時代では、当人同士が納得する結婚は稀であるし、当人同士が愛し合う結婚はもつと希少なのだから。

「まあ、向こうの狙いは明白よ。

賭金を思い切り釣り上げてこちらを降ろそうとしておるのであろうて。

アレが昔から良く使う手だ」

「せつかく目の前に甘美な果実をぶら下げて貰ったのです、遠慮無く頂戴しましょう」
「違うないな。全く昔から、一度でも懐に入れた相手には甘い甘い……」

いや、その点は余も久遠も偉そうには言えんか」

「ちよ、ちよつと待ってくれ2人共、まさかとは思うが勝つ気なのか!？」

「主様、まさかとは思うが負けてやる気だったのか？」

「当たり前だろう！」

あんなにも一生懸命に九十郎の事が好きだと言ってる娘を、俺の嫁にするなんて……」

「言っておきますが劍丞様、断る事はできませんよ」

「え……？」

「勝負の如何に関わらず、自分は新田劍丞の妻になると言ってきた場合、

劍丞様はそれを拒む事ができません。

早い話、美空さんが勝負など知らん、劍丞の嫁になると叫んだ場合……」

「美空は主様の嫁になる……我らや主様が何を言おうが。

鬼と戦う者であれば誰でも良いというのが、

誑し免状の唯一にして絶対の条件であるからな。

そして現状、美空は間違い無く鬼と戦う意思を持つておる」

「ええ……」

劍丞は血の気が引いた。

純朴な現代人である劍丞には、愛の全く無い婚姻がありうる事に考えが至っていなかった。

そういう婚姻がある事は知っていたが、それは知識として知っていただけで、自分の

身に降りかかるとは全く想像できていなかった。

「犬子さんを抱かれたのですから、その責任を取られてはどうですか」

「いや、あれは……信じてもらえるか分からないけど、

気がついたら抱いてたと言うか……えと、どう言えば良いか分からないけど……」

「まあ分かつておる、主様は人妻を強姦できる性分では無い」

「可能性としてありうるのは、九頭竜川で遭遇した鬼子のように、

他人の精神に働きかける能力を持った者でしょうか」

「そのものズバリ、九頭竜川の鬼子かもな」

「まあ、いずれにしましても……」

「ああ、いずれにしても……」

「勝ちましょう、劍丞様」

「勝つぞ主様」

詩乃と一葉が当然の事、既定路線であるかのようにそう告げる。

劍丞は泣きたくなった。

「……何でそうなるんだ？」

負けても尾張に送り返されて、今後越後に入国禁止になるだけなんだぞ」

そう告げると詩乃と雫がちよつとがっかりした様子で目を見合わせる。

「お言葉ですが劍丞様、決して『だけ』とは言い難いかと。

今日の日ノ本の状況を理解されてますか？」

「劍丞様、誑し免状が出された理由をお忘れですか？」

「え、いや……つまり……鬼が各地で暴れてて、朝倉さんが……」

「その様子ではイマイチ理解しとらんようだな……」

詩乃が、雫が、そして一葉が口を揃えて劍丞を迫及する。

分かつているのか……と。

「まず、我々に残された時間は少ない……これが前提です」

「諸国を侵食する鬼の猛威は、主様が思っているよりも早い」

「つまり、常識的な手段で、常識的な速さで日ノ本を纏める時間は無く、

かと言って散発的に對抗しては、いずれ日ノ本は鬼に吞まれます」

「でなければ、我も久遠もあんな笑える免状を出しはしない」

「つまり……劍丞様に拒否権はありません」

「同時に、劍丞の妻である我等にも拒否権は無い」

「そこに愛があるうが、無かろうが……まあ、私に言えた義理は無いかもしれませんが

……」

「う…………ただ……そんな……」

現代人の道徳では、それは許されない事だ。

現代人である新田劍丞にとって、彼女達の言葉は理解はできても、納得はしちやいけ
ない事だ。

だがしかし……自分に拒否権が無い事だけは理解できた。

「だけど、勝負に勝つて美空を無理矢理嫁にしたりなんかしたら、

越後に人達から恨まれるだろう、美空だって……」

「そこは主様の誑力（たらしちから）に賭ける」

一葉が力強くそう断言する。

酷い理屈だと思いつながら、詩乃も、雫も、一定の説得力があると感じた。

「俺にそんな力は無いよ」

「あるとも、余が保証する」

「ええ、ありますね。私もその証人です。」

それに劍丞様、ここで負けて、越後から叩き出されたとしたら……

「どうやって貴方の地に落ちた信頼を回復させるおつもりですか？」

「うぐっ」

劍丞は反応に窮する。

この間の美空の怒りようでは、何を言っても全く聞く耳を持つてくれそうも無い。

「いえ、負けて頂いても問題ありませんよ劍丞様。

私が越後に残って、鬼との戦いに関する協力『だけ』はしますので」

雫は『だけ』の部分の力を込めて強調した。

「雫はああ言っているが、心にわだかまりが残ったまま戦っていれば、後々致命的な隙にもなりかねん。

ならば劍丞には決して惚れんとドヤ顔で言い放ったあいつに、吠え面をかかせてやるしかあるまい」

「そうですね、勝って思い知らせて差し上げましょう。

新田劍丞こそが天下一の男であると」

「妙なプレッシャーかけないでほしいなあ……」

「雫、勝てば長尾景虎殿は劍丞様の妻になる……もう一度確認します、確かですね？」

「ええ、間違いありません。もともと負けませんが」

「それは、私に勝つ……と、解釈しても構いませんね」

そう詩乃に問われ、雫は微かに迷いを見せる。

自分に今孔明と謳われる竹中半兵衛に勝てるのだろうか……と。

「……勝ちます」

少し声が震えていた。

勝つ自信があるのかと問われれば、胸を張ってYESとは言えない気分であった。だがそれでも……雫は退かない、雫は退けない。

愛する斎藤九十郎が新田劍丞よりも良い男だと証明するために。

「ならいつそこちからも積み増しましょうか。」

劍丞様が負けたら竹中半兵衛は斎藤九十郎の妻になるといふのは？」

詩乃が唐突に特大の爆弾をブチ込んだ。

「え!?!」

「ふむ、それも面白い。余も乗ろうか」

ほぼ同時に一葉が……現役の征夷大將軍が超特大の爆弾をブチ込んだ。

「ええっ!?!」

「無駄ですよ、九十郎さんは鬼と戦うなら誰でも……なんて言っていないから。」

『え? やだよ』の一言で切つて捨てられるのがオチです。

もちろん、尻軽女の二つ名が欲しいのでしたら止めませんし、

公方様にそこまでの決意がおりなら、

大々的に尻軽という噂を流してお手伝いというのもやぶさかではありません」

思い切り動揺していた劍丞とは違い、雫は一切の動揺を出さずにそう切り返す。

詩乃も一葉も、本気で言った訳ではない。

新田劍丞が勝つと信じているが……詩乃には愛する劍丞の妻という立場を一片の紙の如く捨て去る事はできないし、一葉が劍丞の妻でなくなれば、久遠達の立てている略が根底から覆るが故に、一度の戦の勝ち負けで離婚なんて話は持ち出せない。

先の発言の真意は、雫の反応を見るためだ。

雫が……小寺官兵衛と言う名の軍師が、竹中半兵衛の全能力を持つて立ち向かうべき『敵』であるかを確かめるためだ。

「勝つのは劍丞様です。長尾景虎殿も、貴女も、必ず手に入れます。

手加減はしません、日ノ本のために、日ノ本を鬼の脅威から救うために」

「日ノ本の為に……ええ、私もそこはブレません。

劍丞様はこれからの日ノ本に必要な人です、鬼を討ち滅ぼすために必要な人です。

ですがそれはそれとしてこの勝負は九十郎さんが勝ちます。

私が勝ちます、勝たせます。小寺官兵衛が……今孔明殿に、竹中半兵衛殿に勝利します。

勝つて証明して見せます、斎藤九十郎は日ノ本一の男性であると。

新田劍丞に決して劣らぬ男性であると証明します」

この日……竹中半兵衛は小寺官兵衛を明確に『敵』と認識した。

全能力を持つて自分に挑んでくる『敵』だと。

全能力を持って迎え討たねばならない『敵』だと。

「どちらが勝つても、鬼との戦いは継続ですが」

「ええ、その通りです。 ですが今だけは……」

「はい、今だけは……」

「私は、貴女に勝つ」

「私は、貴女に勝つ」

この日、詩乃と雫は互いに宣戦を布告した。

美空は、柘榴は、粉雪は、貞子は、そして雫は叫んだ……『レイズ』と。

それに対し、詩乃と一葉はこう告げた……『コール』と。

犬子と柘榴と九十郎第82話『それはきつと死に至る病』

夕暮れの河原で、美男子と野獣……もとい新田劍丞と斎藤九十郎が2人並んで体育座りをしていた。

「俺は……俺はどうすれば良いんだろうな」

「それを俺に言っただろうしどうしようって？」

「どうしてこんな事になったんだろうな」

「ははは、俺が聞きたいぜ全く」

2人の共通する思いは……『どうしてこうなった』である。

「なあ、劍丞」

「何だ？」

「何でお前は、いきなり、唐突に犬子を抱いたりしたんだよ？」

もつとこう……伏線とか張ってくれよ、心の準備ができねえだろ」

「……心の準備の問題なのか？」

そう聞き返されると、九十郎はしばし考えこみ、しばし無言になり……

「……ああ、心の準備の問題だよ。」

前田利家はさ、やっぱ主人公の嫁になるのが一番良いき。俺みたいな屑じゃなくてな」

口を開き、頭に浮かんだ言葉を発音する度に、九十郎は心臓に針が刺さったかのような痛みを覚えた。

心がどうしようもなく負けを認めている。

だけど同時に、それが犬子の叫ぶ『好き』を全否定するものだとも理解している。

それが痛くて、苦しかった。

「あの時、なんで殴らなかつたんだ」

重苦しい沈黙を破り、劍丞が九十郎にそう尋ねた。

劍丞の言う『あの時』が何を指しているのかは、基本愚鈍な九十郎でも流石に理解できた。

「……殴る理由が無いだろう」

劍丞は一瞬、九十郎が何を言ったのか分からなかった。

愛する妻を奪われた……本来劍丞にそのつもりは無かったとはいえ、結果として劍丞は犬子を抱いた。

劍丞にとっては、それは九十郎が自分を殴る理由として十分なものだった。

それを九十郎はいともたやすく否定した。

少なくとも劍丞はそう感じた。

本当は身を裂かれるかのような深い深い苦しみと悲しみが九十郎を襲っていたが、劍丞は頭に血が上り、それが分からなかった。

「悔しかったりはしないのか？ 怒りは湧かないのか？」

「当然の結果だよ、当然の……」

俺みたいな屑が手に入れて良い女じゃなかったんだよ、最初から」

「どういう意味だ？」

「前田利家は、俺みたいな屑の嫁になってちやいけぬ奴だっただよ」
瞬間、劍丞は頭が沸騰しそうになる程に激しい怒りを覚えた。

あの時犬子は泣いていた。

九十郎を語る時、犬子は確かに幸せそうに微笑んでいた。

犬子は確かに、新田劍丞ではなく斎藤九十郎を愛していた。

それを全否定する九十郎の言葉が信じられなかった。

「ああ、良く分かった……よっ!!」

「うぐっ!!」

九十郎の顔面がひしゃげ、無駄にマッチョな身体が地面に転がった。

劍丞が九十郎をブン殴ったのだ。

2人の間にはかなりの体格差、体重差があったものの、劍丞は後漢末期の英傑達から直々に喧嘩の勝ち方を教えられた身だ。

当然、全身の筋肉をフル活用して人を殴る技術も叩き込まれていた。

そんな劍丞に思い切りブン殴られたのだ。

九十郎は情けない声と共に派手に地面にダイブしていた。

「て、てめえいきなり何しやがるっ!!」

「立てよ九十郎、立って殴り返して来い」

「理由になってねえぞ! 喧嘩売ってんのか!?!」

「ああ売ってるんだ、さあ早く立て! そうじやなきやお前は本当の屑になるぞ!」

劍丞に言われるまでも無く、九十郎は屑である。

「この野郎……」

流石に普段から鍛えているだけあって、1発や2発ブン殴られた程度で駄目になる程、九十郎は弱くない。

九十郎はすぐさま起き上がり、ぎゅつと拳を握りしめ、その手を振り上げ……そこで止まった

『九十郎なんかじゃ、劍丞様には勝てないよ、絶対に』

九十郎の耳にそんな声が聞こえてくる。

その声は確かに犬子の声だった。

その声が幻聴だと九十郎には分かったが、言っている事が間違っているとは思えなかった。

きつと犬子は、本心から自分では劍丞に勝てないと思っっているに違いないと思つた。

「どうした？ 何でそこで止まるんだ？」

劍丞がキツと睨みつけながら言う。

九十郎の眼には既に怒りと戦意が消え失せていた。

「俺は……」

『戦つてもどうせ、九十郎じゃ劍丞には敵わない』

『どうせ敵わないなら、戦つても無駄だ』

九十郎の耳に、何度も何度も幻聴が聞こえた。

何度も何度も……何度も何度も何度も……どの言葉も九十郎の魂に突き刺さり、抜けなかった、否定できなかつた。

九十郎の心の中に、諦めの気分が蔓延していた。

「俺が勝つたら、犬子は俺のものになるんだぞ……」

そう言つた瞬間、劍丞は吐き気がした。

女性を物扱いなんて、どうかしていると思つた。

「その方がきつと犬子も幸せだろう」

そう呟く九十郎を見たら、もつと吐き気がした。

全て諦めきつた男の眼であった、負け犬の眼であった。

この男は自分では犬子を幸せにできないと決めつけて、思い込んでいた。

劍丞にはそれが分かった。

「美空も俺の嫁になるんだぞ！ それで良いのか!？」

必死になって吐き気を抑えながら、さらに劍丞が問いたです。

「上杉謙信みたいな偉人が、俺みたいな屑と釣り合いが取れる訳がないだろう」

やはり九十郎は死んだ眼のままだった、負け犬の眼のままであった。

自分は美空とは釣り合わない、自分と美空が結ばれたら、美空が可哀想だと思ひ込んでいた。

でいた。

美空の魂を込めた『好きだ』の叫びは、九十郎の心に届いていない。

上杉謙信だから出会った、上杉謙信だから愛せない。

ただの美空とは思えない。

まるで呪いのように、上杉謙信である事が、美空の努力ではどうしようもない事実が、美空が愛した九十郎の心を蝕み、同時に曇らせていた。

「柘榴もか!？」 お前にとってには柘榴もどうでも良いのか!？」

柘榴も俺のものになっても良いってのか!？」

祈るような気持ちで、劍丞は叫んだ。

頼むから立ち上がってくれ、頼むから俺に反論してくれ、いつそ俺に殴りかかってきてくれ……そんな思いを込めて、劍丞は叫んだ。

「ぐっ……」

直後、九十郎は自らの唇を強く強く噛み締めた。

ほんの一瞬だけではあるが、九十郎の瞳に戦意が宿った。

「柘榴は……柘榴は俺の……お、俺の……」

言え、言うんだと九十郎は自分自身を叱咤する。

柘榴は俺の女だ、お前には渡さないと言うんだと……

だがしかし……

「そんな事……そんな事俺に聞くんじゃないよ！俺が知るかよ!!」

しかし、劍丞と九十郎の視線が交差した瞬間、あつという間に九十郎の戦意は萎えてしまった。

九十郎が劍丞に抱かれる犬子を目撃した時と同じように、一瞬だけ怒りが湧き、戦意が宿り、あつという間にそれらは消えてしまった。

再び負け犬の眼になって、吐き捨てるように言い、頭を抱えながら背を向けてしまっ

た。

「馬鹿野郎おつ!!」

劍丞は再び九十郎を殴った。

先程よりもさらに力を籠めて、先程よりもさらに大きな怒りの感情を籠めて殴った。

「お前は何を聞いていたっ?!? お前は何を見ていたんだっ?!?」

そして劍丞は九十郎の襟首を掴み上げる。

自然と両腕に力が入った。

劍丞には許せなかったのだ。

犬子に柘榴、美空、粉雪、貞子、それに雫……全員が全員、素晴らしい女性ばかりだ。

全員が飛び上がる程に可愛くて、綺麗で、素敵な女性ばかりだ。

そんな女性達が、魂を込めて愛を叫んだ。

それをまるで理解しない、理解しようもしない、自ら目を背け、自ら耳を塞ぎ、自

ら心を閉ざそうとする九十郎に怒りが沸いたのだ。

基本好き嫌いが激しい九十郎と違い、新田劍丞には女性の好みというものは存在しな

い。

劍丞の眼には、この世あらゆる女性が好みの女性で、素晴らしい女性に見えるのだ。

正直頭がイカれてるんじゃないかと思われるような性癖だが、この性癖があるが故

に、オーデインは新田劍丞を計画の要に選択し、虎松達は一部例外を除き、新田劍丞を『デトックスされた北郷一刀』等と呼んで嫌うのだ。

「お前には……お前には皆の好きだつて叫びが聞こえなかったのかよっ!!」

劍丞は叫んだ。

思い切り叫び、力づくで立たせ、九十郎と目が合い……劍丞は死ぬ程後悔した。

「やめろ……やめてくれ……これ以上、俺から奪わないでくれよ……」

九十郎は怯えていた、本気で怯えていた。

怯え切った目を劍丞に向けていた。

まるで怪物でも見るかのような目で劍丞を見ていた。

少なくとも劍丞には、同じ人間を見る目では無いと感じた。

「あ……」

劍丞は我に返り、手を放す。

手を放すとすぐに九十郎はその場に座り込み、怯え切った目で立ち尽くす劍丞を見上

げていた。

バツファローマンのような体格の大男が、自分よりも一回り以上小柄な劍丞に怯えた

視線を向けていた。

今までずっと、劍丞は九十郎を強い男だと思っていた。

自信とプライドに満ちた男だと思っていた。

だけどそれが間違いだつたと悟つた。

本当は怖がりなんだと思つた。

だから身体を鍛えていた、だから神道無念流にのめり込んでいった、そして未来の武器や技術に頼ろうとしたのだと思つた。

本当は奪われたくない、だけど自分では新田劍丞には勝てない。

だから必死になつて自分に言い聞かせているのだ……劍丞に渡した方が上手い」と。

「俺が……俺が怖いのか？ 九十郎」

九十郎は言葉も無くガタガタと震えていた。

これ以上無い程に情けない姿を劍丞に晒していた。

それが答えであつた。

だから貴様は九十郎なのだ。

柘榴が自分を奮い立たせようとしているのは分かっていた。

美空も、粉雪も、貞子も、黒田官兵衛すらも自分を立ち直らせようとしているのも分かっていた。

劍丞への嫁入りという大きすぎる代償を受け入れてすら……

だがしかし、だがそれでも、九十郎は劍丞を殴れない。
だから貴様は九十郎なのだ。

もう一度書こう、何度でも書こう、書き続けよう、だから貴様は九十郎なのだ。
だから貴様は九十郎なのだ。

「俺は化け物じゃないよ、九十郎。俺はあんたと同じ人間だ」

九十郎はガタガタと震え続ける。

その言葉は確かに九十郎の耳に届いていたが、心には全く届いていなかった。

「俺が……俺がお前に勝てる訳がないだろ……しゅ、主人公によ……」

そう告げる九十郎の声もまた、震えていた。

九十郎の目に人間は映っていなかった。

その目に映るものは災厄、怪物、あるいは絶望……九十郎から全てを奪い尽くす恐ろしいナニカが映っていた。

「……ああ、分かったよ」

劍丞は一瞬だけ『勝てる』と言おうとした。

言おうとしたが、やめた、

わざと負けてやる事が九十郎の助けになるんじゃないかと思つたし、それが犬子と關係を持つてしまった償いになるんじゃないかとも思つた、そうすれば全てが丸く収まるんじゃないかとも思つた。

だけどそれは、九十郎を子供扱いするも同然だと思つた。

こんな情けない男に美空のような素晴らしく魅力的な女性を幸せにできるのかとも思つた。

自分を信じて、自分に力を貸して、自分の勝利を信じている詩乃や一葉への裏切りのような氣もした。

それに何より……劍丞には鬼と戦う使命があつた。

何よりも大事な久遠の祈りがあつた、願いがあつた。

こんな所で足踏みをしている時間は無かつた。

だから……

「悪いけど、勝つて奪わせてもらおう。

九十郎を踏みにじつて、踏み越えて、九十郎が持っているものを全部余さず持つて行く。

俺はこんな所で止まってはいられないんだ」

良心の呵責による吐き気を堪えながら、劍丞はそう告げた。

そして決意した……勝とうと。

勝つて九十郎の全てを奪おうと。

……

……

……

「まず、君は自分が途轍もなく危ない橋を渡っている事を自覚しようか」

粉雪が『何故ここに来た?』と尋ねると、一二三はそう答えた。

「うん……うん?」

粉雪は怪訝な顔つきで固まる。

一二三の返答は粉雪が想像したようなものでは無かったし、唐突に『危ない橋』と言われても特に心当たりが無かったからだ。

「自覚してない、か……君が霧雨魔理沙とか名乗って越軍の戦に参陣してるって聞いて、拙いと思つてすつ飛んで来たんだよ、私はね」

「ま、拙いのか!?!」

「むしろ何故拙くないと思つたのかな?」

君が今非常に拙い事になっている理由は4つある」

「よ、4つもあんのかよ……」

粉雪にはその理由が1つも思いつかず、想像すらもできていない。

そんな粉雪の様子に、一二三はふうつとため息をついた。

「まず1つ、先代様の様子を見に行くって話、御屋形様には伝わってない」

「え？」

「つまり典厩様の独断だって事だよ」

「ま、マジかよ……」

いきなり超大型の爆弾が投げ込まれ、粉雪は絶句した。

夕霧が命じて、粉雪は甲斐を離れ、越後へ来た。

当然、主君武田晴信にこの任務の事は報告されていると思っていた。

その前提が崩れ去ってしまった。

「マジだよ、残念ながらね。」

2つ目、君は越軍の戦に参陣した、霧雨魔理沙なんてバレバレの偽名を使ってね」

「そ、それはなりゆきで……だな……」

「要は御屋形様の目から見れば、君は無断で甲斐を抜け出して、

無断で越軍の戦の手助けしてるって事、拙いだろう」

「ああ、そりや拙いな……」

粉雪が今更ながら自分がしでかした事の重大さを自覚し、蒼褪める。

だがしかし、真の意味で粉雪が蒼褪めるのはこれからだ。

粉雪はまだ、今すぐ躑躅ヶ崎館に戻って光璃に土下座すれば許してもらえんと思つて
いる。

「3つ目、君は柿崎景家殿の……宿敵長尾景虎の腹心にして、

越後の切り込み隊長の夫である、斎藤九十郎という男に惚れている。

しかも君はそれを隠そうとしていた上、隠しきれずに周りにバレバレだった」

「あ、あたいが誰を好きになつても一―二三には関係無いだらうっ!!」

「関係無いと言えればどれ程幸せか!!」

「うっ……」

掴みかかってくるかのような勢いで反論する一―二三に、粉雪が思わず後ずさる。

彼女自身、敵と言つても良い立場である九十郎に恋慕している事に、決して小さくない後ろめたさを感じていたのだ。

「最後に4つ目、ある意味これは君のせいではないが、

ある意味ではこれが一番君を危うい立場に追い詰めている」

「ど、どういう事なんだぜ?」

「当然、君のお姉さんが裏切り者、謀反人だという事さ」

「姉ちゃんが……そ、そりゃあ姉ちゃんは昔、御屋形様を殺そうとしたけど……でもあたいはそれを御屋形様に知らせて、それで……」

「功と忠義を認められ、君は山県の性を賜った。」

知っているよそれくらい、甲斐では子供でも知っている事だからね。

しかしそれでも、君は謀反人の妹だ。

何かきっかけがあれば、君もまた姉と同じように裏切るんじゃないか……

そう思っている者は決して少なくないんだよ」

「あたいが御屋形様を裏切るなんて！ そんな事は絶対にありえないんだぜ！」

「君がどう思っているかは関係無い、周りがどう思うかが問題なんだ。」

君が九十郎の事を話す時、顔が綻んでいた事に気づいていたかい？

君が九十郎の事を話した時、周りの者の口数が急に減つてゐる事には気づいていたかい？」

「う………そ、それは………」

心当たりがあつた。

九十郎の話題が出て、親友の心の顔が僅かに曇つていた時が何度かあつた。

特に九十郎が越後の柿崎景家の夫になつたという報があつて以降は……

「で、でも……御屋形様なら分かってくれるんだぜ。

御屋形様だけは……あたいの忠義を……」

「へえ、そんなに優しい人かい？ 御屋形様が？ 武田晴信様が？」

「うう……」

粉雪は無言になる。

脳裏に浮かぶのは志賀城での惨劇だ。

志賀城に並んだ3000の首を冷徹な目で見つめる武田光璃晴信の姿。

そして光璃を裏切り、思い出すだけでも吐き気を催す程残酷に殺された姉の姿だ。

それは屑のオリンピックピックがあつたら金メダルでオセロができそうな姿である。

「次は君がそうなる。 そう言われて、 反論はできるかい？」

粉雪は咄嗟に何かを言おうとして……

その言葉があまりにも説得力が無い事に気がつき、黙り込んだ。

粉雪は絶望のあまり目の前が真っ暗になった。

自分の認識の甘さ、考えの浅さが情けなくて泣きそうになった。

「現状を認識してもらったようでは何よりだよ。

さて、そうなる君が辿るであろう末路は3つ考えられる」

一方、一二三は平常運転である。

最初に暗あくい現実を突きつけ、絶望させ、そこから救いの蜘蛛の糸を垂らす。

一二三の……真田昌幸お得意の人心掌握術である。

それは屑のオリンピックがあつたら、あの劉玄德やあの武田晴信とも互角に戦えそうな程の手腕である。

もしこの場に呂奉先がいれば、『騙されるな粉雪！ そいつこそが食わせ物だあ！』と叫んだ事であろう。

「み、3つ……？」

「1つ目、甲斐に戻つて御屋形様に斬首される。

良くて君一人、一歩間違えれば一族郎党巻き込んで志賀城再びだね」

「そ、それは勘弁してほしいんだぜ」

「君ね、私が越後に来てなかつたら十中八、九そうなつていたんだよ」

「す、すまないんだぜ……」

「2つ目、本当に裏切つて越後に永住する。

たぶん長尾景虎殿は喜んで君を迎え入れるだろう、先代様もね。

君は助かるだろうけど、甲斐に残っている君の一族は皆殺しだろうね。

ちなみに私はこれを一番お勧めする」

「御屋形様を裏切るなんてできないんだぜっ!!」

「そうだね、君はそうだ。君は私と違って他人を裏切れるような性格をしていない。

君のその性格を理解している人は、君が裏切るかもしれないとは思わない。

「ただ問題なのは？」

「ま、周りがどう思うかだぜ……」

「そうその通り、君は九十郎を好きなり、それを周りに示してしまった。

周りの者はこう思う……九十郎のために甲斐を、武田を裏切るかもしれない、

姉と同じように謀反を起こすかもしれないと」

「う……そ、それは……」

「いっそ武田を出奔して、九十郎の元に身を寄せてしまおうかと思つた事はある。

それも一度や二度ではない。

粉雪は、粉雪自身ですら、山形昌景は裏切らないと断言できなかつた。

「よろしい。それでは3つ目の予想される末路は……」

「ま、末路は……」

粉雪がごくりと唾を飲み込む。

「ここまでもつたいぶつたのだ、きつと前の2つよりもずっと恐ろしくて悲惨な末路に

違いなと思つた。

だが……

「君は甲斐に戻って、御屋形様にも斬首されない……そういう良いところ取りの未来だよ」
「そ、そんな事が出来るのかぜ!？」

地獄の底で天へと繋がる蜘蛛の糸を見たかの如く、粉雪が身を乗り出して食いついてくる。

これも真田昌幸流の人心掌握術である。

「具体的な方法はこれから考える。先に言っておくけれど、相当か細い道だよ。

私が2番目の道が一番お勧めだと言ったのはそのためだからね」

なお、そのための方策は一二三にも見えていない。

早い話がハツタリである。

「だ、大丈夫なのかよ……?？」

「要は越後に来たのも、霧雨魔理沙を名乗って越軍の手助けをしたのも、

全部憎き長尾景虎を討つための策でしたと言い張るのさ」

「な、成る程、それならどうにかできそうなんだぜ」

「へえ、できるのかい?？」

「そりゃあ、もちろん……」

そう言われて、自分が光璃の前で弁明をする姿を想像してみる。

越後に来たのも、霧雨魔理沙を名乗って越軍の手助けをしたのも、全部長尾を討つた

めの策ですと言つたは良いが……ぶつちやけその論理には説得力というものがカケラ程も存在しなかつた。

「……何をどう言えば、納得してもらえるんだぜ？」

「うんうん、自分にできない事を理解してくれてるでも有難いよ」

一二三が自分に任せなさいとでも言いいたげな自信に満ちた顔で胸をどんと叩く。

もつとも、彼女自身も光璃を巧く誤魔化す架空の策なんて思いついていないのであるが。

「とりあえず、ここちに来てから見た事、聞いた事を教えてもらえるかな。」

色々考えてみるからさ」

正直な所、粉雪は絶体絶命の窮地に立たされていたし、状況も分からないままに空と名月の後継者争いに関与し、負けたら劍丞の嫁になるなんて馬鹿げた賭けに相乗りした一二三もまた、粉雪よりマシとはいえ、それなりに危うい立場になっている、

だが一二三は、そんな断頭台一步手前の状況を楽しんでいた。

……

……

……

「ひー、ふー、みー、つと……ぱつと数えられただけでも3人か。」

こんなか弱い乙女相手に大げさな事だよ全く」

軒猿と呼ばれる長尾の密偵達が自分を尾行している事を確認し、一二三（歴史に名が残るレベルの屑）がげんなりとした表情で肩を落とす。

急いで越後に来たために、親友にして凄腕の密偵でもある湖衣（凄い善人）は着ていない。

それ故に監視している軒猿が何人なのかは正確には分からないし、襲い掛かってこられたら成す術も無く殺されるだろう。

体調が万全なら1人で100人以上は惨殺できる粉雪には全く監視がついていないのに、どう頑張つても2〜3人が限界な一二三にはがつつりと監視がつくのは、何をしでかすか分かったもんじゃないうまいナス方向での信頼があるが故だ。

正直な話、粉雪が内部からの攪乱などという器用な真似ができない事は、美空にも、光璃にも、当然一二三にも分かっている。

それ故に一二三は危険を覚悟で、自ら空と名月の後継者争うに飛び込んだのだ。「さて……」しばらく、御屋形様は織田の天人殿にご執心の様子。

生き残りの鍵は新田劍丞様になるかな？ 上手く甲斐まで連れて来られれば、多少怪しい部分があつてもお目こぼし頂けると思うけど……」

そこまで考えた所で、一二三は前方に新田劍丞と斎藤九十郎がいる事に気がついた。

2人を探していた……という訳ではない。

光璃を巧く誤魔化すプランを練りながら、適当に歩いていただけだ。

そしてそんな一二三の目の前で、劍丞が九十郎に殴り掛かり、胸倉を掴んで掴み上げ

……劍丞が肩を強張らせながらその場を立ち去っていった。

「おや、喧嘩かな？」

怒りに任せて拳を振り上げるような性格には見えなかつたけれど……」

一二三が劍丞と鉢合わせしないよう、物陰に隠れながら様子を伺う。

しばらく様子を見ていたが、劍丞が戻ってくる気配は無く、九十郎は劍丞に殴られた頬をさすりながら、じくつと座り込んだままだ。

「ふうむ……」

様々な推論、様々なプランが浮かんでは消える。

頭を高速回転させながら、ゆっくりと一二三が九十郎に近づく。

劍丞が勝つか、九十郎が勝つか……そのいずれかがによって、一二三がするべき立ち回りは大きく変わる。

ここで読み違えると本当に粉雪共々刑場の露と消える羽目になりかねない。

だから一二三は九十郎の様子を見に行った。

「……あ、駄目だこりゃ」

そして九十郎の顔を見た瞬間、一二三は劍丞が勝つと確信した。

九十郎はガタガタを震えて、怯え切っていた。

負け犬の顔であつた。

勝ち負けどころか、勝負が成立するかすら危ぶまれる姿であつた。

当の本人の戦意が0では、戦いになる筈が無かつた。

だから一二三は、越後の後継者争いは劍丞が勝つという前提で策を練り始める。

空達の足を巧妙に引つ張り、名月や劍丞に恩を着せ、その上で織田と長尾の仲は決定的に決裂させる策を……

「あつ……!?」

……拙い、と思つた。

自分の病気が出てしまうと思つた。

自分自身を滅ぼしかねない大病が出てしまうと思つた。

しかし、一二三にはそれが分かかっていてもどうしようも無い。

元より抵抗は不可能なのだ。

だがしかし、一二三はその明晰な頭脳と観察力で気づいてしまった。

この状況下で九十郎が勝つ可能性を。

か細いながらも、確かに存在する可能性を。

九十郎の戦意が完全に萎えている理由を。

「や、やあつ！ 元気が無いじゃないか、どうしたんだい？」

微妙に声を強張らせながら、一二三が九十郎に話しかける。

九十郎は幽鬼のような目で一瞬だけ一二三を見上げるも、すぐに視線を落としてしまった。

だが一二三は若干興奮した様子でさらに話しかけ続ける。

「や、やだなあ、今は味方同士なのだから、そんな態度は無いだろう」

「……放っておいてくれ」

九十郎はそう呟くと、また黙り込む。

だが一二三は自分の気づきに、そしてその気づきがもたらした大病に胸を躍らせていた。

一二三は大病を患っていた。

「話、聞かせてくれないかな？」

一二三はそう言うのと、九十郎の隣にちよこんと座った。

鶏口と為なるも、牛後と為なる無なかれ……大きな集団や組織の末端にいるより、小さくても良いから長となって重んじられるという言葉はあるが、現実問題としてその言葉を体現できる者は滅多にいない。

負けそうな者を助けるよりも、勝ち馬に乗った方がよっぽど楽だし、実入りも大きいからだ。

だがしかし、一二三は違う。

放つておいても勝てる者を勝たせて何が楽しいのかと思つてしまう。

命も賭けずに評論家の真似事ばかりする者を心の底から軽蔑してしまふ。

十中八九で負けると分かつていても、残りの一二に全てを賭けてしまいたくなる。

一二三はそういう病気を患つていた。

正直に言つて一二三は、自分はこの病気で死ぬだろうと思つている。

どこかで計算を違えて、見るも無残な死に方をするだろうと思つている。

布団の上で子供に囲まれて……とはいかないだろうと思つている。

だけど一二三には、その病を抑え込む事ができないのだ、どうしても。

それはきつと死に至る病だろうと思つていた。

自らを破滅に導く大病だろうと思つていた。

それでもなお、一二三はその病を抑えられなかった。

だから……

「力になるよ、損得抜きでさ」

だから一二三は、九十郎の肩に手を回し、そう語り掛けた、その言葉に一切の嘘偽り

は無かった。

自分が何のために越後までわざわざ出向いたのかを、光璃を巧く誤魔化さなければ粉雪共々殺されかねない事を、今この瞬間だけは忘れていた。

いや、それだけではない。

歴史だけは長いが、吹けば飛ぶようなド貧乏大名であった頃の武田晴信ならばともかく、戦国の巨獣とまで畏れられる今の武田晴信を裏切り、蹴落とす、その首級を前に高笑いをしたら楽しいんじゃないか……そんな背徳的な誘惑が胸をよぎっていた。

「俺は……俺は昔……惚れた女がいたんだよ……」

そして一二三にとって幸運な事に、九十郎にとって一二三は、ただの一二三だった。

前田利家ではなく、上杉謙信でもなく、山県昌景でもない……歴史上の偉人ではない、ただの一二三に過ぎなかった。

後日九十郎は自分の生い立ちや、当時の心境を一二三に……真田昌幸に説明した事を死ぬほど後悔するのであるが、後の祭りである。

犬子と柘榴と九十郎第84話 『英雄も、所詮は人間』

「……英雄も、所詮は人間」

武田光璃は九十郎にそう告げた。

「そうか」

九十郎は無感情に頷く。

正直どおしくても良いとでも言いたげな表情であった。

「殴られれば鼻血も流す」

光璃の鼻の穴には赤く染まったティッシュが詰められていた。

さつき全力で叩いて被つて被つてジャン・ケン・ポンという命令に当たり、鬼島桃子の超高校級のパワーでブン殴られたためだ。

「時には下痢になつて悶絶もする」

光璃はさつきまでケツが燃えるとか叫びながらみつともなく転がつていた。

ちよつと前に激辛マーボー三皿完食という命令に当たり、明らかに人間が食して良い代物ではない紅い物体を胃に流し込んだためだ。

「そして社会的に死ぬ時もある」

光璃は虚ろな瞳で遠くを見つめていた。

開幕1発目にとりあえず額に『肉』という命令を自爆し、しかもその直後に、秋月八雲と恋人繋ぎをしながら避妊戦士コンドムを買いに行く命令に当たったためだ。

当然、額の肉は王様ゲームが終わるまで消す事は許されない。

「英雄も一皮剥けば所詮は人間。時に笑い、時に怒り、時に泣き、時に眠る。

成功もする、それと同じ位、失敗もする」

「……そうか」

光璃は九十郎の両肩に手を乗せて、そつと身を寄せる。

なお、九十郎も九十郎で先程ローション相撲をしたばかりなので、全身ローションまみれである。

「ただだけ深刻な表情で、ただだけ深刻な台詞を言ってもギャグになってしまう、逆にならざるを得ないシチュエーションであった。」

武田晴信を知る人物が見たら卒倒するようなシチュエーションであった。

「貴方が教えてくれた事、貴方が思い出させてくれた事。」

光璃は……人間だった、人間に戻れた……ただの光璃になれた」

光璃はそう言う……ポッキーを口に啣えて、九十郎に顔を近づけていく。

「命令を自爆した直後じゃ無けりや感動したかもな」

九十郎がため息をつく、光璃の唾えたポツキーの反対側を口に入れた。

つい先程、『キメ顔で何か恰好良さげな事を言ってからポツキーゲーム』という命令を出し、指定した番号札を引いていたのが自分だった事に気づいたのだ。

早い話が光璃は本日2度目の自爆をしたのだ。

光璃は顔を真つ赤にしてプルプルと震え始めた。

このバカ騒ぎが始まった直後、とりあえずノーパンになれという朱金の命令が直撃し、今までずっとノーパンミニスカートという痴女臭い恰好にされているのだ。

それは『こいつ武田信玄です』と言われても、誰も信じてくれそうもない恰好である。

光璃と九十郎が両端から一本のポツキーを噛み進んでいく。

顔が近づき、唇が近づき、吐息が近づき、そして……ぼきん、と折れた。

「はい、折れたつと……次行くぞ、次」

「むう……」

ちよつと残念そうな声が周囲から漏れる。

その中でも一番残念そうに頬を膨らませたのは光璃だった。

光璃は少しだけ……いや、かなり切実に、ポツキーゲームの勢いで九十郎とキスがしたいと思っていたのだ。

「俺が……俺達が！ ガンダムだっ!!」

その時、現在ノーパン＋ブラを頭に装着中の吉音がキメ顔でそう言った。

「吉音、いきなり何を言ってるんだ？」

隣にいる八雲が呆れた顔で聞き返す。

「狙い撃つぜっ！」

吉音が再びキメ顔、謎ポーズつきでそう言った。

「うん、吉音がガンダム好きなのは分かったから」

「反射と思考の……融合だあっ!!」

吉音がクルツと回ってターンしてからそう叫ぶ。

八雲は『今一瞬見え……』と、言いかけたがやっぱり言わずに黙った。

吉音とは既に何度も裸を見せ合い、何度も身体を重ねた八雲であるが。

それはそれとしてこういう一瞬のチラリズムには特別な感情を抱いてしまう。

八雲もまた、そういう思春期の男の子であるのだ。

「もしかして……ポッキーゲーム、したいの？」

吉音はにっこりと笑ってコクコクと頷く。

「命令に当たってないのに参加するのはルール違反だよ」

「じゃあさ、次に八雲が王様になったらポッキーゲーム命令してよ」

「吉音の番号に当たるか分からないぞ」

「大丈夫大丈夫、八雲ならできるよ。そんな予感がする」

「そうかなあ……」

そう言いながらも、八雲は後で律儀にポッキーゲームの命令を出した。

そして吉音は佐東はじめとポッキーゲームをする羽目になり、『コレジヤナイ……』と、眩くのであるが、それはまた別のお話である。

「よし、カードのシャッフルができたぞ。」

それじゃあ全員番号カードと王様選出カードを一枚ずつ引いてけ」

全員が机に並べられたカードを引きに集まったところで……

「待たせたわね！ カードは拾ってきたわ！」

スケスケのネグリジエ装備の徳河詠美が帰還する。

凝視すれば生乳首やパンツが薄っすらと見えるなんとも痴女臭い恰好であるが、当然この恰好をする羽目になったのは彼女の意思では無く、王様ゲームの命令故にだ。

「え、詠美ちゃんおつかえり〜」

「九十郎！ カードは拾ったわ！ おい、デュエルしろよ！」

ぜえはあと肩で息をしながらそう叫び……

「え、やだよ」

……普通に断られた。

「貴方がやれって言ったんでしようがあっ!!」

「いや、俺遊戯王やった事ねえし、カードも持ってねえよ」

「じゃあ拾ってきなさいよ! 大変だったのよカード屋巡ってゴミ箱漁って、

カード屋巡ってゴミ箱漁って、カード屋巡ってゴミ箱漁って……」

この男は将軍（しかもネグリジエ装備）に何をやらせているのであろうか。

「やだよ、めんどい」

そして九十郎はバツサリと切り捨てる。

詠美は轟沈した。

「じゃあ詠美も復帰で次やるぞ。 王様だくれだ!」

「「「王様だくれだ」」」」

参加者一同が一斉に王様選出カードを表に向ける。

この時点では命令対象者を決める番号カードは開示しないし、自分のも確認してはいけない事になっている。

酷い命令が自分自身に直撃すると笑えるからだ。

「お、俺だな。 それじゃあ……」

5番と7版は最高に高めたファイルで最強の力を手に入れてこい。

もつと速く疾走れーっ!!」

ここで九十郎が意味不明な命令を出した。

ここで自分に当たる可能性を考え、手料理を食べさせあえとかいった無難な命令を出す者（詠美や平良）もいれば、ノーブラになってブラジャーを頭に装備とか、自分に直撃する可能性を度外視して、全力でブッコんだ命令を乱発する者（光璃、輝、朱金）もいる。

そして九十郎は最初から最後まで後者である。

「ちよつと待ちなさい！」

何をどうすれば良いのか全く分からないわよっ！ 走れば良いの!?!」

そして命令は戻ってきたばかりの詠美に直撃した。

「その辺はファイリングで何かしてくれ」

「ファイ、ファイリングって貴方……」

「とりあえず白馬に乗って走りながらデュエルすれば良いんじゃないかな？」

愕然とする詠美に対し、吉音助け舟（？）を出した。

「それだ」

「それじゃないわよ！ 白馬なんてどこに……」

「銀シャリ号の事、忘れちゃったの？」

「……いたわね、白馬」

「平良賀、確か昔デュエルディスクを作ってたよな？」

「あつたよ！ デュエルディスク！」

「でかした！」

平良賀輝（こいつもローションまみれ）がどこからともなく円盤状の機械を持ち出し、素早く詠美に装着させる。

「え……ちよつと待って、

もしかして本当に馬に乗りながらデュエルしなきゃいけないの……？」

「となると当然、デュエルの相手は7番のオレだな、デュエルディスクもう一個あるか？」

「モチのロンさね！ 2個以上ないと遊べないからね！」

大江戸学園の町の正義と平和を守るお奉行様こと、北町奉行遠山朱金が愛用のデツキを用意し、輝作成のディスクに挿入する。

先程ノーパンノーブラの状態で、パンツとブラ以外全部脱げという命令を自分自身に直撃させたため、彼女は現在全裸であった。

それで良いのか北町奉行……と、言いたい者も居るかもしれないが、これが彼女の平常運転である。

「乗り物はどうする？」

「九十郎のサイドカーで良いんじゃないか」

「遠山は運転が荒いから、あんま貸したくねえんだがな」

「じゃあ自分で運転しろよ、オレは隣に乗るからよ」

「そうだな……そうするか」

「おい、外に出る前に何か羽織ってけ。」

北町奉行がわいせつ物陳列罪で捕まったら流石にシャレにならん」

九十郎がサイドカーの鍵を、火盗長官の長谷河平良（パンツとブラ以外全裸）がロングコートを支金に投げ渡す。

無いよりはマシかもしれないが、全裸＋コートの格好はそれで痴女っぽい。

「よっしゃ、行cule 詠美……デユエルだ！」

詠美の右手を九十郎が、左手を支金ががしりと掴み、『最早逃れる事はできんぞ』とばかりに連行していく。

それで良いのか北町奉行……と、言いたい者も居るかもしれないが、これが彼女の平常運転である。

「……もう二度と、王様ゲームやろうなんて言わないわ」

死んだ魚のような目で、詠美はぼそつと呟いた。

なお……

「……あ、禁止カードを読み込ませたら電流が流れるよつて言うの忘れてた。

まあ良かったか、禁止カード使わなきゃ普通に遊べるし」

……バリバリバリバリッ!!

「ぎやあああああーっ!!」

「ぬわあああああーっ!!」

どんがらがっしやーっ!!

遠山朱金、斎藤九十郎、再起不能（リタイヤ）。

九十郎のサイドカーは電柱に激突して大破した。

敗因は反則負けである。

……

……

……

「……せえいつ!!」

「たああっ!!」

柘榴と粉雪が、同時に竹刀を振り抜いた。

竹刀がメキメキと音を立て、ひしゃげ、両者がはじかれるように飛びのき、距離をとる。

「……さらやるようになったな、柘榴」

「相変わらず腹立つくらいに強いっすね、粉雪」

2人共ぜーはーと肩で息をしている。

かれこれ半日近くもの間、2人はこうやって戦いを続けていた。

互いの力と技をぶつけ合ってさせていた。

互いに意地と覚悟を確かめ合うかのように。

武田最強の勇将と、長尾の切り込み隊長が、殺し合う為ではなく、互いの実力を確かめ合い、磨き合う為に戦う……過去の武田と長尾の確執を知る者からすれば、あり得ない光景であった。

そして今、柘榴と粉雪の実力は拮抗しつつあった。

かつては果てしなく遠かった実力差が、ほんの僅かな差異となっていた。

過去の柘榴と粉雪の戦績を知る者からすれば、それも有り得ない光景であった。

九十郎が越後に来た日から一日も欠かさず続けた鍛錬が……長い年月と共に洗練された技と筋トレ理論が、柘榴を数段強くしていたのだ。

「ようやく影くらはいは踏めるところまで来たってところかぜ？」

「背中に触れる位までは近づいたつもつりすよ。」

「そつ首叩き落とせるまであと半歩ってところっすかね」

「良く言ったぜ……だがその半歩は限りなく遠いんだぜえっ!!」

既に腕を上げる事すらも億劫な程に疲弊した2人が、最後の力を振り絞って駆けだした。

粉雪は柘榴を、柘榴は粉雪の首を狙い、手にした竹刀を振り下ろす。

直後、ばあんっ!! と何かが破裂したかのような音が道場に鳴り響き、派手にぶつ飛んだ柘榴の身体が、派手に壁に叩きつけられた。

一瞬……ほんの一瞬、されど果てしなく遠い一瞬の差で、粉雪が柘榴の速度を上回っていたのだ。

「ま、まだ届かねーっすか……」

実戦ならば、互いに真剣を使っていれば、間違い無く即死の一撃……文句をつけようもない、柘榴の敗北である。

「はんっ、伊達や酔狂で武田四天王は名乗れねえって事だぜ」

10戦10敗……それが今日の柘榴と粉雪の戦績であった。

2人の勝負は全て紙一重の差であった。

全ての勝利が粉雪にとって薄氷を踏むようなギリギリの勝利であった。

だがしかし、柘榴はその紙一重がどうしても突破できなかった。

「どうする? もう一本行つとくか? あたいはまだまだイケるぜ」

粉雪はそう言うが、体力の限界はとつくの昔に過ぎている。全身に乳酸が飽和し、気力だけで立っている状態であった。

「お前ら、朝っぱらから騒がしいぞ。他人の安眠を妨害して楽しいのかよ？」

そこに、寝ぐせと目ヤニを満載した九十郎がやって来た。

「朝っぱらつて、もう昼過ぎなんだぜ、九十郎」

「今日は随分とお寝坊さんつすね、ちゃんと眠れたつすか？」

九十郎は言うべきか、言うまいか少し迷い……

「久々に、光璃の夢を見た」

この日、九十郎は前の生でのファースト幼馴染……武田光璃の夢を見た。

光璃がある日突然『王様ゲームしようぜ』と言い出し、仲間を集めて王様ゲームを始め……何故か光璃にばかりハードルの高い命令が集中した夢。

前の生で九十郎が体験した事を追憶するかのような夢だった。

「光璃……？」

急に九十郎の口から主君、武田晴信の通称が出てきたため、粉雪が目をはちくりとさせる。

「俺の幼馴染だよ」

「そ、それってもしかして……あたいの……しゅ、主君だったり……」

「んな訳ねえだろ、俺の幼馴染がこの時代に……」

いや、とにかくずっと昔に生き別れになってな、ずっと遠い場所にいるんだよ、

武田晴信の通称が光璃って事は知ってる、だが別人だよ、完璧に」

「そ、そうなのか……」

そう言われて、粉雪はほっとする。

しかし、この時の九十郎は気づいていないが、九十郎が思い浮かべた人物と、粉雪の思い浮かべた人物は同一人物である。

この察しの悪さこそ、九十郎の九十郎たる所以である。

「なあ、粉雪……山県昌景にも、怖いものつてあるのか？」

九十郎は小さく、自問自答するかのようにそう呟いた。

『……英雄も、所詮は人間』

前の生で光璃に言われた言葉を思い出していた。

そして昨晚、『剣丞が怖い』『好きが無くなってしまるのが怖い』と、涙をボロボロと零しながら怯える美空の姿を思い出していた。

あんなに怯えない美空を見たのは初めての事だった。

情けなく怯える美空を見て……美空も自分と同じ、人間だったのではないかと思っ
た。

だから九十郎は聞きたくなつたのだ。

山県昌景にも……歴史上の偉人である山県昌景にも怖いものがあるのかと。

「そりやあるぜ、当たり前だろ」

「そうなのか？」

「怖くて、恐ろしいから腕を磨いたんだぜ。

腕を磨いて、鍛え上げて、どんどん強くなつて……

強くなつてから見た景色は、あたいが望んだ景色じゃなかつたけどな」

そして粉雪は思い出す。

砥石城での敗走を、初めて戦う鬼の強さと怖さを、次々と戦友達が傷つき、疲弊し、力尽きていく恐怖を、落ち武者狩りに襲われ、武器も衣服も取り上げられ、あと少しでの連中の男根が……あの時は本当に怖かつたと思う。

「……本当に、安っぽい物語みたいな恋をしたもんだぜ、あたいも」

怖い思いをして、ガタガタ震えていた所を助けに来てくれた、だから好きになつた。

粉雪は自分が凄く単純で安っぽい恋のしかたをしていると思ひ、自嘲する。

だがそれでも……主君・武田晴信に裏切り者と見られる危険を考えたとしても、粉雪は九十郎が好きだつた。

九十郎が好きだという事だけは否定できない、捨てられない。

「そこが御大将の凄い所つすよ」

そして柘榴が胸をどーんと張りながら、愛菜のようなドヤ顔をする。

柘榴も柘榴でしつかりきつかり九十郎の悪影響を受けていた。

全部九十郎が悪い。

「まあとにかく、御大将は頼りになるし、誰よりも先を見るけど、

時々……うん、時々何考えてるか分からなくて、時々それが凄くおつかなくて……

凄い人だし、尊敬できるけど、それと同じくらい怖い人なんだぜ」

「そうかそうか、粉雪も大変だったんだな……」

そう言いながら、九十郎は思う。

たぶん、昨日までの自分なら聞き流していたと。

山県昌景に怖い物があのかよと笑い飛ばし、すぐに忘れてしまっただろうと。

だが今は、美空の涙を見てしまった今は……

「実を言うとな、俺はあの時、

山県昌景のサイン貰えてラッキーだったぜ、くらいしか思っていなかったんだよ」

「お前のサイン好きはどっから来てるんだぜ」

「後でファースト幼馴染に自慢してやろうって思ってたんだよ。」

あいつ山県昌景のファンだからな……まあ、見せる手段ねえんだが」

「柿崎景家のサインならいつでも渡すつすよ」

「え、いらねえよ柿崎なんて聞いた事ねえし」

この男は日本全国の柿崎景家ファンに土下座して詫びるべきである。

「まあ、それはそれとしてだ……すまん粉雪、俺は今までずっと、

あの時助けに行かなくても、山県昌景ならなんとかしてたと思っていた。

山県昌景なら、歴史上の偉人なら、

俺が助けに行かなくても自力でどうにかしてたと思っていた。

助けても助けなくとも、結果はあまり変わらないと思っていた、ずっとな」

「そんな事は……」

粉雪が九十郎の言葉に反論しようとした瞬間……バツファローマンのような大柄な男が、幼女のように小柄な粉雪を力強く抱きしめていた。

「今は、助けに行つて良かったと思つている。

結果を変えて良かったつて、粉雪を助けられて良かったと……そう思つている」

瞬間、粉雪の血液が沸騰する。

瞬間、粉雪は本気で耳が孕んだかと思つた。

九十郎はこれでもかって位のブ男であつたが、声だけはイケメンだつた。

そんな九十郎が粉雪の耳元で、そつと囁いたのだ……助けられて良かったと。

「た、助けてくれて……あ、ありがとう、なんだぜ」

粉雪は跳ねまわる心臓を抑えながら、粉雪は震える声でそう伝える。

そして思う……やっぱり自分は九十郎が好きだと。

前からずつと好きだった、今のもつともつと好きになったと。

「犬子にも謝らないとな……なあ柘榴、犬子は今どこで何をしているんだ？」

例の……例のアレがあつてから一回も見えてないが」

例のアレと口にした時、九十郎は露骨に顔を歪める。

時間が経つて多少はマシになったが、それでもあの時……犬子が剣丞に抱かれていた

瞬間を思い出すと、背筋が凍る、怖気が走る。

だが……

「謝らねえとな、謝つてどうなるって話でもねえが、謝らねえと。」

考えてみりや俺は、犬子に結構酷え事を言ってきた」

今更反省した所で、所詮貴様は九十郎である。

しかし、柘榴の目からも、粉雪の目からも、今日の九十郎は明らかに違って見えた。

「俺は……俺はどつかで、犬子は泣かないし傷つかないとも思ってたのかもな。」

いや、たぶん思ってたんだろう。

だから何度も、前田利家は劍丞の嫁になった方が良いつて……俺は……」

この日、九十郎は珍しく自らの言動を恥じていた。

本当に珍しく己の行動を省みて、後悔をしていた。

九十郎は前田利家も、上杉謙信も、山県昌景も同じ人間だと思つていなかった。

自分という存在が前田利家に、上杉謙信に、山県昌景に影響を与えとは思えなかつた。

前田利家や上杉謙信、山県昌景に好かれるなんて思いもしなかつたし、信じられなかつた。

前田利家だから出会つた、前田利家だから愛されない、ただの犬子とは思えない。

山県昌景だからであつた、山形昌景だから愛されない、ただの粉雪とは思えない。

上杉謙信だから出会つた、上杉謙信だから愛されない、ただの美空とは思えない。

だが今は……

「九十郎、何かあつたつすか？ 今日はいつとも雰囲気が違うつすよ」

そう言われて、九十郎は昨晚の出来事を思い出す。

美空が泣いていた事を。

美空が劍丞を怖がつていた事を。

美空をキスをした事を。

美空が柘榴と同じか、それ以上のキス魔であった事。

何度も何度も、何度も何度も何度も何度もキスをせがまれた事。

もう一回とか、次が最後とか、今のうちにキス溜めしときたいとか、九十郎分が足りなくなるとか色々言ってきた……端的に言って、夜が明けるまでひたすらイチヤイチャし続けた事を思い出す。

信じがたい事に……

「信じがたい事に……俺は上杉謙信……じゃねえや、長尾景虎に影響を与えていたらしい。」

長尾景虎を変えていたらしい」

九十郎がそう呟くと、柘榴と粉雪が顔を見合わせる。

そして同時にふっと笑みがこぼれた。

「何だよ、今までずっと気づいて無かったのかぜ？」

「御大将は変わってるっすよ」

「昔の景虎は今と違って、街中をチャリで爆走したりしないし、

唐突にテールスピン・ドリフトオーツ!! とか叫んだりしないんだぜ」

「眉間に皺が寄る回数が減ったっす。お酒の量も減ってるって噂っすよ」

「景虎は……いや、美空は変わったんだぜ。あたいには分かるぜ」

「そつすよ、九十郎」

かつて九十郎のファースト幼馴染は『英雄も所詮は人間』と言った。

王様ゲーム中、ネタ命令（しかも自爆）で発した言葉だったので、

当時の九十郎は聞き流して、気にも留めなかったが……今になって思い返してみれば、奇妙な説得力のようなものを感じた。

「英雄も所詮は人間……か……」

九十郎は心のどこかで、犬子や美空、粉雪を人間と思っていないかった。

人間と思っていないから、相手がどう思うかとか、相手がどう感じるかとか、そういう事を考えていなかった。

九十郎は思う、自分の存在は犬子や粉雪も変えたのだろうか。

自分と出会わなかった犬子と粉雪は、自分が知る犬子や粉雪と違うのだろうか。

もし自分と出会わなければ、犬子も粉雪も、新田劍丞に……

かつて見た、犬子と粉雪が劍丞に抱かれる夢を思い出し、九十郎は少し吐き気がした。

そして九十郎は……

「やっぱ、渡したくねえよな、劍丞には」

その言葉を聞き、柘榴と粉雪はもう一度顔を見合わせる。

「本当っすか!? 本当に本当っすか!？」

「誰をなんだぜ!? あたしもそこに入ってるのかぜ!?

入ってるって言ってくれなんだぜ!」

若干食い気味に柘榴と粉雪が九十郎に詰め寄る。

負けたら自分達が剣丞の嫁になると宣言したものの、今一やる気を見せない九十郎に
対し、思う所があつたのだ。

「剣丞には渡せねえよ、柘榴も、美空も、粉雪も……」

九十郎は剣丞に抱かれる犬子の姿と、自分を好きだと叫んでいた犬子の姿を交互に思
い浮かべる。

九十郎に捨てられると泣いていた犬子の姿も思い浮かべる。

怖い怖いと泣いていた犬子の姿を思い浮かべる。

何がどうなつたのかとかは聞いていないし、知らないし、分からないが……

「……犬子も渡せねえ」

九十郎は自分自身に言い聞かせるように言った。

瞬間、柘榴と粉雪の顔がぱあっと明るくなった。

とりあえず貞子と雫は九十郎を殴っても良いだろう。

「じゃあ勝たねえとな、なんとしても」

粉雪はかつて九十郎から贈られた魔理沙っぽい帽子を深々と被りなおす。

粉雪はまたもや自称霧雨魔理沙として空と名月の後継者争いに首を突っ込むつもりである。

「当然、柘榴も手を貸すつすよ」

「そりゃ心づよ……おい、公平を期すためにお前は介入禁止だつて言つてなかつたぜ」

正論だが、霧雨魔理沙と言い張つて参戦する気満々の粉雪が言つて良い台詞ではない。

「まあまあ、粉雪が通りすがりの霧雨魔理沙つて事で通るなら……」

当然、柘榴も同じ手段が使えるつて事つすよ」

そう言ううと柘榴は押入れの奥から衣装入れの箱を引つ張り出し、奥からこの時代にはそぐわない形状の衣服を取り出した。

「そ、それは……お前、マジかよ……」

それが何かに気づいた九十郎が、思わず蒼褪める。

こいつまさかコレを着て戦場に出る気じゃあるまいなと考える。

それはかなり大胆なスリットが入られた緑色のチャイナドレスと、星型のバッチが付けられたベレー帽……紅美鈴が着ている衣装に似せて作られたコスプレ服だ。

「そう、九十郎がこすぶれえつち用に作った衣装つすよ。」

これを着て通りすがりの紅美鈴とでも言い張れば万事解決つす」

柘榴が三つ編みを解き、彼女の長く綺麗な髪がバサツと広がる。

柘榴が持ち出した衣装はコスプレエッチ用に作っただけあって、チラリズムの見地から計算された下半身の露出が、非常に魅惑的な様相を呈している。

早い話、戦場における実用性は全く考慮されていない上、男を誘ってるのかと思うような格好であるのだ。

露出度と言う意味では柘榴の普段の格好の方が上だという点には目を瞑ってもらいたい。

いずれにせよ確かな事は……

「足引つ張るんじゃないぜ」

「柘榴はもう誰にも止められねーっすよ。愛のパワーっす」

「ありがとな、柘榴、粉雪。俺が劍丞に勝てるかは分からないが……やってやるさ」

いずれにせよ確かな事は……劍丞と九十郎の双方に戦意が宿った事だ。

それ故に、今この瞬間、劍丞と九十郎の戦いが始まったといえよう。

……

……

……

「納得できませんわっ!!」

一方その頃、名月は後継者争いを中止しろと美空に詰め寄っていた。

犬子と柘榴と九十郎第85話 『忘却と情愛のルーン』

シャー……シャー……と、砥石の上に刃物が滑る音がする。

一振りの刀を無言で研ぎ続ける少女がいた。

殺意と凶器が混じり合った、鬼気迫る表情であった。

……

……

……

「納得できませんわっ!!」

ある日の昼下がりの事、名月は後継者争いを中止しろと美空に詰め寄っていた。

「……まあ、そういう第一声が来るんじゃないかとは思ってたわ」

昨晚これでもかって位に九十郎とイチヤつき、九十郎分を存分に摂取した美空は大して悪びれもせず名月に応対している。

越後一……いや、日ノ本一のツツコミ名人である美空を動揺させるには、今の名月は迫力とか勢いとかが足りていないのだ。

「それで、名月は何が不満なのかしら？」

「決まっていますわ！ 今度の後継者争いの事です！」

お互いに人脈を辿って人を集めて決戦……いえ、それは良いのですが、
どうしてそれに美空様の結婚を結びつける必要があるのですのっ!？」

「女の意地よ」

ただ単に頭を空っぽにして突っ走った結果でもある。

「おかげで美空様に恩義を感じている方達が大挙して空さんの陣営に流れていますわ！」

あんな訳の分からない男に美空様を渡せるかゝつて！」

「それが不満？」

「不満に決まっていますわ！」

実力で挑んで負けるならともかく、こんな理由で負けるなんて！」

「不公平って言いたいの？」

「そうです！ 不公平ですわ！ 平等じゃありませんわ！」

「何を言ってるの、素でやってもそれはそれで不公平じゃない。」

元々ね、名月、貴女には実家の力……

つまり北条の後ろ盾という大きな大きな強みがあるの。

純粹に本人の資質と能力を競わせるのであれば、

空の方に何かしらの下駄を履かせないと正直勝負にならないわ」

「うっ……」

痛い所を突かれ、名月が数秒硬直する。

美空がツツコミ……もとい指摘した通り、名月には北条の名やコネを利用した交渉術があり、財力もあり、人も動かせる。

使えば使う程北条の影響力が強まり、使い過ぎると北条の傀儡政権が成立する諸刃の剣であるが、後先考えなければ空を圧倒するのはそう難しい事では無いのだ。

それ故に並行世界の美空は、新田剣丞に空陣營の手助けを頼むのだが……それはまた別の話である。

「でも……だからって履かせ過ぎですわ！　いくらなんでもこれは酷すぎですわ！

最早下駄と呼ぶには高すぎで、竹馬ですわ！　竹馬っ！

そもそも、どうして良く分からない自称天人とか、誑し免状がどうか、

そんな変な男に美空様を嫁がせなければならぬのですか!？」

「ついでに九十郎に自信をつけさせたいと思つて」

「どう見ても！　どう考えても！　越後の後継者問題の方がついでですわっ!!」

「そんな事は無いわ、どっちも重要かつ喫緊の課題よ。

やらないと北条は同盟切るって言ってるし」

「うう……そ、それは……」

名月も人伝手にはあるが、その話を聞いている。

自分の実家が美空に対して無理難題スレスレの要求を突き付けて来た事に、名月も思う所がある。

「それでも……それにしても！」

「これで私が勝ちでもしたら、完全に悪者ではありませんか！」

「へえ、そのところは？」

「美空様の嫁入りに反感を抱いている者がこぞつて空の陣営に参加をしています！」

美空様が織田の天人の嫁にでもなれば、

それは私が美空様を追い出すかのような形になりますわ！

国中の者に反感を持たれて、とても国を纏められませんっ!!」

「じゃあ貴女が勝つても私が追い出される事にならない方法を教えるわ。

それなら少しはやる気が出るかしら？」

美空はにこやかに笑ながら名月に告げる。

「……そんな方法があるのですの？」

「本当は自力で気づいてほしかったのだけどね」

「うう……ご、ごめんなさい……」

名月はこの間まで幽閉同然の暮らしをしていたため、世間知らずな所がある。

名月は幼い頃に結ばれた武田・北条間の同盟締結と同時に、武田光瑞晴信の養子となり甲斐に移住した。

だがしかし、名月は武田晴信を親と思つた事は無いし、晴信も名月を娘と思つた事は無い。

名月にとつても、晴信にとつても、2人の関係は人質以上のものではなく、会話らしい会話は『土蔵に戻れ』と『聖杯を破壊しろ』くらいしか無かつた……と言うのは流石に嘘だが、とにかく親子らしい会話は一切無かつた。

そして晴信は当然のように北条を裏切り、風魔忍軍の総力を結集した決死の救出作戦の末に小田原まで逃げのび、今度は長尾と同盟を結ぶので長尾景虎の養子になれと言われ……今に至る。

それ故に彼女は、他人の内心や思惑を読むのが苦手なのだ。

「名月、劣勢の中での戦いを全力で学びなさい。

全身全霊で挑んでなお越えられるかどうか怪しい高い壁に挑みなさい。

もし勝つ事ができたのなら、貴女を越後長尾家の時期当主とするわ。

私は文句を言わないし、誰にも文句は言わせない」

美空が名月にそう告げる。

期待していると……そう告げられているのが分かつた。

「は、はいっ!!」

名月は自然と意気が高揚し、身体に力が張っていくのが分かった。期待されている、娘として期待されている。

ただそれだけの事が名月には何よりも嬉しいのだ。

「そしてもう一つ、私が追い出されない方法、

貴女が針の筵に座らずに越後長尾家次期党首をやる方法だけ……」

美空は妖しい笑みを浮かべ、名月の耳元に口を近づけ……囁く。

「要は戦いが終わった時に、新田劍丞が死んでいれば良いのよ」

その声には、確かな殺意が宿っていた。

良さげな話が一気に台無しである。

「私に……私に味方を討てというのですの?」

「事故を装って殺しなさい、鬼の仕業に見えるような殺し方ならなお良いわ。

名月は知っているかしら? 事故を装って味方を殺すのって、案外簡単なのよ。

貴女が思っている以上に、とてもとても簡単なの」

名月は思った、聞きたくなかったそんな話をと。

美空はそんな名月の表情の変化を感じ取り、やっぱりまだ当主の座は重いかないと考えた。

美空とて戦国時代の人間だ、無能過ぎて手にを得ない場合や、謀反を企んでいるのは分かっているが証拠が掴めない場合等に、やむなく味方殺しに手を染めた事がある。

片手で数えられる回数ではあるが……美空は確かに、味方殺しの経験があるのだ。

そして今、名月にそれをやれと命じているのだ。

「でも……でも、もし失敗したら……」

「今の言葉、本気で言っているのなら私は貴女を見限るわ。」

失敗を怖がって何もできない大将がどこにいるのよ」

「しかし織田との関係は!？」

「最悪の場合切り捨てるわ、剣丞の首と一緒に絶縁状を送り付けてしまうわ。」

貴公の首は柱にでも吊るされるのがお似合いだっかね」

織田との戦争不可避である。

「公方様もおられるのですよ」

「あんな奴もう親友でも何でもないわっ!! ついでに殺しておきたいくらいよっ!!」

「ええ……つ、ついでに公方様まで殺すんですの……う？」

名月の信じられないと言いたげな視線を前に、美空がはつと我に返る。

そして今までの一葉との交流とか、双葉との文通とかを思い出し、思い出し……

「……前言撤回するわ、新田劍丞以外は可能な限り死なないように動きなさい。

特に公方様は」

でつかい溜息と共に、美空は前言を撤回する。

しかし、難易度はさらにハネ上がった。

圧倒的に不利な戦で勝利しつつ、新田劍丞を事故を装って殺し、劍丞と四六時中ベツタリな一葉は殺さない……ここまで来ると諸葛孔明でもキツイ条件である。

「あの、私の記憶が確かでしたら、

あの人って九十郎さんが土下座までして殺さないでくれと……」

「ええ、してたわね」

「……良いのですの？」

名月が再び美空に尋ねる……殺しても良いのかと。

今度の質問の意図は実利の話では無く、心情の話である。

「昨晚、もう一回詳しく話を聞いたのよ。」

新田劍丞は日ノ本から鬼を追い出す要になるかもしれない……

だから殺してほしくない、という事なのよ」

「……なんだか胡散臭い話ですわね」

「奇遇ね、私も同じ事を考えたわ。そして私は考えた……」

名月をけしかけた程度で死ぬような男に日ノ本の要が務まる筈が無いし、私の夫が務まる訳も無いってね」

酷い理屈である。

「確実に、確実に息の根を止めるつもりで動きなさい、名月。

万が一貴女が劍丞の抹殺に失敗して、

しかも下駄を履かせまくった空に勝利するような奇跡が起きたら、

私もその時は諦めて劍丞の妻になるわ。

貴女もその時は針の筵に座る覚悟で次期党首をやりなさい」

「うわぁ……」

美空と名月の脳裏に、最悪の未来予想図が浮かぶ。

たった今脳裏に浮かんだ最悪の未来を實現させてはならないと……美空も、名月も強く思う。

「分かりましたわ。ちよつと可哀そうですね、新田劍丞さんをあの世に送ります。

その上で、空さんに勝って、後継者の座を奪わせて戴きますわ」

「劍丞を殺す事に気を取られれば、空に勝てない。

空に勝つ事だけを考えれば、劍丞を殺せない。中々にすれすな逆境になったわよ

ね」

「すれす……?」

「胃が痛くなる状況って事」

「そうですね、本当に。少しは手加減してくださいでも良いでしょうに」

「覚えておきなさい、名月。」

家長というものは常にでつかいすれすに晒されるといふ事を。

そして頼んでもないのに次から次へと困難と逆境が襲い掛かってくる事を」

「逆境を知らない私では当主として不資格……ですわね。」

けれど、それを言うなら空さんも同じではありませんか?」

「空と愛菜では駄目なのよ。あの娘は春日山城の奪還の時に、劍丞に助けられているの。」

あの娘は優しいから、たぶん劍丞を殺せないわ」

「空さんが逆境を知らないまま当主になったらどうなさるおつもりで?」

「実はその辺ノープランよ」

「聞きたくなかったですわ、そんな話」

ノープランのまま頭を空っぽにして突っ走り、途中何度もゲロを吐きながら軌道修正を繰り返し、最終的にはなんやかんやでどうにかしてしまおうのが美空の凄い所である。

早い話、行き当たりばったりは美空の通常運転である。

「私は当分隠居する気は無いから、数年がかりで経験を積ませるわよ。」

それじゃあ、今度は空と個人面談するから、空を呼んできて頂戴な」

「はあ……分かりましたわ」

名月が小さくため息をついてから、のそのそと評定の間から退室する。

正直、気分は重かった。

圧倒的不利な状況から空に勝利し、かつ、新田劍丞を抹殺する。

名月の勝利条件は果てしなく厳しかった。

だが……

「負けませんわ、これしきの事では」

……だがしかし、名月が心の底から尊敬する長尾美空景虎が乗り越えて来た困難と逆境は、今名月が越えようとしている逆境より、数も質もケタ違いである。

どんな困難も、どんな逆境も、ゲロを吐きながら、深酒をしながら、時には吐血をしながら全力で抗い、なんやかんやでなんとかしてきたのが長尾美空景虎だ。

それ故に、だからこそ、名月の心は未だに折れてはいなかった。

この程度の困難で心が折れてしまえば、この程度の逆境で諦めてしまつては、長尾美空景虎の娘だなんて恥ずかしくて名乗れなくなつてしまうからだ。

……

……

……

シャー……シャー……と、砥石の上に刃物が滑る音がする。

1人の少女が、笑みを浮かべながら一振りの刀を研いでいた。

「うふ……うふふ……ふふふはは……あははあ……」

その目には殺意があり、狂気があつた。

怒り、悲しみ、嘆き、苦しみ、絶望、渴望……そして愛。

ありとあらゆる感情が殺意と狂気の根っこになり、養分になつていた。

「劍丞……劍丞様あ……」

前田犬子利家の目に、殺意と狂気が宿つていた。

……

……

……

「さて……空、事情は分かっているわね？」

「は、はい」

空は緊張した面持ちで頷いた。

「当然、分かっているとは思うけれど、今回の戦、ハナっから対等な条件ではないわ。

これでもかかって位に、何段も何段も下駄を履かせたうえでの戦いよ」

「はい！」

「勝つても決して慢心しない事。ぶっちやけここまでやって負けたら恥よ、恥」

「は………はい………」

美空からプレッシャーがかけられ、空がごくりと唾を呑む。

美空は空の肩がガチガチに固まっているのを知つての上で、こうやってプレッシャー

をかけている。

国主になつた者には、大小様々な形で圧力を受ける。

プレッシャーをかけられた程度で実力を発揮できなくなる者は、国主として不適切と

言わざるを得ないからだ。

それにもう一つ、名月が言う通り、このまま戦わせたなら空が圧勝してしまう可能性が

非常に高いので、多少は名月が有利になるよう精神的に追い詰めておこうと思つたの

だ。

「追い詰められた人間の最後の悪足掻きを甘く見るな」

そして美空は、冗談の色が一切ない目でそう告げた。

自らの生死を賭け、越後の存亡を賭け、戦場を突つ走る時と同じ目をしていた。

美空は過去何度も、何度も何度も何度も何度も、追い詰められた人間の最後の悪足掻きでもつて逆境を乗り越えてきたのだ。

瞬間、空は怖気を感じた。

一瞬、空は美空に殺されるのではないかと本気で恐怖した。

目がマジだった。

「はい、悔りません、悔れませんが、絶対に……」

空は知っている、追い詰められた人間の最後の悪足掻きがどれ程恐ろしいかを。

空は知っている、追い詰められた美空が今まで何度奇跡の逆転劇を実現させたかを。

どんな困難も、どんな逆境も、ゲロを吐きながら、深酒をしながら、時には吐血をしながら全力で抗い、なんやかんやでなんとかしてきたのが長尾美空景虎なのだから。

「国主というのはね、どんな絶望的な状況でも諦める事は許されないわ。」

でもそれと同じ位大切なのは、勝てる戦いをちゃんと勝ち切る事なのよ」

「ちゃんと勝ち切る……ですか？」

「確か九十郎はピュロスの勝利と呼んでいるわね」

「はい、知っています。古代ローマと戦ったピュロスという名前の将軍は、

ローマ軍と何度も戦い、勝利を重ねましたが、

戦う度に兵を減らし、ローマは講和を拒み続けました。

そして戦勝を喜ぶ部下の前でこう言ったそうです、

『もう一度ローマ軍に勝利したら、我々は壊滅するだろう』と

「それから払った犠牲が大きすぎる勝利を、ピュロスの勝利と言うようになった……

どうやら空も九十郎から聞いているようね」

「はい、九十郎さんのお話はどれも面白いですから」

「目の前の戦いをどう勝つかだけ考えていけば良いのは部将だけ、

大将は次の戦い、次の次の戦いを常に考えながら作戦を進めなければならないのよ」

頭を空っぽにして突っ走るのが特技の美空が言っても説得力が無い。

とはいえ……武田晴信のような化物のような戦上手が相手に無ければ、美空は普通に

色々考えながら戦える。

ギリギリまで頑張って、ギリギリまで踏ん張って、どうにもこうにもどうにもならな

い、そんな時……ウルトラマンは助けに来てくれないので止む無く頭を空っぽにして戦

うのだ。

ゲロを吐きながら、深酒をしながら、時には吐血をしながら全力で抗い、それでもど

うにもならない時だけ使う切り札中の切り札なのだ。

決してただのやけっぱちではない、決して。

「犠牲少なく、勝利せよという事ですね」

「名月の方はどんな勝ち方でも、勝つたら問答無用で長尾の次期当主に指名するわ。でも貴女は別、勝敗はもちろん、勝ち方も見させてもらうわ。」

例え最終的に勝利していたとしても、被害が大きすぎると判断した場合、

周囲の反対を押し切つてでも、名月を次期当主にする。

ああ、それと今言つた事は名月には教えない事、必死さが薄れてしまうからね」

「は、はい……」

「前に備えれば後方が手薄に、左翼に備えれば右翼が手薄に、

全てに備えればあらゆる地点が手薄になる……これは孫氏の言葉よ。

追い詰められた名月がどう動くかを考え、注意深く観察し、先手先手を打ちなさい。

どんな行動にとられても対応できる方法はどこにも存在しないわ。

私ができる助言はここまで……後は貴女と名月の器量の差が勝敗を分けるのみよ」

美空が空にさらなるプレッシャーをかける。

この程度のプレッシャーに負けるようでは、長尾の時期当主として不適格だという思いも込めて。

「勝ちます、絶対に勝つて見せます」

空は美空からのプレッシャーをもものともせず、必ず勝つと決意する。

「そう、頑張りなさい」

美空はそんな空の様子を満足そうに見ている。

そして空は……

「勝つて実現させてみせます……共産主義革命をつ!!」

「うん、その意気よ。私も応援してるから……つて、共産主義？」

共産主義つて何の事かしら？」

後日美空や名月の胃壁をガリガリと削る素敵ワードである。

後の世で制作された織田信長が主役の大河ドラマでは、番組の3分の1がソレとの戦いに費やされたりする。

しかし、その辺の事情は犬子と柘榴と九十郎の物語に直接関係しないので割愛する。

「では、私は準備があるので、これで失礼させて頂きます。

絶対に、絶対に勝つて見せますから、見ていてください。

そして共産主義革命を実現させます!

ウラジミール・レーニンが見た理想を、

ヨシフ・スターリンが果たせなかつた夢を現実のものにして見せます!」

「レーニンつて誰えつ!」

未来の人物である。

「失礼しますっ!!」

「ちよ、ちよと待つて……ああ、行っちゃったわね」

空が凄いい勢いで走り去っていった。

美空は強引にでもそれを止めようとしたが……やっぱりやめた。

空の様子も少し気になったが、それよりも先に会わなければならぬ者がいるのだ。

「まあ、後で時間ができた時にゆっくり聞くんかかないわね……」

誰かいる！ 犬子をこの部屋まで呼んできなさい！」

後日、この時もつと詳しく話を聞いておけば良かったと死ぬ程後悔するのだが……犬

子と柘榴と九十郎の物語とは直接関係の無い事なので、割愛する。

……

……

……

「……美空様」

「来たわね犬子、待つていたわ」

犬子がゆっくりと美空の前へと歩いてゆく。

その手には抜き身の刀が握られている。

ついさつき研ぎ直され、鋭い剣先が鈍く輝いていた。

「その太刀、初めて見るわね」

「ずっと昔、壬月様から元服祝いで贈られた太刀です」

「壬月……織田の鬼柴田よね、確か」

「拾阿弥って娘を殺して、犬子が久遠様の元から離れた原因を作った太刀でもあります。

あの時からずっと、なんとなく使う気になれなかつたんですよ」

「あら、それなら私と犬子を出会わせてくれた縁起の良い太刀じゃない」

「私にとって一番の……いえ、二番目に嫌な思い出がある剣です」

一番は新田劍丞に抱かれた事である。

「そんな剣を、どうして今日は持ってきたのかしら？」

「色々理由はあるんですけど……」

久遠様が愛する人を斬るのなら、この剣が一番良いかなくて」

「そう……」

美空が目を伏せる。

何も言わずとも分かっている。

美空と犬子は今、新田劍丞を殺そうと考えているのだ。

九十郎が……美空と犬子が愛する男性が、土下座をしても助けようとしている人物

であると理解した上で、殺そうとしているのだ。

かつて久遠が愛した拾阿弥を斬った剣で、今、久遠が愛する新田劍丞を斬るつもりなのだ。

「後で九十郎に何て言われるでしょうね、私も、犬子も」

「ただの八つ当たりだって、分かっています。」

九十郎も、久遠様も、劍丞様は鬼との戦いで必要になる人だって、

日ノ本を守るために絶対に欠いてはいけない人だって言っていましたし、

犬子もそうだと思います」

「私は思わないわ、あんな変な男、いてもいなくても大して変わらないわよ。」

八つ当たりとも思っちゃいけない、正当な怒り、正当な殺意よこれは」

「一番許せないのは、九十郎を忘れてしまった犬子です」

「犬子は何も悪い事をしていないわ、犬子は被害者よ」

「それなら、劍丞様も被害者ですよ」

「そうかもしれない、違いかもしれない、いずれにしても……」

「そうですね、いずれにしても……」

「私達は、新田劍丞を殺したい」

美空と犬子の声が重なった。

美空にも、犬子にも、劍丞を殺さない理由、殺せない理由が何個重なるうとも、劍丞への殺意が抑えられないのだ。

理屈ではないのだ、理屈では。

「美空様、あれを……」

「うん？」

犬子が指差す先を見る……一匹の犬が全力で走っていた。

全力で走り、春日山城の石垣の隅から飛び降りた。

まるで恐怖というものが一切存在しないかのように、全くスピードを緩めずに飛び降りた。

飛び降りた犬はくるくると宙を舞い、宙を舞い……ぐちゃつと潰れた。

「……あの犬は？」

「全然知らない人です、ここに来る途中で、たまたま目についた人です」

「人……？ ああ、そういう事」

美空が無感動に頷く。

ミンチ肉のようになった犬の死骸がぐきやりと曲がり、膨らみ、1人の人間の遺体に変わった。

当然、生き返る事は無い。

背骨や脳漿がぐちゃぐちゃに潰れ、ピクリとも動かずに絶命していた。

「犬子の御家流……こういう事もできるって、ずっと前から分かってました。」

分かっていたけれど、今までどうしても使う気になれませんでした。 だけど……」

「そうね、その能力を使えば、新田劍丞を事故死か自殺に見せかけて殺す事ができる」

犬子は挽肉のようになって絶命した実験台を見下ろして、こくりと頷いた。

「私はこの太刀と、この能力を使って……劍丞様を殺します」

犬子の目には、漆黒の殺意が芽生えていた。

犬子とて、劍丞の重要性は知っている。

犬子とて、劍丞に何の罪も無い事を理解している。

犬子とて、劍丞は自分と同じ被害者だと理解している。

本当は精神を操る能力を受けて、一時的におかしくなってしまったただだと思っ
てい
る。

だがそれでも、斬らずにはいられない、殺さずにはいられない、恨まずにはいられ
ない、憎まずにはいられない。

「(だって他に……他に何も思いつかないから……)」

劍丞が全てを狂わせてしまった。

劍丞がいるから、九十郎は色々拗らせてしまった。

劍丞に抱かれてしまったから、九十郎はもう二度と犬子を抱く事も無ければ、笑いかけられる事も無いだろう。

劍丞が犬子の幸せを完膚無きまでに破壊してしまったのだ。

劍丞に何の落ち度も、罪も無いと理解していても、劍丞を殺したところで九十郎が戻ってくる訳ではないと理解していても、それでもなお恨み、憎まずにはいられなかったのだ。

そんな犬子の狂気の目は研いだけばかりの刀身に向けられ……

「ん……？ 何か変な模様……こんな模様、前からあつたかな？」

刀身を見た時、奇妙な違和感があつた。

峰の部分に、小さく奇妙な紋様が2つ彫られている事に気がついた。

犬子が拾阿弥を斬った日から、壬月から贈られた太刀をまじまじと眺める事は一度も無かつたため、記憶が定かとは言えないが……その紋様は、今日初めて見るもののような気がした。

「犬子、どうかしたの？」

犬子は美空からそう声をかけられ、はっと我に返り。

「いえ、何でもありません」

きつと今まで見落としていたか、ずっと見てなかつたから忘れていたのだろうかと思

直し、犬子は奇妙な紋様が彫られた太刀をそつと鞘に納めた。

犬子も美空も気づかなかつた。

その紋様がルーン文字と呼ばれるものである事に。

持ち主の記憶を混乱させる『忘却』のルーンと、一時的に男女間の愛情や性欲を増大させ、さらに排卵と受精の可能性を大幅に向上させる『情愛』のルーン……優れたルーン魔術の技術と知識の持ち主が悪用すれば、そういう使い方もできる魔法の紋様である事にも。

そして美空と犬子はその日見た紋様をすぐに忘れてしまった。

取るに足らない事だと思ひ込んでしまった。

『忘却』のルーンは、そういう使い方もできる魔法の紋様であった。

犬子と柘榴と九十郎第86話 『初めましてじゃないし』

……2人の幼子が、物陰に隠れてガタガタと震えていた。

「(怖い、怖いよ……お父さん、お母さん……)」

姉は台所にある大きな水瓶に隠れていた。

「(何あいつ、何あいつ、何なのよあいつ……)」

妹は狸の置き物の影に隠れていた。

ぐちゃり、ぐちゃりと怪物が人間の咀嚼する音がしていた。

ほんの数分前まで、そこでは父と、母と、姉と、妹の4人が、1つの鍋を囲み、今日あつた話を話しながら楽しそうに夕食を食べていた。

この日、姉と妹は家の周りにある雑木林でかくれんぼをしていたとか、日が暮れるまで探しても妹が見つからなくて、姉が泣き出してしまったとか、そんな事を無邪気に話していた。

しかし今、囲炉裏の傍には血と肉と骨と内臓を吸い喰われ、ぐしゃぐしゃのボロ雑巾のようになつた父の亡骸が転がっている。

娘達を逃がすために怪物に挑みかかった父の亡骸である。

そんな父の亡骸を踏みつけながら、血の滴るミンチ肉の塊のような怪物が母の亡骸を噛みちぎり、咀嚼していた。

「(助けて……だれか……だれか助けて……助けてよ……)」

「(畜生、畜生……もつと力があれば……)」

姉は必死に息をひそめながら、来るはずもない助けを心の中で呼び続ける。

誰でも良い、誰でも良いから気づいてほしい、助けに来てほしい、大丈夫だと言ってほしい。

そんな願いが、そんな祈りが、突如彼女達を襲った怪物への恐怖が……姉の魂を歪めつつあった。

本来超能力の才能の無い姉に、超能力が芽生えつつあった。

声の届かぬ人に、声を届ける超能力……『口伝無量』が芽生えつつあった。

そんな時……ぎよろりと、肉塊の怪物の目が姉の隠れている水瓶に向いた。

気づかれた、気づかれてしまったと、妹は思った。

このままでは姉は……気が弱いけど優しく、誰よりも大好きな姉が、父のように殺されて、母のように食べられてしまうと思った。

だから……

「こっちだ！ こっちだ化け物！ こっちだぞ！」

妹が無我夢中になつて飛び出した。

刀では傷つけられない。

刀身が怪物に触れた瞬間、刀が喰われ、指が喰われ、腕が喰われ、肩が喰われ、血肉を喰われ、内臓が喰われる……それは父が身をもつて示してくれた。

だから妹は大声で怪物に呼びかけながら、姉がいる場所とは反対の方向に走り出した。

「こつちだ怪物！こつちだぞ！ もつと食べたいだろう!？」

お父さんとお母さんを食べただけじゃ物足りないだろう!？」

こつちに來い！ お前の食べ物はこちらにもあるぞおーっ!!」

妹は喉が枯れんばかりに叫び、足が折れそうだと感じる程に走つた。

怪物が後ろから迫っているのが分かったが、振り返る余裕はなかった。

姉が助かったかどうかを確かめる余裕も無かつたし、家に戻れるように知っている道を選ぶ余裕も無かつた。

姉妹の家はある事情によつて、非常に入り組んだ密林の奥にあり、まだ幼く、地形や道順を覚えきつて妹は、もう二度と自分の家に戻れなくなる。

だががしかし、それは同時に怪物も姉を食べに戻れなくなるという事でもあつた。

「こつちだ怪物！ 姫野も食べたいだろう！ 姫野はこつちだぞっ!!」

自分はどうなっても良い、二度と姉と会えなくなっても良い、この醜悪な怪物に喰われてしまっても良い、だけど姉だけは生きていてほしい。

妹はそんな事を考えながら、祈りながら、ひたすら叫んで、ひたすら走った。

走って、走って、走って……走って走って走って走って走って走って走って走って走って走って……喰われた。

「こな……み……お姉ちゃ……ん……」

妹の……小波の妹、姫野の意識はそこで途絶えた。

……

……

……

「……これはひどい、と言わざるを得ないですね」

「……そうですわね」

朧が連れて来た風魔忍軍が方々から集めて来た情報を総合すると、空陣営と名月陣営の兵力差は2対1……上手く敵の裏をかくことができれば、十分逆転は可能な兵力差である。

少なくとも、桶狭間の時の信長よりは大変さは少ない。

しかし朧と名月がこれはひどいと頭を抱える理由はそこではない。

「隴姉様が集めて来た者が8割、私が集めてこれた者が2割……」

「しかも美空に強い忠誠を誓っている者程、空陣営に……」

長尾と北条の代理戦争ですかコレは？」

「負ける気はないですけど、勝ったら勝ったで問題になりそうですわね」

「もう笑うしかないですね、あつはつはつはつはつはつ！」

来るんじゃないかったこんな国」

詰んでるとしか言いようのない状況に、隴は若干キャラ崩壊気味だ。

何せこの状況、元はと言えば隴が朔夜……主君・北条氏康の命を受け、越後まで来た事で起きたのだから。

「で、真面目な話大丈夫なのですか？」

この状況下で勝った所で、誰も貴女を長尾を継ぐ者とは認めないのではないですか？
むしろ北条の傀儡と……」

隴が北条の将としての立場を一時忘れ、純粹に名月を心配する。

名月は僅か1歳で戦国クズ……もとい武田晴信の養子（人質）になり、晴信の裏切り（いつもの事）を切欠に養子解消、北条に戻って来たかと思えば、長尾・北条間の対武田同盟成立と同時にまたも人質として越後に行き、何故か美空に気に入られて養子になり『景虎』を名乗るようになった。

人生のほぼ全てをたった一人敵地で過ごす名月を、臆はいつだって心配していた。

もしも武田や長尾が名月を害する意思を見せれば、どこへだって飛んでいき、助けに行こうと誓っていたのだ。

「大丈夫です、美空様は断言してくれましたわ。

勝てば私を長尾の後継者に指名すると、誰にも文句は言わせないと」

そんな臆の心情を知っているため、名月は嘘を言った。

本当は空陣営に勝つと同時に、新田劍丞を抹殺しなければならぬ……その事を名月は、臆に隠した。

言えば臆はたぶん、自分に代わって泥を覚悟で新田劍介を殺すだろう。

愛する夫を惨殺された織田信長が何を考え、どんな行動をとるか……たぶん、織田が北条に仇討ちの戦を仕掛けるだろう。

名月は知っている。

詰み一步手前の名月陣営を立て直し、劣勢ではあるが勝負には出れるような状態にまでする事は容易では無かったと。

そして名月は知っている。

詰み一步手前の名月陣営を立て直すため、臆が何度頭を下げ、作らなくても良い借りを作ったかを。

そしてその上、新田劍丞を殺し、織田と北条の血で血を洗うかのような争いの引き金を引かせる訳にはいかない。

それ故に名月は、自分が新田劍丞を殺そうとしている事を臙に話せなかった。

「(これ以上、臙姉様に借りを作らせる訳には参りませんわ……」

それにこの戦力差で勝つためには、劍丞隊の力も借りないと)」

これが逆境ですか……と、名月が小さく呟いた。

勝負が終わるまでに、劍丞は殺さなければならぬ。

そうでなければ、名月が心から尊敬する長尾美空景虎は新田劍丞の妻になる羽目になるし、長尾の諸将からの名月への印象は最悪になる。

しかし、劍丞隊には今孔明と謳われる竹中半兵衛を始め、チートじみた強さを誇る本多忠勝、鉄砲の扱いでは右に出る者はいない傭兵部隊・八咫鳥隊、そして腕利きの忍者である当時に、口伝無量という厄介な能力を持つ服部半蔵等、人数は少ないが人材の質の面では寒気がする程に優秀なのだ。

「(え？ それでは私は公方様の他にあの今孔明殿と、

服部半蔵を出し抜いて劍丞さんを殺さなければいけないのですの？

しかも事故を装って殺さなければならぬのですの!?)」

絶望的な挑戦を強いられている事に気がつき、名月は再度、これが逆境ですかと呟い

た。

9 回表 1 1 2 対 3 から逆転しろと言われるのと同じ位、凄まじい逆境である。

どんな困難も、どんな逆境も、ゲロを吐きながら、深酒をしながら、時には吐血をしながら全力で抗い、なんやかんやでなんとかしてきたのが長尾美空景虎だ。

名月はゲロを吐き、深酒をし、吐血をしていた時の美空の気分が少しだけ分かったよう気がした。

「あの、名月、本当に大丈夫ですか？ さっき 2 回もこれが逆境かって呟いたような」

「いいい、言っていないですわ！ 全然言っていないですわ！ ただの空耳ですわ！

仮に逆境としても、逆境と言う名のスパイスですわ！」

「おお、言葉の意味は分かりませんが、とにかく凄い自信ですね」

スパイスの意味は全く分からなかったが、臃はとりあえず頷いた。

しかし、実態はただのやけっぱちである。

「（いずれにせよ……まずは服部半蔵をどうにかしなければ話になりませんわね）」

名月が頭の中で新田劍丞暗殺計画を練りながら、そのための前提条件を確認する。

そして……

「臃姉さま、例の計画の準備は進んでいますか？」

名月は新田劍丞暗殺の前段階として、服部半蔵と新田劍丞を引き離す策に出た。

小波の口伝無量が機能している限り、劍丞の状態がリアルタイムで劍丞隊全体で共有されている限り、事故に見せかけて劍丞を抹殺する事など不可能だからだ。

……

……

……

「いつまで待っても来ないから迎えに来たし！ さあ、さつさと出発するし！」

見るからに不機嫌そうな風魔小太郎・通称姫野が、劍丞隊の詰め所の前で大声を張り上げる。

姫野が待つて、待つて、待つて、待つて待つて待つて……

「小波いいいいいいーっ!! さつさと出て来るしいいいいいいいーっ!!」

待ち合わせ場所で待たされ、今ここでも無視された姫野が怒りを爆発させた。

「え？ 私ですか？」

自分の名前を呼ぶ者が現れた事に驚きを隠せない小波が慌てて表に出てくる。

「えつと……は、初めまして？」

「昨日も！ 一昨日も自己紹介したし！」

アンタが私の名前忘れるのこれで3度目だしっ!!

てか会った事すらも忘れるとか何考えてるしいっ!!」

「え、初対面ですよね？」

「昨日も一昨日も会ったしっ!! 昨日も一昨日も名前教えたしっ!!」

「どなたですか？」

「風魔小太郎おっ!! 通称は姫野だしっ!!」

「風魔小太郎!! あの風魔忍軍の頭領の!？」

「その反応も3度目だしっ!!」

「こんなアホみたいに叫ぶ娘が風魔忍軍の……」

「その反応は初めてだけど、叫ばせる原因を作ったのはアンタだしっ!!」

そしてぜーはーと肩で息をする姫野と、どう反応すれば良いのか分からず、オロオロする小波、そして何が起きたのかと物陰から覗き込む新田劍丞……何とも表現し難い絶妙に微妙な空気が周囲を流れる。

「(劍丞様! 助けてください!」

知らない方が唐突に表れて、自分は風魔小太郎だと言い張っています!」

小波は無駄に口伝無量を使って劍丞に助けを求めろ。

「(いやその娘本物の風魔小太郎さんだから! 昨日も一昨日も会ってるからな!」

劍丞にそう言われ(テレパシーだが)、小波は昨日と一昨日の記憶を探り……

「(……え? 会っていませんよ)」

しかし、心当たりは一切無かった。

忍びの者として幼い頃から修業をしてきた小波にとつて、会つてもいない人物を会つたと言われるのは不思議でならない事である。

ましてやそれが、主人としても男性としても敬愛する新田劍丞の言葉であれば、猶更だ。

劍丞はふう……と、遠い目をしながらため息をつく。

「……ごめん、もう一回自己紹介してくれないかな」

諦めきつた目でそう告げた。

「これで三回目だし!! 信じられないしいっ!!」

臙様に連携して事に当たれって言われてるけど、

本当に連携になるのかも疑問だしっ!!」

「連携……ああ、そう言えばそんな話もありましたね。 えつと……」

一昨日、臙と名月、劍丞と詩乃らを交えた現状確認と基本方針の確認のための話し合いがあつた事を思い出す。

臙と詩乃から情報収集と偽情報によるかく乱、罨の仕込みを命じられた事も思い出す。

そしてその時……

「既にどなたかが動いているので、連携せよと……」
そこまでは問題無く思い出せた。

しかしそこから先は、頭に靄がかかったかのように思い出せない。

「すみません剣丞様、どなたと連携を……」

「姫野とだしいっ!! 今アンタの目の前にいて、

昨日も一昨日も会って自己紹介したのに綺麗さっぱり忘れられた姫野だしいっ!!
その上合流場所と時間も忘れられて、

日が昇るまで一人で寂しく池に潜ってた姫野だしいっ!!

ドジョウが出てきてこんにちはだったしいっ!!」

姫野、ブチ切れる。

「何者だ貴様! どこから入った?!

」正面から普通に歩いて……じゃないしい!!

アンタまた姫野の事忘れてるし! ニワトリ以上のトリ頭だし!
忍者として不適格って言うか、日常生活すら不安になるしいっ!!」

「剣丞様! お下がりください、敵です!」

「敵じゃないし! 味方だしいっ!!」

「敵ではない……?」

信用できないという内心を隠そうともせず、警戒しながら小波がゆっくりと劍丞の前に移動する。

姫野はそんな小波の様子を……悲しむべき事に昨日も一昨日も見た、警戒心丸出しの小波の様子を見て、深くため息をついた。

「劍丞、ちよつと姫野の頭撫でるし」

姫野は唐突にそんな事を言い出した。

「え？ 何で急に？」

「良いからさっさと頭撫でるし！ もう一から説明するの面倒だし！」

「そ、それじゃあ……」

険悪な空気の中で、劍丞が恐る恐る姫野の頭に右手に乗せて、ゆっくりと撫で始める。

姫野は一切抵抗せず、されるがままになっていた。

「……ほら、敵じゃないし」

しばらく劍丞のなでなでパワーを堪能……ではなく、無警戒に人体の急所である頭を劍丞に触らせる姿を見て、小波が警戒心を解いた頃合いを見計らい、姫野がそう告げる。

「そのよう……ですわね」

正直半信半疑といった様子ではあったが、とりあえず小波は眼前の正体不明の少女を信じる事にした。

「うん、見た目は馬鹿らしいけど、この方法悪くないし。

小波の警戒心が早く解けるし、劍丞の撫で方結構上手いし。

どうだ服部半蔵、御主人様に余計ななでをさせたくなかつたら、もう二度と他人の名前を忘れるなだし」

「忘れる……？ 何か忘れてましたか？」

「相変わらず忘れてる自覚すら無いし……オレの名を言ってみろだし！」

「初対面ですよ」

「初対面じゃないしっ!! 昨日も一昨日も会ってるし！」

自己紹介もしたしさっきは約束すっぽかされて一人寂しく池に潜ってたし!

そしてドジョウが出てきてこんにちはしてきたしっ!!」

そして姫野がもう一度深くため息をついた。

これから姫野は、終始こんな感じの小波と共同して密命を遂行しなければならないのだ。

「とりあえず初めまして……本当は全然初めましてじゃないし、

印象深過ぎて夢にまで出てきそうだけど、とりあえず初めまして。

風魔忍軍の長、風魔小太郎……通称は姫野だし」

「姫野……？」

その名を聞いた時、小波は奇妙な懐かしさを感じた。

小波は奇妙な安らぎを感じた。

ずっと探し求めていたもののような、ずっと求め続けていたもののような……

「あの……以前どこかでお会いしましたか？」

小波は思わず、そう尋ね。

「昨日も一昨日も会ってるし！ 自己紹介もしてるしいっ！！」

姫野は再度ブチ切れた。

この日姫野は心に誓った……この戦いが終わったら、忘れられた回数と同じ回数、憎いコンチクショウをぶん殴ると。

犬子と柘榴と九十郎第88話 『逃走中へ捕まったら即孕ませレイプ』（その1）』

（注）作者の趣味全開です。

九十郎の魂が戦国時代に飛ばされず、犬子や柘榴と出会わなかった世界の事。無数に存在する並行世界、無数に存在する虎松達の記憶にて……

「……虎松、何のつもりですか」

葵が虎松にそう尋ねる。

葵はズタボロだった。

10を超える刀傷を全身に受け、全身が泥と血に塗れ、疲労困憊の様子であった。葵が連れている僅か数十名の三河侍達もまた、残らずズタボロであった。

「オレノ分、葵、食工」

虎松はそう言うのと、小さな赤飯の塊を葵に差し出した。

虎松もまた、ここに来るまでに超能力を振り絞っていたため、限界寸前である。

「これは貴女の方です、貴女が食べて、生き延びるのよ！」

「オレ、イラナイ」

「ふざけないでっ!! 鬼でも何でも貴女は私の大事な家臣です！」

私の大事な家族の一員です！ 今更変な意地や遠慮で言っているなら許しません！

松平葵元康の命令です、食venaさい虎松！」

虎松は葵の命令を聞いてもなお、手にした赤飯を口に運ぼうとはしない。

葵の目の前で、虎松はそつと首を横に振った。

「オレ、モウスグ、死ヌ。 赤飯、イラナイ。 葵、食エ」

「何を言っ……」

「赤備エ、近イ」

「赤備えですって!?!」

虎松がそう告げると、三河侍達にどよめきが始まる。

葵はつい先日、上洛を目指す武田晴信に挑み、三方ヶ原にて激突し、返り討ちにあつて敗走している。

精強で知られる三河侍が成す術も無く、完膚なきまでにブチ殺され、蹴散らされるといふ忌まわしき記憶が葵達の脳裏をよぎる。

それは葵が恐怖の余り脱糞してしまう程のものであった。

そして武田の騎馬軍団の中でも特に強く、特に勇猛果敢な部隊こそ、山県昌景率いる武田の精銳、赤備えなのだ。

今の心身ともに消耗しきつている状況で戦えば、間違いなく全滅……葵達の脳裏に『絶望』の二文字が浮かぶ。

「オレ、残ル。 オレ、戦ウ。 葵、逃ゲロ」

それ故に、それだからこそ、この世界の虎松は自らの食料を葵につき返したのだ。

「虎松、貴女……」

「時間、無イ！ 行ケ！ 早ク！」

葵が何かを言おうとするが。

虎松は罵声のような、怒号のような叫びでそれを遮る。

葵は迷い、悩み、そして……

「浜松城で待ちます！ 必ず生きて戻りなさい！」

そう叫び、走った。

虎松を見捨てて逃げた訳ではない。

自分が長くこの場に留まれば留まる程、虎松が死ぬ確率が増えると思つたからだ。

「葵、元氣デナ」

そんな虎松の眩きを聞く者はいない。

虎松は1人大きく息を吸い……ゴキリ！　ゴキリ！　と音を立て、骨が、筋肉が、内臓が、脳髓までもが造り変えられ、小さな幼子の姿から紅い髪の毛の姿へと変わる。人に似た外見である事を重視した肉体を捨て、超能力の行使、戦う事に特化した肉体を得る為に。

そして程なく……

「殿はテメエかあ!?　赤鬼いいいいいいーっ!!」

「鬼ノ力、見セル!」

山県昌景・通称粉雪……虎松の死因ランキング3位と、虎松が激突した。

2人の戦いのどのような結末を迎えるのか……

それは犬子と柘榴と九十郎の物語には一切関わりの無い事である。

……

……

……

「前回までのあらすじ!」

ここは夢の世界で、今オレ達の前にいるのはサキュバスで、

捕まったら強姦されて、絶頂したら最近夢精したどっかの男の児を孕まされて、攻撃しても効かないけど時間制限があるからひたすら逃げるか耐えようぜ。

それと前に仕込んだバックドアを逆用されて歌夜と綾那は巻き込まれました。許してチョンマゲ、てへぺろ」

何が何だか分からない歌夜と綾那に対し、新戸が今まで作つて来た知的で冷静なキャラを崩壊させながら簡潔に状況を説明する。

最悪孕まされるだけで、命までは奪われたいはいえ、ハッキリ言つて絶体絶命の状況下で、新戸は若干テンパっていた。

「大体分かつたのです！　てりやああああっ!!」

一方綾那は夢の中でも正常運転であつた。

本多忠勝はどこまで行つても『ただ、勝つ』事しかできやしない。

それは彼女にとって致命的なまでの短所でもあるが、同時に何者にも代えがたい長所でもある。

綾那がその辺から拾つてきた長棒を振り回すと、彼女らを取り囲んでいた100名近くのサキュバス達が次々と砕け散り、煙となつて消えていく。

「て、手ごたえが全然ねーです。まるで本当に煙を殴つてるみてーです」

「倒しても倒しても数が減らない……!!?」

「こいつらは夢界構築の応用で創つた分体だ！　相手をして疲れるだけだ！

それより囲みを破つて距離を取れ！」

「む、夢界構築……?」

「ここは夢の世界、何でもアリだ。」

ただし奴まだ夢界を掌握し切っていないから、何でもアリと言っても限界がある。

夢界の浸食が進めば進む程、何でもアリの限界がどこまでも上がっていく。

そうなったら本当にどうしようもなくなるぞ」

「じゃあどうすりゃ良いんだよ!」

「走れ! そして距離を取れ! 接触が多ければ多い程、夢界浸食は速く進む!」

距離を取れば遅くなる!」

新戸がそう叫ぶと、夢界構築の能力を発現させ、蜻蛉斬と赤龍独鈷、そして人間無骨を創り出す。

綾那達の記憶を基に創った贗作に過ぎないが、ここは精神の世界、イメージの世界であるが故に、こういった小道具の有る無しが戦いの帰趨を左右する。

使い慣れている得物がある、だから負けない……そんな自己暗示に近いものが、夢界での戦いでは重要なのだ。

「だけど、この位だったら倒せなくもないぞ」

基本ヒヤッハー脳な小夜叉が不満そうな声を漏らす。

「今はまだ増えて襲ってくるだけだが、夢界浸食が進んだら何をしてくるか分からない。」

それに捕まったら犯されて孕まされるって事、忘れるなよ」
「う……………」

小夜叉の脳裏にあの時の光景が……小夜叉の母、桐琴が鬼に強姦され、鬼の児を孕まされ、風船のように膨らんだ腹が破裂した瞬間が思い浮かぶ。

アレが自分の身に降りかかるかもしれない……それは彼女にとって恐怖そのものである。

「……………くそっ！ どけよてめえら！ 同じ顔が何個も何個も並んで気色悪いんだよっ！！」

胃液が逆流しそうな程の恐怖を嘔み殺し、小夜叉は人間無骨をサキユバス達に突き立てる。

「ふうん、怖い、怖いんだあ……でもそんな事は無いわよ。

セックスは気持ち良くて、蕩けそうな位気持ち良くて、幸せな事なのよ……」

小夜叉達によって蹴散らされながらも、無数のサキユバス達はクスクスと笑い続けている。
いる。

殴られても、斬られても、彼女は何の痛痒も感じない。

それどころか、セックスを怖がり、肩を強張らせる小夜叉の様子をまるでコメディでも見ているかのように笑っていた。

「だ……誰も何も怖がっちゃいねえっ!!」

「嘘よ、嘘嘘……貴女は怖がってる、恐れているわ。」

セックスする事を、男と女の交わりを。何て可哀そうな娘なんでしょう。

おいで……私がセックスの気持ち良さを教えてあげるわ」

サキュバス達が優しく小夜叉達に手招きをすると、下腹部の肉が集まり、男根そつくりの形状になった。

サキュバスが女性と交わり、女性を絶頂させるために創る疑似男根である。

「ひっ……」

小さな声ではあったが、それを見た瞬間、小夜叉は悲鳴をあげてしまう。

女性の身体に、男性の肉棒……先程新戸から見せられた光景、肉棒を生やした森蘭丸によってイカされ、イカされ、イカされ、イカされ、雪崩のような快樂に潰されて発狂していく自分の姿を思い出してしまったのだ。

「何かトラウマでもあるのかしら？ でも良いわ、私が癒してあげるもの。」

セックスが気持ち良いって事を教えてあげる。

セックスを怖がらなくても良いって事を思い出させてあげる。

そして児を孕み、児を産み、児を育てる、女の最高の幸せを貴女に与えてあげるわ」
ただし、その児の親は最近夢精した近所の誰かである。

「うるせえっ!! 誰もそんな事頼んじやいねえよっ!!」

小夜叉が血管が浮き出る程に怒り、怒鳴り、人間無骨をやたらめったらに振り回す。心臓がバクバクと高鳴っていた。

それは恐怖か、怒りか、それともセックスへの期待か……色々な感情がごちゃ混ぜにな

り、小夜叉は訳が分からなくなっていた。

「拙い……想像以上に夢界浸食が速い……!? 小夜叉! 耳を貸すな!」

声をかけるな! これ以上夢界を掌握されると本気で拙い!」

新戸が念動力で小夜叉の首根っこを掴み上げ、無理矢理引っ張り戻す。

そのまま綾那達が切り開いた囲みの隙間に向かって飛び込んだ。

「綾那! 歌夜! ここに留まると拙い!」

「わ、分かったです!」

「はい!」

綾那と歌夜が新戸達を追って走り出す。

「ふふ……うふふ……イキが良いわねえ、頑張るわねえ。私もヤル気が出てきたわあ

……」

逃げ去る4人の後ろ姿をサキユバスはクスクスと笑いながら眺めていた。

夜はまだ始まったばかりだ。

……

……

……

町を、森を、荒野を、大江戸学園を、雪原を、沼地を……パラパラ漫画の中のように次々と脈絡なく背景が切り替わるカオスな世界を走り、新戸達4人は逃げ続ける。

そして長い長い逃亡の果てに小さな民家な民家に逃げ込んでいた。

「……くそっ！ 何だっつてんだ一体!？」

「ここは夢の世界で、あいつはサキュバスだ」

「そういう事が聞きたいんじゃない！ どうすりや倒せるんだ!？」

「このまま逃げ隠れするしかない。」

サキュバスは夢の中では何でもアリだが、夢界の浸食が進んでいなければ限界がある。

そしてサキュバスと交わり、絶頂してしまわない限り、

サキュバスは現実世界のオレ達に手出しができない」

「つまり？ どういう事ですか?」

「できるだけ接触を避けながら逃げ続ける。」

万一捕まっても、絶頂だけはしないよう耐える。そして時間切れを待つしかない」「やつつける事はできねーです?」

「完全な不意打ちができれば不可能じゃないが、

それ以外の暴力的な手段は一切効かない。

一応、セックスで先にサキュバスを絶頂させる事が出来れば、引き下がるが……」

新戸は今この世界にいる面々を思い浮かべる……

自分……セックスが苦手なので駄目。

小夜叉と綾那……セックス経験ゼロ、無謀。

歌夜と小波……経験人数1、回数1、他よりマシだがサキュバス相手に寝技を挑むに

はあまりにも経験不足。

新戸は他の面子に聞こえないよう小さくため息をつき、「無理だな」と呟いた。

「じゃあ、このままずっとここに隠れてろって事か?」

「そうできたら良いのだけだな。さっきの接触でかなり夢界が浸食されている。

たぶんそう遠くない内に見つかる」

新戸は大きくため息をついた。

先程は数を増やして襲い掛かる程度ですんだ。

しかし、さっきの接触で夢界が浸食されているため、サキュバスの感知範囲が広く

なっている事も、自分達を取り押さええて強姦するためにとれる手段がかなり広がっている事も分かった。

そしてサキュバスと出会って生き延びた虎松はそう多くないため、新戸は夢界浸食が進んだ時、サキュバスがどんな手段を取ってくるか分からない。

それも新戸にとって懸念すべき事項である。

「とにかく、今は少しでも身体を休めてくれ。

「……」は夢の世界ではあるが、疲労や消耗はある」

「夢の中で休むって、何か変な感じですよ」

「良いから黙って休んでろ、オレは考え事で忙しい」

「……分かったのです」

微妙に納得できないという感じではあるが、綾那達3人はそれぞれ壁にもたれ、休息を取ろうとする。

「どうする、どうする、どうすれば良い……どうすればこの状況を打開できる……」

ぶつぶつと独り言を呟きながら、新戸はこれからの事を考えている。

正直な話、今の状況は詰み一歩手前の状況だ。

自分が襲われる寸前まで夢に入られたと気づけなかった事、夢界浸食があまりにも速い事から、今自分達を襲っているサキュバスはかなり高位の者であると分かる。

粉雪が襲われた時のように不意打ちで殺す事も、セックスで上回るのも困難と言わざるを得ない。

一度でも捕まってしまうえば、たぶんどうする事も出来ずにイッてしまうだろう。

「四天王アタックなら、あるいは……いや、小夜叉にアレは無理か……」

4人でも使えなくも無いが……」

説明しよう。

四天王アタックとは、本多忠勝、榊原康政、酒井忠次、そして井伊直政が全力で敵の注意を引き付け、服部半蔵が後ろからこつそり近づいて刺し殺す虎松発案の卑怯殺法である。

『四天王アタック』と宣言した癖に5人で攻撃してる所がミソである。

「それともニュー四天王アタックで……」

説明しよう。

ニュー四天王アタックとは、本多忠勝、榊原康政、酒井忠次、そして井伊直政がまっすぐ行ってブチのめすという、綾那発案の脳筋戦法である。

シンプル極まりない戦法であるが、シンプルであるが故に意外と対応困難な所がミソである。

ただし、サキユバスには絶対に効いてくれそうもないため、今使っても無意味である。

「いっそグレート四天王アタックで……」

説明しよう。

グレート四天王アタックとは、榊原康政が騎乗位で繋がり、本多忠勝がお〇んこを顔面に押し当て、酒井忠次が胸や首筋を舐め、井伊直政がち〇こを生やしてケツの穴を掘るといふ、歌夜発案のエロエロアタックである。

犠牲者は新田劍丞である場合が圧倒的に多いが、何かの間違いで歌代と綾那が九十郎に惚れた世界では、九十郎がグレート四天王アタックのターゲットになって無様なアヘ顔を晒している。

余談だが、全力で逃走中の島津義弘を追いかけるべく編み出した、酒井忠次発案ファイナル四天王アタックというものもある。

『ファイナル』と名付けられている理由は、それを実行すると大体的場合、虎松の死因ラッキング1位の川上シロンペロン家臣、柏木源トツと遭遇し、虎松が死ぬからである。

そのため最近では上田城で一二三と睨めっこをしたり、呉学人ごっこをしたりしてサボタージュし、関が原から逃げる虎松が後を絶たない。

そんなこんなで新戸は延々とブツブツと独り言をしながら思考の迷宮へと埋没していく。

「綾那、どう思うっ？」

「どうって……？」

そんな新戸の様子を眺めながら、歌夜は綾那にそつと耳打ちをした。

歌夜はこの世界に来てから……いや、三河の地で新戸を初めて見たあの日から、歌夜は一瞬たりとも新戸に対する警戒を緩めていない。

敵か味方か……そんな事ばかりを考え続けていた。

「さっきの言葉、どこまで信用できると思う？」

故に歌夜は、さっきキヤラ崩壊させながら言い放つた説明台詞を信用しきれていないのだ。

「どこまでって……えつと……ごめんです、歌夜の言ってる事が良く分からないのです」

一方綾那は、動物的な本能で新戸を『味方』と判断していた。

「はあ……」

余りにも能天気なその思考に対し、歌夜は1人ため息をつく。

綾那と歌夜が子供だった頃からずっとずっと、2人の関係はこんな感じだ。

「綾那！ あれは鬼なんですよ！

いつどんな理由でこちらに襲い掛かってくるかわからないんだから！

だいたい、許してチョンマゲって……」

新戸に聞こえないようヒソヒソ声のままだが、歌夜は必死にそう語りかける。

三河で葵共々蹴散らされた悪夢のような光景を、歌夜は未だに根に持っていた。

そして歌夜が新戸がいかに信用できないかを一から十まで説明しようとした時……

「……巻き込んで、ごめんな」

小さな声だった。

掻き消えてしまいそうな程に小さな声だった。

それは小さな小さな声であつたが、彩那にも、歌夜にも、小夜叉にも、そして小波の耳にも確かに届いていた。

小屋の中がしん……と静まり返つた。

誰も彼もが無言であつたが、皆の視線は新戸に集まつていた。

そして一瞬……ほんの一瞬だけではあるが、歌夜は新戸に対する警戒心を無くしてしまつていた。

その言葉は新戸が思考の迷宮に迷い込んだ末に浮き出たものであるが……その言葉は、確かに新戸の本心からの言葉であつた。

直後……ぞくりと、悪寒と怖気が背筋に走つた。

「綾那、感じたか？」

「何か、何かこう……」

綾那は馬鹿だから上手く説明できねーですけど、何かヤバイ感じがしたのです」

「オレもそう感じた……歌夜、小夜叉、移動するぞ。

たぶんだが、この場所はサキユバスに気づかれた」

「……ああ、分かった」

「そうですね、確かに何か危険な感じがします」

そこから中から危険な気配がした。

右からも、左からも、壁からも、障子からも、天井からも、土間からも、囲炉裏からも、果ては隅っこに置かれた狸の置物からも危険な感じがした。

それは長年殺すか殺されるかの修羅場を潜り抜けてきた綾那達の直感だ。

そして新戸達が戸を開けて外に飛び出した時……4人は戦慄した。

外の景色が変わっていたのだ。

ついさつきまで、この掘っ建て小屋の周囲には原生林が広がっていた筈だったのに、今は岩と苔、そして闇の広がる洞穴の中になっていたのだ。

「な……何だこりゃあ!？」

「さつきまでの風景と全然違うのです!？」

まるで小屋ごと別世界に転移死したかのような光景に、小夜叉と歌夜、綾那が戦慄する。

いくらここが夢の中で、何でもアリだと頭では理解していても、理性が理解を拒んで

いた。

「ま……まさか、こんな……ま、拙い……非常に拙いぞ、これは……」

しかし、新戸の驚愕と戦慄はそれ以上だ。

新戸には今、周囲に広がる光景に見覚えがあつたからだ。

この場所は……

「オレが……小夜叉の特訓のために用意した……エロトラップダンジョン……」

新戸が滝のように汗を流しながら、そう呟いた。

犬子と柘榴と九十郎第92話 『サキユバスの爪痕』

越後の地に朝日が差し込む。

いつもと変わらぬ夜明けであった。

サキユバスは夢と現をひっくり返す前に絶命したため、あの淫靡な夢は夢のまま終わった。

綾那も、歌夜も、小波も、新戸も、夢の中で犯され、膣内射精を受け、受精してしまった……が、夢は夢、現実の世界には何の影響も生じてない。

夢の中で重篤な後遺症覚悟で超能力を振り絞った新戸も、現実世界ではピンピンしている。

「最悪だし、とうとう夢の中にまで小波が出てきたし。

しかも夢の中ですら姫野の事を思いっきり忘れやがったし……」

姫野は夢を夢だと認識していた。

夢の中で窮地に陥った小波を助けただなんて思っておらず、ちよつとした悪夢を見ただけだと思っていた。

「全く、幸せそうにすやすや寝ちゃって……」

なんでこんなのが服部半蔵やれてんのか、全然分からねーし」

安らかに眠る小波の姿を見て、姫野は無意識のうちに安堵のため息を漏らす。

「姫野の事をすぐに忘れる鳥頭のクセして、寝顔は悪くねーし」

そしてすやすやと寝息を漏らす小波を、まじまじと眺めていた。

空と名月の戦いはすぐそこまで迫ってきており、1分1秒でも早く下準備を進めなければならぬというのに、何故か姫野は小波を起こせずにいた。

「全く、忍びのクセしてアホみたいな寝顔晒して。」

情けないったらありやしないし……本当に、危なっかしくて仕方がねーし……」

奇妙な安らぎと、奇妙な幸福感を、姫野は感じていた。

だがしかし、サキュバスの淫夢は現実世界に2つ、大きな爪痕を残していた……

……

……

……

「……こんな朝っぱらから何の用だ？ こっちは眠てーんだよ、勘弁しろよ」

東の地平線に朝日が僅かに顔を出す頃、九十郎が怪訝な表情で来訪者に目を向けていた。

昨晩は真夜中まで雫や一二三と一緒に、竹中半兵衛を出し抜き、新田劍丞をハメる反

則ストレスの卑怯殺法をあーでもない、こーでもないと話し合っていたため、九十郎の目の下には大きなクマができていた。

「……てか誰だお前？　俺の知り合いにはミイラ男も透明人間もないぞ」

九十郎の目の前にいる人物は、小柄な少女、あるいは少年だと思った。

九十郎の知り合いにはミイラ男のように全身に布切れを巻き付けた人物はいない。

だからこそ九十郎は、もしかしてアサシンか何かじゃなからうかと身構える。

この男、図体はでかい癖に小心者である。

「た、頼む……助けて……くれよ……」

来訪者はガタガタと震えながらそう呟いた。

その声は心底怯え切った声だった。

その声に九十郎は聞き覚えがあった。

だがしかし、聞き覚えがあるが故に驚いた。

その人物はもつと澆刺とした喋り方をしていて筈だから。

「……もしかして、お前小夜叉なのか？」

来訪者が目深に被った頭巾を脱ぐ。

金色の髪がばさつと広がり、藍色のクリクリとした瞳が九十郎に向けられる。

しかし、視線はきよるきよるとして定まらず、四六時中周囲を警戒しているような様

子だった。

「奥に入れ、良く分かんが中は安全だ」

「す、すまん……」

九十郎が練兵館の中に招き入れる。

劍丞陣営に見せたら拙い手紙とか計画書とか陣の配置図とかが床に広がっているが、

九十郎は気にせず小夜叉を中に入れた。

一目で分かったからだ……放置するとヤバイと。

「それでどうしたんだ小夜叉？ そんなに震えて、お前らしくないだろう」

九十郎は床の作戦計画書の上に座布団を敷き、紅茶を淹れながらそう尋ねる。

黒田官兵衛と武藤昌幸が議論を重ねながら何度も修正を重ねた計画書であるが、九十郎はその戦略的価値も、学術的価値もイマイチ分かっていないため、割とぞんざいに扱っている。

後世の歴史家が九十郎を見たら、助走をつけてブン殴るだろう。

「お、オレは……」

小夜叉は床の上にへたり込み、ガタガタと震えている。

寒いからではない、怖いからだ。

彼女の脳裏に浮かぶものは、つい先ほどまで見ていた夢……股間に肉棒を生やした蘭

丸とセックスをする自分、セックスの快樂に押し流される自分、恐怖に駆られて敵前逃亡した自分だ。

「怖い……こゝ、怖いんだ……肌を晒すのが……男の視線が怖い……」

それに……それに……男に抱かれるのが怖いんだ……怖いんだよ……」

小夜叉がガタガタと震えている。

ヒヤッハーヒヤッハーと叫びながら敵に突撃する、普段の姿からはおよそ想像もつかない姿であつた。

そんな小夜叉の姿を見て、九十郎は思った……

「(うわあ面倒臭え……ぶっっちゃけ聞かなかつた事にして放置してえ……」

劍丞か桐琴のどつちかにブン投げて後は野となれ山となれつて言いてえ……

だけどこれ……放置したら明らかにヤバイパターンだよなあ……)」

九十郎は放置しても遅しく生き延びそうな者には基本的に辛辣だ。

だがしかし、放置したら野垂れ死にそうな者には意外と優しい。

それ故に九十郎は思った。

こんな状態の小夜叉を放置するのは流石に目覚めが悪いよなあ……と。

そして劍丞との戦いを最優先で考えなければならぬ身の上だというのに……

「……分かつた、何か考えてやるよ」

そうやって後先考えずに安請け合いをするのであった。

……

……

……

「えーりん、えーりん、助けてえーりん」

「ごめん、意味が分からない」

「劍丞、へるぶみー」

東の地平線に朝日が僅かに顔を出す頃、新田劍丞が怪訝な表情で来訪者に目を向けていた。

劍丞を嫌っている筈の新戸が、何故か朝早くから劍丞を訪ねてきたのだ。

しかも劍丞にとって驚くべき事に、新戸の表情は一目で分かる程に弱々しかった。

「と、とりあえずコレを見てくれ……」

そう言うのと新戸はおもむろにもんぺを脱ぎ、禪もばばつと外して生尻、生ま〇こを

……

「ちよ、ちよつと待つて！　ここ外だから！　ここで脱がないでせめて中に入って!!」

慌てて劍丞は強引に新戸を長屋の中へと引きずり込む。

見る人が見れば誘拐のようにみえる光景であるが、劍丞にとって幸運な事に目撃者は

1人もいなかった。

どうせ剣丞に自分を襲う度胸は無いと読み切っていた……という訳ではない。

世間体とかを考慮している余裕が無い程、新戸は精神的に追いつめられているのだ。

「こ、これは一体……」

新戸の下腹部に奇妙な刺青のようなものが浮かんでいた。

ピンク色の、ハートのような形状の魔法陣のような紋様であった。

ただのお洒落では無い事は、新戸の深刻そうな目を見ればすぐに分かる。

「淫紋だ……サキュバスという怪異が使う超能力封じ。

これがある限り、オレは超能力を使えない」

「超能力……って、つまり御家流の事だよな？」

「そうだ、これがあると使えない。精神の集中を妨害される。

多分だが、用心のためにこれだけ先に夢と現を操ったのだと思う。

ぶつちやけ、今はオレの長所が9割死んでる」

「一大事じゃないか!?!」

「そうだ、だから助けてほしい。

これも多分だが、剣魂ならコレを破壊できる可能性もある」

「何か曖昧だな」

「……アレも使えなくなってるからな」

新戸が言う『アレ』とは、別世界の虎松達と対話する程度の能力である。

決して忍者の最終奥義ではないし、邪悪な意思でもない。

さておき、別世界の虎松達と対話する能力には特に深い集中が必要であり、淫紋によつて性的快感をブチ込まれながらでは絶対に発動できないのだ。

「アレつてのは良く分からないけど……でも、俺の剣はまだ……」

劍丞が床の間に置いてある刀を……劍丞が戦国時代に来た際、何故か手元にあつた刀を持つてくる。

鞘から抜くと……金ヶ崎で蘭丸に襲われた直後に比べれば大分マシになっているものの、まだまだ大小様々な形のキズやひび割れが残る、ボロボロの刀が現れる。

「むっ……」

新戸は劍丞の刀をまじまじと見つめ……ふうつとため息をついた。

「駄目だな、まだ修復途上だ。今無理をさせれば、本当に碎けてしまいかねない」

それはつまり、劍丞の刀が完全に直るまで、新戸が置物一步手前の役立たずになるという事だ。

希望を碎かれた新戸が、深くため息をつく。

「しかし、これは拙いな……」

「拙いって、何が？」

「これが現実になつてるといふ事は……」

あまり考えたくないが、受精まで現実になつて……」

最悪の想像が新戸の頭によぎる。

透視能力を使えば受精してるかどうかは一発で分かるし、念動力で墮胎するのも簡単なのだが、今の新戸はそれすらもできない。

もしかしたら、姫野がサキュバスを殺すのが遅すぎたのでは。

もしかしたら、自分が気づいていないだけで、綾那と歌夜、小波は知らぬ男の児を孕まされてしまっているのでは……そんな想像が頭をよぎる。

「ちよ、ちよつと、何か不穏な事を言つてないか？ 受精とか何とか……」

「大丈夫だ、大丈夫だとも……」

たぶん、たぶんな、ギリギリだったが間に合つたと思う、たぶん」

「いや微塵も安心できないよ！ 本当に何があつたんだ？」

新戸は盛大に目を泳がせ……

「前回までのあらずじ！」

小夜叉を夢の世界でエロエロ特訓させようとしたらサキュバスに襲われました。

捕まったら強姦されて、絶頂したら最近夢精したどっかの男の児を孕まされます。

しかも前に仕込んだバックドアを逆用されて歌夜と綾那と小波は巻き込みました。色々頑張ったけど小夜叉以外サキュバスに犯されて受精までしちゃったよ。

でも絶体絶命の所で姫野が助けに来てくれて事なきを得ました。

と思つたら何故かオレには淫紋は残ってましたあゝ。

これじゃオレの長所が9割お亡くなりになる！

ヘルプミー劍丞様！ 劍丞大明神様！ 300円あげるからあつ!!」

今まで積み上げてきたキャラを見事に崩壊させながらこれまでの経緯を超早口で説明した。

九十郎なら『長い、三行で』と駄目出しするところであるが、根が真面目な劍丞は真剣に耳を傾けている。

なお、日本円が成立するのは明治4年5月10日、つまり未来の通貨だ。

大江戸学園でならともかく、戦国時代ではどう頑張っても300円を用意する事は不可能である。

「えっと……何でエロエロ特訓なんてやろうとしたんだ？」

「話すと長くなるが……つまり、オレが蘭丸に負けた時の保険で……」

「劍丞！ 劍丞えっ!! 頭撫でるし！ なでなでするしいっ!!」

「あ、おい！ ちよつと……御主人様に何て事を……」

そんな時、どたばたと忍者らしからぬ大きな足音を響かせながら、風魔小太郎と服部半蔵……この時代の忍びの中でもトップの実力を持つ2人がやってくる。

「……またか」

「……うん、まただし」

目と目が遭う瞬間、2人は通じ合った。

余計な言葉は不要であった。

2人の間には奇妙な友情があった。

「え？ 御主人様？ こいつをどこ存じなのですか？」

一方、小波は訳も分からず目をきよろきよろと右往左往させている。

「むしろ知らないお前の方にびっくりだし。このやりとりかれこれ10回目だし。

小波の鳥頭にはいい加減ウンザリだし」

「毎回毎回、何で忘れるんだろうな。」

他の事はしつかり覚えてるのに、姫野の事だけ綺麗さっぱり」

「姫野……？ 誰ですか、それは？」

「私だしっ！！ ついさつき名乗ったばかりだしっ！！」

「ここに来るまでの時間で綺麗さっぱり忘れるとか、

草とか忍びとか以前に社会人としてあり得ないっ！！」

こうやって劍丞の目の前で不毛すぎる問答が行われるのも今回で10回目である。やむなく劍丞はいつものように、姫野の頭を優しく撫で始める。

「……御主人様……!?!」

小波が驚愕で大きく目を見開いた。

目の前の少女が何者なのかは全く分からないが、その立ち振る舞いから腕利きの忍びである事は理解できた。

そんな腕利きの忍びが他人に頭を撫でさせた事も、敬愛する主君、新田劍丞が腕利きの忍びのすぐそばに無警戒に寄り添う事も、小波にとっては驚愕すべき事実であった。

なお、彼女は全く覚えていないが、彼女が感じる驚愕と混乱はこれで10回目である。

「あの、御主人様……も、もしかしてですが、その方は……お、お知り合いで……?」

敬愛する主人の知り合いに無礼を働いてしまった、敬愛する主人に恥をかかせてしまった、そんな後悔の思いと共に、小波はおずおずと劍丞に問いかける。

「大丈夫、味方だよ」

少しでも小波を安心させようと、劍丞はにこりと笑ってみせる。

小波にとっては、その笑顔だけで御飯三杯は食べれそうな程に輝いて見える。

「……御主人様……」

小波の顔が真っ赤になっていく。

心臓が早鐘のように脈動し、頭がかあつと熱くなつていくのが分かった。

「これがリアルニコポか……」

新戸がぼそつと呟く。

読心能力は使えずとも、小波が今どんな事を考えているか、なんとなく理解できた。

「ただし、期間限定の味方だし。まあ、またこつやつて頭撫でてくれるなら、

この戦が終わつた後もちよつとした便宜くらいはくれてやつても良いし」

どーだ羨ましいか、どーだ思い知つたか、とでも言いたげな視線を向けながら、姫野が胸を張る。

こつやつて小波がオロオロする姿を眺める事は、姫野の密かな楽しみになりつつある。

それに劍丞に頭を撫でて貰うと、不思議と胸の奥がぼかぼかと温かくなつていった。

まるで幼き日に亡くした、父の姿に重なるようで、まるで幼き日に失つた、家族に温かみを取り戻したかのように……姫野はこの感触が好きだった。

「これがリアルナデポか……」

新戸がぼそつと呟く。

読心能力は使えずとも、姫野が今どんな事を考えているか、なんとなく理解できた。

ニコポだの、ナデポだの、安つばいラノベかエロゲでしか見られないようなスキルを

披露する劍丞に対しては、正直な所驚きを禁じ得なかつた。

時々、本当にラノベかエロゲの主人公なのではないかと思う程だ。

だからこそ新戸は……いや、無数の並行世界に存在する無数の虎松達は、劍丞相手にノリノリでグレート四天王アタックとかをヤツてる一部例外を除き、新田劍丞を嫌うのである。

「あれ？ 劍丞、その劍……」

恍惚とした表情で劍丞のリアルナデポを堪能していた姫野が、劍丞が握っていた抜身の刀に興味を持った。

「うん？ 何か気になる事でもあつたか？」

「随分ボロボロの劍だし。 そんなの使つてちや生き残れないし」

「いや、この劍は結構重要な物だから。 そう簡単には捨てる訳には……」

劍丞の言葉が終わらないうちに、ガシャンとなにか金属製の重い物が劍丞に押し付けられる。

「これ……は……小太刀、だよな？」

「それ、あげるし」

目をぱちくりとさせる劍丞に対し、姫野は何でもない事のように告げる。

しかし、彼女は視線を劍丞の方向に向けようとしない。

刀劍マニアの義姉や、刀劍乱舞にハマってる義姉から色々仕込まれているので、無駄な装飾が一切無い、実戦用の刀劍だと劍丞には分かった。

風魔小太郎が……歴史に名を残る程の腕利きの忍者が、己の命を預けるに足りると認めるような、素晴らしい刀だと劍丞には理解できた。

「貰えないよ、こんなの」

「気にすんなし。期間限定とはいえ今は味方だし、

うっかり死なれると姫野は困るんだし、それにお侍つてのは二本差しするもんだし」
なお、まだ姫野には知らされていないが、この戦の総大将、北条名月景虎は隙を見て劍丞を殺す気である。

「じゃあ、期間限定が終わったら返すよ」

「返さなくても良いし。姫野の都合で何度も何度も押しかけて、頭撫でさせてるし。

迷惑料みたいなものと……ものと……」

そこまで言つて、姫野はハタと気がつく。

こうやって何度も何度も劍丞の元に押しかけて、何度も何度も頭を撫でると要求している原因を……何度も何度も何度も姫野の事を忘却し、その度に手っ取り早く『味方』だと再認識させる手間をかけさせる、憎い憎いアンチクショウの事を思い出した。

「……小波、姫野に迷惑料よこすし」

「何故私が!？」

「何度も何度も姫野を忘れるから、その度に作戦行動が中断されるし！」

緻密な連携が命の風魔忍軍の強みがお前一人のせいでも色々乱れてるし！

姫野が徹夜で考えた段取りがこれでもかかって位に崩されてるしいっ!!」

「そんな覚えは無い！」

小波は一切の迷いも無く、力強く断言した。

「覚えが無いのが一番の問題だしいいいいいいいいーっ!!」

その言葉に嘘は無い、嘘は無いが……むしろそれが問題なのだ。

姫野は叫ぶ、唾が跳び、血管が浮き出る程に叫ぶ。

今の姫野のツツコミ力(つつこみちから)は、美空を凌駕し、志村新八にも匹敵する。

「全く、どんな教育されたのか、親の顔が見てみたいし！」

父親も母親もお前と一緒にだよ……と、新戸は小声で呟いた。

「てか何がどうなった姫野の事だけ忘れられんだって話だし！」

呪われてるみたいだし！」

呪われてはいないが、精神操作はされてるな……と、新戸は小声で呟いた。

「そもそも、こんなに可愛い可愛い姫野様を忘れるって事自体がありえないし。」

親兄弟を忘れたとしても、姫野は忘れないって人が世の大多数だし」

お前だって姉の顔を忘れてるだろ、しかも精神操作も何もされてないのに素で忘れてるだろ……と、新戸は小声で呟いた。

大きな声で言つてやりたいとも思つたが、どうせ信用されないし、どうせ変人と思われただけだと分かり切つている。

それに今の新戸には小波と姫野の事よりもつとずつと重要な事があるのだ。

「そう言えばその剣、前に見た時とちよつと違つてない？」

もうちよつと傷が多かつたような……」

ぶつくさと文句を言つていた姫野がふと気がついた事を口にする。

「ああ、この剣つて、ナノマシン……実は俺も良く分かつてないんだけど、

自分で自分を修復できるみたいなんだ」

「それ、何気に凄くない？ ひとりでに直る剣とか聞いた事無いし」

「そりゃ無いだろうな……」

ナノマシン……戦国時代に似つかわしくないワードである。

そんな代物が何故叔父の家にあつたのか。

何故自分と共に戦国時代にやつて来たのか。

新戸はかつて北条早雲が神々と戦うために作ったと言つたが、何故北条早雲がナノマ

シンなんぞ作れて、何故神と戦い、何故自分がその時に作った剣がここにあるのか……
新戸から話を聞いた前も後も謎だらけの剣である。

「まあ、良いわ。 劍丞、頭撫でるのはその辺で良いし。」

そろそろ任務に戻らないと段取りが増々崩れちゃうし」

姫野が少し名残惜しそうに劍丞から離れる。

最初の1・2回は特に何も感じなかったが、今は少し、ほんの少しだけではあるが、この心地良い場所から、ストレスフル極まりない任務に戻る事に抵抗感があった。

なお、ストレスの半分は小波が何度も何度も姫野の顔と名前を忘れる事、残りの半分は小波が徹夜で考えた段取りが何度も何度も練り直しになる事……つまりほぼ全部が小波由来である。

「小波、そろそろ動かし。 姫野達にはこんな所で時間を浪費できないし。」

覚えてるかどうかわからないけど、風魔忍軍は連携が命」

「一に段取り、二に準備、三に緻密な連絡、四に指揮系統の徹底、

さらに不測の事態は常に起こりうるため、人も物も常に予備を用意すべし」

「何でそれは一言一句違えず覚えてて姫野の名前は綺麗サツパリ忘れるしい!!」

そんなこんなで、姫野と小波は今日も行く。

圧倒的優位の空陣営の情報収集、そして攪乱、さらに戦が起きるまでに仕込みをする

ため
に。

犬子と柘榴と九十郎第93話『吞牛の術』

「さあさあ寄つてらっしゃい！ 見てらっしゃい！」

世にも珍しく、とつても楽しい見世物でございっつ！！」

姫野と小波が大通りを歩いていると、そんな陽気な声が耳に届いた。

「お、大道芸人だし。 小波、ちよつと見てくし」

「姫野、我々には無駄な時間が無いと言つたのはそちらだぞ」

「一番時間を浪費してる理由はお前が姫野の顔と名前を忘れるからだし」

「失敬な、私がいっつ貴女の名前を忘れたと」

「昨日も一昨日も全く同じ台詞を吐いてたし」

そして昨日も一昨日も小波は見事なまでに姫野の顔と名前を忘れてる。

夢の中にすら助けに行つた姫野もこれでは浮かばれまい。

ちなみに、当然のように小波は夢の中で姫野に助けられた事を忘れてる。

「しかし、もうあまり時間が……」

「んな事小波に言われなくつても分かつてるし。」

でも、こういう今にも戦が始まりそうな時、一番警戒しなければならぬのはどんな

奴？」

そう言われて、小波ははつと気がつき、服部半蔵の……冷徹なる忍びの顔になる。越後の龍と畏れられた長尾美空景虎の後継者を決める戦いがもう間もなく始まるのだ、

当然、他国の目も向けられている筈だ。

そして他国の内情を探るため、草を送り込む場合良くあるのは……行商人か旅芸人に変装させるのが常套手段だ。

「少し、見ていきましようか」

「うんうん、そうするし。小波も少しは話が分かるし」

ニコニコと能天気笑いながら姫野は見物客の中に紛れる。

表面上は能天気笑っているが……当然、姫野には一切の油断は無い。

姫野と小波は隣り合つて、手と手をぎゅつと握り合いながら見物を開始する。

最近、手を握っていると多少は忘れるまでの時間を延ばせる事が分かったからだ。

「これよりお見せしますは、世にも奇妙な物語」。

種も仕掛けも無い本物の怪異を「ごらんください」

細身の女性が大きな大きな黒牛をばんつばんつと叩いて見せる。

女性の10倍も20倍も大きく重そうな牛であった。

小波の目にも、姫野の目にも、その他の群衆の目にも、その牛は何の変哲も無い普通の牛のように見えた。

しかし……

「(なんだ……胸の奥がざわざわする……?)」

「(武術の心得はあまりなさそうだけど……何か胡散臭い感じがするし。)

まるで……まるで……良く分からないけど、言動の端々が胡散臭いし)」

2人は無意識の内に身構えていた。

へらへらと笑う細身の女性に対し、奇妙な違和感のようなものを感じた。

「今から某……この大きな牛を丸呑みにしてみせまゝす」

そして細身の女性はいきなりステーキ……もといいきなりとんでもない事を言い出した。

群衆がざわめく。

『何言ってるんだあいつ』とか『無理だろ』とか『頭イカレてるんじゃないかねーか』とか、そんな声が周囲から聞こえてくる。

「この牛ちゃんね、結構高かったが故に。この芸に失敗すると素寒貧になるが故に。

見事成功しましたら、見物料をたっぷり投げてくださいいね」

しかし、細身の女性はへらへらと笑ったままだ。

「さて、それじゃ早速……」

へらへらと笑ったまま黒牛の尻のほうに回り……

「……がぶりんちよつ」

腹這いになって牛の背に乗った。

少なくとも小波と姫野の目にはそう見えた。

だがしかし、他の群衆は揃って目を大きく見開き、感嘆の声をあげていた。

まるで信じられない芸が目の前で披露されたかのように。

『何だあれ!?』『信じられねえ』『あいつどんだけ口がでかいんだ』『本当に丸呑みする気かよ!?』『あいつ人間じゃねえ』

そんな声が周囲から聞こえて来た。

「さてそれじゃあ、もつともつと飲み込みますよ」

細身の女性が腹這いになりながら、ずりずりと黒牛の背を這って前に進んでいく。

それは床オナにも見えなくも無い艶めかしい所作であった。

群衆の驚きや戸惑いの声がどんどん大きくなっていく。

「な、何あれ……何なの……?」

姫野が思わず戸惑いの声を出す。

いきなり黒牛の背中に腹這いに乗つかる女性も謎だが、周囲の反応はもつと謎だ。

「幻術……姫野、これは幻術です。どうやっているかは謎ですが、

おそらく周囲の者に牛を呑み込む幻覚を見せているんです」

小波が小声で姫野に耳打ちをする。

「そ、そつか……姫野達だけ幻を見てないって事か……」

姫野もひそひそ声で小波に言う。

その瞬間、牛の背に乗る女性の瞳が、まるで獲物を見定める猛禽類のように細まった事に、まるで極上のデイナーを前にしたかのように涎を流した事に、小波も姫野も気がつかなかった。

「……よいしょつと」

細身の女性はそのままずりずりと牛の背を這っていき、頭の上まで到達すると、くるつと回って地面に着地した。

群衆がさらにさらに大きくどよめく。

『すげえ!』『やべえ!』『パネエ!』『マジでやりやがった!』そんな歓声にも似た声で一杯になった。

しかし、小波と姫野の目には、普通に女性と黒牛が立っているように映っていた。

「はい、見物料はこちらにお願ひします。

某腹ペコであるが故に、某とてもとても腹ペコであるが故に、

たつぷりたつぷり恵んでくださあ〜い」

『まだ食う気かよ!』なんてツツコミの声があつたが、群衆は割と素直に見物料として小銭や野菜、米等を取り出し、女性の足元にある籠に投げ入れていく。

「ううん……野菜やお米より、金子の方が良いのですけど……」

まあ、贅沢は言えませんかねえ」

そんな事を小さく呟きながら、女性が籠を覗き込む。

小波と姫野も、怪しまれない程度の額を財布から取り出し、籠の中に投げ入れた。

「あんまり少ないと、襲つて食あ〜べちや〜うぞ〜」

女性がへらへらと笑いながら、猛獣が威嚇するポーズで周りにアピールする。

当然、群衆の誰も本気で食われるとは思っていない。

姫野も小波も食われるなんて少しも思わない。

誰も彼もが今の女性の言葉を、冗談として聞いていた。

「はいっ! 本日はこれにて店じまい! ありがとうございましたあ〜」

女性が最後までへらへらと笑い、黒牛を引つ張つてどこかへと去つていった。

さつき丸呑みにした筈の黒牛を連れて帰っているというのに、群衆の誰もそれに違和感を覚える者はいなかった。

「どうします、追いますか?」

「部下を1人つけて、尾行させるし」

姫野は特別な訓練を受けた者にしか聞こえない、特殊な加工が施されている笛を吹く。

1分もしない内に、風魔忍軍の1人が姫野達の前に現れる。

「……と、言う事だし。分かった?」

「御意」

部下に自分達が見聞きした事を簡単に伝え、しばらく動向を探るように命じ、姫野と小波は本来の任務に戻っていった。

そして……

……

……

……

「こんにちは、お二方あ〜……」

その日の夕刻……

有力者の館に忍び込み、密談を盗み聞きして。

姫野の事をド忘れした小波を連れて戻り、劍丞に頭なでなでさせて。

空陣營の参加者の陣地に偽手紙を仕込んで、姫野の事をド忘れした小波を連れて戻

り、劍丞に頭なでなでさせて。

戦場になりそうな場所を下見し、毘もしこたま仕込み。

姫野の事をド忘れした小波を連れて戻り、劍丞に頭なでなでさせて。

なんやかんやで日が暮れた頃……早朝に大道芸をしていた細身の女性が姫野と小波の前に現れた。

へらへらと……いや、にたにたと気色の悪い笑みを浮かべていた。

「貴女は、今朝の……」

「何でこいつの事は覚えてて姫野の事は3回も忘れるし……」

姫野が周囲を見回す。

部下の1人に尾行を命じていたから、近くに来ていた筈だ……と。

「ああ、あの娘を探しているのですから……ここに居ますよ」

細身の女性が自分のお腹をぼんぼんと撫でる。

姫野も、小波も、そいつが何を言おうとしているのか理解できなかった。

「とても美味しかったですよ。 おやつ代わりとしてはとても上等でした。

何せ某、ここ最近はとっても不味い物しか口にしていなかったが故に」

そして細身の女性は懐から簪を取り出す。

紅く血で染まった簪を……

「それは!？」

姫野はそれが、さつき尾行を命じた部下の物だと気づいた。

「いえ、おやつと言うよりも食前酒か、前菜ですかねえ。

あの娘の血はとてもジューシーな味わいでしたよお。

心臓のコリコリとした食感もとても素敵でした。

骨髓をちゅーちゅーと吸うのも久々でした。

お二方はきつと……もつともつと美味しいのでしようねえ」

じゅるりと、女性が涎を拭いた。

姫野は気づいた、気づいてしまった。

こいつに部下は殺された……いや食われたのだと。

「あんた……何者だし?」

姫野が身構えながらそう尋ねる。

素直に教えてくれるとは思わなかったが……

「加藤段蔵」

予想に反して、その女性は……段蔵は自らの名を名乗った。

「貴女達2人を、食べに来ました。いえ、某は特異体質でしてねえ。

人間の肉以外、どんな食べ物も身体が受け付けられないのですよ」

そして宣言した。

お前達を食うと。

ぞくりと2人の背筋に怖気が走る。

一瞬、2人は自分が俎板の上に乗せられた鯉になったかのような錯覚に襲われる。

そして確信する。

こいつは本気で自分達を食す気だと。

こいつは本気で自分達を食材だと思っっていると。

「ただの大道芸人じゃあなかった訳だし」

「ああ、アレですか。あれは美味しいのと美味しくないのを見分けるためですよ。

超能力者はとても美味しいが故に。脳ミソが美味しいくんですよお、とてもとても。

最近は路上にころがる犬のクソのよう不味いものばかり口に詰め込んでいたが故に、今はとてもとてもグルメな気分なのですよ」

「小波、路上にころがる犬のクソの味って想像できるし？」

「できません、したくもありません」

「そりゃそーだし。むしろ想像出来たらドン引きだし」

小波が忍者刀を抜き、姫野が両手に苦無を握る。

愛用の小太刀は今朝劍丞に渡してしまつて無いが、武器の1つや2つ減つている程度では、風魔小太郎の戦闘能力は微塵も下がらない。

「ではでは、この世の全ての食材に感謝を込めて……」

段蔵が舌なめずりしながら両手を合わせた瞬間……

「……やれ」

姫野が冷徹、かつ冷酷にそう告げると、周囲の物陰から10本の投擲用に作られた短槍が飛び交い、その全てが脳天や心臓、喉や腎臓等、人体の急所へと吸い込まれるように突き刺さつた。

「あ……が……な……つ」

段蔵が呻き声と共にぼたんと倒れ伏す。

そして先程短槍が飛び出した物陰から、町娘や浮浪者に変装した風魔忍軍の構成員が出て来た。

「獲物の前で舌なめずりする程、姫野は抜けてないし。」

風魔忍軍は連携が命。 定時連絡が急に途絶えたら警戒するに決まつてるし」

御家流を使う相手と戦う時は、精神を集中させる時間を与えるのは悪手……姫野は会話をしながら部下達が奇襲を仕掛ける準備を整えるのを待つていたのだ。

「頭領、ヤツは一体……」

段蔵に短槍を投擲した忍者の一人が姫野に駆け寄ってくる。

「加藤段蔵つて名乗つてたけど、飛び加藤にしちゃ弱すぎるし。」

たぶん別人が名を騙つてただけだと思ふし」

「死体の処理は？」

「一応、持ち帰つて調べてみるし。」

身元が分かる物を持ち歩く位抜けてれば助かるけど……」

姫野が無警戒に倒れ伏す段蔵に近づいていったその時……異変が起きた。

「いやですねえ、飛び加藤ですよ、某は。」

「本当に本当に飛び加藤ですよ、信じてもらえないかもですけど」

喋る筈の無い遺体が喋り、その場の全員が身構え……ぐじゆるるるっ!! と、奇怪な

音と共に単槍が空けた10の風穴から醜悪な肉の触手が飛び出した。

「なっ!!」

「ぐわあっ!!」

「ぎゃああっ!!」

「が……ああ……」

段蔵の額に短槍を投げた者は額に、段蔵の心臓に短槍を投げた者は心臓に、段蔵の喉に短槍を投げた者は喉に……寸分たがわずに突き刺さり、モズの早贄のように貫通して

いた。

そしてその直後、風魔忍軍達を刺し貫いた触手が、ぐじゆるぐじゆると醜悪な音と匂いを出しながら人間の体液を吸い上げる。

数秒もしない内にまるで中身を吸い取られたブドウの皮のようにしわくちやになり、10名の風魔忍軍達が残らず絶命した。

「な……なに、これ……」

「こいつ……人間を吸って……飲み込んだ……!?!」

姫野と小波が戦慄する。

そして段蔵は伸ばした触手をまるで掃除機のコードのように体内に収納しながら、ゆっくりと立ち上がる。

「悪くない味でしたよ。ちよつと空腹でふらふらしてたのが一気に回復できました。

でも、この食べ方は良くないですねえ、色んな味が混ざって味が良く分からない」

血と肉と骨と内臓をぐしやぐしやのムースにしたモノをペロりと平らげ、比喻表現で無く全身で人間の味を堪能した段蔵がにたあくつと笑う。

「姫野、こころは一時引きましよう。明らかに異常です、アレは」

小波が姫野を庇うように身を乗り出してそう告げる。

しかし、姫野は俯きながらぶるぶると震えていた。

「お前……お前は……」

その目に宿った感情は『恐怖』ではなく、『嘆き』や『悲しみ』でもなく……『怒り』。その殺し方に見覚えがあった。

人間に触手を突き立て、ちゅーちゅー吸って平らげるその殺し方を見たのは2度目であつた。

その殺し方は……

「私のお父さんとお母さんを殺した……あの時の肉塊いいいいいいーっ!!」

その殺し方は、姫野の父と母を殺したやり方と全く同じであつた。

あの時、姫野の両親は見ただけでS A Nが削れそうな肉塊から伸びた触手に刺し貫かれ、吸い殺されたのだ。

「うーん……?」

段蔵が興味深そうに怒りに満ちた姫野の顔を覗き込み、額をぽりぽりと搔いて……

「ああ、某が食事した時の目撃者ですかねえ?」

どろりと、段蔵が溶けた。

見た目は若い女性だった段蔵が、まるで生魚を猛暑の中で何日も放置したような鼻が曲がる程の悪臭と共に、見ただけでS A N値が削れるような赤黒い肉塊へと変わった。その姿はかつて姫野の両親を惨殺した異形と瓜二つ……いや、そのものズバリであった。

「両親の仇いっ!!」

姫野が憤怒の表情で苦無を何本も投げる。

苦無がザクザクと肉塊に突き刺さり……何の痛痒も感じていないかのように、肉塊はぺつと己の身体に突き刺さった手裏剣を吐き捨てた。

「お前を殺した所で、堅物だけど頼りになるお父さんも、

ドン臭かったけど優しくかったお姉ちゃんも、

いつもハジケてたお母さんも返ってこない……けどっ!!」

「仇討ち……ですか?」

正直某、貴女がどこの誰なのか全くまあうつたく覚えてないのですがねえ」

段蔵が人を小馬鹿にしたような嘲笑の笑みを浮かべた。

「そうよっ!! 私の大変な大事な家族の痛みと苦しみを味わえ!!」

大事な大事な家族を奪われた私の悲しみを味わえ!!

そうじゃなきゃ……そうじゃなやあ！ 私の気が済まないのよおっ!!」

姫野がそう叫ぶと、見ただけでS A N値が削れそうな醜悪な体表から何個も何個も口が浮かび出て、一斉にゲラゲラと大きな声で笑い始める。

「いいですとも！ ああ、いいですともっ!! 復讐？ 仇討ち？ 大いに結構!!
何せ某……グルメであるが故に！

強い強い感情を抱きながら死んだ人間はととてもとても甘美な味であるが故に!!
ぐしゃつと潰してえ！ 脳味噌をちゅーちゅー吸うとおっ！

実に実にじいっつにいい！ 美味であるが故にいいいいいいーっ!!」
「もう喋るなっ!!」

姫野がさらに手裏剣を投げつける。

しかし、段蔵はゲラゲラと高笑いをしながらそれを受け、ぺつと吐き捨てた。

「効いちやいないか……」

全く堪える様子が無いのを確認すると、姫野が舌打ちをする。

火薬玉や、鉄菱、鎖鎌といった武器を隠し持っているが、この様子では手持ちの武器で殺すのは難しいと認めざるを得ない。

「姫野、奴は何者ですか？」

「小波には関係ねーしっ!! これは姫野の仇討ちだしっ！

巻き込まれたく無かったら離れてろだしっ！」

仇敵を目の前にしながら、有効な手立てが何一つ思い浮かばない焦りからか、姫野は思わず声を荒げてしまう。

「しかし、期間限定とはいえ、味方同士で……」

「うるせーしっ！ 関係無い奴は引っ込んでろだしっ!!」

姫野が更に声を荒げ、懐から取り出した鎖鎌をブーメランのように投げつけ、醜悪な肉塊と化した段蔵に深々と突き立てる。

しかし、やはり段蔵は全く痛がる様子も無く、苦しむ様子も無い。

「ふふふ……良いのですかな、こんな迂闊な事をして？」

某、釣りも得意であるが故に「

それどころか、突き刺さった鎌を引っ張り、鎖を握る姫野を自分の方へと引き寄せようとしていた。

「く……このっ……」

姫野も引っ張られまいと両足に力を籠めるが、段蔵はまるで巨象のように重く、力も強く、どんどん距離が縮まっていく……激昂し、焦り、冷静な判断力を失いつつある姫野には、鎌に繋がった鎖を手放すという発想すらも浮かばない。

「……吞牛の術」

肉塊が能力を発現させた瞬間、空間そのものが飲み込まれた。

犬子と柘榴と九十郎第94話『死闘』

「……呑牛の術」

肉塊が能力を発現させた瞬間、空間そのものが飲み込まれた。

「姫野おっ!!」

咄嗟に小波が姫野を抱きかかえ、真横に飛ぶ。

紙一重で姫野がいた場所が段蔵に喰われた。

「なっ、何よ今のは!？」

「幻術です! 人間を喰う奴の触手が、幻術で隠されていたのです!」

「見えない触手って事!? 何てインチキだし!？」

「迂闊ですよ! あんな奇妙な怪物に正面から無策で挑むなんて!」

「小波には関係ねーしっ! 黙ってるだしっ!!」

姫野が小波をきキツと睨み返す。

そんな2人の様子を、段蔵は興味深そうに眺めていた。

「へえ……へえ! へえ! へえっ!! 今のを見切りますか!？」

しかも幻術と気づきますかあ!？」

見破られる前提で組んだ小手調べの術では無くて、本気の本気の呑牛の術を!?
貴女テレパスですねぇっ!!」

「てれ……ばす……?」

「他人の思念を読み! 他人に思念を読ませる能力!

声を発さずに声を届け、遠く離れた者の声を聞く能力!

そして幻術や催眠、読心への耐性があるのがテレパスでしょうに!」

小波には思い当たる節が何個もあつた。

幼い頃に、気がつけば使えるようになっていた口伝無量は、まさしく声を発さず、遠く離れた者に声を届ける能力であるし、小波は他の者より、幻術の類を受けにくい体質であつた。

「呑牛の術うっ!!」

段蔵がもう一度、呑牛の術で不可視になつた触手を伸ばす。

今度は1本ではなく、3本同時に……1本は姫野が立っている場所に真つすぐ伸び、残りの2本は姫野が避けそうな方向に向かつて回り込むように伸びた。

「姫野! 危ない!!」

小波が姫野を押し倒すように伏せさせる。

2人の頭上数cmの所を、段蔵の触手が掠めていった。

「見えてますね！ 見えてますねえ！ 本気の呑牛の術で隠した某の触手をおっ！！

やはり貴女はテレパスだ！ 某の呑牛の術を身切れるが故にいつ！！」

狂喜、狂喜、狂乱の笑みが浮かぶ。

口惜しさを滲ませながら、姫野が肉塊の攻撃痕に視線を移す。

空気も、水も、草木も、岩も、地面すらも、まるで空間そのものを、一切合切を残ら

ず呑み込んだとすら思うその強烈な光景は、姫野を戦慄させるに十分なものである。

そして反省し、自戒する……頭に血が上ってしまったと。

「(手持ちの武器じゃ殺せない。 けど、ここで逃がしたら次に会えるか分からない……

そうだ、越後の後継者争うで使うつもりで仕込んだ罠。

あれに上手く巻き込む事ができれば、あるいは……)」

姫野がじりじりと後退を始める。

逃げ切つてはいけない、怪しまれてもいけない、できるだけ自然に、できるだけ疑われずに、罠を仕込んだ場所まで誘導しなければならぬ。

「(小波、一昨日仕込んだ、丸太の罠までコイツ誘導するし)」

「(崖の上から丸太が落ちてくるアレですね。 固定用の縄はどうやって切ります?)」

「(姫野が引き付けるから、小波が……って、何でそれは覚えてて姫野の事は忘れるし)」

「(……なんの話ですか?)」

「別に良いし、こんな時に蒸し返した姫野が悪かったし。

とにかく、姫野が引き付けるから、小波は適当な所で別行動。

姫野の合図と同時に丸太を落とすし」

「(分かりました、ご武運を)」

口伝無量で作戦を伝え合い、小波と姫野が行動を開始しようとした瞬間。

「今……何かを伝えましたね？」

姫野と小波の表情は動かない。

凶星を言い当てられ、心臓が掴まれたかのような思いであったが、その程度で表情を変えするような動揺はしない。

しかし、段蔵は構わず話を続ける。

「大方、斬つても突いても傷つかない某を殺す算段でもしていたのでしょうか？」

それとも逃げ出す算段ですか？

憎い憎い家族の仇、部下を惨たらしく喰い殺した怪物を放つておいて逃げ出す算段

……

それはあんまり無さそうですねえ。

いずれにせよ、視線の動きを追つていれば、おおよそ検討はつきますよ。

何せ某、加藤段蔵であるが故に、こう見えて凄腕の忍者であるが故に」

うじゆるうじゆると気色の悪い触腕を蠢かせながら段蔵は自慢げに語る。

「何が忍者よ、化物じゃない」

「おやおやあ、化物が忍者をやつてはいけないルールでも？」

「一緒にされたくないだけだしっ!!」

姫野が目潰し用に持ち歩いてきた砂塵入りの紙袋を投げつける。

風魔忍軍に伝わる特別な折り方で作られている袋は、力一杯投げつけると、空中で分解して、袋の中身を広範囲にばら撒ける構造だ。

「効きやしませんよこんな物おっ！ 某は忍者で化物であるが故に！」

化外の存在であるが故にいいいいいいーっ!!」

しかし、当然のように段蔵には通じず、距離を取ろうとする姫野達を猛追する。

同時に呑牛の術により不可視となった触手を伸ばし、小波と姫野を貫き、貪り喰おうと試みるも、服部半蔵と風魔小太郎は流星に素早く、するりするりと曲芸のように回避し続けていた。

「ええい！ 大人しく某の晩御飯になりなさいっ！」

「断るっ！」

「冗談じゃねーしっ!!」

小波と姫野が手裏剣を投げ、次々と段蔵に突き刺さる。

大したダメージにならないのは承知の上だが、2人の本当の狙いから目を逸らす狙いもあるので、反撃の手は一切休めない。

「なんて往生際の悪いっ!!」

触手を伸ばす、姫野が躲す。

触手を伸ばす、小波が躲す。

触手を伸ばす、姫野が躲す。

触手を伸ばす、小波が躲す。

触手を伸ばす、姫野が躲す。

触手を伸ばす、小波が躲す。

綱渡りのようなギリギリの逃走劇が延々と続いていく。

そして中々捕まえられない事に、段蔵が苛立ち始めた頃……

「今だあっ!!」

「なっ!?!」

段蔵の見ただけでSAN値が削れそうな醜悪な肉体が宙に浮かぶ。

この場所に仕込んでいたネットが、木々のしなりを利用して、段蔵を持ち上げたのだ。

そして当然……

「この辺り?」

「ええ、そこです」

……当然、段蔵を宙刷りにしただけでは終わらない。

「そこが一番！ 拳を叩き込みやすい角度！」

宙刷りになった段蔵に、山吹色に輝く超常の拳……

小波のもう一個の御家流『妙見菩薩掌』が叩き込まれる。

「うぎやあああああーっ！！」

天から降ってくる小波の氣で寝られた巨大な拳が直撃、そのまま段蔵をサンドイッチの具のように地面に叩きつける。

ぶしやあ！ と鼻が曲がりそうな程の腐乱臭がまき散らされ、段蔵の身体が水風船のように弾けた。

「やったか？」

微妙にフラグ臭い台詞と共に、姫野が身構え、菩薩掌に押し潰された肉塊を覗き込む。すると……

「く……うぐう……」

段蔵が立ち上がった。

ただし、見ただけでSAN値が削れそうな醜悪な肉塊ではなく、昼に幻術を使った大道芸を披露した細身の女性の姿であった。

「ぜえ……はあ……で、テレパスでは、無かった……？」

超能力は、1人1つの筈……な、なのに……」

段蔵はぶるぶると震えながら、両肩を大きく上下させ……

「いっしょ」

ドス黒い血の塊を吐いた。

小波の御家流が、段蔵に決して無視できないダメージを与えていた。

「小波、もう一発いけるし？」

「すみません、この能力は連発が利きません」

「残念……でも上出来だし、初めて小波を連れて来て良かったって思ったし」

句伝無量でしれつと酷い台詞を吐くと、姫野は距離を取ったまま再度手裏剣を投げつける。

「きよ、恐怖を叩る姿に変わったのは……よ、より美味しく食べられるが故に……」

段蔵の身体に手裏剣が突き刺さる。

傷口から、何か月も放置して腐乱した魚のペーストのような、怖気と吐き気がする黒い体液がどろりと流れ落ちる。

「よし、今度は効いてるし！ 小波、一気に畳みかけるし！」

「はい！」

不用意に接近しすぎないよう警戒しつつも、小波が苦無を投擲し、姫野が数日前に仕込んだ木の槍が飛んでくる罠を動かす。

何本もの槍や苦無に刺し貫かれ、段蔵が苦悶の表情を見せる。

「ぐっ……ああ……」

段蔵が片膝をつく。

全身につけられた傷口から、黒い体液がどろりと流れ落ちる。

小波と姫野が投げる武器が無くなるまで、嬲り殺しのような一方的な戦いが続く。

そして……

「ええ、ええ、認めますよ、認めますとも。貴女達は強い、恐ろしく強い。

触腕の避け方、手裏剣の投げ方で分かりますとも、一流の忍者だと。

食べ物で遊ぶような真似をしていたら大火傷をしかねない……もつとも……」

近づいて斬るか、それともその辺に落ちている石でも投げるかと考えていた姫野の前で、段蔵が変化する。

全身から流れ落ちるコールタールよりも真つ黒な体液が、まるで意思を持ったかのようにならぬように纏わりつく。

それはまるで、液体でできた鎧のように……

「な、なんかやばい感じ……両親の仇！ お姉ちゃんの仇！ 覚悟だしっ!!」

不穏な気配を感じ、姫野が先程味方の死体から拝借した忍刀を抜き、段蔵に飛びかかる。

「……もつとも本気でやれば、やっぱり某の方が強いのですがねえ。」

某、加藤段蔵であるが故に、飛び加藤と畏れられる超一流の忍者であるが故に「

……次の瞬間、空中で姫野の身体がくの字に曲がる。

内臓が破裂したかのような激痛が走り、肋骨が何本もひしやげて粉碎される。

「がふっ」

何の事は無い、段蔵が姫野の腹をぶん殴っただけだ。

文章にすればそれだけの事であるが、その鋭い一撃は服部半蔵の目でも、風魔小太郎の目でも追えない程に早かった。

「さつきはよくも殴ってくれましたねえ、こいつはお釣りです!」

「があっ!」

空中で姫野の後頭部が踏みつけられ、そのまま落下……今度は姫野の顔面がサンドイッチの具のようにひしやげて潰れた。

今度の段蔵の動きも、百戦錬磨の忍びである2人が何の反応もできない程に速かった。

「だ、大丈夫ですか!?!」

小波が顔色を変え、忍刀を抜き倒れ伏す姫野と、それを踏みつける段蔵へと駆け寄る。段蔵はそんな小波の姿を冷めた瞳で眺め……

「はああっ！」

小波が忍刀を振るも、がきんっ！ と、まるで鋼鉄の塊を叩いたような手ごたえがあった。

「な……………う？」

小波は驚愕のあまり絶句する。

段蔵の身体は全く傷つかず、逆に小波が振ろ下した忍刀が刃こぼれをしていた。

それはつまり、段蔵の表皮が鎧兜以上の頑強さを持っているという事だ。

気がつけば、全身を覆っていた黒い液体が段蔵の顔を覆い隠し、覆面のようになる。

その形状は小波や姫野にとって馴染みの深い、恐び装束そのものであった。

「貴女……本当に人間ですか？ 人間なら、能力は1人1種類の筈なのですがねえ……

やはりテレパスではなかった？ たまたま幻術への耐性が強かった？」

段蔵は自分が斬りかかれた事に気づいていないかのように、自分の足元で激痛に喘ぐ姫野が見えていないかのように、無感情に小波を見つめる。

小波はそんな段蔵の様子に、底知れぬ恐怖を感じた。

そして次の瞬間……小波の右肘の関節がぐしゃつと潰れた。

「があっ!? な…………ぐっ…………」

衝撃と激痛で忍刀が吹き飛ぶ。

小波の右肘を粉碎したのは、まるで稲妻の如く速く鋭い段蔵の拳である。

それは服部半蔵の目でも追えず、防御も回避も出来ない程に速い一撃であった。

「もつとも、口に入れてしまえば同じですがねえ」

今度は小波の全身が強風の日の木の葉のように吹き飛ぶ。

段蔵の飛び蹴りが小波を捉えたのだ。

「うぐあ!!」

まるで全力で走る巨像と正面衝突をしたかのような衝撃が全身に走る。

小波は全身の骨がバラバラにされたかと思う程の激痛に襲われる。

「う……………のお……………」

次元が違うとすら思える実力差にも関わらず、姫野の闘志は未だに衰えない。

こいつは家族の仇だ、風魔忍軍の仲間を無残に食い散らかした憎い敵だ。

そんな想いが姫野の心に闘志の炎を燃え上がらせる。

ポロポロになった全身に活を入れ、ずるずると這いずりながら小波が落とした忍刀を

拾う。

しかし…………

「往生際の悪いー！」

ぶちっ！ という鈍い音と共に、姫野の右肩がひしやげ、その衝撃で右腕が千切れて飛んだ。

「……づっ！」

噴水のように鮮血が流れ出し、周囲を真っ赤に染め上げる。

段蔵は嬉々とした表情で千切れた姫野の右腕を拾い上げ、砂埃を払う。

「ま、丸太を仕込んだ場所まで、まだ距離が……」

小波……立てるなら、今すぐ逃げるし」

句伝無量を使い、姫野が小波にそう呼びかける。

「し、しかし……」

「姫野なら大丈夫だし。小波が逃げ切った後で、隙を見て逃げ出すし」

「しかし、見ず知らずの貴女にそこまでしてもらおう訳には……」

……一方、小波は姫野の顔と名前を完全に忘却していた。

「あ、あれ……？ あの、貴女は誰ですか？ 何故句伝無量を知って……？）」

「(どうでも良いからとつとつと行くしっ!!)」

姫野の叫ぶようなテレパシーに背中を押され、小波は静かに、しかし素早く着ていた衣服を近くに落ちていた木片に被せ、自分は姫野や段蔵から距離を取る。

小波だけは逃げられそうだと、姫野は密かに安堵する。
だが……

「(でも正直……姫野は助からねーかもしれないし……)」
急激に血を失い、意識が朦朧とし始めた。

段蔵を殺したい、家族と仲間の仇を討ちたいという気持ちは全く萎えていないが、肉体が闘志についていけない。

「それじゃあ、ちよつと味見と参りますかねえ」

段蔵が漆黒の覆面を外し、大口を開けて姫野の右腕を口に運び、ガリッ！ ポリッ！ と骨を噛み砕く音を響かせながら咀嚼する。

「(あの時も……こいつに捕まって……喰われたんだっけな……)」
死を前にした走馬灯なのか、姫野は過去を……過去に遭遇した段蔵の姿を思い出した。

あの時もこうやって、段蔵に喰われた事を思い出した。

「(そういえば……私って、あの時どうやって生き延びたんだっけ……?)」

……

……

……

「駄目だなこれは、全身がヤツに喰い散らかされておる」

肉塊のような怪物に襲われ、喰われた後……今にも途切れそうな意識の中で、姫野はそんな声を聞いた。

気がつけば、全身を咀嚼され、喰われていく悍ましい感覚が無くなっていた。
「皮も、肉も、骨も、肺や心臓もヤツに喰われてしまっているのう。」

無事なのは脳だけか……これではもう、助かるまい」

老人の声が言うように、姫野は虫の息……いや、虫の息すらできない状態だった。

肺も心臓も怪物に喰われて無くなっていたからだ。

「しかし驚いた、この娘はこんな状態になってもなお、目に闘志が宿っておる。」

この娘の目は慈悲を懇願する目ではない、復讐を誓う怒りの目だ」
老人がそう呟いた。

今にも死にそうな状態であるというのに、姫野の心は家族を殺した怪物への怒りで一杯であった。

だからこそ……

「死なせたくはない……とすれば方法は一つ……」

そんな声を聞き、姫野は完全に意識を手放した。

……

.....

.....

「ぎゃああああああっ?!!」

苦しみがなく段蔵の叫び声を聞き、姫野の意識は現実へと引き戻される。

夥しい量の吐血をする。

段蔵を覆い、段蔵を防御していた黒い液体が周囲に飛び散る。

先程小波の菩薩掌を叩き込まれた時と同等……いや、それ以上に苦しんでいた。

「に、人間の筈なのに……に、人間ではないっ!」

混ぜ物! 混ぜり物! この味は獣の肉の味っ!? 何故!? どうしてえ!」

投げ槍や手裏剣によって穿たれた全身の傷跡から、夥しい量の血が噴き出す。

しかも今度は忍者装束に変貌する様子も無い。

そして段蔵は全身を痙攣させながら、その身を大地に横たわらせる。

「そういえば……」

その時、姫野は思い出す。

「そういえば爺ちゃん、熊とか、犬とか、野鳥とかの血肉や内臓を集めて、繋ぎ合わせて、欠けていた身体を補ったって言ってたっけ……」

そして同時に理解する。

段蔵は本当に人間以外の肉を身体が受け付けられない体質なのだ。

そして今の自分の身体は、段蔵が喰う事ができない、獣の肉でできているのだ。

つまり……

「人間以外食べられないって言葉……本当だったんだ。

姫野の腕を食べて苦しんでるって事は……

つまり直接お前を殴っても、喰われる心配はしなくて良いって事だし！」

喪つた右腕を気にも留めず、姫野が立ち上がり、全体重をかけて段蔵の顔を踏み抜く。

「ぐううつ、うおお……」

予想通り、段蔵は姫野を喰わない。

さらに夥しい量の吐血をし、ビクン！ ビクンッ！ とのたうち回る。

「もう一発！」

さらにもう一度、段蔵の腹を踏み抜く。

「ぐぎゃああつ!!」

段蔵がさらに夥しい量の吐血をし、ビクン！ ビクンッ！ とのたうち回る。

「このっ！ このおっ!! さっさとくたばるしっ!!」

姫野は何度も何度も、何度も何度も何度も何度も、執拗に段蔵を蹴り飛ばし、執拗に

段蔵を痛めつける。

その度に段蔵は苦悶の表情を浮かべながら吐血し、全身を痙攣させていた。

「家族の……家族の仇い！ 仲間の仇いっ!!」

姫野がもう一度小波の忍刀を拾い上げ、全体重をかけて段蔵の心臓目がけて突き立てた。

ざくりっ！ と鈍い感触と共に、忍刀が段蔵を串刺しにした。

「呑……牛のお……術うううっ!!」

瞬間、姫野の視界が真っ白に染まった。

幻術をかけられたと理解し、姫野はすぐさま姫野は忍刀から手を放し、全力で後方に跳んで距離を取った。

数秒後……姫野の視力が戻った時、周囲に段蔵の姿は無かった。

「やってられませんよおっ!!」

某、食事に結びつかない戦いは大ッ嫌いであるが故にいつ!!

勝つても何も口にできないですし、負けたら死んじやうじやないですかあっ!!」

そんな捨て台詞が、遙か彼方から聞こえて来た。

足音でも聞こえないものかと、姫野は地面に身を伏せて注意深く周囲を探る。

しかし相手は飛び加藤と畏れられた熟練の忍び、風魔小太郎と言えど、そう容易く尻

尾を掴まれる程、抜けてはいなかった。

「逃げられちゃったし……」

姫野はため息をつく。

家族の仇を見つけた。

あと一步で殺せる所まで追い詰めた。

しかし、逃げられてしまった。

大きな大きな落胆があつた。

「でも、あの加藤段蔵が仇だったとは思わなかつたし……」

次に会つた時は、絶対にブチ殺してやるし」

仇の正体を知る事が出来た。

そしてあの恐るべき怪物は、自分だけは喰う事ができない事も分かつた。

人間以外の肉を喰わせる事ができれば、まるで猛毒を飲んだ時のように苦しむ事も分かつた。

それは姫野にとって大きな大きな前進であつた。

そんな事を考えていると……物陰からひよっこり顔を出す小波と目が合つた。

「お前……逃げろって言つた筈だし」

「いえ、あの、その……自分でも分からないんですけど。」

何故か、何故か涙が出て、足が重くて……

今逃げたら、一生後悔するような気がして……それで……」

「戻って来たし？」

小波は恥ずかしそうにこくりと頷いた。

姫野は深々とため息をついた。

「あの……お、おかしいですよね？ 初対面なのに、まるで初対面じゃないみたいで……

名前も知らないのに、貴女を残して逃げたらいけないって、そんな気がして……」

姫野はもう一度深豚とため息をついた。

「……初対面じゃねーし」

そしてもう何回言ったか分からない台詞と共に、姫野はばたんと倒れ伏した。

全身の骨にヒビが入り、多量の血を流し、体力の限界を超えて戦い、姫野はもう限界だ。

「とりあえず止血、お願いするし。それが終わったら、北条の……」

いや、剣丞の所まで運んでほしいし」

「はいっー！」

薄れゆく意識の中で、小波が駆け寄ってくる音が聞こえた。

小波が戻ってこなかったら、出血で死んでいたかな……そんな事を考えながら、姫野

は意識を手放した。

喰われた右腕は、また別のを用意して繋げれば良い。

かつて段蔵に襲われた日、先代の風魔小太郎が自分にしてくれたように。

犬子と柘榴と九十郎第95話『54年早い真田丸』

「はあ……」

姫野がクソでかいたため息をついた。

「最つ悪だし……」

姫野は1人静かに頭を抱えていた。

これから北条の堅物武士こと北条隴綱成と会わなくてはいけない。

しかし、どんな顔で会えば良いのかがまるで分からない。

もうじき始まる……それこそ、明日か明後日の夜明けには始まりそうな、空と名月による越後の後継者を決める大戦に備え、姫野は隴から地勢の確認、戦場になりうる地点に罠の設置、情報収集、偽情報による錯乱等を命じられた。

……が、しかし、姫野の任務は当初の見通しの半分程度しか達成できていなかった。

ただでさえ兵力差の面で不利だというのに、裏工作まで遅れをとってしまったのは、本気で名月陣営の勝ち目が薄くなってしまふ。

それ故に、姫野は隴や名月にどんな顔で報告に向かえば良いのか分からなかった。

「……全部小波が悪いし」

とぼとぼと歩き、朧のいる場所に向かいながら、姫野は小波に対する恨み言を呟いた。

「小波が何度も何度も姫野の事を忘れるせいで、その度に段取りが狂わされたし。」

段蔵もあの日から全然見つからないし」

姫野は思い出す。

小波が数えるのも面倒になる回数、自分の事を忘れやがった事を。

忘れた回数だけ後でブン殴ると誓った事を。

そして忘れた回数だけ、劍丞に頭を撫でて貰った事を……

「まあ、満更悪い事ばかりじゃなかったけど……」

姫野は心に誓った。

小波が自分を忘れた回数だけ、後でデコピンすると。

少なくとも、新田劍丞に出会うきっかけを作った事に関してだけは、姫野は小波に感

謝してやつても良い気分であった。

「それにしても、どうして朧様は小波と一緒に行動しろなんて言ったんだろ。」

姫野と小波が一緒に行動する事に何の意味が……」

そんな事を考えながら、姫野は朧と名月が待つ陣幕へ入り……

「この戦で、新田劍丞を殺す」

そう告げられて。

「貴女の次の任務は、服部半蔵を抹殺する事だ」
そう命じられて。

「これまで常に行動を共にしてきた。今なら、如何様にも始末できるだろう」
そう教えられた。

……

……

……

「やはり、服部半蔵殿が勝負のキモになるね」

「ええ。そうですね」

一三二と雫が頷き合った。

「どう考えても厄介極まりない、あの口伝無量とかいう御家流は」

「伝令が不要になり、途中で討ち取られる危険や、寝返る危険も無く、

伝達内容が敵に知られる危険も無い。

しかも報告も命令伝達も瞬時に行われ、伝達にかかる時間の分だけ、

常に先手を取る事ができる……本当に、敵に回したくない能力ですね」

「こんな恐ろしい能力を軽々しく剣承隊に貸した松平殿は阿呆だね、ア・ホ。

私ならずと監禁して一生外には出さないよ」

一二三がしれつと恐ろしい事を言う。

今日も彼女は平常運転であった。

「しかも本人は手練れの密偵という事も厄介ですね。

それに連発はきかないとはいえ、絶大な破壊力を持つ御家流……手札が多い……」

「そうかい？　そこはむしろ短所だと思ふよ。

奥で引きこもられるより、外に歩き回ってくれた方が仕留めやすいじゃないか」

「なるほど、それも一理ですね」

「そうだろう、そうだろう」

雫と一二三がうんうんと頷き合う。

正道、王道の思考を基本とする雫と、

24時間365日死ぬまで他人を欺く方法を考えている捻くれ者の一二三では、考える事が真逆になる事が頻繁にある。

それ故に彼女達は互いを師とし、互いを教材とし、互いの思考を示し合い、自らの策を研磨しているのだ。

「……愛菜、分かるか？」

一方、戦の当事者の1人である九十郎はイマイチ話について行けず、自分とは1周りも2周りも年下の幼女に助言を求めていた。

「つまり、小夜叉殿をどうにかしなければ、戦の主導権を奪われ続けるという事ですぞ」
九十郎はそうなのか……という視線を雫に向ける。

「ええ、その通りです。我彼の兵力差はおおよそ2倍、たった2倍です。

しかし戦の主導権を握られるという事は、
いつ、どこで戦いを始めるのかを支配されるという事。

たった2倍の兵力差で、主導権を握られる不利をひっくり返すのは困難ですな。

何せ相手は……あの竹中半兵衛ですから」

愛菜がどやつと言いながら平坦な胸を張った。

九十郎はちよつと悔しそうにぐぬぬ……と唸った。

情けない男である。

「ふふつ、その歳にしては聡明な娘じゃないか。これはうかうかしていられないかな
？」

それじゃあ今度は私から質問だ、

厄介な服部半蔵殿に早急にお引き取り願うにはどうすれば良いか？」

愛菜は少しも迷わず回答する。

「当然、信虎殿の御家流『まぐなむしゅうと』を使うのですぞ！

空様と信虎様の影武者を使って敵を攪乱し、

調べに来たところを……どーんっ！ とやっつけてしまうのです」
そんな愛菜の回答を、一二三はにこにここと笑いながら聞いていた。

愛菜はまだ知らないが、彼女がにこにここと愛想良く笑っている時は、大抵口くでもない事を企んでいる時である。

……

……

……

「……と、雫は考えているでしょうから、小波を撒き餌に使います」

一方、劍丞隊の知恵者、竹中半兵衛は雫の思惑を読み切り、逆に利用する策を立てていた。

詩乃は正しく雫の思考を、策を読み切っていた。

空と信虎の影武者を使い、小波をおびき寄せ、射程距離に入った所でマグナム・シユトを使い、句伝無量を封じる策であった。

もつとも、捻くれ者の一二三はそれとは全然別の策を考えていたのだが……詩乃や劍丞がその事に気がつくのはもつと後の事である。

「それは……危険じゃないのか？」

その言葉を聞いた時、劍丞はまず難色を示した。

「劍丞様には危険を冒さずに2倍以上の数の差を巻き返し、勝利を収める策があるのですか。」

大変素晴らしいですね、是非とも菲才で浅学な私に教えていただきたいものです」「今回は対案がある訳じゃないよ、あまり虐めないでくれ」

城攻めだったら自分が侵入すると言ひ出しかねない男がお手上げのポーズをとる。

「安心しました。 劍丞様ですから、」

自分が単騎で突撃して空さんを討ち取るというかもしれないと思つていましたから。」

「俺はそこまで向こう見ずじゃないよ」

詩乃はどの口が……と、言いかけたが、やめた。

必要だと思つたら1人でも突つ走る性格だからこそ、かつて詩乃は危うい所を助けられたのであるし、詩乃はそんな劍丞が好きになったのだから。

「もう少し説明をします。」

兵力差のある戦で勝利を収めるには、まず戦の主導権を握らなければなりません」「敵の戦力は分散させ、こちらの戦力は集中させるべし……だな」

「今川義元公は決して愚将ではなく、暗君でもありません。」

田楽狭間の地では大軍を長細くさせねば進めない場所……つまり地の利があつた。

戦が始まる寸前、土砂降りがあり兵の足音、馬の嘶きが消えたため、奇襲に気づくのが遅れた……つまり天の時があった。

そして一見無謀極まりない奇襲戦法を聞きされたにも関わらず、

織田の将兵は怯えるどころか、奮え立った……つまり人の和があった。

天の時、地の利、人の和の全てを味方につけたからこそ、

久遠様は義元公を打ち破る事ができたのです。

戦の主導権を握るといふ事は、天の時、地の利、

そして人の和を味方につける上で必要不可欠と言っても過言ではありません」

興が乗った詩乃が早口で自らの所見をまくしたてる。

九十郎なら3秒でギブアップするような話題でも、劍丞はしっかりとついていく事ができている。

元より頭のデキが桁違いなのだ、劍丞と九十郎では。

「そうになると、やっぱり怖いのはマグナム・シユートを使う武田信虎さんだよな」

劍丞はかつて（第55話と第67話）、信虎の御家流を見た事がある。

御家流を受け止め、掴み、投げ返す能力は、御家流を使う者の天敵と言っても過言ではない。

句伝無量というこちらの強みを殺す事も容易であるし、菩薩掌で対抗する事も困難で

あろう。

まさしく武田信虎は、服部半蔵の天敵であるのだ。

「でも、本人はそこまで強くないんだ、上手く綾那をぶつける事ができれば……」

「それは困難でしょう。武田信虎は重要な戦では必ず影武者を使います。

複数の影武者に翻弄され、攻撃の的を絞れずに混乱する敵を、

武田の騎馬軍団で素早く的確に蹂躪していくのが信虎の定石です。

やみくもに攻撃をすれば自ら罠に嵌りに行くようなものです」

詩乃は右手の5本の指を立て、左手で1本ずつ折り曲げていく。

右手の5本の指が、影武者に翻弄され、分散した敵、左手が分散した敵を1つずつ潰して回る武田信虎を表現している。

敵の戦力は分散させ、自らは戦力を集中させて戦うのが、武田信虎お得意の影武者殺法のキモである。

「でも、信虎さんは甲斐を追われているから、武田の騎馬軍団を使えないんじゃないのか？」

「いいえ、信虎率いる第七騎兵团は長尾の精鋭中の精鋭です。

数は少ないですが、練度はあの赤備えにも匹敵するかもしれません。

「過小評価は自殺と同じです」

「だから小波を囿に使う……か……」

劍丞は思う。

女の子を囿に使うなんて間違っている。

その正しい考えこそ新田劍丞の美点であり、オーデインが自らの計画の要とした理由でもあり、虎松達が『デトックスされた北郷一刀』と蛇蝎のように嫌う原因でもある。

「やらせてください、御主人様」

そんな劍丞の迷いを感じ取り、小波は堂々とそう言い放った。

自分の事はどうなっても良い、自分の身にどんな危険が迫っても構わない、愛する男性であり、誇りに思う主君でもある新田劍丞の役に立つ事が重要なのだと。

そんな小波の心中を察し……劍丞と姫野はずきんと胸を痛めた。

「これは殺し合うための戦じゃない……」

でも、互いの誇りと信念を賭けて、本物の武器を使ってやる戦なんだ。

一歩間違えれば死ぬかもしれない」

「そんな事は百も承知です」

小波は少しも迷わずにそう答えた。

小波は本心から、劍丞のために死ねるなら本望だと思っていた。

劍丞と姫野は、ずきんと胸を痛めた。

劍丞は何かを言おうとして……やめた。

同じ事を二度も三度も言った所で、小波の決意は変わらないだろうし、それはむしろ、小波の決意を侮辱する事に他ならないと感じたからだ。

「まあ、小波は姫野が守ってやるし、心配すんなだし」

姫野は笑みを浮かべながらそう告げる。

しかし、内心は罪悪感で一杯であった。

何を白々しい事をと、自分で自分が嫌いになりそうだった。

「いえ、見ず知らずの方にそこまでしてもらおう訳には……」

小波は本心からそう答えた。

小波はまたもや姫野の事を完全に忘却していた。

「見てるし知ってるしいっ!! お前が忘れてるだけだしっ!!」

「ところで、何故貴女はしれっと劍丞隊の軍議に参加しているのですか?」

「劍丞に呼ばれたからだしっ! 次の戦でお前と一緒に行動するからだしっ!」

「い、一緒に行動……一体何故……?」

「姫野が風魔小太郎だからだしっ!」

「風魔小太郎!? あの有名な!」

「その有名な風魔小太郎の事をお前は忘れすぎだしっ!!」

姫野は一瞬、今すぐこの場でブチ殺してやろうかと思つた。

そう思つた瞬間……臙から小波と劍丞の抹殺を厳命された事を思い出した。

思い出して、胸に槍でも刺さつたかのような鋭い痛みを感じた。

「……命を粗末にすんなだし」

姫野は思わず小波にそう告げた。

この言葉を告げた瞬間、頭がぐしゃぐしゃになるような強い自己嫌悪に襲われた。

「風魔忍軍の半数以上を費やし、戦場になりうる場所に罠を仕込みました」

「色々大変だったし、主にコイツが姫野の事を頻繁に忘れるせいで」

加藤段藏に精鋭10人が一気に喰い殺された事は華麗にスルーする。

アレに言及すると姫野の家族の話とか、段藏の正体の話とか、どこまでもどこまでも話が脱線しかねない。

「前から気になってたんだが、軍勢同士の戦いで罠なんて使えるのか？」

「1つや2つでは焼け石に水でしょう。」

しかしちよつとした罠も100重ねれば前線に混乱をもたらす事も可能です」

「だけど、100以上の罠を仕込むなんて、そう簡単な事じゃないだろう。」

相手がこつちの想定と外れた動きをしたら……」

「武田信虎は小波の天敵です。しかしそれは裏を返せば、小波を無力化するためには、

武田信虎が直接動かねばならない事でもありません」

「逃げ方を少し工夫すれば、畏満載の死地におびき出せるって事だし」

「畏に警戒して小波を無視するならば、句伝無量の能力で場を引つ掻き回すだけです。

どちらを選んでも、有利に立ち回れます」

詩乃は右手で5本の指を開き、左手で指の1本を折り曲げようとした瞬間に5本の指を束ねた。

分散した味方を叩こうとした瞬間に、戦力を集中させて信虎を討つ……小波の口伝無量をフル活用すれば、それが可能になる。

信虎を喪った混乱に乗じ、空を料理する。

それが現段階における詩乃のプランである。

この時、詩乃には自信があった。

雫の思惑を読み切り、その上で勝利を掴む自信があった。

少なくともこの時まで、詩乃の頭の中に一二三の存在は無かった。

「……姫野、何か表情が暗くないか？」

一方、姫野の表情は暗かった。

その事に、劍丞は気がついた。

「え？ い、いや何でもないので。 ちょっと緊張してるだけだし」

姫野はびくつと肩を震わせ、慌てて劍丞から距離と取る。

明らかに不自然な挙動であった。

「大丈夫なのか？ 何か悩み事があったら聞かよ。

期間限定だけど、今は味方なんだからさ。 姫野に元気が無いと、やっぱり心配になるよ」

劍丞は純粹に姫野を心配する。

純粹だからこそ、姫野の心に突き刺さる。

良心の呵責が姫野を襲う。

「な……なんでも、ないし……別にどうという事もないから……」

言えなかった。

名月は劍丞を殺そうとしているなんて・

言えなかった。

自分は小波を殺せと命令されているなんて。

言えなかった。

仕込んだ罠には小波も知らない物が何個か存在していて、

それを利用して小波を殺すつもりだなんて。

言えなかった。

本当は小波も劍丞も殺したくない、死んでほしくないと思ってるなんて。

「……ところで、この間運び込まれた時は、右腕が無くなってたよな？」

どうして今は元通りになってるんだ？」

劍丞がひそひそ声で姫野に尋ねる。

「元通りじゃないし、義手作って着けてるだけだし」

「義手!? これがか!？」

驚愕の事実を伝えられ、劍丞が思わず姫野の右腕を二度見した。

どこにも繋ぎ目は見えないし、普通に動いていた。

それどころか、血管や神経まで通つているとしか思えない程に精巧な義手だったからだ。

それは言われなければ絶対に気づけない……いや、言われても全く分からないような、精巧すぎる義手であった。

「その辺で犬とか鳥とか熊とか捕まえてきて、解体（バラ）して繋いで作った義手だし。

風魔に伝わる秘術なんだから、軽々しく他人には喋らないでよ」

「まるでオーパーツだな……」

実は脳と脊髄を除いた肉体の全てが、同じ要領で作ったオーパーツの集合体なのだが……姫野はそれも言い出せなかった。

言えれば化物のように見られてしまうかもと思うと、怖かった。

それこそ、あの加藤段藏のように……そう思うと、怖くて仕方がたなかった。

「(劍丞……)」

心の中で劍丞の名を呼ぶと、胸がきゅゅと締め付けられるような感覚がした。

……

……

……

「お、お、お……お頭あゝっ!!」

「た、た、大変ですーっ! い、一大事ですよおーっ!!」

翌日の早朝、寝起きの劍丞の元に血相変えた様子の子と転子が駆けこんできた。

「どうしたんだ?」

既に目を覚まし、戦支度をしていた劍丞が、少しも顔色を変えずにそう尋ねる。

あの小寺官兵衛が……今孔明と畏れられる詩乃が才能を認める程の知恵者が敵に

回っているのだ。

想定外の事態の1つや2つ、当然のように起きるだろうと覚悟していた。

しかし……

「一夜城ですよおっ!」

「昨日まで何もなかった場所に砦ができてるんですっ!!」

「何だって!？」

劍丞の想像とは違い、ひよ子達をあつと言わせた知恵者は雫では無い……

……

……

……

「今日は蒸し暑い日になるね、湖衣」

空模様を眺めながら、一二三が言った。

「本格的に熱くなったら、体力保つかなあ。ただでさえ徹夜作業の直後なのに……」

「あらかじめ作っておいた砦の部品を川に流し、下流で組み立てるか……」

実際にやってみるまでは半信半疑だったけれど、

これは中々使える策じゃあないか。色々と応用も効きそうだねえ」

かつて劍丞やひよ子が使った策を丸々パクった少女が、一晩で組み上げた即席の砦でほくそ笑む。

彼女……武藤一二三昌幸は、仮にも武田に与する者が、長尾の後継者争いに大つびらに参戦するのは如何なものかという政治的配慮故に、猫耳カチューシャと深緑色のゴシックロリータファッションの服をまとい、通りすがりの火焰猫燐という事になっている

のだが、既にその珍妙な恰好にツツコミを入れる者は誰もいない。

粉雪は通りすがりの霧雨魔理沙、柘榴は通りすがりの紅美鈴、一二三は通りすがりの火焰猫燐……それはまるで戦国時代で東方コスプレ大会が開かれたかのような光景である。

「さあ典厩様、それに湖衣、そろそろ向こうもこの砦に気づく頃……」

「ここで少しでも長く持ちこたえようじゃないか」

「……巻き込まれたでやがる。」

「よりによって越後の後継者争いにガッツリと巻き込まれたでやがる。」

「姉上にどう説明すりゃ良いでやがるか」

「こうやって気づいたら後戻りできない状況にまで連れて来られた時、」

「ああ、いつもの一二三ちゃんだなあって思いますよ。桶狭間の時も……」

「気がついたら義元公を討ち取る手伝いをさせられていた時もこんな感じだったなあ……」

「しかもある目的のために越後に来ていた夕霧と湖衣も思い切り巻き込んでいた。」

「政治的配慮故に、夕霧は水橋パルスィ、湖衣は霊鳥路空の恰好をさせられているが、今の2人にはそれにツツコミを入れる気力すら残っていない。」

「真田一族は築城と籠城が得意中の得意なんだよ。」

一晩で組んだ砦であろうとも、十二分に戦えるって所を教えてあげよう」

彼女の名は武藤昌幸……武田の眼と畏れられ、後の世で発売された歴史ゲームでは『統率97 武勇76 知略98 政治91』になっている、下手をすれば武田信玄よりも危険で、下手をすれば真田幸村よりも色々やらかし、下手をすれば黒田官兵衛以上の警戒が必要な智将にして謀将である。

それと同時に、使えるモノなら主君でも使い、王道、正道に全力で背を向ける捻くれ者でもあった。

武田晴信のように理詰めで戦をするタイプではなく、長尾景虎のように頭を空っぽにして突っ走るタイプであった。

基本、王道、正道に重きを置く詩乃や雲では決して思考を読むことが出来ない者であった。

「私に全軍を差し向ければ、先代様が背後を襲う。私を無視して戦えば、私が背後を襲う。」

軍を分け、私と先代様と同時に戦えば各個撃破される。さあ、どうするかな？」

空と名月陣営による、越後の後継者の座を賭けた戦は、武藤一二三昌幸が一晩で砦を築くという奇策を用い、戦の主導権を握る事で始まった。

「一二三ちゃん、敵が近づいているみたい」

「想定より早いぶ早い……やるね今孔明。 数と率いる者は？」

「数は800……率いているのは……」

竹中半兵衛と、木下藤吉郎、それと蜂須賀小六も来てる」

「八咫鳥は？」

「来てない」

「来てない？ おかしいな、どこに……まあ、考えるのは後か、典厩様！」

「ええい！ こうなりやヤケでやがる！」

総員作業止め！ 敵が近づいてるでやがる！ 配置につくでやがるっ！！」

……今、空と名月による、長尾景虎の跡継ぎの座を巡る戦いが始まるうとしていた。

その日の越後は、とてもとても蒸し暑い日であった。

犬子と柘榴と九十郎第96話 『前哨戦』

「……ええ、ええそうです。現在移動中です。作戦は一部変更します。」

しかし、綾那さんは当初の打ち合わせ通り動いてくださいと伝えてください」

馬を進ませながら、詩乃がぶつぶつと呟く。

独り言ではない。

小波の御家流『句伝無量』を使い、隴や名月といった各地の指揮官達と連絡をとりあっているのだ。

「全く……主様の一夜場を真似るとはな……」

「認識を改める必要がありますね。」

雫が私に全く気付かせずに一夜城を準備し、実行に移すなんて」

一葉が心底不機嫌そうに一二三達の立て籠もる砦を睨みつけ、詩乃は感心した様子で見上げている。

なお、どちらも雫がやったと思いついてるが、下手人と言うか主犯は一二三である。

「一葉様、もう一度念を押しておきますが、御家流は使わないでくださいね」

「あんなちゃんまりとした砦に信虎が隠れているとも思えんが」

「私もそう思います。」

しかし万一まぐなむ・しゆうとで三千世界が投げ返されてしまえば、我々は全滅です。そして相手は小寺官兵衛……

たぶんないだろうという思考の裏をかく事も考えなければいけません」
「分かった、分かった、こうも何度も念を押されてはな。」

小波と姫野が信虎を無力化するまで御家流は使わんよ」

「公方様の場合、ついカツとなつてやつた、反省はしていない……

というのも普通にありえるのですがね」

「煩いぞ、幽。主も良いと言われるまで御家流は禁止じや、分かつておろうな」

「分かつておりますよ、自分の御家流でやられるのは御免ですからな」

「雫……まさかこの状況下で一夜城を使うとは思いませんでしたよ。」

しかも絶妙に無視できそうで、絶妙に無視し難い地点に。

本当に認識を改めなければならぬですね、油断ならぬ敵だと。

私はどこか、貴女を実績の無い小娘と侮っていたのかもしれない」

もう一度書くが、主犯は一二三である。

雫は一二三が一夜城の準備を進めている事を全く知らされていなかった。

知っていたのは一二三に監視をつけていた美空と、一夜城の準備のために密かに人手

を用意した信虎だけである。

「一夜城だけでは戦には勝てない。必ず次の手、次の次の手が用意されている筈……」

ならば次の手、次の次の手が動くよりも早く、一夜城を叩き潰すまで」

詩乃は知っている……正確には、かつて美濃で一夜城を作り上げたひよ子と転子は知っている。

「やつぱりあの城……所々柵や壁が途切れている場所がある。

堀だけは完全に近いのは、前々から堀だけは作ってあったからかな」

「近づいて見たら結構粗があるね、ひよ」

ひよ子と転子の目には、一夜城の粗がハッキリと分かった。

2人は知っているのだ、どんなに準備をしても、一夜で砦を築くなんて無理だという事を。

一夜城なんて、遠目から見たら城っぽい砦モドキを作るのが精一杯で、見た目だけ整えた張り子の虎、粗だらけの城に過ぎないのだと。

ただしその粗は、時間を経れば経つほど小さくなっていくのだと。

さらに城の設営に駆り出された兵の疲労は、城が建った直後がピークであるのだと。

つまり一夜城は、建ったのが見えた直後に速攻で叩き潰すのが最適なのだ。

「ひよさん、ころさん、この戦いはいかに素早く一夜城を潰せるかが重要になります。

あるいは、この戦いを左右する要は、ひよ子さんと転子さんかもしれません」

「あ、あんまり重圧かけないでほしいかな……」

「うんうん、鞠ちゃんも小夜叉も綾那さんも歌夜さんもないし」

「鞠さんと小夜叉さんは本物信虎を討ち取るため、

三河のお2人は本陣の奇襲の為に別行動ですよ」

「それは分かっているけどさあ……」

ひよ子と転子が一夜城を見上げる。

確かにいくつもの防備の穴があつたが……それでもなお、城は城だ。

剣丞隊の脳筋軍団……もとい戦闘集団を抜きで戦える自信は無かつた。

……

……

……

「……しかし速い、想像以上に対応が速い。 噂の竹中半兵衛の判断の速さもそうだけ
ど、

句伝無量で連絡を取り合ってるせいで、動揺や混乱が恐ろしく小さく、短い」

「句伝無量か……噂には聞いていたけれど、厄介だね」

「ああ、厄介だよ、本当に」

一二三と湖衣が、ちよつと高めの木に梯子を立てかけただけの即席の見張り台に上り、一夜城を攻めに來た名月陣營を睨みながら相談をしている。

一夜城は、遠目に見たら城つぼく見える砦モドキを作るのが精一杯だ。

敵が一夜で城ができたと勘違いさせ、右往左往している間に、砦モドキの防御設備を少しでも整える必要がある。

防御設備を整える前に襲い掛かるというのは、一見すると短絡的なように見えて、意外と効果的な一手であるのだ。

「一二三ちゃん、気が付いたら御屋形様を抹殺する策の片棒担がされていた……」

なんて事になったら、本気で絶縁するからね、その前に刺し違えてでも止めるからね」湖衣が忘れずに釘を刺しておく。

かつて織田、武田、松平が結託し、今川義元を討つべく暗躍をしていた頃、彼女は名目上武田晴信に仕えていたものの、事実上は今川義元から送られてきた裏切り防止用の監視役として働いていた。

それが一二三に上手く騙され、今川義元を殺す手伝いをさせられ、気が付いた時には後戻りできない状況……後戻りしようものなら今川に裏切り者として抹殺される状況になっていたという、苦あゝい経験がある

ある意味では、今川義元が死亡する原因を作った戦犯である。

ある意味では、鞠にとつての親の仇の1人でもある。

それはこの世界での山本勘助であつた。

騙された自分が悪い、裏切られた今川義元が悪いと思ひ、その時の事を根に持つてはいないが、それはそれとして二度も騙されて主君を討つのはご遠慮したいと思つてゐる。

「はつはつはつ、君ほどの知恵者に二度も同じ策が通じるなんて思つていないよ」

一二三は明るく笑い飛ばす。

『やらない』とは言つていない所がポイントであるし、後戻りができない場所に立たせるまで決して気づかせないのが一二三の怖い所だ。

「ああ、いつもの一二三ちゃんだなあ……」

当然、湖衣は一二三が『やらない』とは言つていない事に気が付いている。

少しでも隙を見せれば当然のように色々仕込んで、色々仕掛けてくると確信している。

一二三と付き合うという事は、そういう事だと完璧に理解している。

同時に、湖衣だつて隙あらば一二三をぎやふんと言わせてやろうとも思つている。

だからこそ彼女は密偵であるにも関わらず、暇さえあれば兵法書や戦史を読み漁り、一二三や春日と戦略や戦術について議論を交わし、今では一流の軍師と呼んでも遜色無

い程に知恵をつけている。

だからこそ騙し、騙され、時に殺し合った2人であるのに、それはそれとして2人は親友なのだ。

「てめーらそんな所でくつちやべってる暇があつたら手伝うでやがるっ!!」

2人がそんな事をしてしている間、間近に迫っている敵を迎撃するべく、馬車馬の如く働いている夕霧がブチ切れた。

元より、一夜で城ができるなんて常識的にはありえない。

どこかで無理無茶無謀を強行しなければ、一夜城なんてものは成り立たない。

現状、一三三達が立て籠もる一夜城は、見た目だけは城っぽいが、その実態は無いよ
りマシン程度の砦モドキに他ならない。

つまり、1分1秒でも長く、1人でも多く迎撃の準備に時間や人手を割かなければ、普通に死ぬのが一夜城なのだ。

上手く理解できない方は、

高校の試験を一夜漬けで乗り切ろうとする学生をイメージして頂きたい。

それ故に、武田晴信の妹であり、武田の重鎮でもある典厩武田信繁といえど、過労死覚悟で不眠不休の労働を敢行しなければ一夜場は成り立たない。

「ふふ、だつてさ、一三三ちゃん」

「ああ、全くもって可愛らしい妹君だよ」

詐欺同然の手法で、半ば無理矢理、本来関係の無い長尾の跡継ぎ問題に参戦する羽目になった夕霧を見る。

夕霧は誰よりも無関係な身の上であるにも関わらず、誰よりも汗と泥に塗れながら一夜城歓声に手を尽くしていた。

そんなちよつと間抜けな夕霧の事が、一二三も湖衣も好きだった。

「全く、裏切り難い妹君だよ」

「……一二三ちゃん？」

まるで晴信（光璃）や信廉（薫）は裏切りやすいかのような言い草である。

「いや、なんでもない、なんでもないともさ。」

それより、そろそろ敵が鉄砲の射程距離に入る、本格的に忙しくなるよ。

何せ相手は……この一夜城の策を編み出し、実行した新田劍丞殿と、

難攻不落の稲葉山城をたつた7人で落城させた竹中半兵衛殿なのだから」

「……敵の先鋒が近づいてる、もうすぐ射程に入るよ」

「分かっているとも！ 典厩様っ!!」

「とつくに並ばせてるでやがるっ!!」

夕霧の指示により、信虎から借りて来た兵と、夕霧の護衛に甲斐から連れて来た兵は

弓矢を構えて壁の後ろに並んでいた。

「そっち方面は任せます！ 私は裏側を見ています！」

劍丞殿なら絶対何かしにかけてきますので！ 湖衣は見張りを続行！」

「ぬかるんじやねーでやがるよっ！」

「わ、分かったよ！ 気を付けて一二三ちゃん！」

一二三が即席の見張り台から飛び降りて、あらかじめ用意しておいた抜け道へと走る。

時間と資材との兼ね合いもあり、一二三の一夜城には何か所か意図的に開けてある防御の穴が存在する。

新田劍丞ならば必ずその隙を突く筈だと信じて……

「全員構えいつ！ 劍丞隊の弱卒共を一人残らず返り討ちにしてやるでやがるっ！」

「典廩様！ もう少し……もう少し……今あつ!!」

「射てええええええーっ!!」

夕霧の叫びと同時に、弓矢が空を横切り、鉄砲が発射される。

堀を超えようと走る劍丞隊の兵卒達が次々と倒れ伏す。

なお、情報流出の危険が高いのと、洒落にならない人数が死ぬ可能性が高いので、ドライゼ銃と四斤山砲、毒ガスの使用は両陣営ともに禁止されている。

今この瞬間、空と名月の後継者を巡る戦いが始まったのだ。

そして……

「マスク・ザ・斉藤殿、八咫鳥隊は来てないので、プランAは無し。

プランBを基本に行きますので、そのつもりで」

およそ戦国時代には似つかわしくない珍妙な仮面をつけた女性が、一二三が見張り台代わりに使っていた木の下で佇んでいた。

「……うまうー」

一二三の声を聞くと、自称マスクザ斎藤がびしつとサムズアップした。

驚くべき事に、日本語が通じていた。

彼女の正体とは……

……

……

……

「……第二陣に引き上げの合図を！」

詩乃の指示と同時に、陣太鼓の音が戦場に響く。

叩く回数や早さで、前進、後退、包囲、強行突破といった指示を伝えるためのものだ。

「2度の攻撃でも綻びず、か……想像以上の堅陣ですね」

「俺達が墨俣で築いたヤツよりも堅牢かもな」

「場所も立て籠もる人数もまるで違いますので、単純な比較は出来かねますが……」

そうですね、認識を改めます、単なる張り子の虎と思つて戦えば大火傷は免れないと
劍丞と詩乃がそびえ立つ一夜城を前に感嘆のため息を漏らす。

まだたった2回しか攻撃を加えていないものの、全力で城に立て籠もっている時の真
田昌幸のしぶとさは、詩乃や劍丞の想像を超えていた。

『申し上げます、敵の陣地は一夜城を含めて6か所。』

その全てに武田信虎の旗があります』

そこに戦場を偵察し、信虎の動きを探っていた小波から匂伝無量の声が伝わる。

「やはり、お得意の影武者戦法でございましたか」

詩乃が独り言を呟くかのように応答する。

『5か所の陣のうち、4箇所から部隊が出陣し、それぞれ別々に動いています。』

そのうち1つは、まもなく朧様の隊と交戦を開始します』

「残る1つは？」

『今の所動きがありません、おそらくは予備兵力かと』

「分かりました、動きのある4つの部隊……その中のうち、

北条の隊と交戦していない3つを探ってください。

おそらくその中に本物の信虎がいる筈です」

『動きのない1つではなくですか?』

「相手はまだ貴女の位置が掴めていません、動き回って探す必要があります。」

予備兵力として待機している隊や一夜城に立て籠もっている隊はもちろん、

北条の隊との戦いで身動きが取れなくなる隊にも、本物の信虎はいません」

『分かりました、動きがある3つを探ります』

「気を付けてくださいね、貴女が一番危険な役割ですから。」

それと風魔小太郎さんの顔を決して忘れないように、作戦が瓦解しかねないので

『ぜ、善処はします……』

微妙に自信がなさそうな小波の声が聞こえてくる。

この戦が始まる前に、過去何回も姫野の顔と名前を忘れていると聞かされているが、忘れたという事すら忘れてしまうためイマイチ実感が湧かないし、気を付けようにも対策も特に立てられないからだ。

……

……

……

「……………はハズレか」

武田信虎の旗印をぎろりと睨みつけながら、隴はそう呟いた。

先程から彼女が指揮する隊と、信虎らしき人物が指揮する部隊とが正面からぶつかり合っているのだが、どうも攻め方が単調すぎるような気がするのだ。

それ故に隴は、眼前の部隊を指揮する者は、武田信虎本人ではなく、武田信虎のそっくりさんに過ぎないと判断した。

「小波さん、聞こえますか？　こちらは隴です、現在交戦中の部隊は信虎の影武者です。他の信虎を調べてください」

『こちら小波です、立った今一人目の信虎を調べ終わりました。』

西の信虎は、全くの別人に同じ旗印と鎧を着せただけです』

「これで5人中2人……残りは3人か……残りを調べてください。」

「こちらは目の前の敵を蹴散らします」

『承知！』

小波と隴の句伝無量の通信が途絶える。

同時に隴は小さくため息をついた。

「必要な事とは言え……」

名月は劍丞を殺そうとしている……その事に、隴はすぐに気づいていた。

名月が何も言わなくとも、名月が心から尊敬する長尾美空景虎を劍丞の嫁になる事無

く、名月が空陣營に勝利する方法は他にあり得ないと思つていた。

だからこそ臆は、名月から何も聞く事無く、自らの判断で新田劍丞を殺そうとしていた。

最悪、自分が泥を被ろうと思つていた。

織田との関係悪化は避けられないが、長尾に親北条の当主（名月）を据え、しかも大きな大きな借りを作れる事を考えれば、そう悪い事にはならないと考えていた。

そしてそのための準備として、姫野に服部半蔵を殺すように命じていた。

味方を騙し、味方を殺す事に思う事はあるが……必要な事で、やむを得ない事と思つていた。

「申し上げます！ 敵の新手が現れました、側面から攻撃を受けております！」

「何っ!?!」

思案の渦中に入り込もうとしていた臆であつたが、

部下からの悲鳴のような報告を聞き、我に返る。

「ここまで近づかれて……今まで一体どこを見ていた!?!」

「お、音も無く近づいてきて……そ、それよりも御味方が圧されております！ ご指示を！」

「左翼の救援を行います！ 近衛は私に続きなさい！」

隴が自ら剣を抜き、敵の襲撃を受けている左翼へと駆けだした。

「なんと鮮やかな奇襲を……やるな信虎……」

隴が忌々しげに舌打ちをする。

そして思う……敵の指揮官はただ者ではないと。

音も無く現れた奇襲部隊の中心部には、これ見よがしに信虎の旗印が掲げられている。

「もしかや奇襲隊の指揮官が本物の信虎か!？」

そんな事を考えた瞬間……

『隴さん、こちらは小波、現在2人目の信虎を……』

再び小波の句伝無量による声が……ぶつんと不自然に途絶えた。

「始まったか!？」

それはつまり、本物の信虎の御家流『マグナム・シュート』の射程距離に入ったという事だ。

それはつまり、信虎との戦いの中で服部半蔵を討つ隴の計画が、風魔小太郎の手によって実行されるという事だ。

……

……

………

「……お姉ちゃん！ 句伝無量が途絶えたよ！」

……とある場所でひたすら息を潜め、身を伏せていた八咫鳥隊が臨戦態勢に移る。

その日は蒸し暑い日であった。

彼女達が待ち伏せをしている窪地は、風通しが悪く特に蒸し暑かった。

「………

八咫鳥隊の隊長、鈴木孫一鳥重秀がこくと領き、静かに愛用の鳥銃を構え直した。

小波が『マグナム・シユート』の影響下に入ったら、

小波と姫野によって本物の信虎をおびき出し、

罾と伏兵が満載する殺し間へと招待する手はずになつてゐるからだ。

「戦……戦が……始まる……」

こーほー……と、まるでダース・ベイダーのような不自然な呼吸音がする。

戦国時代のニホンでは不自然極まりないフルプレートアーマーの女が、僅かに震えながら大きな槍を……人間無骨を握りしめた。

「ねえ、お姉ちゃん、あの人……誰？」

ハッキリ言つて滅茶苦茶浮いているフルプレートアーマーを指差しながら、雀が鳥にひそひそ声で尋ねる。

鳥は浮きまくるフルプレートアーマーの正体を知っているが……

「……………」

よつぼどの事が無いと喋らない、基本無口な鳥は説明を放棄した。

「あの人、小夜叉ちゃんなの」

雀のひそひそ声を聞いていた鞠が、鳥に代わりに質問に答えた。

「こ、小夜叉ちゃん!? ええっ! アレが小夜叉ちゃん!」

雀が伏兵として隠密行動中であるにも関わらず、びつくり仰天する。

微妙に緊張感が無いのは、八咫鳥隊の平常運転である。

「……………」

鳥も一回頷いて、鞠の回答が正しいと伝える。

「だって、だって……ええ……」

雀はただただ困惑するばかりだ。

何せ今までずっと、小夜叉は『ぬののふく』よりも防御力が無さそうな、肌を大きく

露出した格好で戦場に立っていた。

それが今は、肌の露出が100%存在しない、ブ厚い鉄板の塊に身を包んでいるのだ。

雀の驚きと戸惑いはいかほどのものであろうか。

「でも、何で急に……?」

「鞠にも良く分からないけど、九十郎に作ってもらったって言ってたの」

「九十郎さんって何者なのかな?」

「……凄い人なの」

ちよつと遠い目をしながら、鞠はそう呟いた。

神道無念流の使い手の剣豪であり、前代未聞の連発銃『ドライゼ銃』を完成させ、用心棒代を払えなかった鞠が悪いとはいえ、用心棒代の代わりにと鞠を強姦しようとしたと思えば、サイナー一枚であつさりと引き下がり、拳句に自分の身柄を劍丞に丸投げし、襲い来る三河侍達を惨殺して帰っていった人物……鞠にとって、斎藤九十郎は何とも表現し難いヘンテコな人物なのだ。

「(やべえ……足が震えて、止まらねえ……)」

鉄の鎧の中で、小夜叉は震えていた。

男の視線が怖い、セックスが怖いからと、九十郎に頼んで頑丈な鎧を用意してもらった。

だがしかし、フルプレートアーマーを着込んだ程度では、小夜叉の恐怖心は大人しくなってくれなかった。

「(やべえ……怖え……)」

人間無骨が嫌に頼りなく思えた。

全身を守る鉄の板が嫌に頼りなく思えた。

負けるかもしれない、倒されるかもしれない、犯されるかもしれない……あの時の桐琴のように、腹が破裂して死ぬかもしれない。

あの時の自分のように、セックスの気持ち良さに負けて、気が狂ってしまうかもしれない。

そう思うと、小夜叉は怖くて怖くて堪らなかつた。

「(こ、こんなんで……戦えるのかよ……オレは……オレは……)」

桐琴がこの場にいれば、甘ったれるなど小夜叉の萎えた心を叩き直しただろう。

劍丞がこの場にいれば、大丈夫だと震える小夜叉に寄り添っただろう。

だがしかし、小夜叉の傍には桐琴も劍丞もいなかった。

「大丈夫ですの?」

そんな小夜叉を心配し、声をかける者が1人だけいた。

蒲生氏郷・通称梅……お互いがお互いを気に入らないと思いつつも、なんやかんやで一緒にいる事が多い相手であつた。

「……なんでもねえ」

小夜叉は短く答える。

他に何か喋ろうとしたら、ボロが出てしまうような気がしたからだ。

命知らずの森一家の頭領が、戦が怖くて、強姦されるのが怖くて、非常識な程に頑丈な鎧を用意してもらったなんて知られたくなかった……特に梅には。

「前の恰好は軽装過ぎと思いましたが……なんで急にそんな……ええつと……」

「……フルプレート」

「そう、そのふるぶれいとを使うのですの？ 驚きましたわ」

戦国時代で一人だけフルプレートアーマーというのは普通に目立つ、そして浮く。

梅はある意味当然の疑問を、割とストレートに尋ねてきた。

「……………」

小夜叉は無言のまま考え込む。

周囲の者がこちらの会話に意識を傾けているのが分かった。

たぶん、よっぽど小声で話さないと周囲に漏れて、その上拡散すると思った。

「てめえに話す必要ねえだろ」

だから小夜叉は回答を拒否し、そのまま話を打ち切った。

梅は心配そうにそっぽを向いた小夜叉を見つめ……

「……その鎧、熱くありませんの？」

そう呟いた。

その日は蒸し暑い日であった。

彼女達が待ち伏せをしている窪地は、風通しが悪く特に蒸し暑かった。

……

……………

一方その頃、一二三の一夜城を一刻も早く叩き潰すべく、劍丞達は戦いを続けていた。智将竹中半兵衛の指揮のもと、劍丞達は巧みに部隊を動かし戦いを続けていたが……それでもなお、全力で籠城する真田昌幸は手強い相手であった。

「公方様！ 御家流をお願いします！ あの砦に信虎はいません！」

そして小波の句伝無量が不自然に途切れた次の瞬間、詩乃が叫んだ。

小波の御家流が途絶えたという事は、小波が信虎の『マグナム・シユート』の射程内に入ったという事だ。

そして句伝無量が途絶えた時の小波の位置から逆算すれば、少なくとも一夜城には本物の信虎がいる可能性は排除できる。

詩乃の判断は早かった。

「須弥山の周囲に四大州、その周囲に九山八海。上は色界、下は風鈴までを一世界

……」

一葉が精神を集中させ詠唱を開始する。

一葉の氣が研ぎ澄まされ、周囲に並行世界から呼び集められた無数の名刀が浮かんでいく。

一夜で作った砦モドキ等、簡単に粉碎する一葉の御家流『三千世界』が今……

「三・千・世界いつ!!」

「三昧耶曼荼羅あああああ——っ!!」

……炸裂しなかった。

ある人物の御家流によって呼びつけられた護法五神が、文字通りその身を楯にして、その身をズタズタに引き裂かれながらも、一葉が飛ばした名刀を受け止めた。

……微妙にバチが当たりそうな使い方であるが、いつもの事である。

「……あの御家流は!? 馬鹿なっ! あいつがこの戦に参加している筈が無い!」

あり得ない光景に驚き慌てる一葉の前に、珍妙な仮面をつけた女性がゆっくりと歩み出した。

「ただの斉藤よ」

渦中の人物はしれつとそう言うのと、腰に佩く剣をゆつくりと抜いた。

「信虎様の居場所が割れたら、三千世界が飛んでくるなんて決まり切っている。

当然、対策は立てているとも」

「それで長尾景虎を持ち出す所が一二三ちゃんだよね……」

そんな力オス極まりない光景を見下ろしながら、一二三がふふんつと胸を張り、湖衣はやれやれとため息をつき……

「何考えてるでやがるかあつ!! 一二三いいいいいいーっ!!」

……基本常識人な夕霧が喉も枯れ果てんばかりにツツコミを入れた。

使える物は長尾景虎であろうと迷わず使うのが一二三流。

それは湖衣と夕霧にも、雫にも、あろう事か九十郎にすら内緒で用意した切り札である。

「はりやほれうまうー!!」

「何だかわからんがあつ!!」

頭を抱える夕霧と、ふふんつと鼻を鳴らして胸を張る一二三の眼前で、自称斎藤と征夷大將軍の一騎討ちが始まろうとしていた。

犬子と柘榴と九十郎第97話 『空の夢、空の理想』

「くう……すや……すや……」

空と名月が長尾景虎の後継者の座を巡って戦いを始めていた頃、井伊直政・通称新戸（ニート）はすやすやと寝息をたてていた。

周りがどったばったん大騒ぎしている中、新戸は珍しく惰眠を貪っている。

「ぐう……あやなあ……おれのぷりん……かえせえ……」

くずろおがつくったぷりんだぞお……」

何とも能天気な夢を見ながら、何とも間拔けな寝顔を晒していた。

九十郎から糞ニートと呼ばれている割に、いつもいつでも過労死寸前になるまで働き続けている新戸であったが、今日は珍しく心置きなく休息をとっていた。

空と名月の争いは、珍しく怪異が絡まない争いであり、珍しく新戸が主体的に関与しなくても問題の無い戦いであった。

「くじゅろう……すきい……」

何とも能天気で都合の良い夢を見ながら、新戸は笑って……いや、にやけていた。

吉野に借りを作ってしまったが、先の蘭丸との戦いで消耗は完全に癒えた。

吉野に2つ目の借りを作ってしまったが、サキユバスに付けられた淫紋も消えた。透視能力を使い、小波、綾那、歌夜、そして小夜叉の子宮を確認したが、誰も孕んではいなかった。

新戸は今、心から安心しきって熟睡していた。

しかし……

「……尊治!？」

次の瞬間、新戸ががばつと起き上がった。

彼女にとって2回分も借りがある男が……吉野の御方と呼ばれる人物のテレパシーを感じ取ったのだ。

吉野の御方と呼ばれる男が、鬼を創り、鬼に指令を飛ばしている気配を感じたのだ。

「全く、どいつもこいつも……本当にオレの思い通りに動かないな、少しは休ませろ!」
そんな事を叫びながら、新戸の身体がゴキゴキと音を立てて変形し、変質し、鬼の身体へと変貌していく。

それは新戸の短い短い休息が終わりを告げた瞬間であった。

……

……

……

「なんのつもりじゃ？ 美空」

一葉が名刀大般若長光を抜き。仮面の女に突き付ける。

「ただの斉藤よ」

仮面の女は先程と同じく、自分はただの斉藤と答えた。

「……私はただの斉藤よ。決して長尾景虎ではないわ」

「そんな言い訳が通用するか！」

あの御家流が使える者は、天下に一人しかおらんわっ!!」

「違いまくす、アレ撃つたの私じゃないで〜す。

何か気がついたらどこから飛んできました〜」

自称マスク・ザ・斉藤が超白々しい大嘘をつく。

「ほほう、ではその姫鶴一文字は」

「……………え？」

仮面の女がドキリと肩を震わせ、自分の手元にある剣を何度も何度も確認し……………『あ、

やつべえ、忘れてたわ』とでも言いたげな雰囲気醸し出す。

「ち、違いまくす、姫鶴一文字なんて素敵な名刀じゃありません〜ん。

えつと……………ひ、拾った……………じゃなくて……………そう！ 私、美空様の追っかけで！

ちよつとでも美空様の気分を味わたくて、似たような刀探して使ってるんで〜す!」

仮面の女が微妙に上ずった声で、必死に誤魔化そうとする。

しかし、刀剣マニアである一葉が、姫鶴一文字程の名刀とその辺に転がっている贋作を見間違える筈も無い。

「ね、ねえ、お頭……あの人って……」

「ああ、うん……たぶん、あの人だよな……いや絶対にあの人だよな……」

ひよ子と剣丞がひそひそ声で相談する。

一葉以外の全員にも、突如として現れた仮面の女が美空なのだと思っていた。

ぶつちやけ珍妙な仮面一枚被っただけで、他の部分はいつもの美空だったため、バレバレと言えはバレバレである。

「ええい！ 覆面超人（マスクマン）の正体を暴くのはやめなさい！

お約束つてのを知らないの!?! 私はマスク・ザ・斉藤！

それ以上でもそれ以下でもないわ！」

「マスク・ザ・斉藤……一体、何尾景虎なのやら……」

幽が皮肉たつぷりにそう呟く。

実際の所、剣丞達にも一二三達にも、自称マスク・ザ・斉藤の正体はバレバレである。

「何考えてるてるでやがるかあつ!! 一二三いいいいいいーっ!!」

一夜城の奥で、基本常識人な夕霧が喉も枯れ果てんばかりにツツコミを入れた。

その叫びは、一夜城の攻防戦に参加している全ての者の共通認識であった。

「そもそも何で公方様が、

長尾の後継者を決める戦に思い切り首と突っ込んでいるのかしら？」

公平性を期すためには公方様も身を引くべきじゃないかしら」

「……………うぐっ」

仮面の女の反論が一葉を貫く。

長尾景虎が手を出すのも大きな問題だが、全ての武家を（名目上は）束ねる征夷大將軍が一国の御家騒動に自ら介入するのも、それはそれで問題であろう。

「私は通りすがりの貧乏旗本、徳田新之助……………」

「そんな見え見えの嘘で誤魔化されるかっ!!」

仮面一枚で変装ができていていると思ひ込む美空の言えた台詞ではない。

「……………通りすがりのマスク・ザ・斉藤とやら。何のためにこの戦に割って入った？」

最早バレバレであるが、あえてそれを無視して、一葉はマスク・ザ・斉藤に問うた。

「はりやほれうまうーっ!!」

「日ノ本の言葉で喋れっ!!」

「ああ、ごめんなさい。ついノリで……………そうね、通りすがりの徳田新之助さん、

私は貴女と斬り合う為にここに来たわ」

一葉は最初から正体を隠していなかったし変装もしていないが、あえて自称マスク・ザ・斉藤は一葉を徳田新之助と呼ぶ。

「余と斬り合う？」

かなり予想外、想定外の回答が来たため、一葉がキョトンとした表情になった。

「今を逃したら、貴女と斬り合う機会は無いですか？」

「ふむ……」

一葉は美空……もとい自称マスク・ザ・斉藤に剣を向けたまましばし考え込む。

そして……

「すまぬ主様、この戦、余は抜けさせてもらおう」

「うえええ!？」

いきなりの一抜けた宣言にひよ子が思わず驚愕の声を漏らした。

「余はな、あやつを友と思っている」

「私は、かつて貴女を友と思った。だけど、今は友とは思えなくなつたわ」

「余は主様を……新田劍丞を信じておる。」

新田劍丞こそ天下一の夫であると信じておるし、日ノ本を救う男と思つている。

当然、犬子を無理矢理犯すような無体をする筈が無いと信じておる」

「私は、そいつを……新田劍丞を信じられない。新田劍丞が天下一の夫とは思つてい

ない。

それどころか、全く悪びれる様子のない、盗人猛々しい強姦魔とすら思っているわ。そして何をしたかは分からないけど、

何かしらの策か能力を使って犬子を無理矢理犯したと思っている」

「お主は、新田劍丞を知らぬだけだ」

「貴女は、新田劍丞に騙されているのよ」

仮面の奥の瞳が鋭く、細くなる。

強い強い不信の心をもって、新田劍丞と一葉の2人を睨みつけていた。

「なるほど、そういう事か？」

「そうね、多分貴女が考えている通りよ」

「余が、お主を再び友と呼ぶには……」

「私が、貴女を再び友と呼ぶには……」

「最早斬り合う以外に方法が無いっ!!」

2人の声が見事に揃った。

なんとも脳筋な解決方法である。

脳筋な解決方法であるが……将であると同時に、優れた劍客でもある2人にとっては、これが最上の解決方法であった。

「公方様、こちらの分隊には公方様しか腕つぶし担当がおりませんが」

「あれ、しれつと私無視されてる」

「転子と主様がおるであろう」

「わあい、無視されてな……いや、それはそれで責任重大のような……」

小波と姫野が信虎おびき寄せ隊、鞠と小夜又が伏兵部隊、綾那と歌夜は空陣営本陣の奇襲部隊にそれぞれ振り分けられているため、一葉が言う通り、最前線でまともに敵と切り結べるのは剣丞と転子、そして幽くらいである。

しかし、それでも……

「主様、無理を承知で頼む……」

今を逃せば、余は二度とあやつを友と呼べなくなるような気がするのだ」

基本身勝手で、基本他人の話を聞かない一葉が深々と頭を下げて懇願した。

「く、公方様……」

明日には槍の雨が降りそうな光景に、幽が思わず後ずさる。

「ああ、分かった……後の事は俺達に任せて、行つてくれ」

剣丞は少しも迷わず、一葉の戦線離脱を承諾した。

九十郎なら大人げなく美空を袋叩きにする場面である。

「良いのですかな？」

「ああ、今行かないと、きつと後悔するだろうし」

「戦況不利という事が分かっておられるので？」

「いえ、私も劍丞様と同じ考えです」

さらに追及しようとする幽の言葉を遮ったのは、詩乃であった。

「城に立て籠もる武藤昌幸と、長……ではなく、

通りすがりのマスク・ザ・斉藤殿と同時に戦うよりも、

公方様に一方を抑えて頂いた方が、比較的勝算は高いと考えます。

それに……勝つせよ、負けるにせよ、わだかまりを残したままでは、鬼とは戦えませ
ん」

詩乃にとってこの戦いは、空と名月のどちらが後継者にふさわしいかを決める戦いでは無く、あくまでも鬼に対して一致団結して戦う下地を作るための戦いである。

景虎が劍丞に対して抱いている不信感をどうかしなくてはならない。

勝負に勝ち、長尾景虎を嫁にするのが最上であるが、それ以外の方法で不信感を払拭できるのであれば、それはそれで構わないのだ。

「決まりのようね」

「うむ、そうじゃな」

「幽、貴女も来なさい」

「幽、お主も来い」

2人の台詞が再度ハモツた。

「………はい？」

「決闘には立ち合いが必要でしょう」

「決闘には立ち合いが必要であろうが」

2人は見事なまでに同じ事を考えていた。

この時幽は『誰がどう見たって親友ですよ、ズツ友ですよ、刎頸ですよコレ！』と思つた。

「公方様は実に馬鹿であらせられますな」

まるで青タヌキのような厭味つたらしい台詞を呟き、ため息をつき、全てを諦め切つた表情で細川藤孝が2人に手を引かれて戦線を離脱した。

……

……

……

「社会保障が必要だと思ふんですよ」

「え、ええ……」

雫が引き攣つた顔でそう答える。

しかし発言者……空の目は真剣そのものであった。

「富める者は益々富み、貧しい者は、益々貧しくなる。

強き者が栄え、弱い者は虐げられる。

良く言えば自由主義、悪く言えば弱肉強食が行きついた果てがこの乱世だと思ふんです」

「そ、そういう見方も可能かもしれませんが……」

雫の顔が益々引き攣る。

「今こそ貧者、弱者が団結し、立ち上がるべき時なんです。

富める資本家達や、血筋や権威、武力でもって貧者や弱者を虐げる者達を打倒し、

真に平等な社会を勝ち取るべきなんです」

「そ、そういう極端な事はあまり公言しない方が良いんじゃないかと思ひますけど……」

雫の顔がもつともつと引き攣る。

内心では、そんな事をしたら真つ先に打倒されるのは空なのではとか考えていたが、分別のある大人の雫はそれを口には出さなかつた。

「そう、今こそ必要なんです！ 共産主義革命が！

まずはより稼ぎの多い方からはより多く課税し、

貧しき方からは少なく、軽く課税をする累進課税制度を確立し、

労働時間に上限を設け、最低賃金を設け、さらに傷病手当、失業手当を充実させ、それでも生活が成り立たない方には生活保護を、

そして当然年少者への教育は義務教育として、教育機関への編入を義務づけて……」
「国が無くなるっ!!」

雫はどうとう堪え切れずにツツコミを入れた。

いくら賢くとも、いくら先見の明があつても、天文15年（1546年）年生まれの薬屋の娘には、共産主義や社会保障の概念を完全に理解する事は不可能だ。

いや、賢く、先見の明があり、社会保障の概念やそれがもたらす利益と混乱の一端を理解してしまつたが故に、雫は大きな声で叫んだのだ……国が無くなると。

恐るべき事に雫は……黒田官兵衛は一端は確実に理解している。

この思想はまだ早すぎると。

「やはり……国が無くなつてしまいますか?」

先程まで熱く熱く理想を語っていた少女……長尾景勝・通称空は悲しそうな目でそう尋ねた。

空もまた理解している……この思想はまだ早すぎると。

「はい、国が無くなります」

雫は一瞬だけ考え込み、一瞬だけ迷い……最終的にはきつぱりと断言した。

「累進課税を制定すれば、富める者は他国に逃げ、貧しい者だけが残ります。

社会保障を行えば、貧しい者が際限なくこの国に集まります。

そして溢れんばかりに集まった貧者に押し潰され、

累進課税も社会保障も、あつという間に画餅となつて消えゆくでしょう」

「はい、その通りです」

「現状、日ノ本の大多数の者にとつて、

幼子であつても立派な労働力であり、家を支える命綱です。

義務教育を断行すれば、家業が成り立たなくなる家がどれだけ増えるか……

勉学というものは、本人が学びたいと心から願つた時が、最も血肉になるものです。

義務として無理矢理学び舎に集められた若者が、どれだけ真剣に学ぶのでしょうか。

ただただ無為な時間を過ごさせるだけになるのではありませんか」

「はい、その通りです」

「そもそも、そんな大勢の若者に誰が教えるのですか、

どうやって教師たる者を集めるのですか。

万卒は得易く一将は得難しと昔から言います。

学び舎を建てる事は容易い事でも、若者を教え導く事ができる教師を集める事は、

空さんが思っているよりもずっと大変なのですよ」

「はい、その通りです」

雫はさつき空が口走った夢みたいな思想の問題点を一つ一つ指摘していく。

雫の指摘は理路整然としたものであり、道理にかなったものである。

だがしかし、だがそれでも……空の眼はそう語っていた。

「九十郎さん！　九十郎さん！　どうすれば良いんですかコレ?」

叱りつけて止めれば良いんですか!?　頑張れって背中を押せば良いんですかあつ!?」

雫がとうとうギブアップし、泣きそうな目で、ひそひそ声で九十郎に助けを求め。

「すまん、官兵衛。　たぶんだが原因の何割かは俺にある。」

レーニンとかスターリンの話をした時、若干美化して伝えちまったような気がする」

「いったい何の話をしたんですかあ!?!」

「許せ、労働法と環境法の成り立ちを説明するには、

ブリカスの植民地支配の手法とか、共産主義の興廃について言及せざるを得なかった」

イギリスの綿製品を売りつける為に、インドの織物職人の3万人の腕を切断した話とか、

商品作物の作付けを強要し、インド大飢饉を引き起こし、飢えと疫病で500万人が死亡した話をした時の空と愛菜のドン引きっぷりは、後々の語り草になっている。

もつとも、ブリカスの真の恐ろしきは、現地住民の憎悪を、イギリス人ではなく身内に向けさせる状況コントロール術である。

九十郎はこの能力をブリテンマジックと呼んでいる。

「まあ、真面目な話……」

「はい、真面目な話ですな」

「鬼よりも先に紅毛人（西洋人の事）を滅ぼすべきだと私は思います」

空は真顔でそう言い放った。

「そう！ 今こそ無二念打払令を出し！

この国に近づく全ての異国船を焼き討ちし！ 鎖国を行い！ 攘夷するんです！

この国に入り込む商人と宣教師を直ちに皆殺しにして！

欧米列強の植民地支配に抵抗しなくてはっ!!

ブリカスがこの国にまで来る前に！ インドのような苛烈な植民地支配を受ける前

に！」

「国が無くなるうっ!!」

雫が思わずそんな叫び声をあげた。

なお、現在日ノ本で最も広く流通している銭は宋銭……外国の通貨である。

「九十郎さん！ 九十郎さん！ どうすれば良いんですか！

ていうか私は大丈夫なんですか！ 私はキリシタンなんですよ！

後で棄教か死か好きな方を選べとか言われませんか!?

マリア様の絵を踏めとか言われませんか!?!」

「俺もクリスマスにターキーを食ってるからアウトかもしれない。

七面鳥っぽい鳥をそれっぽくローストしたなんちやってターキーだが」

雫と九十郎がヒソヒソ声でそんな相談をする。

基本無責任な九十郎であつても、流石に拙いかなうと思ひ始めていた。

「……やはり、国が無くなりませんか」

「いえ、それは……分かりません。

少なくともこの日ノ本の全ての国と大名が一致して行動に出なければ、

なんの意味もないでしょう。

例えば……そうですね、日ノ本の乱世を終わらせる程の実力者が現れ、

その者が今後我が国は鎖国すると宣言をすれば、あるいは……

しかし、そのような事をして何になるのか、どんな事が起こるのかは、予想もできま

せん」

「宋銭は使えなくなるよな」

「そうですね、あらゆる取引が物々交換に逆戻りとなれば、

どれ程の混乱が生じるか想像もできません。

ならば先に日ノ本の統一通貨を自力で鑄造し、流通させる事が不可欠でしょう」

「成程、統一通貨が必要ですか……」

「しかしですよ、

そもそも話として異国船を打ち払うのは越後国主の仕事ではありません」

「なら、誰の仕事なんですか？ ブリカスの魔の手は刻一刻と迫っているんですよ」

「それ……は……」

雫が言い淀む。

聡明な雫には、その問いに対する明解な答えを一瞬で頭に思い浮かべる事ができた。

しかし、それを口にするのは憚られた。

「征夷大將軍じゃねえの。 夷狄を成敗する大將軍なんだろ、元々」

一方、九十郎は空気を読まずに雫が思い浮かべた答えを口にした。

「なるほどー」

空の瞳がキラーン！ と輝いた。

「（一葉様逃げてええええええーっ!! 超逃げてええええええーっ!!）」

雫は胃をキリキリと痛めながら心の中でそう叫んだ。

ぶつちやけた話、有名無実化した今の征夷大將軍にとって、異国を打ち払い攘夷を行

えなんて無茶ぶりもいい所である。

かといつて『攘夷できません』と認めるのは自己否定そのものであり、口が裂けても言う事ができない。

明治維新の頃に徳川幕府が大政奉還した理由の一つがコレである。

実際の所、空は本気である。

本気でこの国に社会保障や国民皆保険、義務教育といった概念を根付かせようとしているし、イギリスを筆頭とした西洋諸国からこの国を守り抜こうと決意している。

その為であれば、悪魔とだって……具体的には武田晴信とだって手を結んでも良いとすら思っていた。

だがしかし……

「(も、もしやこの国の未来についての話が始まった途端、

愛菜さんがそそくさと逃げ出した理由って……

それにこれだけ露骨に美空さんが肩入れしてるのに、

兵力差が2倍程度に収まっているのも……)」

だがしかし、戦国時代の人間に社会保障がどうか言っても怪訝な顔をされるだけであるし、場合によってはドン引きされる。

ブリカスの脅威については熱心に語った場合、さらにドン引きされる。

現状、空の人望は微妙な……いや、お寒いものであった。

全部九十郎が悪い。

「やはり、まずは乱世を終わらせる事が先決でしょうか」

「そうですね、右も左も敵だらけでは改革もままなりません」

雫がそう答えた時……気がついた。

さつきから散々否定的な意見をぶつけているというのに、空は全く諦めの表情をしていない事に。

空は諦めが悪いのだ、自分と同じで……雫はそう思った。

そう思うと、雫は空に対し奇妙な親近感のようなものを覚えた。

「この戦いが終わったら、一緒に考えましょう。」

どうすれば乱世を終わらせる事ができるかも、

どうすれば国を亡くさずに、空さんの理想に近づけるかも」

雫がそう言うのと、空は屈託無くにこっと笑った。

「話し相手になって頂き、ありがとうございます。」

最近、愛菜もこの話をしようとするやとすぐに話を打ち切って逃げてしまうんです」

すぐに話を打ち切って逃げるだけでも、愛菜の知能指数の高さが伺える。

愛菜が……後の直江兼続が完全に洗脳され、犬子の従妹である前田慶次や石田三成と

共に色々やらかし、日ノ本全体をどったんばったん大騒ぎさせ、美空と名月の胃壁をキリキリと痛めつけた上、アカく燃え上がった比叡山は久遠やエーリカの手によつて物理的に炎上し、最終的には関が原で行われたアカい人達による政治集会に対し、武力による鎮圧が行われ、動員兵力は合計18万人、戦死者8000人の一大決戦が行われるのだが……それはもう少し後の話である。

なお、後世で作られた織田信長主役の大河ドラマにおいて、話の半分が共産主義者との戦いに割かれている事も付言しておこう。

……その辺も含めて全部九十郎が悪い。

さて空と雫そんな感じで政治談議を交わしていると……東の空で狼煙が上がった。

「九十郎さんー！」

「分かつているー！」

雫と九十郎の2人がすぐさま双眼鏡を構え、狼煙の根本に……小波の口伝無量を妨害すべく動いている、

本物の武田信虎が指揮をしている部隊の方角を凝視する。

事前に打ち合わせでは、本物の信虎がいる部隊が狼煙による合図を送る時、それは即ち小波をマグナム・シュートの射程内に捉えた時だ。

「(信虎だ……たった今、口伝無量を掌握した)」

直後、九十郎の脳裏に直接響くかのように、信虎の声が届く。

「(ファミチキください)」

「(ふあみ……何だつて?)」

九十郎は何故そのネタが戦国時代の人間に通じると思ったのだろうか。なお、ファミチキが発売されたのは2006年、未来の食べ物である。

「(どうやら聞こえているみたいだな、そっちはどんな感じだ?)」

「(この能力、気の消耗が激しい。あまり長くは続けられん)」

「(なら一言だけ……こっちは予定通りに動く、良いな?)」

「(こちらも予定通り。今の我は服部半蔵の居所を手に取るように探知できる。」

このまま追い詰めて捻り潰す)」

「(欲をかきすぎんなよ、時間稼ぎも別に良いんだ)」

「(案ずるな、我を誰だと思っている……ぐっ、限界か)」

ぶちっという、通話中に電話線が断裂したかのような軽い衝撃と不快感が九十郎の脳裏に走り、信虎の声は一切聞こえなくなった。

「九十郎さん」

「今、信虎の声が聞こえた。句伝無量を掌握してるつてよ」

「(こ)までは(こ)ちらの想定通りに動いていますね。」

想定通り過ぎて、むしろ薄気味の悪さを感じますが」

「奇遇だな、俺もだ……」

「……あの新田劍丞が、最後まで良いトコ無しで終わる筈が無い」

「……あの竹中半兵衛が、最後までこちらの想定通りに動く筈が無い」

九十郎と雫の見解が一致する。

九十郎は基本馬鹿だが、馬鹿でも馬鹿なりに新田劍丞の底知れぬ勝負強さを感じていた。

「どうする？ 作戦を変えるか？」

「いえ、このまま畳み掛けます。句伝無量が使えない時間を無駄にはできませんので」

「信虎が上手く服部半蔵を追い詰めてくれりや楽なんだがな」

「それが最上ですが、そこまでの戦果は期待できないと思います。」

むしろ小波さんを囿に信虎さんを討ち取る算段をしているかもしれません。

あまり深追いはしないようにとは言っていますが……」

「なら、こつちも急いだ方が良いみたいだな」

「そうですね……愛菜さん！」

「ひゃいっ!!」

雫が隅っこで隠れていた愛菜に声をかけ、1冊のウス・異本……もとい、薄い本を投

げ渡した。

「ここ、これは……悪の戦争教本？　ポリユーム2？」

「ここから先は、愛菜さんが全体の指揮を執ってください。」

留意すべき点は可能な限りその本に書き留めておきましたので」

「うえっ!?　あ、いや……この越後きつての義侠人！」

樋口愛菜兼続にお任せあれ！　なのですよぞ！」

いきなりの大役に一瞬だけ怯んで戸惑うも……愛菜は天下人の顔面に泥を塗るどころかウンコすら投げつけられる程のクソ度胸でもって、すぐにいつものドヤ顔に戻る。

後日、そのクソ度胸が回りまわって比叡山をアカク燃え上がらせ、物理的にも炎上させるのであるが……それはまた別の話である。

「あの……何故『悪の』戦争教本と……」

やる気満々な愛菜を尻目に、空が至極まっとうなツツコミを入れる。

「表題を考えたのは九十郎さんです、私ではありません」

「ああ、それか？　ただのゲン担ぎだよ、深い意味はねえ」

空と愛菜と雫は思った……どんなゲン担ぎだと。

なお、『悪の戦争教本』は、藤崎竜という漫画家が自身の作品の中で登場させた本であり、当然のように戦国時代の人間は誰も知らない。

胡散臭そうな目で悪の戦争教本を眺める空と愛菜を意図的に無視して、九十郎は雫をひよいつと持ち上げ、肩車のようにして担ぎ上げた。

「さて、それじゃ俺達も動くとするか」

「はい、今から私達は2000万パワーズです！」

「この俺の1000万パワーズと」

「私の1000万の知略……って、自分で言うところとちよつと恥ずかしいですね」

「良いんだよ、これもゲン担ぎだ、ゲン担ぎ。」

とにかく、合わせて2000万パワーズ結成だ」

なお、2000万パワーズはキン肉マンという漫画に登場するタッグチームであり、宇宙超人タッグトーナメントの準決勝でヘル・ミッシヨネルズにブチのめされ、究極のタッグ編ではマッスルブラザーズ・ヌーボーに負けた2人を指す。

……むしろ縁起の悪い名前ではなからうか。

「俺は、新田劍丞に勝つために」

「私は、竹中半兵衛殿に勝つために」

「一蓮托生、協力し合って行こうじゃねえか。」

正直俺は戦術とか苦手だからな、頼りにしてるぜ、黒田官兵衛」

「はい！ 絶対に勝ちます！ 必ず九十郎さんを勝たせて見せます！」

勝つて九十郎さんこそが天下一と認めさせます」

「いや、天下一は劍丞だろ」

「それを言われると立つ瀬が無いのですが」

「劍丞は天下一としても、柘榴は渡せねえし、犬子も、美空も、粉雪だつて渡せねえ。」

だから劍丞に勝つ、そして劍丞をブン殴つて犬子を泣かした事を後悔させてやる」

「あれ、私は？ 貞子さんは？」

九十郎も雫も、気合は十分であつた。

しれつと自分と貞子の名前を抜かされてる事に気づいてしまったが、それはそれとして基本諦めの悪い雫は気合を入れ直した。

そして……

「最初の行先は？」

「まずは……こつちの道を真つすぐ！」

「了解！ 捕まつてろ！」

雫を肩車したまま、雫が指差した先へと、バツファローマンのような体格のマツチョが全力ダツシユで駆けだした。

新田劍丞と竹中半兵衛をブチのめし、全てに決着をつけるために。

犬子と柘榴と九十郎第98話 『姫野』

「小波、疲れてない？ ちょっと休んでからでも良いんじゃないかな……」

劍丞達が一二三の一夜城への攻撃を開始して少し経った頃、姫野は小波にそう尋ねた。

「……うん？ 御主人様が戦っているというのに、休んでいる暇など無いだろう」

小波は怪訝な表情をしていた。

まだ戦は始まったばかりで、休憩をとらなければならない程、疲労は蓄積されていない。

当然、それは姫野にとつても分かり切っていた事である。

しかし、姫野が小波に休憩を持ちかけたのはこれが初めての事ではない。

「で、でもさ、小波はこの作戦の要だし、体調は万全にしておいた方が……」

姫野は言葉を濁していた。

最後まで言い切る事ができなかった。

自分の言葉が白々しい建前の産物に過ぎないと理解していた。

「要だからこそ、急がなくてはいけない。」

姫野？ さつきからおかしいぞ、どうしたんだ？」

「あ、うん……な、なんでもねーし……」

姫野は……姫野は、本心では小波を殺したくないのだ。

だがしかし、姫野は既に命を受けている。

小波は殺さなければならぬ。

信虎との戦いのどさくさに紛れ、小波に知らせていない罠におびき寄せて殺さなければならぬ。

故に姫野は心の中で、信虎と遭遇する事無く戦が終わってくれればと祈ってしまうのだ。

「なんでこんな時だけ、姫野の事忘れねーし」

「忘れる……？ 誰が、何をだ？」

「お前が、姫野の事、今まで散々忘れてるし」

「……忘れるも何も、今日が初対面だろう」

小波が先程以上に怪訝な顔をして、首を傾げた。

姫野は一瞬言い返そうとして……やめた。

これ以上こんな他愛も無いやり取りと続けてしまえば、今よりもっとと殺し難くなってしまうそうだったからだ。

そんな微妙な空気の中で……

「うぐつ!？」

突然、小波が呻き声を漏らし、足を止めた。

「小波!?! どうしたし!?!」

急に立ち止まった小波を心配し、殺害すべき相手だというのに姫野が駆け寄る。

「は、始まった……か……」

まるで脳髓の一部が直接掴まれたかのような不快な感覚が小波を襲う。

その感覚は、かつて一度……菩薩掌を信虎に投げ返された時に味わっていた。

つまり……

「姫野、匂伝無量を掌握された。

つまり、まぐなむ・しゅうとの射程内に入った……本物の信虎が来るぞ」

御家流を掴まれた瞬間から、小波には本物の信虎の位置が直感的に把握できるようになった。

しかし同時に、自分がいる位置もまた、本物の信虎に悟られたと感じていた。

本物の信虎が自分を追い詰め、トドメを刺すべく動き出した事も理解した。

ここまで全て詩乃の予想通りに動いていた。

ここまで全て臆の想定通りに動いていた。

故に……

「八咫鳥が伏せている場所まで、信虎を誘い出さなければ……」

「そして罠にハマて……殺す……こゝ、殺さなきゃ……」

故に小波は、姫野は、あらかじめ決められた作戦通りに事を進めなければならない。

小波は本物の信虎を倒し、愛する主人、新田劍丞に勝利を献上するために。

姫野は小波を殺し、新田劍丞を殺すために。

「うん？ 殺せとまでは命じられていないぞ。」

今回はあくまで後継者を決めるための戦であつてだな……」

「ああ、そうだったし！ わ、忘れてたし！」

「こんな重要な事を忘れるなんて、大丈夫なのか？」

「小波にだけは言われたくねーし」

そんな軽口を叩く。

泣きそうな顔になるのを、必死でこらえる。

そして小波と姫野は信虎の部隊を誘き出すために移動を開始した。

離れすぎて信虎が追跡を諦めないように、近づきすぎて信虎の手勢に捕らえられない

ように……

……

……
……

「全員駆け足！ これより我らは服部半蔵正成を捕らえる！

奴らの生命線は口伝無量だ！

口伝無量さえ抑えれば、残りの連中などカスにも等しい！

ここが戦の勝敗を分ける要と心得えいっ！！」

九十郎とのテレパシーでの会話を終えると、信虎は喉が裂けんばかりに叫び、

信虎が率いる部隊……越後の精鋭中の精鋭、第七騎兵団が動き始める。

「さて……問題は第七騎兵団の速さが、服部半蔵の予想を上回るか否かだな……」

信虎がそう呟くと、自らも部隊と共に走り出す。

信虎が口伝無量を掌握している間は、他の御家流を掴む事、投げ返す事はできない。

その代わり、小波は口伝無量を使う事ができず、

小波は信虎の、信虎は小波の現在位置が正確に把握できるようになる。

基本的に逃げ隠れしながら戦う忍者にとって、非常に不利な状況である。

「(こちらは半蔵一人捕らえれば良く、しかも相手は私の位置は知れても、

私の手勢の位置は分からぬ……しかし、我らは奇襲伏兵を警戒しながら追わねばなら

ぬ。

状況は五分と言わざるを得んな、我と半蔵の度胸勝負と言った所か……」

信虎が冷静に状況を分析する。

越後の精鋭中の精鋭、第七騎兵団を自由に動かせるとはいえ、御家流の掌握によって相手の位置を把握できるとはいえ、超一流の忍者である服部半蔵正成を補足する事は困難極まりない。

しかも……

「ぎやああー！」

「うわらばー！」

「ひびい〜っ!!」

しかも風魔忍軍が何日もかけて仕込んだ罠によつて、1人、また1人と脱落者が増えていく。

第七騎兵団は越後の精鋭中の精鋭、そう簡単には補充がきかない。

そして信虎にとつて、第七騎兵団は晴信を殺すために絶対必要な力であるが故に、この戦いで大きく損耗するのは避けたい所である。

「……ちつ、また伏兵か。 ドライゼを使えれば皆殺しにするのも簡単だと言うのに」

そして土の中、水の中、茂みの中から黒装束の者が現れ、第七騎兵団に斬りかかってくる。

少数とはいえ、いつ、どこから出てくるか分からない奇襲の連続に、自然と追走の足が遅くなっていく。

さらに今回、第七騎兵团はドライゼ銃を持ってきていない。

武田や北条の者が多数参加しているこの戦いでドライゼの性能を見せてしまえば、まず間違い無く武田や北条が対策を立ててしまうからだ。

「さて、どうするか……九十郎からは深追いはすると言われてるが……」

信虎の頭に3つの選択肢が浮かぶ。

1つ目は全速力で服部半蔵を追う事。

2つ目は罨や奇襲に警戒するために速度を落とし、服部半蔵を追う事。

3つ目は半蔵を追うのを諦める事だ。

信虎は即座に2つ目の選択肢を頭の中から排除する。

伊賀忍者の中でも特に優れていると聞く服部半蔵相手に、中途半端な攻撃は悪手であるからだ。

全力で追うか、諦めて引き上げるか……信虎は2つの選択肢の狭間にしばし迷う……が……

「惚れた男には、恰好良い姿を見せたいよなあっ!!」

信虎はさらに足を速めて半蔵を追いかける。

第七騎兵团もまた、全速力で信虎の後に続く。

服部半蔵は必ず、惚れた男、新田劍丞が少しでも有利に戦を進められるよう、自分を討つ事に固執する筈だ。

必ず、必ず、隙を見せる筈だ……信虎はそれに賭け、決断したのだ。

「速いっ!!」 毘は……作動しているの!!? 思ったより足止めができてない!」

そんな信虎と第七騎兵团の姿に、姫野が動揺する。

毘と奇襲で足止めをしながら、八咫鳥隊と森一家が伏せている場所まで誘導する事が、詩乃の策であり、小波と姫野の課せられた任務である。

しかし、第七騎兵团の速さは姫野の段取りを崩す程のものであった。

「手空きの風魔忍軍を集めてるけど、あいつらの速さじゃ間に合わねーかもだし!」
「だったら走るしか無いだろう!」

「そりやそうだけど、ちよつとは焦るし!」

「なんでも良いから走れ!」

「はいはいっ!!」

姫野と小波もまた、足を速める。

姫野も小波も一流の忍者であるが、第七騎兵团は越後の精鋭中の精鋭だ。体力も運動能力も凡庸とはかけ離れている。

地形や罨を利用してどうにか凌いでいるが、たった2人での逃走劇はそう長くは続かない。

うだるような蒸し暑さもまた、姫野と小波の体力を容赦無く削り取っていた。少しずつ、少しずつ、小波達と第七騎兵団の距離が縮まっていた。

「うおおおっ!!」

「邪魔をするなっ!!」

ついに第七騎兵団の1人が小波に追いつき、小波に斬りかかった。

小波が咄嗟に忍刀を抜き、迎撃する。

相手がそこらの雑兵であれば、切り捨てるのは容易い、しかし……

「踏み込みが足りん!」

小波に追いついた男は、刀でそれを受け止めていた。

「くっ、う……」

そのまま唾競り合いに持ち込まれる。

こうしている間にも他の第七騎兵団が次々と集まって……

「小波、何やってるし!」

「ぐおっ……」

姫野が小波を襲った男を背後から切り捨て、蹴り倒す。

「す、すまない……えつと……」

「姫野だしっ！ また忘れて……ああもう、とにかく走るし！」

姫野が小波の手を引き走る。

走る、走る、走る、ひたすら走り続ける。

「(な、なんだ……私は……?)」

全速力で走りながら、小波は自身の心中に奇妙な違和感を覚えていた。

「(私は……この手を知っている……? この手の感触を、暖かさを……知っている……?)」

小波は姫野の手を握りながら、何故かそんな事を考えていた。

理由がまるで説明できない、奇妙な安らぎを感じていた。

「撃てええええええーっ!!」

「全員伏せろおおおおおーっ!!」

雀と信虎の叫び声が同時に聞こえて来た。

直後……ズドドドツ!! という鉄砲が連射される音、銃弾が飛び交う音、断末魔の叫び声がそこから中から聞こえて来た。

「よっしやあつ!! かくれんぼはここまでだ! 行つくぜえつ!!」

茂みの奥よりフルプレートアーマーの小夜叉が飛び出し、

ほぼ同時に森一家がヒヤッハーと叫びながら第七騎兵団へ突撃していた。八咫鳥隊によつて銃弾を浴びせられ、手加減なんて器用な真似はせきない森一家に襲われ、

第七騎兵団が次々とあの世へ送られていく。

「ええいつ！　小癩な真似を……狼狽えるな！　隊列を整え迎撃しろっ!!」

全速力で小波を追いかけていたため、第七騎兵団の戦列は伸びている。

越後の精銳を集めたと言つても、その状況で森一家の勢いに対抗する事は難しく、第七騎兵団の隊列が大きく拉げた。

「……勝機」

その瞬間を、小波は見逃さない。

信虎を守る兵が大きく減つていた。

今ならば護衛をすり抜け、信虎本人を叩けると考えた。

時間が経てばまだこの場に来ていない兵が合流してしまい、体勢を立て直してしまうかもしれないが……今ならばきつと、信虎を討つと考えた。

そうすればきつと、新田劍丞の役に立てると……そう考えて、小波は最後の力を振り絞つて近くの木に体重をかけ、しならせ、トランポリンのように利用して跳躍した。

が……しかし……

「焦れたな半蔵……死ねっ!!」

瞬間、信虎がにやりと笑った。

瞬間、小波は周囲がスローモーションのようになったかのように感じた。

あまりにも明確で濃密な死の気配が、小波の脳髓に緊急事態を訴えかけた。

思考が、そして感覚がどこまでのもどこまでも間延びしていく。

殺意に満ちた血走った目で、信虎が懐から小さな金属製の機械を取り出していた。

それは九十郎が造り、護身用にと信虎に渡した回転式拳銃……俗に言うリボルバー銃であった。

服の下に仕込める程の大きさで、6発までリロード無しで連発可能な銃こそが、信虎が隠し持っていた切り札なのだ。

「(あれは……鉄砲……?)」

当然、戦国時代生まれの服部半蔵は、リボルバーの存在を知らない。

想像すらした事が無い。

しかし小波は、長年の経験と勘により、信虎が取り出した奇妙な機械が小さな小さな銃だと判断した。

信虎が銃を構え、自分を狙っていると判断した。

ズドンッ！ と火薬が破裂する音が響く。

「くうっ！」

小波が空中で身体を捻り、急所を庇う。

放たれた銃弾が小波の左腕の皮と肉を何cmか抉り取り、鮮血を纏い近くの巨木にめり込んだ。

直後、小波が大きく体勢を崩し、地面に転がり込むように着地する。

肝が冷えたが、軽傷だ……小波がほつと胸を撫で下ろした次の瞬間、小波をさらにさらに驚愕させる出来事が起きた。

ズドンッ！ と火薬が破裂する音が響く。

信虎は銃弾と火薬を詰め直した形跡は無いし、別の銃に持ち替えた様子も無い。

にも拘わらず、信虎は再び引き金を引き、銃弾を発射したのだ。

リボルバーを知っている者にとっては当然予想すべき状況である、しかし、鉄砲は1発撃つ度に弾丸と火薬を詰め直さなければ撃てない……そんな常識に染まった小波にとっては、予想すらできない異様な状況であった。

「あぐっ!?!」

既に大きく体勢を崩していた事もあり、回避は出来なかつた。

小波の右肩が大きく抉られ、間接を貫かれ、周囲に鮮血が飛び散る。

今すぐ治療をしなければ失血死しかねない重傷だ。

銃弾の熱が肉と神経を焼き、衝撃が全身を波打たせ、今まで味わった事の無い凄まじい激痛が小波を襲った。

激痛と一気に血を失ったショックで気絶しそうになるのを、小波はギリギリで堪えた。

そして……ズドンッ！ と火薬が破裂する音が響く。

信虎が小波を狙い、3度引き金を引いたのだ。

「あ……避けられない……死ぬ……」

瞬間、小波は自らの死を悟った。

優れた動体視力を持つが故に、百戦錬磨と言つて良い経験があつたが故に、放たれた銃弾が真つすぐ自分の脳天に向かつて飛んできていた事が理解できた。

2発目の銃弾は、信虎が拳銃の扱いに慣れていなかったが故に、右肩に当たるだけだ。

だがしかし、3発目の銃弾は正確に小波の急所に向かつていた。

「(劍丞様……)」

小波は心の中で愛する人の名前を呼び、ぎゅつと目を閉じ……

「小波いっ!!」

姫野が小波を庇った。

小波を狙った銃弾は、間に割って入った姫野の心臓を貫いた。

「い……はっ……」

姫野の胸に空いた銃創から、夥しい量の血が噴き出す。

致命傷だ、間違いなく心臓に当たった……小波にはそれが分かった、理解してしまつた。

「え……あ……？」

小波の心の中で、何かが警鐘を鳴らしていた。

思い出してはいけない、忘れなければならない、名前を呼んではいけないと訴えていた、

「ひ……め……」

小波は目の前の人物を……たった今自分を庇い、心臓に銃弾をブチ込まれた少女の事を瞬時に忘れた。

名前を忘れ、顔を忘れ、存在を忘れた……小波の魂に刻まれ、小波の精神を操作し、小波の記憶を消し、小波の魂を歪め続けている伊賀忍者に伝わる秘奥義が発現した。だがしかし、小波の眼からは涙が溢れていた。

小波の心は悲しみで一杯になっていた。

小波の口がその意思と無関係に動き、目の前の人物の名前を呼ぶ……

「姫野おっ!!」

悲痛な叫びであった。

悲しみに満ちた痛々しい叫び声であった。

その悲痛な叫びを聞いた瞬間、信虎は総毛立った。

寒気がして悪寒がした。

「馬鹿な……口伝無量が……!?!」

直後、信虎の御家流『マグナム・シュート』で掌握し、封じていた筈の口伝無量の声を聞いた。

『消えてなくなれ』

怨念そのものを声にしたかのような、身の毛のよだつ声であった。

『消えろ』『消えてなくなれ』『みんななくなれ』『よくもよくもよくも』

『消してやる』『全部消してやる』『全て無くなってしまえ』『おのれおのれおのれ』

『消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ』

憎悪と怨念に満ちた声が、第七兵团や風魔忍軍、八咫烏隊……いや、越後近辺に存在するありとあらゆる生物の魂に直接叩き込まれる。

そして今度は信虎だけでなく、その場にいたありとあらゆる者が恐怖した。

「お、お姉ちゃん、あ……あれ……」

「……っ!？」

「おいおいおいおい! なんだよ、ありやあ!？」

「あ、あれ……あれも小波お姉ちゃんの御家流なの……?」

山吹色に輝く超常の腕が空に浮かんでいる。

それは小波のもう1つの御家流『妙見菩薩掌』の腕……それが100も200も空に浮かび、しかもその数は際限無く増え続けていた。

「消えろ……消えろ……みんな消えろ……消えて無くなれ……」

小波がぶつぶつと呟きながら、菩薩掌の腕を次から次へと増やしていく。

かつて小波は姫野を見捨てた。

姫野が自分を助けるために醜悪な怪物の前に躍り出たのに、自分は隅っこでガタガタと震える事しかできなかった。

その時、小波が魂を歪める程に強く強く望んだ物が2つあった。

1つはどこまでも遠くに届く声、

日ノ本のどこかで生きているかもしれない姫野にまで届く声……口伝無量。

もう1つは両親を無残に喰い殺し、姫野と生き別れになる原因を作った怪物と、ガタガタと震えて姫野を見捨てた自分自身を殴る為の腕……妙見菩薩掌である。

そして口伝無量と妙見菩薩掌が、姫野の死を切欠に暴走を始めていた。

憎悪と怨念を無差別に垂れ流す口伝無量の声と、憎悪を怨念を纏いながら際限なく増え続ける菩薩掌の腕がその証である。

「いかんっ！ 全員散解しろっ！ 我一人では庇いきれんぞっ!!」

「み、みんな逃げてええええええーっ!!」

信虎と雀が同時に叫ぶ。

第七騎兵团が、八咫烏隊が、風魔忍軍が、そして驚くべき事にヒヤツハーと叫びながら制圧前進しかできない筈の森一家すらもが、各々逃げ隠れを開始する。

想いは皆同じ……巻き込まれたら死ぬ、である。

「消い・ええ・ろおおおおおおおおーっ!!!」

ドス黒い殺意に満ちた叫びが物理的に、それと同時に口伝無量によるテレパシーによつて周囲に伝わる。

金色に輝く菩薩掌が、小波の憎悪に反応するかのように輝く。

そして無数の菩薩掌が落下してきた。

「ぎゃああつ!!」

「うわあああつ!!」

「た、助け……うがああつ!!」

「踏み込みが足りん！」

第七騎兵团が、八咫鳥が、そして森一家が、無差別に落下する菩薩掌に文字通り叩き潰され、

見るも無残な轢死体へと変わっていった。

血飛沫が飛び散り、脳漿がまき散らされ、骨と内臓がバラバラになって撒かれる、地獄絵図のような光景になった。

「ぐうおおっ!!」 な、何だこれは!?

私の御家流が菩薩掌を掌握しているというのに、何故止まらない!?

御家流は一人一つの筈だぞ! 何故こいつは口伝無量以外の御家流を使える!?

信虎も黙って見ているだけではない。

必死になって逃げ回りながら無数に降り注ぐ菩薩掌の1つを掴み、小波に投げつけ、逃げ回りながら菩薩掌の1つを掴み、小波に投げつける。

しかし、まるでバリアでも張っているかのように、投げ返した菩薩掌は空中で軌道が逸れ、どこか別の場所へと着弾する。

信虎は何度も何度も菩薩掌を投げ返したが、小波と小波が抱きすくめる姫野にはカスリ傷一つつかなかった。

「ええい! 伊賀忍者の頭領は化け物かっ!?

信虎が思わず悪態をつく。

御家流を使えば気力が消耗し、疲弊し、限界を越えれば気絶する……しかし、暴走した小波はそんな常識すら無視しているかのように、菩薩掌を際限無く連発し続けている。

「ならばっ!!」

信虎が先程姫野を撃つたりボルバーを再び取り出し、構え、銃弾を発射した。

八咫鳥隊もまた、暴走する小波を止めるために銃撃を始める。

だがしかし、それら全ては空中で不自然に軌道が曲がり、あらぬ方向へ逸れてしまった。

「駄目か……駄目なのか……」

このままでは全滅する、逃げる事すらできない……信虎の心に絶望が包み始める。

「お、お姉ちゃん……」

「……………」

次々と菩薩掌に潰され、挽肉のようになって死んでいく同胞達を前に、鳥と雀もまた、絶望の淵に立たされたていた。

雨のように無尽蔵に降り注ぐ菩薩掌の前には、誰もが無力であった。

そんな中で……ぱんっ！ と、小さな音が辺りに響いた。

菩薩掌で潰される人の断末魔、ヘシ折れる木々、そして銃声に比べれば小さな小さな音であったが、小波の耳にはやけに大きく響いた。

それは何者かが小波の右の頬を引っぱたいた音であった。

「小波、何やってるし」

気がつけば心臓を撃ち抜かれた筈の姫野から、心音が聞こえるようになっていた。

血色が戻り、冷えていく体温も戻り、閉じていた瞳が開いていた。

「ひ……………めの……………?」

「そうそう、姫野だし。 珍しく忘れてないみたいだし」

もう二度と目覚めないと思った姫野が目覚め、もう二度と聞けないと思った姫野の声

が聞こえていた。

「姫野には予備の心臓が埋め込まれてるし、

片方が無くなったらもう片方が動くから死にはしないし」

そうやって姫野はニコリと笑った。

小波は何故か、その笑顔の前にも見た事があるような気がした。

その笑顔を見ると、ドス黒く心を染め上げた憎悪と怨念が消えていくような気がした。

「あ……………私……………何をやって……………」

空に浮かぶ1000を越える菩薩掌の腕が一瞬にして残らず消えた。

小波の心から憎悪や怨念が消え、御家流の暴走が止まったのだ。

「あ…………えつと…………」

そして御家流の暴走が止まるのと同時に……

「す、すみません、どなたですか？」

何か……何か分かりませんが、初めて会ったのではないような……

すみません、上手く説明できないんですけど……」

……小波は再び、姫野を忘れた。

顔も、声も、名前も、完全に忘れ去った。

「全く…………」

姫野はもう一度小波の頬を叩こうとして……やめた。

「全く、初対面でも何でもねーし。いつもの小波でむしろ安心したし」

そして姫野は安堵のため息を漏らした。

周囲を見回すと、第七騎兵团も、八咫烏隊も、森一家も、1人たりとも無傷の者が無く、戦意を維持している者もまた1人もいなかった。

自分が生き残った事すらも信じられないといった様子であった。

「全く、酷い有様だし。 姫野が気絶してる間に何が起きたのやら……」

そんな時……周囲に伏せていた風魔忍軍が小波達の元へと集まってきた。
「来ちゃったか……まあ、第七騎兵团は戦闘不能だし。」

「そうならばやる事は……一つしか無いよね」

撃たれた心臓を抑え、ふらつきながら姫野が立ち上がる。

予備の心臓が動いているため、即死こそ免れているが、心臓を撃たれた傷は決して軽くはない。

普段のように飛んだり跳ねたりするのは無理だと考えざるを得なかった。

「頭領、我等の任務は……」

風魔忍軍の1人が忍刀を抜いた。

それを合図に、他の忍び達も鎖鎌、短槍、手裏剣、鉄爪といった武器を構える。

「分かつてる、分かつているし……」

風魔忍軍に与えられた任務は何か、しっかりと覚えていくし」

姫野もまた、近くに落ちていた刀を拾い上げて構えた。

限界を超えて御家流を使ったためか、小波は立ち上がる事すらできない程に疲弊していた。

手にした刀を振り下ろせば、簡単に斬れる……姫野にはそれが分かった。

それ故に、だからこそ……

「風魔忍軍の全ての者に告げる……」

風魔小太郎はあ！ 今この瞬間をもつてえっ!! 抜け忍になったあっ!!」
叫んだ、腹の底から叫んだ。

「小波を傷つけようとする者は！ 誰であろうと姫野が許さねーしっ!!」

それは北条からの命に背く宣言であつた。

風魔忍軍から決別し、小波の……服部半蔵の味方になるという宣言であつた。

たぶん自分は風魔忍軍によつてこの場で討たれるだろうと思つたが……姫野は清々しい気分になつていた。

「な、何を……?」

突然の抜け忍宣言を聞き、小波が目を白黒させる。

姫野に関する記憶を失つた今の小波にとって、姫野は顔も名前も知らない誰かに他ならない。

それが突然、固い結束がウリの風魔忍軍を抜け、自分を守ると宣言したのだ。

小波の驚きと混乱は並々ならぬものであつた。

「安心するし、これからは姫野が小波を守つてやるし」

混乱する小波に対し、姫野はもう一度笑いかけた。

そして先頭で忍刀を構える風魔忍者がゆつくりと姫野達の前に進み……

「ならば……私もまた抜け忍となりましょう」

そう言いながら振り返り、風魔忍軍へと立ちはだかった。

「だつたら私も抜け忍だあっ!!」

「おうよ! 頭領だけを死なせてたまるかっ!!」

そんな声がして、風魔忍者が1人、また1人と姫野の傍へ駆け寄つて来た。

「抜け忍1人追加だっ!」

「俺も抜け忍びだ! 抜け忍になるぞ!」

「私も頭領について行きます!」

10人、20人と、姫野の側に立つ忍者がどんどん増えていき……

「あ、あはは……姫野って意外と……人望あつたみたい……」

気がつけば、姫野と小波に武器を向ける風魔忍者は1人もいなくなっていた。

犬子と柘榴と九十郎第99話『美空の思惑、綾那の思惑、一二三の思惑』

「オラアッ!!」

美空が決して恋愛ゲームのヒロインがしてはいけない表情と共に、一葉の顔面に強烈な蹴りを決めた。

背景に『王龍の極み』とでも浮かんできそうな、見事な蹴りであった。

唯一の救いは、マスクド斎藤の仮面のおかげで、表情が見えなかった事であろうか。

「ぷっ……くっ……」

ぶっ倒れた一葉が、ぷるぷると両足を震わせながら立ち上がる。

しかし、限界は既に超えていた。

立ち上がるのがやつとと言った所で、今の一葉は詩乃にすら……いや、5歳児にすら負いかねない程にボロボロだ。

「ま……まだまだあ……」

ぷるぷると震えながら、辛うじて一葉がファイティングポーズっぽいものを取る。

一葉の闘志は未だに萎えてはいなかった。

「はい、そこまでー」

……が、しかし、もう100%逆転の目が無いと判断した幽が一葉を止めた。

「まだじゃー！ まだ負けておらん！」

「いやいや、誰がどう見たって公方様の負けですよ、ま・け。

劍の勝負でボコボコにされて、

まだ負けてないと言い張って素手同士の殴り合いを初めて、

それでまたボコボコにされたんじゃあないですか」

「うぐう……」

自覚はあったが認めたくなかった事実を突き付けられ、一葉が絶句する。

「完・全・勝・利」

一方、ほぼ無傷の美空は、何の意味も無く背後に護法五神を並べながら、これ見よがしに勝利のポーズを決めていた。

「幽は悔しくないのかっ!？」

この戦いは主様と九十郎のどっちが男としての格が上かを決める戦いなんじゃぞ!」

「ほう、それでは公方様が景虎殿よりも殴り合いが強いと、良人殿の格が上がると?」

「当然じゃろう!!」

「どうしてです?」

「それは……むむむ……」

「何がむむむですか。」

存分に斬り合つて殴り合つて友情を取り戻そうつて話でしたでしょうに」

「あ……」

「い……言われてみれば……」

美空と一葉が同時に目を見開き、そう言えばそうだったとでも言いたげな表情で互いに顔を見合わせた。

「アンタら絶対マブダチですよ！ 殴り合うまでもなく大親友ですよ絶対に！」

最近の美空はツツコミキャラを放棄しているともつぱらの噂である。

「で、どうする一葉……じゃない、通りすがりの徳田新之助さん。 殴り合う？」

「そうさな美空……じゃない、通りすがりのマスクザ斎藤。」

これ以上は殴り合いにはならんだろうな、一方的に殴られるだけだ」

「私は別にそれでも構わないわよ、公方様……じゃない、

公方様のそっくりさんの顔面に蹴りを入れるなんて滅多にできないし、気分も悪くない」

サデイスティック仮面がしれつと物騒な事を言い放った。

「ええい、余が気にするわ！ 青痣だらけで床に入れるか！」

王龍の極みが直撃して鼻血をだらだらと垂れ流す一葉が抗議するが、既に手遅れである。

「まあ……床入り云々はともかく、負けを認めざるを得んな。

煮るなり焼くなり好きにするが良い」

一葉が抵抗を諦め、どっかりとその場に座り込む。

「煮ても焼いても食えそうも無いわ、貴女わね。

思い切りブン殴ったら頭も少しはすつきりした……

少し、これからの事を話しましょうか」

美空が一葉の隣にどっかりと座り込む。

「前は剣技も御家流も互角であったのになあ」

「九十郎のおかげよ。九十郎の神道無念流が、私を強くしてくれたわ」

「一目見た時から一廉の人物と思っていたが、お主程の者がそこまで惚れこむとはな

……」

「私は前田利家のおまけ位にしか思っていなかったわ。

でも……でも今は、心の底から愛しい人だと想っているわ」

美空と一葉が空を見上げる。

カンカンと照り付ける日差しに、じりじりと煮え立つような蒸し暑さ……その日はや

たらと不快指数の高い日であったが、2人の心には何か爽やかなものがあつた。

「……新田劍丞と手を切つて、一葉」

美空が本題に入る。

「ずつと一葉に言いたかつた事だ。」

「ずつと一葉に言いたかつた事だが、今までどうしても言えなかつた事だ。」

「それはできん」

「やや時間を開けてから、一葉はそう答えた。」

「即答すべき事であつたが、即答はできなかつた。」

「美空の目が……親友の目が真剣そのものだつたからだ。」

「そう……」

「その言葉は美空にとって当然予想すべき言葉であつたし、現に予想していた言葉でもあつたが、美空の表情は僅かに曇つた。」

「理由を聞かせい、お主の事じや、何の意味も無く言つた訳ではなからう」

「確たる証拠があつて言つて言つて無いわ。私自身、確信がある訳でもないもの」

「教えてくれ、頼む」

「一葉が美空の前に回り、膝をつくようにして頼み込む。」

「美空は言うべきか、言うまいか迷い、迷い、考え込んだ末に……」

「公方様は……洗脳されているわ」

マスクザ斎藤の仮面を外し、そう告げた。

「余が洗脳……誰にじゃ？」

「……新田劍丞」

「馬鹿なっ！ 主様がそんな事をするものかつ!!」

「私だつて無茶な推論だと思つてるわよ！」

「だけど……だけど、そうとでも考えないと不自然よ！」

「どういう意味じゃ？ 順序立てて説明せい」

「歴史が大きく動こうとしているわ。」

長く続いた乱世が集結し、治世の世に移り変わる大きな大きな転機が来ようとしている。

その中心に居るのが織田信長と、豊臣秀吉」

「豊臣秀吉……？」

「ひよ子の事よ」

「久遠はともかく、ひよ子が歴史の転機を中心じゃと!？」

「私だつて半信半疑よ。とにかく話を続けるわよ。」

戦乱の世を終わらせるなんて事、当然だけど無血という訳にはいかないわ。

大きな戦いが何度も何度も行われる。

その戦いに深くかかわった者の名前を挙げてくわ。

竹中半兵衛、黒田官兵衛、明智光秀、柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益、前田利家、たぶん足利のお手紙大好きな誰か、武田晴信、長尾景虎、北条なんとか、

浅井なんとか、服部半蔵、本多忠勝、風魔小太郎、毛利元就、島津なんとか、

石田三成、真田幸村」

「何人か知らん名があるが……」

「てかうろ覚えの人多すぎやしませんかね」

しかし、一葉にとって美空が挙げた者達は、名前を聞いてすぐに顔が浮かぶ者も少くない。

「その上で聞いわ、一葉……」

今挙げた人と、その関係者の中に、新田劍丞に惚れている女は何人いる？

これから何人増えると思う？ 惚れ方が急すぎて不自然な人はいない？」

瞬間、幽と一葉の表情が同時に固まった。

思い当たる節がある……それも1つや2つではなく、10も20もだ。

「何が言いたい、美空」

「何者かがそうなるように仕向けているのではないの？」

「馬鹿なっ!? 主様が女を洗脳しているとしても言うつもりかっ!」
「そう考えるのが一番自然なのよっ!」

犬子は心の底から九十郎を愛していたわ!

本当に心から九十郎に惚れ抜いていたのよ!

どうして急に劍丞に抱かれるなんて事が起きたのよっ!!」

「だからと言って、主様が女を洗脳している等と……」

「わかつているわ! 証拠は一切無い事も、一葉はきつと信じないだろうって事も。

さっきも言ったけれど、私だって確信がある訳じゃない。

もしかしたら、劍丞以外の誰かが裏で動いているのかもしれないとも思っているわ。

だからこそ、私は確証を得る為に動いているの!」

「確証を……?」

「まず一つ、今回の戦いで空の陣営が敗北した場合、私は……」

長尾景虎は新田劍丞の妻になると宣言したわ。

柘榴や粉雪達まで乗って来るのは予想外だったけれどね!」

「それで何が分かると言うのじゃ?」

「暗躍する者の狙いが、歴史を動かす重要人物を残らず新田劍丞の嫁にする事であるなら、

おそらくこの戦いに介入してくる筈よ。その動きを掴む事ができれば、

誰が、何のためにそんな事をしているのかを知る手掛かりになるわ」

「成程のう……」

「そしてもう一つ、私は新田劍丞を殺すための刺客を放っているわ」

瞬間、一葉と幽の表情が変わった。

「今なんと言った？ 流石に聞き捨てはできんぞ」

「公方様と幽を連れ出したのは、巻き込みたくなかったからよ。」

あの娘の御家流に公方様が巻き込まれないようにするために、

私が公方様を連れ出す事に成功したら、あの娘が劍丞を襲う……

そういう手筈になっているわ」

「なっ……!?!」

一葉が絶句する。

冗談で言っているようにはまるで見えなかった、美空の眼は真剣そのものだった。

その目の奥に……確かな殺意があると一葉には分かった。

「主様っ!!」

すぐさま一葉は立ち上がり、劍丞の元へ向かおうとするも……

「行かせないわっ!!」

「ぬぐっ!？」

すぐさま美空が後ろから羽交い絞めにして、一葉の行動を制止した。

「幽! 今すぐ主様の元へ走れ!」

「し、しかし……」

「余も後から追いつく! 早く行けいっ!!」

若干死亡フラグっぽい台詞と共に、

幽は一瞬、一葉を置いて立ち去る事へ抵抗を覚えたが……美空ならば一葉を傷つけるような真似はしない筈だと思い直し、劍丞の元へと走り出す。

しかし……

「止めなさい!」

美空がそう叫ぶと同時に、番傘を持った女性が幽の前に立ちはだかった。

「何い!？」

「貴女は……甘粕殿……?」

「甘粕景持じゃない……私は通りすがりの風見幽香」

そこには昨晚こっそりと九十郎作成のコスプレエッチ用衣装をくすねていた松葉がいた。

幽と一葉が劍丞の元に戻ろうとした時、腕づくでもその場に留まらせるために、美空

があらかじめ来るように指示しておいたのだ。

なお、粉雪（魔理沙）、柘榴（美鈴）、一二三（お燐）、湖衣（空）、夕霧（パルスィ）に続く東方コスプレ勢6人目……東方由来ではないコスプレをしている美空も数に加えるなら7人目である。

笑える事に、コスプレして戦線に乱入していない者が秋子、貞子、紗綾くらいしか残っていないかった。

それが後々酷い結果を招くのだが……まあ、それが分かるのはもう少し後の話である。

「失礼、急用を思い出しましたので中座させて頂きたいのですが」

「主名故、引き止めさせてもらう」

「まつ……じゃない、幽香！ 絶対に幽も公方様も通しては駄目よ！

なんと少しでも足止めしなさい！」

「御意」

一瞬松葉と言いかけていた事を華麗にスルーして、自称風見幽香が番傘を剣のように構えた。

「余は通りすがりの徳田新之助、公方ではない」

「公方様のそっくりさんも通すんじゃないわよ！」

「御意」

一葉の背後を取った美空が、ステップオーバートウホールド・ウイズ・フルネルソンの体勢に入る。

「ええいつ！ 離さぬかつ！」

「断じて離しやしないわよっ！」

私が思い描く乱世終結には、足利義輝が不可欠なのよっ!!」

「その義輝の命でも離さぬかつ!？」

「それでもっ!!」

「友の頼みでもかつ!？」

「それでもよっ!!」

どうにか技を外そうと力を籠めると、両肩がミシミシと軋み、激痛が走る。

完全に関節を極められ、立ち上がる事すら不可能であった。

「……中々、やりますな」

「そちらこそ」

一方、幽と松葉は一進一退の攻防を繰り返している。

幽が愛刀兎手柏による鋭い突きを見舞うも、松葉は涼しい顔で躲し、防ぎ、最小限の動きで幽の時間を浪費させていく。

「このままでは突破する前に日が暮れそうですね……」

幽の心に焦りが生じつつあった。

彼女もまた、新田劍丞に惚れこみ、新田劍丞の為ならば命すら投げ出せる女の一人。

その劍丞に危機が迫っていると聞けば、心中穏やかではない。

焦りが技の精度を鈍らせているのが分かった。

分かつていたが、どうする事も出来ずにいた。

このままでは……と、一葉と幽が思ったその時である。

『消い・ええ・ろおおおおおおおおおお……つ!!』

恐ろしい声を聞いた。

身の毛のよだつような声であった。

ドス黒い殺意と憎悪に満ちた声であった。

そして同時に、胸が締め付けられるような悲哀に満ちた声であった。

「小波……?」

その声を聞いた瞬間、一葉と幽はそれが小波の叫びだという事が分かった。

小波の御家流……句伝無量によって届けられた、小波の思念だと分かった。

「だが、あれがこうも取り乱すとは……一体……?」

一葉は思った……もしや、劍丞の身に何か良くない事が起こったのではないかと。

いつも冷静沈着な忍びである、服部半蔵が取り乱す事があるとすれば、愛する主君・新田劍丞の凶事以外には無いのではと……

そんな一葉の不安をさらに煽つたのは、雷鳴のような大音を轟かせ、暴風雨の如く地上に降り注ぐ山吹色の腕……妙見菩薩掌の連打である。

天変地異としか表現できない、常識外の御家流の連打によって、否が応でも尋常ではない何かが起きたと理解させられる。

「な、何……何が起きているの……？」

美空もまた、異様な声を聞き、異様な光景を目にして、大きく動揺していた。

そして考える、考えざるを得ない……この戦いを中断させるべきではないかと。

「美空、妥協する気は無いか？」

そんな穏やかではない心の中を見透かしたかのように、スルリと一葉の言葉が入り込む。

「妥協……どういう意味よ？」

「主様の元へ行かせろとは言わぬ。その代わり、小波の元へ行かせてくれ。」

あの声、あの御家流の乱発……ただ事ではない」

「くっ……」

美空と一葉の視線の先で、100発も1000発も連発される菩薩掌の光があった。

常人ならば……いや、どんなに優れた超能力者であろうとも、脳の血管と神経がズタボロになって憤死するような、御家流の濫用である。

「何かが起きたのじゃ！ 小波程の者がああも取り乱す程の何かがつ！！」

「ここで下手を打てば越後が滅ぶぞつ！！」

迷い悩む美空を、一葉が叱責する。

美空は……

「仕方……ないわね……」

……美空はやむなく、一葉にかけた変形STFを外した。

……

……

……

『消い・ええ・ろおおおおおおおおおおー……っ！！』

恐ろしい声を聞いた。

身の毛のよだつような声であった。

ドス黒い殺意と憎悪に満ちた声であった。

そして同時に、胸が締め付けられるような悲哀に満ちた声であった。

さらに、山吹色に輝く腕が暴風雨の如く降り注ぐ光景も目にした。

「歌夜、合図があつたのです、出陣するのです」

そんな異様な声を聞いてもなお、異様な光景を見てもなお、綾那は……本多忠勝は平常運転である。

本多忠勝は、良くも悪くも『ただ、勝つ』事しかできない。

それは彼女の欠点でもあつたが、何物にも代え難い美点でもある。

「綾那、その……アレ、放置しても良いの？」

当然、綾那の外付け良心回路ごと歌夜が疑問を呈す。

彼女達がじい〜と目を凝らすと、巨象に踏まれる蟻のように潰されていく第七騎兵团や八咫鳥隊の姿が辛うじて見えた。

「歌夜？ 菩薩掌が合図でしたよね？」

「いやいやいやいや！ アレは普通の菩薩掌じゃないわよ！」

「普通じゃなくても菩薩掌なのです。」

綾那達は合図を見たら空さんの本陣を強襲するのです」

「そういう指示は受けてるけど……綾那は小波が心配じゃないの？」

「姫野がついてるのです」

綾那は当然の事のように言う。

句伝無量によるSOSを聞きつけ、夢の中にまで小波を助けに来た姫野であれば、何

があろうとも小波を守り抜くだろうと信じていた。

「でも……」

歌夜が何かを言おうとしたその時……

「歌夜、どうやら向こうは見逃しちやくれないうみたいですよ」

「え……う？」

綾那が臨戦態勢に入っていた。

鋭い視線が深い森の奥へと向けられ……そこから2人の女性が現れる。

「……げ、マジでいたぜ」

「流石は黒田官兵衛様つすね、ドンピシャだったつす」

雪のような白髪の少女が1人、炎のような真つ赤な髪の女性が1人、いずれも武装していた。

その手には『悪の戦争教本ボリユーム1』と題された、雫が用意した作戦の指示書が握られていた。

「何者か……とは、聞かない方が良いですか？」

綾那がどこからともなく蜻蛉斬り取り出し、構えながらそう尋ねる。

「あたいは通りすがりの霧雨魔理沙だけ」

「こっちは通りすがりの紅美鈴つす。」

まあ、本名は故あつて名乗れないって事で勘弁してほしいっすね」

甲斐最強の勇将・山県昌景と、越後で2番目くらいに強い猛将・柿崎景家が、歌夜と綾那に立ちほだかる。

気がつけば自称魔理沙と自称美鈴の背後から次々と兵が現れ、綾那達が率いる総勢100名の兵を5倍近い人数が、綾那達を取り囲んでいた。

「遠路遙々と来てくれたとこ。すまねーっすけど。ここでご退場願うっす」

「三河最強がどれ程のものか、試させてもらうぜ」

「確か、三河で九十郎から神道無念流を学んだ2人だったすよね。

兄弟子、弟弟子として、一つ技比べといかせてもらうっす」

自称魔理沙も、自称美鈴も、綾那達をこのまま見逃してはくれそうも無い。

「仕方ない……か……」

事ここに至つて、歌夜は腹を括り、覚悟を決め、愛刀を構え、骨身に染み込んだ神道無念流の構えを取つた。

「榊原康政、お相手いたします！」

「本多忠勝が相手なのです！」

空と名月の後継者争いの……後に御館の乱と呼ばれる戦いの帰趨を決める戦いの火蓋が切つて落とされた。

……
……
……

「お……収まった……の……」

「そのよう……で、やがるな……」

一二三の一夜城に立て籠もる湖衣と夕霧が恐る恐る顔を上げる。

憎悪と怨念で満ち溢れた小波の声が響き、暴風雨の如く降り注ぐ菩薩掌が見えると、一夜城の攻防戦はしばしの間、事実上の停戦状態になっておいた。

「湖衣、金神千里で何か分らない？」

ただ一人、あの異常としか言いようの無い御家流の連打に少しもビビらなかつた一二三が、城壁の上で仁王立ちをしながら湖衣に尋ねる。

「む、無理だよ！ あんな強烈な思念が渦巻いてる場所は視れないようっ!!」

湖衣がぶんぶんと力強く首を横に振る。

湖衣の御家流・金神千里は、簡単に言えば遠くの場所を視認する能力である。

この時代の技術力で作れるどんな望遠鏡よりも遠くを見れる上、障害物も無視できるという利点があるが、瘴気や怨念の渦巻く場所を見ようとすると、脳の神経が焼き切れて死ぬ。

「じゃあ今は視れる？　山吹色の腕はもう浮かんでいないけど」

「し、しばらくは無理だと思う。　何日か経って怨念が散つてくれないと……」

「そうか……」

一二三が一夜城への攻撃を中断し、いずこかへ立ち去ろうとする劍丞隊の姿を眺めながら、頭をフル回転させながら追撃すべきかどうかを思案する。

「なりふり構わない総退却、今孔明にしては余りにも拙速な……」

いや、戦争中ならともかく、越後後継者を決める野試合のような戦では、

あの光景を見て即座には動けないと判断したのかな？」

「行先は服部半蔵の所でやがるか？」

「たぶんそうだろうね。　殺そうと思えば殺せなくも……」

いや、無理かな、こっちの兵は大部分が第七騎兵団からの借りものだからね。

第一、それが武田の利になるかどうかとも断言できない」

口ではそう言いながらも一二三は思う……新田劍丞を殺すのは決して難しくない。

自称マスク・ザ・斎藤が思うように、劍丞を積極的に殺しに行く事で得られる情報も

あるかもしれない。

しかし、たぶん劍丞を殺す事では九十郎のトラウマは癒せない。

むしろ明確に殴れる対象を喪う事で、宙ぶらりんになってしまいうだろうと。

九十郎が劍丞を思う存分殴るまで、劍丞には生きていてもらわなければ困る。

「ああ、駄目だなあ……自分がどどん駄目になっていくのが分かる……」

あんな負け犬の目をした駄目人間の事を、甲斐よりも、武田よりも、

真田と武藤の家の事よりも、日ノ本の未来よりも先に考えるなんて……」

一二三はそんな事を考えて、恍惚とした笑みを浮かべた。

もう一度九十郎に組み伏せられたい、犯されたい、叶うものなら九十郎の児を孕みたいとすら思い始めた自分を、この上なく情けなく感じていた。

情けないと感じつつも、一二三は自分を止める事ができなかった。

「あ……鬼だ……」

そんな一二三の駄目駄目思考を後押しする大義名分が現れた。

金神千里の能力で遠隔地を偵察していた湖衣が、戦場に近づくと鬼の姿を感知したのだ。

「どうします典厩様？ この戦力で越後を滅ぼすのは無理でも、

鬼を上手く導き入れれば、相当な混乱を起こせますよ」

一二三が夕霧にそう尋ねる。

答えは半ば予想している。

夕霧が越後を滅ぼすのに鬼の力を頼る訳が無いと……

「何言つてるでやがるか。景虎を殺すのに鬼の力は使わねーでやがるよ。

決着は人間の手でつけるでやがる。そこに鬼や化外が入り込む余地はねえでやがる」

一二三の予想通りの返答があつた。

一二三は思わず、にやあくつと笑つた。

「それじゃあ、鬼を防いで思いつきり恩を着せる方針でよろしいですか?」

「ああ、そうするでやがる」

「じゃあ話は決まりだね。湖衣、鬼の進行はどこから、どつちに向かつてる?」

「う、うん! この城から見て……ここ! ここに集まつて、方向は……」

「空ちゃんの本陣近くか……」

「それと、小勢だけどこの城に向かつてるのもいて……方向と数は……」

越後に血生臭い空気が漂い始めていた。

そして……

「……あ」

「ど、どうしたの一二三ちゃん!」

一二三がある事に気がついた。

「考えてみれば、長尾景虎がこつちに来てるつて事、誰にも話してないなつて」

めなければならなくなつた瞬間であつた。

犬子と柘榴と九十郎第100話『犬子襲来』

「追撃は……してこない……か……」

劍丞が何度も何度も後ろを振り返り、一二三の一夜城の動きを確認している。

しかし、一夜城は不気味な沈黙を保ち続けていた。

「運が良かった……いえ、見逃してくれたのですね。何にせよ急ぎましょう劍丞様。」

小波さんも心配ですが、追撃が来る可能性はまだ排除できていません」

「ああ、分かった」

小波の御家流の暴走を、劍丞達もまた確認していた。

何かしらの異常事態が起きたと判断し、敵の目の前で180°ターンするのは悪手で

あると知りながら、小波達の救援に向かう事にした。

命と命を奪い合う本物の戦では自殺行為だが、あくまで後継者を決めるための戦闘である今回だけは、敵の目の前で反転が上手くいくかもしれない……咄嗟の賭けに、劍丞隊は勝った。

一夜城に立て籠もる敵が異常な事態に困惑している間に、少しでも距離を稼ぐ作戦である。

「……きやつ?!」

小波の元へ急ぐ中で、ひよ子が突然そんな声をあげた。

「ひよ子、どうしたんだ?」

「す、すいません、ちよつと犬に噛まれちゃって……」

見ると、ひよ子の脛に小さな噛み痕があつた。

野犬が数匹、脇道から顔を出し、唸り声をあげて劍丞達を睨みつけていた。

「犬について……大変じゃないか?!」 すぐに傷口を洗うんだ、あるならお酒で洗わないと」

「そんな、大袈裟ですよ」

「駄目だよ、傷は小さいけど、どんな細菌を持つてるか分からない。」

すぐに洗浄しないと傷口が化膿するかもしれないし、病気になるかもしれない」

医療知識がほぼゼロなひよ子と違い、

劍丞はサバイバル知識が無駄に豊富な周幼平に色々仕込まれたため、知っている。

野生動物に噛まれた時は、すぐに傷を洗って消毒しないと命に関わると。

「お頭、水を持ってきました! お酒も少しですけど持ってます!」

転子が飲み水として持ち歩いている水筒を何本か持って駆け寄って来た。

こつそり隠し持っていた部下から拝借した酒もある。

「お、大袈裟だなあ、本当に大丈夫なだけ……」

そうは言いながらも、ひよ子はちよつとだけ嬉しそうに笑っていた。

愛する男性である劍丞と、幼馴染であり親友でもある転子から心配されるのが嬉しかったのだ。

だがしかし……

「あ、あれ……ひよ子、なんだか……手足が、縮んで……」

「……え？」

……異様な事が起きた。

手当てをしようとする転子と劍丞の目の前で、ひよ子の手足が急激に縮んでいった。

同時に両手両足、顔や首がどんどん毛深くなつていき、全身の骨と関節ゴキゴキと音を鳴らしながら変形していく……

「ひっ……な、何なのこれ……お、お頭、助け……うああっ!？」

自分の肉体が人ではないナニカに作り替えられるという異常事態に、ひよ子が叫び声をあげる。

「ひよ子!?! お、お頭、どうすれば……」

「どうすれば……」

劍丞が咄嗟に腰に佩く剣を見る。

蘭丸と戦った事で生じた亀裂は9割消え、残った亀裂も小さく薄くなっていた。

そんな剣丞の剣が、怪異を討つ剣魂が……微かに光を帯びつつあった。

「鬼……まさか、鬼が来ているのか……？」

「鬼いつ!？」

剣丞と転子、詩乃が大きく目を見開く。

慌てて周囲を確認するも、いるのは数十匹の野犬だけで、鬼の姿は一つも無かった。

「お……かし……ら……」

「ひよっ! し、しっかりして……あ、ああ……」

それから10秒もしない内に、ひよ子は完全に犬へと変貌してしまった。

「ごめんね、ひよ子。

たぶん後で凄くすっごく怒られるし、泣かれると思うけどさ……

犬子はもう止まれないし、ひよ子を巻き込みたくもないんだ」

犬となったひよ子が1人の少女に駆け寄った。

山伏風の帽子に犬耳カチューシャ、紅葉をイメージした赤と黒のスカートに高下駄、銀髪のカツラ……見る者が見れば東方プロジェクトの犬走椛の格好だと一目で分かる姿であった。

「き……君は……？」

剣丞は東方をやった事が無いので、少女の格好が椛のコスプレだとは気づかない。

その恰好がコスプレエッチ用に作られた趣味の作品、しかも複数回使用済みだという事はもつと気づかない。

その恰好は少女にとつて、九十郎に頭が馬鹿になるくらい濃厚に愛してもらった時に恰好である事と、それを着るだけで心に勇気が湧いてくる勝負服だという事にも気づかない。

(犬走権のバストサイズには諸説あるが、九十郎は巨乳派である。)

だがしかし……

「こんにちは、劍丞様。

一応、名乗る時は通りすがりの犬走権を名乗れって言われてるんですけど……

今更自己紹介なんていらさないですよ、お互いに」

「犬子……」

劍丞には目の前の少女が前田利家・通称犬子である事が分かった。

相手が九十郎の妻である事を忘れて抱き、悲しく辛い想いをさせてしまった者である事が分かった。

彼女を抱き、彼女を泣かせ、美空を怒らせた事が、この戦いの元凶の半分なのだ。

(残りの半分は北条からの無茶ぶり)

「(目つきが普通じゃない……)」

まるでブラックホールのような、まるで虚無そのもののような、なんの感情も感じさせられない目であった。

今の犬子が普通じゃないという事がすぐに分かった。

「ひよ子が犬になったのは、君の能力……御家流なのか？」

劍丞がそう尋ねる。

犬子が劍丞を恨んでいようが、憎んでいようが、それはそれとして劍丞には自分を信じて、付き従っててくれる者達を守る義務があった。

「……ひよ子、悪いけどどこか遠くに行つてね。」

ひよ子は巻き込みたくないし、ここから先はひよ子に見せたくないから」

犬子はそうだとも言わず、違うとも言わず、まるで劍丞の声が耳に入っていないかのようにひよ子に語りかける。

ひよ子が変化した犬は、わうんと小さく悲しそうに鳴くと、いずこかへと走り去つていった。

「竹中半兵衛さんに、蜂須賀小六さん……は、別にいいかな。」

ああ、やっぱり美空様は凄いなあ、ひよ子一人だけだったよ。

ひよ子一人だけどこかへ逃がしておけば、もう誰もいない……」

犬子が値踏みをするかのように詩乃や転子に視線を向ける。

視線を向けられただけであるのに、詩乃も、転子も、

まるで天を衝くかのような巨大な猛犬に睨まれているかのような不気味な圧を感じていた。

「(な、なんなのこれ……ほ、本当にこの人、犬子さんの……?)」

転子がそんな事を考えていると……剣丞の目の前に1人の女性が音も無く降り立った。

空気が読めないのか、空気を読んでいるからこそか、運が良いのか悪いのか……その女性もまた、犬子と同じ目的でこの場に来ていた。

「新田剣丞殿」

「貴女は……?」

覆面をつけてはいたが、剣丞はその人物に見覚えがあった。

姫野や小波と一緒に情報収集をしていた、風魔忍軍の小頭の一人だ。

助けに来てくれたかと、剣丞が僅かに緊張を緩める。

「……しっ!!」

しかし次の瞬間、小頭による居合抜きが剣丞を襲った。

人体の急所である喉を狙った正確な一撃……剣丞が避けられたのは、

盲夏候さんのトンデモ脳筋ムーブに何度も何度も付き合わされたが故の、

神がかり的な危機察知能力があったが故である。
数mm程、小さな切り傷が喉にできる。

あとほんの少し身を引くのが遅ければ、間違ひなく致命傷になっていた。

「……お、おかしらあつ!? 大丈夫ですかあつ!?」

「だ、大丈夫だ、だけど……何をするんだ!?!」

「……忍びに口は不要、御命頂戴」

風魔忍軍の小頭が忍刀を構え直し、再度劍丞に斬りかかる。

今度は姫野から貰った小太刀を抜き、受け止める。

後漢末期の英雄達から直々に武術の手ほどきを受けただけあり、劍丞の劍の腕前は一線級である。

「一体何故だ!?! 期間限定だったとはいえ、味方同士の筈だろう!」

「問答無用! かかれえー! っ! っ!」

小頭の号令と共に、およそ20人ももの忍者が劍丞隊を取り囲むように現れ、一斉に劍丞目がけて飛びかかって来た。

「くっ……円陣を組み、迎撃を!」

「お頭! 下がっててください!」

詩乃が劍丞隊に指示を出し、転子が出て槍を構える。

劍丞隊の脳筋……もとい、腕つぶし担当がいなくとも、彼ら、彼女らは怯む事無く風魔忍軍に立ち向かう。

劍丞目がけて、四方八方から突進する風魔忍軍との戦いは……意外な程にあつさりと終わりを告げた。

「邪魔を……するなあっ!!」

犬子が激高し、怒鳴り声を出した。

普段の温厚な性格からは想像もできないような声であった。

その直後、劍丞隊を取り囲んでいた犬が一斉に劍丞隊と風魔忍軍に飛び掛かった。

その数は100を越え、200を越え……森の奥から、茂みの奥から、次から次へと数を増していった。

「な、何い!?!」

風魔忍軍の小頭が不意を衝かれ、襲い来る犬の1匹に噛みつかれた。

その直後……ごきりっ、ごきりっ、と全身の骨と関節が変形し、身体の造りが変わっていく、作り替えられていく……

「え……」

「い、犬に……変わった……!?!」

信じられない光景に、劍丞隊も、風魔忍軍も戦慄した。

人間が目の前で犬に変貌する光景を目の当たりにして、全員がS A N チェックを強要される。

「かかれえっ!! かかれえ、かかれえっ!!」

犬子の号令によつて犬達が猛り狂いながら剣丞隊と風魔忍軍に襲い掛かる。

がぶり、がぶり、次々と犬に咬まれる者が続出し……咬まれた者は全員、等しく風魔の小頭と同じように犬に変貌していった。

「こ、これは一体……」

「な、何ですかこれは！ どうすれば良いんですか!？」

その余りに非現実的な光景に、詩乃と転子が動揺する。

その動揺を犬子は見逃さなかつた。

「今だ、行けえっ!!」

犬子が詩乃と転子を指差し、号令する。

100を越える犬達が一齐に詩乃と転子に襲い掛かり……2人に噛みついた。

竹中半兵衛であれば、時間をかければ必ず対応策を思いつく、それ故に最初に潰す……それが犬子が必死になつて考えた作戦だ。

「う……ああ!?! か、身体が……!?!」

「ひっ!? ひゃああ!?! お、お頭、た、助け……ああっ!!」

「詩乃っ!! 転子っ!!」

劍丞の目の前で、詩乃と転子が犬へと変貌していく。

犬の軍団に襲われた事、そして自分達の指揮官が犬に変わってしまった事により、劍丞隊に大きな動揺が走る。

一二三の一夜城を攻略するため、気力と体力を消耗した事もあり、劍丞隊の戦闘能力が急速に萎えていき……当然、あつという間に襲い来る犬に咬まれ、次々と犬に変えられていった。

「ま、拙い……どうする? どうすれば……?」

劍丞がこの異常事態の中で、どうやって生き延びるかを思案する。

「火を着ける……いや、違う……高い所に寝台を作つて……」

走馬灯のように前の生での出来事が……周幼平から、野営における野生動物からの身の守り方を教わった時の事が脳裏に浮かんだ。

そして……

「皆あつ! 急いで木の上に登るんだっ!!」

咄嗟に劍丞はそう叫んだ。

そう叫んで、自らも近くにあつた大きな木の上によじ登った。

周幼平の趣味の猫カフェ巡りとボルダリングに散々付き合わされた劍丞とにとって、

木の上に登る事はそう難しい事ではなかった。

「風魔の皆さんも早く！ 木の上ならたぶん……」

木の上から1人、また1人と引つ張り上げる。

劍丞隊はもちろん、自分の命を狙ってやって来た風魔忍軍も分け隔てなく助けに行つた。

そして劍丞の予想通り、木の上に登った事で、無数の犬達による噛みつき攻撃は一切届かなくなった。

忌々しいという感じの視線が一斉に木の上の劍丞隊に向いていた。

向いていたが……どの犬も木の上まで登って追いかけてようとはしてこなかった。

「た、助かった……のか……?」

犬に追われて木の上に……微妙に恰好悪い光景ではあるが、劍丞は眼前の危機から見事に逃れていた。

「こんなに短い時間で犬子の御家流の弱点を見抜くなんて……流石ですね、劍丞様」

犬子がふうつとため息をつき、木の枝にしがみつく劍丞達を見上げる。

寒気がする程に冷たい目つきに、劍丞が思わず息を呑んだ。

「(半数……いや、3分の2くらいがやられたか……もう組織立った行動は無理か……)」
組織的抵抗力の喪失という観点から、軍団においては約40%が戦闘不能になった場

合、全滅と評価される。

劍丞隊の過半数が犬子の御家流によって犬に変えられてしまった現状、軍事学上の定義で言えば劍丞隊は全滅している。

一方、犬子に周りに控える犬の群れは、犬に変えられた劍丞隊、風魔忍軍の分だけ数を増している。

「(どうする……正面から戦っても勝ち目は薄い……

木を伝って逃げようにも、まず間違ひなく向こうの方が足が速い。

いや、犬の嗅覚を持った相手が追跡してくるんだ、逃げるのは無理か。

なら……いつそのまま、相手が諦めるまで木の上に居るか……?」

主人公らしからぬ消極的な手が劍丞の頭に過る。

実際の所、犬子は劍丞を殺す理由があるが、劍丞には犬子と戦う理由が無い。

状況が変わるまで待ち続けるのも、選択肢としてはアリであった。

しかし……

「ねえ劍丞様、このまま時間を稼ごうって考えていませんか?」

ニコニコと笑いながら、犬子が劍丞にそう問いかけた。

口元は笑っていたが、目元は一切笑っていなかった。

その笑みの恐ろしさに、そして自分の思考を言い当てられた事に対し、劍丞は寒気を

感じた。

「犬子は劍丞様を殺そうと決めた日からずっと、ずっとずっとずうずうと、

自分の御家流を使い続けて、試し続けて、観察し続けて、

そして考え続けて来たんですよ……対策、立ててないと思いましたが？」

寒気がするような笑みを浮かべながら、犬子が劍丞に問いかけた。

「劍丞様より先に詩乃さんと転子さんを咬ませて犬に変えた意味、わかりませんか？」

劍丞はさらにさらに強烈な寒気に襲われた。

嫌な予感がした、猛烈なまでの嫌な予感がしたのだ。

「噛まれた相手を犬に変える、そして犬になった者に命令する能力……

でも、犬になった人は意識を失う訳じゃないし、

犬になってた間の記憶が無くなる訳でもないんです。

ほら、こつちに来て……劍丞様から良く見える所にさ……」

「何……!？」

犬子の前に2匹の犬が歩み出る。

その2匹が誰だったのか……劍丞には分かった。

「詩乃……転子も……!？」

それは先程劍丞を庇って咬まれた転子と、逃げ遅れて咬まれた詩乃が変化した犬だっ

た。

嫁である2人をわざわざ良く見える位置に導いた意味を、劍丞は直感的に理解した。人質にする気か……と。

「さて……と……」

犬と変わった詩乃と転子に視線を下ろしながら、犬子は僅かに躊躇し、考え込む。

詩乃にも、転子にも恨みは無い。

自分が今からやろうとしている事は、何の恨みも無い詩乃と転子に地獄を見せる行為だ。

友達のひよ子や若菜、雛にやろうとしたら、良心が邪魔をして完遂できないような非道で下劣な行為だ。

だがしかし、犬子は覚悟を決めてここに来た。

非道で下劣な手を使ってでも劍丞を殺す、そう決めたのだ。

自分の誇りは、矜持は、そして愛は、あの日劍丞に抱かれた日に粉々に砕けてしまった。

その怒りを、悲しみを、苦しみを……新田劍丞に倍にして返すためにここに来たのだ。だから……

「ん〜つと……誰でも良いんだけど……君と、君、

お〇んちんをあのお〇んこにブチこんで、2人を犯して、膣内射精（なかだし）して」

犬子の命令は剣丞の想像を遥かに越えるものであった。

犬子がかつて（第58話）柘榴が言った事をしっかりと覚えていた。

犬子の御家流は拷問に使えるではないかと、女を御家流でメス犬に変え、その辺のオス犬を宛がい、膣内射精（なかだし）させれば……それはきつと身悶えする程の恥辱を与える事ができるだろうと。

犬子の命令を聞いて、指定された2匹のオス犬がゆつくりと詩乃と転子の後ろに回り、

のそりと覆いかぶさった。

「……わあうー！」

「……うおんっ！」

詩乃と転子が身をよじり、押し掛かってきたオス犬から逃れようとするも……

「抵抗するな」

犬子がそう呟くと同時に、まるでマネキン人形のように全身が硬直した。そしてオス犬達が詩乃と転子の後ろでカクカクと腰を揺さぶり始める。

「な、何をするんだっ!？」

「何って、強姦だけど」

犬子が当然の事のように答える。

「愛する夫の目の前で、他の男のモノを啜え込んで、

膣無射精（なかだし）される辛さ……教えてあげるよ」

100回記念突発ネタ企画『カミサマは言いました』

カミサマは言いました、ジャンヌandクックちゃんですと。

自己紹介にカミサマの名を使ってるんじゃないですか。

カミサマは言いました、顔だけでも覚えて帰ってくださいねと。

顔はどこにも出ねえですう！

カミサマは言いました、声だけでも覚えて帰ってくださいねと（CV佐本二厘）
声も出ねえですう！（CV姫川あいり）

カミサマは言いました、眼鏡だけでも覚えて帰ってくださいねと。

眼鏡だけ覚えさせてどうする気ですう!?

カミサマは言いました、とにかく覚えて帰ってくださいねと。

もう分かっていると思うけど、こいつがボケで、私がツツコミですう。

カミサマは言いました、私はフランス出身、こっちはイギリス出身だと。

100年も戦争続く程度の仲ですう!!

カミサマは言いました、

f a t eのジャンヌちゃんも英雄戦姫のジャンヌちゃんも全くの別人だと。

あつちのジャンヌは時々はつちやけるですけど、

こつちのジャンヌは常時はつちやけてるですう。

カミサマは言いました、f a t eにクックちゃん出ると。

出たら万歳三唱してやるですう。

たぶん先にマゼランちゃんが出るですう。

カミサマは言いました、酔キヤベツ食ってただけのマイナー英雄がf a t eに出る筈がにいと。

カミサマは言いましたってつければ何言っても許されると思ってるんじゃないですう

！

ザワークラフト以外にも色々やってたですう！

カミサマは言いました、ジャンヌちゃんマジ聖女と。

味方に見捨てられた挙句、異端認定されて焼かれた奴が何か言ってるですう。

カミサマは言いました、ナポレオンマジエンペラー。

ネルソン提督にボロ負けして、島流しにされて憤死したエンペラー（笑）ですう。

カミサマは言いました、クックって誰ですかと。

よしその喧嘩買ったですう。

カミサマは言いました、英雄戦姫やるまでジエームズ・クック何て人全然知らなかったと。

どーせ日本じゃドマイナーですよ!!

カミサマは言いました、ともあれブリテンは滅びるべきであると。

大カトーかですよっ!!

カミサマは言いました、犬子と九十郎100回達成記念のネタ企画であると。

その露骨な話題転換、嫌いじゃねーですよ。

カミサマは言いました、ぶっちやけ100回も続くとは思わなかったと。

なんやかんやで良く続いたもんですよ。

カミサマは言いました、半年くらいで話を畳んで英雄戦姫小説に戻るつもりだったと。

私ら放置されすぎですよ!

カミサマは言いました、九十郎が越後に来た時点(第29話)で話を畳むつもりだったと。

蛇足長いにも程があるですよ!

カミサマは言いました、トラウマとか、前田利家とか、

その辺が強調されたのは話の引き延ばしが決まってるからだと。

唐突に大江戸学園の話が挿入されて、

あつぱれ！天下御免やってない読者が置いてけ堀ですよ！

カミサマは言いました、ともあれブリテンは滅びるべきであると。

だから大カトーかですよ！！

カミサマは言いました、ジャンヌとクツクちゃんマジ動かし易いと。

カミサマは言いましたつてつければどんなメタ発言でも許さるですよ。

カミサマは言いました、クツクちゃんと同じ理由で夕霧は動かし易かったと。

語尾にやがるをつけて若干ツツコミ体質にすれば……つて誰がツツコミ眼鏡ですよ

！！

カミサマは言いました、クツクちゃんの語尾を『ですよ』から『やがる』に変えれば

……

そこおつ！書き分けできてねーとか言うなでやがるうっ！！

カミサマは言いました、美空様はボケもツツコミも出来るオールラウンダーだった

と。

でもナポレオンとキャラ被ってるですよ！

カミサマは言いました、

ナポレオンで描こうとしたネタを大体美空様にやらせてしまったと。

ネタ潰しも大概にしろですう！

カミサマは言いました、今後もナポレオンで描こうとしたネタをどんどん押し込むと。

後で困るのは作者ですう！

カミサマは言いました、信長の出番が極端に少ないのはワザとだと。

出番を増やせば増やす程、英雄戦姫小説で描く事が減っていくですう！

カミサマは言いました、ランスロット可愛いよランスロットと。

アイツのランスロット鼻屑はどっから来るですう。

カミサマは言いました、ぶっちやけ犬子はそのままで……

メインヒロインンンン……ツツ!!

カミサマは言いました、動かし易いのがジャンヌ、

クツクちゃん、ナポレオン、美空様、夕霧とするなら……

な、なんか嫌な予感してきましたですう……

逆に動かし難いのは、ランスロットと犬子だと。

メインヒロインンンン……ツツ!!

カミサマは言いました、正直サキユバスを出したのは失敗だったかもしれないと。

戦国恋姫の世界観ガン無視だったですう。

カミサマは言いました、だが私は謝らないと。

作者あああああーっ!!

カミサマは言いました、第87話から91話、描いてて超楽しかったと。

作者あああああーっ!!

カミサマは言いました、正直姫野に捏造設定盛り込み過ぎたと。

ほぼ別キャラですう。

何ですか小波の妹とか、改造人間とか。

カミサマは言いました、そこらへんは反省していると、次回作があったら気をつける
と。

ランスロットとガラハドに親子設定盛り込むつもりなの奴が言っても説得力ねーで
すう。

カミサマは言いました、そろそろ巻きに入ると。

信憑性ゼロですう。

カミサマは言いました、絶対に完結させると。

できたら褒めてやるですう。

カミサマは言いました、柘榴愛してると。

まあ、個人の好悪にまで文句つける気はねーですう。

カミサマは言いました、ランスロット可愛いよランスロットと。

だったら早く英雄戦姫小説進めろですう！

カミサマは言いました、前田利家も大好きだと。

うんうん。

カミサマは言いました、ぶっちゃけ犬子はそこまで……

メインヒロインンンンン……！！

カミサマは言いました、人の成長を描きたかったと。

無駄に長い蛇足はそのせいかですう。

カミサマは言いました、勝利してどうなったかよりも、

敗北してからどうするのかを描きたかったと。

だから話がどんどん長くなるですう。

カミサマは言いました、ジャンヌとクックちゃんの凌辱シーンは描いていて楽しかったと。

一度撃ち殺させろですう。

私が絞め殺してからにしてください。

カミサマは言いました、この世に許せないものが3つある、裏切らない呂布と、

裏切らない劉備と、裏切らない真田昌幸だと。

「恋姫無双シリーズ全否定ですう！」

カミサマは言いました、だから英雄戦姫の呂布も裏切らせるよと。
酷えネタバレですう！

カミサマは言いました、一二三も裏切らせるよと。

原作ファンに土下座してこいですう！

カミサマは言いました、裏切る呂布もつと増えろと。

だから恋姫無双シリーズ全否定ですう！！

カミサマは言いました、これからもどうかよろしくねと。

ここまで読んでくれた読者の皆様に、作者に代わって感謝するですう。

カミサマは言いました、ともあれブリテンは滅びるべきであると。

いい加減にしろですう！

ありがとうございます！

ありがとうございます！

犬子と柘榴と九十郎第101話 『前田利家だから出会った、前田利家だから愛されない、ただの犬子とは思われない』

「愛する夫の目の前で、他の男のモノを啜え込んで、

膾無射精（なかだし）される辛さ……教えてあげるよ」

ぞつとする程に冷たい視線を劍丞に向ける。

本気で詩乃と転子を強姦させる気だと、否応無く理解させられる。

新田劍丞への怒りと憎しみが、犬子を歪めてしまっていた。

既に彼女は正気では無い。

「それが……それが前田利家のやる事かあつ!!」

それでも、劍丞は一抹の望みをかけ、ほんの僅かでも良心が残っていると期待し、叫ぶように、祈るように問いかける。

「ふぎけないでっ!! 好きで前田利家に生まれた訳じゃないっ!!」

犬子は……犬子は前田利家になんかなりたくなかった!

前田利家として生まれなくなかった!

前田利家を辞められるのなら、犬子は何だってやってやるっ!!」

……だがしかし、劍丞の言葉は犬子の良心ではなく、逆鱗に触れた。

愛が、怒りが、悲しみが、絶望が、落胆が、自己嫌悪が、犬子の心を黒く黒く塗りつぶした。

そして残ったのは、劍丞への殺意。

「良いんですか劍丞様? そんな所で喋ってる暇なんてあるんですか?」

まだお〇んちゃんが勃起してないから、お2人のアソコには挿入されてないんですよ。

でも、あんなに密着して腰を振ってれば、すぐに勃つちやいますよ、

すぐにナカに入っちゃいますよ」

「くっ……」

劍丞が一瞬、迷う。

正面から戦っても勝ち目は無い、木の上から降りたら間違ひなくやられる。

しかし……今の犬子は言葉だけで止まらない事も理解できた。

降りて戦うか、このまま様子を見るか……劍丞は一瞬、迷った。

「あ……」

その時、詩乃と目が合った。

言葉は無かったが、劍丞にはその目が何を訴えていたか、直感的に分かった。覚悟の目であった。

その目が意味する事はたった一つ……『降りて来るな』だ。

「……一瞬でもこのままやり過ぐそうなんて考えた自分を殴つてやりたい」

劍丞はふうつとため息をつき、姫野から貰った小太刀を握りしめる。

無理無茶無謀は承知の上だ。

だがしかし……

「嫁の1人や2人守れない男に……天下をどうこうできる訳が無いだろうっ!!」

枝のしなりを利用して、水泳の飛び込みのように大きく跳躍した。

飛び込む先は……当然、犬子の喉元。

「2人を離せえっ!!」

「この期に及んで峰打ちでえっ!!」

飛び降りの勢いを利用した劍丞の一撃を、犬子は手にした太刀……かつて壬月が犬子に贈り、かつて犬子が拾阿弥を斬った太刀で受け流す。

最初から殺すつもりで斬りかかっていけば、あるいは勝負を決めれたかもしれないが、劍丞は殺すためではなく、あくまでも制圧するために小太刀を振るう。

「とにかく接近して、周囲の犬に命令を出す隙を与えなければ……」

そんな事を考えながら、劍丞は姫野の小太刀を力任せに何度も何度も叩きつける。

犬子はそんな劍丞の攻撃を冷静に躲していく……一進一退の攻防がしばらくの間続いた。

一回でも咬まれたらそこで終わり……故に、犬子の周囲を固める無数の犬が動き出せば劍丞は圧倒的に不利だ。

劍丞はか細い勝利への道筋を丁寧に追いかけていた。

しかし……

「……きやううっ!!」

犬の姿に変えられた転子が悲痛な鳴き声を出した。

劍丞の注意が一瞬だけ犬子から外れた。

「半勃ちって所かなあ……そろそろ本当に挿入っちゃいそうですねえ、劍丞様」

犬子が挑発する。

安っぽい挑発だ、普段の劍丞なら何も感じない安い安い挑発だ……だがしかし、愛する妻が目の前で犯されそうになっている中で、冷静に戦える程、劍丞は冷徹では無かつた。

「や・め・ろおおおおおーっ!!」

劍丞が叫ぶ。

詩乃と転子を犯そうとしているオス犬も、犬子の御家流で犬に変えられ、操られているだけだと理解している。

叫んだところで止まってはくれないとも理解している。

だがしかし、劍丞は叫ばずにはいられなかった。

「……襲えっ！」

直後、無慈悲な死刑宣告が劍丞の耳に届く。

犬子の傍に控えていた犬が劍丞に飛び掛かる。

「同時に3匹……拙い、避けられ……な……」

左右と真後ろから同時に襲ってくるのが分かる。

後漢末期の英雄達と何度も何度も手合わせをしたからこそ分かる……避けられないと。

「間に合えええええーっ!!」

しかし、犬の牙が劍丞に届く事は無かった。

高速で飛来した苦無が劍丞を襲った3匹の犬の眉間に深々と突き刺さり、瞬時に絶命させたのだ。

「全く、小波もアンタも、目を離すとすぐ死にそうになるし。危なっかしいったらないし。」

やっぱりこの姫野様が守ってやらなきやどうしようもないみたいだし」

「ご主人様！ 御無事ですか！」

苦無を投げ、劍丞を助けたのは、姫野と小波であった。

「小波!? それに姫野まで!？」

「何それ? こういう時は助けてくれてありがとうだし。」

主従揃って礼儀つてのがなつてねーし」

「話は後だ! そのこの2匹を連れてここから離れてくれ!」

「そのこの2匹……つて、あそのこのサカつてる犬の事? 劍丞、頭大丈夫だし?」

「詩乃と転子なんだ! 犬に噛まれると犬に変えられてしまうんだ!」

「……マジ?」

「そ、そんな……」

今一状況を理解し切れない姫野と小波の目の前で、先程苦無が突き刺さり、絶命した犬に異変が起きる。

ごきりつ、ごきりつ、と奇怪な音をたてながら骨や関節が變形し、全身の毛がどんどん短くなり、手足はどんどん長くなり……数秒もない内に、全裸の若い男女の遺体へと変わってしまう。

何より、姫野と小波、そして劍丞を戦慄させたのは、その遺体の顔に見覚えがあつた

からだ。

「こいつ……確か、劍丞隊の……」

「風魔忍軍も……まさか、本当に犬に変えられて……」

「まさか姫野と同じ能力……?」

1人は劍丞と共に一二三の一夜城攻略戦に参加していた劍丞隊の下つ端だった。

2人は劍丞を姫野の部下、風魔忍軍の下忍であった。

嫌が応にも信じざるを得ない……本当に人間が犬に変えられたのだと。

「2人を助けてくれ! もう時間が無い! 早く!」

「しかし御主人様は!」

「俺は良い! 早くしてくれ!」

「ああもうつ! 良く分かんねーけど分かったし!!」

姫野が再び苦無を投擲、詩乃と転子に伸し掛かり、犯そうとしていた2匹のオス犬を殺害する。

「ごきりつ、ごきりつ、と音をたて、オス犬2匹が人間の……つい先ほどまで劍丞の隣で戦っていた、劍丞隊の兵卒2人の姿に戻る。

「小波、姫野、2人と一緒に木の上に登れるか?」

木の上に登れば周りの犬は手出しできない!」

「余裕だし、風魔小太郎ナメンだし」

「急ぐぞ、姫野！」

小波が御家流の連続使用により消耗した身体を押して、転子を抱え上げる。

姫野も犬になった詩乃を捕まえ、一気に木の上まで跳躍した。

「劍丞！ 2人は確保したし！」

「ご主人様！ 早くこちらに」

「分かっている！ 分かっているが……」

劍丞ももう一度木の上に登ろうとするが……

「させないよっ！」

「……くうっ!!」

犬子が太刀を構えて斬りかかり、劍丞の前に立ちはだかる。

ほぼ同時に犬子が支配する犬達もまた劍丞に襲い掛かっていく。

「劍丞！」

「ご主人様！」

姫野と小波が木の上から苦無や手裏剣を投げ、劍丞を襲おうとした犬をあの世へ送つ

た。

「ああもうっ！ 何すつトロイ事やってるし！ 早く登ってくるし！」

「くうつ、そんな事を言われても……」

劍丞の元に多数の犬が殺到していた。

絶対に木の上には登らせまいと、二重三重の包圍網が敷かれ、一瞬の猶予も与えない波状攻撃が繰り返されていた。

姫野と小波の援護もあつて、今はどうにか避け切っているが……劍丞の集中力も、姫野と小波の武器も無限ではない。

そう遠くない内に破綻する事は確実である。

「じゃあないか……小波、劍丞に鉤繩を投げて！

こうなったら2人で引つ張り上げるしかねーし！」

「わ、分かった！ 御主人様！」

小波が鉤繩を……崖や城壁を登攀する際に使う、フック付きの頑丈なロープを劍丞に投げる。

「劍丞！ それに捕まるし！」

「すまん！」

無数の犬に襲われる劍丞が、どうにか隙を見つけ出して鉤繩を自分の身体に巻き付ける。

「小波！ せえので行くし！」

「良し……せえの!!」

姫野と小波が劍丞に巻き付いた鉤縄を思い切り引つ張り……

「い・ま・だあああああーっ!!」

……瞬間、犬子が咆哮し、大きく大きく跳躍した。

空中でくるくると回転しながら御家流を自らに使用し、自身の肉体を人間のものから犬のものへと変貌させる。

その鋭い牙の狙いは劍丞……ではなく、鉤縄を両腕で掴み、全力で引つ張っているが故に身動きのとれない、小波の方であった。

「……何っ!？」

犬子が犬に変わった事、安全と思っていた木の上まで跳躍した事……予想外の出来事が起こり、小波の対応が一瞬遅れる。

「小波! 危ない!」

その牙が小波に届くより一瞬早く、姫野が割って入る。

直後、がりつと……犬子の牙が姫野の左手に突き刺さった。

「姫野おっ!？」

「姫野!？」

劍丞と小波の目が大きく見開かれる。

そして……

「……自切っ!!」

その直後、2人の目の前で姫野の左手首から先が宙に飛んだ。

犬子の顎力によって咬み千切られたのではない。

姫野が自ら斬り落としたのだ。

「はっ、どんな毒使ってるか知らねーけど、周りの肉ごと斬って捨てちまえば関係ねーし」

姫野が勝ち誇った顔で、左手首と共に落下していく犬子を見下した。

元々、姫野の両手両足は野生動物の組織を分解して繋ぎ合わせて作った物だ。

後で身体の部品を付け替える事が出来る姫野にとって、トカゲの尻尾切りのように左手を自切する事はいえぬ選択肢では無いのだ。

しかもどんな方法によるものか劍丞にも小波にも分からなかったが、切断面からの出血は少しにじむ程度の僅かなものであった。

「劍丞! こっちは問題ねーし! 早く登ってくるし!」

「わ、分かった」

姫野に促され、劍丞が慌てて鉤縄を支えに木の上によじ登ろうとする。

姫野と小波が2人で鉤縄を支え、劍丞を全力引っ張り上げようとする。

しかし……

「……うわっ!？」

急に鉤縄の支えが無くなり、登攀中の劍丞が尻もちをつく。

何事かと上を見上げると……姫野がうずくまっていた。

「な、なん……で……」

「ごきりっ、ごきりっ……と、姫野の全身の関節が変形していく。

両手両足が縮み、全身がどんどん毛深くなっていく。

「ど、毒じゃない……うああ!？」と、止まらな……あがあっ!」

劍丞と小波の目の前で、姫野の身体がどんどん犬に変貌していく……

「……の……ど、呑牛……う……ああ……」

そしてついに姫野は完全に犬に変わり、枝の上から落下していった。

「姫野っ!」

落下した衝撃で姫野が気絶し、ぴくりとも動かなくなる。

「劍丞様! 早く上がってください!」

切り替えが早い小波は、姫野がやられた事をすっぱりと割り切り、劍丞を引っ張り上

げようと鉤縄を引っ張る。

しかし、第七騎兵团との戦いや、御家流の連続使用の影響で消耗している今の小波では、劍丞を持ち上げるだけの力が出ない……

「させない……襲ええっ!!」

犬子が着地と同時に人の姿に戻り、再び犬達に劍丞を襲わせる。

「くう……」の……

やむなく劍丞は鉤縄を外し、大きく前転するように跳んで回避する。

襲い掛かって来た犬は躲せたが、近くに木が無い場所で、周囲を取り囲まれてしまった。

「ご主人様あっ!!」

「俺は大丈夫だ! それより姫野を!」

劍丞が必死にそう叫ぶ。

叫ぶが……誰がどう見ても大丈夫ではない。

劍丞は100匹を超える数の犬に完全に包囲されていた。

小波が木の上から手裏剣を投げて援護してもなお、逃げられない、防ぎ切れない数に囲まれていた。

「劍丞様……覚悟おっ!!」

犬子の号令と同時に、四方八方から犬が飛び掛かる。

劍丞の腕、足、腹、胴体……複数の方向から複数の場所を狙った牙が迫る。

そのうち一本でも劍丞の身体に食い込めば、成す術も無く犬に変えられてしまう……

「ご主人様あああああーっ!!」

小波は跳んだ。

劍丞を救うべく、安全地帯である木の上から飛び降りた。

「(さつき姫野は、確かに『呑牛』と言った……もし……

もしもこの御家流が、飛び加藤の呑牛の術と似ているのであれば……あるいは……)」

確信がある訳ではない。

姫野の言葉が、小波の想像した通りの意味である保証は無いし、そもそも姫野が勘違

いや読み違いをしている可能性もあった。

だがしかし、僅かな可能性でも、不確かな理屈でも、愛する主人である新田劍丞を助

けられる可能性がある限り、賭けずにはいられず、縋らずにはいられなかった。

「御主人様！ 下がって！」

そして次の瞬間、今度は小波が劍丞を庇い、犬子が操る犬の牙を突き立てられていた。

「そ、そんな……小波まで……」

「やった！ 後は劍丞様だけで……」

劍丞の目に絶望が宿る。

同時に、犬子が勝利を確信する。

後は小波を人質にしてしまえばどうにでもなると思った。

しかし……

「私は……私はあつ！ 服部半蔵正成だあああーっ!!」

裂帛の氣勢と共に、小波が忍刀を振るい、周囲の犬の首を次々と斬り落とした。

10匹殺し……20匹殺し……30匹殺し……二重三重に張り巡らされた劍丞包囲網が徐々に綻びを見せ始める。

そして奇妙な事に、どれだけ待っても小波の身体が犬に変わる気配が無い。

「小波、一体どうして……」

「催眠術です！ 御主人様！」

「催眠術?!」

「自分は人間ではないと強く強く思い込ませているんです！」

噛みつくのを引き金にして、そういう暗示をかけるのが犬子さんの御家流です！

だから腕を斬り落としても防げなかった！ だから姫野は吞牛に似ていると言った

！

だから私には効かなかった！」

「わ、私も知らない……弱点を……!?!」

この土壇場で使用者すら知らなかった弱点を見つけ出され、犬子が大きく動揺する。

「どうして……どうしてそんなに前田利家である事を嫌う？」

「え……？」

動揺する犬子に対し、小波がそう問いかける。

「瞞まれた瞬間、お前の想いが……強い感情が私に触れた。

前田利家である事が憎い、前田利家なんか生まれなければ良かった、

前田利家を辞めてしまいたい……そんな感情が私に触れた」

「うるさい……」

犬子の顔が醜く歪む。

怒り、憎しみ、悲しみ、後悔、自己嫌悪、殺意……どす黒い感情が次から次へと溢れ

ていく。

「本当に……お前が前田利家をやめれば、

前田利家でなくなれば、斎藤九十郎はお前を愛するののか？」

「うるさあああああーいっ!!」

犬子が激昂する。

犬子が激昂し、喉が裂けんばかりに叫ぶ。

小波には分かっていた。

怒り、憎しみ、悲しみ、後悔、自己嫌悪、殺意……犬子を覆いつくすありとあらゆる
どす黒い感情の根底にあるものは、斉藤九十郎から愛されたいという欲求からくるのだ
と。

前田利家だから出会った。

前田利家だから愛されない。

ただの犬子とは思われない。

それが犬子の絶望であつた。

そしてそれは……

「だとすれば、犬子がそうなつた原因は、たぶん俺にあるんだろうな」

そしてそれは……その絶望を根本的に取り払うためには、新田劍丞でもなく、服部半
蔵でもなく、斉藤九十郎が必要である事を意味した。

そして今、犬子や劍丞達の前に、何故か雫を肩車で運んでいる斎藤九十郎がいた。

そしてそれは……その絶望を根本的に取り払うためには、新田劍丞でもなく、服部半
蔵でもなく、斉藤九十郎が必要である事を意味した。

そして今、犬子や劍丞達の前に、何故か雫を肩車で運んでいる斎藤九十郎がいた。

「九十郎?! 雫まで?!」

「な、なん……で……?」

劍丞と犬子が大きく目を見開いた。

犬子も、劍丞も、雫と九十郎が空陣營の本陣に控えているという情報を掴んでいたし、空陣營の本陣から兵が出たかどうかは常に注意を払っていた。

雫と九十郎がこの場に突然現れるなんてありえないと思った。

「何でって、劍丞を殴るために決まってるだろ」

九十郎がキョトンとした表情でそう答える。

生徒同士のチャンバラが日常的に発生する魔境大江戸学園で育った九十郎にとつて、気に入らない事が起きたらポン刀片手に殴り込みというのは自然な発想であった。

要約すると、戦争のドサクサ紛れに単騎で突撃してぶちのめそうぜ作戦である。

「私はこの戦の総仕上げに詩乃さんに蹴りを入れて勝利宣言するために……」

なんですけど、詩乃さんがいませんね」

そして戦国時代生まれの人間では……特に軍師としての生き方を選んだ者にとつては発想し難いそのトンデモ作戦に、雫と一二三は乗った。

この戦いは空と名月がどちらが国主を継ぐ者として相応しいかを決める戦いであるが、同時に劍丞と九十郎が男としてどちらが格上かを決める戦いでもある。

どうせなら九十郎の発想を混ぜ込んだ作戦で戦い、勝ちたいという思いがあった。

それ故に雫と一二三は、九十郎の殴り込みの成功率が少しでも上がるよう、

その知恵を絞りに絞った。

一二三は一夜城作戦をパクリ、近くにいた湖衣と夕霧を巻き込んだ。

雫は詩乃の作戦を読み切り、柘榴や粉雪、信虎の隊を配置に気を配り、可能な限り劍丞の守りが薄くなるように仕向けた。

そして劍丞の守りが薄くなった瞬間を狙って襲撃してきた犬子とハチ合わせたのだ。

「詩乃さんならあつちでミノムシみたいにぶら下がってるよ。」

蹴りたいならどうぞ、蹴ったら回れ右して帰ってくれない？」

犬子が指差す先には、再度人質にされるのを防ぐため、縄で縛られたまま木の枝からぶらくんと下がっている2匹の犬がいた。

忍者は素早く敵を無力化するため、瞬時に相手の身動きをとれなくさせる縄の結び方を知っているのだ。

「やめておきます。私は詩乃さんを思い切り蹴つとばして、

愛菜さんのようなドヤ顔で勝利宣言するために来たのですから。

犬になって身動きの取れない人を蹴つても、後味悪いだけでしよう」

「そこにいられると、巻き込んだんじやいそうなんだけど」

自分は絶対に劍丞を殺す。

時と場合によっては雫を巻き込む事も辞さない……犬子の視線はそう語っていた。

「ああ、その事なんだけどな、犬子……」

「ああ、その事ですけど、犬子さん……」

雫と九十郎の声が重なる、視線が交差する。

お互い、今から言う事が何なのか理解していた。

お互い、これから何をやるうとしているのかを理解していた。

だからこそ九十郎、柘榴でも、粉雪でも、一二三でもなく、雫を共に行動する相手に選んだのだから。

「剣丞は殺させねえ」

「剣丞様を死なせはしません」

雫と九十郎がまつすぐ犬子を睨みつけながら、ハッキリとそう宣言する。

それは剣丞を殺すためにここに来た犬子と真つ向から対立するという事だ。

「なん……で……」

犬子が震える。

信じられない、信じたくない……そんな想いが犬子を包む。

「剣丞は主人公なんだ……てのは、理由になってねえって、この間美空に怒られた。

別の言葉で説明するのは、中々難しいんだよな」

そう言いながら九十郎は、チラリと背後の剣丞に視線を移した。

美形だ、男同士だと言うのにうっとり見とれてしまいたいような美形だ。THE・ブ男の自分とは大違いだと九十郎は思った。

そして思った、綺麗に棲んだ、真つすぐな瞳だと。

戦国時代の英雄達が揃って惚れるのも無理もないかと……

その目の輝きが、かつて九十郎を負かして、九十郎が密かに惚れていた長谷河平良と男女の仲になった秋月八雲を思い出させた。

かつて秋月八雲は、大江戸学園を揺るがす巨大な陰謀に立ち向かい、打ち勝った。多くの人々を惹きつけ、力を合わせ、大きな大きなうねりを生み出した。

秋月八雲と同じ目の輝きをしている剣丞ならば……あるいは……

「俺はな、剣丞が乱世を終わらせてくれんじやねえかと思ってる。

右を見ても左を見ても屑しかいねえ、年がら年中殺して奪つてを繰り返してる、糞みてえな世の中を変えてくれるんじやねえかと思ってる」

長い長い思考の果て、意を決して九十郎は犬子に告げる。

それを聞いて犬子は……泣いた。

「なんで……なん、で……なんでさ……」

九十郎達の前で、ぽろぽろと大粒の涙を流し始めた。

「犬子の事はどうでも良いの!? 犬子の事は愛していないの!?

犬子は……犬子が前田利家だから!? だから……だから……」

それは犬子の慟哭だ。

心が張り裂けんばかりの嘆きと悲しみの叫びであった。

「犬子は劍丞様を憎んではいけないのっ!!」

怒り、憎しみ、悲しみ、絶望……犬子の胸中を様々な感情が渦巻いて、犬子の心をぐしゃぐしゃに粉碎していった。

「だがな犬子、お前が一番憎んでいる相手は、劍丞じゃねえような気がするんだよ」

「なんでっ!？」

「憎んで、殺そうとしてる相手に『様』はつけねえだろ、普通」

犬子が押し黙る、黙り込んでしまう。

九十郎の言った通り、犬子が本当に憎んでいるのは、嫌っているのは劍丞ではない……本当に憎んで、嫌って、殺してしまいたいと思っっているのは、自分自身なのだ。

「犬子は……犬子は……あの日、あの時……九十郎を忘れた……忘れただけなんだよ

……

心の底から劍丞様を恰好良いと思って、素敵な男性だと思って、

この人がきつと乱世を終わらせてくれると思って……

す、好きになって……あ、愛して……自分から身体を開いて……そのまま最後まで

……」

出会う順番が違えば、自分はきつと……いや、間違い無く新田劍丞を好きになつていた。

心の底から劍丞に惚れ抜いて、九十郎には見向きもしないと確信できた。だからこそ犬子は辛くて、悲しいのだ。

「犬子は……犬子は九十郎に愛される資格なんて無い……」

九十郎に愛される筈……無いんだよ……」

「そんな事は無い。愛してるぞ、犬子」

そんな犬子の絶望を笑い飛ばすかのように、九十郎はそう告げた。

「嘘っ!! 嘘だよっ!! 犬子は前田利家だから……」

「前田利家でも愛してるってんだよっ!」

九十郎が真正面から言い返す。

その言葉は、恐怖に震える美空を見て、上杉謙信のような歴史上の偉人であろうとも恐怖し、悲しみ、そして人を愛するのだと……同じ人間なのだと理解したからこそ言える言葉だ。

少し前の九十郎であれば、絶対に言えない言葉でもあった。

「嘘……だよね……」

信じられない、だけど信じた……そんな相反する感情が犬子の中で渦巻く。

「劍丞、この戦い、俺に代われ」

「え？」

若干蚊帳の外だった所に急に話が振られ、劍丞が微妙に狼狽える。

「横からしやしやり出てくるみてえで少し心が痛むが、この戦いの続き、俺にやらせてくれ」

「いや、俺にとって……」

「多分これは、俺がやらなきゃならない事だからな」

そう言つて九十郎は雫と一緒に背負つていた袋から一本の竹刀を取り出し、構える。

その構えは犬子にとつても馴染みの深い、神道無念流の構えであつた。

その目が、その構えが、九十郎の強い戦意を感じさせられる。

「分かつた、頼んだ」

こうなつてはもう自分では足手纏いだし、この戦いに介入する資格も無いと悟ると、劍丞は迷わず九十郎に後を頼んだ。

雫も、小波も、何も言わずに少し離れ、2人の戦いを見守る姿勢になつた。

「おしおきだ、犬子」

「そこをどいて、九十郎……どかないなら、九十郎でも……」

犬子が太刀を構え直す。

その構えもまた、九十郎が教えた神道無念流の構えであった。

「悪いがどけねえよ、劍丞は絶対に殺させねえ」

「犬子を愛してるなら、そこをどいて。」

犬子は……犬子はもう、収まりがつかないんだよ、劍丞様を殺さない限り」

「殺せばもつと引つ込みがつかなくなる。」

あの時……由比の奴が大江戸学園でクーデターみてえな事をしでかした時、

俺のファースト幼馴染は最初から最後まで関わろうとしなかった。

自分が動いたら間違ひ無く死人が出るからつてな」

「そんな理屈じゃ！ 犬子はもう止まれないんだよおつ!!」

「だつたらかかつて来い！ 相手が俺だろうと遠慮はすんな！

全力で戦つて、俺を倒して本懐を遂げろ！ まあ、負けんがな」

「犬子は、犬子は……」

「俺は……」

犬子と九十郎が睨み合い、各々の得物を強く強く握りしめる……

「九十郎を倒して！ 劍丞様を殺すつ!!」

「お前を倒して！ 劍丞を殴るつ!!」

劍丞は昔見た映画のセリフを思い出した……『勝った方が我々の敵になるだけです』。

犬子と柘榴と九十郎第102話 『決着の時』

「犬子は、犬子は……」

「俺は……」

犬子と九十郎が睨み合い、各々の得物を強く強く握りしめる……

「九十郎を倒して！ 劍丞様を殺すっ!!」

「お前を倒して！ 劍丞を殴るっ!!」

劍丞は昔見た映画のセリフを思い出した……『勝った方が我々の敵になるだけです』。

「う……うわあああああーっ!!」

犬子が叫び声をあげながら九十郎に飛び掛かる。

竹を束ねた棒きれの1つや2つ、簡単に両断……しようとしたが、奇妙な手ごたえと

共に犬子の斬撃は受け止められた。

「……鉄芯入り!？」

「劍丞がトチ狂って真剣で斬りかかって来た時用の備えだよ！

役に立つとは思ってなかったが！」

九十郎がぶおんっ！ と大きな風切り音と共に竹刀を振り抜く。

犬子はそれを間一髪の所で身体を振じり、回避する。

「くっ……うっ……」

2人の戦いは、次第次第に犬子の防戦一方になっていった。

今現在における犬子と九十郎の剣の腕前はほぼ互角。

しかし、犬子は九十郎の急所を狙わない、狙えないのに対し、九十郎は容赦無く、躊躇無く犬子の脳天を狙い、気絶させるつもりで竹刀を振っていた。

仮にも自分の妻を本気でブン殴ろうとするとは、見下げ果てた男である。

「官兵衛えっ！」

「は、はいっ！」

そんな犬子の様子を見て、九十郎は雫に合図を送る。

雫はすぐさま九十郎と同じく背負っていた袋から竹刀を取り出し、犬子に向かって放り投げた。

「そいつを使え犬子！ その方が遠慮無くイケるだろ？」

「ば……馬鹿にしてえっ!!」

やや釈然としない思いをしながらも、犬子は太刀を鞘に納め、近くに転がって来た竹刀を拾いあげる。

練兵館で何度も何度も振るっていた、使い慣れた得物が犬子の手に入った。

「たあああああつ!!」

「うおおつ!!」

竹刀と竹刀がぶつかり合う。

力と技がぶつかり合う。

神道無念流の使い手と、神道無念流の使い手が、己の信念をぶつけ合う……

「劍丞様が……劍丞様さえっ! いなければあつ!!」

竹刀を振るいながら、犬子は自分に言い聞かせるかのように叫ぶ。

視界が涙で滲み、それが劍筋を僅かに揺るがせていた。

「劍丞様がいなければ! 犬子はこんなに苦しくないのに!」

「本当かよ?」

「そうだよ! だから九十郎! 邪魔をしないでっ!!」

「俺はむしろ……劍丞よりも、むしろ俺がお前を苦しめてるように思えるんだがな……」

「犬子は……犬子は……うわあああああーっ!!」

自分の感情の赴くままに竹刀を振り回す。

神道無念流の型と技に沿った戦い方が、まるで素人のやけくそ戦法のようになってい

く……

「本当に……ああ、本当に俺は、今まで一度も犬子に向き合ってなかった」

軽い自己嫌悪の眩きと共に、九十郎が犬子の攻撃を受け止め、受け流し、躲していく。犬子と九十郎の現在の實力はほぼ同等……しかし、犬子の精神状態が技の冴えを鈍らせ、

戦いは少しずつ、少しずつ九十郎の優位に進んでいく。

このまま押し切れるか……剣丞達がそう思った、その時。

「……御家流も使えよ、犬子」

「えっ?」

犬子にとつても、剣丞にとつても、雫にとつても予想外の事を、九十郎は言い出した。「持つてるものは全部使え、全部使つて俺と戦え。」

俺を倒して剣丞を殺したいんだらう? 俺に変な遠慮して、変に手を抜いて、それで負けたら諦めつくのかよ? 大人しく引き下がれるのかよ?」

「でも……」

犬子が躊躇する。

犬子には分かっている、九十郎に犬子の御家流に対抗するような技は無いと。

もしも犬子がなすり構わず、御家流を含めて戦えば、あつという間に犬子が勝ってしまうと。

そう、勝てるのだ、勝ってしまう……勝ってしまうのだ、犬子が九十郎に。

犬子はその事に対し、何か説明の難しい複雑な想いを抱いていた。

「私は、本当は……」

犬子が自分の胸を抑え、跳ね回る心臓を抑え、次から次へと流れ落ちる額の汗を拭う。
「言っておくが、勝つのは俺だぞ」

九十郎は懐から鉄製の爪を取り出し、左手に装備した。

少なくとも犬子にとって、まるでウォーズマンのベアクローのような武具を見たのは初めての事だ。

「神道無念流に、爪を使う技は無かったよね」

「神道無念流とは無関係に編み出した必殺技だよ。この俺に一度見た御家流は通じん。」

嘘だと思ふなら……やってみろ犬子、御家流を使つてかかって来い」

「でも……」

犬子はそれでも躊躇する様子を見せると……

「犬子、俺が信じられないのか？ 俺は勝つ、お前にも、劍丞にも。」

信じろ、信じてくれ。俺はお前を倒し、劍丞もブチのめす」

九十郎は真つすぐ犬子を見つめながらそう断言した。

実をいえば九十郎には、自分が劍丞に勝てるかどうか全然分からなかった。

『やってみなければ分からないわ、九十郎』

そんな美空の励ましを支えに、なけなしの勇気を振り絞っていた。

「いや、こう言うべきだな……頼む犬子、俺を信じてくれ。」

俺が勝つ、俺が必ず勝つと信じてくれ、頼む」

犬子は、そんな九十郎の心境を察する事はできなかつたが……

「九十郎……行くよ！」

全部をぶつけよう。

自分が持っているもの全てを使って、九十郎と戦おう。

九十郎を信じよう。

犬子はそんな決意と共に、精神を深く深く集中させる。

「襲ええええええーっ!!」

瞬間、犬子の周りに控えていた犬達が一斉に牙を剥き、九十郎に飛び掛かった。

「なんとおとおおおおーっ!!」

どこぞのニュータイプのような叫び声と共に、九十郎が襲い掛かる犬達に竹刀を叩きつける。

1匹や2匹であればそれで捌ける。

劍丞にも同じ事ができる。

しかし、犬子の御家流の恐ろしい所は、1000以上の犬の群れに対し、一瞬にて命令を伝達できる事にある。

恐るべき俊敏さと執念深さを併せ持つ猛犬が、何重にも九十郎を包囲して、休む間もない波状攻撃を浴びせ続ける。

「駄目だ……あれは防ぎ切れない……」

劍丞には分かる、分かってしまう。

もう九十郎にはどうする事も出来ない。

九十郎は優れた剣士であつたが、それでも1000を越える猛犬による波状攻撃を凌ぎ切る事はできない。

服部半蔵のような優れた忍者でも、柴田勝家のような猛将でも難しい。

そして1度でもその牙を突き立てられれば、そのまま犬にされ、支配されてしまうのだ。

「と……くうっ！ い、意外とキツイなおい……」

九十郎が耐える、耐える、耐える……しかし、犬子との距離は一向に縮まらない。

犬子が支配する犬の猛攻に晒され続ける。

「九十郎……これだえ!!」

そしてついに、破綻の時が訪れた。

犬子が支配する犬の1匹が、九十郎の片足に噛みついたのだ。

「勝った！ か、勝っちゃった……」

その瞬間、犬子は自らの勝利を確信する。

僅かな未練と後悔を振り払い、九十郎を犬に変え、どこか遠くへ逃がそうと精神を集中させる。

次の瞬間……

「変移抜刀・がらすきい」

ぎぎぎぎぎぎいいいいいゝゝゝゝつ!! と、不快な音が全員の耳に届いた。

劍丞と小波は、一瞬鬼の雄叫びかと身構えたが……何の事は無い、九十郎が懐から取り出した小さなガラス板を思い切り引つ掻いただけだ。

「斎藤キツク!!」

「へぶうつ!!」

突如として響いた不快な音に困惑し、一瞬犬子と配下の犬達が硬直した隙を九十郎は見逃さない。

全力でダツシュし、一直線に距離を詰め、犬子の顔面に強烈な跳び蹴りを見舞った。鼻の骨が砕けそうな程の衝撃を受け、犬子が転がりながら悶絶する。

それにしても、仮にも自分の嫁の顔面に蹴りを入れるとは、見下げ果てた男である。

「あの包圍網を抜けた!？」

「で、ですが嘯まれてしまいました、もうじき犬に……」

劍丞と小波が固唾を飲み、これから九十郎がどうするのかを見守る。

九十郎は倒れた犬子にトドメを刺さず、追撃すらせずに佇んだままだ。

しかし……

「犬に……変わらない……!？」

何秒経とうが、九十郎の肉体は変化しない。

その驚愕の光景に、劍丞も小波も大きく目を見開いた。

「う……く……このおっ!!」

犬子が激高し、さつきよりも強い念波を周圍に発する。

ほぼ同時に硬直していた犬が再び九十郎を襲い始める。

しかし九十郎は、今度は避けもせず、真つすぐ犬子に突進した。

がぶり、がぶりつ、と複数の牙が九十郎に突き立てられる。

「今度こそおっ!!」

「変移抜刀・がらすきい」

ぎぎぎぎぎぎいいいいいゝゝゝゝつ!! と、不快な音が再度全員の耳に届いた。

「齋藤キツク!!」

「ぶべっ!!」

再び犬子の顔面に強烈な跳び蹴りを見舞う。

バッファローマンのような体格の大男に蹴られ、犬子はヒロインが決してしてはいけない顔と声と共に吹っ飛んだ。

そしてまたもや、劍丞は犬に変わる様子が無い。

「なんで……なんでっ!!? なんでっ!!? なんでえっ!!?」

「長所と短所は表裏一体、ままならねえもんなんだよ」

今まで、犬子が支配した犬に噛まれた生物は皆等しく犬に変わった。

1人の例外も無く……いや、小波を除けば全員犬に変化した。

そして今、九十郎も犬に変化しなかった。

訳の分からない状況に、犬子が混乱し、困惑し、泣き叫びながら周囲の犬に命令を出す。

だが……

「う……く……く……」

視界が歪む、足元がふらつく、頭がぐらぐらと震え、割れるような激痛が走る。

脳震盪の症状だ。

「超能力者は、脳震盪を起こすとしばらくの間超能力を使えなくなる。

糞ニートから聞いていなかったのか？ 超能力者の弱点だよ」

「そん………な………な、なんで………」

周囲の犬に命令を出そうと精神を集中させようとすると、

頭がくらくらして思考が定まらない、精神が集中できない。

当然、犬子の支配下にあった犬達はその場で佇んだままであった。

バファローマンのような体格の大男に2度も頭を蹴られたのだ、精神を集中させる事が困難になる程のダメージがある。

それを狙って、九十郎は犬子の頭を狙って攻撃を仕掛けたのだ。

「なんで………なんで、犬に、ならないの………？」

「変移抜刀・がらすきい。 井伊の糞女に吠え面かかせるために編み出した、

フアースト幼馴染しか知らない俺の切り札だ。

精神を集中させる瞬間を狙って、集中をかき乱す音を聞かせて超能力を封じる。

100%確実に成功させれる訳じゃねえし、

初見の能力にはタイミングを合わせられねえのが難点だがな」

「そ、そんな………」

そう聞かされ犬子は、御家流を使えと言ったのがこちらに対する配慮ではなく、むしろ戦いを有利に進めるための策だと気づかされる。

自分の御家流を防ぐ自信があつたが故に、あえて御家流を使わせ、つけ入る隙を作らせたのだと。

「敵わないなあ……本当に、何年経つても……」

視界が歪んでいた、平衡感覚が消失し、両手両足に力が入らなかつた。

既にまともに立ち上がる事も、剣を振るう事も難しい状況であつた。

勝負は既に決していた。

犬子は過去を……自分がまだ犬千代と呼ばれていた時代、近所のガキ大将の座を欲しがり、何度も何度も九十郎に挑んでは返り討ちにあつていた頃を思い出していた。

毎日が楽しかつた時代を……

「ねえ、九十郎……犬子の事、好き？」

「ああ、好きだよ」

九十郎は迷いなく断言した。

「犬子はさ、間違つてたのかな？」

「ああ、間違つてるよ」

九十郎は迷い無く断言した。

「本当は……本当は、劍丞様も被害者だつて分かつてたんだよ。」

劍丞様も何かされて、訳も分からない内に犬子を抱いたんだつて、分かつてたんだよ」

「ああ、たぶんそうだろうと思ってた」

「自己嫌悪の、八つ当たりだつて分かつてた。

そうじゃないと、九十郎が好きだつて気持ちだが、

愛してるつて気持ちだが、嘘になつちやうような気がしたから……」

「嘘なんかにはならねえよ、俺が絶対にさせねえよ」

九十郎は迷い無く断言した。

「九十郎の事、信じてても良いのかな？」

「信じてくれ、犬子」

「犬子はさ……前田利家だよ、それでも愛してくれる？」

「愛してる、犬子。俺はお前に惚れてるんだ、前田利家だろうが何だろうが構うものか」

九十郎は迷い無く断言した。

「剣丞様の事、ブン殴つてくれるかな、犬子の代わりにさ」

「2人分の怒りを込めてブチのめすさ、そこで見ていてくれ」

「じゃあさ……キスして、抱きしめてよ」

その言葉を聞くと九十郎は、ゆっくりと犬子に歩み寄り、力の限り抱きしめて、やや強引にその唇を重ねた。

犬子が握っていた竹刀が……落ちた。

「勝負あり……ですね」

雫が呟く。

それと同時に、犬子の御家流によって犬に変えられていた人々が、次々と人の姿へと戻っていく。

先程犬に変えられてしまった、詩乃、転子、姫野もまた人に戻っていった。

さつき身体が急激に縮んだ影響で服が脱げ、全裸であるが。

「ひゃあああ!? お、おかしらあ! みないでえ〜!!」

「ふ、服うつ! 服着るからこつち見るなしいつ!!」

「剣丞様! 後生なのでこつちを見ないでください!!」

詩乃、転子、姫野の3人が慌てて地面に転がっている衣服を拾う。

そんな様子を見ながら、雫の目がキラーン! と妖しく光る。

「いったん詩乃さんを治せば……これでもうぜんぜん卑怯じゃない訳ですよえ〜」

「どこぞのリーゼントのようなセリフを言い放ちながら、雫は助走をつけて大ジャンプ

……

「掟破りの官兵衛ニーキック!」

その右膝をシャイニング・ウイザードの如く詩乃の後頭部に叩きつけた。「がふっ!？」

そのまま雫は全裸の詩乃の後頭部を踏みにじりながら……

「完・全・勝・利!」

九十郎に向けてドヤ顔でブイサインを出し、勝利宣言をしたのであった。

「……雫、これは何の真似ですか?」

全裸で土下座をしているかのような姿勢のまま、詩乃が雫にそう尋ねる。

「何って、勝利宣言ですよ、詩乃さん」

「お互い軍師として、知略と軍略を戦わせようとしていたのですが……」

「詩乃さんはそう考えているだろうと思って、裏をかいて直接蹴っ飛ばしにきました」

「うぐっ……」

詩乃が絶句する。

脳筋極まりない思考だとは思ったが、少なくとも詩乃は、雫が直接蹴っ飛ばしに来る事を全く予想していなかったし、想定していなかった。

予想も想定もしていない策を考え付き、その策を実現させた時点で、軍師同時の格付けという意味では限り無く敗北に近い状況であった。

「……まだ負けていません。この戦はこちらの勝ちです」

悔しさと惨めさに齒噛みしながら、詩乃は言い返す。

誰が聞いても負け犬の遠吠えである。

「本陣狙いの奇襲部隊の事を言っているのなら、柘榴さんと粉雪さんが迎え撃つています。」

「あのお2人を突破して本陣の空さんを討ち取るのは相当難しいと思いますよ。」

それよりも……剣丞様の九十郎さんの戦い、始まりますよ」

そう言うや雫は詩乃の後頭部から足の裏を離した。

詩乃や雫の視線の先に、剣丞と九十郎がいた。

互いに睨み合いながら、互いに竹刀を向け合っていた。

「剣丞、お前に1対1の決闘を申し込む」

「ああ……受けて立とう」

かつて、九十郎は負け犬の目をしていた。

それ故に剣丞は、九十郎に勝って美空も、犬子も、柘榴、粉雪も、雫も、貞子も自分の嫁にしてしまおうと決意した。

だがしかし、今は九十郎の目の色が違っていた。

強い決意と信念の目……漢の目であった。

「負けてやる気は無いぞ」

それでも、劍丞は負けられない。

この勝負は自分と九十郎の男としての格を競う戦いと理解していた。

それ故に劍丞は負けられないと思った。

自分を信じ、自分を愛してくれる久遠達のためにも負けられないと思った。

「変な遠慮をしてワザと負けられたら迷惑だ。全力で来い、俺も全力で挑ませてもら

う」

「ああ、そうだな、その通りだ」

劍丞と九十郎が互いに竹刀を構え、じりじりと距離を詰めていく。

10歩の距離……5歩の距離……3歩の距離……そして……

どんっ！　どんっ！　どんっ！　と太鼓の連打の音が響いてきた。

その太鼓の音の意味を、劍丞も、九十郎も事前に知らされていた。

「え……戦闘終了……？」

「しかもこの叩き方だと……空の奴、討ち取られたのかよっ!？」

即ち、名月陣営の勝利を意味する停戦の合図である。

……

……

……

「勝ったのですっ!!」

「ば、ばたんきゅ〜……」

同じ頃、たった1人で柘榴と粉雪をブチのめし、歌夜を含む味方全員を置き去りにして突っ走り、1人で空陣營の本陣に突入し、迎撃に来た将兵全員を1人で叩きのめし、空本人もストリートファイターIIの負け顔よりもボコボコにした綾那が、その小さな胸を張って勝利宣言をしていた。

本多忠勝はどこまで行っても『ただ、勝つ』事しかできないが、『ただ、勝つ』事にかけては右に出る者はいなかった。

……

……

……

「歌夜さんと綾那さんに敵本陣の奇襲を頼んでいました。

小波さんを囿に使って、注意を引き付けて」

「そ、そんな!? その手は読んでいたの!? 柘榴さんと粉雪さんに対応を……」

「読めるのに対応できるのでは大きな隔たりがありますよ、雫。結果として……」

詩乃が後頭部に乗せられた雫の足をどけ、どっかりと胡坐を組み、腕も組んで胸を張る。

全裸なので色々と見えてはいけない所が丸見えであるが、今は見栄と虚勢が優先だ。「結果としては、私の勝ちです」

そして詩乃は愛菜もドン引きする位のドヤ顔と共に、勝利を宣言した。

「え……これで終わり……？ いやちよつと待て！ ちよつと待ってくれ頼むからっ!!」

俺今凄く恰好良く決めた所だろ!?! 犬子とOHANASIして、

これから劍丞をブチのめして俺最強ってやる所だっただろ!?

そういう話の流れだっただろ!?! 何でよりもよつてこのタイミングなんだよ!?!

消化不良極まりねえだろおっ!!」

「も、もしかして……この話の流れの後、俺は犬子を嫁にしないといけないのか？

あんなラブロマンスを見せられた直後に略奪婚だつて……

しゃ、洒落にならない!! 洒落にならないぞっ!!」

劍丞と九十郎が竹刀を向け合いながら硬直し、多量の冷や汗を流していた。

劍丞も九十郎も、空陣營の敗北……イコール犬子と柘榴と美空と粉雪と雫と貞子が、

みんな揃って新田劍丞の嫁になるという暗黒の未来に頭を抱えていた。

「あの糞弟子いいいいいいーっ!!」

九十郎の叫びが虚しく木霊した。

「そうだ、腹を切ろう」

そして犬子は割腹自殺を決意した。

……

……

……

「……おい、生きてるか柘榴?」

「生きてるつすよ、辛うじてつすけど」

粉雪と柘榴が、率いていた兵と共に倒れ伏していた。

九十郎が神道無念流を叩き込み、現代ニホンのスポーツ医学に基づいた合理的な筋トレ法も叩き込み、他の並行政界の2倍……いや、10倍にパワーアップした綾那に念入りにブチのめされた2人は、全身打撲によって立つ事すらままならない状態になっていた。

「自信無くすぜ……甲斐最強のあたいが、泣く子も黙る武田赤備えを率いるあたいが、ああも一方的にボコボコにされるなんてなあ……」

「柘榴も自信揺らぎそうつす……」

結局一太刀たりとも有効打は与えられなかったつすから……」

「もつと鍛えねえとなあ……」

「そつすねえ……」

地面に寝そべり、燦燦と輝く太陽に当たりながら、粉雪と柘榴がそう呟いた。
その時……

「狼煙……!?!」

柘榴が異常事態に気がついた。

空と名月の本陣から同時に上がった狼煙の意味を、柘榴は知っていた。

「粉雪、立てるっすか?」

「何かあつたんだぜ?」

「鬼が近くに来てるっすよ」

「な、何だつてえ!?!」

粉雪と柘榴が負傷した身体に活を入れ、無理矢理にでも立ち上がろうとする。

しかし、綾那に念入りに念入りにブチのめされた身体は、僅か1時間弱寝ていた程度では万全には戻らない。

腕が震え、足が震え、一挙手一投足の度に全身に激痛が走り、とてもまともに戦える状況ではなかった。

しかも……

「しかもどうやら……ハチ合わせしちまつたらしいっすね……」

気がつけば2匹の鬼が柘榴達の前に現れる。

たった2匹……普段の2人なら軽く捻れる数だ。

しかし柘榴も、粉雪も、率いていた将兵達も、皆等しく綾那にブチのめされ、柘榴と粉雪以外は全員気絶。

柘榴と粉雪は辛うじて立つのがやっとといった状態であった。

「こいつは……やべえかも……」

「無茶でもなんでもやるしかねーつすよ、生きて九十郎と会いたいなら……」

「そうだな、その通りだぜ……こんな所で死んでたまるかだぜえっ!!」

柘榴と粉雪が得物を握り、鬼達に斬りかかって行つた。

自分達が消耗し切っているのは分かつていた。

勝ち目が限りなくゼロに近いのも分かつていた。

だがしかし、九十郎の為にも、主君である美空と光璃の為にも、こんな所で死ぬわけにはいかなかった。

「あいつが柿崎景家か……朕の生き字引よ。

お前が朕に鬼子は持て余すと言うのであれば、朕はそれを覆して見せよう。

お前が執着する斎藤九十郎の妻を鬼に犯させ、鬼子を産ませ、それを御し切つて見せよう」

そんな絶望的な戦いに挑む柘榴と粉雪の姿を眺めながら、鬼を操る者……吉野の御方

がニマアくと笑みを浮かべていた。

他の場所には多量の鬼を出現させ、柘榴達の前にはあえて2匹だけ鬼を出現させた。

この場所で行われる事に、気づかせないために。

そして吉野が柘榴の前にいる2匹の鬼達に命令を下した。

『女を犯せ』『女を孕ませろ』『鬼子を産ませるのだ』と。

犬子と柘榴と九十郎第105話『4分の3くらい九十郎 が悪い』

「……君が、加藤段蔵になってくれ」

「へ……？ な、何を言ってるんですか、段蔵殿。」

「忍者になんてなれる訳がないでしょうに。」

「某、人間ではないが故に、人食いの化け物であるが故に」

「君が、加藤段蔵になってくれ」

「だから無理ですよ。ほら、そんな事より食事にしませうよ。」

「木の実や果物を沢山沢山取って来たんですよ。鳥や魚だつてあるんですよ。」

「某は食べられませんけど……でも良いんです、段蔵殿が沢山食べて、早く元気に……」

「俺はもう、長くない」

「……知りません、聞きたくありません」

「だから頼む、君しかないんだ」

「聞きたくないって言つたでしょうっ!!」

「さあ食べて！ 食べてくださいよおっ！」

こんなに食が細くちやあ弱つてくのが当たり前じゃないですかあ!!

昨日持つてきた食べ物も! 一昨日持つてきた食べ物も!

全然減つてないじゃないですかあ!!」

「すまない」

「すまないと思つてるなら元気になつてくださいよお!!」

もう一度某と一緒にかけっこをしましょうよおつ!

かくれんぼもしましょうよおつ! 楽しい話を沢山沢山聞かせてくださいよおつ!!」

「すまない、本当に。そして頼む、加藤段蔵になつてくれ」

「なりますよつ! 忍者でもなんでもやりますよおつ!!」

だから早く元気になつてくださいよおつ! もつと沢山食べてくださいよおつ!!」

「そう……か……」

「段蔵殿? 段蔵……殿……?」

だ、駄目じゃないですか、居眠りなんかしちやあ。某、人食いの化け物ですよ。

こんな無防備になつてちやあ、食べられちやいますよ……」

「……………」

「起きてくださいよ。ほら起きて……ねえ、お願いだから起きてくださいよお。」

某、段蔵殿のお願いを聞いたんですよ。

某、今日から加藤段蔵をやるんですよ、忍者なんですよ。

段蔵殿だつて某のお願いを聞いてくださいよ。

起きてくださいよ、食べてくださいよ、元気になつてくださいよ」

「……………」

「段蔵殿？ 段蔵殿？ 段蔵……殿……」

……

……

……………」

「……懐かしい、夢を見ましたね」

見ただけでSAN値が削れそうな醜悪な肉塊がそう呟いた。

「何年前の事でしたっけ？」

「10じゃない、20でもない……100は流石に無いと思いますけど……」

うじゆるうじゆると醜悪な音を立て、鼻が曲がりそうになる程の悪臭をまき散らし、

肉塊の姿が忍び装束を纏った長身の少女のものへとが変化する。

その姿は肉塊が見た夢に出た、病身の忍者と瓜二つだ。

身長も、体重も、手足の形も、目の色も、髪質も、匂いすらも全く同じであった。

「もう、やめちまいましたようか、加藤段蔵なんて」

肉塊が……いや、ついさつきまで肉塊だった少女が不機嫌そうに呟いた。

加藤段蔵をやるようになってから、嫌な事ばかりが起きている気がした。

「ああ、やっぱり御家流でつけられた傷は治りが悪いですねえ。

まだ痛みますよ、とてもとても」

約1週間前、小波の菩薩掌を叩き込まれた場所が、ずきずきと痛む。

一ヶ月もすれば完全に消えて無くなる痛みではあるが、裏を返せば一ヶ月の間、半強制的に1週間前の負け戦を思い出させられるという事だ。

そんな段蔵に見せつけるかのように、西の空で小波の菩薩掌が嵐のように降り注ぎ、断末魔の悲鳴や地響きが段蔵の元へまで伝わってきた。

「もしかして、ずっと前に喰べ損ねた娘……ですかねえ。

あの時も思いましたけど、あの娘本当に人間なんですかねえ。

あの御家流の連打は、明らかに人類の限界を超えているが故に……」

あの時尻尾を巻いて逃げ出しておいて正解だったと、段蔵は胸をなでおろす。

優れた御家流使いは美味であるが、だからと言って死ぬか生きるかの半町博打をして

まで食べに行く気も無い。

何事も程々で十分だというのが、長生きの秘訣と段蔵は考えている。

「お腹……すきましたねえ……」

少女のお腹がくうつと鳴った。

小波と姫野を襲ったあの日以来、彼女は何も口にしていない。

モグラ並みとまでは言わないが、あまり食い溜めはできない身体なのだ、傷を負い、身体が養分を欲しているような状況では特に。

もういつそ鬼でも良いから食べようかとすら思う程に、段蔵は空腹であつた。

そこに……

「おい化外、誰の許しを得て持ち場を離れた？」

物凄く物凄く不機嫌そうな吉野が、100を越える鬼と共に彼女の目の前に現れた。

「どーも、吉野さん。某が駿河を鬼の巣窟に変える手伝いをすれば、

鬼を好きなだけ食べて良いって契約……あれ、やめにします。

鬼はとても不味いが故に、グルメな某はとても満足できないが故に」

とつとと帰れとでも言いたげな表情で、段蔵がそう告げる。

余りにも一方的な契約破棄だ。

基本義理堅く、いらんもんまで背負い込んで破滅した前の段蔵では決してしない言動だ。

だがしかし、このある種のいい加減さ、無責任さが、『加藤段蔵』という名の呪いを背負いながらも、数十年の間生きながらえる事ができた理由でもある。

「やはり化外は化外か。役に立つなら骨の一つは恵んでやろうと思つてたのだがなあ」

「骨ですかあゝ？ いりませんねえゝそんな物はあゝ。」

某、人間以外の肉は決して口にできないが故に。

空間ごと抉る位はできなくもないですけどねえ、アレでは全く栄養にならないが故に、

しかも結構疲れるが故に、あまり意味が無いんですよ」

段蔵がそんな事を言っている間に、殺気立つた鬼達が周りを囲み、じりじりと間合いを詰め始める。

吉野が何を考えているかなんて、基本他人の感情に興味を持たない段蔵にも分かつた。

「八つ裂きにしろ」

吉野が周囲の鬼達に命を下した瞬間、100を越える鬼達が一斉に段蔵に飛び掛かつた。

「……手加減できませんよ」

鋭い爪と牙、あるいは刀や槍、弓矢が段蔵目がけて迫りくる。

その一つ一つを、段蔵は極めて冷静にスウエーで回避していった。

「今日の某は機嫌が悪いが故に、とてもとても機嫌が悪いが故に」

加藤段蔵が忍び刀を抜いた。

前の段蔵の遺品である忍び刀が、太陽に照らされ妖しく輝いた。

新戸が放置すれば無害と断言した怪物が……逆に言えば、不用意に近づくとシヤレにならない被害が出ると判断した怪物が咆哮した。

……

……

……

柘榴と粉雪が鬼に犯されていた頃、劍丞達は襲い来る鬼を切り捨てながら、犬子の襲撃によって散り散りになっていた劍丞隊の者達との合流を図っていた。

「梅！ 大丈夫か！」

「だ、ダーリン!? やつと会えましたわ！」

そして空が夕焼けに染まり始めた頃、劍丞は梅や鳥、雀といった信虎待ち伏せ部隊との合流を果たす事に成功した。

信虎との戦い、小波の暴走、そして鬼の襲撃……別動隊に無傷の者は1人も無く、皆疲れ切り、脱落者も多かった。

「そちらの状況はどうですか？」

「あまり良くはありませんわ。」

口伝無量が使えなくなつて、戦況がどうなっているか全く分かりませんでしたもの「す、すみません……」

一足早く劍丞に合流していた小波がしよぼーんと肩を落とす。

昼頃に自身の限界を超えた御家流の連打を行った反動で、現在彼女は御家流が全く使えない状態なのだ。

「責めるつもりはありませんけど、後で何があつたかは教えてもらいたいですわ。」

あんなに錯乱した小波さん、初めてでしたもの「

「ええ、あの時は……えつと、あの時は……ええつと……」

小波が弁明をしようと記憶を辿る。

信虎との戦いの中で窮地に陥つた事は覚えてる。

御家流をありえない勢いで連発し、敵も味方も巻き込んだ事も覚えてる。

しかし……

「あの、劍丞様……私は何故あの時錯乱を……?」

「いや、俺はその場にいなかったんだけど」

錯乱した理由が全く思ひ出せず、ぐっしょぐしょと小声で劍丞に質問した。

「はあ……本当、いつもの小波だし、腹立つくらいにいつも通りだし」

そんな小波の様子をしつかりと見て、聞いていた姫野が、小さくため息を漏らす。しかし、姫野は少し嬉しそうに笑っていた。

「劍丞様、その話は後にしましょう。」

梅さん、口伝無量が途絶えて以降の経緯を教えてください」

「率直に言つて訳が分かりませんわ！」

作戦通りに信虎を待ち伏せできたと思つた矢先に、

小波さんはおかしくなつて御家流を乱発するし。

小波さんが元に戻つたと思つたら唐突に風魔忍軍が襲つてくるし。

唐突に姫野さんが拔忍宣言したら他の風魔も揃つて拔忍宣言するし。

小波さんも姫野さんも風魔忍軍も行先も告げずにどつかへ行つて、

残つた私達で信虎と第七騎兵团と戦う羽目になるし。

第七騎兵团が思つてたより強くて負けそうだと思つたら戦には勝つてるし。

やあくつと静かになつたと思つたら鬼が出てきて襲つてくるし」

「修羅場の連続だつたよね、お姉ちゃん」

「……………」

基本お気楽な雀が珍しく顔を険しくさせていた。

超無口だが真面目な鳥がそれに追従する。

それだけで別動隊の激闘の程が知れる。

「損耗はどの程度ですか？」

「もうすぐ半分切りそうですわ、八咫鳥隊はもう少しマシですけど」

「あ、八咫鳥隊も玉薬が切れそうなんで、もおくそろそろ置物になります」

「……………くん」

八咫鳥隊は鉄砲の扱いは一流であるが、それ以外の能力は正直に言って微妙である。

そのため、隊長の鳥、雀姉妹を含めて、弾薬が無くなれば置物同然の足手纏いに変貌する。

これから鬼と戦おうという時に、剣丞隊の主力である八咫鳥が置物寸前というのはいか
なりの痛手である。

「……………」

「第七騎兵団の人達が鉄砲に槍の穂先を着けてたけど、あれって役に立つのかなって、

お姉ちゃんが言ってます」

雀が姉妹の直感で、R—18 シーン以外無口の鳥が言いたそうにしている事をズバリ
と言いついてた。

「ああ、銃剣か」

「じゅーけん？　じゅーけんて言うの？」

「……………」

烏と雀が興味深そうに劍丞の顔を覗き込む。

「あ……………」

一方、劍丞はうっかり口を滑らせた事に気がついて、慌てて口を噤もうとする。

後先考えずに未来技術を片っ端から導入しようとする九十郎とは対照的に、劍丞は時代の先取りには慎重な立場なのだ。

「おにーちゃん、じゅーけんって何？ 外人？ 歌？」

「じーっ……………」

烏と雀の視線が強まる。

銃の扱いは傭兵部隊である八咫烏の生命線だ。

当然、銃をさらに強化する発想に対する関心は強い。

「いや、その、銃劍っていうのは……………えっと……………」

一方劍丞も迷う。

銃劍は真似するのは容易で、普通に有用な装備である。

第七騎兵団が大つぴらに銃劍を使っている以上、遅かれ早かれ銃劍は他の国にも広まるだろう。

故に今ここで銃劍について八咫烏に説明をしても大きな問題は起きないかもしれない

い。

しかし……

「(どこまで言つて良くて、どこからが駄目か、線引きが難しい……)」

銃剣は非常に有用な、人殺しの道具だ。

戦争をより激化させかねない危険な知識だ。

そしてこれは例外と危険な知識を広めれば、あれも例外、これも例外とどんどんエスカレートしかねない。

危険な知識をどこまでも広げ、戦争をどこまでも凄惨なものにしかねない。

劍丞はそれを恐れていた。

「しかし、厳しいですね……」

一方、詩乃は冷静に今の状況を『厳しい』と評価していた。

一般的に、軍隊は半数以上が死ぬか逃げるかすると、『全滅』と表現される。

半数が喪失した時点で、組織的な行動はとれなくなるからだ(島津以外)。

梅達が率いていた別動隊は全滅寸前、八咫鳥隊は弾切れ寸前、そして劍丞と行動を共にしていた劍丞隊の本隊は、犬子に襲われた時にかかりの人数と散り散りになっていた。

そして鬼の数はさらに増し、戦場全域が混沌とした状況になっている。

これからどう動くべきか……詩乃と劍丞が真剣な表情で思考を巡らせる。

「や、やはり私がもう一度句伝無量を……」

小波がそう提案する。

しかし、今の彼女の肌は土気色で、唇は紫色で、視線も揺らぎ、とても普段のように御家流を使えそうにない。

「反対だし！ 今無理したら本気で廃人になるし！」

斥候に出した風魔忍軍がもうじき戻ってくるから、それまで待つべきだし！」

「しかし、一刻を争う状況で……」

「風魔忍軍ナメんなだし、鬼が出た程度で任務に支障をきたす程、ヤワな鍛え方してねーし」

「小波さん、これ以上の無理はしないでください。」

鬼との戦いはこの一戦で終わりになる訳ではないのですから」

「……わかりました」

小波は渋々といった様子で、姫野と詩乃の言葉に従う。

「劍丞様、迂闊に動くのは危険です。」

風魔の方々が戻ってくるまで、小休止を兼ねた損害状況の確認を進言します」

「ああ、分かった」

劍丞の目から見ても、味方は限界寸前だ。

右も左も分からない中で我武者羅に動くのは危険すぎると判断し、詩乃の進言に従う事にする。

劍丞隊と八咫鳥隊がその場に倒れ込むかのように身体を休め始める。

皆、疲れ切っていた。

無傷の者は一人もいなかった。

そんな中で……

「小夜叉さんが……いない……!?!」

あの浮きまくって目立ちまくっているフルプレートアーマーの少女が、いつの間にやらいなくなっている事に気がついた梅が、そんな声をあげた。

……

……

……

恐るべき事に、この日の小夜叉のキルカウントは未だ0である。

小夜叉は良く言えばヒヤッハー、悪く言えばヒヤッハーな森一家の中で生まれ育ち、どびつきりに頭のイカれた女である。

鬼に会っては鬼を斬り、人に会っては人を斬る、生粋の殺人鬼である。

そんな小夜叉が、人知れずぶっ倒れていた。

「はあ……はあ……ぜえ……ぜえ……」

舌・口腔内乾燥、皮膚の乾燥、皮膚の弾力性・緊張度低下、血圧低下・頻脈、易疲労感、脱力、食欲低下、意欲低下、立ちくらみ、意識障害・意識の鈍化……脱水症状である。

小夜叉は今、自力で立つ事はおろか、大きな声を出す事すらできない状態である。

彼女にとって不幸な事はいくつかあった。

1つ、フルプレートアーマーの調整が不十分だった。

フルプレートアーマーは全身をブ厚い金属板で覆う防具である。

着る者の体格に合わせて調整をしなければ生まれ育ち動きが阻害され、酷ければ動く度に激痛が走る。

小夜叉が来ている物は元々犬子用に作った鎧を徹夜で調整したものが、突貫作業であつたが故に、調整が不十分な部分が何か所かあった。

2つ、鎧が重かった。

良く言えばヒヤッハー、悪く言えばヒヤッハーな森一家は全員軽装で、全員俊足である。

しかも鎧全部で20kg以上の重さがあり、小夜叉はずっと陣羽織とサラシだけとい

う狂気とすら思える超軽装で戦っていたため、重い鎧を着ている時の動き方をまるで知らなかったし、ペース配分も無茶苦茶だった。

森一家と共にヒヤッハーと叫びながら第七騎兵团に突撃した小夜叉であったが、あつという間に大きく引き離され、無理矢理森一家に追いつき、追い越そうとしたせいで体力を消耗し、あつという間に体力を使い果たしてしまったのだ。

3つ、暑かった。

西洋の騎士が身に纏うようなフルプレートアーマーは、日本ではほぼ使われていない。

無論、使った者が全くいなかったという訳ではないが、主流にはならなかった。

何故ならば、日本は西欧諸国と比べて高温かつ多湿な気候であり、しかも山とか谷とか流れが急な川も多かったからだ。

当世具足よりも頑丈だが、当世具足よりも重く、

通気性が悪く湿気や熱を逃がしにくいフルプレートアーマーは、高温多湿な日本で使うのには向かない……今日のような蒸し暑い日は特に。

4つ、小波が暴走した。

基本面倒見が良い梅や雀は、なんやかんやで小夜叉の事を気にかけていた。

急に非常識な程に重装備をし始めてどうしたんだろうかと心配していた。

だから小夜叉が熱中症で倒れても、梅か雀のどちらかが気がついていた……普通ならば。

だがしかし、小波の御家流、妙見菩薩掌が暴風雨の如く降り注ぎ、敵も味方の区別無く破壊と殺戮を繰り広げた事で、戦場の混乱は頂点に達した。

誰も彼もが自分の身を守る事で精一杯になり、必然的に小夜叉に対する注意が薄れてしまったのだ。

結論、4分の3くらい九十郎が悪い。

「(頭痛がする……は、吐き気もだ……)」

ずりずりと地面を這いながら、小夜叉は前に進むとうとする。

森一家には『死』という文字はあっても、『逃走』の文字は無い。

少なくとも小夜叉は桐琴からそう教わっていたし、サキユバスの夢に引き込まれるまで、それを実践してきた。

「(ち、ちくしょう……一体なんで……ど、毒でも飲まされたのか……?)」

小夜叉は今まで一度も熱中症になった事が無いのだ。

しかも森一家は無駄に頑丈で脳筋しかいなかったため、小夜叉に熱中症の怖さを教える者もいなかった。

それ故に小夜叉は、自分が何故倒れているのかも分からなかった。

小夜叉は今まで、戦いの中で体調不良になった事も無かった。ヒヤツハーとかヒヤツハーとかヒヤツハーとか叫びながら突撃し、殺戮するだけだった。

だから比較的軽症な内に他人に助けを求める事を考えられなかった。

気がつけば、小夜叉の周りにいるのは死体だけになっていた。

周囲は不気味な程に静かだった。

呻き声すら聞こえない戦の跡地であった。

八咫鳥の、劍丞隊の、第七騎兵団の、風魔忍軍の、そして森一家の死体がゴロゴロと転がっていた。

そんな中で……一匹の鬼がのそのそと死体の転がる湿地を横断していた。

「……へっ、手柄首が向こうから来てくれたか、運が良いぜ」

最悪の体調の中で、小夜叉がほくそ笑む。

謎の体調不良で第七騎兵団との戦いでは一人も殺せなかったのを取り返せると思い、両脚に活を入れ、人間無骨を杖代わりにして無理矢理立ち上がる。

あるいは倒れたまま死んだふりでもしていればやり過ぎたかもしれないが、小夜叉にとつて二回連続の敵前逃亡は死と同義である。

「ギシャルルルウ……ッ」

鬼と小夜叉の目が合った。

胃液を吐き戻しそうになるのを必死に堪えながら闘志を振り絞り、愛槍人間無骨を握り直す。

鬼も両腕の鋭い爪を光らせながら、小夜叉に飛び掛かると身構える。

そして……

「うおおおっ!!」

「グアルルウツ!!」

小夜叉と鬼が同時に跳躍し、小夜叉は鬼を、鬼は小夜叉を狙い、得物を振るった。

犬子と柘榴と九十郎第107話 『表裏比興と書いてクソヤロウと読む』

空と名月による越後長尾家後継者決定戦と、突発的に起きた鬼の撃退戦は無事に……無事と言って良いか微妙というか、死者行方不明者多数、普通に大惨事だが、とにかく終わったものは終わった。

疲弊した中をありつたけの鬼を乱入させる吉野の作戦は当たっていた。

多くの並行世界と異なり、この世界における美空はあろうことか松葉をも巻き込み、自ら空と名月の後継者争いに首を突っ込んだ。

そのため、柘榴、松葉、美空の越後の優秀な指揮官3人が、揃いも揃って鬼に対応できない時間が生じてしまった。

それ故に急に越後を襲撃してきた鬼への対応は遅れに遅れた。

美空達にとって幸運だった事は、吉野が新戸から言われた事を気にして、人を殺す事よりも女を犯し、鬼子を産ませる事を優先させた事、そして吉野がよせば良いのにわざわざ野生の加藤段蔵にちよつかいを出し、比喩表現で無くケツを齧られ、あと一步で越後に壊滅的な打撃を与えられたという所で総撤退を決めた事だ。

いずれにせよ、美空や九十郎、劍丞達はしぶとく生き残った。

柘榴と粉雪と小夜叉を除けば、いわゆる主要メンバーの中に鬼に犯された者もいなかった。

死者を弔い、傷病者を休ませ、動ける者は戦後処理に奔走する時間がやってきたのだ。

「御大将、分かつてるっすね」

「何度も念押しされなくとも分かっているわよ、柘榴」

柘榴と美空が真剣な表情で……本当に本当に真剣そのものといった面持ちで頷き合
う。

彼女達は剣も槍も弓矢も持っていないが、彼女たちにとっては戦場で槍や采配を振るうのと同じ……いや、それ以上に重要な戦である。

勝った者はより多くの利益を得ようとし、敗れた者はより少ない出血で乗り切ろうとする、戦後交渉という名の大战である。

「犬子と粉雪だけは絶対死守よ！」

「犬子と粉雪だけは絶対死守っすよ！」

2人の思いは一つである。

この戦が始まる前にした約束……空陣営が負けた場合、長尾美空景虎、柿崎柘榴景家、前田犬子利家、山県粉雪昌景、小寺雫官兵衛、小島貞子貞興、そして武藤一二三昌幸の

7人は全員新田劍丞の嫁になるという約束を、全部は無理でも何割かは反故にしようという思いである。

「いや、まさか犬子が劍丞抹殺に失敗するとは思わなかったわ」

「九十郎に止められたんじゃ仕方ねーっすよ」

つまり九十郎が悪い。

「それより……はあ、今回の戦の敗因は柘榴っすよ。

まさか本多忠勝があそこまで強いなんて」

「野蛮人と畏れられる三河侍の中でもぶっちぎりで最強つて噂、伊達じゃないようね。

松平元康には過ぎたものね」

なお、その綾那が柘榴と粉雪を瞬殺できる程に強くなった原因は、かつて九十郎が教えた神道無念流である。

つまり九十郎が悪い。

「勝算、あるっすか？」

「正直厳しいわ、劍丞を翻意させるのはできなくもないけど、

竹中半兵衛が絶対に反対するわ。

私は絶対に逃げられない、たぶん柘榴も……ごめんなさい、柘榴も覚悟を決めて頂戴」

「柘榴は後回しで良いっすよ」

柘榴はさも当然の事のように言う。

「九十郎と離婚させられるって事なのよ、分かっているの?」

「何言ってるっすか、柘榴は武家の娘っすよ。」

好きでもねー相手と婚姻するのなんて5歳の頃から覚悟してたっす。

むしろ……むしろ、たった数ヶ月だけでも、

心の底から好きになった男の嫁でいられた事、嬉しかったっす。

柘榴にとっちゃ一生忘れられない大切な思い出……

この思い出だけあれば、柘榴は誰の嫁になったって前を向き続けられるっす」

「ごめなさい……本当にごめなさい、柘榴」

美空がふがない自分を呪いながら、深々と頭を下げた。

元々、空陣営が負けたら新田劍丞の嫁になると言い出したのは美空だ（第79話）。

ある意味柘榴は美空の意地っ張りに巻き込まれたと言っても良い。

だからこそ、美空は柘榴に詫びた。

自分の意地っ張りに巻き込んだ事、戦のドサクサ紛れに劍丞を殺す事に失敗した事、

襲撃してきた鬼への対処が遅れ、柘榴と粉雪が強姦されてしまった事、そして戦後交渉

で柘榴を約束の範囲外と言いつ張る自信が無い事、その全てが美空にとって大きな大きな

失態なのだ。

「それより、犬子と粉雪を守る方法を考えないといけねーっすね」

「分かつてる、分かつているわ、それだけは何としても、

文字通りこの身に代えてでも守り抜く。 最悪晴信に土下座してでも守り抜くわ。

あんな事が起きた直後に劍丞の嫁になれだなんて、絶対に言えないわ」

あの戦いの最中で、粉雪が鬼に犯され、処女を散らし、膣内射精をされて鬼の児を孕まされてしまった事は聞いている。

孕んだ鬼子は新戸の透視能力と念動力により、受精卵から成長する前にぶちっと潰して事なきを得ているが、そんな事は大した慰めにはならない事も知っている。

粉雪が泣いていた事を知っている。

甲斐最強と畏れられ、泣く子も黙る武田赤備えの対象でもある山県昌影が、鬼に犯されたショックで人目もはばからず、子供のように泣きじゃくっていた姿をその目で見た。

美空にも、柘榴にも分かった……この上新田劍丞の嫁になれと強要したら、きつと粉雪は壊れてしまう、壊れて頭がおかしくなってしまうと。

そして犬子の精神状態も、危ういところで辛うじてバランスをとっているのも分かった。

劍丞に抱かれた事だけでも犬子の精神医多大なストレスを生じさせているのに、愛す

る九十郎との唯一の繋がりである婚姻関係を解消させ、さらにストレスの原因である新田劍丞の嫁にさせたら、たぶん犬子は発狂してしまうと思つた。

だからこそ美空は、柘榴は、自分が犠牲になつても犬子と粉雪だけは守らなければと決意したのだ。

「で、真面目な話何か策はあるつすか？」

「ノープラン」

柘榴の表情が固まつた。

薄々そんな気はしていたけどやっぱりかあくつという表情だ。

「ノープランよ、ぶつちやけ負けた時の事は全く考えていなかつたわ」

戦場で頭を空つぽにして突つ走れる事が長尾美空景虎の最大の長所であるが、それは同時に最大の短所である。

頭を空つぽにして突つ走っている間は、勝つた後にどうするかとか、負けた時はどうしようかとか、そういう事が丸つきり頭の中から消え失せてしまうのだ。

そこが彼女同様頭を空つぽにして突つ走れる程度の能力を持ちながら、勝つても負けでもしれつと生き延び最終的には畳の上で大往生した、表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸との最大の違いである。

今、長尾美空景虎に最大最悪のピンチが迫りつつあつた。

「ふう〜」

「ふい〜」

粉雪と九十郎が湯船に浸かる。

バツファローマンのような体格の大男と、見た目幼女の32歳が肩を寄せ合つて一つの湯船に浸かる姿は、何も知らない者が見れば親子のようだと言うかもしれない。

しかし、今の2人は親子ではなく、兄妹でもなく……男女である。

「傷、痛むか？」

九十郎が心配そうに粉雪に声をかける。

柘榴と粉雪が綾那にボコボコにされ、自信とかプライドとかが粉々に打ち砕かれ、追い打ちとばかりに鬼によつて凌辱されたのはつい昨日の事だ。

傷の手当てをして、腔内を穢す体液を洗い流し、砕けた骨、千切れた血管や神経を可能な限り繋ぎ合わせ、胎盤に繋がり急速に成長しつつあった鬼子を念動力でぶちつと潰したとはいえ、心身を苛む傷は癒えたとは言えなかつた。

全身に青あざが何か所もあり、擦り傷や切り傷も多く、心の傷は……大きい。

「まだあちこちがズキズキと痛むよ、情けねえぜ」

己の右手を親の仇でも見るかのように睨みつけ、ぎゅうつと握りしめて、粉雪が答える。

「あの糞弟子、昔から手加減が苦手だったからな」

鬼の襲来を退け、事の次第を聞いた綾那の表情を思い出す。

ショックは大きかった様子だった。

桐琴が鬼に犯され、鬼子を産まされたと聞いた時と同じか、それ以上の衝撃を受けていた。

一分一秒でも早く空陣營の本陣を陥落させなければ負けていた。

だから一切の手加減無しで、死なない程度に柘榴と粉雪を叩きのめした。

鬼の襲撃があつてからは、押し寄せる鬼の大軍から空と愛菜を守るので精一杯で、道中で叩きのめした柘榴や粉雪を助けに戻る余裕が無かった。

だから綾那は悪くない……歌夜はそう言つて綾那を励ましたし、粉雪や九十郎もそう思つた。

だがそれでも、綾那は大きな大きなショックを受けていた、罪悪感を覚えていた。

自分が悪い、自分のせいだと……

「あの糞弟子、あんな顔しやがって……殴り難いじゃねえか……」

九十郎もまた、己の右手をぎゅつと握りしめる。

ぶん殴るつもりだった、力の限り綾那をぶん殴って、柘榴と粉雪の苦しみの10分の1でも、100分の1でも味合わせてやろうと思っていた。

だが……九十郎は殴れなかった。

綾那が泣きそうな目で柘榴と粉雪の2人を見ていたからだ。

そして劍丞もなんやかんやで殴り損ねた。

よくも犬子を泣かせたな、よくも俺の嫁に手を出したなという怒りを込めて殴るつもりだったが、殴る前に空の本陣が陥落し、その上鬼が襲ってきて有耶無耶になった。

九十郎の心に、大きな大きなフラストレーションが溜まりつつあった。

「劍丞の嫁に……ならなきやいけねえんだよな……」

そんな中で粉雪がぼそりと呟く。

九十郎は何も言えずに目を伏せる。

空と名月による越後長尾家後継者を決める戦いに助力し、負けた時は犬子と柘榴を含め、九十郎に惚れた女達が新田劍丞の嫁になる。

それが戦いを始める前に決めた約定である。

「美空と雫が、その辺をどうにか反故にできねえか交渉してるらしい」

だから希望を捨てるな……そう九十郎は続けようとした。

続けようとしたが、言葉を継げなかった。

ぼたり、ぼたりと、水滴が湯船に落ちているのに気がついたのだ。

汗ではない、屋根を濡らす湯気でもない……粉雪の目に大粒の涙が零れ落ちていたのだ。

「ち、ちくしょう……情けねえぜ……何が甲斐最強だ、何が武田四天王だ。

惚れた男に良い所見せようと張り切って、手も足も出ずにボロ負けして、拳句の果てに鬼にも負けて、犯されて……」

ボロボロと顔が崩れていった。

涙と鼻水が次から次へと溢れ出て止まらなくなっていた。

九十郎は慟哭する粉雪を身体全体で抱きしめた。

抱きしめただけでどうこうできるような状態じゃないと思ったが、黙って見ているだけではいらなかった。

「粉雪、この間の続きだ、抱くぞ」

力一杯抱きしめながら、九十郎は粉雪の耳元で囁いた。

「……あたいは、明日には他の男の嫁になる女だぜ」

粉雪は涙を零しながらとう告げる。

「関係ねえよ。抱かない理由を探してりや、永遠に抱けねえだろ。」

俺が抱きたいと思ってるんだ、それ以外の事は全部無視する」

九十郎は粉雪の言葉をあえて無視して強く抱き寄せる。

基本巨乳好きの九十郎であったが、今日だけは股間の肉棒がギンギンに勃起していた。

今すぐにも粉雪を押し倒したい、押し倒して強姦したいと主張していた。

「前に温泉で鉢合わせした事、あつたよな？」

「ああ、あつたぜ。武田で管理してる隠し湯に九十郎がいて、

しかも湯船の中で鬼小島とセックスまでして、あの時は腰を抜かすくらいに驚いたぜ」

九十郎がかつて（第52話）に見た粉雪の裸体を思い浮かべる。

あの時は巨乳の貞子や信虎、湖衣の方に視線が向きがちだった。

あの時は正直に言つて、粉雪を歴史上の偉人、山県昌景と認識していて、血の通つた人間だとは思つていなかった、女とは見ていなかった。

だが今は……

「驚いて、恰好つけて、怖がつて、泣いて……ああ、やっぱりお前も人間なんだなつて思う」

「幻滅、したか？」

「いいや……」

これがその証拠だとばかりに、九十郎が粉雪の唇を強引に奪う。

粉雪は一瞬身体が強張ったが、すぐに自ら九十郎を抱きしめ、舌と舌を絡ませ合った。劍丞に渡したくない、粉雪を己の物にしたいと強く強く願いながら、粉雪を強く強く欲しながら、九十郎は粉雪の口内を思う存分食った。

「お前が山県昌景だろうが構いはしねえ、俺は粉雪を抱きたいと思ってる」

そして九十郎が己の欲棒……もとい、粉雪の子宮に精を放たんとガチガチに硬く欲情する肉棒を握り、ゆっくりと粉雪の膣口へと宛がった。

「そういうヤケツパチは、あんまり好きになれないんだけどね」

……そして、さあ挿入といった瞬間に邪魔が入った。

気がつけば粉雪と九十郎が入浴している湯船にもう一人浸かっていた。

粉雪は九十郎を、九十郎は粉雪だけを見ていたために、抜き足差し足忍び足で浴室に入って来た乱入者に気づかなかつたのだ。

美空と同様頭を空っぽにして突っ走れる程度の能力を持ちながら、勝つても負けてもしれつと生き延び最終的には布団の上で大往生した、表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸……現在は武藤昌幸を名乗る少女である。

「……おい一二三、流石に空気が読んではしいんだぜ」

何でいつもいつも邪魔が入るんだとでも言いたげな視線を一二三に向ける。

「気持ちには分かるけど、そう邪険にしないでほしいなあ。

せつかく良い話を持って来たつてのに」

そう言うのと一二三はざばつと勢い良く立ち上がり、その色良し、艶良し、形良しの美乳を九十郎に晒す

「さて粉雪、昔から忠義には上中下の3つがあるつて話、知ってるかい？」

「3つ……いや、知らねえけど、なんで今そんな話をするんだぜ？」

「主君の言いなりになる忠義、これは忠義の中でも下の忠義。」

主君の望みを叶える忠義、これは中の忠義。

そして上の忠義は、主君を名君に仕立て上げる忠義だよ」

「言いなりに……」

そう言われ、粉雪はズキリと心臓を刺されたような気分になる。

甲斐最強の闘将にして、武田の精鋭赤備えを率いる四天王である彼女であるが、戦術を考えた事はあつても戦略を考えた事は殆ど無い。

政治や外交の事を真剣に考えた事はもつと無い。

自分は心のどこかで、政治や外交、戦略を考えるのに向いていないと決めつけ、主君・武田光瑞晴信の言う通りに動く事に終始してはいなかったかと。

主君の言いなりになる事を忠義だと思つていなかつたかと。

「ちゆ、忠義の話をどうして今するんだぜ!？」

微妙に上ずつた声で粉雪が話題を変えようとする。

「大事な事だよ、とても大事な事」

「どう大事なんだぜ?」

「劍丞隊の頭脳、竹中半兵衛殿は上の忠義を持っている、これは間違いない。

そうでなければたつた16人で稲葉山城を乗っ取るなんて真似する筈がない」

なお、表裏比興と書いてウラギリモノと読む真田昌幸には下の忠義すら無い。

「でも、そこが弱点だと思ふんだよ、竹中半兵衛殿のね。

太陽のように眩く輝く新田劍丞殿のために、汚れ役を買って出ようとしている。

立ち回り次第では大きな讓歩を引き出す事も決して不可能じゃない」

「えっと、つまり……どういふ事なんだぜ?」

「長所と短所は表裏一体という事だよ。

上の忠義は下の忠義に常に勝る訳ではないって事」

なお、表裏比興と書いてウラギリモノと読む真田昌幸には下の忠義すら無い。

それは一二三の短所であるが、同時に大きな大きな長所でもある。

そして次の瞬間、一二三は粉雪にも、九十郎にも予想外の行動に出る。

「でさ、ちょくつと悪いんだけど……挿れてくれないかな?」

表裏比興と書いてクソヤロウと読む謀将が……一糸纏わぬ姿で浴槽の淵に手を置いて、小振りの尻を突き上げて、左右に振っていた。

「何を？」

「キミのお〇んちん」

「どいかに？」

「ハハ」

一二三が腰をくいと持ち上げると、左手で自らの秘所へと手を伸ばし……くぱあつと広げた。

犬子と柘榴と九十郎第109話 『それは普通に児童虐待だ』

九十郎が呑気に一二三や粉雪とエロエロな事をしていた頃……

「ぜえ……ぜえ……ぐつ……お、おのれ化外……」

越後に大量の鬼を呼び込み、ズツコンバツコン大騒ぎしていた張本人、吉野の御方と呼ばれる超能力者が人知れず死にかけていた。

人食いの怪物・加藤段蔵と戦った結果、無農薬野菜のように全身が虫食い状態になり、内臓の欠損と失血により死にかけている。

このまま小一時間程放置すれば、喧嘩を売った相手が意外と強かったなんていうアホ臭い死に方をしそうな状態であった。

「……貸し1つ分消費で良いな？」

そんな死の一步手前の吉野をニヤニヤと笑いながら見下ろす鬼子が1人……井伊直政・通称新戸、犬子と九十郎が尾張から出奔した頃から、なんやかんやで九十郎らと行動を共にしている鬼子である。

そして今現在、新戸は過去2回（第87話と92話）吉野に助けられ、貸しが2つ分

溜まっていた。

それを一つ分減らすために、新戸は苦戦する吉野を超能力で救出したのだ。

「その位まで回復したなら、後は自力で治せるな？」

透視能力と念動力で最低限の止血をすると、吉野の周囲に瘴気が集まって来る。

どす黒い怒りや殺意、憎悪や絶望が具現化したものが虫食い状態の吉野の肉体に入り込み、欠損した肉体を埋めていく……人間をやめるとしか思えないような光景だが、吉野はまだ人間である。

「づう……があああつ!! うぐうつ、おおつ!!」

吉野が激痛に喘ぐ。

物理的欠損を瘴気で埋めるなんて真似は、常人には不可能だ。

他人の強い強い感情をねじ伏せ、我が物にするだけの意志力と、自分の肉体を麻酔無しでドリルで削るような激痛に耐える忍耐力、それだけの苦痛を受けながら集中を切らさない事も必要だ。

少なくとも、新戸にはできない。

「ぐう……はあ……はあ……」

吉野の肉体の欠損が埋まった。

数日もすれば完全に肉体に馴染み、元の身体と全く同じように動かす事ができる。

1000人が1000人とも死んだ方がマシと断言するような苦痛が多い方法だが、吉野はこうやって長い年月を生きてきた。

日ノ本で最も高貴な立場から引きずり降ろされた、武士に対する憎悪と執念を糧に生きてきたのだ。

「もう、やめた方が良いんじゃないのか？」

新戸が吉野にそう声をかける。

「まだだ、この程度で……ぐう……」

吉野は狂気とも思える強い執念に満ちた視線を新戸に向ける。

建武2年（1335年）に足利尊氏に裏切られ、京を追われた日から既に200年……

吉野は1日たりとも憎悪を途切れさせた事はない。

新戸は2000年前にTHE・ボツチだった吉野を憐れみ、超能力の使い方のコツを教えた事を後悔した。

既に何十回、何百回と後悔した事だが、何度後悔しても足りないと思つた。

「日ノ本の民を鬼に変えても、超ボツチが超々ボツチになるだけだぞ」

「煩い！ 朕はもう人を信じぬ！ 武士など信じられぬっ!!」

「たかが一回裏切られた程度で……」

「黙れえっ!!」

吉野が激高する。

新戸は超能力の使い方よりも先に、友達の仕事方を教えるべきだったかと思つた。

もつとも、新戸も新戸で鏡に映つた自分しか話し相手がない超ボツチの女から産まれ、自身も別世界の自分位しか相談相手がない超ボツチなので、友達の仕事方を教える事は限りなく不可能に近い。

「……加藤段蔵は放置すれば無害だと前に教えたな？」

無様に地面を這いながら激痛に耐える吉野を見下ろしながら、新戸がそう尋ねる。

「鬼を操つて柘榴達を強姦させたな？」

オレはお前に、鬼子を軽々しく作るなど言つたはずだ」

今度は以前（第87話）鬼子を作るなど忠告した事について言及する。

吉野は何も言わずに新戸に狂気と憎悪の視線を向ける。

「何で一々オレの忠告と真逆の事をする？ そんなだからオレ以外に友達がいらないだ」

「朕に友などおらん、朕に友などいらぬ」

吉野は地獄の底から這い出るような身の毛のよだつ声でそう答える。

常人ならその声を聞くだけで震えあがるが……新戸は軽くため息をつくとき、吉野を置いたまま春日山城へ戻ろうとする。

「待て、朕の生き字引よ。貸しはまだ1つ、残つていような？」

立ち去ろうとした新戸を、吉野は呼び止めた。

……

……

……

ざわ……ざわ……と、まるで福本漫画のようなざわめきが起きる。

良い意味でヒヤッハー、悪い意味でヒヤッハーな森一家の視線が集中する先に、金ヶ崎での負傷故に松葉杖をつく森一家の頭領・森桐琴可成と、そんな桐琴に殴られ、地面に尻もちをつき、青い顔をした森小夜叉長可の姿があった。

「おいガキ、今の言葉もう一度言ってみろ」

「オ、オレは……」

小夜叉が言いよどむ。

もう一度言えば、もう一度叱責され、殴られるのは明らかであった。

桐琴は重傷だ。

例え新戸の超能力により千切れた血管や神経、砕けた骨を繋ぎ合わせて貰ったとしても、その傷が完全に治る事は無い。

既に桐琴は、戦闘者として再起不能と言って良い状態だ。

しかし、さつき殴られた時、痛かった。
途轍もなく痛かった。

だからこそ、小夜叉は恐怖に声が震え、言葉を詰まらせた。

「聞こえなかったか糞ガキい！ 今日の日、戦あ、一体何人の首を刎ねたかと聞いたんだ！」
小夜叉が息を呑む。

森一家のざわめきが大きく強くなる。

そして……

「ひ……一人も……殺せなかった……」

とうとう観念して、小夜叉はもう一度同じ事を桐琴に伝えた。

桐琴を含めた森一家に衝撃が奔った。

良く言えばヒヤツハー、悪く言えばヒヤツハーを体現する小夜叉が、戦場に出て首を刈れずに帰って来た事は一度も無い。

いつもいつも誰よりも早く激戦区に飛び込み、誰よりも多くの返り血を浴びて帰って来た。

そんな小夜叉が弱弱しく震えながら、一人も殺せなかったと告げたのだ。

それを聞いた桐琴は、即座に小夜叉をもう一度ブン殴った。

「儂がいなけりや人一人殺す事もできんのか？」

小夜叉の肩がビクンツと震える。

その声、その表情は知っている。

自分の母、森可成が本気でブチ切れる寸前の声と表情だ。

「おちおち怪我もしてられんのか?」

小夜叉の肩がビクンツと震える。

声は静かだったが、目が座っていた。

瞳の奥に殺意が滾っていた。

「いつまで甘ったれてるつもりだあつ!! 糞ガキiiiiiiiiっ!!」

そしてその殺意が爆発した。

その怒号を浴びせられた小夜叉は無論の事、傍らで聞いていた森一家の面々も一人残らず震えあがった。

負傷し、槍も握れず、馬にも乗れなくなったとはいえ、桐琴は今なお森一家の頭領であつた。

負傷し、槍も握れず、馬にも乗れなくなつてもなお、今なお自分が森一家の頭領である事に対し、桐琴は苛立っていた。

そのために桐琴は必要以上に声を荒げていた。

「は、母……」

だがしかし、そんな桐琴の内心の焦り、苛立ちは小夜叉には伝わっていない。失態を晒し、情けないと呆れられ、失望され、怒鳴られた……小夜叉にとつてはそれだけの話だ。

この世で一番強く恐ろしい母・森桐琴可成の殺意の混じった視線を浴び、怒号を浴び、小夜叉の目が怯えて、竦んだ。

そんな小夜叉の怯え切った表情が、桐琴をさらにさらに苛立たせる。

「何だその目は？ その目で人が殺せるか？ その目で鬼が斬れるか？」

桐琴がそう問いかける……しかし、怯え切り、思考が真っ白になってしまっている小夜叉にまともな応答は不可能だ。

小夜叉は殺せるとも、殺せないとも言えずにびくびくと震えるだけだ。

そんな小夜叉の姿を見た瞬間……桐琴の苛立ちが最高潮に達した。

「さっさと答えろ糞ガキいいいいいいーっ!!」

基本ヒヤッハーな森一家の屈強な男達すらも残らず震えあがるような恐ろしい声だった。

この時小夜叉が感じた恐怖は、それこそ呼吸が止まり、心臓が止まり、そのまま落命しかねない程のものだ。

そして桐琴が小夜叉の胸板を蹴り、そのまま踏み抜くように押し倒した。

「あが……う……」

後頭部を強く地面に叩きつけられ、地面と髪の毛が紅く染まる。

過去にも何度か桐琴の怒声を浴びせられた事はあった。

殴られた事も、刺された事も、斬られた事もあった。

死に掛けた事も当然あった、恐ろしさに震える事もあった。

だがしかし、今感じている桐琴の怒りは、殺意は、そしてそれに対する恐怖は、今までの比ではない。

「そもそも、何だその珍妙な鎧は？」

小夜叉の傷を気にも留めず、体重をかけて踏みつけたまま桐琴はそう尋ねる。

「あ、……これは……」

「そんな物を着けているから後れを取るのだ、戯け」

小夜叉が何かを言うよりも早く、桐琴がそう決めつけてさらなる罵声を浴びせる。

お前の説明を聞く気が無い、お前の考えに配慮する気も無い……桐琴の態度は言外にそう告げている。

「外せ」

「え……？」

「聞こえなかつたか？ 今すぐ外せ、外して捨てる、そんな物は」

桐琴が頭ごなしに命令する。

そんな物……フルプレート・アーマーを着ていたせいで、敵兵も鬼も討ち取れなかったという考えは全く正しい。

今すぐに捨てた方が良いと言う考えも全く正しい。

しかし……小夜叉にははいそうですかと従えない理由があつた。

森一家は九十郎と同じか、それ以上にむさ苦しい男所帯だ。

今この場で鎧を脱げば、死ぬ程男性の視線に晒されたくない素肌が露出する。

特に股間の部分は下履きも喪つており、ほんの数時間前に鬼のお〇んぼを啜え込み、愛液すら漏らしたオナナの部分がそのまま視線に晒されてしまう。

もしも桐琴に鬼に犯されたと知られたら、どれだけ怒り狂うだろうか。

もしかしたら、怒りの余り殺されるかもしれない。

そして何よりも、自分のアソコを男の視線し晒されたくない、男の視線が怖い……

「は、母……それだけは、勘弁してくれよ……」

頭から血を垂れ流しながら、恐怖に震えながら、小夜叉が桐琴に懇願する。

その弱々しい姿は、野次馬のように見物する森一家の男たちにとつても、小夜叉の母である桐琴にとつても初めて見るものだ。

「ちっ……儂がいなければ、何もできんのかこのガキは」

桐琴が小さく舌打ちをした。

自分はまだ戦闘者として再起不能だ。

これからは小夜叉が森一家を背負って立たなければならぬ。

これからは小夜叉が森一家の先頭に立って戦わなければならない。

それなのに……と、桐琴はさらに強く失望し、憤り、苛立った。

「これは九十郎が……九十郎がオレのために作ってくれたんだ！

わざわざ徹夜までして、オレに為に……だから！

だから頼むよ母、捨てさせないでくれよ」

小夜叉は震えながらそう懇願していた。

その態度が桐琴をさらに苛立たせる。

戦乱の世では強き者が弱きものを殺し、奪うのが当然の事だ。

泣いて懇願しても誰も助けに来てはくれない、桐琴はそんな戦乱の世で強く、逞しく生きられるよう小夜叉を育ててきたつもりだった。

震えながら懇願する小夜叉を見たのは初めてで、それは桐琴にとって最も見たくない姿であった。

だから桐琴は……

「いい加減にしろ糞ガキいっ!! 甘ったれるなあっ!!

黙って言う事をきかんかあつ!!」

桐琴は小夜叉の首根つこを掴み上げ、凄まじい形相でそう叫ぶ。

基本ヒヤツハーな森一家の屈強な男共が残らず震えあがった。

幸いと言わすべきか、怪我のせいで握力が大きく落ちていたため、絞め殺されるような事はなかった。

しかし、不幸な事に怪我で握力が落ちていたが故に、桐琴は一切の手加減をしなかった。

一切の手加減無く、その目に殺意を滾らせて、力の限り小夜叉の首を締め上げていた。

「ぐ……………う……………は、母……………」

呼吸は辛うじてできる。

だがしかし、実の母親から本気で首を絞められているという事実そのものが、小夜叉の心を、魂を抉る。

「九十郎、流石に見てるのも限界だぜ、あたいは止めに行くぜ」

「お前にやらせる訳にはいかねえよ、俺が行く」

「……………分かったぜ。相手は怪我人だけど、変に躊躇するんじゃねえぜ」

「当たり前だ」

全員の視線が桐琴と小夜叉に向いていた。

だから誰も気づかなかった……小柄な少女と、バッファローマンのような体格の大男がその光景を見ていた事に。

そして大男の方が取り巻きのヒヤッハー共を掻き分け、桐琴のすぐ近くにまで来ると

……

「斎藤。パンチッ!!」

「ごちんっ!!」と、桐琴の脳天に拳骨を一発見舞った。

一切の手加減無く、グーでぶん殴った。

女性を、しかも怪我人を本気で殴るとは見下げ果てた男である。

「何をするっ!!」

桐琴が突然の乱入者……九十郎をキツと睨み付ける。

「こつちの台詞だ! 何やってやがる!」

九十郎は桐琴を睨み返し、一步も引かず、怒鳴りつけるように言う。

「他所の家の事に口を挟むな!」

「やかましいっ! あれがX歳児に言う台詞かよ!

おまけに殴るわ、首を絞めるわ……てめえの常識がどうなってるか知らねえけどな、

こつちの常識じゃ普通に児童虐待なんだよっ!!」

(この作品の登場人物は全員20歳以上です)

九十郎がそう断言する。

もつとも、この件に関しては正しいのは桐琴で、間違っているのは九十郎だ。

児童虐待なんて概念は戦国時代には存在しない。

九十郎がやっている事は、未来の価値観の押し付け、単なるエゴである。

言うなればそれは、21世紀の捕鯨反対派が、戦後復興期にクジラ肉を食べた者を非難するようなもの。

時代が違えば価値観も違う……九十郎はその事を見事に忘れていた。

「く……九十郎……」

だがしかし、正しい、間違っているという事と、それを見た者がどう思うかは全くの別問題だ。

小夜叉にとって、九十郎が救世主のように見えていた。

自分が一番苦しい時、辛い時に颯爽と現れてくれたヒーローのように見えていた。

なお、九十郎が本当にヒーローなら、小夜叉も柘榴も粉雪も鬼に強姦される前に助けられているだろうし、そもそも小夜叉が熱中症でぶつ倒れた原因を作ったのは九十郎が渡した鎧である。

結論・全部九十郎が悪い。

「あたいからも一言良いかだぜ？」

今にも殴り合いを始めそうな険悪な雰囲気、2人の間に、粉雪が割って入る。

「貴様には関係無い、引っ込んでいろ」

「まあ、確かに関係無いし、事情も良く分かってねえぜ。」

「あたいに分かる事は……あんたがド素人だつて事くらいだぜ」

「なに……」

いきなり『ド素人』と侮辱され、桐琴が怒りのあまり奥歯をぎりつと噛み締める。

「怒鳴つて殴るなんて猿にだってできるぜ。」

「気に入らない事があつたら怒鳴つて殴れば良いなんて思つてるなら……」

「てめえの頭は猿山の猿以下、ド素人そのものだぜ」

「猿以下だとお!？」

「あ、ひよつとして猿語じゃないと駄目なのかだぜ? ウツキー! ウツキツキー!!」

森一家のヒヤツハー達が震えあがる。

それは桐琴に対する明確な挑発だ。

今まで桐琴を侮り、挑発して長生きをした者はいない。

「必ず桐琴がブチ切れ、刃物を抜き、瞬時に血祭りにあげてりまうからだ。」

「何も知らん奴が、知つたような口を聞くな!」

「おい……それはあたいに言つたのか?」

瞬間、空気が冷えた。

寒気を感じる程の静かな怒りが周囲を包んだ。

「あたいを……武田四天王・山県昌景に対して言ったのか？ 何も知らん奴つて？」

桐琴の殺意……ではない。

粉雪が森桐琴可成と同等か、それ以上の気迫を放ったのだ。

基本ヒヤツハーだが、強い弱いには敏感な森一家の男共が瞬時に理解する。

見た目は幼女だが、目の前の人物は……山県昌景は怒らせてはいけない人物なものと。

その気になれば自分達を瞬時に皆殺しにできる程の剛の者なのだ。

もつとも、笑える事に桐琴も粉雪も負傷やら疲労やら心労やらのせいで、実力の半分

……いや、10分の1以下しか発揮できない。

今の粉雪と桐琴は、2人で力を合わせても九十郎1人にボコられかねない体調なのだ。

「貴様……」

「やんのか、おい？」

桐琴と粉雪が殺意を滾らせながら睨み合う。

今この瞬間にも凄惨な殺し合いが始まりそうな空気である。

まあ、仮に殺し合いが始まったとしても、お互い負傷やら何やらのため、スーパーマンと会長の殴り合い並みの塩試合にしかならないのだが。

そして永遠に続くかと思われた一触即発の睨み合いは……

「全く、親つてのはそういうもんじゃねえだろうが、そういうもんじゃ……」

朱金の親みてえなひたすら無関心なタイプに比べりゃいくらかマシなんだろうがな」

そう言いながら九十郎が睨み合う2人を無視して、小夜叉の方へと歩み寄る。

昔……と言つても前の生での事だが、医者を目指していた友人、刀舟齋かなうが言つていた事を思い出す。

曰く、子供の頃に虐待を受けて育つた人は、自分が親になった時、我が子を虐待してしまう事があると。

それ以外の子供との接し方を知らないのだと……

「誰かが教えてやんなきゃいけないんだよな、怒鳴つて殴る以外のやり方をさ……」

俺にそれができるとも思えねえんだけど、四の五の言つてはられねえか」

本当は無視したかった。

無視して、見なかった事にしてしまいたかった。

だがしかし、放置したら小夜叉に取り返しのできない心の傷ができそうな様子だった。

それを見なかつた事には……九十郎は小夜叉に関わり過ぎた。
だから九十郎は……

「……良く無事に戻つて来たな、偉いぞ」

……九十郎はそう告げて、小夜叉をぎゅーつと抱きしめた。

このやり方が正しいか正しくないかは後で考えようと、今は目の前の問題を……桐琴と粉雪の2人を今にも死にそうな目で見つめる小夜叉をどうにかしなくてはと思い、九十郎は無心で小夜叉を抱きしめた。

「あ……え……？」

小夜叉が驚き、戸惑う。

小夜叉にとつて戦から帰つた時に話す内容と言えば、誰を殺したか、何人殺したかしかない。

生きて帰つただけで褒められるなんて事、あり得ない事であつた。

小夜叉にとつて戦とは、ただ前に進み、ただ敵を殺すだけの行為であつた。

なのに……

「……つて、お前頭怪我してるじゃねえか!? 粉雪何か持つてねえか、手当してねと」

「手拭いと、血止めの軟膏なら持つてるぜ」

「悪いけど貸してくれないか」

「良いぜ、ほら」

「サンキュー」

九十郎が小夜叉の軟膏を着けた手拭いで傷口を縛り、止血をする。

ただそれだけ、たつたそれだけの事だったが、小夜叉の頬で涙が伝う。

森一家のヒヤツハー共がどよめく。

森一家のヒヤツハー共にとつて、小夜叉はあのおつかない桐琴の兇らしく、いつでもヒヤツハーヒヤツハー叫びながら敵を殺し、帰り血を浴びるイメージしかない。

その小夜叉がまるでX歳児のように……いや、実際にX歳児なんだが、とにかく年相応の少女のように涙を零していた。

それは森一家のヒヤツハー共にとつて驚愕すべき事であった。

(この作品の登場人物は全員20歳以上です)

「あ……………」

小夜叉もまた、子供のように泣きじゃくるのは初めての事だ。

物心ついてから人前で泣いた記憶が一度も無い。

そんな女々しくて、情けない姿を見せたら、桐琴にシメられると骨身に染みて分かっていたからだ。

だがしかし、何度涙を拭っても、涙は次から次へと溢れ出て止められなかった。

「や、やめ……見るな！ 見るなあっ!!」

涙がボロボロと零れ落ちた。

涙と一緒に辛い思い出が次から次へとリフレインした。

桐琴が鬼に犯され、腹を破裂させて死にかけた事が……桐琴が何日も何日も目を覚ま
さずに、本当に死ぬんじゃないかと思つた事が……夢の中でサキュバスに襲われ、戦友
を見捨てて一人で逃げ出した事が……鬼に襲われ、鬼に強姦された事が……次から次へ
を脳裏に過り、涙がどんどん溢れていった。

「ち……ちくしよお……生まれ、生まれよお……」

ずっと辛かった。

ずっと苦しかった。

辛くて苦しいと叫びたかった。

叫びながら泣きたかった。

そして何より……

「九十郎お……くう……ああ……」

そして何より、他人に頼りたかった。

誰かに優しくされたかった。

小夜叉は身体中の水分を流しきり、脱水症状で死ぬんじゃないかという程に涙を流し

ていた。

「小夜叉……」

そんな小夜叉の姿を見て、桐琴は思わず大きく目を見開いた。

小夜叉がX歳児のように泣きじやくる姿を見たのは初めてだった。

小夜叉はどんな修羅場に叩き込んでも涼しい顔をして首級を上げてきた。

小夜叉は今まで一度も泣き言を言わず、我儘も言わなかった……少なくとも桐琴はそう認識していた。

そんな時、桐琴と九十郎の目が合った。

2人共言葉を発する事は無かったが……桐琴には九十郎が言わんとしている事が分かった。

『見ているか？ こうすれば良いんだよ』

桐琴は九十郎がそう告げているように見えた。

そのやり方は、今まで桐琴が一度もやらなかったやり方で、考えた事もなかったやり方であった。

「九十郎……」

そんな小夜叉と九十郎の姿を見て、桐琴が胸に抱いた感情は……怒りであった。

「九十郎っ！ 貴様あつ!!」

桐琴が叫ぶ。

叫ばずにはいられなかった。

その光景が、小夜叉と九十郎の姿が、まるで自分の人生そのものを否定しているかのように感じたのだ。

「そんな甘い事で……甘つちよろい事で！」

戦乱の世を生き抜けるとでも思っているのかあつ!!」

怪我人とは思えない声量で、怪我人とは思えない気迫を籠め、桐琴が叫ぶ。

怪我がなければ、たぶん桐琴は九十郎を殺していただろう。

そんな桐琴の怒号を聞き、小夜叉の肩がビクンツと震えた。

「大丈夫だ、俺が守るからな」

そうキツパリと告げると、九十郎は小夜叉を安心させるため、もう一度その小さな両肩を抱き寄せた。

「大丈夫だ、何も心配するな。俺が傍についてるからな」

九十郎が小夜叉の耳元でそう告げる。

当然、この言葉はただの出任せだ。

九十郎がどれだけ頼りにならないかは、当の本人が誰よりも理解している。

新田劍丞のような主人公ならともかく、自分のような屑が守っていたからといって、

安心なんてできる訳がないと思っっている。

だがしかし、だがそれでも、九十郎はあえて断言した……大丈夫だと。

「九十郎……貴様……」

桐琴は目の前が真っ暗になるような思いをした。

九十郎の認識は甘い、甘すぎる。

戦国の世はそう容易く生き延びれるようなものではない。

殺し、殺され、騙し、騙され、容易く死ぬ。

誰も彼もが容易く死ぬ。

斉藤道三であろうと、今川義元であろうと、容易く死ぬ。

だから桐琴は小夜叉を強く、逞しく育てようとした。

厳しく、厳しく接した。

だが九十郎は逆に、小夜叉を甘やかさそうとしていた。

ぬるま湯につけ、腑抜けにさせようとしていた。

桐琴にはそれが許せなかった。

「何も心配するな、大丈夫だからな」

九十郎はもう一度小夜叉にそう告げた。

むしろ心配しないと内心思っていたが、九十郎はそれを口にしなかった。

「へへっ、やっぱ九十郎は恰好良いトコあるよな。

あたいが惚れた男なだけあるぜ」

そして粉雪が人知れず九十郎の事を見直し。

「(そうだ、後で劍丞にブン投げよう)」

九十郎は人知れずゲスな事を考えていた。

犬子と柘榴と九十郎第110話『美空、出荷される』

「非常にやばい」

「やる前から薄々分かってたつすけど、かなり劣勢つすね」

美空と柘榴が厠で顔を突き合わせていた。

2人の表情は非常に悪い。

ついさっきまで『待った！』だの『異議あり！』だの『くらえ！』だのと叫びながら、どうにか開戦前の約束……空陣営が負けたら美空、犬子、柘榴、粉雪、雫、貞子、そして一二三は新田劍丞の嫁になるという約束を無かった事にしようと頑張っていた。しかし、今孔明と畏れられる竹中詩乃半兵衛は優しくなかった。

「今になって思えば、劍丞をぶつ殺しに行つたのは不味かつたかもしれないわね。

アレで公方様を完全に敵に回してしまつたわ」

「まさか公方たる余の前であれだけ堂々と啖呵を切つておいて、

今更やくめたとは言うまいな……いやあ、完全に人殺しの目をしてたつすねえ」

「いや、漆黒の意思つてのはまさにああいうのを言うのでしょうね。

思い出しただけで寒気がしてきたわ」

正直な所、美空は心のどこかで一葉の援護を期待していた。

あの一葉が愛の無い婚姻を手放しで賛同はしないだろうと見ている。

しかし、一葉がベタ惚れしている新田劍丞が洗脳能力を使つて等と言つて乏しめ、しかも犬子をけしかけて抹殺しようとした事が、一葉の態度をこれでもかつて位に硬化させていた。

援護どころか、一人も逃がさんと言いたげな目つきで、公方としての権威をも振りかざす決意で交渉に臨んでいた。

「負けたら劍丞の嫁になるメンツ、

貞子以外の全員が変装したり何なりで参戦してた上で負けてるのも地味にキツイわ」

「あそこまで露骨に肩入れして負けといて何言つてるの……」

全く反論できなかつたすね、柘榴も、御大将も」

「ギリギリで助かつたとはいえ、

犬にした竹中半兵衛を強姦しようとしたのも良くなかつたわね」

「尋常じゃない目つきだつたすね」

「……個人的には、ちよつと演技臭かつた気もしたけど」

「そうだつたつすか？」

「ごめんなさい、確証がある訳じゃないわ。」

何にせよ向こうの交渉担当である竹中半兵衛は滅茶苦茶怒つて、情に訴えるこつちの作戦は一切通用しないわ」

「劍丞さんがそれとなく助け船出してくれてたっぽかったっすけどね……」

「それとなくじゃないわよ、凄い分かりやすく助け船を出してたわ、何度も」

半兵衛も公方様も全く聞く耳を持ってないっただけで」

「……ヤバイっすか？」

「ヤバイわね、とてつもなく」

美空と柘榴が狭くて臭い厠の中で互いに見つめ合い、ため息をつき合った。

状況は絶望的だ。

これまで何度も何度も確認した通り、状況は絶望的であった。

「そうだ、仮病を使いましょう」

「ちよつとやそつとの体調不良じゃ逃がしちゃくれねーっすよ、間違い無く」

「いつそ死んだふりをしましょう」

「厠で倒れてそのまま臨終とか情けないにも程があるっすよ!!」

なお、史実において上杉謙信は厠で昏倒してそのまま死亡している。

「分かったわ、それなら次善の策として……」

「おお、何か妙案があるっすか。 流石は御大将っす」

「古くなつた生卵を一気飲みしてハラを壊しましょう」

「時々物凄く恰好悪くなる所、九十郎にそっくりつすよ、御大将」

もう一度ため息をつき合う。

妙案は浮かばない、どうしてもどうしても浮かばない。

それこそ、古くなつた生卵を一気飲みなんてふざけた手が妙案のように感じてしまう程に。

「いつまで厠に籠っているつもりですか？ 長尾景虎さん」

その声が聞こえた瞬間、美空と柘榴の背筋が凍り、全身から冷や汗が噴き出てきた。

時間稼ぎなど無駄だ、一人も逃がさんという漆黒の意思が宿つた竹中半兵衛の声である。

「よもや長尾景虎ともあろう者が、厠で仮病などと情けない真似はすまいなあ？」

ゴゴゴゴゴゴ……というジョジョっぽい擬音を背景に浮かばせながら、征夷大將軍・足利義輝が2人に声をかける。

竹中半兵衛と同等……いや、それ以上の憤怒の意思が明確に感じ取れた。

「本格的にヤバいわ、柘榴何か妙案は無い？」

小声で、しかし異様なまでに早口で美空が柘榴に助けを求める。

「無いっす、全く」

しかし、柘榴は基本脳筋だ（粉雪と違って）。

美空以上に外交交渉に向いていない（粉雪はある程度できる）。

怒れる竹中半兵衛と足利義輝をなだめる作戦も、開戦前の約束をブツチする作戦もまるで頭が浮かばない。

そんな事は聞くまでも無く分かりきっている事だが、美空はそれだけ追い詰められていたのだ。

「ふう……」

美空が深々とため息をつく……そして自ら厠の鍵を開けて扉を開いた。

「ごめんなさい、三日ぶりのお通じだったから長引いてしまったわ。

さあ、私は逃げも隠れもしないわ、交渉を続けようじゃない」

ついさっきまで劣勢の余り厠に逃げ隠れていた美空が扉を開けた瞬間、詩乃がその右腕を、一葉がその左腕をがっしりと掴み、まるで囚人連行のように引っ張っていく。

もう二度と同じ方法での時間稼ぎは通用しないだろう。

「ごめん柘榴、手詰まりだわ……覚悟を決めましょう……」

ドナドナドゥナドゥナドゥナドゥナとでも聞こえてきそうな程に目が死んでいる美空が、柘榴の方を見つめていた。

美空は一言も言葉を発しなかったが、長年の付き合いであるが故に、柘榴は美空が何

を考えているのかがハッキリと分かった。

「(これで柘榴もバツイチっすか……はあ……)」

柘榴は覚悟を決めて美空達3人の後ろについて行く。

これから処刑されるに行くかのように、その目からは希望と輝きが消え失せていた。

戦国時代の人間の癖にバツイチなんて言葉を知っているのは、九十郎の仕業である。

せめて犬子と粉雪だけは守り通したかったが、それすらも叶わず、柘榴の心は後悔や無力感で一杯であった。

短い間ではあったが、九十郎の妻として過ごした楽しい時間が次から次へと脳裏に浮かぶ。

辛い事もあったが、それ以上に楽しい事、嬉しい事が沢山あった。

そして……

「(……思い出すな)」

柘榴が自らに言い聞かせる……思い出すなど。

ほんの一瞬、しかし確実に脳裏に浮かんだ……鬼との交わったあの瞬間を(第104話)。

九十郎のモノよりも硬く、長く、太く、熱い肉棒を子宮に突き立てられたあの瞬間を。

『ああ……あつんっ！ ふわっあつふわっ！』

あの日、あの時、自らの口から漏れ出た喘ぎ声がフラッシュバックのように再生される。

あの日、あの時……柘榴は確かにヨガっていた。

九十郎以外の男の……いや、人のモノですらない肉棒を銜え込み、ズコズコパコパコと抽送され、柘榴はヨガっていたのだ。

「思い出すな、思い出すな……思い出すなっ!!」

柘榴は自らにそう言い聞かせる。

何度も何度も言い聞かせる。

次に脳裏に浮かんだのは……新田劍丞のち〇こを下の口で銜え込み、本当に本当に幸せそうに腰を上下に振っている犬子の姿だ。

もしも今、自分が劍丞のち〇こを銜え込んだら、どうなってしまうのだろうか……そう考えた瞬間、寒気がした。

柘榴が人知れず葛藤している間も、詩乃と一葉は情け容赦無く美空を連行し、評定の間へと半強制的に戻らせた。

いつもは美空が愉快な仲間達と一緒に悪巧みをしていたこの場所は、今は美空と柘榴の処刑場のように見えた。

「さて、三日分の糞を捻り出して身も心も軽くなっただろうな？」

そろそろ回答を聞かせてもらおうか」

一葉が美空に最後の回答を促した。

「分かつてる、分かつてるわよ……」

美空が大量の冷や汗を流しながら頷いた。

美空、柘榴、犬子、粉雪、雫、貞子それに一二三は新田劍丞に嫁になる約束。

それを反故にするための論理は全て出し尽くしたが、全て退けられた。

情に訴えようにも、詩乃と一葉は聞く耳を持たない。

手詰まりだった。

後ほもう完全敗北を宣言する以外にない、完全なる手詰まりだった。

「わ、私は……いえ、私達は……」

声が震える。

その言葉の先を言えば、もう本当に後戻りができなくなる。

自分はどうなっても構わない、だけどせめて犬子と粉雪だけは対象外にできないか

……美空は知恵を絞り尽くす勢いで頭を捻ったが、妙案は何も思い浮かばなかった。

「私達は、なんだ？」

一葉が恐ろしい目つきで美空を睨みつける。

これ以上の時間稼ぎは認めない……そういう態度がありありと見えた。

「わ、私達……は……」

美空の顔が青ざめる。

本当に本当に何も思い浮かばなかった。

もう駄目か、もう駄目なのかという思いが……絶望が美空を覆いつくそうとしていた。

「（お願い、お願い……誰か来て、何か起こって！ 誰でも良いから！ 何でも良いから！

このままじゃ……このままじゃ本当に……）」

美空は瞳をぎゅーつと閉じ、神仏に祈った。

祈った、祈った、無心に祈った。

そして次の瞬間……

「ちよつと待つのですうううううーっ！！」

ばたーんっ！！ と勢い良く襖が左右に開く。

そしてまるで討ち入りでもするかのように殺気立った鹿角の少女が……本多綾那忠勝が乱入してきたのだ。

美空と柘榴の、詩乃の、一葉の、そして劍丞の視線が集中する。

皆一様にぎよつとして、大きく目を見開き、予期せぬ来訪者に意識を集中させる。

今まで綾那は外交だの交渉だのといったまだるっこしい事に関わりとうしなかつた。

綾那自身も、本多忠勝の仕事はただ勝つだけだと思ひ、勝つた後にどうするかは他人に任せきりにしていた。

そんな綾那が、戦地に赴く時と同じ……いや、それ以上の決死の表情でこの場に飛び込んできたのだ。

美空達の驚愕と混乱は並大抵のものではなかつた。

「何事か騒々しい!」

なんやかんやで最も荒事慣れしている一葉がいち早く我に返る。

征夷大將軍が一番荒事慣れしている事へのツツコミは不要である。

「その話! ちょっと待つのです! 綾那は絶対反対なのです!!」

そこいらのチンピラ相手なら小便を漏らしながら腰を抜かす程の一喝であつたが、当然、綾那は全く怯まずに睨み返す。

それどころか、自分が柘榴と粉雪をボコつて手にした勝利を、勝利によつて得た戦利

品を無かった事にするような言葉が発したのだ。

「綾那さん、劍丞様のお嫁さんがもつと増えるのです」と言つて、

誰よりもやる気を出していたのは貴女だったと記憶しています」

続いて詩乃が落ち着きを取り戻し、ツツコミを入れる。

彼女の言う通り、誰よりも能天気な、誰よりも愚直に勝利を目指していたのが綾那だ。

しかし……

「一二三から事情を教えてもらつたのです。

綾那はずつと、目の前の敵を叩きのめす事しかしなかつたのです。

目の前の敵を叩きのめす事しか知らなかつたのです。

昨日の戦でもそうだったので。でも……今日だけはそれだけじゃ駄目なんです

！」

「へえ……」

「ほお……」

一葉の口角が上がる。

長い前髪に隠れて見えにくいのが、詩乃の眉も少し上がる。

自分の意見に反対する者への嫌悪感は一切無い。

むしろ好ましい物を見た時の反応に近い。

「しかしだな、名月陣営が勝てば長尾景虎、

柿崎景家を始めたとした7人は主様の嫁になるという約定は、

向こうから言い出した事なのだぞ」

「勝つてねえです！」

「……え？」

「……あ？」

「……か、勝つてない？」

突如として勝つてないと真顔で断言する綾那に対し、詩乃と一葉、そして劍丞がぽかーんとした顔になった。

「……そうきたか」

「何を言ってるのか全く分からねーっすけど、空気を読んで黙ってるっす。」

美空様は分かったっすか？」

「私に分かる事は一つよ、柘榴。」

勝つてないって言い訳は私には思いつかなかつたし、まだ言っていないって事よ」

美空と柘榴が固唾を飲んで見守る中で、綾那は懐から2冊の本を取り出して、詩乃に投げ渡した。

「これは……？」

「あ、あれは……!?!」

その本に全く見覚えが無い詩乃が首を傾げ、その本に思いつき見覚えがある柘榴がその身を強張らせる。

嫌でも思い出す、昨日の戦での綾那のシヤレにならない強さを。

嫌でも思い出す、昨日の戦で綾那に為す術も無く叩きのめされた事を。

そしてその後……鬼に犯されて……九十郎のモノよりも大きく太い巨根を……

「(く……また、思い出して……)」

ぶるりと、奮えた。

思い出しははいけないと何度も自分に言い聞かせているが、ちよつとしたきっかけでどうしても思い出してしまう。

その2冊の本には『悪の戦争教本ボリューム1』、そして『悪の戦争教本ボリューム2』と書かれていた。

昨日の戦で、1冊は柘榴が、1冊は空が持っていた本……雫が書いた作戦指示書である。

「……………それを、どっか……」

詩乃は2冊の本の中身を斜め読みして、綾那にそう尋ねる。

肩がわなわなと震えていた。

その目は驚きで一杯であった。

「柘榴と空が持ったのを拾ったのです。

こっちの配置も、作戦も、動き方も、全部読まれていたのです」

「まさか……内通……？」

驚愕の事実には剣丞が咄嗟にそう呟く。

しかし、詩乃はそうは思わない。

「いえ……服部半蔵と風魔小太郎を出し抜くのはそう容易い事ではありません。

あの2人を同時に出し抜ける者がいると考えるより……」

その筆跡は知っていた。

間違いなく小寺隼官兵衛の字だとすぐに分かった。

そして同時に思う……信じたいが、隼ならばあるいはと。

「なるほど、認めましょう。策の読み合いでは一歩遅れをとっていたようです。

しかし、この戦は先に本陣を陥落させた方が勝ちとなっていました。

そして空さんの本陣を陥落させたのは、他ならぬ綾那さんの筈です」

詩乃が追及の矛先を少し変える。

新田劍丞の軍師として、隼との知恵比べで後れを取った事に対して思う事はあるが

……それはそれ、これはこれとして話は続ける。

「柘榴と粉雪は強かったです。恐ろしく強かったです」

美空が柘榴に『そーなの?』とアイコンタクトで尋ねる。

柘榴は美空に『2人纏めて瞬殺されたっす』とアイコンタクトで答える。

「たぶん、三河で神道無念流を教わってなかったら負けていたのは綾那だったのです」

綾那と歌夜は、かつて九十郎から神道無念流の手ほどきを受け、現代ニホンのスポーツ学に基づいた効率的なトレーニング法も教わり、大幅にパワーアップした過去がある(第11話)。

本多忠勝は確かに強い。

戦国時代でも一二を争う程に強い。

しかし、越軍七手組の大將である柿崎景家と、武田四天王最強の山形昌景を同時に相手取り、瞬殺する程強い訳ではない。

それを可能にしたのは、九十郎の神道無念流だ。

つまり……

「つまり……神道無念流の勝利なのですっ!!」

綾那が力強く断言する。

美空が柘榴に『アンタも神道無念流やってなかったっけ?』とアイコンタクトで尋ねる。

柘榴は美空に『やってたけど瞬殺されたっす』とアイコンタクトで答える。

「くっ……」

詩乃は一瞬……しかし確実に言葉を詰ませた。

敵本陣を伏兵で奇襲する策を行った。

しかし、伏兵の位置は見事に見抜かれ、あの柿崎景家と山県昌景が率いる部隊が本陣を守っていた。

本陣を陥落させる事に成功したのは、まさしく味方がドン引きする程の、本多綾那忠勝の戦闘能力があつたからである。

「そもそも君ら、一夜城の目の前でぐるっと回転して転進してたよね。

言いたく無いけどアレ隙だらけだったよね。

鬼が近づいてたからその対処を優先させて追撃しなかったけど」

直後、一二三が熱いお茶をすすりつと下品に音を立てて飲みながらそう告げる。

「貴女は……?」

「武藤昌幸、通称は一二三……」

私も当事者の1人だから、当然、話に加わる権利があるよね?」

美空が一二三に『今までどこほつつき歩いてた?』とアイコンタクトで尋ねる。

一二三は美空に『え? 最初から居たよ』とアイコンタクトで答える。

「さあどうなんだい？ あの時私が劍丞隊を追撃したらどうなっていたか？」

今孔明殿と名高い竹中半兵衛殿はどうしていたか？ さあ答えてもらいましょるか」美空からの『嘘つけコンニャロウ!!』という抗議のアイコンタクトを意図的に無視しつつ、一二三はさらに詩乃に追及をかける。

詩乃は再び言葉を詰まらせ、考え込み……

「勝敗の条件は本陣の陥落か、空さん、名月さんが討ち取られる事です。

劍丞隊の全滅ではありません」

……考え込んだ結果、詩乃がそう言い返す。

「そうかいそうかい。では犬子が新田劍丞殿を殺すために襲撃した時、

雫と九十郎が身体を張って助けに来た事はどうだい？

聞けば貴女と蜂須賀小六殿は犬にされ、しかも強姦までされかけたそうじゃないか」

「うぐ……そ、それは……」

詩乃がまたもや言葉を詰まらせる。

あの時……犬にされて犯されそうになったあの時に感じた恐怖は筆舌に尽くしがた
い。

幸いにも、挿入されたのは先端部が数cm程ですみ、性交と呼べるような事にまでは
至っていない。

もしもあの時、姫野と小波、雫、そして九十郎が助けに来なければ、劍丞隊は一人残らず全滅し、劍丞が殺されていた事は確かである。

「まだあるよ。鬼が出たとの狼煙が出たのは確かに空陣營の本陣が陥落した後だ。

「ただ私の友人は目が良くてね、

狼煙が上がるよりもずっと早く鬼の襲来を察知していた。

「だから劍丞隊の追撃をしなかった」

「な、何を根拠に!？」

「典厩武田信繁が証人だ! まさか甲斐の武田信繁が嘘つきだとしても言わないね!」

「それは……」

詩乃が三度言葉を詰まらせる。

武田晴信は同盟破りを繰り返す大嘘つきで有名であるが、その妹、武田信繁は嘘や曲がった事が大嫌いな事で有名である。

表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸は、再び湖衣と夕霧を勝手に巻き込む事で窮地を脱しようとしていた。

特に湖衣の御家流『金神千里』は普通に武田の軍事機密であるにも関わらずだ。

当然、交渉のネタにする許可は湖衣にも夕霧にも取っていない。

「さらに! 鬼の襲来を知らせる狼煙出るのも遅かった!」

長尾景虎、柿崎景家、そして甘粕景持殿が変装して勝手に参戦したせいで、越軍の命令系統がぐちゃぐちゃになっていたからね。

つまり、鬼の襲来があつたのは空陣營の本陣が陥落するよりの前の事！ よつて

……」

そこまで言うと、一二三と綾那の視線が交差する。

硬い友情の視線、熱い信頼の視線が交差する。

『分かつているね？』『分かつているのです』と視線で伝え合う。

そして……

「まだ！ 負けてないっ!!」

「まだ！ 負けてないのですっ!!」

一二三と綾那の声が重なる。

同時に詩乃に向かって2人が人差し指をびしつと突き出し、返答を迫る。

詩乃はしばしの間黙り込み……

「なるほど、理屈は通らなくもないですね」

……ある種の敗北宣言にも近い事を呟いた。

「なあ、やっぱり……」

劍丞が何かを言おうとするが……

「しかし、鬼の襲来を知らせる狼煙が上がるよりも前に、空陣營の本陣が陥落したのも確かな事実です。

そしてもう一つ……長尾景虎殿の密命を帯びた前田犬子利家によって、少なくとも数人の犠牲者が出ました。

私を含めた大勢が犬に変えられ、あと一步の所で我が主新田劍丞が死ぬところでした。

この落とし前はどのようなにつけるつもりですか？」

しかし、劍丞の言葉を遮り、やや早口で方向性を変えた追及をした。

これは理屈の話では無い、感情の話、面子の話だ。

強い怒りを籠めて、そう易々とは引き下がれないという態度を示す。

が……

「(……当然、次はそう来る。当然、予想はしていたし対策も持ってきた)」

一二三の表情は変わらない、極めて平静であった。

一方、綾那は顔を伏せ、右腕に血管が浮き出る程に強く力を籠め、肩をわなわなと震えさせていた。

その感情は怒りであり、憤りである。

「そもそも……そもそも……」

そもそも綾那がこの場に來た理由は怒りである。

強い強い怒りの感情を叩きつけるために來たのだ……即ち……

「鬼に強姦された直後の女を無理矢理嫁につて……しかも離婚までさせるつて……
てめえら鬼以上に鬼なのですうううううーっ!!!」

綾那の怒声というか、罵声が春日山城全体に響き渡った。

……

……

……

「え、決死の交渉の結果……」

美空が釈然としないと言いたげな表情で頬をポリポリと搔く。

助けてもらったのは確かだが、それはそれとして色々と割り切れない思いを抱いてい
た。

「交渉の結果……」

「こゝ、交渉の結果……」

「(劍丞様の嫁になれって言われたら切腹しよう)」

粉雪と九十郎が緊張した面持ちで美空の次の言葉を待ち、犬子は人知れず割腹自殺のための短刀を握りしめながら美空の話を聞いていた。

3人の視線が集まる中、美空は意を決して口を開く……

「交渉の結果、私と松葉の2人が劍丞の嫁になるという事で収まりました、マル」

なんやかんやで、言い出しつぺに全責任をとってもらおうという事になっていた。

松葉は劍丞君が越後にいる間にしれつと誑していた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第111話『今日も一二三は平常運転』

ここまでの物語は『犬子と柘榴と九十郎』の物語であった。

ここから先の物語は『犬子と柘榴と一二三と九十郎』の物語である。

前田利家だから助けた、前田利家だから愛せない、ただの犬子とは思えない。

それは九十郎にとっての真理であった。

秋月八雲によつて生まれ、新田劍丞によつて扶られたトラウマが、九十郎をそうさせた。

しかし、九十郎は一步を踏み出した。

前田利家と……いや、犬子と本気で向き合う覚悟を決めた。

柘榴の愛と、美空の弱さを胸に抱き、犬子と向き合う覚悟を決めた。

そんな九十郎が、犬子に力の限り『I love you』を叫ぶ物語。

そんな九十郎が、柘榴に魂を籠めて『I want you』を叫ぶ物語。

犬子と柘榴が、そんな九十郎にありつただけの愛を注ぐ物語。

そして、それと同時に……

「光璃……光璃いつ!! しっかりしろ! 目を開けてくれ!

死ぬんじやねえ! 頼む、頼むから……起きてくれ! 光璃いつ!!」

……それと同時に、九十郎に新たなトラウマが刻まれる物語。

九十郎のファースト幼馴染である武田光璃が、九十郎の目の前で惨殺される物語。

「や、やめて……嫌だ、そんな目で私を見ないで……」

武藤一二三昌幸が光璃を裏切り、武田晴信を殺害する物語。

「わ、私は! 私は九十郎のために! キミのために頑張ったんだよ!

疑り深くて用心深い武田晴信を騙し通して! 湖衣も典厩様も裏切って!

死地に誘き出して! 全部キミが武田晴信を殺したいと言ったからだっ!!」

一二三が九十郎に恋をして、主君を裏切り、友を裏切り、光璃を殺す物語。

「分かる訳が無い! 分かる訳が無いじゃないかっ!

御屋形様がキミの幼馴染だったなんて! 私に分かる訳が無い!

私は! わ、私は……キミに褒めてほしくて、喜んでほしくて、それで!

表裏比興と書いてクソヤロウと読む一二三が、生まれて初めて本気で後悔し、本気で

涙を流す物語。

「そんな目で……そんな目で私を見ないでえっ!!」

この物語は、九十郎が自らの幼馴染である武田光璃をうっかりブチ殺してしまう物

語。

武藤一二三昌幸が武田晴信を全力で裏切り、全力で殺し、そして全力で後悔する物語。
一二三と九十郎が、光璃の死を踏み越える物語……『犬子と柘榴と一二三と九十郎』の
物語。

「我は武田信玄、明日この世界を肅清する」

「やつほく、九十郎、おつひさく……どしたの？ そんな顔しちやつてさ。

もしかして、あたしの顔見忘れちやつた？」

そして大江戸学園の馬鹿共が動き出す。

……

……

……

「一二三ちゃん、私の切り札、勝手にバラさないでつて前にも言ったよね」

湖衣が珍しく怒気を孕んだ声と瞳で一二三に詰め寄っていた。

「前にも似たような事があつて、前にも怒ったよね。

今回が初めてじゃないよね。

他人の御家流を勝手に交渉のネタにしたのも今回が初めてじゃないよね。

次やったら本気で絶交するよつて言ったよね」

そう言いながら、分かり易く私怒っていますという態度でずいっと一二三に詰め寄った。

こういう分かり易さが、一二三が湖衣を友人と呼んでいる理由の一つである。

「一二三、またこつちに無断で夕霧を交渉のネタにしやがったな？」

夕霧から氷点下とすら思える冷たい視線が向けられる。

「いや、典廐様って使い勝手良いんですよ。」

御屋形様と違つてまだ積極的な同盟破りしてませんし、

高過ぎず低すぎない適度に地位があつて、相手も無視しづらいですし、

咄嗟に名前を出すうえでは……」

「誰が夕霧の名前の有用性を語れと言つたでやがるかっ!!」

夕霧が激怒する。

主君の妹を使い勝手が良いだなんて表現できるのは、世界広しといえど武藤一二三昌幸ただ一人……でも無い所が戦国時代の怖い所である。

「一二三、夕霧もこんな事は言いたくねえでやがるが、

こつち（越後）に来てからの一二三の行動はどっかおかしいでやがるよ」

「そうですね、私もそう思いますよ」

元々、一步間違えれば破滅一直線の危うい橋を、無自覚で渡っていた粉雪を止めるた

めに越後に来た。

そして九十郎に出会った。

犬子と劍丞の一件で精神的に参っていた九十郎に抱かれた（第83話）。

あの時から、一二三は自分の頭がイカれてしまっていると自覚している。

……が、それをそのまま湖衣や夕霧に伝えると肅清されるので何とか取り繕う必要がある。

「一二三ちゃん、何か悩み事でもあるの？ 御屋形様には言えない悩みなの？」

わ、私で良ければ力になるから……」

「嫌だなあ、私が湖衣に嘘や隠し事をした事が今までであつたかい？」

「大量にあるよね、数え切れないくらいあるよね。」

桶狭間の時は主君（今川義元）殺しの片棒担がせたよね」

「友達じゃないか」

「あの時も友達じゃないかって言ったと思うんだけど。」

友達だからって信じたのがあの結果なんだけど」

湖衣と一二三の間に不穏な空気が流れ始める。

「ま、まあまあ、あの時は義元を殺すって決めたのも、

湖衣を巻き込むって決めたのも姉上でやがる。」

「一二三は姉上の命に従っただけでやがるよ」

直後、夕霧が慌てて2人の間に割って入り、湖衣をなだめる。

「(うゝむ、全くもって裏切り難い妹君だね、本当に)」

「一二三が心の中でそう思い、僅かに視線を伏せる。」

尤も、それでも裏切る時は汗一つかかずに裏切れるのが表裏比興たる所以であるが。

「今度やったら本当に絶交だから」

……結局、夕霧が宥めたのもあり、基本人の良い湖衣はまたもや警告で済ませてしま
う。

彼女がこのセリフを一二三に向けたのは今日で5回目である。

最近、湖衣はもう二度と一二三に出し抜かれまいと猛勉強をしている。

猛勉強をしているからこそ、分かってしまう。

「一二三も好き好んで不義理をしているのではないと。」

だからどうしても許してしまう、次は無いよで済ませてしまう……何度も何度も。

「そろそろ聞かせるでやがるよ、一二三が一足早く越後に入った理由を。」

いきなり夕霧達を越後の後継者争いに巻き込んだ理由に、

勝手に夕霧の名前を交渉のネタにした理由も聞かせるでやがる。

たぶん、母様……いや、武田信虎の様子を探りに行かせた、

粉雪の關係だつて事までは分かるでやがるけど」

「流石は典廐様、ご明察です。」

斎藤九十郎が好きだと公言して、越後にいつまでも滞在してる今の粉雪は、結構危険な状態です」

「姉と同じく、裏切るのではないか……そういう噂は何度か耳にしてるでやがる。」

信虎を探れと命じたのは夕霧でやがる、できれば何とか誤解をときたいでやがる」
「いえ、あえて誤解はとけません」

「粉雪に死ねとでも言う気でやがるか？」

夕霧が慌てた様子で聞き返す。

粉雪の自助努力では100%死ぬという、逆の意味で凄い信頼があつた。

「死の危険は否定できません、みすみす死なせる気もありませんが。」

その代わり、上手く事を運べれば目の上のタンコブを綺麗に取り払えます」

「つまり……どういう事でやがるか？」

「私が用意した策は、その誤解を逆に利用する事なんです」

「……り、利用？」

夕霧が思わず聞き返す。

夕霧はどうやって粉雪を平穩無事に甲斐に戻らせるかしか考えていなかった。

しかし、一二三はそれを逆に利用すると言ったのだ。

「長尾景虎の立場から見れば、今の粉雪はとても美味しい。

越後の人材は長年の戦乱によって枯渇し切っていますから。

槍を取っては武田四天王でも最強、

精鋭赤備えを率いる将を寝返らせる事ができるかも……」

「粉雪に裏切ったふりをさせるつもりでやがるか!？」

夕霧の顔が驚愕に染まる。

頭の中によぎる言葉は、無理、無茶、無謀だ。

確かに粉雪は武田四天王最強であるが、同時に武田四天王の中で最も演技と腹芸を苦手としている。

裏切ったふりをして長尾景虎を騙しぬくなんて芸当ができるとは思わなかった。

「実は私も裏切っているんです、斎藤九十郎殿に一目惚れしてしまいました。

あの人の顔を見るだけで子宮が疼いて、子種を求めてきゆうつとするんですよ」

「なっ!？」

「ええっ!？」

続く言葉に、夕霧も湖衣も絶句する。

2人にとって一二三は、恋だの、愛だの、一目惚れだのとかいう単語とは縁遠い存在

だったからだ。

「その証拠に……ほら」

一二三がそう言うのと着ていた袴をそっとたくし上げる。

彼女の秘部を覆い隠す布は僅かに湿り気を帯びて変色していた。

そして一二三がそれを右にずらすと、白濁液が……ほんの少し前（第108話）に一二三が男性に抱かれて、膣内射精された事を示す証拠が漏れ出た。

「一二三、まさか!？」

「さつきおねだりしてきたんですよ。」

身体が疼いて、子宮が疼いて我慢できないから、お情けをくださいって」

「く、九十郎さんに……だよね？ あの、確か前に温泉で鉢合わせした……」

「うん、その人。結構気持ち良かったかな」

湖衣と夕霧が思わずかつて見た（第53話）九十郎のち〇この色艶を思い出し、顔を真っ赤にする。

あの時、2人は温泉の地縛霊の影響を受け、もうちよつとで九十郎に抱かれている所であった。

あの時した選択を後悔した訳では無いが……思わず考えてしまった、あの時雰囲気の流れされていたらどうなっていたかを。

「つ、つまり粉雪一人では騙せないから、一二三ちゃんが手助けするって事なの？」
「演技には自信がある」

一二三がふふーんと鼻を鳴らしながら胸を張る。

『はい』とも『YES』とも言っていない所がポイントである。

「まあそんな訳で、現在長尾景虎を殺すための罠を準備中です。

御屋形様にはそう伝えておいてください」

「成程……確かにそれなら、粉雪の肅清は回避できるかもでやがるな」

「でも、粉雪は大丈夫なのかな？」

「大好きな九十郎さんを騙して裏切る事になるけど……」

「その辺は私の方から言い含めておくからさ」

「説得するとは一言も言っていない所がポイントである。」

「さて、長尾景虎殿にもっともっと信用してもらうための一手を打とうと思うんだけ

と」

「まだ何かやる気でやがるか？」

「確か典厩様がこつちに来た本来の理由は……」

「ああ、新田劍丞を甲斐に連れてくる事でやがる。」

「はい、つは姉上からの直々の命でやがるよ。」

まあ、呼んだ後どうするかは聞かされてねーでやがるが」

「それを使います」

「ど、どう使うでやがるか……」

「この一二三さんはアフターケアにおいても万全だつて所をお見せするつて事ですよ」

「あ、あふたあ……?」

「け、けあ……で、やがるか?」

聞き慣れない単語を聞いて、湖衣と夕霧が首を傾げる。

一二三は首を傾げる2人をまたもや自分の策に無断で巻き込む気がマンマンだ。

表裏比興と書いてクソヤロウと書く真田昌幸は今日も平常運転であつた。

この日はまだ、へらへらと笑いながら外道殺法を考え、得意の二枚舌外交を味方に向かつて炸裂させる、いつもの一二三であつた。

……

……

……

「交渉の結果、私と松葉の2人が劍丞の嫁になるという事で収まりました、マル」

「なんやかんやで、言い出しつべに全責任をとつてもらおうという事になつていた。

松葉は劍丞君が越後にいる間にしれつと誑していた。

「おい何で松葉が出てくるんだよ」

九十郎が思わずツツコミを入れると、柘榴と美空がたんとも言えない珍妙な顔で互いの目を見合つて……

「明日からあいつの綽名はスケベ野郎よ」

「明日から劍丞の事はスケベさんつて呼ぶ事にするつす」

新田劍丞に大変不名誉な綽名がついた。

美空と柘榴がちよいちよいと手招きして九十郎を近くに呼ぶと、美空が右耳、柘榴が左耳から先程一二三から聞いた事の経緯を耳打ちする。

「ひそひそひそひそ……」

「ふんふん、まあその位ならやりかねえなあ、劍丞なら」

「ごによごによごによごによ……」

「おいおい、そんな事までやってんのかよ、手が速いな劍丞は」

「ひそひそひそひそ……」

「待て、過程が何段か抜けて無いか？ 聞いた通りに話してるつて？」

あいつあんな澄ました顔してヤルことヤツてたのかよ……」

「ごによごによごによごによ……」

「つて、美空お前劍丞抹殺作戦に松葉巻き込んだのかよ!？」

洒落になら……いや何で松葉承諾したよ!? アレをコレしたばっかだろ!」

「ひそひそひそひそ……」

「ハハッ、ワロス……そーかそーか、モテ男様は違うねえ」

「く、九十郎!? 柘榴と美空様から何を聞いたのさ!」

微妙に蚊帳の外に置かれていた犬子が耐えきれずそう叫ぶ。

「つまり劍丞君はラノベ主人公じゃなくてエロゲ主人公だったって事だな。

異世界転生ハーレムエロゲ的な」

「ごめん九十郎、全然分かんない」

「柘榴達が昨日の戦の準備をしている間に、スケベさんは松葉とスケベしてたつす」

「え? あの犬子だけじゃなくて松葉さんにも手を出してたの?」

「呑気な男って言うか、狂喜の沙汰だぜ」

「狂気の沙汰ほど面白いつて事つかねえ、松葉がそういう趣味だとは知らなかったつす」

犬子粉雪が思わず真顔になる。

誑しだという噂は聞いていたが、ここまでとは思っていなかった。

自分が九十郎に捨てられるかもという恐怖に震え、訳も分からず愛する夫を裏切ってしまった事への罪悪感に苛まれていた間に、当の劍丞は女漁りかと……犬子は目の前が

真つ暗になった。

何と言うか……失望していた。

「しかも本人は満更でも無いって顔してたわ」

「なんやかんやで長い付き合いつすけど……あんな顔した松葉は見た事がねえつす。

完全に女の顔になってたつす」

普段の松葉の姿を知る美空と柘榴が酷く動揺した様子でそう呟く。

一二三がまるでセツト販売の如く松葉も劍丞の嫁にすると言い出した時、何故かそのタイミングで通りかかった松葉は少し頬を赤く染め、こくと大きく頷いた。

表情そのものはいつもの鉄面皮のままであつたが、瞳がキラキラと宝石の如く輝いていた。

正直な所、鬼との戦いを見据え長尾との繋ぎを求める劍丞にとって、松葉が劍丞の嫁になる事はそう悪い話では無い。

劍丞の心情的にも、嫌々ながら嫁になるより、自ら望んで嫁になつてもらつた方が何倍も良いに決まっている。

だからこそ劍丞も、詩乃も、一葉も乗つた。

柘榴や粉雪の代わりに松葉を嫁に出すという一二三の提案に……だが……

「美空様は……美空様は、それで良いんですか……？」

震える声で、恐る恐るといった様子で、犬子は美空に確認する。

本当は今でも剣丞を殺したいという気持ちがある。

もし美空が望まぬ婚姻に対して本気で嫌がる素振りを見せれば、雫や九十郎に止められようとも、再び剣丞の命を……という考えはあった。

「先に言っておくけど、もう剣丞を殺そうとしちゃ駄目よ」

しかし、そんな犬子の内心を見透かすように、美空は釘を刺した。

「……正直に言うわ、松葉が剣丞とそういう関係になった事、全く気付かなかったわ。

そんな素振りは無かったし、松葉はそういう性格ではないと思っていた。

剣丞が犬子や公方様を洗脳してるかもって疑い、増々強まったわ」

「だったらどうして!？」

「だからこそ、私なのよ」

美空がきつぱりとそう断言する。

「九十郎……大好きよ九十郎、心の底から愛しているわ」

そして美空は潤んだ瞳で九十郎の顔を覗き込み、愛していると言いながら、そつと唇に唇を重ね合わせた。

犬子と柘榴、そして粉雪がおおっと感嘆の声をあげる。

「美空……」

「今ここで誓うわ、長尾美空景虎は九十郎を愛していると、一生愛し続けると。」

この先何があるうとも九十郎だけを愛する事を、

だからもし……もしもこの先、私が唐突に劍丞様大好きくなんて言い出したら……」

「劍丞に洗脳された……そう思えって事か？」

美空が頷いた。

「正直に言つて、俺は劍丞が女を洗脳してるかもつて話、あんまり信じちゃいけないんだけどな」

「それだと犬子は素で劍丞に抱かれたつて事になるわよ」

「いや、劍丞だぞ、あんなイケメンが相手なんだし、犬子もふらつと惹かれても……」

九十郎の言葉が不自然に途切れる。

犬子が突然九十郎の顔をがっしと掴み、唇と唇を重ね合わせたのだ。

「好き、好きだよ九十郎」

犬子は九十郎の言葉を遮り、九十郎の目をじいゝつと見つめながら、魂を籠めてそう告げた。

「……俺も好きだぞ、犬子」

九十郎はやや気恥ずかしそうに頬を掻き、犬子に対する愛の言葉を告げる。

ちよつと前の九十郎なら全力犬子から目を逸らしていただろうが……今はもう、犬子

と見つめ合う事にも、犬子に愛を告げる事にも抵抗感は無い。

「……犬子が素で劍丞様に抱かれたなんて事、信じないよね？」

犬子が真剣な表情でそう尋ねる。

九十郎が好きだという事は、犬子にとっての聖域だ。

そこだけは疑われたくない、信じてほしい……それは犬子の心からの願いだ。

「劍丞は敵じゃねえ、他人の嫁を洗脳でも何でも無理矢理手籠めにするような奴でもねえ。」

上手く言えねえが、誰かにハメられたんじゃねえかって思ってる」

「ごめん、犬子は劍丞様が信じられない。本当は薬か、御家流か何かで……」

犬子に九十郎の事、忘れさせたんじゃないかって思ってるよ、今でも」

「私も犬子と同じ気持ち。犬子が九十郎の事を忘れるなんて、尋常な事じゃないわ」

美空が犬子に追従する。

美空と犬子は、劍丞が女性を洗脳する能力を持ち、それで犬子を手籠めにして、一葉達に好意を植え付けていると確信している。

「粉雪、どー思うっすか？」

柘榴がひそひそ声で粉雪に意見を求める。

粉雪はうーんと腕組みして、首を傾げる。

美空や柘榴と違い、粉雪は犬子との接点がそう多くない。

犬子がどれだけ九十郎を愛しているかを良く分かつていない。

「すまん、あたいは何ともいえないぜ。」

そもそも好きでもない相手に抱かれる能力なんて、想像もつかないって言うか……」

「粉雪は蘭丸とも遭遇してねーっすしね……」

はあっと柘榴がため息をつく。

金ヶ崎で生誕し、劍丞達を手玉に取り、犬子と柘榴を快樂墮ち一步手前にまで追い詰めた恐るべき鬼子を粉雪は知らない。

「でもまあ、それを加味しても柘榴は半信半疑っす。」

スケベさん（劍丞）とは何度か会って、何度か話してるとっすけど、

犬子を洗脳して手籠めにするような奴には見えねーっす。

九十郎の言う通り、

何者かにハメられたって線が一番可能性あるんじゃないやねーかって思ってるっす」

「劍丞に犬子を抱かせて、誰に何の得があるのよ?」

「スケベさんにこそ何の得もねーっすよ、思いつきり犬子や御大将に反感持たれてるっす」

「無意識の才能、御家流の暴走、あるいは単に犬子を抱きたかっただけ……」

劍丞が自分のち〇こ、もとい洗脳能力を卸し切れているという保証はないわね」

「まあ、その可能性も捨てきれねーっすね。でも、そうである証拠は何もねーっす」
議論は平行線であつた。

劍丞に洗脳能力があるのか。

それを使つて犬子に九十郎の事を忘れさせ、犬子を抱いたのか、それを確定するよう
な情報や証拠は何一つ存在しない。

それ故に……

「だからこそ、私が新田劍丞の嫁になるのよ。だからこそ私で無ければならないの
……

どっちみち、劍丞の本質を見極めない事には、手を結ぶのも、殺すのもできなわ」

「お前、この期に及んでまだ劍丞を殺そうとしてるのかよ？」

「大事な犬子を傷モノにした報いは必ず受けさせる。必ず後悔させてやる。」

まあ……調べた結果、劍丞が何かしらの陰謀に巻き込まれてるだけって分かったら、
今度はその黒幕をとつちめる方向に行くわよ」

美空が気楽な顔で、何でも無い事のように言う。

だがしかし、柘榴も、犬子も、粉雪も、基本屑で能天気九十郎すらも何も言えなくなつ
た。

九十郎は知っている……美空が劍丞を怖がっていた事を（第83話）。美空が平気な訳がないと思つた。

犬子も、柘榴も、粉雪も、九十郎と同じ事を考えていた。

「御大将……すまねえつす、柘榴が綾那に負けなけりや、こんな事にはならなかつたつす」

柘榴が姿勢を正し、深々と頭を下げた。

「頭を上げなさい、柘榴。勝つた負けたは兵家の常つて昔から言うでしょう」

「それを言うならあたかも同罪だぜ。油断してたとは言わねえけど。」

すまねえ、それしか言う言葉が見つからないぜ」

粉雪もまた深々と頭を下げた。

「武田四天王が頭を下げるんじゃないわよ、人に見られたら変な誤解をされるわよ」

「分かつてるぜ、そんな事は。だけど……同じ男に惚れた女だから……だから、すまねえ」

粉雪がもう一度頭を下げる。

目尻に涙すら浮かんでいた。

綾那は強すぎた。

手も足も出なかつた。

そして無様に負けた。

自分が弱かったせいで、柘榴は鬼に犯された。

自分が負けたせいで、美空は好きでもない男の嫁になる事になった。

粉雪にとつて、美空も柘榴も、何度も殺し合いをした敵だ。

しかし同時に、同じ釜の飯を食い、同じ男に惚れた女でもあるのだ。

「それを言うなら！ 犬子が、犬子が……」

犬子が耐えきれず、ふるふるすると震えながら美空の目の前で土下座をした。

「犬子が剣丞様を殺していればっ!!」

九十郎は無言で犬子の後頭部をひっぱたいた。

「九十郎が邪魔さえしなければっ!!」

九十郎は無言で犬子の後頭部をブン殴った。

「あと一歩で殺せてたのになっ!!」

「おい柘榴、その辺に武器になりそうな物は無いか？」

「ハリセンで良いっすか」

「それで良い、貸してくれ」

九十郎は柘榴から渡されたハリセンを全力で犬子の後頭部に振り抜いた。

「パァンツ!!」という良い音が練兵館に響き渡った。

「九十郎、痛いよ〜」

「痛いじゃねえよ。俺と官兵衛が必死こいて劍丞を守ったのを全否定じゃねえか」

「……九十郎、本当に犬子の事愛してるの?」

ズキズキ痛む後頭部を抑えなら、犬子が九十郎にじと〜と恨めしい視線を向ける。

「大丈夫大丈夫、心配しなくても愛してるから」

「何か、扱いがぞんざいって言うか、適当じゃない?」

その……えつと……劍丞様と、シた時、怒るより先に劍丞様の命乞いしてたし（第7

6話）

「言われてみれば……むしろ真つ先に怒るべきよね。

私より先に劍丞に詰め寄るべきよね」

「考えてみれば、御大将が劍丞の嫁になるって話を持ち出したの、

九十郎の命乞いがきつかけだったつすよね」

本来第76話で出すべきツツコミがようやく美空達から発せられる。

「あの時九十郎が男らしく劍丞をブン殴ってたら、

犬子も劍丞を殺そうとするまで悪い詰めなかつたんじゃねーっすか」

「お、おいおい、それじゃあこの状況、全部九十郎が悪いみたいになるぜ。

流石にそれは言いすぎだろ……精々2割か、3割くらい……」

美空の、犬子の、柘榴の、そして粉雪の視線が一斉に九十郎に向けられる。

なんとなく、全部九十郎が悪いっていう空気が流れ始める。

まあ、実際の所全部九十郎が悪いのだが。

「皆色々胸の中に抱えてるみたいだし、

とりあえず全員で2く3発ずつ九十郎を殴って手打ちにしましょうか？」

……ここで美空が余っていたハリセンを拾い上げ、何かの解決になつていようでの解決になつてない提案が出す。

「賛成っす！」

柘榴が脊髄反射で賛意を示し、九十郎にハリセンで殴り掛かる。

ほぼ同時に美空も九十郎に飛び掛かっていった。

「なっ!! おいちよつと待て柘榴! 美空! は、話せばわかる!!」

「問答無用!!」

「問答無用っす!!」

情けなく逃げ回るマツチヨ、追いかける2人の女。

「ぶっ……くくく……」

「本当、九十郎って時々凄く恰好悪いなあ」

まるでコントのような光景を前に、犬子と粉雪がくすくすと笑い合う。

美空達3人は本当に楽しそうで、さつきまであつた暗あゝい空気が吹き飛んでいた。「それじゃ、あたいらも行くかだぜ」

「さつき九十郎の責任は2く3割って言つてなかつたですか？」

「2く3割の責任だから、2く3発殴らせてもらおうぜ。1発1割って事で」

「それは……」

チラリと九十郎の方を見る。

九十郎は2く3発どころか、10発も20発も殴られてボコボコにされつつあつた。

女には手を出せないとしても考えているのか、少しは責任を感じているのか、その両方か……九十郎は反撃もせず、逃げ回るだけだ。

「やつぱり、犬子も行こうかな」

「おう、そうこなきやだぜ！ で、アレつてもう残つてないのか？」

「犬子作り方知つてるよ！ ハリセンって言つてね、叩いた時に良い音を出すには、

端つここに折り目を付けないように……こんな感じで紙をね……東ねたらこうやつて……」

「ふむふむ……こんな感じか……」

「げつ、お前もかブルータス！ いや犬子！

ちよ、ちよつとタンマ、いくらハリセンでも痛い物は痛いって……」

犬子と柘榴と一二三と九十郎第112話『雫、またもや失言する』

美空達が九十郎をハリセンでしばき倒した翌日の早朝……

「無い……無い……ここにも無い、ここにも……」

雫が泥と汗に塗れていた。

未だ血と消炎の臭いが立ち込める戦場にて、比喻表現で無く草の根を分けてある物を探していた。

「雫様、3班と6班が戻ってまいりました」

そこに柘榴の部下……越後長尾景虎が誇る先手組の小頭がやってくる。

「首尾はどうでしたか？」

草むらに頭から突っ込み、小頭に小柄な尻を向けたまま聞き返す。

本郷一刀なら瞬時に発情して襲い掛かる光景であるし、普段の雫なら男性にこんな姿を見せる事もないのだが……今は一分一秒の時間すら無駄にはできない。

「それが……やはり、見つからないとの事です……」

草むらの中で、雫が静かに落胆する。

しかし、彼女の冷徹な軍師としての側面が、即座に次は何をするべきかを弾き出す。

「もう少し搜索の範囲を広げます。地図をください」

「は、はい」

小頭が今回の活動の拠点として設営した陣幕に走り、雫が指示したこの辺りの地形図を持ってくる。

「3班が探した場所は……6班が……」

携帯用の墨壺と小筆を使い、地図上にバツテンマークと、搜索をした時間を書き込む。

そして昨日の戦いの内容や、柘榴達が見つかった場所、空陣營の本陣があつた場所、綾那達奇襲部隊が通つた道筋を思い浮かべ、雫が今欲している物品がありそうな場所を計算する。

「……では、次はこの場所と、この場所を探してきてください」

「あの……流石に遠すぎるかと……」

小頭が冷や汗を流しながら指摘する。

鬼の襲撃への対応に隊長（柘榴）不在のまま奔走し、やっと終わったかと思えば探し物があると駆り出され、不眠不休で働かされている。

越軍先手組の疲労と眠気はピークに達しつつあつた。

「探してください！ 必ずあります！ 必ずありますから！」

「いえ、存在そのものを疑っている訳ではないのですが……悪の……悪の、えつと……」
「悪の戦争教本ポリウム1と、ポリウム2です！」

1冊は柘榴さんに、1冊は空さんに渡しました。

お2人は先の戦闘のどこかで落としたと言っていましたから、必ずこの近くにある筈です」

……そう、雫は今、先の戦いで書いた作戦指示書を必死に探ししているのだ。

「無礼を承知で申し上げますが、既に誰かに拾われたのでは……」

「その可能性も考えて、軒猿の皆さんにも並行して動いてもらっています。」

先手組の皆さんは、指示した場所の搜索を続けてください」

「しよ、承知しました、もう少しお待ちください」

そして雫の指示が伝えられ、全く先の見えない残業に対する怨嗟の声と共に、先手組が指示された場所へと走り出す。

本当に見つかるのだろうか。

仮に見つかったとして、役に立つのだろうか。

「あ……朝日……」

気が付けば東の空から太陽の光が差し込んできていた。

結局、夜が明けるまで探し続けて、何の手掛かりも得られずに時間だけが過ぎていく。

「急がないと……」

少し弱気になってしまった自分を叱咤し、奮い立たせ、もう一度雫は近くの茂みに頭を突っ込んだ。

美空や柘榴には、できる限り交渉を引き延ばして時間を稼ぐようにと伝えてある。

それでも、相手はあの竹中半兵衛だ。

引き延ばし工作がそう何度も通じる相手ではないだろう。

そうなればきつと空陣営が負けたときの約定……自分を含めた、九十郎に惚れた女達7人全員が劍丞の嫁になるという約定の履行を求められるだろう。

自分はどうなっても構わないが、女として好きになつた男性である九十郎のためにも、自分の能力の限りお仕えしたいと思つた劍丞のためにも、どうしても避けなければならぬ。

「絶対、後で不和の種になる……」

四つん這いになって、這いまわりながら雫が呟いた。

右手にべちやりと、ねばっこい液体の感触がした。

それは昨日の戦いの中で柘榴が鬼に犯され、子宮にたつぷりと注ぎ込まれた子種の一部であつた。

「私が何とかしないと、絶対に」

雫がもう一度決意する。

鬼の子種は女を必ず孕ませる。

墮胎する事も出来ない。

鬼の児が生まれるのを阻止するためには、孕んだ女ごと殺す以外に無い……剣丞の持つ鬼だけを斬る不可思議な剣ならば、あるいはとは思うが、それは単なる希望的観測だ。

「……産ませるしかない、生まれた瞬間に殺すしかない。

だけど……鬼の児を産むのももちろん、鬼との間の児とはいえ、お腹を痛めて産んだ児を、

生まれた瞬間に引きはがされ、殺される。

柘榴さんと粉雪さんの心にどれだけ大きな負担をかけるか分からない。

その上剣丞様の嫁にするなんて話になったら、柘榴さんも、粉雪さんも、どうなるか……」

雫はそんな事はさせないと決意する。

柘榴のためにも、粉雪の為にも、剣丞のためにも絶対に阻止しなければと決意する。

なお、雫はまだ知らないが、柘榴と粉雪が孕んだ鬼子は、とつくの昔に新戸の念動力でぶちっと潰されて絶命している。

報連相は大事である。

「よしっ！ とにかく急いで探しましょう！」

アレさえあれば、きつと突破口に繋がる筈ですから！」

雫が自らの頬をばちんつと叩き気合を入れ直す。

そして悪の戦争教本探しを再開する。

なお、雫はまだ知らないが、悪の戦争教本は2冊とも綾那が回収済みで、しかも美空達と剣丞達の交渉はとつくの昔に終わっている。

もう一度言おう、報連相は大事である。

「お探しの物はコレですか？」

そんなちよつと空回り気味のやる気を見せる雫の眼前に、2冊の本が差し出された。

「これ！ これですっ!! 一体どこ………に………」

「綾那さんが拾っていました」

「し、詩乃さんっ!?!」

雫が血眼になって探し続けていた逆転の切り札を差し出してきたのは、逆転しようとしていた相手……竹中半兵衛だったのだ。

あまりの驚きと混乱に視界がぐにやああと歪んでいく。

何故よりもよつて詩乃が悪の戦争教本を持っているのか？

どうして美空と舌戦をしている筈の詩乃がここに居るのか？

まさか全てが終わってしまった後なのか？

そんな疑念が脳裏に過る。

「この本を持つて、綾那さんが飛び込んできたんです。

無体な事を言うなら、一戦を交えてでも反対するぞつて」

「で、では……」

「ええ、貴女の御想像通り、かなりの譲歩を余儀なくされましたよ。

あまり認めたくはありませんが、これ程確かな証拠を突き付けられた以上は、

認めざるを得ません……私の策は全て見通されていた。

私と貴女の知恵比べは、貴女の勝ちだと」

「よ、良かった……」

安堵の息を漏らしながら、雫はその場で腰を下ろした。

血や泥だとか、鬼の精液だとかが脚や尻を汚したが、不眠不休で野山を駆け回った今

の雫には、そんな事を気にする余裕が無い。

「しかし、まさかこうも完璧に作戦を見抜かれるとは思いませんでした。

対処法も完璧です。私達が勝てたのは綾那さんが常識外れの強さがあつたが故」

「……強いという情報はありました、ですから柘榴さんと粉雪さんを。」

あの2人で止められないのなら、どなたでも無理だと思つて」

「ええ、本当に、私もまさかあの2人に勝つとは思いませんでしたし、

歌夜さん達を置き去りにして単独で空さんの本陣を陥落させるとは思いませんでした。

いくら何でも規格外にも程があるでしょうに」

「そうですね」

「一二三さん、大笑いしてましたよ。」

はっはっはっはっはっ、あんなのいちゃいちゃいくら何でもかてないやゝって」

なお、綾那が東国無双から東西南北中央無双スーパー綾那にランクアップした理由は、昔三河にいた九十郎が神道無念流を仕込んだせいである（第11話）。

つまり、敗因は九十郎である。

「で、何故詩乃さんが悪の戦争教本を？」

「預かって来ました、一二三さんから。」

たぶん貴女が探してるだろうから、返ってきてほしいと」

「……見つけてたのならもっと早く教えてくださいよ、もう」

雫が恨み言を呟きながら、詩乃から悪の戦争教本を受け取った。

自分が泥だらけ、汗まみれ、その上鬼の精液まで身体に付着している事に今更気がつく。

「それは貴女一人で書いたのですか？」

「いえ、一二三さんとの合作です。 テキサス・コンドル・キツクの練習もありましたので」

「て、てきさす……?」

「いえ、こつちの話です」

「それと、後で必要になるからと、

見つけやすくするための仕込みがあつたと聞いているんですけど、

何の事か分かりますか？」

「そんなのがあつたなら教えてくださいよっ!!」

雫が思わず頭を抱える。

不眠不休で探し回った疲れが今更ながら全身に蘇り、腰のあたりに付着した精液の悪臭が今更ながら気になってきた。

なお、仕込みの内容は湖衣の御家流が前提になるものなので、詩乃にも雫にも内緒である。

「結局、私も雫もあの武藤昌幸に手玉に取られていたという事ですか。

流石は武田の眼と畏れられるだけはあると言うべきですか……」

詩乃は頭の中で、一二三に対する警戒度を二段階程上げておく。

油断をしていたつもりはない、侮っていたつもりもない……だがしかし、詩乃は心のどこかで、この戦いは新田劍丞と斎藤九十郎の戦い、自分と雫の知恵比べと決めてかかり、一二三に対する警戒が薄くなっていったと自らを戒める。

「それで、劍丞様の嫁にはどなたが？」

「美空さんと、松葉さんです。本当はもう2、3人は引き抜いて行きたかったのですが、」

綾那さんが今にも斬りかかって来そうな目をし始めましたので「

「そうですか、2人ですみましたか……つて、松葉さん？ どうして松葉さんが？」

「劍丞様が劍丞様だったというだけです、今更驚く事ではありません」

「誑された」と

「誑しました、ええ、またです。最早驚く気力すら湧きません」

詩乃がはあくつとため息をつく。

劍丞隊に合流した直後に誘拐され、そのまま越後に居着いた雫にとって、新田劍丞のモテっぷりにイマイチ実感が伴っていない。

だがそれでも、今の詩乃のため息一つで、劍丞の異様なまでの誑しっぷりの一端を理解した。

「（美空様、大丈夫かな……？ イザとなったら責任を取るとは言っていましたか……）」

少し、美空の事が心配になる。

事前の打ち合わせでは負けた時は潔く劍丞の嫁になるとは言っていたとはいえ、九十郎への惚れっぷりはかなりのものだ。

次から次へと新しい女を誑す劍丞の嫁という立場に耐えられるかも心配だが……

「(万一、美空様が誑されたら……九十郎さん、また落ち込むかも……)」

ある意味最悪の予感が一瞬だけ脳裏を横切った。

そんな事が起きる筈が無いと一笑に伏したい所ではあつたが、犬子が突然劍丞に抱かれ、その後の九十郎の落ち込みっぷりを考えると……

「雫? 聞いているのですか?」

「ああ、すみません。 ちょっと考え事をしていました。 何の話でしょうか?」

「いえ、嫁になる、ならないはともかく。 そろそろ劍丞隊に戻って来ませんか?」

「……へ?」

予想外の言葉に、雫が思わず呆け顔になる。

考えもしなかったと言うのは流石に無いが、詩乃からそれを打診される事は予想外だ。

「理由を伺っても?」

「理由は2つあります。

1つは、斎藤九十郎が今後敵に回る可能性は著しく低いからです。

既に三度、あの人は劍丞様を助けに来てくれました。その事は認めざるを得ません」

金ヶ崎の戦い、美空が劍丞を殺そうと斬りかかってきた時、そして一昨日の戦いの中で、九十郎は劍丞を助けるために動いた。

1度目も、2度目も、3度目も、助ける理由も無いのに『劍丞は殺させねえ』と叫ぶ、ただそれだけの為に命懸けで助けに来た。

その3度の全てを、詩乃は見てきた。

特に3度目は、危うく犬の姿で、犬に犯される危機を救ってくれた……

「不覚にも、少し……ええ、ほんの少しではありますが、

決して劍丞様を見限った訳ではありませんが……その、素敵な殿方だとは思いました。

一葉様が一角の人物と言い、貴女や長尾景虎殿が本気で惚れこむ理由、

少しですが分かった気がします」

詩乃が雫にそう伝える。

「ならもう少し手心を加えてくれませんか。美空様も嫁にする人から外すとか」

「それはそれ、これはこれです」

まあ、それはそれ、これはこれとばかりに詩乃は劍丞を最大限有利にするため、全力で美空達を劍丞の嫁にしようと尽力したのだが。

心に柵を作る事は、戦国時代を生きる者の必須スキルである。

表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田一二三昌幸と、梟雄と書いてゲスヤロウと読む松永白百合久秀（未登場）、戦国DQN四天王と書いてソレガシと読む伊達政宗（未登場）は特にそれが顕著だ。

「まあ、そうですね。私も逆の立場なら、詩乃さんと同じ事をしますから。

では2つ目の理由は？」

「今回の戦を総括して……どう思いますか？」

「綾那さんの強さが別格過ぎるので、次にやる時は縛りましょう」

雫が即答する。

アレさえ無ければ完勝だったのに……という気持ちは、今なお根強く残っている。

……が、詩乃が考えている事は別の事だ。

「分かりませんか？ 今回の戦、私と貴女が2人して手玉に取られ続けているのですよ」

「手玉に……?」

そう言われて、雫はしばし瞑目し、考え込む。

詩乃の作戦を見事に見抜いた悪の戦争教本は、決して雫1人では完成させられなかつ

た。

雫単独で書いた物の完成度は精々80%だった。

残りの20%……果てしなく困難な残り20%の完成度を実現させたのは、間違いなく一二三の才覚だ。

そしてもう一つ、雫が泥だらけになつて、不眠不休で悪の戦争教本を探していた間に、一二三はその悪の戦争教本を見つけ出し、詩乃から大幅な譲歩を引き出している。

つまり……

「……なるほど、確かに一二三さんは脅威ですね」

詩乃は一二三を敵に回したが故に、雫は一二三と共に戦つたが故に、一二三の恐るべき才覚と、ラシャーヌクラスの破滅的性格の一端を理解する。

極論、何をしでかすか分からないし、何をしでかしても不思議ではないのだ。

「力を合わせたいと?」

「そうです、認めたくはありませんが、1人では届かないかもしれません。」

それ故に2人で、剣丞様をお守りするために」

そう告げると、詩乃は雫に手を伸ばす。

賛同してくれるなら、この手を取ってくれ……少なくとも雫は、そう理解する。

「ならお答えします。 時期尚早です」

「時期尚早……ですか？」

「はい、いずれ私は劍丞隊に戻ります。

いずれ劍丞様の傍で、劍丞様の力になろうと考えています。

ですがそれはまだ早いと思います。」

「何故そのように考えるのですか？」

「そもそも、私と詩乃さんの思考は、少なからず似通っています。

同じ場所と同じ問題に対応していれば、増々似通ってしまう恐れがあります」

「しかし現状、武藤昌幸殿は敵とも味方とも言い難いのも確かです。

時期を待っただけの時間が無いかもしれません」

「ならば、2つの方向から、2つの視点から目を光らせましょう。

詩乃さんは劍丞様の傍から、私は九十郎さんの傍から」

「しかし、それでは対応が遅れるかもしれません。

小波さんの口伝無量も万能ではありませんので……」

詩乃はやや歯切れが悪く、中々納得をしてくれない。

雫はそんな詩乃の表情をじいっと見つめ……

「しつかりしてくださいっ!! 自信が無いんですか!？」

「ばあんっ!! と、詩乃の頬を叩く。

詩乃しばらくの間大きく目を見開き、ぼかんとした表情で雫を見つめ返して……

「そうかも……しれません……」

その後、ふうつとため息をつきながら、そう認めた。

「今回の戦、勝てたのはたまたまです。」

ええ、たまたま綾那さんが非常識な程に強かっただけ」

「本当に反則ですよ、次回があつたら縛りましょう」

「そんな事はどうでも良いんです！ そんな事より……そんな事より……」

「……怖かつたんですか？」

雫が意を決してそう尋ねると……詩乃の瞳から大粒の涙がぼたりと落ちる。

「詩乃……さん……？」

「ち、違いますっ！ これは……これは……」

詩乃はすぐさま顔を背け、雫から涙を隠そうとする。

しかし、しけつた地面にぼたり、ぼたりと、次から次へと涙が落ちる、落ち続ける。

「ええそうですよ！ そうですともっ!! 怖いに決まっていますではないですかっ!!」

いきなり犬にされて、妙な能力で全く動けなくなつて、

そのままオス犬に犯されそうになつたんですよ！

しかも私と転子さんが人質にされて、剣承様が殺されそうになつたんですよ！

怖くて……無力で……何もできなくて……どうしようもなく……」

ぼろぼろと、堤防が決壊したかのようには涙が零れ落ちる。

張りつめていた精神が、緊張の糸がぷつんと切れていた。

軍師竹中半兵衛としての仮面が砕け、剥がれ落ち、ただの少女の顔になっていた。

その顔を見た時、雫は思った……

「(あの時の犬子さんと……似てる……)」

あの日……犬子が劍丞に抱かれ、大騒ぎになったあの日、犬子は何が起こったのかわからないという混乱と、九十郎に捨てられるのではという不安で胸が張り裂けそうになっていた。

その時に見た犬子の眼と、今の詩乃の眼が良く似ているような気がした。

「私……本当は……犬子さんをあそこまで追い込んだのは私だつて分かつて……」

もしも私が犬子さんと同じ立場だったら、もしも私に犬子さんと同じ能力があれば、

きっと私も犬子さんと同じ事を……

それなのに私は、身勝手な理屈で犬子さんを追い詰めて、

追い詰められた犬子さんが私を犬にして、強姦しようとした時に……

怖いって、誰か助けてって思って……全部私がやった事なのに……

私の自業自得なのに！ 誰か助けてって思ったんですよおっ!!」

詩乃が叫ぶ。

爆発するかのような感情を叫ぶ。

それは軍師・竹中半兵衛の……いや、ただの少女である詩乃の、罪の意識と恥の意識の発露であった。

軍師・竹中半兵衛は心に柵を作る。

だがしかし、少女・詩乃は、心に柵を作るたびに迷い、悩み、傷ついているのだ。

そんな詩乃の心に刺さったトゲが、今後の不安と重なり、混ざり、詩乃の心をぐしゃしゃに押し潰そうとしているのだ。

「しつかりしなさい！ 竹中半兵衛なんでしょう!？」

あの稲葉山城をたった15人で陥落させて！ 剣丞様から最も信頼されている！

私が憧れた竹中半兵衛なんでしょう!？」

だからこそ雫は、黙っていられなくなつた。

だがしかし、その言葉は潰れかけている詩乃の心に更に強い重圧を与える言葉である。

「(い、いけない!？ また失言を……)」

聡明な雫はすぐにその事に気づき、はつと息を吞んで自分の口を抑える。

詩乃はそんな雫の失言をまともに耳に入れ……

「……そうですね、その通りです」

詩乃の心は未だ折れない、潰れない。

折れず、潰れず、踏みとどまった。

今にも潰れそうな弱々しい心を叩き起こし、詩乃は再び軍師・竹中半兵衛としての仮面を被り直す。

「すみません、気を遣わせてしまいましたね。」

確かにそうです、高々1度や2度の失敗でくじけているような暇はありません」

それは沸騰して湯が吹き零れる鍋に無理矢理蓋をして、密閉するかのような愚行。

今この瞬間に立ち直っていないければ話にならない状況でならともかく、本気で竹中半兵衛の復活を願うのであれば、今は崩れるところまで崩れるべき場面だ。

その可能性を、この場での最適手を、雫の失言が潰してしまった。

「ちよ、ちよつと待つて！　そういう考え方もできますけど！」

ここは敢えて童心に帰って沢でザリガニ獲りでもどうでしょうかあ!？」

最早意味不明である。

「いえ、確かに今この段階で雫に戻ってもらうのは早計かもしれませんが。」

私がしっかりと剣丞様を御守りすれば良いのです」

「一見立ち直ってるようで明らかに危ない方向ですから!!」

お願いですから方向転換してください！　せめて一旦立ち止まって振り向いてえっ
!!

黒田官兵衛らしからぬ慌てぶりの雫を見て、詩乃がクスリと笑う。

少しだが気が楽になった。

今まで悩んでいた事が、まるで馬鹿馬鹿しい笑い話のように感じられた。

「ありがとうございます、雫。やはり貴女と話に来て良かった」

「あの……いえ……ど、どういたしまして……」

「信じて……信じて……良いですね？　これからも」

詩乃が雫に確認する。

前髪に隠れてやや見難いが、その目は強い強い意志が籠っていた。

「私は剣丞様の味方です。　剣丞様の味方であり続けます。　今も、これからも」

だからこそ雫は、そんな詩乃の眼を真つすぐ見返してそう告げる。

「では、最後に一つだけ聞いても良いですか？」

「はい！　私に答えられる事であれば何でも！」

雫の返答を受けて、詩乃は再び瞑目し、すうはあと深く呼吸を整え……

「雫、私は新田剣丞様を愛しています」

「はい、そうですね」

「もしも美空様が言う通り、劍丞様に女性を誑す能力……

いえ、女性を自らの都合の良いように洗脳する御家流があるとすれば……

私の愛もまた、洗脳により植え付けられた、まがい物の愛なのでしょうか？」

「え……？」

雫がほかんと目を見開く。

美空が劍丞には洗脳能力があると言っているなんて、聞かされていなかったし、そんな荒唐無稽な想像をした事も無かった。

だがしかし、森蘭丸と、前田犬子利家……2人の洗脳系超能力を駆使する人物と続けて対峙して、その能力の餌食になりかけた詩乃にとって、美空の発言は決して根拠の無い当て推量だと断言できるものではないのだ。

詩乃もまた考えていた、考えざるを得なかった……新田劍丞は洗脳能力があるのかも
しれないと。

……

……

……

「犬子、柘榴、それと一二三、ちよつと大事な話がある」

一方その頃、当の斎藤九十郎は物凄く真剣な目でそんな話を切り出した。

その目は真剣そのものであったが、犬子が思わず呆れ、柘榴が苦笑し、一二三が飲んでいた紅茶を嘔き出して大笑いするようなしよくもない話である。

即ち……

「俺に……俺に巨乳の良さを叩き込み直してくれっ!!」

先日粉雪を抱いて、貧乳も良いかなうなんて事を考えた事に危機感を持ったが故に、九十郎は巨乳の犬子と柘榴、美乳の一二三にそんな事を叫びながら土下座をしたのだ。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第115話『雫、キレる』

〜前回までのあらすじ〜

(・▽・)ノ————|||||≡≡≡ (雫袋)

〜前回までのあらすじ終了〜

「正座」

雫袋をぽくんと投げ捨てた九十郎の元にやって来たのは、明らかにお怒りの表情の小寺官兵衛さんであった。

掛け布団をまるでマントか雨合羽のように羽織っている姿が非常に情けなく、しかもその下は全裸である。

「あ、いや、さつき官兵衛をブン投げたのはだな……」

こう、若気の至りと言うか……テンションがおかしかったと言うか……ええつと……」

「いいから、正座」

「はい」

バッファローマンのような体格の大男が、自分の半分以下の身長、

しかも掛け布団一枚剥けば全裸の少女に言われるままに正座をした。

雫の姿も情けないが、九十郎の情けなさはそれ以上である。

「……私も正座します」

九十郎が正座すると、雫もまた九十郎の前で正座をする。

正座する筋骨隆々の大男と、

見た目幼女の天才軍師（マツパ）と言う訳の分からない光景が権現した。

「私にも非はありました。素っ裸で寝室に忍び込んだのですから、驚かれるのも当然です」

「そうか、じゃあ今回俺は悪くないという事でこの話はおしま……」

「でも！ 裸の女の子を窓から投げ飛ばすのはどうかと思いますっ!!」

「……ソウデスネ」

「しかも投げる前にブンブンと回しましたよね、10回くらいグルグル回りながら」

「なるだけ遠くに飛ばそうと思って」

「遠くに飛ばす必要がどこにあったんですかあっ!!」

「……ナイデス、ゴメンナサイ」

「しかも投げた瞬間にブツ飛べえっ!! と叫んでましたよね」

「やっぱ掛け声があるのと無いのとじゃ気合の入りが違うからな」

「気合を入れる必要はどこに?」

「……ナイデス、ゴメンナサイ」

「デカイ身体の九十郎がしょぼーんと小さくなつていく。」

「世界広しといえども、黒田官兵衛をハンマー投げの要領でブン投げれるのは、九十郎一人であろう。」

「それと、投げられた後、脱出までかなり大変でしたよ。」

「もがいてる間に不埒な連中に拾われでもしたらどうなつたと思えます?」

「乱暴にされるんじゃねえの、エロ同人みたいに」

「雫から氷のような冷たい視線が向けられる。」

「……スミマセンデシタ」

「九十郎、ついに土下座する。」

「見た目幼女の雫に対し土下座する大男の図は、中々シユールである。」

「全く、本当に駄目な人ですね、九十郎さんは」

「雫は越後に連れ去られてきてから、九十郎に振り回されてばかりだ。」

物理的に振り回されてブン投げられた事も1度や2度ではない。

最初は九十郎を凄い人だと思っていた。

鍛え上げられた肉体、神道無念流という剣術の使い手で、越後の龍と畏れられる長尾景虎からの信頼は厚く、西洋の優れた学術にも通じ……そして何より、自分を好きだと男らしく叫んでくれた人だと思っていた。

しかし、九十郎のそんな印象は後に覆った。

劍丞と比べて自分は駄目だと思い込んだり、犬子を劍丞に取られそうだと1人でメソと嘆いたりする女々しさがあって、その場のノリと勢いで自分を物理的にブン投げるといい加減さがあって、そして何より、自分と貞子の扱いが基本ぞんざいというか、辛辣だ。

雫という女の子が好きだという事ではなく、小寺官兵衛という歴史上の人物が好きに過ぎないというのは理解しているが、好きな歴史上の人物への扱いにしてはぞんざい過ぎるような気さえする。

だが……

「それでも、やっぱり諦められないんですよ、私は」

「……何がだ？」

「今でも私は、九十郎さんに愛されたいって思っています」

雫はキツパリと言い切った。

「俺は官兵衛の事が大好きだぞ」

九十郎もまたハッキリと断言する。

「それは小寺官兵衛という歴史上の人物が……ですよね？」

そんな雫の指摘に対し、九十郎はそうだとも、違うとも言えず、視線を左右に揺らしながら曖昧に笑うだけだ。

「私の事だけ、いつも官兵衛って呼びますよね？」

他の人は美空とか、犬子とか、粉雪って呼ぶのに」

「気づくか、やっぱり」

「気づきますよ、大好きな人の事ですから」

その言葉を口にした瞬間、雫の顔がかあつと赤くなる。

ほぼ同時に、九十郎はどきんと胸を高鳴らせ、視線を泳がせる。

「本気かよつてのは、聞かん方が良いよな？」

「本気です」

「そっか……」

それを聞くと、九十郎が姿勢を正し、衣服の乱れも直す。

基本いい加減で、基本ちゃらんぼらんな九十郎が、珍しくマトモな顔になる。

「悪い事をしたと思っっている。

俺は今までずっと犬子にも、官兵……じゃない、雫にも向き合おうとしなかった」
初めて九十郎が黒田官兵衛を『雫』と呼んだ。

ただそれだけで、雫は思わず飛び上がりそうになる程に嬉しくなった。

「もしかしたら俺は、現実逃避をしていたのかもしれない」

「現実逃避……ですか？」

「戦国時代に来たなんて認めたくなかったんだよ。

そして朝起きたら大江戸学園の一学生に戻ってるんじゃないかって期待してた。

光璃がいて、担庵がいて、遠山がいて……それと、長谷河もいる。

そんないつもの毎日が戻ってくれるんじゃないかってさ」

九十郎らしい女々しすぎる現実逃避である。

「光璃さん……う？」

「俺のファースト幼馴染だよ。

言つとくが武田晴信とは別人だぞ、偶然同じ名前ってだけで」

九十郎はキツパリとそう断言するが、ぶつちやけ同一人物である。

九十郎に比べれば何十倍も用心深く、知恵も働く雫であっても、流石に九十郎の幼馴染が武田晴信だとは思えない。

「まあつまり、俺は認めたくなかったんだよ。」

前田利家や、長尾景虎、それと小寺官兵衛が同じ人間だつて。

生きて、悩んで、苦しんで、笑つて、泣いて、血の通つた人間だと認めたくなかった。

それを認めたら、俺は……戦国時代にいる事を認めてしまうような気がしてた」

九十郎が自分自身を嘲笑うかのように言葉を紡ぐ。

それは九十郎の罪であり、九十郎の弱さでもある。

「雫、ちよつと良いか？」

「あ、はい」

九十郎が正座をやめ、雫の真後ろにどっかりと座り込む。

そして小柄な少女を背中から抱きしめ始めた。

「あ、あのっ!? 何を!？」

「こつから先は、お前の顔を見ながらじゃ喋りにくい。嫌だつたか？」

「いえ、決して嫌な訳では……」

かけ布団越しに、九十郎のゴツゴツとした太い腕が当たる感触は、決して嫌ではなかつた。

力強くて安心できる、神道無念流の鍛錬によつて鍛えられ、磨かれた、剣術家としての九十郎の腕がそこにあつた。

九十郎が話すいくつもの突飛なアイディアを現実のものにする、優れた技術者としても腕もそこにあつた。

そして何より、雫が愛した男の腕であつた。

そんな九十郎の腕を感じるのに、雫袋としてぶん投げられ、なんやかんやで泥だらけになつた掛け布団が邪魔だと思つた。

だから……

「あの……く、九十郎さん……よ、良かったらなんですけど、

お嫌でなければなんですけど、お、お布団を……ですね……」

九十郎はそんな雫の訴えを聞くと、静かに……僅かに指先を震わせながら、雫の背中を覆う掛け布団を取り払い、自分の背中をマントのように覆わせた。

まるで二人場織のように掛け布団が2人を覆い、雫と九十郎の身体が密着した。

心臓がどくん、どくんと早鐘のように鳴っていた。

「……これで、良いか?」

「はい、これで……いえ、これが良いです」

雫には、自分の顔が真っ赤になつていくのが分かつた。

九十郎の息の音がすぐ後ろから聞こえてくる。

息の音、ごくりと唾を飲み込む音で分かる……九十郎が緊張して興奮して、同時に葛

藤しているのだと。

「私が黒田官兵衛だという事が気になりますか？」

「気にならない……と言つてやりたい所ではある。」

「だがやつぱ気になるな。前田利家、上杉謙信、山県昌景……黒田官兵衛。」

「全部が全部、俺にとつちやでかくて重い名前なんだ」

「とりあえず九十郎は日本全国の柿崎景家のファンに土下座するべきである。」

「黒田官兵衛が美空様と並び評されるような名前とは思えないのですけど」

「俺にとつてはそうなんだ」

「九十郎は全く迷わずにそう告げる。」

「九十郎さんは……未来の方なんですか？」

「そして雫が核心に触れた。」

自分の真後ろで、九十郎がどきんと肩を強張らせ、唾をごくりと呑み込んだのが分かった。

「最早それ以上の言葉は不要であつた。」

「……誰にも言うなよ」

「九十郎がちよつと震えた声で、やや消極的にはあるが雫の指摘を認めた。」

「ちよつと失言癖があるが、基本的に聡明な雫にとつてはバレバレの事であつたが、九

十郎的には隠しているつもり的事实である。

九十郎は未来の知識を持っている。

雫は今、長尾にとってかなり重要な秘密を知ったのだ。

「(最近分かったけど、この人は自慢したがる性格で、

美空様は時々ブツ飛んだ事を考えて、実行しちゃう性格なんですよね……

美空様や九十郎さんは隠したがってるみたいですけど、

早めに手を打たないとどこまで知れ渡るのやら……)」

雫は将来的に物凄く胃が痛くなりそうな舵取りを……美空と九十郎のフォローという名の苦勞を背負い込む事を予感した。

普通なら嫌気がさすような未来予想に対し、雫は心が弾むような想いである。

自分が惚れこんだ相手に尽くせる、役に立てる……軍師と呼ばれる人種にとって、それは極上の美酒にも勝る喜びなのだから。

決してDMな訳ではない。

「九十郎さん、私は……雫は、貴方をお慕いしています」

そして雫はついに意を決して、もう一つの核心に触れる。

「俺は……俺は、どうなんだろうな？」

身も蓋もない返答であるが、その言葉は九十郎の心情を端的に表している。

嫌ってはいない……それは確信を持って言える。

しかし、目の前の人物は黒田官兵衛であり、同時に雫という名の女の子でもある。

雫の事を考えると、どうしても黒田官兵衛という名の笑える……もとい尊敬する歴史上の偉人の事が脳裏に過る。

良く分からなくなってしまうのだ、自分が雫をどう思っているのかを。

「九十郎さん、私を見てください」

だからこそ、故にこそ雫は退かない。

退くどころか、2人を覆っていた掛け布団を自ら捨てて、一糸纏わぬ姿で九十郎の目の前に直立した。

つい先ほど動揺の余り窓から投げ捨てた雫の裸体が、再び九十郎の視界に入る。

「ど、どう……ですか……？」

「どうって……何が……？」

「私には魅力がありませんか？ 女とは見れませんか？」

目の前にあるのは、見た目少女の貧相な身体だ。

九十郎が大好きな豊満な乳房はそこには無い。

いつもの九十郎であればへつと鼻で笑って寝所から追い出していただろう。

だがしかし……

「やべ、勃起してる……」

九十郎がバツが悪そうな表情で、それとなく股間の剛直を隠そうとする。

しかし、臨戦態勢に入ったソレを目の前の雫から隠し通す事まではできなかった。

どうしても思い出してしまう、貧乳の粉雪と身体を重ねた記憶を。

あの日、あの時、自分は貧乳の粉雪を押し倒し、その身体を貪り、楽しみ、そして膣内射精したのだと……

だからこそ、食指が動く。

目の前の貧相な胸の人物を女性認識してしまう。

目の前の女性を……雫を押し倒したい、犯したい、膣内射精したいと思ってしまう。

ごくり……と、唾を呑み込む音がやけに大きく聞こえた。

「いやでも、雫は……いや、黒田官兵衛は……」

九十郎がなけなしの理性をフル動員させて、どうにか雫から視線を逸らそうとした。

その時、九十郎の脳裏に浮かんだ言葉は、やはり黒田官兵衛を劍丞の元から引き離そうとした最大にして唯一の理由……

「梅毒……ですか？」

その瞬間、九十郎は心臓が飛び出たかのような感覚に陥った。

九十郎が脳裏に浮かべた言葉を、雫は見事に言い当てたからだ。

その話を知るのは柘榴と美空だけの筈だと（第64話）……

「柘榴からか？」

「いえ、美空様です。ベロンベロンに酔われた時に」

「あいつ意外と口軽いな……」

しかも泥酔中だったが故に、うっかり口を滑らせたという自覚すら無い所が恐ろしい。

上杉謙信らしからぬ駄目つぶりに九十郎は頭を抱え……ふつと笑う。

「上杉謙信……じゃねえ、長尾景虎も人間か……本当に俺は、美空に救われてばかりだよ」

九十郎が犬子や粉雪、雫らと向き合う気になったきつかけは、美空だった。

顔を合わせる度に、言葉を交わす度に新たに駄目な所を発見し、その度に上杉謙信のイメージが砕けていった。

それが九十郎の思い込みを崩していった。

「救われたと言え、やっぱ柘榴かな。

あいつは出会った時からずっと普通の女だった。

普通の女のままで俺を好きだと言ってくれた……

犬子とは別の意味で、俺には過ぎた嫁だよ」

九十郎にとって、柿崎景家は誰そいつとしか言いようのない無名武将である。

そんな柘榴からの純粹な好意が、歴史上の偉人である前田利家に好意を持たれ、居心地の悪さを感じていた九十郎を癒していた。

柘榴がいなかったら、たぶん自分はどこかで潰れてしまっただろう……犬子や美空の傍から離れるために、書置き一つ残さずにどこか遠くに蓄電逃亡していただろうと、九十郎は思った。

そして……

「……認めるよ。俺は雫が梅毒に罹っていると思ってる。

それで、それが雫を劍丞の元から引き離した理由だ」

そしてついに九十郎は自身にとって都合な真実を認めた。

この件は墓場まで持っていこうと決意した事実が割とあっさり、よりにもよって当の本人に漏れてしまったのだ。

「すまん、流石に気を悪くしたよな。

劍丞とエロい事しないってんなら、劍丞の元に戻っても構わねえから……」

「確認してくださいっ!!」

「……へ？」

幻滅して自分の元から去っていくと思った。

しかし、雫は全裸のまま、逆に九十郎へと詰め寄っていった。

「あの……雫？　ちよ、ちよつと距離が近いんじゃないかなあつて俺は思うんだが……？」

「私は性病になんか罹っていません！」

御疑いがあるなら、気の済むまで確認してください！」

「あ、いや、確認つてもどうやって……」

九十郎が思わずそう言った瞬間、雫は九十郎の目の前に一冊の本をバツと開いて見せた。

そこにはこの時代の本にしては驚く程に写實的に描かれた女性器の絵図面と、いくつもの説明書きがあつた。

「なにこれエロ本……いや、医学書か!？」

九十郎にはそれが梅毒と呼ばれる性病の特徴を詳細に記した物だとすぐに分かつた。「梅毒は鼻欠け病と呼ばれるように、罹患すれば外観に出る病気です。」

この本の正確さについては私が保証します。

これでも薬屋の娘です、正しい医学書と、いい加減な医学書の見分けはつきます」「つまり……これと見比べろと?」

「はい、お願いします」

雫は本気だ。

茶化している様子や、冗談を言っているような雰囲気は一切無い。

そしてそんな決死の表情のまま雫は布団の上に腰を下し、自らの秘所をくばあつと開いた。

「黒田官兵衛相手にお医者さんごっこ（ガチ）かあ……

何かもう訳がわからん事になってきたなあ……」

九十郎は全てを諦めきった表情で深々とため息をつき、どうしてこうなったと内心頭を抱えながらゆっくりと雫に顔を近づける……

……

……

……

約30分後……

「……すいませんでした」

見た目幼女の全裸の女性に土下座して許しを請う、バツファローマンのような体格のマツチヨがいた。

情けなさが天元突破しているが、それはそれでいつもの九十郎である。

何度も何度も確認したが、梅毒の特徴である肌の荒れがどこにも見当たらなかったの

だ。

「それだけですか？」

「そ、それだけって……？」

雫から予想外の言葉を向けられ、九十郎が言葉を詰まらせる。

「身体の隅々まで、処女膜まで見せたのですよ。」

すみませんの一言で終わらせるなんて、あんまりじゃないですか？」

「え、えつと……」

そう言われて、考える。

真夜中の寢所で、一糸纏わぬ少女がいる。

その少女は、あろう事か自分が好きだと言っている。

目の前の少女を自らのモノにするか、それとも拒むか……雫が聞きたい事はそういう

事だ。

黒田官兵衛だからという言い訳はもう使えない。

九十郎は上杉謙信もまた人間と理解し、前田利家と向き合い、山県昌景を抱いたのだ

から。

相手が黒田官兵衛だからそれができないとは口が裂けても言えはしない。

梅毒だからという言い訳はもう使えない。

たった今、お医者さんごっこ（ガチ）で確認させられたばかりである。

そして巨乳好きだからという言い訳は……

「俺の愚息がガチガチになつてゐる以上、使えねえだろうな……」

そして九十郎は思う、自分は雫をどう思つてゐるのかを。

黒田官兵衛だという事を忘れて、雫本人をどう思つてゐるのかを。

肉体的というか、外貌という意味で魅力的だという事は確かだ。

だがしかし、例え相手がそれを望んでゐるからといって、ち〇こに引つ張られるよう

に關係を結ぶのは柘榴にも、犬子にも、雫本人にも敬意を欠く。

そして頭に浮かんだ様々な言い訳も、性欲も頭の中から取り払い、九十郎の心中に過つたものは……模型帆船や、写真機、ブリュナエンジン、半自動紡績機を見せ、普通の人には良く分からないがらくたに見えるそれらの機械がどう凄いのか解説した時、とても嬉しそうに相槌をうつてくれた光景だ。

「（そうなんだよな……俺はそうやってアレコレ言い訳をして……

いつも言い訳を考えなくちやいけないくらい……雫を……）」

そして九十郎は大きく息を吐き、睨みつけるかのように雫を見る。

今の九十郎は、雫だけを真つすぐに見ていた。

黒田官兵衛だとか、梅毒だとか、そういう良い訳は全部振り払つた。

「正妻は柘榴だ、そこは変えられんし、変える気も無い。

俺が雫に示してやれるのは、俺の側室っていう立場になるが……それでも構わないか？」

九十郎がそう告げた瞬間、雫の肩がビクンと跳ねて、天井の板がガタツと音を立てた。それは九十郎にとっては無礼千万な提案だ。

お前は側室だけど良いよなんて、現代人の価値観からすればあり得ない提案だ。

「え……？」

だがしかし……雫にとっては望外の待遇、最上の提案であった。

雫は目尻が熱くなるのを抑えられなかった。

ぶつちやけ普通に断られる可能性や、セフレ止まりで終わる可能性が高いと思つていた。

「良いんですか……本当に！ 本当に私が側室で良いのですか!？」

越後長尾家の重鎮であり、柿崎城の城主でもある柿崎景家と同格になれるとはハナツから考えていない。

それよりも重要なのは、薬屋の娘と揶揄される程に歴史が浅い家に生まれ、しかも口くなく実績も無い自分が、物心ついた頃から常に傍にいて、織田家を出奔して浪人になつていた頃を含め苦楽を共にした女である、前田犬子利家と同等の立場が用意されたとい

う事だ。

「え、いや……側室だぞ？ 正妻って訳じゃ……」

「ハイ！ 受けます！ 受けましたからね！ もう言質取っちゃいましたよ！

後で失言でしたって撤回したら泣いちゃいますからね！」

雫はぼろぼろと涙を零しながらそう叫ぶ。

目から止めどなく涙が流れていたが、雫の顔は笑顔である。

そしてそのまま雫は九十郎に抱きつく。

九十郎もまた、雫をゆっくりと押し倒し……

「あれ……そういえば……何で雫は全裸で俺の寝所に忍び込んでたんだ……？」

……その時、九十郎の脳裏にちよつとした疑問が起きる。

「考えてみれば雫が梅毒だって知ってる奴、もう1人いたよな……」

そして思い出す。

一二三にも雫が黒田官兵衛で、豊臣秀吉の軍師になる事、実は梅毒だという事を告げていた事を（第82話）。

そして疑念に思う。

さつき見た医学書は、雫の持ち物に無かった筈だと。

何せ雫は拉致され、着の身着のまままで越後に連れ去られた上、犬子と九十郎と共に練

兵館で寝起きをしているため、九十郎が知らない持ち物はほぼ無い筈なのだ。

そして先程、天井の板がガタつと鳴った事も併せて考えると……

「……そこか一二三いいいいいいーっ!!」

九十郎はさつき使った医学書を鷲掴みにして、ガタつと鳴った場所目がけて思い切りブン投げた。

「ぎゃふんっ!」

およそ結婚適齢期の女性がしてはいけなさそうな声と共に1人の女性と、横山光輝の漫画に出てきそうな全身黒装束、ステレオタイプ忍者が落下してきた。

「一二三と……えつと、誰だてめえ?」

雫と九十郎から疑念の視線が向けられる。

仲間とか友人とかに向けられる類の視線では無い事は、誰の目にも明らかである。

「え、えつと……この人は青海さんで……ご、ご近所のお坊さん……」

「ほお、てめえのご近所では坊主が天井裏に潜むのか?」

「一二三さん、いつからそこにいたんですか?」

「き、君が布団と一緒に窓から投げ捨てられた辺り……」

「最初からですか、そうですか」

雫の視線が氷よりも冷たくなる。

軽蔑とか、侮蔑とか、怒りとか、そういう視線である。

「そもそもお前、越後にいる間は監視が付いてるんだよな？」

「どうやって天井裏に忍び込んだ？」

「いや、それは……えつと……才蔵に頼んで代わってもらったと言いますか……」

「誰ですか、才蔵さんって？」

「ご、ご近所の……えつと……も、ものまね芸人？」

「影武者を使つて監視を欺いたんですか、そうですか」

雫の視線がさらに冷たくなった。

「雫、こいつらどうする？」

「布団でくるんで、窓から投げ捨てましょう」

「2人同時はいけるかなあ？ 雫は軽いからどうにかなった……まあ、やってみるか」

九十郎がゴキゴキと手の関節を鳴らしながら一二三と青海に近づいていく……いつも飄々としていた一二三だが、珍しく危機感を覚えていた。

それ故に……

「佐助っ！ 自来也っ！」

一二三がそう叫んだ瞬間、一二三達を投げ捨てようと開いた窓から小さな袋のような物体が複数投げ入れられ、部屋中が小麦粉に似た真っ白な粉塵が充満する。

「ぎゃあああああーっ！ 喉痛えっ！ 眼が痛えっ！ 鼻も痛えっ！」

凄まじいまでの刺激臭と共に眼と鼻に激痛が奔り、マツチヨの大男がのたうち回る。

雫は咄嗟に眼と鼻を布で覆って防御したために軽傷だが、視界全てが覆われてしま
う。

そして……九十郎のダメージが回復し、どうにか眼を開けられるようになった頃には、練兵館には一二三の姿も、一二三と共に天井裏に潜んでいたステレオタイプ忍者の姿も全く無くなっていった。

『ごめんなさい』と、急いで書いたが故に乱れた字体の書置きを残して……

「おのれ一二三いいいいいいーっ!!」

「一二三さんのアホおおおおーっ!!」

雫と九十郎の遠吠えが真夜中の越後に響き渡った。

後片付けが終わるころには、雫も九十郎も男女の営みを再開するような気分ではなくなっていた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第116話『それぞれの身の振り方』

「見送りは、ここままで結構です」

端正な顔立ちの女武将が、越後の地から去ろうとしていた。

彼女は「地黄八幡」と呼ばれ畏れられる、北条最強の将、北条綱成・通称は臚。

北条氏康の命に従い、長尾にちよつかいをかけるために越後に赴いた彼女であるが、その任務を終えて帰路につく所である。

「でも、国境まではまだ遠い……」

臚を姉と慕い、見送りに来ていた少女、名月が困惑した表情でそう告げる。

「国境まで来てはいけません。」

良いですか名月、今はもう、貴女は越後の長尾景虎の後継者なのです。

邪な考えを持つ者が貴女の身柄を抑えようとする可能性は常にあります」

「臚姉様がそのような卑劣な真似、する筈がありませんわ」

「松平の竹千代殿（家康の幼名）の事を知らないとは言いませんね。」

戦国乱世の中では、いつ、どこで、誰が、どんな策略を講じてもおかしくないのです

から」

徳川家康……今は松平元康と呼ばれる人物は、数え年で6歳の頃に今川に臣従の証として護送される中、戸田康光の裏切りにより、尾張の織田信秀へ送られ、そのまま2年ほど人質にされた経験がある。

その事実は、先の戦いで本多忠勝、榊原康政、そして服部半蔵らと共闘した名月は当然、知っている。

「そもそも、私が越後に来た事自体も、策を巡らせるためなのですからね。

結果としては……そうですね、上々と言つても良いでしょう」

結果は上々、その点に嘘偽りは無い。

元々、主君北条氏康・通称遡夜から今回の作戦を伝えられた際、『名月を次期頭首の座に就ける事が最上』と言われていた。

なんやかんやで空陣営から勝利を収め、なんやかんやで従姉妹の名月を長尾の次期頭首に据える事が出来た以上、結果は上々だと言わざるを得ない。

が……

「姉様？ 何か浮かない顔ですが……」

「いえ、何でもありません、気にしないでください」

朧が無理矢理笑顔を作り、名月に余計な心配はさせまいとする。

脳裏に浮かぶのは、先の戦での自分の戦いぶり……その無様さ、不甲斐なさ。

そして同時に思うのは、これから先、名月はロクな味方もいない中で、非常に非常に難しい舵取りを迫られるという事だ。

「名月、実際に兵の指揮を執って、どうでしたか？ 得るものはありましたか？」

「それはもう、沢山ありますわ。 げつぶが出る位、改善点が見つかりましたもの」

ややげんなりとした表情で名月が言う。

戦術・本多忠勝と揶揄される程、たつた一人の個人武勇に頼り切った勝ち方も、作戦立案のほぼ全てを臚や詩乃に任せきりにしてしまった事も、臚と詩乃が出払った後は、刻一刻と変動する戦況に対し、おろおろするばかりでロクな指示を出せなかった事にも、思う所がある様子だ。

それを感じ取ると、臚はとても満足そうに、とても嬉しそうに微笑み、頷いた。

「私もそうです。 私はいつの間にか、

黄備えの練度を当然の前提にしながら戦い方を考えるようになっていました。

そのせいで今回の戦は、頭の中で描いた味方の動きと、現実の動きにズレが出来て、時間が経てば経つ程にマトモな指示が出せなくなっていました」

黄備えとは、臚が選び、鍛え、磨き上げた北条最強の精鋭部隊の事である。

そこいらの雑兵とは、天と地と言って良い程の差があり、普通の部隊では絶対に無理

な命令も普通にこなしてしまふ。

だがしかし、名目上は越後の後継者を決める戦に、大つぴらに北条の最強部隊を投入する訳にもいかず、それ故に臆は、自分自身でも情けなく感じる程に凡庸な戦い方しかできなかった。

越後にも、北条にも掃いて捨てる程いる凡将と同レベルの戦いぶりだった。

甲斐の猛将、山県昌景とも互角に渡り合える勇将、北条くくとは思えぬグダグダつぶりだ。

「お姉様がそんな……」

「笑ってしまふでしよう?」

でも、猛将、勇将と呼ばれる者でも、案外初歩的な失態を晒すのが現実の戦です。

名月も決して、自分はもう学びきった等と増長せず、いつも謙虚でいなくてはいけません」

「はい!」

名月が元気良く返事をする。

「名月、その気持ちを決して忘れてはいけませんよ。」

失敗から何かを学ぶ機会を得られるという事は、とても有り難い事ですから」

「人と言うのは成功や勝利よりも『失敗』から学ぶことが多い。良く分かっています

わ

「良い言葉ですね、誰の言葉ですか？」

「ジオルノ・ジヨバーナの言葉ですわ、お姉様」

「……え、誰？」

名月は誇らしげに平坦な胸を張り、臙は先程とはうって変わり、心底心配そうな視線を名月に向ける。

前途多難だ……臙はそう思った。

なお、読者の皆様にはお分かりだと思いが、犯人は九十郎である。

「ごほんっ!! それはさておき、今後は何事も謙虚に、

自分以外の全てを師と仰ぐような気持ちで頑張ってください。

私も陰ながら応援いたしますので」

「はっ」

「……本当に危ないと思った時は、変な意地を張らずに逃げてても良いのですからね。

今後いかなる事があるうとも、私は貴女の味方ですから」

そんな事を告げながら、心の中で臙は自分自身を責め立てる……白々しいと。

何せ名月を武田の人質に出し、使えないと思えば呼び戻し、すぐさま今度は長尾へ人質に出し、今度は御家騒動を誘発させ、半ば無理矢理越後長尾家の次期頭首に据えたの

は、他ならぬ北条氏康……隴の主君なのだ。

2度も死地に飛び込ませておいて、自分は味方だ等と言うだなんて、なんて滑稽だと隴は思った。

自分より一回りも二回りも小さく、幼い名月を見ると……隴は自らの目尻が熱くなるのを抑えられなくなった。

「お姉様？」

「……目にゴミが入っただけです」

涙を見せてはいけないと、隴が思わず目を押さえ、顔を背けた。

北条の為だ、北条の家を守る為には、これが一番賢いやり方なのだと自分に言い聞かせる。

そして……

「隴お姉様、私は嬉しいです」

隴の耳に入った言葉は、彼女にとって予想外のものであった。

「大好きで、尊敬できる美空様の跡を継げるのですから。」

見ていてください、きつと立派に越後長尾家を守り、盛り立ててみせますから」

その目は、その顔つきは、その声は、かつて武田に人質として送られていた頃には一度も見た事も、聞いた事も無いものであった。

他人の意思で操られ、何かあれば虫けらのように殺される人質の顔では決して無い。それは自らの意思で道を切り開き、自らの決意で刃を握る、誇りある武士の顔であった。

その瞬間、朧は名月が大きく見えた。

主君・北条氏康の言いなりになり、名月を半ば無理矢理死地に送り込んだ卑小な自分より、

何倍も、何十倍も大きく見えた。

そう思った瞬間、朧の眼から涙が引いた。

守られるばかりの子供と侮っていたと、無意識の内に誇りある武士を侮辱していたと、自らを恥じた。

「大きくなりましたね、名月」

「そんな、私なんてまだまだですわ」

ちよつと照れながら、名月が頬を掻く。

「さあ、さつきも言いましたが、見送りはここままで結構です。

貴女はもう越後長尾家の者なのですから、

あまり遠くまで他国人を見送るものではありません」

「分かりましたわ。朧お姉様、どうかお元気で。私の事は何も心配ありませんわ」

隴はあえて何も語らず、名月に背を向けて歩き出した。

何人かいる共の者達もそれに倣い、主君・朔夜が待つ小田原へと歩み出す。

名月は大きく大きく手を振りながら、いつまでも隴達を見送っている。

視線を向けずとも、隴にはそれが分かった。

そして……

「越後の龍、長尾美空景虎か……朔夜様、あるいは恐るべき強敵になるかもしれませんよ」

名月が『大好きで尊敬できる』と言った人物に対し、底知れぬ恐ろしさを感じながら、隴は少しだけ早足になった。

……

……

……

「おろろろおおくく!!」

「ああっ!! 美空様がゲロを!」

「う、うぷ……お、おぼろっ!!」

「ああっ!! 空様が貰いゲロを!」

……一方その頃、恐るべき敵（笑）こと長尾美空景虎は、先の戦で見事に負けた空と

共に真昼間からヤケ酒を呑み、ぐでんぐでんに酔っぱらっていた。

「え、越後きつての器量人、この樋口愛菜兼続は……」

ゲロなんかになけないのですぞおっ!!」

畳やら襖やら掛け軸やらに撒き散らされたゲロを相手に、自称越後一の器量人こと樋口愛菜兼続は雑巾片手に応急処置に奔走する。

この日、愛菜は心に誓う……もう二度と空に酒は吞ませないと。

……

……

……

「さて……と……」

名月から別れてから少し歩き、人気の無い小道へ入ると、臙は立ち止まって左右を大きく見渡した。

越後を去る前に、臙にはもう一つやっておかなければならない事が残っているのだ。

「姫野、居るのだろうか?」

「はいはい、御傍にいますよ」

臙がまるで独り言のようにつぶやくと、微妙にやる気が無さそうな気怠い返事と共に、1人の忍者が臙の前に現れる。

彼女は風魔小太郎・通称姫野、先の戦いにおいて服部半蔵の暗殺を命じられたものの、戦の最中で唐突に抜け忍宣言をした挙句、与えられた任務をゴミ箱にダンクシュートをした女である（第98話）。

「で、どうするつもりだ貴様」

先程の慈愛に満ちた表情、声は一切無い。

氷点下かと思えるような冷え切った声であった。

身内に対する対応から、仕事モードに入ったからというのもあるが、それ以上に姫野は臆にとって土壇場で任務を放棄した裏切者だからというのが大きい。

共の者達が下手をすれば今すぐにも凄惨な殺し合いが始まるのではと思う程、緊迫した空気が辺りに流れる。

「やっぱナシって事には……」

姫野がにこやかに笑いながらそう提案した瞬間、場の空気が10℃くらい一気に下がった。

臆の視線は雄弁に告げている『できる・わけ・ねーだろ』と。

それを察すると同時に、姫野の尿上も変化する。

味方に対するやや和らいだ表情から、ビジネスの相手に対するフラットなものだ。

「色々と気にかけてやったつもりなんだがな」

「そこは認めなくてもないし。人数が多いウチら風魔忍軍、当然依頼料は高くなるし。

そんなお高い依頼料を即金で払ってくれる北条のお殿様には感謝してるし」

「今回の一件、流石の上に報告せざるを得ん。

いや、仮に報告をしなかったとしても、おそらく噂という形で耳に入るだろうな」

「まあ、この戦に眼を光らせていたのはウチら風魔忍軍だけじゃないだろうし」

「理由は何だ？」

「お仕事の内容はもつと早く教えてほしかったんですけど」

「……それだけではあるまい」

微妙に痛い所を突かれつつも、臆はさらに追及する。

忍びというものは、信用で成り立っている商売だ。

何の理由も無しにいきなり集団で任務放棄したという風評が流れれば、金のかかる風

魔忍軍を雇おうとする者はかなり減るだろう。

そして人数が多いが故に養わなければならない者が多い風魔忍軍にとって、依頼が激

減はそのまま死を意味する。

「依頼が北条にばかり偏ってた気はしてたし、前々から。

それだけが理由じゃないけど……」

「男か？」

「ばっ!! ち、違うしっ!! 全然っ!!」

劍丞とは全然何の関わりもねーしっ!! 姫野の独断だしっ!!」

姫野が顔を真っ赤にしながら大声で否定する。

一流の忍者とは思えない取り乱しっぷりに、臙は思わずため息を漏らした。

「全く、誑しの名人とは聞いていたが……」

今にして考えてみれば、予兆はあった。

新田劍丞の事を話す姫野の姿は、任務の経過報告をするいつもの姫野とは違っていた。

両手の指をもじもじと絡ませたり、視線を泳がせたりして、新田劍丞がいかにダメ男かを言いながらも、こちらが同調するとすぐに怒りだすのだ。

姫野が任務の中で新田劍丞と接触している内に、次第次第に惹かれたのでは……武人として生き、男女の機微に疎い臙であったが、その辺りまでは想像ができた。

そして同時に、服部半蔵の事を報告する姫野もいつもと違っていた。

毎回のように半蔵がどれだけダメ忍者かを熱く語る癖に、最終的にはそれでも良い所はあるという結論が出るのだ。

それを考えれば、自分が出した服部半蔵抹殺命令はいかに愚かだったか……

「……曇っていたのか、いつの間にか。全く情けない」

そして気づく、自分が緩慢になっていたと。

戦術眼も、部下を見る目も思い切り曇りまくっていた。

無意識の内に黄備えならできると無理無茶無謀な指示を出すのに慣れ、無意識の内に姫野なら信頼できると、姫野の気持ちを考えもせず、察しようとする事もしなかった。

若い頃の……右も左も分からずに、周りのもの全てを吸収し、自分の糧にしようとやつきになっていた、ギラギラとした向上心を持っていた自分なら、きつと姫野の様子に気づけた筈だと、自分自身の行いを恥じた。

だからこそ……

「姉上……いや、氏康様には私を取り成そう」

だからこそ臆はそう告げた。

そうする事が自分の役割だと思った。

「へっ？ マジで？ どうしてだし？」

「風魔は北条の内情を知り過ぎていてる。

たった一度の失態で切って良いものかどうか、疑問がある。

それに今回の一件、責任者は私だ。それ故に風魔の失態は私の失態でもある」

「臆様、大丈夫だし？ 変なキノコでも食べたの？」

「どうして貴様はそうやって穿った見方しかできんのだっ!？」

「ごめんごめん、でも正直助かるし。

ぶっちゃけ勢いで抜け忍宣言しちゃって、その後どうするか全然考えて無かったから」

「最低限の弁護はする。

だが言っておくが、その結果姉上がどう判断なさるかは何も保証できんぞ」

「大丈夫大丈夫、あの人身内にはダメ甘だし。

臙様の取り成しがあればどうとでも誤魔化しきくし」

「そうかな……」

臙は先程別れた名月の事を思い出す。

名月もまた、北条朔夜氏康の娘の一人、朔夜にとって家族であり、身内と言って良い関係の筈だ。

その名月を武田に人質として送り、役に立たぬと分かれば呼び戻し、すぐさま長尾美空景虎の元に人質として送ったのが朔夜である。

そして今、そんな名月に対して、長尾景虎の跡継ぎという名の特大的厄ネタを押し付けるよう命じたのも……朔夜なのだ。

もしもその朔夜が、北条の為に名月を殺せと言ったら、自分はどうするか……もしかしたら、先の戦での姫野と同じように、突発的に離反を宣言し、名月を守るために剣を

振るうかもしれない……そんな事を考えた。

「戻ろうか、小田原に。後のことは道中でゆっくりと話すでしょう」

「うんうん、そうすると良いし」

そして臙は名月と別れた直後に比べ、幾分かスッキリとした表情で小田原の方角へと歩みを進める。

そんな臙達を姫野は大きく手を振りながら見送り……

「……何故来ない？」

……臙はダツシユで姫野の方へ駆け戻って詰め寄った。

完全に姫野も一緒に小田原へ戻り、朔夜に事の顛末を報告するものだとばかり思っていた。

「いや、ちよつと姫野は早急にやらないといけない事があつて、

ぶつちやけ小田原に戻る時間が惜しいって言うか……」

「ほう？ それは今回の任務放棄と抜け忍宣言の申し開きをする以上に重要な事と？」

カチャリと鯉口を切る物騒な音をする。

臙はマジでブチ切れる5秒前といった様子だが、それはそれとして姫野にはやらないといけない事があるのだ。

「小波の奴、今朝も姫野の顔と名前忘れやがったし。」

例の御家流の連打の事も含めて、明らかに異常だし」

「どうするつもりだ？」

「小波と一緒に伊賀まで行つて調査してくるし」

「伊賀……か……」

伊賀忍者達の本拠地とされるその場所は、未だ神秘のベールに包まれている。

数々の間者が侵入を試み、人知れず葬られているという眉唾物の噂がある位だ。

「何か勝算でもあるのか？」

「全然、正直小波はアテにできないから、出たトコ勝負で行くつもりだし」

「全く、貴様は本当に行き当たりばったりだな」

「機を見るに敏と言つてほしいし」

「どの口でほぎく、どの口で」

「姫野ちゃんの可愛いお口だし」

投げキッスのような仕草でからかわれ、クソ真面目な性質の隴は深く深あくため息をつく。

こういう性格だから、隴は今一姫野を好きになれないのだ。

好きにはなれないが……それでも、姫野は風魔小太郎だ。

この混迷の時代の中で、天下で一二を争う程の凄腕の忍者だ。

その腕前だけは信用している。

「報告は上げろよ」

「ちやくんと取り成ししてくるなら、喜んで」

「良いだろう、お前の単独行動の件も含めて姉上には話をしておく」

臙は踵を返し、もう一度小田原への道を進み始める。

そして姫野はさつきと同じく、姫野は大きく手を振りながら見送り……

「先に言っておくが、二度目があつたら絶対に庇わないからな」

背を向けたままキツチリと釘を刺されるのであつた。

……

……

……

一方その頃……

「元の場合に返してくるでやがる、今すぐに」

典厩武田信繁・通称夕霧の身にはまたもや胃をキリキリと痛める事態が起きていた。

「絶対に嫌なんだぜ！」

山県昌景・通称粉雪が、そんな夕霧相手に一步も退かず、キツパリと断る。

「何でそんなに意固地になるでやがるかっ!？」

「どんな理由があつても！ 自分の娘に手を上げるような女の元にこいつは返せねえぜ！」

「他人の家の事情に口を挟むなでやがるっ!!」

「典厩様く、ブーメランがブっ刺さつてますよ〜」

簀巻きにされ『わたしは欲望に負けて出歯亀しました』という、大変不名誉な張り紙を張られた一二三がツツコミを入れる。

「ツツコミ所満載な奴が口を挟むなでやがるっ!!」

てかブーメランって何の事でやがるっ!!

いやそれよりも何を考えて出歯亀なんて真似したでやがるうっ!!」

夕霧の胃にキリキリと錐で突かれるような……いや、ギリギリとドリルで抉られるかのような激痛が奔る。

現状、夕霧の最大のストレス源は間違いなく一二三であろう。

「ああ、ブーメランってのは投げると手元に戻ってくる投擲武器で、オーストラリアのアボリジニっていう人達が狩猟や儀礼に……」

「ブーメランの由来はこの際どうでも良いでやがるっ!」

お前は夕霧達が見て無い所で斜め上に動き過ぎでやがる!

お願いだからもう少し落ち着いてくれでやがるうっ!!」

「わあ、凄いツツコミ、流石は典厩様ですね」

「ツツコミで喉が破れそうでやがる！」

いやその前に胃痛で血を吐きそうでやがるうっ!!

一二三は勝手に動き回るし！ 粉雪は勝手に他所の家の娘を拾ってくるし！」

「て、典厩様、胃痛と腹痛に効く野草を煎じました」

湖衣が熱々のお茶……ではなく、煎じ薬を持って入ってくる。

「……夕霧を心配してくれるのは湖衣だけでやがるよ、本当に」

涙が出る程にありがたい煎じ薬を、ふーふーと息を吹きかけながら少しずる胃に流し込む。

苦しい味と、つーんと来る臭いが襲ってくるが、胃の痛みが幾分か和らいだような気がした。

「それで、何でこのややこしい時に、わざわざあれを拾ってきたでやがるか？」

夕霧にも分かるようにゆっくり説明するでやがる」

「そ、それは……」

夕霧と粉雪がそつと視線を真横に向ける。

2人の視線の先には……『犬子でもわかる西洋鎧のお手入れ』なる小冊子を見ながら、フルプレートアーマーの関節部の部品を交換しようと四苦八苦する少女、森小夜叉長可

の姿があつた。

そんな小夜叉の姿をしばらくの間じい〜つと眺めると……

「……成り行きで」

「元の場所に返してくるでやがる、今すぐに」

典厩武田信繁・通称夕霧の胃はまやもやキリキリと痛みだす。

湖衣の煎じ薬だけでは、夕霧の胃痛は収まらなかつた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第117話『やっぱり似ている2人』

「あゝ……まあゝた呑んじやつたわね、それも記憶が飛ぶくらいに……」

ズキズキと、刃物が脳髓に突き刺さっているかのような酷い頭痛に苦しみながら、二日酔いの美空が畳から起き上がる。

一見綺麗に片づけてあるように見える部屋だが、所々でゲロの臭いが染みついている、自分が昨晚も吐いて、その後処理を秋子か松葉辺りにやらせてしまったのだと察する。

なお、実際にモザイク処理必須の汚物を片付けたのは愛菜である。

「いつつつつ……今日の頭の痛さはいつもの2倍ね。胃もムカつくし、関節も痛いし、全体的に気怠いしで、もう今日は仕事休んで寝ていたいわ」

美空が無責任な事を呟きながら両手両足を放り出し、天井を見つめる。

昨日、負けて落ち込んでいた空の口にしこたま酒を流し込んだ事は覚えていたが、そこから先はまるで思い出せない。

空が噴水、あるいはマールライオンのように汚物を噴き出していた光景や、愛菜が死ん

だ魚のような目で部屋の雑巾がけをしている光景があつたような気もしたが、まるで記憶に霽がかかつたような感じで、ハッキリとした事はまるで出てこない。

「落ち込んでたからパーッと楽しく飲ませようとしたけど、

空と愛菜には悪い事したわね……これが原因で酒嫌いにならなきや良いのだけど」

結論から言えば、愛菜は美空を反面教師にして酒嫌いになる。

秋子は愛娘（養子だが）と一緒に酒を飲む楽しみを喪つて枕を涙で濡らすのだが、それはまた別の話である。

美空は寝つ転がりながら、二日酔い対策に戸棚の奥深くに隠し持っている迎え酒を口に入れ……

「……つと、いけないいけない！ 今日のはあの武田信繁と面会するんだつたわね。

流石に他国からの使者に酔っぱらつた状態で会う訳にはいかないわ。

迎え酒はこの一杯だけにしないと」

最後の最後の理性で、美空は酒瓶に再び封をして、戸棚の奥へと押し戻す。

書類仕事だけだつたら酔っぱらいながらやる気かとツツコミが入りそうなセリフだが、最後のツツコミ担当こと秋子は夕霧との面会のセッティングのために不在であつた。

「……よおし！ 酒飲んだら元氣が出てきたわ！」

長尾美空景虎は、元からかそれとも基本駄目人間の九十郎の影響からなのか、順調に駄目人間街道を突っ走りつつあった。

……

……

……

「姉上からの書状でやがる」

「拝見するわ」

それを渡した瞬間、夕霧は全身から力が抜け落ちていくような感覚に陥った。

元々、書状一枚渡してハイおしまいの筈の任務だったというのに、粉雪は越後の内情に深入りしすぎて勝手にピンチになり、一二三は夕霧と湖衣の理解の斜め上をカツ飛び、拳句の果てに水橋パルスィや霊鳥路空のコスプレをさせられ、何故か越後後継者を決める戦にガッツリ参戦させられた（第95話）。

まるで悪夢のような任務も、もうじき終わりを告げるのだ。

この書状に対する長尾景虎からの返答を聞きさえすれば……

「まあ時候の挨拶やらなにやら色々書いてあるけど要約すると……

新田劍丞を引き渡せ、否と言えれば兵を率いて攻め入るぞと」

「歯に衣着せぬ言い方すれば、そーなるでやがるな」

「ふうん……」

興味無さそうな顔で書状を丸めながらも、美空は超高速で頭を回転させ、今後の立ち回りを計算する。

劍丞は正直惨たらしく死ねば良いとか思っているが、それはそれとして対武田との交渉に役に立つのなら最大限役に立ってもらいたいという気持ちもある。

だからこそ、即座に万歳三唱しながら送り出すという線は無い。

最終的に身柄を渡すにしても、できるだけ勿体つけて渡したい所である。

「男一人渡さなければ攻め入るなんて、非常識じゃない？」

「夕霧もそう思うでやがるよ。でも姉上でやがるよ。」

「やりかねーでやがる、実績は十分でやがる」

「そうね、あいつは目玉焼きにかける調味料を口実に攻め込みかねないわね」

「違うと言いたいでやがるが、否定できない所が姉上の恐ろしい所でやがる」

「渡したら攻め込んでこない保証は？」

「夕霧が止めるでやがる」

「止めれるの？」

「何とかするでやがるよ」

「ドンファンの愛の囁きより信用できないわね」

「どんぶあん?」

「いえ、こつちの話」

実際の所、戦国時代の約束なんて薄紙一枚よりも容易く破られるものだ。

相手があのクズ・オブ・クズの武田晴信なら、猶更である。

劍丞を差し出した次の日に気が変わったとか何とか言い出して越後侵攻の軍を興しても不思議ではない。

……と、いうのが美空と夕霧の共通認識である。

故に夕霧は『信用しろ』ではなく『自分が止める』と告げたのだ。

「面倒臭い姉がいると大変よね、お互いに」

「あえて否定はしねーでやがる」

「いつそウチの子にならない? 信虎共々面倒見るわよ」

「断る、でやがる」

美空からの提案を、夕霧は考えるまでも無いと即座に否定する。

武田晴信のブレーキである夕霧を取り外す事が出来ればと思ったがと、美空はちつ、と小さく舌打ちをした。

「元々、担ぎ上げたのは夕霧達でやがる。」

重いか時々斜め上にカツ飛ぶからと途中で放り投げる訳には行かねーでやがるよ」

それに重いのも、斜め上にカツ飛ぶのも、詰み寸前のクソ立地である甲斐で生き抜くために必要な事でやがるし……と、夕霧は心の中で付け加える。

クスで有名な武田晴信も、別に好き好んでクスムーブを繰り返している訳では無いのだと、少なくとも夕霧は信じている。

「実の親は放り投げたのにねえ」

「投げたのは否定できねーでやがるが、何も無い所に放り投げた訳じゃねーでやがる。

受け止められる所に……今川義元を信じて、託したでやがる」

なお、晴信はその義元をブチ殺した（第9話）

「それで使者殿、考える時間はどのくらい頂けるの？」

「流石に今すぐこの場で返答しろとは言わねーでやがる。」

でも、そう何日も待ち続けてやる程暇でも無ければ優しくもねーでやがるよ」

「2〜3日中には結論を出すわ、それで良い？」

「その位なら待つてやるでやがる。決まったら呼ぶでやがるよ」

夕霧がそれだけ言い残して退出する。

美空は残された書状にもう一度目を通して……ため息をついた。

「……悩ましいわね、これは」

城から見える城下町の様子は、普段とはまるで違っている。

多数の鬼が町に雪崩れ込み、多くの兵や民草が犠牲になった。

当然、商家や田畑、堀に塀といった防御設備も壊されている箇所が多い。

今この場に略奪と殺戮に定評のある甲斐武田軍が押し寄せてくれば、勝つても負けても越後の民に甚大な被害が出て、経済活動が破綻する可能性が高い。

撃退はできたけど甲斐も越後も詰みましたでは洒落にならない。

「守ったら負けね」

……ただし、今の越軍には虎の子ドライゼ銃と、秘密兵器四斤山砲がある。

鬼との戦いで兵は損耗しているもの、九十郎がもたらした未来兵器を活用すれば決して勝てない訳でもない。

だからこそ悩ましいのだ。

もう一度言うが、撃退はできたけど甲斐も越後も詰みましたでは洒落にならない。

「信虎に相談……しても良い機会だから晴信を殺せつて言うだけね、やめときましょう。

そうなると秋子を呼んで……いえ……」

限られた時間の中で、誰に相談しようかと頭を巡らせる……すると美空の脳裏に一人の人物の顔が浮かんだ。

「そうねえ、いつそ剣丞に相談しましょう。」

ある意味当事者だし、名目上は私の良人になったのだから、知恵位は出すでしょ」
妙案が浮かんだと笑みを浮かべながら、美空は馬場に駐輪してある自転車に向かう。
それもまた九十郎が造った未来の道具、美空のお気に入りママチャリである。

……

……………

「勝つても負けても恨みっこ無しだぞ、お互いに」

バツファローマンのような大柄な男が竹刀を構える。

「分かっている、今回は俺も本気で行く」

爽やか系のイケメンが同じく竹刀を構える。

斎藤九十郎と新田劍丞が、超消化不良に終わった先日の戦い（第102話）のやり直しをしようとしているのだ。

執念深いというか、諦めが悪いというか、粘着質な男である。

「いくぜえっ!!」

「……勝負っ!!」

野獣のような雄叫びと共に、九十郎が劍丞に飛び掛かった。

そのままガタイの大きさを生かして力任せに竹刀を振り回す。

「神道無念流ナメンなあーっ!!」

「ナメたつもりは無いよ……ぐっ、やっぱり力比べは不利か……」

九十郎のパワーを受け止め、劍丞の竹刀が折れそうになり、両腕がジンジンと痺れた。1度や2度ならともかく、3度も4度も受け止め続けられれば竹刀が折れるか、衝撃で得物を手放してしまいそうだと感じた。

「なら小回りで勝負するしかないかっ!!」

「ちい、猪口才なあっ!!」

どこぞの悪魔召喚士の如く、劍丞が前転して九十郎の狙いを外し、後方の回り込む。すぐさま九十郎の横腹を狙い竹刀を振り抜くも、九十郎はギリギリの所で回避した。

「いや、見事なもんだ。流石は劍丞だな。相手が俺じゃなかったら一本取れてたよ」

「ただ筋トレしてただけじゃあの振りはできないよ。どれだけ鍛錬してるのか……」

「言つたら、神道無念流をナメンなっつてな」

「ああ、違ういな」

劍丞と九十郎が竹刀を構えながら、じりじりとすり足で間合いを詰めていく。

互いが互いに、どのタイミングで斬りかかるか、相手が斬りかかってきたらどう身を躲すか、相手の呼吸一つ見落とすまいと極限まで精神を集中させていく。

「おつかしらあ〜! 頑張れえ〜っ!!」

「九十郎おーっ!! 負けないでえーっ!!」

「劍丞様! 何か卑怯な手段を用意してるかもしれません! 油断しないで!」

「九十郎さあーんっ! 押してますよおーっ! しっかりいーっ!!」

ひよ子と詩乃は劍丞に、犬子と雫は九十郎に、各々愛する男性に声援を寄せる。

そんな中……

「何やってんの、あいつら?」

戦国時代に似つかわしくないママチャリに乗った長尾景虎が現れた。

「あ、美空様。今九十郎が劍丞様を叩きのめす所です」

「違うよ犬子、お頭が九十郎さんをやっつける所だよ」

いきなり犬子とひよ子の意見が真っ向から対立し、じとくとした不愉快そうな視線が交差する。

この男の趣味が正反対の2人は、劍丞と九十郎が関わる時だけ互いの仲が険悪になる。

「で、美空様はどっちを応援します?」

「……へ?」

美空がキョトンとした表情になった。

気がつけば犬子とひよ子だけでなく、雫と詩乃、それに戦っている劍丞と九十郎の視

線まで集中していた。

『喪つたものを取り戻すために戦う九十郎。』

世界の平和を守るために戦う劍丞。君はどっちを応援する?!』

なんてナレーションが一瞬だけ聞こえてきたような気がした。

好き嫌いで選ぶなら即座に九十郎を選ぶ処だが、一応、今の美空は劍丞の嫁という立場だ。

第三者の目がある今は、立場上劍丞の応援をしておいた方が無難な気がする。

「やめてー(棒読み) わたしのためにあらそわないでー(すごい棒読み)」

結局、物凄くやる気のない声で適当な声援(笑)を送る事でお茶を濁す事にした。

「……別に美空の為にやり合ってる訳じゃねえがな」

九十郎が明らかに不機嫌そうに呟く。

正直な所、犬子以外のギャラリーは全員どっかに行つてほしいとすら考えている。

「え? じゃあ誰のためにやってるのよ?! 私を差し置いてっ!!」

「唐突にキレんなよ! 犬子だよ! 犬子のためにやってんだ!」

犬子の代わりに劍丞をブチのめすつて約束したからな!(第102話)

「本当は柘榴も呼びたかつたんだけどね」

「あいつは仕事があるからな。何故か暇そうにしてる美空と違って」

「暇な訳じゃないわよっ!! 色々忙しいわよ!!」

むしろ柘榴より仕事山積みなくせにこんな所でサボっている所が問題である。

「よーし劍丞、あそこの若白髪は放っておいて仕切り直すぞ」

「誰が若白髪よっ?! 誰がっ?! 三昧耶曼荼羅ブチかますわよっ!!」

「俺の大事な嫁の一人なんだが……」

「アンタの嫁になった覚えは無い!

いや、あるけど心まで売り渡すつもりは無いわよっ!!」

見事なツツコミ力(つつこみちから)である。

「せえい!」

「なんのこれしきっ!!」

劍丞の鋭い突きが九十郎の鼻先を掠め、九十郎も負けじと反撃する。

緊迫した一進一退の攻防に、見届け人達が思わず息を漏らす。

「齋藤キツク!」

「くっ、蹴りもアリか……」

「当たり前だろ! 勝てば官軍の世の中だ!」

突然脛をけたぐられ、劍丞が大きく体勢を崩した。

「めえーんっ!!」

「なんのおっ!!」

追い打ちをギリギリの所で避け、劍丞は左手でその辺の砂を掴んで九十郎の顔に投げつけた。

「てめえっ!! この野郎おっ!」

イケメンならイケメンらしく清く正しく美しく散りやがれっ!!」

自分の卑怯技を棚に上げた無茶苦茶な理屈である。

「あいにく、ウチの教育方針はそこまでヌルくないんだよっ!!」

劍丞は真つ当な戦い方をやめ、孫伯符直伝のヤクザキックを九十郎の腹筋に叩きつける。

「うぐっ……へっ、まだまだこれからだ」

鎧のように頑強な筋肉の層によって衝撃はやや軽減されたものの、それでもダメージは決して小さくない。

「さあて、そろそろきつちりイケメンの劍丞君をシメてやらねえとな……」

「嫁が見ているんだ、負けてやる気は無いぞ、九十郎」

「当然、ワザと負けられちゃ困るよ」

劍丞と九十郎が睨み合いながら竹刀を握り直す。

ふう、ふう、と息を整えながら、再び劍と劍が交わる一瞬を読み合う。

そんな緊迫した空気に、嫌が応にも周囲が静まりかえる……

「劍丞の！ ちょっと良いトコ見てみたい！」

そんな緊迫した空気を美空は見事にブチ壊した。

黙って見物しているのが面倒になってきたのだ。

緊迫した空気は一気に『この人いきなり何言ってるの？』的な空気になる。

「劍丞様は今お忙しいので、私が代わりに聞きますが、何のおつもりですか？」

「甲斐に行つてほしいな〜つて」

「……え？」

予想外の提案に、劍丞が思わず美空に視線を向ける。

「武田晴信がねえ、

劍丞が甲斐に来ないと越後に攻め込むよ〜つて感じの書状を送り付けて来たのよ。」

「は、はい……？」

余りの予想外の展開に、詩乃も思わず声が上ずる。

ひよ子と犬子は早くも思考を放棄した。

「越後を守るために甲斐に行つてほしいなつて、劍丞に、1人で」

「……え？ え？」

もう一回聞き直しても同じ……いや、むしろさらに最悪な要求を突き付けられ、劍丞

は思わず決闘中だという事も忘れ、目をまん丸にした。

「面」

「あだっ」

当然、目敏い上に卑怯者の九十郎がそんな隙だらけの劍丞を見逃す筈無く、劍丞と九十郎の決闘はすぐくアツサリ目の終わりを迎えた。

「どうだ勝つたぞ犬子！ 見ていたか？」

それと美空ナイス援護だ！ 後でキスしてやる！」

「一応、名目上は人妻だから唇は駄目、おでこにお願いね」

「……九十郎と美空様って、時々本当に恰好悪くなるよね」

犬子はゴミムシを見るかのような視線を九十郎に向けていた。

「勝てばよかろうなのだアアアアツ!!」

「勝てばよかろうなのだアアアアツ!!」

美空と九十郎が2人でジョジョ立ちしながら勝ち誇る。

2人共格好悪い勝ち方だという事は理解しているが、それはそれとして九十郎は劍丞を殴りたい、美空は劍丞に吠え面をかかせたいという欲求を抑えられなかったのである。

「本当に恰好悪いなあ……」

ため息をつきながら空を仰ぐ犬子の頬は、僅かに緩んでいた。

卑怯だろうが、恰好悪かろうが、自分に劍丞に勝つ瞬間を見せたかったのだと思うと、胸の内に嬉しさが込み上げてきていた。

「（九十郎と美空様が恰好悪い所見ると、顔が緩んじやうなあ……）」

……最近自覚した、犬子は恰好悪い時の九十郎や美空が好きなのだ。

「……で、俺に甲斐に行つてほしいってどういう事？」

「……で、劍丞に甲斐に行つてどういう事だよ？」

それはそれとして劍丞と九十郎がさっきの爆弾発言の真意を問いたです。

「そうですね、教えてもらいましようか」

「美空様、まさか劍丞様との結婚が嫌になつて抹殺する気ではないですよね？」

詩乃や雫からもじとくとした視線が浴びせられる。

劍丞を負けさせるのは成功したが、一気にアウエー感満載な空気の中に放り込まれる羽目になった。

「武田晴信が、劍丞の身柄を渡さないと越後に攻め込むつて強迫してきたのよ。

さつきも言つたけど、これはマジなお話」

「え？ 俺を？ 何で？」

「ちよつと分からないわね、あいつはいつつも唐突だから。雫は何か心当たり無い？」

「甲斐の武田晴信が劍丞様を求め理由……ですか……？」

美空様、そのお話はどなたから？」

「今日の昼、典厩武田信繁からよ。晴信の書状を持っていたわ」

「とすると時期的に……」

例のバカ騒ぎ、じゃなくて、美空様が劍丞様の嫁になる以前に書かれたものでしょうね」

「前々から、何で信繁が越後にいるんだろぅな〜とは思っていたけど、

どうやらあの書状を持つてくるためだったみたいね」

「しかし……やはり晴信さんの意図は読めませんね……詩乃さん、どう思いますか？」

詩乃が深く静かに思索に臨む。

劍丞を寄こせという武田晴信の意図を読む事も確かに重要だ。

しかし今、もっと重要なのは……

「劍丞様を引き渡したとしても、越後に攻め込まないという保証は無いですね。

そして劍丞様に危害を加えない保証もありません。

人質にされるだけではありませんか？」

「その懸念はありますね……」

「ぶっちゃけ甲斐で惨たらしく殺されてくれた方がうれし……」

雫と九十郎から『黙つてろ』という視線を浴びせられ、美空が口を噤んだ。

「美空様が劍丞様の嫁になった件は、武田にとつても予想外と思います。」

幕府に、織田、浅井を同時に敵に回す危険性を考えれば、

そう易々とは危害を加えられないとはおもいますが……」

「雫、志賀城に生首3000並べる人に理性を期待するのはどうかと思いますよ」

「ですよねえ……」

詩乃と雫の話し合いの結果、徐々に反対の方向へと雰囲気の流れていく。

「んじゃあ保険をかけようぜ」

「保険……?」

そんな時、九十郎が独り言のようにそんな事を呟いた。

「一二三いつ! どーせその辺で話聞してるんだろー!?」

ちよつと話あるから出て来おーいつ!!」

「はいはい、一二三はここにいますよー」

まるで遠吠えのように大きな声を出すと……近くの樹の影からひよこつと美女が顔を出した。

「たぶんいるとは思ってたが、本当にいるとはな。一二三、お前何やってんだよ」

「そろそろ呼ばれると思ってスタンバってました」

「じゃあ次に俺が言うセリフを当ててみてくれ」

「劍丞のフォローよろ」

「正解、悪いが頼む」

「お任せあれ。と、いう訳で織田の天人様の身の安全は私、

武藤一二三昌幸が守るからさ、大船に乗ったつもりでいてくれたまえ」

唐突に現れた一二三がどーんと胸を叩いた。

「どう思います、雫」

「正直心配でならないんですけど、任せる他無いので……」

「ひどいなあ、大丈夫だって、悪いようにはしないから」

誰にとつて悪いようにしないかを明言していない所がポイントである。

実際の所、表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸を信用する事は、劉玄德に兵を貸して国の要所を守ってくれと頼むのと同じ位危険である。

「ああそれと、2人か3人くらいなら劍丞殿に同行させられると思うよ」

「……: どういう事ですか?」

「そこはまあ、私の交渉術で。」

お嫁さんと離れ離れにするのは非道じゃないかゝつて泣き落とすつもり。

典廐様は案外泣き落としに弱いからねえ」

「すいません、この人が交渉術って言うとか寒気がするんですが」

「訴訟も辞さない」

「残当」

「残当ね」

「犬子も同じ気持ちです」

「まあ何にせよだ……剣丞、俺にできるのはこの程度で、申し訳ねえとは思う。だが

……」

九十郎が剣丞に向き直る。

「……甲斐に行くべきだと、俺は思う」

基本層で、基本能天気な九十郎が、珍しく真面目な顔をしていた。

「危険です!」

「そうですよお頭あ! 危ないですよおつ!」

詩乃とひよ子が即座に反論する。

雫もまた、言葉にこそ出していないものの、詩乃と同じく、危険性が高すぎると感じ

ていた。

「糞弟子（綾那の事）を連れてけ、あいつなら1000人くらいまでなら1人で蹴散らせる。」

護衛としては最適だろう」

「しかしっ!」

「本気でヤバくなつた時は……一二三、悪いが劍丞の事を頼む。

綾那は放置しても良いぞ、どうせ殺しても死なないから

「その時は責任を持つて安全な場所まで避難させるよ、それで良いかい?」

「そこまでして何故劍丞様を甲斐に行かせようとするのですか!」

「なんでつて……そういう話の流れだつたら?」

「話の流れ!」

訳の分からない理由に、詩乃が思わず聞き返す。

「劍丞が越後でやれる事は、今日の決闘で大体終わつただろ?」

次はどこか別の場所……例えば、武田晴信のいる甲斐とかで物語を動かすべきだろ」

「それは……劍丞様が主人公だからですか?」

「ああ、そうだ」

九十郎は迷い無く頷いた。

歪んでいる……詩乃はそう感じた。

詩乃だけではない、雫も、犬子も、美空も、今でもなお斎藤九十郎は新田劍丞を主人公だと根拠無く信じているのだと気づいた。

主人公だから物語を良い方向に導く筈だと根拠なく信じて、主人公だから多少無茶させてもそう簡単には死ななないと根拠無く信じているのだと。

「美空様、これって……」

犬子と美空がひそひそ声で相談を始める。

「どうやら一番太くて深い根っこ取り去れていないようね」

「そうみたいです、どうします？」

「とりあえず剣丞を遠ざけましょう」

「それ、問題の先送りじゃないですか？」

「長い事剣丞を越後に置いてたら結婚式を開かなきゃいけないし、

夫婦のアレコレする羽目になるじゃない！ 今回のゴタゴタでその辺有耶無耶にするわ」

「美空様って、本当に時々凄く恰好悪くなりますよね」

「剣丞とセックスする位ならその辺の野良犬で処女を散らした方がまだマシよ」

「あ、本当にしたいならいつでも犬子の御家流で……」

「例え話に決まってるでしょうがっ!!」

犬子と美空がそうやって盛大に話を脱線させている頃、残りのメンバーの視線が剣丞に集まっていた。

甲斐に行くか、行かないか。

結局、その最終的な判断は、当の本人である新田劍丞に委ねられる。

「俺は……甲斐に行こうと思う」

そして新田劍丞は皆の前で力強く頷き、そう宣言した。

数日後、綾那、詩乃、小波そして新田劍丞の4人は夕霧達と共に甲斐へと旅立った。

……

……

……

「小波の奴全然来ねえし……またすっぽかされたし……」

そして小波が急遽甲斐へ行く事になったため、自動的に風魔小太郎・通称姫野は、全く土地勘の無く、人脈も無い伊賀（伊賀忍軍の本拠地）へ単身潜入するという、人生最大のハードモードに突入する事が決定づけられた。

「小波のアホオオオオオオオオ……!!!」

姫野の悲しみと憎しみに満ちた叫び声が山奥に木霊した。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第119話『今明かされる 衝撃の真実』

「しばらく越後には戻れねーでやがるよ。 何かやり残した事はねーでやがるか?」

典厩武田信繁・通称夕霧が劍丞にそう確認する。

時間が差し迫ってる筈なのに待つてと言えば待つてくれる人……龍が如くでは良くある光景、現実には滅多に無い光景だ。

「……………」

劍丞が無言で考え込む。

昨晩は色々ありすぎた。

自分の足元が粉々に碎けて奈落へと引きずり込まれるかのような感覚がする。

愛する嫁である織田久遠信長を命懸けで守ろうとしていた自分が、その久遠を害そうとする陰謀の片棒を担がされていたのだから。

「おい! 聞いてたでやがるか!! 返事くらいするでやがるよ!」

「ああ、すまない」

「劍丞様、何かあったのですか? 顔色が優れませんよ」

詩乃が心配そうな眼差しを向ける。

一瞬だけ目が合つて、劍丞は居た堪れなくなつて目を逸らした。

「劍丞様……？」

明らかに様子がおかしいと詩乃は感じた。

昨晩宴会でベロンベロンに酔つぱらつた美空が、『あくたわりやしのおつとでしよがあゝ』とか何とか言いながら劍丞を引つ張り、半ば無理矢理晩酌に付き合わせた事や、今朝何故か美空が全身ズタボロの傷だらけだった事が何かしら関係があるのではと思つたが、具体的な事は何一つ分らない。

劍丞も黙して語らない。

聞くべきか、それとも自分から語つてくれるのを待つべきか……詩乃が迷い、悩む。

同時に劍丞も悩んでいた。

昨日の出来事を言うべきか、言わざるべきかではない。

「(言える訳が無い、あんな事を……)」

……

……

……

……美空と劍丞が増えるエーリカ達に襲撃された直後まで時は少し遡る。

増えるエーリカを撃退し、服を着直した4人は、血痕だらけで刀傷だらけの部屋の片づけを部下に任せ、井伊直政・通称新戸の元へやって来た。

「何で一二三までいるのよ?」

……訂正、4人と一二三が新戸の元へやって来た。

「青姦してた」

「青姦してました」

「青姦してたから」

犬子と一二三と九十郎の声が無駄にハモる。

「あんたらこの非常時に何ヤツてんのよ!?!」

「無茶言うなよ、非常時だって分かったの、お前が犬笛吹いたからなんだぞ」

「私も結構急いで走ったんだけど、

流星に犬子殿と九十郎殿の健脚には敵いませんでしたと」

「あんまりコイツに機密性の高い話を聞かせたくないのだけど……」

「むしろ一二三にこそ聞かせるべきだと思っぞ、劍丞のフォロワー頼んだんだから」

「そもそも何でわざわざ敵にそんな事頼むのよ……」

「はいはい、そんな事より新戸ちゃん。

「こっちの経緯はそんな感じなんだけど、何か知ってる事無い?」

今日あった事を犬子から聞いた新戸は、しばらく黙り込み……

「ふふふ……ふふははは……はあくつはつはつはつはつはあ!!」

……唐突に笑い出した。

「変な悪役笑いしてる暇あったら何か喋れよ」

九十郎が新戸の後頭部を思い切りドツいた。

そして新戸は妙にハイテンションで笑い転げていたのだ。

「最高に『ハイ!』ってやつだアアアアア! アハハハハハハハハハハ……ツ!!」

「DIO様ごっこしてねえでまともな事を喋れ」

九十郎が新戸の後頭部に斎藤パンチを叩き込んだ。

「痛いぞ、クズロー」

新戸がぶすくつと頬を膨らませながら抗議の視線を向ける。

「何か楽しい事でもあったのか? こっちはそれどころじゃねえんだ、後にしろよ」

「楽しいというか……嬉しい事だ、とてもとても愉快で堪らない」

「分かったよ聞いてやるよ30秒で終わらせろよ」

「オレ達の戦いは無意味ではなかったあつ! オレ達の死は無駄ではなかったあつ!」

「はい聞いた。じゃあこっちの用件を話すぞ」

「もうちよつと聞いてくれクズロー」

新戸が若干涙目になりながら抗議の視線を向ける。

「ぶつちやけ眠い。とつとと終わらせて帰って寝たい」

「九十郎、仮にも主君が殺されかけたって時にそれは無いんじゃないかな」

「そうね、ぶつちやけ私もドン引きよ」

「おやおや、九十郎の主君は柿崎景家殿と聞いていたのだけど、違ったので？」

主君兼弟子兼正妻という訳の分からない立場である。

「主君の主君は主君も同然でしょうが！」

「そんなクリスタル聖闘士理論は俺には通じないんだよ」

「全く、本当にこいつは時々格好悪いわね」

「そういう所も九十郎なんですけどね、私も時々幻滅しそうになります」

「むしろ駄目人間な所が良いんじゃないかな」

「一二三さんって、実は男性の趣味が悪い？」

「犬子、ブーメランブーメラン。いや私にも刺さるけど」

「何にせよ剣丞、後は全部任せたから俺は帰って寝る」

「その剣丞様が問題だから来てるんだって!!」

「じゃあ犬子、後は全部任せ……」

「啣むよ」

「仕方ないな、美空……」

「三昧耶曼荼羅、無理すればあと一発くらい撃てそうなのよね」

「一二三、頼んだ」

「え？ この後私が好き勝手にして良いのかい？」

一二三が瞳を爛々と輝かせる。

その瞬間、九十郎は大江戸学園時代の友人である比良賀輝と同じ印象を抱いた。

即ち……放置したら絶対にロクな事にならないという確信である。

「前言撤回！ 分かったよ、聞きや良いんだろ聞きやあ。」

何だつて俺が糞二一トの機嫌とらなきやいけねえんだ」

九十郎がぶつくさと言文句を言いながら話を聞く体勢になる。

「それで、何でそんなに上機嫌なんだ糞二一ト君は？」

「それを語るには下準備……」

「うん？ 何やってんだお前？」

新戸がその辺から棒きれを拾い、地面に大きな円を描く。

「ちよつと危ないからこの線から中に入るなよ」

「てつきり魔法陣でも描いてるのかと思つたぞ」

「グルグルの読み過ぎだな」

美空と犬子と一二三、それに劍丞が言われた通りに一歩ずつ後退する。

新戸はさつき地面に描いた大きな円の中心に座り、空を見上げた。

「さて、長い話になるが、どこから話そうか……」

無数の並行世界に存在する無数の虎松達の戦いの記憶に思いを巡らせる。

長い戦いだつた。

長い長い戦いだつた。

何百もの、何千もの虎松達が無残に落命していった。

虎松達はもう駄目なのか、もう無理なのかと諦めかけていた。

少なくとも数々の虎松達が戦いを諦め、抵抗をやめていた。

まだ完全勝利には程遠いが、大きな大きな勝利を収めた、

新戸にはそれが嬉しくてたまらないのだ。

「先にクズロー達の疑問に答えておこう」

にまあ〜つと笑いながら新戸がそう告げる。

心が読めるので、新戸には九十郎達は何を見て、何を聞いたのかを完璧に把握しているし、九十郎達が自分に聞きたい事も完全に理解している。

今の新戸の心境は『積年の恨みじやコンニャロウ』といった具合だ。

恨みの対象はそもそもの元凶のオーデインと、現場の苦労も知らずにあれをやれこれ

をやれと口うるさい早雲、そして数多の世界で虎松達の思惑とは真逆の事をしでかし、数多の世界で虎松の死因、敗因になってくれた新田劍丞だ。

「犯人はオーデインだ」

「ほう」

そう告げた瞬間、新戸がキツと空を見上げて身構える。

10秒待ち、20秒待ち、30秒待ち……天を裂き、大地を割り、全てを貫く恐怖の一撃が一向に出来ない事を確かめる。

「グングニルは飛んで来ないか。　どうやら相当大きなズレができているようだな」

再び新戸がにまあくつと笑みを浮かべる。

「おい糞ニート、何だグングニルだのオーデインだの、それじゃまさか北欧神話の……」
九十郎が新戸を小馬鹿にするような言葉を投げかけ……途中で言葉を途切れさせる。

「もしかしてマジでオーデインが敵に回ってるのか?」

九十郎が真顔でそう尋ねる。

戦国時代に来てからバーゲンセルのように超能力者に会うし、井伊の糞女とは会うし、鬼は出るしで、ここまで来たらオーデインが出てきてもおかしくねーかと思つたのだ。

「うん」

新戸が頷く。

九十郎は目の前が真つ暗になった。

「理由は？」

「英雄の魂」

「ターゲットは美空と犬子か……」

九十郎は頭が痛くなつてきた。

「九十郎、オーデインって誰？」

「北歐神話の神様だよ。勇者の魂をヴァルハラに集めてラグナロクに備えてる」

「えくカミサマ？ カミサマなんて迷信でしょ」

「景虎さくん、貴女はその台詞言ったら駄目だと思えますよ」

「美空様、ブーメラン刺さってます」

「神社の奥から御神体引つ張り出して拾ってきた小石を置いてきた事あるけど、

別に何も起きなかつたわよ」

「比良賀と同じ事してんじやねえよ上杉謙信っ!!」

「美空様もしかして意図的に罰当たりな事繰り返してませんか？」

「いつそオーデインとかいうのに連れ去られた方が平和なんじやないかなあ」

「一二三さん、流石に言い過ぎ」

惚れた男から辛辣な台詞を浴びせられたシヨックで、美空が物陰で一人マルバツを始めた。

「オーデイン……確か、ルーン魔術の……」

劍丞がそう呟いた。

「ああ、ルーン魔術を作ったって話だな、神話では」

劍丞が無言になる。

美空の身体に宿った自称毘沙門天が立ち去る寸前に告げた言葉が……『ルーン魔術』という言葉が劍丞の脳裏によぎる。

「おいこら糞ニートオツ!! 何で今まで黙ってやがったこの野郎お!!」

「頼む教えてくれ! 一体何が起きているんだ! 犬子の事もオーデインの仕業なのか!」

劍丞と九十郎がさつき描いた円を踏み越えて新戸に詰め寄り、縋りつく。

「その円から入ってこない方が良くぞ、巻き添えで死にたくなかったら」

「何かあんのか?」

「いつものパターンだと、グングニルが飛んでくる」

「あつぶねえなおい!?!」

劍丞と九十郎が慌てて円から外に出る。

「……で、いつから気づいてたんだ？」

美空達がオーディンに眼をつけられてるって事によ」

「だいぶ前、別の世界のオレが命と引き換えに掴んだ」

「何でその時点で俺か劍丞に言わなかった？」

「迂闊に情報を出し過ぎるとグングニルが飛んでくる」

「飛んできてねえぞ、いい加減な事を言うな」

「オーディンのシナリオにズレが起きた。」

グングニルはオーディンの魔術の中でも特に複雑で繊細だ。

だから今、オーディンはこの世界にグングニルを飛ばす事ができなくなっている」

「九十郎、分かる？」

犬子は早くも話についてこれなくなりつつあり、困り果てた表情で九十郎に助けを求め。

一人マルバツをしている美空もしっかりと耳を傾けている様子であったが、やはり話についていけておらず、頭上に多数の『？』マークを浮かべていた。

「すまん、俺もちよつと分からん。糞ニート、もう少し分かり易く話せ」

「オーディンにとつても、異なる世界に対して魔術を飛ばすのは難しい。」

例えるならイトカワに小惑星探査機を飛ばして、サンプルを持ち帰らせるようなも

の。

「もしも急にイトカワの軌道が変わったらどうなると思う?」

「……どうなるんだ?」

「軌道計算のやり直し。」

場合によつては設計図の段階から探査機を作り直さなきゃいけなくなる。

「だがグングニルはオーデインの切り札、そうポンポン連発できるものでもなければ、
そう簡単に設計変更ができるようなものでもない」

「必中の槍のくせに融通がきかねえな」

「撃てば必中だが、撃つのが大変なんだ」

「ところで、さっき言っていたシナリオのズレってのはどういう意味で?」

「今日、美空は剣丞と結ばれる運命だった」

「あ? 誰が誰と結ばれるって?」

隅っこで一人マルバルをしていた美空が新戸にガンをつける。

「もう一度言う、今日美空は剣丞と結ばれる運命だった。神が定めた宿命だった」

「つまりオーデインとかいうクソツタレが勝手に決めたって事でしよう」

「奇跡ってのは起きないから奇跡と言うんだ」

「kanonか、懐かしいな。小学生だった事にプレイしたよ」

しれっと18歳未満お断りのゲームをXX歳でプレイしたと自白する屑男がいた。エロゲーなぞ一度もプレイしてない真面目な剣丞には全く理解できていない会話である。

「オレが100万回死んだ」

新戸がどこか陰のある表情でそう呟く。

美空も犬子も、剣丞も九十郎も思わずぎよつとする。

目が完全に死んでいて、焦点もあわず、虚ろだった。

それは冗談でも何でもなく100万回分の死を経験しているのかと思う程だ。

「100万のオレが犠牲になった。大部分が何の成果も得られない無駄死に、犬死だった。」

数少ないオレ達がほんの僅かな情報と引き換えに命を落とした。

そして少なくともオレの心が折れ、諦めた。

運命なのだと、何をやっても無駄だと……諦めて、受け入れるしかないのだと「諦めたらそこで試合終了だよ」

「本当にな。だから正直オレは……オレ達は半ば諦めていた。」

オレがさつき笑っていた理由はそういう事だ」

「んで、そもそもお前は何でオーデインと戦ってるんだ？」

「北条早雲を知っているか？」

「名前くらいはな」

犬子と美空と一二三、それに劍丞もうんうんと頷き合う。

「オーディンは英雄の魂を集めラグナロクに備えていた。

早雲はかつてオーディンの協力者だった。今は決別しているがな」

「新戸ちゃん、ごめん、らぐなるくって何の事かな？」

「宇宙サバイバル編みたいなものだ」

「ごめん、全然分かんない」

それが分かるのはドラゴンボール超視聴者だけである。

当然、劍丞にも九十郎にも分らない。

「オーディンの予知で、将来途轍もなく大きな戦いが起きるとだけ考えていてくれ。

オレも全容を知っている訳じゃない。

初めのうちは早雲は自発的にオーディンに協力していた。

ラグナロクに備えも、そのために英雄の魂を必要としている事も嘘は無い。

だがその過程で、オーディンが早雲の家族の魂を奪い、

エインヘルヤルにしようとしているのが分かった、だから早雲はオーディンと戦つ

た」

「新戸ちゃん、えいんへるやるって……」

「英雄の魂を小豆とするなら、エインヘルヤルはこし餡だ」

「つまり集めた魂を加工してるって事ね。まったく、人を何だと思っているのやら

……」

「オーデインに囚われると生きてまま蒸したり焼いたり刻んだり痛めたりされて、

他の英雄の魂と混ぜ合わせられられて、

最終的にはオーデインの手駒にされる……と理解していれば良い」

犬子と美空、それに劍丞、あろう事か九十郎までもがぞくりと背筋を震わせる。

自分自身が、愛する嫁が、生きてまま調理される光景を思わず想像してしまったのだ。

「そーいえば孔子様は人肉が好物なんだっけなあ」

「一二三さん！ 変な時に変な事言わないで！」

「なあ、他の魂と混ぜ合わせるって言ったよな。」

例えば……明智光秀の魂と、ルイス・フロイスの魂を混ぜる事も……」

劍丞が恐る恐るそう尋ねる。

「そうだ、エーリカはエインヘルヤルだ。」

こちらの状況をコントロールするためにオーデインが送り込んだ。

本人はその自覚は無いだろうがな」

「増えるエーリカの正体がそれか……」

「なら、あの6匹だけじゃないと考えておいた方が良いわね」

「1匹見たら20匹はいるって昔から言うねえ」

「一二三、それゴキブリだぞ」

「それで、早雲がオーデインと戦った後、どうなったんだ？」

「当然、早雲が負けた。」

剣魂という怪異を斬るための武器を用意したが、それだけでは勝てなかった。

早雲はオーデインから逃れるために、無数に存在する並行世界の一つに逃げのびた。

逃げた先で、早雲はより強力な武器を作り始めた。

それと同時に、オーデインのシナリオを潰す方法も模索した……

その過程で、虎松と出会った」

「それで協力する事にしたのか？」

「あまりにも哀れだったからだ。だが今は正直に言っただけ後悔している。」

早雲は人使いが荒い、他人の死を前提にした策を遣うのも嫌いだ」

「ははは、お前って昔から貧乏籤を引くよな」

「オレはいつもそうだ、尊治の時もそうだった。」

「あまりにも哀れだと思っただけ……後で後悔する」

「今からでもやめちまったらどうだ？」

「途中でやめたオレは大勢いる。」

何の成果も無く、何の意味も無く死んだオレはもっと大勢だ」

「これから俺達はどうすれば良い？」

「今、オーデインはこちらの世界に干渉する手段を完全に失っている。」

だが、時間と共に再びこちらに干渉する手段を得る。

単純で、簡便で、融通の利く魔法ほど早く、

複雑で、強力で、融通の利かない魔法は遅いだろう。　グングニルは一番最後だ」

「それを防ぐためには……もう一度シナリオを動かすか」

「その通りだ。今のオーデインは目も耳も塞がれ、手足を縛られているも同然。」

しかし、グングニルを飛ばせるようになった時点では、奴は限りなく全知全能に近い」

「糞ニート、この後のシナリオはどうなる？」

「劍丞は甲斐に行き、武田晴信と会う」

劍丞はどきりと肩を震わせる。

美空と犬子が思わず顔を見合わせる。

明日の夜明け、劍丞は典厩武田信繁・通称夕霧と共に甲斐に行く事になっていくからだ。

夕霧が越後に来た事すらオーデインの思惑、オーデインの計算に入っているのかと

……

「ハンサムの劍丞君は武田晴信と妹達、武田四天王と共に鬼と戦い、愛を育む。

そして劍丞を中心とした織田、浅井、松平、長尾、武田の大同盟が組まれる」

「劍丞君の大ハーレムね。晴信と棒姉妹だなんて寒気がするわ」

「……そうなる事が、オーデインの計画なのか？」

劍丞が震えながら尋ねる。

頭をがっつんと殴られて、思考が真っ黒になっていくような気分だった。

「そうだ」

新戸は極めて冷静に、極めて冷徹に、淡々と質問に回答する。

「美空様、本気で劍丞様を除きませんか」

犬子が真剣な表情で提案する。

除くとはつまり殺すという事だ。

「おい犬子、それは無しだって何度も言ってるだろ」

「でもさ、向こうは劍丞様と武田晴信さんが結ばれるのを避けなきゃいけないでしょ。

一番確実だよ」

「それに手っ取り早いわね」

「お前らな……俺は反対だぞ」

「死ぬよ」

新戸のぼそつと呟いた一言に、議論がぴたりと止まった。

何とも表現し難い、妙な重みと妙な迫力の籠った呟きであった。

「……糞ニート、今何て言った?」

「劍丞を殺せば、犬子も死ぬ」

「えっ?!」

犬子は思わず、女の子がしてはいけない声を発する。

「言うなれば劍丞は鶉飼の鶉。劍丞と関係を結んだ女は全員マーキングがされ、

劍丞の死と同時に魂を抜かれ、ヴァルハラに送られる。」

「関係って……」

「ち〇こをま〇こに挿入する事だ」

「デデーン、犬子アウト」

「笑い事じゃないよ九十郎おっ!」

私だけならともかく、ひよ子とか詩乃さんとか、松葉まで死んじやうよ!」

「く、久遠と一葉も……だな……」

「アンタ公方様にも手を出してんの!? 他は!? 他はいないの!?!」

「壬月と麦穂と桐琴と転子と鞠と梅と歌夜と小波と眞琴と市と双葉と幽……」

「織田の風紀乱れすぎいつ!？」

「美空様どうしましょう!？」

それだけの人数が一遍に急死したら何が起きるか分かりません!」

「殺すのは無しよ! 流石に洒落にならないわ!」

それで……えつと……軟禁! 甲斐行きは中止して座敷牢に入れましょう!!」

「なるほど! 流石は美空様です!」

「……ごめん、やっぱ無し。」

急に甲斐行きを中止したら晴信が攻め込んでくるかもしれないわ!」

「そ、そんなあ……」

「そっくりさんを送り込んで、これが新田劍丞ですと言いつ張るのはどうだ?」

「いくら何でも夜明けまでに影武者を用意するなんて無理よ!」

「新戸ちゃん! 何とか外せないの!?! その……まあきんぐつての!」

「オレにはできません。だができる可能性がある人物は知っている!」

「え、誰?」

「五十嵐光臣!」

「誰えつ!?!」

「あいつかよ!？」

犬子は誰の事だと分からずに、九十郎は誰だか分かったが故に頭を抱える。

五十嵐光臣……ニホンが誇るトップエリート共がその溢れんばかりの才覚をゴミ箱にダンクシュートし、俺はここだけ一足お先と光の速さで明後日の方向にダッシュする魔境大江戸学園の中でもトップクラスの天才であり、同時にトップクラスのバカでもある。

ついでに言うと、斎藤九十郎の前の生での友人であり、戦国時代の人間ではないため絶対に助力は見込めない人物である。

「とすると……」

「ええ……」

「劍丞様! 甲斐では誑し禁止ですよっ!!」

「劍丞! 甲斐では誑し厳禁よっ!!」

美空と犬子が声を揃えて劍丞に詰め寄る。

それにしても新田劍丞に誑しを禁止するなど、魚に泳ぐな、鳥に飛ぶな、両津に副業をするなど命じるようなものである。

「わ、分かった」

劍丞は若干引き気味にはあるが、2人の言葉に頷いて見せた。

「誑し禁止と言われて止められるものかな……」

そんな3人とは少し離れた場所で、一二三が小さく呟いた。

「イケメンの剣丞様だしなあ……」

正直、武田晴信の方が勝手に惚れて、勝手に嫁になるって言い出す可能性、結構高いぞ」

九十郎も心配そうに呟いた。

「それならいつそ……」

「ああ、そうだねえ……」

一二三と九十郎が一步步近づき合い、肩が触れ合う程に密着する。

次にいう言葉は、新田剣丞には絶対に効かせられない言葉だからだ。

「……先に晴信を殺すか」

「……御屋形様に死んで頂いた方が」

2人の考えが一致した。

……

……

……

そして翌朝、剣丞は昨晚の出来事を思い出しながら、これからどうするべきかと考え

込む。

「とにかく、武田晴信さんと仲良くなるのはともかく……たぶん無いとは思うけど、同衾というか、ナニをアレする事だけはなんとか避けないといけない。

今はマーキングを外せないとはいえ、外せる可能性はあるんだ。

その方法が見つかるまで、死ぬ訳にはいかない」

そして劍丞は、腰に帯びた二振りの劍に視線を下ろす。

一つは姫野から譲り受けた小太刀、もう一つは昨日電池を抜かれ、置物同然になった出自不明の刀である。

「まさか電池で動いていたなんてな……」

劍丞が呟く。

新戸によれば、おそらくオーディンによってプログラミングを変更され、オーディンの洗脳魔術を中継するアンテナのような役割をさせられているとの事だ。

そして電池を抜いている限り、勝手に動いたり、オーディンの魔術の中継をされたりはしない筈だとも聞いた。

そしてプログラムを元通りに直す事ができるのは……

「(大江戸学園の五十嵐光臣か……なんとか行く方法があれば良いんだけどな……)」

劍丞には何も思い浮かばない。

今劍丞達がいる世界にとって、大江戸学園はいわゆる異世界、いわゆる並行世界にあたる。

異世界、並行世界に渡る術など、思い浮かぶはずもない。

ニホンが誇るトップエリート共がその溢れんばかりの才覚をゴミ箱にダンクシュートし、俺はここだけ一足お先と光の速さで明後日の方向にダッシュする魔境でもなければ、異世界に渡る方法を本気で研究する者も、それを実行に移そうとする者もいる訳がない。

「それじゃあ改めて聞いてやるでやがる。 劍丞、越後でやり残した事はねーでやがるな？」

「ああ……」

聞かれるまでもないと、劍丞は思った。

自分がやるべき事……いや、やってはいけない事は昨晚何度も何度も念押しされた。

武田晴信を誑さない、セックスしない、ただそれだけを考えると念押しされた。

オーデインのシナリオを変えるために……

そして劍丞は自分と共に甲斐に行ってくれる人達に視線をやる。

「劍丞様、何があってもお仕えします」

詩乃が頷いた。

「綾那が劍丞様をお守りするのです！」

綾那が大きく胸を張った。

「向こうで変な騒ぎ起こすなよ、鹿角」

そして小夜叉が……

「……あれ？　なんで小夜叉がここに？」

「オレも甲斐に行くからに決まってるんだろ」

「そんな話聞いてないぞ」

「九十郎の奴が俺は引き取りたくないって言うから、山県家が預かる事になったんだぜ」
ちよつと不機嫌そうな粉雪が横から補足説明をする。

劍丞は知らない事だが、森一家に戻るに戻れなくなった小夜叉を越後の柿崎家で引き取るか、甲斐の山県家で引き取るかで一悶着あったのだ。

「いや、山県家で預かるって……桐琴はどうしたんだ？」

「帰れるかつ!!」

「返せるかあつ!!」

小夜叉と粉雪の声がハモる。

事情は良く分からないが、いずれにせよややこしい事態になっている事は確かだ……

「……………めん、まだやる事が残ってた」

結果、劍丞の越後滞在期間が1日延びた。

甲斐で姉（基本クズ and 人殺し）を待たせている夕霧はそんな劍丞の台詞を聞いた瞬間頭を抱え、聞くんじやなかったでやがると呟くのだった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第120話『悪魔が囁いた』

劍丞達御一行は越後から南下し、武田晴信が待つ甲斐の躑躅ヶ崎館を目指して出立した頃、姫野は1人とぼとぼと西へ向かう街道を進んでいた。

「小波の阿呆お、うんこたれえ、痴呆症お、若白髪あ、恩知らずう……」

2人で伊賀に行こうと約束したにも関わらず、小波はそれを見事に忘れた。

それどころか、甲斐に向かう劍丞を御守りせねばと、取り付く島も無く伊賀とは逆方向に旅立ってしまった。

それ故、姫野は考え付く限りの小波への文句をぶつぶつと呟きながら、肩を落としてとぼとぼと歩く羽目になったのだ。

そもそも、伊賀に行くのは小波が見せた異常な能力と、三歩歩くと姫野の事を忘れる鳥頭の原因を探るため……つまり小波のためなのだ。

伊賀に行くのやくめたと言って越後で昼寝を始めても、小波や劍丞を含め誰も文句を言わないのだが……要するに、なんやかんやで小波が心配なのだ。

後日、この選択が原因で彼女に人生最悪のハードモードが降りかかるとは夢にも思わ

ず……

……

……

……

一方、結論から言えば劍丞による森親子中修復作戦は全く上手くいかなかった。最初から最後まで取り付く島も無かった。

『知らん』の一言で全てバツサリと切り捨てられてしまったのだ。

結局、今すぐに説得というのは困難だと判断され、劍丞の甲斐行きが1日延期され、道中夕霧がふくれっ面になっただけに終わった。

「あの2人にはしばらくらく距離を取らせるしかないか……」

「あたいは最初っからそうするしかないって言ってるんだぜ」

「オレも全然帰る気は無いからな」

「はあ……」

劍丞が馬の上でがっくりと肩を落とす。

「やべえでやがる……姉上きつとカンカンに怒ってるでやがるう……」

「大丈夫大丈夫、どうにでもなりますよ」

「一二三ちゃんはどうしてどうしてそうヘラヘラと笑っていられるの」

「じたばたしてもどうしようもないからね。

それにいくら御屋形様でも、実の妹は殺さないよ、たぶん」

「どうだろ、御屋形様って昔実の母親を国外追放にしてるんでしょ？」

「あそこまで親子仲が拗れたのに殺さずに追放で済ましてるんだよ」

「そっか、それなら安心……って、それだと私や一二三ちゃんはどうかなの？」

「ん？ 躊躇無く首を刎ねるんじゃない、御屋形様だし」

「怖い事言わないでよ一二三ちゃん!？」

湖衣がおめめをぐるぐるさせながら狼狽する。

こういう可愛らしい仕草が見たくて、一二三は時々意味も無く湖衣をからかったり、意味も無く怖がらせたりするのだ。

「一応言っておくでやがるが、姉上は実の妹でも躊躇無く殺すでやがるよ。

諏訪の諏訪頼重に嫁いでった妹がいるでやがる。

世間的には病死して事になってるでやがるが……」

湖衣と粉雪が信じられないといった表情で夕霧を見つめる。

夕霧の顔は暗く、暗く、ひたすら暗い……それが答えだ。

「ちなみに今の話、機密だから漏らしたら死なすでやがるよ」

「だからそんな怖い話聞かせないでくださいよ典廐様あつ!!」

「粉雪、湖衣、ついでに一二三……死ぬときは一緒でやがるよ」

夕霧が虚ろな瞳で虚空を見つめる。

夕霧はマジで実の姉に首を刎ねられる心配をしていた。

「急に甲斐に帰りたくなくなってきたぜ……」

「私もだよ、粉雪……」

「あ、いよいよ危険になったら私は逃げますから、死ぬ時は3人でお願いします」

なお、有言実行する所が表裏比興と書いてクソヤロウと読む武藤昌幸の恐ろしい所である。

……

……

……

……数日後。

甲斐に入り、劍丞と粉雪がちよつとした鬼退治に駆り出され、戻ってくるなり……

「私……武田光璃晴信は新田劍丞と祝言を挙げる」

武田晴信・通称光璃はそんなトンデモ発言を繰り返した。

「ああ!?!」 ↑粉雪

「いいっ!?!」 ↑夕霧

「うつ……!?!」 ↑ 詩乃

「ええ……」 ↑ 劍丞

「おめでとうございます」 ↑ 一二三

粉雪と夕霧を含めた一行が全員啞然とした表情になる。

赤備えの再編そつちのけで越後に入り浸つてた事とか、勝手に越後の御家騒動に参戦した事とか、劍丞を甲斐に連れて来るのが遅れに遅れた事で光璃の怒りを買ひ、斬首されるのではと戦々恐々としていた所にこのトンデモ発言だ、粉雪達の混乱は激しい。

「何考えてるでやがるか姉上ええええええええええーっ!!」

夕霧、渾身のツツコミが爆発する。

「聞いてないぜ御屋形様あー!」

粉雪も衝撃を受ける。

なお、同時に集められた他の四天王（春日、心、兔々）は納得し難いという表情ではあるが、先程の爆弾発言に驚いていない、

「な、何であたいと典厩様にだけ知らされてないんだよ……」

「時間が押していた」

光璃が真顔でそう告げる。

「どこかの誰かが勝手に越後のゴタゴタに首を突っ込んだ」

粉雪と夕霧はバツが悪そうな表情で視線を逸らした。

「あはははははははははははっ!!」

一方一二三は腹を抱えて笑い転げていた。

「や、やばっ……ハラが振れそう……」

出会って早々に婚姻って、しかもよりもよって劍丞殿と……あはははははははっ!!」

それはつまり、オーデインの口の中、胃袋の中に自ら飛び込むようなものだ。

「まるで事前に用意してみたいに鬼が出た上に、

甲斐に来たばっかりの劍丞殿を鬼退治に駆り出したりしたから、

絶対何か企んでるだろうな〜って思ってたけれど、

いやまさか劍丞殿と祝言を挙げるためとは思いませんでしたよ、御屋形様」

「覚悟を見せた相手には相応の覚悟を見せるのが礼儀」

「春日や兎々を説得するためとはいえ、領内に鬼を呼び込みますか普通?」

「呼び込んでいない。 たまたま近くに出て来ただけ、偶然の産物」

「出て来なかったらどうするつもりだったの?」

「出るまで待つつもりだった」

「はいはい、そういう事にしておきましょう」

「いやあの、正直祝言はやめておいた方が良いような気が……」

劍丞ができるだけ恥をかかせないように氣遣いながら断ろうとするも……

「礼儀」

光璃は退かない、媚びない、省みない。

「御屋形様の突然斜め上にカツ飛んで盛大に自爆する所、私は大好きです」

一二三が超頑張つて笑いを堪えながらそう告げる。

後日一二三は光璃の自爆ムーブを指して、『こうするしかなかったのはわかるが、まさか本当にやるとは思わなかった』とか『戦国廬武鉉』とか表現するようになる。

「……自爆？」

光璃が首を傾げる。

薄気味の悪さを感じる程に聡明で抜け目の無い一二三の事だ、いきなり劍丞と祝言をあげる趣旨を即座に理解していると感じた。

それを『盛大な自爆』と表現した事に対し、純粹な疑問を持つ。

光璃的には、けっこう長い事考え抜いた妙案だと思つているのだ。

「ああ、その辺は追々説明していきますよ、御屋形様」

一二三は笑い過ぎで出て来た涙を懐紙で吹きながらそう答え……

「……やっぱり説明はしません。自力で辿り着いてください」

「何故？」

「その方が色々都合が良いからです」

誰にとつて都合が良いかに言及していない所がポイントである。

そしてその表裏比興（くそやろう）的な話術を、当然のように光璃は気づく。

「……もつと後になってから教えた方が笑えるという趣旨？」

「それもありませんが、それだけではないです。色々ですよ、色々」

なお、その『色々』の中には、九十郎と共謀して光璃をブチ殺す算段も含まれている。表裏比興と書いてクソヤロウと読む武藤昌幸は、今更主君殺しの1つや2つでいちいち動揺したりはしないのだ。

……

……

……

それから約一ヶ月後。

「御大将お〜」

柘榴が気怠そうにため息をつき、隣でたればんだ状態になっている美空に声をかける。

「何よ柘榴お〜」

美空が耐え難い頭痛と吐き気に悶えながら返事をする。

原因は二日酔いである。

「また一人酒つすか？ 身体に悪いからもう止めるって何度宣言したつすか？」

「呑まなきややつてられないのよ、毎日毎日頭が痛くなる話がぼんぼん飛び込んできて」

「死ぬつすよ、マジで」

「びんびんコロリと逝きたい所ね」

「この前跡取り決めたとはいえ、正直洒落になつてねーつす」

「やっぱり不満に思つてる連中、多いのかしら？」

「過半数には程遠いつすけど、さりとて少ないとも言えねーつすね。」

北条に越後を売り渡す気がつて

「そういう輩は、空が勝つててもなんやかんやと理由をつけて文句を言うものよ」

「かもつすけど、どうするつもりつすか？」

「人の噂も七十五日、暑さ寒さも彼岸までつて、時間が解決するわよ」

「じゃあ長生きしないといけねーつすね」

「……そうね」

「じゃあ酒も止めないといけねーつすね」

「断固としてNO!! 酒が無いと生きていけないわっ！」

「死ぬつすよ、マジで」

「びんびんコロリと逝きたい所ね」

「やっぱ洒落になつてねーっす」

「柘榴、人の事言えるの？ 瘴気って言うのだけ、

最近ドス黒い煙みたいなのを漂わせてるのを見てる人がいるのだけど」

「うぐっ……」

痛い所を突かれ、柘榴が絶句する。

「確かセックスしたり、オナつたりしたら瘴気が増すんですけどっけ？」

「だ、誰から聞いたっすか……？」

「犬子からよ。 それにしてもおかしいわね？」

「確か九十郎との同衾を断り続けてる筈なのに、一体どこの誰とヤツてるのかしら？」

「誰ともしてねーっす!! 御大将でも怒るっすよ!!」

「じゃあ、オナニー？」

「うぐう……」

柘榴が言葉を詰まらせる、それが答えである。

「鬼になるっすよ、マジで」

美空が嫌味つたらしく柘榴の口調を真似る。

「仕方ねーっすよ！ 身体に良くないのは分かってるっすけど、

生活習慣になつてると言うか、何と言うか……寝る前に自慰をするのが習慣に……

しねーと全然眠れないっすよ!!」

「私もね、寝る前に酒を呑まないと眠れないのよ」

美空と柘榴がじとじととした視線を互いに向け合う。

「死ぬっすよ、マジで」

「鬼になるわよ、柘榴」

そして同時に似たような言葉を向け合った。

「真面目な話、禁酒しないと死期を早めるかもって事は認識してるのよ」

「柘榴自身、そろそろマジでヤバくなってるって認識はしてるっす。

ざわざわつとして、ムラつとくる感じが日に日に増してるっす」

「我慢できないの？ 私と違って数ヶ月耐えれば良いんでしょ？」

「寝る前の自慰が日課になつてて……」

「その位我慢しなさいよ、鬼になるよかマジでしょ」

「マジで辛いっすよ！ 処女の御大将には分からねーっすけど!」

「誰が好き好んで処女でいるかあつ!!」

「だから嫁の貰い手もいねーっすよ!」

「一応人妻よ！ 既婚者よ！ ちょっと釈然としないけど！」

「この鋼の処女膜っ!!」

「その処女膜がオーデインの計画を狂わせたって事忘れるんじゃないわよっ！」

ほらほら！ この鋼の処女膜様にひれ伏しなさいっ！」

美空が唐突に袴とパンツを豪快に脱ぎ捨て、豊満な胸をどーんと張りながら女の部分を柘榴に見せつける。

「……で、真面目な話どうなの？」

美空（下半身だけ素っ裸）が急に真顔になつて柘榴に確認する。

「こつちも真面目に答えるっすけど。時々、猛烈にムラツと来るっす。

視界に入った男を押し倒しそうになつたり、

誰でも良いからおおんぼくくださいって叫び出しそうになつたりするっす。

一回オナつて発散したらしばらく止まるっすけど……

前より強烈なムラムラが襲ってくるっす」

「あれ、ちよつと待つて、それ本気でヤバくない？」

冗談で茶化したらいけない類の大問題じゃない？」

「正直、自力で我慢するのは厳しいかもっす」

「お互い、そろそろ本気で自制つてのに取り組まないと拙いかもしれないわね。」

言つとくけど鬼になつた柘榴と殺し合うとか、絶対に嫌だからね」
「そつすね。あんまり自信ね〜つすけど」

「死ぬ気で我慢しなさい！ 気合よ気合いっ！ 人生に大事なものは気合よつ！！」
美空が柘榴の胸倉を掴み上げる。

「全然酒断ちできねー御大将に言われても説得力皆無つすよ！！」

「手足縛り付けて強制的にオナ禁させるわよつ！！」

「御大将こそ簀巻きにして強制的に酒を断たせられてーつすか！！」

「はっ、残念だったわね、んな事したら政務がパンクするわよつ！！」

私が一日にどれだけの客に会つて、どれだけの報告に目を通して、

どれだけの書類を書いてるか知らない訳無いわよねつ！！」

「それは柘榴も同じつすよ！ 御大将は忘れてるかもしれないねーつすけど、

柘榴は柿崎城の城主で、先手組の大将で、軒猿の取りまとめもやってるつすよ！」

「政務を滞らせるつても鬼になるよりマシじゃない！」

「それを言うなら、酒毒で早死にするよりマシって言い返すつすよ！」

「んな事アンタに言われんでも分かつてるわよ！

分かっちゃいるけど止められないのよおっ！」

「こつちだつて分かっちゃいるけど止められねーつすよ！！」

美空（下半身マツパ）と柘榴が胸倉を掴み合つて睨み合う。

なんやかんやで仲が良く、なんやかんやで時々喧嘩をする主従である。

そしてぜえ、はあと息を荒げて、全て諦めきつた表情で距離をとる。

「……節制つてのは、辛いつすね」

「本当にね」

柘榴と美空（尻丸出し）が同時に深々とため息をつく。

「正直、今まで禁酒しろつて軽々しく言い過ぎてたつすよ。」

簡単に口にできる程、楽じゃなかつたつす」

「そうね……ええ、本当にそう。でもいつかは必ず向き合わないといけないわ、お互い

に」

「鬼も早死にも洒落になつてねーつすからね……」

柘榴と美空（履いてない）が再び深々とため息をつく。

言うのは簡単だが、実行するのは難しいのだ。

「節制と言えば……甲斐に行つたスケベさん（劍丞）の事、聞いてるつすか？」

「聞いてるに決まつてるでしょ。」

甲斐に到着した初日であの武田晴信と祝言を挙げたんでしよう」

「もう誑しちまつたつすかねえ？」

「まだまだ信じたいけど……正直、時間の問題かもしれないわ」

「松葉を誑した時のスケベさんの手の速さと口の巧きは、

異様って言うか異常だったつすからねえ」

「悪魔的な口説き文句だったわね。」

私も面と向かつてあんな事を言われたらドキツとしたかもしれないわ」

お互いの顔を見合わせ、もう一度ため息をついた。

「柘榴達も今やべーつすけど、

オーデインの計画を外さないとそれはそれでやべーつすよね。

るうん魔術つてのが飛んでくるつて話つすし」

「せめて向こうの様子が分かれば……」

「流石に武田の中枢に軒猿を送り込むのは難しいつすよ」

2人が無言で縁側に座り、空を見上げる。

雲一つない晴天を見て、鳥達の囀りを聞くと無性に腹が立った。

そんな時……

「たっだいま〜！」

「美空、柘榴、こつちに來てるつて聞いたんだが、いるか？」

青空や鳥達以上に能天気そうな声の女性と、九十郎の声が聞こえて來た。

「……練兵館はアンタのお家じゃないわよ、一二三」↑履いてない

美空（丸出し）がちよつと不機嫌そうに来客の女性……一二三に対して声をかける。

「まあまあ、細かい事は言いつこ無しで」

「そうつすよ御大将、この際向こうの事を聞くつす」

「細かくないわ、とつとと下山城に帰りなさい」↑モロ出し

「あ、下山城代は辞めてきました。武藤昌幸改め真田昌幸今は信濃の上田城主やつてます」

「武藤昌幸改め真田昌幸って……？ 柘榴、何か聞いている？」↑痴女スタイル

「いや、初耳つす」

「九十郎は？」↑こいつ上杉謙信です

「美空なら何か知ってねえかと思つてここに来たんだが……美空も全然か。」

あと、真田昌幸つてどつかで聞いたような気がするんだが何か心当たりねえか？」

「てか2人共、御大将の恰好にはツツコミ入れねーつすか？」

「パンツ履けよ」

「パンツ履いたら」

一二三と九十郎が至極真つ当で、それ故に面白みの無いツツコミを入れる。

「……はい、履きます」

美空がすくすくことさつき脱ぎ散らかした。パンツと袴を履く。

まるで女房と子供に逃げられた中年サラリーマンのような哀愁の漂う姿であった。

「で、知ってるか？ 真田昌幸」

「そんな事言われても何も分からないわよ。 それより一二三、貴女確か武藤……えつと……たぶん武藤信堯とかいうのの養子になつてるのでしよう。」

何でまた真田に戻つてるのよ？」

「いやあ、急に母の幸隆と、前当主で姉の信綱と、もう一人いた姉の昌輝が病死して、それで急遽私が真田家を継ぐ事になりました。」

それで今日は家督相続のあいさつ回りに来ました」

「……戦でもないのに3人も死ぬ、普通」

「本当はもう少し時間をかけるつもりだったんですけどね。」

ええ、オーデインの事もありますし、この際四の五の言つてはられないかなと」
そう言うると一二三はにやりと笑った。

意訳『ブチ殺しました』。

表裏比興と書いてクソヤロウと読む武藤昌幸改め真田昌幸は今日も平常運転である。

「御大将、柘榴達はとんでもない怪物を世に放つてしまったんじゃねーっすか」

「そうね、ひよつとしてコイツ鬼より鬼かもしれないわ」

「美空、柘榴、そんな事より最近の劍丞の様子を聞こうぜ」

「んん、ここしばらく歩き詰めだったから喉が渴いたな。」

温かい紅茶があれば喉の滑りも良くなるかも……」

「分かったよ、淹れてくるから座ってろ」

「はいはい」

……

……

……

「……という訳で、状況は決して芳しくないね」

「スケベさんの下半身に節制を期待した事が間違이었다ようつすね」

「全く、甲斐では誑し禁止って言った趣旨、分かってるのかしら」

曰く、劍丞と武田四天王が力を合わせて鬼と撃退した。

曰く、眠る劍丞の隣で晴信がうっとしとした表情で寝顔を眺めていた。

曰く、劍丞と晴信（のそっくりさんである薫）が2人で花畑で遊んでいた。

曰く、劍丞と夕霧が2人で遠乗りに出かけていた。

曰く、劍丞が春日に膝枕をして休ませていた。

曰く、劍丞と夕霧が晴信（のそっくりさんである薫）と一緒に人物画や風景画を描い

て過ごしていた。

曰く、劍丞が兎々に桃をあぐんして食べさせていた。

曰く、劍丞が春日の日課の乾布摩擦に遭遇していた。

そういう何も知らない者にとつては微笑ましい、オーデインの計画を知る者にとつては戦々恐々とするような報告が次から次へと出てくる。

なお、意図的に光璃と薫を混同して報告する所がポイントである。

今の所、X X XをX X XにX X Xするような関係になつた者はいない様子だが、時間の問題だなど美空も、柘榴も、九十郎も思つた。

つまり……

「やばい」

「やばいっすね」

「劍丞の奴！ 私と犬子が誑し禁止つて言つたの忘れてるんじゃないでしょうね！」
「誑し禁止つて言つた程度じゃ、

スケベさんの誑し力（たらしちから）は止められないみたいっすね」

「しかし……武田信玄に、山県昌景、馬場信房、内藤昌秀、高坂昌信ときて、山本勘助だろ。」

日本史に疎い俺でも知つてるようなビックネームばかりだからな。

オーデインも絶対に狙うだろう」

「これ以上スケベさんを野放しにはできねーって事つすよね。

御大将、どうするっすか？」

「んな事言われても、私にはどうする事も……」

美空と柘榴が絶望に染まりそうになった時……

「ならばいつそ先んじて消しませんか？ 武田晴信の方を」

……悪魔が囁いた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第121話『迫る決戦の時』

「組み手終わりました！」

「良おし！ 次は駆け足！ あたいに続けえっ!!」

「応っ!!」

真紅の鎧を纏う集団が原野を走る。

鎧兜の重量だけではなく、槍に弓矢、携帯食に簡易な陣幕まで背負わされて走っている。

先頭を走る銀髪の少女はあえて上り坂、下り坂、でこぼこの砂利道を選んで突っ走る。

しかし後続の赤鎧の手段は1人も脱落する事無く、ぴつたりと銀髪の少女に追隨していた。

「へへっ、しばらく留守にしていたから心配してたが。

どうやら怠けちゃいなかったようだぜ！」

「当然です大将！」

先頭の少女……山県昌景・通称粉雪が嬉しそうに笑い、さらに加速する。

疾走する馬にすら追いつけそうな速度になるも、やはり1人も脱落者はない。

この真紅の鎧の集団こそ、武田の精銳、誰もが畏れる赤備えである。

「次は渡川だ！ 続けえ！」

……直後、粉雪がほぼ直角にカーブし、ばしやばしやと音を立てながら脇を流れていた川を突っ切る。

フル装備で川を渡るといふのは、訓練された兵であつてもそう容易い事ではない。

しかし、武田の赤備えは少しも躊躇無く川に飛び込み、槍や弓矢を担いだまま器用に泳ぎ始めた。

その後……

「……で、あの娘誰なんですかい？」

ウオーミングアップが一通り終わった頃、赤備えの一人が素朴な疑問を口にした。

粉雪が越後から帰つて来た日から、赤備えの訓練に謎の金髪美少女が混ざるようになっていたのだ。

「あ、やつとツツコミを入れてくれたんだぜ。

あたいままさか一ヶ月近く放置されるとは思つてなかつたぜ。

典厩様なら初日にツツコミを入れてくれたぜ、きつと」

「あの人天性のツツコミ気質ですからね……じゃなくて、誰なんですか？」

「拾つてきた」

「どこから!？」

「越後で」

「ま、まさか大将の隠し子……父親は噂の九十郎とかいうヤツですか!？」

「馬鹿っ! そんな訳あるかなんだぜ! いつあたいのハラがデカくなってたんだぜ!？」

粉雪が顔を真つ赤にしながら否定する。

「敵情視察にしてはやけに長い事留守にしてたから……」

「ヤツてないぜ!! あたいは九十郎とは……」

と、ここで粉雪の動きが止まる。

否が応でも思い出す、思い出さざるを得ない……たった一夜だけ、自分が九十郎と結ばれたのだと(第108話)。

「や……そういう事も……無いでも無い……けど……」

粉雪の顔がさらに赤くなっていく。

赤備えの面々が見た事の無い、乙女な目になっていく。

赤備え達の間で、ざわっ……ざわっ……とどよめきが起きる。

「だああああーっ!! この話やめえっ! 解散しろ解散っ!!」

粉雪の怒鳴り声が響くと同時に、屈強な赤備え達が蜘蛛の糸を散らすかの如く周囲に

散らばった。

粉雪は全くもうとため息をつくとき、焚き火に当たって服を暖をとる小夜叉の元へと歩み寄る。

「ようっ」

「おう」

小夜叉と粉雪が言葉少なく挨拶を交わす。

見た目幼女で年齢差29歳の2人が隣に座って焚き火に当たる。

「甲斐の水には慣れたかぜ？」

「まーな」

粉雪が手拭いで泥だらけになった小夜叉の顔を拭く。

「無理矢理語尾に『ぜ』をつけるあんたの喋り方にはまだ慣れないけどな」

「悪かったな！ 癖だぜ！ わざとやってる訳じゃねえぜ！」

ムキになって怒り出す粉雪の姿を見て、小夜叉がくすくすと笑う。

甲斐に来たばかりの頃はずっとむすくすと不機嫌そうな表情ばかりの小夜叉であったが、最近はこうやって笑みを見せる事も多くなってきた。

良い傾向だよな……と、粉雪は人知れず息を漏らした。

「その鎧、使えるようになったのか？」

先程の訓練中もずっと、小夜叉は分厚い鉄板のお化けのような大鎧をつけている。言うまでも無く、越後で九十郎に作ってもらったフルプレートアーマーである。

桐琴から全否定されたその鎧を、小夜叉は意地になつてゐるかのようには使い続けた。

「まあ、ぶつつけ本番で使つたのが失敗だった。

普段から慣らしておけば、疲れにくい動き方も分かつたし、どのくらい動けばどのくらい消耗するか分かつてた。

そうすりゃあ、あんな事には……」

小夜叉の脳裏に、鬼の逸物に貫かれ、処女を散らした瞬間が浮かぶ（第106話）。

不覚だった、悔しかった、屈辱だった。

そしてそんな小夜叉に追い打ちをかけるように……桐琴に九十郎から貰つた鎧を否定された。

「最近、こつちの鍛冶屋と色々話してゐるんだろ？」

「まあ。全身鉄で覆うと暑いから、所々に穴を開けてゐるんだ。

重いのと動きにくいのは慣れと鍛錬でどうにかできるけど、

暑いのは気合や根性じゃどうしようもねえからな」

「正直、そんなクソ重い鎧着て赤備えの訓練について来れる奴なんて、

日ノ本中探したって小夜叉1人だと思うぜ」

「……そうか？」

小夜叉は小さくそう呟き、俯いた。

「自信を持つんだぜ。小夜叉は凄いなだぜ」

小夜叉はまるで我が子の初めてののはいはいを自慢するかのように胸を張り、堂々とそう宣言した。

その言葉を聞き、桐琴から浴びせられた言葉を思い出し……河原に1滴、大きな水滴が零れ落ちた。

「ごめん……ちよつとだけ……少しだけ、泣かせてくれ……」

小夜叉は俯き、粉雪の肩に顔を埋めた。

「ああ、良いぜ。小夜叉が泣き止むまで、ずっと隣にいるからな」

……

……

……

「……剣丞が全然手を出してこない」

光璃がぶすぶすと不機嫌そうに頬を膨らませていた。

「粉雪は真面目に赤備えの再建に奔走してるってのに、ひでえ落差でやがる」

「兎々はまああいつを認めちやいないのら」

「まら……？ ああ、まだって言いたいのではやるか？」

「これから先るうくと認められないのらあつ!!」

武田四天王兼光璃の抱き枕である兎々があつと唾をまき散らしながら叫ぶ。

「避けられているような気がする、たぶん」

「避けられて……で、やがるか？」

「嫌われてはいないと思う、たぶん」

「姉上を嫌わない人なんて兎々くらいでやるよ」

「他にもいっぱいいるのらつ!!」

「兎々、本気で言ってるでやるか？」

夕霧が真顔でそう聞き返す。

「ほ、他にもちよびつとくらいはいるのら……」

兎々は後ろめたそうに視線を逸らし、一步後退した。

「じゃあ具体的に誰が姉上を嫌ってねーでやるか？」

「け、劍丞……とか……」

いきなり新田劍丞の名前が出る所が光璃の恐ろしい所である。

「夕霧、後で覚えてて」

「はいはい、覚えててやるでやがるから、とつとと本題に入るでやがる」

「新田劍丞はインポか否か」

「糞して寝てろでやがる」

夕霧がとつとと退室しようとするのを、光璃と兎々が飛び掛かり、ずぎざぎあくど引きずられた。

「姉上はともかく兎々まで何するでやがるか!？」

「あ、いや……兎々は劍丞の事なんて全然気にしちゃいないのらける……」

お、御屋形様が引き留めてたから、つい……」

「はいはい、要は兎々も劍丞にホの字でやがるな。全く粉雪といい姉上といい、

どうして夕霧の周りは面倒臭い恋愛する奴ばつかでやがるか」

「兎々はあんなのに惚れてもいないし、めんろう臭くもないのらあつ!!」

「……で、姉上は結局夕霧に何を聞きてえでやがるか?」

とつととこの話を終わらせて帰りたいというのが見え見えの態度で夕霧が尋ねる。

「新田劍丞は玉無しか否か」

「越後で竹中半兵衛や甘粕景持を抱いてたからそれはねえでやがるよ」

「……本当に?」

「そうなのら?」

光璃と兎々が希望と共に瞳を輝かせて夕霧に詰め寄る。

「湖衣がすっかり目撃してるから確かでやがるよ。」

はい質問に答えたから夕霧は失礼させて……」

光璃と兎々が再び夕霧に飛び掛かり、ずぎざぎあゝと引きずられた。

「ためーらすつぽんでやがるかつ!？」

「……光璃は人間」

「兎々は兎々なのら」

「はいはい、もう逃げねえでやがるから離れるでやがる」

光璃と兎々がシユパツと姿勢を正して夕霧の前に並んで座る。

「……急募、劍丞を寢所に招く方法」

「記憶喪失でやがるか姉上、既に何度か招いてるでやがる」

「手すら繋いでくれない。夫婦なのに」

「最近、桃をくれなくなつたのら……」

手が触れたらけなのに、びくつてなつて、逃げるのら……」

「兎々、さつきてめえで言つた台詞覚えてるでやがるか?」

「別に劍丞なんてろおくれも良いのらあつ!!」

兎々が顔を真つ赤に染めながら叫ぶ。

何と言うか、色々意味でバレバレである。

「途中でやめるなんて……ずるいのら……」

途中でやめるのなら、最初からやらなきや良いのら」

そして急にしよぼくれて、畳を指先でぐりぐりと弄る。

その何とも愛らしい姿を見て、思わず夕霧も、光璃も頬を緩めてしまう。

「兎々、おいで」

「うん……」

光璃が正座して自分の膝の上をぼんぼんと叩く。

兎々は光璃の膝の上に座り、光璃は背中から兎々の身体をぎゅぐゅと抱きしめる。

「ああ、癒される……」

光璃が恍惚とした表情で呟いた。

光璃専用抱き枕と化した兎々の華奢で柔らかな肩や胸の感触が、ストレス社会と戦う

光璃に安らぎを与えていた。

「まるで実家のような安心感」

「ここは姉上の実家でやがるっ!!」

夕霧がツツコミを入れる。

身内以外の者がいない場所では、光璃は意外とボケる。

そして夕霧は周囲に第三者がいようがいまいが生粋のツツコミである。

「結局姉上はどうしたいでやがるか？」

「祝言を挙げてから1ヶ月も同衾が無いのは異常」

「そうなのら！ 異常なのら！」

「夕霧の記憶が確かなら、姉上の嫁入りに一番反対してたのは兎々でやがったが」

「そんな昔の事はろうれもいいのらあつ！」

「大した面の皮でやがる」

「そんな事は無い、兎々の頬は柔らかいですべすべ。まるでゆで卵のよう」

「これ以上話を脱線させんなでやがるうっ!!」

夕霧のツツコミが再度炸裂する。

最早夕霧の頭の血管は破裂寸前である。

「……どうすれば良い？」

「良いのら？」

光璃と兎々の期待に満ちた視線が夕霧に集まる。

何故それを自分に言うのかと聞きたかったが……やめた。

それに言及してしまえば、また話が無意味に長くなるような気がしたのだ。

「全く、薰といい、春日といい、揃いも揃ってあの男のどこに惹かれてるでやがるか……」

夕霧が頭痛を覚え、目頭を押さえる。

劍丞は誑し男で有名であったが、まさかここまでとは想像できなかった。

そして夕霧はもう面倒臭いとばかりにため息をつき……

「とりあえず押し倒せでやがる。 兎でも孕めば向こうも覚悟決めるでやがるよ」

つい先ほど薫や春日に対して告げたと全く同じ対応方法を2人に告げたのであった。

……

……

……

一方その頃。

「一葉様、一葉様」

「なんじゃ美空」

ぶすくつと不機嫌そうな一葉に美空が声をかける。

約1ヶ月前、劍丞が甲斐に行くに決まった際、真つ先に同行したいと申し出たにも関わらず、劍丞隊をまとめ上げられるのは一葉だけだと断られたため、一葉はずうくつと不機嫌状態だ。

「ちよつと甲斐に攻め入りますので、手伝つて」

「何？ 甲斐にじやと!?」

一葉の眉が瞬時にピーンと吊り上がる。

甲斐と言えば、今現在愛する夫である新田劍丞が拉致一步手前の強引な手段で連れ去られた地であるからだ。

「そうそう、そろそろ晴信をブチ殺しに行こうかな〜つと」

美空が爽やかに笑いながら提案する。

しかし言っている事は人殺しの相談であり、戦争の相談だ。

間違っても爽やかなスポーツの話題ではない。

「ふむ、心置きなく大暴れできるならば是非も無し……と言いたい所だがな、

甲斐の武田晴信も今では主様の妻の一人、

気に入らんからとブチ殺す訳にはいかんだろう」

「あら、やっぱ気に入らなかつたの?」

「ぐっ……」

凶星を突かれ、思わず一葉が言葉詰まらせる。

ボケキャラとツッコミキャラが混在するとも言うべきか、こういう時々妙に鋭い所が美空の特長なのだ。

「まあそうよねえ、いきなり意図も離さずに拉致同然に甲斐に呼び寄せて、

出会って早々に劍丞と祝言を挙げて。

しかもこつちには何の相談も無し、未だに手紙一つも寄こさない」

「まったく、我等を蔑ろにするにも程があるうに！」

「我等って何？ 公方様だけでしょ」

「……私の記憶では美空も主様の妻だと思ったが」

「名目上はね」

「一度貴様とも話をつけねばならんようだな」

「そうね、公方様にはいずれ全部を話さないといけないわね。今は話すつもり無いけど」

「どういう意味じゃ？」

「聞かない方が幸せよ」

そう言つて美空は別の方向に話を向かわせる。

オーデインの事、劍丞を取り巻く陰謀の事は、まだ一葉には伝えていない。

本当は伝えるべきなのだとは思うのだが……

「（貴女は洗脳されてましたなんて、どんな顔して伝えりや良いのよ!?）」

……という理由で、一葉に伝えるのがどんどん先延ばしになっているのだ。

「まあ、冗談はさておき」

「冗談に聞こえなんだぞ」

「冗談はさておき」

「だから冗談に聞こえなかった」

「つべこべ言わずに冗談つて事にしときなさい、話が進まないでしょう」

「……まあ良からう、本題に入ると良い」

「流石にブチ殺すのはやり過ぎだと思ふのよ」

大嘘である。

「かと言って、座して待つだけではどおくにもならないわ」

「一旦尾張の織田信長と合流するということのも手ではあるが……」

「へえ、尾張の織田信長様は、

このにつちもさつちもいかなない状況を華麗に解決する程の知恵者なの？

大変素晴らしいわね、是非とも会いに行きましょう」

「……望み薄じやな」

むしろかえって話がややこしくなるような気がした。

「いずれにせよ、劍丞を人質のような状況になつて以上、

信長が加わつても大して役には立たないわ」

「ううむ……せめて向こうの状況が分かればのう……」

「向こうの状況はともかく、今武田晴信が考えている事は分かっているわ。

あいつがこつちに何の説明もしようとしないう理由もね」

「なんじゃと？」

「長尾は信用できない、織田と公方は頼りにならない。

それならいつそ自分だけで鬼と戦おう……と、いう事よ」

「ナメとるのか？」

「その通り、ナメられてるのよ」

「その話は確かなのか？」

「一二三と信虎が言う晴信の人物像からすると、どお考えてもその結論になるのよ」

「気に入らんな」

「私も気に入らない、ええ気に入らない。昔っからね」

「昔からか」

「昔から、じゃなきやあんな血反吐を吐くような戦、2度も3度も繰り返さないわよ。

適当な所で手打ち、損切り、土下座外交」

「なるほどのう、ならば……」

「ええ、それ故に……」

「武田晴信に我等が伊達や酔狂で新田劍丞の嫁になったのでは無いと示さねばなるま

い」

「ええ、あの人間不信の偏屈者に、私達もやれるつて所を見せつけてやりましょう」

「早い話、尻比べをやろうという事か」

「ええそうよ、尻比べ尻比べ」

美空と一葉がガツチリと手を握り合う。

2人の意思がピタリと一致した瞬間……ではない。

「(……まあ今のは大嘘で、本当の目的は劍丞に誑される前に晴信をブチ殺す事だけ)」

そう、美空の目的はあくまで晴信を殺害する事なのだ。

晴信を殺し、劍丞と晴信が結ばれるというオーディンのシナリオを崩すつもりなのだ。

「しかし理由がどうあれ、甲斐に攻め入れれば主様は止めようとするであろうな」

「そうね、下手な事をすれば劍丞が巻き添えで死ぬ可能性はあるわね」

「それはいかな」 ↑ 劍丞が心配だから

「ええ、実に拙いわね」 ↑ 犬子や一葉も道連れで死ぬから

「腹案はあるのか？」

「あるわ、それも公方様で無ければ実行できない案が」

「面白い、聞かせよ」

「まずは劍丞隊から句伝無量の御守りを全部回収して」

「……できなくもないが、それで何が変わる？」

「急に越軍が国境を越えて侵攻してきて、しかも劍丞隊との連絡はとれず。

そんな状況になれば、劍丞は甲軍から離れて、単独行動を始めると思うの。

こつちに残した劍丞隊と合流して、詳しい状況を聞くと共に、

越軍と甲軍の衝突を回避する手足として使用するために」

「まあ、そうなるであらうな」

「劍丞が甲軍から離れてくれれば、

巻き込まれで戦死という結果になる可能性はグンと下がるでしょ」

「しかしそれでは、甲斐の軍勢と正面衝突する事にならぬか？」

「ええそうよ、晴信の顔面をブツ叩いて目を覚まさせるのが目的ですもの」

「ブツ叩くのはともかく、途中で止められるのか？」

「越軍も甲軍も死者多数では鬼を利用するばかりであろう」

「止めてもらいましよう」

「……誰に？ 余では無理だぞ」

「劍丞によ」

「ふうむ……」

一葉がしばし瞑目し、思考にふける。

普通に考えれば無理無茶無謀、狂気の沙汰というような策だ。

策とも呼べぬ、ロシアアンルーレット以下の大博打だ。

だがしかし……それ故に一葉の心に深く深く突き刺さり、響いたのだ。

新田劍丞ならばやれる。

一葉が惚れた男である新田劍丞ならばきつとどうにかする。

そんな狂気の思考に囚われ、盲目になった。

「……やるか」

「ええ、やりましょう」

一葉と美空が再びガツチリと手を握り合った。

「(……まあ今までの話は全部大嘘で、

本当の目的は劍丞に誑される前に晴信をブチ殺す事だけだ)」

美空がそんな事を考えながらほくそ笑んでいるのに、一葉は全く気付かなかつた。

……

……

……

……その日を境に越後が動き出した。

「九十郎！ ドライゼ銃の配備はどう!?」

「今500つてトコだ。 四斤山砲は15」

「信虎！ 訓練はと先日の戦いで、の欠員補充は!?」

「我を誰だと思ってる、とつくの昔に手回しはすんでいる」

「秋子！ 兵糧と金子の蓄えは!?」

「潤沢とは言い難いですが……まだいけます!」

「犬子！ 行軍中の物資の管理は任せるわよ!」

「合点承知です!」

「そろばん算と複式簿記を覚えた犬子にどくんと任せちゃってください!」

「公方様！ 剣丞隊はどう!?」

「句伝無量の御守りは全て回収した。 しかし余が言うのも何だがあいつらチヨロイ
な」

「よおし！ それじゃあ皆で甲斐に殴りこむわよ!!」

第四次川中島の戦いが始まるうとしていた。

そんな中で……

「はあ……はあ……ふう……きよ、今日は一段と……キツいつすね……」

……柘榴が一人、瘴気に襲われ、股間を湿らせ、熱く甘い吐息を漏らしている事に気

づく者はいなかつた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第123話『しばらくよろしく』

「おかえり〜」

「おつかえりー。 ご飯にする？ お風呂にする？ それとも……ひ・ふ・み？」

「一二三、その台詞は犬子専用だよ！」

練兵館に帰宅した九十郎を、何も知らない犬子と一二三（裸エプロン）が能天気にながら出迎える。

敬語を使うべき相手ではないと判断したためか、最近犬子の一二三に対する言葉遣いはタメ口である。

「……………」

九十郎は無言のまま草履を脱ぎ捨て、廊下を歩く。

明らかにいつもと様子がおかしいと犬子も一二三も気がついた。

そして一言も喋らずに、まるで力尽きるかのように自室の畳の上にはたりと倒れ込む。

「く、九十郎……何かあった……？」

犬子が恐る恐る呼びかけるが、九十郎は何も答えない。気絶したかのように倒れ込み……筋肉質な大男の目に大粒の涙がにじんだ。

「う……う……う……」

声が出なかった。

美空と別れ、1人になって、ようやく九十郎は自分の心に来たダメージを自覚した。

目を閉じれば嫌でも思い浮かぶ、思い浮かんでしまう。

自分以外の男のち〇こを下のお口で啜え込み、心底気持ち良さそうに喘ぎ声をあげる
柘榴の姿を。

思い出してしまう、何度も何度も思い出してしまう。

何度も何度も何度も何度も脳裏に浮かぶ。

そして思う……

「ぐへ……ろお……」

……悔しいと。

悔しい、悔しい、悔しいと叫びたかった。

柘榴は俺の女だと叫びたかった。

柘榴は俺の嫁だと叫びたかった。

俺だけが柘榴を抱けるのだと。

俺だけが柘榴を独占できるだと……叫びたかった。

「ちく……しょお……が……」

だが現実には、九十郎はボロボロと涙を零すばかりだ。

立つこともできない、叫ぶこともできない。

底なしの無力感に苛まれながら、柘榴を守れなかった事への後悔と、柘榴の不調に気づけなかった自分自身の不甲斐なさを恨み、ただただ涙していた。

「こ、この落ち込みっぷりは過去最大かも……」

「そうだね、とりあえず君が天人殿とエッチしてた時より落ち込んでるね。」

あの時は会話は成立してたから」

「一二三、ブチ殺すよ」

犬子が何とも味わい深い笑顔でそう告げる。

「本当に何があつたんだろ」

「とりあえず話が聞ける状態になつてもらおう」

「……できるの？」

一人泣き続ける九十郎の前に、犬子が半信半疑といった様子で一二三に尋ねる。
「できるできる。」

「こういうのは一回傷口を思いつきり抉つてうんこを投げつけるのがコツだよ」

「何か物凄く不安になる事を……」

犬子が盛大に顔を引きつらせながらも、かといつてこの状態の九十郎をどうこうする手段も思い浮かばず、やむなく一二三に道を譲る。

そして一二三は九十郎の耳元にそおくと口を近づけて……

「柘榴が目の前で他の男に股を開いてたのを見て、

鬼が変わつてぶつた切つたのかな〜？」

……物凄く物凄く嫌味つたらしい口調でそう呟いた。

「この人鬼より鬼だ……」

犬子が思わずそう呟く。

表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸は今日も平常運転である。

しかし効果は敵面だ。

うつ伏せに倒れて泣き続けていた九十郎の目がギョロリを見開かれ、強烈なまでの殺意と共に一二三にアイアンクローをかける。

「……鬼にはなつてねえよ馬鹿野郎」

静かに、しかし激烈に怒っていた。

自分自身に向いていた過去最強の怒りが、目の前にいるクソヤロウに……外側に向いたのだ。

「そーかいそーかい、最悪の最悪だけは免れてるのか。」

良かった良かった、めでたしめでたし」

「何も良くねえしめでたくもねえよっ!!」

九十郎がさらに激高する。

当然の事だが、一二三はワザと九十郎を怒らせようとしているし、九十郎にもそれが分かつている。

「く、九十郎！ 柘榴に何かあったの!? 鬼にはなつてないって……」

「俺じゃねえ男とセックスしてたよ。それで鬼になりかけて……美空が引き戻した」

「そ、それからどうなったの……?」

「美空が連れて行った。必ずどうにかするから時間をくれってよ……」

「そっか、美空様がついてるなら大丈夫かな……」

犬子がそつと胸を撫でおろそうとして……普段の美空の言動を思い出し、むしろ余計に不安になった。

「……ところで犬子、それに一二三」

九十郎が顔を畳に付したまま尋ねる。

「……知つてて黙つてたな?」

……瞬間、部屋の温度が2〜3度下がる、

「うぐつ……」

凶星を突かれ、犬子が言葉詰まらせる。

「ああ、知つてて黙つていたとも。」

当の本人が土下座しながら九十郎にだけは知らせないでと頼んできたからね」

「言えよ！ それでも！」

「え？ 何で？」

「全部俺に知らせろとは言わねえけどな、柘榴の生き死にが関わつてんだろ！？」

「だつたら知らせろよ俺に！！」

「違うね、生き死にが関わるからこそ知らせなかつた（嘘だけだ）。

命懸けで頼まれた、命懸けで応じた、

そういう命懸けの約束は命懸けで守らないといけない（一般論で）。

こう見えても私、信義と誠実は大事にしているんだ（これも嘘だけだ）」

「一二三が恰好つけて恰好良さげな事を言う。」

なお、あの約束をした時命懸けだったのは柘榴だけで、一二三は命懸けで応じる気も、命懸けで約束を守る気もサラサラ無かつた。

表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸は今日も平常運転である。

「九十郎、ごめんね。柘榴にああまで頼まれちゃうと、犬子としても……」

「1人でどうにかするとういう発言を真に受けて、

本当に1人でどうにかすると思つて放置して、状況を悪化させました、マル」

「う……そ、そういう見方もできるけど……そういう言い方は……」

凄く痛い所を扶られて、犬子が思わずたじろいだ。

同じ立場に見えてこの2人には大きな差がある。

犬子は柘榴ならどうにかすると信じ、九十郎には何も伝えなかつた。

一二三は柘榴が盛大に爆発四散する可能性が大いにありうると予見しながら、それはそれで利用すれば良いかと九十郎に何も伝えなかつたし、柘榴にも忠告しなかつた。

なお、柘榴は盛大に爆発した。

一二三の予想とは異なり、美空の応急処置と言うか火事場のクソ力的な何かで四散は免れたが。

「……犬子、柘榴のお見舞いに行つてくる」

犬子がそう言つて立ち上がる。

こんな状態の九十郎を放置するのは心配だったが、それ以上に柘榴が今どんな状態なのか気がかりだった。

それと美空が傍にいるというのも地味に心配を加速させていた。

「行つてらっしゃい、留守番はしておくよ」

「一二三は来ないんだね」

「あまり接点も無いから」

「じゃあ、九十郎をお願い」

「了解」

犬子がこの場を一二三に任せて部屋から出ていった。

付き合いが短い2人であるが、こういう状態の九十郎を任せる程度の信頼はあった。

そうして部屋には、声も無く慟哭する大男と、胡坐をかきそれを見つめる少女の2人だけになった。

「……羨ましいな、こんなに愛されてるなんて」

一二三は小さく小さくそう呟き……

「……それはそうと、長尾景虎殿が山籠もりしたら、誰が対武田の指揮を執るんだろう？」

そんな非常に非常に大きな問題に気づいた。

……

……

……

「美空様のアホオオオオオオーッ!!」

翌朝、名月の叫び声が春日山城に木霊した。

対武田への侵攻作戦が始まろうとしている時に、よりにもよってその中心人物になるべき長尾美空景虎が『しばらくよろしく』との置手紙1枚残して行方不明になってしまったのだ。

「しばらくっていつまでですの!?! よろしくって何をやれば良いのですの!?!」

不在になるのはともかく、理由くらい説明していつて」

「またか……」

「また……」

「ああ、まただのう」

評定の間で名月は頭を抱え、沙綾は苦笑し、秋子と松葉はげんなりとした表情でつぶやき合う。

そう、美空は過去に1度、全然言う事を聞かない豪族共に嫌気が差して突然行方不明になった事があるのだ。

「置手紙があるだけ、成長した」

「あの時は手紙すら無かったものねえ」

「あんなのあつて無いようなものじゃろ」

「ですよねえ……」

言つちや何だが、越後長尾家は長尾美空景虎個人の武名で保っている所がある。決して武田ほどではないが。

信玄の病死と同時にグダグダになって滅亡した武田ほど深刻ではないが、越後長尾家内には、あの武田晴信と互角に渡り合える長尾美空景虎だから大人しく従っている者は大勢いる。

当然、美空が失踪した事で越軍がバラバラになる事は火を見るよりも明らかだ。

以前急に美空が失踪した時の悪夢のような出来事は正直思い出したくも無い。

美空が急に失踪したのも問題だが、美空が急に失踪した程度でバラバラになる越軍はもつと問題だと秋子は思った。

「とりあえず全員斬つて俺最強という訳で」

越後最強と名高い剣客、小島貞子貞興キリツとした表情でそう告げる。

「貞子さん、それが無茶だつて事は犬子にも分かりますよ」

「分かつてますよそんな事！」

ちよつと雰囲気が暗くなつてゐるから冗談で言つたんですよ！」

「貞子、しばらく黙つとれ」

「はい……」

貞子がしゅんとした表情で隅っこで体育座りをした。

貞子は確かに越後最強の剣客で、劍の腕では甲斐最強の粉雪と同等である。

ただし貞子は練兵の名手であると同時に優秀な前線指揮官でもある粉雪と違い、劍を振るう以外の事は全然できないし、しようと思つた事も無い。

この人材の層の薄さこそが越後長尾家が今まで散々武田晴信に苦戦し続けた原因であり、同時に曲がりなりにも一進一退の攻防にまでしてみせた長尾美空景虎の異常さの証明でもある。

「どうします？　沙綾さん」

「どうって、比較的纏められそうな者に纏めてもらう他あるまいて」

「それって……」

「当然……」

「あの人」

秋子と沙綾、そして松葉の視線が同時に同じ方向に向いた。

その先にいるのは、簡素過ぎる置手紙を手に喚き散らしながら涙を流す名月である。

「次期当主様……ですよね？」

「むしろ他に誰がおるのじゃ？」

「ですよねえ……」

分かつちやいるが心配だと、秋子は思う。

しかし沙綾の言う通り、他の選択肢は考えにくい。

元より、次期当主というものはそのために決めて、そのために存在するのであるから。そしてそんな3人の視線が集まっている事に気づいて、名月は泣き喚くのをやめ、こぼんと咳ばらいをして姿勢を正す。

「降りるのなら、今しか無いぞ」

3人を代表し、沙綾がそう声をかける。

「……降りません」

「何故じゃ？」

「勝った者の責任として」

「それだけか？」

そう尋ねられ、名月は何かを言おうとして……何も言えなかった。

余りにも真剣な沙綾の、秋子の、松葉の視線に圧倒され、口が動かなくなっていた。

「……まあ、それは宿題としよう。 いずれ本当にこの家を継ぐ日が来ればもう一度問う。」

その日まで答えを見つけておく事じゃ」

「良いのですか？」

「優し過ぎ」

「馬鹿者、本当に降りると言われたら我等は武田に皆殺しにされるぞ」

「それはまあ、そうですけど」

「足りぬ所があるのは百も承知、足りぬ部分を補うのが家臣であらうて」

秋子と松葉が顔を見合わせる。

現在の長尾美空景虎と比べれば、今の名月はハッキリ言つて頼りない。

だがしかし、成長しようとする意志がある限り、人は学び、成長するものだ。

秋子も、松葉も、そして沙綾もそれを知っている。

……長尾美空景虎の戦いを、苦しみを、葛藤を見てきたが故に知っている。

「全員ハラを括れ、やるぞ」

「美空様抜きで甲斐に打つて出て、あの武田晴信を討つ……」

全く、無茶ぶりここに極まれりと言いたいですね」

「いつもの事」

「ええ、いつもの事です。あの人のやる事はいつだつて無茶ぶりですから」

「かっかっかっ、違うのう」

3人がそう言つて笑い合う。

「で、でも……やるしかないのはともかく、具体的にどうすればよろしいのですか？」

名月が心配そうにそう尋ねると、咲綾が、秋子が、そして松葉が自信満々といった様

子で頷きあい、胸を張り……

「ノープランじゃ!」

「ノープランです!」

「ノープラン」

3人同時にそう言った。

彼女らも美空と同様、ノープランという語感が好きになつていた。

自信満々に、胸を張つてノープランと言い放つた。

ノープランだ、だがやるのだ。

それでもやるのだ。

それが越軍の心意気なのだ。

「あの……盛り上がっている所申し訳ないんですけど……」

そんなドヤ顔の3人に、犬子がおずおすと声をかける。

「柘榴……じゃなくて、柘榴様つて、越軍の諜報組織を指揮してましたよね。

確か軒猿つていうのを。誰が引き継ぐんですか? 犬子は無理ですよ」

3人がキョトンとした表情で互いの顔を見合わせる。

「儂は無理じゃぞ」

沙綾が真つ先に否定の言葉を告げる。

おそらく諜報組織を卸し切るだけの能力はあるだろうが、残念ながら彼女は越後の目と耳を預けられる程信用されていない。

それ故に、彼女には軒猿に関する情報を一切知らされていないし、本人も美空から信用されていない自覚があるため、あえて知ろうとはしていない。

急に今日から軒猿の指揮命令を行えと言われても無理だ。

「松葉はあくまで親衛隊、美空様を御守りするだけ」

意識・自分は脳筋です。

「美空様には常々言われていました……秋子には向いてないと」

意識・自分は基本お人好しなので、情報の裏取りが甘いです。

会議を主導していた3人が揃って無理だという事が分かり、その視線が評定の間にいるその他大勢の方に向く。

「あの、さつきも言いましたけど犬子は無理ですよ。」

柘榴……じゃない、柘榴様、公私はキツチリ分けてましたから、

軒猿がどうゆう風な指揮系統で、どうやって情報を取って来てるか全然知りませんか
ら」

まず犬子が首を横に振る。

「人斬り包丁の扱いなら任せてください」

意識・自分も脳筋です。

貞子も松葉と同様、諜報組織を率いる事は無謀極まり無い。

そして全員の視線が名月に向き……

「え？ 私ですの？」

全員がハッキリと理解する。

いくらなんでも名月に越後長尾家当主代行の仕事と、軒猿の指揮命令の仕事と同時にやれというのは無謀だと。

そもそも、先程犬子が言ったように、この場の誰一人として軒猿の指揮系統や活動の内容を知らなかった。

つまり……

「も、もしや……だ、誰も軒猿を動かせない……？」

「……やばいの」

「越後終了のお知らせ」

「えっと、全員斬って俺最強という訳には」

「それでどうにかなるのなら美空様は苦勞していませんわ」

「いなくなつて初めてわかる、柘榴の重要性……」

「ごめんね柘榴、犬子は正直見くびっていたよ……」

この日、越後長尾家の目と耳が機能不全になった。

……

……

……

「いない？」

「ええ、急に消息を絶ちました」

一方、甲斐の武田晴信の目と耳は依然として健在である。

美空と柘榴が突如として行方を眩ませたという情報は、即座に武田光璃晴信の耳に届いた。

躑躅ヶ崎館の茶室にて、光璃と一二三、そして湖衣が密かに情報を交換する……

「（こ、この人絶対一二三ちゃんじゃない……たぶん霧隠才蔵つて人だよね……）」

……訂正、光璃と霧隠才蔵、そして湖衣が密かに情報交換をしていた。

なお霧隠才蔵とは一二三が抱えている忍びの1人で、変装と物真似が超上手い人である。

特に一二三の物真似は得意中の得意であり、彼女が全力で一二三の物真似をした時、それを見分けられるのは湖衣だけである。

もう一度言おう、見分けられるのは湖衣だけであり、光璃は当然のように目の前の人

物が一二三だと思ひ込んでいた。

柘榴の失踪により越後長尾家は目と耳が機能不全に陥っていたが、光璃は光璃で、目の前の人物の見分けがついていない。

ある意味五十歩百歩な関係である。

「(い、言つた方が良いのかな……?)

で、でも一二三ちゃんの事だから、何か理由があつてどこか別の場所において、

何か理由があつて才蔵さんに代役を頼んでるんだよね……そうなんだよね……)」

湖衣は聡明だ。

湖衣は聡明であるが故に、一二三が何か理由があつて入れ替わっているのではと深読みしてしまう。

そして自分の判断でそれを光璃に告げて良いものかと考えてしまう。

「(そもそも、御屋形様も才蔵さんも普通に喋つてるよね?)

もしかして承知の上で喋つてる?

いくらなんでも御屋形様相手に影武者を本気で騙そうとなんてしないよね?
?

いくら一二三ちゃんでも……あ、駄目だ一二三ちゃんだからこそやりそうだ)」

そして基本聡明だが、気弱で、迷うと手が止まってしまう性格の湖衣は光璃に対し『そ

の人は才蔵です』と告げる事が出来ない。

一二三はそこまで読み切った上で、才蔵に自分の代わりを頼んでいるのだ。

「……あの長尾景虎の事です」

「当然、何の考えも無く行方を眩ませた訳ではない」

「はい、近々越軍はこの甲斐に侵攻するとの情報もあります。

おそらくは別動隊が……」

……そして才蔵は一流の忍者……いや、超一流の忍者だ。

一二三が自分に代役を頼んだ意図を完全に理解し、光璃の思考を誘導する。

実際には美空は全くのノープラン、脊髄反射的に山籠もりを敢行している。

「目的は……？」

「やはり新田劍丞殿でしょう。長尾景虎殿の入れ込みようは凄まじかったのです」

なお実際には、好感度がマイナス方向に振り切れている。

名目上は夫婦ではあるが、劍丞が惨たらしく殺されたら万歳三唱する程度的好感度で

ある。

才蔵は……いや、一二三は今、光璃を殺すために全力を尽くしていた。

後日光璃を殺した事を死ぬほど後悔する羽目になるのだが……

……

……

……

一方その頃。

「オラアツ!!」

美空の右ストレートが柘榴の顎を捉えた。

「お、御大将……いきなり何するつすか……?」

「今エツチな事考えてたでしょ?」

「うぐ……」

柘榴が言葉を詰まらせる。

美空が見抜いた通り、瘴気の影響か、それとも柘榴の生来のエロさ故にか、柘榴の頭はエロエロへと向きつつあった。

「全く気をつけなさいよ」

直後……

「ドラアツ!!」

柘榴の右ストレートが美空の顎を捉えた。

「な、何すんのよっ!?!」

「御大将、今右手が酒瓶に伸びてなかったつすか」

「うぐ……」

今度は美空が言葉を詰まらせる。

確かに美空は無意識の内に酒瓶に手を伸ばしつつあった。

既に美空にとって就寝前の酒は生活の一部になっているのだ。

そして柘榴も、美空も、さつき殴られた頬を押さえながらジトと相手を見つめる。

「……一度御大将とは決着をつける必要があるっすね」

「奇遇ねえ柘榴、私も丁度貴女と同じ事を考えていたのよ」

柘榴の右手と、美空の左手を繋ぐ頑丈な鎖がじゃらりと鳴った。

その鎖がある限り、柘榴は美空から、美空は柘榴から決して離れる事は出来ない。

当然、柘榴は美空に隠れてセックスやオナニーをする事はできず、美空は柘榴に隠れて飲酒する事は不可能だ。

柘榴は日課の自慰ができず、美空は日課の一人酒ができず、急激にストレスが溜まりつつあった。

結果……

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ!!」

「ドララララララララララララウラアッ!!」

美空と柘榴によるラツシユの速さ比べが始まった。

既に2人は越後長尾家の事も、軒猿の事も、武田晴信の事も綺麗サツパリ忘れ去られていた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第126話『只今裏切り準備中』

「名月様、全て準備終わりました」

「そうですか……」

「美空様はまだ、戻りません」

「そうですか……」

名月は震えていた。

あの長尾美空景虎ですら苦戦を免れない戦国の巨象、武田晴信相手に戦うのだ。

武田晴信の恐ろしさは、良く知っている。

彼女は一時期、晴信の養子として……いや、人質として躑躅ヶ崎館に幽閉されていたが故に、晴信の戦ぶりも、容赦の無い殺戮の噂も何度も耳にしている。

「ならば予定通り、私が総大将を務めますわ。

全軍を挙げて甲斐に攻め入り、義母様……いいえ、武田晴信と決着をつけます」

彼女は初陣という訳ではないが、大軍を率いて打って出るのは初めてだ。

自分の指示、命令一つで大勢の人が死ぬ……それ故に、名月は震えていた。

しかしそれでも、名月は決して目の前の指名を投げ出そうとしない。

「出陣の下知をつ!!」

「御意っ!!」

「飯山街道を南下し、川中島に出ます!」

「前に使った進路そのままですわ……」

「色々考えましたけどアレが最善ですわ!」

この日、美空と柘榴不在の越軍が甲斐に向けて進軍を開始した。

……

……

……

越軍動く。

その報告が躑躅ヶ崎館に入った時、武田の旗を仰ぎし者達は俄かに騒めき立った。

「思ったより早く斬り合う事になりそうだけ、九十郎」

第一報を聞き、粉雪はそう言って笑った。

「……良いのか?」

武田四天王筆頭の春日がそう尋ねる。

それを聞くと、粉雪はまるで恋人との逢引を語る乙女のように顔を赤らめ……

「あいつと約束したんだよ、次に会う時は敵同士つてな」

「敵同士と言う割には、顔がニヤついているぞ」

「あたいは甲斐のため、武田のために命を張ると誓った。

あいつは越後の長尾景虎のために命を張ると誓った。

結局の所、あたいとあいつが斬り合う理由はそれだけだぜ」

「そんなものか？」

「ああ、そんなものだぜ！」

春日は知っている。

武田の家臣の中で、粉雪の立場は微妙なものになつてゐる事を。

元より、姉の飯富虎昌が謀反を企てた頃から、妹の粉雪もいつか裏切るのではという

疑念があつた。

近習、使番、侍大将、そして武田の精銳赤備えの大将としての功績を差し引いた上で

なお、そのような悪い噂が絶えない立場であつた。

その上であの柿崎景家の家臣であり夫である斎藤九十郎との恋仲の噂が立ったのだ。

当然、粉雪の立場は以前の何倍も、何十倍も悪いものになりつつあつた。

それらの事情全てを笑い飛ばすかのように、粉雪は笑つていた。

「お前が御屋形様を裏切るなどありえんよ、粉雪」

春日はそう告げた。

その言葉を告げた瞬間、心の中に生じたもやもやが瞬時に消えて無くなったかのような感覚がした。

そして思う……いや、確信する。

自分は粉雪が裏切るなどと微塵も思っていなかったと。

粉雪は本気で斎藤九十郎を愛していて、本気で斎藤九十郎と斬り合う気であると。

「敵は強大だ、粉雪」

「ああ、だからこそやりがいがあるってものだけ」

「勝つぞ、粉雪」

粉雪と春日は同時にニカツと笑い……

「当然だぜ」

がしりと腕を組んだ。

「あ、いた！ こなちゃん、それに春日さん、大変だよ！ 越後の……」

「越軍が動いたって話だろ、あたいらも経った今知ったとこだけ」

「以前より密かに兵を集めているとの情報はあった。おそらく狙いは我等であろう」

「うん、御屋形様がすぐに集まるようになって」

「分かった、粉雪、行くぞ」

越軍が迫りつつある中、甲斐でも迎撃準備が急速に進められていた。

……

……

……

その日の内に武田四天王その他数名の甲斐武田家の重臣達が躑躅ヶ崎館の評定の間
に集まった。

武田晴信・通称光璃は……

「……けだもの」

「……け、けらものらったのら」

脳内がピンク色に染まっていた。

しかもぶつちやけ寝不足だった。

「おいしいおいしいーっ!! 劍丞姉上に何したでやがるかあああああーっ!!」

夕霧、渾身のツツコミを入れながら劍丞の胸倉を掴み上げる。

光璃も兎々も過去に見た事の内容な幸せ一杯の表情であり、彼女のツツコミ魂が黙っ

てはいられなかった。

何と言うか、一目で昨晚18歳未満閲覧禁止のアレやコレをヤッていましたと分かる

ような様子であった。

「あたいらのシリアスを返せなんだぜ」

「兎々、何を考えて……いや、あえて拙は何も言うまい」

「お、おめでとうございます……つて、言えば良いのかなあ」

「ここ、あたいらもう帰つて良いんじゃないかだぜ」

「良い訳ねえでやがるうつ!! 春日無言で帰り支度をするまでやがるうつ!!」

夕霧の渾身のツツコミが再度響き渡る。

最早集められた理由を覚えているのは夕霧一人……いや……

「美空が軍を動かしたんだったな?」

「ええ、その通りです劍丞様」

……何故か評議の席に呼ばれている新田劍丞と、劍丞の嫁であり、この時代最高の軍師の一人でもある竹中半兵衛・通称詩乃はしっかりと美空の意図や思惑について話をしていた。

そんな劍丞の隣にすすすーつと光璃が擦り寄つて。

「…………ぎゅ」

……ぴとつとコアラの親子のように密着した。

「姉上ええええええええーっ!!」

「お姉ちゃん、あんな表情もするんだ……って言うか、できたんだ……」

「夕霧も正直驚愕してるでやがるよ……じゃなくて！」

越軍は今この瞬間にも姉上の命を狙って動いているでやがるよ！

少しは真面目にやれでやがるうっ!!」

「そう来ましたか、ならば……こうします」

……ぴとつと反対側の腕に詩乃が密着し、意外と大きな乳房を押し当てる。

「だからためえら真面目にやれでやがるうっ!!」

「……思考が定まらない」

光璃がちよつと困ったように眉を顰め、そう呟く。

たった1度身体を重ねただけだというのに、胸の奥がキュンと締めれるような感じがして、頭の中がふらふらと揺れ動く。

自分自身の混乱っぷりに、自分が一番驚いていた。

「光璃は、恋を知った」

独り言のように呟く。

その言葉は評議の間の全員をさらなる衝撃を与え、同時に光痴自身の胸の内に、あたかも乾いた大地に水を撒いたかのようにスーッと浸透していくのが分かった。

理解した、納得した、腑に落ちた……自分は今、恋をしているのだと。

少なくとも、今この瞬間、光璃は冷徹な人殺しの思考には入れない……そう判断せざるを得なかった。

「ようこそ、この地獄より深く、極楽よりも甘い誑し空間へ……と、言っておきましょう」
詩乃が真顔でそう囁いた。

「少し劍丞分を補充する。補充が終わったら参加するから、先に進めて」

まるで武田晴信ではなく、恋する少女……いや、飼い主の膝の上で心地よさそうに丸くなる子猫のように無防備な姿になる。

兎々も光璃程酷くは無いが、物欲しそうに、羨ましそうに頬を赤らめ、劍丞の眼差しや唇に視線を向けている。

「劍丞、マジで何ヤツたでやがるか？ あんな姉上見た事ねーでやがるよ」

「いや、俺はただ……えっと、夫婦の営みと言おうか……あの……」

オーディンの計画の事は流石に話せないと、劍丞がしどろもどろになってたじろいだ。

劍丞は今でもなお、光璃にも、詩乃にも、オーディンの計画について話せずにはいた。

「劍丞様、正直な話聞かなくても分かっていますが、念のため聞いておきます。

また誑されたのですか？」

「いや、そういう訳じゃあ……」

「誑された」

光璃がぎゅううつとさらに強く劍丞に密着して断言した。

「うう……」

そんな光璃の様子を、兎々がちらちらと何度も何度も伺っていた。

堂々と劍丞と密着している光璃が羨ましいというのは誰の目からも明かで……

「兎々、おいで」

光璃が優しいげに手招きをすると、兎々は恥ずかしそうにあくとか、ううくとか、言葉にならない小さな声を出し……

「お、御屋形様に言われたら、断れないのら」

観念したかのように劍丞の隣、身体が密着する距離にちよこんと席を移した。

「春日、どう思うぜ？」

「馬に蹴られたくはあるまい、お互いに」

「姉上、粉雪と春日に呆れられてるでやがるよ」

「に、人間味があつて良いんじゃないですか……」

「劍丞の誑しには毎回驚かされるます、本当に……」

「姉上、心と今孔明殿にまで呆れられたでやがるよ」

「いつそ私が晴信ですつて事にした方が、話が進むような気さえする」

「姉上えっ!!　とうとう薫まで呆れられてるでやがるよっ!!
しつかりするでやがるっ!!」

「劍丞分を十分補充したら対応を検討する」

そんな光璃と兎々の姿を見て……劍丞の心中は穏やかではない。

「(まるで本当に……洗脳しているみたいじゃないか……)」

自分と美空を無理矢理セックスさせようとした劍を見つめる(第118話)。

今は電池を抜いているため、全く動き出す気配が無い。

短い時間なら電池を入れても問題無いとも、鬼と戦う上で役に立つとも聞いていたが、劍丞はどうしても再び電池を入れ、劍を使う気になれなかった。

どうしても考えてしまう、どうしても恐れてしまう。

詩乃や一葉といった、自分を好きだと言ってくれる娘達は、本当は洗脳され、趣味趣向を歪められ、無理矢理新田劍丞が好きなのだと思い込まされているのではないかと。

あるいは……織田久遠信長すらも……

「(もしそうなら、俺は……俺は……)」

こころしばらく、劍丞はまともに眠れていなかった。

「御屋形様、お待たせいたしました」

「長尾の軒猿衆の動きが乱れています。　今ならかなり深くまで情報を抜けそうです

よ」

そこに、武田の諜報組織・歩き巫女達が方々から集めてきた情報を取りまとめていた一二三と湖衣が評議の間へと入って来た。

「敵の数は？」

光璃が一瞬だけ眼光を光らせ、恋する女の子モードから冷徹な戦国武将モードに戻り確認する。

「おおよそ2万」

「長尾にしちや多いでやがるな」

「景虎殿は多くて1万の指揮が限界だからね」

「過去に例がない大掛かりな戦になるな」

「景虎の動向はどうなってるでやがるか」

「そ、それが……」

湖衣が視線をぐるぐると彷徨わせて言葉詰まらせる。

「な、何かやな予感がするでやがる……」

「夕霧お姉ちゃん、流石に聞かない訳にはいかないよ。」

光璃お姉ちゃん、そろそろ話が核心に行きそうだから戻ってきて」

「……あと一時(約2時間)」

「評議終わるでやがるよっ!!」

やむなく光璃は姿勢を正し、湖衣と一二三の話を聞く体勢になる。

兎々もかなり名残惜しそうな表情になるも、光璃に倣つて姿勢を正す。

「長尾景虎がいません」

……一二三からの報告を聞き、評議の間が俄かに騒めき立った。

その瞬間、湖衣が凄く申し訳なさそうに視線を伏せる。

「いないって、どういう意味でやがるか!?!」

「ええ、突如行方をくらまし、家臣団すらも居所を把握していないとの事です」

そして一二三が重々しい表情でそう報告をする。

いや、その人物は一二三ではない。

一二三のそっくりさんこと霧隠才蔵である。

「(一二三ちゃんコレどうすれば良いの!?! なんて霧隠才蔵さんが軍議に出てるの!?!」

一二三ちゃん今どこで何やってるのお!?!)」

湖衣はどうすれば良いのかまるで分らず、人知れず頭を抱えていた。

霧隠才蔵の物真似の巧さは尋常ではなく、一二三の親友であり、優れた密偵でもある

湖衣以外、誰も目の前の人物が一二三じゃないと気づいていない。

「あの景虎の事でやがる、きつとこつちの不意を突く策を考えているでやがるな」

「それと柿崎景家殿も行方不明です、しかも全く同じ時期から」

「決まりだな、おそらく別動隊を率いていよう」

春日がそう分析する。

なお、真実はセックス中毒及びアルコール中毒をどうにかするために突如山籠もりを解しただけで、別動隊なんて影も形も無い（第123話）。

「気になるといやあ、どらいぜっていう武器も気になるぜ」

「うむ、越後で配備を進めている新しい鉄砲との事だが……」

粉雪、越後に行った時に見ていないのか？」

「外観だけは知ってるけど、それ以上の事は教えてもらえなかつたぜ。」

「こう……先っぽに小さな槍を着けていたぜ、九十郎は銃剣つて呼んでいた」

「鉄砲の先端に小さな槍か……」

「鉄砲を槍みたいにするものだと思っけど……」

悪い、あたいじゃそれ以上の事は分からなかつたぜ」

「歩き巫女は何か掴んでるでやがるか？」

「先ほど軒猿の動きが乱れていると申し上げましたが、」

どらいぜと第七騎兵団に関する事柄への防諜は強固なままです。

第七騎兵団という名の長尾の精鋭部隊は、どらいぜを使う部隊と聞いています。

しかしそれ以上の事は……」

「どらいぜに対する徹底した防諜、それに長尾景虎の突然の行方不明……」

「この2つ、繋がりそうな気がするな」

春日がそう言うのと、他の武田四天王全員が頷き合う。

「2万なんて美空らしくねえ数だと思つたけど、こりや大掛かりな陽動つて線もあるぜ」

「景虎さんが行方不明なら、総大将は誰なのかな？」

「北条名月景虎殿……先日後継者を決める戦に勝利し、後継者に指名された方です」

「ふむ……昔北条から人質として送られてきた娘か……粉雪、どう思う？」

「実戦経験が圧倒的に不足している、正直美空本人に比べれば与しやすいと思うぜ。」

「だけど自分の非を認めて、他人の言葉に耳を傾ける謙虚さもある。」

「良い補佐役と巡り合えれば化ける……と、思うぜ」

「油断は禁物でやがるな」

「てか御屋形様、一応はあの娘と親子だったんだよな。」

「あたいより御屋形様に聞いた方が良いんじゃないかだぜ」

「会話はほぼ無かった」

「過ぎた事は仕方が無いとは言え……まさかあの娘が越後長尾家の跡継ぎになろうとは

な」

「ずっと軟禁してたの、やっぱり怒ってるかな……?」

「夕霧が見た限りでは、あんまり気にしてない様子だったでやがる。

かと言って良い感情を抱いてるとも思えねーでやがるが」

「少なくとも、こつちに対して手加減はしてくれないだろうな」

「ここ、言っちゃ何だが別動隊を率いている美空の方が怖いぜ。

あたいは名月の本隊より、どこかにいる別動隊への備えを重視した方が良いと思うぜ」

「同感だ、どらいぜがどのような武器かは分らんが、警戒に越した事はなからう」

「それじゃあ、名月さんの本体への迎撃に大勢の兵は裂けないね」

「一二三はどう思うでやがるか?」

話が一二三に向き、思わず湖衣の肩がびくんと跳ねる。

お願いだから今はその人に話を振らないでくつと叫びたい気分であった。

「ふむ、私が思うに……」

「なあ、ちよつと待ってくれ!」

一二三のそっくりさんが口を開こうとした瞬間、劍丞が話を遮った。

湖衣の劍丞に対する好感度がぐーんと上がった。

まるで地獄に仏、救世主でも見たかのように劍丞が輝いて見えた。

「ここで美空と争つて、殺し合いをして何になるんだ！」

美空も、光璃も、まず鬼をどうにかしなきゃいけないっていう気持ちは同じなんだ！」

「長尾と和議を結べつて事かだぜ？」

「ああ、そうだ」

評議の間に詰めている甲斐の諸将がしーんと静まり返る。

全員、考えている事は同じ……絶対に無理だ、不可能だという事だ。

それを誰が、どうゆう風に劍丞に伝えるのかと、皆が視線を交差させる。

「……不可能」

しばらくした後、ついさつきまでデレデレモードであつた光璃がそう答える。

その姿はもう、凄惨な人殺しを行う武田晴信の姿である。

「前にも言つたけれど、美空は信用できる。俺が保証する」

「光璃は、美空を信用できない。織田久遠信長も信用していない。」

和議は結べない、織田を中心とした同盟にも入れない」

「2人共、俺の大事な嫁なんだ」

「そしてそれよりも大きな問題がある」

「それより大きな……？」

何の事だか分らないと、劍丞が戸惑いを見せる。

「越後には母様がいる」

劍丞には分らない。

劍丞には理解できない。

劍丞は想像する事すらできない。

武田晴信と武田信虎の関係を……

光璃が養子となり、我が子となつた名月にずっと声をかけられなかつた理由は、ちゃんとおるのだ。

「母様は私を殺しに来る」

光璃その目には、確信があつた。

「私も、母様を殺しに行く」

光璃のその目には、静かな殺意があつた。

「そうだね、お姉ちゃん。母様だもんね、ちゃんと殺さない」と

薫もまた、その目に激流の如き殺意を滾らせていた。

そんな2人の目を見て、夕霧は悲しそうに奥歯を噛んだ。

新田劍丞には決して分らない、理解できない、想像すらできない……親が子を、子が親を本気で殺意を抱く事があるだなんて。

そうする事が当然であるかのように、実の親とは殺すのが当然の存在だともいうか

のように、2人の目には殺意が宿っている。

「姉上、薫……本当に殺し合うだけでやがるか……殺し合う以外にないでやがるか……
血肉を分けた親兄弟で憎み合い、殺し合うだけなんて……」

「そんなの、悲しすぎるでやがるよ……」

2人の目は殺意が宿っている……3人の目には、ではない。

夕霧だけが、母を殺す事に抵抗感を抱いていた。

しかし、そんな夕霧の眩きを聞く者はいなかった。

そんな夕霧の悲しそうな瞳を見る者はいなかった。

「一二三ちゃん大丈夫だよね？ 信じて良いんだよね？」

実は御屋形様を裏切る準備してましたとか無いよね？

私に……私にまた、主君殺しの片棒を担がせようとしてないよね？」

憔悴し切った湖衣の、祈るような眩きを聞く者はいなかった。

……

……

……

「みんな丸太は持ったな!! 行くぞオ!!」

一方その頃、そっくりさんでも物真似芸人でもない本物の一二三こと真田昌幸は信濃

の山奥で丸太を積み上げていた。

「……殿、いきなり集められたのはともかく、理由くらいは」

真田家家臣団の1人が恐る恐るそう尋ねてくる。

「何って、治水じゃあないか」

一二三はさも当然の事のように言うが、当然のように嘘である。

「ち、治水……何故、今？」

「今だからだよ、母上と姉上達が急死して家中が動揺しているだろう。」

私が急遽真田家当主になったけど、実績も無いし信頼も薄い。

まずは共同作業で結束を強めようって事さ」

一二三がそう説明する。

なお、実際には一二三が真田家を無理矢理継ぐために母と姉を毒殺したのが真相である。

その真相を知る者は実行犯の猿飛佐助と幫助犯の霧隠才蔵くらいである。

そしてこれも猿飛佐助や霧隠才蔵らにすら知らされていないが、今一二三が何故領内の野武士達を動員した真の理由は……裏切りの準備である。

「それにしても随分と大掛かりな事をするのですな……これでは金子が……」

「大丈夫大丈夫、スポンサーがついたから」

「すぼん……?」

「何かと入用だからって、利子不要、ある時払いで借りてきた」

「おお、それは素晴らしい」

家臣達が感心した様子で息を漏らす。

ちなみに金の借り先は越後の長尾景虎である。

「さあさあ! お金は沢山あるから、この辺はげ山にする勢いで丸太をかき集めて!

川を堰き止める勢いで堤を築くんだ!」

「おおおーっ!!」

真田家臣団は一二三が借りて来た金を持って方々に散り、どんどん丸太を組み上げ、岩を詰め、頑丈な堤を作り上げる。

誰一人気づく者はいない……この堤は河川の氾濫を防ぐためのものではなく、人工的に洪水を作り出すためのものであることを。

その日、一二三は元気に裏切る準備を進めていた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第127話『裏切者』

「いよいよだな」

「……そーだな」

川中島と呼ばれる地で、2人の男女が佇んでいた。

斎藤九十郎と、武田信虎の2人である。

「……なあ、信虎」

「うん？ どうした？」

「勝てるかな？」

そんな事、誰にも分かる筈が無いと思いつつも、九十郎はそう尋ねた。

「勝てる」

だが信虎は躊躇無く断言した。

負ける可能性など微塵も無いと確信しているかのように胸を張った。

「おいおい、相手はあの武田信玄だぞ。しかもこっちは上杉謙信抜きで戦うんだ。

本当に勝てるのかよ？」

「それでも勝てる」

信虎は再び力強く断言した。

「その武田信玄を生まれた瞬間から知っている我が言っているのだ、信じろ」

「こつちは上杉謙信抜きだ」

「何の問題も無い」

「情報戦はボロ負けだ」

「ならばそれを逆手に取った策を採れば良い」

「ドライゼの情報も抜かれたかもしれないねえ」

「いや、草共アレの性能は理解できんよ。」

奇跡的に理解する者がいたとして、武田の将兵はまず信じまい。

武田の騎馬隊は無敵だ、いかなる策も、いかなる武器も真つすぐに踏みつづせば良いと。

ふん、誰よりも卑劣で、誰よりも醜く、

汚く生き足掻く武田晴信を主と仰ぎながらなんたる矛盾か。」

「その辺は良く分からん」

「たぶん晴信の命が尽きた時が、武田の命運が尽きる時だろう。」

そしてその事に晴信は気づいている。

新田剣介を迎え入れた理由、鬼と戦うためというのもあるが……むしろ……」

そこまで呟いた所で信虎は口を閉ざし、ふつと小さく鼻で笑った。

「関係無い、我は晴信を殺す。ただそれだけで良い、ただそれだけが望みだ。

それで甲斐武田家の命脈が尽きるのであれば、尽きてしまえば良い」

「寂しい人生だな」

「武田は代々こうなんだ。全くもってふぎけた血筋だよ。

いつそ今、この場でスパツと滅ぼしてやるべきだ」

「どうかと思うぞ……だが……」

武田の陣幕とから見えるかがり火の光の前に、信虎がそつと九十郎の手に触れる。

九十郎はそれに気づくと、信虎の手をぐつと力強く握り返した。

「オーデインの事もあるが、オーデインの事を抜きにしても、勝つしかねえ。

勝たねえと柘榴も、犬子も、美空も守れねえ。

劍丞はちよい心配だが、まああいつは主人公だし、

一二三にフオー頼んだから多分大丈夫だろ」

「勝てるとも、そして勝つとも。心配ならばその証拠を見せてやろう」

「証拠……？」

「これだ」

信虎が印籠を取り出し、そこから小さな丸薬を取り出し、九十郎に見せた。

その丸薬には見覚えがある

かつて信虎が九十郎に見せた、口にすれば鬼に変わという危険な薬。

何やら吉野だから尊治とかが日ノ本にバラ撒いているから聞いていたが、久々に見たなど九十路は思う。

今見てみれば、少し前に柘榴が纏っていた瘴気に近い、怪しい空気を漂わせているように感じた

「まだ持ってたのか、それ」

「まあな、だが……もはやこれを後生大事に抱え込む必要は無いっ!!」

その危険な丸薬をもう一度印籠に戻すと、信虎は勢いをつけて遙か彼方にブン投げた。

「おい! 信虎?!」

「……我はな、ハッキリいつて勝利を確信している。

負ける可能性など微塵も無い、ドライゼはそれ程強力な武装であり、手札だ。

ならば負けた時の命綱など不要……故に捨てたまでだ」

「いやあれ変な奴に拾われたら面倒だろ」

「……あ」

信虎がきよとんとした表情になる。

正直その辺は全く考えてなかった。

「環境汚染とかも大丈夫か？ この辺で採れる野菜が全部真っ黒になったりしたら、土下座しても許しちやくれねえぞ多分」

「うぐぐつ」

信虎が眉間に皺を寄せ、物凄く物凄くバツが悪そうに前髪を掻き……

「……拾ってくる」

さつき投げ捨てた印籠が飛んでいった方へと向かう。

……

……

……

「ハッキリ言います、ドライゼは張り子の虎も同然です」

武田家家臣団の前で、一二三（本物）は臆面も無く断言した。

当然、その言葉は嘘八百、大した面の皮であるが、表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸にとっては平常運転だ。

一二三は気づいている、一二三は確信している。

今の越軍とまともにもぶつかるのは自殺も同然だと。

「詳しく聞かせて」

光璃が話の続きを促す。

「長尾はここしばらく、諸国から鉄砲を作れる鍛冶屋を呼び集め、

ドライゼと呼ばれる武器を作らせている。ドライゼとは、何？」

「連発可能な鉄砲です」

一三三が正解を告げる。

「ここまででは伝えても良いと、あらかじめ美空と打ち合わせ済みだ。

「どのくらいの速さ？」

「我々の知る鉄砲隊20人分から30人分とお考え下さい」

「馬鹿な！ 不可能だ!!」

春日がすぐさま異議を唱える。

「……雑賀衆や根来衆は、1人の射手に複数の鉄砲を割り当て、

鉄砲の数と同数の助手をつけ、弾込めを代行させるのはご存知ですか？」

「それは聞いている。そうして雑賀衆は恐るべき弾幕密度を実現させたとな。

我々もどうにか再現できないか試してみているが、中々な……」

「ドライゼは鉄砲の内部の部品が弾込めをします。

それも、人の手で込めるよりも何倍も速く、何倍も正確に。

鉄砲を助手に渡す時間も無ければ、狙いを付け直す必要も無く……

引き金を引き、弾込めの機械を作動させれば、瞬き程の僅かな時間で次が撃てます。さらに玉薬を点火する手法がこれまでのものと異なります。

引き金を引けば即座に撃てる、つまり……」

「狙いをつけ易い、か……」

「御明察、止まっただのを撃つかのようには当ててきません」

春日の額にうつすらと汗が浮かぶ。

彼女は今なお、武田の騎馬は最強であると考えているし、戦えば勝つと信じている。だがしかし、あの長尾景虎に恐るべき新兵器を得た以上、勝つたとしても相当な出血を強いられるだろうと予感する。

そうすれば、あの強かな北条や、近年急速に勢力を広げつつあり、新田劍丞の最初の妻でもある織田信長が何をするか全く予想がつかない。

最悪のケースを考えると……

「どらいぜってそんなにヤバい物だったのか……」

一二三より長く越後にいた癖にその辺の事情を全然掴めなかつた粉雪が思わず蒼褪める。

流石は九十郎だというちよつと誇らしい気持ちも多少はあつたが、今はそれより主君武田晴信や、戦友である心を守れないかもという不安が大きい。

「長尾景虎はここ最近、ドライゼに関する情報を入念に秘匿していた。

一二三、今の話は誰から？」

「齋藤九十郎殿から」

「齋藤……られ（誰）なのら？」

「ちよつと前に柿崎の夫になつた奴でやがるよ」

「何故そいつがドライゼの情報を知っているのだ？」

「ドライゼを発案したのがその齋藤九十郎殿だからですよ」

「……偽情報を掴まされた可能性はないの？」

「そうなのら、齋藤つてのが嘘を言つてるかもしれないのら！」

「あー……そういう器用な事ができる奴じゃないと思うのぜ」

「そうでやがるな、単純そうと言うか、単細胞と言うか、

後先考えてなさそうな奴でやがったな」

九十郎と面識のある粉雪、夕霧が答える。

「質問を変えよう、どうやって聞き出した？」

ドライゼが秘匿されている事は、九十郎とて知っていた筈だ」

「抱かれて、閨の中で聞き出しました」

一二三が妖艶に笑う。

いつも飄々としている彼女が、全身に淫らな雌の空気を纏い笑う。

こんな表情もできたのかと、春日は思わず唾を呑み込み、湖衣は一瞬、途轍もなく嫌な予感が心中に過った。

「夕霧？」

「あゝ……ま。まあ、事実でやがる……」

夕霧が少し言い辛いような表情で質問に答えた。

脳裏によぎるのは、かつて越後で見た光景、一二三が九十郎に抱かれた証を自分たちに見せてきた瞬間の光景だ（第111話）。

「ふ、不潔なのらあっ!!」

「しかし、相手によっては有効な手段ではある。拙としては……まあ、否定はすまい」

「まあ、古典的ですけど、有効な手ですよ」

「あたいはノーコメントだぜ」

「脳とれ？」

「何も言う事は無いって事だぜ」

兎々が顔を真っ赤にして声を荒げ、残りの四天王もちよつと釈然としない様子である。そして光璃は床几と呼ばれる折り畳み椅子を蹴るかのような勢いで一二三の近くに

詰め寄り、ちよつと頬を赤らめて……

「……どうだった？」

「柿崎景家殿がチン墮ちしたとの噂……あれ、たぶん真です。

実際に体験した私が言うのですから間違い無いです」

「チン墮ち……」

「本当は2、3回抱かれた段階で必要な情報は概ね揃っていたのですが、

もう一回だけ、あと少しだけと混浴姦して、疑似獣姦して、

結局10回くらいは交わりましたね」

「疑似獣姦とは？」

「前田利家殿の御家流で犬になって、こう……文字通り獣のように……」

「なんと……」

「しかも野外で」

「興味深い……」

「てめーら真面目にやれでやがるううううーっ!!」

軍議そつちのけでエロ談義モードに入りつつある2人の後頭部に、夕霧のツツコミ

チョップがクリーンヒットした。

「一二三、今しれつと前田利家の御家流がどうか言わなかつたか？」

「ちよつと珍しい御家流ですね。 自分自身の体を犬に変える。

犬になった状態で噛みついた相手を犬にできる。

他人を犬に変えた場合、犬になっている間は好きに動かすことができる。

そういう御家流です」

「あ、あいつそんなやべえ御家流持ってたのかよ……」

「こ、怖すぎなのら……」

「ちなみに弱点は犬になっている間、頭の中身も犬と同程度になる事です。

簡単な指示や、敵味方の区別くらいならは理解できますが、

高度な作戦や策略は理解しきれません」

「良くそこまで調べあげたものだな」

「九十郎殿は閨の中では随分とお喋りでしてね」

一二三はそう言つて春日に軽くウインクをする。

九十郎から聞いたと明言していない所がポイントだ。

その言葉は確かに真実だ。

九十郎がセックスの前後でうっかり口を滑らせた事は何回かある。

しかし、犬子の御家流の情報については、九十郎から聞いたわけではない。

本当は美空から聞いたのだ。

武田家臣団に、武田晴信に伝えろと言われたからだ。

その理由は……

「ならば、先程ドライゼが張り子の虎と評した理由は何だ？」

「そうなのら！ さつきかららまって聞いてれば、ろらいぜを褒めてばっかりなのら！」

その理由は……これから言う嘘に少しでも信憑性を持たせるためにだ。

さあここからだ、一二三は静かに手を握り締める。

さあここから先は死地にも等しいと、一二三は静かに息を吸い込む。

表裏非興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸が、息をするよりも自然に嘘を言える一二三が、珍しく……本当に本当に珍しく、緊張の色を隠しきれなくなりつつあった。

「どんなに優れた鉄砲も、玉薬が無ければただの筒です」

「何？」

「……………」

光璃は無言だ。

眉一つ動かさずに一二三を凝視している。

「……………そ、想像してたより怖いな、これは」

動揺するな、汗をかくな、震えを起こすなと全身に活を入れるも、全身の細胞がこれからやらかす事への不安と恐怖に怯えていた。

「どうした？ 何故黙っている？」

春日が一二三に尋ねる。

馬場春日信房……武田四天王筆頭、文武に優れ忠義に篤い武田家臣団の中で最も優れた将である。

一二三とて武家のたしなみとして多少の武術の心得はあるが、春日には遠く及ばない。

その気になれば……光璃が殺せと命じれば、瞬時に首を刎ね飛ばされるだろう。

「いや……違う、しくじれば死ぬのはいつもの事じゃないか。怖いのは死ぬ事じゃない」

一二三は思う……何故自分は震えていると。

一二三は思う……何故自分は、それでも武田晴信を討ち取ろうとしているのかと。

「どう考えても詰んでるとしか言いようがない甲斐がこれまで何とかやって来たのは、間違い無くこの人がいたからだ。

武田晴信の命が尽きた時、甲斐武田家の命運も尽きる」

そして一二三は湖衣を見る。

何度も騙して、何度も裏切つて、何度も怒らせて、それでも自分を友だと呼んでくれる得難い人だ。

真田昌幸の本質がクソヤロウと知りながら友と呼んでくれる人だ。

一三は夕霧を見る。

武田の血筋を引く者の中で、最も武田らしくないのが彼女だ。

聡明で、理的で、義理堅い……裏切りと人殺しを嫌い、戦国時代に生きるのには向いていない可愛らしい女の子だ。

この2人だけではない、甲斐には何人も友人がいて、死んでほしくない人も、壊れてほしくない物も沢山ある。

武田晴信を殺すという事は、それら全てを地獄の底に叩き込むも同然だ。

一三が震えている理由はそれだ。

しかしそれでも、一三は武田晴信を殺そうとしている。

その理由は……

「(単なる保身のため……? 甲斐武田家は武田晴信個人の名と能力に頼りすぎている。

甲斐武田家はいずれ沈む舟、沈み切る前に他の船に乗り移らないといけない。

だから武田を裏切り、長尾に身を寄せるため……)」

そんな理由が頭に浮かんだ。

しかし、一三はその理由は些細なものだと頭から消した。

「オーデインの目論見を阻止するため……?」

この国、この時代の数多の英雄の魂を収奪し、手駒にする恐ろしい計画を阻止するた
め」

そんな理由が頭に浮かんだ。

しかし、正義の味方なんてカラじやないと、その理由も頭から消した。

「もつと単純に、九十郎が好きだから……？」

九十郎が武田晴信を討つて、美空の手助けがしたいと言ったから……」

そんな理由が頭に浮かんだ。

しかし……

「たぶん、それも理由の一つなんだと思う。　だけどそれだけじやない。

たったそれだけの理由でこんな怖い思いをして、

友人を地獄の底に叩き込もうとしているんじゃない」

そして一二三は、ある理由に思い至った。

「……私が裏切りただけ。　あの武田晴信の裏をかき、ぎやふんと言わせたいだけ」

その理由が頭に浮かんだ瞬間、一二三の震えはピタリと止まった。

彼女は真田昌幸……後に表裏比興の者と呼ばれる彼女が、己の性質を自覚した瞬間

だ。

「湖衣、越後に入った硝石の量は？」

「はい、減っています」

「減つて……本当でやがるか？ おかしいでやがる!？」

「なあ、ころ……硝石つてなんだっけ？」

微妙に話についていけない粉雪が、こつそりと隣に座る心に助けを求める。

「玉葉はね、硝石、木炭、硫黄を混ぜて作るんだよ。」

木炭と硫黄は簡単に集められるけど、硝石は結構珍しいの。

日ノ本で採れる分じゃ全然足りないから、最近海の外から買うのが大きいんだよ」

「ふんふん」

「だからね、外国から硝石を買った商人の動きを見張れば、

他国がどこくらい玉葉を備えているか分かるんだよ」

「なるほど」

「御屋形様がずっと海に面した国を掌握したがってるのは、

外国との交易で、日ノ本では手に入りにくい物資を買うためでもあるんだよ」

「へえ、色々考えてるんだな……て、え？ 何か矛盾してねえか？」

「何で長尾はどらいぜをたくさん作って、玉葉は減らすんだよ」

「鉄砲鍛冶の招聘にかなりの大金を費やしていると聞くぞ。」

「まるで金子をどぶに捨てるようなものではないか」

「……………」

光璃は無言だ。

しかし、視線の動きに僅かに迷いが見える。

彼女もまた、長尾景虎の真意を測りかねているのだ。

「一二三、理由に心当たりは無いのか？」

「硝石の予想外の値上がり、そして金子も尽きた」

春日からの問いに対し、一二三が即座に断言する。

「……………どらいぜを作るのに金をかけすぎ、硝石を買えなかったと？」

「どこの大名も競って買い集めていますからね、

特に織田は買い占めんばかりの勢いで買いまくっているとか。

当然、値上がりもしますし、

堺と距離がある越後まで硝石を運ぼうとする商人も少なくなる。

付け加えるなら、鉄砲鍛冶だって多くの大名家が欲しがらるもの。

あれだけの人数を呼び集めるのにどれだけの無茶をしたか」

「長尾景虎程の者が、そんな初歩的な失態を晒すでやがるか？」

「越後の籠も完全無欠ではありませんよ。 たぶん読み違えたんでしよう。

だから長尾は今までずっとドライゼを使えなかった。

使えば玉葉が不足している事を気づかれてしまうので」

「しかし物見の報告では、越軍は此度の戦に大量の鉄砲……

おそらくどらいぜを持ち込んでいるぞ。

景虎が使えもせぬ武器を運ばせるのに人手を費やすのか？」

「今回の総大将、誰でしたっけ？」

その瞬間、皆の脳裏に電流が迸る。

中途半端に兵を集めた段階で唐突に長尾景虎と柿崎景家が失踪し、その行方は武田の諜報網でも捉えられていない。

急遽後継ぎが神輿として担ぎ上げ、甲斐への出兵は強行されたものの、越軍は長尾景虎個人の才覚に頼り切っているが故に、その歪みが出ているのだと。

「玉葉の不足……跡継ぎには知らされていなかったのか!？」

「北条名月景虎が跡継ぎと決まったのはごく最近でやがる。」

ありうる……ありうるでやがる！」

「初めての総らい将、戦果欲しさに新兵器に飛びついたのら！」

皆が目の色を変える。

これまで幾度と無く甲斐武田家の邪魔をし続けて来た越軍を今日こそ打ち破れる。

目の色の瘤の如く晴信を悩ませていた越後長尾家を、この機会に取り除ける。

そんな希望を皆が抱いた。

そして……

「いずれにせよ、長尾に母様がいる以上、和議は不可能……」

光璃がしばし瞑目し、そつと席を立つ。

「……越軍を討つ。母様は殺す。そして、両港と金山を手に入れる。

長尾景虎不在の今が、最大の好機」

……光璃が決断をした。

……

……

……

一方その頃、越軍の陣幕では。

「……正直、作りすぎたな」

「何をだ？」

「火薬」

「今ここに火が付いたら、さぞや派手な花火になるだろうな」

山のように積み重なった弾薬の前で、信虎と九十郎が呟いた。

越軍のドライゼ部隊が1日中射撃し続けても使い切れぬ程の弾薬がそこにあった。

ハーバー・ボツシユ法……それは、空気と水からパンを作る技術。

空気中の窒素を固定化し、硝石を作る技術。

美空が最も入念にその存在を秘匿する技術。

確実に確実にドライゼ銃よりも危険でブツ飛んだ技術である。

そんな危険な技術を、光璃は知らない。

そんな危険な技術を、一二三は知っていて黙っていた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第128話『遅刻』

「越軍は……千曲川を挟んだ向こう側か……」

武田四天王が、遠くに陣を張る越軍の姿を捉えていた。

過去3度、甲斐の武田晴信と越後の長尾景虎はここで衝突し、多大なる出血の末、どちらが勝ったとも言えない戦いをしていた。

今度こそ完全なる勝利を納め、越軍の息の根を止めるのだと、4人の意気は高揚する。微妙な距離に陣を立てたもんだぜ。川を挟んで対陣するか、川を渡って決戦か……」

「敵の目の前で川を渡るのはあまり好ましくないのは確かだな」

「川を渡り切った直後で隊列も整わない所を襲う作戦かな？」

「にしちや遠すぎだぜ」

「距離感を見誤ったのかなあ？」

「五輪の書に曰く、敵を侮る戦は負け戦だぜ、ころ」

「ごりんのしょ？」

「九十郎に教えてもらった、何か有名な兵法書らしいぜ」

「そうなんだ」

ただし、この時代では影も形も無い。

「れも、これらけ距離があれば、接敵の前に渡河を終えられるのら」

「拙としては、前に来た時より千曲川の川幅が狭くなっているのが気になるのだがな」

「上流を堰き止めてるのかも」

「渡河と同時に堰を切り、我等を押し流す策か」

「そんな大規模な作戦、こつちの密偵が見逃すかなあ……」

「上流はむしろ武田の勢力圏だぜ」

武田四天王が互いに顔を見合わせる。

お互いの考えている事は、お互いの目を見れば大体分かる。

「……あの情報、どうやら事実のようだな」

「ああ、あたかもアレを見るまでイマイチ信じられなかったぜ」

「アレがこつちを油断させるための偽装だったら大したものだよな」

「正直、らめらめなのら」

「らめらめって何かやらしくねえかぜ」

「られもそんな事言っていないのらあつ！」

「いずれにせよ……」

4人の視線が遠くに見える越軍の陣を見る。

彼女らが出す結論は全く同じ……

「長尾景虎は不在のようだ」

「マジで美空は来てないようだぜ」

「長尾景虎さん、本当にいないみたいだね」

「景虎はいないのら!」

「あそこに柵を建てて、あそことあそこに見張りを置いて」

「武器はあの辺、兵糧はあの辺に集めると……」

「この位置からバレバレって、罠を疑いたくなるぜ」

「奇襲しほーらいなのら!」

そう、陣立てがイマイチ素人臭いのだ。

一生懸命教本通りの配置を再現しましたがでも言いたげな感じで、百戦錬磨の長尾景虎らしさが全く無いのだ。

「申し上げます、御屋形様よりご通達です」

そんな4人の前に、むかで衆と呼ばれる武田の伝令役がやって来た。

むかで衆より差し出された一片の指令書に目を通り、春日が頷く。

「御屋形様より、渡河せよとのご命令だ」

「決戦なのら!」

「春日、ドライブには警戒しとけだぜ」

「弾避けの竹束は準備させた、問題無かろう。それよりも粉雪……戦えるか？」

「九十郎の事か？」

春日はしばし言い淀み、考え込み、しばしの硬直の後に頷いた。

「心配すんなよ、あたいは一切手加減抜きで行くし……」

逆に言えば、九十郎も手を抜いちゃくれないぜ。

先代様も向こうに付いている以上、本気で御屋形様を殺しに来る」

「……信じるぞ」

春日はまるで独り言のようにそう呟くと、自らが率いる部隊の元へと駆け戻っていき、

そして甲軍による大規模な渡河が始まる。

……

……

……

「決められた順番で手早く渡れ！ 渡川を終えた隊は整列の上待機だ！」

日頃の訓練の賜物か、甲軍による渡川は秩序だった見事なものだ。

川幅が狭く、川底が浅くなっている事もあり、他国の軍の半分以下の時間で川を渡り、

整列し、戦闘準備を整えていた。

「春日様！ 越軍に動きが！」

「やはり渡河中に襲う策か！ だが遅い！ 拙い！」

この水量ならば筏は必要ない！ 徒歩で渡れるのが分からんか！」

甲軍が足を速める。

千曲川の水量は以上に少なく、底は浅く、流れも穏やかだ。

あつという間に甲軍の全体が川を渡り切つてしまふ。

「……この速さ、いくら水量が乏しいとはいえ、これだけの練度があるとは」

「ああ、普通じゃない。 凄いものだな。 詩乃、こつちも急がないと」

「ええ、しかし間に合うか……」

それは本格的に両軍が激突する前に剣丞隊と合流を図ろうとしていた詩乃や剣丞を驚愕させるに十分なものだ。

だが、その直後……

「春日様！ 急に水嵩が！」

「何……？」

甲軍全体が渡りきつた直後、徒歩でも簡単に渡河できる程に水量が減っていた千曲川に変化が起きる。

急に水流が増し、水量が増し、筏が無ければとても渡れる程……いや、筏を用いても容易には渡れぬ程になってしまったのだ。

「水計……？ まさか本当に上流に堤があつたのか!？」

どうやって我らの目と耳を掻い潜つた!？」

春日が驚愕に目を見開く。

ほぼ同時に、やや離れた場所で一二三の口角がぐにやあと曲がる。

この戦いが始める直前に、川の上流に建てた堤防（第126話）は見事にその役割を果たしてくれたと、一二三は笑みを浮かべる。

既に甲軍は川を渡りきっている。

急な増水で分断される事も無ければ、将兵が押し流される事も無い。

しかし……

「まさか……退路を断られた……のか……?」

春日がそう思い至る。

そして春日が考えた通り、この急な増水によって一二三が狙っていた事は、甲軍の退路を断つ事……確実に武田晴信の息の根を断つ事なのだ。

そして次の瞬間……ズダダダッ! ズダダダッ! と、夥しい量の射撃音が戦場に響き渡つた。

「総員突撃いっ!! 敵陣目がけ一気呵成に駆け抜けよ!」

四天王筆頭の判断は早い。

光璃からの伝令を待つまでも無く、どらいぜん新型兵器を持つ越軍に軍を向けた。

だがしかし……

ズダダダダッ!　ズダダダダッ!　と、鉄砲隊の射撃音が響き渡る。

射撃音は途切れない。

射撃音は途切れない。

射撃音は途切れない。

途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切

れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切

れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切

れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切

れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切

れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切

れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切

れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切

れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切れない、途切

い、途切れない、途切れない、途切れない……

甲斐武田家が誇る騎馬部隊が、ズタボロにされていく。

……

……

……

ズダダダダッ！ ズダダダダッ！ と、鉄砲隊の射撃音が響き渡る。

いくつもの断末魔が木霊して、夥しい量の流血が周囲を紅く紅く染め上げる。

それは地上に権現した地獄のような風景だ。

「御大将！ 何かもう始まつてるっばい雰囲気っすよ！」

そんな風景を遠目に見ながら全力疾走する2つの人影があった。

赤毛の少女と、若白髪の少女が、息を切らせながら必死こいて走っていた。

「ああもう！ だから団子屋だの雑炊屋だのに寄つてる暇があったら、

とつとと進もうつて言ったのに！」

「何言ってるっすか!?! 先に暖簾潜つたのは御大将で、カネ払つたのは柘榴っすよ！

てかアンタは何で財布空っぽだったっすか!?!」

「お酒買つてたからよ！」

「捨てても捨てても酒瓶が増え続けてたのはそれが理由っすかあ！」

「買っても買ってもすぐに捨てて！ アンタは賽の河原の鬼か！」

「御大将自分らが何のために山籠もりしたか分かってるっすか!？」

「そもそもあんな山奥でどうやって買ってたっすかあっ!？」

「懇意の酒屋が来てくれたわ」

「気合入ってるっすねえ……」

「猛ダツシユで銃声を方へと走りながら……2人のお腹がぐううつと鳴った・

「……団子屋の事を考えたからお腹が減ってきたわね。

「考えてみたら一昨日から何も食べてないわ」

「柘榴は3日前から水しか口に入れてねーっす」

「柘榴が道を間違えるから」

「御大将が後先考えずに酒を買ってくるから」

「美空と柘榴が無言のまま、じとじととした表情で睨み合う。

「そして再び2人のお腹がぐううつと鳴った。

「空腹で眩暈がしてきたわ」

「柘榴も同じっす」

「とりあえず味方の陣地に行つて、軍糧を少し分けてもらいましょう」

「ズダダダダッ！ ズダダダダッ！ と、鉄砲隊の射撃音。

そして断末魔の叫び声がいくつも重なって聞こえてくる。

「御大将、道こつちで合ってるつすか？」

「柘榴、道はこつちで合ってるの？」

全く同じタイミングで、全く同じ台詞が出て、美空と柘榴が思わず真顔になる。

美空は柘榴が、柘榴は美空が正しい道順を知っていて、先導して貰っているという認識だったがしかし、どうやら2人して適当に走っているだけだったようだ。

ズダダダダッ！　ズダダダダッ！　と、鉄砲隊の射撃音。

そして断末魔の叫び声がいくつも重なって聞こえてくる。

「かなり近いすね」

「この射撃速度、ドライゼよね、まず間違いない」

「武田はウチ程鉄砲を重視してねーっすから」

「火薬の炸裂音より断末魔の方が近いって事は、私ら武田側に近い方に来てるみたいね」

「火薬の臭いより血の臭いの方が強いって事は、そうみてーっすね」

「つまり……私達道間違えてるわね、盛大に」

「このままじゃ武田陣営に見つかって袋叩きか、

味方に撃たれてエメンタルチーズっすね」

ズダダダダッ！　ズダダダダッ！　と、鉄砲隊の射撃音。

そして断末魔の叫び声がいくつも重なって聞こえてくる。

「何か音がだんだん近づいてきてねーっすか？」

「私、鉛玉が飛んでくる音が聞こえ始めたんだけど。ビュン、ビュンって感じの」

「御大将耳良いつすね……あ、まずっ、柘榴にも聞こえてきたっす」

「二択よ柘榴、戦う、逃げる」

「2人じゃ流石に勝ち目ねーっす、逃げ一択で味方と合流を目指すっすよ」

「そうと決まれば回れ右して全力で走るわよ！」

「らじゃーっす!!」

……

……

……

一方その頃、武田陣営は混乱の極みであった。

ズダダダダッ！ ズダダダダッ！ と、鉄砲隊の射撃音。

そして断末魔の叫び声がいくつも重なって聞こえてくる。

「何あれ!? 何あれ!? 何あれえっ!!」

「ドライゼ銃を甘く見えた。

こんな密度で撃たれたら顔を上げた瞬間にハチの巣になる……」

ビュンビュンと容赦無く飛び交う鉛玉。

熱したフライパンに置いたバターのように溶けていく味方。

長尾の隊からはまるで濃霧のように火薬煙が立ち込めて、武田の隊からは噴水のように血飛沫が舞う。

弾幕は一秒も途切れず続き、武田自慢の騎馬部隊はそんな越軍の鉄砲隊に全く近づけずにいる。

劍丞御一行と何かついてきた薫はどうか越軍の中にいるであろう劍丞隊本隊と合流しようよとするも、凄まじい密度の弾幕から逃げ隠れするので精一杯だ。

「どうしよう、あんな数で撃たれたらいくら春日や粉雪でも突破できないよ。」

「そもそもあんなに撃つてどうして玉薬が切れないの!?!」

「こうなったら綾那が血路を開くのですよ」

「いくら綾那でも無茶よ!」

「鉄砲なんて、気合があれば全部避けられるのです」

「だから無茶だつて言ってるでしょ!」

「劍丞様、春日殿の隊が潰走状態になりました」

「潰走おつ?! 転進ではなくて潰走!?! 武田四天王筆頭が接敵すらできずに!?!」

驚愕の出来事に歌夜が思わず愕然とする。

越軍はこれまで一人の兵も損耗せず、甲軍は開戦から半日で壊滅的な打撃を受けていた。

「劍丞様、離脱しましょう。甲軍と越軍の戦を止めるまでもなく、既に勝負は決しました」

「もう何かどうやって勝つかから、

どうやって傷を浅くして退くかにシフトしているな」

「いけない、他の隊がこちらの方に退却してくる……」

「銃声もかなり近づいて……劍丞様！ここは危険です！すぐに離れなくては！」

ズダダダダッ！ズダダダダッ！と、鉄砲隊の射撃音。

そして断末魔の叫び声がいくつも重なって聞こえてくる。

「何だこれは！なんでこんなに撃てるんだ!？」

「うわあああつ！ち、血が……止まらねえ！」

「来るな！来るなあ!!」

恐慌状態になった甲軍の雑兵共が劍丞達が隠れている場所に駆け込んできた。

指揮官はとつくの昔の射殺されており、ただただ怯えて逃げるだけである。

そして既に戦意を失った者であろうと皆殺しにせんと、銃弾の雨も追いかけてくる。

「劍丞様」

「聞かなくて良い！ 逃げろおっ!!」

劍丞御一行が恥も外聞も無くダツシユで逃げ出す。

「小波！」

『はい、御主人様。 その場所から安全に抜ける方向は……』

「違う！ 美空はどつちの方向か教えてくれ！」

『え……』

「劍丞隊との合流は諦める！」

できるかどうか分からないけれど、直接美空を説得して止めるしかない！」

『危険です!? 危険すぎます！ 間に合うかも分かりません！』

それに今朝も話しましたけれど、あの人は今行方不明になっています！」

「来ている筈だ！ すぐ近くに！ たぶん……たぶん光璃を直接狙っていると思う。

俺達も射線上から逃げながら美空を探す、小波も何とか探してくれ」

『……御意。 しかし、本当に危ういと感じた時は退いてください』

「ありがとう」

そんなこんなで駆け出した直後……どすんっ!! となにか柔らかいものと正面衝突した。

「はぶっ!?!」

「きやうつ!？」

その状況を一言で説明するならば、おっぱいおっぱいとも言うべきか。

ギャルゲ体質というかエロゲ体質の劍丞は、生命の危機の中で呑気に巨乳とぶつかつて、倒れた拍子に柔らかな双丘に顔を埋めていた。

「むうーっ!　むううーっ!!」

「ちよ、誰よ貴方っ!？」

「御大将どっち行つてるっすか!?　方向音痴まだ治つて無かつたっすかあつ!!」

「柘榴!　他人に方向音痴設定付加すんじゃないわよ!　って、コイツ確か……」

「劍丞……っすよね?」

「しかもついでで甲斐に追いやった……」

「じゃなくて新天地でのご活躍をお祈りした連中もいるじゃない」

「武田晴信もいるっすよ」

「マジで!?　ここで会つたが1000年目え!!」

「わああつ!　私は薫です!　妹の方です!」

「……言われてみれば、晴信にしては雰囲気か柔っこいような。

でも晴信の妹なら敵よね、斬つても良いわよね」

なんて事をしている間にも越軍からは絶え間ない銃声が鳴り響き、逃げ纏う甲軍の雑

兵達が打ち抜かれ、絶命していく。

「劍丞様あつ!!」

「御大将おつ!!」

詩乃と柘榴が真つ青になりながら叫ぶ。

劍丞と美空がラッキースケベをしているすぐ間近まで銃弾が飛び、無慈悲に、無差別に死をバラ撒いていく。

「ああもう! こんなところでチャンバラやつてる場合じゃないわ!」

晴信の妹でも良いから薫も一緒に来なさい! とりあえずこの場から脱出するわよ!
!」

「え、でも……」

「細かい事は後で!」

美空が薫の右手を、劍丞が薫の左手を掴んで全力でダッシュする。

銃弾が飛び交い、濃密すぎる死の臭いが漂う殺戮空間から少しでも速く、少しでも長く距離を取ろうとする。

「御大将、幸か不幸か分らねーっすけど、周りの連中は御大将どころじゃねーみたいっす。」

前に話した例の手、使えねーっすか?」

「あれはイザつて時以外は使いたくないんだけど……」

「今がイザつて時つすよ！ このままじゃ全員エレメンタルチーズつすよ！」

「それは……そうね、このままじゃ全員エレメンタルチーズよね!!」

そして美空は精神を集中させ、自らの御家流を真上に発現させる。

最近何だか物語を動かすためのゼウス・エクスマキナの使われ方をされてるような超便利な御家流……三昧耶曼荼羅を発現させる。

「行つけえええーっ!!」

護法五神がまるで花火のように真上に打ち上げられ……七色の輝きを纏いながら爆発四散した。

罰当たり極まりない使い方だが、その瞬間戦場の空気が明らかに変わった。

……

……

……

「はっはっはっはっはっ、圧倒的ではないか我が軍は！」

武田信虎が心底満足げに高笑いをしていた。

「おーっほっほっほっほっほ！ 圧倒的ですよ！」

名月がドヤ顔で胸を張る。

初めての総大将、初めての圧勝の気配に胸を高揚させ、ランナーズハイにも似た感覚に酔いしれていた。

「撃って撃って撃ちまくれ！ 一兵たりとも逃がさず皆殺しにしろおっ!!」

「玉薬の心配は無用ですわ！ エレメンタルチーズにしてしまいなさい!!」

名月が、信虎がある意味的確で、ある意味無責任で後先考えない指令を出し、美空が総力を挙げて量産したドライゼ銃をもつ兵達が次弾を装填し、バァンツ!! という炸裂音を響かせて鉛玉を発射する。

「……信虎、良い空気吸いながらドライゼをブツ放すのは良いんだけどよ」

「……名月様、そりゃあ九十郎殿がしこたま玉薬を作ってくれましたから、

弾切れの心配はほぼ無いと言って良いですけど」

秋子と九十郎がやたらとハイテンションな信虎、名月コンビを前に陰鬱な顔で額を押さえる。

彼ら、彼女らの視界は……

「硝煙で前が見えねえ……」

「火薬の煙で前が見えません……」

後先考えずにドライゼ銃を連射しまくったため、周囲は硝煙が充満し、まさしく一寸先すら見通せないような状況だった。

「畜生！ 硝煙の出方見誤った！ こんな事なら無煙火薬準備しとくんだった！

おい信虎！ 流石にこの状況じゃ狙いなんてつけられねえぞ!!」

「めくら撃ちでも何でも構わん！ 撃って撃って撃ちまくれえ!!」

「いや構うよ！ 構いまくるよ！」

ハーバー・ボツシユで硝石作れるつたつて弾薬は無料（タダ）じゃねえんだぞ!!」

「はーばーぼつしゆが無かつたら越後が100回傾く位の玉薬使つてますよ！

九十郎殿がしこたま作った玉薬がバリバリ減つてるんですよおつ!!」

「わ、犬子的には、この戦いが終わった後の金庫事情が考えたくないと言うか……

九十郎が硝石作つてくれる事を加味しても破産しかねないと言うか……」

「晴信一人殺せば他はどうでも良いっ!!」

「美空様が戻るまで持ちこたえるための必要な犠牲ですわ!!」

「どうでも良くなあいつ!!」

「だからつてやり過ぎですよおつ!!」

「武田に勝つても借金に殺されるう!!」

犬子と秋子と九十郎のツツコミをよそに、信虎も名月も止まる気配が無い。

当然、この日のためにしこたま用意されたドライゼ銃部隊も一切止まらない。

既に硝煙で前が見えない状況だったが、そんな事は関係あるかとばかりに鉛玉を撃ち

込んでいく。

そしてある一瞬……

「あれは!?!」

「美空様の三昧耶曼荼羅!?!」

秋子と九十郎が同時に天を見上げる。

長尾美空景虎の御家流の輝きが、美空以外の誰にも出す事の出来ない輝きが天に向かつて昇っていくのに気がついたのだ。

「名月様あっ!!」

「私にも見えましたわ! 何で美空様が戦場に……しかも戦場の真つ只中に!?!」

「今すぐ射撃を止めてください! 美空様に当たってしまいます!!」

「……あと少しで晴信に完全なるトドメを刺せるのだが、駄目か?」

信虎は物凄く物凄おしく残念そうな顔で聞く。

当然、やや血の気が多いが基本聡明な彼女には、この問いに対する答えは予想で来ている。

「駄目だよっ!」

「信虎、ステイステイ」

「だよなあ……ええいやむを得ん、流石に美空ごとブチ殺す訳にもいかん。

総員撃ち方やめいっ!! 繰り返す! 総員撃ち方やめええええーいっ!!

開戦直後から途切れなく続いていた銃声が止まる。

「おいどうするんだこれ? 硝煙で戦場が全然見えねえぞ。」

犬子、匂いで美空の居場所が分からねえか?」

「火薬の匂いがキツ過ぎて無理だよ」

「じゃあ仕方ねえ走って救助に行くか。信虎!」

「ちっ、世話の焼ける上司だな。総員着剣! ここからは接近戦だ!!」

第七騎兵団が各々ドライゼ銃の先に小刀を装着する。

そして濃霧よりも濃くてブ厚い硝煙の先へ駆けだそうとしたその時……

「九十郎! 信虎さん! 待って! 来るよっ!!」

犬子が叫ぶ。

九十郎が即座に反応、刀を抜いて名月の方へと駆けつけ……

ガキインツ!! と剣と剣がぶつかり合った。

「山県粉雪昌景見参あーんっ!!」

硝煙の目隠しを掻き分けて、赤鎧の将が越軍の本陣に現れる。

「やっぱ撃ち過ぎだ信虎あつ!!」

「ええい! 1人で来るとは良い度胸だ!」

「一人？ 生憎だけど、あたいが一人じゃねーぜ」
「何？」

瞬間、硝煙のブ厚い幕の先で剣戟の音が次々と響く。

「敵襲うーっ！！ あ、赤備えだああーっ！！」

本陣の誰かが叫び声を挙げる。

そして硝煙の臭いに血の臭いが混じり始める。

「この弾幕の中を突っ切ってきたか、やるな粉雪……」

「煙だらけで近づきやすかったよ。 悪いが九十郎……今日は勝たせてもらうぜっ！！」

犬子と柘榴と一二三と九十郎第129話『それはそれ、これはこれ』

「音が……止まった……」

甲軍の一兵卒がそう呟いた。

ズダンッ！ズダンッ！ という火薬の破裂音が止まった。

ヒュン！ヒュンッ！という鉛玉が飛び交う音が止まった。

次から次へと、そこから中から聞こえてきた断末魔の叫び声が止まった。

信じられないといった表情で恐る恐る周囲を見渡す。

見渡す限り続く死体死体死体……死体死体死体死体死体死体死体死体……

どれもついさつきまで生きて、喋っていた戦友達の死体、甲軍の将兵の死体であった。

それを目にした瞬間、心が折れた。

もう戦えない、もう嫌だ、死ぬのは嫌だ、怖い怖い怖い……

「う……う……う……うあああああーっ!!」

恐怖が脳裏を覆いつくし、体中を震え上がらせて、糞尿を垂れ流しながら叫び、逃げ出し……

「状況は？」

……その声が聞こえた瞬間、逃げようとした足がピタリと止まった。

いつも通りの声だった。

自分と同じようにあの恐ろしい銃弾の雨に晒されて、自分と同じように同胞がゴミのように吹き飛び、落命していくのを見ていたというのに、その声はいつも聞くのと同じ声であった。

前には無数のドライゼ銃、後ろは荒ぶる千曲川。

絶望的な状況の中で、武田光璃晴信はかつて何度も潜り抜けた他の戦と同じように、震え一つ起こさず、泣き言一つ言わずに淡々と報告を求めていた。

さつき落とした槍を慌てて拾い上げる。

越軍が使うドライゼ銃に比べれば遥かに原始的で、遥かに殺傷力が低く、遥かに頼りない武器であったが、ほんの少しだけ勇気が湧いた。

気がつけば、武田光璃晴信の姿に奮い立ち、1人、また1人と甲軍の将兵達が立ち上がり始めた。

大多数が死んだ。

少なくとも数が逃げた。

だがしかし、それでもなお武田の旗の下で戦おうとする者もいた。

「御屋形様、やはりこの場所が最も入念に撃たれたようです。」

本陣から離れた場所は比較的損耗が少ないみたいです。」

本陣に詰めていた武田四天王の一人、内藤心昌秀がそう報告した。

「……当然、光璃が越軍でもそうする」

「只今各部署の状況を確認しております！　しばし時間を頂ければ……」

「待つ余裕は無い、今分かるだけの事を簡潔に」

「御屋形様！　お怪我を……すぐにお手当てを！」

光璃の右腕に大きな風穴が空いていた。

幸いにして急所とは言えない場所ではあるが、鉛玉が骨を砕き、肉と神経をズタズタ

にして、激しい出血を生じさせている。

「あまり時間は無い、最低限の止血だけ」

「……は、はいっ!!　誰か、すぐに止血を！」

近くの兵士が比較的マシな陣幕の一部を破り、即席の包帯のようにしてキツクキツク

光璃の右腕を縛り上げる。

右腕を触った瞬間、手当をした者には分かっってしまう。

例え手当をしたとしても、この腕はもう二度と動かないと。

「申し上げます！　前線は壊滅的な状態です！」

「未確認ですが、典厩様が討ち死にされたとの報告が……」

次々と絶望的な報告が集まってくる。

光璃は穴の開いた右腕の手当てを受けながら、眉一つ動かさずに淡々と話を聞き続ける。

状況は絶望的だ。

それは誰の目にも明らかだ。

「今回は、負け戦」

光璃がそう言った。

誰の頭の中にも浮かんでいたが、誰もがそれを口にしようとしなかった、できなかった言葉の口にした。

「ここは退く」

「し、しかし千曲川は未だ増水があり、流れも急でして……」

「増水は一時的なもの、だけど、このまま水が引くまで立ち止まることもできない。

故に……」

光璃がすつと左手で軍配を持ち上げ、ある一点を指し示す。

それは戦場のど真ん中、春日の部隊が一方的に虐殺された場所からはやや外れているが、それでも銃弾が雨あられの如く降り注ぎ、半数を大きく上回る数の将兵が殺された

死地……

「あの方向に退く」

……この最悪極まりない負け戦の中で敵中突破をやろうと言いだしたのだ。

「御屋形様!? 正気ですか!」

心が思わず悲鳴をあげる。

本陣にいる者はドライゼ銃の集中砲火を浴び、無傷の者は少なく、比較的傷の軽い者でも心は恐怖に染め上げられている。

ついさつきまで砲火に晒されていた場所に向かつて走れと命じて、いったい何人がそれに従ってくれるだろうか。

「あの方向が最も生還の可能性が高い。 何故ならば……」

「な、何故ならば……?」

「……さつき、あの場所で長尾景虎が三昧耶曼荼羅を使った」

「何でえ!」

心が再び悲鳴をあげる。

銃弾がシャワーの如く飛び交う先に、行方知れずだった敵の総大将が単独で出てくるなんて意味不明以外のなにものでもない。

万一何かしらの作戦で潜んでいるのだとして、どうしてわざわざ自分の居場所を周囲

に知らせるような事をしたのだろうか。

当然、光璃も何がどうなつて美空があんな場所で孤立していたかなんて知らないし、分からなかつたが、それはそれとして美空があんな場所で孤立しているという状況を最大限に利用する方法を考えていた。

これが罫である可能性も考慮したが、最早それを確かめている時間は無いし、他の選択肢も思いつかない。

一か八かに賭けるしかないのだ、どっちみち。

「越軍の周りにかかった多量の煙……おそらくあれは、火薬の煙。

一度に多量の鉄砲を撃ちすぎたせいで、視界が悪くなっている」

「そうか……今は戦場の様子が良く見えないから、

撃てば景虎を巻き込むかもしれないから」

「しかし当然、撃てないなら撃てないで……手は打つ」

次の瞬間、幕のようにぶ厚い硝煙で良く見えなかつたが、ずっと陣地に籠り、隊列を乱さずに射撃だけが続けて来た越軍に動きがあるのが分かつた。

「直接景虎さんを確保するつもりですね」

「違う、動かしたのは母様。

私が中央突破して逃げようとしているのに気づいて、頭を押さえに来た」

「いくら先代様でもそこまでは……あ、どうしよう、やりそう、凄くやりそう」

そうこうしている内に、さっき撃ち抜かれた光璃の右腕の止血がとりあえず終わる。

酷い激痛に、失血からくる眩暈に吐き気……それでも光璃は、ここで死ぬわけにはい
かない。

「其の疾きこと風の如く……」

光璃が精神を集中させる。

「其の徐かなること林の如く」

さらにさらに精神を集中させる。

「侵掠すること火の如く」

光璃の周囲の将兵達が淡く、暖かな光を纏い始める。

「知り難きこと陰の如く、動かざること山の如く」

それは武田の旗の基に集いし武者達にさらなる力を与える御家流。

「動くこと……雷霆の如しっ!!」

武田家御家流・風林火山が発現する!

痛みが引き、恐れが消え、勇氣と力が湧いてくる。

武田は負けない、武田は消えない、武田はまだまだこれからだど武者達が高揚する。

「そして逃げ出すこと脱兎の如し」

……次の瞬間、武田の武者たちがズコーっとコケた。

「御屋形様、そんな一節ありましたっけ？」

「肝心な時にヘタれる事兎々の如し」

「兎々が聞いたら泣きますよ！」

「微妙に空気が読めないこと春日が如し」

「私もちよつと思えますけど今言いますか!？」

「ツツコミが微妙なこと心の如し」

「典厩様みたいには無理ですよ！」

「……………」

「こなちゃんには何も無いんですか!？」

武田の陣幕でどつと笑い声が響き渡る。

煙幕が晴ればすぐにでもドライゼの一斉射が再開されるだろう。

越軍に退路を断たれたり、先に長尾景虎を確保されても全滅は必至だ。

1秒が千金にも値する状況下で、あえて光璃は皆を笑わせた。

春日と兎々は、集中砲火によりズタズタにされた部隊を纏め、押し寄せる越軍に対し
どうか組織的抵抗を行おうとしていた。

そして粉雪は……

……

……

……

「撤退の時間はあつ！ キッチリ稼がせてもらうぜえっ!!」

「ちいっ!!」

……越軍本陣のど真ん中で、粉雪と赤備え達が無理無茶無謀な戦いに挑んでいた。

赤備えは少数ながらも精鋭揃い。

一度部隊をバラバラに分散させ、窪地や物陰を利用しながら回り込み、越軍の陣地の目の前で再集結……そうして豪雨の如き鉛玉の暴威による損耗を最小限にしてみせたのだ。

甲斐武田の赤備えでなければ実現不可能な方法だ。

「九十郎！ 大丈夫!?!」

犬子が血相を変えて叫ぶ。

他の赤備えが次から次へと本陣へと雪崩込み、状況は混沌としてきている。

「敵は少数です！ 慌てず騒がず迎撃を！」

「名月は下がって、親衛隊はこういう時のために存在する」

秋子の指示が飛び、松葉が親衛隊を率い、赤備え達を迎撃に走る。

「全員固まるな！ 一か所に留まるな！ 走り続ける！」

味方の撤退までこの陣地をかき混ぜ続ける！」

今ここであたいらが四半刻も踏ん張れば、甲斐武田家の命脈が1年長引くぜ！」

越軍親衛隊を次々と斬り伏せながら、自らも決して少くない手傷を追いながら、粉雪が赤備えに下知を出す。

九十郎は思う……赤備え達は全員がこの場で死ぬ気だと。

全員が1分1秒でも長く時間を稼ぎ、1人でも多くの敵と刺し違えるつもりだと。

「犬子！ 信虎！ お前らは美空の所に走れ！ 粉雪は俺がどうにかする！」

そう叫び、九十郎がポン刀片手に粉雪に飛び掛かる。

「第七騎兵団！ 赤備え共には構うな！ 我に続けえ！」

信虎が即座に動く。

一方、犬子は混迷を極める越軍本陣が気にかかり、中々前に進めない。

「や……やっぱり犬子も九十郎と一緒に戦うよ！」

「柘榴も美空と一緒にだ。美空の匂いも柘榴の匂いも覚えてるだろう。」

あいつらを見つけ出すのに、お前の嗅覚が役に立つ」

「そ、そうかもだけど……」

「良いから早く行け！ 美空と柘榴を頼む！」

「わ、分かった……気を付けてね！」

犬子も信虎の後を追ひ、先程美空が三昧耶曼荼羅を発現させた場所へと向かう。犬子と信虎が越軍本陣から離れたのと、心と光璃がボロボロの将兵達をまとめ、中央突破からの撤退を開始したのは、ほぼ同時であつた。

向かう先は全く同じ……

……

……

……

「本気でやべーつすよ御大将。 敵も味方もこつちに向かつて一直線つす」

「見りや分かるし、見る前から分かつてたわ。 たぶんこーなるだろうつてね」

美空と柘榴が鯉口を切り、剣を抜く。

「正直、とつととトンズラこきたいのだけれど。 もう勝負ついでるし」

「そうしてーのは山々つすけど、それはちよつと厳しそうつすねえ」

「片や酒断ち、片やエロ断ち、

武田との戦そつちのけで山籠もりしていた罰が当たつたかしら」

「今まで散々護法五神を飛び道具扱いしている人が罰がどうか言える立場つすか？」

「柘榴、これが終わつたら覚えときなさいよ」

「無事にこの場を切り抜けられたなら、好きだけ付き合うつすよ」
美空と柘榴は早くも取り囲まれていた。

それも明らかに友好的とは思えない、殺気立った連中にだ。

「あれが……長尾景虎なのか……」

「さつき出した御家流、俺は見覚えがあるぞ」

「し、しかし越軍の総大将が、何故こんな所に……」

劍丞と行動を共にしていた薫の……武田信廉の親衛隊が美空と柘榴を取り囲んでいるのだ。

武田晴信の親族であり、影武者でもある薫を守るといふ任務を与えられている彼らの練度はかなりのものだ。

彼らを突破して逃げ出すのは容易ではないし、彼らが美空に一斉に襲い掛かれば……という状況だ。

「待ってくれ！ 双方剣を納めてくれ！」

一触即発の状況で劍丞が大きく声を張り上げる。

劍丞をガードするように綾那と歌夜もまた割って入る。

元より、甲軍と越軍の戦を止め、正面衝突を回避させるためにこの場に来たのだ。

その意味では越軍総大将であり、劍丞の嫁の一人である長尾美空景虎と対面できたこ

の状況は決して悪くない。

……既に甲軍は壊滅寸前、越軍はほぼ無傷の状況で停戦させてどうなるのだという疑問から、劍丞は目を逸らした。

「劍丞様、どうするつもりですか？」

歌夜が若干冷や汗を浮かべながら劍丞に耳打ちをする。

「なんとか説得してみる」

「自信、あります？」

「全然、でもやらなくちゃ」

劍丞がちよつと肩をすくめながら苦笑した。

イケメンは苦笑する所もイケメンだ。

「劍丞様、綾那が美空をひつつかんで走るってのはどうなのですか？」

「……場合によっては頼むかも、心の準備だけはお願ひするよ」

綾那の常人離れた……いや、人間離れた身体能力頼みの策とも呼べない力技を選択肢に入れつつ、劍丞は大きく深呼吸をする。

「美空、ここで兵を退いてくれないか」

「断る」

薫の親衛隊が俄かに殺気立ち、槍や剣を構える腕に力が入る。

「これ以上の人殺しを重ねてどうするつもりなんだ!」

「分かっていないわね、武田晴信が生きている限り、甲斐武田家の命脈は尽きない。

どれほどの大敗を喫しようとも、甲斐は再び蘇る……

少なくとも、私を取り囲んで剣を向けてきている連中は本気でそう信じているように」

「ここで越軍よりも早く御大将の身柄を抑えれば、晴信を安全に退避させられるかも……
そういう目をしてるのが分からないっすか、劍丞」

柘榴は思う……逆の立場になったとすれば、自分も同じ事を考え、同じ目をするだろうと。

「待った! 待ってくれ! そうやってどちらかが滅ぶまで、

完全に息の根を止めるまで殺し合いを続ける気なのか!」

じりじりと距離が狭まっていくのを食い止めようと、劍丞がさらに大きく声を張る。

「貴方には分からないかも知れど、殺し合いをしたのよ、殺し合いを続けて来たのよ。

私達はこの程度の流血では止まれない許せない。

向こうも同じ、この程度の流血では止まれない、諦められない」

「そんなの悲し過ぎるだろうっ!!」

「信虎とも約束したっすしねえ、晴信は殺すって。」

晴信を殺す事を約束したから、信虎は御大将に従つてゐるつす」

「約束を抜きにしても止まれないわ。家族を喪い、友を喪い、故郷を喪い。

お互い血が流れ過ぎて、恨みや憎しみを育て過ぎた」

「そんな事は無い！ まだ間に合う！ 戦いは止められる！

君が決断さえしてくればきつと！」

「無理よそんなの！ だつて……」

「今軍を動かしてるの名月だし、私は句伝無量みたいな便利な能力も無いわ」

劍丞があれえ……とでも言いたげな表情になる。

今の美空には物理的に戦を止められない。

劍丞のプランが見事なまでに破綻した瞬間である。

「えつと……小波……」

『無理です、越軍は誰も御守りを持っていません』

そして最後の望みも絶たれた。

「お兄ちゃんもう良いよね！ とりあえずかかれーっ!!」

「うおおおおおーっ!!」

「景虎覚悟おおっ!!」

「御屋形様のためにいつ!!」

薫の掛け声と共に親衛隊が一気に美空へと襲い掛かる。

「来たっすよ御大将!」

「見りや分かるわ! 腹括りなさい柘榴っ!」

「腹が減って力が出ねーっす!」

「私もよコンチキシヨウ!! こうなったら最後の悪足掻きを見せてあげるわっ!」

「し、仕方ない……綾那! 歌夜! とりあえず応戦だ!」

「どっちの味方すれば良いんですか!」

「とりあえず手当たり次第になぎ倒すのです!」

「綾那ちよつと待って! それ状況悪化させる予感しかないわ!」

「とりあえず昇竜槍天撃いつ!!」

「本日二度目の三昧耶曼荼羅あっ!!」

「ぬわーっ!!」

俄かに場が混沌としていく。

斬ったり斬られたり蹴ったり殴ったり噛みついたりの大乱戦、大混戦が繰り広げられ

……

「御屋形様！ 景虎殿がいましたあつ!!」

「……このまま突入」

光璃と心達がそんな大乱闘の真っ只中に到着し……

「そこか晴信うううううーっ!!」

「美空様あつ!! 柘榴おっ!! 大丈夫ーっ?!」

やや遅れて犬子と信虎、第七騎兵団が乱入してきた。

……

……

……

「ぜえ……ぜえ……はあ……」

粉雪が大きく肩で息をしている。

粉雪と甲斐の精鋭赤備え達が越軍の本陣に突入してから、どのくらいの時間が経った
だろうか。

粉雪は既に限界を超え、気力だけで身体を支えている。

何発かの銃弾が直撃し、刀傷もあり、失血死寸前といえる程に深く深く傷ついていた。

右も左も敵だらけの中で1秒たりとも休まずに暴れ続けたため、体力も限界だ。それでもなお……

「まだ……まだだぜえ……」

それでもなお、彼女は戦いを放棄しようとしなかった。

最後の力を振り絞り、槍を杖代わりに立ち上がる。

「やつと追いついた。随分頑張るんだな、粉雪」

そんな疲労困憊、半死半生の粉雪の元に、斎藤九十郎が追いついた。

「赤備え共は全員死ぬか逃げてったよ。後はお前1人だ」

「ああ、そうか……流石はあたいが鍛えた連中だ、引き際はわきまえてるようで何よりだぜ」

「お前が大暴れしてなければ全員プチ殺せてたよ。」

たった1人に引つ掻き回されたって、松葉が地味にシヨックを受けていた」

「引つ掻き回された……か……過去形で語るには、まだ早いんじゃないやあねえか？」

あたいはまだ、この通り生きてるんだぜ」

「……何人斬った？」

「数えてねえよ」

「やっぱお前は凄いよ、山県……いや、粉雪。」

たった一人で良くここまで頑張った。 良くここまで踏ん張った」

「惚れたかい？」

「惚れ直したね。 山県昌景なんて関係無い、もうそんな事はどうだって良い。

粉雪っていう女を俺のモノにしたい、俺の女にしたいって心の底から思ったね」

九十郎が赤備え達を何人も斬り伏せ、絶命させた血染めの刀を投げ捨て、竹刀を構える。

「俺の女になれよ、粉雪」

九十郎がそう告げる。

それを聞き、粉雪は笑う。

こんな修羅場の中でもなお、心底嬉しいという感情が抑えられなかった。

「何言ってるんだぜ、九十郎。 あたいはとつくの昔に、九十郎の女だと思ってたぜ。

粉雪って女は、とつくの昔に九十郎のモノで、九十郎を愛しているぜ」

粉雪が自らに活を入れ、何人もの越軍親衛隊を切り伏せ、絶命させた血染めの刀を投げ捨てると、その辺に落ちていた棒つきれを拾い構えた。

「愛してるぜ、粉雪」

「愛してるぜ、九十郎」

粉雪と九十郎が笑い合った。

俺が負けた時は甲斐にでもどこにでも行ってやるさ」

「言つたな、負けてから前言撤回したら許さないぜ」

「しねえよ。それに……いくらボロボロになろうとも、山県昌景を侮る程馬鹿じゃねえ。」

本気で、全力で、格上に挑む気でやらせてもらう」

粉雪が精神を集中させる。

九十郎が精神を集中させる。

眼前の敵を……愛しい異性であり、別の主を仰いだ敵でもある相手を全力で叩き潰すべく、全神経を集中させる。

そして……

「いざ、尋常に……」

「勝負っ!!」

粉雪と九十郎がぶつかった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第130話 『元氣万倍』

「ぜえ……ぜえ……」

粉雪と九十郎の対決は、一瞬にして終わった。

粉雪の気力、体力はとつくの昔に限界を超えていたのだ。

九十郎の峰打ちでもって粉雪は木の葉の如く吹っ飛び、力無く倒れ伏していた。

「そーいや、初めて会った時もボロボロだったよな」

犬子と一緒に尾張から出奔し、新たな仕官先を求めて旅をしていた頃の話だ（第18話）。

思い返せば、随分と時間が経ったような気がした。

「愛した男が実は敵……か……」

あの時はあたいと九十郎がそういう関係になるなんて思ってもみなかったぜ」

「お互い体調が万全だったなら、結果は逆だったかもな」

「何言ってるんだ、遅滞戦法の完遂を優先させて、

勝負を避けて逃げ回ったのはあたいの方だぜ」

「それ含めて、勝負かね……」

九十郎は純然たる剣士として粉雪に相對した。

一方粉雪は最初から最後まで武將、あるいは前線指揮官として戦っていた。

粉雪にとつて戦とは、眼前の勝ち負けを度外視してでも達成しなければならぬ目標がありうるものであり、また、自分が万全な状態で戦えるよう立ち回る事も含めてのものなのだ。

「親衛隊は……しばらく動けないか……」

粉雪と赤備え達は凄まじい勢いで越軍本陣をかき回していった。

親衛隊を含めた本陣の兵達はこれでもかかって位に混乱し、少なくない数が傷つき、逃げる武田晴信を追いかけたり、敵中に取り残された美空を助けに行くにはしばしの時間が必要だ。

その意味では、粉雪と赤備え達は見事に作戦目的を達成したと言えるだろう。

「さーて、あんまりモタモタしていると美空や柘榴がやばいかもな……」

祝勝代わりと再会祝いに一発ヤツちまおうかと思つたが、やめにしよう」

「おいこらっ！ 美空がやばくなかつたらこの場でやる気だつたのかぜ！」

「ああ」

九十郎は一切の躊躇無く頷くと、倒れた粉雪をお米様抱つこで持ち上げる。

「馬鹿野郎っ!!」

いくらなんでも衆人環視の……しかも敵のど真ん中でセックスなんてできるかつ!!」

「いや、流石に物陰に引つ張り込むくらいの配慮はするつもりだったぞ」

「んな配慮いらねえぜ!!」

「ぶつちやけ今、勃起してる」

「馬鹿つ!! そういうのは……そういうのは、閨の中で、2人きりの時に言えよ……」

粉雪の顔がかあつと赤くなつていく。

惚れた男と密着しているせいか、武将としての色が消え、武人としての色も薄れ、1人の女の色が濃くなつていく。

もしも九十郎から、今すぐ、この場でお前を抱きたいとでも囁かれたら、自分は どうするだろうかと考える。

もしかしたら、なんやかんや文句を言いつつも、受け入れてしまうのではと考える。

今、この場で九十郎に押し倒されたい、抱かれないという背徳的な願望が胸の奥に僅かな、しかし確かな震えとともに湧き上がる。

だがしかし……

「松葉、俺が戻るまで粉雪の身柄を頼む。

俺の戦利品だからな、逃がしたり無駄に傷つけたりするんじゃないぞ」

「……承知した。 御大将と柘榴は任せる」

九十郎は粉雪を米俵のように担ぎ上げたまま、松葉に身柄を預けようとする。

粉雪自身、このまま九十郎の捕虜というか、戦利品になるのも決してやぶさかではない。

だがしかし……

「合図か来たか……悪い、九十郎」

粉雪が九十郎の耳元で囁いた。

「何だ、急に？」

「実は連れてきてるんだよ」

「……誰を？」

九十郎は猛烈に嫌な予感がした。

「……小夜叉」

瞬間、九十郎は血の気が引いた。

そして叫ぶ、腹の底から叫ぶ。

「松葉避けろおおおおーっ!!」

ざくりっ! と、松葉の胸から真紅に染まった刃先が生える。

人間を、まるで骨が無いかのように切り裂き、貫く名槍、人間無骨が彼女を貫いた。

「が……ぐう……!!」

完全に不意を衝かれた。

咄嗟に急所を……心臓を刺し貫かれるのを避けるのが精一杯であった。

「死ねっ!!」

フルプレートで武装した小夜叉が人間無骨の柄を蹴り上げる。

その衝撃で刃先が一気に跳ね上げられ、松葉の左肩を大きく切り裂いた。

血管が何本も何本も切断され、噴水の如く鮮血が流れ出す。

「小夜叉てめえっ!!」

九十郎が激高し、粉雪を放り投げて走り出す。

「……ちっ、浅かったか」

小夜叉が小さく舌打ちをする。

全員の視線が粉雪に集まっていたが故に、不意打ちには成功した。

しかし、それでもなお松葉は紙一重で致命傷を避けていた。

一直線にこちらに向かってくる九十郎の前に、松葉にトドメを刺す時間はあるかと自

問自答し……

「まったく、このオレが……二戦連続で一人も殺せずとは情けねえっ!!」

……決断する。

「こっちに向かって!!」

「通してもらおうぜっ!!」

松葉を救出しようと走る九十郎。

九十郎の予想に反し、逆に九十郎と粉雪の方向へ身を低くしながらダツシユする小夜叉。

森一家特有の勝負に対する感性が、再び九十郎の意表を衝き、小夜叉に行動の自由を与える。

そして……

「悪いな、九十郎！ 今回の戦は、引き分けて事にしてくれなんだぜ！」

小夜叉は倒れ伏す粉雪を抱えると、凄く速さで退散していった。

「……やられたな。 山県昌景を甘く見た俺の落ち度か。」

いや、親の身柄がこつちにあるからって、

あの小夜叉が不参加って決めてかかった俺の不明か。

ええいクソッ！ いくらボロボロになろうとも悔らないって言った先からコレかよ

！

おい松葉大丈夫か？ すぐ止血するからな」

九十郎は一瞬、悔しそうに歯噛みするも、すぐに松葉の手当を開始する。

「しほらへ……動けそうも無い……」

「しばらくって言うか絶対安静だぞ！ 死にたくなかったら大人しくリタイヤしてろ！」

「……不覚」

「こりやかなりの深手だな……下手すりや……」

嫌な予感が九十郎によぎる。

もしかしたら、もう二度と槍を握り、馬に乗れないかもしれない。

もしかしたら、もう二度と戦場に立てなくなるかもしれない。

あるいはこのまま……命を落とすかもしれない……

九十郎の額に脂汗が浮かんだ。

「……追って」

「口を開くな、重傷なんだぞ」

「追って！ 今すぐ！」

松葉が声を荒げる。

瞬間、傷口から一気に血が噴き出した。

「馬鹿野郎！ 大声出すな！ 死にてえのか！」

「……美空様を、守って」

鋭い眼光は九十郎を射抜く。

今にも死にそうな程の重傷だというのに、九十郎は思わず身を竦めてしまった。

「そうだったな、お前ら親衛隊にとつちや、

美空の生還は自分の首の有り無しよりも重要な事だったな」

松葉が頷く。

九十郎はそれを見てふっと笑い、すつくと立ちあがる。

「死ぬんじゃねえぞ、松葉」

犬子と信虎が向かった先へ……未だ混沌として、殺伐とした殺し合いが続く戦場へと

駆けだした。

……

……

……

一方その頃、松葉殺人事件（未遂）の下手人は、疲労困憊の粉雪を背負い走り続けていた。

「……それにしてもお前、度胸あるな」

「そうだろう？ 女は度胸、戦場で生き、戦場で死ぬ森一家ならなおさらさ」

息を吸うよりも気楽に人殺しができる少女、小夜叉がニカツと笑う。

が、粉雪が言いたい事はそういう事ではない。

「いや、奇襲は見事だったぜ。あたいが注意を引いてたつっても、

松葉相手にああも見事に不意討ちを決めるのは普通じゃねえぜ。でもよ……」

「あん、他になんかあんのかよ?」

「お前の母さん、今越後の世話になってんだろ。」

あたいの退却を手伝うだけならともかく、松葉をぶった斬つたら立場危うくしねえか?」

「……?」

小夜叉は何も考えていなかった。

至極単純に、あの場にいた中で松葉が一番の手柄首だからと襲い掛かっただけである。

「まあ、その辺は追々考えりゃ良いか」

小夜叉はとりあえず考えるのをやめた。

とりあえずぶち殺した相手が、後で殺しちや拙い奴だったと判明するのは、小夜叉にとっていつもの事である。

「あたいら赤備えにできる事はここまでだ。後は頼んだぜ、春日、兎々、心……」

自分だけ一足早く戦場から離脱する事に一抹の不安と、罪悪感を覚えつつ、粉雪は意識を失った。

どっちにしろ、既に彼女は限界だった。

……

……

……

「怯むな！ 押し返せ！ 赤備えだけに良い恰好をさせる気か！」

春日が声を張り上げる。

ここまでの戦いで、彼女もまた少なからず負傷し、少なからず疲弊していた。

だがしかし、この程度では武田四天王筆頭は折れない、曲がらない、諦めない。

何度も何度も声を張り上げ、次から次へと詰めかけて来る越軍の雑兵共を切り捨て、

今にも崩れそうな味方を鼓舞し、戦線を支え続けている。

粉雪と赤備えが稼いだ、千金にも勝る時間をギリギリまで使い、敗走をしつつあった

味方から比較的戦意を維持している連中をかき集め……しかし……

「（これは……駄目かもしれない……）」

春日は歴戦の勇将である。

勝ち戦も、負け戦も、数えきれない程に経験している将である。

それ故に分かる、分かってしまう……すでに勝負は決していると。

ここからどれだけ奮戦しようとも、甲軍の敗北と、自分達の討ち死には覆らないと。

「兎々、どうやらここが拙らの死に場所らしい」

春日がそう言って笑った。

見る者全てが戦場である事を忘れてしまいそうになる程、春日が武田四天王筆頭である事を忘れてしまいそうな程に優しく微笑んだ。

「兎々は……兎々の命の使い方はずつと前から決めてたのら。」

死ぬ時は絶対、御屋形様のためにつて決めてたのら」

兎々は春日と同じ位……いや、もつとずつと深く深く傷ついていた。

常人では死んでいてもおかしくない程に失血し、身体のうちこちに銃創があった。

先程から典厩武田信繁の姿や、山本春幸の姿が見当たらない。

どうしても最悪の予想が頭にちらつく。

だがしかし、だがそれでも。

「御屋形様が退却するまでは……」

「ここは絶対！ 通さないのらあつ!!」

再び気合を入れ直し、春日と兎々が絶望的な戦いを再開する。

そこに……

「そろそろ諦めて降伏しろ、馬場。負け戦だ、それが分からぬお前ではなからう」

美空を確保し、光璃を殺すべく突撃を繰り返す越軍の指揮官が……武田信虎が苛立ち

に満ちた表情で2人の前に現れる。

「寄せ手の将は先代様か、道理で見覚えがある」

「貴様も相変わらざるようだなあ。 晴信はじきに死ぬ、我が殺す。」

故に降伏を薦めよう。 貴様の實力は、ここで喪うには惜しい」

「春日が御屋形様を裏切るなんて、ありえないのらあ!!」

「黙れ、貴様には聞いていないぞ、晴信の自慰道具風情が口を挟むな」

「なに……」

春日の表情が険しくなる。

愛玩動物だの、夜の玩具だの、尻を差し出して出世しただの、そうやって兎々を擲揄

する者は過去にも何人かいた。

無論、兎々は実力で武田四天王の座を勝ちとった事は知っている。

だからこそ、そのような下種な勘繰りをする者には怒りを覚える。

「こんな所で朽ち果てたくはなからう? 晴信と手を切り、我に付け。

だがそうだなあ、お前がどうしてもと言うのであれば、

そこの高坂とかいう晴信の妓女の命も保証しよう」

「願い下げだっ!!」

瞬間、春日の頭が沸騰した。

武田信虎が越軍に付いた事は知っていた。

戦場で敵として会う事も覚悟していた。

相対した時、何を言うべきか、伝えるべきかは考えていた。

そんな考えは一瞬で吹っ飛んだ。

そして今までの戦いで疲弊しきつた身体に鞭打ち、一直線に信虎の首を刈り取らんと

飛翔する。

が……

「させないよっ!!」

必殺の一撃は前田犬子利家によって阻まれる。

「くう、仕損じたか……」

「あいたたた、腕が痺れたあ……これは本気でやらないと拙いかも……」

春日は渾身の一撃が防がれた事に、犬子は満身創痍の状態でなお一瞬槍を落としそう

に成す程の一撃を叩き込まれた事に驚愕する。

互いに互いを油断のならぬ相手と認識し合う。

「兎々! まだ行けるか!? 2人でやるぞ!」

「当然らあっ!!」

「前田、できれば生け捕りにしたい。御家流を使え」

「信虎さん、美空様からは、いぎって時以外使わないようにって厳命されてるんですけど」

「今がいぎという時だろう」

「……とりあえず、御家流は使わず、正攻法で行きます。」

信虎さんは危ないから下がってて」

そう言うのと犬子は先程春日の一撃を防いだ直槍を投げ捨て、腰に佩く太刀に手を伸ばす。

「九十郎の神道無念流が強いつて所、見せてやる」

犬子の目が、獲物を狙う肉食獣のように鋭くなった。

……

……

……

一方その頃、美空と柘榴は死にかけてた。

「あつちだ！ あつちに逃げたぞっ！」

「追え！ 追ええっ！ 絶対に逃がすな！ 奴さえ討ち取れば勝機はある！」

ドライゼ銃の集中砲火によってズタズタにされ、土気も指揮系統もボロボロの甲軍であつたが、美空と柘榴が戦場のど真ん中で孤立している事に気づいてる所だけは元気一

杯だ。

その状況はロバの鼻先に吊り下げられたニンジンとそう変わらない。

「御大将、まだ生きてるっすか？」

「三途の川を渡りかけたわ」

「御大将なら泳いで帰ってこれるっすよ」

「あんたもね」

美空と柘榴が草むらの中で大の字に寝転んでいた。

何度目になるか分からない襲撃、追撃を振り切ったものの、2人の疲労はかなりのものだ。

「完全に犬子とはぐれちまったっすねえ」

「そーね」

「次見つかったら、本気でやべーかもっすねえ」

「そーね」

「御大将、御家流はあと何発っすか？」

「すっからかん、そっちは？」

「逆さに振っても鼻血すら出ねーっす」

「後継者、決めといて良かったわね、本当に」

「名月は経験不足つすよ、越後長尾家を背負うのは10年早いつす」

「決めないままで死んだらもつと面倒になるでしょ」

「それは……まあ、そつすね」

2人がしばし無言になる。

美空と柘榴を探し回る武田の雑兵達の声や足音がそこから聞こえてくる。

全身をけだるい疲労感が包み込み、このまま眠り……いや、気絶しそうになる。

だがしかし、今この状況で意識を手放したら死ぬのは目に見えている。

「……死ぬ前に酒が飲みたいわ。 持つてない？」

「一滴も持つてねーつす」

「そう……」

美空が落胆した表情になる。

「死ぬ前に九十郎とエツチしたいつすねえ。 御大将、ち〇こ生やしたりできねーつす

か？」

「できる訳ないでしょっ!! アンタ私を何だと思つてるのっ!？」

「三味耶曼茶羅で大体の事解決するし、もしかしたらくつて」

「……意外とやってみたらできるかもしれないわね、生きて帰れたら練習してみましよう」

「できて不思議じゃねー所が御大将の恐ろしいところすよね」

そんな戦場らしからぬアホらしい事を話していると、美空と柘榴を探し回る甲軍の雑兵達の声がさらに近づいてくる。

「この場所もそろそろ見つかりそうね」

「みてーっすね」

美空も柘榴も、最早剣や槍を振るう体力も、走る体力も残っていない。

次に見つかれば、討ち死には間違い無いだろう。

「男ならそこら中で私を探してるみたいよ。」

そんなにセックスしたいなら、生尻突き出して犯してくださいとでも言ってみたら
？」

「その間、御大将はどうしてるっすか？」

「私は逃げるわ」

美空がくすりと笑ってそう告げる。

当然、美空は冗談のつもりでそう言った。

だが……柘榴はそうはとらえなかった。

「……………」

「柘榴っ!? 何で黙り込むのよ!？」

「その作戦が一番、御大将が生還できる確率が高いか……」

「真顔で検討するんじゃないわよ！ 本気で実行する気!？」

山籠もりの前に私に約束した事忘れたの!？」

「もう二度と、九十郎以外の男に股は開かねーって誓ったつす」

「だったら変な事を考えるのはやめなさい!？」

「……だけど、どうせここで死ぬ命つす。」

甲軍の男に股を開いて、御大将が少しでも長く生きながらえるなら、

御大将が生還できる可能性が少しでも広がるなら……」

「本気で怒るわよ!？」

「それでもつ!？」

「九十郎が泣くわつ!!」

「ぐ……それは……」

柘榴の決意が一瞬揺らぎ、言葉を詰まらせた。

しかし、大勢の足音がどんどん近づいてくる。

このままでは2人共見つかってしまう。

そうなればきつと……柘榴は瞑目し、心の中で美空と九十郎への詫びの言葉を呟いた。

直後、柘榴は自らの着物を力一杯引き裂いて自らの豊かな乳房を露出させると、名槍・十六夜蕪を茂みの奥に隠し、その辺に落ちていた手ごろな大きさの木の枝を拾う。

戦って血路を開くつもりなら、乳房を晒す必要は無い、わざわざ木の枝を武器にする必要も無い。

「柘榴やめなさい、2人で生き延びる方法はきつとあるわ」

美空には柘榴の考えがすぐに分かった。

今の柘榴は戦う気は無い、生き残る気も無い。

今の柘榴はわざと負け、雑兵達の劣情を誘い、犯され、注意を引いて時間を稼ぐ気なのだ。

「御大将、ごめんつす。柘榴には他の方法が思いつかねーつす。

九十郎にも後で謝っておいてほしいつす」

「柘榴！」

美空が何かを言おうとした瞬間、柘榴は人差し指をそつと美空の口に添えた。

今喋れば、美空を探している連中に見つかる。

そうなれば柘榴がやろうとしている事は……自らの命と尊厳を犠牲にして、誓いを破つても美空だけは生き延びさせようという試みが無駄になってしまう。

「あ……………ま……………」

待ってと叫びそうになった。

行かないでと叫びそうになった。

だが……叫べなかった。

美空は頭があんっ!! と殴られたかのような感覚に陥る。

美空は今、この瞬間、柘榴を見捨てたのだ、見捨ててしまったのだ。

柘榴に命と尊厳を投げ出させ、自らの生存を優先させたのだ。

柘榴に向けて伸ばした手が……空を切った。

「はああああっ!!」

柘榴は既に茂みから飛び出していた。

そして一番近くにまで来ている足音の主に飛び掛かり、木の枝を振り下ろし……避けられる。

「……………うう」

今の自分には不意打ちで雑兵1人倒す力も残っていない。

そんな事実には愕然としつつも、柘榴は予定通りの行動をとる。

適度に戦い、できるだけ多くの注意を引き、できるだけ遠くに逃げ、敗れて犯されるだけだ。

なのだが……

「柘榴、お前なんつう恰好で戦ってるんだ」

……殴り掛かった相手は甲軍の雑兵ではなかった。

柘榴の夫、斎藤九十郎が真顔でドン引きしていた。

「えっと……さつき、破れて……」

柘榴は視線をそらした。

「それに木の枝つて、まさかずっとそれで戦ってたのかよ」

「あ、いや……その……さつきどこかに落として……」

柘榴は冷や汗をかいた。

「美空はどこだ？ 一緒にやないのか？」

「その……さつき逸れて……どこにいるのやら……」

柘榴はもう限界間近だ。

「あ、私ならここにいろわ。 十六夜蕪もここに」

「おーっと！ 意外と近くにいたっす〜！ 槍もこんなに落ちてたなんて〜っ

!!」

柘榴は凄じ棒読みだった。

「大方、気力体力が限界だから、

自分一人が囷になって美空を逃がそうって魂胆だったんだろ」

「……ぎく」

「九十郎、良くここが分かったわね」

「お前らが咄嗟に逃げ込みそうな場所なら勘で分かるよ」

「柘榴、もう諦めましょう。今謝ればきつと許してもらえるわよ」

「御大将、今から腹斬るから、介錯をお願いするつす」

「絶対嫌」

「柘榴、帰ったらお仕置きだ」

「い……痛いやつつすか……?」

「いんや、エロいやつだ。」

二度と他の男の事考えられなくなるまでアヘアへにしてやるから覚悟しとけ」

そう宣言すると、九十郎は自分の羽織を柘榴に着せ……その唇を強引に奪った。

「んんっ!? ん……んう……」

柘榴の目がとろんと緩む。

山籠もりをしている間、ずっとこの感触が欲しかった。

舌と舌が絡み合う感触が柘榴に活力を注ぎ込んでいた。

最早立ち上がるのすら一苦勞な程に疲弊していた筈なのに、九十郎を唇を重ね、舌と舌を絡ませるだけで力が湧いてきた。

そして……美空と柘榴のハラがぐううぐと鳴った。

「お前ら、腹減ってるのか？」

「一昨日から何も食べて無いわね」

「柘榴は3日前から水しか口にしてねーっす」

「……途中でカネが無くなったか？」

美空と柘榴が同時に視線を逸らす。

派手に道に迷い、当初の想定より2倍近く日数がかかったため、路銀の残りの計算が狂ったのだ。

「乾パンとマーマレードなら持って来てるから食べ。果糖が疲労回復に効果がある筈だ」

「九十郎大好き!!」

「愛してるっす!!」

「頂きますくらい言えよお前らあっ！」

美空と柘榴が先を争いながら九十郎が差し出した食料を口の中に放り込む。

萎えかけていた気力が戻り、ぶるぶると震えていた腕や脚に力が戻る。

「何か涙が出てきたわ……美味し過ぎて……」

「う、美味い……美味いっす……久々の九十郎の手作りの食事……」

当然、九十郎はプロの料理人ではない。

人並以上の腕はあるが、感動で涙を流させる程のものではない。

空腹と言う名の最高のスパイスに、もう二度と会えないと覚悟した愛する人と再会した喜びが、美空と柘榴を感動させた。

そんな3人の再会の時間を妨害するかのようには、美空と柘榴を探し回る甲軍の雑兵達の声や足音が聞こえてくる。

「柘榴、もうひと暴れいけるわよね？」

「元氣百倍……いや、元氣万倍っす」

「御家流はいける？」

「気合もやる気も十分っす、二発は無理でも、一発くらいならブチかませそうっすよ。

「御大将は？」

「私も一発分くらいは回復したわ」

九十郎が持ってきた乾パンとマーマレードを残らず平らげ、美空と柘榴が立ち上がる。

既に彼女達の心に絶望は無い。

あるのは絶対に生き延びてやると言う強い強い決意だ。

「九十郎、お酒ある？」

「あるぞ、消毒用のウイスキーで良けりやな」

「一杯頂戴」

「これからチャンバラやろうってんだ、呑み過ぎるなよ」

「大丈夫よ。 柘榴、良いわよね？」

「一杯だけつすよ」

「ありがと」

美空が九十郎からウイスキー入りの徳利を受け取り、ぐいぐいと胃に流し込む。

「これで私も元氣万倍！ 完全復活よ！」

「にしても、何で俺より先に出た犬子と信虎がいねえんだ？」

「一体いつ追い抜いたんだか」

「さつき一度合流できそうだったつすけど、

乱戦になってそれどころじゃなくなつたつすよ」

「何やってんだよあいつら」

「武田四天王が奮戦しているわ。」

あれだけバカスカとドライゼを撃ち込まれたのに前線が崩壊していないのは、

きつと連中の手腕でしょうね」

「合流を阻まれたのも四天王つすね、たぶん」

「ええ、そうね」

「どっちみち四天王をどうにかしねえと武田晴信は殺せねえか。」

粉雪はさつき撃退したから、あと3人だな」

「内藤は槍働きが得意な方じゃないから、実質残り2人ね。」

その2人はどっちも一筋縄じゃないから、実質残り2人だけだ」

そんな事を話していると……3人の前に甲軍の雑兵達がわらわらと現れる。

「ほうらおいでなすつた」

「まずはこいつらを蹴散らすわよ」

「腕はなまっちゃいねーつすよね、九十郎？」

「疑ってるのか？ なら見せてやるよ……神道無念流の強さをなあつ！」

3人が臨戦態勢をとった直後……

「ひ……光璃……？」

九十郎が信じられないものを見た。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第131話『九十郎、やつと 気づく』

「ぜえ……ぜえ……やつと……見つけた……」

薫の息が荒い。

美空を追いかけ、追い詰めるため、彼女は必死だ。

全身の力を1gたりとも残さず使い切る勢いで駆けまわっていた。

聡明な彼女は気づいている、この戦いに武田の勝ち目は既に無いと。

彼女を守る近衛兵達もまた同様だ。

「やあ、遅かったわねえ」

「さつきまでならともかく、今の柘榴達は……ちよつと手強いっすよ」

一方、追われて、囲まれた美空と柘榴はどこまでも強気だ。

身体の奥底から力が溢れていた。

乾。パンとマーマレードを口にして、栄養を摂取しただけではない。

絶体絶命の窮地に惚れた男が駆けつけてきてくれた……たったそれだけの事が、美空

と柘榴を何倍にも、何十倍にも強くしていた。

今の2人は、まさしく万人の味方を得た気分だ。

今の2人は、例え万人を越える屈強な武者に囲まれようとも、少しも怖くはなかった。

「劍丞はどこにいったの？ ひよつとして喧嘩別れでのしたのかしら？」

「それは……ええ、そうです。今の私達には、手段を選ぶ余裕も、時間も無いから」

この戦いが始まる前、薫は戦いを止めたいと言う劍丞の志に賛同し、力を貸すと約束した。

甘かった、自惚れていた、武田の実力を過信し、越軍の能力を過小評価していた。

武田晴信が……尊敬する姉が負ける筈がないと無邪気に信じていた。

そんな幻想は、ドライゼ銃の雷鳴の如き炸裂音、血と硝煙の臭いと共に崩れ落ちた。

今は粉雪、春日、そして兔々の頑張りによつてギリギリの所で全面敗走だけは避けているが、それも時間の問題だ。

千に一つ、万に一つでもこの状況から逆転する目があるとすれば……越軍よりも先に長尾景虎の身柄を抑える以外には無い。

それ故に薫は必死であった。

そして薫に付き従う武田の武者達も全員必死であった。

が、しかし……

「全部で10人……1人3人！」

「1余りつすよ！」

「それじゃあ、最後の1人は早い者勝ちね」

「ちよ、ちよつと待て柘榴！ 美空もだ！ 光璃が……」

「向こうは待つ気はねーみたいつすよ！」

だがしかし……必死さだけで戦いに勝てるのであれば誰も苦勞はしないのだ。

「たあーっ!!」

「おおおっ!!」

ザシユリ！ ザクリ！ と血煙が舞う。

九十郎が持ってきた乾パンとマーマレードで体力を回復させた美空と柘榴の手によって、薫の親衛隊はあっという間に切り伏せられる。

薫の親衛隊もかなりの手練れ揃いではあった。

しかし、雨あられの如く降り注ぐ銃弾の雨からくる肉体的、精神的な疲弊、美空や柘榴相手の追いかけてこに、突如乱入してきた第七騎兵团との戦闘……薫達もまた、自分では気づかぬうちに消耗していた。

あと少しで美空に追いつける、あと少しで美空を捕らえ、死を待つばかりの大勢の味方を助けられる……皮肉と言うべきか、目の前にぶら下げられた一抹の希望が、彼ら、彼女らから疲勞を忘れさせていたのだ。

「神道無念流舐めんなーっ!」

「口を開く前と開いた後に神道無念流バンザイってつけるっすよ!!」

それだけではない、美空も柘榴も九十郎に鍛えられ、以前よりも数段強くなっていた。実際、九十郎が当然のように使う訓練道具……竹刀は実に優れた物である。

刃引きがされようとも、木刀であろうとも、剣の達人が本気で振るえば大怪我は免れない。

軽く型を見せる程度で留めるか、さもなければ大怪我覚悟で打ち合うか……故にこの時代の武術家の対人戦闘経験は、思った程多くは無いのだ。

しかし、九十郎がもたらした竹刀が、ポトルネックを克服させた。

本気で打ち合っても怪我を気にする必要が無い環境が、美空や柘榴の対人戦闘経験を大きく大きく引き上げた。

それに現代ニホンにおける最新スポーツ学を応用した訓練メニューが重なり、最早そこいらの雑兵では手が付けられない程に美空や柘榴を強化していたのだ。

「あ……あああ……」

決意に満ちた薫の目が絶望に染まった。

薫の目の前で、今まで苦楽を共にした同胞達が物言わぬ骸へと、無残な肉塊へと変わってしまった。

手にした短刀が、静かに地面に落ちる。

駄目だ、勝てない、自分では勝てない……姉を、武田晴信を救えない。

そんな絶望に襲われた薫の両肩を、バッファローマンのような体格の大男ががっしと掴む。

見た目は不審者による少女誘拐の図のようである。

「光璃！ 光璃だよなっ!? 何でお前まで戦国時代に來てるんだ!?

お前もトラツクに轢かれて死んだのか!? 自称転生の神に送り込まれたのか!?

肩をぐらぐらと揺さぶって何度も何度も問いかける。

この男は完全に目の前の人物を武田光璃だと……現代ニホンを生きるファースト幼馴染だと思い込んでいる。

「え……こ、この人……お姉ちゃんの知り合い……?」

「お姉ちゃん? お姉ちゃんってどういう意味だ? お前は光璃だよな?」

人違いじゃないよな? 俺の事覚えてるよな!?

「あの……あの、私……貴方の事……知らない……」

「九十郎どいて! そいつ殺せないわ!」

「人を『始末』しようとするって事は、逆に『始末されるかもしれない』という危険を常に、

『覚悟して來ている人』ってわけっすよねえっ!!」

美空と柘榴が悪魔のように笑っている。

久々の活躍らしい活躍に、ちよつとハイになっていた。

「ちよつと黙つてろ柘榴！ 美空もだ！」

「……何か勘違いしてるみたいだけど、そいつは『光璃』じゃなわよ」

「光璃……つまり、武田晴信の妹、武田薫信廉っすよ。」

そいつは顔が似てるから時々影武者をやつてるっす」

「顔が似てる……それつてつまり……武田光璃晴信の顔が……」

武田光璃が……九十郎のファースト幼馴染が、実は九十郎と同様、戦国時代に来てい
るのではという不安で一杯だ。

「（俺は……俺はもしや……光璃を殺す手助けをしていたのか……）」

「九十郎、分かったでしよ。 とりあえずそいつは殺すからちよつとどいて頂戴」

そんな九十郎の心境に気づかず、美空が血濡れの剣を携え近づいていく。

「させねえよ……」

……九十郎がそう呟いた。

薫を殺そうとしていた柘榴の動きが一瞬止まる。

「御大将、何か嫌な予感が……ちよつと待った方が……」

「へ……？」

柘榴がそう呼び止めて、美空の歩みが止まる。

次の瞬間、白刃が美空の額数ミリ先を掠め、前髪が何本かはらはらと落ちる。

それを行つた人物は他でもない、斎藤九十郎だ。

「今大事な話をしている。ちよつと待てと言つただらう」

九十郎の目がマジだった。

美空も柘榴も、瞬時に理解する。

美空が止まっていなかったら斬られていたと。

「あー……別に、今更九十郎が裏切つたとは思わないけど……」

どういふつもりで位は聞いても良いわよね？」

「こつちとしても、今更美空の敵に回ろうという気はねえよ。柘榴の主君でもあるし

な。

だが……すまん、武田晴信は俺の大事な幼馴染かもしれないねえ。

まずはそれを確かめさせてくれ」

「確かめるって……どうやって？」

「本物の光璃ならスーパー戦隊ヒーローゲッターを何も見ずに歌える筈だ」

「ごめん、何が歌えるって？」

「スーパー戦隊ヒーローゲッター」

「良くわかんねーっすけど、たぶん歌えねーと思うっすよ」

「聞いてみなきや分かんねえだろ！ とにかく会えば判別できる！」

「会うつてこの状況で!？」

「そもそも会って……」

「無いとは思うつすけど、本当に九十郎の幼馴染だったらどうするつもりっすか？」

「中止だ」

「……ごめん、できれば全力で聞きたくないんだけど、流石に聞かざるを得ないわ。

何を中止するって？」

「武田晴信を殺すのを中止する」

瞬間、美空と柘榴は目の前が真っ暗になった。

「できる訳が無い!!」

「流石に無茶っすよ九十郎！ もう戦は8割終わってるっすよ!!」

突然の^ご乱心に驚き戸惑う2人の前で、薫が九十郎の手をぎゅつと握る。

「助けて……くれるんですか……？ お姉ちゃんを……」

信じられないといった表情だ。

そりやそうだろう、敵として現れた大男が自分の顔を見るなり、突然姉を……甲斐武

田家の当主である武田晴信を殺さないと言いだしたのだから。

「どつちにしろ、確認ができるまで保留だ。この顔で、名字が武田で、通称が光璃だろ？」

「今までずっとありえねー事だと思ってたが……もしかしたら、もしかするかもしれない」

「あの……お名前は？」

「俺のか？俺は斎藤九十郎だ」

「き、聞いた事が無いなあ……でも、

お姉ちゃんって私達にも色々隠し事するから、本当に幼馴染なのかも」

「御大将、どーするっすか？九十郎は本気っぽいつすよ」

「柘榴がひそひそ声で美空に尋ねる。

「どーするって……どうしよう。」

「今から晴信を殺すの中止って言ったって止められないわよ。」

「特に信虎が絶対に納得しないわ」

「そうだな、とりあえず物理的に信虎を黙らせる事から始めるか」

「つて聞こえてたあー!？」

「九十郎！乙女のひそひそ話を聞くのは駄目っすよ！」

「てか物理的に黙らせるって何する気!？」

「ぶった斬る」

「微塵も躊躇せず味方をぶった斬る発言したつすよ!」

「信虎が聞いたら泣くわよ!」

その場がさらにさらに混沌としてくる。

美空は祈った、柘榴も祈った……誰か何とかしてくださいと。

「……おい、誰が泣くつて?」

「美空様大丈夫ですか! やつと甲軍を突破できました!」

この混沌とした状況の中で、犬子と信虎がこのことやってきた。

何故か犬子は気絶した犬を2匹抱えているが……状況が状況なので誰もツツコめない。

ほんの数分前まで……いや、数秒前まで心の底から早く来てくれと願っていた味方の登場だが、美空と柘榴は心の底から『今は来ないで』とか『もつと遅く来て』とか願っていた。

「久しいな信廉、我が晴信に殺されかけた日以来か?」

お前を殺すのは晴信の後になると思っていたが、まあ行きがけの駄賃代わりだ。

「ここで殺……」

信虎は必死に引き返せアピールをする美空と柘榴を気にも留めず、九十郎に抱えられ

ている薫を殺そうと無防備に近づく。

そして次の瞬間……ザシユリと血飛沫が舞う。

「え……？」

信虎は一瞬、何が起きたのか分からなかった。

目の前が真っ赤に染まり、肩に鋭い痛みが走り、じわつと熱くなっていく。

過去に何度か味わった、鋭利な刃物で斬られた痛みと気づくのに時間がかかった。

「ぎゃああああっ!! ノータイムでぶった斬ったああああああっ!!」

「や、やりやがったつす!! 少しは躊躇してくれつす!!」

「すまん信虎、状況が変わったんで死んでくれ」

……信虎は、自分が斎藤九十郎に斬られた事に気づくまで、ずいぶんと時間がかかった。

信じられなかった、信じたくなかった。

「え……あ……な、なんで……？」

信じていたのだ、九十郎を。

九十郎は自分の味方だと無邪気に信じ切っていたのだ。

何があるとうと自分を手にかける事は無いと……

「九十郎!? どうしたの急に!」

「犬子！ 九十郎を止めるっす！」

「何があつたの!？」

「説明は後でするわ！」

「とりあえず光璃の元に行くぞ！ ついてこい！」

「は、はいっ！」

突然の出来事に狼狽する犬子達を尻目に、九十郎は薫の手を引いてその場から走り去る。

「美空！ とりあえず晴信殺しは保留にしておいてくれ！ 頼んだぞ！」

「頼まれたつて無理よ！ 今更止めようがないわ！」

「じゃあ適当に時間を引き延ばしておいてくれ！」

「こつちで確認して、俺の知つてる光璃だつたらこつちで勝手に保護するから！」

「そんな事認められる訳ないでしょ！ 粉雪でもギリギリなのよ！」

「待ちなさい！ 待つて九十郎！ お願いだから待つて！」

美空が必死に叫び、九十郎を呼び止めたが……すぐに薫と九十郎は美空達の視界から消えていった。

「信虎、傷は大丈夫つすか？」

柘榴がさつき九十郎に斬られた信虎の傷を見る。

幸いにして、決して深手ではない。

簡単に止血をすれば、重篤な事にはならないとすぐに分かった。

だが……

「痛い……」

信虎の顔が歪んでいた。

傷はさほど痛くはなかった。

信虎は過去に何度も死線をくぐり抜け、今受けた傷よりも何倍も痛く、何倍も深い傷を受けた事が何度も何度もあつたからだ。

だが……

「痛い……よ……」

涙がぼろぼろと零れ落ちていく。

戦場で涙を流すなど、信虎にとって初めての経験であつた。

それ程までに痛かつた。

……心が、張り裂けそうな程に痛かつた。

「信虎さん大丈夫？　今止血の薬を出すから、ちよつと待つてて」

何が何だか分からないまま、犬子が信虎の手当てを開始する。

やや遅れて、信虎が率いていた第七騎兵团達もその場にやってくる。

美空の匂いが近いからと先行した犬子と信虎を追ってきたが……敵の姿が見えないのに、信虎が手傷を負い、しかもぼろぼろと童のように涙を流している姿を目の当たりにして、第七騎兵团達がぎよつとする。

「痛い、痛い……九十郎……なんで……?」

今起きた事が信じられず、肩を震わせ、顔を伏せながら何故、どうしてと繰り返す信虎の姿を目の当たりにして……美空は拳にぎゅつと力が籠るのが分かった。

「……許せないわね」

「そつすね、今回ばかりはちよつとカチンと来たつす」

「柘榴、美空様、何があつたんですか?」

「武田晴信が幼馴染かもしれないって」

「え? そんな訳ないですよ。九十郎とはちっちゃい頃からの仲なんですよ(第1話)」

「たぶん前世の話つすよ」

「前世って……ああ、光璃さんって人の事か。」

でもそれは、たまたま名前と言うか、通称が一致しただけって」

「顔も一致してたのよ」

「それだけの事で信虎さんに斬りかかったの!」

「そうよ、たったそれだけの事で……」

どんな幼馴染だったか知らないけど、ハッキリ言つて腹が立つわ。

遊びや余興で軍を興した訳じゃないのよ、私達は」

「犬子、九十郎の匂いは追えるつすか？」

「追えるよ、毎日嗅いでる匂いだよ」

「ほぼ確実に、匂いを追つた先に武田晴信がいる筈つす。」

「今すぐ、全速力で追いかけるつすよ」

「でも、信虎さんが……」

犬子が躊躇する。

深く傷ついた……肉体的には軽傷でも、精神的に深く深く傷つき、悲しみにくれる信虎を放置していく事へためらいが出る。

だがしかし、美空はこの場で足を止める訳にはいかない。

「信虎、悪いけどこの場に置いて行かせてもらうわ。この戦いの決着をつけるためにも、

派手に乱心した九十郎を引っ叩いて目を覚まさせるためにも、

貴女が動けるようになるのを待っている時間は無いの。

最低限の護衛は残しておくから、動けるようになったら味方と合流しなさい」

……遊びや余興で軍を興した訳ではないのだから。

美空は甲軍を蹴散らし、晴信を討つために軍を興したのだから。

「犬子も来てほしいです。九十郎を止めるのは、妻の務めですよ」

「違うわ柘榴、この時代に生きる、九十郎に惚れた女達の務めよ。」

前世だか現代だか戦国時代だか知らないけど。

この世界、この時代の女にも意地があつて、意思があつて、

想いがあつて……そして今、とても怒つてる事を教えてやらなきゃいけないわ」

「じゃあ……この2人どうしましょう？」

犬子が抱えている2匹の犬に視線をやる。

良く見れば大小様々な傷を負っており、自力で走るのはちよつと無理そうだ。

「……さつきから気になってたつすけど、誰つすかそれ？」

「さつき交戦した武田四天王です。」

なるべく御家流を使わないように戦つたんですけど、結局使っちゃつて……

「ごめんなさい、美空様」

「構わないわ、秘匿もそろそろ限界だと思つていたもの。」

確認するけど、犬子が寝たり気を失つたりしない限り、犬のままなのよね？」

「それと射程外まで離れると戻ります」

「じゃあ置いては行けないわね……仕方ないわ、交代で背負いながら走りましょう」

「それじゃあみんな走るつすよ！ 犬子は先導をお願いするつす！」

柘榴の掛け声と共に、第七騎兵団が動き出す。

「ま……待て……」

しかし、それを呼び止める者がいた。

他でもない、さつき九十郎に理不尽に斬られた信虎だ。

「我も行く……行かせてくれ」

「走れるの？」

「走るさ、さつきは少々取り乱したが。」

九十郎をひつ叩くのは、この時代に生きる、九十郎に惚れた女達の務めなのだろう。

ならば我も行くこう、いや、行かせてくれ」

「そうね……分かったわ。 信虎の手当て急いで！ 終わり次第九十郎を追いかけるわ

！」

そして美空達が行動を開始する。

この時代に生き、九十郎に惚れた女達の務めを果たすために……

……

……

.....

「お前光璃か!? 光璃なんだよなっ!?」

「お姉ちゃん! この人お姉ちゃんの幼馴染だったの!」

「.....え?」

一方その頃、光璃は混乱の極みに陥っていた。

劍丞の御守り.....もとい、劍丞と行動を共にしていた筈の薫が合流してきて、何故か柿崎景家の夫も一緒に、しかもそいつが幼馴染ですかと凄い剣幕で尋ねてきているのだ。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第132話『あんた誰?』

「今にして思えば……光璃は俺に依存していた。

だけどそれと同じ位、いや……それ以上に、俺も光璃に依存していたらしい」

「九十郎さん?」

薫の手を引きながら、血と硝煙の匂いにする戦場を走る。

そんな九十郎の声は震えていた。

その顔には、さつき斬った信虎の血がべつとりと付着していた。

息を吸う度に、むせ返りそうになる程に強烈な血の臭いが鼻に飛び込み、頭がずきずきと痛んだ。

頭ではこの少女が光璃ではないと分かっている。

分かっているながらも、光璃と瓜二つの少女の手を引くと、なんとも表現し難い奇妙な気分になる。

同時に、頭の中らぐにやあつとねじ曲がっていくかのような気分になる。

自分がどんどん混乱していくのが分かる。

もう絶対に会えないと諦めかけていた光璃が、近くにいるのかもしれない、もう一度会えるのかもしれない。

そして自分は今までずっと、その光璃を殺す手伝いをしてきたのかもしれない。

九十郎は視界がぐるぐると洗濯機の如くかき混ぜられているような錯覚に囚われた。

光璃に会いたいという気持ちと、本当に光璃だったらどうしようという気持ちとが九十郎の心を掻き乱す。

「俺は信虎を斬つちまった……」

返り血がべつとりと顔に付着していた。

ずっと味方として寝食を共にしていた女を一時の感情に身を任せて斬ってしまった。

信虎には何の落ち度も無い。

そして信虎は九十郎に斬られた直後、今にも泣きそうな顔になっていた。

九十郎が罪の意識に苛まれる理由としては、その2つがあれば十分すぎる。

「俺は信虎を斬れなかった……」

トラツクに轢かれて死に、自称転生を司る神に会い、この時代に来た直後の自分なら、光璃を殺そうとする者は躊躇なくブツた斬っていただろう。

だがしかし、信虎の首筋目がけて刃を振り下ろそうとした瞬間、信虎が心地よさそうに昼寝をしていた時を思い出してしまった。

そして気がついたら、無意識なのか、意識的なのか、急所を外して斬っていた。九十郎は今、自分の心が、感情が、くしゃくしゃになっていくのが分かった。

「俺は何がしたいんだ？　俺は光璃に会ってどうする気なんだ？」

武田晴信が光璃だったどうする？　いや光璃じゃなかったらどうするんだ？

美空や信虎になんて言って詫げる気だ？

そもそも……そもそも俺は、本気で柘榴も、美空も、犬子も捨てる気なのか？

それで本当に良いのか？　それで本当に後悔しないのか？」

九十郎自身、自分の行動が間違っている事は理解している。

同時に、それでも光璃を守らなければとも思っている。

理解しているからこそ、身勝手な自分の態度に吐き気がした。

「え……あの……私に聞かれても……分からないと言いますか……」

そもそも本当にお姉ちゃんの知り合い……なんですよね？」

「俺にも分らん」

「お姉ちゃんに会ったら、どうするつもりなんですか？」

「分からん、誰か教えてくれ」

「わ、私に聞かれても……」

「このままこの屑マツチョを姉の元に連れて行って良いのだろうか、薫が地味に悩み

始めた。

……

……

……

これは九十郎がトラックに轢かれて死んだ日や(第27話)、由比雪那が学園の改革を叫び、大江戸学園全土を巻き込んだ大乱闘を始める日から少し前の事だ。

「……あの2人は、恋人同士なのか?」

大江戸学園の学生食堂で、泣く子も黙る鬼平こと、長谷河平良がそんな事を呟いた。

それを聞いた人物……九十郎のセカンド幼馴染こと担庵はただでさえ大きな瞳をさらに大きく見開いて、2〜3度ばちくりと瞬かせた。

「弟分と妹分の事かね?」

落ち着くためにハーブティーを少し口に含む。

ハーブの香りと、喉を優しく潤す暖かな感触が、少しだが動揺を止めてくれた。

「ああ、そうだ。その辺りどうなんだ?」

「鬼平がついに色恋に興味を持った……だと……」

「そういうのではないよ、知り合いに聞いてきてほしいと頼まれただけさ」

「なんだ面白味の無い。その知り合いとは誰かね?」

「守秘義務がある」

「私や弟分の知り合いかどうかは？」

「……それも言えないな」

「その反応からすると知り合いか、さて誰だろうな……」

「その位で勘弁してくれ。それよりどうなんだ？ あの2人は？」

「そうだなあ……」

担庵がふうつとため息をつき、ハーブティを飲む。

見た目は優雅そうだが、頭の中ではどう答えたものかと……どう答えれば一番愉快に笑えるかを超高速で考えている。

そしてしばらくの間色々と考えてから……

「そうだな、私としては……そうなってくれば良いなど、ずっと思っている。

という回答では如何かな？」

……結局、特に茶化す事無く質問に答えた。

「とすると、今現在は違うと」

「と、言うよりは……うん……」

担庵が長谷河平良の顔をじいっつと見つめる。

「……実はねえ、今現在弟分が惚れている女性は君なんだ」

……なんか唐突に爆弾を放り込んだ。

「な!? なにつ!? 斎藤が私をか!?!」

「そう遠くない内に君に告白すると思うよ、弟分は昔から犬の卒倒、

つまりワンパターンだからねえ。惚れて、告白して、振られて泣いて。

また誰かに惚れて、告白して、また振られて泣いて。

ずっと昔から何度も何度も繰り返しているよ」

「困ったな……私にその気は無いのだが……」

「ならばキツパリと断ればそれで良い。

心配する事はないさ、本人がしばらく気落ちするだけで、君に実害を与える事はない。

その辺りも弟分はワンパターンでね、

泣いてる弟分を立ち直らせるのは私と妹分の役割さ」

「な、泣くのか」

ちよつと乱暴だが荒事では頼りになるマッチョの印象にかなり大きめの日ヒビが

入った。

「泣くよ。弟分も妹分も……たぶん私も結構な泣き虫でね。

弟分の泣き顔が見れるのは私と妹分との特権、

これについても友人である君であつてもそう簡単には譲れない」

「歪んだ愛情だな」

「かもしれない、自覚はある」

満員の学食の片隅で、光璃と九十郎が大盛り肉うどんとかき揚げうどんを啜っている。

席が全部埋まっているからかもしれないが、まるで身を寄せ合っているかのように見える距離感だ。

長谷河平良がああの2人の姿を見た時は、だいたい今と同じような距離感でいる。

だからこそ、知り合いのためにも、確認したくなつたのだ……恋人同士なのだろうか
と。

「先に答えを言っておくと、弟分が誰かに惚れている時期はあんな感じだよ」

「……ん？」

「特にその相手が近くににいる時は、なんとつか過剰な程にくつつきたがる。」

「実に可愛らしいだろう？」

「ああなるほど、確かに最近、ああの2人がべつたりな場面が多いな」

「本当に愛らしいよ、私の妹分は。嫉妬しているんだ、妹分は昔からそうだった。」

「それこそ小学校低学年の頃からずっと……」

「そこまで口走った所で、担庵は幼い頃の光璃の言動を思い出し……」

「に、しても……あの子は本当に私の一個下なのだろうか?」

そんな疑問を口にした。

「どういう意味だ?」

「ああ、いや……妹分は弟分に妙な執着を見せると言うか……」

時々本気でゾツとする位に残虐な事をぼろつと口走るからな」

……

……

……

「……心外」

丁度その頃、光璃はかき揚げうどんを食す手を止め、そんな事を呟いた。

平良と担庵が何を喋っているのか聞こえている訳ではないが、目と口の動きと直感で
どういふ話題なのかおおよそ見当はついていた。

ふと、担庵と目が合った。

担庵は何かを……この距離では全く聞こえないような声量で、何かを独り言のように
呟くと、にこつと笑って手を振ってきた。

光璃も少し恥じらいながら手を振り返す。

「光璃、知り合いでもいたのか?」

厚めに切った豚肉を口に頬張りながら九十郎が尋ねる。

この男は、口に物を入れながら喋るなど親から教わらなかつたのであろうか。

光璃はちよつとの間、んん〜と表現に迷い。

「おねーちゃん」

ちよつと皮肉気な表情でそう答える。

「ああ、セカンド幼馴染か。」

妹分つてのはあいつが勝手に言ってるだけで、お前がそれに付き合う必要は無いんだぞ」

「光璃にはおねーちゃんはいなかったから、少し新鮮」

「新鮮ってお前、もうあいつとは10年近く付き合ってるだろ」

「そうだった」

「そうだったってお前……」

「年を取ると時間が経つのが早い」

「俺とタメだろうが」

「ず〜と品無くうどんをすする。」

戦国時代で食べた食事よりも何倍も何十倍も美味に思える現代ニホンの食を堪能する。

あの時代は味噌も、醤油も、塩さえも貴重品で、しかも冷蔵庫なんて便利な道具は存在しない。

近海で獲れた魚を早馬で甲斐に届けさせ、京からの使者をもてなしたエピソードを思い出すと、酷く自分が滑稽に思えて、笑いがこみ上げてきた。

「やっぱりサンマは、目黒に限る」

「目黒に海ねーけどな」

「海が無い目黒で美味しい魚が食べられるというのは、凄い事。 平和の証拠」

「そうだな、この学園も狭い人口島のくせして飯のレパートリーは無駄に豊富だからな。 そうだ光璃、この前道場の近くにできたイタ飯屋、美味いって評判らしいぜ。」

「今度行ってみねえか?」

「行きたい!」

光璃は即答して、嬉しそうに目を輝かせた。

もしも光璃に尻尾が生えていれば、ぶんぶんと大きく左右に振られていただろう。

「美味かったら今度は長谷河を誘おうぜ、あいつ美味しい飯にはこだわるからな」

「……ふうん」

光璃の目が途端に冷ややかなものに変わった。

納得いかなんかと言うか、面白くないと言うか、なんとも表現し難い不快な感情が胸を

つつかえさせる。

当然、光璃はとつくの昔に自覚している。

自分が九十郎に対し、愛しいとか、恋しいとか、もつと触れ合いたいとか、独り占めしたいとか、そういう感情を向けている事に。

その感情に非常に近いものを、前の生で……戦国時代の武田晴信であつた時に、新田劍丞に向けていた事も、自覚している。

かつて愛した新田劍丞を忘れ、ないがしろにしているかのような自身の感情変化に、ちよつとキツめの自己嫌悪に襲われる。

「初めて会つた時の事、覚えてる？」

「何だその話題の切り替えは？」

同じ日に同じ病院で生まれて、隣同士のベッドで寝かされてたんだろ？

そんなの覚えてる訳ねえだろ」

「うん、そう」

だがしかし、光璃は覚えている。

しつかりと、はつきりと、一番最初に斎藤九十郎と会つた時の事を覚えている。

前の生での一番最初の出会いも、今生での一番最初の出会いもしつかりと覚えてい

両方ともかなり強烈な出会いだった。

「食い終わったら教室に戻るぞ。ほら、お前の分も片しておくよ」

「ありがとう」

九十郎が自分のお盆に光璃の食器も乗せて、使用済み食器の回収棚へと運んでいく。

「……いつも、ありがとう」

光璃は自然に、自分でも驚き、自分でも気色が悪く感じる程に自然に、感謝の言葉を口にした。

前の生で、光璃を憎む者はいた、光璃の敵になる者もいた、味方のフリをして近づく裏切り者もいた、光璃を誇りに思う者、忠誠を誓う者もいた、正直者もいた、嘘つきの二枚舌もいた、妹もいた、だが……親と姉はいなかった。

九十郎は光璃を守ろうとしてくれている。

それはまるで、前の生では存在しなかった親のように。

担庵は光璃を守ろうとしてくれている。

それはまるで、前の生では存在しなかった姉のように。

それは何年経っても、光璃に新鮮な喜びを与えてくれる、勇気を与えてくれる。たった一人見知らぬ世界に漂着した光璃を何よりも強く支えてくれる。

そう言えば、午後の授業を担当している英語教師は、そろそろ抜き打ちテストを敢行

しそうな雰囲気だった。

教室に戻ったら、ここ一ヶ月くらいの英語の授業ノートを見直しておこうかと考えながら光璃は席を立つ。

席を立つて視線を上げると、九十郎の今現在の想い人である長谷河平良と目が合った。

あげないぞ、というちよつと敵対的な視線を向け、大食堂を後にした。

「そう言うお前はさ、覚えてるのかよ。最初に会った日の事」

やたらと広い大江戸学園の校舎内を歩きながら、九十郎はそんな事を聞いていた。

光璃はうくと考え込み……

「……強引に迫られた」

「捏造してんじゃねーよ!」

……

……

……

「お前光璃か!? 光璃なんだよなっ!」

「お姉ちゃん! この人お姉ちゃんの幼馴染だったの!」

「……え?」

その日……戦国時代、後に第四次川中島の戦いと呼ばれる日において、光璃は混乱の極みに陥っていた。

劍丞の御守り……もとい、劍丞と行動を共にしていた筈の薫が合流してきて、何故か柿崎景家の夫も一緒に、しかもそいつが幼馴染ですかと凄く劍幕で尋ねてきているのだ。

とりあえず今この時点の光璃には、九十郎との面識は一切無い。

しかし、薫と九十郎がエライ劍幕で迫ってくるため、光璃は必死になって自らの記憶を漁り……

「……誰？」

無慈悲な現実を九十郎に突き付けた。

「そんな……そんな訳ねえ！俺が光璃の顔を見間違える訳がねえ！」

俺が光璃の声を聞き間違える訳がねえ！

俺達は同じ病院で！同じ日に生まれた腐れ縁だろう！」

九十郎が一瞬だけ呆然自失と言った表情になり、まるで掴みかかるかのような勢いで光璃に迫る。

しかし、光璃が何度記憶を探ろうと、漁ろうと、唐突に目の前に現れたマッチョの顔を思い出す事はできない。

「本物の光璃ならスパー戦隊ヒーローゲッターを何も見ないで最後まで歌える筈だ！」

「……全然分らない」

「そ……そんな……馬鹿な……」

九十郎ががつくりと肩を落とす。

なお、歌えたら歌えたらでこの小説は権利者に消される。

「薫……」

光璃が妹に対し、口を開きかけ……やめる。

さつき撃たれた傷は一刻も早くちゃんと手当てをしないと命に関わるし、そもそも自分の首を狙い、今この瞬間にも越軍が襲い掛かってきそうな状況だ。

春日と兎々が最後の力を振り絞り、文字通り身を盾にして時を稼いでいるが、それも長くは保たないだろう。

ここで問答している時間は無い。

「話は後で、劍丞の事も、この……」

「齋藤九十郎」

「齋藤九十郎の事も後で……齋藤九十郎!?!」

「おお！ 俺の事が分かるのか!?!」

「柿崎の夫の」

「そうだけどそうじゃねえ……って、光璃お前怪我してるじゃねーか!」

「え……あ、酷い傷!? 撃たれたの!? お姉ちゃん大丈夫!」

薫と九十郎が光璃の右腕の銃創に気がつく。

「……平気」

腕以上に頭が痛いと思いつつも、光璃はとつとこの話を打ち切ろうとする。

「馬鹿、平気な訳ねーだろ! 泣き虫の癖して!

しかも何だこの雑な止血は!? 銃創だぞ、布巻いたくらいで止血できる訳ねーだろ
!」

「時間が無かった」

「無理すんなよ、お前自分が病弱だって自覚あんのか!」

ガキの頃から遠足の日に腹壊すわ、学園祭の日に熱出すわで大変だったろ

なお、九十郎は未だに気づいていないが、その中の何割かは仮病である。

「とにかくすぐ傷口消毒して縫うからちよつと動くな」

「今も時間が無い」

「大丈夫だ、俺がどうにかする。だから黙って手当させろ」

光璃は無根拠に断言する九十郎に対し何も言い返せなくなり、動きも止まる。

陰謀渦巻く戦国の世に生まれた武田晴信だからこそ分かる、理解する。

唐突に現れたこの男は本気だと。

本気で自分を助けに来たのだと。

薫もそれが分かったからこそ、この男を自分の前にまで連れてきたのだと。

光璃は……

「なん……で……？」

光璃は知らず知らずのうちに、目頭を熱くさせていた。

視界が潤み、気がつけば大粒の涙がぱたりと地に落ちた。

純粹に光璃を心配する九十郎の姿が、何故か親が子を心配する姿に重なったのだ。

武田信虎の子として生を受け、実の親と憎み合い、殺し合いをした武田光璃晴信が心の底から望んでいた、我が子を愛し、我が子を心配し、我が子の為に何かをしてくれる親の姿を九十郎に見たのだ。

「何言ってるんだ、お前が光璃だからに決まってるんだろ。」

俺が光璃を助ける理由なんて、他に要るかよ」

九十郎は何の疑問も抱かずに告げる。

その瞬間、光璃の心が、魂がボキンツと折れた。

光璃を武田晴信たらしめていた何かが、一瞬にして、いとも容易くヘシ折れた。

魂を支える背骨が再び繋がるまで何日、何ヶ月、何年かかるか見当もつかないが……
少なくとも今、この瞬間、武田晴信はここが戦場であることを忘れた。

しかしその直後……光璃と九十郎の前に、ここが死神の跋扈する戦地である事を否応なしに思い出させる存在が現れた。

「晴信うううううーっ!!」

まるで殺意と暴虐が形をもったかのような、恐ろしい声が響き渡る。

光璃は知っている、薫も知っている、武田晴信の近習達も、武田信廉の親衛隊も大部分がこの声の主を知っている。

「母様……?」

「母様が来た……」

光璃の母……いや、武田晴信の血縁上、生物学上の親である、武田信虎の声である。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第133話『乱戦、混戦』

「晴信ううううーっ!!」

まるで殺意と暴虐が形をもったかのような、恐ろしい声が響き渡る。

光璃は知っている、薫も知っている、武田晴信の近習達も、武田信廉の親衛隊も大部分がこの声の主を知っている。

「母様……?」

「母様が来た……」

光璃の母……いや、武田晴信の血縁上、生物学上の親である、武田信虎の声である。「そう……光璃と母様は、どこまでも似た者同士……」

だから憎み合って、だから殺し合って……だから……同じ男性に安らぎを感じて……」

光璃にはすぐに分かった。

光璃はすぐに理解した。

今日の信虎の目は、自分の知るどの信虎の目とも異なっている。

今まで何千回、何万回と向けられた殺意という名のどす黒い感情に、嫉妬の感情、女

の感情が入り混じっていた。

『その男は私の物だ』『私の物に手を出すな』『私の物を盗るな』『私の物を奪うな』『この泥棒猫め』『この薄汚い盗人め』『この汚らしい売女め』

どれもこれも、およそ実の娘に向けるべき、向けて良い感情では無からう。

だがしかし、武田晴信と武田信虎は出会った瞬間から、晴信がこの世に生まれ落ちた瞬間からこういう関係だ。

実の娘、実の親など関係無い。

奪い合い、憎み合い、妬み合い、殺し合う関係なのだ。

瞬間、光璃は折れて萎えかけていた戦意を再び燃え上がらせる。

負けてなるものか、こんな所で死んでたまるかという意思と決意を新たにす。

突如として光璃の前に現れた斎藤九十郎が何者なのか、何故自分の前に来たのかも、何故自分を助けようとするのかもまるで分からなかったが、分からないまま死ぬのも、この男を他でもない武田信虎に奪われて喪うのも御免だと思った。

「全速で離脱！ 一人でも多く逃げ延びよ！」

光璃が立ち上がる。

ここが正念場だと、光璃にここまでつき従ってきた近習達も奮い立つ。

ここさえ切り抜けければ、どうにかなる。

武田晴信さえ無事に逃げ延びれば、きっとどうにかしてくれと。

「困え！ 回り込め！ 退路を絶て！ 雑魚はこの際どうでも良い！」

武田晴信一人殺せばこの戦は我らの大勝だあつ!!」

信虎がヒステリックな金切り声で叫ぶ。

「晴信だ！ 手柄首だぞ！」

「晴信を殺せ、我らの恨みを思い知らせろ！」

「逃がすな！ 走れ走れ走れえっ!!」

第七期兵団が勢いを増し、晴信へと殺意を向ける。

「心、不慣れとは思うけれど」

「私も武田四天王です。こなちゃん程強くなくとも、覚悟ならとうの昔に……

御屋形様を御守りして！ ここが私達の死に場所だから！」

甲軍が光璃を逃そうと最後の力を振り絞り、越軍はそうはさせんとばかりに奮い立つ。

「母様が目の前にいるのに……」

「……今は殺せない。一旦退いて、殺す手段を考える」

「分かつてるよ……けど……」

薫が思わず目を伏せる。

光璃程ではないにせよ、薫もまた信虎の殺意を浴び、信虎に殺意を抱いている。

我を忘れて走りださないうのは、自分以上に強烈な嫌悪や殺意を抱く光璃が『退く』と決めたからだ。

薫には分かつている。

光璃は甲斐の生命線であり、光璃の命が尽きる時が甲斐の命脈も尽きるためだと。

そしてきつと、光璃さえ生き伸びれば、信虎を殺す算段も立ててくれると。

だからこそ自分は、今まですつと光璃の影武者に甘んじてきたのだと。

だからこそ自分は、この劣勢極まりない状況で、劍丞を撒いて光璃の元へ舞い戻ったのだと。

「お姉ちゃん、行ってきます」

「……見届けてはあげられない」

「見届けようとしたら怒るよ、流石に」

薫が光璃にふつと笑った。

光璃に最後に見せる顔が、泣き顔でもなく、恐怖や絶望に染まった顔でもなく、笑顔であつてほしいと願うから。

「薫……お前何を……？ まさかてめえっ!？」

九十郎が何かを察し、怒声をあげとする。

「九十郎さん、会ったばかりの人にこんな事を頼むのもどうかと思うけど……」

お姉ちゃんをよろしくね。あと、劍丞さんも拾っておいてもらえると嬉しいかな」

優しく微笑みながらそれだけ告げると、九十郎の返事を待たずに薫は武田の騎馬隊を全滅させた恐るべき兵器・ドライゼ銃を構える第七騎兵団をキツと睨みつける。

「我こそは甲斐武田の頭領！ 武田光璃晴信である！」

我こそはという者はかかって来おい!!」

そう叫ぶと、逃げるどころか無数の銃口の前に飛び込むかのような特攻を開始したのだ。

いや、命を捨てようとしたのは薫だけでは無かった。

「我は武田晴信！ 我を討ち取り手柄首とせよ！」

「武田晴信はここに居るぞ！ 私と戦う勇氣ある者は来るが良い！」

1人、また1人、気がつけば10名以上の武者達が揃って武田晴信を名乗り、薫と共にドライゼ銃を構える第七騎兵団へと無策特攻を開始した。

無論、その中の大部分は声も、背格好も、鎧兜も、酷いのは性別すらも光璃とは全然違っていた。

しかし、越軍のほぼ全員は武田光璃晴信を直接見た事が無い、声を聞いた事も無い。

それ故に全く似てない自称武田晴信の集団も、第七騎兵団を僅かに困惑させ、標準を

ブレさせる効果があった。

「忌々しい……」

信虎が表情を険しくさせて、奥歯を強く噛み締める。

かつて信虎は晴信に敗れ、甲斐を追われ、今川義元の居城で軟禁生活を強いられたことがある。

その時は誰一人として、信虎の身代わりになり、信虎を逃がそうとした者はいなかった。

大将としての力量が、人望か、あるいは人としての器そのものが晴信とはかけ離れているのだと突き付けられているようだ。

「忌々しい！… ええい忌々しいっ!!」

内藤心昌秀が剣を振るい、まるで自らを盾にするかのように戦う姿を見て、信虎が歯噛みする。

内藤昌秀は、基本的に後方からの物資管理や、後詰として役割を担う者だ。

ああやって真正面から敵兵と切り結ぶ姿を初めて見た。

あんな必死の表情で、必死になって剣を振るう姿を、信虎は初めて見たのだ。

何より……何より九十郎が、本物の武田晴信の手を引きながら、立ち塞がる越軍の雑兵を切り捨てている光景が信虎の心を抉った。

先程九十郎に斬られた方の傷が、ズキン！　ズキン！　と苦痛を与えてくる。信虎は吐き気がして、眩暈がして、倒れてしまいそうになった。

「そんなに死にたいのなら……そんなに死にたいのなら殺してやる！」

ドライゼだ！　ドライゼを撃て！　撃ちまくれ！　銃身が焼けるまで撃ち続ける！

一人残らず皆殺しにしろ！　殺せ殺せ殺せえーっ！

半狂乱になって叫ぶ、叫びまくる。

第七騎兵団が特攻してくる自称武田晴信達に……先頭を駆ける薫に狙いをつけ、射撃。

ズダダダダッ！　ズダダダダッ！！　と再び時代錯誤の殺戮兵器が火を噴いた。

すぐに辺りに断末魔の叫び声が木霊して、血と硝煙で視界が一気に遮られる。

「あ……ぐう……っ!？」

真っ先に晴信を名乗り、駆けだした薫の陣羽織が紅く染まる。

水のように蒼い髪が地で真っ赤に染まる。

「……止めなくて、良いんだよなあ！」

光璃と九十郎にも、薫を含めた自称武田晴信達が次々と射殺されていくのが見えた。

九十郎はそれを見ながらもなお足を止めない。

「……うん、止めない、止められない」

我が身が張り裂けそうな程の魂の痛みを堪えながら、光璃もまた止まらない。

襲い掛かってくる越軍の雑兵達を切り捨てながら、決死の覚悟で……いや、必ず生き延びる覚悟で走り続ける。

「撃て！ 撃て撃て撃てえっ！ 殺せ殺せ殺せえっ!!」

目尻に涙を浮かべ、信虎が叫び続ける。

周囲があつという間に硝煙で一杯になり、数m先すらもはつきりとしなくなり……

「……頭に血を昇らせるんじゃないやねーつすよ、信虎」

「ちよつと頭冷やしなさい、向こうはドライゼを撃たせて、硝煙で視界を悪くさせる算段よ」

「九十郎、本気で向こうに寝返ってるなあ……」

今回に関しては、流石の犬子もドン引きだよ、全くもう……」

そんな信虎を止める3人が……柘榴と、美空と、犬子が何とも言えない複雑な表情で現れる。

「お、お前ら……」

「同じ男に惚れてる身として気持ちは分かるけど、一旦切り替えなさい。

今は武田の命脈をキツチリ断ち切る事を考えましょう。

柘榴、犬子九十郎の事、任せて良いわよね？」

「当然、他の誰にも譲れねー役目っすね」

「そうだねえ。すぐに軸がブレる駄目亭主を引つ叩く役目は、私と柘榴以外、誰にもできそうにないからねえ」

「お互い変な男に惚れちまったっすねえ」

「ほんと、ほんと」

犬子と柘榴が苦笑し合う。

「私が許すわ、私と信虎の分までブチのめしちやいなさい」

「合点承知っす！」

「御意！ 今回ぼっかりは念入りにとっちめてやります！」

犬子と柘榴が鎖を外された獵犬の如く駆け出した。

「信虎、本物の晴信はどれ？ 貴女なら見分けがつくでしょ」

「あつちに逃げたのが本物だ！」

「第七騎兵团！ 総員着剣！ 私に続きなさいっ！！」

影武者に構って本命を逃げすんじゃないわよっ！！」

ほぼ同時に美空と第七騎兵团も動き出す。

「九十郎おっ！！ 何考えてんのっ?！」

犬子と柘榴が九十郎に飛び掛かる。

「光璃先行け、あいつら俺に用事らしい」

「……気を付けて」

「お前を遺して死ねるかよ」

九十郎が光璃を先に行かせてUターン、犬子と柘榴へと向かって行く。

「御大将には柘榴から謝つとくつすから、戻ってくるつすよ!!」

「そうしたいのは山々なだけど……なあつ!!」

槍と太刀がぶつかり合う。

ガチンツッ! と火花が散り、柘榴と九十郎の視線が交差する。

「本当に裏切ったつすか!」

「すまん柘榴、お前にも美空にも恩義はあるが、いくらなんでも光璃を殺す手伝いはでき

ん」

「いや前々から違うって言ってたよね!」

いくらなんでも武田信玄が光璃な訳が無いって何度も言ってたよね!」

「実際会ってみたら光璃だったんだよ!」

「何でもつと早く気づかなかつたつすか!」

「気づける訳ねえだろ! 俺だつて驚いてんだつ!!」

まるで泣き言のような事を叫びながら九十郎が犬子と柘榴からの攻撃と口撃を躲し

ていく、

「……マジでこのまま甲斐に行く気つすか？」

「そうは言わねえよ、んな事言いたくねえし、言わねえけど……だが、それでも……」
「御大将はそこまで至らねー主だったつすか？」

柘榴や犬子は……そんな簡単に捨てられる程に……」

「ああ分かつている、分かつているさ。俺は今、最低最悪の事を言っているってな……」

九十郎が柘榴を見る。

九十郎にとって最愛の妻、最高の嫁である柘榴を見る。

戦国時代の中で、ただの柘榴として、ただの九十郎を愛してくれた人を見る。

九十郎が胸を張って俺の嫁だと断言できる女を見る。

九十郎が犬子を見る。

九十郎にとって恐れ、敬うべき前田利家を見る。

前田利家でありながら、前田利家である事を否定してまで九十郎を求めた女を見る。

前田利家であり、ただの犬子でもあり、愛おしい女でもある人物を見る。

そして九十郎が少し離れた所で剣を抜き、武田の近衛達と切り結ぶ美空を見る。

九十郎にとって人生二度目の、心の底から自らの主君と呼ぼうと決めた人物を見る。

どんな言い訳をしようとも、九十郎は大事な大事な3人を切り捨てたのだ。

光璃を守るといふ目的のために……

「武田晴信、覚悟おーっ!!」

「くうっ……」

九十郎がそうこうしている内に、美空は光璃に追いついた。

過去幾多の武田の武者を惨殺してきた愛刀・姫鶴一文字が振り上げられる。

「美空っ！ やめろおっ!!」

「止まらないのよ！ 血が流れ過ぎてるのよおっ!!」

美空は一切止まらない。

武田との戦のために、過去夥しいまでの血が流れ、幾多の将兵や領民が犠牲になったのだ。

今この瞬間のために……武田晴信を討ち取るために、多くの人が動き、多くの金子が使われ、多くの鉄砲鍛冶を拉致一步手前の強引な手段でかき集め、密偵による防諜もして、真田昌幸に莫大な裏金を握らせて寝返らせた。

今ここでやっぱりやめますなんて言える訳が無い。

過去の武田との戦いで犠牲になっていった者達に顔向けができない。

この戦いで勝つために様々な形で尽力していった味方に何と言えば良い。

そして何より……同じ男に惚れ、あの冷酷な武田晴信を相手に、命懸けで裏切り、寝返った一三三のために止まる訳にはいかないのだ。

なお、その惚れた男が唐突にトチ狂った事を言い出している事には全力で目を瞑った。

「……さつせませんわあつ!!」

だがしかし、姫鶴一文字が晴信の首を刎ねる寸前、予期せぬ方向から無数の刃がまるで猛牛の群れの如く突進してきた。

「全く次から次へと……誰よ邪魔するのは!？」

無数の刃に刺し貫かれる寸前、美空がバク転の要領で回避する。

美空と共に晴信を追いかけていた第七騎兵団のメンバーが何人かミンチ肉にされる、

「劍丞隊が一員、蒲生梅賦秀(こ)に見参。

盛り上がっている所申し訳ないのですが、この勝負物言いですわ」

頭クルクルパーマ……もとい、無事に劍丞と合流を果たした梅が御家流・『蜈蚣切丸・神威千里行』を発現させながら飛び込んできたのだ。

「さつきのは梅の御家流……ええい! 外野は引つ込んでなさい。

さもなきやあ痛い目に遭わせるわよ!」

「あら、外野ではありませんわよ。

私も貴女も、甲斐の武田晴信殿もダーリンの嫁御でしょう」

「もう止まれりやしないのよ！ 私は！ 私達はあつ！！」

渾身の怒りと苛立ちと共に、叩きつけるように愛刀を振るう。

「止まらないなら、もう一発ブチかましますわよ」

梅の周囲に槍の穂先のような形状の影が浮かび上がる。

先程使った梅の御家流をもう一度発現させる準備はできていると、言外に伝えていた。

「そんな脅しに通じるとでも？」

そんなチンケな脅しにいちいち屈してたら、一国の当主なんてやってられないわ！」

「国の主であるからこそ、ここで思い留まっていたくださいます！」

「もうやめてくれ！ これ以上血を流す必要なんて無いんだ！」

切り結ぶ美空と梅の元に、詩乃と劍丞、そして一葉が駆け寄ってくる。

「和睦の誓書に署名する者が必要です！」

甲斐の武田晴信以外の誰にその役目が務まりますか!？」

「日本中が鬼で大変な事になりそうだって時に、

これ以上無意味な争いをしている場合じゃない！」

「あんたら……相変わらず無責任な事ばかり言ってる……」

「尻比べはこの位で十分であろう、これ以上はただの死体蹴りよ」

「尻比べなんて適当な理由で兵を動かしてる訳ないでしょうが!!」

「なん……………だど……………!?!?」

一葉は本気で尻比べだと思っていた。

「悪いけど、武田との和睦なんてハナツから考えていないわ。

皆殺しにするわ、それ以外にはありえない。危ないからどきなさい、さもなければ

……………」

美空が精神を集中させる。

美空の切り札、美空の御家流である三昧耶曼荼羅の光が周囲に漏れ出る。

「絶対にどけませんわ。

そつちが御家流を使うのであれば、こちらももう一発、ブチかまさせて戴きますわ」

梅もまた、負けじと蜈蚣切丸・神威千里行を発現させるため、精神を集中させる。

一触即発の空気が流れ……………」

「ところで……………良い御家流じゃないか、使わせてもらおうぞ」

……………美空と武田信虎がにやりと笑う。

「な……………、これは……………っ!?!?」

瞬間、梅は脳髓を直接鷲掴みにされたかのような奇妙な感覚に襲われる。

そして己の意思と能力で発現させようとしていた神威千里行の制御が梅から離れる。

「信虎あつ！ 構う事は無いわ！ 派手にやっちゃいなさい！」

「積年の怒りと憎しみを……ありつただけの殺意を全てぶつける。 我の主の分もなあ

！」

「あら？ 初めてじゃない、私の事を『主』だなんて呼ぶのは」

「うん？ そうだったか？ まあ良い……行くぞおつ!!」

他者の御家流を掴み、投げ返す信虎の御家流・マグナムシュートによって、梅の神威千里行の制御が一時的に強奪されたのだ。

「マ・グ・ナ・ムウ……」

そして信虎が、九十郎に斬られた傷の痛みを堪えながら、大きく振りかぶり……

「……シューウウウウー！ トオツ!!」

神威千里行の刃をまるで衝撃波の如くブン投げる。

「危ない！ 避けるんだ！」

「きゃあああつ!？」

信虎の能力を知っている劍丞が叫ぶ。

梅が咄嗟に横飛びをして回避する。

そして信虎が放った刃の衝撃波は……

「あ…………ぐう…………」

…………武田光晴信の身体をズタズタに引き裂き、空高く舞い上がる。

「光璃っ!!」

「光璃いいいいいいーっ!!」

劍丞と九十郎の悲痛な叫びが周囲に響き渡った。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第135話『巨星が墜ちた

日』

「な……何だ……？」

「お、御屋形様……？」

九十郎と心の目が大きく見開かれる。

美空が振り下ろした刃が、光璃を貫けていない

「……流石は私の好敵手、こんな簡単にくたばってはくれない訳ね」

一方美空は自分自身でも驚く程の冷静だった。

心のどこかで、あの武田晴信がこの程度で死ぬ筈が無いと信じたかったのかもしれない。

「グルルウ……アアアアツ!!」

ゴキリッ! メキリッ! と奇怪な音を立てながら、光璃の肉が割れ、骨が砕かれ、人ならざる者へと変貌していく。

美空や九十郎にとっては過去何回か見た光景……新戸のように、人の形をした者が、

鬼へと変貌していく光景だ。

「ひ、光璃……お前、何でこんな……？」

「まず間違い無くアンタが原因よっ！ 後でお説教だから覚えときなさいっ!!」

分かり易く狼狽える九十郎を尻目に、鬼に変わりきる前にトドメを刺すべく刃を振り上げる。

「シネナイ……」

光璃の眼球がギリリと輝く。

鬼の瘴気を多量に体内に取り込みながらも、光璃の意思は未だ折れず、光璃の意識は未だ途絶えない。

「グオ……アアアアッ!!」

「……ちい!!」

身の毛がよだつような奇声と共に、腕の一振りですべて美空を弾き飛ばす。

美空と九十郎が同時に目を大きく見開く。

後にかたつむりの観光客レベルと九十郎に押搦される光璃の腕力では、人間一人吹っ飛ばすなんて到底不可能だ。

「帝釈っ！ 掴んでっ！」

瞬間、美空は反射的に三昧耶曼荼羅を……帝釈天の腕だけを具現化させ、吹っ飛ばす勢

いを逆に利用して九十郎を引っ張る。

「んがっ!？」

突然の出来事に目を白黒させながら、美女とマツチヨが木の葉のように吹き飛んでいく。

当面の脅威を一時的にはあるが排除した事を確かめると、光璃は自らの身体を血流の如く駆けまわる強大な瘴気を……

「フウ……リイン……カザアアアンソッ!!」

……寒気がするような殺気を籠めた雄叫びと共に、凄まじい勢いで噴出させた。

まるで幕霧の如く、周囲の視界を一気に覆いつくす。

「御大将! ありやヤバいつすよ!!」

「全員今すぐ黒い霧から離れなさい! それに触れると鬼にされるわよっ!!」

柘榴と美空の悲鳴のような叫びと同時に、晴信を討ち取らんと殺到していた越軍が一斉に逃げ出した。

彼ら、彼女らは身をもって知っている、美空が逃げろと言った時に逃げなかった者は例外無くと死ぬのだと。

黒いドームのように展開された瘴気の膜から次々と越軍第七騎兵団が飛び出してくる。

「ぜえ、ぜえ……柘榴無事!? 鬼に変えられてない!？」

「無事つすよ! 九十郎は!？」

「大丈夫! しつかり回収してるわ!」

「御大将、さつき帝釈天の腕だけ出してなかつたつすか？」

「いつからそんな器用な真似を……」

「断酒してたら何かできたわ」

「御大将つてたまあゝに雑に強くなるつすよね」

「ほっときなさい! それより皆無事? さつきの瘴気で鬼にされたのはいない?」

「幸いと言うべきか、美空の元へ戻つて来た第七騎兵団の面々は、誰も鬼へと変貌して
いない様子であつた。

「だがしかし、すぐさま瘴気の奥から異様な声と音が聞こえ始める。

「ひ……あ……あああつ!？」

「うおお!?! な、何が……ああつ!?!」

「ゴキリ、メキリと、人の血肉が音を立てて変形し、鬼に変わっていく音がした。

「それと同時に、まるで青姦でもしているかのような、艶めかしい喘ぎ声が始めた。

「え……何……ナカでナニやってんの?」

「み、美空様、いくら何でもこんな状況下でおっぱじめるような事は流石に……」

「ありえなくはねーっすよ、瘴気で頭がおかしくなってるなら」

ちよつと前に瘴気で頭がおかしくなっていた柘榴が言うと言得力抜群である。

「どうする、撃つか？ 撃てるが」

「待て信虎！ んな事したら光璃が死ぬだろ！」

「我は晴信を殺すためにここまで来たのだがな……」

「いい加減に諦めなさい！ 目の前で晴信が鬼に変化したのが分からなかったの!？」

「そ、それは……」

「九十郎、気持ちには分からなくもないけど……」

前言撤回、今回ばかりは擁護できないし気持ちもサツパリ分からないけど、

とにかく諦めて戦おう。 ここまで来たらもうそれしか無いよ」

「他人の幼馴染だと思っただけいい加減な！」

「そんな大事な幼馴染だったらもつと早く確認しといてよ！」

「んな事言われても、俺の幼馴染が武田信玄だったなんて予想つく訳ねえだろ!!」

て……良く考えたら、さつき光璃が出した印籠、信虎のだったよな。

何であいつが持つてるんだ？」

「……この前紛失した(第127話)。 まさかあいつの手に渡ろうとはな」

「信虎、帰ったら始末書と滅給ね」

「んな殺生な……ええい！」

今はそんな事よりもどうやってアレを討つかを考えるべきだろう!!」

「アレに突入するのは無いとして……撃つか、しばらく様子見か」

「いや、そうでもないかもしれんぞ」

「それでもないって、どういう意味よ?」

「さつき晴信から出た黒い霧……瘴気だったか? あれには前にも触れた事がある。

たぶんだが、あれはヤツの御家流・風林火山の亜種だろう。

武田の御旗に集いし武者達に力を与える能力だ。

その証拠に……見ろ、越軍の者は一人残らずあの瘴気らしき霧の影響を受けておらん」

信虎が指差す先で、瘴気のドームから次々と越軍が抜け出て来る。

確かに、越軍の将兵に対しては、視界を遮る以外は何ら影響を与えていないようだ。

「光璃の超能力は他人を強化する能力。

ただしその能力を使うには、力を受け取る側の『同意』が必要だ」

「犬子の御家流みたいにな、無理矢理犬に変える訳じゃないって事?」

「ああ、そうだ」

「何でそんな事知ってるのよアンタ?」

「ああ、昔光璃に教えてもらったから……」

「って事はやっぱりあの光璃と俺が知ってる光璃は同一人物って事じゃねえか！」

「しかし拙いな、今になって思えば一旦引いたのは悪手だった。」

「もしあの瘴気の渦が風林火山とすれば……時を置けば置く程厄介になるぞ」

「信虎がそう呟いた時……渦巻く瘴気がふっと消えた。」

「そして信虎達がぎよつとする。」

「疲弊し、傷だらけの武田の武者達は一人として残っていない。」

「いるのは瘴気を纏い、悍ましくも頑強な肉体を誇る、鬼の一団……光璃の近くにいた」

「武田の兵達が残らず鬼へと変貌していたのだ。」

「オヤカタ……サマア……サイゴマデ……サイゴマデ、オソバニイ……」

「それは武田四天王の最後の一人、内藤心昌秀も例外ではない。」

「愛くるしいその瞳は濁り、白絹のような美しい素肌は岩の如く堅牢に変わり、鳥のさ」

「えずりのような声は、思わず怖気を感じるようなものへと変貌していた。」

「およそ30もの鬼を前にして、第七騎兵団が思わずたじろぐ。」

「おい信虎！……こつちの光璃も……」

「ああ！……本気を出せば優に千人は同時に能力を行使できる！」

「今すぐ奴を止めねばどれだけの被害が出るか分からんぞ！」

「う……うう……」

九十郎が齒噛みする。

武田の武者達を鬼に変えたのが光璃の超能力によるものであれば、光璃を殺せば元に戻せるかもしれない。

だがしかし、だがそれでも……どれでも、九十郎には光璃を殺す決断ができない。

どうしてもどうしても光璃を殺すという選択肢を取れないのだ。

「九十郎！ もう手伝えなんて言わないわ！ せめて邪魔だけはしないで！」

それと劍丞！ アンタらも協力しなさい！」

一方九十郎達と同じく、光璃達が鬼へと変貌したのを目の当たりにした劍丞は……

「仕方……ないか……」

……静かに決意し、以前姫野から譲り受けた小太刀を強く握りしめた。

今でも、できる事なら光璃を救いたい、光璃と美空が手を取り合い、共に鬼と戦う姿を見たいと願っているが……聡明な劍丞は理解したのだ、もう無理だと。

「劍丞、例のアレと電池、今持ってる？」

「持ってるけど……」

「今すぐ電池を入れなさい！」

「だ、だけど……」

突如予想外の事を言われ、劍丞が思わず啞然とした表情になる。

何せ美空が言っている例のアレとは、劍丞がこの時代に降り立った際に何故か持っていた一振りの劍……美空を洗脳しようとした劍を言うからだ（第119話）。

再び電池を入れ、起動させれば、確かに鬼に對する強力な武器になるかもしれない。

しかし一方、再びオーデインの施した細工によって、何か悪い事が起きるかもしれない……劍丞の脳裏にそんな迷いが生じる。

「何ぼけ〜つとしてんのよ!？」

一番の被害者がやれつて言ってるのよ! さつさとやりなさいよ!!」

美空がそう叫ぶ。

美空とて今の状況は分かっている。

今すぐ、この場で武田晴信を討たなければ、際限無く被害が広がるかもしれない。

最悪、甲斐も越後も鬼の巣窟にされるかもしれない。

だからこそ美空は……頭の中を書き換えられ、劍丞に身も心も捧げそうになった恐怖の記憶に震えながら、劍を使えと叫ぶのだ。

「……分かった」

そうやって美空が震えているのを見て、劍丞もまた決断した。

そして肌身離さず持っていた見た目単三電池の物体を、劍の柄へと挿入した。

劍丞の劍がぼうっ青白く輝く。

鬼が近づくと輝き、鬼を引きつけ、鬼の頑強な皮膚をバターのように切り裂く武器が再起動したのだ。

そして劍丞が、美空が、犬子と柘榴が……この場に集まった全員が武器を構え、駆けだした。

「や、やめろ……やめてくれ、劍丞、美空……犬子、柘榴……」

九十郎は動かない、九十郎は動けない。

何をどうすれば良いのか分からない。

頭では分かっている。

戦国時代の光璃は、大江戸学園の光璃の記憶が無い。

どんな理屈であれもそっくりになったのかは分からないが、自分が知る光璃と、たった今日の前で鬼へと変貌した光璃は厳密に言えば別人物だと。

だがそれでも九十郎には光璃を殺せない。

鬼が変わってしまった人間を助ける方法は無い。

鬼が変わってしまった光璃を人に戻す事はできない。

光璃を救うには、もうどうしようもない程に手遅れだと。

だがしかし、だがそれでも……九十郎には光璃を殺す決断ができない。

第七騎兵団が鬼となった武田の将兵達と切り結んでいた。皆必死になって戦っていた。

血だらけになり、傷だらけになりながら戦っていた。

「……………うぐっ！」

「柘榴！ 大丈夫!?!」

「アバラ何本か持つてかれたっすかねえ……………でも、この程度じゃ！」

柘榴が血反吐を吐いていた。

傷つきながらも何度も何度も立ち上がり、鬼達に刃を突き立てていた。

「硬あ!?! かったいっ!!」

「ごめん柘榴、御家流で操れないかって思ったけど、犬子じゃ歯が立たないみたい！」

犬子も額から血を流しながら、比喩表現でなく鬼達に喰らいついていた。

「私から離れるんじゃないわよ劍丞！」

「妙な動きしたらその剣ごと叩き潰してやるんだから！」

「分かってる！ 俺が美空を守る！」

「だから……………もし俺が、俺の剣がおかしな事を始めたら止めてくれ！」

「言われなくてもそのつもりよ!!」

美空と劍丞が次々と立ちはだかる鬼達を切り伏せながら、光璃の元へと近づいてい

く。

劍丞を狙う鬼を美空が倒し、美空を狙う鬼を劍丞が倒す。

そうやって互いに互いを守りながら進んでいた。

「信虎さん！ あつちの御家流を止められないんですか!? 風林火山っていうのを！」

「できなくも無いが……やめておいた方が良いな。」

他人に力を与える御家流を投げ返そうとすると、御家流を使う本人に力が逆流し、手が付けられなくなる程の力を発揮してしまう。

昔我が晴信に敗れて、甲斐から追い出された時もそうやって負けた」

「回想してる暇あったら手を動かすつす！ 武田の増援が来たらまた鬼が増えるつすよ！」

少しずつ、少しずつ、鬼が切り伏せられ、倒れていった。

無論、第七騎兵団もまた無傷の者は無く、少くない人数が落命していたが、それでも少しずつ鬼が制圧されていた。

「さあさあ！ どんどんかかって来るのですよ!!」

三河の本田忠勝はここにいるのですっ!!」

特に目覚ましい活躍をしていたのは、綾那だった。

殺到する鬼の剣を、弓矢を、槍を、牙を、爪を全て払い落とし、次々と鬼の首を斬って

いった。

穂先に蜻蛉が留まった際に、あまりの鋭さに蜻蛉が斬られたと噂される綾那の愛槍・蜻蛉切りは、既に10を越える鬼の血を吸っていた。

しかも、綾那の勢いはまるで衰える気配が無い。

そしてついに劍丞と美空が周囲を守る鬼を抜け、光璃の元へと辿り着いた。

それが見えた瞬間……九十郎は駆けだした。

「光璃いいいいいいーっ!!」

光璃の名を叫びながら、目に大粒の涙を蓄えながら、九十郎は走る。

第七騎兵団を力任せに押しつけ、犬子や柘榴を追い抜かし、光璃の元へと一直線に走っていた。

「晴信！ 今度という今度こそお!!」

「光璃……すまない!!」

美空と劍丞が同紙に光璃に斬りかかる。

九十郎がダイビングキヤッチのように跳躍する。

そして……美空の姫鶴一文字が九十郎の右肩を貫き、光璃の心臓を同時に貫いた。

「なんで……なんでよう？　なんでそこまでしてソイツを守るのよ！」

美空がどこか悔しそうで、泣き出しそうな程に辛そうに奥歯を強く噛んでいた。

人によつては、単なる優柔不断の結末だとか、場当たりの対応だとか言つて非難するかもしれない。

しかしこの瞬間、九十郎もまた決断していたのだ。

美空や劍丞と同じく、己の魂に問いかけ、結論を出し、行動をしたのだ。

……それでも、光璃を殺す手伝いはできないと。

「すまねえ美空、ごめんな劍丞。俺自身分かつてるんだよ。

美空が正しい、劍丞が正しいってな。

こうなつちまつた以上、光璃はどうしても倒さなきゃならねえ事も分かつてるんだ」
「だったらどうしてよ！」

「光璃だからだよ、俺の大事な幼馴染だからだ。

難度考えても、それ以外の理由は思いつかねえ。それと……」

激昂する美空を尻目に、九十郎は自分と同時に刺し貫かれた光璃の頭をそつと撫でる。

血塗れの腕で、血塗れの頭をそつと撫でる。

「ごめんな、光璃。俺はお前を守れなかった」

九十郎はそう言うのと、傷の痛みには耐えながら優しく微笑んだ。

「ア……アア……」

光璃の肩が震える。

光璃の腕が震える。

光璃の声が震える。

ぼろりと一筋の涙が伝う。

鬼となったこの身であっても、致命傷。

自分は間もなく死ぬ……にも関わらず、目の前の男は最後の瞬間まで光璃を守ろうと
していた。

せめて少しでも痛みが和らぐようと、優しい笑みを浮かべていた。

自身も肩を刺し貫かれ、激痛があるのになだ。

「アリガトウ……」

自然と、光璃はそう告げていた。

九十郎に対して、光璃はそれ以外に伝えるべき言葉が思いつかなかった。

そしてそれが、光璃の最後の言葉になった。

光璃の身体が粒子のように細かく崩れ、煙のように消滅した。

「これで……これで良かったのか、俺は……」

最後のトドメは美空の剣によるものだった。

最後のトドメを刺す瞬間、美空が劍丞を押しつけた。

たぶん、劍丞が自分の妻を刺し殺すのは忍びないから……

そして心のどこかで、あの瞬間、美空に押しつけられて自分は安心していた。

自分の手で光璃を……愛する嫁の一人を刺さずに済んだと安心していた。

そんな一瞬の安堵が、コールタールのように劍丞の良心に纏わりつき、締め上げていた。

「信虎、貴女の気持ち、ちよつとだけ分かったわよ……」

そして美空は、心の奥底で泣いていた。

心の奥底で震えていた。

九十郎は最後の最後に、自分ではなく、柘榴や犬子でもなく、武田光璃晴信を選んだ……それがショックだった。

光璃の肉体が完全に消滅したと同時に、光璃を守っていた鬼達も一斉に倒れ伏し、纏っていた瘴気が消え……驚くべき事に、人間としての姿を取り戻していた。

「終わったんだな……やつと……」

「どうやら一件落着……と言いたるところだけど、そういう訳にはいかないようね」

九十郎をこれ以上傷つけないように、美空が肩に刺さった剣を抜き、止血の為に自分の陣羽織をきつくきつく巻き付ける。

劍丞は淡く輝く劍の柄から電池を取り出し、鞘へと納める。

「ち……ちくしょう……俺のせいだ……俺のせいで、光璃が……」

俺がもつと早く、光璃に気づいていれば……」

九十郎は慟哭し、号泣していた。

「九十郎……これからどうなっちゃうの……?」

「わかんねーつすよ、柘榴にも」

犬子も柘榴も、九十郎にどう声をかければ良いのかまるで分らなかつた。

かつて犬子が劍丞に抱かれているのを目撃した時と同じか、あるいはその時以上に深い深い悲しみに包まれていた。

「やあやあ、どうやら無事終わったみたいだねえ」

そんな中、空気を読まずに今までずっと姿を現さなかつた一二三が皆の前にひよつこりと顔を出した。

「いやあ、御大将……おっと、元御大将が鬼になった時はどうなるかと思つたし、

九十郎が飛び込んでいった時はヒヤツとしたけど、どうにかなって良かった良かった

た」

一二三がそう言つて笑つた。

その笑みが……九十郎の心に強く、深く突き刺さつた。

次の瞬間、ドカツ!! と、顎が變形するのではと思ふ程強く、九十郎は一二三を殴りつけていた。

「え……?」

一二三は信じられないといった表情で尻餅をつき、呆然と九十郎を見上げていた。

一二三が九十郎の前に顔を出したのは、褒めてもらうためだった。

大変な立場を見事完遂した事を褒めてほしかつた。

九十郎に優しく笑いかけてほしかつた。

だが現実には……九十郎の表情は深い絶望と、強い怒りに満ちていた。

「な、なんで……? あぐつ!!」

一二三が何故と問うのを無視して、九十郎がもう一度一二三をブン殴つた。

頬の骨にヒビが入り、顔に大きな青あざができた。

「二度とそのツラ、俺に見せるな……」

酷く狼狽し、酷く困惑する一二三に、九十郎は強い強い憤りと共にそう告げていた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第136話『第二次これからどうしようか会議』

「何を書いてるんだ、担庵？」

大江戸学園……現代ニホンのトップエリート達はその溢れる才能をゴミ箱にダンクシュートし、俺はここだけ一足お先と光の速さで明後日の方向にダツシユする魔境。

そんな大江戸学園の斎藤九十郎が、筆をとるセカンド幼馴染にそう声をかけた。

「これかい？ これは、そうだな……男性にモテるコツかな？ 友人に頼まれてね」

「担庵に男性にモテるコツ、ねえ……」

「どうやら私は、それなりにモテるらしい」

「ははは、世も末だな」

「違うないね」

苦笑しながら、担庵が筆を滑らせる。

幼い頃から習字をしているだけあって、九十郎の乱雑な字と違って綺麗で読み易い字をしていた。

「どれどれ……男は剛を以って徳といたし、女は柔なるを以って用といたし候事に候間、

身を修め候には敬にしくはこれなく、つよきを避け候には順にしくはこれなく候事故、

敬慎の道は婦人の大礼に候……」

九十郎が後ろからひよこつと首を伸ばし、担庵が書く文書を覗き見る。

割と古風な書き方をしているが、九十郎にも読めなくも無い。

そしてそれを最後まで見た感想は……

「お前何時代の人間だよ」

「現代ニホンの人間だよ、君と同じく」

「なるほど完璧な作戦っスね」

「不可能だという点に目をつぶれば……だろう？」

「そうだよ、自由・平等・博愛のフランス革命精神にすら追いつけちゃいないぞこれは」

この時、担庵が書いていた文書は、早い話『女は黙って男に従っておけ』というものだ。

人は平等という現代社会の基本精神に真つ向から唾を吐くような内容だ。

だが……

「だが……コレが自然にできりゃ、モテるだろうさ」

「だがしかし、そこまでしてモテたいかという問題もある」

「楽しくない人生だろうよ」

「願わくば、心の底から平伏し、

身も心も差し出せるような男性に出会っていただきたくないものだ」

「担庵にモテ方聞いている時点で臨み薄だろ」

「はっはっはっはっはっ！」

担庵が大笑いをしながら筆をおいた。

筆を置き、完成した文章を読み返し……ため息をついた。

「私がモテる理由を、私なりに分析してみたんだよ、これは」

「お前って事なかれ主義みたいな所あるからなあ」

「ああ、そうだ……あの娘の時もそうだ。

最後の最後まで匿い続けていれば良かったんだよ。

本人が何を言おうとも、私の目の届く所に……」

担庵の声のトーンが、明らかに変わった。

手が震えていた。

脚も震え、肩も震えていた。

「……なあ、担庵」

九十郎が独り言のように呟いた。

担庵の……九十郎のセカンド幼馴染の手がピタリと止まった。

「高野や渡辺がくたばったのはお前のせいじゃない」

高野、渡辺……それはかつて九十郎や担庵のダチ公だった者達の名だ。

現代ニホンにおけるトップエリートが集まる大江戸学園の中でも特に優秀な才覚を示した者たちの名だ。

片や割腹自殺、片や捕縛の際にうつかり力を入れ過ぎて撲殺……現代ニホンにおけるトップ中のトップの才覚は無駄に、無意味に散華した。

ニホンを導くエリートを養成するという目的を持つ大江戸学園にとって、余りにも余りにも大きな痛手だ。

だがしかし、その2人を殺したのは、大江戸学園の持つ独特な歪みそのものなのだ。

「私は……私なら助けられたんだよ……」

担庵はぼそりと呟いた。

平静を保とうと必死になりながらも、心の中は呪詛で一杯だ。

「助けられた、どうにでもできた。 だけど……」

「墓参りには毎年行ってやってるだろ、あの悪ガキ共にはその程度の扱いで十分だ」

「だけど……」

それでもと続けようとした担庵の頭を、九十郎はわしやわしやと力強く撫でた。

「俺以外にそんな情けねえ泣き顔、見せるんじゃないぞ。」

桂や二宮、万次郎とかが心配するからよ」

「ああ、分かっている。分かっているき、弟分」

担庵は泣いていた。

ぼろぼろと止めどなく涙を流し、これ以上無い程に情けない顔になっていた。

本当に本当に、悲しそうな顔をしていた。

……

……

……

一二三が何故と問うのを無視して、九十郎がもう一度一二三をブン殴った。

頬の骨にヒビが入り、顔に大きな青あざができた。

「二度とそのツラ、俺に見せるな……」

酷く狼狽し、酷く困惑する一二三に、九十郎は強い強い憤りと共にそう告げていた。

一二三の血が付着した右拳再び握りしめ、怒りに任せて振り上げようとしたその瞬間

……

「ひっ……」

一二三が怯えていた。

いつも飄々として、白刃を向けられようとも、悪意や害意、殺意を向けられようとも平然と笑う表裏比興の者が初めて怯える姿を見せた。

「あ……」

そんな一二三の表情を、怯え切った目を見た瞬間、九十郎は前の生の事を……九十郎のセカンド幼馴染の事を思い出した。

親友を次々と喪い、自分だけがのうのうと生き延び、人知れず慟哭していた時の幼馴染と同じ目をしている……九十郎はそう思った。

感情に身を任せて一二三を殴る事が、あの日、友を喪い涙するセカンド幼馴染を殴るのと同じ事のように感じた。

「この馬鹿っ!!」

九十郎の動きが留まった次の瞬間、今度は九十郎の顔面に拳が叩き込まれる。

「あんたと武田晴信がどんな関係だったかは知らないし分からない! でもねえっ!

こつち勝たすために誰よりも困難で、誰よりも危険な橋を渡った相手を、いきなり殴りつけて良い理由に何てなりやしないわよっ!!」

九十郎を殴りつけ、怒鳴りつけたのは長尾美空景虎だ。

「九十郎、一二三に詫び入れなさい」

美空が九十郎に謝罪を要求する。

九十郎はしばし瞑目し……この男にしては珍しく反省し……

「すまん、一二三。光璃が死んで……気が立って、いや……」

お前が光璃を殺したのかと思って……」

「変な言い訳しない！ さっきの無礼な行い、私からも謝らせて。

それと感謝を、貴女のおかげで勝てたわ」

美空が深々と頭を下げる。

「あ、あはは……いや、私は全然気にしてない……気にしてないよ……」

一二三が引き下がる。

表面上は笑みを浮かべて……だけど、その笑みが無理矢理作っているものだというこ
とは、美空にも、九十郎にも、犬子や柘榴にもすぐに分かった。

一二三は聡明だ、

聡明で、他人の思考や感情を推し量るセンスがある。

だから先程、九十郎が本気で怒り、本気で憎んでいるのだと分かってしまったのだ。

「ああそうだ、悪いけどこれからやる事があるから、一旦失礼させてもらうよ。

今後の事も話さないといけないけど、それは後でという事で」

「ええ、そうね」

一二三がぼたぼたと落ちる血をそのままに、そそくさと逃げ出すかのようにその場か

ら立ち去った。

「……本当にごめんなさい」

その余りにも悲痛な後ろ姿を見て、美空はそう呟いた。

「九十郎、あんたは今回、

切腹を申し渡されてもおかしくない程にやらかした事、自覚してる?」

「そうっすね、流石に今回は擁護できねーっす」

「いきなり信虎さんを斬りつけて、晴信を殺すのをやめろなんて無茶言っつて、

今度は一二三を殴りつけて……いくらなんでも酷すぎだよ、今日の九十郎は」

九十郎は何も言わない。

ファースト幼馴染である光璃を殺す手伝いをしてしまったショックは当然ある。

美空や柘榴を裏切り、信虎を傷つけ、一二三を傷つけた事への罪悪感もある。

もう少しどうにかできなかつたと自問自答する。

信虎を斬り、一二三を殴った右腕がずきんと痛んだ。

「勝つには勝ったけれど、これからやらなきやいけない事、

考えなきやいけない事が山積みよ。

晴信の死に動揺している間に、できるだけ武田の力を削いでしまわないと」

「武田は地方豪族の寄り合い所帯っすからね」

「ええ、ここから先は調略、引き抜き、外交の戦いになるわ。

どの順番で話を持っていくか、誰にどんな条件を提示するべきか、誰を見せしめとして惨たらしく踏み潰すか……

武田の内情を知る一二三に相談に乗ってほしかったのだけど」

「……一二三、戻ってくるかなあ？」

「わからないわ、全然」

その意味では、先程の顔面パンチは見事なまでに的確に美空を苦しめていた。

そして……

「……柘榴」

「え？ 柘榴が言うっすか？」

「柿崎の家臣でしょうが！ 陪臣に直接処分言い渡したりできないわよ！」

「そう言えばそうだったっすね……ごほん」

柘榴が軽く咳ばらいをして、険しい表情で佇む九十郎の前に回る。

「追って沙汰あるまで、謹慎を命じる……っす」

後に第四次川中島の戦いと呼ばれるこの戦は、終わりを告げた

……

……

.....

「はい！ 第二次これからどうしようか会議い〜〜!!」

「どんどん！ ぱふぱふ！ ぴーぴーぴーつすよ!!」

「てめえら本当にシリアス長続きしねえのな!!」

その日の夜、越軍の陣幕の片隅に急遽設営された座敷牢つきの掘つ建て小屋でシリアスさんが爆発四散していた。

「仕方ないでしょ、九十郎が座敷牢にいるんだから」

「まさか謹慎命じられて素直に謹慎するとは思ってもみなかったつす」

「柘榴、お前後で覚えてろよ」

「エロい御仕置きつすよね、超楽しみにしてるつす」

「瘴気とやらはキツチリ抜いておいたから、後で好きなだけくんずほぐれつヤツてなき
い。

私は邪魔しないから」

「俺は今謹慎中なんだがな」

「謹慎中つつつたつて、夫婦の営みは禁止されねーつすよ」

「悪いが、今回ばかりは本当にしばらく放つておいてくれないか。俺は……俺は……」

脳裏に浮かぶ………光璃の死に顔が。

脳裏に浮かぶ……自分に斬られた時の信虎の顔が。

脳裏に浮かぶ……『二度とそのツラ見せるな』と言われた時の一二三の顔が。

誰よりも大事な幼馴染を守り切れないどころか、知らぬ内に殺す手伝いをしていた事。

晴信を倒すという同じ目標を持ち、共に力を合わせてやってきた仲間を身勝手な理由で裏切り、叩き斬ろうとした事。

そして……一二三を泣かせた事。

どれもこれもが九十郎にとって死にたくなるような出来事だ。

「信虎の怪我は？」

「大した事無かったわ、見た目ほど深手では無かった。

手加減したのでしょうか？ 意識してか無意識にかは分からないけれど」

「松葉は」

「かなりの深手つす。意識も戻ってねーつすから、あるいは……」

「できるだけの事はしたわ、後はあの娘の気力と体力を信じる他ないわ」

「じゃあ……」

今度は光璃の事を聞こうとして……やめた。

光璃は死んだ。

九十郎の目の前で鬼になり、美空に斬られて消滅した。

あれ以上明確な『死』を見ておいて、今更何を聞けと言うのか……

「一二三は……」

「その後、何組か人をやって探させてるわ。今の所、見つかつてはいないけれど」

「勝ち戦とはいえ、戦の後つすからね。」

色々情報は錯綜して、どこも人手不足になるつすから……」

「そうか……見つかったら教えてくれ。謝らないとな……一二三にも、信虎にも」

謝って済む話じゃなからうが……と、九十郎は心の中で付け加え、さらに深く暗く沈んでいく。

「とりあえず、今後どうするか考えましょう。」

本当は一二三も呼ぶつもりだったのだけど……」

「いないものは仕方ねーつすよ。2人共、もう入ってきて良いつすよ」

柘榴が外に声をかけると、引き戸ががらつと開き、2人の男女が入ってくる。

男性が若干距離を取りながら、女性は数珠のように紐で繋がれた……生首を持って。

「それは7つ集めても神龍（シエンロン）は出ないぞ、たぶん」

「開口一番それか、クズロー……」

最近あんまり出てこなかった鬼子、新戸が7つのエーリカの生首を持って……いや、

引きつって入って来た。

当然、男性……新田劍丞はドン引きである。

「で、何でお前は例の増えるエーリカの首を抱えているんだ」

「刈ってきた」

まるで山に芝刈りに行くかのような気楽さである。

「人が大変な目に遭ってる時に……」

「時間と共にオーデインはこちら側に干渉ができるようになるからな。」

今のうちにできる限り向こうの手駒を減らしておきたい」

「残り何人だ？」

「……分かんが、10よりは少ない筈だ。できればそう信じたい」

「正直に言つて、今でも信じられないよ。」

エーリカがエインヘルヤルで、この時代の英雄の魂を収集するために動いていたなんて」

劍丞がゴロンと地面に転がる生首達をそつと拾い、付着する泥と血を拭う。

どの首も彼が出会い、彼が知るエーリカと瓜二つだ。

その事に、劍丞は何とも表現し難い薄気味悪さを覚えていた。

「それはそうとして、オーデインの計画……全二ホン劍丞ハーレム計画だっけ？」

「その名づけ方はクズローだな？」

「まあそうね、とにかくその計画からすると、劍丞と晴信がくつつくと拙いと思つて、取り急ぎ晴信を始末したわ。少しは計画から外れたかしら？」

そう尋ねられると、新戸はしばし瞑目し、大きく深呼吸をしながら精神を集中させる……

「……オーデインの気配が大きく遠ざかった」

美空が小さくガツポーズをし、劍丞と九十郎の顔が僅かに沈む。

「もう少し……もう少し他にやり方は無かったのか……う？」

「遅巧よりも拙速よ、劍丞。」

時間をかけたら、アンタ武田の家中全員を嫁にしかねないじゃないの」

「そ、それは……」

武田での出来事を……特に、光璃と兎々に押し倒された時の光景が脳裏によぎる（第125話）。

まるで呪いにもかけられたかのように、まるで洗脳されているかのように、甲斐の武田晴信が自分に惹かれ、自ら衣服を脱ぎ捨て、自分のモノに跨ってきた時、嬉しいと思う以上に背筋が凍った。

オーデインが何か仕込んだのでは、自分や光璃はそれに操られているのではと思う

と、心が震える。

あるいは……誰よりも大事な嫁である久遠すらも、そうなのではないかと思うと、震えが止まらなくなる。

劍丞は信じたい、信じたいのだ。

久遠が語る愛の囁きを、『好き』の一言を……どんな言葉よりも信じたいのだ。

「だが、残念ながら武田信玄の魂はオーデインの手に落ちた。

今後おそらく武田信玄のエインヘルヤルが……」

言い終わらぬ内に、ドンツ！ と強い衝撃が胸に当たる。

座敷牢の奥から丸太かと思間違えそうになる太い腕が伸び、新戸の胸倉を掴み上げていたのだ。

「……おい糞ニート、今何て言った？」

……鬼気迫る表情だ。

大事な大事な幼馴染の魂が、妙な計画で英雄の魂を集めている妙な連中の手に渡った事に、怒りと焦りを隠しきれずにいた。

「クスロー？」

新戸は訳が分からないと驚き、戸惑い……九十郎の心を読んだ。

「え……？ これは……な、何で……？」

瞬間、新戸の心がさらに大きな驚きと戸惑いで一杯になる。

戦国時代の武田晴信は、現代ニホンの武田光璃である……それは九十郎にとつては確固たる事実であるが、新戸にとつて……無数の並行世界を生きる無数の虎松達にとつて、絶対にありえない事なのだ。

「クズロー、おかしい。それは変だ」

「何が変わった!? 他人の幼馴染が妙な連中に攫われたようなもんだろっ!!」

落ち着いてなんていられるかよっ!!」

「そうじゃない! 時系列がぐちゃぐちゃだ!」

「時系列だあ……?」

「クズロー、光璃に会ったのか?」

「ああ、会ったよ。あれは間違い無く光璃だった」

「光璃はクズローの事、覚えていたか?」

「いや……」

「なら猶更おかしい。現代ニホンの武田光璃は、クズローと会った。

現代日本で17年生きた。クズローは光璃の影響で今の性格になった。

そんなクズローが一度死に、戦国時代に生まれ、25年生きた……」

「どこがおかしいんだ?」

「戦国時代で、クズローとまだ出会ってない光璃と会った。

僅かな時間でも、クズローと会って、影響を受けて……

そして現代ニホンに生まれ変わり、

光璃とまだ出会っていないクズローと出会ったのなら……

やはりそうだ、間違いなくループしている」

「ループって……言われてみればそうだな、俺は一体どこから来て、どこへ行くんだ？」

「現代ニホンで、早雲はクズローを邪魔に思い、殺した」

「おいちよつと待て、俺がどうしたって？」

「殺して、魂は戦国時代に送った……オーデインの計画を狂わせる一手になるかもと」

「いや待てよ！ 俺は殺されたのかよ！ 事故じゃねーのかよっ!!」

「なら……オーデインも同じ事を考えた？」

邪魔な早雲の計画を潰すために、異物を送り込んだ？

互いに送り込んだ異物が、それぞれの時代で、互いに影響を与え合ったと気づかず

……

そんな事をすれば時系列も因果関係もぐちゃぐちゃだ、收拾がつかなく……」

そこまで呟くと、新戸がハツと気づき、天を見上げる。

「オーデインの能力は……因果関係を操作する能力……」

もしも因果関係が、收拾がつかない程にぐちゃぐちゃになれば……」

それは生まれて初めて感じる……全ての並行世界の虎松達が願ってやまなかった、神のミス、オーデインの失策である。

「勝てるかも……もしかしたら、本当に勝てるのかもしれない」

新戸がそう呟いた。

その目は確かな希望を見出し、爛々と輝いていた。

「因果関係の矛盾が起きて、重大なエラーが起きて、

オーデインが構築したシステムが機能不全を起こしているのかもしれない……」

「いや聞けよお前えっ!! 何かさつき俺が殺されたとか言つてなかったか!」

「……気ノセイダゾ」

超棒読みであった。

「御大将、どう思うっすか?」

「後でとつちめて色々聞き出すわよ、後で……」

でも今重要な事は、私達は思っている以上にオーデインを追い詰めてるかもって事、

今考える事は、これからどうするべきかって事でしよう」

「劍丞の嫁になりそうな大名をぶちぶちと潰して回るとかどうっすか?」

「だ、駄目だ! そんな事したら絶対に駄目だっ!!」

劍丞が大慌てで反対に回る。

今日の戦は武器の差、情報の差で制したものの、いくらなんでも日本中全部を敵に回して連戦連勝とは思っていない。

新兵器というものはいくら優れていたとしても……いや、優れていればいる程、対策が立てられ、類似品が出回るものなのだ。

「……蘭丸を倒す。それでオーデインの計画は完全に崩壊する」

「桐琴から産まれた鬼子か……」

「どうしてソイツを倒す事がオーデインの計画阻止に繋がるのかしら？」

「本人にその自覚は無いと思うが、アレはおそらく、」

オーデインが用意した計画遂行のための最大にして最後のセーフティネットだ」

「せ、せえふてい……？」

「つまり、計画が当初の予定通り進まなくなった時の備えて事だろ」

「その洗脳能力で、この時代の英雄、英傑を残らず支配下に置き、」

無理矢理にでも新田劍丞の妻になるように仕向ける……

重ねて言うが、本人にはオーデインの計画を手伝っている自覚は無い。

アイツはただ、本当の愛を探しているだけ、

そのために劍丞を利用している程度の感覚しかない」

「俺を利用して……無理矢理……」

ぎりいつと劍丞が奥歯を噛みしめる。

久遠や一葉、詩乃や小波との出会いや想いを……愛を……それら全てを、劍丞が尊いものだと思う全てを否定するも同然の計画に、怒りを覚えていた。

「倒すと言つても、どうすりや良いっすかね？」

柘榴達はあいつがどこで何をしてるのか分からねーっすよ」

「それは問題無い、蘭丸は今、オレやクズローを殺すために動いている。

越後長尾家と互角か、それ以上に戦える勢力を丸ごと洗脳して味方につけ、

近々戦いを挑んでくる……あいつは毎回、ワンパターンだからな」

「そう……なら、次の戦いに勝ちさえすれば、オーデインの計画はどうかできるって事ね」

「まともに戦えさえすれば、蘭丸を殺すのはそう難しい事ではない。

蘭丸の身体能力は転子と同程度だ」

「つまり、俺の神道無念流の敵ではないって事だな」

「だが、奴とマトモに戦えるのはオレと劍丞だけだ」

「洗脳能力ね……」

柘榴は直接対峙して、美空は柘榴から聞いて、森蘭丸という名の鬼子の能力を知って

いる。

新戸は話が早いと説明を続ける。

「ああそうだ、オレは超能力で、劍丞は劍魂の機能で洗脳を防げる。」

「だが他の人間は駄目だ、目が合っただけ、声を聞いただけで瞬時に洗脳される」「前に九十郎が戦ってなかつたつすか？」

「あの時、オレは全神経を集中させて九十郎の洗脳を防いでいた」

「……実質一人ね、それじゃあ。つまりこういう事？」

「軍と軍による戦いでは決して勝てないと」

「後に、九十郎は蘭丸との戦いを『傾世元禰持つてる相手に太極凶無しで戦いを挑むよ
うなもの』と表現する。」

「蘭丸と戦うというのは、本当にそう言う事なのだ。」

「味方の将兵全員が、能力の射程距離に入った瞬間裏切つて斬りかかって来るわね。」

「今日の九十郎みたいに何の前触れも無く、唐突に」

「……戦いにすらならねーつす」

「つまり蘭丸を倒すには不意打ち、暗殺しかないって事……そうよね？」

「オレもそう思う、それ以外に方法は無い。」

「そして蘭丸と戦つた並行世界の無数のオレ達もまた同じことを考えた。」

そして……1人の例外無く蘭丸に負けた、1人の例外無く」

「勝てないって、どうしてよ？ 貴女は蘭丸に洗脳されないのでしょうか？」

「……俺はセックスが苦手だ」

「はあっ？」

あまりにも唐突な話題転換に、美空が思わず眉を顰める。

「もう少し説明すると、セックス中、絶頂の瞬間生物の精神は無防備になる。

洗脳や催眠……他者の精神に干渉する能力への耐性がほぼ無くなる」

「かも……しれねーっすね……」

柘榴は思わず、蘭丸のち〇こを思い出した（第77話）。

ほんの僅かに思いを巡らせるだけで背筋が凍る。

あの神々しさすら感じる程美しき肉竿は、あまりにも異様だ。

一度挿入されれば、きつとあまりの快楽に発狂死してしまうのではと思う程……

あの魔性の肉棒と恐るべき洗脳能力が重なればどうなるか、柘榴は想像し、恐怖した。

「剣丞ならどう？ あまり使いたくないけど、剣魂つていうのを使えば……」

「絶頂し、無防備になった精神を保護するのは、剣魂でも相当な無理を重ねないといけ
ない。

一度や二度ならともかく、三度、四度と重なれば過負荷によって自壊する。

金ヶ崎の時のように」

「あの時の……」

今度は劍丞が、金ヶ崎で蘭丸と戦った時を思い出す（第68話）。

いや、あれは戦いなんてものではなかった。

洗脳能力で全員同時に金縛りにあい、押し倒され、犯され、情けなく何度も何度も絶頂して、射精して……余りにも一方的で、およそ戦いと呼べるようなものではなかった。

そして新戸が言うように、劍魂が蘭丸の発狂死を防ごうとして、砕けてしまったのだ。絶望的過ぎる状況を再確認した所で、全員の発言が無くなる。

まるでお通夜のような……いや、お通夜よりも酷い重苦しい沈黙が辺りを覆う。

「糞ニート……いや、新戸、どうすれば良い？」

九十郎が珍しく危機感を持ち、姿勢を正して新戸にそう尋ねる。

こういう都合の良い時だけ新戸に頼る所が九十郎である。

「……賭けるしかない」

新戸はそう言うしかない。

そう答えるしかない。

蘭丸をどうこうするアイディアがあるのなら、もつと早く別の虎松が蘭丸を打倒している。

「長尾景虎が劍丞のモノにならず、越軍に時代錯誤の強力な武器が備わり、武田信玄が戦に敗れ、命を落とす……」

「ここまでオーデインのシナリオが大きく崩れた事は過去に例が無い」「オーデインのシナリオが崩れれば崩れる程、

オーデインは打てる手立てが少なくなるのだったわね？」

美空が以前新戸から教わった事を再確認する（第119話）。

「そうだ、そしてクズロー達が武田と戦っている間、

オレはこうしてオーデインの手駒を減らしておいた」

新戸が数珠繋ぎの生首をポンポンと叩いてアピールする。

傍から見れば猟奇殺人犯であるが、当の本人は大真面目だ。

「蘭丸、森蘭丸……か……」

かつて後一步まで追い詰めた鬼子の顔を思い出し、九十郎はふと窓から見える空を見上げる。

西の空には夕日が半分姿を隠し、東の空には僅かに星が瞬きつつあった。

……

……

……

「二度とそのツラ、俺に見せるな……か……あは、あはははは……」
その頃、一二三が乾いた笑いをしながら、とぼとぼと戦場を歩いていた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第138話『蘭丸の策』

第四次川中島の戦いから一夜が明けた。

この戦いで武田光瑞晴信が死んだ。

九十郎がもたらしたドライゼ銃と、九十郎がしこたま作り溜めた弾薬に圧倒され、自らを鬼に変えて抵抗を試みるも、美空の手で討ち取られた。

この戦いで夕霧が、湖衣が、自来也が、そして一二三が死んだ。

脳神経がズタズタになり、発狂死する程の強烈な快樂をブチ込まれ、蘭丸によつて頭の中身を書き換えられた。

今、戦場跡地に静かに横たわる4人は、見た目こそ依然と全く変わらないものの、その中身は……つまり、精神の構造は全くの別物だ。

彼女達は既に、新戸と九十郎を引っかけ、自分に有利な戦いの場に引っ張り出すための釣り針、森蘭丸の操り人形と化している。

そして多数の名も無き将兵達が……特に甲軍の将兵達が屍を晒していた。

「おい、こっちは上物だぞ」

「銭束だ！ こいつは良いなあ！」

死体剥ぎ達が屍から金品を奪っていた。

近隣の土民、貧農もいれば、越軍に参加して、ドライゼをぶつ放していた雑兵達もいる。

この時代、戦いの後の剥ぎ取りは、力無き者達の役得として当然のように行われる。そんな光景を……新田劍丞が乾いた目で見つめていた。

「いくらオーデインの計画を止めるためとはいえ、これはやりすぎなんじゃないのか……」

劍丞がそう呟く。

その強い強い憤りの目も、失望に満ちた声も、気づく者は誰もいない。

少なくとも劍丞の目には、美空がやった事は大量殺戮に他ならない。

劍丞にとって、甲斐で生きる人々も、越後で出会った人々も、等しく人間だ。

生活があり、家族があり、愛があり、情があり……人生があった。

そんな人間を大勢……本当に数えきれなくらいに無慈悲に射殺したこの行いを、劍丞は認める事も、許す事も出来そうになかった。

そして同時に、この無残な光景が現実のものになる事を止められなかった自分の無力さを嘆いた。

「エーリカ……君に会いたい。

君は本当に敵なのか？ 俺にはどうしてもそれを信じる事が出来ない。

そしてオーディンは……オーディンは何のために英雄の魂を集めようとしているんだ？

話し合う事は……分かり合う事はできないのか？

こうやってハナツから敵と決めつけて武器を向け合うなんて事、正しい訳が無い」

劍丞がそう呟いた。

劍丞自身、今の自分の言葉が、今の自分の考えが甘いというのは理解している。

現代人特有の、戦国時代をしらない若造の考えと理解している。

だが……

「人殺しを当然と思っちゃいけない、殺し合うのが必然と思っちゃいけない。

殺し合いを止める方法はある、きつとある。そこだけは譲れない、譲っちゃいけない」

劍丞は1人静かに決意する。

もう一度考えよう、考えたら行動しよう……そう決意した。

「あ、あのう……劍丞様……」

そんな劍丞の元に、1人の少女が現れる。

その声に聞き覚えがあり、その顔には見覚えがあつた。

「君は……湖衣ちゃん!? 無事だったのか!？」

劍丞が甲斐で知り合った友人の無事を目にして、思わず顔が綻ばせた。

手にも足にも胴体にも傷があり、出血なのか返り血なのか衣服や鎧は血塗れであったが、少なくとも今すぐ生命にかかわるような重傷があるようには見えなかった。

「はい、どうにか追っ手を撒く事ができました。」

ただ……典厩様と途中で逸れてしまい……」

無論、今の湖衣の言葉は嘘だ。

真実は蘭丸に別行動を命じられたため、この場に夕霧がいないだけだ。

だがしかし、蘭丸に頭の中身を全面的に書き換えられ、記憶の中も弄られた今の湖衣に嘘を言っている自覚は一切無い。

本心から、越軍から逃げ回る中で夕霧と逸れたと思っっているし、途中でその辺の雑兵達に強姦された記憶も、一二三や蘭丸と会った記憶も無い。

「夕霧も無事だったのか!？」

劍丞が驚愕で大きく目を見開いた。

典厩武田信繁、そして山本勘助……劍丞の知識では、どちらも川中島の戦いで戦死した者の名だ。

正直に言って、夕霧と湖衣の生還は絶望的だと思っていた。

「と、途中までは……御家流で探したいのですけれど、少し休まないと……」
湖衣が申し訳なさそうに目を伏せる。

これから言う事は劍丞の立場を危うくさせかねないお願いだ。

半ば無理矢理甲斐に連れて来られた事での出会い、ほんの数回言葉を交わしただけの劍丞にこんなお願いするのは無理だし、無茶だと思つてゐる。

劍丞のお人好しに付けこむようなものだど理解している。

……が、今湖衣が頼れるのは、劍丞だけだ。

「お願いします……ほん少しの間だけで良いですから、匿つてください！」

少し休めば、また御家流が使えるようになります！

そうすればきつと……きつと典廐様を探せます！ それまでの間だけで構いません

！」

湖衣がその場で土下座をした。

ここに来るまでで全身がボロボロになるまで戦い、傷つき、疲労と痛みで立つのもやつとだろうというのに、それでもなお湖衣は夕霧を助けようとしていた。

劍丞は思う……この娘を死なせたくなないと。

同時に劍丞は思う……馬鹿正直に美空に報告すれば、美空はこの娘を殺すか、少なくとも利用しようとするだろうと。

あるいは、越後を発った直後の劍丞であれば、美空の人間性を信用し、利用するにしてもそこまで酷い事はしないだろうとでも考え、美空に今の湖衣の窮状を伝えていたかもしれない。

だがしかし今の劍丞には、甲斐に生きる人々を無慈悲に銃殺し、蹂躪し、この地獄のような光景を現実のものにした人物を……その人間性を信じようという気にはどうしてもなれなかった。

だから……

「……分かった、力になるよ」

劍丞は美空には何も言わず、湖衣を匿い、湖衣を助けようと決意した。

湖衣が既に蘭丸によって殺され、目の前にいるのは精神をそっくり作り替えられた別人であり、蘭丸の傀儡であると気づきもせず。

蘭丸は今、美空と劍丞の間に入った亀裂を、新戸と九十郎を殺す作戦に……新戸と九十郎を蘭丸に有利な戦場に引っ張り出し、夕霧達のように発狂死させる作戦に利用しようとしている事に、全く気づけなかった。

そして劍丞は蘭丸の用意した埋伏の毒を、自らの懐に抱え込んだ。

……

……

………

その頃、越軍の陣内、その辺にあつた農家をその辺からかき集めてきた材木で急遽改造して作られた即席の牢獄の中は痛々しいまでの沈黙の中にあつた。

春日、兎々、心、そして薫……昨日の戦で最後の最後まで武田光璃晴信を守らんと足掻き、その晴信が鬼に変貌し、美空に討たれるのを目撃した4人である。

4人の心の中を埋め尽くす感情は1つ……絶望だ。

「これから……ろーなるのら……」

兎々が口火を切った。

誰もが心の奥底で気にしながら、誰もが考えるのを拒絶していた事だ。

「分からないよ、そんなの……私、私は……光璃お姉ちゃんがいないと、何も……」

ぼたりと床に涙が落ちる。

彼女らの間は急ごしらえとはいえ頑丈な木材の格子で阻まれ、手足は鎖で壁に繋がれており、薫の涙を拭える者はいない。

「拙等はおそらく、処刑され晒し首だろう」

次に春日が重苦しく口を開く。

武田四天王は、越後に対して暴れ過ぎた。

過去の行いへの報いの意味でも、対武田の勝利を知らしめる意味でも、武田四天王の

首は有用だろう。

そして同時に、生かしておくには危険すぎる。

「総大将を討ち、御親類衆である武田信廉を捕らえ、武田四天王は皆殺し。

この辺り一帯の豪族達は震えあがり、先を争い長尾に教順を誓うだろう……な……」
絶望がそこにあつた。

春日も、兎々も、心も薫も、生きながら死んでいるかのようだ。

武田晴信が身を削り、命を燃やすかのように詰み寸前の甲斐を立て直した。

春日達もまた、晴信と共に足掻き、戦つた。

戦つて、戦つて、戦い抜き、いくつものいくつもの死骸を踏み越え……夢、希望、未来、全てが音を立てて崩れ去つた。

既に春日達は、心臓が動いているだけの死骸も同然であつた。

「こなちゃん、大丈夫かな……ちゃんと落ち延びてくれるかな。

無茶とか……無理とか、してないかな……」

心が友人の無事を案じて一人静かに祈る。

粉雪は九十郎の知り合い……どう考えてもただの知り合いとは思えない関係だが、とにかく友好的な関係だから、越軍に見つかつても殺されはしなないと思う。

同時に、粉雪が自分達を救おうと襲撃をかけてくる可能性もあると思えた。

故に心は祈る……自分達はどうなっても良い、今この瞬間に首を刎ねられても良いから、どうか粉雪だけは無事でいてほしいと。

甲斐も、武田も忘れ、どこかで無事に生きていてほしいと。

そう願ひ、祈った。

……

……

……

「……で、これからどうするつもりだ？」

「決まってるんだろ、徹底抗戦だぜ。御屋形様が死んだ程度で負けを認められるかだ

ぜ」

「よっしゃ！ そうこなくちゃだな！ んならオレも手を貸すぜ。」

一宿一飯の恩もあるし、越後にや戻り難いしな」

「お前本来の所属、尾張の織田んとこだつて事、忘れてないかぜ？」

「そつちは母に任せた」

「いい加減な奴だな……」

まあ付いて来るつてんなら止めねえけど、当然危険は覚悟してもらうぜ」

「ははっ、望むところだ！」

一方その頃、粉雪と小夜叉、武田の精鋭赤備え達は元気に景虎に一泡吹かせようぜ作戦を立案していた。

粉雪も、小夜叉も、赤備え達も、誰一人として絶望していなかった。

しかし、心の祈りは全く届いていないどころか真逆の方向にぶっ飛ぶ気満々である。

……

……

……

「なーにお葬式みてーな空気出してるでやがるか？」

…… 閑話休題。

粉雪とは違い、武田晴信という名の希望が砕かれ、完全に心が折れている武田四天王の残り3人と薫の前に、夕霧が現れた。

「典厩様!？」

「夕霧お姉ちゃん!? どうしてここにっ!？」

この場所は越軍が用意した簡易の牢獄。

当然、薫達は夕霧までも囚われの身に……つまり、もうじき処刑される身となつてしまったのかと驚愕し、さらなる絶望に叩き込まれる。

「腰縄はついてねーでやがるよ、監視はついてるでやがるが」

「はーい、監視でやがるゝってね」

「真似すんなでやがるっ！」

夕霧と一緒に何故か長尾美空景虎が入って来て、薫達の混乱は一気に最高潮に達した。

「典厩様?! これは……これは一体……?」

「何って、お前らの命乞いに来たでやがるよ」

「い、命乞い……なのら……?」

「色々聞きたい事もあると思うでやがるが、まずはこれを見るでやがる」

夕霧が懐からやや古びた手紙を出した。

その字体、その花押……間違い無く武田光璃晴信の物と薫達には分かった。

「例の桶狭間……義元公が討ち死にしたあの戦が起きる少し前に、

姉上から渡されたものでやがる。自分に万一の事があれば、これに従えと」

武田四天王（粉雪以外）と薫達に読ませるため、夕霧がその手紙を開き、ゆつくりと一人ずつ見せていく。

「自分にもしもの事があれば……」

「典厩様に全権限を預ける……?」

「夕霧お姉ちゃんを私と思い、仕えるように……」

「お、御屋形様、こんなものをろうして……？」

それは夕霧に充てた手紙ではない、夕霧を除く全ての武田家家臣に充てた手紙であった。

それは自分の死後、夕霧に武田家当主の座を継がせるので、夕霧の元で結束し、武田を守れと命じる命令書であった。

「あの頃、姉上はバレるとちよつと洒落にならねー悪巧みをしたてでやがる」

「そ、それは一体……？」

「悪いがそれは言えねーでやがる」

正解は織田、松平と結託して今川義元をブチ殺す策である（第9話）。

それは当時の同盟者を後ろから刺し殺す策。

今川義元亡き後とはいえ、今なおバレると政治的に色々拙い上、バラモスが思っていたよりも強いので先にゾーマを殺しに行くのと同じ位の暴挙であるため、夕霧はこの場では言葉を濁す。

「万一事が露見した時、あるいは策自体が失敗に終わった時、

自分を蜥蜴の尻尾のように切り捨て、

甲斐武田家そのものが沈むのを避けるために用意したものでやがる」

「えつとあの頃だと……あれかな？ いや、例の件かも？ それとも鉾山の事？」

まさか母様の……いや、あれは夕霧お姉ちゃんには絶対に教えない筈だから……
心当たりが多すぎて分からないよ、お姉ちゃん」

「え？ アレの他に何か企んでたでやがるか？」

「むしろ何も企んでない光璃お姉ちゃんを見た事が無いよ」

聞きたいような、聞かなかった事にしたような、夕霧は頭を抱えた。

「しかしそれなら何故この場に來たのですか!？」

「そーなのら！ りさつ（自殺）行為なのらあっ!!」

「私達なんて見捨てて、どうして落ち延びてくれなかったのですか!？」

典厩様がいれば武田を立て直す事が……」

「んな事できねーでやがるよっ！ 武田四天王は誰一人として死なせられねーでやがる

！」

「しかし！ あの長尾景虎がはいそうですかと拙らの助命を認める筈が……」

「いや認めるわよ」

予想外の言葉が当の長尾美空景虎から飛び出し、薫達が硬直した。

「え……何で……?」

「わ、わけがわからないのら……?」

「全員助命はするわ。 現在行方不明の粉雪も含めてね。」

ただし、全員纏めて国元に帰れるとは思わないでもらうわ。

人質も兼ねて何人かは越後に留まってもらう。

武田四天王が全員揃って暴れられたら厄介なんでものじやないからな。

王と宰相をうっかり帰国させたせいで逆襲された呉王夫差の二の舞はゴメンよ」

今回、確かに美空は武田四天王を含めた甲軍相手に大勝し、武田晴信を討ちとる大戦果を挙げた。

しかし、今回の勝利は、ドライゼ銃が実戦初披露であつた事による奇襲のような物だろ理解している。

しかも作り溜めておいた玉薬は大幅に目減りしてしまつた。

武田四天王相手であれば、当然のようにドライゼ銃対策を立てるだろう。

故に同じ戦法で同じように勝てるかどうかは微妙な所である。

「まあ、そのくらいの条件は出すよな。私が景虎さんでも同じ事を言うと思う」

当然、その事は美空も薫達も理解している。

異論を唱える者は一人もいない。

いっそ軽すぎるとすら思える条件だ。

「それとさつき話した一番大事な条件……ちゃんと皆の前で、貴女の口から説明なさい。

それも助命の条件にした筈よ」

「分かつてるでやがる、急かすなでやがる」

夕霧が大きく息を吸い、息を吐き……ほんの僅かに肩を震わせると、皆の方を睨むかのように目を開く。

「……長尾への、全面降伏でやがる」

美空は気づかない。

薫も、春日も、兎々も、心も気づかない。

今日の前にいるのは、皆知っている典厩武田信繁ではない。

典厩武田信繁は森蘭丸によつて精神を破壊され、頭の中を完全に書き換えられているのだ。

本当の夕霧は薫達を見捨てて落ち延び、再起を図るつもりであった。

夕霧が今、越後への全面降伏を決意したのは、蘭丸がそうしろと命じたから……新戸と九十郎を蘭丸に有利な戦場に引つ張り出し、夕霧達のように発狂死させる作戦だからだ。

だがしかし、その恐るべき陰謀に気づく者は誰もいなかった。

夕霧本人すらも、蘭丸に洗脳されているという自覚も無かった。

そして美空は蘭丸の用意した埋伏の毒を、自らの懐に抱え込んだ。

……

.....

.....

一方その頃、粉雪と小夜又はこれからどうするかをあーだこーだと話し続けていた。

「やつばあんな一方的な負け方したんだ、ハッキリ言つて士気がヤバイぜ」

「まっすぐ行つてブツタ斬るんじや駄目なのか？」

「あたいらがどれだけ徹底抗戦叫んだつて、他がついて来ないぜ」

「ならオレらだけでやりや良いだろ」

「お前、吞まず食わずで何日走れるぜ？」

「そりやあ……」

「他がついて来ないつてのはそういう事だぜ、

お前や赤備えがいくら強かろうがそれだけで戦えるもんじやないぜ」

「飯なんてその辺から奪つてくりや良いじやねえか」

「んなもんだの押し込み強盗だぜ！」

強盗が束になったくらいで美空には勝てりや苦勞無いぜ！」

なお、亡武田晴信はその強盗戦法をこれでもかかってくらい多用しているし、粉雪も赤備えもそれに参加している。

「じゃあどうするつもりだよ？」

「味方の心が折れてる、それをどうにかしなきゃ戦いにならねえぜ。」

「このままじゃ雪崩みてえに長尾に恭順し始めるだろうぜ」

「んなモン放っておきや良いじゃねえか。」

「死にたくねーのなら好きだけ逃げりや良い」

「それじゃ困るぜ、そうなる前に……本格的に崩壊する前に、立て直す。それしかねえ

ぜ」

「だからどうするつもりなんだよ」

「世間をアツと言わせる」

「何だそりや？」

「御屋形様が討たれて、心達四天王が囚われの身、まずそれを吹き飛ばせば良い」

「要は戦って勝てば良いって事だな。分かり易いじゃねえか」

「違う、勝ち方を考えるんだよ。大規模な戦いになったら絶対負ける。」

「ただど小規模な戦いであれば、やり方によっちゃ勝利は不可能じゃない。」

「小さく勝って、それを大敗北と同じ位でつかい勝利だつて大げさに宣伝するんだぜ」

「えーつと……ごめん、分かんねえや」

「たぶん九十郎は玉薬を作っているぜ」

「あん？ 材料を混ぜ合わせんだっけ？」

「そうじゃねえ、玉薬の材料そのものをどうにかして作ってるぜ、間違い無く。

そうでなけりゃあ、あんだだけバカスカとドライゼを撃てる理由が説明できねえ。

たぶん……たぶんその場所は長尾の本拠、春日山城のどこかだ」

「何で分かるんだよ？」

「勘だ」

大正解である。

「じゃあ春日山城を焼き討ちしようぜ！ 玉薬作つてんなら派手に燃えるだろ！」

粉雪はちらりと生き残った赤備え達に視線をやる。

全員少なからず披露し、傷ついていたが……一人残らず、確かな戦意を宿していた。

負け犬の目、絶望の目をした者は皆無であった。

このままじゃ終われない。

このまま諦めきれない。

そんな熱く滾る想いが一目で分かった。

「……斬り死にするために行こうって奴は今すぐ失せろ。

死地に飛び込んでなお、生き残る気がある奴だけ、残れ」

赤備え達の中にその場から立ち去ろうとする者は一人もいない。

それどころか、増々戦意を滾らせた。

「はっ、それでこそあたいが鍛えた赤備えだぜ！」

粉雪が満足げに笑うと、多少刃こぼれしつつも、なお輝きを放つ愛槍・紅桔梗を握りしめた。

「春日山城に討ち入りだぜ！ 玉薬を作る場所を突き止め、そこを焼くぜ！」

「おっしや！ そうこなくちや面白くねえ！」

「我等の生き様をみせてやりましょう！」

「甲軍が弱卒ではない事を思い知らせてくれる！」

「越軍何するものぞ！ 長尾を恐れる我等ではない！」

皆が勢い良く立ち上がる。

皆の目的はただ一つ、越後の長尾景虎に一泡吹かせる事。

それが甲斐武田家を立ち直らせる事に繋がると……そう信じて。

粉雪は他人の心の機微には疎く、政治も苦手であったが……戦の勝ち方は誰よりも心得ている。

「まずはこの目立つ赤鎧を捨てて、流民に変装だ！」

「流民の恰好なんて持ってねえよっ！」

「その辺から奪えば良いぜ！ あと飯や銭も奪うぜ！」

「押し込み強盗じゃねーか！」

瞬間、粉雪と赤備え達がどつと笑い始める。

実際の所、赤備え達が強盗戦法をするのは今回が初めてではない……どころか、過去数えきれない位に繰り返してきたのだから。

たつた今、夕霧達が長尾への全面降伏を決めたとは想像すらせず、粉雪が、小夜叉が、そして赤備え達が、その溢れる才能をゴミ箱にダンクシュートし、俺はここだぜ一足お先とばかりに光の速さで明後日の方向にダッシュしようとしていた。

その姿はまるで、大江戸学園の馬鹿共のようであった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第140話『春日山城炎上』

武田晴信の死から一ヶ月。

美空は未だ収まらぬ混乱に乗じ、武田傘下の中小勢力を次から次へと討ち滅ぼし、あるいは降伏させ、その勢力を急激に伸ばしつつあった。

「こいつは今まで散々舐めた態度取ってたからぶっ潰して恩賞に当てて。」

「こいつは色々借りがあるから踏み倒して……」

「こっちは蝙蝠外交ばかりで信用しきれねーっすから叩き潰してーっすね」

その日の春日山城では、美空と柘榴が色々良からぬことを企んでいた。

「ちよつと待つでやがる、そこは夕霧から話せば無血開城すると思うでやがる」

「えー？ でもこっつて武田の勢力圏の割に結構田畑が豊かなのよね、」

武田勢力圏にしてはだけど」

「交通の便も悪くねーっすし、欲しがるのも多いつすよ」

「領地召し上げじゃあ流石にうんとは言わねーでやがるよ」

「じゃあ可哀そうだけどミンチにして恩賞に当てましょう。」

晴信が死んだ混乱に乗じて取れるだけ取らないとね」

「御大将も中々のワルっすね」

「くくく……柘榴や、そちには敵わぬわ……」

「おうほっほっほっほっほっほっ！」

「わっはっはっはっはっはっはっ！」

美空と柘榴がこれでもかつて位に邪悪な笑いを高らかにあげている。

最早笑いが止まらない状況であった。

「あんまりやり過ぎると夕霧が降伏した意味と言うか、必要性が無くなるでやがるから、程ほどにしてほしいでやがるよ……」

「大丈夫大丈夫、これ以上ない位に役立ってるから」

「武田という名のでっかい後ろ盾が急に木端微塵に砕け散ったから、

この辺一帯の豪族達が面白い位に右往左往してるっすよ」

「柘榴、今日までに届いた露骨過ぎる擦り寄りの手紙の枚数は？」

「百から先は数えてねーっす！」

それだけドライゼ銃の一斉射撃の衝撃はすさまじかったという事である。

最強と謳われた武田の騎馬隊が成す術も無くハチの巣にされ、散々に打ちのめされたという事実は、最早隠しようがない事だ。

それ故に、『最強』の武田を頼みとしていた弱小勢力は当然として、日ノ本の全ての大名家の目と耳が越後に向いていた。

美空も柘榴も、その他越後長尾家に与する全ての者が、過去に無い多忙で、過密な時間を過ごしていた。

やる事は山積みで、文字通り寝食を惜しんですら一向に減る気配が無いどころか増え続け、もう面倒だからよっほど残す価値が高い勢力以外はドライゼの威力をもつて綺麗サツパリあの世に送っちゃおうという考えが蔓延するような日々であった。

「武田は滅んだ。私は己の不甲斐なさを責めるのみだよ」

「滅んだ原因の何割かは間違い無くてめえでやがるよ！ 一二三いつ!!」

「いや、私もそう思うんだ」

そしてそんな美空や柘榴の悪だくみに、表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸がしれっと混ざっているのもいつもの光景である。

「でも真面目な話、

貴女が敗戦後ノータイムで恭順の意を示してくれたおかげではかどっているわ。

アレが無ければドライゼで射殺していた人数が2倍から3倍位は増えていたと思う」「それにしたって、もうそろそろ一万人くらいは撃ち殺してる気がするっすけど。」

九十郎が頭抱えてたっすよ、弾薬の生産が追い付かねーって」

「薄々そうじゃねーかって思ってたでやがるが、やつぱり硝石を作ってたでやがるか。

どのくらい作れるでやがるか？ 原料は？」

「悪いけどまだ秘密、そのうち教えてあげるわよ」

「どーせそのうち漏れるっすけど、今漏れるのは勘弁っすよ」

「まあ、流石に仕方ねーでやがるな」

「悪いわね、まだ貴女達に全幅の信頼を寄せられる訳じゃないのよ」

「ちなみに、一二三はその辺知らされてるでやがるか？」

「九十郎から全部丸々教わっていると」

「私は教えて良いって言った覚えはないのだけどね」

「ちよつと落ち込んだのでエッチい事をさせたら洗いざらい吐いてくれたとも（第8話）」

「御大将、もうちよつとハニトラ対策はしておくべきだったつすかねえ」

「本当にね」

「……それ、いつの話でやがるか？」

「え？ 件の越後長尾家後継者決定戦の頃ですが」

「……さつき『滅んだ原因の何割か』って言ったの、訂正するでやがる。

10割てめえのせいとやがる一二三いつ!!」

「まあそれはそれとして」

「それはそれじゃねーでやがるうっ！ 2と3発殴らせるでやがるうっ！」

「それはそれとして、硝石の生産はともかく、

ドライゼの製法の方はそろそろヤバそうだつて、雫が言つてたつすよ」

一三に殴りかかる夕霧を放置して、柘榴が話を続ける。

「頭が痛い問題ね、けど仕方が無いわ。この間から戦場であんだけバカスカ撃つてるもの、

どうせ何丁かはドサクサ紛れにパクられてるわよ」

「そしてドライゼの製法を説明して、ドライゼ運用の用途がつくまで時間を稼がねばとか、

ウチに交渉を持ちかける手紙が毎日どっさりつすね！」

「もう面倒臭くて読む気にもなれないわね！」

「目を通すくれーはしてやれでやがる！ 書いてる方は命懸けでやがるよ！」

夕霧が一三に殴りかかる手を止めた。

「ごめん、これ以上睡眠時間削つたら先に私が死ぬわ」

「御大将が倒れたら柘榴や秋子も過労で死ぬっす」

「高橋是清みたいに引退してやろうかしら」

「何度引退したって地の果てまで追いかけて政界に連れ戻すつすよ！」

「コレキヨ……?」

リアルチートである。

「じゃあ、夕霧が読んで内容を要約してやるでやがる。それなら読むでやがるか？」

というか、今後の統治のためにできれば残しておきてー家も混じってるでやがるから、

そこからの手紙くれーは読むでやがるよ」

「是非お願いするわ！」

「普通に機密事項つすけど、四の五の言っではられねーつす！」

柘榴達の睡眠時間のために働いてもらおうつすよ！」

美空と柘榴がノータイムで飛びついた。

当然、美空も柘榴も気づかないし、想像すらしない……夕霧が蘭丸によつて精神を一度壊され、再構築され、傀儡と化している事に……

「全く、このユルさ……心配になってくるでやがるな……」

夕霧がため息をつきつつ、未処理の手紙入れの攻略にかかる。

手紙の数も分量も膨大であり、しかも言質を取らせまい、揚げ足を取らせまいと迂遠な表現が多く、時節の挨拶等の無意味な表現が必ずと言って良い程に混じっていた。

確かに、比較的時間がある夕霧さえも、読む気が失せてくる。

手紙一通あたり3行くらいには要約しないと、あいつらは読んでくれないだろうと、夕霧は自らに気合を入れ直した。

「そう言えば、粉雪はまだ行方不明のまままでやがるか？」

悲鳴のような助命嘆願の手紙を読みつつ、夕霧がそんな事を口にする。

「まだ見つかって無いわ……と言うよりも他にやる事が多すぎて着手すらできてないわ」

「早めに探した方が良いでやがるよ。」

粉雪はなんと言うか……思い切りが良いでやがるから、

夕霧にも予測がつかない事をしでかすかもしれないねーでやがる」

「武田の情報網に引つかかって無いの？」

「あんだだけバカスカとドライゼを撃たれたでやがる。」

武田の組織ははつきり言つてズタズタでやがる、情報網は完全にマヒして、

軍事行動すら当分不可能に近いでやがる。湖衣も未だに行方不明でやがるし」

「死んだんじゃないの〜？」

「思つてても口にすんなでやがるうつ!!」

そしてしばらくの間、ギャーギャー煩い美空と柘榴を尻目に黙々と要約作業を続け

……

「ありや、この手紙は豪族からの手紙じゃねーでやがるな……」

乱筆で、誤字脱字が多すぎて意味が分からねーでやがる。柘榴、分かるでやがるか

？」

「どれどれ……ああ、こりゃ軒猿からの報告つすよ。」

一見すると関係ねー事を書いてあるように見えて、暗号を知っていれば……」

その意味不明な手紙を目にした柘榴が、急に黙る。

しばらく手紙を前に、不気味な程に沈黙し……

「御大将、駿河は……」

かつての義元公の城下は、こっちの予想以上にやべー事になってるつすよ」

美空にそう告げた。

「そう、やはり出ているのね」

「ああ、ちよつと洒落にならねー位にひしめいてるようつすね」

「鬼が？」

「鬼つす」

発狂しかねない程の激務の美空や柘榴達に、さらなる仕事が無い込んだ瞬間である。

それは美空達が面倒だからドライゼで射殺して勢力を広げようなんて無茶をし続け

た理由の一つであり、下手をすれば日ノ本そのものがひっくり返りかねない厄介事……鬼への対処である。

「弾薬、あとのくらい残ってたかしら？」

「そろそろ底を尽きそうつすよ」

「鬼にブツ放す分は残しておくべきだったかしら」

「今更言つても後の祭り、火葬後の心臓マツサージつすよ」

「それもそうか……まあ、九十郎がどんどん増産してるから、

弾不足はそう長く続かないでしょ」

「え？　そうホイホイ増産はできねーって九十郎、言つてなかったつすか？」

「あれ？　そうだったかしら？」

「当たり前つすよ。　ほぼ九十郎一人で道具を作つて、

材料を混ぜたり炉の温度を管理したりしてつすから。

それに今の作業所の面積じゃあこれ以上大きな炉を作れないつす」

「それなら人を増やせば良いじゃない、施設も拡張して……」

「御大将、秘匿技術つすよ。　人を増やすのも道具を運び込むのもそう簡単じゃねーつ

す」

「……あ」

美空は頭が真っ白になった。

九十郎がハーバー・ボツシユ法を用いてどんどん硝石を作ってくれたおかげで、完全に感覚がマヒしていた。

美空は心のどこかで、ドライゼ銃を無限に撃ち続けられる魔法の武器のように扱ってしまっていたのだ。

そして美空がその過ちに気づいた直後……

どかあああああーっんん!!

春日山城が大きく揺れた。

……

……

……

一方そのころ、練兵館では。

「次の戦い、オレはクズロー達の敵に回る」

全ての力の使い果たし倒れ伏す犬子と九十郎の前で、新戸が唐突に現れ、そんな敵対宣言をした。

「ごめんね、新戸ちゃん……犬子達、すつごく疲れてるから……後にして……」
「やべえ、布団敷く気力も、飯を作る気力も沸かねえ……」

ああ、意識がだんだん遠のいて……いく……」

「九十郎、犬子も……もう駄目みたい……」

犬子と九十郎、堂々完結……と、いう事には流石にならない。

犬子は武田の崩壊と共にすり寄って来た連中に鉛玉をプレゼントする仕事、九十郎はハーバー・ボツシユ法で肥料と弾薬を作る仕事に追われ、ちよつと疲れているだけである。

特に『話せばわかる』『問答無用』『ズキyun!』『ズキyunツ!!』という五・一五事件めいたやりとりを、東に西に駆けずりまわりながら繰り返してきた犬子の肉体的、精神的な疲労は甚大であった。

実際、先の武田との決戦でこれでもかって位に有用性を示してしまった以上、日ノ本中の大名家がドライゼの製法を知ろうとするだろうし、美空達がどれだけ秘匿しようとしても情報を抜かれるのは時間の問題……よって、ドライゼ銃配備という有利性がある内に崩せるだけ崩しておきたいという美空の思惑は理解している。

調略で済ませられる所は調略で何て言っていたら時間がかかって仕方が無いし、ドライゼ怖さだけでこつちに着いた連中がどこまで、あるいはいつまで信用できるかも分からないのも理解している。

理解しているが、ここまで過密かつ苛烈にやる事はないんじゃないかと犬子は思った。

「首尾はどうだった？」

「来た、見た、撃った」

「いつも通りか……今回の出張は割と早かったが、何人射殺した？」

「えつと……いち、にい、さん……とりあえず百以上かなあ……」

「下着まで返り血でべつとりだけで着替える気力も沸かないよもう……」

「後で洗い場に出しとけ、洗っとく」

「ごめんね九十郎、最近家事全部押し付けてるよね……」

「本当にな、後で美空に文句言ってるよ」

「雫は？ 先に戻ってるって聞いてるけど？」

「アイツを起こさないでやってくれ、死ぬほど疲れている」

「うん、分かった、起こさないよ。 気持ちはすつごく分かるから……」

「と言うか、犬子もこのままじゃ寝ちやう……そして風邪をひく……」

「寝るな犬子、死ぬぞ」

「お布団まで運んでよ、九十郎お」

「甘えんな、寝床は用意してやってるから自分で行け」

「……じゃあ、ちゅーしてよ、そしたら元気出すから」

「しようがねえな……」

九十郎が這うように廊下を進み、力尽きて倒れ伏す犬子の元へとのそのそと近づき……そと唇と重ねた。

「ぐう……すう……」

「つて寝てんじゃねえよっ!!」

「犬子死ぬほど疲れてるから……寝かせて……」

「ち〇こ突つ込むぞコンチクショウ!」

「あ、ごめん今はちよつと勘弁して。起きるよ、起きるからさ」

今にも崩れ落ちそうな程に疲弊しきった身体に鞭打って、犬子が返り血塗れの装備品を抱えて立ち上がる。

「おいクスロー、次の戦い、オレはクスロー達の敵に回ると……」

心の中を読まずとも、明らかに話を聞いていないと察した新戸が2人の後を追おうとするも……

「きゃあああああーっ!!」

絹を裂くかのような悲鳴によつて新戸の声は遮られた。

「え、何!? 今の雫の声だったよね!」

「ゴキブリでもでたんじゃねーのか?」

「そんな訳ないでしょ! 行くよ九十郎!」

友人の悲鳴に犬子が疲労困憊の身体に鞭打ち、奥へと走る。

「雫っ! どうしたの!」

鬼が出たか蛇が出たかと、襖をパーンと勢い良く開き、犬子が寝室に突入した。

見れば雫が窓から見える外の様子を眺めながら、ぶるぶると震えていた。

「な……なんで星空が……なんで……九十郎さんのためにお料理していた筈なのに

……」

「え? どういう事?」

「いや、包丁持ってた手が震えてたんでな、こりゃアカンと思つてこう……」

スリーパーホールドをだな……」

「もうちよつと穏当な手段で寝かしてあげなよっ!!」

「い、言われてみれば九十郎さんに後ろから抱き着かれた時から記憶が無い……」

とりあえず意識を失う瞬間、雫は割と幸せそうな顔をしていた。

「悪いな、無理してそうだったんでこっちの判断で休養を取ってもらってた」
「く、九十郎さんと二人きりになれる唯一の好機が……」

せつかく練習してきたお料理が……」

色々計算が狂ったと、雫はショックを隠し切れないううであつた。

「九十郎、謝りなよ」

「なんで俺が？」

「女の子つてのは、好きになつた人のためにちよつと位の無理はしちやくものなんだよ」

「気持ち分かんなくても無いが、指でも切られちゃ迷惑だ」

「それは……そうかもだけどさ……」

「いえ、分かっています。」

今は越後長尾家にとつて……いえ、日ノ本にとつても大事な時期です、

大事な時期に無理をしてはいけないというのは分かっています。

ですが……その、差し出がましいようですけど、

九十郎さんに相当な無理がでているように見えましたので、

美味しい物でも食べて、少しでも元氣になつてもらえればと……」

「それでお前が倒れちゃ拙いだろ。知ってるんだぞ、

毎日毎日美空から無茶ぶりされて、あつちこつち走り回つてるって事くらいな」

「それは……」

雫は何も言い返せず、俯いてしまう。

冷静になってみれば、確かにいざ料理に挑もうとしていた自分の手は震えていたし、軽い眩暈や立ち眩みのようなものも感じていた。

「よしそれじゃあ今から作り直そう！」

ちよつと良くない沈黙になりそうだと、犬子が2人の間に割って入る。

「い、今からですか!? もう夜中ですよ」

「そうだそうだ、寝る前に食うと太るぞ」

「3人で手分けすればパパッと作れるよ。」

それに毎日東に西に走り回ってるから、ちよつと太る位じゃないと身体が保たないよ」

「俺疲れてるんだけどなあ……」

そう言いつつも、九十郎は台所に向かう。

「犬子も疲れてるから御相子だね」

「仕方ねえ、たっぷり半日休んだ雫に頑張ってもらおうか」

「そうだね、雫」

「え、あ、はい」

「ちよつと遅い夕食になりそうたけどき、一緒に作ろうよ」

犬子がかつと朗らかに笑い、手を差し伸べる。

雫は少し……ちよつとだけ、妬けるなと思いつつも、犬子の手を取った。

「んで、何作るんだ？」

雫が持つてきた食材は手付かずだが、流星に何を作ろうとしてたかまでは分からん

ぞ」

「は、はい。今日はビーフシチューを作ってみようかと。」

以前お好きだと伺ったので」

「ああ、前に犬子が間違えて肉じゃがにしちやったアレね……」

「今度はうっかりするなよ、犬子」

「大丈夫だよ！ た……たぶん……」

「雫、こいつしつかり見張つててくれ」

「あ、あはは……」

そうして、なんやかんやで3人で料理をすることとなり、台所に食材を並べ、鍋や包丁も準備し、和気あいあいとした雰囲気調理が始まる。

トン、トン、トン、とリズムカルに食材を切る音や、竈にくべられた薪がパチパチとなる音が台所から聞こえ始めた頃。

「おいクズロー、いい加減聞いてほしいんだが……」

いつまで待ってりや良いんだと新戸が口を挟んだ。

「心配すんな糞二ート、全然働かないお前の分も一応用意してやるよ」

なお、九十郎は桐琴救出時や、蘭丸に襲われた時に思いつき新戸に助けられているが、当然のように綺麗サツパリ忘れている。

「駿河の鬼の事なんだがな」

止む無く、新戸は全然緊張感の無い九十郎に対し話を続ける。

当然、九十郎は右耳から左耳に聞き流しているが……

「アレを退治する戦では、オレは敵に回るのでよしなに」

……ただ一人新戸の言葉に耳を傾けていた雫の動きがピタツと止まった。

「ご……御理由を伺っても……?」

ちよつと声が震えていた。

「借りを作り過ぎた。これ以上返済を先延ばしにすれば踏み倒しになりかねない」

「そーかそーか、頑張つて来いよ」

全く危機感の無い九十郎が適当にも程がある激励を述べ、犬子はそもそも聞いていない。

「ちよ……ちよつと待つてください！ 駿河で何が起きているのですか！」

「んん、まあ、その位は教えても良いか。

劍丞達に斬られてきた鬼の怨念を集めて、タイラント……

いや、ウルトラキラーザウルス……どちらかと言えばジャンボキングの方が近いか。

ジャンボキングのような強力な鬼を、駿河で創っている」

「い、一大事ではないですか!？」

「ジャンボキング（仮）が完成するまで、オレは儀式の防御を行う。

そういう理由で、オレは駿河の鬼退治の時、敵に回る」

話を打ち切り、新戸は台所から離れていった。

後に残るのは、全く危機感の無い九十郎、そもそも話を聞いていない犬子と、とんでもない事になったと頭を抱える雫の3人だ。

読心能力、催眠能力、念動力、自然発火能力、どれをとっても一線級の御家流と互角か、それ以上の効果を持つ超能力をいくつもいくつも使いこなす新戸に本気で敵に回わ
れては、どれほど厄介かと頭を抱えた。

「……ああ、それとだ」

どこかへ去ったと思っていた新戸が、ひよつこりと引き戸から顔を出す。

「あ、あの！ 先程のお話！ 翻意していただく訳には……」

「さつき粉雪が……いや、やっぱりやめた、人間同士の切った張ったへの介入はよそう」

慌てて新戸に交渉を持ちかけようとした雫を無視して、新戸はそれだけ告げてまたどこかへ行った。

その数秒後……

どかあああああーっん!!

春日山城が大きく揺れた。

直後、九十郎達の視界に、派手に爆破炎上する城が映った。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第141話『我は武田信玄、明日この世界を肅清する』

どかあああああーっん!!

「た〜まや〜」

「か〜ぎや〜」

派手に爆発した春日山城を眺めながら、粉雪と小夜又が勝鬨をあげた。

九十郎が不眠不休で増産してきた火薬に火が付き、大爆発を起こしたのだ。

当然、ハーバー・ボツシユ法のための機材やら材料やらを隠してある秘密の作業所も火と爆風で再起不能だ。

「はっはっはっはっはっ、やべえ思ったより上手く行ったぜ! やってみるもんだぜ!」
粉雪は大笑いをしていた。

正直な所、彼女の想像以上に奇襲は上手く行った。

春日山城の警備は僅かで、しかも小夜又も粉雪も、春日山城の構造をしつかりと頭に叩き込んでいたのだ。

なお、その原因の半分は、時間は敵だとばかりに手勢の殆ど全てをフル回転させ、近

隣の中小勢力を踏み潰していた美空であり、残りの半分は後々敵対する可能性があるのに、後先考えずに粉雪を長期間越後に滞在させ、あろう事か春日山城内への出入りもほぼ無制限にやらせた美空である。

要は美空の迂闊だ。

美空は追い詰められると強いが、逆に追い詰める側に回ると数々の綻びを見せる……これは後日、この件について思い出した際の黒田隼官兵衛のコメントである。

「これからどうするよ？」

小夜叉が粉雪にそう尋ねる。

「ん？ そりゃ火を消しに来た奴らを可能な限りブツた斬つてこの城を全焼させるんだぜ」

ここまではどうか誰にも気づかれずに侵入し、破壊工作ができたが、これほどまでに派手な爆発炎上を起こせば、いくらなんでも気づかれる。

そこら中で敵襲を知らせる呼び声や、鳴子やら半鐘やらの音が鳴り響いていた。

「お、コソコソすんのはようやく終わりか？」

「ああ、ここからは暴りたい放題、斬り放題だぜ」

小夜叉と粉雪、そして武田の精鋭赤備え達が臨戦態勢に入った。

……

.....

.....

どかあああああーっん!!

そんな大きな音と共に、春日山城が派手に爆発炎上していた。

「始まったか……」

新田劍丞はそれをただ眺めていた。

間違はなく、怪我人が出ているだろう。

間違はなく、火事で焼け出される人も出るだろう。

間違はなく、死んだ人もいるだろう。

そして今からでも駆け足で現場に向かえば、延焼の範囲も、命を落とす人も減らせるだろうという事も理解していた。

理解したうえで……劍丞は動かない。

「いくらドライゼ銃が強力とはいっても、

黒色火薬の原料である硝石の供給が途絶えれば、使い物にならなくなる。

これではばらくの間、美空の行動は大きく制限できる筈だ。

少なくとも、今まで見たいに節操無く撃ち続ける事はできない筈だ、きつと……」

ぶつぶつと独り言を呟く。

早い話、劍丞は粉雪達による襲撃を察知しつつも、それを見逃したのだ。

その決断は命懸けで自分を生かそうとした九十郎や、一応は自分の嫁の一人である美空に対する裏切りに他ならない。

劍丞にとって、その決断が意味するものは相応に重い。

「劍丞様……」

そんな劍丞の背中にぎゅつと縋る一人の少女……先日劍丞隊にて匿う事にした、湖衣である。

本当にこれで良かったのですか……そんな言葉が湖衣の喉まで出かかった。

出かかったが、止めた。

もう何度も、何度も、何十回も聞いた事だからだ。

湖衣の持つ千里眼にも似た能力にて、粉雪と小夜叉、武田赤備えの息の残り達が流民の紛争で接近してくるのを確認した時から、何度も何度も尋ねた事だからだ。

「これで良かったんだ、これで……良い筈だ、さもなきやあ……」

劍丞がこの世界に転移した際に持っていた剣を握る。

今は電池を抜かれて沈黙している劍魂と呼ばれる剣、鬼を引きつけ、鬼をバターのように切り裂き……劍丞と美空を催眠状態にして、無理矢理交合せようとした劍だ。

ドライゼが無くとも、この剣でもって鬼と戦う……ドライゼが無くとも問題は無い筈

だと自分に言い聞かせる。

オーデインは今、魔法が殆ど使えない状態故に、この剣を介して自分達にちよつかい
をかける余裕は無い筈だ、単純に鬼に対抗するための手段として利用できる筈だと言
い聞かせる。

そうでなければ、燃え上がる春日山城に押し潰されてしまいそうだ。

「すまない、湖衣。

夕霧が正式に長尾に下った今、君を劍丞隊に引き留める理由はないのに……」

劍丞が湖衣をぎゅっと傍に手繰り寄せる。

湖衣はそんな劍丞の腕に抱かれ、頬を上気させながら目を伏せる。

「良いんです。もう私には帰る場所はありませんから……」

だから、このままずっと劍丞様のお力になりたいんです」

湖衣は優しくそう告げる。

決意に満ちた瞳で……その実、蘭丸の精神操作によって言わされているとは誰も気づ
かずに。

遠く尾張の地で、森蘭丸が……新田劍丞の妻達や、姫野を洗脳し、凌辱する鬼子・蘭
丸が。ドライゼ銃の無力化に成功した事に笑みを浮かべているとは誰も知らずに……

そして劍丞と湖衣の唇と唇がそつと重なり合った。

……
……
……

「ど、どうしよう九十郎……燃えてると言うか、焼けてると言うか……」

何かとんでもない事になっちゃってるよっ!？」

「てか爆発したの俺の作業所じゃねーかあ! やつべえ美空に殺されるうっ!？」

「あの火勢、風向きも良くない……拙いです九十郎さん、犬子さん、

あれでは天守閣まで燃え広がるかもしれませんが、急いで消火しなければ」

犬子と雫と九十郎がどたどたと城下町を駆け抜ける。

混乱する人々を掻き分け、同じように春日山城に駆けつけようとする越後長尾家の家臣達を押しつけ、駆け続ける。

「ええい、くそ! どけよお前ら、俺を美空の所に行かせろ!」

「雫、犬子にしっかり掴まって! 離しちゃ駄目だよ!」

「は、はいっ!」

春日山城に近づけば近づく程混乱が大きくなり、混雑も酷くなり、まるでバーゲンセールのような人の絨毯がで始める。

それを九十郎のバツファローマンのような体格で無理矢理引っぱがし、分け入って進

み……ついに春日山城内の九十郎の作業スペース近くにまでたどり着く。

「うげ、バラバラじゃねーか……こりや元通りにするのに数か月はかかるぞ……」

「そんな事は後だよ九十郎！ 敵襲だよ！」

げんなりとした表情の九十郎に、乞食や流民の恰好をした男達が斬りかかってくる。

「ちっ、犬子無事か!？」

「ああもう、ちよつとは休ませてよ……たあああつ！」

犬子と九十郎が同時に剣を抜き、侵入者を迎撃する。

普段から鍛えに鍛えた神道無念流は伊達ではない。

そして2〜3回も剣を交えればすぐに理解する……

「九十郎、こいつらただの流民じゃない……かなり手練れだよ」

「てめえら、粉雪の所の……武田の赤備えだな？」

「……その通り、我等は赤備え、晴信様の仇討ちに参った」

それは半ばあてずっぽうに近い指摘であったが、珍しく九十郎の予感は当たった。

少し視野を広めてみれば、第四次川中島で長尾の本陣強襲を見事に成功させた武田の精鋭赤備え達が、そこから中で警備の兵達とチャンバラを繰り広げていた。

長尾の手勢があちこちに分散していて、城の警備は普段の半数近くにまで減っていた事を考慮してもなお、多勢に無勢である。

長引けば武田の赤備えといえども、全滅は必至、しかし……

「い、いけません九十郎さん！ 犬子さん！ 城の燃え方が思ったより早い……

このままでは天守閣まで焼け落ちてしまいます！」

「それが我等の狙いよおっ!!」

赤備え達が再び九十郎達に斬りかかる。

長引けば間違い無く春日山城は全焼……九十郎達に、そしてこの場に駆けつけてきた警備兵達に焦りが生まれる。

飛ぶ鳥を落とす勢いで周囲を制圧する長尾であるが、その象徴たる春日山城が焼け落ちたとなればどうなるか……当然、長尾恐れるに足らずと反長尾の勢力が勢いづく事だろう。

いや、いくら時間をかけたくなかったとはいえ、長尾の攻勢は少々強引すぎ、少々死人が出過ぎてている。

下手をすれば外交的に孤立し、反長尾同盟が結成され、日ノ本中から攻撃される事すらもありえた。

そして頼りの綱のドライゼ銃は、九十郎の作業場が爆発四散し、硝石の生産が当分の間行えなくなった以上、しばらくは張り子の虎も同然だ。

春日山城が焼失すれば、美空の戦略的判断が見事に裏目に出てしまい、越後長尾家の

窮地を招きかねないのだ。

「ちつくしよう……粉雪いつ!! 粉雪出て来いつ! いるんだろおつ!!」

九十郎が負け犬の遠吠えのように叫ぶ。

「よお九十郎、あたいはここにいてるぜ」

乱戦の中で、そんな声が返ってくる。

みれば2人、3人……10人、20人と次から次に惨殺死体を量産する少女達……小夜叉と粉雪がそこにいた。

「テメエこの野郎! 何のつもりだ!」

「決まってるだろう、勝つつもりだぜ」

「あの場所が何だか分かってんのか!」

「九十郎がこつそり玉薬を作ってた場所……違うか?」

「うぐつ……」

凶星を突かれ、九十郎が絶句する。

「な、なんで場所が分かった……?」

「あたいを好き勝手に行動させたのは迂闊すぎるぜ、九十郎。」

「そこそなにかをやったのには気づいてた。それで川中島であの連射だろ?」

すぐにピーンと来たぜ、九十郎はどうやってんのか知らねえけど玉薬を作ってるって

な」

結論、全部九十郎が悪い。

まあ、知っていてほぼ放置していた美空も限りなく同罪に近いが。

「鬼への対抗策をフツ飛ばしやがって！ どうするつもりだ！」

「いや、今んとこてめえら、人にしか向けてねえぜ」

「……まあな」

「九十郎さん！ 言い負けちゃ駄目ですよ九十郎さんっ!!」

雫が涙目になりながらツツコミを入れる。

こうしている間にも赤備え達は元気に城の警備達を惨殺死体に変えているし、城は見事なまでに燃えて崩れつつある。

半鐘の音がガンガンと鳴り続け、人の叫び声がそこら中から響き渡り、混乱がさらにさらに加速していた……全て、粉雪の作戦、粉雪の目論見の通りである。

「その通りだ、おイタが過ぎるぞ……バラガキ共」

混沌とした場に、また誰かが現れた。

「お、前らは……？」

小夜叉と九十郎が大きく目を見開いた。

その人物……いや、その人物達は、大怪我をし、とても戦場には出られない身体のだからだ。

その人物は……

「は、母……？」

「応、久しいな糞餓鬼め。ふらつと家を出て随分と勝手気ままにやっているようだ」

森桐琴可成……小夜叉の母親であり、金ヶ崎の撤退戦（第66話）で鬼に襲われ重傷を負い、再起不能になっていた筈の人物がそこにいた。

「よう、甘粕……今日は随分と重役出勤じゃあないかだぜ」

「これ以上はやらせない」

「む、無茶です松葉さん！ その身体では……」

「私は御大将の親衛隊筆頭、例え実は回復していなくとも……」

今、回復してなければ話にならないという時には、回復するしかない

「そいつは便利な身体だぜ！ それじゃあどの程度回復したか……」

思いつきり試してやるぜ！

もう1人は松葉……第四次川中島（第129話）で小夜叉に斬られ意識不明の重体になつていた松葉が、怪我を無理矢理ねじ伏せて駆けつけたのだ。

直後、粉雪が全身で大きく振りかぶり、名槍・紅桔梗を叩きつける。

ガキイツ！ と大きな金属音、松葉は辛うじて自身の傘（鉄骨入りの特別製）で受け止めるも、同時に大きく体勢を崩す。

「足元がふらついてるんだぜ！」

「ぐ……うう……」

松葉の脇腹が赤く染まる。

小夜叉の人間骨無で刺された傷はやはり完治しておらず、今の衝撃で傷口が開いたのだ。

「犬子お！」

「松葉さん下がってえっ！」

犬子と九十郎がほぼ同時に粉雪に斬りかかる。

「ちいっ！」

粉雪は襲い来る剣閃を危なげなく回避し、すぐさま反撃に移る。

「くっそ！ 川中島の時とは違うな！」

「つたりめえだろ！ こっちはまだまだ元気一杯なんだぜっ!!」

犬子と九十郎は辛うじて避ける……犬子も九十郎も最近徹夜続きで美空からの無茶ぶりに対応していたため、普段通りの力が出ていない。

川中島の時とは全く逆に、疲労による消耗が九十郎を不利に、粉雪を有利にしていた。

「典厩様のためにも！ 心のためにも！ このまま負ける訳にやいかないんだぜえっ
!!」

粉雪が裂帛の氣勢と共に九十郎達への攻勢を熾烈にさせる。

なお、そんな事を叫びながら、第四次川中島の後長尾に下った粉雪や心達にとって最も不利な事を全力で行っている点へのツツコミは不要である。

そして犬子と九十郎が粉雪の相手に掛かり切りになるといふ事は、当然、小夜叉の前に立ちほだかるのは……桐琴になる。

「邪魔する気か、母？」

「ああ……そのために来た」

桐琴と小夜叉がお互いの槍を構え、じりじりと距離を詰める。

10歩の距離が5歩になり、5歩の距離が3歩になり……視線が交差する。

「何か……言わねえのかよ……っ？」

小夜叉がそう告げる。

小夜叉の槍は僅かに震えていた。

本当に母と斬り合うのか、殺し合うのか、それで良いのかと……自問自答する。

脳裏に浮かぶのは、桐琴に殴られた記憶、蹴り飛ばされた記憶、罵声を浴びせられた

記憶……殺人者たれと骨の髄まで叩き込まれた記憶だ。

それは小夜叉にとって、吐き気がして、寒気もする程に恐ろしい記憶だ。

九十郎から贈られたフルプレートアーマーが……戦場で一人も殺せないという不甲斐ない結末を迎える原因になり、自分と霧琴が決裂する原因にもなり、その後赤備え達との猛特訓によって自らの手足の如く扱えるようになった武具が、かたかたと音を立てていた。

「大丈夫、鎧が……九十郎の鎧が勇気をくれる、だから……」

震えが……止まった。

小夜叉が人間骨無を握り直す。

母親であろうが何であろうが切り殺す、そして押通ると覚悟を決めた。

なお、九十郎の鎧を着て、九十郎から勇気をもらい、九十郎にとって最も不利益になる事をしでかしているという点へのツツコミは不要である。

所詮は九十郎なので、気にはいけない。

「……………」

桐琴は無言のまま、まるで走馬灯ようにこれまでの事を思い浮かべていた。

小夜叉を殴った記憶がある、小夜叉を蹴り飛ばした記憶がある、口汚く罵った記憶もある……それは全て、この過酷な戦国の世を強く生き抜いてほしかったからだ。

その結果、小夜叉は自らの元を離れていった、敵である粉雪と共に（第109話）。

桐琴は思う……間違っていたのは自分の方なのかと。

桐琴は思う……正しいのは粉雪の方なのかと。

少なくとも、今の小夜叉は自分の元にいた時よりも生き生きとしているような気がした。

本当は殴りたくない、本当は蹴りたくない、本当は罵りたくない……しかし、桐琴はそんな魂の叫びを口にした事は無い。

それ故に小夜叉は気づかない、気づこうともしない、桐琴の想い、桐琴の願いに。

桐琴は、本当は……

「儂は……本当は……」

それはあの新田劍丞にも言えずじまいの言葉、桐琴の秘めたる本心。

その言葉が喉まで出かかる。

そして桐琴は……無言のまま槍を握る手に力を込めた。

小夜叉もまた、人間骨無を握り直す。

殺さなければ殺されると、親と子が互いに槍を握りしめ、向け合った。

「どかねーなら、ブチ殺す」

「生意気を抜かすな、糞餓鬼」

「言つたな、母にやあ……いや、てめえには後悔する時間すらも与えねえ」

一触即発のその瞬間……

どかあああああーっん!!

「またもや、春日山城に大きな炸裂音が……いや、なにか重い物同士が派手に衝突した音が響き渡った。」

「あ……あいたたた……ハンドルに頭ぶつけちゃったよ……」

「下手糞……」

「いや、わかっちゃいたけど乗馬とは全然操作感が違ってたや、失敗失敗」

「大きな音がした方向……石垣に激突した誰も見た事の無い機械の塊、そしてそんな奇妙な物体の上に、ヘルメットをつけた2人の少女たちが乗っていた。」

「注意を、大事な装置に傷がついたら、二度と戻れなくなる」

「わわっ!! 八雲や詠美ちゃんに会えなくなるのは嫌だよ!」

「……大丈夫そう、このマシンの頑丈さに救われた」

2人の少女達が、何やら訳の分からない事を話している。

その場にいた全員がぼかーんとした表情でそれを見つめていた。

戦国時代生まれの者達にとつて、まさしく未知との遭遇に他ならない。

下手をしたら、狐狸妖怪の類と遭遇した時以上に衝撃的な光景であった。

「お……俺のサイドカー……な、なのか……？」

いや、九十郎は知っていた。

九十郎だけは突如現れた2人が乗っているマシンに見覚えがあった。

「お、本当にいた」

「流石は比良輝輝謹製の生体反応リーダー……大した精度……」

「あれってギヤグじゃなかったんだ」

輝が聞いたらバチィツとされそうな発言をしながら、女性のうち片方がヘルメットを

脱ぐ。

その瞬間、九十郎を除いた全員が誰だろうと首を傾げ、九十郎はさらなる驚愕、さら

なる衝撃に襲われる。

「な……ななっ……何で、お前が……」

「やつほ、九十郎、おっひささ……どしたの？ そんな顔しちやつてさ。

もしかして、あたしの顔見忘れちやつた？」

忘れる筈がない、忘れられる筈がない。

そいつは九十郎の胸に刻まれたトラウマの原因の何割かを作った女である。

そいつはニホンの誇るトップエリート共が、その有り余る才覚を全力でゴミ箱にダンクシュートして、俺はここだけ一足お先と、光の速さで明後日の方向へダツシユする魔境である大江戸学園の中でもトップクラスのB A K Aである。

九十郎は知らない事であるが、最近徳川吉宗の生まれ変わりだと判明し、オーディンから狙われている事も判明した女である。

そいつの名は……

「徳河……吉音……？」

「正解っ！ なあ〜んだ覚えてるじゃん、一瞬忘れられたかな〜って心配になっちゃたよ」

吉音ニコニコと笑っていた。

まるで自然体であった。

ここが戦国時代である事などお構いなしに、まるで級友に会いに来たかのように笑っていた。

「てめえら何やってるでやがるかあああああ〜っ!!」

そんな混沌とした場所に、美空と夕霧が血相を変えて駆けつけて来た。

美空も夕霧も若干どころではなく蒼褪めていた。

「がわがらどん1号……なのか……？」

九十郎はそう呟いた。

直後、ヘルメットを脱がなかった方の女が刀の柄から金属製の棒をガチャンと取り出し、別の金属棒を同じ場所に挿入した。

他の誰にも分らなかつたが、九十郎はその金属棒が電池だと分かつた。

九十郎には、その刀が『剣魂』がインストールされた、精密機械の塊のような存在だと分かつた。

戦国時代では誰も作れない、大江戸学園でも片手で数えられるくらいの人数にしか生み出す事の出来ない『剣魂』つきの刀である。

そして……もう一人の女性がヘルメットを外した。

瞬間、九十郎だけではない、その場にいた全員が口をあんぐりと開けて混乱の極みに叩き込まれた。

「我は武田信玄、明日この世界を肅清する」

川中島で死んだはずの武田光瑞晴信がそこにいた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第143話『劍丞には聞かせられねーわ』

「話す前にもう一回確認するけど、劍丞はいないわね?」

唐突なヴァルハラ宮殿殴り込み作戦発言に、なんのこっちゃと混乱する面々の前で、長尾景虎・通称美空がそう続ける。

「ああ、いねえよ。　　と言うか呼ばなくて本当に良かったのか?」

「……気まずい」

唐突に現れた自称武田信玄……光璃が目を伏せながらそう呟いた。

「おい光璃、それだけが理由だったら今すぐ劍丞呼びに行くぞ」

「あ、劍丞は呼ばないでってのは私の発案よ。　　ぶっちゃけ反対されそうだから」

「反対されそうって、何に?」

「今から皆に話す方針に」

「劍丞が嫌がるって事は技術チート系か?」

「血生臭い系じゃない?」

「その両方」

そう聞いて九十郎は、能天気になんか飯を食う吉音の方をちらと見る。

血生臭い系はこいつも嫌がると思うがなあ……と、内心不安ではあるが、話を続ける。

「チートつっても俺の手持ちのネタはほぼ尽きたから……光璃が何か持ってきたか？」

「無論、まずこのデバイスにこっちで再現できそうな技術を思いつく限り入れてきた」

光璃が懐からiPadに似た小型デバイスを取り出す。

無駄に計算高い光璃が『思いつく限り』と言うからには、本当に思いつく限りなのだ

と九十郎は察してしまう。

「……剣丞には内緒なので、教えないように」

「気づかれたらノータイムで壊すか奪いに来るわね、きつと」

「美空様、いくら剣丞様でもそこまではしないとしますよ」

「核爆弾のデータも入っている」

九十郎は思わずぎょっとした。

「九十郎、犬子かくばくだんって知らないけど危ないの？」

「とりあえず剣丞には絶対言うな、150%話がこじれる」

1回大喧嘩になった後、奇襲で奪いにくる可能性が50%である。

吉音は納得してるのかよと、ちらりと表情を伺うも……特に何の反応も無い。

分かっていないのか聞いていないのか、九十郎には分からなかった。

「光璃、お前まさか本気で戦国時代で核戦争をやるつもりじゃなかるうな」

やりかねない所が九十郎のファースト幼馴染こと武田光璃の恐ろしい所である。

「戦国時代の技術レベルで核爆弾の作成が無謀なのは理解している」

「その無理無茶無謀を通しかねねえのがお前だろ」

「九十郎、『太陽を盗んだ男』は知っているかしら？」

「おいマジでやる気かよ美空!? いくら俺でも流石にビビるぞ」

なお、1979年公開の映画を長尾景虎が知っている事へのツツコミは不要である。

「目下、私達がどうにかしないといけない事項は3つあるわ」

「いやこのタイミングで話題転換すんなよ!」

「一つは戦国乱世の終結。」

まあこれは10年後20年後にどうにかすれば良い事だから、当面は後回しとする

わ」

「九十郎、犬子は今、

かくばくだんで戦争を終わらせるって続かなかった事に本気で安堵してるよ」

「そうだな、だが後回しで良いのかよ?」

「良いの、世の中優先順位ってモンがあんのよ。」

二つ目は吉野とかいう鬼をばら撒いてる迷惑な奴。

三つ目はオーデイン、戦国時代と大江戸学園の英雄から魂を奪って、

エインヘルヤルとかいう絶対服従の兵士みたいなものの材料にしたらしいわ」

「戦国時代はともかく……大江戸学園もなのか？」

「保護対象に剣魂を持たせ、自衛力をつけさせるクロノアイズ方式」

「おいおい、それじゃ俺のクラスメイトに英雄がいたみたいじゃねえか」

九十郎がはっはっはっと笑い飛ばそうとしたところ、光璃はすつと能天気な飯をカッ喰らっている吉音の方を指さし……

「……徳川吉宗の生まれ変わり」

……そう告げた。

「え、誰？」

「ごめん、犬子も分かんないや」

「おっと柘榴に期待しても無駄っすよ」

ただし、徳川吉宗を知っている者は皆無だった。

九十郎は日本史の成績は常に赤点ギリギリだったため、徳川幕府八代将軍の名前を普通に通じているのだ。

「まあまあ、誰の生まれ変わりでもあたしはあたしだからさ、気にしなくて良いよ」

「いやすまん、前田利家とか上杉謙信の生まれ変わりってんならともかく、ぶつちやけ全然知らねえ徳川……よ、よ……よし……」

「……吉宗」

「そうそう、徳川吉宗なんて言われても『はいそうですか』としか言えねえよ」
「大江戸学園じゃあんなに大騒ぎになったのにな!？」

あたしが吉宗で、詠美ちゃんが家光で……」

「すまん、家光って誰だ?」

「有名でしょ!? あたしですら名前覚えてたのにな!!」

なお、徳河吉音は日本史どころか全教科赤点常習犯、追試や補修の場に居ない方が珍しいというレベルである。

「……なんだろうこの肩透かし感、こっちは一悶着も二悶着もあつたのに」

「犬子、前田利家じゃなくて徳川吉宗だったら良かったのに……」

「こら犬子、その話は前に散々やっただろ。前田利家ごと愛してやるから、蒸し返すな」

「あ、ごめん、ごめんね……でも犬子、まだちよつと不安でさ……」

「美空、生まれ変わり云々は良いから進めてくれ。」

吉野とオーデインにどう立ち向かうんだ?」

「吉野をどうにかする方は特に期限も無いから後回しにするわ。」

「今どこで何をしてるか知らないし」

「駿河で何か超でつかくて超強い鬼を造ってるって話は聞いてるっすよ」

「無視するわ。後でどうにかする算段は付いているし、

下手に突つくと新戸と戦う羽目になるもの」

「ああ、そう言えばあいつ、吉野に借りがあつて、

駿河の鬼を守らなきゃいけないって言ってたな。」

「おい美空、良い機会だからあの糞ニートを死なない程度にボコボコにしようぜ」

「後でどうにかするわ、オーデインの方をどうにかした後で」

「後でって大丈夫かよ、オーデインは鬼より強そうだぞ」

「かつて武田晴信がやろうとした事と同じ……」

「長尾景虎を倒すのは面倒なので、先に今川義元を殺して金山を確保するのと同じ」

「……」

「え、何その話？ 義元殺したの？ 下手人は信長じゃなかったの？」

「美空が思わず聞き返した。」

「信長が義元を殺すお膳立てをした」

「当時今川と武田って同盟組んでたっすよね？」

「組んでた」

「光璃お前……」

「17年以上前の話なので時効」

「殺人は公訴時効の対象外だろ」

「……それは現代ニホンの話」

「戦国時代には時効そのものがねえよ!!」

「ないわー」

「ドン引きっすー」

「犬子もちよつと擁護できないかなあ……」

「んで御大将、オーデイン以外後回しにする理由、そろそろ教えてほしいっす」

「このままだといつまでもこの話になりそうだと、やや強引に柘榴が話を戻す。

「オーデインだけ時間制限があるのよ。」

例の剣丞大ハーレム計画から逸脱すればオーデインはしばらくの間魔法を使えない。

時間が経って魔法で色々やられると手が付けられなくなるからその前にどうにかするわ」

「えつと前に新戸ちゃんから聞いた話だと……蘭丸っていう鬼子が、

オーデインの計画を維持する最後の砦だから、それをやつつければ良いんだっけ？」

「でもそれって根本的な解決にならないでしょ」

九十郎は若干イラっとした。

ここまでの自分の言動は完全に棚上げである。

「蘭丸は所詮手駒に過ぎない以上、時間稼ぎにはなるでしょうけど、

オーデインの計画そのものを頓挫させる事までは期待できないわ」

「そりゃ親玉を叩きのめす以上に効果的な手段はねえな」

「でもオーデインは別の世界にいるつすよ。」

でかい船を造れば海の向こうに攻め込む事もできるつすけど、

別の世界に攻め込むには何を造れば良いつすかね？」

「完成した物がこちらにあります」

光璃が待ってましたとばかりに金属製の鉄柱らしきメカをどすんと床に置く。

成人男性のおおよそ半分程度の大きさだろうか。

こけしにも、トータムポールにも、アシヨーカーピラーにも似ているようで似ていない

その物体は、その場にいる全員にとって初見の不思議メカだ。

「何つすか、これ？」

「これはポータル」

「……ぼおたる？」

「大江戸学園がある世界……私や吉音、九十郎がいた世界に繋がるトンネル……つまり、抜け道のような物を作り出す機械」

「く、九十郎の世界に!？」

「繋がるって……帰れ……いや、帰っちゃもうつか!？」

犬子と柘榴と九十郎が目丸くする。

九十郎はもう二度と帰れない、戻れないと思い続けてきた……そう思い込もうとしていた。

故郷が、生まれ故郷が目の前にあるかのように思えた。

だがそれは……同時に、戦国時代で出会い、愛し合った女達との別れを意味するので、はと、犬子と柘榴は肩を強張らせた。

「そうか……そうだよな、お前と吉音が戦国時代に来れたんだ……」

逆に俺達が現代ニホンに帰る方法だって……いや、だが……だが俺は……」

九十郎が顔を伏せ、ぶるりと震え……

「残念ながら、今すぐにポータルを起動させることはできない」

九十郎の次の言葉を紡ぐよりも先に……あるいは、遮るかのように光璃が話を続ける。

「エネルギーが圧倒的に足りない。」

異なる世界を繋げるには巨大なエネルギーを必要とする。

それこそ……そう、核爆弾が1発爆発するくらい熱量があれば、起動できる」

「え、さつき言ってたかくばくだんっていうの本気で造るの？」

「危ないし難しいんじゃないの!？」

「核爆弾作成計画はプランB、プランAが何らかの事情で頓挫した場合の予備プラン」

「プランAは何だ？　ここで『ねえよそんなもん』とか言ったらダダじゃおかねえぞ」

「徳河早雲曰く、江戸時代にわざと似せた衣服、城塞、建物、小道具、通貨には意味がある」

「意味ってどんな意味だよ」

「別の世界、別の場所を同じ場所に誤認させる。」

「世界の修正力、ティンダロスの猟犬、その他ポータルの妨げになる諸々を全部誤魔化する。」

つまり……このポータルをこの時代、この世界の江戸城と、

現代ニホンの大江戸学園に設置する事ができれば、

通常の数万分の一以下のエネルギーでポータル同士を繋げられる」

「核爆弾を造る必要が無くなるって事か」

「その通り。　この世界の江戸城にポータルを設置し、この世界と現代ニホンを繋ぐ。」

それがプランA」

「繋げた後はどうなるっすか？」

「大江戸学園の戦力と戦国時代の戦力を合流させて、ヴァルハラに殴りこむわ」

「ちよ、ちよつと待つっすよ御大将。」

オーディンの本拠に殴り込みは構わねーっすけど、その間越後はどーなるっすか
!？」

「そうねえ、留守居役は次期党首の名月に任せるつもりだけど」

「ヴァルハラがどんな所か知らねーっすけど、

戦が1日や2日で終わるって事はありえねーっすよね？」

「関ヶ原じゃあるまいし、そりやねーだろ」

「え？ 関ヶ原って1日2日で終わったの？」

「半日で終わった、そして黒田官兵衛が天下を握り損ねた」

「ちよつと今大事な話してるから脱線しねーでほしいっす！」

「今玉葉が枯渇して、生産の用途も立ってねーて事忘れたっすか!？」

ドライゼは当面使えねーっすよ！ おまけに春日山城は丸焦げ！

賭けても良いっすけど、一月もしねー内に武田の残党が蜂起するっすよ！」

「粉雪の反攻作戦は本当に見事だったわね」

「むしゃくしゃしてやったぜ、後悔はしてないぜ」

越後長尾家の大ピンチを招いた元凶は、九十郎の作ったピラフに舌鼓を打っていた。で、どうするつもりですか？ これも後回しとか言ったら流石に怒るっすよ。

オーディン退治は大事っすけど、国が亡くなるのまでは容認できねーっす」

「そうねえ、いつそ滅べこんな国って思ったのは1度や2度じゃないけど、

本当に滅んだらちよつと寂しいかもしれないわね」

「ちよつと寂しいじゃねーっすよ！ もつと深刻に考えろっす！」

「まあまあ、ちゃんと策は考えてあるわよ」

「おお、流石は御大将。イザという時だけは何故か頼りになるっすね」

「1ヶ月後に蜂起されたらどうしようもないけど、

1年後に蜂起だったらどうにかできるような気がしない？」

「要は時間を稼いで後回しっすか……でも武田も馬鹿じゃねーっすよ、

何の意味も理由も無く反撃を遅らせるなんて事ありえねーっす」

「粉雪がいるわ」

「え、あたい？ あたいに何させる気なんだぜ？」

「粉雪には反越後長尾家の旗頭になってもらうわ。」

武田家健在の頃は四天王と呼ばれ、さらに今日、春日山城を丸焦げにする実績もある。

反長尾の旗頭としてこれ以上の存在は無いと思わない?」

「美空様、犬子凄く嫌な予感がしてきたんですけど……」

「犬子、柘榴も同じ気持ちですよ」

「おい、本気であたいに何させる気なんだぜ?」

「越後長尾家への反攻作戦をできるだけ盛り上げて、できるだけ大規模にして頂戴。

規模がでかくなればなるほど、下準備にも時間がかかるでしょ」

「正気ですか御大将っ!」

「美空様流石に無茶ですよっ!!」

「え? 最大限合理的な策じゃない、どこが変なのよ?」

「良いっすか御大将、今吉野は超強力な鬼を造ってるっす!」

「いつできるかは知らねーっすけど1年後も未完成ってのは楽観が過ぎるっす!」

「そうねえ」

「1年つつてもオーデインとの戦の片手間っす、

玉薬の生産体制もそこまで劇的に回復するとは思えねーっす!」

「そうねえ」

「その上で1年間準備を重ねた武田残党と戦えって流石にありえねーっすよ!」

「先に言っとくけど、反長尾の旗頭になるのは可能だけど、

ワザと負ける作戦を立てるのは無理だぜ。

あたいは一二三程器用な立ち回りはできねーぜ」

「そうでしょうねえ」

「さっきの台詞もう一度言うつすけど、国が亡くなるのまでは容認できねーつす!!」

「でも、ドライゼ銃の100倍強力な銃がしこたま手に入ったらどうにかできると思わない?」

「は……?」

柘榴が思わず絶句する。

彼女にとつて、ドライゼ銃の時点で未来世界の超兵器に見えたのだ。

それよりも100倍強力な銃と言われても、すぐにはピンと来ない。

「ああ、こりゃ剣丞には聞かせられねーわ」

しかし、かつて現代日本を生きていた九十郎にはすぐにピンときた。

同時に、美空と光璃が何をやろうと……何をやらかそうとしていのかも察しがついた。

「光璃が5. 56mm機関銃 MINIMIを、89式5. 56mm小銃を、84mm無反動砲を、

その他ありとあらゆる現代ニホンの最新兵器を調達し、戦国時代に持ち込む。

1丁や2丁では意味がない、10丁や20丁でも無い、光璃がこれまでに築いてきた人脈を総動員して揃えられるだけ揃え、持ち込めるだけ持ち込む」

とりあえず九十郎は思った……

「劍丞が聞いたら1000%妨害してくるな……」

9回撃退してもなお諦めずに妨害を試みる確率が100%……天津垓もびつくりな諦めの悪さで立ち向かつてくる姿がありありと想像できた。

「光璃、お前が現代兵器を調達できる謎人脈がある点はこの際置いとく。

正直お前ならやりかねねえって思ってる。

だがお前まだ学生だろ！ そんな金どこにあるんだよっ!？」

「何言ってるのよ九十郎、佐渡に金山があるじゃない。

もう二度と金脈が見つからなくても良いって位の勢いで掘りまくれば、

金の問題は解決よ」

美空と光璃ががっつちりと手を握り合った。

九十郎は思った……我が幼馴染、我が主君ながら、まるで悪魔と悪魔が手を組んだよ
うだと。

「おい、それだとあたいは川中島と同じかそれ以上に凄惨と言うか、

「一方的な負け戦をやる羽目になるんじゃないやねーかだぜ」

「初戦で頑固そうな少数を出してきなさい。」

「全員エメンタールチーズ（穴だらけ）にして恐ろしさを見せるから、その後降伏しなさいな」

「そういう腹芸は一二三程上手くねーぜ、あたいはさ」

「何とか上手くやつて、言いたか無いけど他に手段が無いのよ」

「御屋形様がやるんじゃないや駄目なのかだぜ？」

「この前の戦で死んだのは影武者で、本物は密かに逃れてたつて事にして……」

「それはできない」

「何でなんだぜ？」

「ポータルを動かせるのは現状、光璃しかない。」

「森蘭丸対策に使える剣魂持ちの人数も減らせない。 それに何より……」

「な、何より……？」

「新田剣丞の妻・武田晴信は死んだ。」

「光璃はあくまで現代ニホンに生まれ、現代ニホンで育った武田光璃。」

「その建前は崩せない……崩して剣丞の妻に逆戻りしたくない」

「え？ でもついでこの間まで若干引くくらいベタベタして……」

「昔は昔、今は今……今、武田光璃は斎藤九十郎に恋焦がれている。

斎藤九十郎を愛している」

「ええっ!?!」

「ひ、光璃い!?!」

「ま、マジなんだぜっ!?!」

犬子が、九十郎が、粉雪が腰を抜かささんばかりに驚愕する。

そして愕然とした表情で硬直する皆の前ですたすたと九十郎の前に歩き……ちゅつと、口づけをした。

唇が重なる感触がした。

10秒も、20秒も、ずっとずっと唇が重なり続けた。

もう二度と離れない、絶対に離さないという決意がその口づけにあつたように思えた。

「こりやマジで剣丞には聞かせられねーわ」

唇が離れると、九十郎は一人頭を抱えた。

「分かった、分かったぜ! 九十郎に惚れちまつたんじゃ仕方ねえぜ。」

超巨大な反長尾連合軍を作つてやるから、見てやがれだぜ」

「はい、これで全問題解決ね。良かった良かった」

「劍丞にバレたらまず間違ひなく揉めそうだって所を除けばな。

いや、待てよ……おい美空、さっきの案には問題が2つぐらいあるぞ」

「え、そう？ まだ何かあったかしら？」

「さつき光璃も言つてたが、蘭丸はどうすんだよ。

あいつの能力は洗脳で、強力な武器を持てば持つ程逆用されて危険だろ」

「問題無い、劍魂も並行して戦国時代に持ち込む。

劍魂は元々オーデインと戦う為に作られた武器。

オーデインを倒した後なら、大量に戦国時代に持ち込んでも問題無い」

「劍魂持ちは蘭丸でも容易に洗脳できない。

洗脳能力抜きなら蘭丸の強さは転子と同程度……

どう、劍魂持ちが100人以上いれば間違ひなく勝てるでしょ」

「ねえ九十郎、今劍魂持つてるのって何人だっけ？」

「え、そりや劍丞だろ、吉音だろ、光璃だろ……」

「それともう1人、九十郎」

光璃はそう言いながら、一本の刀を九十郎に差し出した。

一目見て分かった、それは前の生で大江戸学園の齋藤九十郎が愛用していた劍だと。

九十郎の劍魂『がらがらどん3号』がインストールされた劍だと分かった。

「俺含めて4人、それに鬼子の新戸か……確かに、合計5人で蘭丸と戦うよりは、劍魂持ちを100人以上に増やしてからのの方が勝率は高そうだな。」

蘭丸の方から仕掛けてきた時はどうする？」

「高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に」

「まあそれしか無いか……」

「それじゃあ問題点その1は大丈夫そうね、それで問題点2は何かしら？」

「いや、それなんだが……」

九十郎が吉音の方をもう一度ちらりと見返す。

まだ温かい食事が何種類も残っていると言うのに、吉音は箸を置き、食器を置き、正座しながら発言のタイミングを今か今かと待っていた。

そして……

「そんな計画だったなんて聞いてないぞーっ！ 反対反対はんたあーいつっ！」

そうやって可愛らしく吠え立てた。

「問題点その2、吉音もこういう血生臭い計画を嫌うって点だよ。」

どうすんだよ吉音抜きで鬼だとか蘭丸だとかと戦うのは骨だぞー」

「吉音、戦争はヒーローごっこじゃない」

比較的吉音との付き合いが長い光璃が説得に動く。

「言いたい事は分かるけど、

要するに気に入らない人全員現代の武器で撃ち殺すって事でしょ！

それって独裁じゃない！」

「だけど、このままダラダラと戦国時代が続くよりは死人は少なくなる」

「最新の武器で偉くなった人が判断を間違えたらどうすんのさ!？」

「反対したら撃たれるんじゃないや誰も何も言えなくなっちゃうじゃない！」

「社会科の授業は全て寝て過ぐし、万年赤点の吉音にしてはまともな事をと九十郎は密かに驚いた。

「光璃達は圧倒的な武力を持って紛争を根絶する。英語で言えばソレスタルビーイン

グ」

「ソレスタルビーイングじゃ駄目だよ！ 結局紛争根絶に失敗してるんだから！」

吉音と光璃がぐぬぬっと睨み合う。

このまま膠着かと周りが心配し始めた頃……

「ジオンは緒戦こそMSを使って有利に戦ったけど、

地球連邦軍は必死になって努力してガンダムやガンキャノンを作っちゃうんだよ。

やっぱ危ないと思う」

「そこは信じてもらおうしかない」

「信じてって言われても……」

光璃は吉音の目をじっと見つめて言う。

「正義無き力は暴力、力無き正義は無力……」

現代二ホンの兵器を暴力にはしない、光璃が絶対にさせない。信じてほしい」

その目は真剣そのものだった。

本当に本当に真剣に訴えかけていた。

吉音はそんな光璃の眼差しをじいっと見返して……

「オーデインと話をつけた後も、時々戦国時代に見に来る。それが条件」

……吉音はそう告げた。

「現代の武器を使って弱い人を虐めてたら本気で怒るからね。

本気で怒って、どんな手を使ってでも止めるから。

だから時々戦国時代に来て確認させて。そうじゃなきゃさっきの計画絶対反対する」

……吉音が折れた。

……

……

……

「一二三、もしかして体調悪かったのか？」

諸々の話し合いが済み、そろそろ解散しようかという雰囲気になった頃、九十郎は一
二三にそう尋ねた。

「へ？ いや、特に悪く無いけど、どうして？」

「いや、さつきからお前一言も喋ってねえだろ。最初からずっといたのによ」

「あれ、言われてみれば……確かに何も喋ってないね、どうしてだろ？」

一二三がうくと首を傾げる。

九十郎は気づいていない、一二三も気づいていない、この場にいる全員が気づいてい
ない……一二三は恐るべき鬼子・森蘭丸によって精神を破壊され、人格を書き換えられ
ている事に。

「ああ、喋ってないと言えば典厩様だよ。」

普段ならツツコミの100や200してなきやおかしいって」

「一二三は私を何だと思ってるでやがるか」

「ツツコミ」

「そりや役に立てなくて悪かったでやがるなっ!!」

あんまりにも話がブツ飛び過ぎて何を喋りや良いのかまるで分からねーでやがった
よー」

そして夕霧もまた、一二三と同じく密かに森蘭丸の手駒とされている事に、誰一人として気づいていない。

一二三と夕霧が見聞きした事は、全て森蘭丸に筒抜けだという事に、誰一人として気づいていなかった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第144話『失言』

「……で、結局劍丞はどうするよ？」

バレたら色々面倒なのは分かるが、遅かれ早かれって感じがすんだけどよ」

「え？ そりゃクーリングオフよ」

「くーりん……美空様、最近横文字使うの気に入ってますんか？」

「丁重に尾張の織田信長の元へお帰り頂くって事。」

「こつちの悪巧みに気付かれる前に全てを終わらせるのが理想よね」

「だ、大丈夫かなあ……」

「そうだなあ……そうだな、ちと不安だがそうする他ねえか」

正直な所、むやみやたらと未来の兵器を持ち出すなという劍丞の意見も道理なのだ。

と言うよりも、正しいか正しく無いかを言えば、間違いなく劍丞の方が正しいのだ。

現代ニホンの武器を持ち出して無理矢理乱世を終わらせたとして、一歩間違えれば焚

書坑儒アゲインで、二歩間違えればポルポト・アゲインだ。

ただでさえ血生臭い人類の歴史がさらに血生臭くなる危険性が大きいという事は、美

空にも九十郎にも分かっているのだ。

分かっていながらもなお、美空は『このままダラダラと戦国の世が続くよりはいくらかマシ』と、九十郎は『舐めプで自分や愛する家族、敬愛する主君が死ぬのは御免』と、それぞれの理屈でもって道理を引つ込めているに過ぎないのだ。

本当は、未来の兵器で無理矢理乱世を終わらせるなんてインチキはやらないに越した事が無いというのは分かっているのだ。

「だがなあ美空、劍丞は殺さねえって点は、俺は譲らねえぞ」

いつそ殺した方が色々早いという点は、美空も九十郎も一致している。

美空に至っては、本多忠勝が四六時中ボディガードのように侍ってしていなければ、すぐにでも殺してしまいたいとすら思っていた。

しかし、九十郎は頑なに劍丞を害する行動に反対する。

「前から思ってたけど、九十郎の劍丞への信頼はどっから来るのよ?」

「戦争を終わらせんのも大事だろうし、大変なんだろうけど、

たぶんもつと大変なのは、戦争が無い世の中を維持する事なんだと思う」

「そうね、そこは理解するわ。」

今まで殺して奪う事が当たり前だった連中に、田畑を耕し、家や農具を造り、

金を稼ぐ生き方を覚えさせるのはきつと大変でしょうね」

「特に根拠がある訳じゃねえけどな、劍丞はきつと、

戦争が終わった後にこそ必要な奴なんだと思う。

憎み合って殺し合う以外の生き方を……なんと言うか、こう……

上手く言葉にできねえけど……」

「……誑して教え込む、とかじゃないの？」

「やべえ、否定できねえ」

「あはははつ、あの誑し男にはピッタリの役割じゃない」

「まあとにかくだ、あいつには俺や美空とか、光璃とかとは違った役割がある奴だと思
う。」

「だから殺すのは無しだ」

「そうね、こつちも一回殺そうとして失敗した身ですし、

再チャレンジは勘弁してあげようかしら」

「劍丞様、土壇場になるとしづといですしね」

「……と、一回劍丞殺しに失敗した犬子が口を挟む。」

「主人公補正だろ」

「だから九十郎のアイツへの信頼はどっから来るのよ」

「色々あったんだ、色々」と

九十郎はどことなく、新田劍丞に秋月八雲と似た雰囲気を感じていた。

心のどこかで、主人公に自分のような屑が勝る筈が無いと感じていた。
だが……

「……しかしまあ、役割分担任ならできらるだろ。

俺や美空がダーティファイトで乱世を終わらせて、

その後は剣丞にバトンタッチって事だな」

……九十郎は少し、ほんの少しだけ、八雲や剣丞との折り合いをつけられるようになつていた。

……

……

……

「九十郎さん、九十郎さん……起きて……起きてください……」

翌朝、誰かが九十郎を揺り動かしていた。

「ん……んがあ……う？」

九十郎が目を覚ますと小寺官兵衛・通称雫が土下座をしていた。

瞬間、九十郎は物凄く物凄く嫌な予感がした。

「官べ……じゃない、雫。何をやらかした？」

九十郎の声が震えていた。

できれば聞きたくは無かったが、聞かざるを得なかった。

「失言しました」

九十郎は眩暈がした。

「……誰に、何を言った？」

「劍丞様に色々バレました」

九十郎は朝っぱらから気絶しそうになるのをギリギリ堪えた。

そして……

「官兵衛てめええええええーっ!!」

朝っぱらからそんな悲鳴にも怒声にも似た叫びが辺りに響いて、

疲れ切つてぐーすか眠っていた犬子が飛び起きた。

……

……

……

「どうして分かってくれないんだっ!？」

「どうして分かってくださらないんですかっ!？」

犬子と雫と九十郎がごそこそと忍び歩きで劍丞隊の面々に宛がわれている宿舎にやってくる、何やら険悪な雰囲気になっていた。

今にも掴み合い、殴り合いに発展するのではと思う程に強い怒気を孕んだ声が聞こえてきた。

「ありや九十郎と……竹中半兵衛だな。他の面々が居ないようだが……」

「あらかじめ遠ざけておきました。

そのおかげで広まってほしくない事が広まらずにすんでいるのですが、

そのせいで誰もあの2人の口論……いえ、喧嘩を止められず……」

「官兵衛がああ2人と何をしてたかはあえて聞かねえよ」

「……エッチな事はしてませんよ」

「そういう誤解を招きかねない事をしてた自覚はあるんだね」

「正直……ええ、正直に言つて、配慮不足と言いますか、不注意でした。

反省します……反省しますので、なんとか止められませんか」

「お前が何とかしろよ黒田官兵衛」

「何とかする算段があれば九十郎さんと呼んでませんよ！」

「お前なあ……」

そうこうしている内に詩乃と劍丞が益々ヒートアップしていた。

「分かっていないのか!？」

現代の武器はドライゼ銃とは比べ物にならない程に危険で、強力なんだ!

「一步間違えればどれだけ大勢の血が流れるか分かったものじゃない!」

「しかし、曲がりなりにも乱世を短時間で納める事ができたなら、

戦で死ぬ者も! 傷つく者も! 家財を奪われる者もずっと少なくなります!」

「分相応を大きく超えた武器で成り立った権力者が、民衆を幸せにするものか!

強力な武器を背景にいつまでも戦いを続けるか、

民衆をどこまでも搾り取る事を考えるに決まっている!」

「その危険は、未来の武器でも、槍と弓矢でも、いつそ丸太でもあるでしょうが!

長尾が未来の武器で乱世を収めるのならば、それを前提に立ち周りを考えるべきです

!」

「美空に頭を下げて家来にしてもらうのか!」

「それが最善ならばそうします!」

「川中島でどれだけの人を撃たれて死んだのか忘れたのか!」

「あんな光景! 戦国の世では良くある事です!」

「ああ言えばこう言う!」

「こつちでの台詞です!」

「この分からずやつ!!」

「この分からずやつ!!」

2人共、既にいつ殴り合いに発展するかという勢いであった。

「……官兵衛、お前ホントにどんな失言したんだよ」

九十郎は頭を抱えていた。

いつそ今すぐ逃げ出したい気分だった。

「黙秘します」

「黙秘ってお前……」

なお、黙秘権について規定する刑事訴訟法の成立は西暦1948年、要するに未来の概念である。

「どうする九十郎、いつそ2人共噛んで犬にしちゃう？」

なんやかんやでついて来た犬子がちよつと強引な解決法を提案する。

「それは問題の先送りだろ……いやでも他に方法もねえしな……」

あんまり長引くと流石に他の剣丞隊が気づくだろうし。

そうなったら益々ややこしくなるかもだな」

「じゃあ隙を見て行くから、九十郎は注意を引いておいて」

「そうだな……いや、やっぱ言葉で説得する。」

犬子には「つちもさつちも行かなくなつた時に頼む」

「分かつたよ、スタンバっておくから合図してね」

犬子は御家流で自らの身体を犬に変え、近くの茂みに潜り込んだ。

九十郎が腹を括って前進する。

基本逃げ腰のこの男が腹を括るのは相当なレアケースである。

そして……

「お前らそこまでだ！ 官べ……雫から何言われたか知らねえが喧嘩はよせ！」

基本非常識な九十郎にしては常識的な台詞と共に割って入った。

「九十郎、か……」

ある意味、この口論の元凶とも言える人物の登場に、詩乃も劍丞も一瞬戸惑い、言葉と言葉の応酬がやんだ。

「お前らの喧嘩の原因は何だ!？」

「お前だよっ!!」

「貴方ですよっ!!」

詩乃と劍丞の台詞が見事に重なった。

「馬鹿な!?! 俺が一体何をしたと言うんだ!?!」

「今からやらかしそうな事が問題なんだよ!」

「やらかすのは確実ですが! ええ確実ですがっ!!」

それはそれとして少しでも被害を軽くする努力をするべきだと言っているのですっ

!!

「やらかす前に止めるべきだろう！」

「やらかし前提でも全体として見れば死人が減るのが厄介なんですよ！」

「お前ら、一体俺を何だと思ってるんだ……」

……結論、全部九十郎が悪い。

叫びまくったせいで詩乃と劍丞ははげえはあと肩で息をしていた。

特に基本病弱な詩乃は慣れない大声を出したせいで顔色が悪い。

「まあ、話はだいたい分かったよ。」

要するに現代ニホンの武器を戦国時代に持ち込むなって話をしてたんだろ？」

「九十郎、考え直してくれないか。 どう考えても良い結果になるとは思えない」

「いや決めたのは美空で俺じゃないんだが」

酷い責任転嫁である。

「だったら止めるのを手伝ってくれ！」

「たぶん前にも言ったが、俺は舐めプで死ぬのは勘弁だ。」

全力で抗った結果死ぬならともかく、

まだ打てる手があるのにそれをせずに死にたくない」

「それで大勢が死ぬぞ！ 川中島のあの光景を繰り返す気なのか!？」

「一体何人を撃ち殺せば気が済むんだ!？」

「極論、俺の家族、俺の主君が生きてりや他は死んでも良い」
外道の所業である。

「未来の銃で撃ち殺される人にだって、愛する家族がいるんだ!

主君だっている! 同じ人間だって何で分からないんだ!

力をより強い力で押さえつけるやり方じゃ、戦争が終わっても絶対に長続きしないぞ
!」

「そこまでは責任持てん。 その辺は美空に考えてもらうさ」

「考えていると思うか?」

劍丞は真顔で尋ねた。

九十郎は数十秒程うぐんと考え込み……

「……やべえ、ノープランって言いそうだ」

その辺、美空と九十郎は似た者同士である。

そもそも、頭を空っぽにして突っ走るのが長尾美空景虎の基本姿勢である。

目の前の戦いをどう切り抜けるかは神業、あるいは芸術的とすら言えるセンスを發揮するのだが、目の前の戦いが終わった後どうするかを考えるのは苦手なのだ。

「だったら今すぐ止めないと駄目だ! 人が死んでからじゃ取り返しがつかないぞ!」

「劍丞様！　それでもなお止めるべきではありません！」

九十郎が説得されかけたその時、詩乃が劍丞の前に割って入った。

「古来から巧遅は拙速に如かずと言います。

多少の問題はあろうとも、

早期に戦国乱世を終わらせる可能性があるのなら、それを止めるべきではありません
ん」

「分かつてる！　その方がかえって死ぬ人数は少ないだろうって事は分かつてるんだ！

だけどそうやってできた社会は、

きつと未来の銃という暴力で無理矢理頭を押しさえつけられる地獄のような社会だ！」

「それでもいつまでもいつまでも戦国の世が続くよりは良いじゃないですか！」

「それに戦国が終わった後、海外に出兵する事になるかもしれない！」

負ければそれで良い、ただ勝ったらどうなる!?

いつまでもいつまでも戦いを続ける事になるかもしれないじゃないか！」

「ならば、そうならないように誘導する方法を考えるべきです！」

「そんな簡単に出来たら苦労はしない！」

「そうやって貴方は夢みたいな目標を掲げて分かった気になって！」

詩乃と劍丞が泣きそうな顔になりながら睨み合う。

最早雫も九十郎も眼中に無いかのようである。

とりあえず九十郎は後で雫にキツイお仕置きをしようかと心に決めた。

「劍丞様がここまで分ならず屋だったとは思いませんでした」

「詩乃がここまで頑固だとは思わなかったよ」

詩乃と劍丞が、独り言のように呟いた。

「貴方を主と仰いだのは間違いでした」

詩乃は今にも泣きそうな顔で俯き、そう呟いた。

その声は劍丞や九十郎、雫の耳にもしつかり届く。

物陰から様子を伺う犬子（御家流で犬に変化中）から、『どーするの？ そろそろ噛んで良い？』というアイコンタクトが来て、九十郎は『ステイ！ ステイ！』とジエスチャーを返す。

御家流使用中は体格と共に知能まで犬と同程度まで下がるため、何やら険悪な雰囲気という所までは理解できているが、具体的に何を話しているかまでは理解できていない。

「雫うつ！ 俺もう帰って良いかな!? 帰って良いよなあつ!?

もう後は野となれ山となれって逃げ出しても良いよなあつ!!」

「待つてえつ！ お願いだから待つてえつ!!」

コレの原因を作ったの私なんですよおっ！」

「(それはてめえの責任であって俺の責任じゃねえええーっ!!)」

九十郎は早くも逃げ腰だ。

いつそ犬子にアタックさせて2人共犬に変えて……とも思ったが、何の解決にもならないどころか状況が悪化する未来しか見えなかった。

そんな2人のコントのようなやり取りをよそに、場を包む空気はさらにさらに険悪になっっていく。

「俺が気に入らないのなら、いつでも隊から離れてくれて構わない。

俺は……俺は、たとえ1人になっても、やるべき事をやるだけだ」

剣丞の声は震えていた。

本心では行かないでくれと叫びたかった。

心の中では自分の周りから誰もいなくなるのではという不安で一杯だった。だが剣丞はそんな感情を、理性でもって踏み潰す。

「たとえ乱世を終わらせるためでも、やっちゃいけない事はあるんだ」

それは詩乃との決裂を意味する言葉だ。

その言葉を劍丞は、身が張り裂けそうな程の痛みを堪えて振り絞った。

「出ていきますとも、ええ出ていきますとも！」

もう劍丞様の頭の固さにも、すぐに女人を誑すその性質にも、

何度も何度も無茶をするその性格にも振り回されるのは沢山ですつ!!」

詩乃の声も震えていた。

本心では離れたくない、別れたくないと叫びたかった。

時々妙に頭が固くなる所も、頻繁に新しい女を作ってくる所も、放っておくと単身敵

城に侵入しようとする所も、全部ひっくるめて劍丞を愛していた。

だが詩乃も自らの感情を、理性でもって押し潰す。

「たとえこの先、千の血が流れても、万の嘆きが生まれても、

戦国の世を終わらせる事に価値があると私は信じます」

それは劍丞との決裂を意味する言葉だ。

その言葉を詩乃は、身が張り裂けそうな程の痛みを堪えて振り絞った。

「ちつくしよおおおおおーっ!! 帰りにええええええーっ!!)」

一方、九十郎は情けなく頭を抱えていた。

2人の間に立つてオロオロしながら、いつそ犬子をけしかけて全員犬に変えてしまおうかと本気で悩み始めた。

問題の先送りにしなければならないどころか普通に逆効果になりかねなかったが、それ以上にこの場の空気に耐えられないというか、色々面倒臭くなってきたのだ。

何秒か、何十秒かの沈黙の後、九十郎は意を決して犬子に『アタック』のジェスチャーを……

「んぐう!? んんっ……」

それが物陰に隠れる犬子に伝わるより一瞬早く、何か九十郎の口を塞いだ。

詩乃が唐突に九十郎に抱き着いて、思い切り背伸びをして唇で唇を塞いだのだ。

「し……詩乃……!?!」

劍丞は愕然とした。

意見が違っても、失望されても、劍丞は詩乃を愛していたし、詩乃も自分を愛してくれていると思っていた。

少なくとも劍丞にとって、自分の妻が他の男と唇を重ねるのを見るのは初めての経験だ。

それは詩乃にとって咄嗟の行動だ。

愛する劍丞に出ていけと言われ、悲しみと混乱の余り、自暴自棄になった末の行動だ。普段の理知的で慎み深い詩乃からは想像もつかないような行動で、本人にとつても、

劍丞や九十郎にとつても衝撃的な行動だった。

あるいは……あるいは、こうすれば劍丞が自分を取り戻そうと動いてくれるかもと、期待していたのかもしれない。

「以前から考えていました。

もしも出会う順番が逆だったならば、

私は九十郎さんを主人と慕っていたかもしれないと」

詩乃はそう告げる。

劍丞は奥歯をぎゅつと噛み締めながら目を伏せて、九十郎は予想外の告白に目を白黒させた。

「もしも出会う順番が逆だったならば、私は九十郎さんを愛していたかもしれないと」

詩乃はそう告げる。

それは詩乃の本心からの言葉ではない。

チラリとでも考えなかったかと言われれば嘘になる。

しかし、どれだけ喧嘩しようが、見解の相違が生じようが、それでもなお詩乃の主は新田劍丞であり、詩乃の愛する夫もまた新田劍丞だ。

「ただ、だけれども……」

「ああ、そうか……そうかい……」

……劍丞には、そんな詩乃の心は読めなかった。

普段の劍丞であればすぐに察して、理解したのであろうが、頭に血が昇った今の劍丞ではそこまでの機微は無理だった。

劍丞は愛する妻の一人である詩乃を取られた怒りと悲しみと共に右拳にありつたけの力を込めて……九十郎の顔面を思い切りブン殴った。

「ぐふっ!？」

腰の入ったパンチをまともに喰らい、バッファローマンのような体格の大男がよろめき、大地に腰を打ち付ける。

なんとも無様な姿である。

「ちよつと待って、俺なんか悪い事したか!？」

今回ばかりは俺被害者だと思っただけどおっ!!」

九十郎は立ち上がりも殴り返しもせず命乞いを始めた。

実に無様な姿である。

「詩乃は俺の嫁だ！ お前には渡さないぞ、九十郎おっ！」

「チクシヨウ！ 話を通じねえっ!!」

「何が妻ですかっ！ 何が渡さないですかっ！」

気に入らないなら隊から出て行けと言ったのは何処の誰ですかっ!!」

「待ってお願い！ 火に油注がないでっ！ 300円あげるからやめてえっ!!」

「う……うおおおっ!!」

「がはっ!!」

劍丞からもう一度ブン殴られ、九十郎が地べたに後頭部を打ち付けて悶絶する。

物凄く物凄く無様な姿である。

一方、雫はしれつと植木の裏に隠れてやり過ごしていた。

「頼むうううーっ！ 誰か助けてくれええええーっ!! できれば光璃！」

いやこの際一二三でも吉音でも良いから誰か来てくれえええええーっ!!」

もんだりを打ちながら九十郎は実に他力本願な祈りを天に捧げていた。

基本不信心で、基本バチ辺りなこの男の祈りが天に届く事は滅多に無い。

滅多に無いが……今この瞬間だけは、何故か九十郎の祈りが届いたようだ。

「……ちよつと待った」

武田光璃……九十郎のファースト幼馴染にして、かつては戦国時代の武田晴信だった少女がその場に現れたのだ。

「ひ、光璃いつ！ 助かった、超助かった！ いやマジで助かった！

ありがとうカミサマあつ!! 俺、明日からカミサマ信じるよつ!!」

まるでずっとスタンバっていたかのようなタイミングの良さだが、九十郎は素直に神に感謝した。

が、しかし……

「……んんっ!? んむうっ!!」

……しかし、来たのは救世主ではなく悪魔の類であった。

突如現れた光璃は、倒れ伏す九十郎に覆いかぶさるように身体を預け、そのまま強引に唇を唇を重ねたのだ。

そして……

「……九十郎は光璃のモノ。誰にも渡すつもりは無い」

……そしてとんでもない爆弾発言をその場に投下した。

「(悪化したああつ!! これ以上無い程に悪化したあああああーっ!!

光璃でめええっ! 何でこの状況下でそれを言ったあああああーっ!!)」

九十郎は心の中でカミサマに対し中指を突き立てた。

「……このタイミングが一番ダメージが大きそうだったから？」

「あ、ゴメンな光璃、長い事会ってなかったから忘れてたな！」

お前って腐れ外道だったな！」

九十郎は心の中で光璃に対しても中指を突き立てた

自分の事を思いつきり柵に上げる男である。

実際の所この2人は、後先を考えるかどうかという点で天と地ほどに差があるが、他人の被害や迷惑を考えるかどうかという点では似た者同士である。

「ひ、光璃……光璃なの……か……？」

眼前のあんまりな光景に、劍丞も驚きを隠せない。

そもそも、劍丞は光璃が死んだものとばかり思っており、目の前の人物が大江戸学園の武田光璃だという事すら知らない。

いきなり死んだ筈の人間が現れて、唐突に九十郎とキスをしたのだ、劍丞の驚愕と衝撃は推して知るべしである。

「そ、そんな……確か川中島で鬼に変わって……斬られたと……!?!」

「我は武田信玄、明日この世界を肅正する」

「お前その台詞、昨日も言ってたろ」

「戦国時代の武田晴信は死んだ、もういない。」

背中や胸に一つとなつて生き続けるような事も無い。

私は現代ニホンに生まれ、現代ニホンで死ぬ予定の武田光璃。

大江戸学園甲級二年は組の武田光璃。 武田晴信ではない」

「そ、そんな……そんな事つて……」

「新田劍丞、貴方を愛した少女、武田晴信は確かに光璃の前世である。

かつて新田劍丞を愛した記憶は確かに光璃の頭に入っている」

「そ、それならっ!!」

「だけど……だけど、17年間ずっと放置されると、どんなに美しい記憶も、愛情も、

薄れていくのは避けられなかった」

「17年……放置……?」

劍丞は何を言われているのか分からなかった。

「薄情者と、尻軽女と思つてくれても構わない、罵られても甘んじて受け入れる。

だけど今、この瞬間、光璃は斎藤九十郎に恋しく想い、斎藤九十郎を愛している。

その一点だけは譲れない、どうしても譲れない。

劍丞にも、北条早雲にも、オーデインであろうとも、この想いだけは否定させない」

「あ……あ……」

劍丞には分かった、分かつてしまった。

光璃は本気だと。

本心からそう言っているのだと。

武田光璃は自分の意思、自分の考えで新田劍丞ではなく斎藤九十郎を選ぶのだと。

「前の生ではそんな素振り見せなかつたよなお前」

「……喪つてから、初めて分かる大切さ。光璃は少々、臆病になりすぎた」

「嘘つけ、臆病から真逆の性格だろお前は」

「恋愛と戦術を同列に語ろうとしないほしい、乙女心というものは複雑」

「お前が乙女つてタマかよ」

九十郎は勘弁してくれとか、これ以上人間関係を複雑骨折させないでくれとか考えていた。

しかし、光璃の乱入により劍丞の意識が詩乃から逸れたのは確かである。

それはつまり、この場から退散する最大の好機がやってきた事に他ならない。

「犬子おっ！ 雫うっ！」

九十郎が物陰に隠れている2人の名を叫び、同時に詩乃をお米様だつこで抱え上げる。

バッファローマンのような体格の大男にとって、小柄で貧相な体格の詩乃を抱えてダツシユするのはそう難しい事ではない。

「逃げろおおおおおーっ!!」

齋藤九十郎逃亡。

隠れていた雫と犬子、そしてアイコンタクトで九十郎の思惑を完全に把握できる光璃も同時に脱兎の如く逃げ出した。

「雫と光璃いつ！ 後で覚えとけよ、キツイお仕置きしてやるからなああああーっ!!」
そんな情けない捨て台詞と共に、齋藤九十郎は剣丞隊の宿舎から逃げ去っていった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第145話『母子の会話』

「ハジケリストって知ってるかしら？」

「……ごめん、何の話？」

ある日の事……新田劍丞が物置にあつた謎の刀劍と共に戦国時代に飛ばされる数日前に、劍丞の何人か、いや何十人かいる義姉の1人である華琳が、劍丞にそんな質問をした。

「ハジケリスト……直訳すると『バカ』。人生をかけてハジけまくってるバカ達のことを、

人はハジケリストと呼ぶらしいわ」

「ええと、それは要するにコメディアンって事？」

「結論を急がない、これはいくつかある説の内の1つに過ぎないわ」

「他にも説があるの？」

「一説によるとハジケリストとは、ロースとカルビの間にある肉の部位」

「さっきの説明と全然違うんだけど!？」

「最新の研究データによると、カップ焼きそばのかやくの一種」

「食べ物の話!？」

「あるいは……言葉で表現できる程、安っぽいものではないという説もあるわね」

「説明すら放棄した!？」

「私としては、これらの説の中で一番本質に迫った説明は

『ロースとカルビの間にある肉の部位』だと思おうわ」

「むしろ一番訳が分からない説明なんだけど!？」

義姉が急に訳の分からないボケを連発し始めて、劍丞はげんなりとした表情になる。

義姉……本郷一刀の嫁達はかなりの割合で天然ボケ気質な者が混じっていて、劍丞がやむなくツツコミに回る事は結構ある。

しかし、今のボケは天然ではなく、意図的な物だろうと、劍丞は思った。

「要するにハジケリストってのは、ハジケってのは、そういうものって事よ」

「ごめん華琳姉さん、悪いけど全然分からない」

劍丞が戸惑いながらそう言うと、華琳は『まだ早かったか』と小さく呟き、ため息を漏らす。

「じゃあ話題を変えて、曹孟徳の求賢令は知っているかしら?」

「も、物凄い話題の急カーブ……まあ良いけど。」

たしか『才あれば用いる、才あれば挙げよ』っていう布告じゃなかった?」

「そうそう、曹操だけに」

「……………」

劍丞は何言つてんだこいつという視線を華琳に向けた。

「……………」ほん、曹孟徳はどうしてそんな布告を出したかって考えた事はあるかしら？」

「それは……………」それは、乱世の終結のために、

従来常識に囚われずに積極的に優秀な人材を……………」

「まあそういう説もあるわね。」

「これも文献を巡つてみると、色々な説明がされていて面白いのよ」

「じゃあ、華琳姉さんは別の見解なのかな？」

「NOハジケ、NOライフ。」

ハジケない人生なんて人生じゃないという理由だった説も……………」

「よりもよって焼肉が理由!? いや、その説だけは絶対に無いと思う」

この時、劍丞は華琳の言葉を笑い飛ばした。

歴史書にある曹操の記述と、彼女の言うハジケリストの定義とどうしても結びつかないからだ。

そしてこの時の会話で彼女が劍丞に何を伝えようとしたか……………少なくとも、劍丞はそれを理解できなかったし、理解しようとはしなかった。

ただの暇つぶし、ただの馬鹿話だと思っていた。

過酷な運命に身を投じそうな気がする劍丞への、彼女なりの激励だったとは思えなかった。

……

……

……

「だけど……だからって現代兵器を戦国時代に持ち込んで良い話があるか！」

九十郎達が慌ただしく去っていった直後、劍丞は一人そう叫んでいた。

本当にこれで良かったのか、もつと何か言うべき事や、するべき事があつたんじやないかと考え込んでいる内に華琳の言葉を思い出し……思い出したのは良いが、何のヒントにもなっていない事に気がついた。

だいぶ前に（第69話）、本郷一刀と同居する美女達が後漢末期の英雄、英傑達だと知らされた事はあつたが、何度考えても、何度思い返しても実感が湧かなかつた。

劍丞には彼女達が普通の人に見えた……一部ハジケリストや頭梁山泊が混じっているが、そこ以外は普通の人に見えた。

少なくとも、戦争をして、焼き討ちをして、略奪をして、人殺しをするような人々にはとても見えなかつた。

川中島のように、何人も、何十人も、何百人も射殺するような命令を出せるような人々には見えなかった。

川中島のように、血と硝煙の臭いがむせ返り、銃声の度に人が倒れ、数えきれない程の人々が呻き声をあげながら死んでいく地獄を作り出すような人々には見えなかった。

川中島のように、川中島のように、川中島のように……

「……うっぷ」

……あの時の光景を思い出して、吐き気がした。

死体の山、吐き気がするような熱く濃い血の臭い。

さつきまで普通に喋っていた人達が、普通に笑っていた人達が、銃声が轟く度に軀へと変わっていったあの光景を思い出した。

「絶対にあんな光景は繰り返させない。絶対にだ」

劍丞は決意を新たにす。

詩乃が言った通り、美空が大量の現代兵器を手に入れば、乱世は史実よりもずっと早く終わるだろう。

史実よりも早く乱世が終わる事で結果として死人の数は減るかもしれない。

それならば対案を出せと言われたら、きつと何も言い返せなくなる。

それでも、劍丞は美空に現代兵器を渡したくなかった。

美空にだけは渡したくなかった。

美空にだけは……美空にだけは……あの川中島の光景を現出させた美空にだけは

……

「ああ、なんだ……結局俺は、美空が信用できないだけだったんだ」

劍丞が小さな声で呟いた。

劍丞が出した答えは、胸の奥にすんと落ちていった。

そして考える。

もしも劍丞の最愛の妻である織田久遠信長が、美空と同じように現代兵器を手に入れようとしたらどうするだろうか……現代兵器の危険性を説く程度の事はするだろうけれど、たぶん身体を張って止めようとまではしないだろうと思った。

根っこの所で信じているのだ、織田久遠信長を。

「美空も久遠も同じ自分の嫁だというのに、おかしい話だよな……」

劍丞が少し笑いながらそう呟いた。

どう考えても、何度考え直しても、美空に全幅の信頼を預ける事はできなかつた。

「……決めた、美空を止める。 なんとしても、どんな手段を使っても止める。」

夫婦なんだからとか、九十郎には世話になってるからとか、言葉尽くしてとか、そういう段階はもう過ぎた。 もう腕づくで止める以外に無いんだ」

劍丞は強く決意した。

「いや違う、止めるじゃ駄目だ、止めるなんて考えじゃあ止まらない。

もういつそ……いつそ、敵だと思わないと何もできない。

敵だと思って、命を奪い、命を奪われる覚悟が無ければ何もできない」

劍丞は強く強く決意した。

劍丞はその日初めて、人を殺す覚悟を決めた。

そして……

『やめろ美空っ！ やめてくれっ!!』

……劍丞の脳裏に、九十郎の土下座が浮かび上がる。

良く分からない内に犬子を抱いた夜、逆上した美空に殺されかけた時に一回（第75話）、それから少し後、逆上した犬子に殺されかけた時に一回（第101話）、劍丞は九十郎に命を救われている。

九十郎は美空を主君と仰いでいる以上、美空を殺しても止めるという事は、命の恩人である九十郎も殺す可能性があるという事だ。

そんな選択を、劍丞はした……したのだ。

「腹は括ったか、主様？」

そんな劍丞の元に、征夷大將軍足利義輝こと一葉がひよつこりと顔を出した。

「一葉!? いつからいたんだ?」

「九十郎が駆け込んで来た時からじゃよ。」

あんなでかい男がでかい声でぎゃーぎゃー喚かれては、嫌でも気がつく
無駄に騒がしい男である。

「他の皆は?」

「適当に誤魔化して遠ざけておいた。後で幽に礼を言っておくのじゃな」

「そうか……」

劍丞が少し安心する。

劍丞隊結成の時からずっと軍師として皆を支えてきた詩乃と意見対立、そして連れ去り……いつまでも隠し通せる事ではないが、かといって今すぐ周知させたい事でも無い。

「して主様、さつき九十郎が詩乃を米俵のように持ち去っていったが、

あれは連れ去られたのか? それとも自ら去ったのか?」

「そ、それは……」

連れ去られた……と、言いたかった。

だがしかし、詩乃との決裂は決定的だった。

あのまま口論を続けていたら、きつと詩乃は自らの意思で、自らの足で九十郎と共に

劍丞の元から去っていったらとうと確信できた。

「全く、この前は半死半生で寝込んで、今度は喧嘩別れか。

イザという時に役に立たぬ軍師よな」

「前回のも今回のも、原因はむしろ俺にあるよ。 前回は俺が詩乃を護れなかったから。

今は俺が詩乃の説得を聞いてもなお、我を通したから。 それと……」

劍丞の脳裏に、詩乃が大きく背伸びをして九十郎と口づけをした瞬間が浮かび上がる。

心の底から腹が立った。

心の底から憎たらしかった。

そして殴った、心の赴くまま、感情の赴くままに。

『やめろ美空っ！ やめてくれっ!!』

かつて九十郎が土下座して自分を守ろうとしたのに、自分は感情の赴くままに九十郎を殴った。

それが自分と九十郎の器の違いを示しているようで……今度は自分自身を殴りたくなった。

「ならば今度は器比べでもやろうか」

「……一葉!？」

まるで心を読んだかのような台詞を聞き、劍丞はぎよつとする。

「主様が何を考えているかなどお見通しよ。」

齋藤九十郎も一廉の人物とは思うが、主様には及ばんよ」

「そう……だろうか……」

劍丞はとでも頷く気になれなかった。

「美空や詩乃の論にも一理はあろうが、主様が我を通すだけの論があり、意地もある訳だ」

「それは……ああ、そうだ」

劍丞は一瞬迷いながらも、大きく、強く頷いた。

「であれば今度は九十郎と主様で器比べよ」

「うん、ごめん良く分からないんだけど。論理が何段階か飛んでない?」

「これ以上詳しく説明するなど、余には無理だぞ!」

ええつと……つまり……そうアレじゃアレ!

仁義とか人徳とか、そういうあともす……あともす……

ええつと……そうじゃあともすふいあじや!」

「あともすふいあつて……」

劍丞が苦笑した。

言いたい事は何となく分かるが、戦国時代の人物が背伸びしてアトモスファイア（霧囲気）を使うのが少しおかしかった。

「つまり……最高に高めた俺のフィールで 最強の力を手に入れてやるぜ!!」

という事ですね、公方様」

そしてそこにデュエル脳が乱入。

乱入ペナルティによってライフが2000ポイント削られた。

「いやむしろ遠ざかった気がするんだけど?! ……つて、潮衣? 君もいたのか?」

「す、すみません……覗き見をするつもりは無かったですけれど……」

「いや、良いんだ。 隠す気は無かったし、どう隠したっていずれ皆には知られるのだから」

「おお丁度良い、詩乃も雫もおらんので相談役に困っておった所じゃ。

何か良い案はあるか?」

「良い案……ええつと、景虎さんが未来の鉄砲を手に入れるのを阻止するために、

どのような行動をするべきか……ですか?」

「それで良いかの、主様」

一葉から話を振られ、剣丞は一度深く深く息を吐き、大きく大きく息を吸う。

脳が酸素を欲していた。

この言葉を口にすれば、今度という今度こそ後戻りはできない。

決定的に美空や九十郎と対立……敵対する決断をしなければならぬ。

「……それで良い、絶対に阻止しないといけない。

美空に未来の兵器を渡すのは危険すぎる」

「うむ、そう来なくてはな」

「分かりました、それでは今から……」

湖衣が大きく頷くと、遙か遠く……織田久遠信長の居城たる、岐阜城がある方向を指し示す。

そして……

「……とりあえず逃げちゃいましょう」

劍丞と一葉がぐくぐつと脱力した。

「つい先日、粉雪さんが春日山城を襲撃するのをこつそりと手助けしましたよね」

「ああ、そうだな」

「なんじゃと!?! 初耳じゃぞ、何でそんな面白そうな事に声を掛けん!?!」

「バレたら殺されちゃうので、同時並行でこつそりと逃げ支度もしました。

尾張に戻る最短最速の道順も下調べもしています」

「それも初耳じゃぞ!?!」

「ごめん、俺も初耳」

「とにかく、長尾家の居候同然の立場ではどうする事もできません。

戦うにせよ、交渉するにせよ、力の後ろ盾が無ければどうしようもありません。

なので最速で尾張に退き……」

「……久遠と合流か」

劍丞は知らない。

湖衣が蘭丸によつて都合の良いように操られている事を。

劍丞は知らない。

湖衣の見たもの、聞いたことは全て蘭丸に筒抜けだという事を。

劍丞は知らない。

蘭丸が織田信長を洗脳し、関係者のほぼ全員を洗脳し、着々と力を蓄えている事を。

そんな劍丞が……

「……分かった、そうしよう。久遠と合流して、織田の力を借りて美空を止める」

……決断した。

……

……

……

時は少し遡り、九十郎が詩乃と劍丞の大喧嘩に巻き込まれ、胃壁をガリガリと削られていた頃……

「生きていたか、晴信」

「お元氣そうで、前の生でのお母さん」

武田光璃と武田信虎が対面していた。

掴み合い、罵り合い、殺し合いになった時は即座に止められるよう、美空と柘榴も同席している。

現状、戦国時代と現代ニホンを繋げるポータルの作動手順を知っているのは光璃一人のため、うっかり死なれると作戦の前提がひっくり返ってしまうのだ。

信虎が光璃をじいぐつと見つめる。

一回死んで生まれ変わり、今の光璃は1X歳（この作品の登場人物は全員20歳以上です。）。

先の川中島の時点で40歳だったため、一回り以上若返っている事になる（なお柘榴は48歳、美空は31歳、信虎に至っては61歳である）。

戦国時代と現代ニホンの差から来る栄養状態の差もあって、ちよつと肌の色艶が良くなっているような気がした。

見た目の違いはそれだけだ。

かつて殺し合った武田晴信と、今日の前にいる武田光璃は全くの瓜二つであった。しかし……

「……妙だな、殺意が沸かぬ。まるで次郎を前にしているかのようだ」

次郎というのは、武田晴信の妹であり武田有数のツツコミ、武田典厩信繁・通称夕霧の事である。

「それはこちらと同じ事、顔を見る度に巻き起こる魂を焦がすような痛みが無い……」
信虎は眉間に皺を寄せて、何度も何度も瞬きをしながら光璃の顔を覗き込む。

そして……

「……誰だ貴様は？ 見た目こそ晴信に瓜二つだが、別人だな」

……そして信虎はそう結論付けた。

「え？ 別人だったっすか!？」

「一回死んで、生き返ったから……じゃ、ないわよね？」

「美空が正しい。光璃はこの時代に産まれて、この時代を生きて、

この時代で死んだ武田晴信とは魂の形が……魂の在り方が少し、変わっている」

「魂の……形……？」

美空と柘榴がなんのこつちやと首を傾げる。

「光璃は一度死に、魂魄はヴァルハラのおーデインによって回収された。」

「エインヘルヤルにはされなかつたけれど、魂の形を少しだけ作り変えられた」

「え、何？ それってオーデインの手先にされたって事？」

「ある意味ではそう」

「それってどういう状況ですか？」

「いきなり襲い掛かってきたりとか、こっちの作戦が全部筒抜けになつたりとか……」

「それは無い……と、思う。 たぶん」

「何その曖昧な返事……」

「大江戸学園の機材で精密検査をした。魂の形質操作の痕跡があつた箇所は1箇所だ

け」

「魂の検査できるの、凄いわね大江戸学園」

「で、どんな細工がされてたつすか？」

「察するに、我が貴様の顔を見ているにも関わらず、殺意が全く湧かんのはそれが原因か

？」

「……母様が光璃に殺意を抱くのと同様に、

光璃もまた母様を見る度に得体の知れない殺意を覚えていた」

「殺伐とした母子つすね」

「少しは私を見習いなさい。空とも名月とも仲良しよ、血の繋がりは無くても」

「それは魂のレベルで刻み込まれた宿命のようなもの。

光璃は母様を、母様は光璃を、憎んで憎んで殺し合う宿命の元に生まれた」

「殺伐とした宿命つすね」

「少しは私を見習いなさい。

親殺しも同盟破りも生首3000個並べるのもやってないわ、今の所は」

ただし、現代ニホンから銃火器を手に入れた場合、まず間違いなく乱世終結までに3000以上射殺する。

「オーデインが光璃に施した細工は、殺意を抱く対象の差し替え。

本来母様に向くべき殺意や敵意が、徳河早雲……北条早雲に向くように細工がされた」

「北条早雲!? ……って、随分前に死んだ人じゃねーっすか?」

「オーデインみたいな神話生物が現実に出てくるんだから、

北条早雲が生きててもおかしくないわね」

「五体満足に生存している訳では無い。

かつて早雲はオーデインに挑み、敗れ、ギリギリの所で一命を取り留めた。

具体的には鋼鉄ジグのマシーン・ファーザーのような状態で生き延びた」

「……御大将、分かるっすか? 柘榴は全然ピンと来ねーっすけど」

「ごめん、分かるわ」

「アンタホントに戦国生まれっすか!？」

マシン・ファアザーがどんな状態なのかは各自ググって頂きたい。

「要するに、かつて我が貴様に感じていた殺意がそのまま早雲に向いたと。」

まあ、ご愁傷様だな。 何日で殺った?」

「出会って5秒で電源プラグを引っこ抜いた。」

10秒後にバックアップシステムに鉛玉をブチ込み、

15秒後にハードディスクにドリルを突き立て、20秒後にドリアンボムを……」

「ようし分かった、だいたい分かった。 分かったからそこから先は言わなくて良い」

「……残念ながら、非常に非常に残念ながら、これらの殺人計画は功を奏さなかった。」

九十郎を殺された恨みもあったので、再チャレンジは20を超えたが、いずれも躲さ

れた」

「ちよつと待つつす、今誰が殺されたって言ったつすか?」

「……徳河早雲は、大江戸学園の斎藤九十郎を殺した。」

剣魂の……ナノマシン技術の応用により、

何も無い空間に輸送トラック型の殺人マシンを生み出し、轢死させた。

その怒り、その恨みはそう容易く忘れる事はできない」

「『大江戸学園の』ってわざわざ付けたという事は、

私達が知ってる九十郎とは正確には違うって事よね？

九十郎は前の生はトラックに轢かれて死んだって言っていたもの」

「……その通り、だけどそれはそれとして私から九十郎を奪った恨みはある」

「そいつはメチャゆるせんっすね」

「私がアンタの立場でも同じ事をするわね」

「まあ、私もその状況なら仇討をするな」

北条早雲もとい徳河早雲の味方は一人もいなかった。

「……で、早雲殺さずにこっちに来て良かったの？」

「後一步で成功しそうなのが何回かあった。

このままでは本気で殺されかねないと、追い出された。

次元の壁を隔てていれば殺意は起きない事は確認済み」

「確認ってどうやって？」

「靖国の境内に次元の壁が薄い場所が……」

「……場所が？」

「……説明が面倒、本筋にも絡まないなので省略」

美空と柘榴がどてっつと周囲に転がった。

「説明終了。母様に殺意が沸くかの試しも済んだので失礼する」

光璃がそのままスタスタと立ち去り、美空が倒れこんだ姿勢のまま見送る。

鬼滅の刃読者なら『おい待てエ、失礼すんじやねえ』と返す所であるが、九十郎が轢死したのは鬼滅ブームに火が付く前なので守備範囲外である。

「がらがらどん1号、広域サーチ。九十郎の剣魂の位置情報は……剣丞隊の宿舎？」

九十郎のがらがらどん3号の位置を割り出し、光璃が小走りで剣丞隊の宿舎に向かう。

雫の失言が原因で、剣丞隊が非常にややこしくなっている事も、光璃の介入により火に油が注がれる事も知らずに……

……

……

……

九十郎が雫を抱えて逃げ出し、剣丞隊が逃げ支度を始めた頃、それとは別の場所で親子の対話かなされようとしていた。

1人は森桐琴可成、もう1人は森小夜叉長可……基本的にヒヤツハーヒヤツハーと騒がしい森一家の中核たる2人であるが、今日は珍しく静かであった。

そこにあるのは沈黙、沈黙、沈黙、沈黙だ……

「なあ、そろそろ何か話せよ母。何か用があつて呼びつけたんだろ？」

基本堪え性の無い小夜叉が先に沈黙に耐えられなくなった。

桐琴も桐琴であんまり我慢が利く性格ではないが……今日はずっと難しい表情で黙つたままだ。

「またもや沈黙、沈黙、沈黙、沈黙だ……」

「……おいもう帰つて良いか？ 粉雪のヤツ、面倒な事頼まれて忙しいつてんだよ」

小夜叉はまだ粉雪を手伝う気だ。

「なんやかんやで粉雪が美空達の協力する事になったが、それはそれとして美空が久遠や剣丞と敵対する可能性があるため、やっぱり粉雪への助力は桐琴の立場を危うくしかねない。」

「しかねないが……小夜叉の脳内にその辺の機微は入力されていない。」

「……本来は、桐琴が教えなければならぬ事だ。」

「だがしかし、桐琴が小夜叉に教えてきた事は、人殺しのやり方だけだ。」

「ヒヤッハーヒヤッハーと叫びながら敵を討ち取る事だけだ。」

「桐琴は深いため息をついた。」

「普段の桐琴ならナメた口を叩いた瞬間に拳骨を落とすのだが……金ヶ崎の戦いで負傷は完治しておらず、今の桐琴は自力歩行すら覚束ない。」

「本当は……な……」

桐琴は重々しく口を開いた。

本当はこんな事は言いたくない。

心底言いたくない事だが、今伝えなければと……そう思い、口を開いた。

「……本当は可愛らしいお嫁さんになりたかったんだ、儂はな」

その衝撃的な告白を聞き、小夜叉は開いた口が塞がらなかった。

桐琴が言いそうもない事コンテストがあつたら金賞が取れそうな台詞であつた。

「ああ、鷺のマークの大正製薬か」

そして小夜叉は現実逃避を開始した。

なお、大正製薬の創業は1912年、鷺のマークを使うようになったのは1955年である。

「真面目に聞けクソガキ。儂は本当は可愛らしいお嫁さんになりたかったのだ」

「いや無理だろ。絶対無理だろ」

小夜又は冷徹に事実を突きつけた。

「本当は殺し合いは嫌いだったのだ」

「嘘つけ、いっつも凄え良い顔して真っ先に切り込んでたぞ」

小夜又は胡散臭そうな視線を桐琴に向けた。

「怪我して弱気にでもなったか？ 母らしくねーぞ」

「……胸騒ぎがする。勘だが、金ヶ崎で儂の腹を食い破った鬼子……蘭丸が動く。」

「いやおそらく既に動いている」

「……かもな」

「だからお前に聞かせる必要があつた。儂は本当は可愛い……」

「3度目はいいよ、可愛いしいお嫁さんだろ！」

それとこれとがどう関係するってんだよ!？」

「新戸の母は、鏡に写つた自分しか話し相手がいない、哀れな女だった。」

お茶、歌、鼓しかやる事が無く、チャカポンと揶揄される暗い女だった……らしい」

「……それで？」

小夜又は早くも帰りたくなっていた。

「聞けば鬼子の能力や行動原理は、

母胎となった者が心の奥底にしまい込んだ願望に大きく影響されるらしい、

ならば儂の胎から生まれた鬼子が取るであろう行動は……」

「見合いでもしてるんじゃないの」

「まず間違い無くそんな生易しい事ではない……なんとなくだが、分かるのだ。」

「アレはおそらく乱世を終わらせようとする」

「……乱世を？」

「ちょうどその頃、詩乃と劍丞がどうやって戦国時代を終わらせるかの意見対立を起し、怒鳴り合いの末に喧嘩別れをしていた。」

「当然、小夜叉も桐琴も、劍丞達の騒動を知っている訳では無い。」

「たまたまタイミングが被っただけだ。」

「乱世を終わらせんなら、良い事じゃねーか」

「あるいは小夜叉と桐琴の会話がもっと早く行われていれば、会話の内容を劍丞達が知っていたら、劍丞の行動は変わったかもしれない。」

「劍丞は尾張に戻るといふ選択をしなかったかもしれない。」

「だがしかし、この会話は劍丞が詩乃と喧嘩別れをして、尾張への逃げ支度を始めるのとほぼ同じタイミングであった。」

「乱世を終わらせるやり方は洗脳だ。」

「本当の愛を持つ者……そんなヤツが居るかどうかは知らんが、」

蘭丸の洗脳の御家流を撥ねつけるヤツ以外を全て洗脳し、愛を植え込み、
全てを支配させるつもりだ」

「……は？」

小夜叉が一瞬耳を疑った。

まるでオーデインがやろうとしている剣丞ハーレム計画じゃないかと感じた。

そして同時に、久遠と一葉が考えた誑し免状による剣丞を中心にした同盟関係も想起させた。

そして桐琴は……

「根拠がある訳では無い、自信も無いが……蘭丸は、尾張にいるかもしれん」

……苦虫を噛み潰したような、心底忌々しいといった顔で、そう呟いた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第148話『スターは取得できるので問題ありません』

「もう一度確認するけど、今回の遠征では駿府に巢食っている鬼も、

どこかで洗脳能力使って地盤を固めてるのであろう蘭丸も無視するわ」

第一次江戸出征開始の前日、美空は九十郎にそう告げた。

「可能なら北条の軍勢も無視したいところだけれど、

それは流石に無理筋だろうから強行突破して江戸城を制圧する。

江戸城自体は掘っ立て小屋より少しマシ程度のボロ城だから、

江戸城まで辿り着けさえすれば戦略目標は成ったも同然よ」

そう言つて美空は必死こいてかき集めた将兵達に号令をかけた……その3日後に光璃が体調を崩しUターンする羽目になったが。

第二次江戸出征も概ね第一次と同じ作戦、同じ進路で進軍し、やっぱり3日後にUターンする羽目になった。

そして……

「かなり遠回りになるけど、先に駿府の鬼共を一掃してから江戸城に向かうわ」

……第三次江戸出征前日、美空は唐突に作戦変更を皆に伝えた。

「御大将、この前と言ってる事がだいぶ違うっすよ」

「この前と今とでは状況が違うわ。」

状況が違えば最適な進軍方法も違うのが当たり前でしょう」

「雫からの手紙には『早くしてくれ』って書いてあるんだけどな」

「そつすよ、あんまりモタモタしていると本拠地が奪われちまうっすよ」

「そんな事は分かっているわ。理由を説明するから……」

皆、ちよつと立ち聞きされてないか周囲を確認して」

その場にいる全員……柘榴、九十郎、そして光璃が各々陣幕の裏側や、兵糧を運ぶ大八車の影といった人が隠れられそうな場所を確認する。

「誰もいねーっすよ」

「よろしい、じゃあ説明すると……私の勘働きよ」

「説明になってねーっす、いつもの事っすけど」

「森蘭丸との戦闘になる可能性……違う？」

光璃が独り言のように呟いた。

「……本当、腹立つ位に鋭いわね。一回死んだのに切れ味は鈍らないって事？」

「人の性質は一度死んだ程度では治らない」

「いやそれよりもだ、あの蘭丸と戦う気かよ、美空」

九十郎はあまり良い顔をしていない。

かつて新戸と比喻表現でなく手を組んで戦いを挑んだ事はある（第78話）。

しかしその時は正直ギリギリ判定勝ちが精々、蘭丸側が万全の態勢を整えてから挑まればかなり厳しいと言わざるを得ない。

一応、蘭丸が目の前に居てくれれば、第102話で使った九十郎流の超能力封じで対処できなくも無いのだが、際限無く手駒を増やす能力を持つ蘭丸が、わざわざ九十郎の前まで来てくれるかは微妙である。

「もう一回やって勝てそうかしら？ 九十郎」

美空に痛い所を突かれ、九十郎は露骨に目を逸らした。

「いや前にやった時は糞ニートも居たんだが、今あいつは……」

ああ、そうか、それで先に駿河なのか？」

「蘭丸の洗脳にある程度まで対抗できるのは、剣魂を宿した刀を持つ九十郎、光璃、吉音、

洗脳や催眠を受けたら条件反射的に

自分自身に三昧耶曼荼羅を叩き込むよう訓練してる私（第118話）。

蘭丸がどの位の人数を手駒にしてるか分からないけど、

たった4人で戦える程度しか集めていないというのは流石に楽観的過ぎるでしょ」
「劍丞と小波がいれば6人だった……」

小波は精神感應の超能力を使うため、他人からの精神操作の類にある程度まで耐えられる。

「あいつらは雫の失言とアンタのダメ押しで思いつ切り敵に回しちやたわね（第144話）。

今頃どこで何してるのやら……」

最悪を考えるなら、蘭丸の手にかかって劍丞隊ごと洗脳されてるかもね」

「天がやれって言ったから……：：：：光璃は悪くない……」

「まあ、あの時のアレコレに関しちや俺にも原因の何割かあるから勘弁してくれ。

とにかく、新戸は普段はニートだがサイキッカーだからな。

蘭丸相手に一戦って時には役に立つか……」

「今新戸は昔の借りを返すとか何とかで、駿河で巨大鬼の護衛をやってるらしいじゃない」

「確かジャンボキングがどうか言ってたな（第140話）」

「そうそう、護衛対象を叩き潰せば大手を振ってこっちに帰ってこれるって寸法よ」

「そう上手くいくっすかね、駿河は鬼の巣窟になってるって聞いたっすよ」

「そこは光璃とも相談して、一応の対策は考えているから安心なさい。
ぶつつけ本番だけだ」

「御大将がそう言うならしやーねえつすね。」

柘榴は御大将の隣で悪い切り突つ走るだけつすよ」

「そうなると気になるんだが、何で今になって方針転換したんだよ、美空」

「私の勘働き……てのは嘘じゃないけど、

もう一個重要なのは、一回目と二回目の出兵がしよくもない理由で頓挫して、

三回目……つまり今回もやっぱりしよくもない理由で何度も延期になったって事」

「今は反省している」

一回目の頓挫、三回目の延期の原因にがつつり関わっている光璃が、流石にバツが悪そうに咳ごみをした。

「……たぶんだけど、内通者がいるわ」

美空は小さく、しかし強い確信に満ちた声色でそう告げる。

「何か証拠品でも見つかったのかよ？ 目撃者がいたとか？」

「証拠は無い、誰が怪しいかの目星もついていない。けれど……けど、そうね、

何となく意図的な何かを感じるのよ、誰かの意思が動いているような気がする」

「洗脳された者、そうでない者を判別できないというのは、かなり厄介……」

「剣魂持ちは問題無い筈だ。定期的にフィジカルチェックが入って、

精神感応系のサイキックの影響下に無いかを確認してる……んだよな？」

「北条早雲……大江戸学園創始者の徳河早雲は、

元々神に立ち向かうための武器として剣魂を作った。

洗脳、催眠、暗示、誘惑……その他考えられる限りの精神操作魔法に対策がされている。

「少なくとも、他の誰にも気づかれないように洗脳する事は不可能」

「御大将、柘榴は剣魂持ってねーっすよ」

「柘榴は良いのよ、貴女に私を裏切れる程の知能は無いわ」

「御大将、そんな事言つてるとその内本気で謀反起こすっすよ」

「やって御覧なさい、秒で制圧してみせるから」

「なお、前田利家は状況次第で裏切りに走る事は『賤ヶ岳の戦い』から明らかなたため、犬子は今回の会議に呼ばれていない事も追記しておこう。」

「要するに、今ここにいる面々と吉音以外は信用できないって事ね。」

「正直吐き気がする状況よ」

「お酒に逃げるんじゃないっすよ、折角禁酒に成功したっすから」

「そーいや吉音は今どこで何やってんだ？ 最近見ねーけど」

「数学ドリル、漢字や英単語書き取り、英文や古文、漢文の和訳、その他諸々……

こつちの世界に移動する直前に大量の宿題が出されていた」

「そうかそうか、あいつの成績は相変わらずか……」

「吉音には、必要になるギリギリまで宿題をやつてもらう。」

「そうでなければオーデインをどうにかできて吉音は留年する」

「留年とかどうでも良いからこつちに集中してもらえないかしら？」

「アレは暇になればすぐに他人の喧嘩や揉め事に首を突っ込む……」

その予測困難さ故に、戦力として計算し難い。

多量の宿題が出るよう誘導したのは、こつちの世界での行動を制限する目的もあった」

「成程、要するに一葉様の同類って事？」

「暴れん坊将軍が大江戸学園にもいるって大変ねえ」

「もう1人の将軍は良い奴なんだけどなあ……」

なお、もう1人の生徒大將軍こと徳河詠美は、大江戸学園側で対オーデイン戦の準備をしているため、戦国時代には行けなかった。

もつとも、基本病弱な彼女が、衛生状態が比較的悪い戦国時代でどの程度動けるかは微妙な所である。

「とにかく、私の勘働きでは内通者が時間稼ぎをしているわ。

蘭丸がこつちの目的達成を妨害するための時間稼ぎ。

近いうちに蘭丸本人が直接仕掛けて来るだろうから、その前に戦力を整える。

それが江戸城に向かう前に駿河の鬼を叩く理由よ」

「やれやれ、随分と方針転換の多い上杉謙信だ」

「何よ、文句あんの？」

「唐突に方針転換する所がいつもの御大将つすよ」

「悪く言えば行き当たりばったり。」

しかし、いつ突飛な行動に出るか予測がつかないという点は、

敵に回すと厄介な能力、厄介な才能でもある」

「そうなると問題は、蘭丸が来るより先に駿河に辿り着けるかだな」

「最悪のケースは鬼と蘭丸の挟み撃ち」

「せめて蘭丸がどこの勢力に取り入ってるか分かれば、

そうでなきやウチの陣営の誰が内通者にされているかが分かれば、

色々と対策も立てられるのだけどねえ……」

「無い物をねだつてもしやーねーつすよ、御大将」

その場の全員がうくむと考え込む。

いくら考えても答えが出ない事は分かりきっているのだが、それでも何かしらヒントが、何かしらの光明を見出す切欠を見落としてはいないかと思い、これまでのあれこれに思いを馳せる。

そして……

「……案外、一二三だったりしてな」

九十郎が独り言のように呟いた。

「もしかして何か心当たりがあるの？」

「本人が言ってたんだよ、自分の言動に違和感があるって」

「違和感？ 洗脳されて内通してる奴が、『自分怪しいでくす』なんて言うかしら？」

「そりゃ普通は言わねえよ。 だけど、こう……変な言い方だが、

内通をしている本人すら自分が内通者だって自覚が無いんじゃないやねえのか？

ジギルとハイドみてえによ。

そうだとすると、自分がやった行動の理由を説明できなくなるんじゃないやねえか。

そうじゃなきゃ裏切り行為をしている間だけ記憶が飛ぶとか」

「……ありえない話じゃないかも」

それはどう考えても荒唐無稽な理屈、荒唐無稽な説明であつたが、美空は割とあっさり受け入れた。

例え根拠薄弱な理屈であっても、蘭丸に関する情報が少なすぎる現状では、それに頼らざるを得ないのかもしれない。

「暫定的に、一二三を黒に近い灰色として扱おう。その上で……」

『内通者だという確信を得るまで泳がせる』

『これ以上の妨害工作をかけられないように監視する』

美空の頭の中で2つの選択肢が浮かんでいた。

どちらも一長一短……蘭丸の情報を得る事を優先するか、蘭丸の準部が整う前に進めるところまで進軍するかの違いだ。

美空はいずれの選択肢を取るか、しばし迷う……

「……一二三を出し抜くのは、光璃でも困難。

柘榴や九十郎ではまず不可能、吉音では逆に利用されかねない。

いつそ露骨なまでに疑っている姿勢を見せて、牽制する方が無難」

光璃がそんな助言をした。

そして美空は大きく息を吐き……

「一二三を監視する、泳がせるのは基本無し、これ以上の妨害を防ぐ事を第一目標とするわ。」

特に例のアレには絶対に細工をさせないよう警戒して」

そのように決断した。

……

……

……

駿河に立ち入った越軍を待っていたのは地獄であつた。

「第四、第五分隊が押されています！ このままじゃ陣形に穴が開きますよ！」

秋子の悲鳴のような声が戦場に響く。

「親衛隊は！ 松葉はまだ健在なの!?!」

「わ、分かりません。既に親衛隊も後詰に出ていますが、とにかく押され気味としか

……

左翼の陣が特に危険です！」

『L o f t 4 D e a d』の如く、四方八方から止めどなく襲い来る鬼、鬼、鬼。

鎧兜を纏う鬼、人間よりも巨大な大金槌を振るう鬼、両腕が刃物のように鋭い鬼、猿のように縦横無尽に跳ね飛ぶ鬼……数も種類もこれまでの戦いとは段違いだ。

「左舷弾幕薄い！ 何やってんの!?!」

美空が小型通信機に向かって叫ぶ。

「弾薬は粉雪が全部フツ飛ばしたんだよ！ おい吉音、そっちはどうだ！」

左側がそろそろ本格的にヤバい、助けに入れるか!?

俺は目の前まで敵が迫ってて動けん」

最前線で多数の鬼相手に奮戦している九十郎が、美空からの通信に返しつつ吉音に繋ぐ。

光璃が大江戸学園から持ち込んだソレは、半径2km程度の距離であれば声を届かせることが可能、しかも最新鋭AR技術により遊戯王カードから魔法・罠、モンスター召喚、攻撃等の映像効果を空間に投影し、しかも各プレイヤーの残りライフ、手札、デッキの枚数、エクシーズ素材や各種カウンターの数までも自動でカウントしてくれる、戦国時代では100%使われない機能付きだ。

「左舷ってどっち!？」

今まさにチャンバラの最中故に、吉音は息を切らせながら返答をする。

「マゴベエにナビゲートさせろ!」

「ナビゲート……え? どうやんの!？」

「音声入力だよ! お前の剣魂は基本全部音声でやれる!」

「えつと……マゴベエ、方向教えて!」

吉音のふんわりとした指示に対しても、刀身に内蔵された最新鋭AIシステムが即座に所有者の意思に答える。

「ケエエエエエエーーンッ!!」

剣魂は本来、大江戸タワーの電波圏内でしか実体化できない。

しかし、戦国時代用特別なカスタマイズを受け、さらに大容量バッテリーを搭載した事で、単独での実体化と戦闘を可能にさせていた。

「がらがらどん、吉音の位置情報をくれ……」

美空、吉音は左翼に向かった。たぶん持ちこたえてくれる筈だ」

本陣からやや離れて戦っていた九十郎が自身の剣魂……山羊型の剣魂・がらがらどん3号を通してマゴベエの位置情報を確認する。

戦場の方々に配置された剣魂から集められた情報が、最新鋭AR技術により絵図面として空中に投影されていた。

「ごめん見えないわ、こっちにも送って」

「ちよつと待つてろ、えつと美空のIDは……美空、お前のDゲイザー番号、何番だっけ？」

「8334よ！ 覚えなさいよそろそろ！」

「8334、で検索……ああ、これか。んでデータ共有はこっちで……」

美空、今データ送ったぞ、見えるか？」

九十郎が多少もたつきながらも、最新AR技術により空中に浮きあがるキーボードを

操作して美空の通信機にデータを送信する。

こういう現代的なアイテムは極力持ち込まないのが大江戸学園の暗黙の了解であるが、九十郎が轢死した日以降の光璃にはその辺に気遣う余裕は無い。

「ちよつと陣形ぐちゃぐちゃじゃないのっ!? 合ってるのコレ!？」

「剣魂の各種センサーでの最新の情報だよっ!」

駿河に……かつて東海一の弓取りと畏れられた今川義元の勢力圏であった場所に生きた人間は一人もいなかった。

その代わりに美空達を出迎えたのは、まるで駿河の人間全員が全て鬼に変貌したかと思う程、膨大な数の鬼の軍団だ。

倒しても倒しても倒しても襲い来る鬼共によって、越軍は疲弊しつつあった。

「チャンバラしてる内に、糞弟子と小夜叉を見失った。美空の方に行つてないか?」

「来てないわ、でもあの2人だから一番の激戦区よ、どうせ」

「全方位激戦区だけこりゃ、あちこち食い破られて本格的にきついぞ」

「ちっ、前座と侮つたこつちの落ち度か……」

美空が臍を嘔む。

ここまでの戦いで僅かに残ったドライゼ銃の弾薬はゼロになり、止む無く槍と弓矢で

交戦しているものの、ここしばらくドライゼを使った戦闘に慣れきっていた反動か、少なくない被害が生じている。

「仕方ないか……秋子！ 全軍纏めて後退するわ！

九十郎は吉音と一緒に左翼の後退を支援して！」

「行けたら行くよ！」

「そこは前面は適当な所で崩れても構わないわ！

左が潰走したら退路も潰されかねないから最優先で支えなさい！」

「分かったよ！ 後で文句言うなよ！」

「吉音聞こえてた!? 九十郎もそっちに向かわせるから撤退の援護を頼むわ！」

「吉音、俺もすぐに追いつくから無茶すんなよ！」

「ここが踏ん張り時でしょ！ 普通の武器じゃ鬼の皮膚が硬すぎて斬れないんだから

！」

「九十郎お！ 首に縄引つ掛けても吉音は連れ戻しなさいよ！

戻らなかつたら承知しないからっ!!」

「分かつてるよっ!! 吉音、本気で無茶すんなっ！

後で美空からも秋月からも叱られんだよ！ 俺があっ!!」

……

.....

.....

その日の夜。

出征前日のように美空、柘榴、光璃、九十郎、それと吉音が集まっていた。

「この前の面子にプラス吉音か、秋子は呼ばんで良いのか？」

「蘭丸にこつちの手の内を知られたくないわ」

「さよけ」

「まずは現状確認。吉音と九十郎、光璃が全員軽傷で済んだ。」

「軍全体の被害もまあ、多少再編の手間はかかるけどまだまだまだ進軍可能な程度ね」

「だがどうするよ美空、無策で突っ込んだらまた返り討ちだぞ」

「士気の低下もある。これ以上の損害を受ければ総崩れもありうる」

「吉音の精神状態もあんま良くねえぞ。」

現代ニホン育ちを戦場に放り込むのは無茶だったんじゃないかねえのか？」

ちらりと吉音の顔を覗き見る。

いつもはどんな時も無駄に元気で、目の前に食べ物があれば何を置いても喰いつく彼女であったが、今日だけは特に無口で、顔色は悪く、目の前に置かれた握り飯にも味噌汁にも手を伸ばさず気配が無い。

「おい吉音、大丈夫か？」

「うん、大丈夫……大丈夫だから……」

どう見ても大丈夫そうに見えなかった。

朝おはようと言いつつ人が、夕べには死んでいるかもしれない。

腕一本、脚一本喪い、地べたに寝かせられて痛い痛いと呼んでいるかもしれない。

そんな戦国時代ではありふれた戦場の光景に、現代ニホン生まれの徳河吉音は少なからずショックを受けている様子だ。

「……光璃は平気」

「お前は生まれも育ちも戦国時代だろ、武田信玄」

一方、同じ大江戸学園甲級2年の光璃は全く動揺していない様子であった。

「過去3回の突入と撤退で分かった事をまとめろ。まずは……」

「駿河の奥地に進むとそこから鬼が出てきて襲ってくるつす。」

逆方向に進むと潮が引くように鬼がどっかにいなくなるつすね」

「指揮官が居るって感じじゃねえよな。」

どっか機械的な反応……遠隔自動操作型のスタンドを相手にしているって感じの……」

「光璃はむしろ、グリーン・デイに似ていると感じた。殺人カピのスタンド……」

「下に降りれば攻撃され、登れば攻撃が止まるんだっけか？」

「あるいはメ○ド・イン・アビス」

「そうになると2回目と3回目に襲われた時の進行方向を地図上に線を引いて、

交わる場所に敵が一番守りたい物がある可能性が高いわね」

「どの辺だ？」

「まあ、2回目の時点で概ね予想してたんだけど……」

今川義元が本拠地としていた、駿府館のようね、どうやら」

「やっぱそこら中に湧いて出る鬼共の原料は駿河の住民か」

「一番強力な鬼を造るなら、この辺で一番人口が集まっている場所だろうと思ってたわ

よ」

吉音の表情が自然と険しくなる。

鬼の筋骨をバターののように切り裂く刃・剣魂……それを振るって100を超える鬼を

屠ってきた。

それはつまり、100を超えるかつて人間だったモノを切り裂いたという事だ。

ここに来るまで、心のどこかでテレビゲームみたいだとはしゃいでいた。

だがしかし、戦場では人がゴミのように散っていた。

バケモノが人を惨たらしく殺し、そのバケモノもかつて人間だった。

そしてそれを何度も何度も八つ裂きにして、何度も何度も踏み捨ててきた自分は……
吉音の心がぐらぐらと揺れ動いていた。

「しかし駿府館まで結構距離があるつす。

あの勢いで湧いて出る鬼を振り切つてそこまで行くのはキツイつすよ、流石に」

「美空、アレを使う」

「ええ、良くつてよ」

「……スーパードライナズマキックは用意していない」

「はいはい私が悪かつたわ、話を続けなさい。アレつてどれの事よ？」

「まず決死隊を募る」

「はいはい」

「進めば鬼が集まつて来る性質を利用して、窪地におびき寄せる」

「ふんふん」

「マスタードガスを散布して一網打尽にする」

「それ決死隊も死なないかしら？」

「決死隊は死にますが、スターは取得できるので問題ありません」

「それは……」

その人を人と思わぬような言い分に、美空は一瞬言葉を遮りかけた。

遮りかけたが……少し考え込んで、止まる。

「……アリかナシかで言えば、アリね」

そして戦国時代らしい冷徹で冷酷な計算で、そう結論付けた

「全く、この前ハーバー・ボツシユ法をやったと思つたら、今度はマスタードガスだ。

フリッツ・ハーバーが聞いたら泣くな」

遠征準備と同時並行でマスタードガスの合成をやらされていた九十郎がため息をつく。

一歩間違えれば自分含めて大勢死ぬその作業は、基本凶太い九十郎にとつても神経を削るイヤな作業であつた。

「フリッツ・ハーバーなら、むしろ喜ぶ。戦争が早く終われば、それだけ死人は減るか
ら」

「それはそれもそうかもな。

だが光璃、お前の作戦には越えなきやいけないハードルが3つある」

「一つ、誰を送り出すか」

「そうだよ、死んでもそこまで惜しく無くて、

それでいて死ぬと言われて素直に死んでくれるヤツなんているのかよ？」

「腹案はある。」

死んでも困らない者を選んで、表面上は別の作戦を伝えて窪地にガスを運ばせる。時限装置が遠隔操作でマスタードガスを流出させ、鬼を殺す」

「なるほど、完璧な作戦だな。」

人道とか仁義とかかって言葉に真つ向から喧嘩を売ってるって点に目をつぶればな。

じゃあ2つ目だ、そもそも鬼はマスタードガスで殺せるのか」

「殺せる。それは既に実験してある」

「お前つて本当に後ろ暗い事は黙ってやるよな」

「我は武田信玄、明日この世界を肅正する」

「分かった分かった、武田信玄は分かった。」

最後3つ目のハードルなんだがな……たぶんだが吉音が納得しねえぞ、その作戦」

そう言う九十郎はちらりと吉音を見る。

普段の彼女なら真つ先に反対の声を挙げるだろうと予想しての行動だが……吉音は目を伏せて、俯いて、唇をぎゅつと噛み締めて黙ったままだった。

「え……？ いや、おい吉音……いや、吉音さん？」

「お前……じゃない、貴方本気で大丈夫でございますか？」

それは普段の彼女の調子から余りにも外れていて、水を向けた九十郎の方が心配になり、狼狽えるような有様であった。

「死んじゃう……死んじゃったん……だよ……」

沢山死んで。沢山怪我して、皆一生懸命生きて……一生懸命に……」

理由を聞いて……吉音は顔を顔を歪めながら、声を震わせながら、絞り出すように言葉を出していた。

普段からやつてるチャンバラは、なんやかんやで命を賭けてはいなかった。

大江戸学園は超治安が悪いとはいえ、学園のチンピラ、無法者共でもなんやかんやでガチ刃物振り回していなかった。

敵も味方も刃引きをされた剣、鉄パイプ、角材、チェーン等を使って、精々骨折、精々病院送りの喧嘩を繰り返していた

一度に何十人、何百人も惨殺される修羅場に飛び込んだのは初めての事であった。

人外の腕力で文字通り引き裂かれ、骨が砕け、肉が千切れ、のたうち回りながら鮮血に沈む人々を見たのも初めての事であった。

自分は心のどこかで、遊園地のアトラクションに行く感覚で戦国時代に来たのかもしれない……吉音はそう思ってしまう。

「それで……それで死ぬ人が……死んじゃう人が……少なく……」

そんな震える言葉を遮って、九十郎は吉音のデコをぺちーん！ と叩いた。

「しっかりしろ吉音、お前がここに来たのは、光璃がお前を選んだのも、

ここで震えて黙り込むためじゃねえだろ」

それは九十郎のツツコミだ。

叱責ではない、激励でもない、急にボケ始めた吉音に対してツツコミを入れる感覚の言葉であった。

「九十郎に何が分かるのっ?! 大勢死んでるんだよ！」

沢山沢山死んじゃったんだよっ!!」

吉音が九十郎に詰め寄り、叫ぶ。

「いや知らん、正直俺と俺の主君、家族以外が何人惨たらしく死のうがどうでも良い。

ぶっちゃけ光璃もそうだよな？」

「……同感」

「だったら!!」

「だがお前はそうじゃねえだろ、吉音」

「だけど貴女はそうでは無い筈、吉音」

光璃と九十郎の声が揃った。

それは九十郎の、光璃のツツコミだ。

「私に……何ができるの……? 何をして……何をすれば……」

「決まってる、思った事をそのまま話せ」

「戦略、補給、陣形、士気、キルレシオ、そういう七面倒臭い事は武田信玄に任せれば良い。」

光璃は武田信玄。 大江戸学園で多少安寧な生活をしていようが光璃は武田信玄。

戦国時代の理屈は吉音よりも深く理解している」

「要するにだ吉音、お前はお前の理屈、大江戸学園のノリをブチ込んでくれりや良いんだ。」

それは俺にも、光璃にも、美空にもできねえんだよ」

「当然、柘榴にも無理っすよ」

「そして俺や美空は一回走り出すと頭が空っぽになって途中で止まれなくなる」

「光璃はどこまでもどこまでも残酷になれる」

「要するに一回方向を間違えたら凄い勢いでかっつとピングするって事ね。」

て、ちよつと九十郎っ！ 光璃もっ！ アンタら私の事そういう風に思ってたの!？」

「事実だろ」

「事実」

「残念ながら事実っすよ、御大将」

「柘榴貴女裏切ったわねえっ!!」

「柘榴に御大将を裏切る程度の知能はねーっすよ」

柘榴は厭味つたらしく打ち返した。

そんなコントのような、漫才のようなやり取りの中で吉音は……

「じゃあ……駄目って言っても……良いの……」

「構わない。むしろそうで無ければ困る」

「吉音は劍丞程頑固じゃねーからな」

「光璃も話を聞いて、一考する程度はする。ただし一考して同じ結論を出す事はあり

得る」

「分かった、じゃあ言う……言うよ……」

吉音はすーっと息を吸い、はーっと吐いて、自分の考えを纏める。

自分は本当にこの言葉を告げて良いのだろうかと自問する。

そして、それでも……と意思を固める。

「さつき光璃ちゃんが言ってた作戦、やっちゃいけないと思う」

吉音はきつぱりとそう告げた。

「理由は……」

光璃が間髪入れずにそう返す。

単なる人道主義、単なる哀れみからの言葉ならば、自分はさつきの作戦を強行すると

その目が告げていた。

吉音が自身の頭をフル回転させる。

授業時間はほぼ全て睡眠に回し、テストは全教科赤点か、赤点ストレスの彼女であるが、地頭は案外悪くない。

どうして自分はこの結論を出したのかと何度も何度も自問自答を繰り返す。

「……この一回で終わらないから」

そうして絞り出した声は、さっきよりも強くはつきりとしたものだった。

「続けて」

「そうね、私も続きが聞きたいわ」

光璃と美空が続きを促す。

「一回、この一回が上手くいったら、きつとまた同じ事を繰り返すよ。」

今は他に方法が無いから、より大勢を助けるためって、

ちゃんと納得してくれる人を探せるかもしれない。

でも同じようにピンチになったら、同じような方法をきつと使う。

同じように命を捨ててくれる人を探して、都合良く見つかるなんて思わない」

「見つからなければ……？」

「自分が死にたくないからと、他人に死を押し付ける事になる。」

それは今この場で勝つよりももっと良くない事だと思っよ」

「良くねえな、そりゃあ」

九十郎がぼりぼりと頬を搔く。

「国を守るためとか、より多くを守るためとか、

そう言つて他人に死を押し付け合うのは、どう考えても良く無いよ。

絶対にマトモに動けなくなつちゃうよ」

「……光璃、どうするよ？」

「一理ある。よつて今回は次善の作戦を取る」

光璃は吉音の予想以上にあつさりとマスタードガス作戦を引つ込めた。

「おいおい、次善あんのかよ？」

「当然ある、むしろ無い方がおかしい」

「御大将、言われてるつすよ」

「柘榴黙りなさい！ 私がいつも行き当たりばったりつて思われるでしょうが!!」

「今更氣にしても火葬後の心臓マツサージつすよ」

そして光璃は、陣幕の奥に置かれたサイドカーを指さした。

それは大江戸学園の斎藤九十郎の愛車であり、吉音と光璃が次元の壁を越えて戦国時代へ飛び込んでくるのに使用した未来メカである。

何かの役に立つかもしれない、大八車に乗せてここまで運んできているのだ。

「……ただしこの作戦は、先ほどの作戦よりも危険が大きい。

一歩間違えれば剣魂を二振り、喪う事になる」

……

……

……

ぶうんっ!! ぶうんっ!! とエンジンを吹かす。

何年ぶり、いや何十年ぶりに乗る愛車の具合を確かめる。

戦国時代でガソリンを補充する手段は無い。

現在タンクに残っている分を消費してしまえば、サイドカーは鉄の置物に変わってしまふ。

そんな貴重なガソリンを思い切り使うのが、光璃の第二の作戦である。

搭乗者は……

「行くぞ吉音、腹は括ったな?」

「うん、いつでも良いよ」

搭乗者は……吉音と九十郎であった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第149話『成敗』

ぶうんっ!! ぶううんっ!! とエンジンを吹かす。

何年ぶり、いや何十年ぶりに乗る愛車の具合を確かめる。

戦国時代でガソリンを補充する手段は無い。

現在タンクに残っている分を消費してしまえば、サイドカーは鉄の置物に変わってしまう。

そんな貴重なガソリンを思い切り使うのが、光璃の第二の作戦である。

搭乗者は……

「行くぞ吉音、腹は括ったな？」

「うん、いつでも良いよ」

搭乗者は……吉音と九十郎であった。

「良いわね2人共、有象無象はできる限りこっちで引き付けるわ。

ガソリンは希少だけど、貴方達の命と剣魂二振りを喪失する方が重大だから、

敗色濃厚と見たら逃げ帰りなさい」

「九十郎、Dゲイザーちゃんと着いてるか見てくれない？」

この前、戦つてる内に外れかけて大変だったんだよ」

「どれどれ……充電良し、固定具良し、通信状況良し、

美空の機器はちゃんとショートカット設定してあるな。

カードプール及びマスターールデータは最新版に更新済み、

デュエルディスクとのリンクもOK……大丈夫そうだぞ」

何個か戦国時代では絶対に使いそうもない設定があるのは内緒である。

「こつちの状況も適宜送るわ、手が空いた時で良いからそつちの状態も送りなさいよ。

ただし撤退を決めた時は必ず連絡して、こつちから救助の兵を送るから」

「もう耳にタコだよ」

そもそも話、美空達は蘭丸対策に新戸を呼び戻しに来たのであって、駿河の鬼を全滅させに来た訳では無い。

吉野の御方と呼ばれる鬼の親玉が創ろうとしている巨大な鬼……ジャンボキングのように過去に倒された鬼の怨念を重ねた怪物を、新戸はガードをしている。

決して駿河の鬼全体を守っている訳では無いのだ。

よつて最奥部のジャンボキングだけ殺せば、美空達の目的は達成されるという事だ。

今回の作戦は非常に単純である。

先の3度の進行により、大勢で動けば多数の鬼に迎撃され、少数であれば比較的少数

の鬼が迎撃に来る性質が分かつていた。

そこで、美空達本隊が防御重視の陣形で鬼を可能な限り引き付け、吉音と九十郎がサイドカーで迎撃を振り切りつつ最奥部に（たぶん）居る巨大鬼を倒すという作戦だ。

「じゃあそろそろ、昨日確認した突入ルートに移動する。美空、時計合わせを頼む」
「現在時刻表示……大丈夫、合ってるわ。」

陽動は午前6時きっかりに開始、突入はその30分後、良いわね」

「おう、任せとけ。吉音も準備できてるな」

「大丈夫。今度こそこの戦い、終わらせて見せるよ」

悪人の住処に単騎突入して事件解決は大江戸学園では日常茶飯事。

軍勢と軍勢による殺し合いに割り込むよりもずっとずっと徳河吉音向けの作戦である。

そして……

……

……

……

「時間ね……松葉、法螺を吹きなさい！ 全軍進撃せよ！」

そして作戦は開始される。

「戦闘開始のゴングなのですっ！ 綾那はただ勝つのみなのですっ!!」

「じゃあっ！ パートタイム赤備え改め、

パートタイム越軍の森小夜叉長可の出陣だあ!! 死にてえヤツはどいつだあっ!!」

目的はあくまで時間稼ぎと事前に聞かされているものの、綾那、小夜叉コンビは全く気にせずダツシユする。

駿府館の方向に一直線に進む2人に、早くも鬼が立ちふさがる。

「何千、何万いるか知らねえけどなあ!!」

「全員叩き切って綾那最強なのですっ!!」

鋼の如く、あるいは巖の如く強靱な鬼の肉体が花火のように飛び散った。

剣魂のような対神話生物用の特殊加工がされた武器ではないが、鍛え抜かれた肉体と、磨き抜かれた技の数々が、鬼達を次々に叩き斬る。

……

……

……

「吉音え！ 右旋回！ 体重寄せえっ!!」

「分かった！」

サイドカーに乗った吉音が九十郎に抱き付くように身を寄せる。

急に吉音と九十郎の間にロマンスが芽生えた訳では無い。

パッセンジャーの体重でマシンの重心をコントロールし、より速い、より鋭い旋回を可能にするのだ。

「次は左旋回！ 一気に振り切るぞっ!!」

「逆側だねっ!!」

吉音が今度はサイドカーから身を乗り出して逆側に体重をかける。

急旋回による横転を重心移動によって防ぐ技術だ。

「索敵い！」

「前方向に2体、残りは後ろだよ！」

「よおしっ!! このまま全員抜き去るぞ、振り落とされんなよっ!!」

九十郎はフルスロットルで駆け抜ける。

「情報リンクは？」

「やってる……大丈夫、美空ちゃん達はまだ持ちこたえてるよ」

「今方向合ってるか!?!」

「んん……ちよつと逸れてる！ 左方向に少し修正……うん、そっちの方向！」

基本的に敵は避け、時にはぶん殴り、時には轢き殺し、吉音と九十郎が鬼の迎撃を避

けて奥に奥にと突き進む。

だがしかし、エンジンを吹かす度に、ガソリンの残量はガリガリと減っていく。

一般的な自動車のようなメーターは取り付けられていないが、走行量と走行音でおおよその残量は推定できる。

「くっそ、これ以上遠回りしたら逃げる分のガソリンが残らねえぞ……」

猛スピードで鬼の集団を掻い潜りながらも、九十郎は内心焦っていた。

越軍本隊と離れば離れる程、目的である駿府館に近づけば近づく程、鬼の妨害は濃く、強くなっていく。

「九十郎お！ 前方……時にまた出てきたよっ！」

上空高く飛び進む劔魂・マゴベエから警告が来る。

吉音は即座に美空や九十郎のDゲイザーにデータを送る。

「糞が、また回り道かよっ！ 吉音体重こっちに！」

「うんっ！」

再び吉音が九十郎に身を寄せ、体重をかけ、急旋回をサポートする。

サイドカーがガタガタと揺れ、ガソリンがどんどん減っていく。

もし引き返すのならば、そろそろ決断しなければ……

いや、駿府館から遠ざかるのであれば邪魔は入らないから、まだ多少は余裕があるのか……いやいや、もし逃げるにしても敵の中枢の情報を抜く位はしなければ、ガソリン

を減らしたただけだろう……

九十郎はどうする、どうすれば良い、どうしようど何度も何度も自問自答する。

九十郎はでかい図体の癖に小心者であった。

そして……

「吉音、これ以上進んだら戻るガソリンが無くなる。

つまり……しくじったら2人仲良くあの世行きだ」

九十郎は相談とも、弱気とも取れる言葉を漏らした。

一応、新戸とジャンボキングを倒す作戦は立ててはある。

あの武田信玄と上杉謙信が夜明けまで議論を尽くし、練りに練った作戦がある。

だがしかし、こっちはたった2人だ。

たった2人で越軍全軍でも突破できない怪物共の布陣を突破して、デ○ツク牧のような超強力なサイキッカーが護衛についたジャンボキングのような怪物を殺さなければならぬのだ。

九十郎は自分の腕が、脚が、ぶるぶると震えているのが分かった。

恐怖しているのだ。

だがしかし……

「……行こう、九十郎」

……だがしかし、徳河吉音は死を恐れない。

「正直に言つて、あたしも怖いよ。」

もう学園に帰りたい、もう一度八雲に会つて、わんわん泣きながら甘えたいつて思うよ。

でも……それでも……」

いや、徳河吉音は死を恐れていた。

九十郎と同じ位、死ぬのは嫌だ、死ぬのは嫌だと怖がり、震えていた。

だがしかし、それでもなお徳河吉音はキツと前を向く。

朝普通に話をして、一緒に食事をした誰かが、夕刻には惨たらしく殺される地獄があつた。

誰もが涙を流し、誰もが痛みを堪え、それでもこの国の未来のために戦う人々がいた。目を閉じれば、そんな地獄のような光景が鮮明に浮かぶ。

あの光景を止められるならば、傷つく誰かを、涙を流す誰かを救えるのならと、吉音は恐怖を押し殺す……いや、踏み越える。

「行こう、九十郎」

九十郎はそんな吉音を横目に見て、ふつと笑う。

トラツクに轢かれ、自称転生をつかさどる神に会い、戦国時代に生まれ変わつてから

なんやかんやで25年。

しかし、徳河吉音は、九十郎が記憶する吉音のままだった。

無鉄砲のようで意外と怖がり、怖がりな癖に外せない所は外さない……そんな姿が眩しくて仕方がなかった。

「吉音、ちよつと迂回し過ぎてガソリンがヤバイ。

こつから先は一直線に突っ切るしかねえ！」

「要するにいつも通りって事だよね！」

「そうだ！ 大江戸学園名物の……」

「殴り込みだあああああ……っ!!」

「討ち入りだあああああ……っ!!」

九十郎がエンジンを吹かしサイドカーを加速させる。

大江戸学園において、とりあえず悪人の住処に殴りこんでチャンバラというのは日常の光景だ。

戦術だの戦略だの政略だのといったまだるっこしい事は基本考えない。

その辺を考えながら、方法は過激でも学園の未来のために動こうとした由比雪那の方がむしろ異端である。

「素敵……前方から7体来るよ！」

「ままよ、突っ込むぞ！ ブツた斬れ吉音えっ!!」

「了解！ トランザムツ!!」

吉音が1体をマゴベエの体当たりで怯ませ、1体をサイドカーから身を乗り出して叩き斬る。

残りの5体はフル加速して振り切った。

なお、当然だが九十郎のサイドカーにトランザムシステムはついていない。単なる気分の問題である。

「ヒヤッハアーツ!! 大江戸学園ナメんなよおっ!!」

「今日のあたしは峰打ちじゃないよっ!! 寄れば斬る！ 寄らなければ斬らない！」

「死にたくなけりやそこをどけえっ!!」

「再びジオンの理想を掲げるために！ 星の屑成就のために！」

「ガトーじゃねえよっ!! やめろよ最後死ぬだろっ!!」

吉音がノリノリで剣を振るい、立ちはだかる鬼達を次々と真つ二つに切り裂いていく。

あるいはそれは、本物の戦場に飛び込んでしまった自身を奮い立たせ、死の恐怖を忘れるための軽口かもしれない。

「九十郎、この前ね！ 赤穂浪士の格好して悪い奴らをやっつけたんだよ！」

「今言う事かよそれっ!? 勝ったのかそれでえ!？」

「うんっ! 詠美ちゃんと八雲と一緒にお城に登って！」

大江戸キャノンでドカーンッ!!」

「そりや笑える光景だったろうなっ!」

「九十郎も来れば良かったのにつ!」

「俺はそんな時、戦国時代だったよ!」

吉音とマゴベエが鬼を倒し、九十郎はサイドカーを走らせ一直線に突き進む。

対神話生物用の特殊加工がされた刀は、どれだけ鬼を斬っても刃毀れ一つ生じさせない。

鬼の首が飛び、腕が飛び、脚が千切れ、凄惨な光景を振り切りながら2人は進む。

そして……

「吉音掴まれっ!! ライダーブレイクするぞっ!!」

「良いよっ! やつちやえ九十郎おっ!!」

ズドーンンッ!! と凄まじい轟音が響く。

速度と重量と頑丈さに任せての体当たりにより、屋敷の門が弾け飛ぶ。

2人が飛び込んだその屋敷こそ……

「……よう、久しぶりだな糞ニート」

「そうだな、クズロー」

かつて今川義元の本拠地とした場所であり、かつて松平元康が人質として過ごした場所、駿府館である。

そして今、吉野が鬼の根拠地とし、新戸に防衛をさせている駿府館である。

「普段働かねえ癖にイザって時に敵に回りやがって、たつぷりとお仕置きしに来たぜ」

「こつちにも色々あるんだ、色々」と

色々とは、具体的に言えば超能力の使い過ぎで半死半生の所を助けられた借りである。

「……で、アレが例のジャンボキングだね？」

駿河館の庭に巨大な鬼が佇む。

それは剣丞達に斬られた無数の鬼達の怨念を集めて作られた、吉野の切り札である。

「体長は4〜5mって所か？」

「大魔神と同じくらいだね」

「スロープドッグ（3・8m）よりやや大きいな」

「ガダムF91（15m）の3分の1」

「コ〇・バトラVは57m、ウ〇トラマンは40m……と思えば小さい、小さい、

あの程度ならどうにでもなりそうだな」

「……だね」

吉音がごくりと唾を飲みこむ。

吉音も九十郎も顔こそ笑っていたが、目は全然笑っていない。

そんな2人がサイドカーを降り、刀を抜いた。

軽口を言い合いながらも、2人は戦場の緊張、戦場の緊迫を持ってそこにいた。

「どうして2人で来た？」

新戸が呆れた様子でため息をつく。

大江戸学園の生徒は無理無茶無謀を繰り返して早死にするのが通例だが、それにして今回の殴り込みは無理筋だ。

「糞ニートぶん殴って連れ戻す程度なら俺1人で十分だろ」

「一体いつから……他の鬼が出てこないと錯覚していた？」

新戸がパチンツと指を鳴らすと、庭の影、襖の奥からぞろぞろと鬼達が湧き出てくる。

悪代官や悪徳商人が『出会え！ 出会えい！』と叫ぶと用心棒が瞬時に集合してくるのと似たような光景だ。

「ぐええ、どう見ても40〜50体以上は居るな。卑怯だぞ糞ニート！」

「卑怯は敗者の戯言というのがクズローの言い分だっただろ」

「昔から言うだろ、他人がやれば犯罪で、俺がやればロマンスだってな」

無茶な理屈である。

「いずれにせよ手加減はできないぞ、クズロー」

「桃から産まれた桃太郎、お供にマツチヨを引き連れていざ鬼退治っ!!」

「鬼退治桃太郎先輩はどこでなにやっつてんだか。」

「こういう時に身体を張って後輩を守るのがあいつの存在意義だろうに」

「あの人も来たがっつてただけだね……とはいえ大ピンチだね、九十郎」

吉音が冷や汗を流す。

殴り込みをして多数の敵に囲まれるなんて経験は、大江戸学園では何度も何度もあつた事だ。

しかし、大江戸学園のチャンバラはなんやかんやで学生同士の喧嘩の範疇、敵も味方も刃引きをされた剣で戦い、負けても骨の2く3本叩き折られて病院送りが精々だ。

生きて帰れないかもしれないと本気で思いながら、振れば斬れる、突けば刺さる剣で戦うのは初めての事だ。

「で、どういう割り振りでいく?」

「九十郎は新戸って娘に集中、残りは全員あたしが引き受ける。」

できるだけ多くこつちに引き付けるけど、討ち漏らしが何人かそつちに行くかも」

「10や20ならどうにかする。悪いがそれ以上は勘弁な」

「分かった、何とかするよ」

2人を取り囲む鬼達が身構える。

いつまでもお喋りを許してくれる程、優しくはない様子だ。

……カチャリッ!! と、吉音がポン刀を構えた。

く作者より ここからは『暴れん坊將軍 殺陣のテーマ』を流してお読みくださいく

「うおりやあつ!!」

「てやああああつ!!」

吉音が大型鬼の方向へ、九十郎は新戸の方向へ駆け出した。

当然、周りを取り囲んでいた鬼達が次から次へと立ち塞がるも、現代ニホンの最新技術によって対神話生物用の特殊加工された剣が、豆腐かバターのように切り裂いた。

そして九十郎は一直線に新戸を襲い、吉音は1体でも多くの鬼を引き寄せようと、右に左に駆け回る。

「お仕置きだ糞ニートオオツ!!」

「迎撃イツー!」

新戸が精神を集中させ、周囲の鍋や桶といった小物を空中に浮かび上がらせ、ミサイ

ルのように九十郎へ飛ばしていく。

「効くかあつ!! こんなもおんつ!!」

飛んできた物が軽く、スピードも大した事が無いと見切った九十郎は、自身の体格と頑強さに任せて突っ走る。

新戸のサイコキネシスは、精神集中が短く浅ければ重い物を動かせない。

開戦直後に一直線に殴りに行ったのは、深く長い精神集中を許せばその時点で負けが確定しかねないからだ。

「ナラバアツ!!」

新戸が懐から小刀を5本抜いて投げ、サイコキネシスで空中に留める。

これならば軽い力でもそれなりの殺傷能力が出せる、が……

「対策済みだボケエっ!!」

瞬間、ぎぎぎぎぎいゝゝつ!! と思わず耳を塞ぎたくなるような嫌な音が響き渡る。

『変移抜刀・がらすきい』サイキツカーが深い集中に入りかけた瞬間を狙った、九十郎流の超能力封じである。

かつて(第102話)犬子の御家流発現を妨害したそれが、今度は新戸のサイコキネシスを妨げ、宙に浮かんだ小刀は力無く大地にひれ伏した。

「うおおおおおつ!!」

「な……ンノオツ!!」

新戸が再度精神を集中させる。

今度はサイキネシスではなく、パイロキネシス……超能力により自然発火現象を発生させる。

しかし、パイロキネシスも深く長い集中をすればより高火力、より広範囲を焼く超自然の炎となる。

浅く短い集中では軽い火傷を負わせる事はできても、致命傷には至らない。

「射程距離……がらがらどん！ 新戸を攻撃しろおっ!!」

「グロロオオツ!!」

がらがらどん3号……斎藤九十郎の剣魂が実体化すると、砲弾のような勢いで新戸に突進し、再度精神集中を阻害する。

情報収集の1号、解析の2号、戦闘の3号。

がらがらどんは本来3体揃わなければその真価を發揮できない剣魂であったが、それでも牽制によって集中力をそぐ程度の能力はある。

様々な能力を使い分けるサイキッカー相手に、あの手この手で食らいつく。

「吉音えつ、まだ生きてるかあ!?!」

「まだいけるよっ!」

吉音も吉音で修羅場の真ただ中にいる。

次から次へと、わんこそばの様に現れる鬼達を斬り伏せていく。

そして……

「グオオオオオオーツ!!」

丸太のような剛腕から振るわれる一撃からバク転で躲す。

崩れた姿勢を狙って、多数の鬼が殺到してくる。

巨大鬼の体長は高々4〜5m。

常人の2・5倍の体格から繰り出される筋骨と質量の暴力は脅威と言う他無い。

身長が2・5倍なら体重は6・25倍。

柔道やボクシングでは5kg程度の体重差でも別階級になるのを考えれば、体重差のアドバンテージは凄まじいものと分かる。

また、手足が長ければ射程も長く、警戒が難しい頭上からの攻撃も容易なのだ。

「たあああつ!!」

吉音が刀を振るう。

その度に鬼の首が飛び、腕が飛び、脚が飛ぶ。

たつた今切り裂いた鬼達が、駿河に住んでいた普通の人が作り変えられた存在であることを思い出し、吉音は一瞬、胸の奥から悲しみや哀憫に似た感情が沸くのを覚えた。

しかし、だからと言って怯んではいられない、だからと言って手加減もできない。少しでも鬼を斬るのを躊躇えば、次の瞬間には死ぬのは自分だと思いなおす。

「負けられない……だからあつ!!」

鬼に殺される恐怖を振り払い、鬼を殺す恐怖を押し殺し、吉音は刀を振り回す。

肉体的にも精神的にも一杯一杯であったが、積み重ねてきた鍛錬と、何十、何百と潜り抜けてきた戦いの記憶が、その太刀筋にブレを生じさせない。

そして襲い来る鬼の間を衝き、巨大鬼の脛を叩き斬り……

「うわっ、硬い!？」

……刃が弾かれた。

何千、何万もの鬼の怨念を重ねて生み出されただけはあり、パワーも、スピードも頑丈さも他の鬼とは比べ物にならない。

対神話生物用に特殊加工された剣魂と言えど、ほんの僅かな切り傷をつける事が限界だ。

「吉音無理すんな! デカいのは注意を引きつけてりやそれで良いっ!!」

それよりも数減らせ、数をつ!!」

「ご、ごめんっ! そつちも頑張つて!」

「任しとけえっ!!」

吉音がねずみ花火の様に駆け回る。

右に、左に、上に、下に、縦横無尽に動き回って巨大鬼にターゲットを絞らせない。

同時に吉音に喰らいつこうとする鬼達を斬って斬って斬りまくる。

「オラ逃げんな糞二一トオ！」

「くっ……」

一方、九十郎は距離を取ろうとする新戸を追って走り続ける。

途中立ち塞がる鬼を何度か叩き斬る。

「神道無念流なめんなよおっ!!」

徳河吉音は超一流の剣客だが、斎藤九十郎もまた一流の剣客である。

現代ニホンにおける最新スポーツ医学を取り入れた合理的なトレーニングは、戦国時代でも可能な限り続けてきた。

犬子や綾那、歌夜といったこの時代の弟子達に剣を教えた経験が、九十郎の太刀筋にさらなる強さと鋭さを生み出していた。

そして戦国時代での戦いの経験が、九十郎の心を鍛え上げていた。

斎藤九十郎は大江戸学園でチャンバラをしていた頃よりも、何倍も強くなっていたのだ。

いくつもの超能力を自在に操る恐るべきサイキッカー、井伊直政・通称新戸に肉薄す

る程、強くなっていたのだ。

「(うっかり殺しちまうと本末転倒だから手加減しねーとな……)」

「(まあ、程々に戦うか。後で怒られない程度に……)」

それはそれとして、新戸も九十郎も微妙に手を抜いていた。

一切手加減無く、手心も無く襲い掛かって来る鬼達と死闘を繰り広げている吉音に土下座して謝るべきである。

「たあああつ!!」

そんな新戸と九十郎の思惑も知らずに、吉音は大立ち回りを続けている。

巨大鬼の一撃を躲しながら、群がる鬼達を1つ1つ斬り伏せていく。

「うおりやあつ!!」

新戸に距離を取られないように気にしつつ、九十郎もまた鬼達を斬り倒していく。

斬って斬って斬って斬って……

斬って斬って斬って斬って斬って斬って……

斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って

……

「九十郎お!」

「おおっし! やっちまえ吉音えつ!!」

そしてある瞬間、吉音は巨大鬼から離れ、乗ってきたサイドカーへと駆け寄った。当然、巨大鬼はその剛腕を振るい吉音を追撃するが、ギリギリの所ですり抜けた。そして他の雑多な鬼達の追撃は……無い。

「……なあっ!？」

新戸は驚愕の余り目を大きく見開いた。

いつの間にか巨大鬼の護衛に張り付けておいた鬼達がほぼ全滅していたのだ。

「何を驚いてんだよ糞ニート、吉音だぜ。鬼の40〜50体程度じゃ止められねえよ」

徳河吉音強さは異常としか言いようがない。

その辺にいる雑魚を何十、何百集めてもまるで歯が立たない。

それは戦国時代では非常識だが、大江戸学園の生徒には常識だ。

「成敗っ!!」

吉音がサイドカーに向かって大きく、良く通る声で言い放つ。

次の瞬間、乗り捨てられて沈黙していた筈のサイドカーに光が灯る。

「解除コード確認……声紋分析クリア……シユートイニングフォーメーションニ以降シマス」

カシャリ、ガシャリとサイドカーが組み変わる。

さつき吉音が乗っていた側車部分が特に大きく姿を変え、およそ戦国時代には似つか

わしくないメカニカルで、武骨な砲身が露になる。

「照準セツト、ファイアーっ!!」

吉音が砲身と同時に出てきた引き金を引く。

瞬間……

ドルルルルルルッ!! ドルルルルルルルッ!! ドルルルルルルルッ!!

瞬間、凄まじいばかりの轟音が鳴り響き、地面が揺れる。

それはM134機関銃・通称無痛ガン。

毎分3,000発で7.62x51mm NATO弾をブチ込む未来の兵器。

生身で喰らえば痛みを感じるよりも速くミンチになる事から名付けられた異名が無痛ガン。

武田光璃が現代ニホンから持ち込んだ兵器の一つである。

それは生身で振るう刀や槍、弓矢とは文字通り桁違いの速度と質量の暴力を現出させ

……巨大鬼をあつという間にミンチより酷いナニカに変えた。

「あわわっ、ストップ、ストオーツプ!! もう良いよっ!! もう十分だつてえ!!」

吉音が慌てて引き金から手を放す。

射撃は数秒程度の短い時間であったが、そんなごく短い時間であっても、無痛ガンは吉音がドン引きする程の多量の弾薬を消費し、巨大鬼に致命的な致命傷を与えていた。

そしてそれは、巨大鬼をガードするという約定で吉野の手助けをしていた新戸が戦いを続ける理由が焼失したという事に他ならない。

「まさか……な……こんな物まで戦国時代に持ち込むか……」

「何驚いてんだ、光璃だけ。この程度ならむしろ可愛い方だろ」

なお、戦国時代に転移した翌日にマスタードガスの生成にチャレンジし始めたのは内緒である。

そして気が付けば巨大鬼、雑多な鬼達、駿河館に詰めていた敵が全員死に絶えていた。

数千、数万の怨念をコストに苦勞して創った巨大鬼は、現代二ホンの凶悪兵器の前に1分と保たずに沈黙した。

夥しい数の空葉莢と共に周囲にプチ撒けられた鬼の肉片が、まるで蒸発するかのよう
に溶けていく。

慣性で熱気と共に回る銃身が、世の無常を告げるかのようにカラカラと乾いた音を鳴らしていた。

「お、終わった……の、かな……?」

無痛ガンぶっ放した吉音は、ようやくコレが物騒な戦国時代をもっと物騒にする存在

だと気が付いた。

これが人間の集団に向けて使われれば、あつという間にミンチより酷い死体の山が出来る。

「光璃の奴、やべえもんを俺のマシンに積み込みやがって、車検通らねえぞコレ」

「車検の時だけ外したら」

「んな面倒な事したくねえよ、比良賀にでもやらせ……」

もつとやべえ改造されそうだな。自分でやろう」

「九十郎、そちも中々の悪よのう」

「へっへっへっへっ、將軍様には敵いませんとも」

動く者は既に無い。

戦いが終わった安心感からか、軽口を叩き合う余裕も生まれた。

「……できれば、これつきりにしたいよね。コレを使うのは」

「うん？ 賭けても良いがこれつきりにはならなえだろ」

「そう……そうだね……」

吉音の脳裏に浮かんだのは、駿河での戦いで死んでいった人々だ。

一生懸命に戦い、必死になって生きたいと叫び、1人また1人と死んでいった戦友達の亡骸だ。

重い荷物を背負い、一緒に山道、獣道を歩き、同じ釜の飯を食べたこの時代の友達の姿だ。

「うん、きつと使っちゃうよね……これつきりには、ならないよね……」

友達、仲間を、家族を殺したくない、死んでほしくないという思いが、今の吉音には理解できた。

そして同時に、そんな思いがより強力な武器を生み出し、より残虐な戦場を生み出すのだと。

「血を吐きながら続ける悲しいマラソンだね、まるで」

「生涯続けるさ。 どれだけ血塗れになろうともな」

吉音は思う……もう一度引き金を引くべき時が来たら、きつと自分は使うだろうと。

「さて、それはそうと糞ニート。 ジャンボキングのガードのお仕事は終わったのか？」

「ああ、終わった」

新戸は降参を示すかのように手を振った。

吉野への借りは十分に返し、ここから先は純粹に対オーディンに集中するつもりだ。

「はいそれじゃあ目的達成、長居は無用だ。 帰るぞ吉音」

「薬莢、拾ってかなくて大丈夫かな？」

「薬莢だけあっても何の役にも立たねえよ」

「帰りは、押して帰るんだよね？」

「戦国時代じゃガソリンの補充ができねえからな」

「あ、あたし箸より重い物持てな〜い」

「嘘つくんじやねえ！ 良いからためえも押すんだよ。」

おい糞ニート、お前も手伝え……って、いねえっ!? あいつどこ消えやがった!?

「じゃあ闇系の仕事が今からあるからこれで……」

「逃がすかコンニャロウツ!! 俺一人でこんな重いの運べるかっ!!」

現代ニホン製のエンジンも、ガソリンが無ければ糞重たいだけの鉄塊である。

吉音と九十郎は2人でえっちらおっちらとサイドカーを押し進める。

「おくも〜い〜よ〜」

「黙って歩け」

「なんで舗装されてないの〜」

「戦国時代だからだよ」

「もう置いて帰っちゃおうよ」

「機密情報の塊みたいなのを放置できるかっ! あとまた使うかもしれないねえだろ!」

吉音も九十郎も汗だくになりながらゆっくりと進む。

石や木の根でデコボコする道のりが、2人の気力と体力を容赦無く奪っていく。

……気が付けば、吉音の着物が汗で身体に張り付いて、うつすらと透けていた。「こいつ……本当に良い身体してるよな……」

生きるか死ぬかの修羅場を超えた直後だからか、九十郎の生殖本能がざわついていた。

吉音が戦国時代に来た日（第141話）に見た、吉音を抱く夢が脳裏に浮かぶ。いつその場で押し倒してしまおうかとすら考えてしまう。

九十郎がそんな事を考えているとは露知らず、吉音は無防備な姿を見せ続ける。

「……と、いかんいかん。こいつは他人の彼女、他人の彼女」
九十郎が頭をぶんぶんと振りながら煩惱を散らす。

股間の棒は既にギンギンになっていたが、気合で耐える。

九十郎にとって幸か不幸か、既に鬼の姿はどこにも無かった。

「あ……やべ、美空に終わったって連絡入れんの忘れてた」

犬子と柘榴と一二三と九十郎第151話 『本多忠勝十小刀Ⅱ死亡フラグ』

「借りは全て返したぞ、尊治」

「戯け、貴様手を抜いたな」

時は少し遡り、駿河館で巨大鬼がハチの巢にされた直後の事。

吉野の御方と呼ばれる男が……日ノ本に鬼を生み出し、殺戮と混乱を生み出す男が、新戸に詰め寄っていた。

「オレの超能力は強力かつ多芸だが、完全無欠ではない。それはお前も知っている筈だ」

「小僧と小娘2人すら殺せない……か？ 余は貴様を少々買いかぶっていたようだな」

発火能力、テレパシー、読心、催眠、変身、飛行、エネルギー衝撃波、操虫、透視……
通常は1人1つしか発現しない超能力であるが、新戸だけは複数の能力を状況に応じて使い分ける事が可能だ。

しかも1つ1つの能力は強力無比だ。

一度も使って無い超能力が一部混ざっている事へのツツコミは不要である。

ともあれ、普通に考えればどれだけの剣客をどれ程集めても軽く蹴散らせる能力だ。

「超能力者共通の弱点は、能力の発現に精神集中が必要な事だ。その弱点を衝かれた。

クズローは徹底して、オレに集中をさせない戦法を使った」

「壁役は付けていただろうに」

「そこは吉音が上手く捌いた。そしてあの未来の武器だ……あれでは勝てない」

「ぐぬぬ……」

まるでステレオタイプの悪役のように、吉野が歯噛みをして吉音、九十郎に視線を飛ばす。

汗と泥に塗れながら、えっちらおっちらとサイドカーを押す2人は、見た目それほど強そうにも、恐ろしそうにも見えなかった。

今すぐこの場で殺してしまう事も考えたが、それをやろうとした瞬間、目の前の鬼子が襲い掛かって来る事は明らかだ。

「……ならば、次会う時は敵同士か」

「それはどうだろうな？」

オレはできる事なら、お前が死なない形で戦いが終わらせないかと考えているぞ」

「戯け、相容れぬわ。余と武士という存在はな」

「それはお前の思い込みだ」

「余が受けた恥辱を忘れろとな？」

「200年も昔の苦痛にいちいち拘るな」

「あり得ぬ話だ」

吉野が一瞥すらせずに吐き捨てる。

新戸は少し苦笑して、ため息をついた。

「こいつどこの並行世界でも全然変わらんなどという苦笑とため息だ。

「1つだけ……友人として、1つだけ助言を残す。 斎藤くじゅ……じゅく……」

言い辛いな、クズローの当面の目的は、大江戸学園に帰る事だ。

この前こちら側に来て、サイドカーとミニガンを持ち込んだ2人もそうだ。

オレがお前の立場なら、しばらく放置して丁重にお帰り頂く。 未来の兵器と一緒

に」

そして新戸は大嘘を吐いた。

「九十郎が大江戸学園に帰る」美空が危険な未来兵器をたんまり入手するという事を隠したのだ。

せめてオーデインとの戦いに備え、少しでも横槍が入らないようにと。

自分の友人、愛すべきぼっち仲間との凄惨な殺し合いが避けられないのであれば、せめて不完全燃焼の幕切れとならないようにと願いながら。

せめて全力と全力、真つ向からの殺し合いができるようにと願いながら……

……

……

……

「劍丞……あいつ……」

小波と姫野から尾張の状況を聞いた九十郎は、思わず頭を抱えてしまう。

織田信長と新田劍丞が蘭丸に取り込まれ、敵に回った……

そうなる可能性は前々から考えてはいたが、いざ現実になってしまうと眩暈がした。

「秋子、被害の確認と再編成を大至急。日没までに終わらせなさい」

「はいっ！ 直ちにっ！」

美空の命令により、越軍が俄かに慌ただしくなる。

無限にも思えた鬼の軍勢との耐久レースが終わり、弛緩していた空気が一気に張り詰める。

「私を知りうる事は全て話しました……どうか！」

私に差し出せる物は全て差し出します！ どうかご主人様を!!」

小波は地べたに這いずるように懇願する。

「とんだ疫病神よ！ 新田劍丞はっ!! やる事、成す事、何から何まで私の癪に障る！」

次から次へと面倒を起こして、九十郎を何度も何度も苦しめてっ!」
「そ、それは……」

美空が癩癩を起したかのような怒声を浴びせ、小波が思わず言葉を失う。

元より彼女は忍者……密偵の類であつて外交官ではない。

詩乃やひよ子と比べて口下手で圧しが弱い性格だ。

「まあ、二つ返事であつさり了承得られるなんて思つてねーし。

こつちもあのへつぽこ助けるために兵を貸せなんて非常識な事言う気はねーし、

どーせ言つても断られるし」

そこで比較的口達者な姫野が小波に代わつて美空の説得に動く。

「貴様! 他人の主人をへつぽこ呼ばわりとはどういふつもりだっ!」

いや……貴様何者だ!? いつからここにいた!」

そしていつものように姫野の事を忘れた小波によつて後ろから足を引つ張られた。

「また姫野の顔を忘れやがったしいっ!! もうお前は永遠に黙つてろだしいっ!!」

「あく、小波……そいつは風魔小太郎で、

一応お前の味方っぽい雰囲気だから、あんま虐めてやんなよ」

基本空気を読めない九十郎が思わずフオローを入れた。

「何っ!? 風魔小太郎だと!」

あの有名な風魔小太郎が、こんなとぼけた顔だったとは……」

「とぼけてんのはてめえの頭の方だしっ!!」

「あんたら私にどつき漫才見せに来たのかしらあつ!?

そうだったら今すぐ回れ右して帰りなさいっ!!」

美空の怒声というか、罵声によって半強制的に小波と姫野を黙らせる。

「小波……は、ちよつとアレだから、姫野。結局私に何してほしいのか言いなさい。

話くらいなら聞いてあげるから」

小波は『心外!!』とでも言いたそうな顔になった。

「……さつきも言ったけれど、劍丞助けるために兵を貸せとは言わねーし。

連中と戦って、運良く劍丞にまだ息があったら、

トドメは刺さないでいてくれれば十分だし」

「なっ!! ご主人様が連中に奪われた放置するのか!?!」

直後、または小波が姫野に噛みついた。

「落ち着けだし、どう考えても兵を借りればどうこうできる状況じゃねーし!」

姫野や劍丞隊の皆がどうなったか忘れたとは言わせねーし! 1000人借りたら1

00人が、

1000人借りたら1000人がそっくりそのまま洗脳されて敵に回るのがオチだ

しっ!!」

「しかし、少数なら少数でやりようはある筈だ!!」

「どうしてもやりたいなら小波一人で行けだし。」

でも蘭丸の洗脳にある程度対抗できる小波は、この状況では超貴重だし。

劍丞の命乞いをするのにこれ以上の材料は無いって事も考えろだし」

「いや……だが……」

「姫野と小波ならできる、やれる事はいくらでもあるし。」

風魔小太郎と服部半蔵正成なら、この最悪極まる状況でも……」

姫野は祈るような面持ちである。

風魔小太郎、服部半蔵と言えど、所詮は蘭丸の能力の前に尻尾を巻いて逃げ出した敗残兵2人に過ぎない。

特に姫野は、蘭丸に囚われ、洗脳され、劍丞達に牙を向いたばかりだ。

そんな自分に何ができる……出かけたその言葉在必死になつて飲み込んだ。

「とにかく、本気で劍丞を助けたいなら情報と働きを手土産に命乞いするしかねーし。」

戦の最中でくたばったら劍丞の命脈がそれまでだったと思うしかねーし」

「ちよつと、アンタらの結論はどうでも良いけど、

せめて事前に意見の統一ぐらい済ませてから来なさいよ」

「話し合ったし意見も合わせてたしっ!!」

こいつが姫野の顔と一緒に全部スバツとわすれやがっただけだしっ!!」

「松葉、何か食べ物とお酒を持ってきて、できるだけ上等なのを。」

「この苦勞人を少しでも勞つてあげましょう」

「御意」

ついに姫野は美空からも同情され始めた。

これを狙つてやっているのだとすれば相当の知患者である。

「話した……? はな……した……のか……?」

確かにここに来るまで、妙に記憶が曖昧な時間が……くつ、頭が……」

「おい美空、小波が混乱してるみてえだぞ」

「面倒だからこのまま混乱してもらいましよう。それよりも問題は……」

「言つとくが、劍丞を殺す相談なら……」

「反対するつて言いたいなら、念押ししなくても分かつてるわよ。」

雫もどうせなんやかんやと理由をつけて反対してくるでしょうね。

まあ素敵、主に逆らう気概のある家臣が大勢いて助かるわ」

「雫はともかく、俺の禄は柘榴からお前からじゃねーけどな」

いわゆる陪臣である。

「主君の主君は主君も同然でしようが!？」

「そんなクリスタル聖闘士理論は俺には通じんつ!!」

美空は深あくため息をついた。

大江戸学園に辿り着き、現代ニホンの武器を入手しさえすれば、織田も北条も松平もどうにでも料理できる。

ここで劍丞を助けるために貴重な時間や人手を費やす事は流石にできない。

しかし向こうから襲ってきた場合、身を守るために迎撃せざるを得ない。

そうなった場合……

「(うっかり劍丞を殺したら九十郎がヘソを曲げるかも。

そうなると当然、九十郎の幼馴染の光璃とも険悪になる。

そうすると未来の武器が仕入れられなくなつて……詰む)」

美空がこの作戦の前提がひっくり返る最悪な未来を想像してしまふ。

無論、『劍丞を殺す＝光璃が約束を反故にする』というのは多少論理の飛躍がある。

だがしかし、現代ニホンの武器を仕入れるのは光璃の人脈頼りである以上、そうなる可能性が一欠片でもあれば考慮せざるを得ない。

つまり……

「(本心はともかく、劍丞を助けるポーズ位はしないといけないわね)」

美空の心労が一つ増えた瞬間である。

「(そうだわ、この戦いが終わったら劍丞に離縁状を叩きつけて、
気絶するくらい酒を？んで、九十郎に慰めてもらいましょう)」

そして死亡フラグも一つ増えた。

「……とにかく、悪いけど方針は変えられないわ。

蘭丸との戦いは可能なら避けて江戸城に向かう。

敵の現在位置と、織田信長を洗脳して取り込んでるのが分かっただけでも大収穫ね。

蘭丸の能力で不意打ちをかけられていたら、目も当てられない状況になってたわ」

「じゃあ大収穫の報酬を寄越せだし」

「良いわ、新田劍丞は『なるべく』殺さない、約束するわ。

ただし『なるべく』よ、無理そうだったら諦める。

乱戦の中でうっかり殴り過ぎたなんて事になっても恨むんじゃないわよ」

「まあその辺が限界か、だし」

「おい待て！ それではご主人様を放置する事になるだろう！」

話が纏まりそうな所で小波が口を挟む。

「つつてもこつちの手札じゃこれ以上は何も引つ張り出せねーし。

逆さに振つても鼻血しか出ないとは正にこの事だし」

「ああ、そう言えば貴女って北条に伝手があつたわよね。

どうも一刻を争いそうな状況だし、

江戸城に行く手伝いもしてくれるならこつちも色々便宜を図るわよ」

「ちよつと前に中途退職したから向こうは怒ってるかもだし。

それでも良いなら、状況が状況だし手伝ってやらんでも無いけど、期待すんなだし」

「おい！ 部外者が勝手に決めるな！」

「部外者じゃねーし！ 思い切り当事者だしっ!!」

「そもそもお前は誰だ!? いつからここにいた!?!」

「この短時間で2回も忘れやがったしっ!!」

……

……

……

「小夜叉、鎧の調子はどうか？」

その日の夜、九十郎は小川で鎧に着いた汚れを洗う小夜叉に声をかけていた。

鬼は遺体が残らず、返り血や肉片による汚れは無いのであるが、鬼に斬られた味方の兵の血や、戦場を駆け回る際に付着する泥汚れ等は当然ある。

そういう細々とした汚れについて、気にしない者はとことん気にしないが、気にする

者は結構気にする。

そして小夜又は意外な事に、比較的気にする方に分類される。

「うん？ 九十郎か、良い感じだよ」

間接の隙間に溜まった泥を掻き出しながら小夜又が答える。

その鎧は一般に流通する当世具足ではなく、九十郎作成の西洋風フルプレートアーマーだ。

最初の一戦（第106話）では暑すぎ、重すぎ、身長や体格に合っていない、ペース配分ミスの四重苦により散々な結末になってしまった鎧であるが、その後間接の位置や構造が変え、内部の熱気を逃がすスリットが増やし、比較的致命傷になり難い部位の装甲を薄くして軽量化を図る等の改修が行われている。

それと並行して行われた猛特訓（第121話）によって、全身の筋肉が増し、重い鎧を着用した状況での戦い方にも慣れ、現在では以前と遜色ない戦いぶりを見せている。

そのおかげで、小夜又は先の戦闘では柘榴や綾那といった猛将達と共に凄まじい勢いで雑魚鬼達を刈り取っていた。

「オレに用事か？」

「いや、用があるのは糞弟子の方だ。今どこにいるか知ってたら教えてくれ」

「さつきあつちで仏像彫ってたぞ」

「そか、ありがとな」

九十郎が軽く礼を言つてからその場から立ち去ろうとして……足が止まる。

「怪我とかしてねえか？」

「……あん？ 今日出てきたのは雑魚ばかりだったよ。張り合いが無い位だったぜ」

「そか、そりや良かった」

九十郎がその場から立ち去る……が、2〜3歩進んだところでまた足が止まる。

「……粉雪は元気でやつてるかな？」

「知らねえよ、便りが無いのは元気な証拠なんじゃねえの？」

「いや頼りは結構来てるんだ。」

早くしろとか、真面目にやれとか、夜になると俺の事ばかり考えるとか」

「それ恋文なんじゃねえの？」

「かもな、全然返事書いてねえが」

「書いてやれよ、待つてるぞ絶対」

「いや、改めて書こうとすると何を書けば良いか分からなくてだな……」

「釣った魚にもエサをやっておけつて」

「ああ、そだな……分かつちやいるんだが……」

九十郎がそれだけ言い残すとその場から……立ち去らずに、しばし無言で佇む。

「あゝ、小夜叉……その……だな……」

そして何かを言いかけ……また止まる。

そうこうしてる間に、小夜叉はフルプレートアーマーの洗浄が終わった。

「……あの時の事、気にしてんのか？」

あの時と言われ……後先考えずにフルプレートアーマーを小夜叉に渡し、それが原因で鬼に押し倒され、凌辱された時の事だとすぐに分かった（第106話）。

「あんま愉快な思い出じゃねえけどな、アレについては何とか折り合いをつけてる。

今更謝られても何も変わらねえよ」

「う……すまん、あの時は本気で考え無しだった……」

「だから謝るなって」

小夜叉が水洗いした鎧の部品から水気を拭き取っていく。

「……剣丞隊が全滅した、小波以外」

小夜叉の動きがぴたつと止まる。

「蘭丸……か？」

小夜叉は直感的に、森蘭丸の仕業のような気がした……と言うより、他に剣丞隊を全滅させられるような存在に心当たりが無かった。

「小波が洗脳されて偽の記憶を植え付けられてなけりやだがな。

いや、あいつはテレパスで、ある程度は精神操作に耐性がある。

たぶん大丈夫だとは思うんだけどな……」

「何があつたんだ？」

「それはだな……」

九十郎が頭を掻き、どこからどう話したものかと思案する。

そして……

「2回同じ話するのは面倒だ、とりあえず糞弟子の所に行くぞ」

とりあえず九十郎は話し難い事を先延ばしにした。

こういう無意味な先延ばしを多用して話をややこしくする所が九十郎である。

……

……

……

カリカリカリカリ……と、小刀で木片を削る音がする。

ガリガリガリガリ……と、鑪で角やささくれを削る音がする。

本多綾那忠勝の傍には、既に4体程の木彫りの仏像が置かれており、少し前に5体目の作成に着手した所であつた。

「糞弟子、いるか?」

「よう鹿角、さつきぶりだな」

……と、そこにズカズカと無遠慮に小夜叉と九十郎が入ってきた。

「……て、お前何やってんだ?」

「仏像を彫っているのです。」

綾那は少し手を止めて答える。

今回の戦いで斬殺した鬼達は、元々は駿河に住む普通の人々だ。

世を乱す鬼として殺した事に後悔は無いが、それでも犠牲になった人々の無念を慰めるために綾那は仏像を彫り、念仏を唱えていた。

何も考えていないようで、意外と信心深い方なのだ。

「九十郎殿、敵が迫っているのですか?」

近くで近辺の地図を眺めて何やら考え事をしていた詩乃が、九十郎に声をかける。

「……ん? 誰から聞いた?」

「いえ、誰からも。」

しかしこうも慌ただしく陣の立て直しを急がれては、嫌でも分かります」

「そりやそうか。竹中半兵衛だったもんな、あんたは。」

俺がこっちに来るのもお見通しだったか?」

「まさか、予知能力者ではありませんよ。」

しかし事情が分からないままでは対策も立てられず、困っていました」

九十郎が苦笑する。

現状、詩乃と綾那の立場は越軍の中でも微妙なものだ。

美空が付けた見張りを昏倒させ、蓄電逃亡した新田劍丞。

現状、明確な敵とまでは見なされていないが、直前までの言動から限りなく敵に近い存在として認識されている。

その劍丞についてこの間まで仕え、支えていたのが詩乃と綾那だ。

形式上は越後長尾家に助力しているものの、その立ち位置はやや敵に近いグレーと認識されていた。

要するに、古参の者達からは距離を置かれてしまっているのだ。

「蘭丸は知ってるか？ 森蘭丸、桐琴が鬼に孕まされて産んだ鬼子なんだが」

「存じています。金ヶ崎の退き口で遭遇しましたので」

「ああ、言われてみればそうだったな」

九十郎にとっては対して思い入れの無い戦いだ、詩乃にとっては金ヶ崎の戦いはトラウマ一步手前である（第66話）。

突如として目の前に現れ、劍丞隊の全員の動きを問答無用で止め、その後は……正直、

あまり覚えていない。

覚えていないが、『恐怖』と『快樂』の2つだけは、どれだけ頭から振り払おうとしても取り除けない程に強烈に染みついていた。

「それに……もう一度……」

「もう一度？ 何かあつたのか？」

「いえ、それは……」

詩乃が言いよどむ。

彼女は金ヶ崎の他にも、蘭丸と会っている。

助けられた御礼と称して九十郎に抱かれ……いや、九十郎を押し倒し、淫らに腰を振る夢を見た日に、詩乃は確かに森蘭丸と会っているのだ（第114話）。

何の悪意も、殺意も、害意も感じ取れない装いで『本当の愛を探している』と言つてのけた鬼子に……

（あの一件は……流石に言えません……ね……）

洗脳と催眠を武器とする鬼子に2人きりで会つていたと告げれば、次に待っているのは内通疑惑だろう。

美空や九十郎に伝えるのであれば、劍丞から袂を分けた時点で伝えるべきだった。

今この状況で内通をした、していないの水掛け論を行うのは明らかに悪手である。

「蘭丸の居所が分かったのですか？」

詩乃が話題を逸らす。

蘭丸対策の難しさは情報不足にある。

どこで何をしているのかが分からない。

いつ誰が蘭丸に洗脳され、敵に回るかも分からない。

そんな状況ではどのような作戦も立てられたものではない。

「……蘭丸は、織田信長を取り込んだ」

「織田に……!?!」

詩乃が明らかに動揺する。

越後から去った剣丞隊の行先は尾張、織田久遠信長の元だという事は状況的に明らかだ。

織田久遠信長と合流し、美空が未来の兵器を手に入れるのを阻止するために……その織田信長が蘭丸に取り込まれたという事は……

「では……剣丞隊は……」

詩乃は自らに対し『動揺するな』、『心を掻き乱すな』と言い聞かせながら、片手をぎゅううつと握り絞めながら剣丞隊の安否を尋ねる。

剣丞は洗脳を防ぐ剣を持っていただけのだからと、小波も多少なら蘭丸の能力に耐えられ

た筈だからと、必死に劍丞が無事に戻る理由を頭に思い浮かべて、祈るような気持ちで九十郎の言葉を待った。

だがしかし……

「劍丞隊は全滅した」

……しかし、その祈りは届かない。

瞬間、ザクツ！ という刃物が肉に食い込む音、ガララツ！ という木彫りの仏像や材木が崩れる音がして……

「い……い……痛った……いのですうっ!!」

本多綾那忠勝が動揺の余り、小刀を左手に突き刺し大出血していた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第152話『劍丞隊全滅』

〔前編〕

……少し時は遡る。

美空の監視下から逃れた劍丞隊及び三河松平家一同は、追手を警戒しつつ自らの根拠地へと急いでいた。

この時、葵に従う三河侍達の数はおよそ1500人。

数こそ少ないが、頑固で、勇敢で、屈強で知られる三河侍である。

「しかし、意外でしたなあ」

本多正信・通称悠季が、主君である松平元康・通称葵に声をかける。

「何の話？」

葵が珍しく敬語抜きで聞き返す。

その表情はかなり険しめだ。

「存外、殿が九十郎をあつさりと諦めて帰国した事ですよ。

一時期は夢に見る程に執着されていましたのに」

「またその話？ 言ったでしょう、今の私では熱が足りない」と

熱とはつまり、熱気とか熱意とか、あるいは執着といったものだ。

美空が、柘榴が、雫が、貞子が、信虎が、そして粉雪がそれぞれの想いを熱く熱く叫んだあの日、葵だけは何も言えず、何も叫べずに黙ってしまっていた（第76話）。

単純な話、九十郎への想いが小さく弱かったのだ。

あの時葵は九十郎を、便利なアイテムを運ぶお助けキヤラ程度にしか思っていなかった。

美空や柘榴のように、1人の男性として愛してはいなかった。

それ故に、彼女達の熱い想いに気圧され、自身の浅ましさを突きつけられ、声が出なくなってしまったのだ。

「いつなら熱が足りるの？」

悠季がそんな葵の傷心をづけづけと抉る。

その人の心を顧みない直言は悠季が綾那から嫌われる理由であり、葵がいつも相談役として彼女を傍に置く理由である。

「自身が届かないのならば、他が落ちるのを待つのが定石でしょう」

「果報は寝ているだけでは届きませんよ」

「棚の上の牡丹餅は叩いて揺らして落すもの。」

「何個か手は考えているから、三河に戻ったら根回しを手伝いなさい」

「御意。して……方針はいかがします？」

葵は少し考え、周囲に聞こえないように小声になる。

「大江戸学園とやらと手を結び、未来の武器を多量に仕入れ、

その威力を持つて一気に戦乱の世を平定する……それが今の長尾が進む道」

「未来の武器を『買う』を『造る』に替えれば、以前我々が目論んだ事と同じですな」

「悠季はこの方法で天下が治まると思う？」

「おやあ……？ 何を仰います、上手くいくと思つたからこそ進めていたのでは？」

「美空殿は31歳、私は19。」

どうも毎日毎日吐く程呑んでいるみたいだから、多分50まで生きられないわ。

命脈尽きるまで後、10年か、15年……」

「殿は100まで生きる仮定ですか？」

「常に年寄が先に死ぬとは限らないけれど、

今回に関しては私の方が長生きする可能性は高いと思うわ」

「そうしますと狙い目は跡目争いですな」

「それもあるけれど、それだけでは弱いわね。」

既に美空殿は跡目を名月殿にと指定しているもの」

死ぬまで誰も跡目にしなければ楽だったのに……と、葵は思った。

「尤も、それに不安や不満を持つ者もいるように見えたのですが」

「後は美空殿が天下を治めんと何人撃ち殺すか……」

「多すぎず、少なすぎず誘導できれば……」

「ふむ……多すぎれば恐怖に染まる、少なすぎれば恨みが出ない……ですかな？」

「葵は『分かっているじゃないか』とでも言いたげに笑った。

「ではでは、盛大に炎上するよう今の内に火種をばら撒くとしましょうか」

「未来の鉄砲隊を相手に戦う戦法も研究しましょう」

「そんな事を話しながら、葵は思う。

「（天下は風船のようなもの……誰かが手を離せば、フワフワと誰かの手に移る……」

「そこに備えがあれば、私の元にも……なんて考えるのは、極論でしょうけど……）」

「そうして葵と悠季は美空が死んだ後に天下を乱す計画を立てながら進んでいた。

「その企みが思い切りひっくり返る出来事が後で起きるとも知らずに……」

……

……

……

「葵と悠季が悪巧みをしている頃、三河勢から少し離れ、尾張に向かう劍丞隊では……」

「劍丞様、本当に良かったんですか……？」

豊臣秀吉……もとい、木下藤吉郎・通称ひよ子が不安そうな顔をしていた。

「俎板の鯉は料理人に挨拶はしないものですよ、ひよ子さん」

劍丞に代わり、劍丞のすぐ隣に身を寄せ合うかのようにくつつきながら進む湖衣が答えた。

川中島の戦いの後で急に匿ってほしいと現れて、直後に古参の軍師……詩乃の立場にとつて代わるかのように劍丞の隣を確保した彼女を、ひよ子はイマイチ好きになれない。

「美空様に黙って抜け出すような真似して、後で怒られやしませんか……？」

ひとまず湖衣の言葉はおいといて、劍丞に自身の不安を吐露した。

一瞬、それに対して湖衣が何かを言おうとしたが……また無視されるのではと思ったのか、少し俯いて口を閉ざす。

たぶん頭の中で何かしら気の利いた回答を用意しているのだろうか……と、ひよ子は察したが、それを聞き出すような事はしない。

こういう庄しの弱い所も、ひよ子は少し苦手である。

「もうそういう時期は過ぎてるよ」

「過ぎてるって……」

「俺達……いや、俺は長尾美空景虎と敵対する事にした。」

美空のやろうとしてゐる事を全力で止める……そう決めた。

嫌われるとか、怒られるとか、そういうのを気に留める必要はもう無い」

「うえええつ!? そうなんですかあつ!?」

直後、ひよ子が腰を抜かさんばかりに驚いてみせる。

そういうばまだ言つて無かつたかと、劍丞は一人頬を搔いた。

一葉が『適当に誤魔化しておいた』と言つていたのを今更ながら思い出した（第14話）。

越後脱出からこつち、昼は歩き通し、夜は追手の警戒で気が休まる時が無く、ひよ子ら劍丞隊の主要メンバーに自分の行動の意図を伝えきれていなかったと思ひ知る。

「（小波、追手の気配は？）」

精神を集中し、小波に届けと念じながら、頭の中でメッセージを思い浮かべる。

小波の精神感応系の御家流・句伝無量の効果により、劍丞の思念がテレパシーに変換され、広範囲に張り巡らせた精神感応の網に引つかかる。

「（今の所は……物見も追手の気配も……）」

劍丞隊や三河勢達からやや離れた所から、小波がテレパシーを返す。

小波は句伝無量で連絡を取りつつ、こうやってずっと越後からの追手が来ないかと見張り続けていた。

空を見上げれば、太陽は南の空で燦然と輝いていた。

その日は日差しが強く、気温も高く、皆も疲れが溜まりつつある様子だ。

無理してこのまま歩き通しているよりも、日陰を探して少し休みを取った方が、結果として早く尾張に辿り着けそうだと思った。

「ひよ子、皆を集めて小休止をとろう。」

色々と……ああ、そうだな、皆に話さないといけない事がある」

……

……

……

劍丞隊の中で今回の越後脱出の経緯を知っているのは数少ない。

詩乃と劍丞の大喧嘩に立ち会った湖衣と一葉、そして一葉の態度から色々察して色々聞き出した幽くらいだ。

「……と、いう訳で主様は美空に見切りをつけて脱出したという訳じゃな」

基本口下手な湖衣はこういう状況では戦力外、幽は後から又聞きしたただけなので聞き役に回り、劍丞と一葉が説明役に回った。

「……………」

「……………」

鳥と雀のちびっ子姉妹がじとくっとした視線を劍丞達にやる。

基本お喋りな雀まで黙ってるのは結構珍しい。

雇われ傭兵という立場上、上が決めた方針に真っ向から反対するつもりはないとはいえ、それはそれとして『もっと早く言えよ』という気持ちらしい。

「急に綾那がいなくなったと思ったら……」

「最近詩乃ちゃん見ないな〜って思ってたけど……」

歌夜とひよ子が苦笑する。

詩乃は見解の相違によって喧嘩別れし、綾那は詩乃の護衛として残ったと聞き、ようやく合点があったと胸を撫でおろす。

急に姿が見えなくなったので、知らない所で何か問題でも起こしたのではと不安だったのだ。

なお、2人共自身の友人の安否は心配していない。

敵中に1人で取り残された程度で死ぬようなタマじやないと理解しているし、2人共新田劍丞にベタ惚れしているので、なんやかんやで合流するだろうと思っっている。

「じゃあ今後の劍丞隊の方針は……」

「まずは尾張に帰還、

ハニーは久遠様に会って美空殿の危険性を伝えて説得という流れになりますわね」

「お頭、説得できなかつた時はどうする気なんでしょうか？」

「その時は……」

転子からの質問……それは考えたくも無い事であつたが、考えざる得ない事。

その答えを、劍丞は既に出している。

「その時は俺一人でも美空を止める」

「えっ!? 一人であつて……」

「結局の所、俺がやりたい事は未来の武器を使った圧政を阻止する事で、

美空を打ち倒す事じゃない」

「でも一人じゃどうする事もできないですよ」

「いや、やりようはある。ポータルを壊せば良いんだ。

雫から聞いた限り、アレはそう何個も量産できるものじゃないようだし、

精密機械だから、一度壊してしまえばこの時代の技術で直すのは不可能だ。

ポータルさえ壊せば……未来の世界との通路さえ作らせなければ、

未来の武器を大量に輸入する事も出来なくなる筈だ」

「そんな事したら、織田と長尾の関係は最悪になるような……」

「だから俺一人で行つて、俺一人で行る」

そう告げると、ひよ子が、転子が、一葉が、幽が、歌夜が、烏が、そして雀が互いに

顔を見合わせる。

誰かが『分かつてるな』という視線を向けて、誰かが『分かつてる』と視線を返す。今ここにいる女達は、全員残らず新田剣丞という男に惚れて、剣丞のためなら命もいらぬという覚悟を持った女達だ。

この場に居ない綾那と小波もそうだろうし、たぶん詩乃だってそうなんじゃないかと思っていた。

そして……

「はいはいはい！ その時は八咫鳥隊も参加希望しまーすっ!!」

雀の宣言に、基本無口な鳥がこくと頷く。

「いや、危ないし、居場所がなくなるから……」

「えー、でも未来の鉄砲なんて使われちゃたら、

八咫鳥の価値ダダ下がりじゃないですか」

鳥がうんうんと何度も頷く。

「先陣はこの蒲生梅氏郷にお任せあれ……と、言わせてもらいますわ。

ハニー、まさか私を置いてくなんて薄情な事は言わないでしょう?」

見た目的にも性格的にも隠密行動に絶望的に向かない少女が身を乗り出してくる。

「私も、及ばずながら力になりますよ」

歌夜もまた、名目上は今なお松平葵元康の旗本であるにも関わらず、劍丞への協力を誓う。

次から次へと自身への助力を申し出る姿に、劍丞は泣きそうになった。

……そんな時だ。

「……え、それって？ 本当に？」

休憩中に周囲に放った斥候が戻り、転子になにやら耳打ちをする。

転子は途端に訝し気な表情になった。

「ころちゃん、どうしたの？」

「追手ですか？」

梅が立ち上がり臨戦態勢になる。

当然、想定する相手は越後からの追手である。

「いえ、あの……」

後方からの報告ではなくて、前方に少数放った物見からの報告です。」

「前から!!? まさか先回りされたのですの!」

「そ、それがおかしいんですよ。旗印が……」

「旗印が？」

「織田の桔梗紋を……見たって言うんですけど……」

それを聞いて、今度は剣丞が訝しげな表情になる。

今いる位置は旧武田の勢力圏内。

武田光璃晴信の戦死によって敵味方がごちゃごちゃにこんがらがり、迂闊に足を踏み入れば大火傷の危険がある場所だ。

ここまで剣丞達が無事に進めたのは武田の内情に詳しく、しかも遠隔地に視界を飛ばし偵察を可能にする便利な御家流を使用可能な湖衣の道案内があったためだ。

「……数は？ 武装はしていたのか？」

剣丞が思わずそう尋ねる。

人数が多ければ周囲の中小勢力を刺激する危険があり、少なければ野盗の類に襲われる危険がある。

どっちにしろ危険ではあるのだが、それでも聞かざるを得なかった。

「数は正確に分からないんですけど、明らかに武装していて、

100人や200人よりずっと多いって……」

「戦闘前提の数なのか……一体どうして……？」

剣丞には久遠がこの辺りに進軍してくる理由に心当たりがない。

剣丞隊と三河武士達が越後の長尾家によって保護されている事は伝わっているとは思いますが、その長尾家から蓄電逃亡した事は突発的な出来事で、事前の連絡等はできてい

ない。

「意図は分かりかねますが、好都合ではありませんか？」

「元より我々はその織田と合流しようとしているのですから」

「幽は比較的落ち着いた様子ではあるが、全員が多かれ少なかれ動揺している。」

「お、おとお頭あゝ、どくしましよ〜」

「ひよ、落ち着きなよ。私も驚きはしたけど、敵が迫ってるって訳じゃないんだから」

「あ、そっか」

「まさか織田に偽装した越後の追撃部隊じゃあるまいな……」

「ひええ、怖い事言わないでくださいよ〜」

「基本小さなひよ子はさつきからビビリ通しだ。」

「梅、転子、念のため皆に警戒態勢に入るよう伝えてくれ。」

「湖衣、御家流で『視て』もらえないか？」

「あ、はい。 やってみます……」

湖衣が精神を集中し、御家流を発動させる。

自身の意識をまるでドローンの様に空を飛ばし、上空からの視点で偵察を行うこの能力は、湖衣の切り札に他ならない。

剣丞隊と三河勢が慌ただしく警戒態勢に入る。

外していた鎧を着こみ、剣や槍、弓矢で武装する。

そしてこの時……剣丞は自身の剣魂に電池を入れた。

以前オーディンの遠隔操作魔法に操られ、訳の分からないまま犬子を犯し（第73話）、美空を犯しかけた（第118話）その剣に電池を入れる事は滅多に無い。

しかし剣丞はこの時、何となく嫌な予感がして電池を入れた。

だがしかし、『それ』は彼らが準備整えるよりも早くやって来た……

「え、早い……？　まるで、こつちの位置を知って……」

御家流で視界を飛ばす湖衣がそう呟くのと、剣丞達の視界に『旗』が見えたのはほぼ同時だった。

「あれは……織田桔梗紋……？」

事前に知らされていてもなお、剣丞は己の目を疑った。

それは確かに織田の旗印であった。

ずっと会いたかった、ずっと話したかった……織田久遠信長がいたのだ。

瞬間、緊張していた剣丞隊の面々の表情が一気に明るくなる。

「久遠っ!!」

剣丞は歓喜の叫びと共に駆け出していた。

見ればそこには懐かしい面々が揃っていた。

壬月がいた。

麦穂がいた。

和奏がいた。

雛がいた。

そして久遠が劍丞を見て笑った。

少しも驚く様子が無く、まるであらかじめここに劍丞がいる事を知っているかのよう……瞬間、劍丞は猛烈に嫌な予感を覚えた。

重ねて書くが、劍丞達が越後長尾家の庇護下から離れ、蓄電逃亡を凶ったのは突発的な出来事で、久遠への事前連絡はしていない。

仮に越後を離れた日に早馬か何かで連絡を取ったとしても、この位置で合流ができる訳が無い。

それこそ、携帯電話か何かで瞬時かつ持続的に劍丞隊の情報を入手し、劍丞隊が越後から離れる決意をした時点で、瞬時に合流を決意して移動を開始しなければそんな芸当は不可能だ。

つまり……

「(無理だ、どう考えても不可能だ……それこそ……それこそ森蘭丸がない限り……)」
森蘭丸は、洗脳して手駒とした者が見た事、聞いた事をリアルタイムで知る事ができ

る。

その能力をもって劍丞隊の行動を監視し続けていたとすれば。

そして劍丞隊が越後から離れた時、即座に久遠達を洗脳して劍丞との合流を決意させたとすれば……

そして腰に佩く劍に視線をやれば……

「光って……光っている!? 鬼が近くにいるのか!?!」

その瞬間、劍丞の嫌な予感はずいぶん変わった。

「止まれえ!! みんな止まるんだっ!!」

劍丞が叫ぶ。

味方と合流できたと、肉体的にも精神的にもキツい逃避行はここまでだと安堵して、目の前の織田の軍勢に駆け寄ろうとした何人かがギョツとして立ち止まる。

「……もう少し近づいてくれれば良かったんだけど。勘が良いのだねえ、劍丞は」

……そいつは、織田久遠信長の背中からひよっこりと顔を出した。

そいつの顔は忘れたくとも忘れられない。

そいつはかつて金ヶ崎の戦いで桐琴の胎を食い破って産まれ、劍丞隊を壊滅寸前にまで追いやった恐るべき鬼子……森蘭丸に他ならない。

そしてそいつは感心した様子で劍丞の方を向くと……次の瞬間、勝ち誇るかのようにニタアと笑みを浮かべる。

劍丞は背筋がゾクリと凍り付くのを感じた。

「この距離、この広さ、この人数……今更私に気付いてももう遅い。

既に！ 君達は一人残らず！ 私の能力の射程圏内いっ！！」

その眩きは、確かに劍丞の耳に届いた。

いや、劍丞隊や三河侍達の全員の耳に……違う、脳裏に確かに届いていた。

小波の御家流『句伝無量』と同じく、蘭丸の思念がテレパシーとなってその場の全ての人々へ届いたのだ。

「拙っ!? 皆逃げろおっ!! 散開してこの場から離れるんだっ!! 今すぐにつ!!」
慌てて劍丞が叫ぶ。

次の瞬間、劍丞の剣がピカピカピカアーツ!! と激しく点滅する。

その反応もかつて金ヶ崎の戦いで見た事がある。

劍魂と呼ばれる未知のテクノロジーが、洗脳系の超能力の発動を感知して、持ち主の

精神を自動的にガードした挙動である。

数秒……たった数秒、10秒未満の短い時間、蘭丸は己の精神を極限まで集中させ、己の超能力が限界ギリギリまで振り絞り、およそ2000人余りも及ぶ剣丞隊及び三河侍達全員に対しある『処置』をした。

処置をした。

処置してしまった。

あつというまに蘭丸の処置は『完了』してしまった。

その処置から逃れたのは、剣魂の機能で洗脳からガードされた剣丞と、追手の警戒のために本体から離れた位置にいた小波だけだ。

「久遠、どうやら剣丞隊はこっちに手向かうつもりみたい。

遠慮は要らないからさ……ヤツちやってよ」

滝のような汗を流し、今にも倒れ込みそうな程に脚を震えさせながら、蘭丸は久遠にそう伝える。

「うむ、であるか……できればもう少し穏当に話を進めたかったのだがな」

「ごめんごめん、意外と剣丞の勘が鋭かったみたいだ。

本当は私だって、避けれる戦いは避けたかったんだけどね」

「まあ良い、ここから先は腕づく、力づく……皆の者！ 事前に申し合わせた通りだ！

かかれええええーっ!!」

そんな久遠の勇ましい掛け声と共に、織田の軍勢が一斉に劍丞隊と三河侍達に突撃を開始した。

劍丞隊は500、三河勢は1500、総数は2000。

一方で久遠がこの場に連れてきた将兵の数は5000。

悪い意味で弱卒として知られる織田の将兵相手である事を考えると、数の差故に劣勢ではあれど、戦力の決定的な差という程の大差はついていない。

「あわわっ!! お、お頭、何で久遠様がこっちに攻めかかってくるんですかあっ!!」
「呆けている場合か!! この距離では逃げ切れん、応戦するしか無からう!!」

一葉達が混乱しつつも応戦の態勢を取り始める。

この日、この時、この瞬間、劍丞は知る事になる……いくら蘭丸の洗脳能力が優れているとはいっても、『敵味方の認識をそっくり入れ替える』ような真似はできない事を。そして同時に知る事になる……蘭丸の恐ろしさを。

「み、皆……何を、何をやっているんだ!?!」

劍丞の叫びは、誰の耳にも届かなかった。

織田の将兵達が、劍丞隊の面々が、屈強な三河侍達が、まるで早脱ぎ競争でも始めたかのように武器を捨て、鎧兜を捨て、素っ裸になりながら敵に向かって駆け出したのだ。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第154話『獣化の術』

……剣丞隊は全滅した。

鬼子・森蘭丸の恐るべき洗脳能力によって戦争の常識を書き換えられ、戦闘Ⅱセックス、絶頂Ⅱ敗北という条件で織田軍と真つ向から戦い、見事に負けた。

弱卒で有名な織田軍を相手に、見事なまでのボロ負けである。

蘭丸の洗脳から逃れられたのはたった2人だけ。

未来の科学技術によって洗脳防御装置が組み込まれた剣魂を所持していた新田剣丞と、精神感応系の超能力者であったが故に洗脳への耐性があり、越軍の追撃を警戒して本隊から大きく距離を取っていた服部半蔵正成・通称小波の2人だけだ。

そして剣丞も小波も、剣丞隊のメンバーが1人また1人と蹂躪されていくのを黙って見ていたという訳では無い。

「ま、拙いぞ……どう見ても皆正気じゃない、俺がどうにかしないと、どうにか……」
戦闘が……いや、常識を改変された被害者同士のセックスが開始された頃、剣丞はど
うするべきかと戦場を見回していた。

右からも左からも淫らな喘ぎ声や肉と肉がぶつかり合う音が聞こえてくる。

その数は明らかに10や20じゃない、もともともっと多くの出来事が同時並行で巻き起こっている。

「殴つてでも止めて……いや駄目だ、いくらなんでも数が多すぎる。」

俺1人じゃこんな大勢を止める事なんてできないし、殴つて止まるかもわからない。

何か皆を正気に戻す手段があれば……」

……と、そこで急に思い出した。

劍丞が越後の長尾景虎の庇護下に入っていた頃に、多種多様な超能力を使いこなす鬼子・新戸から蘭丸の洗脳の解き方を教わっていたのだ。

……

……

……

その日、新戸と綾那の組手が行われていた。

超能力者との戦い方を覚えさせるために、新戸は時間がある時は綾那や小夜叉といった劍丞隊の荒事担当と組手をするようにしている(第87話)。

最初は新戸の念動力や自然発火能力、催眠術によって翻弄されていた綾那や小夜叉であったが、戦闘センスは劍丞隊随一の連中だ、何日かすればコツを掴み、半月もすれば

逆に新戸を一方的にボッコボコにするようになっていた。

「……蘭丸と戦う時に最も気を付けなければならぬ事は何か分かるか？」

その日も綾那と小夜叉に超能力を使う暇さえ無くボッコボコに殴られまくった新戸が、まるで負け惜しみを言うかのようにそんな事を言い出した。

「超能力を使う時間を与えるな、だろ？」

「ひたすら距離を詰めて、すっぽんのように張り付いて、

少しでも精神を集中する仕草をしたら一直線に切り込むのです」

小夜叉と綾那がそう答える。

それは確かに対超能力者との戦いの基本であるが、今この場で新戸が伝えたい事とは少し違う。

「それもある。あるが最も警戒して回避すべきは、味方に袋叩きにされる事だ。

蘭丸と戦う場合、これが怖い」

新戸は並行世界の自分と会話をする能力がある（第37話）。

その能力で別の世界の剣丞が蘭丸とどう戦って、どう負けたかを知っている。

ほぼ全ての並行世界で新田剣丞は洗脳を防ぐ剣魂を所持しているのだが、にも関わらず剣丞は全ての世界で蘭丸に負けている。

その負け方が、味方に袋叩きなのだ。

「え〜つと……それは……どういふ事なのですか？」

「言った通りだ、敵に倒される前に味方から袋叩きにあつて負ける……それに警戒しろ」
「んな状況まずありえねえだろ」

小夜叉が至極真つ当なツツコミを入れる。

「オレは1度に1人しか洗脳できない。」

しつかりと精神を集中させて、お互いの顔が分かる距離まで近づく必要がある。

だが蘭丸は違う。一度に大勢……おそらく最大で2万か……3万人、

それ以上かも知れないが10万、20万という事は無い筈だ。

長距離、広範囲の人間を一度に洗脳ができる」

「……うげっ」

「さ、3万以上つて……」

綾那と小夜叉が絶句する。

基本脳筋の彼女達だが、万人単位の味方が一気に敵に回つたら勝負どころではないという程度は理解できた。

「蘭丸の洗脳で変な行動を取り始めた味方を無理矢理止めようとするのは悪手だ。」

洗脳を免れた者にとつてどれだけ非常識な行動であつても、

洗脳された者にとつては真つ当で、常識的で、疑う余地の無い行動だ。

「そうなるか……どうなる？」

「それが味方から袋叩きって訳か」

「綾那達じゃどうしようもなのですよ……」

「そうでもない、蘭丸は小夜叉に妙なこだわりがある。

アイツが勝ち確定と判断した時点で、小夜叉の洗脳だけ解く事が稀に良くある」

「稀に良く……ん？ 矛盾してねーかそれ？」

「綾那は野性的な直感で洗脳が来る直前に範囲外に逃げる事が超超低確率だがある。

エルムドアから源氏装備を盗むのと同じくらいの確立だが」

意識・小数点以下の確率。

とはいえ、数多の並行世界の虎松達が数千、数万回の試行をしつつも1度も勝てていない蘭丸に勝てる可能性は、例えば小数点以下であっても上げておきたいのが本音である。

実際の所、蘭丸の白兵戦技能は転子と同程度、本多忠勝が接近戦に持ち込めさえすれば瞬きするよりも早くあの世に送れる程度の強さだ。

「なんだか心もとない話なのです」

「いずれにせよだ、周囲が明らかに変な言動を始めたら、

蘭丸に洗脳されている可能性がある。その時は味方に袋叩きだけは避ける」

「……具体的に？」

「迂闊に味方に近づくな、むしろ真つ先に味方から逃げる」

実に後ろ向きな戦い方を伝えられ、綾那と小夜又はげんなりとした表情になった。

「んじやあよ、洗脳されちまった仲間を助ける方法はねえのかよ」

「……ある、蘭丸の洗脳を解く方法は2つある。

蘭丸が自発的に洗脳を解くか……蘭丸を殺すかの2つだ」

……

……

……

「そうだ、そうだった、蘭丸を斬れば……蘭丸1人倒せれば、皆は洗脳から解放される。

そうすれば……いや、そうするしかない」

劍丞は自らの手に握る剣を見る。

未来の科学技術により蘭丸の洗脳能力を防ぐと同時に、鬼の強靱な骨肉をバターのよ
うに切り裂く超兵器でもある。

「これだけ大規模な御家流……じゃない、超能力を使った直後なら、消耗している筈だ。
今なら俺でもどうにかできるかもしれない……

いや、俺がどうにかしないとイケないんだ」

劍丞は対超能力者の特訓に参加していなかったので直接その話を聞いていないのだが、綾那から話の内容は教えてもらっていた。

蘭丸を殺せば洗脳が解ける……それが今の劍丞にとって唯一の希望となる。

「俺がどうか……しなれば……」

劍丞がもう一度剣を握り締める。

既にできる、できないの問題は頭の中から削除している。

過去何度も自ら敵城の内部に侵入し、その度に詩乃に心配され、呆れられる劍丞の思考が今もまた前面に出てきていた。

劍丞の視界の先で、一葉と幽が男の前で服を脱ぎ、跪いて男根を啜え込んでいた。

蘭丸が彼女達の精神を操作し、あんな破廉恥な真似をさせている事は明らかで、あのまま放っておけばどうなるかも容易に想像ができる。

最早劍丞に迷っている時間、迷っていられる時間は無い。

「うおおおっ!!」

劍丞は叫んだ。

脳裏にチラリと浮かんだ『負けるかもしれない』という考えを振り払うために叫んだ。

おそらく蘭丸に洗脳されているとはいえ、織田軍を……織田久遠信長を敵にするという事実から目を逸らすために叫んだ。

そして……

「麦穂！ 投網っ!!」

「御意っ！」

……しかしまあ、この状況が劍丞一人でどうにかできる訳も無かった。

蘭丸は自分一人が死ねば洗脳が解けるといふ弱点をすっかり認識しており、劍丞が自分を斬るために突撃してくる可能性も認識していて、あらかじめ投網や長棒を準備させて待ち構える程度には用心深かった。

そして次の瞬間、劍丞が目にしたのはかつては共に戦った仲間達が十数人がかりでこちらに殺到し、次から次へと鍵爪付きの投げ縄や投網を放つ姿であった。

「しまっ……!?!」

あるいは、普段の劍丞なら待ち伏せを予想できていたかもしれない。

あるいは、普段の劍丞なら物陰に身を伏せる敵の姿に気づいていたかもしれない。

あるいは、普段の劍丞なら掻い潜る事もできたかもしれない。

だがしかし、その日の劍丞は自身の嫁達が今にも犯されそうな状況に焦り、周囲への警戒をする余裕が無くなっていた。

その結果、新田劍丞は普段の活躍が嘘のようにあつさり縄や網に手足を取られ、あつという間に複数の織田の兵達によって取り押さえられてしまったのだ。

「くそっ！ くそおっ！ この、斬れない……」

劍丞が投網の中で劍を当て、手足に絡みついた投げ縄を斬ろうとする。

しかし、元々劍魂は大江戸学園の学生同士で使われる刃引きがされた物品である。

蘭丸のような神話生物は豆腐かバターかの如く容易く切り裂ける片面、縄や人間のよ
うな物理的に断ち切る必要のある物には滅法弱い。

しかも蘭丸が準備させた投網や投げ縄は、鋼糸を編み込ませた特注品なのだから猶更
だ。

それなら……と、劍丞は以前姫野から渡された小太刀（第92話）を引き抜こうとし
た次の瞬間。

「……止まれ」

瞬間、劍丞の全身が硬直する。

まるで全身がコンクリートで固められたかのような感覚、それはかつて金ヶ崎の敗走
中に遭遇した森蘭丸の能力だ（第68話）。

「（また……まただ!? 声も出せない!）」

「1人なら止められる。たとえ劍魂で洗脳対策をされていようと、直接目を合わせ、

直接声を聴かせられ、精神を集中する時間もあればこうやって止められる。

だけど間違いないく2人同時は無理だ。

劍魂を持った人間が2人以上いたら、1人を止めている間にもう1人にやられる」完全に身動きが取れなくなった劍丞の前で、蘭丸がぶつぶつと独り言を言う。

その間にも、劍丞隊のメンバーは次々と織田の将兵達に組み伏せられ、犯され、成す術も無く絶頂させられていた。

既に蘭丸は劍丞隊の事は眼中に無い。

劍丞隊には完全に勝利したものととして、劍丞隊よりも厄介な越軍とどう戦うかを考えている様子であった。

「や……やめ……ろお……」

劍丞は辛うじて声を絞り出す。

今の劍丞には羽虫の飛行音のようにか細い声を出すのが精一杯で、当然のように蘭丸は止まらない、劍丞隊を……一葉や幽といった劍丞の嫁達を強姦する男達の動きも止まらない。

「(ご主人様! ご主人様あつ! しつかりしてください!」

今そちらに向かつております! もう少しだけ待っていてください!!)」

その声は劍丞の脳裏に直接響く声だった。

物理的な『音』ではない……劍丞隊所属の忍者にして、劍丞の嫁の1人、服部半蔵正成・通称小波の御家流『匂伝無量』によってもたらされる超常の『声』だ。

小波は越軍の追撃を警戒していたために本体からかなり離れた位置にいたのだが、劍丞隊の主要な何人かにはあらかじめ渡しておいたお守りを通じて異変を察知し、一直線に劍丞の元へ向かってきていた。

劍丞に何度も何度も声を届けながら、必死に走ってきているのが分かった。それに気づいた時、劍丞は一瞬『助けてくれ』と叫びそうになる。

何とかしてくれ、どうにかしてくれと哀れに懇願してしまいたいになる。だが……

「来るな……来るな！ 来ては駄目だ！ 今すぐ離れるんだっ!!」

劍丞は己の心の中の弱気をねじ伏せて叫ぶ。

視界の端で、一葉が男に抱かれているのが見えた。

他の劍丞隊の女達も、別々の場所で別の男達に組み伏せられているのも分かった。

あるいは小波だけはこの吐き気のする光景から守りたいと思つたのかもしれない。

「(ご、ご主人様……しかし……)」

「命令だ！ 今すぐ離れるんだ！」

そして今日ここで何が起きたのかを九十郎に伝えるんだ！」

それは絶望的な状況下での悪足掻きかも知れない。

自力での勝利を諦めた敗北主義的な言葉なのかも知れない。

だがしかし……その叫びは、絶対的優位の立場にいた蘭丸を青褪めさせた。

「え、嘘……服部半蔵がいらない……？ げっ、本当にいないだつて!」

ああしまった! なんてこつた、なんて迂闊な!」

蘭丸は頭を抱えて狼狽えるもすぐに気を取り直し。硬直する劍丞から小波のお守りを奪い取る。

「服部半蔵! 服部半蔵正成っ! お前今どこにいる!」

お守りを触媒に、蘭丸のテレパシーが小波の元へ伝達される。

当然、小波はお守りが蘭丸の手に渡った事をすぐに理解しており、その質問に回答はしない。

「……ちっ、切断されたか。いや、当然か。

だけど大まかな距離と方向は今の一瞬で分かった……久遠!

伊賀の忍者達をありつたけ呼んできて追跡をお願い! 念のため武装もさせて!

長尾に情報を持つてかれるのは非常に拙い!!」

「むっ……良く分からんが、分かった!!」

蘭丸の指示で織田の本陣が慌ただしくなる。

こんな事もあるうかと蘭丸は織田家を掌握後、伊賀の忍者達も洗脳して手駒に加えておいたのだ。

その伊賀忍者達が10人も20人も現れて、先ほど蘭丸が割り出した小波の居場所へ駆け出した。

〔頼むぞ、小波……〕

投網と金縛りで身動きが取れない中で、劍丞は小波の無事を祈る。

駆け込む先がついさっきまで自分が力づくで止めようとした美空や九十郎の元だという点については、この際考えない事にした。

蘭丸を止められる可能性のある者が他に思いつかなかった。

……

……

……

「はぁ……はぁ……うう……」

新田劍丞が囚われの身になってから半日が過ぎた。

小波は何か所かの傷を受け、その息は荒れていた。

服部半蔵はこの時代において上から数えた方が早い凄腕の忍者だ。

たった半日程度走った程度で息が荒れるなんて事は無い。

通常ならば……

「グアアアアア……ッ!!」

「…………ぐうつ！」

物陰で身を潜める小波に大型の獣が襲い掛かる。

蘭丸に洗脳された織田軍から逃亡を開始してから何度も何度も攻撃を受けている。

何度身を隠しても、川を渡り、谷を越えてもなおその獣は執拗に小波を攻め続けてきた。

「離れ…………ろおつ!!」

顔を噛み砕かれそうになるのをギリギリで止め、巴投げの要領で投げ飛ばす。

「ギシャルルルウツ！」

怖気が奔る呻き声だ。

気が弱い者ならこの恐ろしい呻き声を聞くだけで失神してしまうかもしれない。

忍者の中には犬や鳥を手懐けて敵を襲わせる術を使う者がいる。

最初はこの獣もそういうものだと思っていた。

だがしかし…………『それ』は見た事も聞いた事も無い姿形をしていた。

頭は猿、胴体は狸、手足は虎、尾は蛇に似た造形で、あらゆる箇所が他のどの獣とも異なっている。

複数のまるで違う造形物を無理矢理混ぜ合わせたかのような奇怪な姿に、小波は吐き気すら感じてしまう。

恐ろしいのは外見だけでは無い。

その強靱な毛皮は刀や手裏剣では傷一つ付かず、恐るべき動体視力と反射神経は小波からの反撃を易々と躲す。

聴覚も嗅覚も優れていたため、何度逃げ隠れしてもすぐに追いつき、執拗に攻撃を繰り返す。

しかも知能まで高く、火も恐れず、どんなに死力を尽くそうが逃げる事も撃退する事も叶わない。

捕獲レベルに換算すれば8程度だろうか。

小波が過去に戦ったどの敵よりも強い相手であった。

(捕獲レベルで、猟銃で武装したプロのハンターが10人必要な強さである)

「く、このままでは……」

小波の左腕から血が流れ落ちていた。

先程この獣と揉み合った際に、爪か牙で血管が破られたようで、布で縛った程度では十分な止血になっていない。

急ぎ傷口を縫わなければ、失血死すらありうる状況だ。

「グオアアアッ!!」

またもや獣が飛び掛かって来る。

全身が傷だらけ、疲労困憊の状態……小波の反応が一瞬遅れる。その一瞬の遅れが致命的になった。

「あ……やられ……」

……直後、小波は周囲がスローモーションのようになるのを感じた。獣が自身の喉笛を正確に狙っているのが分かった。

防御も回避も絶対に間に合わないのも分かった。

自分の死を確信してしまった。

小波は……

「ひめ……の……」

小波は思わず、そんな言葉を呟いていた。

小波は自分自身、何故そんな言葉が口から出たのか分からなかった。

『姫野』という名前に心当たりが無かった。

自らに襲い掛かる未知の獣を凝視していたら、全く記憶に無い名前が思い浮かんだのだ。

そもそも、何故『姫野』という言葉を何かの名前だと思ったのかすら分からなかった。

「ぐ……るるう……」

小波の喉仏を食い破る寸前、獣は止まった。

そしてワナワナと震え始めた。

その表情は、震えの源泉は……凄まじいばかりの『怒り』である。

「なんで……なんで……普段は顔も名前も忘れまくる癖に……」

なんでこの姿の時だけ姫野って分かるしいいいいいいーっ!!」

……そして叫んだ。

「……って、あれ？ 姫野何でこんなトコにいるし？」

しかも切り札の獣化の術まで使ってるし。 小波？ 小波が何でいるし？」

ちよつと、どうしてそんな傷だらけだし!？」

獣が急に人語を話し始めた。

その声を聞いた時、何故か小波は聞いた事があるような気がした。

そして同時に、目の前の獣こそが『姫野』なのではないかと、特に何の根拠も無く感じた。

「姫野……?」

「うん、姫野だし。 じゃなくて、どうしてこの姿の時だけ姫野って分かるし!？」

「いや、それは分からないが……」

そもそも『私達は知り合いましたっけ?』と聞きたかったが、どうにもそういう雰囲気ではなかった。

「とにかくちゃんと手当するし！　かなり深手の傷もあるし！」

未知の獣がゴキゴキと骨を鳴らし、メキメキと肉と皮を歪ませ、人間の姿に……それも、美形かつ若い女性の姿になった。

その顔は、小波にとつて全く見覚えの無い顔であった。

「……誰だ貴様は？」

「はい、いつもの入りましただしいっ！！

もう何回このやり取りしたか数える気も起きねーしいっ！！」

犬子と柘榴と一二三と九十郎第156話『じゃあ犬子は逃げるから後は頑張ってね』

「……という状況らしい」

九十郎が長い長い話を終えた。

小波と姫野からもたらされた情報を、包み隠さず詩乃と綾那、そして小夜叉に伝えただ。

小波が撤退を始めた後の蘭丸と劍丞との会話（第155話）は小波も知らない事なので伝わっていないものの、そこ以外は粗方伝わっている。

それは追手の忍者達に自ら股を開き、犯させ、皆殺しにした部分も含めてだ。

「陸内射精をさせれば大きな隙を晒す、ですか……」

上手く常識の書き換えから逃れる事ができれば利用できそうな情報ですね」

小波も姫野も新田劍丞を愛し、新田劍丞に愛された女である。

いくら生き延びるためとはいえ、いくら劍丞の最後の命令を遂行するためとはいえ、愛する者以外の男に抱かれる苦痛は容易に想像ができる。

どれ程辛い想いをしたか、どれ程の悲しみを背負ったか、まるで我が身を引き裂かれるような胸の痛みを詩乃は感じていた。

故に詩乃は決意した。

この戦いは絶対に勝たなければいけないと。

どんな手を使つても勝たなければいけないと。

そして全霊を込めて否定しなければいけない、森蘭丸の所業を否定するのだと。

「だが広い範囲、大人数を一気に洗脳する能力は厄介だぞ。

インチキ効果も大概にしろつて言つてやりたいね」

遊○王なら『所有者の刻印』か『洗脳解除』をデツキに入れるところであるが、残念ながら現実にはカードゲームのようにはいかないのである。

「防ぐ手段があるとすれば、本隊から別行動をとる事でしょうか」

「美空や一二三とも相談したが、各個撃破されるだけだと言われたよ。

たぶん越軍の中に裏切者がいて、こっちの情報も流されてる。

分散したらポータルを運んでいる少人数だけを狙われるのがオチだ」

「裏切者が……いえ、そうですね、相手は他人を洗脳する能力の持ち主、

まず間違いなく誰かを間者に仕立て上げていると見て良いでしょう。

それではどのように対抗するのですか？」

「あえて味方を密集させる」

「ほう？」

「対超能力者との戦闘の基本の一つ『能力を無駄撃ちさせろ』だ。

強力な超能力を使えば使う程、精神が消耗する。

休憩を取らなければ再び超能力は使えなくなる。酷ければその場で気絶だ」

「あえて一度に大人数を洗脳させて、蘭丸を消耗させるのですね」

「そうだ、中途半端に分散させれば少人数の洗脳でつけ入る隙を作られるからな。

味方が洗脳されたら、すぐさま剣魂持ちと糞二トで蘭丸に特攻。

蘭丸一人斬れば洗脳された奴は全員正気に戻るって寸法だ」

「こちらはポータル一つ守れば勝ち、破壊されれば負け。

しかしそれは相手も同じという事……それならば、蘭丸が身を隠す可能性は？」

「剣魂には超能力行使を検知した時、距離や方向を表示する機能がある。

洗脳直後に間髪入れずに飛び込めばどうにかなる。いや、どうにかするしかない」

詩乃と九十郎が互いに顔を見合わせて、全く同じタイミングではあくつとため息をついた。

「この作戦、犬子さんや柘榴殿には伝えたのですか？」

「教えられる訳ねーだろ」

「では、既に脱出されたのですか？」

「あく……正直、迷ってる」

九十郎が頭をぽりぽりと搔きながらそう答える。

このまま越軍と行動を共にさせれば、劍魂を持たない犬子や柘榴はあつという間に常識を書き換えられてしまうだろう。

その後どうなるかは、劍丞隊と同じだろう（第153話）。

犬子と柘榴だけ、適当な口実を作って逃がす事は可能だ。

美空も『その時は口裏を合わせる』と言ってくれた。

九十郎だって、内心は犬子と柘榴だけは逃がしたいと思っている。

だが……

「事情を知ってる俺が自分の嫁だけを事前に逃がして。

事情を知らされてない大多数はそのままってのもな……」

「それではいつそ全てを話してしまいますか？ この戦に関わる全員に」

「他人の頭の中を自由に書き換えられる鬼がいます、その鬼ともうすぐ戦います、

劍魂を持ってない奴は誰とも分からない相手に強姦されます、と……

無理だな。 どう考えてもパニックになるだろうし、大多数は逃げる」

「そうすればポータルを守る事はできない……と」

「ははは、やべーな勝つても負けても地獄だな」

要するに美空や九十郎は、何も知らない一般将兵達を、蘭丸を疲労させるための捨て駒にしようとしているのだ。

捨て駒にされた者達がどうなるかを知りながら……

「ならば何故、私に全てを伝えたのですか？」

私が全てを暴露するかもとは思いませんでしたか？」

「いや、何か良いアイディアでもねーかなと思つて」

そう聞かれて、詩乃はしばらくの間考え込む……

「(例えば、洗脳の能力を受けながら、正気を保ち続けられれば……

呆れる程に単純な一手、効くかどうかどうかも分からない一手ですが、

他の作戦を阻害する訳でも無し……)」

九十郎の期待に満ちた眼差しが詩乃に向けられる。

詩乃はその眼差しに気付くと、ちよつとした高揚感に見舞われる。

「(こつやつて素直に頼られると……わ、悪い気はしませんね)」

そして同時に思う、いつから劍丞からこつという眼差しを向けられなくなったのだろうか。

どうして今、自分は愛する夫である新田劍丞と別れ、敵対勢力たる越後長尾家の客分

になつてゐるのだろうか。

「(劍丞様と九十郎殿……もし、出会う順番が逆だったのなら……)」

……そんな邪な思考を、詩乃はぶんぶん頭を振つて描き消した。

「一つ、試してみたい事があります」

「おおつ、マジで何かあんの!?!」

「あります。ただしこの策、事前に内容を知らせる事はできません。そこで……」

詩乃は小物入れに使つてゐる小さな巾着袋を九十郎に見せる。

「私の策を紙に書き、こういつた小さな袋に入れて配らせてください。

その内容は戦が始まるまで決して見てはならないと念を押して」

「孔明袋か」

「はい、戦端が開かれるまで策は内密にと」

「つつても、蘭丸に洗脳されてる奴が1人でもいたら、内容バレるぜきつと。」

「ならば蘭丸側に内容を知らせるまでです」

「……味方にはギリギリまで知らせねえのにか?」

「はい」

詩乃は一切躊躇せず頷いた。

「分かつた、信じるよ。一応聞いとくけど、末端まで全員に配るのか?」

「1万人くらいはいるぞ」

「そうできればそうしたいのですが、流石に間に合わないでしょうね。

誰に配るか、どうやって準備をするか。

その辺りは美空殿と相談して決める事にします」

「そっか、じゃあそっちはよろしくな。美空には俺からも頼んでおく」

そうして九十郎はぱんぱんと袴の土埃を払うと、その場から立ち去ろうとする。

「おい糞弟子、それと小夜叉。お前らさっきの話聞いてたよな？」

同じ説明2回もするの面倒なんだけだよ」

長話のため途中で飽きたのか、小夜叉は少し離れた所で人間骨無の素振りをしていった。

綾那は2人の近くで静かに座っているが、あまりにも静か過ぎて寝てるんじゃないかと不安になってくる。

「ちゃんと聞いているよ。」

要する洗脳だかなんだか怪しい術を使われる前にブチ殺せば良いんだろ？」

「それができりや苦労しねえって話を散々してるんだよ俺達はっ!!」

あまりの脳筋、あまりの能天気発言に九十郎が頭を抱えた。

「綾那は……本多忠勝はいつだって、『ただ勝つ』だけなのです」

一方で、ずっと無言だった綾那が堅い表情のまま口を開く。

綾那はさつき怪我した右手の指をじっと見つめていた（第151話）。

布で傷口を縛ったものの、未だ出血は止まっていない。

綾那が怪我をするのは実は今日が初めてだ。

それがまるで自身の……いや、これから起きる大一番での暗い未来を想起させ、綾那は内心穏やかではない。

「そう『ただ勝つ』だけ……なのです」

指の傷がずきずきと痛む。

まるで自分にそう言い聞かせているみたいだ……と、綾那は思った。

指の傷がずきずきと痛む。

まるで神か仏が『戦ってはいけない』と伝えようとしているみたいだ……と、綾那は思った。

指の傷がずきずきと痛む。

弱気になるな、弱気になるなと何度も何度も念じつつも、自身の心が衰弱していくのを感じていた。

「本多忠勝もこうなっちゃおしまいなのです……」

小さな声で漏れ出た弱音は、九十郎の耳には届かなかった。

「糞で……じゃない、綾那。お前にこれを預けたい」

それどころか、九十郎は対蘭丸用の切り札を綾那に見せる。

「それは……!?!」

それを見た瞬間、詩乃が目を丸くする。

一見すればどこにでもある普通の刀剣のように見えたが、彼女の鋭い観察眼が、鞘や装飾の質感がこの時代の物ではないと見抜いたのだ。

今このタイミングで、この時代の物ではない……おそらく現代ニホンで造られた刀剣とはつまり……

「まさか……これも剣魂、ですか?」

詩乃からの問いに対し、九十郎は静かに頷いた。

「光璃がこの時代に持ち込んだ剣魂は4つあった……吉音の『マゴベエ』、

光璃の『がらがらどん1号』、俺の『がらがらどん3号』。

そして4つ目はこれだ、俺のセカンド幼馴染、丹庵の剣魂『がらがらどん2号』」

「がらがらどん……2号……?」

綾那が恐る恐る刀剣を受け取る。

柄や鞘はプラスチック製、刀身は玉鋼よりも軽量な特殊合金製で、妙な手触りがした。しかもその大きさの割に軽すぎ、この剣で敵と切り結ぶのは少々慣れが必要になりそ

うだ。

「剣魂は利用者の生体情報と紐づいていて、

一度利用者登録をすればクラッキングするか初期化しない限り、

他の奴には使えなくなる。

これが結構嚴重プロテクトが掛かってな、残念ながら今のコレは完全な状態じゃない
「い」

「完全では無い、ですか……？」

「一言で言えばセーフモード……てのは、戦国時代の人間じゃ伝わらんか。

使える機能に絞る代わりに本来の持ち主以外にも使えるようにしたって事だ。

本来こんな真似はできねえらしいんだが、

五十嵐がクラッキングして無理矢理設定変更したんだとか。

当然、ナノマシンを操つてのサポートは無理だ」

「なのま……さぼー……ええつと、綾那にも分かるように説明してほしいのです」
「がらがらどん、出てこい」

九十郎の声に反応し、腰に帯びた刀が光る。

光の粒子のような物が周囲に舞い、あつという間にそれが集まり、一塊になり、一匹
の山羊の形になった。

「めえええーっ!!」

突然そこに現れた山羊が、荒々しく雄たけびを上げる。

「こいつは全ての剣魂のに備わった機能だ。

ナノマシンを組み上げて一種のサポートロボットにするんだ。

カスタマイズによって持ち主の筋力、体力の向上、化学物質の分析、怪我の治療とか、

色々できるようになるんだが……俺の『がらがらどん3号』は戦闘特化、

できる事は頭突き、噛みつき、体当たりだな」

「剣丞様の刀も剣魂だと伺いましたが、この……」

ええと、動物のようなものが出た事はありませんでしたよ」

「俺は五十嵐じゃないから分かん。 たぶんだが機能が封印されているじゃねえか。

今のコレも剣魂を出す機能は封印されている」

綾那が渡された剣を抜き、2〜3回素振りをしてみる。

その余りにも軽い感触はイマイチ好きになれなかったが、剣丞の刀と同様に鬼をバ

ターののように切り裂く能力があるのとしたら、それなりに役には立ちそうではある。

「がらがらどん1号と2号にはどのような能力が？」

「光璃の1号は情報収集特化、各種センサーがこれでもかかって位に追加されてる。

2号は分析と通信特化。 1号から受信したデータを分析して、

行動予測と推奨される対応を送信できる」

「……それ。2号が使えないのは致命傷なんじゃねーのか？」

小夜叉からツツコミが入った。

九十郎は盛大に目を逸らしながら小さく「まーな」と呟いた。

「では洗脳の防衛は？」

「一応は使えるが、完全じゃねえ。

酸素濃度やら脈拍やら脳波やら神経伝達物質やら、

色々な生体データを洗脳対策に応用しているから、

本来の持ち主が使ってる時よりもいくらか割り引いて考えろだ」と

「いくらか割り引きを……とはいえ、今はこれに頼るしか……」

詩乃がぶつぶつと何かを呟きながら思索にふける。

たった1振りとはいえ、誰に対しても使える洗脳対策という切り札を前に、これをど

う使えば蘭丸に勝てるかを考える。

そしてしばらくして……はつと気づく。

「あの……本当に良いのですか？ 綾那さんで」

詩乃は蘭丸に『ただ勝つ』事だけを考えていた。

しかししばらく考えている内に気付いたのだ。

今日の前にある1振りの『剣魂』は蘭丸の常識改変を防ぐ。

常識を改変され、誰かも分からぬ男に股を開くのをたった1人だけ阻止できるという事だ。

つまり、これを綾那に渡すという事は……

「犬子さんや柘榴殿は……」

これを綾那に渡すという事は……九十郎の嫁が誰か他の男に抱かれる事を容認するという事だ。

「だが客観的に、綾那が持つのが一番勝率高い」

九十郎は詩乃の声を遮るように言った。

そんな事はとつくの昔に気付いていると、言外に伝えようとしていた。

「もう一度言うが、味方が洗脳されたら、すぐさま剣魂持ちと糞ニートで蘭丸に特攻。

それで……それで1秒でも早く蘭丸をブチ殺して、

犬子や柘榴がやられる前に全てを終わらせるしかねえ」

そんなに上手くいくのだろうかという疑問は、詩乃にも、綾那にも、九十郎にも嫌でも思い浮かぶ。

「それに誰かがポータルを守らねえといけない。

頭の中身を書き換えられても、エロ行為以外何もできなくなっても、

身体を張って時間を稼ぐ程度は……でき……できる筈だ……」
そう告げる九十郎の声は震えていた。

想像すればする程、激しい怒り、吐き気も含めた嫌悪感を覚えずにいられなかった。
思わず両腕に力が入り、ワナワナと震えていた。

「頼む綾那、俺達と一緒に切り込み役、引き受けてくれねえか？」

俺が知る中じゃお前がぶつちぎりの最強だ。

お前が来てくれれば、きつと蘭丸にも勝てる。

素早く処理できれば、犬子や柘榴が助かる可能性も……ある、筈だ」

「綾那にそんな大役を……」

綾那は少し震えていた。

普段の綾那なら『大暴れしてやるのです』とでも言っつて、二つ返事で引き受けていた
だろう。

だが今……綾那の指の傷がずきずきと痛んでいた。

この大一番で、この大役を任せられる直前の怪我が、まるで神仏からの警告のように
感じてしまう。

『引き受けてはいけない』『戦っつてはいけない』と警告されているかのように感じてしま
う。

「ああそれと、詩乃と小夜叉は逃げてても良いぞ。

綾那に手伝ってくれと言った直後に何だが、決着は越後長尾家の者でつける。

詩乃も小夜叉も、成り行きで手伝ってるだけだから……」

「……はあつ？ ふざけんな俺も参加すんに決まってるんだろ！」

小夜叉がさも当然といった様子で言い返す。

「槍の使い方忘れようが関係ねえ。喉笛に噛みついてでも蘭丸を殺つてやるよ」

「それができりや苦勞しねえつて……いや、お前だと普通にやりそうで怖い」

「ならば私は、身体を張つてぼおたるを守る方でしょうね。」

槍や弓矢は不得手ですが、その……あの、要するに男女の……

「ご、ごほん、あつちの経験は多少ありますので」

詩乃もまた、顔を真っ赤にしつつ自ら参戦を宣言した。

「いや分かつてんのかお前ら！ そりやつまり……剣丞以外とだな……」

「時間稼ぎ役は1人でも多い方がよろしいでしょう？」

詩乃も小夜叉も、一步も引かないという強い意思を感じる眼差しを九十郎に向ける。

一方綾那は、メンタル的な部分が絶不調そのものである。

「そんな事より九十郎さん、現在の状況と作戦、犬子さんには伝えないのですか？」

「いや……それは……」

九十郎は苦々しい顔で回答に窮する。

「秘密保持のために？」

「まあ……そうなるな、状況が広く知られたらまず間違いなく末端が逃げる。

だから……いや、だが……」

「1人か2人だけなら、何かしら理由を付けて別行動をさせる事は可能では？」

「まあな……いや、だから問題なんだ。

1人か2人逃がせば、3人、4人と逃がしたくなる。

そうこうしてる間に10人、20人と逃がすようになって……」

「数を集めて蘭丸を疲弊させる作戦が破綻しますね」

「そしてポータルを守る奴も減って一点突破される訳だな」

詩乃と九十郎の間に再び重苦しい沈黙が訪れる。

いつそ洗脳される前に剣魂持ちと新戸だけで切り込んではおも思ったが、敵の現在位置が正確に分からなければ机上の空論だと気づいて再び黙った。

「しかし……だとしても、犯される事は回避できないとしても、腹は括れます。

覚悟はできます。今の内に伝えた方がよろしいでは？」

「……教えるべきかな、やっぱ？」

……

.....

.....

「じゃあ犬子は逃げるから後は頑張ってね」

約1時間後、状況の説明終了と同時に衝撃発言が飛び出した。

「おいしいiiiiiiiiっ!?!」

「ちよ、犬子!?! そりゃ無いっすよ!!」

「え、何!?! 犬子今変な事言った?」

あまりにも予想外の宣言に柘榴と九十郎に衝撃を受ける。

柘榴と九十郎は、犬子も自分と一緒に戦ってくれるものとばかり思っていたのだ。

「ちよ、ちよつと落ち着こう。一旦時間を置こう。」

犬子のさっきの発言は一旦忘れて他から行こう。

柘榴、お前は逃げ……逃げないよな? 逃げないと言ってくれるよな?」

「ちよつと九十郎っ!?! 犬子の時と聞き方が大分違うよ!」

さっきは『逃げてても良い』って言ってたよね!?!」

「逃げてても良いと言われて本当に逃げるヤツがあるかあっ!!」

「逃げてても良いって言われたら普通は逃げるよ! ねえ柘榴!!」

「いや、柘榴は逃げねーっすけど」

「嘘おっ!？」

「良く言つた柘榴! ありがとう柘榴! 信じてた……」

いや、後々の事考えると全然良くねえけどとりあえず良く言つてくれたぞ柘榴おっ!!」

「ひ、一二三は!?! 一二三は逃げるよね? こういう時逃げるつて言うよね?」

犬子おかしな事言つて無いよね!?! ねえつ!?!」

犬子が思わず一二三に助けを求める。

どうやら犬子にとって一二三は、こういう時に逃げそうなキャラだと思つていらしい。

「いや、逃げないね」

しかし、一二三はバツサリと切り捨てた。

尤も、一二三は以前蘭丸に襲われ洗脳されており(第137話)、蘭丸が最大限有利になるよう立ち回るよう操られている以上、ここで逃げるといふ選択肢は出ない。

犬子、柘榴、一二三の3人の……九十郎から最悪極まる状況を説明された全員の意見が出揃つた。

とりあえず逃げたがつているのは犬子1人だけのようだ。

「良おし、心の準備ができた。 もう一回犬子の話に戻すぞ……」

犬子でめえ何一人だけ逃げようとしてんだよっ!? 恥ずかしくねえのかよっ!?」

「さっき逃げてても良いって言ったじゃない!?」

「まさか本当に逃げるとは思ってたんだよ!! てかお前本当に前田利家かよ!」

お前本当に史実ネームドなのかよ!? ノータイムで逃げる宣言すんじゃないやねえよっ!!」

「逃げるな卑怯者!! 逃げるなア!!」

「お前もノータイムで鬼○ネタ挟むんじゃないやねえよ一二三い!!」

本当に戦国時代の人間かよっ!」

なお、一二三が鬼○の刃を知っている理由は光璃が持ち込んだタブレット型端末に入っていた漫画データである(第147話)。

「いや、待てよ……前田利家、だったんだな……」

……と、ここで九十郎が何日前に読んだ日本史の情報を思い出す。

「え、何? 犬子が前田利家だと何か拙いの?」

それなら今すぐにもも返上したいんだけど、前田利家」

「本能寺の変で織田信長が死んだ時にな、後継ぎ……じゃない、

当時織田家の当主だった長女も一緒にくたばったんだ。

それで織田家を誰が継ぐのかでモメた」

「まあ、良くある話と言えば良くある話っすね」

「その結果な、秀吉……ひよ子と柴田勝家との間で戦争になった」
「うん？ 何でひよ子が壬月様と戦争してんの？」

あの2人が戦うところ想像できないんだけど」

「その辺は良く知らん」

「目玉焼きにかける調味料が合わなかったんじゃないかな？」

「ひよ子が一方的に譲歩して戦争にならないと思うけどなあ……」

「戦争の結果ひよ子が勝つ」

「勝つの!? 無理でしょ！ 絶対無理でしょそんなの!？」

ひよ子が壬月様に勝つところ全然！ 全く想像できないんだけど!!」

「その辺も良く知らん」

「目玉焼きに毒でも盛ったんじゃないかな？」

『『死因：目玉焼き』なんて歴史書に残されちゃたまんねーっすね」

「趙思温って將軍は隕石が直撃して死んだって歴史書に書かれてるらしいね」

「え、マジで？ 出典、民明書房じゃねえよなソレ？」

「九十郎、話が逸れてるっすよ。さっき言ってた戦争に前田利家も関わってるっすか

？」

「敵前逃亡した」

……九十郎の衝撃発言に場が凍りついた。

「く……九十郎、犬子正直今の言葉聞かなかった事にしたいんだけど、

したいんだけど……ええつと、ごめん、聞き取れなかったからもう一回言つて」

「お前、思いつきり敵前逃亡してるんだよ。

織田家の将来つていうかニホンの未来を決める大戦で。

しかもそれが原因で柴田勝家が負けてる」

「聞き間違いじゃなかったあ?! 犬子歴史書に敵前逃亡つて書かれてるの?!」

「き、きつと犬子にも深い事情があつたつすよ。きつと」

「とりあえず Wikipedia には何も書かれてなかったな」

「目玉焼きの調味料が合致したんじゃないかな」

「それだつとやっぱ『死因：目玉焼き』つて歴史書に書かれるつすね」

「ねえ九十郎、確かひよ子つて最終的に天下人になるんだよね?」

「まあ、そうだな」

「さつき言つてた戦いつて、日ノ本の未来が決める重要な戦だつたんだよね?」

「そうだな」

「犬子の行動が原因で壬月様が負けたんだよね」

「腹搔つ捌いて内臓を掴んで投げたつてよ」

「犬子が加賀に100万石貰ったのってその時の裏切りの報酬なんじゃ……」
犬子達の間に物凄く気まずい沈黙が漂った。

「……という訳だ犬子、今更前田利家要素を出さんでも良いんだぞ」

「という訳ってどういう訳!? 今の話必要だった!？」

犬子無駄に貶められただけなんだけどっ!? いやそもそも……そもそも……」

犬子の目尻が涙で滲む。

「……柘榴はどうして逃げないの？」

聞いたでしよ、九十郎以外の男の人にえっちな事されちやうんだよ?」

「そりゃ……そりゃあ、嫌かどうかって話なら普通に嫌つすよ。

でも御大将を置いて自分だけ逃げるのはもつと嫌つす。

知らねえ男に股開いて戦に勝てるなら……」

「……犬子は嫌だよ」

端的に、正直に、率直に犬子は告げた。

それは紛れもない犬子の本心だ。

「頭の中を弄られて、好きでも無い人に身体を許すなんて経験、二度と嫌だよ」

それは犬子にとって拭いきれない悪夢のような記憶である。

それは犬子にとって最悪の記憶である。

犬子がかつて、九十郎と恋仲になった記憶を一時的に消され、訳も分からぬ内に新田劍丞に抱かれた事があるのだ(第74話)。

「だからこそ、柘榴は戦いたいです」

「……え？」

そして柘榴からの返答は、犬子にとって予想外の言葉だ。

「他人の頭の中を好きに弄って、本当の愛がどうだのこうだのと言って、

しかも織田家の連中を誑かして、けしかけてこつちの妨害までしようって奴で……

もしかしたら犬子があんなった犯人かもしれねーっす。

そんな奴の好き勝手にはさせねーっす」

「だからって戦い方が酷すぎるよ！ 美空様のために戦うのは良いよ！

戦国時代を終わらせるために戦うのは良い！ 戦って怪我しても良い！

ううん、死ぬ事だって覚悟はしてる!! でも……」

「でも……何っすか？」

「……敵を疲れさせるために超能力をくらう役つてのは流石に嫌だよ。

しかもよっぽど上手いかなない限り、そのまま知らない男に抱かれるんですよ。

それも嫌だよ、やっぱり」

「とりあえず死なねーって点は間違い無いっすよ」

「死ななきや良いって訳じゃないよ!!　いつそ死んだ方がマシだよ!!」

犬子と柘榴が睨み合う。

犬子も柘榴も今にも泣きそうな表情をしていた。

犬子も柘榴も、洗脳能力を積極的に使い、他人を好き勝手に操る蘭丸と戦いたいという気持ちがある。

犬子も柘榴も、愛する夫である九十郎以外の男に抱かれる事への強い抵抗感がある。「兵達にだけ辛い役目を押し付けて、自分だけ逃げる訳にはいかねーっす。

御大将が命がけの大勝負をしようって時に、自分だけ逃げる訳にもいかねーっす。

だから……」

「……だからって!!」

逃げたい理由を天秤に乗せて、逃げられない理由も天秤に乗せて、傾いた方向は違っていた。

そして同時に、犬子の天秤は揺らぎつつあった。

柘榴や九十郎、美空達だけを戦わせて、何も知らない、何も教えられていない名も無き越軍の将兵達だけを戦わせて、自分だけが逃げる事への罪悪感が重なり、逃げられない理由の重みを増幅させているのだ。

「おい一二三、お前は何か無いのかよ。今の犬子に対して何かよ」

九十郎が一二三にそつと耳打ちをする。

「え？ 逃げちやえば良いんじゃないかな。 1人や2人なら誤差の範囲じゃないか」

「それは……いや、まあ、そうなんだがな……」

そして九十郎はふうつとため息をつく。

確かに一二三の言う通りなのだ。

確かに犬子1人逃がしたところで、作戦の成否はたぶん変わらない。

いやむしろ、犬子の心の平穩の為に逃がした方が良いように思えた。

だが……

「大多数は何も知らねーまま、逃げるかどうかを判断する機会も無いまま、

思い切り巻き込むってところがな……」

「そこはまあ、心に柵を作ろうじゃないか」

「だが……な……」

「それなら君が少しでも早く蘭丸を斬れば良い。

前戯をしている間に斬ってしまえば、挿れられるのだけは避けられるんじゃない？」

「絶対、対策してると思う……剣丞も同じ事考えて失敗してるしな……」

すぐに弱気になる頼りにならない九十郎である。

「剣魂持ちは君、ザ・ニュー御屋形様、徳河吉音殿、綾那の4人、

それに蘭丸と同じ鬼子の新戸、御家流で洗脳を跳ねのけられる美空殿、単純計算で戦力6倍じゃないか。それにあの竹中半兵衛殿の秘策もある」

「お、そう言われると段々どうにかかなりそうな気がしてきたな……」

そして乗せられやすい九十郎である。

この男は本当に成長が無い奴である。

「九十郎お!!」「九十郎お!!」

そんな会話をしていると、突然犬子と柘榴が同時に九十郎に詰め寄って来た。

「絶対勝つてよ九十郎!」

「ポータルは柘榴達が全力で守るっすよ!」

「遅くなったら犬子達えっちな事されちゃうんだから!」

勝つだけじゃなくて、早く勝つて犬子達を絶対に守つてよ!!」

「え、いや……犬子お前、さっきは逃げるって……」

「逃げたいよ! 正直今でも逃げたいに決まってるよ!」

でも頑張るから、逃げずに頑張るから絶対に犬子を守つてよ九十郎お!!」

そう言いながら九十郎に詰め寄る犬子であったが、その目には涙が溜まっていた。

基本愚鈍な九十郎であったが、犬子が本当は逃げたいのだと、本当は怖いのだと察する程度の知能はあった。

そして九十郎は……

「……犬子」

「うん」

九十郎が犬子の名を呼び、手を伸ばした。犬子はそつと自らの手を九十郎に重ねた。

「柘榴」

「おーつす」

九十郎が柘榴の名を呼んだ。

柘榴が犬子と九十郎の手をぐつと掴んだ。

「あと、ついでに一二三」

「ついでが無ければ感動してたかもね」

そうは言いつつも、一二三は少し照れ臭そうに笑い、犬子と柘榴と九十郎の手の上に自分の手を重ねた。

犬子と柘榴と一二三と九十郎の手が重なった。

お互いの手を重ね合い、握り合い……互いに頷きあった。

「お前達は俺の女だ、他の誰にも渡さねえ」

九十郎が宣言する。

「お前達は俺が守る、必ず守る」

九十郎がそう誓う。

「俺は必ず……蘭丸に勝つ！」

九十郎が勝利を誓う。

「信じるよ、九十郎」

「頑張れっす、九十郎」

「まあ、本気で困った時は力を貸すから、気楽にやりなよ」

犬子が、柘榴が、そして一二三が九十郎の手を強く強く握り返した。

犬子と柘榴と一二三と九十郎が、勝利を誓い合った。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第157話『開戦』

小波と姫野が越軍の陣屋に駆け込んで来た日から数日後の真夜中。

美空と光璃は蘭丸の襲撃への備えとして、同時に蘭丸戦後の江戸城攻略のため、駿河の鬼との戦いで傷ついた軍の再編を急いでいた。

恐るべき洗脳能力を有する鬼子・蘭丸と、蘭丸に洗脳されて手駒となった織田軍の動向を掴もうと何度か物見を放っているが、戻って来るのは『織田軍は見つかりませんでした』という報告ばかり。

本当に見つからないのか、実は別方向に進んでいるのか、それとも物見が洗脳されて嘘の報告をさせているのか……先の見えない状況に美空は苛立ちつつあった。

そんな時の事だ……

「……そういえば、アンタ剣丞とどうする気なの？」

書類仕事の手を一時止めて、美空が光璃にそう声をかける。

移り気で根気の無い美空に集中力の限界が来たのだ。

「どっ……どっ……」

「どうって、アンタも新田劍丞お嫁さんだったんでしょ？」

離縁したって話も聞かないから、今でも……」

「武田晴信は死んだ、もういない。」

今の私は大江戸学園甲級二年は組の武田光璃、それ以上でもそれ以下でもない」

「んん？ 要するに別人って事？」

でも武田晴信だった記憶があつて、自覚もあつて、見た目もそっくりじゃない」

「そんな事は無い、今の光璃は○7歳、スキンケアも欠かさないピチピチたまご肌。」

スキンケアの『ス』の字も知らない40歳のズタボロ肌とは訳が違う」

何かあてつけのようなセリフに、美空は思わずイラツとした。

「やっかましいっ!! ええそうよこちとら今年で30歳よ!」

若い頃程跳んだり跳ねたりできないし、

すぐ息切れするし肌の手触りも年々悪くなってるわよ!」

「くくく……棚ボタ、圧倒的棚ボタ……望外の幸運、人類の夢、若返り……」

光璃が自慢げに胸を張った。

意外と豊満でハリのある乳房が美空の目の前でプルンと跳ねる。

「そうじゃなくて、こう……心情を聞きたいのよ」

「NDK? NDK?」

「言葉の意味は分からないけど多分違うわ」

「シヨボーン（・・ω・・）」

「妙な顔芸ではぐらかさないの。良いからちやちやと吐きなさい。

劍丞の目の前で九十郎に抱き着いてキスしたって、雫から聞いているのよ（第144話）。

何考えてるのアンタ？ 生きてた頃は劍丞とは決して険悪では無かった……

いえ、むしろ懇ろな間柄だったと聞いているわよ。なのに今の貴女はむしろ……」

「……それ以上は言わなくて良い」

光璃が美空の言葉を遮った。

美空は一瞬だけ怯むが、すぐに光璃を睨み返して喋り続ける。

「茶化さないで答えなさい。貴女は新田劍丞をどう思っているの？

劍丞をどうしたいの？ 劍丞とどんな関係になりたいの？」

さらに美空が光璃に詰め寄る。

他人のデリケートな場所に土足で踏み込むかのような態度に光璃がむっとした表情になる。

だがしかし、美空は一切退く気が無い様子だった。

そのまま十秒か睨めっこのように不機嫌な表情で睨み合う。

「……答える必要は無い。と、言ったら?」

「そりやあ拷問してでもなんて言う気は無いわよ、流石に。でもね……」

「でも?」

「私はね、不本意ながら、物凄くものすつごく不本意ながら、

一応は剣丞の嫁の一人つて事になってる。それは知つてるわよね?」

「まだ離婚していなかった?」

光璃が意外そうな顔をした。

「言われなくてもそうするつもりよ。」

いずれ時期を見て、何かしら適当な理由をつけて、理由が無ければでっち上げてでも。

今の所越後からの無断外出位しか理由らしい理由が無いから思い留まっているけれ

ど」

「判例上、別居期間が5年を越えた辺りから裁判所は婚姻関係の破綻を認定しやすい」

「それ、九十郎のいた世界の話?」

「民法第770条、夫婦の一方は、次に掲げる場合に限り、

離婚の訴えを提起することができる。一つ、配偶者に不貞な行為があつたとき。

二つ、配偶者から悪意で遺棄されたとき。

三つ、配偶者の生死が三年以上明らかでないとき。

四つ、配偶者が強度の精神病にかかり、回復の見込みがないとき。

そして五つ、その他婚姻を継続し難い重大な事由があるとき」

「離婚の訴えって……？ 誰かに離婚させてくれって頼みに行かないといけないの？」

「離婚できる、できないを判断する専門機関がある」

「きかん……良く分からないしあんまり知りたくないけど、やな連中ねそれ」

「かもしれない」

なお、当然ながら光璃は家庭裁判所に関わった事は無い。

現代ニホンにおいては光璃と劍丞は婚姻関係はなく、仮に離婚の訴えを起こしても前提事実が存在しないため却下（民事訴訟法140条）されるだろう。

光璃が民法の離婚の条件を暗記するのは、暇な時に気になつて調べたからだ。

「まあとにかく、私は今現在新田劍丞の嫁つて立場なのよ、一応は。

貴女だつて本来はそうでしょ。なのに九十郎が好きだつて、

よりにもよつて劍丞の目の前で宣言してキスマでしたつて、雫も混乱してたのよ」

「2人の後継者候補を戦わせた時に、

公衆の面前で九十郎が好きだと叫んだと報告を受けている」

「……うぐ、また随分と細かい所まで調べてるのね」

割と痛いところを衝かれ（第76話）、美空が思わず言葉を詰まらせる。

「高々既婚者になつた程度の障害で、長尾景虎が欲しい物を諦めるとはとても思えない。光璃は武田信玄、長尾景虎と戦つた経験だけは他の誰よりも多いと断言できる。

だからこそ分かる。貴女は今でもなお、斎藤九十郎の事を愛している……違う?」
凶星を衝かれ、美空は自身の心臓が驚掴みにされたかのような錯覚を覚えた。

「ちが……ち、ちが……ああもうっ! 違わないわよ!」

ホントに腹立つ奴よねアンタって!!」

美空が顔を耳まで真つ赤にしながらそっぽを向いた。

その態度で美空が九十郎をどう思っているのかは明白だろう。

「私はちよつとした成り行きと言うか、交渉の結果と言うか、

後先考えない大言壮語のツケを支払う羽目になつたと言うか、

まあとにかく、劍丞と愛し合つた結果で夫婦になつた訳じゃないわ。

でも貴女は違う……そうよね?」

今度は光璃の方が痛いところを衝かれる番だ。

「愛してた……それは否定できない」

「愛してたねえ、それはどういふ心境の変化なの?」

「……………」

光璃は無言になる。

無論、答える必要は無いと突っぱねる事はできた。

できたが……長尾景虎は戦国時代における自身の最大最強の敵、戦国時代の自分を殺害した憎いアンチクショウだ。

そんな憎いアンチクショウが、自身と同じ男性を愛し、新田劍丞の妻という自身に類似する立場に置かれている事に、光璃は奇妙な運命を感じずにはいられない。

「愛してた、光璃は新田劍丞を確かに愛していた。 だけど17年……17年が経った。

その17年で新しい出会いが沢山あった、ドロドロとした殺し合いの日々は無く、キラキラと光り輝く青春の時間があつた。

そして……17年の間に、光璃が劍丞の事を思い出す時間はどんどん減っていった。

そしてある時、光璃は……自分が九十郎の事を愛している事に気がついた」

「考えてみたら意外とモテる奴よねアイツ、筋肉達磨のブ男の癖に」

「一般受けはしない顔、だけど慣れれば愛嬌のある顔」

「ふふ、強烈に印象に残る顔ではあるわね」

「光璃は九十郎を愛している事に気がついた。

気づいてすぐに九十郎に愛していきなすと伝えるのは、劍丞に悪いような気がした。

劍丞は大勢いる妻の1人としてではあつたけれど、光璃を本気で愛そうとしていた。

劍丞には何の落ち度も無い。 だけどそうして迷っている内に……九十郎が死んだ」

九十郎が命を落とした日の事は今でも鮮烈に記憶している（第27話）。

後で徳河早雲がナノマシン技術を悪用して起こした殺人であり、同時に九十郎の魂を戦国時代に送り出す陰謀であった事が判明したが、当時は嘆き、悲しみ、取り乱し、食事さえ喉を通らない状態になっていた。

当時の事を思い出すと、今でもなお早雲への怒りと憎しみで気が狂いそうになる。

「光璃は泣いた、そして強く強く後悔した……」

「こんな事になるのなら、もっと早く九十郎に愛していると伝えれば良かったと」

「だからこつちの世界にまで追いかけて来たの？」

「……それもある」

光璃はその時、どこか怯えたような様子で空を見上げた。

「それもある、けれど……最大の理由は、怖かったから」

「怖かった？ 何が怖かったのよ？」

美空がなんのこつちやと首を傾げる。

「九十郎が戦国時代で……」

「精確に言えば、戦国時代に酷似した異世界に生まれ変わり、生きていると知った時、

光璃は嬉しいと思うより先に、恐怖を覚えた」

「だから何が怖かったのよ？」

「光璃は17年で愛する男性の事を忘れて、他の男性を愛するようになった。

17年……たった17年で……それと同じ事が九十郎にも起きるかもしれないと思つた。

もしも次に会つた時、九十郎が光璃の事を忘れていたら、

もしも見知らぬ他人と同じように見られたら、きつと光璃は気が狂つてしまう、

きつと光璃は頭がおかしくなつて心が壊れてしまう……そう思つた」

「何言つてるのよ、九十郎は貴女の事、全然忘れちゃいなかったわよ」

美空は九十郎が戦鬪中に信虎に斬りかかつて来た事を思い出す（第131話）。

あの時は何の確証も無い状態で、『光璃かもしれない』程度の認識だというのに、少しも躊躇せずに味方に凶刃を振るうのが斎藤九十郎という男である。

だからこそ美空には分かる、それが男女間の愛情なのかどうかはともかく、九十郎は今でもなお光璃の事を大切に想っているのだと。

「（私が危うい時も、全部を投げ出してでも助けに来てくれるのかしらね……

あーあ、ちよつと嫉妬しちゃうわね）」

絶対に口には出さないが、美空は心の中で光璃を羨んでいた。

「九十郎は変わつていなかった。今も変わらず光璃に暖かい目を向けてくれた。

今も変わらず優しく抱きしめてくれた。

『愛してる』と伝えても拒絶はしなかった……できれば抱き返してほしかったけれど」

「あら、とつくの昔にくんずほぐれつだと思ってたけど、

まだえつちな事はしてなかったの？」

「……残念ながら」

美空は光璃の目の前でガッツポーズをして、光璃はそんな好敵手の態度に舌打ちをした。

「じゃあ最初の質問に戻るけど、アンタ剣丞の事はどうする気なの？」

「それは……」

光璃は再び言い淀む。

光璃が何かを言いかけ、口を閉ざす。

何か奥歯に引っかかったかのような態度に、美空はやれやれと頭を押さえた。

「……分かっているとと思うけれど、次の戦いは容易なものじゃない。

そんな煮え切らない態度で後悔しても知らないわよ」

美空が頭を押さえながらそう告げる。

「蘭丸が剣丞隊を蹂躪した時と同じ戦法を使うかどうか分からないけれど、

もし使ってきたら酷い事になるわね。

私以外のほぼ全員が望まない相手を抱いて、抱かれて、犯して、犯されて……」

「勝てばそれで良い、勝利のために何かを喪う事自体は戦国時代……

現代ニホンにおいてもままある事、珍しくも何とも無い。

喪うものが人命、名声、金子ではなく、大勢の人間の貞操に置き換わっただけ」

光璃は当然の事だとばかりにそう告げる。

非常に、冷酷で、残忍な言葉ではあるが、それは確かに武田信玄の本心からの言葉である。

「後で色んなところから恨み言をいわれそうね」

「俺じゃない。あいつらじゃないの？ 知らない。済んだこと」

「あれ、まさかとは思うけど全責任を私に押し付ける気？」

「責任者は貴女、光璃ではない」

美空は『さっきの仕返しかコンニャロウ』とばかりに苦虫を嘔み潰したような顔になり、光璃は意地悪な笑みを浮かべた。

「でも問題は……あまり考えたくない事だけれど、負ける……負けるかもしれない……

ええ、この際だから率直に言わせてもらおう。

「この戦いは全力で挑んでもなお相当不利な戦いになるわ」

『負ける』という言葉を口にした瞬間、光璃の顔から笑みが消えた。

「本当は剣魂っていう洗脳を防御する武器をもう何十本か入手してから戦いたかった。

そうじやなきや軍団を丸ごと洗脳してくる相手と戦うなんて絶対にやりたくない。一応考えられるだけの対策は取っているけれど、それでも……

それでも、勝てるとは断言できない。もし負けたら、私達も剣丞隊のように……」蘭丸との戦いで剣丞隊がどうなったかは、小波と姫野から報告されている（第153話）。

戦闘Ⅱセックスだと思ひ込まされ、何の疑問も抱かずに見知らぬ男に股を開き、自分をイカせた男に完全服従する羽目になるだろう。

それを想像するだけで、美空も光璃も吐き気と寒気で身震いする。

何より恐ろしいのは頭の中を書き換えられ、それを恐怖だと感じれなくなってしまう事だ。

「それでも私は戦う、他人の頭の中身を好きに覗き込んで、

好きに弄るような奴に頭を下げて慈悲を乞うなんて絶対に嫌。

そんな事をする位ならいつそ死んだ方がマシよ」

「それに関しては光璃も同じ。それがどれだけ素晴らしい考えなのだとしても、

他人を洗脳して自身の意見押し通そうとする者に賛同はできない。

例えどれだけ愚かな考えであっても、だれかに強要された思想に比べれば、

それが自身の心の内側から染み出たものであるならば万倍マシだと光璃は思う」

「でも本当はね、蘭丸が来る前に九十郎に抱いてもらおうかとも考えていたのよ。

勝ったけれどもハジメテは誰か別の男に捧げた後でしたなんて事になったら、きつと後悔するから……」

「……そうしなかつた理由は？」

「それは単純に忙しかつたのよ。」

やるべき事が山積みでとてもそんな時間を作れなかつたわ……」

「m9（＾∩＾）プギャーwww」

「言葉の意味は分からないけど超腹立つわねその顔おつ!!」

そう言うアンタはどうなのよ!?

九十郎とキスしたって聞いたけど、その先には進んでるの!?

美空からの反撃に、光璃の顔から笑みが消えた。

「まだ何も……」

「ほら見なさいよ!」

他人の顔を指さしてゲラゲラ笑ってるアンタも私とたいして変わらないじゃないの

!」

「それは……剣丞が……」

「剣丞?」

「劍丞が美男子だったから、光璃のおぼろげな記憶の中の劍丞よりもずっと」と

「まあ、顔が整っているのはそうよね……って、アンタまさか!」

「光璃はかつて、確かに新田劍丞を愛していた。」

それは17年の時間の中で色褪せて、忘れ去って、自分の中で折り合いをつけて、決着をつけていた筈だった。 筈だった……なのに……」

「まさかとは思うけれど、アンタ劍丞に惚れ直したなんて言わないわよね?」

そう尋ねられて、光璃は即答できなかった。

顔をしかめ、眉をしかめ、肩を強張らせてワナワナと震え、奥歯を噛み締めて……ようやく次の言葉を口にする。

「そうは言わない……言わないけれど……劍丞の顔を見たとき、劍丞の声を聞いた時、猛烈に嫌な予感があったのは確か。 だから……だから光璃は怖くなって……」

17年の歳月の中で劍丞を捨てて、自分に優しくしてくれた九十郎に乗り換えて、また劍丞に戻るなんて事になれば……

あまりにも……あまりにも破廉恥で、あまりにも惨めで、あまりにも悲しくて……」

「m9 (^ 皿 ^) プギャーwwww」

美空の顔を光璃のスタンドがぶん殴った。

「何で殴るのよ!?! さっきアンタも私を指さして笑ったじゃないの!?!」

「他人が真面目に悩んでいるのを嘲笑うな」

「率直に言つて超笑えるわ」

再び美空の顔を光璃のスタンドがぶん殴った。

「二度もぶつた！ 親父にもぶたれたことないのに！」

「おお、流れるようなガ○ダムネタ……」

忘れてる方もいるかもしれないが長尾美空景虎は生まれも育ちも戦国時代である。

「まあ要するに、また劍丞が好きになりそうで困つたつて事ね。」

良いじゃない、自分の心に正直になつてそのまま劍丞のトコに行きなさいよ」

三度美空の顔を光璃のスタンドが……ぶん殴る寸前に美空の御家流で呼び出された毘沙門天がガードした。

「私闘に毘沙門天を呼びつけるとはバチ当たり」

「アンタだつて武田の祖霊を気安く呼びつけるんじゃないわよ！ それも3回も！」

見なさい、おでこにタンコブできてんのよこっちは！」

美空と光璃がぐぬぬつと齒齧みをしながら睨み合う。

「……ねえ、やめない？ こんな時にいがみ合うのは時間と体力の無駄よ」

「……同感、光璃達には時間が無い。 蘭丸と接触する前にできる事はまだある」

美空と光璃がやれやれとため息をつきつつ、書類仕事に戻る。

時刻は早朝、東の空が多少白み始めた頃。

『また睡眠不足になるなあ』と考えつつ美空はその日も仕事に忙殺されて……

……いくかと思われたその時、光璃の剣魂から警報音が鳴り響く。

「三・昧・耶・曼茶羅ああああーっ!!」

次の瞬間、美空の周囲に暴風が吹き荒れる。

まるでナパーム段が直撃したかのような熱量と重圧。

それは美空が自身の御家流・三昧耶曼茶羅を自分の脳天に叩き込んだ余波である。

三昧耶曼茶羅の応用版『神降ろし』。

自身が洗脳や催眠を喰らった瞬間、脊髄反射的に自分自身に三昧耶曼茶羅を撃つように訓練した。

その原理は一言で説明すれば洗脳の上書きである。

「え……? あれ? 神降ろしが発現した!？」

って事は誰かが私に洗脳か催眠の能力を使ったって事!？」

突然の異常事態に美空が驚き慌てる。

神降ろしの発動はあくまで条件反射、脊髄反射的な行動であり、洗脳を意識・認識しての行動ではないからだ。

「剣魂がテレパシーに似たサイキックウェーブを感知してブロックした。

パターン解析……間違いない、遠隔地からの洗脳。それもかなり強力かつ広範囲」

「つて事は……」

「まず間違いなく……」

「森蘭丸が近いっ!!」

美空と光璃の見解が一致する。

そして蘭丸が近いとすればグズグズはしていられないという認識も即座に一致する。

「光璃は今すぐ九十郎達を起こして！ 私はポータルの防御を指示してくるわ！

どうせ洗脳されてるだろうけど時間稼ぎくらいはできるでしょ！」

「洗脳の内容が戦闘行為に関する常識の書き換えとは限らない、警戒して」

「分かっているわ、万が一味方が襲ってきたらそのまま戻る」

そう言うのと美空はポータルの保管場所へ、光璃は九十郎達の待機場所へと駆け出した。

蘭丸が近くまで来ているという事は、ほぼ間違い無く蘭丸に洗脳された織田軍も近く

まで来ているという事である。

のんびりしている時間は一切無い。

そして……

「……分かつちやいたけど、神降ろしは負担がでかいわね」

光璃が十分に離れたのを確認してから、美空はそう呟いた。

神降ろしは元々、自身が洗脳されるという非常事態に備えての緊急手段である。

燃費や持久性といった要素はハナツから度外視された技術である。

それ故に……

「戦いが終わるまで保たない……九十郎達の戦いについて行けるのは途中まで。

その後はきつと……」

そんな美空の呟きを聞いた者は誰もいなかった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第158話『グングニル』

……時は少し遡る。

美空と光璃が劍丞と九十郎についてあーだこーだと言いついて合っている時、新田劍丞は数名の護衛と共に真夜中の山道を歩いていた。

「本当に……本当にこれで良いんだらうか？ 本当にこれが正しいやり方なのか？」

劍丞が自問自答をしながら道を行く。

劍丞が本当に何度も何度も自問自答を繰り返しながら道を行く。

護衛が持つ小さな小さな松明の明かりを頼りに、暗い暗い先の見えない道を行く。

劍丞の視線の先に見えるものは、闇、闇、闇だ。

「くう……すやすや……」

一方、森蘭丸は劍丞に背負われてぐーすかと寝息をたてていた。

恐るべき洗脳能力を持つ鬼子であっても、睡眠中は基本的に無防備だ。

他人の心を読み、自身に対する敵意や殺意を敏感に感知する蘭丸でも、睡眠中なら簡単に殺すことができる。

「（今ならきつと殺せる……殺せるけど……）」

当然、劍丞にはできない。

全くの無防備に、自分を信頼して身体を預けてくる相手を殺すような真似は劍丞にはできない。

蘭丸含めた全ての超能力者は、能力を行使する際に尋常でなく脳神経を酷使する。

遠距離から数千人もの人間を同時に洗脳するような大規模な能力行使であれば猶更だ。

そして酷使して傷ついた脳神経を回復させる手段は、栄養のある物を食べて休む以外には無い。

蘭丸は劍丞隊との戦い以降、ごく僅かな食事時間以外は全て眠って過ごしていた。

眠っている間の世話は劍丞に任せて……

それはまるで『殺したくなったら殺しても良い』と告げられているかのようだった。

「(だけどここのままじゃ……このまま進めば……この娘は美空達を洗脳する。

戦争にやり方の認識を変えて、織田の軍勢と劍丞隊をけしかける。そして……)」

劍丞隊に起きた出来事が脳裏に浮かぶ(第153話)。

自分は普通に戦っていると思いい込みながら、だれかれ構わず犯し、犯され、絶頂すれば相手に絶対服従をさせられる。

人道的か、道徳的かどうかと問われれば、誰がどう考えても『NO』と答えるだろう。

そんな仕打ちを、これから越軍に押し付けるのだ。

美空が未来の武器を入手するのを止めるために……

「きつと正しいやり方じゃない、それは分かっている。

だけど美空のやり方じゃ戦国時代は終わらせる事は出来ても、その過程で人が死ぬ。

間違い無く人が大勢死ぬ……何の罪も無い人が大勢大勢死ぬ。

だけど蘭丸のやり方なら、とりあえず人が死ぬ事だけは……死ぬ事だけは……」

死ぬ事だけは無い、それは正しい。

だけどそれは、戦国時代に生きる全ての人々への侮辱のような気がした。

だけどそれは、この時代で戦争に参加し、命を落とした全ての人々を嘲笑う事のような

気がした。

お前の死は無駄死に、犬死になのだと否定する事のような気がした。

「悩んでいるのかな？ 劍丞」

そんな思考の袋小路へ入りかけた劍丞に声がかかる。

美しい声だ。

一声聞いただけで魅了され、発情しかかるといふような美しい声だ。

それはついさっきまで劍丞の背中で寝息をたてていた森蘭丸の声だった。

「……心を読んだのか？」

「いいや、君が持っている剣魂は今も機能している。

私の読心能力をしつかりと遮断してくれているよ」

なんでそんな事を聞いたのだろうか、剣丞は後悔した。

自分がまだ誰かの操り人形ではないと確かめたかったのだろうか、剣丞は思った。

「一体誰が、俺の正気を保証してくれるって言うんだらうな」

剣丞はここ数日悩み、悩み、悩みまくり、時々狂気染みた感情まで覚えつつあった。

「うーん……それは中々悩ましい質問だ。もちろん、私は剣丞を洗脳していない。

記憶も感情も常識も書き換えていない。

だけど洗脳してなければ正気って訳じゃないだらうし、

私以外に他人を洗脳できる能力を持つてる者がいないとも限らない。

ああそうだ、私が嘘を言っている可能性だってあるだらう」

「……真面目に答えないでくれ、悲しくなってくる」

「私から言える事は、洗脳された者は悩まない、迷わない、考えないだ。

そんなに険しい顔をしながら悩んで、迷って、考えている剣丞はきつと正気だよ」

蘭丸がニカつと笑う。

そのあまりに無警戒で、あまりに無邪気な笑みに、剣丞は思わず警戒心を消しそうになつてしまった。

「……俺はお前が嫌いだ。

他人の心を弄んでおいて、こうやって他人の心に寄り添うような素振りを見せる」
「そうかい、それは困ったな」

蘭丸は笑ったままだ。

劍丞の持つ『嫌い』という感情すらも愛おしいと感じているのだろうか。

「……だけど、できるだけ人が死なない方法を探し続けている所は評価してる」

蘭丸はちよつと照れ気味に視線を逸らす。

劍丞のような美男子から褒められるのは、人外である鬼子にとつても嬉しいものなのだ。
だ。

「さ、さあ〜つて、そろそろ目的地に着いた頃じゃないかな。

それじゃあ早速洗脳と行こうじゃないか」

若干照れ隠し気味に劍丞の背中から飛び降りると、蘭丸は精神を集中させる。

そしてできるだけ正確な越軍の数と配置を割り出そうと、一二三や夕霧にテレパシーを飛ばす。

「……うげ、この前逃げた忍者は行方知れずか。

これは本隊から離れて洗脳をやり過ぎして、奇襲狙いだろうな。

一応、それなりに護衛は付けてるけれど、これは警戒しないと」

最初に越軍の主要メンバーの位置を割り出した所で、蘭丸がげんなりとした表情になる。

姫野の読みは当たっていた（155話）。

蘭丸はその気になれば一瞬で他人を洗脳できるが、逆に言えば一瞬の時間は必要になる。

蘭丸に現在位置を知られないまま接近し、一瞬の時間すら与えずに致命傷を与える事ができたなら、蘭丸の恐るべき洗脳能力を無力化する事が可能なのだ。

「な、なあ……やはりこの方法はやめないか？」

いくら美空が人殺しをするのを止めるためでも、こんなやり方は……」

直前になって剣丞がそう声をかける。

一度は死人が出ないのならばやむを得ないと考えたが、それでも何か他の手段があるのではという思いは振り払えない。

「こんなやり方以外でどうやって止めるつもりだい？」

「そ、それは……」

「一応、念のためにもう一度言うけど、

1万人近い人数をいっぺんに洗脳するのは大変なんだ。

戦争には行きたくない、殺し合いなんてしたくない、異性と交わりたくない、

人間が原初的に持っている欲求に沿う形で思考を誘導してギリギリ可能なんだよ。

もっと穏当で、もっと人が傷つかないやり方があるなら喜んで受け入れるけど、そんな方法はあるの？」

そう言われてしまうと、劍丞は黙るしなくなる。

越軍はもうじき江戸城に辿り着いてしまう。

そうなればポータルが起動され、戦国時代と現代二ホンが繋がり、美空は現代の武器を大量に入手してしまうだろう。

そうなればもう、蘭丸でも止める事ができなくなってしまう。

全ての人々の生殺与奪の権が美空のものとなり、逆らうものは現代の武器で全て射殺される世の中になってしまいうだろう。

「美空は撃つと決めたら実際に撃つ。

大勢の死者が出ると分かっているもきつと撃つ。川中島の時のように……」

劍丞の脳裏に浮かぶのは、ドライゼ銃によって一方的に射殺され、次々と倒れ伏す甲軍の姿……川中島での出来事である（第128話）。

「美空は止まらない……言葉だけで説得はできない、放置もできない、それなら……

それなら人が死なないこのやり方が一番……」

「まあ、一番で無くとも比較的マシ、それで良いじゃないか。

もしかしたらもつと良い方法もあるのかもしれないが、今の私達にそれを探し続ける時間は無い」

「そう……だな……ああそうだ。すまなかつた、俺はもう迷わない。美空を止めよう」

劍丞が胸中にあつた迷いを振り払う。

『それでも』『それならば』『だがしかし』色々な言葉が頭をよぎるが、劍丞はそれらを心に作る棚にしまい込んだ。

そして蘭丸はさあやるぞと気合を入れ、越軍全体に戦争の常識を書き換えるサイキックウエーブを送ろうと精神を集中させ……

「やられたっ!？」

……と、叫んだ。

「何かあつたのか!？」

「数が多い! 数が多いんだよ! 何度数え直しても事前の情報よりも数が多い!!」

「か、数が多いだつて?」

劍丞の目の前で蘭丸が頭を抱える。

「良いかい劍丞、越軍は出発時点でおおよそ八千人、

駿河で鬼の大群と戦つて数を減らし、今は六千から七千くらいの筈なんだよ!」

「それが今日急に増えていたのか？」

「そうだよ！ 八千……いやもつといるな、九千に近いかもしれない！」

ああもう一体どんな手品でこんなに兵隊を集め……あ、集め……」

その時、蘭丸が絶句する。

事前に洗脳して越軍の動きを知らせる役目をさせている一二三からテレパシーを受け取ったのだ。

「くそ、そういう事か……なんて事だ、ずっと寝ていたから気づけなかった……」

ああしまった、やっぱり服部半蔵を逃がしたのは失態だった。

あれが無ければこんな事にはならなかったのに……」

超能力の使用は脳神経を過剰に酷使する。

回復のためには栄養のある物を食べて寝る以外の方法が無い。

蘭丸がここ数日、僅かな食事の時間以外ずっと眠り続けたのは確かに合理的であったが、越軍の行動が殆ど分からなくなるというデメリットに気づけていなかったのだ。

「蘭丸、一体何が起こっているんだ？」

「私が寝ている間に越軍の数が急に増えた。 だけど増えたのは兵隊じゃない。

鬼が出たから避難していた領民だ、要するに普通の人達だ。

美空が砂金と食料をばら撒いて近くに避難していた領民を急速に呼び集めたんだ」

「そんな、普通の人を集めただつて!？」

思わぬ事態に劍丞が衝撃を受ける。

この世に存在するありとあらゆる超能力者は、超能力を使えば使う程気力と体力を消耗し、脳神経に負担をかける。

大規模で、強力な超能力を行使する程、使い手は重篤な状態になる。

美空は何も知らない普通の人々を盾代わりに使い、蘭丸を少しでも消耗させる作戦に出たのだ。

「悪魔の発想だ……普通思いつくか!? いや、思いついても実行に移すか!？」

美空! お前は本当に人の心が無いのか!？」

劍丞の叫びが虚空に消える。

無関係な人を意図的に巻き込む行動に対し、怒りに震えていた。

「駄目だ……領民の仮小屋と越軍の陣幕が複雑に混じりあつて……」

どう頑張つても洗脳にも戦闘にも巻き込むぞ……」

蘭丸は愕然としている。

越軍が中途半端に洗脳すれば、洗脳された者とされない者との大混乱になり、大量に死人が出る上、一歩間違えればそのまま負けかねない。

越軍と領民の全員を洗脳せざるを得ないが、そうすれば想定よりも消耗した状態で劍

魂によって洗脳を免れた者達から身を守らなければならなくなる。

「進めば地獄、しかし戻れば越軍が江戸城に辿り着いて勝ち目が無くなる……

やるしか……ええい、やるしかないっ!!」

「待て! ちよつと待ってくれ!

たった今無関係な人を巻き込むと言っていたじゃないか!」

「私だつてやりたくない!! だけど他にどんな方法があるつて言うんだ!?

これ以上あつちに時間を与えたら、次はどんな手段を取ってくるか分からない!!」

「くう……小波、俺が君に逃げろと言ったから……」

九十郎に何が起きたかを伝えろと言ったから、こんな事になったのか……」

かつて蘭丸に捕らえられ、最後の命令として劍丞は小波を逃がした(第154話)。

それが無ければ、越軍は蘭丸達の接近に気づかず、準備や対策を立てる前に戦いを始

められたのだ。

劍丞はほんの数日前の自身の行動を呪いつて悔やんだがもう遅い。

劍丞と蘭丸は無関係な人々を巻き込み、越軍ごと淫らなで不健全な戦闘を強いて、おそらく蘭丸を殺すために準備をしている劍魂持ちの猛者達から身を守らなければならなくなつたのだ。

「……やつてくれ、蘭丸」

劍丞は震える手を握り締め、絞り出すようにそう告げた。

「もう本当に覚悟を決めた、もう本当に俺は迷わない。美空を止めよう。」

「こんな事……こんな事絶対に許しちゃいけない!!」

劍丞の目には明らかな戦意があつた。

こんな横暴は許せないという純粹な怒りがあつた。

蘭丸は静かに目を閉じると、大きく息を吸い……

「い・く・ぞおおおおおーっ!!」

……渾身の力を込めて吼えた。

そしてその直後、越軍と領民に対し強烈なサイキックウェーブが放たれた。

……

……

……

「それじゃあ犬子、柘榴、行ってくる」

越軍全体が慌ただしく戦闘準備を行う中で、九十郎が犬子と柘榴に声をかける。

「うん、いつてらっしゃい」

「ポータルの防衛は柘榴達でキツチリやつとくつすよ」

犬子と柘榴は既に戦闘態勢を整えて九十郎を見送る。

だがその姿は戦国時代においてハッキリ言つて異様なものだ。まず武器を持っていない。

刀も、槍も、弓矢も、鉄砲も、脇差すら持つていない。

そして鎧を着ていない。

胴丸、肩当、小手、兜、身を守るための装備が一切無く、脱ごうと思えばすぐに脱げる薄着の服を着ているだけだ。

既に犬子も、柘榴も、そして周囲で戦闘準備をする越軍の全員が蘭丸により洗脳され、戦闘行為に関する常識を書き換えられている。

戦闘Ⅱセックスという非常識を植え付けられているのだ。

もうじき織田軍がポータルを奪うためにこの場所に押し寄せるだろう。

おそらく織田軍は今の犬子達と同じように、戦闘Ⅱセックスと常識を書き換えられているだろう。

それはつまり……九十郎は首を大きく横に振り、その先の想像を振り払った。

「竹中半兵衛から受け取った袋、ちゃんと持つてるな？」

「大丈夫、大丈夫、無くしたりしてないよ」

「何書いてるか知らねえが、戦いが始まったらすぐ開けよ、忘れんなよ」

「心得ているつすよ、九十郎」

「九十郎こそ気をつけてね、途中でやられちゃ駄目だからね」
『やられる』とはつまり、敵軍の女性と性交し、先に絶頂するという事だ。

蘭丸によつて書き換えられた常識に照らせば、性交中に先に絶頂した者は、その時に相手に絶対服従しなければならない。

犬子も柘榴も、九十郎が今から織田軍の女達とセックスをしに行くのだと思ひ込んで
いる。

それを当然と思つている。

自分達の夫が見知らぬ女と交合する事を当然の事と受け入れ、何の違和感も覚えてい
ない。

九十郎は吐き気がした。

本当はこんな状態の犬子や柘榴を置いて行きたくはなかった。

本当は2人の頭を揺さぶつて正気に戻れと叫びたかった。

だがしかし、今の九十郎には時間が無い。

「(剣魂の内蔵センサーが蘭丸のサイキックウェーブの痕跡を捉えている。

今なら蘭丸の位置が分かる。だが急がねえと痕跡が消える。

蘭丸が行方を眩ませたらこつちは負け確だ)」

そう……今の九十郎にはとにかく時間が無いのだ。

「犬子、柘榴、愛してる。この先何があっても、俺はお前達を愛し続ける」

九十郎は犬子と柘榴をぎゅっと抱きしめた。

「もう、急に何言ってるのさ。犬子も愛してるよ」

「柘榴だって、九十郎を心の底から愛してるっす」

犬子と柘榴が九十郎の無駄にデカイ身体を抱きしめて愛を囁く。

犬子と柘榴を救うためには、彼女らを洗脳した蘭丸を殺す以外に無い。

九十郎は強い強い殺意を胸に、犬子と柘榴から離れた。

そして……

「吉音えー！ 新戸おー！ 準備は良いかあっ!!」

サイドカーの側車部分に吉音と新戸が待機している。

光璃がこの世界に自身やポータル等を運ぶために使った九十郎の愛車である（第14

1話）。

駿河での戦いの時（第149話）と同じように、戦国時代では破格の速度をもって蘭

丸の居場所へ突入し、速攻で戦いを終わらせる作戦。

さらに今回は比較的小柄な吉音と新戸を側車部分に無理矢理押し込み、突入後の戦闘

能力を向上させるオマケつきだ。

「準備完了だ！」

「ぐう……すやすや……うみゆく、もう食べられないよお……」

新戸は気合十分、吉音は寝ていた。

九十郎はとりあえず吉音の顔を引っ叩いた。

「わぎや!?! い、痛い……もう、何すんのさ!?!」

「嫁の貞操が懸かってんだよ!! 真面目にやれっ!!」

「九十郎の身支度が長いんだよ! 真夜中に叩き起こされたこっちの身にもなってよ
!」

「これでも目一杯急いだ! 待ってる間、暇だからって寝るな!

てかお前よく見たら。パジャマじゃねーか!?!」

「え、とにかく急げって言ってなかった?」

「今からバイクでカツ飛ばすって教えただろっ! んな格好じゃ凍えるぞ馬鹿っ!」

「あれ、そうだっけ? ごめんごめん、じゃあちよつと着替えてくるから……」

「もう待てんっ! 行くぞっ!」

九十郎はサイドカーの本体部分に素早く乗り込んでエンジンを吹かす。

ついさつきまで犬子達と会うために吉音を待たせていた事は無視である。

だからお前は九十郎なのだ。

「予想される蘭丸の位置は……うげっ、ガソリン量がギリギリだな。

吉音、新戸、途中でガス欠したら自力で走るぞ、良いな？」

「走るのには苦手だが……やむを得ないな」

「大丈夫、そうなたらあたしが新戸ちゃんを背負って走るから！」

「ありがとよ！」

九十郎がサイドカーを発進させた。

戦国時代には似つかわしくないガソリンエンジンの音と共に、凄まじい勢いで鉄の車が荒野を駆ける。

「行っけえ！ 九十郎号おっ!!」

「ア○パンマン号みてえに言うなよ！」

爆音轟かせ、鉄の車が突き進む。

戦国時代における常識とかけ離れた超スピードで突き進む。

「距離算出……よし、がどんどん縮まつてる。」

保てよガソリン、保てよ俺の愛車あっ!!」

左目に装着したDゲイザー（片眼鏡型デバイス）が九十郎に蘭丸の位置を伝え続ける。蘭丸は最初に超能力を行使した場所から少しずつ移動しているが、全開でカッ飛ばす九十郎のサイドカーよりもずっと遅い速度だ。

洗脳能力を行使する前に越軍に見つかる訳にはいけないと、織田の本体からやや離れ

た位置にいたのも幸いし、途中の妨害も殆ど無い。

これなら行ける。

これなら追いつける。

九十郎の心にちよつとした楽観が芽生え始めたその時……

「九十郎！ 前方から何か来るよ！」

吉音が叫ぶ。

ほぼ同時に九十郎の視界に複数名の人影が映る。

「あれは……あれ、誰だ？ 前に見た事があるような……」

奇妙な事に、九十郎達の前に現れた団体は、全てが同じ顔、同じ背丈、同じ体格、同じ髪の色をしていた。

まるでクローン人間でも見ているかのようなだった。

「あれはエーリカ……」

明智光秀とルイス・フロイスの魂を混ぜ合わせて作られたエインヘルヤル。

オーデインの手駒……まだあんなに数がいたのか」

新戸は折を見てちまちまと、ぶちぶちと念入りに潰し続けていたオーデインの手駒が
ここまで残っていた事に軽く驚愕する（第136話）。

「数はどうだ!? 何人いるんだっ!？」

吉音がDゲイザーを操作して剣魂の内部センサーからの情報を照合する。

「ちよつと待つて、12……じゃない、13人！ 全部で13人もいるよ！」

「クソがよっ!! だがどつちみち迂回すりゃガス欠だ！」

突っ切るぞ吉音！ 新戸！ てめーら腹括れえっ!!」

九十郎はサイドカーの速度と重量で突っ切ると決断し、残り少ないガソリンを派手に燃やして最大速度でエーリカ達の団体に突っ込んだ。

しかし、エーリカ達は生気の無い瞳で九十郎達を見つめ、腰に帯びた短剣を引き抜き

……

「消去」「消去する」「殺す」「殺害せよ」「生贄魔法」「召喚」「命はいらぬ」「全てが礎」「我らは贄」「贄」「正しい犠牲」「全ての世界の存続のために」

全員同時に何か奇妙な呪文を呟き、直後に自らの喉を長剣で刺し貫いた。

「なにっ!？」

「じさ……じ、自殺した!？」

吉音と九十郎が思わず大きく目を見開いた。

全く同じ顔の人間が、全く同じ動作で、全く同時に自害する光景は数々の修羅場を潜りぬけてきた彼らにとっても予想外の光景だ。

直後13の……ではなく、12の遺骸から流れ出た血が空中に浮かび、巨大な魔方陣

へと姿を変える。

「拙い！ アドバンス召喚だ！ 怪物が出て来るぞおっ!!」

ただ一人状況を即座に、正確に理解した新戸がそう叫ぶ。

「怪物って!?!」

「怪物でも妖怪でも怪物でも何でも良い！ 凄まじい戦闘能力の怪生物が出てくる！

あの魔方阵はオーデインがこっちの世界に干渉するための門だ!」

「良く分からないけど、やっつければ良いんだね!」

吉音がサイドカーから身を乗り出して、剣を抜く。

剣魂は元々北条早雲がオーデインと戦う為に作った武器だ（第119話）。

普通の生き物が相手ではタダの鈍器だが、神話上の精霊や怪物が相手であれば凄まじいばかりの切れ味となる。

「馬鹿、時間がねーって言うてるだろ！ 無視して突っ切るぞ!」

「13……いや、12人分のエインヘルヤルを生贄に捧げた、

相当難儀なヤツが出て来るぞ……まず間違いないバイクよりも素早いヤツだ……」

「チクシヨウここで足止めかよっ!! 吉音、ガトリング砲を出せ!」

「え？ 新戸ちゃんを乗せるスペース作るから、外しちやってるよ」

「ハイそうでしたあっ!! 外したの俺でしたあっ!! すっかり忘れてましたあっ!!」

「来るぞ遊馬っ!!」

「遊馬じゃねえよ! Dゲイザー付けてるけどよ!」

「やってる場合かつ!!」

サイドカーが止まり、吉音が、新戸が、そして九十郎が臨戦態勢に入る。

そして空中に浮かぶ巨大な血の魔方陣がギラギラと妖しく輝き、巨大怪獣……ではなく、一本の古びた槍へと姿を変えた。

「……あれが怪物?」

「……ひどくいサーベルじゃないかな?」

思っていたのと違い、吉音と九十郎が首を傾げる。

「グ、グングニル……だと……」

ほぼ同時に、新戸が脂汗と共に青褪めた。

幾多の並行世界の虎松達がアレによって葬られた。

放てば必中、回避も防御も不可能なオーディンの切り札こそがグングニルなのだ。

「(馬鹿な!? たった12人の生贄で使える代物では……いやそれよりも……)」

新戸が焦る。

吉音も九十郎もグングニルの危険性を全く知らない。

そしてそれを伝える時間は無い。

「逃げろおおおおおーっ!!」

新戸が叫ぶ。

同時に新戸の肉体が鬼のものに変化する。

人間に擬態した姿を捨て、超能力行使に特化した彼女本来に戻ったのだ。

直後、空中に浮かぶグングニルが裂けるチーズかカニ風味かまぼこのように枝分かれし、2本の槍となり……うち1本が凄まじい速度で新戸に向かって飛び出した。

「ト・マ・レエエエエエエーっ!!」

新戸が全力の念動力で槍を止める。

銃弾のような……いや、超音速ミサイルのような速度で進む槍が空中で止まる。

「止まった……だと……? 本物のグングニルでは無いのか?

本物ならたった12人の生贄で召喚は無理だ!

オレ程度の念力で抵抗するのも無理だ!」

新戸が僅かな希望を見出すと、さらに強く脳神経を酷使して、全身のエネルギーを振り絞り、さらに強力な念動力を行使する。

だがしかし……

「トマレ……トマレッ! トマレッ! トマレッ! トマレエッ!!」

……だがしかし、例えば本物でなくとも、例えば何重にも劣化した模造品であっても、1

犬子と柘榴と一二三と九十郎第164話『怒りの拳』

「お前……お前えええーっ!!」

段蔵の挑発に、姫野が激高した。

生身で触れれば喰いつかれ、齧られる不定形の肉体であるが、姫野は脳と脊髄を除く全てが獣の肉体で補われているために喰われない……それは前回の戦いで分かった段蔵の泣き所だ（第94話）。

「もう一回ブン殴ってやるし！ 今度は絶対逃がさねーしっ!!」

「やれるもんならやってみなさいっ!! あの時はずただのまぐれ勝ちっ！」

まぐれ当たりっ！ 本気を出した某には遠く及ばないと教えてあげますよおっ!!

ほんの少し、ほんの僅かに不意を衝かれただけであるが故にっ!!」

段蔵の不定形の肉体がギョツと集まり、纏まり、固まった。

全身が黒曜石のように真つ黒になり、顔は仮面のような硬質な何か覆われる。

自身の密度を大きく上げて、硬度と速度と強度を増す段蔵の切り札である（第94話）。

ズドオンツ!! と、まるで大砲のような轟音や衝撃と共に、姫野の剛腕が段蔵に叩き込まれる。

既に姫野の両腕は人間のモノではなく、まるでヒグマのような毛皮に包まれ、爪が伸び、骨も筋肉も何倍もの太さに変貌していた。

「ぬるいですよっ!! 効きやしませんよっ!!」

某は忍者ですがあ、それと同時に化け物であるが故にいつ!!」

ドゴオツ!! と、姫野の一撃に負けず劣らず凄まじい轟音、衝撃が周囲に伝わる。

段蔵の細身の身体からは想像もつかない程の速度、重さ、硬ささから放たれる物理の暴力は、それこそ本物の大筒にも匹敵する。

「があ……まだまだあっ!!」

直撃すれば城壁すら打ち砕く超高速の右ストレートを喰らい、姫野が血反吐を吐く。

いくら風魔忍軍の秘術により全身を強化されているとはいえ、段蔵の全力パンチはそれを上回っている。

「こんのおっ!!」

姫野が負けじと段蔵を殴る。

「あはははははははあっ!!」

段蔵は狂ったように笑いながら殴り返す。

「ぐ……う、負けるかあああつ!!」

姫野は額から血を流しながらも、未だ戦意は衰えない。

姫野が殴る、段蔵が殴る、姫野が殴る、段蔵が殴る、姫野が殴る、段蔵が殴る……改造人間と化け物が常人を遙かに超える膂力でもって殴り合う。

だが……

「いい、いけない……このままでは……」

傍で見ている小波が焦燥に駆られる。

殴り、殴られる度に血を吐き、傷つくのは姫野の方だ。

段蔵は無傷という訳ではない様子ではあったが、その傷つき方は、その疲弊の具合は明らかに姫野よりも小さく、軽い。

殴り合いが続けば続く程、不利になるのは姫野の方だ。

「御家流は……いや、駄目か……」

妙見菩薩掌を使おうと精神を集中させ……途中で止まる。

既に1度、小波は全力の妙見菩薩掌を使ってしまっている（第159話）。

超能力の発動は脳神経を酷使し、消耗させる。

それは蘭丸だけでなく、あらゆる超能力者に共通する弱点である。

それ故に、今の小波では普段の半分か、それ以下の威力でしか妙見菩薩掌を使えない。

そして過去に段蔵は全力の妙見菩薩掌に耐えている（第94話）。

あの時の半分以下の威力では、段蔵を倒すどころか、ほんの少し怯ませる事すらできないと直感的に分かってしまった。

「あはははは……あぁーっはっはっはっはっはあっ!!」

段蔵の深いな高笑いが辺りに響く。

気がつけば既に姫野と段蔵の戦いは殴り合いから、一方的な蹂躪へと変わっていた。

「弱い！ 弱い！ 弱すぎるうっ!! 明らかに弱くなってるう!!」

この前戦った時よりも明らかに弱くなってますねえ!!

確信しましたよ！ 今の貴女の鈍く拙い戦い方で確信できましたよお!!」

段蔵が狂気に満ちた笑みを浮かべていた。

「う……っぐう……だ、誰が弱くなったってえ……」

姫野は奥歯を噛み締め、ふらつきながらも立ち上がる。

だがしかし、風魔の秘術で改造され、人並みならずれた頑強さを誇る肉体であろうとも、人外の膂力で何度も何度もブン殴られては無傷ではすまない。

全身は顔や肩には内出血で青あざができ、骨にヒビが入り、一部は折れて内臓を傷つけていた。

既に立つのもやっつという有様だった。

「貴女達は殺人を禁じられているんですよ。頭の中身を書き換えられて、

かつては息を吸い、吐くのと同じように当然にやっていた事が、

できて当然、やって当然の行動と思えなくなっているんですよ」

「な……………い……………」

「頭を……………書き換え……………」

姫野と小波が信じられないといった様相で互いに顔を見合わせる。

「じやなきやあ、誰も剣を持たず、誰も槍を握らず、誰も矢を放たず、

皆揃って男女のまぐわいをするなんて異常事態、起きる訳ないじゃないですかあ…………

頭の中身を書き換えられたが故に！ 殺人を忘れえ！

人殺しのやり方を忘れさせられたが故にい！

ち〇こをお〇んにブチ込むのが戦争の常識だと思ひ込まされたが故にい！！

アンタらは頭のおかしい事を延々とやらされてるんですよおっ！！

段蔵が下品にゲタゲタと啜う。

それは下等生物を見下す傲慢な超越者の態度そのものだ。

「ひ、姫野はおかしくなってるなんてねーし！ 何も忘れてない！ 弱くなってもねーし

！

「ぶっ、うふふ……………本当にそう思いますか？ 本当にそう思ってるんですかあ？

だつたら試して見ましようよお。 私の顔面、殴つて御覧なさいよお」

「ば、馬鹿にしてえっ!!」

姫野が傷ついた身体に鞭打つて、再び段蔵に飛び掛かった。

そして無造作に出された段蔵の顔面に鋭いパンチが……届く寸前で、段蔵は素早く身を引いて回避した。

「よ、避けんなだしっ!!」

「欠伸が出る程にノロかったが故に、私は悪くない」

「こ、このおっ!!」

今度は段蔵のアゴを打ち抜く鋭いアツパー……これもひよいつと避けられる。

「遅いですねえ、でもこれは怪我や疲労だけのせいじゃないでしょう?」

「う、うるせーしっ!!」

姫野は段蔵の言葉を、嘲笑を跳ね除けると何度も何度も殴りかかる……しかし、そのどれもが避けられ、受け止められ、どれも有効打には程遠い。

「今、一瞬考え込みましたねえ? 本当に殴つて良いのかと。」

こんな強い力で殴つたら死んじやうんじやないかって考えましたねえ?

故に! 故に全てが遅くなる! 故に全てが拙くなる!

故にさつきから一方的に殴られまくるんですよおっ!!」

そんな見下しと嘲笑の言葉と共に打ち込まれた叩きおろしがクリーンヒットし、姫野は再び地面に倒れ伏した。

「ぐう……ま、まだ……こんな……」

「まだ理解できませんかあ？ 貴女は絶対に私には勝てないのですよお。」

敵を倒す事に集中して戦う貴女が勝てなかった相手に、

戦いとまるで関係無い事を考えながら戦う貴女が勝てる筈が無いが故にいつ！」

段蔵がゲタゲタと嗤い、嘲り、倒れた姫野を思い切り踏み抜いた。

「あがぁっ!!」

その重さと衝撃が姫野の骨と内蔵をたわませ、傷つけ、血反吐を吐かせる。

「ぐ、うう……げほ、ごほっ……」

肺の内側に血が溜まり、既に呼吸すら満足にできない。

姫野の限界は……姫野の死は、もうすぐそこにまで迫っていた。

「そろそろ、トドメといきましょうか」

「ふ、ふん……姫野を喰ったら、ハラを壊すって忘れたし？」

「何を言ってるんですか、ちゃんんと覚えていますよ。 故に……」

次の瞬間、段蔵の姿がフツと消えた。

「くっ、呑牛の術か!？」

精神操作系の能力に多少の耐性がある小波は、すぐに幻術と体術の合わせ技によって瞬間移動したかのように錯覚させられたのだと理解する。

いきなり視界から消えた段蔵がどこへ行ったのかと、すぐに身構えて周囲の気配を伺った。

「う……うわあつ!？」

……直後、男の悲鳴が姫野と小波の耳に届いた。

「こつちですよお、こつちこつちい……」

「しまった!？」

その光景を目にした瞬間、小波は自身の迂闊さを本気で呪った。

小波の新たな主人のなった男が、段蔵の伸びる触腕に捕らえられ、空中で逆さ吊りになつていたのである。

「その方を開放しろ! 何の関係も無い筈だ!」

「うくん? どうしましよかねえ?」

でも、目撃者を消すのは実に忍者らしい行動であるが故にい……」

段蔵が小波の前でにたあくど厭らしく笑った。

その邪悪で嗜虐的な笑みを見た瞬間、小波は段蔵が男を生かして返す気が全く無いと確信してしまう。

「やめろおおおーっ!!」

左腕で手裏剣を投げる。

小波もまた一流の忍者、例え利き腕が負傷していたとしても、それでもなお目にも止まらぬ速さと正確さで手裏剣を飛ばす事ができる。

だが……

「ほおら、一瞬躊躇した……頭の中が書き換えられているが故に、

殺人の技を禁忌と思い込まされているが故に、こんなの当たりませんよお」

段蔵は手裏剣が突き刺さるよりも一瞬早く体表を硬質化して防いでしまう。

改造人間である姫野が思い切りぶん殴るか、大砲や破城槌を直撃させでもない限り、段蔵の硬質化した表皮はビクともしない。

今の小波には、妙見菩薩掌以外に段蔵を攻撃する手段が一切無いのだ。

「ご主人様をどうするつもりだ!? 人質か!? ならば私が代わりになる!!」

「人質い? 何を言ってるんですかあ? こいつを捕らえたのはこうするためですよお」

「え……?」

直後、段蔵は小波をイカせた男の頭に触腕を巻き付け……凄まじい力で引き絞った。

「ぎぎ……ぎぎやあああーっ!!」

断末魔の叫び声。

次の瞬間、ぐちゃりと嫌な音と共に男の頭蓋骨が砕け、血と脳漿がぼたぼたと零れ落ちた。

その零れ落ちた脳漿を、段蔵は大きく口を開けてゴクゴクと美味そうに呑み、啜る。
「ああ……ああ、美味い。 実に美味ですねえ。」

やはり人間は脳ミソが一番美味しい。 殺したての脳ミソは特に味が良い」
男は何の返事もしない。

頭蓋骨を砕かれ、脳漿を喰われて即死していた。

段蔵は小波の目の前で、小波の新しい主人となつた男を惨殺したのだ。

「な、なんで……何故殺した……？」

小波がわなわなと震えながらそう呟く。

「さつきこう言いましたねえ、『姫野を喰つたら、ハラを壊す』と……なので予告します。
今から貴女の頭を砕いて、脳ミソを掻き出して喰います。 この男のようにねえ」

そして段蔵はもう用は無いとばかりの男の死骸を投げ捨てた。

ぼとりと落ちたソレは指先がびくびくと痙攣し、まだ僅かに動いている。

ほんの数秒前まで生き物だった物体が、無造作に捨てられる様を見せつけられて、姫野は戦慄し、小波は怒りを覚えた。

「そのために……それだけのために殺したのか？ たったそれだけの理由で……」

「いいえ、もう一つ理由はありますよ。運動をして、小腹が空いたが故に」

その言葉が耳に入った瞬間……いや、耳に入るよりも早く、小波は段蔵に強い殺意を抱き飛び掛かった。

「死んで良い人では無かったあっ!!」

手にしたクナイを段蔵に突き立てる。

渾身の力を籠めたそれは、段蔵の表皮に数m程度の小さなキズをつけた。

「今日会ったばかりだ！ 戦場でたまたま遭遇しただけの人だ！」

名前も知らない！ 過去も知らない！ 血筋も家柄も知らない！

「だけど……だけど！ お前なんか殺されて良い人では、断じて無いっ!!」

「腹が減ったから喰った、ただそれだけですよ。」

腹が減る、メシを喰う。それは自然の摂理であるが故に。

「ああもちろん喰い残す気はありませんとも、後でゆっくり食べるつもりであるが故に」

「お前を許さない……」

「許さなければ……どくするんですかあ？ ウサギとワルツでも踊りますかあ？」

「うわあああーっ!!」

小波が再度飛び掛かる。

だがしかし、今度は段蔵の硬質化の方が僅かに早い。

今度はミリ単位の傷すらつけられず、クナイの方がポキリと折れた。

「無駄なんですすよおっ!!」

そして剛腕から繰り出される反撃が小波の腹部に叩き込まれ、小波がくの字になつて吹き飛んだ。

「う、あああ……ぐぐ、うう……」

ついさつきまで全裸でセックスをしていたため、今の小波は防具の類を一切身に着けていない。

姫野のように肉体を改造された訳でもない。

生身の身体に段蔵の人外のパワーをともに受けて、小波は早くも立ち上がれない程に深刻なダメージを受けてしまった。

「さあて、待たせてすみませんねえ……それじゃあ頭蓋を砕いて差し上げましょう」

段蔵が倒れ伏す姫野の顔を掴んで持ち上げた。

「や、やめろお……」

小波がどうにか立ち上がろうと足掻く。

しかし、段蔵の拳をまともに喰らい、全身を地面に叩きつけられたダメージはそう軽

くはない。

「は、放せ……、このお……」

姫野も段蔵の拘束から逃れようと藻掻く。

しかし、何発も何発も殴られ、蹴られ、踏まれた身体は既に限界であり、段蔵を振り払うだけの力は残っていない。

「さようなら、風魔小太郎殿」

ギリギリと頭蓋骨が圧迫される。

メキメキと音を立てて頭蓋骨にヒビが入る。

姫野は風魔の秘術によって全身を獣の身体に置き換えられ、強化されているものの、脳と脊髄だけは自前のままで。

頭蓋骨ごと砕いて潰されれば即死は免れない。

「やめろおおおーっ!!」

小波が叫ぶ。

涙を浮かべながら、喉が枯れんばかりに叫ぶ。

しかし、段蔵はその叫びを一瞥もくれない。

姫野の頭蓋骨を潰して脳ミソを喰おうと力を籠め続ける。

「(どうすれば良い!? どうすれば良いんだ!?)」

小波は焦った。

全身が痛んで軋む。

身体は全く言う事を聞いてくれない。

無策に飛び掛かっても再び叩き伏せられるだけだ。

助けを呼ぶ時間も無い、助けを求めるアテも無い。

絶望的な状況だった。

……

……

……

「そうか、分かった！ やつと理解できた！ やつと合点がいった！

君のスタンドは怒りの拳だったんだ！」

「怒りの……拳……？」

「君の心の中の怒りを物理的な破壊力に変換する能力さ。

ああ、スタンドとしては割と良くある、オーソドックスな方だ。

悪魔の暗示のスタンド・エ○ニーデビルや、

ノ○ーリアス・B・I・Gと同系統だったんだ」

「怒りの拳でヤツは殺せますか？」

「……うん、まあ、それは無理だろうね。

何せ源平合戦の時代から人食いを続けてる化け物だもの。

生き物としての格が違う、フィジカルが違う、戦闘経験も違う」

「源平合戦から……いえ、それでもやらなければ」

「アレは柱の男と同じ、生まれながらにして人類を超越した超生物。

それに対して人間の怒りの感情は長続きしない。

人は変わっていくものだよ、どれだけ怒ろうが、どれだけ忘れないと誓おうが、

人間の感情は移ろいゆくもの、それは人間の美点であり、欠点でもある」

「この身がどうなっても構いません。引き換えに命を落としても良い。

それでも私はヤツを討ちたい。

どうしても討たなければ……父も、母も、妹も浮かばれない……

何より……何よりも、自分自身を許せません」

「それならば……本気で君の全てを擲つ気なら、方法はある」

「やってください」

「たぶん後悔するよ」

「やってください」

「ボクは君の事が結構気に入っているんだけどなあ」

「やっってください」

「この世界に来て初めての友達なのだけど」

「やっってください」

「ボクのレストラン、あんまり良い思い出無いから使いたくないんだけど」

「やっってください」

「たぶんイケるとは思うけど、本来の用途とは違うから何かしらの不具合が起きるかも」

「やっってください」

「何これ『はい』を選ぶまで無限ループする感じ？」

「戦国時代かと思ったらド○クエだったパターン？」

「やらないのなら、今すぐこの場で自害します」

「わーい別の台詞だー、うれしいなー、なんて冗談を言っつてられる事じゃないんだよ。」

「それはつまり……言い難いけどね、君の記憶を切り離し、脳髄の奥の奥に封印する」

「分かりました、やっってください」

「1度や2度の怒りではアレは倒せない、殺せない。」

「だから100回、200回……いや、100や200じゃ無理、無駄、無謀だね。」

「千回、一万回分の怒りを君の魂の奥底に封印して溜め込む。」

「つまり君は今後、怒りの感情を抱く度に記憶喪失になる」

「ならば全てを喪つても構いません、やっってください」

「喪うのは君が最も大切に行っている記憶だ。」

君は怒りの感情を抱く度に父を、母を、妹を、そして家族の仇の事を全て忘れる。顔も、名前も、色も、匂いも全て忘れる。

君が、君の仇に巡り合い、怒りの拳を叩きつけるその瞬間まで全て忘れる」

「それでも……それでも、やっってください」

「そして……そしてきつと、溜め込んだ君の怒りが、君の怒りの拳が、きつと君の仇を打ち砕くだろう」

「きつと……きつと本懐を遂げて見せます」

「……ま、良いさ。 どうせ人生のロスタイムみたいなものだ。」

人助けと思えば、指の一本くらいは惜しくない」

「では……？」

「やってみよう。 ただし失敗してもボクを恨まないように」

……

……

……

「……思い出した、怒れば良いんだ」

その時、小波はある人物との会話を思い出した。

その人物によって、自分は記憶の一部を封印されていたのだと思い出した。

そして……怒った。

「ふざけるな、ふざけるなよ加藤段蔵。父を殺し、母を殺し、妹の身体を喰い散らかし、

そして今度は妹を殺そうというのか……」

空気が震えていた。

大地が震えていた。

近くの野生動物達が異様な圧を感じ、怯えて逃げ始めていた。

「思い出したぞ、お前は両親の仇だった。そして姫野は私の妹だった。

私はあの日、あの時、父か喰われ、母が喰われ、妹が喰われるの間近で見ながら、

ガタガタと怯えながら逃げる事しかできなかった。

父にも、母にも、妹にも何もしてやれなかった」

小波はかつて段蔵に出会った時の事を完全に思い出していた(第86話)。

「妹は私を助けるために、わざと大声を出してお前に姿を見せた。

私を助けるためにだぞ。それなのに私は何もせず、逃げ出した」

小波はかつて姫野に命を救われた事も完全に思い出していた(第86話)。

それは怒りの感情を溜め込む為に、封印されていた記憶の一部だ。

「妹は生きていた。それなのに私は気づかなかつた。

大事な家族の顔を忘れ、名前を忘れ、見知らぬ相手と思つて接した。

何度も何度も名前を忘れた、何度も何度も顔を忘れた、忘れ続けた」

そして過去何度も何度も姫野の顔と名前を忘れ続けていた事も思い出した。

「妹はいつも私を助けてくれた。

さきゆばすとかいう夢に巢食う化け物に襲われた時も、

お前と二度目の遭遇をした時も、北条から私を殺せとの密命を受けた時も、

蘭丸に捕らえられ洗脳されそうになつた時も……何度も何度も救われた。

なのに私は礼すら言わず、その度に妹の顔と名前と恩義を忘れた……」

封印されていた全ての記憶が一気に蘇つていた。

記憶が一つ蘇る度に、小波の心に強い強い怒りの感情が生まれるのが分かつた。

怒りが自分の心を埋め尽くし、破裂しそうになるのを感じた。

「そんな……そんな自分に腹が立つ!!」

小波が再び立ち上がり、ぎゅつと握り締めた拳を天に突き上げた。

そして次の瞬間、夜空が急に昼間になつたかのように明るくなつた。

太陽のように明るく輝く、太陽のように圧倒的熱量を帯びた超常の拳が、空に浮かんでいるのである。

「な、何を……何が起きて……」

段蔵はようやく自身を理解を越えた何かが起きつつある事に気がついた。

空に浮かぶ超常の拳は、今まで見た事も感じた事も無いような強烈な熱気と圧力があつた。

あんなものをまともに喰らったら死ぬと確信させられた。

「教えてやる、これが本当の妙見菩薩掌だ。」

私の怒りを力に変えて、私が殴りたいと願うものを殴る能力。

それが私の本当のスタンドだ」

「すたん……？ な、何を言ってるんですかあ!? 非常識ですよお!」

その拳は、いつもの妙見菩薩掌とは桁違いの力が宿っていた。

普段の百倍……千倍……いや、一万倍にすら届く程の凄まじいエネルギーであった。

それは今まで小波が怒る度に記憶を封印し、今この瞬間に爆発させるために溜め込んできたエネルギーの暴力だ。

その凄まじいエネルギーが……

「これが私のお!! 怒りの拳だあああああーっ!!」

……その凄まじいエネルギーが加藤段蔵に振り下ろされた。

「うおおおっ!?!」

段蔵は咄嗟に掴んでいた姫野の身体を盾代わりにする。

あの凄まじいまでの力の奔流がその程度で防げるとはとても思わなかったが、ほんの僅かでも勢いが落ちてくれれば生還の目があると思つての行動だ。

「妹を盾にするなああああーっ!!」

だがその行動は、かえつて小波の怒りを炎上させる結果になった。

「ひっ……ああ、力がコイツの身体をすり抜けて……」

小波が放つた怒りの拳は、姫野の身体だけは器用に避けて段蔵の肉体に殺到した。

「ぐ、ぎ……ぎあああああーっ!!」

段蔵が叫ぶ。

妙見菩薩掌の万倍のパワーが段蔵に叩きつけられる。

その桁違いの熱量は、エネルギーは、段蔵の身体を容赦なく焼き消していく。

「し、死ぬ……死んでしま……がああああーっ!!」

段蔵は自身の肉体を限界まで絞り、硬めて耐えようとしたが、圧倒的な力の差の前に

肉体は凄まじい速さで崩壊していった。

そして……

「ああ、でも……こういう死に方は、忍者っぽいかもしれませんが……」

……そして加藤段蔵は、細胞一片すら残さず焼失し、死亡した。

「ぜえ……ぜえ……はあ、はあ……」

小波が膝から崩れ落ち、大きく肩で息をする。

普段の万倍の威力の御家流を使った割には、気力と体力の消耗は驚く程に軽かった。

そして小波の頭から、ぽろつと干からびた人間の指らしき物が転がり落ちる。

「能力行使の代償……指を一本……そうか、これが……」

小波がそれを拾おうとすると、干からびた指は燃え尽きた灰のようになって崩れ散った。

「段蔵を……やったの？」

姫野がよろよろとふらつきながらも立ち上がり、小波に確認する。

「……ただいま、姫野」

小波は姫野の声を聞いた瞬間、涙を溢れさせていた。

助けたかった、助けられなかった妹がここにいます。

ただそれだけが、小波にとって何よりも大きな救いだった。

「いや質問に答えろだし」

「ああ、すまない。大丈夫だ、加藤段蔵は死んだ」

「ああ、そうなんだ。何か良く分からない内に死んだけど……まあ、良いか。

それより小波、妹がどうか言つてたけどどういう意味だし？」

「決まっているだろう。姫野は私の大事な大事な妹だつて事だ」

「え……？」

いきなり奇妙な事を言われて、姫野がぎよつとしながら小波の顔を覗き込む。

「お姉ちゃん……確かに同じ『小波』だけど、たまたま一致しただけども……」

いや、そもそも……お姉ちゃん生きてたんだ、知らなかった」

そんな言葉を聞いて、小波の目から涙が引いた。

「し、死んでると思われてた……だと……!？」

あえて小波の心境を文字にするならば『ガビーン!』になるだろうか。

「いやだつて、お姉ちゃん昔からトロかったし、何の音沙汰も無かつたし、

どつかで死んでるもんだとばかり……」

「む、昔からトロかつたと思われていた……だと……!？」

小波は地味にショックを受けた。

「まあ小波のボケは置いておいて、これからどうするかだし」

「こ、小波のボケ……だと……!?!」

小波は妹からの信頼度がマイナス方向に振り切っている事に今更ながら気がついた。

「頭の中を書き換えられて、殺人を禁止されて……段蔵の言葉が正しいとすれば、

姫野も小波もどっか気がつかない内に蘭丸の術中に陥ってたって事になるし」

「私達の常識が……信用できないか……」

小波は頑張って気を取り直した。

「姫野達が普通の行動だと思っている事が、異常な行動かもしれない。

そしてそれは、おそらく蘭丸にとつて相当都合の良い物だという事だし」

「しかし、常識を疑えと言われても、何をどう疑えば良いのか……」

「とりあえず戦闘はひたすら避けながら、蘭丸がいる場所を指すべきだし」

「戦闘を避ける理由は？」

「アンタと姫野が織田の雑兵にあっさり返り討ちになったのが引つかかるし。

常識の書き換えの内容が、戦闘に関わるものかもしれないし」

「ううむ、そうだろうか……」

いや待て、私も姫野も既に織田軍の者に討ち取られているのだぞ!

今から敵対行動を取るのには流石に拙い!」

「戦場の作法は、自分をイカせた相手に降伏して服従する事であって、

相手が所属する軍団に服従する事じゃねーし」

「ま、まあそうだが……」

「つまり、ご主人様が死んじまった後は誰にも服従する必要は無い。

好き勝手に動いて問題ねーし」

「それは屁理屈だろうっ!?!」

「じゃあ姫野一人で行動するし。小波は好きなだけ義理を果たせば良いし」

「うぐっ、それは……」

小波は迷う。

姫野の理屈は屁理屈に近いが、通らなくもない。

新たな主人が死亡したからと言って即座に裏切るのは気が引けるが、それと同時に姫野を守りたい、新田劍丞を助けに行きたいという気持ちもある。

だから小波は迷って、迷って、迷って……

「せ、せめて……せめて遺髪を取って、埋葬する時間はくれないか。

このまま野ざらしというのは、忍びない……」

「はいはい埋葬ね、手伝ってやるから手早く済ませるし」

……結局、小波はこのラインで妥協する事にした。

こうして蘭丸とは全然関係ない復讐劇は幕を下ろした。

この戦いは蘭丸も九十郎も関与せず、関知しない事情で始まり、勝手に終わった。

この戦いにより人喰いの化け物・加藤段蔵は死亡し……服部半蔵と風魔小太郎、この時代でも有数の忍者2名にフリーハンドを与える事になった。

「それにしても気になるのは……何故、大江戸学園の学生服を着ていたのだろうか？」

そして小波は、自分の記憶を封印した人物の事を思い返していた。

「確か……確か名前は、天草四郎」

犬子と柘榴と一二三と九十郎第166話『駆け付けた者達』

注・原作キャラが洗脳、凌辱される描写があります。

犬子、柘榴を強姦され、一二三を洗脳され、怒りに燃える九十郎が蘭丸の護衛達を次々と蹴散らしていく。

「死ぬ、蘭丸うううーっ!!」

この酷い絵面の最終決戦も、終結の時が近づきつつあった。

蘭丸が気絶していた間に簡単な手当を受けていたとはいえ、蘭丸の護衛達の中には負傷していた者も多い。

それについてさつき吉音と九十郎にボコボコにされたばかりで、戦意が萎えてしまっていた。

負傷もあるが、それ以上に鬼気迫る表情で叫び、暴れる九十郎に気圧されて、まともに戦える状態の者はそう多くない。

そして頼みの綱の劍丞も、九十郎の大車輪投げを喰らってまともに戦える状態では無い事も、蘭丸の護衛達の戦意を大きく削いでいた。

「邪魔すんな、寝てろお！ てめえらもブチ殺すぞおっ!!」

1人、また1人と九十郎が護衛達を斬り伏せる……いや、斬り殺していく。

吉音のように歯止めをされた武器を使う気は無い、峰打ちや手加減をする気も一切無い。

怒りと殺意の赴くままに、本気かつ全力で殺しに来ていた。

「どうすんだよ！ どうするんだよおっ!!? な、なんとか説得とかできないのおっ!!」

一応、君はあれの嫁さんなんだよねあいつのおっ!!」

「……私は死体、私は死体」

「死んだフリして誤魔化そうとすんなあっ!!」

蘭丸も一二三も一切打開策を見いだせず、怒り狂う九十郎が護衛を斬殺していくのを眺めるばかりだ。

今の蘭丸は超能力の使い過ぎで疲弊して、立って歩く事すら難しい。

一二三も本調子であれば何かしら反撃のアイデアも浮かんだのかもしれないが、今は洗脳の副作用で知力が落ちていた。

護衛達の中には一二三に倣って死体のフリでやり過ごそうとしている者がいたが、蘭

丸にも九十郎にもそいつらに構っている余裕は無い。

そして比較的やる気のある護衛達が粗方斬られ、やる気の乏しい護衛達は腰を抜かし、逃げ出し、あるいは死体のフリでやり過ごそうとし、ついに蘭丸本人へと斬り込む決定的な隙が生じる。

「蘭丸、てめええええっ!!」

「く、来るなああああっ?!」

蘭丸が叫ぶ。

恐怖のあまり若干涙目になっていた。

さっきのように催眠は使えない。

今の九十郎は蘭丸への殺意が強すぎ、他の感情や欲求を引き出そうとしても無意味だ。

他の洗脳を使つたとしても、九十郎の剣魂がそれを防いでしまう。

「や、やめ……やめろお!」

劍丞が蘭丸を守ろうとするが、傷ついた身体は思うように動かない。

ついに九十郎の剣が蘭丸に届く。

『勝つた! 第三部完!』とばかりに九十郎は勝利を確信する。

ガキインツ!!

だがしかし……寸前の所で九十郎の前に立ちほだかり、蘭丸を守る者が現れる。

新田劍丞ではない、その姿は、その細くしなやかな体格は女性のものだ。

その者の名は……

「全く、主様は少し目を離すとすぐに無茶をするのう」

その者の名は……第13代征夷大將軍・足利義輝。

名目上は全国の武家の棟梁であるが、塚原卜伝から直々に劍の手ほどきを受けた劍豪であり、なんやかんやでずくくと劍丞隊と行動を共にしている女傑である。

その足利義輝がこの土壇場で駆けつけたのだ。

「しょ……將軍かよオオオ!!」

九十郎の剛劍をまともに受け止められる者はそう多くない。

その数少ない例外的存在が都合良く……いや、九十郎にとって都合悪くこのタイミングで現れた現実に対し、頭を抱えたい気分になった。

「え、何? 呼んだ?」

「お前じゃねえ！ 座つてろ！」

なお、徳河吉音は生徒大將軍、征夷大將軍に名前だけ寄せたなんちやつて將軍である。なんでこんな無意味な事をおもわれる方もいるかもしれないが、『無理無茶無謀』と『くだらない意味が無い面白い』は大江戸学園における平常運転である。

「か、一葉……どうしてここにいるんだ!? 来ちゃ駄目だつて言つただらう!?」
「何故かと、そりゃあ主様が絶対来るなど申すからじゃな。」

えつとアレじゃろ、ダ○ヨウ倶楽部とかいう……」

「いやギャグじゃないよ！」

「それに主様が黙つて単独で動く時は、大抵無茶で無謀な事をやつてる時じゃからな。」

だから頃合いを見計らつて陣を抜け出した。 ああ、当然余だけではないぞ」

「蒲生氏郷ここに見参ですわ！」

「……ぐつ！ びしつ！」

「八咫鳥隊つ！ 総勢2名着陣つ！」

そう、劍丞の窮地に駆けつけて来たのは一葉だけではない。

蒲生梅氏郷、鈴木鳥重秀と鈴木雀重朝……劍丞隊の荒事担当がそろそろと姿を現した。

そして……

「剣を振るうは部門の恥なれど、

戦場の心得を解さぬ狼藉者が相手なれば、是非も無し……」

かつて三河の地で九十郎から剣を学んだ（第11話）榊原歌夜康政が、険しい表情と共に現れ、刀を抜いた。

「また敵同士かよ、愛弟子……」

なお、歌夜が九十郎の敵に回るのはこれで5回目である（第12話、15話、55話、99話）。

「九十郎さん、どうしてこのような事を……」

人を斬り殺生を行うなど、武士たる者のやる事ではありません!!」

「いやアホかあ!?! むしろ率先して斬り殺すのが武士だろ?!」

「く……どうやら乱心したようですね……」

「いや、お前の方が乱心って言うか、たぶん蘭丸に洗脳されてるぞ」

九十郎が歌夜に向き直り剣を構える。

剣豪将軍と名高い一葉も強敵だが、九十郎が手塩をかけて鍛え上げ、磨き上げた歌夜もまた強敵だ。

歌夜を相手に一対一でも危ういというのに、一葉も梅もそれぞれ武器を構えて九十郎を取り囲み、その後ろで烏が火縄銃の火蓋を切っている。

物凄く、物凄く拙い状態だと否が応でも理解させられる。

「そんな……来ちゃ駄目だと言ったのに……」

そして一方、彼女らに助けられた剣丞は思わず天を仰いでいた。

助けられた側だというのに、どうしてこうなつたと頭を抱えたい気分だった。

一葉、梅、歌夜、そして烏と雀……たつた今駆けつけた頼れる仲間達は一人残らず蘭丸によつて常識を書き換えられ、戦闘Ⅱセックスだと思ひ込まされている。

男と女で相対し、服を脱ぎ、愛撫し合い、挿入して腰を振るのが常識的な戦いだと思ひ切っている。

九十郎のように剣を振り回し、人を殺す者は戦場の常識を無視した狼藉者、非常識なヤツだと疑わない。

……なお、この誤つた常識の下で織田軍と戦い、全員仲良くイカされているため、本来は彼女達をイカせた男達に従っているべきなのだが、その辺は『織田軍と戦つた』記憶を綺麗に消去する事で回避している。

剣丞を哀れんだ蘭丸の恩情である。

さておき、常識を書き換えられた彼女達が九十郎を取り囲んでいる。

一葉達が負ければ九十郎に斬り殺される。

だが逆に一葉達が勝てば……彼女達は自身の常識に従い、九十郎とセックスを始める

だろう。

劍丞はそれを避けるために劍丞隊全員を後方に下げ、『絶対に前線に来てはいけない』と何度も何度も念押ししたのだ。

「たあああつ!!」

そんな劍丞の願いも空しく、目の前で歌代が九十郎に斬り込んでいた。

「ええい、また腕上げたな愛弟子いつ!」

「日々鍛えていきますから……ねえつ!!」

刃と刃が打ち合って火花が散った。

かつて三河の地で学んだ神道無念流の技の冴えは今なお健在、その劍閃が向けられる者は教えた側である齋藤九十郎だ。

ある意味で酷いブーメランである。

「袋叩きは少々気が引けるが……」

「何を仰るのですかっ!？」

相手は戦場で剣を振るう不心得者、卑怯ではありませんわ!」

「……ふむ、それもそうか。何かこう、妙なものが胸の奥で引つかかるのだがのう」

「四の五の言つてないで助太刀ですわ!」

そして一葉と梅が左右に分かれ、歌夜とは別方向から九十郎に斬りかかる。

「邪魔すんなよ將軍がよおっ！」

「尋常な一騎打ちを望むなら、まず劍を捨てよ！」

「そうですわっ！ 劍を捨ててお○んぼをお出しなさい！」

「出すかアホオツ!!」

なお、ついさつきまで吉音とナニをされていて袴を履き直す時間も無かったため、現在九十郎はアレをぶらぶらさせながら戦っている。

本場に本場に、なんて酷い絵面の戦いである。

「(や、やべえ、こいつは……ま、負ける……)」

くそ、歌夜だけでも手こずってるのに、將軍も金髪もかなり強いぞ……)」

威勢だけは良かったが、内心で九十郎は焦りまくっている。

新当流の使い手である劍豪・今川氏真こと鞠が来ていないのは不幸中の幸いかもしいないが、それ込みでも劣勢だ。

「く、くの……」

劍閃が光る。

何度も何度も致命の一撃が九十郎に迫る。

その全てをギリギリで受け、ギリギリで避け続けているが、その度に気力と体力が削られていた。

「ああ、クソがよっ！ あと少し……あとほんの少しかったのによおっ!!」

九十郎は悪態をつきながら諦めきれずに戦いを続ける。

実際の所、寸前で一葉が邪魔をしなければ九十郎は蘭丸を殺せていた。

蘭丸一人殺す事ができれば、織田軍、越軍双方の洗脳は一気に解除され、この無意味な大乱交は止まる筈だった。

それなのに……

「クソがあっ!! 邪魔すんなあっ!!」

「だが断るっ!」

一葉達3人は休まず攻め続ける。

九十郎は一瞬も休まずに3人からの攻撃を躲し続け、彼女達の3倍以上の消耗を続ける。

強行突破して蘭丸を狙おうかとも考えたが、弾を込め、火蓋を切り、無言で銃口を九十郎に向ける鳥の存在が物凄く邪魔だ。

今は戦闘に参加していないが、一葉達3人から距離を取れば狙撃するつもりなのだろ
う。

一葉達3人を無理矢理突破する事も難しいが、狙撃態勢に入った雑賀孫一の目の前を横切つて蘭丸を斬るにはさらなる奇跡が必要になる。

このままでは負けると分かっているながら、ギリ貧のチャンバラに付き合わざるを得ない……九十郎がここまでかど軽く絶望したその時。

「や・め・ろおーっ!!」

そんな九十郎の絶望を吹き飛ばすかのように飛び込んで来た一人の少女がいた。

徳河吉音が九十郎を守るために飛び込んできたのだ。

「な、吉音!? 動けるのか!」

「うん、蘭丸って娘を斬ろうとしたらまた全身固まって動けなくなるみたいだけど……」

吉音は自らの身体の調子を確かめるように、剣魂を握り直し、構え直す。

身体の硬直は無い。

吉音は先ほど蘭丸の催眠、あるいは思考誘導を受け(第162話)、心の中で嫌がっている殺人を禁止されている。

だがしかし……

「うん……大丈夫みたい。」

人を殺すために戦う事はできなくても、友達を守るためだったら戦える!」

自然と身体に力が張るのが分かった。

ついさつき身動きの取れない自分を押し倒し、下着を引っぺがし、犯してきた相手で

あるが、それでも九十郎は吉音の友達だ。

友達が目の前で殺されそうになっているのなら、例え危険であっても戦える……それが徳河吉音の魂の叫び、魂の震えであった。

「お前……お前って本当に良い女だよな」

「良い女でしょ、でもあたしは八雲の彼女だからお触りは駄目だからね」

「……さつきは本当に済まなかった」

「うん、後でビンタ10回だから覚えといてね。あたし結構忘れっぽいから」

「補修とか追試の時間とか頻繁に忘れるよな」

「宿題とかも良く忘れるね」

「提出10分前に写させてるのは本気でやめろよお前、

俺以外にやったら友達なくすからな」

「あはは、いつもお世話になってます」

吉音と九十郎がゲラゲラと笑いながら背中を預け合う。

一葉、歌夜、そして梅が2人を囲む。

3対1の戦力差が1・5対1に縮まり、背後を気にする必要が無くなった。

劣勢の九十郎にとって、これ程頼りになる味方はいない。

なお、さつき九十郎にブラとパンツをはぎ取られたため、吉音の格好は光るパジャマの上着だけである。

酷い絵面がもつと酷くなっている。

そして……

「はあああつ!!」

「なんとおおつ!!」

一葉と吉音が、戦国時代のガチ將軍と大江戸学園のなんちやつて將軍が剣を交える。

「良い加減に観念なさい!」

「九十郎さん、ここままです!」

「まだだ、まだ諦めねえぞ!」

梅と歌夜が再び九十郎に斬りかかる。

攻め手が1人分減り、捌く九十郎に僅かだが余裕ができる。

「死にたくなやどけえつ!」

攻められつばなしだった先程と違い、今度は九十郎の方から反撃する事も可能になった。

劣勢なのは変わらないが、絶望的な大差は消え、奮戦によってひっくり返せる可能性がある差になった。

「吉音えっ! 絶対に倒れんじゃねえぞ!」

「こっちは任せてっ! なんとかするから!」

そして何より、背中に友がいた。

友が背中を守り、共に戦っていた。

それが九十郎の力を何倍にもしていた。

だがそんな均衡も長くは続かない……吉音と九十郎の剣魂が同時に光を放ち、ナノマシンを放出して2匹の獣を現出させる。

「……………えっ? マゴベエ!?!」

「がらがらどん!?!」

剣魂が勝手に起動した事に驚く暇も無く……ズドオンツ!! という破裂音と共にナノマシンの集合体、マゴベエとがらがらどん3号の胴体の大きな穴が開いた。

「……………」

撃つたのは鳥だ。

吉音の参戦により九十郎に相対する人数が減り、射線が通るようになったのを彼女は見逃さなかった。

そして鳥が引き金に指をかけたのを感じし、マゴベエとがらがらどん3号が自ら盾になつて九十郎を守つたのだ。

「……………やつべえ」

九十郎が冷や汗を流す。

マゴベエとがらがらどん3号が光の粒子となって消えていく。

吉音と九十郎の剣魂のバッテリーとナノマシン残量は今の攻防で空になった。

大江戸学園に戻って補給しなければ、マゴベエやがらがらどん3号の助けは得られない。

次を撃たれたら死ぬ……九十郎はそう確信してしまう。

「……弾込め前に潰す！ 吉音、抑えててくれ！」

「わ、分かった！」

九十郎がダツシユで歌夜と梅の間を抜け、鳥へと迫る。

鳥が使ったのはごく一般的な火縄銃だ。

弾込めには約1分、早合を使っても約30秒はかかる……その前に鳥を戦闘不能にしなければ終わりだと、九十郎は全力で走った。

走ったが……

「お姉ちゃん！」

「……………くっ」

九十郎は雀に気づいていなかった、雀が見えていなかった。

鳥のすぐ隣にいた鈴木雀重朝がいた。

九十郎が駆け出した直後、鳥は手にした火縄銃をぽいっと投げ捨てる。

そして雀が弾込めを完了し、火蓋を切り、今すぐ発射可能な火縄銃をほいと鳥に投げ渡した。

「そんなのアリかよおっ?!」

がちやりと、鳥が九十郎に対し火縄銃を構え直した。

九十郎が瞬時に鳥への突進を中止、90度曲がつて真横に飛んで地面に転がり……直後にズドオンツ!! と再び破裂音が響き渡る。

「あ、あつぶねえ……」

銃弾が九十郎の顔を掠めて飛んだ。

火縄銃には引き金を引いてから銃弾が発射されるまで、僅かな時間のズレがあるという弱点がある。

その僅かな時間があったが故に、九十郎はギリギリで回避できたのだ。

だがしかし……

「……んっ」

「ほいさっ!」

鳥が再び発射済みの火縄銃を投げ捨てる。

雀が再び装填済みの火縄銃を投げ渡す。

僅か1秒で鳥は九十郎を狙い撃てる態勢を整えた。

そして九十郎は後先考えずに真横に飛んで姿勢が崩れ、膝立ちの状態だ。その状態で雑賀孫一の狙撃をもう一度躲すのは不可能である。

「……………」

烏は銃口を九十郎に向け、引き金に指をかけたつても、撃つてはいない。

だが九十郎の急所を真つすぐに見据えるその眼が『少しでも動けば射殺する』と雄弁に物語っていた。

「や、やべえ……動けねえ……」

九十郎が盛大に冷や汗を流しながら硬直する。

烏の向ける銃口は、蘭丸の洗脳以上に強力に九十郎の動きを止めていた。

「……………びしっ!」

烏が『ミツションコンプリート』とでも言いたげに劍丞に向かってドヤ顔でサムズアップした。

「九十郎!? ?でしよ!?!」

そうなるたたった1人で一葉、歌夜、梅の3人を抑えようとした吉音も無事ではない。すまない。

「掛かれえっ!!」

吉音の注意が烏と九十郎へ向いた瞬間、一葉がそう叫ぶと同時に吉音に突進して組み

付いた。

「あわわっ!? く、うう……」

吉音が慌てて避けようとしたが間に合わず、勢いをつけて飛び掛かった一葉に押し倒され、組み合った状態で2人揃って転倒した。

「その剣……やはり刃引きをしていたな」

1分にも満たない攻防の中で、一葉は吉音が人を斬れないように加工された剣を使っていると素早く見抜いていた。

吉音の戦い方が、人斬りのものではなく、殴り倒して昏倒させる事に主眼を置いたものだと見抜いていた。

「うう、この……離して……」

刃引きをされた剣では、組み付かれた相手を殺傷できない。

敵を倒すためにある程度の速度が必要で、速度を出すために距離が必要なためだ。

そして梅も歌夜も、吉音が無力化された瞬間を見逃し、放置するような間抜けではない。

「貴女も観念なさい! こんな物を振り回すんじゃありませんわ!」

「貴女も武士なら……」

いえ、武士じゃないかもしれませんが、とにかく真つ当に戦いなさい!」

梅と歌夜もまた倒れた吉音に掴み、3人がかりで抑え込みに入った。
そして……

「ああ！ マゴベエッ！」

吉音の唯一の武器、剣魂が力づくで奪われるまで、そう長くはかからなかった。

「やべえ、本気でやべえ……」

九十郎は少しでも動けば撃たれる状態で、吉音は物理的に組み伏せられ、蘭丸の洗脳を防ぐ剣魂を取られてしまった。

もはや絶体絶命と思われたその時……

「九十郎おっ！」

その時、九十郎の名前を呼ぶ女性が現れる。

その声を九十郎は知っている。

絶望に沈みかけた九十郎の目に再び希望が宿る。

「……九十郎」

九十郎を呼ぶ別の声も聞こえる。

その声も九十郎は知っている。

その声の主は、九十郎の主君である美空と、ファースト幼馴染である光璃だ。
九十郎が顔を上げ、目を見開くと、そこには確かに美空と光璃の姿があった。

美空と光璃は荒縄で両手首を縛られ、明らかに織田軍の兵士約10名に周囲を固められて護送されていた。

「……美空、光璃、何やってんだ？」

「そっちこそ何やってんのよ？」

「見て分からねえのか、銃突きつけられて動けねえんだよ」

「ああそう、こっちは途中で力尽きて取り押さえられたわ」

「……銃弾が尽きた」

「綾那は……あのクソ弟子はどうした？ いないのか？」

「途中で別れて……え？ 来てないの？」

「……クソがよ、役に立たねえなああの糞弟子は」

九十郎は絶望と共に天を仰いだ。

劍丞には絶体絶命のピンチに頼れる仲間が駆け付け、自分の絶体絶命のピンチにはクソの役にも立たない奴らが駆け付けた。

これが持つて生まれた天運の差なのかと、これが主人公と自分の運命力の差なのかと、九十郎は絶望した。

「さて、それじゃあ後は君達4人を全員洗脳すれば完全勝利って訳だ」

蘭丸がニマアと笑った。

ついさつきまで情けなく狼狽していたのが嘘のように、余裕たつぷりの笑みを浮かべていた。

そして蘭丸が九十郎以外の3人を一気に洗脳しようと精神を集中させ……集中し……主中止……能力が発現する前にふらついて倒れそうになった。

「蘭丸!! 大丈夫なのか!」

「あぐう、うう……思ったより消耗してる……これ以上能力を使ったらまた気絶しそうだ。」

どうする、回復するまで待つか? いやでも忍者が何かする前に決着はつけたい……」

劍丞に支えられながら、蘭丸は両足をぶるぶると震えさせ、ぜえはあと呼吸を荒げる。

ここまでの戦いで蘭丸は超能力を使い過ぎ、普通に立って歩くのも大変な程に消耗していた。

それ故に蘭丸は……

「じゃあ仕方ない、手分けして4人共イカせて。できるだけ時間をかけず、手早くね。絶頂した瞬間を狙えば、普段の何倍も何十倍も楽に洗脳できる。」

それなら今の私でも気絶せずに洗脳できるから」

……蘭丸は周囲の織田兵達にそう命令した。

それは戦いの方法を指示するものではない。

戦いが終わり、捕虜となった者達への処刑方法を指示するものに他ならない。

それは九十郎達4人にとって、処刑宣告に他ならなかった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第170話『立て、撃て、斬れ』

……綾那の感情が爆発していた。

「そんな事はどうでも良いのです！ さつきから聞いていれば劍丞様が間違ってるって

異常だって！ 人を殺して平気なお前達の方がよっぽど異常なのですっ!!」

『おい異常だとは言ってねえよ。それに俺だって人殺しが平気って訳じゃ……』

「綾那はずっと斬り続けているのですよ！ お師匠の言う『その他大勢』をつ！

鬼になった人も斬ったのです！ 本当は被害者だって、

今は鬼でも元は普通の民草で、綾那が守らなきやいけない民草だって知ってるのに、それでも斬ったのです！ 痛くて！ 辛くて！ キツくて！ 手が真っ赤になって

！

血の臭いがこびりついて！ それでもそれでも斬り続けたのですよっ!!

いつか人を斬らずに生きていける日が来るって信じてっ!!」

『おい綾那、今はそんな事言ってる場合じゃねえだろ!?』

「今後回しにして、いつ話せつてんですかあつ!! 本当は誰も斬りたくない、

本当は誰も殺したくない、そんな簡単な事を何度後回しにする気なのですか!？」

『だが剣丞のやり方だつて問題あるだろっ!?』

「それでも! 剣丞様は行動してるのですよっ!! 横から出てきてアレが悪い、

コレが悪いと文句しか言わないお師匠より万倍マシなのですっ!!」

九十郎が剣丞を否定する言葉を口にした瞬間、頭がカーツと熱くなつて、指の傷がズキズキと痛んで、感情の赴くままに叫びまくっていた。

かつて自身に剣を教えた恩人を全否定するような事を……という気持ちも無い訳でないのだが、少なくとも綾那が話を聞いた限りでは、九十郎よりも剣丞の言う事の方が正しいように思えたのだ。

そして言いたい事を一通り言つて、気がつけば通信は途切れていた。

綾那の方がD・ゲイザーを操作した訳では無い……と言うか、綾那は操作方法を全然知らない。

たぶん一二三あたりが何かしたのだらうなと思つたが、今となつては綾那にはどうでも良い事だつた。

「はあ、はあ、ふうう……」

荒い息を整える。

どうやら呼吸する事すら忘れて叫びまくったようだ。

「指はもう……痛くない……のです……」

出陣前に誤つて小刀を刺してしまった手を何度か握り、開く（第151話）。

気がつけば血は止まり、ズキズキとした痛みはもう無視できるくらいに小さくなつていた。

「綾那が迷うのをやめたからですかね……いや、きつとそうなのです」

綾那はそう信じる事にした。

こんな事は間違つていてると思ひながら人殺しを続けた自分を諫める為に、神仏が指の痛みを通じて訴えていたのだろう……綾那はそう信じる事にした。

そして呼吸を整えたら……息を殺して自身を見つめる何者かの気配を感じ取つた。

「そこに隠れているヤツ、もうバレてるから逃げるなり出てくるなりするのですよ」

そう声をかけると、隠れていた人物は綾那の目の前に姿を現した。

「高名な武芸者とお見受けします……貴女のお名前は？」

「三河の本多綾那忠勝なのです」

「いきなりビックネームが出てきたな」

「びつくね……ええ？」

何か良く分からない単語が出てきたが、綾那は一先ず無視する事にした。

その人物は如何にも奇怪な見た目をしていた。

男のようだと思えば男のように見えた。

女のようだと思えば女のように見えた。

老人のようだと思えば老人のように、若者のようだと思えば若者のように見えた。

美しいと思えば美しく、醜いと思えば醜く見えた。

くるくる回る万華鏡を覗いているかのように、見た目が一定していないのではとすら思えた。

そしてその人物は、吉音や光璃と同じく大江戸学園の女学生用の学生服を着ていた。

「大江戸学園の関係者なのですか？」

「学生だよ。こっちに来てからもう何年も経ってるから、

たぶん退学扱いになってると思うけど」

「何者なのですか？」

「ジェロ……いや、やっぱりこっちの流儀に合わせよう。」

天草四郎時貞、それが私に与えられた名前……だと思ふ、たぶん」

面倒臭い話が出てきそうなので、綾那は『たぶん』という部分は無視する事にした。

こういう所で直感的に最適解を引き当てるのが本多忠勝である。

「それで、お前は綾那の敵なのですか、それとも……」

綾那が名槍・蜻蛉切を構える。

槍を握り締めた瞬間、再び右手の指がズキリと痛んだ気がした。

「敵か味方かと言うなら……敵だね」

そして天草四郎と名乗った人物は、奇妙な肉片を取り出した。

指が一本だけ残った腕を……

「……森宗意軒の指、最期の一本。忍法・魔界転生、使えるのはあと一回」

「魔界転生……？」

その言葉を聞いた瞬間、綾那は全身が総毛立つような悪寒を感じた。

何か途轍もなく嫌な事が起きるような予感がした。

「お前が何者で、何をしでかそうとしているのか知らねーですけど。」

お前が敵だって言うのなら、綾那にできる事は『ただ、勝つ』事だけなのですよっ!!」

そうして綾那が蜻蛉切で突き刺そうと全身に力を籠めた瞬間……ズキンと、指に特大の痛みが走った。

『違う、そうじゃない』と、目に見えぬ神仏達から叱責された気がした。

「く、綾那は、綾那は……本多忠勝にできる事は『ただ、勝つ』だけなのに……」

綾那は必死に頭を巡らせる。

武器を振るい、敵を殺す。

本多忠勝はそれ以外知らず、それ以外は何もできない。

少なくとも綾那は、そう思っていた。

あるいは、そう思い込んでいただけじゃないか……と、綾那は思った。

「ああ、そうか。こうすれば良かったのですか……」

そして綾那は、天草四郎の目の前で蜻蛉切を投げ捨てた。

……

……

……

「……あ、そうだ。こいつを殺せば九十郎とお別れしなくて済む」

……犬子がぼそりとそう呟いた。

その時、地面に落ちた詩乃の策が書かれた紙片が視界に入った。

何度も読もうとしても全く読めなかった紙片が、今はちゃんと意味のある文字として

読めた。

そして犬子は……手にした筈を目の前の男の全力で眼球に突き立てた。

前田利家の筈斬りである。

「ぎゃああああああっ!!」

直後、悲鳴が上がる。

蘭丸の洗脳によつて、例え戦争中であろうとも人殺しは禁忌と思ひ込まされている。戦闘Ⅱセックスという常識において、正々堂々と戦ひ、勝つて下した相手にいきなり刺される……その衝撃は半端なものではない。

「死ね！　死ねえっ!!」

犬子が苦しみ悶える男に飛び掛かり、突き立てられた筈を思い切りブン殴る。何度も、何度も殴りかかる。

犬子の拳に押された筈の先端が、男の眼球を貫通し、脳にまで達し、ぐしゃりと脳漿をかき混ぜる。

血と脳漿がぐちゃりと吹き出し、犬子の顔にかかる。

「ひ、ひい……」

「こ、こいつ人殺しを……」

周囲の者が後ずさる。

今の犬子の暴挙を例えるならば、戦争に負けておいて講和条件が気に入らないと言つて桓公に刃を向けて脅迫する曹沫の如き行動である。

いや、刃を向けるどころか、人殺しまでしている点では曹沫よりもタチが悪い。

武家としての良識がある者程、今の犬子の常識外れの行動に戦慄していた。

「ああそうだ、犬子は人殺しだ。紛うことの無い人殺しだ」

犬子は男の頭の中に指を突っ込み、深々と突き刺さった筈を引つ張り出した。

「人殺し……どうあつても前田利家は人殺しだ。

愛しい人から贈られた筈を奪われ、面罵された程度で人を斬つた。それが前田利家だ。

前田利家だから、前田利家は人殺しだから、

今日、ここで、犬子はまた人を殺した。愛しい人から引き離されるからと人を殺した」

犬子はぶつぶつと呟きながら立ち上がる。

そして九十郎から……愛する人から贈られた筈を髪に挿して、怯える織田の将兵達をキツと睨みつける。

「だけど、人殺しだから戦えるのなら。前田利家だから戦えるのなら……」

犬子は、今日、生まれて初めて、前田利家に生まれて良かったと思う」

そして犬子は戦鬪前に使わないからと投げ捨てた刀を拾い上げ……

「……お前ら皆殺しだあっ!!」

犬子が吠えた。

そして織田の将兵の顔面に刃を叩きつけ、絶命させた。

「うおおっ!! 暴れ出したぞ!!」

「ええいつ! 誰か取り押さえろおっ!!」

「取り囲め! 縄を持ってこい!」

織田の将兵達が慌ただしく動き始める。

いくら戦闘Ⅱセックスと常識を書き換えられているとはいえ、目の前に刃物を持って暴れている奴がいる時まで非暴力主義は貫かない。

脇差といった最低限の護身具を使い、それすら持っていない者はその辺にあった木の枝や縄を使ってどうにか抵抗を試みる。

「死ね! 死ねえっ! 犬子から九十郎を奪おうとするヤツはみんな死ねえっ!!」

そうこうしているうちに犬子は織田の将兵達を殺傷していく。

一人斬り、二人斬り、三人斬り、四人斬り……斬る度に刃に血と脂がこびりつき、重く切れ味が鈍っていく。

刀を振り上げ、振り下ろす度に、手足に疲労が蓄積されていく。

織田軍は万を超え、越軍は既に一人残らず戦闘不能になっている。

織田軍が弱卒を越えた超弱卒であろうとも、いくらなんでも犬子一人で全員斬り殺していくのは不可能だ。

どこかで刀が折れ、どこかで犬子の気力と体力が尽き、美空や光璃と同じように取り

押さえられてしまうだろう。

「犬子……なんで……なんでこんな事になっちゃったつすか……」

柘榴は動かない。

柘榴は動けない。

彼女は前田利家ではない。

良くも悪くも、柘榴は武家社会の常識に染まってしまっている。

彼女にとって、人殺しは禁忌だ。

人殺しは禁忌だから、犯す事はできない。

そもそも、主君の目の前で主君のお気に入り茶坊主を斬殺したなんてトンチキエピソードが残っている武将なんてそうはいない。

柿崎景家にそんなエピソードは一切無い。

可能性があるとすれば、天下一の短気こと細川忠興くらいであろう。

ともかく、柿崎景家たる柘榴には、犬子のように刀を抜き、織田の将兵を斬殺するよ
うな真似はできない。

しかし……

「読んだ……読んだのですね？ 私を描いた策を」

……柘榴には無理でも、柿崎景家には無理でも、竹中半兵衛であればどうだろうか。

彼女もまた前田利家ではない。

主君の目の前で主君のお気に入り茶坊主を斬殺したなんてトンチキエピソードは残っていない。

だがしかし、主君を諫める為にたった17人で稲葉山城を占拠し、信長に黒田官兵衛の子を処刑したと報告しつつこっそり匿うといった頭ハジケリストなエピソードが現代まで残っている。

自分が正しいと信じれば、主君が間違っていると思つたならば、躊躇無く歯向かつてくるのが竹中半兵衛だ。

そんな竹中半兵衛であれば、蘭丸によって植え付けられた戦闘セックスの常識を、あるいは良識を踏み越えられる可能性があるのではなからうか。

「うん、読んだ。読めたよ。XXXって書いてあつた」

犬子が人斬りの手を僅かに止め、詩乃の問いに答えた。

肝心要の所は急に耳が遠くなり聞こえなかつたが、犬子は確かに読めたと言つた。詩乃は仕草や表情、目つき、声色等から他人の考えを読む事に長けている。

だから詩乃は、犬子は確かに自分の策を呼んだのだと確信する。

「そう……ですか……それならば……」

詩乃がしばし瞑目し、大きく息を吸い込んだ。

犬子の言動から、策を描いた紙片を読む方法はすぐに思いついた。

その方法を実行するのに、詩乃の良心が、良識が邪魔をする。

「やれ……動け……動きなさい！」

自分自身に何度も何度も言い聞かせ、無理矢理身体を動かそうとする。

戦闘Ⅱセックスと常識を書き換えられた彼女にとって、殺人は戦争中であろうと犯してはならない禁忌である。

戦闘に負け、降伏を宣言した直後にそれを翻すのは、武家にとって切腹しても繕えない程の恥晒しである。

それでも、それならば、だがしかし……詩乃は自身の良識と常識を噛み殺し、踏み越える。

「……そおいつ!!」

詩乃はその辺に落ちていた手ごろな大きさの枝を拾うと、自身を犯してイカせた男の顔面目掛けてフルスイングした。

ボカッ! と鈍い音と共に、男が倒れ伏す。

「……一発では死にませんでしたか」

詩乃は自身の非力さにため息をついた。

男は思い切り顔面を殴られつつもまだ死なず、血反吐を吐きながらもぞもぞと地を

這つてその場から逃れようとしている。

地面に落ちてゐる策を書いた紙片を見たが、やはり何が書かれているのかまるで理解できなかった。

「一発で駄目なら、何度でも繰り返すまでです」

殴つた衝撃で折れた枝は捨てて、今度は重くて硬そうな石を担ぎ上げる。

そして倒れた男の上に馬乗りになつた。

全裸の女が全裸の男に馬乗りになり、騎乗位セックス……のように見えるが、そうではない。

詩乃は直立する男根には目もくれず、拾つた石を持ち上げると……

「……えいつー！」

……振り下ろして男の顔面を潰した。

「ぐああつー！」

ぐしゃあつー！ と周囲に血が飛び散つた。

詩乃の顔に、胸に、両腕に返り血がかかり、思わずむせそうになつた。

二度、三度、四度と石を持ち上げ、振り下ろし、男の顔面に叩きつける。

その度に周囲に血と脳漿が飛び散つて、グロテスクなものをブチ撒ける。

「ぐあいつー……ぐあー！ あがつー！ や、やめて……ぐあいつー！」

男の抵抗が徐々に弱くなっていく。

詩乃はこみ上げる吐き気を必死に堪えながら、何度も何度も石を振り下ろし、男の顔を念入りに潰す。

そしてついに……男は完全に息絶え、物言わぬ骸と化した。

「ああ、やっと読めました」

詩乃がほつと一息ついてそう呟いた。

正直、ここまでやって読めなかつたらどうしようとか考えていた。

基本病弱な彼女にとって、石を持ち上げて振り下ろすだけでも結構な重労働なのだ。

『武器を取れ、敵を殺せ』それが、詩乃が描いた策の全容だった。

「あ……あははは……あくっはっはっはっはっはっはっ!!」

自然と、詩乃は腹を抱えて笑い転げていた。

石を何度も振り下ろす重労働をして、禁忌としか言い難い人殺しを行い、そうまでして読んだ策の中身がそれだった。

「な、何ですかコレ？　こんなのは策でも何でも無い、ただの殺人教唆ですよ！　こんな物を大真面目な顔して、

手首が動かなくなるまで筆を取って皆に配ったのですか!？」
こうなつてはもう笑うしかない。

この最悪極まる状況から一気に逆転する妙案が書かれているのではと、密かに期待していた。

それが出てきたのは、変身超獣ブ○ツケンと戦うウ○トラマンエースにウ○トラ兄弟が送ったサインと同じくらい単純なものだった。

とはいえ……その単純極まるメッセージこそ、蘭丸にとって最も見られたくないものであ

る事だけは確信できる。

「ああ、だけど理解できました、思い出しました。

間違っているのは常識の方で、戦争とはつまり互いに手を尽くし、知恵を尽くし、力の限り人殺しを続ける事に他ならないのですね」

詩乃は……竹中半兵衛は理解した、確信した。

正しいのは自分の方で、間違っているのは常識の方なのだ。

そして自身が正しいと確信した時、竹中半兵衛は相手が斉藤龍興だろうと、織田信長

だろうが、自身の常識であろうが、黙って従うような性格ではない。

知識と知略の限りを尽くし、全力で抗うのが竹中半兵衛である。

その竹中半兵衛が、その辺に落ちていた脇差を拾うと、すつくと立ちあがる。

万を超す軍勢に立ち向かう武器としては少々心許ないが、その辺に落ちていた武器の中では比較的マシに思えた。

「このおっ！ 死ねっ！ 死んでしまえっ！」

犬子が変わらず暴れ続けている。

彼女が刀を振るう度に腕が飛び、脚が飛び、首が飛び、血が飛び散り、織田の将兵の命が散っていく。

九十郎から受け継いだ神道無念流の剣の冴えには、弱卒を超えた超弱卒となった織田軍ではどうする事もできやしない。

ただしそれは……犬子が無尽蔵の体力を持ち、犬子の剣が無限に斬れるアロンダイトの如き魔法剣であったとすればの話である。

「ぜえ、ぜえ、はあ、はあ……」

敵を斬る度に犬子は疲労していく。

刀は血と脂を纏い重くなっていく。

息がどんどん荒くなっていく。

「犬子、もう諦めよ。これ以上見苦しい手向かいをしても良い事など無いぞ」
久遠が犬子に語りかける。

唐突に曹沫の如き暴拳に出た元部下を本心から心配して止めようとしている。

「嫌だ！ 絶対に嫌だ！ 犬子から九十郎を奪おうとする奴は全員敵だっ！」

みんなみんな殺してやるうっ!!」

しかし、犬子は止まらない。

「たった一人で勝てるんでも思っているのか!？」

「うるさい！ 九十郎から引き離されて生きるなんて死んだ方がマシだ！」

勝てないなら勝てないでも良いっ！」

それならお前達を一人でも多く道ずれにして死んでやるっ!!」

犬子はそう叫ぶと、血と脂と刃毀れで殆ど斬れなくなった刀を握り直し、周囲の将兵

達に飛び掛かっていく。

「くそっ！ 囲め、後ろから攻めろ！」

「縄だ！ もっと長いのを持ってこい！」

「怯んだぞ！ 叩け叩け！」

織田の将兵達とて棒立ちで斬られるのを待っている訳では無い。

その辺にあった木の枝で防戦する者もいた。

荷物を縛る縄を解き、犬子に投げつける者もいた。

刀よりも長い棒を持ち出し、犬子の背を叩く者もいた。

その一つ一つはか弱く、か細い抵抗に過ぎなかったが、犬子の体力を確実に消耗させていった。

「やめろ犬子！ 勝てるはずが無い！」

久遠が叫ぶ。

「それでもっ！ それでもだあっ!!」

犬子が叫ぶ。

気力の体力の限界は刻一刻と迫っていた。

その時……

「……いいえ、勝てますよ」

……詩乃が犬子と久遠の間に割って入ってきた。

「し、詩乃さん!？」

「詩乃、まさかお前まで!？」

「犬子さん、私にも策が読めました。」

尤もあれは、策なんて呼べる物ではありませんでしたが

「とりあえず実践はしているけど、ちよつと勝てそうもないかな」

「何を仰りますか、勝てますよ。 ええ勝てますとも、私には無理でも犬子さんならば」

「え、犬子ならつて……」

詩乃は自身の右手をすつと犬子に差し出した。

「よもや忘れたのですか？ 敵は槍も無く、弓も鉄砲も無く、誰も具足を着けていない。

そういう状況に靦面に刺さる手札をお持ちではないですか」

「槍……？ 具足……？」

犬子は何の事だろうと首を傾げる。

自分は全力で抵抗している、全力で織田軍と戦っている。

使っていない手札なんて……そう思った時に、気がついた。

「犬子の……御家流……？」

「はい、人を犬に変えるあの能力であれば。 この状況を打開できます」

犬子は精神を集中して詩乃の腕を噛み、御家流を発現させる（第56話）。

すぐに犬子と詩乃の身体がゴキゴキと音を立てて縮んでいき、全身から毛が生え、牙が伸びる。

数秒もしない内に犬子と詩乃は犬の姿に変わった。

「ひいっ!?! な、何だあつ!?!」

織田の将兵達が腰を抜かす程に驚き慌てる。

目の前で人間が犬に変わるなんて光景、普通はS A N チェックものである。

「な、犬子!? お前、いつの間に御家流を!?!」

織田軍の者は犬子のこの能力を知らない。

かつて犬子の主君であった久遠ですら知らない。

だからこそ、この土壇場で出てきた隠し玉に動揺を隠せない。

そして二匹の犬が織田の将兵に飛び掛かり噛みついた。

「うわああつ!?!」

噛まれた織田兵が悲鳴を上げる。

自身の身体がミシミシと音を立てながら縮んでいき、腕の形が、脚の形が変わり、犬の姿に変わっていく。

「ひ、ひいいっ! い、犬に、犬になっていくう!?!」

「な、何だよこれえつ!?! 聞いてねえぞおつ!」

織田の将兵達は恐慌状態になっていた。

入念な戦闘訓練を積んでいれば、恐怖を覚えながらも崩れる事は無かったのだろうが、今の織田軍は弱卒を超えた超弱卒である。

そして犬子達に背を向けて逃げ出した者達は、次から次へと犬に噛まれていった。

噛まれた織田兵もまた犬になり、別の織田兵に噛みついて、噛まれた者は犬になる

い程になりつつあった。

犬の牙は鎧を貫通するようなものではない。

織田軍が通常の戦のように具足を着けていれば、槍や弓矢、鉄砲で完全武装していれば、ここまで早く犬の数が増える事は無かった。

肉も皮膚も常人の何倍も強靱な鬼が相手であれば、簡単に返り討ちに遭っていた。

だがしかし、今の織田軍は弱卒を超えた超弱卒で、しかも誰も具足を着けず、最低限の護身以上の武器も持ち込んでいなかった。

それ故に、犬子の御家流が靦面に刺さる事となった。

犬子と詩乃、たった二人の反攻作戦が、この劣勢極まる戦況を逆転させつつあった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第172話『大乱交のあとしまつ』

「あばよ蘭丸、成仏しろよ」

蘭丸が完全に息絶えたのを確認すると、九十郎は両目をそつと閉じ、瞑目しながら両手を合わせた。

この瞬間、越軍と蘭丸との非常に苦しい戦いは終わった。

織田軍には長尾家に喧嘩を売る動機が無く、この戦いは蘭丸がその超能力によつて無理矢理織田久遠信長を従わせて起こした戦いに過ぎない。

だから蘭丸一人が死ねば、それで戦いはおしまいだ。

これから始まるのは大〇獣のあとしまつ、ではなく大乱交のあとしまつである。

「オロロロッ!!」

まず最初に一二三が盛大に吐いた。

全身が汗でびっしょりで、顔は青褪め、手足は震え、もう死にかけなんじゃないかと思ふような有様だ。

「……………うう、何かクラっとした」

それとほぼ同時に、吉音や光璃といった常識改変を受けた者達が少しふらつく。

「お、おい一二三!? 大丈夫かよ!?!」

九十郎が一二三に駆け寄る。

「うええ……………あ、あんまし大丈夫じゃ……………うぶつ、無いかも……………」

ふ、船酔いを10倍か100倍酷くしたみたいな……………頭の中が掻き混ぜられるような

……………

あ、ゴメンまた吐きそ……………オロロロロロロッ!」

一二三が再び盛大に吐瀉物をまき散らした。

「これはもしかして、洗脳が解けた副作用……………なのかな?」

確か洗脳するのにも、洗脳の維持にも超能力を使うから、

洗脳した本人を殺せば、元に戻るって新戸の奴が……………

ああくそつ! 肝心な時に新戸の奴が死んじまったから良く分からねえな」

後で分かる事だが、この時の九十郎の推測は当たっていた。

蘭丸の死により一気に洗脳、催眠、記憶改変や常識改変から解き放たれた影響で精神

に異常が生じ、それが肉体の不調にも繋がっている。

戦闘Ⅱセックスと常識の一部のみ改変された軽微な洗脳を受けた者は数秒で終わる

軽い症状だが、一二三のように人格を破壊されて再構築されるようなガチ洗脳を受けた者は非常に重い症状が出ていた。

当然、同様のガチ洗脳を受けていた夕霧や湖衣、久遠といった面々も別々の場所で地獄のような苦痛を味わっている。

死んでもからも傍迷惑など九十郎は思ったが、こんなものは後々の大変さに比べれば序の口、地獄の一丁目に過ぎなかったと思ひ知る事になる。

「え……あ……嘘、何で……い、嫌あああーっ!!」

吉音が悲鳴をあげた。

近くに落ちていた自らの衣服（ガ○ダムの光るパジャマ）を急いで拾い上げ、自身の乳房や秘所が見られないようにと縮こまる。

蘭丸の洗脳が解けたとしても、洗脳されていた間の記憶が消える訳では無く、バタバタと気絶する訳でも無い（第154話）。

いくら常識を書き換えられていたとはいえ、秋月八雲以外の男に対し自ら口づけをして、股を開き、膣内射精をねだり、お嫁さんになりますと宣言した事に対する強烈な罪悪感、強烈な嫌悪感が吉音を襲っていた（第167話）。

これは夢だ、何かの間違いだと祈るような気分で自らの股間に視線を落とす……そこにあつたのは八雲以外の男から膣内射精をされ、今なお白濁液に塗れたオンナの部分で

あつた。

「ひ、酷いよ……こんなの無いよ……あ、あたし……八雲に何て言えば良いのさ……」
ポロポロと涙が零れ落ちる。

秋月八雲に詫びたい気持ちと、捨てられるかもしれない、嫌われるかもしれないという恐怖がせめぎ合い、吉音の心はズタボロになっていく。

「待つて、待つて、これは何かの間違い、一時の気の迷い、本意じゃなかった、

正気じゃ無かった、く、九十郎が……いや、劍丞が……あああ……」

光璃も普段の彼女からは想像もできない程に追い詰められていた。

劍丞に犯されながら浮気の言い訳のような事を言い、イカされた後は劍丞が好きだと、劍丞を愛していると宣言し、その愛の言葉は自分自身にすら本心からの言葉なのか、洗脳された故の言葉なのか分からず……それらの言動全てがよりにもよつて九十郎の目の前で行つてしまった（第169話）。

ここからどう名誉挽回、汚名返上すれば良いのか、武田信玄たる彼女にも流石に見当もつかなかった。

今すぐ逃げ出し、泣き喚き、高坂兔々昌信を抱き枕にしながら愛でる事で精神を復活させる兔々セラピーに走りたい気分であつた。

なお全然関係ない話だが、現代二ホンには武田信玄が高坂昌信に宛てて書いた浮気の

言い訳の手紙が現存している。

また、後日兎々はこの件について『御屋形様は本当にしよーもない人になのなら』とコメントしつつ、兎々セラピーによってズタボロになった光璃の精神力を回復させた事も付言しておく。

「ぐ、これは……なんだ、何が起きた……？ どういう事だ……？」

余が良いように操られていたというのか……？」

劍丞隊の面々も同じように常識が戻り、自身のこれまでの言動に愕然とするばかりであつた。

「あ……え、あ……ああ……や、やだあ……」

特に新田劍丞の目の前で九十郎に跨り、情けなく喘がされ、膣内射精まで許してしまつた鳥の衝撃と苦悩は凄まじいものがあつた。

どうしてあんな真似をしてしまつたのかと自身の言動を悔やみながら力無く膝をつき、呆然とした表情で震えていた。

そんな折、九十郎のD・ゲイザー型の端末に美空から通信が入つた。

『九十郎、蘭丸を殺したの？』

九十郎はすぐに端末を拾い、応答する。

「ああ、どうにかな。蘭丸は殺した、俺が斬つた。」

吉音とかの様子を見るに洗脳も解けているみてえだ。美空、そっちはどうなってる

？」

『こっちはちよつと酷い事になってるわね。急に洗脳がなくなつて、呆然としてるの、

泣きだしてるの、半狂乱になつて暴れるの、自殺しようとしてるのもいるわ』

美空からの話を聞き、九十郎はふうつとため息をついた。

当初目標としていた通り、蘭丸を速攻で殺し、織田軍とのセックス合戦が始まる前に洗脳から解き放つ事ができれば、もつとずっとマシな状況にできたのだろうか……だがしかし、今更後悔した所で状況は変わらない。

「しかしそうすると……ある意味では想定通りという事になるな」

そう……美空や九十郎は、蘭丸を殺したらそうなるだろうと事前に予想していた。

急に洗脳が解け、狂わされた常識が戻り、敵も味方も大混乱になると予想していた。

そしてその状態を放置したら……おそらく越軍が怒りと恥辱を晴らすために織田軍を殺し始めるだろうと予測していた。

今の織田軍は弱卒を超えた超弱卒、指揮官として動ける者はほぼ全員が犬子達に襲われて犬に変えられてしまっている。

ここから真つ当な戦闘が再開されれば、成す術も無く越軍に殺されてしまうだろう。

織田を滅ぼすのが目的であれば、それで良いが……

『それじゃあこっちは当初の予定通り、織田との戦いを止める方向で動くわ。そっちは口裏合わせ、良いわね?』

今の越軍の目的は現代二ホンの大江戸学園に辿り着く事、そして戦国時代の英雄の魂欲しさにナメた真似をしたオーデインを叩きのめす事である(第142話、143話)。織田信長の首だの、織田家滅亡だの、そういうのは正直いらないうか、後々やろうとしている戦国乱世終結を考えるとむしろ邪魔だ。

「戦いを止める……? 俺達や久遠を殺すんじゃないのか!？」

剣丞が信じられないといった表情でそう聞き返す。

「殺すって? いや、何で俺達がお前や織田信長を殺すんだよ、何のメリットも無いだろう」

「お前はたった今、蘭丸を殺しただろうっ!」

「コイツに関しては正当防衛だ、悪く思うな」

「俺は蘭丸に協力していたんだぞっ! 他の皆とは違う!」

洗脳もされていないのに、あの娘に力を貸していた、あの娘を守っていた!」

「それに関しては色々言いたい事もあるんだが、悪いが一旦保留にさせてくれ」

正直時間が惜しい、殺し合いが始まってからじゃ止めるの難しいんだぞ」

「だけど……でも……」

それでも納得できないという感情が劍丞の胸中に渦巻いていた。

殺されたい訳では無いが、蘭丸に協力した自分に何の咎めも無いのはどうかという思いもあつた。

「…………え？　今、ご主人様が洗脳されていないと言つたような…………？」

き、気のせいですよね、何かの間違い…………き、聞き間違いですよね」

なお、小波は今この瞬間まで劍丞は洗脳されているものとばかり思つていた。

彼女は全力で劍丞を助けようと行動していたが、その実全力で劍丞の足を引っ張つていた事に気づくのは、もう少し先の事である。

そうして劍丞と小波が悩んでいる所で…………ぱあんつ!!　と大きな音が鳴つた。

悩める劍丞の横つ面を比喻表現で無く叩いた者がいた。

「え…………あ…………？」

劍丞の頬が赤く腫れる。

叩いた側の右手も赤く腫れていた。

頬に涙が伝つていた。

指が震え、肩が震え、膝も震えていた。

怒りと悲しみ、後悔と絶望、そして失望で心をぐちゃぐちゃにかき混ぜられて、なんとも言い難い酷い表情になつていた。

「か……から、す……う？」

鳥が新田劍丞の頬を力一杯叩いていたのだ。

そして鳥は呆然とする劍丞をキツと睨みつけ……

「……大嫌い」

……そう告げた。

普段はあり得ないくらいに無口な鳥が、ハッキリとした声でそう告げた。

その場にいる全員にハッキリ聞こえる声量で告げた。

そして走った。

涙で頬を濡らしながら駆け出し、自分の着物と鉄砲だけを拾うとどこかへと走り去っていた。

「ちよ、お姉ちゃんどこ行くの!? 待って〜!!」

鳥の妹である雀が慌てて追いかける。

だが鳥を追いかけたのは雀だけ……劍丞は追いかけない、追いかけれなかった。

「そう……だよな……そりやそうだ……皆を守り切れなかっただけじゃない、

皆にあんな酷い事をさせたんだ。そりや嫌われるよな……」

劍丞はヒリヒリと痛む頬を抑え、俯きながらぶつぶつと何かを呟くだけだ。

「主様……仕方なかったとは言わん、余とて今回の所業には思う事もある。

だがな主様、それでも……ああ、それでも余は主様の妻で、主様の味方じゃ。それだけは忘れてはならぬぞ。それと……それと短慮を起こしてもいかん」

一葉が劍丞に寄り添い、震える手を握り締めた。

「そ、そうですねっ！ 私達の劍丞様への愛はこの程度では播るぎませんものっ！」
梅もまた劍丞に駆け寄ってその背を支える。

その言葉は表面上こそ劍丞を全肯定するものであったが……若干声が震えて、肩や喉に力が籠っている事に気づく者は多かつた。

まるで自分に言い聞かせているかのようだと思う者もいた。

「そ、そうですね！ その通りです！ 私達は何があろうと劍丞様のお味方です！」

ついさつき全力で劍丞の足を引っ張った小波が追従する。

劍丞が洗脳されていなかったという事実から全力で目を背けているものの、劍丞を愛している、劍丞の助けになりたいという気持ちだけは確かであった。

「ごめん……ごめん……本当に、本当にごめん……」

劍丞の表情は、彼女達が今まで見た事が無いものだった。

迷う事もあった、悩む事もあった、苦しむ事もあった、しかし劍丞にはいつだって未来を切り開こうとする意思があつた。

その強く輝くような意思是、覇気となつて皆を惹き付けた。

その覇気の輝きが、今の劍丞からは消えていたのだ。

だから一葉は、だから梅は、だから小波は、このまま劍丞が消えて無くなってしまうのではと心配になり、不安になり、劍丞に寄り添い、支えようとしているのだ。

「ああ、良かったな劍丞。」

こつぴどく負けた時に支えようとしてくれる人がいるのは、結構幸せな事だぞ」

九十郎はそんな一葉や梅、小波の姿を見ながら、小さく小さく呟いた。

あの様子なら、劍丞は大丈夫だろうと思った。

泣きながらどこかへ去っていった鳥も、劍丞がどうにかするだろうと思った。

「美空、こつちは大丈夫だ。事前に決めといた戦後処理に移ってくれ。」

それと……フラッシュ、ミラクル、ストロングの3パターン考えといたが、

どれを使うんだ？」

『アンタねえ……フラッシュは速攻で蘭丸を討ち取って損害軽微だった時、

ミラクルは蘭丸がトチ狂ってお友達になりたいって言い出した時に使うって忘れたの？

どつちももう使えないでしょうがっ!!』

「ああ、スマン忘れてた。じゃあ消去法でストロングだな」

『ええそうよ。一番単純で、一番無理があるストロングしかないわよ、こうなったら』

「おい美空、みらくるだの、すろんぐだの訳が分からぬ。

主様の死を前提にする計画だったとしたら、悪いが全力で手向かいをさせてもらおうぞ」

『ええご心配なく、残念ながら劍丞は殺さないつもりですよ、公方様。』

非常に不本意ながら』

「はあ……その声色からすると、

できれば殺したいが政治的事情で殺せないといった所かの」

『ご明察、殺したい理由について説明は必要でしょうか？』

「いらん、流石に分かる、理解もできる。だがな……」

『だがそれでも、劍丞を愛さずにはいられない……ですか、公方様』

「……その通りだ。全く、恋と言うものは盲目よのう」

美空と一葉が同時に、はっはっはっはと大声で笑う。

2人共表面上こそ笑っていたが、声も表情も全く笑っていないかった。

片方は『今は無理でも、いつか絶対に思い知らせてやるからな』という強い決意が、もう片方は『この先何があるうが、何が起ころうが、絶対に愛する夫を守り抜いてみせる』という強い決意があった。

『越軍全員に告げる！ 繰り返す、越軍の全員に告げる！』

さつきも名乗ったけど、越軍の総大将、長尾美空景虎より次の命令を伝えるわっ!!」
そして笑い声が止まると、今度は全ての通信回線を使い、全ての通信端末から同時に美空の声が聞こえてくる。

『これ以上織田軍と戦うのはもうやめなさい! 人類は皆兄弟っ!』

このまま血みどろの戦いを続けても虚しいだけで何も生まないわっ!

武器を納めて、戦いを止めなさいっ!』

つい先ほどは『武器を取れ、敵を殺せ』と命じた舌の根も乾かぬ内に、それとは180度方向転換した命令を伝えた。

直後、織田軍も越軍もキョトンとした表情で、何言っただコイツと喉まで出かかったのは言うまでもないだろう。

『さつきと言っている事が違うと思っただでしょう、無理もないわ。

でも聞いて頂戴! この戦いの元凶は森蘭丸という悪魔のような奴だったわ!

そいつが織田軍も私達もおかしくさせて、無理矢理戦わせていたのよ!

訳も分からずに武器を捨てて、服も脱いで、

馬鹿みたいにまぐわいをする事になったのもそいつの仕業よ!』

織田軍からも越軍からもどよめきが起きる。

「貴方達は全く悪くない! 織田軍だつて蘭丸に操られていただけの被害者よ!

そして今、皆が正気を取り戻したのは、

全ての悪の元凶である森蘭丸を討ち取ったからなの！

私達を織田軍と無理矢理戦わせていた森蘭丸が死んだのだから、

もうこれ以上の戦いは無意味なのよっ！」

そう、これこそが美空と九十郎が事前に準備した織田軍との全面戦争を避けるための秘策。

一番単純で、一番無理があるストロングな方法……全ての罪を蘭丸一人に押し付けた上で死んでもらう蘭丸レクイエム計画である。

「こ、こんなやり方で本当に戦争が回避できるか……」

「無茶でも何でもやるしかねえだろ。それより劍丞、口裏を合わせるぞ。」

「お前も蘭丸に洗脳されてて、良く分からない内に協力させられていたって設定だ」

「い、いや、だけどそれは……」

「良いからこの場合は領いとけ。」

「お前が洗脳されてなかったってバレたら犬子あたりに刺されるぞ」

「それは……」

「いつそその方が良いんじゃないかと、劍丞は考えてしまう。」

しかし右腕からは一葉の、左腕からは小波の、背中からは梅の体温を感じ、考えを改

める。

「俺が襲われたら、この3人に迷惑がかかる……」

戦った結果、誰かが死ぬかもしれない……俺一人だけが死ぬのなら良いけど……」

一葉も、梅も、小波も、必死に自分を守ろうとしているのが、必死に自分を支えようとしているのが分かった。

だから劍丞は悔しそうに奥歯を噛み締め……自身の身を守るための嘘をつく事を決心した。

「分かった……分かった、従うよ。仕方ないからな……」

新田劍丞にとって、短い期間ではあっても蘭丸は仲間だった。

共に戦う仲間であった。

その仲間を自己保身のために切り捨てるような真似をする事に、劍丞は強い嫌悪を覚えた。

「俺は美空を殺してでも止めようとしたのに……」

洗脳して強姦するなんて酷い手段で戦おうとしたのに……

美空は、九十郎は、戦いを始める前から俺達を助ける方法を考えていたのか」

劍丞は自身の心に大きな亀裂が走るのを感じた。

劍丞は美空に、九十郎に、大きな大きな敗北感を植え付けられたのが分かった。

「ああそうか、そうか……俺は負けたのか……

完膚なきまでに、何の言い訳のできないくらいに……俺は負けたんだ……」
心が負けを認めた瞬間、劍丞には全身の力が一気に抜けていくのが分かった。

「(ごめん、ごめん蘭丸……本当にごめん……)」

そして蘭丸に対して、心の中で何度も何度も謝った。

自分が無力なせいで守れなかった、自分が馬鹿だったせいで勝たせてあげられなかった。
た。

そして自分が負けたせいで、美空を止められなかった。

劍丞の心は限界に近かった。

そこに……

「え……ら、蘭丸……？」

劍丞は信じられないものを見た。

森蘭丸の遺体……真つ二つに切断された半分、頭と右腕の部分が空中に浮かんでいたのだ。

「まだ生きてたかテメエ!!」

瞬間、九十郎が空中に浮かぶ蘭丸の首を切り落とす。

蘭丸の首は即座に切断され、ぼとりと地面に落ちる……が、それでも右腕だけが空中

に浮かんだままだ。

「蘭丸じゃねえ、蘭丸は念動力を使えねえ……誰だ!? どこにいる!」

九十郎が辺りを見回す。

そして先ほど蘭丸に取り上げられた自身の剣魂を見つけると、すぐさまそれを拾って超能力関知センサーを起動させた。

「念動力の反応、やっぱり蘭丸からじゃねえ……そつちかあ!!」

九十郎が向き直った先に皆の視線が集中する。

その先に一人の少女が立って……いや、宙に浮かんでいるのが分かった。

「あ、綾那……いや、誰だてめえ」

それは綾那のように見えて、確実に綾那ではない存在だった。

綾那は御家流を……超能力を使えない。

だから自身の身体や蘭丸の右腕を宙に浮かせるなんて芸当はできない筈だ。

それに目の前の綾那モドキは……作り物ではない、装飾品でもない、本物の鹿の角を額から生やしていたのだ。

その姿はまるで……

「鬼子……馬鹿な!」 綾那が鬼子になったってのか!?

いや、綾那が犯されて鬼子を産まされたのか!?

「いいや違う、この娘は鬼子ではなく、魔人になったんだよ。

ボクの忍法・魔界転生によってね」

綾那モドキがいる方向から、綾那とは別の声が出た。

そして綾那モドキがクンツと指を振るうと、宙に浮いた蘭丸の右腕が空を飛び、新たな声の主の下へと納まった。

「ああ分かる、分かるぞ……やはりこの指は正解だ。

この指を媒体に使えばもう一度……いや、もう5回は忍法魔界転生を使える」

新たな声の主がニマアッと笑った。

そいつは吉音や光璃と同じく大江戸学園の女学生用の学生服を着ていた。

男のようだと思えば男のように、女のようだと思えば女のように見える奇怪な見た目をしていった。

そいつは先の大乱交の中で綾那と遭遇し、綾那を犯した人物であった(第170話)。

「だ、誰だ……誰だお前はっ!? 綾那に何をしたんだっ!？」

劍丞が折れかけていた心を無理矢理奮起させ、謎の人物に対峙する。

劍丞はその人物に見覚えが無い、しかし小波と九十郎は別だった。

「お、お前は……」

「貴女はもしか……」

「天草四郎時貞!」 「DJジェロニモ!」

……そして同時に、全然違う名前を叫んだ。

「え? え? 天草四郎? ジェロニモ? DJ?」

「劍丞お前DJ知らねえのかよ。」

ほら、クラブに行くといえるだろ。 ターンテーブル回して音楽かけながら、

YO! とか、チェキラ! とか、ボンバヘッ! とか言う感じの奴」

「いやDJは知ってるよ」

劍丞の頭上に? マークが何個も何個も浮かんでくる。

天草四郎と言えば戦国時代最後の戦と呼ばれる島原の乱の首謀者、ジェロニモと言えば白人に対して強固な反抗を行ったアパッチ族のシャーマン、どちらもDJとは全然関係無い筈の人物である。

そもそも戦国時代にDJやジェロニモが出て来る方がおかしい。

「おいジェロニモ、お前今までどこほつつき歩いてたんだ。」

そろそろ新曲出せよ、詠美の奴が楽しみにしてるんだぞ」

そんな劍丞をよそに、九十郎がまるで知り合いに話しかけるかのような事を言い出す。

「ああ、ごめんごめん、色々あつて学園に帰れなくなっちゃつて。」

ボクってもう退学になつてるの?」

「なつてねえが出席日数足りなくて留年したぞ。今は俺らと同学年だ」

「うわつ、もうそんなに時間経つてたか。柳生十兵衛はもう卒業した?」

「してねえがもうじき卒業だと思うぞ。あいつは成績も内申も問題ねえからな」

「お、おい九十郎! 知り合いなのか!」

「一学年上の先輩だよ、大江戸学園の。」

学生やりながら学園内のクラブでDJもやつてる」

「何で学園の先輩が戦国時代にいるんだよ!」

「え、知らねえけど何かあつたんじゃねえの? 何か急に行方不明になつて留年してたし」

なお、大江戸学園では急に学生が行方不明になる事件は割と良くある方である。

剣丞は大江戸学園の魔境っぷりに頭を抱えた。

「さて九十郎!」

聞けばこれからポータルとかいう機械を使って大江戸学園に戻るみたいだね!」

「まあな、一緒に来たいってんなら来てても良いぞ」

「なら柳生十兵衛に伝言をお願いしよう!」

ボクはこれから、この森蘭丸の指を使って4人の武芸者を魔人に変える。

ここにゐる本多忠勝を加えた5人の魔人を揃えた時、

大江戸学園に戻つて柳生十兵衛にリベンジマッチを挑むと。

最後の指一本は柳生十兵衛を魔人にするのに使つてやるうっ!!」

「あく、はいはい、要するにお前と十兵衛の痴話喧嘩の延長戦な」

九十郎はちよつとげんなりした様子だった。

「ジェロニモ、使い終わつたら綾那は元の場所に返せよ」

「はい」

「綾那、付き合いきれん思つたら戻つてきても良いからな」

「分かつたのです」

魔人になつたという綾那が普通に返事をしてきたため、劍丞は思わずズッコケそうになつた。

「おいちよつと! 良いのかそれで!？」

何か巨大な悪の陰謀みたいな感じで出てきて、普通に帰して良いのか!？」

「心配すんな、大江戸学園が良くある事つて言うか、むしろ比較的大人しい方だ。

やれやれ、蘭丸を殺し損ねたかと思つてヒヤツとしたぜ」

「何なんだ大江戸学園つて……」

「じゃあ九十郎、伝言よろしくね」

「左手は持つて行かねえのか？ 別に良いぞ、こっちにあつても捨てるだけだし」

「魔人を9人も集めるのは面倒だから良いや」

そのままDJジエロニモと魔人化した綾那は、ばいばーいと手を振って逃げた。

剣丞はさつきまでとの空気感の差に眩暈がしそうになっている。

そうこうしていると、今度は九十郎のD・ゲイザーから着信を知らせる電子音が鳴り始める。

「うん？ 誰から……雫からか。」

うわあ、もう午前6時か、俺ら夜が明けるまで戦つてたのかよ」

気がつけば、東の空は明るくなりつつあり、もうじき夜明けなのだと感じさせる。

九十郎は若干の疲労感を覚えつつも、雫からの通信に応答する。

『あ、定時連絡です。美空様ですか？』

「いや九十郎だ。色々あつて美空の端末を俺が預かつてる」

『色々……？ あの、なにかそっちであつたのですか？』

「本当に色々あつたよ。全部説明したら一時間はかかるんじゃないかねえかつてくらいにな」

『あの、それでは一旦切つてしばらく後に繋ぎ直しましょうか？』

「いや、ちょうどその色々がひと段落ついたところだ。

口裏合わせも兼ねて簡単に説明するから聞いていてくれ。

ああそうだ、近くに粉雪はいるのか？」

『ああ、あたかもここにいるぜ』

「機密にしたい事もある、悪いが雫と粉雪以外は席を外してくれ」

『分かりました、少しお待ちください』

……

……

……

それから九十郎は、雫と粉雪に蘭丸戦が始まってからここまでの経過を説明した。

『な、何と言うか、思ってた以上に酷い事になってるんだぜ……』

「そうだろうさうだろう、この後の事を考えたら頭が痛いよ」

『大変でしたね……』

「ああ、大変だったよ。 本当にな」

何度も何度ももう駄目かと思った。

何度も何度もここまでのなかと諦めた。

何度も何度も闘志を奮い立たせ、抗い、立ち向かい、最後の最後で勝利を掴んだ。

気がつけば太陽が空に昇っていた。

雲一つ見えない青空が広がっていた。

そして一二三のゲロ地獄は小康状態になり、今は安らかな寢息を立てていた。

織田軍と越軍の殺し合いの声は聞こえてこなかった。

「そしてどうやら、美空は織田との全面戦争回避に成功したらしい。

まあ、良かったとは言えないが、最悪の最悪だけは避けられたかな」

『悪いな、そんな大変な時に全然役に立てなかつたぜ』

「良いんだよ、お前らは武田の残党の抑えをやってくれれば十分だ。

それにもし参加したら、お前らまで洗脳されて強姦されてただら。それも嫌だし

な」

こうして、なんやかんやで『めでたしめでたし』という方向に話が進みそうになった

時……

『いやあ、本当に失言のおかげで助かりました』

……雫の特大の失言、いや暴言が飛び出した。

その無神経な発言に九十郎の怒りが再燃し、その場の空気が凍り付いた。

粉雪は思った、思っても口には出さなよ馬鹿野郎と。

この瞬間、それなりに存在していた雫と九十郎の恋愛フラグが完全に、ひとつ残らず、完膚無きまでに粉碎され消滅した事は言うまでも無いだろう。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第172話『大乱交のあとしまつ』

「あばよ蘭丸、成仏しろよ」

蘭丸が完全に息絶えたのを確認すると、九十郎は両目をそつと閉じ、瞑目しながら両手を合わせた。

この瞬間、越軍と蘭丸との非常に苦しい戦いは終わった。

織田軍には長尾家に喧嘩を売る動機が無く、この戦いは蘭丸がその超能力によつて無理矢理織田久遠信長を従わせて起こした戦いに過ぎない。

だから蘭丸一人が死ぬば、それで戦いはおしまいだ。

これから始まるのは大〇獣のあとしまつ、ではなく大乱交のあとしまつである。

「オロロロッ!!」

まず最初に一二三が盛大に吐いた。

全身が汗でびっしりよりで、顔は青褪め、手足は震え、もう死にかけなんじゃないかと思ふような有様だ。

「……うう、何かクラつとした」

それとほぼ同時に、吉音や光璃といった常識改変を受けた者達が少しふらつく。

「お、おい一二三!?! 大丈夫かよ!?!」

九十郎が一二三に駆け寄る。

「うええ……あ、あんまし大丈夫じゃ……うぶつ、無いかも……」

ふ、船酔いを10倍か100倍酷くしたみたいな……頭の中が掻き混ぜられるような

……

あ、ゴメンまた吐きそ……オロロロロロロツッ!」

一二三が再び盛大に吐瀉物をまき散らした。

「これはもしかして、洗脳が解けた副作用……なのか?」

確か洗脳するのにも、洗脳の維持にも超能力を使うから、

洗脳した本人を殺せば、元に戻るって新戸の奴が……

ああくそっ! 肝心な時に新戸の奴が死んじまったから良く分からねえな」

後で分かる事だが、この時の九十郎の推測は当たっていた。

蘭丸の死により一気に洗脳、催眠、記憶改変や常識改変から解き放たれた影響で精神

に異常が生じ、それが肉体の不調にも繋がっている。

戦闘Ⅱセックスと常識の一部のみ改変された軽微な洗脳を受けた者は数秒で終わる

軽い症状だが、一二三のように人格を破壊されて再構築されるようなガチ洗脳を受けた者は非常に重い症状が出ていた。

当然、同様のガチ洗脳を受けていた夕霧や湖衣、久遠といった面々も別々の場所で地獄のような苦痛を味わっている。

死んでからも傍迷惑など九十郎は思ったが、こんなものは後々の大変さに比べれば序の口、地獄の一丁目に過ぎなかつたと思ひ知る事になる。

「え……あ……嘘、何で……い、嫌あああーっ!!」

吉音が悲鳴をあげた。

近くに落ちていた自らの衣服（ガ○ダムの光るパジャマ）を急いで拾い上げ、自身の乳房や秘所が見られないようにと縮こまる。

蘭丸の洗脳が解けたとしても、洗脳されていた間の記憶が消える訳では無く、バタバタと気絶する訳でも無い（第154話）。

いくら常識を書き換えられていたとはいえ、秋月八雲以外の男に対し自ら口づけをして、股を開き、膣内射精をねだり、お嫁さんになりますと宣言した事に対する強烈な罪悪感、強烈な嫌悪感が吉音を襲っていた（第167話）。

これは夢だ、何かの間違いだと祈るような気分で自らの股間に視線を落とす……そこにあつたのは八雲以外の男から膣内射精をされ、今なお白濁液に塗れたオンナの部分で

あつた。

「ひ、酷いよ……こんなの無いよ……あ、あたし……八雲に何て言えば良いのさ……」

ポロポロと涙が零れ落ちる。

秋月八雲に詫びたい気持ちと、捨てられるかもしれない、嫌われるかもしれないという恐怖がせめぎ合い、吉音の心はズタボロになつていく。

「待つて、待つて、これは何かの間違い、一時の気の迷い、本意じゃなかった、

正気じゃ無かつた、く、九十郎が……いや、劍丞が……あああ……」

光璃も普段の彼女からは想像もできない程に追い詰められていた。

劍丞に犯されながら浮気の言い訳のような事を言い、イカされた後は劍丞が好きだと、劍丞を愛していると宣言し、その愛の言葉は自分自身にすら本心からの言葉なのか、洗脳された故の言葉なのか分からず……それらの言動全てがよりにもよつて九十郎の目の前で行つてしまつた（第169話）。

ここからどう名誉挽回、汚名返上すれば良いのか、武田信玄たる彼女にも流石に見当もつかなかつた。

今すぐ逃げ出し、泣き喚き、高坂兔々昌信を抱き枕にしながら愛でる事で精神を復活させる兔々セラピーに走りたい気分であつた。

なお全然関係ない話だが、現代二ホンには武田信玄が高坂昌信に宛てて書いた浮気の

言い訳の手紙が現存している。

また、後日兎々はこの件について『御屋形様は本当にしよーもない人になのら』とコメントしつつ、兎々セラピーによってズタボロになった光璃の精神力を回復させた事も付言しておこう。

「ぐ、これは……なんだ、何が起きた……？ どういう事だ……？」

余が良いように操られていたというのか……？」

剣丞隊の面々も同じように常識が戻り、自身のこれまでの言動に愕然とするばかりであった。

「あ……え、あ……ああ……や、やだあ……」

特に新田剣丞の目の前で九十郎に跨り、情けなく喘がされ、膣内射精まで許してしまつた鳥の衝撃と苦悩は凄まじいものがあつた。

どうしてあんな真似をしてしまつたのかと自身の言動を悔やみながら力無く膝をつき、呆然とした表情で震えていた。

そんな折、九十郎のD・ゲイザー型の端末に美空から通信が入つた。

『九十郎、蘭丸を殺したの？』

九十郎はすぐに端末を拾い、応答する。

「ああ、どうにかな。蘭丸は殺した、俺が斬つた。」

吉音とかの様子を見るに洗脳も解けているみてえだ。美空、そっちはどうなってる？」

『こっちはちよつと酷い事になってるわね。急に洗脳がなくなつて、呆然としてるの、

泣きだしてるの、半狂乱になつて暴れるの、自殺しようとしてるのもいるわ』

美空からの話を聞き、九十郎はふうつとため息をついた。

当初目標としていた通り、蘭丸を速攻で殺し、織田軍とのセックス合戦が始まる前に洗脳から解き放つ事ができれば、もつとずっとマシな状況にできたのだろうか……だがしかし、今更後悔した所で状況は変わらない。

「しかしそうすると……ある意味では想定通りという事になるな」

そう……美空や九十郎は、蘭丸を殺したらそうなるだろうと事前に予想していた。

急に洗脳が解け、狂わされた常識が戻り、敵も味方も大混乱になると予想していた。

そしてその状態を放置したら……おそらく越軍が怒りと恥辱を晴らすために織田軍を殺し始めるだろうと予測していた。

今の織田軍は弱卒を超えた超弱卒、指揮官として動ける者はほぼ全員が犬子達に襲われて犬に変えられてしまっている。

ここから真つ当な戦闘が再開されれば、成す術も無く越軍に殺されてしまうだろう。

織田を滅ぼすのが目的であれば、それで良いが……

『それじゃあこっちは当初の予定通り、織田との戦いを止める方向で動くわ。』

そっちは口裏合わせ、良いわね?』

今の越軍の目的は現代ニホンの大江戸学園に辿り着く事、そして戦国時代の英雄の魂欲しさにナメた真似をしたオーデインを叩きのめす事である(第142話、143話)。織田信長の首だの、織田家滅亡だの、そういうのは正直いらないうるか、後々やろうとしている戦国乱世終結を考えるとむしろ邪魔だ。

「戦いを止める……? 俺達や久遠を殺すんじゃないのか!」

劍丞が信じられないといった表情でそう聞き返す。

「殺すって? いや、何で俺達がお前や織田信長を殺すんだよ、何のメリットも無いだろう」

「お前はたった今、蘭丸を殺しただろうっ!」

「コイツに関しては正当防衛だ、悪く思うな」

「俺は蘭丸に協力していたんだぞっ! 他の皆とは違う!」

洗脳もされていないのに、あの娘に力を貸していた、あの娘を守っていた!」

「それに関しては色々言いたい事もあるんだが、悪いが一旦保留にさせてくれ。」

正直時間が惜しい、殺し合いが始まってからじゃ止めるの難しいんだぞ」

「だけど……でも……」

それでも納得できないという感情が劍丞の胸中に渦巻いていた。

殺されたい訳では無いが、蘭丸に協力した自分に何の咎めも無いのはどうかという思いもあつた。

「(……え？　今、ご主人様が洗脳されていないと言つたような……?)」

き、気のせいですよね、何かの間違い……き、聞き間違いですよね」

なお、小波は今この瞬間まで劍丞は洗脳されているものとばかり思つていた。

彼女は全力で劍丞を助けようと行動してしたが、その実全力で劍丞の足を引っ張つていた事に気づくのは、もう少し先の事である。

そうして劍丞と小波が悩んでいる所で……ぱあんっ!!　と大きな音が鳴つた。

悩める劍丞の横つ面を比喻表現で無く叩いた者がいた。

「え……あ……?」

劍丞の頬が赤く腫れる。

叩いた側の右手も赤く腫れていた。

頬に涙が伝つていた。

指が震え、肩が震え、膝も震えていた。

怒りと悲しみ、後悔と絶望、そして失望で心をぐちゃぐちゃにかき混ぜられて、なん

とも言い難い酷い表情になつていた。

「か……から、す……う？」

鳥が新田劍丞の頬を力一杯叩いていたのだ。

そして鳥は呆然とする劍丞をキツと睨みつけ……

「……大嫌い」

……そう告げた。

普段はあり得ないくらいに無口な鳥が、ハッキリとした声でそう告げた。

その場にいる全員にハッキリ聞こえる声量で告げた。

そして走った。

涙で頬を濡らしながら駆け出し、自分の着物と鉄砲だけを拾うとどこかへと走り去つ

ていた。

「ちよ、お姉ちゃんどこ行くの!? 待って〜!!」

鳥の妹である雀が慌てて追いかける。

だが鳥を追いかけたのは雀だけ……劍丞は追いかけない、追いかけれなかった。

「そう……だよな……そりやそうだ……皆を守り切れなかっただけじゃない、

皆にあんな酷い事をさせたんだ。そりや嫌われるよな……」

劍丞はヒリヒリと痛む頬を抑え、俯きながらぶつぶつと何かを呟くだけだ。

「主様……仕方なかったとは言わん、余とて今回の所業には思う事もある。」

だがな主様、それでも……ああ、それでも余は主様の妻で、主様の味方じゃ。それだけは忘れてはならぬぞ。それと……それと短慮を起こしてもいかん」

一葉が劍丞に寄り添い、震える手を握り締めた。

「そ、そうですわっ！ 私達の劍丞様への愛はこの程度では揺るぎませんものっ！」
梅もまた劍丞に駆け寄ってその背を支える。

その言葉は表面上こそ劍丞を全肯定するものであったが……若干声が震えて、肩や喉に力が籠っている事に気づく者は多かつた。

まるで自分に言い聞かせているかのようだと思ふ者もいた。

「そ、そうです！ その通りです！ 私達は何があろうと劍丞様のお味方です！」

ついさつき全力で劍丞の足を引っ張った小波が追従する。

劍丞が洗脳されていなかったという事実から全力で目を背けているものの、劍丞を愛している、劍丞の助けになりたいという気持ちだけは確かであった。

「ごめん……ごめん……本当に、本当にごめん……」

劍丞の表情は、彼女達が今まで見た事が無いものだった。

迷う事もあった、悩む事もあった、苦しむ事もあった、しかし劍丞にはいつだって未来を切り開こうとする意思があつた。

その強く輝くような意思は、覇気となつて皆を惹き付けた。

その覇気の輝きが、今の劍丞からは消えていたのだ。

だから一葉は、だから梅は、だから小波は、このまま劍丞が消えて無くなってしまうのではと心配になり、不安になり、劍丞に寄り添い、支えようとしているのだ。

「ああ、良かったな劍丞。」

こつぴどく負けた時に支えようとしてくれる人がいるのは、結構幸せな事だぞ」

九十郎はそんな一葉や梅、小波の姿を見ながら、小さく小さく呟いた。

あの様子なら、劍丞は大丈夫だろうと思った。

泣きながらどこかへ去っていった鳥も、劍丞がどうにかするだろうと思った。

「美空、こつちは大丈夫だ。事前に決めといた戦後処理に移ってくれ。」

それと……フラツシュ、ミラクル、ストロングの3パターン考えといたが、

どれを使うんだ？」

『アンタねえ……フラツシュは速攻で蘭丸を討ち取って損害軽微だった時、

ミラクルは蘭丸がトチ狂ってお友達になりたいって言い出した時に使うって忘れたの？

どつちももう使えないでしょうがっ!!』

「ああ、スマン忘れてた。じゃあ消去法でストロングだな」

『ええそうよ。一番単純で、一番無理があるストロングしかないわよ、こうなったら』

「おい美空、みらくるだの、すとりんぐだの訳が分からぬ。

主様の死を前提にする計画だったとしたら、悪いが全力で手向かいをさせてもらおうぞ」

『ええご心配なく、残念ながら劍丞は殺さないつもりですよ、公方様。』

非常に不本意ながら』

「はあ……その声色からすると、

できれば殺したいが政治的事情で殺せないといった所かの」

『ご明察、殺したい理由について説明は必要でしょうか？』

「いらん、流石に分かる、理解もできる。だがな……」

『だがそれでも、劍丞を愛さずにはいられない……ですか、公方様』

「……その通りだ。全く、恋と言うものは盲目よのう」

美空と一葉が同時に、はっはっはっはと大声で笑う。

2人共表面上こそ笑っていたが、声も表情も全く笑っていないかった。

片方は『今は無理でも、いつか絶対に思い知らせてやるからな』という強い決意が、もう片方は『この先何があるうが、何が起ころうが、絶対に愛する夫を守り抜いてみせる』という強い決意があった。

『越軍全員に告げる！ 繰り返す、越軍の全員に告げる！』

さつきも名乗ったけど、越軍の総大将、長尾美空景虎より次の命令を伝えるわっ!!」
そして笑い声が止まると、今度は全ての通信回線を使い、全ての通信端末から同時に美空の声が聞こえてくる。

『これ以上織田軍と戦うのはもうやめなさい! 人類は皆兄弟っ!』

このまま血みどろの戦いを続けても虚しいだけで何も生まないわっ!

武器を納めて、戦いを止めなさいっ!』

つい先ほどは『武器を取れ、敵を殺せ』と命じた舌の根も乾かぬ内に、それとは180度方向転換した命令を伝えた。

直後、織田軍も越軍もキョトンとした表情で、何言っただコイツと喉まで出かかったのは言うまでもないだろう。

『さつきと言っている事が違うと思ったでしょう、無理もないわ。』

でも聞いて頂戴! この戦いの元凶は森蘭丸という悪魔のような奴だったわ!

そいつが織田軍も私達もおかしくさせて、無理矢理戦わせていたのよ!

訳も分からずに武器を捨てて、服も脱いで、

馬鹿みたいにまぐわいをする事になったのもそいつの仕業よ!』

織田軍からも越軍からもどよめきが起きる。

「貴方達は全く悪くない! 織田軍だって蘭丸に操られていただけの被害者よ!

そして今、皆が正気を取り戻したのは、

全ての悪の元凶である森蘭丸を討ち取ったからなの！

私達を織田軍と無理矢理戦わせていた森蘭丸が死んだのだから、

もうこれ以上の戦いは無意味なのよっ！」

そう、これこそが美空と九十郎が事前に準備した織田軍との全面戦争を避けるための
秘策。

一番単純で、一番無理があるストロングな方法……全ての罪を蘭丸一人に押し付けた
上で死んでもらう蘭丸レクイエム計画である。

「こ、こんなやり方で本当に戦争が回避できるか……」

「無茶でも何でもやるしかねえだろ。それより劍丞、口裏を合わせるぞ。」

お前も蘭丸に洗脳されてて、良く分からない内に協力させられていたって設定だ」

「い、いや、だけどそれは……」

「良いからこの場は領いとけ。」

お前が洗脳されてなかったってバレたら犬子あたりに刺されるぞ」

「それは……」

いつそその方が良いんじゃないかと、劍丞は考えてしまう。

しかし右腕からは一葉の、左腕からは小波の、背中からは梅の体温を感じ、考えを改

める。

「俺が襲われたら、この3人に迷惑がかかる……」

戦った結果、誰かが死ぬかもしれない……俺1人だけが死ぬのなら良いけど……」

一葉も、梅も、小波も、必死に自分を守ろうとしているのが、必死に自分を支えようとしているのが分かった。

だから劍丞は悔しそうに奥歯を噛み締め……自身の身を守るための嘘をつく事を決心した。

「分かった……分かった、従うよ。仕方ないからな……」

新田劍丞にとつて、短い期間ではあつても蘭丸は仲間だった。

共に戦う仲間であつた。

その仲間を自己保身のために切り捨てるような真似をする事に、劍丞は強い嫌悪を覚えた。

「俺は美空を殺してでも止めようとしたのに……」

洗脳して強姦するなんて酷い手段で戦おうとしたのに……

美空は、九十郎は、戦いを始める前から俺達を助ける方法を考えていたのか」

劍丞は自身の心に大きな亀裂が走るのを感じた。

劍丞は美空に、九十郎に、大きな大きな敗北感を植え付けられたのが分かった。

「ああそうか、そうか……俺は負けたのか……

完膚なきまでに、何の言い訳のできなくらいに……俺は負けたんだ……」
心が負けを認めた瞬間、劍丞には全身の力が一気に抜けていくのが分かった。

「(ごめん、ごめん蘭丸……本当にごめん……)」

そして蘭丸に対して、心の中で何度も何度も謝った。

自分が無力なせいで守れなかった、自分が馬鹿だったせいで勝たせてあげられなかった。

そして自分が負けたせいで、美空を止められなかった。

劍丞の心は限界に近かった。

そこに……

「え……ら、蘭丸……？」

劍丞は信じられないものを見た。

森蘭丸の遺体……真つ二つに切断された半分、頭と右腕の部分が空中に浮かんでいたのだ。

「まだ生きてたかテメエ!!」

瞬間、九十郎が空中に浮かぶ蘭丸の首を切り落とす。

蘭丸の首は即座に切断され、ぼとりと地面に落ちる……が、それでも右腕だけが空中

に浮かんだままだ。

「蘭丸じゃねえ、蘭丸は念動力を使えねえ……誰だ!? どこにいる!」
九十郎が辺りを見回す。

そして先ほど蘭丸に取り上げられた自身の剣魂を見つけると、すぐさまそれを拾って超能力関知センサーを起動させた。

「念動力の反応、やっぱり蘭丸からじゃねえ……そっちかあ!!」

九十郎が向き直った先に皆の視線が集中する。

その先に1人の少女が立って……いや、宙に浮かんでいるのが分かった。

「あ、綾那……いや、誰だてめえ」

それは綾那のように見えて、確実に綾那ではない存在だった。

綾那は御家流を……超能力を使えない。

だから自身の身体や蘭丸の右腕を宙に浮かせるなんて芸当はできない筈だ。

それに目の前の綾那モドキは……作り物ではない、装飾品でもない、本物の鹿の角を額から生やしていたのだ。

その姿はまるで……

「鬼子……馬鹿な!! 綾那が鬼子になったってのか!」

いや、綾那が犯されて鬼子を産まされたのか!」

「いいや違う、この娘は鬼子ではなく、魔人になったんだよ。」

ボクの忍法・魔界転生によってね」

綾那モドキがいる方向から、綾那とは別の声がした。

そして綾那モドキがクンツと指を振るうと、宙に浮いた蘭丸の右腕が空を飛び、新たな声の主の下へと納まった。

「ああ分かる、分かるぞ……やはりこの指は正解だ。」

この指を媒体に使えばもう一度……いや、もう5回は忍法魔界転生を使える」

新たな声の主がニマアッと笑った。

そいつは吉音や光璃と同じく大江戸学園の女学生用の学生服を着ていた。

男のようだと思えば男のように、女のようだと思えば女のように見える奇怪な見た目をしていた。

そいつは先の大乱交の中で綾那と遭遇し、綾那を犯した人物であった（第170話）。「だ、誰だ……誰だお前はっ!? 綾那に何をしたんだっ!？」

劍丞が折れかけていた心を無理矢理奮起させ、謎の人物に対峙する。

劍丞はその人物に見覚えが無い、しかし小波と九十郎は別だった。

「お、お前は……」

「貴女はもしや……」

「天草四郎時貞!?!」 「DJジェロニモ!?!」

……そして同時に、全然違う名前を叫んだ。

「え? え? 天草四郎? ジェロニモ? DJ?」

「剣丞お前DJ知らねえのかよ。」

ほら、クラブに行くといえるだろ。 ターンテーブル回して音楽かけながら、

YO! とか、チエキラ! とか、ボンバヘツ! とか言う感じの奴」

「いやDJは知ってるよ」

剣丞の頭上に? マークが何個も何個も浮かんでくる。

天草四郎と言えば戦国時代最後の戦と呼ばれる島原の乱の首謀者、ジェロニモと言えば白人に対して強固な反抗を行ったアパッチ族のシャーマン、どちらもDJとは全然関係無い筈の人物である。

そもそも戦国時代にDJやジェロニモが出て来る方がおかしい。

「おいジェロニモ、お前今までどこほつつき歩いてたんだ。」

そろそろ新曲出せよ、詠美の奴が楽しみにしてるんだぞ」

そんな剣丞をよそに、九十郎がまるで知り合いに話しかけるかのような事を言い出す。

「ああ、ごめんごめん、色々あって学園に帰れなくなっちゃって。」

ボクってもう退学になつてるの?」

「なつてねえが出席日数足りなくて留年したぞ。今は俺らと同学年だ」

「うわつ、もうそんなに時間経つてたか。柳生十兵衛はもう卒業した?」

「してねえがもうじき卒業だと思うぞ。あいつは成績も内申も問題ねえからな」

「お、おい九十郎! 知り合いなのか!」

「一学年上の先輩だよ、大江戸学園の。」

学生やりながら学園内のクラブでDJもやつてる」

「何で学園の先輩が戦国時代にいるんだよ!」

「え、知らねえけど何かあったんじゃないの? 何か急に行方不明になつて留年してた

し」

なお、大江戸学園では急に学生が行方不明になる事件は割と良くある方である。

剣丞は大江戸学園の魔境っぷりに頭を抱えた。

「さて九十郎!」

聞けばこれからポータルとかいう機械を使って大江戸学園に戻るみたいだね!」

「まあな、一緒に来たいってんなら来ても良いぞ」

「なら柳生十兵衛に伝言をお願いしよう!」

ボクはこれから、この森蘭丸の指を使って4人の武芸者を魔人に変える。

ここにゐる本多忠勝を加えた5人の魔人を揃えた時、

大江戸学園に戻って柳生十兵衛にリベンジマツチを挑むと。

最後の指一本は柳生十兵衛を魔人にするのに使つてやるうっ!!」

「あく、はいはい、要するにお前と十兵衛の痴話喧嘩の延長戦な」

九十郎はちよつとげんなりした様子だった。

「ジェロニモ、使い終わつたら綾那は元の場所に返せよ」

「はい」

「綾那、付き合いきれん思つたら戻つてきても良いからな」

「分かつたのです」

「魔人になつたという綾那が普通に返事をしてきたため、剣丞は思わずズッコケそうになつた。

「おいちよつと! 良いのかそれで!？」

何か巨大な悪の陰謀みたいな感じで出てきて、普通に帰して良いのか!？」

「心配すんな、大江戸学園が良くある事つて言うか、むしろ比較的大人しい方だ。

やれやれ、蘭丸を殺し損ねたかと思つてヒヤツとしたぜ」

「何なんだ大江戸学園つて……」

「じゃあ九十郎、伝言よろしくね」

「左手は持つて行かねえのか？ 別に良いぞ、こっちにあつても捨てるだけだし」

「魔人を9人も集めるのは面倒だから良いや」

そのままDJジエロニモと魔人化した綾那は、ばいばーいと手を振つて逃げた。

劍丞はさつきまでとの空気感の差に眩暈がしそうになっている。

そうこうしていると、今度は九十郎のD・ゲイザーから着信を知らせる電子音が鳴り始める。

「うん？ 誰から……雫からか。」

うわあ、もう午前6時か、俺ら夜が明けるまで戦つてたのかよ」

気がつけば、東の空は明るくなりつつあり、もうじき夜明けなのだ感じさせる。

九十郎は若干の疲労感を覚えつつも、雫からの通信に応答する。

『あ、定時連絡です。美空様ですか？』

「いや九十郎だ。色々あつて美空の端末を俺が預かつてる」

『色々……？ あの、なにかそつちであつたのですか？』

「本当に色々あつたよ。全部説明したら一時間はかかるんじゃないかねえかつてくらいにな」

『あの、それでは一旦切つてしばらく後に繋ぎ直しましょうか？』

「いや、ちようどその色々がひと段落ついたところだ。

口裏合わせも兼ねて簡単に説明するから聞いていてくれ。

ああそうだ、近くに粉雪はいるのか？」

『ああ、あたいもここにいるぜ』

「機密にしたい事もある、悪いが雫と粉雪以外は席を外してくれ」

『分かりました、少しお待ちください』

……

……

……

それから九十郎は、雫と粉雪に蘭丸戦が始まってからここまでの経過を説明した。

『な、何と言うか、思ってた以上に酷い事になってるんだぜ……』

「そうだろうさうだろう、この後の事を考えたら頭が痛いよ」

『大変でしたね……』

「ああ、大変だったよ。 本当にな」

何度も何度ももう駄目かと思った。

何度も何度もここまでなのかと諦めた。

何度も何度も闘志を奮い立たせ、抗い、立ち向かい、最後の最後で勝利を掴んだ。

気がつけば太陽が空に昇っていた。

雲一つ見えない青空が広がっていた。

そして一二三のゲロ地獄は小康状態になり、今は安らかな寢息を立てていた。

織田軍と越軍の殺し合いの声は聞こえてこなかった。

「そしてどうやら、美空は織田との全面戦争回避に成功したらしい。

まあ、良かったとは言えないが、最悪の最悪だけは避けられたかな」

『悪いな、そんな大変な時に全然役に立てなかつたぜ』

「良いんだよ、お前らは武田の残党の抑えをやってくれれば十分だ。

それにもし参加したら、お前らまで洗脳されて強姦されてただろ。それも嫌だし

な」

こうして、なんやかんやで『めでたしめでたし』という方向に話が進みそうになった

時……

『いやあ、本当に失言のおかげで助かりました』

……雫の特大の失言、いや暴言が飛び出した。

その無神経な発言に九十郎の怒りが再燃し、その場の空気が凍り付いた。

粉雪は思った、思っても口には出さなよ馬鹿野郎と。

この瞬間、それなりに存在していた雫と九十郎の恋愛フラグが完全に、ひとつ残らず、完膚無きまでに粉碎され消滅した事は言うまでも無いだろう。

犬子と柘榴と一二三と九十郎第173話『エンド・オブ・リバーズ』

「……早いもんだな、あの地獄みてえな蘭丸戦からもう一ヶ月か」

九十郎がぼそりと呟く。

「そう、もう一月……大変だったわね、あの後は」

美空が遠い目をしながらそう答える。

「ここは戦国時代……ではない。」

美空と九十郎がいるのは大江戸学園である。

現代ニホンのトップエリート共を闇鍋、あるいは蟲毒の如く詰め込んで、その溢れる才能を盛大にゴミ箱にダンクシュートし、俺はここだけ一足お先とばかりに明後日の方向へカツ飛んで逝く魔境、それが大江戸学園である。

『皆さん、聞こえますか。こちらは生徒大將軍の徳河詠美です』

大江戸学園の各所に設置されたスピーカーから、詠美の声が聞こえてくる。

『やつほー、同じく生徒大將軍の吉音だよ、皆ちゃんと寝れたかな？』

体調が悪い人は無理せず保健室に……』

『吉音さんっ！ 横から入ってきて能気な事言ってるんじゃないの！』

今がどんな状況か知ってるでしょ!?!』

『どんなも何も、いつも通りの……カチコミでしょ』

大江戸学園は島一つを丸ごと敷地にする（無駄に）広大な学園である。

上を見れば青い空が、横を見れば美しい水平線が見えるのだが……今日だけはドス黒いと言うか、混沌と言うか、何やら気持ちの悪い前衛芸術めいたナニカが空と海の代わりに見えた。

そう、大江戸学園は今、学園そのものを異世界ゲートに突入させ、全ての黒幕たるオーディンの居城・ヴァルハラ宮殿に向けてカチコミをかけようとしているのだ。

『只今、大江戸学園は亜空間に突入しました。』

島の外に落ちたらどんな異世界に飛ぶか分からないので、

不用意に近づかないでください』

『押すなよ！ 絶対に押すなよ！』

『その後で落つことすヤツでしょっ！』

詠美のツツコミが全校放送で冴えわたる。

なお、怖いもの知らずの大江戸学園のバカ共数名が外周部から落つこちて異世界に飛

び、大冒険を繰り広げるのだが……それは九十郎達の物語とは直接関わらないため割愛する。

「あの娘、蘭丸戦の後わんわん泣いてたのに、結構元気そうね」

「ああ、良音か。あいつタフそうに見えて悩みまくる奴だからな。

俺も正直心配してたが……秋月には感謝しかないな」

詠美と吉音のコントじみた校内放送を聞きながら、美空と九十郎がちよつと感慨深そうにしている。

蘭丸戦の……大乱交のあとしまつは、それはそれは大変だった。

誰も彼もが心に深い傷を負っていた。

愛しい恋人であり、大江戸学園屈指のイケメンである秋月八雲に泣きつく事ができた徳河吉音は比較的马シな方である。

「空は……空は本当にどうしたら良いんでしょうね」

「とりあえず大江戸学園の図書館に『むくちをなおすほん』は無かった」

「案外頼りにならないわね、大江戸学園」

あつてたまるかそんな物。

……というツツコミはさておき、心の傷が一番深く、一番重かったのは空だった。

「あの娘の声、最近全然聞けてないんだけど」

「話しかけても無反応ってのは正直しんどいよな」

蘭丸戦の直後から空はあまり喋らなくなり、あまり笑わなくなった。

丸一日、誰も空の声を聞いていないという日が結構な頻度で発生する程に喋らなくなった。

いや、喋らなくなったというのは正しくない、喋れなくなったのだ。

蘭丸戦で受けた極度のストレスが、深い深い絶望が、空の心に傷となって残ってしまった。

心の傷が肉体の不調となり、空は比較的体調が良い時しか喋れなくなったのだ。

「まあ、あの娘は強い娘だから大丈夫でしょ。きっと時が癒してくれるわ」

「そうだと良いんだけどなあ……」

「何か良い案無いの？」

「気休めかもしれないが、あいつが好きそうな本を何冊か渡しておいた。

あれで少しは気が紛れる事を祈る」

「そう、ありがと。」

それなら時々様子を見ながら、できるだけ静かな環境で休ませましょうか」

「そうだな、それが良い」

なお、九十郎が渡した本はマルクスの『資本論』、『毛沢東語録』、レーニンの『国家と

革命』ヒットラーの『我が闘争』、ゲバラの『革命戦争回顧録』、その他諸々の詰め合わせである。

これが後日酷い事になる遠因となるのだが、それはまた別の話である。
「なあ美空、もうちよつと空の奴に会つてやれよ。」

俺や愛菜じやお前の代わりはできねえぞ。

本とか渡したつて、ちよつとした気晴らしにかなりやしねえ」

「そうしたいの山々なんだけど、

蘭丸との戦いで傷ついているのはあの娘だけじゃないし……

あの娘にばかり気を遣うと、面倒臭いのが出てくるからあんまりやりたくないのよ」

「面倒臭いのつて何の話だよ？」

「私の後継ぎは名月だつて国内外に宣言したのは覚えてる？」

「ああ、あつたなそんな事も」

「あの娘を江戸遠征にも今回の戦いにも連れて来てないのはね、

次期当主に絶対必要な知識を詰め込めるだけ詰め込んでおきたいのが半分、

現当主と次期当主が同時に死ぬと再起不能になりかねないのが半分よ」

なお、現当主（名目上は隠居済み）と次期当主が同時に死んだら何が起きるかは、本

能寺の変が起きた後の織田家がどうなつたかを見て頂けると分かり易いだろう。

「で、それが空に何の関係があるんだ？」

「あの時の勝負の結果に納得してないのが結構いるのよ。」

空はまだ負けてないだの、部外者が首を突っ込んで無理矢理勝っただけだの、

越後長尾家の気概を受け継ぐのは空しかないだの、王者の気風があるだの、

吉兆があるだの凶兆があるだの、妙な屁理屈でひっくり返そうとしているのがねえ」

「それは……面倒臭いな、確かに」

なお、基本無神経で無頓着な九十郎はそういう面倒臭い手合いに全く気づいていなかった。

「そんな状態で私が露骨に空を鼻屑するようになったらどうなると思う？」

「名月に後継者指名したのを後悔してるって邪推される」

「正解、やっぱり私達って似た者同士よね。」

それじゃあ、そういう邪推をした連中は何をするとと思う？」

「今の内に空に取り入って保身に走るな」

「そして空こそが後継者に相応しいって考えてる奴らが保身に走った奴らと結託して、

あの手この手で名月を次期当主の座から引きずり降ろそうとするでしょうね」

「空を休ませるどころじゃ無くなるなそりゃあ……すまん美空、俺が悪かった。

是非とも空との接触を控えてくれ」

「はいはい、心底嫌だけどそうするわ」

美空と九十郎がはああっため息をついて俯いた。

そんな事を離している間も、校内放送によって吉音のボケと詠美のツツコミが聞こえてくる。

空も海も持ちの悪い前衛芸術めいた異空間に置き換わったままだ。

「でも、悪い事ばかりじゃないわよ。」

こつちの世界の進んだ医療のおかげで助かった人が大勢いるわ」

「そうだな、蘭丸がくれたばったせいで性病とか妊娠とかフォローできなくなったからな」
「クソ寒い日にクソ冷たい池に飛び込ませる、

昔ながらの墮胎法に頼らずに済んだのは素直にありがたかったわ」

「それ自殺とほぼ変わらんからな、マジで」

「でも他の方法も五十歩百歩、コレが比較的穏当で安全な方法なのよ。」

こつちの世界の人から見たら危なくて野蛮な方法なんでしょうけどね」

織田軍か越軍かを問わず、少なくとも者が妊娠し、少なくとも者が性病に感染した。

具体的に誰と誰が……というのはあえて描写しない。

蘭丸を殺した後で分かった事だが、蘭丸の肉体操作の能力はある程度までは他人の肉体にも干渉可能であった。

蘭丸は肉體操作の能力によって望まぬ妊娠をした者を墮胎させ、一時的に免疫機能を強化することによって性病の類を完治させ、妊娠や性病感染の記憶を消してしまうつもりだった。

「だったのだが……蘭丸を殺したせいで、墮胎と性病治療は現代医学でちまちまと対処し、心の傷へのフォロワーは美空が超頑張る事でどうにかする他無くなった。

「刀舟齋がな……もう一生分の墮胎施術したって嘆いてたぞ」

「あの娘には一生頭が上がらないわね。心に傷を負った娘達にも良くしてもらった」

「あいつは俺らが入学した時からずくと変わらねえ。凄い奴だよ、本当に」

なお、暴力事件、強姦事件が頻発し、望まぬ妊娠や性病感染も頻繁に起きる大江戸学園の地獄っぷりについてのツツコミは不要である。

徳河早雲こと、北条早雲が方々から集めた英雄・英傑の生まれ変わりのレベルアップのため、意図的に修羅場が起きやすい環境にしているせいもあるが、単純に大江戸学園の学生達が凄イバカばつかりな事も原因の一つである。

（作者注・母体保護法の要件を満たさない墮胎行為は違法です。刑法212条等により処罰

される可能性がありますので、現実世界では絶対にやらないでください。）
 そうして……美空も九十郎もしばし無言になる。

大江戸学園は超空間ワープ航法によって島ごとオーデインの居城に移動中であるが、いつそ不気味な程に何も聞こえない。

風の音も波の音も聞こえず、聞こえてくるのは校内放送だけである。

「……何か不気味ね、妙な胸騒ぎがするわ」

「もうすぐ俺達はあるのオーデインと戦うんだよな」

「北欧神話の主神でしょ。」

私らの生きてる世界に劍丞を送り込んで、蘭丸を影から操って、

私達の魂をエインヘルヤルとかいうのの材料にしようっているムカツク奴

「ああそうだ、俺達を散々苦しめてきた心底ヤな野郎だ。」

「だけど神だ、本物の神様相手に今から喧嘩を売りに行くんだ」

「勝てる……かしら……？」

美空が九十郎の隣に立ち、そっと指と指を絡め合う。

その指先は冷えていて、少し震えていた。

「勝てるって言ってやりてえけど、正直なんとも言えねえ」

そして九十郎は蘭丸戦からここまでの戦闘準備について思い出す……

「美空様！ 九十郎！ そろそろわあぶつてのが終わるみたいだよ！」

「いよいよ戦闘開始つすよ！」

そんな美空と九十郎の下に、犬子と柘榴が駆け寄ってきた。

「ああ、ゴメン。ちよつと感慨に耽つていたわ。

戦いの準備はできてるんでしょね？」

「越軍改め長尾連隊、総勢5000！ 戦闘準備完了っす!!」

直後、美空が戦国時代から連れて来た将兵達が一斉に雄たけびを上げた。

犬子が、柘榴が、秋子が、松葉が、貞子が一斉に戦意を見せた。

例え敵が何者であろうと、例え敵が神話の存在であろうが、最後の最後まで美空と共に戦い抜く決意を示した。

「甲軍改め、武田大隊。 関の声を上げよ」

美空達から少し離れた所で、武田光璃が軍配を掲げた。

蘭丸戦の後、雫や粉雪と共に方々を駆け回り、武田軍の残党をかき集め、総勢1000名の大隊を結成するに至った

その武田大隊が、光璃の命令に応じて雄たけびを上げる。

「武田再興が成るか成らないかはこの一戦に掛かっているんだぜ！

赤備え共、ためえら全員腹くくれえええーっ!!」

粉雪も、武田の精鋭赤備え達も気合は十分だ。

「異国の神とやらに見せつけてやるぞ！ 我らは弱くして敗れたのではないのだと！」

「甲斐武田の恐ろしき！ 見せてやりましょう！」

「今日こそお館様のために、死んれやるのらあ!!」

粉雪だけではない、春日、心、そして兎々がこの戦に参戦する為に特別に釈放され、武田四天王が集結している。

毎日毎日兎々セラピーをせがまれたため、兎々は若干お疲れ気味であったが、残りのメンバーは全員気合十分だ。

「ああ……. またもや九十郎さんと別行動…….

失言で落ちた信頼を挽回できないまま時間だけが過ぎていく…….

私は一体いつになったら越軍に戻れるのか…….

「君は基本優秀なんだから、

時々ぼろつと本音が出る癖をどうにかすれば良いんじゃないかな」

「一二三さん、こういう時に正論を言わないでください。むしろ悲しくなります」

なお、雫と一二三もなし崩し的に武田大隊に組み込まれている事も付記しておこう。

「織田師団っ！ 我らも負けずに声を上げよっ！」

織田久遠信長の合図と共に、織田信長が戦国時代から連れて来た1万5000の将兵達に気合を入れさせる。

人数的には一番多いが、数ヶ月もの間戦闘訓練そつちのけでエロ特訓だけやっていた

影響で、弱卒を超えた超弱卒状態である。

蘭丸戦後の一ヶ月弱の期間、後漢末期の英雄達（特に于禁と楽進）による猛特訓によって多少は実戦の勘を取り戻しつつあるが、それでも弱卒の域は超えていない。

「松平旅団っ！ 今こそ三河武士の心意気を見せる時ぞー！」

松平葵元康の命により、三河武士達が雄たけびを上げる。

蘭丸戦ではずっと蚊帳の外だった彼ら、彼女らであつたが……いた、ずっと蚊帳の外だったからこそ、この戦いで天下に存在感を示そうと必死の覚悟を持っていた。

松平旅団、総勢8000名。

その全員が屈強な肉体、独特の頑固さと面倒臭さを併せ持つ三河武士達である。

さらに……

「北条師団、この戦いは元より北条の戦。他国の者達に後れをとってはならんぞー！」

北条が誇る勇将にして名将、北条隴綱成が自軍に気合を入れさせる。

蘭丸戦の後、剣丞隊の尽力によって現当主北条朔夜氏康を説得し、今回の戦いに参戦してもらっている。

人数は織田と並ぶ1万5000、ただし参戦が開戦日直前になったため現代兵器の取扱いは全くできず、個々の戦闘能力という意味では織田軍とあんまり変わらない。

参戦がギリギリになった原因の何割かは一二三の煽りに猪俣邦憲がブチキレ、織田松

平連合軍VS北条軍の戦争勃発一歩手前になったためである。

北条早雲の頑張りが無ければ織田、松平、北条軍が揃ってこの戦いに参戦できなかったらう。

『大江戸学園有志っ！ 総勢1万人！ 頑張って行こっ!!』

吉音の能天気な声に応じ、大江戸学園のバカ共が一斉に叫び、剣を天に掲げる。

大江戸学園の学生数は約10万人。

学園島ごと北欧神話の神、オーデインの居城に殴り込みに行こうという話をして10分の1が残って戦う選択をする辺り、大江戸学園は魔境である。

約一ヶ月間、殆ど不眠不休で織田軍と越軍のケアを担い続けてきた刀舟齋かなうの戦意は特に高く、今すぐにも『てめえら人間じゃねえ！ 叩っ斬ってやる!』と戦いを始めそうな勢いである。

しかも残りの10分の9もかなりの数が学園島に残っている。

学園島から避難した人数よりも、残って物資運搬や防御設備の設営、負傷者の救護等で戦いを支えようとしている者の人数の方が多い。

大江戸学園にとつて、最早次元の壁を越えてオーデインに喧嘩を売る事ですら日常茶飯事の範疇に含まれつつあるらしい。

「……人数、見事にバラバラっすね」

島中から聞こえてくる将兵達の叫び声に心強さを感じると共に、柘榴達は一抔の不安も感じていた。

「これ本当に統率とれるのかしら？ とりあえず私には無理よ、この人数は」

美空もまた柘榴と同じ不安を抱えている。

いくら人数が多くても、いくら現代二ホンの武器を用意していても、バラバラに戦うのでは大した戦果はあげられない。

北欧神話の主神を相手にするというのに、それで大丈夫だろうかという思いがあった。

しかし……

「その心配は無用だぞ美空。」

この一ヶ月、俺と犬子がどこで何をしてたか知らん訳じゃねえだろ」

「そうですよ、犬子達も頑張ってたんですからね」

犬子と九十郎がふふーんと胸を張る。

そして校内放送から吉音のでも、詠美のでもない声が聞こえてきた。

『あく、あく……ごほん、この度全体の指揮を執る事になりました。』

姓は陸、名は遜、字は伯言と申します。これから作戦について皆様にご説明します』

少し緊張が見える声。

後漢末期の英雄・英傑達の中では比較的若く、実戦経験の浅い彼女であったが、作戦の内容が内容のため、全会一致に近い賛成をもって今回の作戦の総司令官に抜擢された。

『ええ、まず、私達三国志の時代出身のメンバーは軍勢を引き連れていませんので、腕自慢の人達は軍勢の中で、

知略で勝負する人はここ、中央作戦指令室から皆さんを援護します』

「燕人張翼徳！ 越軍に助っ人するのだ！ 久々に蛇矛で大暴れなのだ！」

後漢末期の英雄・英傑達の一人、張翼徳こと鈴々が名乗りを上げる。

そして越軍への助太刀を承諾した何名かが次々と獲物を振り上げ、名乗りを上げ、その度に越軍全体から歓声が上がった。

『美空さん、九十郎さん、聞こえますか？ こちらは諸葛孔明です。』

作戦指令室から通信をしています』

続いて、美空と九十郎の通信機から声が聞こえてくる。

中国史の教科書どころか、世界史の教科書に名前が載るレベルの史実ネームド、諸葛孔明その人である。

「よお孔明、俺らの戦術支援引き受けてくれてありがとな。ぶっちゃけ頼りにしてるぜ」

『九十郎さんは放っておくとどこで何をしてくるか分かりませんからね』

「はっはっはっはっ、あん時は色々済まなかった。謝るから許してくれ」

『桃香様の無理無茶無謀から救っていたのでお相手ですよ』

何やら親し気に話し込む孔明と九十郎を見て、事情を知らない美空と柘榴がひそひそ声で犬子に話しかける。

「……ねえちよつと、何か妙に親し気なんだけど、何かあったの？」

「まさか柘榴の知らない現地妻じゃねーっすよね」

「柘榴、その辺は目を光らせてたから大丈夫だよ。」

それ以外は……うん、まあ色々ありまして……」

犬子が思わず苦笑する。

蘭丸戦が終わってからの苦労はともではないが一言では言いあらせない。

「そうそう、色々大変だったんだよ。」

本物の前田利家ですよく、怪しくありませんよよって話しかけたら思い切り怪しまれて、

証拠代わりに歴史の教科書を開いたら前田利家が男だった」

「織田信長とか、上杉謙信も男の人になって、本当に驚いたんですよ」

「え、何？ どういう事？ 私が男だって事になってたの!？」

「俺らや美空とかが生きてた世界では、歴史上の偉人は大体女だったけれども、劍丞がいた世界だと大体男だったらしい。」

源義経とか、弁慶とか、坂上田村麻呂とかまで男だつてよ、驚きだろ」

「何よそれ、血縁関係とかどうなってるの!？」

「知らん、興味もない。まあとにかくフアーストコンタクトは最悪だった訳だ。」

そこを助けてくれたのが孔明だ」

『まあ、ええ、劍丞様の世界に移り住む事になった直後は、私達も驚きましたから、もしかしたらつて……』

「その後も大変だった、呂布は裏切つて、ロキに襲われて、

劉備はトチ狂つてお友達になりましたよとか言い出して、

エインヘルヤルだのヴァルキリーだのに袋叩きに遭つて、

慌てて助け出したと思つたら呂布がまた裏切つて、ついでにロキも裏切つて、

それから孔明の罠が炸裂して高層ビルがドミノ倒しになつて、

エインヘルヤルが軒並みペチャンコになつて今に至る」

『いやあ、アレは楽しかったですね』

「瓦礫の下から魏延が出てきて、

『殺す気かっ!』つて言い出した時は2人で大爆笑だったよな」

『頭がアフロでしたからね』

そして朱里と九十郎があっはっはっと思ひ出し笑いをする。

なお、巻き込まれかけた焰耶は凄い目で2人を睨んでいたが、後で桃香がよしよしと頭を撫でたら機嫌を直した。

「犬子、とにかく大変だったみたいね」

「犬子、1人だけ九十郎と一緒にだつて羨んで悪かつたつす。

苦労させた分だけ後で労わせてほしいつす」

「あ、あはは……」

そうやって朱里と九十郎が思い出話に浸っている間にも、校内放送で陸遜……真名・穩が作戦の説明を続けていく。

『……という事で、オーディンの居城ヴァルハラ宮殿及び周辺の市街地は、

建物の構造物そのものにオーディンの魔術を補助する術式が練り込まれています』

『ガ○ダムが分かる人は、サ○フレイムか、

F○1のマルチプル・コンストラクション・アーマー構造みたいなものだつて

思ってくれば良いと思うよ』

穩の説明を吉音が補足する。

サ○コフレームとは、サイコミューの基礎機能を持つコンピューター・チップを、金属

粒子レベルで鑄込んだモビルスーツ 用の構造部材である。

当然だがガ○ダムが分からない者にはさっぱりな説明である。

『そこで作戦の第一段階は、全軍に配備した火炎放射器、火炎瓶、

焼夷弾に換装したロケット砲を使い、ヴァルハラ宮殿を燃やします！

灰すら残さない勢いで焼き尽くします！』

要するに殴り込みの次は全員で放火をしまくれという作戦である。

このある意味で単純、ある意味で頭の悪い作戦が、無限とも思える魔法力を持ち、超常現象としか表現できないような大魔法を軽々と行使するオーティン攻略に不可欠であると分かった時、ほぼ全会一致で陸遜が総司令官に選ばれた事も付言しておこう。

「皆あつ!! 火炎放射器は持ったかあ、なのっ!!」

織田軍に混じって参陣している于禁・真名は沙和がそう叫ぶと、織田兵全員が一斉に火炎放射器を空に掲げる。

「汚物は消毒やああああつ!!」

続いてヴァルハラ攻略用火炎放射器の設計者である李典・真名は真桜が声を上げると、織田軍全員がうおおおつ!! 叫びだした。

『バルドル、ツールといった神格持ちが前線に出て来る事が予想されます。

こちらは関雲長殿、徳川家康殿に神格を付与して対抗します』

「え？ 何？ どういう事？ 神格を付与？」

「良く分からんが、神の領域に至った連中には、

こつちも同じ土俵に上がらないと戦いにならねえらしい。

それで東照宮と関帝陵に集まった信仰を拝借して、

一時的に関羽と家康を神様と同格に引き上げるんだとか」

「要するに愛紗がカミサマパワーでぶん殴るのだっ!!」

「とりあえず物凄く頭の悪い事をしてかそうとしてるって事だけは理解したわ」

なお、この程度の無理無茶無謀は大江戸学園では良くある事である。

『そしてオーデインを射程に捉えた所で、最大出力の大江戸キャンオンで勝負を決めます
!』

「大江戸……キャンオン……？」

「ああ、学園中央の城に、でっかいキャンオン砲が付いてるんだと。

俺もこの前初めて知ったけど、大江戸学園だしキャンオンがあってもおかしくないよ
な」

「おかしいわよ!! 絶対おかしいわよ!! 絶対にいっ!!」

美空のツツコミは戦国時代でも大江戸学園でも変わらない。

『もう間もなく超空間ワープが完了します。』

エインヘルヤル、ヴァルキリーからの魔法攻撃が予想されますので、
合図があるまで対魔法バリアーから出ないでください」

「ああもう、ツツコミ追いつかない！」

総員、衝撃が来るわよ！ 何かに掴まりなさいっ!!」

そして……ついに開戦の瞬間がやって来た。

ズドオオオオンツ!! という学園島が大地に激突する大きな音と地響きが開戦の合
図である。

『ワープアウト……各数値正常！ 美空さん！ 迎撃魔法が来ますっ!!』

「全軍！ 対魔法バリアーに退避！ 死にたく無かったら一歩も出るんじゃないわよ
!!」

越軍全員が学園の各所に配置されたバリアーマシンの周囲に集まる。

そして対魔法用の特殊加工がされた盾を構えて……構えて……

「……ん？」

「……あれえ？」

『魔法感知レーダーに反応なし……迎撃魔法が……来ない……?』

九十郎が、美空が、そして朱里がそれぞれの場所で首を傾げる。

嵐のように飛び交うであろう攻撃魔法が一発たりとも飛んでこない。

そんな状態で10秒経ち、20秒経ち……数分間ずくと何も起きないまま無言で身構え続けていた。

「……ねえ、九十郎。ここって本当にヴァルハラ宮殿だよな？」

オーデインの本拠地なんだよね？ 行先間違ってたとか無いよね？」

「流石に無いだろ、いくら大江戸学園でも……やべ、自信無くなってきた。

生徒全員で迷子とか普通に起きそうだ、大江戸学園だしなあ……」

「この学園はどうなってるのよ!？」

美空のツツコミが周囲に虚しく響き渡る。

しかしそれでもオーデインの軍勢からの迎撃は皆無であった。

そして越軍含めた全員があれくつと首を傾げる中で、九十郎達に通信が入った。

「孔明か。こっちは妙に静かで困ってるんだ？ このまま作戦開始で良いのか？」

それとも中止か？ もしかして行先を間違ってたか？」

『……中止です、行先は間違えていません』

「……はい？」

『もう行かなくて良いです。』

いえ、ややこしい状況がもつとややこしくなるので行かないでください』

「おい待て孔明、訳が分からんぞ」

『ヴァルハラ宮殿に先走って突入した人がいます、3名程』

「捕まってる人質にでもされたのか？」

『いえ、宮殿の中枢にまで入り込んでしまいました。』

そこで暴れられたら本気で困るので引き取ってくれと、

オーデインから打診されています』

「向こうの都合なんて知るかよ、弱ってるなら今の内に色々燃やしておこうぜ」

『こちらに有利な条件で和睦したいと言うので現在交渉中です。』

ややこしくなるので待機してください』

「はあっ!? お前それ……マジかよ!? 俺達一生懸命軍勢揃えて訓練したんだぞ!

対オーデイン用の新技とか考えて、新兵器とか作ってよおっ!!

大江戸キャンノンだって学園中の知識と資材を結集して大改造してさあっ!!」

『使いませんでしたね』

「お前らも毎日毎日深夜まであーでもないこーでもないって作戦練ってただろ!?

良いのかよこんな終わり方でえっ!？」

『無意味な時間でしたね』

「人格付与で人間だった頃の記憶とか人格とかに影響出るかもって、

関羽と葵が凄え悩んでたよなあ! あいつらの悲壮な覚悟はどうなんだよっ!」

『何の意味も無かったですね』

「誰だよ余計な真似したヤツは!? 誰なんだよお!」

『仲村往水って人なんですけど、知ってます?』

「知らん……誰それ……怖……」

いや待て、もしかして凄いな有名な大英雄の生まれ変わりとか……」

『さつき早雲さんに聞きましたけど、誰の生まれ変わりでもない普通の人みたいです』

『どうやって異世界に行ったんだよ!? 並行世界に移動するのって大変なんだろ!』

ああそうか、ロキだな! ロキの奴がこっそり抜け道とか用意してたんだなっ!」

『さつきロキさんにも聞きましたけど、知らん……何それ……怖……ですって』

九十郎は訳が分からないと頭を抱えて崩れ落ちる。

後で分かった事だが、オーデインはこの戦いに備え、戦国の日ノ本、後漢末期の英雄・

英傑達を限りなく完璧に近い形で監視していた。

何を考え、誰と会話し、何を行ったかを全て漏らさず把握していた。

大江戸学園の者達も例外ではない。

徳川吉宗の生まれ変わりである徳河吉音を。

徳川家光の生まれ変わりである徳河詠美を。

徳川光圀の生まれ変わりである水都光姫を。

遠山金四郎景元の生まれ変わりである遠山朱金を。

長谷川宣以の生まれ変わりである長谷河平良を。

大岡忠相の生まれ変わりである逢岡想を。

それぞれ限りなく完璧に近い監視を行い、ありとあらゆる情報が筒抜けだった。

だがしかし、誰の生まれ変わりでもない一般生徒である佐東はじめは、五十嵐文は、眠利シオンは、大神伊都は、刀舟斎かなうは、そして仲村往水はまるで監視がされていなかった。

戦国乱世を生きぬいた英雄・英傑ではなく、英雄・英傑の生まれ変わりでもない彼女達に割くだけのリソースはオーデインと言えども持ち合わせていなかった。

それが勝敗を分けたのである。

「こんな……こんな……こんな終わり方ってアリかよおっ!!」

この日、オーデインと戦国・三国・大江戸学園連合との間に和平が結ばれた。

地獄のような有様だった蘭丸戦に比べ、あり得ない位に早く終わったこの戦いを、九十郎は『エンド・オブ・リバーズ』と呼ぶことになる（第79話）。

犬子と柘榴と一二三と九十郎最終回『ここから先の物語
にあえて名前をつけるのならば』

「……早いもんだな、

あの拍子抜けする程に楽だったエンド・オブ・リバーズから今日で3ヶ月か」

「九十郎、前にも似たような事言っただけでなかったか？」

オーデインとの戦いから……九十郎が個人的にエンド・オブ・リバーズと呼んでいる
戦いから3ヶ月か過ぎていた。

あの戦いの後、九十郎は大江戸学園に復学し、犬子と一二三と雫と粉雪の4人も季節
外れの編入生として入学する事となった、

とはいえ、大江戸学園は現代ニホンのトップエリートを養成する場所であり、授業の
レベルは非常に高い。

多少のブランクはあるとはいえ、実力で大江戸学園の入試を突破した九十郎はともか
く、他の4名は戦国時代基準では高度な学力を有していたものの、現代ニホンのトップ
レベルには到底及ばないため、一二三以外全員毎日毎日補修と追試漬けである。

なお、一二三は元々の地頭の良さもあるが、それ以上に教師への賄賂、試験問題の不
正入手、カンニング、その他諸々の卑怯戦法によつて補修と追試から逃れていた。

今日も今日とて犬子達は補修を受ける日……という事になつていたが、今日は特別な
日の為、教師に頼み込んで日程を変更させてもらつていた。

「九十郎、通信機の準備できたよ」

「流石に3回目にもなると、手慣れたものだな」

「そりゃあ犬子だつて毎日勉強しているもの、ネット会議くらいできるようになるよ」

「最近はどこに行つてもウイルス対策がうるさくなつてゐるからなあ」

「時々、あの大らかだつた戦国時代が懐かしくなるかも」

「無知だつただけだろ」

九十郎が時計を見る。

時計の針は11時55分を示していた。

「あと5分……」

「美空様も柘榴も元気かな？」

「一ヶ月前は元気だつたんだ、今回も大丈夫だろ」

犬子と九十郎の2人がパソコンの前に座る。

通信回線に問題無いかを確かめたり、ちよつと髪型を整えたり、そわそわしながら時

間が経つのを待っている。

「カメラ、ちゃんと動いてるのかな？」

ほら、一回目の時はカメラが動いてなくて、声しか送れなかったじゃない」

「心配すんな、ついさつきテストしたばかりだろ」

「ちよつと拭いておこうかな、雑巾どこだっけ……」

「良いから座つてろ」

九十郎が犬子を抱き寄せる。

肩と肩が触れ合う。

ただそれだけ、たったそれだけで犬子は言いようの無い幸福感に包まれる。

「……あと一分だね」

「そうだな」

「ビデオメールはちゃんと送信したっけ？」

「心配すんな。メールソフトは起動済み、送信予約設定もしているよ」

「やっぱり、たった10分じゃ近況を伝える事もできないからね」

「あいつらのビデオメールへの感想もな」

「うん、美空様も色々頑張つてて、本当に凄いよね」

「ああ、そうだな」

時計の針が進んでいく。

あと10秒で正午……あと5秒……1秒……針が正午を示したのを確認すると、九十郎はパソコンのネット会議ソフトから『接続』のボタンをクリックした。

……

……

……

「……という訳で、

どうにか私と九十郎さんの恋愛フラグを復活させられませんかでしょうか」

「諸葛孔明にもできる事とできない事があるんですよ」

……同じ頃、大江戸学園のメインストリートに面したお洒落な喫茶店のテラス席で、雫と朱里が話をしていた。

戦国時代と後漢末期における稀代の軍師が密談を交わしているという訳では無い、内容は単なる恋愛相談である。

蘭丸戦が終わった直後、洗脳され、凌辱され、失意の内にあつた人達が聞いている中で『失言のおかげで助かりました』と無神経な発言をした時から、九十郎との関係がどうにも先に進まずに焦っているのだ。

「雫さんは基本優秀なので、

時々ぼろつと本音が出る癖をどうにかできればと思いますけど……」

「うぐう、一二三さんと同じような事を……」

「人の噂も七十五日と言いますし、森蘭丸との一件で心を病んでしまった人達も、

少しずつではありますが着実に回復しつつあります。

焦らずじっくりと信頼を重ねながら、

時間が怒りを忘れさせてくれるの待つのが良いのではと思いますよ」

「アツハイ、ソウデスネ……」

あまりにも無難な、あまりにも面白げの無い回答に、雫はがっくりと項垂れる。

「……もしかして、あの諸葛亮孔明なのだから、

問題を一気に解決するような妙案が出せるとか思っていますか？」

「いえ、そんな事は……あ、ごめんなさい。正直に言つて、ちよつと期待していました」

心の内を見事に言い当てられ、雫は姿勢を正して頭を下げた。

いつもの失言癖で『貴女は本当に諸葛亮ですか』と溢さなかったのはちよつとした成

長なのかもしれない。

「諸葛亮といつてもほんの少し機転が利くだけで、血の通った人間ですよ。

できない事なんてごまんとあります。

知っているでしょう？ 諸葛亮は劉玄德亡き後、蜀を率いて5回に渡って北伐を行

い、

魏国を亡ぼすどころか、その途上にある長安に辿り着く事すらできなかつたのすから」

「それは……そうかも知れませんが……」

それでも、藁にも縋りたい気持ちなんです。諦めたく無いんですよ、九十郎さんを。

私はこう見えて黒田官兵衛なんです。諦めが悪いのも分かるでしょう?」

「一説では、関ヶ原の時も東軍西軍双方を出し抜いて天下取りを狙っていたとか」

「狙っていたのだと思いますよ。」

歴史書の中の黒田官兵衛は、九十郎さんと出会わなかつた私です。

何を考えて、何をしようとしていたのか、大体は分かります」

「ところで、ここのお支払いは?」

「もちろん私が出しますよ」

「店員さん、ラズベリーパフェとホットケーキ、

それとダーズリンティーを追加でお願いしまーす」

朱里は言質を取ったと見るや、すかさず雫の財布の中身ギリギリのラインで追加注文を行った。

恋愛相談では頼りにならずとも、怒られないギリギリのラインで自らの利益を最大化

するのは諸葛孔明の得意技である。

雫としても無理を言つて相談の時間を作ってもらつた手前、今から『やつぱりワリカ
ンで』とは言いにくい。

「ううう、目薬作りの内職増やさないとなあ……」

大江戸学園に通う生徒達は、いわゆる資産家の子女が多い。

しかし、学園内では独自の通貨が流通しており、学園島の外の金銭をそのまま使用する事はできないようになっていゝる。

資産家の子女であつても、貧乏人の倅であつても、等しく島内で労働し、学園内の通貨を稼がなければならぬのだ。

なので授業外の時間のほゞ全部が補修と追試で埋まつていゝる犬子と粉雪、そして雫は超絶貧乏生活を強いられていゝる。

例え前田利家や山県昌景、黒田官兵衛のような史実ネームドであろうとも一切手心を加えない所が大江戸学園の魔境たる所以である。

ドケチで有名な前田利家、儉約家で知られる黒田官兵衛はともかく、譜代家老衆の生まれで節制生活になれていゝない山県昌景は結構苦勞をしていゝるのだ。

一方、一二三は通貨偽造で生活費や遊興費を賄つていゝる。

こゝういゝう非合法な抜け道が多数存在し、北町、南町奉行所の役人と永遠に終わらぬい

イタチゴッコを繰り返している所も大江戸学園の魔境たる所以である。

通貨偽造をするのも学生ならば、それを取り締まる者も学生。

教師はたとえ死人が出る事態になろうとも不干渉を貫く……それが大江戸学園の方針であり、教育理念でもある。

これは単なる放任主義ではない、壺の中にありつただけの毒蛇、毒百足、毒蜘蛛、毒蛙を押し込んで極限まで濃縮させる蟲毒めいたナニカである。

「ところで、どうして朱里さんも学園にいるんでしょうか？」

転入はされてなかったと思うのですが」

「気分転換と言いますか、時間潰しにチャドーでも学ぼうかなと思ひまして」

「じ、時間潰し……?」

「戦国乱世の時代から、

100年近く戦争を経験していない国に連れてこられたのですからね、もう暇で暇で」

なお、暇を持て余した鳳雛こと龐統士元はコミケで同人誌を売っている。

「ああ、やはりそちらもそうですか」

「いつそパリピになって歌姫のプロデュースでも始めようかと思う位に平和ですよ」

雫が頭の中で『イエーイ』なんて文字が浮かぶゴーグルを掛けた朱里を想像する。

思わず吹き出しそうになる程に違和感が無かった。

「そ、そうですね……この学園、茶道の手ほどきをする私塾がいくつかあります。

結構有名な家系のお子様が指導をしている所とかもありますから、

そこに通われるのも良いかもしれません」

「じゃあ暗殺拳を教えている所もあるかもですね」

無いと言い切れない所が大江戸学園である。

「二〇ジャスレイヤーの読み過ぎです。ニンジャは実在しない、良いですね?」

「ハイ」

なお、小波や姫野は忍者であって平安時代をカラテによって支配した半神的存在ではないのでセーフである。

「では、しばらくこちらに滞在するのですか。」

戦国時代なら、まだ千利休殿が存命の筈ですよ」

「それでも良かったのですけれど、まあ、急ぐような事でもありませんから。

ゆつくりと学園の雰囲気を楽しみながら学べればなと」

大江戸学園に普通の学生生活の空気を求めるのは無謀が過ぎる。

「知っているとは思いますがけれど、異なる並行世界を繋ぐポータルは、

一ヶ月に一回、およそ10分しか開きません。」

家族とは離れる事になりますけれど……」

「私や貴女の生まれ育った時代なら、

少し離れた所に暮らせば一ヶ月以上音信不通なんて当然でしょう」

「それは……まあ、そうですね」

オーデインとの戦いが終わった後、大江戸学園と戦国時代を繋ぐポータルと、大江戸学園と剣丞が生まれ育った別の日本を繋ぐポータルは閉鎖されている。

ずっと繋ぎっぱなしにする事もできなくも無かった。

現に蘭丸戦からヴァルハラ宮殿殴り込み作戦が行われるまでの約一ヶ月間は、3つの並行世界を繋ぐポータルはずっと稼働していた。

原則閉鎖に方針が変わった理由は、とにかくコストがかかるからである。

何しろ、ポータルをずっと稼働し続けるために必要なエネルギーは、最新型の原子力発電所を休み無くフル稼働し続けてやっと賄える程に莫大で、異世界間の出入り口が2つあれば単純計算で原発2か所分である。

オーデインとの決戦準備が僅か一ヶ月という短い期間に行われたのは、それ以上時間をかけると国が傾く程のコストがかかってしまうからでもあるのだ。

超空間物理学の研究によって、異なる並行世界を繋ぐゲートを作り出すのに必要なエネルギーは一定ではない事と、比較的ゲートを作りやすいタイミングは概ね一ヶ月に一

度の頻度で訪れる事が分かり、ポータルは一ヶ月に一度、約10分間だけ開くようになったのだ。

「戦国時代側のポータルが開くの、今日じゃありませんでした?」

「ええ、昨日家族や友人に送るビデオレターを撮影しました。」

家を出る前に予約送信に設定しておきましたから、

ポータルが開くと同時にあつちに届きます」

「すつかりこの時代の技術を使いこなしてますね。私達は慣れるまで苦労したんですよ」

「おや、そうなんですか? ちよつと意外ですね」

「今時の電子機器には今でもちよつと慣れません。」

やつと使えるようになったと思つたら、

ウ○キペディアに諸葛孔明は男性と書かれていて混乱していたんですよ」

「大江戸学園の教科書では黒田官兵衛も諸葛孔明も女性と書かれていますのですけれど」

「本当に何なんでしょうね、この違いは」

そんな事を話していると、喫茶店の店員がパフェとパンケーキ、紅茶を運んできた。

雫がふと腕時計を見ると、間もなく正午を……戦国時代と大江戸学園を繋ぐポータルが稼働する時間を指し示そうとしている事に気がついた。

「こうしていると忘れそうになりますけれど、

美空様がいる側は今なお戦国乱世なのですよね」

「美空さんに現代兵器が渡ったと聞きますから、

雫さんが卒業する頃には乱世は平定されているかもしれないよ」

「そうですね、そうだった良いのですが……何十年も続いた戦乱の時代が、

過ぎた武器を手にした程度の事で容易く平定できるとは……

いえ、もちろんただの杞憂だとは思うのですが」

「胸騒ぎがしますか？」

「ええ……まあ、少しだけ……」

そして時計の針が……正午を差した。

……

……

……

ズダダダダッ！ ズダダダダッ！ と、鉄砲の射撃音が響き渡る。

一発だけなら誤射かもしれないと思う所だが、銃声は途切れる事無く何度も何度も

……何十、何百も響き続けていた。

そして人が撃たれて倒れ伏す音、苦痛の呻き声、助けを呼ぶ声、もつと撃て、もつと

殺せと叫ぶ声……戦場の音が聞こえてきた。

「……………ん？ ……んん？」

「え……………な、なにこれ？ ……どんな状況？」

ネット会議をスタートした瞬間、そんな剣呑な音を聞かされた犬子と九十郎は、何が起きたのかと呆然とするばかりである。

『うおおおおおーっ！！ ボンタンボンタンボンタンボンタン』

ボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンツ！！』

そして画面の向こうで、美空が段ボールに詰められたボンタンを投擲していた。

『ちっ、ボンタンが切れたか……………柘榴っ！ 次の箱持つてきなさいっ！』

『御大将、ボンタン投げてる場合じゃねーっす！ 九十郎と通信繋がったっすよ！』

『ちよ、それを早く言いなさいよ！ 通信機どこ!? こっち!?』

『そっちは雪隠！ こっちっすよ！』

困惑する犬子と九十郎の前に……………といってもWEBカメラ越しではあるが、美空と柘榴が顔を見せた。

「おい美空！ 柘榴！ 今そっちはどうなってるんだよ!？」

春日山城だよな!?! 誰が銃なんてぶっ放してんだよ!?!」

『共産主義革命軍よっ!!』

「きよ、きよようさん……?」

「か、かくめい……ぐん……?」

犬子と九十郎がなんのこつちやと顔を見合わせ、首を傾げた。

『あく……ピンとこねーのも分かるつすけど、

ぶつちやけ柘榴達も何が起きてるか分かつてねーつす。

空様を中心とした自称共産主義革命軍つてのが蜂起して、城を取り囲まれてるつす

』よ

「はあっ!? 空が中心!? あいつそんな事したのかよ!」

『真偽は分からないわ、私達だつてつい数日前まで知らなかつたし、

知つた直後に春日山城まで攻め込まれて防戦一方なのよ』

「おい美空、大丈夫なのかよ!」

『……ごめん、正直に言つて勝てる見込みは殆ど無いわ』

「おいおい、こんな時のために現代兵器を持たせたんだろ。

ガトリング砲でもロケットランチャーでも何でも使つて鎮圧しろよ』

『盗られたわ』

「……はあ!? 盗られただあ!」

『内部の裏切り者がいたのよ! こつちが軍を興す前に武器蔵を制圧されて、

そつちの世界の武器の大部分は共産主義革命軍に奪われたの！

そうじゃなきやボンタン投げて抵抗なんてする訳が無いでしょうがあっ!!」

「マジかよ……」

九十郎は思わず頭を抱えてしまう。

現代兵器を持つてすれば、戦国時代の軍勢はハッキリ言つて恐れるに足りない。

精強で知られる武田の騎兵隊ですら、九十郎が作ったドライゼ銃の前に成す術も無く敗れたのだ（第128話）。

いくら美空が上杉謙信だとしても、敵が現代兵器を持ち、こちらは持たないとなれば……

「劍丞が……結局、劍丞が正しくて、俺達が間違つてたつて事なのか……」

『そうね、結果論で言えばそうかも。自身の手之余る強力すぎる武器に対して、

安易に手を伸ばしてしまった私達の落ち度かもしれないわ』

『つっても危険はハナツから承知だったつすよ。』

危険は承知で、御大将なら使いこなせると信じて……信じた結果がこのザマつす。

本気で情けねーつす、本気で』

「……美空、柘榴」

『最後に……ええ、最期に九十郎の顔が見れて良かった、九十郎の声が聞けて良かった

わ』

『柘榴達はもうすぐ死ぬつすけど、九十郎達は気にせず幸せになつてほしいつす』

「馬鹿野郎おつ！ 約束しただろ！」

卒業証書を受け取つたらもう一度長尾家に土官するつてよおつ！

良い待遇で迎え入れてくれるつて約束しただろつ!!」

『その約束、守れそうもないわ。 本当にごめんさい』

その時、九十郎は見た。

美空の目尻に涙が伝っているのを確かに見た。

九十郎は怒りに震え、奥歯が砕けんばかりに噛み締め……そしてすつくと立ちあがった。

「……美空、柘榴、今すぐ俺が行く、今すぐ俺が助けに行く。

だから最後の最後まで諦めんな、最期の瞬間まで生き残れ、足掻き続けろ」

「でも九十郎！ あんまり時間は……」

大江戸学園と戦国時代を繋ぐポータルは、約10分間しか稼働しない。

その10分の間で人も、物も、データもやり取りをする事になっている。

九十郎達の住む長屋と、ポータルが設置されている大江戸城までにはそれなりの距離があり、稼働限界までに間に合うとは思えなかった。

だが……

「犬子、今すぐ一二三と粉雪、あと雫に連絡しろ。」

間に合えば今日、間に合わなければ一か月後に戦国時代まで来させる。

俺は一足先に行つて、なんとか時間を稼ぐ」

「いや間に合わないよ!! もうぼおたるも閉じちやうつて」

「サイドカーをカッ飛ばせばギリ間に合うっ! たぶん! きつとー!」

九十郎はそれだけ言うのと返事も聞かずに外に飛び出し、戦国時代から持ち帰った愛車に飛び乗った。

「うおおおおおっ!! 走れ俺の愛車あああーっ!!」

エンジン音が周囲に響く。

オーデインとの戦いに備えて色々改造した九十郎のサイドカーは、正直近所迷惑な爆音とクソみたいな燃費と引き換えに特撮ヒーロー番組かと見間違える程の速力を得ていた。

公道では絶対に走らせられない仕様であるが、大江戸学園は全面私有地、全ての道が私道であるため合法である。

こういう頭のおかしい車両が九十郎のサイドカーだけではない所が、大江戸学園の魔境たる所以である。

犬子が間に合わないと言ったのは、確かに道理である。

ポーターの稼働が止まるまでの時間は僅かで、普通の方法では絶対に間に合わない距離があつた。

だがしかし、常識的ではない方法であればギリギリ間に合う時間と距離でもあつた。

魔改造されたサイドカー、全ての信号を一切無視する九十郎の精神性、そして突然の暴走車両にも『またにござるか』とばかりに普通に対処する大江戸学園の一般生徒……それら全てが重なり、信じられないような速度で九十郎は大江戸城まで進んでいった。

そして……

「間に合う……このペースならギリギリ間に合う……だが……」

この時、九十郎の脳裏に浮かんだのは間に合うかの心配ではなく、間に合つた後の心配だつた。

「大江戸学園のノリで殴り込みをしてもどうにもならねえ場合もある、

それは蘭丸との戦いで嫌つて程に理解した。

俺一人だけで戦国時代に行ったとして、本当に美空や柘榴を救えるのか？」

脳裏に浮かぶのは敗北の記憶である。

全身を拘束され、目の前で吉音が犯され、光璃が犯され、犬子や柘榴達が犯される光景を見せつけられる……二度と味わいたくない屈辱の記憶が呼び起こされていた。

それに共産主義革命軍なる連中は現代二ホンの兵器を美空達から奪っている。刀一振りです撃つには余りにも分が悪いと言わざるを得なかった。

「劍丞と合流して……いや駄目だ、劍丞が今どこで何をしているのか分からねえ。

都合良く合流できるか分からねえし、美空達を助けてくれるかも分からねえ。

何か……何か無いのか？ 誰かいないのか？ 何でも良い、誰でも良い。

この時代の兵器に対抗できる何か、対策を想いつけるような誰かが……」

そんな事を考えている間にも、時間は刻一刻と過ぎていく。

タイムリミットは近い。

寄り道をしている時間は無い、立ち止まる時間も無い、Uターンをするなんて以ての外だ。

焦る九十郎、しかし何も見つからない、しかし何も思いつかない。

焦り、焦り、焦り、そして……2人の人物が喫茶店にいるのを見つけた。

それも都合の良い事に店内の席ではなく、店外の……いわゆるテラス席に座っていた。

「あ・れ・だあああーっ!!」

九十郎が思い切り体重を偏らせてサイドカーを旋回させる。

そして限界ギリギリまで手を伸ばし、1人の少女の襟首をひっ掴んで側車に乗せた。

そう、その少女こそ小寺雫孝高、後に黒田官兵衛とも名乗る稀代の軍師……ではなかつた。

「は……はわわあつ?! な、何ですかあつ?!」

姓は諸葛、名は亮、字は孔明、そして真名は朱里……九十郎が連れ去つたのは雫ではなく、諸葛孔明の方であつた。

「すまねえ孔明えつ! 本気ですまねえつ!

いきなり巻き込んで悪いが、俺の主君と嫁が大ピンチなんだよつ!

たぶん俺一人じゃどうする事もできねえ、お前の知恵がどうしても必要なんだつ!

だから頼む孔明、俺に力を貸してくれつ! 俺と一緒に戦国時代まで来てくれえつ!

ここまでの物語は、犬子と柘榴と一二三と九十郎の物語である。

しかし、ここから先の物語は、犬子と柘榴と一二三と九十郎の物語ではない。

この後、諸葛亮孔明と九十郎は閉鎖寸前の異世界ゲートに飛び込み、ギリギリのタイ

ミングで美空や柘榴達のいる並行世界に移動する事に成功する。

しかし、閉鎖ギリギリでゲートに飛び込んだせいでオーバード現象が発生し、戦国時代側のポータルが破損してしまい、修繕に成功するまで大江戸学園との異世界ゲートは開くことは無かった。

ここから始まる日ノ本の命運を懸けた大冒険に犬子も、柘榴も、一二三もついて行く事が出来なかったのだ。

だからここから先の物語は、犬子と柘榴と一二三と九十郎の物語ではない。

ここから先の物語は……

「良おしっ!! ポータルが見えた! このままフルスピードで飛び込む!

孔明っ! しっかり掴まってろおっ!!」

「はわわあ!?! ひ、人さらいいいい〜!!」

……ここから先の物語にあえて名前をつけるのならば、孔明と九十郎の物語である。

完走した感想

ここでは犬子と九十郎を完走した感想を書き連ねていきます。

ネタバレに対する配慮はありませんので、ご承知おきください。

1 はじめに

この作品を描くにあたり、作者が密かに目標としていた事が2つあります。

一つ、負けた後の再起を描く事(なので主人公が頻繁に負ける)。

一つ、男爵様の作品の面白さを探求する事。

2 ごめんなさい

という訳で……男爵様お許しくださいっ!!

男爵様はやる夫スレの製作者様で、中聖杯シリーズやゴブリンスレイヤーTRPGリプレイ、トライマキナシリーズ等、(良い意味で)笑える作品が多い方です。

男爵様のネタを自分なりの解釈を加えつつ模倣した箇所が頻繁にあり、そのうち怒られるのではとヒヤヒヤしながら書いていました。

結局、男爵様の作品の面白さを模倣するという無謀な挑戦は見事に失敗したように思

います。

また、こちらは意識的に真似した訳では無く、無意識の内に寄って行ったというものですが、最近のエロシーンは◆WRVdP・MTx6様の影響を受けているように思います。

仲間が犯されていくのに助けられず、自分もどんどん追いつめられていくシーンとか、普段なら絶対に負けないような雑魚に数で押されるなり薬を盛られるなりして屈服させられるシチュエーションは来るものがあります（ユ○カゼが明らかに自分より弱い連中に手加減して戦った結果強姦されるシーンや、寅○星が薬を盛られて手籠めにされるシーン辺りは最高でした）。

3 ハイ悪化したー！

「セイバー、宝具を使えー！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！ ハイ悪化したー————ッ！！」

男爵様の第4次中聖杯戦争的一幕、個人的に男爵様のギャグの中で一番印象深いものです（上から二番目はバネ足による黒幕捏造から中聖杯に黒幕の情報求めた辺り……いや、強すぎたエ○スロボットの如く大暴れする強すぎたメ○リと劇辛も捨てがたい）。拙作『犬子と九十郎』のストーリー作りの中で何度も何度も「ハイ悪化したー！」が出てきました。

ハイ悪化したー！ の例その1

「ついカツとなって拾阿弥斬っちゃった」↑状況

「しゃあねえ、逃げようぜ」↑行動

「蓄電逃亡成功！」↑結果

前田利家はそのまま戻って来ませんでしたとき↑悪化した状況

ハイ悪化したー！ の例その2

「オーデインの野望を阻止するために劍丞が晴信を誑すのを阻止するわよ」↑状況

「弾薬もドライゼ銃も十分あるし、先に武田晴信ブツ殺そうぜ」↑行動1

「それじゃあ千曲川を氾濫させて甲軍の退路を断っておこうかな」↑行動2

「サヨナラ！（爆発四散）」↑結果

「光璃い！ 何で死んだあつ!？」↑悪化した状況1

「御屋形様が九十郎の幼馴染って、そんなの分かるかあつ!!」↑悪化した状況2

他多数。

読み返してみると、ハイ悪化したー！ が思ったよりも多くあり、男爵様の影響は大きいなあと思いました。

他には、主人公チームの特殊能力（今回は犬子）が、ラスボス（蘭丸）相手に高相性だった点や、最終決戦（オーデイン戦）の一個前の中ボス戦（蘭丸）が盛り上がりつつ、

最終決戦は談合で終わるといった要素は男爵様の中聖杯戦争シリーズの『あるある』かなと思います。

それと、主人公を斎藤弥九郎にしようと考えたのは第九次中聖杯戦争を見ていた時で、蘭丸の切り札を戦闘Ⅱセックスへの常識改変にしようと考えたのは、第八次小聖杯戦争や（別作者様の）蒼○石は敵にチートされるようですを読んでいる時でした。

意図的に寄せた描写もあり、無意識のうちに影響を受けていたなと思う描写もあり、男爵様の作品のファンの方は、その辺を探してみると面白いかもしれません。

4 森蘭丸

森蘭丸はこの作品におけるラスボスです。

オーデインはラスボスではありません。

この作品における説明困難な事象やご都合主義展開のつじつま合わせをするための舞台装置です。

なので今まで物語に全然関わってこなかった人がほぼ単独で勝負を決めるというギャグに繋げつつさっくり退場してもらいました。

敵も味方も孫子の兵法に則って最適解の行動した場合、戦闘開始前に和睦なんてトンチキな状況が起こるのではという考えも多少はありました。

蘭丸との最終決戦は、作者が考えた最強のNTR・凌辱描写をこれでもかと盛り込め

て、割と楽しかったです。

5 これからの活動について

蘭丸戦からどうなったのかを描写していない数名について、省略された幕間シリーズとして投稿していくつもりです。

その後は、他の作品を書くか、引退するか、トチ狂ってやる夫スレ作品に挑戦するか、色々考えていますが、未定です。

6 最後に

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。

ご感想をいただけますと嬉しいです。

男爵様、ネタを何度も模倣して本当にごめんなさい。

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ2 『省略された幕間シリーズ・鳥の場合（前編）』

時は少し遡る。

これは蘭丸との戦いが終わり、九十郎達がオーディンとの戦いの準備に奔走していた頃の事……テンポが悪くなるため省略された出来事である。

「ぐっす……うぐう、ううう……」

鳥が泣いていた。

止めどなく涙を漏らし、たった1人であっても無く歩き続けていた。

蘭丸戦から数日、『大嫌い』と新田劍丞を引つ叩いたあの時から鳥は一睡もしていない。

鳥の頭の中では、愛する夫以外の男に股を開き、モノを受け入れ、腰を振った罪悪感で一杯だ。

蘭丸の死によって、戦闘Ⅱセックスという偽りの常識は消え失せたが、夫以外の男に抱かれた記憶は消えていない。

知らぬ男に自ら跨り、ズコズコと膣奥を衝かれ、あんあんとはしたなく喘ぎ、ついに

は絶頂に達し、そして……

『貴方の妻になります……一生かけて、貴方に仕えます……』

……誓った、誓ってしまった。

新田劍丞以外の男の前に跪き、全裸で土下座をして、妻になると誓った。

戦闘Ⅱセックスという常識に従い見知らぬ男に抱かれ、絶頂Ⅱ敗北という常識に従い全てを差し出しますと誓わされた。

そして男は下品な笑みを浮かべながら烏を組み伏せ、犯し、子宮にたつぷりと精液を

……

「うぐ……お、えええ……おええええつ!!」

それを思い出した瞬間、烏は胃液を吐いた。

蘭丸戦から数日、烏は一睡もしていない。

そして僅かな水以外の食物も口にできていない。

固形物を口にした瞬間、猛烈な吐き気を覚えて、そのまま吐き戻してしまうからだ。

「はあ、はあ、はあ……」

何度も何度も胃の中のを吐き戻し、舌や鼻は胃液のエグい酸味しか感じなくなっていた。

このままでは本当に死んでしまうという不安と、いつそ死んでしまいたいという自暴

自棄な思考が混ざって、もう本当にどうしたら良いのか分からなかった。

そんな時……

『まあ、そうよな……見てくれは少々悪いが、アレも一廉の人物に違いない。

美空が惚れ込込む男だからな。万一の時は、斎藤九十郎に頼るが良からう』

ふと……傭兵部隊・八咫鳥隊の雇い主たる、一葉の言葉を思い出した。

九十郎もまた常識を書き換えられた鳥を抱いた男の一人……だが、心底嫌そうな顔で鳥と交合をしていた。

蘭丸に精神を書き換えられていた間、誰も彼もが己の支配欲に正直で、嬉々として、吐き気がする程に厭らしい笑みを浮かべて女を犯していた。

この女を俺のモノにしてやると。

この女を孕ませてやると。

この女を支配してやると。

下種で、下賤で、吐き気がするような汚らしい欲望が顔を見るだけですぐに分かった。

そんな男に跪き、貴方の妻になりますと、貴方の子を孕みますと宣言するのは、本当に本当に苦痛だった。

ただ九十郎だけは違った……だから……

「……………」

九十郎の事を考えたら、九十郎の顔を思い浮かべたら、少しだけ頭痛や吐き気が軽くなつた気がした。

そこから先はあまり覚えていない。

まるで救いを求める亡者のように、一本の蜘蛛の糸に群がる死人のように、ふらふらと青褪めた顔で、覚束ない足取りで、九十郎の姿を求めて歩き回った。

何分か、何時間か、もしかしたら何日も歩き回り、そして九十郎の姿を見た瞬間……

「んぐおぐ、んがあぐ」

九十郎は鳥の気持ちをしりも知らず、大いびきをかきながら寝つ転がつていた。

まるで何日も不眠不休で働き続けていたかのように深く深く眠つていて、鳥が陣幕に入つて、手が触れ合う程に近づいても、起きる気配全くない。

「……ふつ、ふふつ」

鳥の口角が僅かに上がる。

ほんの小さな、一瞬のものであつたが、鳥が笑つた。

蘭丸との遭遇以降、一度も、一瞬たりとも笑えなかつた鳥が少しだけ笑つた。

九十郎の超無防備で馬鹿丸出しの姿を見たら、まるでここだけはあの凄惨な戦いから隔離されているかのように思えたのだ。

あの苦しく、あの屈辱的な戦いが嘘だつたかのように思えたのだ。

そして鳥がほんの僅かに笑った直後……全く眠らずに、僅かな水以外何も食べずに歩き回った疲労感に一気に襲われ、九十郎の隣に倒れ込み、そのまま気絶するのであった。

……

……

……

「くう……すや……すや……」

……九十郎の寝具に鳥が潜り込んでいた。

まるで炬燵で丸くなる猫のように、九十郎の体温で暖を取りながら、すやすやと小さな寝息をたてていた。

「……えくと、なんでここに居るのかな？」

九十郎が困惑するが、それに答える者は居ない。

「どうするかな、このまま寝かしといてやりたい気もするが……」

鳥は薄着で、これ以上無い程に無防備で、まるで母親の腕の中にいるかのように安らかに眠っていた。

「……ええい、起きろコラ」

そんな鳥を九十郎は容赦無く起こしに行った。

慈悲の心が欠片も無い男である。

だから貴様は九十郎なのだ。

「……………ん？ ……んんう？」

九十郎に揺さぶり起こされて、鳥は自分が気を失っていた事に気がついた。

短い時間ではあったが、全ての悩みを、全ての苦しみを、疲労も空腹も忘れて眠った事で、鳥の心は軽くなっていた。

自分でも驚くくらいに、心と身体の活力が戻っているのが分かった。

「……………救われた？ 救ってくれた？ ……この人は観音様？ ……御使い様？」

寝ぼけた目を擦りながら、鳥はそんな外れにも程がある事を考えた。

酷い勘違いもあつたものだが、鳥は一瞬、本当に一瞬だけだが、九十郎がこの活力を、心の平穩をもたらしてくれたように感じていた。

まるで神仏が自分を救うためにこの地にもたらされた救いの使者のように感じていた。

それは鳥の思い違いであるし、鳥自身も数秒後には何を考えているんだと思ひ直して
いた。

全然関係無い話だが、現代ニホンの歴史書において、雑賀孫市を頭領とする含めた備兵集団「雑賀衆」は、本願寺と組み、あの織田信長を相手に10年以上にも渡る石山合戦を戦い抜いたと伝わっている。

「……………」

「……………」

鳥と九十郎が無言で見つめ合う。

ここで九十郎は目の前の女性が剣丞隊と行動を共にしていた鉄砲傭兵部隊、八咫鳥の隊長で、新田剣丞の嫁の1人で、当時洗脳されていたとはいえ、先日の戦いで九十郎を押し倒して逆レを仕掛けてきた女だという事を思い出した。

剣丞に『大嫌い』と告げて引つ叩いた事も思い出した。

なんだか色々な意味で微妙な立場だという事を察して、九十郎はどう声をかけたものかと迷ってしまった。

「……………」

「……………」

鳥と九十郎が無言で見つめ合ったまま硬直する。

鳥は無口で、口下手だ。

基本的に言葉で何かを伝えるのが苦手で、コミュニケーション能力が必要な場面はほぼ100%妹の雀が代行していたため、経験も不足している。

頭の中で何を話せば良いのか、どうすれば良いのかが現れては消え、無言のままパニック状態になっていた。

そして鳥と九十郎の無言の千日手、無意味な千日戦争が延々と続きそうな雰囲気になったその時……九十郎の腹がぐううつと下品に鳴った。

「……ハラ減ったな」

九十郎がそう呟く。

そう言われて、鳥も自分がここ何日か何も口にしていないのを思い出す。

空腹を思い出した途端、鳥のお腹もくうつと可愛らしく鳴った。

「……………」

鳥の顔が羞恥で赤くなる。

夫以外の男の寝所に押しかけるのも、何も言わずに隣で眠りこけるのも、起きたら起きたで食事を要求するかののように腹を鳴らしてしまったのも、彼女にとってあり得ない位に恥ずかしい行為だ。

少し眠って気力と体力が回復したら、自分の行動のおかしさを実感してしまう。

「とりあえず、そうだな……昨日作ったスープが残ってるから、暖めなおしてくる。」

あと乾パンと干し肉で良けりや持つてくるから、食っていけよ」

「……………!?!」

鳥は首を横に振って否定の意思を示す。

そこまでの迷惑はかけられないと思ったからだ。

しかし、直後に鳥のお腹がもう一度鳴る。

身体が疲弊していた。

身体が体力の回復を求めている。

身体が栄養を求めている。

身体が暖かい食事を求めている。

それを自覚したら、首を横に振る速さと勢いがかなり鈍った。

「まあ良いから食って行けよ。」

戦国時代で手に入る食材で作った特製コンソメスープだ。結構美味しくできたんだ」

そして九十郎は鳥の返事を待たず、昨日スープを作った野外調理場に向かった。

鳥は一人ぼつんと残された。

「……………」

見張られている訳ではない、拘束されている訳でもない。

この場から立ち去る事はできた。

だけど今自分が立ち去ったら、きっと九十郎は2人分の食事を持ってきてしまうと思
い。

いやそれ以上に、調理場から漂ってくる嗅いだことの無いスープの匂いがあまりにも
新鮮で、あまりにも美味そうで、あまりにも自分の食欲を掻き立てるので、鳥はその場

から動く気が無くなってしまった。

「待たせたな。昨日の残りで悪いが、食ってけ」

九十郎が戻って来た。

本当に本当に美味そうな匂い、食欲を掻き立てる匂いが鳥の口から涎を漏れさせる。脱水症状一歩手前だった、食事の事すら考えられなくなる程に酷い精神状態だった。

しかし、それでもなお鳥の身体は涎を出させる……そんな、今までに嗅いだことのない匂いだった。

お盆が差し出される。

スープと、乾パンと、干し肉……寝所で飯を食うのは行儀が悪いかもしれないが、今の鳥はある意味病人、そんな事を気にする余裕も無い。

「あつ……」

鳥が僅かに声を漏らす。

お盆は2つ、九十郎のものと鳥のもので2つあった。

スープ、乾パン、そして干し肉がそれぞれ同じ量、同じ数だけ置かれていた……その量は小柄で身体が弱っている鳥にとっては十分な量だろうが、バッファローマンのような体格の大男である九十郎にとっては明らかに少ない量だった。

この人は自分が食べる量を減らして、自分のために分け与えてくれているのだと気が

ついた。

それに気がついた時、鳥は申し訳なきに視線を伏せる。

なお、越後長尾家にとつての重要人物である九十郎に十分な食料が与えられないという事は全く無く、食糧管理をしている者に言えば普通におかわりは手に入る。

要するに鳥の感じた申し訳無きは全般的な外れなものである。

「……ありがとうございます」

さておき、鳥はせめてもの誠意を示すために、小さな小さな……蚊の羽ばたきにすら負けそうな小さな声で感謝の意を口にして、両手を合わせた。

当然、九十郎には聞こえていないが……表情と仕草で、気持ちだけは何となく伝わった。

器を手取る……適温に暖められたスープから、何とも言えない幸福な感触が伝わってくる。

透き通った出汁の色のスープに視線を落とす……こんそめすうぷという食べ物、今まで見た事も聞いた事も、味わった事のないもので、期待に胸が膨らんでいくのがわかる。

匙で救い、口元へ運ぶ……匂いを嗅いだだけで分かる、これはとてもとても美味しいものだ。

そして一口、口に含むと……全身が幸福感に包まれた。

「……うっ、うううっ」

ぽたりっ、ぽたりっと涙が零れた。

鳥は泣きながらスープを口に運ぶ、運び続ける。

戦国時代で手に入る食材で少しでも美味くなるようにと、何年もかけて研究して作られたその味を、現代ニホンの飲食店と比べてもなお遜色無いその味を、鳥は感動の涙と共に味わい続ける。

実際の所、そのスープには戦国時代では希少かつ高価な食材を使っている、灰汁掬い等によって戦場飯としては常識外れな程に手間がかかっている。

現代ニホンの食事に慣れきっている者にとってはともかく、戦国時代の食事しか知らない鳥にとって、信じられないくらいに美味なスープになっていた。

なお、クソ忙しい最中にそんな高価で面倒なものをわざわざ作っているのは、現代ニホンの食事に慣れて舌が肥えていて、しかも病弱でハラを下しやすい武田光璃の食事用である。

「おいおい泣くなよ。何があつたか知らねえ……いや大体知ってるんだが、

まあとにかく泣くな、メシが不味くなる」

そう言って九十郎は手ぬぐいで鳥の涙を拭いた。

そんな小さな優しさが、小さな施しが、鳥の傷ついた心に深く染み渡る。

一口、また一口と、スープを飲み込む度に、冷え切った身体に温かみが戻っていく、傷ついた心が癒えていく、喪われた活力が蘇っていく……錯覚かもしれないが、鳥は本当にそう感じていた。

そんな幸福な時間もじきに終わりを迎える。

何のことは無い、差し出されたスープや干し肉、乾パンを全て平らげてしまったのだ。

「……………」

空になったスープ皿を覗き込む。

少し物足りない気がする。

あまりの美味さに、あまりの幸福感に、その温かみに、無限に食べ続けられるような気さえした。

「…………ちそうさまでした」

鳥が小さな小さな声で与えられた食事への、受け取った活力への、幸福な時間への感謝の言葉を述べる。

無論、九十郎にそのか細いにも程がある声は全く聞こえていなかったが、仕草と表情で言わんとしている事は伝わった。

「…………で、お前は何で他人の寝床に潜り込んでたんだ？」

唐突に話題が変わる。

このまま有耶無耶になってくれないかと、鳥はちよつとだけ期待していたのだが、流石に通らなかつたようだ。

「……………」

鳥は無言で姿勢を正す。

九十郎のもとに足を運んだ明確な理由はない。

『何故来たのか?』と問われると『なんとなく』としか言いようがない。

あるいは……

「……………」

自身の胸にそつと手を置く。

冷え切つた身体が、今にも砕けそうな程に弱弱しかつた身体が、今は確かな暖かさを感ずる。

心臓がとくん、とくん、と鼓動をしているのが分かる。

もしかしたら自分は、この暖かさを求めてここに来たのかもしれないと思つた。

あの信じられない程に美味しく、身体を暖め、活力をくれたスープを求めてここに来たのかもしれないと思つた。

そして同時に思う……

「劍丞……様……」

……劍丞の名を呟く、小さくか細い声で呟く。

そして同時に思う、自分は新田劍丞に捨てられたのだと。

新田劍丞は自分を愛してはいなかったのだと。

そうでなければ、いくら人が死ぬのを避けるためだとしても、自分が他の男に抱かれ、他の男に跪き、他の男の妻になることを強要されるような手段を受け入れる筈が無いと。

自分は新田劍丞を愛していた。

新田劍丞は自分を愛していると信じていた。

だけどその愛は……新田劍丞の愛は嘘だった、偽りに過ぎなかった。

見知らぬ他人の命を救うために……たったそれだけのために、自身の身体を他の男に差し出すような男だった。

それが辛くて、苦しくて、悲しくて、腹立たしくて……自分は『大嫌い』と叫びながら、新田劍丞を殴ったのだ。

「……う、うう……うぐ、うう……」

目尻に涙が溜まるのが分かった。

あんな男のために泣いてやるものかという思いで、涙が零れるのを必死に堪えた。

本当は以前から不安に思っていた。

本当はいつかこんな日が来るのではないかと思っていた。

自分は本当に新田劍丞に愛されているのだろうか……自分程度の女が、あの現人神の如き素晴らしい好青年に愛される資格があるのだろうかと思っていた。

新田劍丞に愛されているなんて、何かの間違いではないかと思っていた。

自分は……鈴木烏重秀は物凄い無口だ、身体つきは全体的に貧相で、顔だつてあまり可愛い方ではない。

鉄砲の取り扱いだけは自身があるが……鉄砲の扱い以外の取り柄は全く無い。

長篠の戦い……無敵と謳われた甲斐武田の騎馬軍団が、越軍のドライゼ銃によつて一方的に射殺されていった戦いがあった（第128話）。

あの日、あの時、烏は思った。

あの日、あの時、烏は気づいた、気づいてしまった。

あんなに大量の鉄砲を揃える事ができるのなら、あんなに簡単かつ素早く鉄砲を連射できるのなら、どれだけ鉄砲が下手な者でも敵軍を全滅させるに十分な弾幕を張れてしまふ……鉄砲の扱いが上手いという自分の唯一の取り柄が、無意味で無価値なものなってしまうと。

その日から、自分は本当に新田劍丞に愛されているのだろうかという不安が、自分に

新田劍丞から愛されるだけの価値があるのだろうかという疑念が、何倍にも、何十倍にもなつて鳥の心に重く重く伸し掛かるようになった。

そして『大嫌い』と叫びながら、新田劍丞を殴った瞬間にこう思った……ああ、やっぱり自分には新田劍丞に愛されるだけの価値は無かつたのだと。

「……………」

ぼたりと、一滴の涙が鳥の膝を濡らしていた。

その涙は悲しみか、悔しさか、それとも別の理由からなのか……鳥には分からなかつた。

そして思った。

もう新田劍丞なんて知つた事かと。

天下の安寧も、乱世の終結も、鬼との戦いも知つた事かと。

そして同時にこうも思った……ボロボロになつた心と身体を抱えながら、最後に九郎のもとへたどり着いたのはきつと運命なのだ。

あの素晴らしく美味さの、傷ついた心と身体を癒してくれたスープを分け与えてくれたのはきつと天啓なのだ。

あの思い出したくもない苦痛と屈辱に塗れた戦いの中で、斎藤九十郎に抱かれたのはきつと予兆だつたのだと（第169話）。

「……………ここに、置いてください」

鳥は深々と頭を下げた。

土下座をするかのように跪き、九十郎に懇願した。

普段の蚊の羽音よりも小さくか細い声量が嘘のように、この時だけはハッキリと九十郎の耳に届く声量が出ていた。

「……………ここに置く……………」

九十郎が怪訝な表情で鳥を見つめる。

冗談で言っているようには見えなかったが、かと言つてはいそいそですかと頷けるようなものでもない。

洗脳されていたとはいえ九十郎のち〇こを自ら啜え込んだ事も、その後劍丞を『大嫌い』と言いながらひっ叩いたのも知っている。

そりやあ居ずらいだろうなとは思う……………だが……………

「……………駄目だ、劍丞の所に帰れ」

……………たつぷり数秒、あるいは数十秒くらい考えて、九十郎はそう結論を出した。

「お願い……………お願いします。なんでもします、なんでもやりますから」

鳥がさらに深々と頭を下げて懇願する。

先程は土下座のような姿勢での懇願だったが、今はもう完全に土下座そのものだ。

地べたに額を擦りつけながら、鳥は九十郎に懇願していた。

「なんでもねえ……」

この時、九十郎は『本当に何でもやりそうだ』と思った。

基本愚鈍な九十郎ですら一目で気づく程、今の鳥は深く深く傷つき、疲れ果て、心身共に弱っていた。

それこそ、現代ニホンに生きる者にとつては何の変哲もない、あるいは貧相とすら思えるようなコンソメスープに本気で救われたと感じる程に弱っていた、疲弊していた。

無理矢理にでも押し倒せばやれるのではないかと、九十郎は思った。

『俺が剣丞の事を忘れさせてやる』とか何とか言つて口説けば、自ら股を開くので話無いかと、九十郎は思った。

九十郎は生来の巨乳好きであるが、粉雪や雫とのなんやかんやがあつて、貧乳の女に對しても普通に魅力を感じ、勃つようにはなっている。

今の弱り切つた鳥の唇を奪い、押し倒し、手籠めにしたいという純然たるオスの欲求は確かにあつた。

「(だけど俺、NTRは嫌いなんだよなあ……)」

そんな九十郎の欲求に待つたをかけたのは、この男の性癖だ。

この男は知り合い(剣丞)の嫁を寝取つて喜ぶ性格ではないが故に、鳥を押し倒して

手籠めにする選択肢はゴミ箱にダンクシュートされた。

「……やつぱ駄目だ。 劍丞の所に大人しく帰れ」

そうして九十郎はキツパリと、そして無慈悲なまでに烏にNOを突きつけた。

「……っ!?!」

烏は息を呑み、悔しそうに奥歯を噛み締め、さらに強く強く額を地面に押し付ける。

烏は口下手だ。

妹の半分でも、十分の一でも舌が回るのであれば、九十郎に翻意を促す何かが出来たかもしれない。

しかし烏には何の言葉も浮かばない、何を言えば良いのかまるで分からない。

「お願いします……どうか、どうか……」

だから烏はか細い声で懇願し、土下座を続ける他なかった。

「ああ、帰り辛いのは分からなくもねえよ。

あの時……その、色々あったのは、俺が蘭丸をすぐに殺せなかったせいで、そういう意味じゃ俺も原因の何割かがあるかも知れねえ。 だがな……」

九十郎がどう伝えたものかと、頭の中で何度も何度も推敲を繰り返す。

傷ついた心をさらに深く傷つけやしないかと、そんな不安と共に言葉を選ぶ。

「お前が何も言わずにいなくなつて、劍丞が心配してたんだよ。 お前の妹も。」

俺の所に顔を出して、探しているから見つけたら教えてほしいって頼んできたよ。あんな事があつた後でも、あいつらは愛想を尽かしていねえし、心配もしてんだ。悪い事は言わねえから、一回は劍丞の所に顔を出しとけ」

基本考え足らずな九十郎にしては珍しく慎重に、珍しく常識的に声をかけていた。だが鳥はその言葉を聞いて、こう思った……『そんな事できない、できる訳が無い』と。

「……くっ！」

鳥は急に立ち上がると、そのままどこかへ駆け去っていった。

ポロポロの身体を押して、ポロポロの心を抱えて、何の宛ても無く立ち去った。

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ4 『省略された幕間シリーズ・光璃の場合』

時は少し遡る。

これは蘭丸との戦いが終わり、九十郎達がオーデインとの戦いの準備に奔走していた頃の事……テンポが悪くなるため省略された出来事である。

詩乃が変わった。

表面上はいつも通り、新田劍丞の忠義の臣、頼れる軍師である。

表面上はいつも通り、新田劍丞の貞節な妻である。

しかしある日を境に、九十郎を見る目が少し変わった。

ある日を境に、九十郎を語る声が変わった。

ある日を境に、九十郎の事を話題に出す頻度が増えた。

その変化はいずれもごく僅かなもので、その変化に気づく者は少なかった。

その変化が示す意味を察した者はもつと少なかった。

「貴女の秘めた想いは、きつと時間が解決してくれる」

武田光璃は詩乃にそう告げる。

「この戦いが終われば、九十郎は大江戸学園に復学する。

少なくとも卒業するまでの一年半、こちらの世界に戻ることは無い」

なお、実際には越後で共産主義革命が勃発し、美空と柘榴が窮地に追い込まれていると知った九十郎は、諸葛孔明を伴い戦国時代に舞い戻るのだが……それはまた別のお話である。

「卒業後の進路は、まだ分からない。

現代ニホンで就職するかもしれない、戦国時代に戻るかもしれない。

どちらにせよ、貴女と九十郎が接触する機会はそう多くない」

純然たる事実を突きつけられる。

詩乃は何も言わずに聞いている。

「戦国時代で死に、現代ニホンに転生した光璃は、

まず初めに元の世界に戻りたいと願った。

愛する人ともう一度会いたい、愛する人と共に生きたい……新田劍丞を求めていた。

だけれども、その想いは時間と共に薄れていった。現代ニホンで生きる内に、

少しずつ、少しずつ、愛が小さく、軽く、薄くなつていった。新田劍丞への愛が……」

光璃の独白を、詩乃は何も言わずに聞いている。

「だからきつと、貴女の想いも時間と共に……」

そして詩乃は……

「光璃さんに言われても説得力がありません」

バツサリと切り捨てた。

そう、この時光璃は頭髪をバツサリと刈られ、丸坊主になっていたのである。

光璃が丸坊主になった理由は……

……

……

……

「これより長尾裁判を開始する!!」

美空がその辺からかき集めてきたボロ板やボロ布で作った即席裁判所から開廷を宣

言する。

「お願いでございます。命だけは、命だけはお助けください」

被告人席には簀巻きにされた光璃が座らされている。

「検察側、準備完了だよ」

「弁護側も準備完了だ。とつとと始めて、とつとと終わらせるぞ」

検察席には一二三が、弁護人席には九十郎がいた。

知略98の真田昌幸対斎藤九十郎……この時点で絶望感が酷い。

なお、当然の事だが戦国時代には檢察も弁護士も存在しない。

小中学生が社会科の授業で開廷するような、なんちゃって裁判である。

「検事、まずはコイツの罪状を読み上げなさい！」

「はいはい、大江戸学園甲級二年は組武田光璃、

自称武田信玄さんは『九十郎を愛している』とか何とか言つといて(第144話)、

この前の戦いで劍丞のち〇こを突つ込まれて即堕ちしました(第169話)。

浮気罪で死刑を求刑しまーす」

現代ニホンの刑事裁判であれば求刑は証拠調べが終わった後に行うのだが、戦国時代のなんちゃって裁判なので誰も気にしていない。

「……で、被告人は何か言いたい事はあるかしら？」

「あれは、あれは……」

光璃が苦虫を噛み潰したような表情で俯く。

さつきは命乞い于禁の真似をして誤魔化そうとしていたが、この前の自分の言動が好ましくない事は自覚している。

ちらりと、九十郎の顔を覗き見る。

「(表情が……表情が読めない……)」

九十郎の事は何でも知っている、九十郎の事は何でも分かる……そう思っていた。子供の頃は毎日毎日、朝から晩まで一緒にいた幼馴染だった。

大江戸学園に入学してからも、毎日顔を合わせ、一緒に馬鹿な事をして、はしやいで笑い合つて……でも今は、九十郎の顔を見ようとするとただで心が苦しく、息が詰まった。九十郎の表情を見て、何を考えているのかを考察するだけの心の余裕が無い。

「(光璃は……何故、どうしてあんな事を……)」

『劍丞……好き……愛してる……』そう言つて口づけをした事は覚えている(第169話)。

あの言葉を告げる何秒か前に、光璃はイカされて、洗脳……戦いに関する常識を書き換えられたのも覚えている。

頭が一瞬真っ白になって、自分は劍丞にイカされたのだから、劍丞に負けたのだから、劍丞の妻にならなければと思わされた。

だが同時に、あの常識改変が人の好悪感情を左右させるものではない事も分かっている。

それならば、劍丞に愛していると誓つたのは……

「違う、あれは違う……何かの間違い……光璃はあんな事、言っていない」

「その言い訳は流石に通らないわよ、私も一二三も九十郎もしつかりと聞いていたわよ」

「ザ・ニュー御屋形様の即堕ちはいつそ芸術的でしたねえ」

言葉のナイフがグサグサと刺さる。

九十郎の顔が怖くて見えない。

どんな表情をしているだろうか、失望されているだろうか、軽蔑されているだろうか、股の緩い女と思われているだろうか、薄情な女と思われているだろうか……嫌な事ばかり考えてしまい、九十郎の顔を見る勇気が出ない。

「お願いでございませす。命だけは、命だけはお助けください」

もう一度、横山光輝三国志の一シーンを再現してみる。

普段ならこれでシリアスな爆散させてギャグ風味の空気を召喚できるのだが……今は駄目だ、マイナスの思考は消えてくれない、呪文は虚しく木霊した。

「あれは……一時の気の迷い」

「どっちが気の迷いなの？ 劍丞の方、九十郎の方？」

「……………」

光璃は即答できなかつた。

九十郎への想いが気の迷いだとは思いたくない。

九十郎の事を考えるだけで胸に溢れる暖かさは、今でも確かに存在している。だけど……

「劍丞……劍丞……新田劍丞……」

劍丞の名をぶつぶつと呟く。

かつて愛した男の名前。

17年、現代ニホンで生きる内に少しずつ、少しずつ思い出す回数が減っていった男の名前。

そして数日前に肌を重ねて、そして……好きだと、愛していると囁き、口づけをした男の名前だ。

かつては愛していた。

しかし今は、その愛が失われた。

新田劍丞への愛が戻る事はもう無い。

そう思っていた……いや……

「そう思い込もうとしていた、一生懸命自分に言い聞かせようとしていた、光璃は……本当は……本当はずっと……だとしたら……」

だとすれば……自分はただの酷い奴じゃないかと、光璃は思った。

「あ……ち、違う……そうじゃない……光璃は……」

顔が強張る。

全身が強張る。

自分の醜さに目を背けたい気持ちで一杯だ。

そして……

「お前がそんなのだから勝頼が苦勞するんだよ、光璃。

天目山行って勝頼に土下座してこい」

九十郎は呆れた様子で光璃を切り捨てた。

シャ○バンクラッシュかと思まごうばかりの見事なバツサリ具合である。

「う……ぐ、うう……ぐす、ぐすつ……」

心が引き裂かれるかのような痛みに耐えかね、光璃の膝に大粒の涙がぼとり、ぼとりと滴り落ちた。

「ガチ泣き!?!」

「おつと、こりや洒落じや済まなさそうだ」

「休廷! 一旦休廷! ちよつと九十郎、台本と真逆の事を喋るんじゃないわよ。

私と一二三が厳しい事言つて、アンタが優しい言葉をかけるツンデレメソッドでしょ!」

「……あ、悪い忘れてた。 おうい光璃く、お前は悪くないぞく、知らんけどく」

「何故『知らんけど』を付けたあつ!?!」

その明らかに棒読みな『お前は悪くない』はいつそ逆効果で、光璃の心の傷はさらに

深く抉られる。

「うわああ〜ん！」

とうとう本格的な決壊が起きる。

光璃の心はポッキリと折れ、恥も外聞も無く泣き喚き始めた。

「九十郎お！ アンタ本当にいい加減にしなさいよ！」

「あ〜うん、気にすんな。 お前らにとつちやこういう光璃は初めてかも知れんが、

俺やセカンド幼馴染にとつちや割と良くある事だからな。

泣き虫なんだよコイツは昔から」

そう言う九十郎は光璃の頭を撫でてみせる。

「お〜よしよし、 ホントお前は手のかかる奴だよな。

ほ〜れもう苛めっ子はいないから安心しな〜」

「虐めた本人が何言ってるのよ……」

「ひっ、ひっ、ひう、ひふっ！」

「あ、やべえ過呼吸気味になってきた。 はいストップ！ ドクターストップ！

おい一二三、ちよつとアイツ呼んで来い、大至急で」

「はいは〜い、安い早い美味いを取り柄の一二三宅急便出勤しま〜す」

……

……

……………

それから約1時間後。

「……やれやれ、やっと落ち着いたか」

光璃の涙はようやく止まった。

ストレス性の過呼吸も収まった。

だがその代わりに……

「うう……兎々、兎々、みんながいじめ……」

……その代わり、光璃の威厳的な何かは粉碎・玉砕・大喝采状態であった。

蘭丸の戦いで深い深い心の傷を負い、ポータルの操作もままならなくなった光璃をどうにかしようと、越後で軟禁状態であった高坂昌信・通称兎々が呼び出された。

兎々を抱き枕代わりにして横になると心のパワー的なナニカが回復する、言うなれば兎々テラピーに頼るためだ。

「ああ……この柔らかな肌の手触り、すべすべの髪、匂い……」

兎々だ、大江戸学園では一度も触れられなかった兎々がいる……」

なお、光璃の威厳的な何かは粉碎・玉砕・大喝采状態である。

良い歳をした大人がでつかいぬいぐるみに抱き着くのも絵面が酷いのだろうか、

兎々テラピーではそれが生身の人間、しかも見た目幼女ときている。

『この人武田信玄です』と言つても誰も信じないであろう、情けなさMAXな光景になっていた。

「見たくなかつたわ、かつての好敵手のこんな姿は」

美空がげんなりとした表情で頭を抱えている。

「御屋形様がらめ（駄目）なじようらい（状態）になつてるのら。」

な、何があつたのら……?」

兎々は割と見慣れているのか、美空と違ってドン引きはしていない。

死んだと思つていた主君が（微妙に肌年齢を回復させつつ）生きている事への驚きも無い。

武田四天王である兎々にも知らせないまま影武者を殺して、後日生きていましたと出てくるのを普通にやりかねないのが武田晴信だからだ。

「ところで一二三、光璃が川中島で死んでて（第135話）、

ここにいるのは記憶とか人格を引き継いだ生まれ変わりつてのは……」

九十郎がひそひそ声で一二三に話しかける。

「ああ、あれね? ややこしいから説明してない」

一二三もひそひそ声で返答する。

「どうする？ 伝えとくか？」

「良いんじゃない、もうちよつと落ち着いてからで。」

「そもそも魂がどうだの、オーデインがこうだの、本人だけど別人だの、

理解させる自信は無いし、必要性も感じないよ。」

「実は生きてましたの方が説明が楽じゃない？」

「そうか……？ いや、そうかもな」

……閑話休題。

「兎々……光璃は自分自身の薄情さを思い知った。」

「光璃の感じた愛、信じた愛は薄っぺらなものだと思いつた。」

「叱ってほしい、詰ってほしい、罵ってほしい、だけど……」

「だけど捨てられたくない、一人になりたくない……」

「そんな自分勝手な願いを持っている光璃が心底嫌いになっている」

「光璃がぼそぼそと今の自分の感情を兎々に伝える。」

「兎々はしばらくの間きよとーんとした表情で硬直し、それから少し困った様子で首を傾げる。」

「お、御屋形様、良く分からないのら。」

「らける（だけど）、兎々は御屋形様を捨てたりなんてれきないのら。」

叱るのは……むむむ、御屋形様が何を悩めるのか分からないから、上手くれないのら……」

「なにかむむむだ！」

「一二三、ちよつと黙つてようか」

こういう場面で意図的に空気を読まない真田昌幸である。

「つまり、それは……要するに……」

光璃が悩まし気々に顔を歪め、口元をもごもごとさせて、最終的には兎々の耳元でこしよこしよと……

「光璃は劍丞が好きで……しばらく会わない内にそれを忘れてて……」

好きの心が無くなったと勘違いして、九十郎が好きと言つてみたけど……

劍丞にもう一回会つたら再燃した……」

「……たらの（ただの）浮気者なのらっ!？」

兎々はドン引きした。

一度死んで現代ニホンに生まれ変わった光璃にとって、劍丞に会えなかった『しばらく』は17年間であるが、光璃は最初から死んでいなかったと認識している兎々にとつて、光璃が劍丞に会えなかった『しばらく』は高々数ヶ月だ。

情熱的に愛していると囁き、寢屋を共にした相手がいるのに、たった数ヶ月会えな

かった程度で他の男に走るのは戦国時代の倫理観でもアウトである。

特に光璃は、劍丞に最初に抱かれた夜に、兎々を半ば無理矢理引っ張り込んだというのだ（第126話）。

「ふふふ、ふしだらな主君と笑うと良い……」

光璃は若干涙目である。

だがしかし……

「笑わないのら……笑ったりなんかできない（できない）のら……」

だがしかし、兎々はそんな光璃を嘲笑う事はしない。

笑う事なんてできなかった。

ドン引きはした。

何考えてんだコイツ、とは思った。

戦国時代の倫理観でも酷い光璃の行動にドン引きしつつ……受け入れていた。

何故ならば……

「御屋形様は間違ってるのらっ!!」

何故ならば……

「御屋形様は、御屋形様は……」

何故ならばっ!!

「志賀城に3000の生首を並べた時とか、

諏訪頼重をらまり討ち（騙し討ち）にして切腹させた時とか、

ろうめい（同盟）してた今川義元を殺した時とかの方が、

よっぽろ残酷ひろろう（非道）らったのらっ！」

……何故ならば、光璃が突如として戦国時代の倫理観でもドン引きされるような残酷行為を行うのは今回が初めてではなく、たぶん今回が最後ではないからである。

「いっ……」

あまりにもあんまりな自身の所業を突きつけられ、光璃は吐血しながら倒れ込んだ。「れも！ それれも！ 兎々は御屋形様を笑ったりしないのらっ！」

見限つたりれきないのらっ！ 御屋形様がひろろう（非道）なのは知っているのらっ！

御屋形様がひろろう（非道）れも、それれも御屋形様は兎々のらいじ（大事）な主君なのらっ！」

兎々が『やっべ言い過ぎた』とばかりに軌道修正を試みる。

「残虐非道でごめんなさい……生まれきてごめんなさい……」

光璃は倒れ伏しながら、しくしくと涙を流していた。

「兎々らげじやないのら！ 春日らって、心らって、粉雪らって、

御屋形様をらいじ（大事）な主君らと思ってるのら！

ついて行けないって思ってるのは、とつくの昔に飯富虎昌みたいに裏切ってるのら

！」

「いふつ……」

飯富虎昌の突然の謀反というできれば思い出したいくない出来事を突きつけられて、光璃は再度吐血した。

「惜しむらくは、典厩様をこの場に連れて来れなかった事だね。

さぞや良いツツコミを入れてくれただろうに」

「ツツコミって言うか、追い打ちになんじやねえの？ それってよ」

なお、典厩様こと武田信繁・通称夕霧は蘭丸のガチ洗脳を喰らった反動でぶつ倒れている。

自分の倫理観とかけ離れた言動を強要された心理的ストレスは甚大なものであり、それが体調の悪化という形で夕霧達を襲っている。

一二三のように二枚舌に慣れていて、心に柵を作るのが上手いタイプは比較的すぐに

回復したが、夕霧や湖衣のような律儀で、誠実で、嘘が苦手な者は今も立ち上がるのすら困難な程に消耗していた。

実を言えば久遠も割と深刻なダメージを受けていて、ゲロを吐きながら織田・長尾間の戦争回避に奔走していた。

一方、長尾側の最高責任者である美空は酒の飲みすぎが原因でゲロを吐きながら織田・長尾間の戦争回避に奔走していた。

……閑話休題。

「しかしまあ、何だ……光璃、俺もな、こいつ……えつと、名前何て言ったっけ？」

「兎々。高坂らんじよう（弾正）昌信、通称は兎々なら」

「そうそう、俺もぶつちやけ兎々と同じ意見だよ」

「お、同じ……？」

光璃がおずおすと九十郎の方を覗き見る。

「ああすまん、お前を笑わねえし笑えねえって所は違うな。

ゲラゲラ笑いながら酒の肴に思う。

でもな……うん、お前がひでえヤツだったのはとつくの昔に知ってるんだ」

「いふ……」

光璃は再び吐血した。

「お前はひでえヤツだ、それでも俺はお前の幼馴染だ。

それでも俺はお前を大事な幼馴染だと思ってる。

それでも俺はお前は大事な武田光璃だと思ってる。 変わらねえんだよ、そこは

「変わら……ない……？」

「御屋形様は兎々のらいじ（大事）な主君なのら！

それは変わらないのら、変えられないのら！」

「そうそう、お前光璃の扱いが分かってるな、今度一緒に飯でも食いにいこうぜ」

「そっちの奢りなら行くのら」

「良いぜ、奢ってやるよ。 まあ、それはそれとして……」

俺はお前の幼馴染だぜ、お前のクズエピソードなんて百も二百も知ってるんだ、

今更クズエピソードが1つや2つ増えた所で、引いたりしねえし見限ったりしねえ。

お前は今も昔も、俺の大事な幼馴染で、俺の大事なダチ公だよ」

そして九十郎は倒れ伏す光璃の横に座ると、よしよしと頭を撫でた。

「う……う……う……」

光璃の目から涙が溢れた。

自分のクズっぷりを思い出して涙が溢れた。

自分の駄目さ加減に涙が溢れた。

そして同時に、そんな自分を見限らない兎々と九十郎のありがたさに涙が溢れた。「なに泣いてるんだよ、笑えよ光璃。」お前は本当に泣き虫だよな、昔っから」

そして九十郎はわしやわしやわしやと光璃の髪の毛を乱雑に掻き回した。

戦国時代の価値観ではその場で首を刎ねられてもおかしくない無礼な行為だが、現代ニホンを生きる武田光璃と斎藤九十郎にとっては、それは日常的なスキンシップだ。

光璃はがばつと立ち上がると、両手を一杯に広げて、兎々と九十郎をぎゅうつと抱きしめた。

「ありがとう兎々、ありがとう九十郎。それと……ごめんなさい」

光璃の顔には涙は無い。

光璃の心に自己嫌悪はもう無い。

あるのは大きな大きな感謝の気持ちだけだった。

こうして今回の蘭丸戦における光璃のやらかしは全て清算され……

「……でもな光璃、

お前のそういうフラフラする性格で迷惑する奴はいるって事は自覚しろよ」

「そうなのら！ 御屋形様は割と重要なけつらん（決断）を翻す悪い癖があるのら！」

……良い話で終わりそうな空気だったが、そうは問屋が卸さないと追撃が入った。

「俺は許すよ、兎々も許すかもだ。」

だがお前が色々やらかしたせいで勝頼は散々苦勞して、最終的には切腹したんだぞ」
「そうなのら！」

勝頼つてられ（誰）の事か知らないけろ、迷惑をかけたらごめんさいするのら！」
なお、武田勝頼は現代ニホンにおいては武田信玄の娘として知られているが、こちらの世界線では生まれてすらいない。

「そーだそーだ、勝頼に謝りなさいよ」

「謝れ、勝頼に謝れ」

美空と一二三が外野から追撃を入れる。

「え、いや……謝れと言われても……まだ子供も産んでいない……」

「ろうめい（同盟）したかと思えば攻め込んれ、和睦したかと思えば攻め滅ぼして、

従う方も大変なのら！ 他国から白い眼れ見られてるのら！」

「裁判長、これは有罪ではないでしょうか」

「そうね、浮気罪は百歩譲って見逃してあげても良いけど、

同盟破り罪と勝頼に迷惑かけた罪は許せないわね」

「そ、それは刑法何条と何条の……」

「やつかましい！ 私が法よ！」

美空は罪刑法定主義（日本国憲法第31条）に真っ向から喧嘩を売っている。

「という訳で有罪！ 有罪よ！ 刑罰は……」

そうね、ぶつ殺すのは後で九十郎に恨まれるし、

ポータルを動かせる人が他にいないから勘弁してあげるけど。

最低限頭は丸めて反省の意を示しなさい！」

「ひう!!? ぜ、前時代的な……」

現代ニホンならSNS炎上間違いないの坊主強要である。

「弁護士、何か意見は？」

「……まあ、その位はやつとこうぜ。髪なんて2〜3ヶ月すりやまた生えるだろうし」

「喜んれとは言えないけろ……命を奪わないのなら、兎々は何も言わないのら」

「はい、弁護士も異議なしだから決定！ だいたい武田信玄を名乗っておきながら、

髪の毛がそのままって所が気に入らなかつたのよ。

戒名を名乗るんだつたら剃髪くらいしなさいって」

「こ、控訴は……? 上告は……?」

「やつかましい！ 私が法よ！」

美空はどこからともなく剃刀を手にとると、じりじりと光璃にじり寄っていく。

「ま、待つて……話せば、話せば分かる……」

「諦めろ光璃、試合終了だ」

逃げようとする光璃を、バッファローマンのような体格の大男がむんずと掴んで制止する。

「髪の毛の一つや二つで命が助かるのなら、いっそ運が良いのなら」

なおも逃げようとする光璃を、兎々がしがみ付いて止める。

そして……

「あああああゝゝつ!!」

……そして哀れな断末魔が響き渡ったのである。

……

……

……

「……と、というような事情で剃髪されたと聞いていますが」

「……ういふっ」

光璃（丸坊主）は吐血した。

ここから先、光璃がどうなるのかは誰も分からない。

恥と外聞をゴミ箱にダンクシュートし、もう一度剣丞へ愛を捧げるのか。

剣丞に靡きかけたのは一時の気の迷いだとして、九十郎の元に戻るのか。

大穴で剣丞でも九十郎でも無い誰かと愛を育むのか。

一生喪女ルートだって否定できない。

九十郎は、光璃がこの先どうなるかと、この先どんな選択をしようとも、大事な幼馴染だという事は変わらないと思っている。

光璃がどんな善行を積もうが、どんな悪行を働こうが、それはそれとして大事な幼馴染だと思っている。

九十郎の想いは変わらない。

そしてもう一つ、分かっている事があるとすれば……

「そういうえば九十郎、ずっと気になってたんだけど、

ザ・ニュー御屋形様に好きって言われて嬉しかったかい？」

「え？ まあ、それなりに」

「彼女にしたい？」

「いやー、きついでしょ」

……九十郎は光璃と男女の関係になる気は全くないのであった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ6 『省略された幕間シリーズ・天草四郎の場合』

時は少し遡る。

これは蘭丸との戦いが終わり、九十郎達がオーデインとの戦いの準備に奔走していた頃の事……テンポが悪くなるため省略された出来事である。

蘭丸との戦いが終わり、北条家勢力範囲の強行突破、江戸城にポータル設置からの大江戸学園への転移も終わり、対オーデイン戦の準備が始まった。

さて、約一ヶ月にも及ぶ対オーデイン戦の……ヴァルハラ宮殿殴り込み作戦の準備は、3つの異世界で同時並行にて行われていた。

第一に戦国時代……犬子や美空達が生まれ育った世界では、北条早雲と呼ばれた者にして、大江戸学園創始者たる徳河早雲でもある人物の力を借りての北条家の説得と合流があった。

第二に現代日本……新田劍丞や本郷一刀が生まれ育った世界では、後漢末期（通称三国時代）の英雄・英傑達との合流、そしてそれを阻まんとするオーデインの手勢との戦

闘があつた。

第三に現代ニホン……大江戸学園が存在し、九十郎や秋月八雲が生まれ育つた世界では、対魔法防御バリア、アンチ神話生物ビーム、超巨大異世界転移ポータル等の設置による大江戸学園の要塞化があつた。

第一の作戦、戦国時代での北条家の説得と合流作戦は、新田劍丞とその嫁達を中心となつて実行された。

第二の作戦、現代日本での後漢末期の英雄・英傑達との合流作戦は、斎藤九十郎とその嫁達を中心となつて実行された。

第三の作戦、現代ニホンでの大江戸学園要塞化作戦は、秋月八雲とその恋人達を中心となつて実行された。

「いや配置逆だろっ?! 何で俺が劍丞の叔母さん叔父さん迎えに行く役割なんだよ!?

劍丞にやらせろよおっ!」

……との意見もあつたが、ほぼ間違ひなく協力的であろう後漢末期の英雄・英傑達との合流よりも、北条家の面々を説得して兵力を引き出す方が明らかに高難易度のため、このような役割分担になつた。

もつとも、後漢末期の英雄・英傑達との合流を妨害しようとオーデインの手勢が差し向けられ、戦闘になり、呂布が裏切つたり真田昌幸が裏切つたり呂布が裏切つたり孔明

が事故に見せかけて魏延を殺そうとしたり呂布が裏切ったり真田昌幸が裏切ったり口キが裏切ったり呂布が裏切ったりして色々大変だったため、結果として九十郎の仕事が最も苦勞が多く難易度も高かった事は付言しておこう。

「……結局あの人、なんで4回も裏切った挙句最後だけしれつと味方ヅラしてたんだろ」「痴話喧嘩だつてよ」

「じゃあ、朱里さんが焰耶さんを消そうとした理由は？」

「え、事故じゃねえの？ 諸葛亮だつてたまにはミスるだろ」

「アレを事故と言い張るのは無理があると思うけどなあ……」

犬子と九十郎は何度も死ぬような目に遭って、オセロのように裏切りまくる味方やしれつと味方を亡き者にしようとする軍師に振り回されっぱなしだった事も付言しておこう。

呂布に同調して裏切ったは良いが数分も経たずに梯子を外された一二三もだいぶ苦勞した方である。

さて、そんなどつたんばつたん大騒ぎをしている中で、天草四郎と本多忠勝・通称どこで何をしていたかと言うと……

……

……

.....

「大江戸学園甲級二年天草白江！ 芸名はジエロニモ！」

年齢だけは三年だけど出席日数不足留年したから甲級二年、クラスは現在調整中！

よろしくねーっ!!」

「助っ人外国人の本多忠勝！ 通称は綾那なのです！」

大江戸学園の危機を聞いてやって来たのです！」

……ヴァルハラ宮殿殴り込み作戦開始直前の大江戸学園に、2人の少女達が元気良く自己紹介をしている。

そう、尺の関係で省略されていたが、天草四郎と本田忠勝の2人はヴァルハラ宮殿殴り込み作戦に思い切り参加していたのだ。

「えっと……何か角が生えてるけど、貴女は綾那……なのよね？」

「魔人忠勝なのです、葵さま！」

綾那がビシッと敬礼する。

額には鹿に似た角が2本生えていた。

戦国時代の礼儀作法とは180度ズレたその振る舞いを見て、葵は思わずしかめっ面になった。

「それで貴女は……えっと、天草……」

「あ、本名嫌いなんで、ジエロニモって呼んでね。それか天草四郎で」

「天草四郎……たしかこちらの歴史書では、

島原の乱とかいう事件の首謀者だったかしら？」

「そうそう、何を隠そう天草四郎の生まれ変わりです。

北条早雲つて人が……いや、徳河早雲だったっけ？」

オーデインから保護するために過去の偉人の生まれ変わりを学園に集めてたって、

驚いたよね、ホント」

葵の表情がますます険しくなっていく。

いまから神に喧嘩を売ろうって時に、こんな訳の分からない連中の相手は正直したくない。

「あ、ちなみにあつちの世界の天草四郎はもう居ない。

最初にこつちの世界からあつちの世界に飛んだ時に、あつちの世界の天草四郎の魂と、

天草四郎と同じ魂を持つボクとで引っ張り合わせたんだ。

それで魂と魂がゴツチンコして、肉体も融合しちゃって、

今のボクはピ○コロとネ○ルみたいに混ざり合っているんだ」

「引っ張り合わせて……どうしてそんなあからさまに危険な真似をしたの？」

「そりゃあ、当時完成していた次元転移マシンの性能が低かったからだよ。

肉体のほぼ全部を切り捨てて、ギリギリ魂の器になる程度まで小さくなつて、さらに並行異世界の同一人物との共鳴現象を起こして、

ここまでやってようやく跳べますってヤツだったんだよ。

魔人化してないと肉体の大部分を破棄した時点で死ぬから、

実質魔人専用のマシンだったね、アレは。

あつちの世界の天草四郎さんを事実上消滅させたのは悪い事したな〜と思うけど、

まあ、こつちも柳宮十兵衛に斬り殺される寸前だったから、

たぶん緊急避難（刑法37条1項）かな」

「……あらそう、それは大変ね」

葵は目の前の素敵生物との話を打ち切ってブン殴ってしまおうかと迷い始めた。

あつちの世界というのが戦国時代、葵たちが生きていた世界で、こつちの世界というのが大江戸学園のある世界という事までは辛うじて理解できたが、それ以外の所はチンパンカンパンである。

「しかあしっ！ 天草四郎と私ことジェロニモちゃんが合体してパワーアップ！

かつては柳宮十兵衛に手も足も出なかつたボクだけど、

いまなら百回やって1回か2回くらいは勝てるかも！」

「全然駄目じゃない」

「まあ、クツソ強いからね、柳宮十兵衛」

大江戸学園最強は誰かという話題になると真つ先に名前が挙がる武者者である。

忍法・魔界転生により魔人となり、鬼子と同レベルの超能力を駆使できるようになったからといって、そう易々と勝てる相手ではないのだ。

「それで貴女達、何をしにここに来たのかしら？」

「こっちは今からオーデインとの戦いに……」

「だから、その戦いに助太刀しようって事だよ」

「ふっふっふっ……ヒーローインタビューは綾那が貰うのですっ!!」

意外過ぎる回答、理解不能な回答に、葵は思わずズッコケそうになった。

天草四郎とかいう女は魔界転生とかいう人間を魔人に変える秘術を悪用し、こっちの世界でいう1年前に大きな騒乱を起こしたと聞いている。

あの地獄のような蘭丸戦のどきどき紛れ、綾那を魔人に変えて連れ去ったとも聞いている(第170話、第172話)。

その天草四郎が何を考えてこっちに助太刀を……理解に苦しみ、真意が読めず、いつでも頭も痛くなってきた。

「綾那、貴女は……聞いても分からないかも知れないけれど、蘭丸の洗脳がまだ……」

「え、洗脳なんかされてねえですよ」

綾那はキョトンとした表情で聞き返す。

織田軍、越軍、そして松平軍のほぼ全員を襲った洗脳であるが、綾那だけは剣魂に組み込まれた対サイキック防御装置によってその影響を排除している（第156話）。

「それじゃあ、こっちの天草四郎に何かされて、脅されているとか……」

敬愛する主君にそう問われて、綾那はちらつと天草四郎に視線をやる。

天草四郎は特に意味も無く『ウイッシユ!』とカッコつけポーズをとった。

「葵さま、アレにそんな事できそうですか?」

「ええ、無いわね。 あんな馬鹿そうなのに」

「馬鹿じゃないやいっ!!」

『超』がつく高偏差値校である大江戸学園の編入試験をパスし、売れっ子DJとして多忙な毎日を通^ごしながら全科目で平均以上の成績を取っていた天草四郎、知能指数や要領の良さという点では上澄みと言って差し支えないだろう。

だがしかし、言動が馬鹿っぽいのは彼女の知り合い全員の共通認識である。

それはさておき、葵の想像した通り天草四郎に他人を洗脳する能力は無い。

使えるのは物理的な強度を無視した物体切断能力『忍法・髪切丸』と人間を魔人に変貌させる『忍法・魔界転生』、そして魔界転生を応用した肉体操作、体質変化である。

「……………」

葵が耐え難い頭痛に苦しみながら、眉間に皺を寄せてこめかみを抑えた。

葵がこの大一番のために集めた兵力は約8000名、今の三河松平家が揃えられる限界一步手前の数と言っても過言ではない。

しかも葵にはオーディンを大江戸キャノンの射程圏内まで引つ張り出すという重大な役割が……神格の付与という上手くいく保証が一切無い大きな大きな賭けに出るという役割もあつた。

有力な指揮官は増えた軍団の統率に、あるいは神格付与の儀式の準備に駆り出されておき、ここにいるバカ2名の相手を代わってくれそうな人材は皆無であつた。

「本当……本当に何なの……こっちは神格とやらを受け止める反動で、

人として生きてきた記憶も、人格も喪われるかもって覚悟でここにいるのに……」

真剣に悩みまくっていたのが馬鹿らしくなり、何故か涙が零れ始めた。

「ああ、葵さまが泣いているのです!? 白江、なんとかするのです!」

「本名言うなし! こうなりや大江戸学園のデイスコヤクラブを

ドツカンドツカン沸かせ続けたDJジェロニモちゃんの本領発揮の時っ!

誰かターンテーブル! ボクのDJパワーを見せてやる!」

学生がデイスコヤクラブを経営している学校は二ホン中を探しても大江戸学園だけ

である。

「た、たーん……てーぶ……?」

あの、▽○ンダムならあるんですけど、これでいけるですか?」

「ボクは▽より鉄血のがテンション上がるねえ」

いずれにせよ1/144スケールのガ○プラではDJパワーは発揮できない事だけは確かである。

ただしDJパワーで葵の頭痛が収まるかは微妙というか、むしろ悪化しそうな所には綾那も天草四郎も気づいていない。

「あ、綾那!? いないと思ったらやっぱりこっちに!」

勝手に出歩いちゃ駄目ですよ、変な角が生えてるのだから!」

あまりのストレスで憤死寸前の葵の元に、ここで天の助けが現れる。

三河徳川家の家臣、勇猛な武人であり指揮官としても有能、現代二ホンの歴史書においては徳川四天王と称えられる少女、榊原康政・通称歌夜である。

「ああ、歌夜! 助けに来てくれ……って、『いないと思ったら?』」

貴女、まさかコイツらの事を知ってて黙ってたの?」

葵の目つきが急激に険しくなる。

腕つぶしは強く義理堅いが面倒臭く、主君殺し常習犯でもある三河武士の頭領のため

か、幼少期の人質生活が人格形成に悪影響を与えたのか、葵は割と疑り深い性質だ。信用する部下であっても、それはそれとして裏切つてはないかとの疑念は捨てない。「ち、違つ……知つていて黙っていたのではありません！」

私も昨日の夜遅くに急に來られて、混乱して……それと神格付与が……

そう！ 人の身でありながら神の力の一端を手に入れる重大な役目を担つてます、

葵さまの御心を煩わせないように……えつと、ですね……」

急ごしらえ感満載の言い訳に、葵の疑念はどんどん強くなっていく。

「……貴女、今日は随分と髪が短いじゃないの。失恋でもしたのかしら？」

「いえこれは切つたのではなく！ 朝起きたら何故か短くなってまして！」

訳の分からない説明に、葵は何のこつちやと首を傾げた。

「ああ、それね。ボクの忍法・髪切丸は発動に触媒が必要だから提供してもらつたの」

……と、ここで予想外の方向から助け舟が出る。

葵と歌夜を混乱と混沌の渦に叩き込んだ天草四郎が口を挟んだ。

「流石に対魔法防御バリアまでは抜けないけど、

それ以外なら大体は豆腐みたいにスパスパスキれる優れもの。

刀よりも軽いし長い、しかも脳波コントロールできる。

しかも手足を使わずにコントロールできるんだ、凄いでしょ？」

「能力は凄いとありますが、ええ素晴らしいですとも。

でも深夜に押しかけて有無を言わさず2人がかりで強姦した事へ何か一言は？」

「凄い気持ち良かった、アソコはキツキツだったね」

「肌もスベスベだったのです」

「こらっ！ 大声でそんな事を言わないで！ はしたないでしょっ！」

天草四郎と綾那が凄い良い笑顔で歌夜にサムズアップし、歌夜は顔を真っ赤にしてい

る。
「え、何？ 強姦？ 貴女達2人共女でしょう？ ナニを挿したつてのよ？」

「そりゃナニさ」

「ナニです！」

天草四郎と綾那が下履きをばさつと引き下げる。

2人の生尻が露になり、歌夜が慌てて陣羽織を広げて周囲の視線から隠そうとする。

そして葵と歌夜の視線の先には、ぶらんと2本の男根が垂れ下がっていた。

「……ち、ち○ん？」

「なのです！」

「何で自慢げなのよ綾那……」

「気に入ってるのです、取っちゃやなのです」

「誰も盗らないわよそんなモノっ!!」

「魔人化の時に使った指が変化したものだよ、本物のち○ちんじゃない。

こうやって男根みたいな形になって、魔人の股座にくつつくんだ。

完全に肉体と融合して、

血も神経も通ってるからお○んこに挿れると凄く気持ち良い」

「しかも脳波コントロールできるのです!」

「うん、しれつと嘘教えないでね、流石に脳波コントロールは無理だからね」

「うわあ……」

倫理観がブツ飛んでるのかと葵はげんなりとした表情だ。

この時点には誰も気づいていない事であるが、実は忍法・魔界転生には重大な弱点がある。

鬼子の如く強大な超能力が後天的に手に入るが、それと引き換えに良心の呵責と云うか、常識フィルターと云うか、そういった心のブレーキ的な何かが極度に効きにくくなってしまふのだ。

かつて森宗意軒は天草四郎を含めた7人の武芸者を魔人にし、柳宮十兵衛をあと一歩のところまで追いつめたものの、統制がロクで取れずにグダグダになり、柳宮十兵衛の卑怯殺法がクリーンヒットし、最終的に全員返り討ちにされたのにはこの弱点がモロに

影響を及ぼしている。

「……で、結局貴女達何をしに来たの？ 私達に喧嘩を売りに？」

「さつき言ったでしょ、助太刀だって」

「助っ人外国人、魔人本多忠勝なのです！ ヒーローインタビューは貰うのです！」

葵は思った……コイツら帰ってくれないかなあと。

「綾那、洗脳が無いのならどうしてコイツに従っているのかしら？」

「フラフラとほつき歩いていないで戻って来なさいっ！」

「え、後で返すからもう少し貸してよ。」

「柳宮十兵衛にリベンジマッチ挑むんだからさ。」

「そんな事情は知ったこっちゃ無いわ！ やりたいなら1人でやりなさい！」

「綾那どうなの!? 帰るの、帰らないの!？」

「葵様、綾那はまだ戻る訳にはいかねーのですよ」

「じゃあ百歩譲って剣丞隊にでも行きなさい、貴女好きだったでしょ、新田剣丞の事」

「そりゃあ剣丞様は敬愛しているのです。」

「ですけど、敬愛しているからこそ、そう易々と戻る訳にもいかないのです」

「な、なんで……？」

「何故なら……」

「エッチの勝負で負けたからなのですっ!!」

綾那は力強くそう宣言し、歌夜と葵は揃ってズココと倒れ込んだ。

「イエース、イエース、アイムウイナーってね」

天草四郎はドヤ顔でダブルピースをしている。

このバカらしさ、このアホ臭いノリこそが大江戸学園である。

「エッチの勝負って……えくつと、それはつまりこの間の……」

「アレ、なのね……蘭丸の……」

歌夜と葵の脳裏に嫌でも浮かぶのは、ほんの1ヶ月前の悪夢、地獄のような蘭丸戦である。

三河松平家の面々は剣丞隊のついでで洗脳され、犯され、蘭丸に支配された挙句、対越軍との戦いでは『足手まといだから先に帰って』と戦力外通告を出されてすごすと引き下がっていた。

歌夜にとつても葵にとつても思い出したくない、屈辱的な記憶であった。

「あの、綾那……あの時の、その……先に達したら負けというのは、ね……」

「アレは森蘭丸が適当かつ一方的に決めたもので、

今更従う必要は全く無いわ、分かってるの?」

「それでも、劍丞様が決めたしきたりなのですよ」

「……うん?」

葵は一瞬何を言っているのか理解できず、目頭を指で押さえた。

「ああ、そつか……そういう……何となく分かるかも……」

「分かるのっ!」

そして綾那の謎理論に理解を示しかける歌夜にドン引きした。

「そりゃあ、あの仕組みはちよつと常識外れなところはあるかもなのです。

ですけど、劍丞様が世の中を良くしようと一生懸命考えて出した結論なのですよ。

それを蔑ろにするような真似はしたくねーのです」

「ええ、まあ……問題点はげつぷが出る程多いけど……」

とりあえず、人が死なないという点だけは合理的……かも……」

「だからって律儀に守るんじゃないわよっ!!」

葵は思った……三河武士って本当に面倒臭いと。

実直で、律儀で、融通が利かず、面倒臭く主君殺しの常習犯……それが歌夜や綾那を

含めた三河武士の実態である。

そんな三河武士特有の面倒臭さを発揮し、非常に面倒臭い立ち位置に自ら飛び込みつつある綾那をどうしたものかと葵が頭を抱えたその時……

「ワープアウトまであと30秒！ 皆さん、攻撃に備えてください！」

大江戸学園の校内放送からそんな声が聞こえてくる。

ほぼ同時に学園の各所に備え付けられたバリアーマシンに電源が入り、魔法や超能力を防ぐ光の壁が展開される。

「ああもう時間が無いっ！ 歌夜、貴女は急いで持ち場に戻りなさい！」

「は、はい！」

「綾那、それと天草四郎。この話は後でゆっくり。」

とりあえずどこかで適当に戦っていなさい、こっちの邪魔だけはしない事っ！」

「かしこまり〜」

「御意なのです！」

「皆の者！ 事前の訓練通り、近くの対魔法防御バリアに身を隠しなさい！」

ヴァルハラに到着と同時に、オーディンの軍勢から攻撃が来るわっ!!」

葵がそう叫ぶと、バリアーマシンの効果範囲内に身を伏せる。

綾那と天草四郎も葵と共にバリアに隠れ、まるでおしくらまんじゅうのように身を寄

合せ合った。

「あ、貴女達……邪魔しないで……」

「いや、神様の魔法喰らったらいくら魔人でも死んじやうかな……」

「昔はこうやって薪の節約をしてたのです。懐かしいのです」

葵は思った……オーディンより先にこいつらを血祭りにあげてやろうかと。

そしてついに大江戸学園は超空間を超え、ヴァルハラ宮殿へとワープアウトし……

「ここ、ここがヴァルハラ宮殿……?」

「静か……だね、静か過ぎるくらい……」

「攻撃魔法、全然飛んでこねーのです」

ワープアウトから10秒経ち、1分経ち、5分経つても一向に攻撃が来る気配が無かった。

対魔法防御バリアの駆動音だけが虚しく響き、三河武士達の間がちよつとした動揺が生じ始める。

「はあっ!!? もう戦わなくて良いっ!!? 和平交渉に入ってるから何もするなあ!!?」

そして大江戸学園の必殺仕事人3名が先走った結果、開戦前に勝負が決まっていた事が判明するのである(第173話)。

「え、何? どうゆう事?」

「ヒーローインタビューは逃したっぼいのです」

「もしかして……もう戦いが終わったって事？」

葵と綾那がこくこくと頷いた。

すると天草四郎は額から滝のような冷や汗が出て、歯をガチガチと鳴らし始めた。

「今度はどうしたの？ 雪隠（トイレ）はあっちゃよ」

「アイドルと魔人はトイレなんて行かないの。」

そうじゃなくて、柳宮十兵衛とはオーデインとの戦いが終わるまでって、

期間限定で休戦してるんだよ。だから戦いが終わったって事は……」

「いくら何でも今すぐ襲っては来ないでしょう」

「いや、十兵衛ならやりかねない。あいつその辺シビアだから……」

直後、天草四郎のガラケーがピピピピピッ！ と鳴った。

二つ折りの携帯を開いて画面を見ると『斎藤九十郎』の文字が出ていた。

「あ、九十郎？ どうしたの？」

新曲はもうちよつと待っててよ、今ちよつと忙しくて……」

『おい、ジェロニモ。柳宮十兵衛がダッシユでそっちに向かっただぞ。

お前休戦はオーデインを倒すまでって言ってたよな？

あいつ多分、速攻でお前らを殺りに行くつもりだぞ』

天草四郎がボトツとガラケーを取り落とす。

そしてガタガタと震えながら綾那の方へ向き直った。

「あ……あはは……柳宮十兵衛、こっち来てるって……」

速攻でボク達を殺りに来てるかも……」

「じゃあここで決着をつけるのです！ 綾那の強い所を存分に見せてやるのですよ！」

「駄目えっ!! 絶対駄目えっ!! あいつ冗談みたいに強いから絶対負けるよっ！」

前に戦った時はボク含めて魔人7人もいたけど、

うっかり1人ずつ戦ったから全員ボコボコにされたんだよ!!」

「ええ、じゃあいつ戦うのですかあ？」

やる気満々だったのに水を差され、綾那は不満気だ。

「森蘭丸の指が5本残ってるから、魔人はあと5人作れる！」

ボクと綾那含めて、7人の武芸者を魔人にしたら戦う！」

そして今度は7人がかりで袋叩きにするんだ！ そうすれば絶対に勝てるから！」

「むう……まあ、ジェロニモがそう言うなら、綾那は我慢するのです」

綾那はかなり不満顔だが、渋々ながら天草四郎の言葉に従う。

そして……

「天草あああああ——っ!!」

まるで地獄の悪鬼の如き殺意に満ちた怒声が響く。

精強かつ屈強で畏れられる三河武士達ですら思わず竦む程に迫力のある声であった。

柳宮十兵衛の……大江戸学園の剣術指南役にして、学園最強と噂される凄腕の剣客の怒声は戦国時代の本物の武士すらも竦ませる威勢があった。

「逃げろおおおーっ!!」

「ふははははっ! サラバだ明智君なのですっ!」

天草四郎と綾那は逃げた。

恥も外聞も無い猛ダツシユで逃げた。

戦おうとは一切考えなかった。

大江戸学園とヴァルハラ宮殿全土を巻き込んだ鬼ごっこは、それから半日くらい続いた。

「ボクはあ! 柳宮十兵衛に勝あつ!! 絶対に勝つ! 今度こそ勝つ!」

そしてグチャグチャになるまで犯しまくってやるううううーっ!!」

学園最強の剣客、柳宮十兵衛を倒し、犯し、穢し、蹂躪したいという邪悪な欲望を大声で叫びながら、天草四郎は学園中を逃げ回るのであった。

……

……

.....

それから少し時は過ぎる。

オーデインとの和平交渉は意外な程につつがなく終わった。

犬子や粉雪、一二三や雫、九十郎といった面々の大江戸学園への編入手続きも終わり、しばしの間の平和かつ平穏な時間（ただし大江戸学園基準）が過ぎた。

そして戦国時代で共産主義革命が勃発し、美空や柘榴達に危機が迫っていると知らされ、斎藤九十郎が諸葛孔明を連れ去ってポータルに飛び込んだ日（最終回）から約半月が経った。

「……と、いう訳で天草白江は再びここ大江戸学園に戻って来る事が予想される」

大江戸学園生徒会執行部の会議室で、柳宮十兵衛が天草四郎に関する全ての情報を話していた。

かつて森宗意軒という人物が人間を鬼子と同じ超能力に覚醒させ、魔人に変貌させる忍法・魔界転生を編み出した事を。

忍法・魔界転生によって天草四郎を含めた7人の武芸者を魔人に変え、徳河早雲を抹殺して大江戸学園を支配しようと企てた事を。

その企ては柳宮十兵衛の手によってギリギリのところまで阻止された事を。

魔人となった7人の武芸者達は、天草四郎を除き全員が病院送りとなり、森宗意軒は

命を落とした事を。

天草四郎は未完成の次元間転移マシンを使い、並行異世界に……光璃や犬子達が生まれ育った戦国時代に酷似した異世界に逃げ延びた事を。

そして……天草四郎は森蘭丸の指を使い、戦国時代の武芸者5名を魔人に変え、再び柳宮十兵衛に戦いを挑もうとしている事を包み隠さず話していた。

「ええ……」

「本当に騒動の種だけは事欠かないな、この学園。

今度お祓いした方が良いんじゃないか」

徳河吉音が苦笑しながら頬を掻く。

遠山朱金がげんなりした表情で肩を落とす。

他には徳河詠美、逢岡想、鬼島桃子、長谷河平良、そして犬子と粉雪が集められている。

いずれも一流の剣客であり、魔人化した武芸者とも十分に渡り合えると柳宮十兵衛が判断した者達である。

「魔人をこれ以上増やされる前にこっちから攻めるのはどうだ？」

「駄目だよ、ポータルは九十郎が無茶したせいで壊れちゃったから。

直るまで戦国時代には行けないんだよ」

「そりゃ厄介だな、向こうから襲撃してくるのを待つしか無いのか」
集められた者達が顔を見合わせる。

大江戸学園に騒乱が起きる度に集められる面々だ、今更魔人が襲つてくると聞かされた程度では動揺はしない。

しかし、叩いても叩いても雨後の筍のように湧き出て来る騒乱の種にうんざりとした気分は隠せなかった。

「……最新の研究の結果、魔人になった者を殺さずに人間に戻す手段が見つかった」

そして柳宮十兵衛が重苦しい表情でそう告げる。

「そっか、じゃあ綾那も元に戻るんだ。良かった〜」

吉音が能天気にかう。

戦国時代に仲良くなり、オーディンとの戦いの数日前には趣味で作ったV○ンダムの144/1スケールプラモデルを友情の証として贈った相手について、彼女なりに気にかけていたようだ。

「おい、ちよつと待った、何か凄い嫌な予感がするぞ……」

その、魔人に戻す方法って、具体的にどういふのなんだ？」

遠山朱金が露骨に顔を歪めて確認する。

大江戸学園の騒乱に何度も何度も巻き込まれた……というより、南町奉行として先頭

に立って騒乱を収める立場にある朱金だからこそ、率先して嫌な予感の元を確認しようとする。

「まず前提として、忍法・魔界転生によって魔人になった者は全員女性だ。

森宗意軒は自身の指をだな、こう……男根のような何かに変えて、

対象の子宮に魔人化エキスを注入する。

それ故に魔人は全員女性だが……魔人化した女は全員、魔人の力の源の……

あく、つまり、指が変化した疑似男根とでもいうべきモノが生える」

「エロ漫画みてえな設定だな」

遠山朱金がそんなツツコミを入れる。

他の皆も似たような事を考えていたのか、うんうんと頷きあった。

「まず魔人化した人間の疑似男根に経文を書いたコンドームを被せる」

柳宮十兵衛が朱金のツツコミを無視して話を続ける。

大江戸学園に何年も通学していると、こういう話の本筋に関わらない無駄話に関わっ

ているといつまでも話が前に進まないと感覚的に理解させられるのだ。

「うん……？ 凄え強い武芸者に漫画みたいな超能力がプラスされるんだよな？」

その時点で難易度高くないか？」

米粒アートのような精密さでびっしりと経文が書き込まれたコンドームが何十個も

ずらつと並べられる。

朱金が1つを手を取って見る……遠目で見る分には何かの文様のように見えたが、近くで見ると確かにお経のような文字列だと分かった。

「見た目はアレだが、効果はある。」

コレを被せる事で、魔人の超能力をほぼ無力化可能だ」

「そもそも勃つのか？ 疑似ち〇こ」

「勃つ、魔人は超能力を行使した後は例外なく勃起する。」

さらに魔人は超能力を使えば使う程女を犯したい欲求が増大し場合によつては暴走する」

「何でそんな事知ってるんだ？」

「以前戦ったからだ。戦いの最中に乳を晒すだけで面白いくらいに集中を乱せた。」

超能力の行使には精神集中が必須なので……後は言わずとも良からう」

柳宮十兵衛が苦笑しながらそう話す。

かつて森宗意軒が起こした戦いは十兵衛にとって楽な戦いでは無かった。

理性のブレーキが効きにくくなる弱点に、超能力行使後は性欲が増大する弱点が無ければ、おそらく7人の魔人に成す術も無く蹂躪されていただろう。

魔人の攻略法を見出すまで防戦一方、超能力に翻弄され、ヒイヒイ言いながら逃げ回

るのが精一杯だった。

「戦いながら色仕掛けって事、はしたない真似をするのね」

「言ってくれるな、他の手段は思いつかなかった」

「いや待て、もしや我々にもそれをやれと言うつもりじゃ……」

徳河詠美と長谷川平良が嫌な予感と共に一步後ずさる。

「まあ最後まで聞け。」

このコンドームを被せた後、疑似男根に蓄えられた魔人パワー、

あるいは魔人エキスとでも呼ぶべきか、魔人の力の源とでも呼ぶべきモノを吸い出す。

そうすれば魔人を生きたまま人間を元に戻せる訳だが……」

「……訳だが？」

「その方法はこの経文コンドームを被せた状態で射精させる事だ」

「おい待ちな！」

ちよつと際どい服着て色仕掛けくらいならともかく、そこまでヤレってか!」

「ちなみに口淫、手コキ、乳ズリ、尻穴、それとオナホールに射精させても無駄だった。

正しい手順で射精させた場合に比べて、

何倍も、何十倍も薄い魔人エキスしか抜けないため……らしい」

「それ、全部試したのか？」

「……試した」

「マジかよ!?! ちょっとオレ、ジエロニモに頼んで魔人に……」

長谷川平良が朱金の後頭部をブン殴った。

「待って! ちょっと待って! だったら正しい手順でもしかして……」

集められた面々が猛烈に嫌な予感を覚える。

徳河吉音、遠山朱金、徳河詠美、逢岡想、鬼島桃子、長谷河平良、そして犬子と粉雪

……全員が武術に優れた『女性』である事に気がつく。

「……そうだ、お前達が想像した通りの方法だ」

意識『魔人ち〇ここにコンドームを被せてセックスしろ』である。

「ちよつと何それ!?! 聞いてないよ!」

「今、言った」

「本当にエロ漫画みてえな連中だな! 魔人って!」

「知らん、森宗意軒の趣味じゃないのか」

集められた面々はドン引きである。

「生きたまま人間に戻すのにはそういう行為が必要ね……」

「じゃあ、後腐れなく殺しちゃえば良いんじゃない」

ここまで黙って話を聞いていた犬子が口を挟む。

「殺すのは簡単だ、疑似男根を切断すれば良い。」

魔人は人間離れした耐久力と回復力があるが、男根が急所だ。

アソコを斬れば例外無く絶命する」

「だってさ、どうするの？」

犬子が集められた面々にそう尋ねる。

魔人とのセックスが嫌なら、いつそ殺してしまえば良いと言外に提案している。

「戦うのは私達、魔人と……その、セック……」

「ごほん！ 魔人を元の人間に戻すのは他の人に……」

詠美が顔を真っ赤にしながらそう提案する。

「それは難しいでしょうね……」

天草さんがどのような人を魔人にしてくるか分かりませんが、

十兵衛さんに挑む以上は、相当に腕が立つ人でしょう。

どんな超能力を使ってくるかも分かりません。

足手纏いになる人を守りながらでは……」

……と、今度は大岡想が反対意見を出す。

大江戸学園には驚くべき事に、あるいは笑える事に娼婦がいる。

金さえ出せば魔人とゴム付きセックスをしてくれる女は探せるかもしれないが、一流の武人同士の戦いの中に飛び込めというのは無理無茶無謀である。

大江戸学園があらゆる意味でブツ飛んだ学園だと言っても、そこまでブツ飛んだ人材はいない。

「くそ、厄介だな魔界転生つてのはっ！」

「でも……それでも、殺しちゃうのは駄目だよ。」

「私達は学生で、ジェロニモだつて学生なんだから」

そして吉音が重苦しい表情でそう呟く。

この場にいる面々の中で、犬子と粉雪、詠美、そして柳宮十兵衛以外の全員は秋月八雲の彼女である。

魔人を元に戻すためとはいえ、コンドーム越しとはいえ、ち〇こが付いているけど相手は女性とはいえ……秋月八雲以外の人間とセックスする事は倫理的な抵抗感がある。

特に吉音には、蘭丸戦で見知らぬ男に犯され、膣内射精までされた負い目がある（第167話）。

だがしかし……だがそれでも……

「八雲には土下座しなきゃいけない、もしかしたら八雲に嫌われるかもしれない、今度は本当に許しちゃくれないかもしれない。」

それでも……それでも私は、ジェロニモを元に戻したい。

一緒に授業を受けて、一緒に遊んで、一緒に勉強して、一緒に卒業したい」

それでもと、吉音は思った……それでも、誰も殺さずに終わらせる方法があるのなら、逃げたく無いと。

力で叩きのめして、殺して、それでおしまいだなんて救いが無さすぎると思った。

そして吉音は心の中では全力で八雲に謝りつつ、机の上の経文コンドームを手を取った。

「はあ……まあ、お前はそう言うだろうよ……ええいくそつ！」

オレも乗った、アイツを人間に戻して復学させてやる！ 八雲にや後で土下座だな」

遠山朱金が経文コンドームを握り締め、天高く拳を掲げた。

「はあ……そう言うと思いましたよ。 なら、私の答えはこうです」

大岡想が経文コンドームを手を取った。

「まあ仕方ねえ、あたかもやるか……ここでダチ公を見捨てちゃ目覚めが悪い」

鬼島桃子も経文コンドームを手を取った。

「はあ……まさかこんな形で処女を喪う羽目になるとは……」

徳河詠美も吉音達に難題を押し付けられず、盛大なため息と共に経文コンドームを手を取った。

「何だ、まだ九十郎に想いを伝えていなかったか？」

「ええそうよ、悪い。急に死んだと思ったら戦国時代で生きていて、

前田利家とか真田昌幸とかをお嫁さんにしてましたなんて想像つく？」

とても好きです、付き合ってくださいいなんて言える雰囲気じゃないわよ」

「そうか……それなら、詠美に順番が回ってこないよう、精々身体を張るとしよう」

長谷河平良が苦笑しながら経文コンドームを手を取った。

魔人は現在2人、森蘭丸の指の数は5本……来襲するであろう魔人の数は最大で7人。

それに対して、この場に集められた剣客は全部で9人。

途中で脱落する者がいなければ……ではあるが、詠美がその身を穢し、処女を喪う前に全滅させる事は出来ない。

「念のため言っておくが、ナマは絶対に避けるように。」

子宮に直接魔人エキスを流し込まれれば何が起きるか分からん。

最悪、魔人にされる危険すらある」

柳宮十兵衛が経文コンドームを手を取った。

数年前の戦いではとても表沙汰にできない卑怯殺法を連発した孤独で過酷な戦いだっただった。

だが今は違う、仲間がいる、魔人の性質も研究した、倒し方も分かった。

「(今度は必ず助ける……今度こそ必ず救ってみせる……今度こそ……)」

柳宮十兵衛はそう心に近い、新兵器にして、かつて救えなかつたダチ公を人間に戻す鍵……経文コンドームを強く強く握り締める。

「おい犬子、あつちはやる気みたいだぞ、どうするんだぜ？」

粉雪がひそひそ声で犬子に尋ねる。

「粉雪はどうしたいの？」

「どうしたいって、そりゃあ……その……」

粉雪は九十郎の婚約者という事になっている。

今はまだ正式な嫁ではないが、大江戸学園を卒業したらすぐに婚姻と約束している。

だから九十郎以外の人間とセックスするような真似は極力したくないのだが……

「はあ……ゴメンな九十郎、あたいは……あたいはあいつらの事、結構好きになつてた。

この大江戸学園も気に入ってる。だから一回だけ、一回だけ許してくれなんだぜ」

粉雪はそう呟くと、机に並べられた経文コンドームを手を取った。

「じゃあ犬子は先に帰るから、後は頑張つてね」

そして犬子は逃げた。

お忘れの方もいるかもしれないが、犬子は前田利家である。
賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を見捨てて逃げた前田利家である。

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ7 『省略された幕間シリーズ・柘榴の場合』

時は少し遡る。

これは蘭丸との戦いが終わり、オーデインとの戦いも終わり、九十郎達が平和な日常に回帰しつつある頃の事……テンポが悪くなるため省略された出来事である。

「それでは皆さん……かんばああああ〜っ!!」

大江戸学園で宴が行われていた。

オーデインに勝利した事を祝う宴である。

決して散々苦勞して戦争の準備をしたのに全く出番が無いまま終戦した事へのヤケ酒ではない。

一応は学校である筈なのに、学園全体にいきわたる程の酒が流通しているのは、大江戸学園の笑える所であろう。

「勝っちゃまったつすね、神様に」

「勝っちゃまったな、イマイチ実感わかねえけど」

「柘榴と九十郎は人込みから離れ、小さな雑木林の片隅でジョッキにビールを注ぎ合
う。」

ガラス越しに泡立つ黄金色の酒は、まるで勝利を祝う星々のように見えた。

「何に乾杯するっすか？」

「普通に勝利にで良いんじゃないやねえの」

「イマイチ勝った気がしねーの、柘榴だけっすかね？」

「いいや、俺もぶっちゃけ実感が湧かねえよ。」

その辺の物陰からエインヘルヤルが出て来るんじゃないやねえかってビクビクしてる」

「エインヘルヤルっすか……一回くらいは戦ってみたかったっすね。」

九十郎はスケベさんがいた世界で戦ったって言ってたっすけど、強かったっすか？」

「クソ強かったよ、犬子と翼徳が2人掛かりで普通に蹴散らされた。」

「しゃあねえから廃棄予定のビルに誘いこんでビルごと爆破してやっとな殺せた。」

「ぶっちゃけ2度と戦いたくなかったから、その点は感謝しなきゃだな」

「うううそれ聞くと猶更、柘榴は戦いたかったっすよ」

「まさか戦闘していた時間よりも、和睦交渉の結果待ちの時間の方が長くなるとはな」

「皆でポ○モンとか遊戯王とかで遊んでた時間の方が長かったっすよね」

「ああ、戦国時代の連中が普通にS○i t c hとカードデッキ持ってたのには驚いた。」

「誰だ広めたのは？」

「御大将が率先して広めてたっすよ。 対戦できないと面白く無いって」

「何やってんだよ上杉謙信」

「そのせいで現代二ホンにおける S O i t c h の品薄がさらに加速した事も付言しておこう。」

「……で、何に乾杯するよ？」

「まあ、やっぱ勝利に乾杯で良いんじゃないやねーっすかね」

「ほいほい、じゃあ俺達の勝利に……」

「乾杯っす」

「ジョッキとジョッキがカツンと鳴って、柘榴と九十郎がビールに口をつける。

「一緒に持ってきた焼き鳥も頬張り、口いっぱい肉のうま味が広がった。

「……結局、オーデインは何のために英雄の魂を欲してたっすか？」

「やっぱ、ロキの言ってた通りだったよ。 あいつは嘘つきで、裏切者だったが、

「オーデインの目的に関しては嘘を言っていなかった」

「また剣丞には聞かせられねー話だったっすか？」

「いや、今回は聞かせてる。 また雫あたりの失言で漏れるかもだしな」

「大江戸学園のどこかで雫が『心外!!』とでも言いたげな顔になった。」

なお、雫は剣丞に絶対に伝えるなど厳命した事項を失言した前科持ちである（第14話）。

「ありや、良く揉めなかつたつすね。

スケベさん達、最初から最後まで協力的だったから、教えてないと思つてたつすよ」
「あいつもあいつなりに、思う所はあつたんだろ」

九十郎が星空を見上げる。

大江戸学園は再び超空間ワープを敢行し、現代ニホンに戻ってきている。

いくら和睦交渉がまとまつた後とはいえ、オーデインの根城であるヴァルハラ宮殿で戦勝の宴をするのは少々憚られた……のもあるが、不意打ちを喰らうのを恐れて元の世界に戻つてからの宴となつた。

遠足は家に帰るまでが遠足という事である。

「全ての世界が一気に崩壊する危機が迫つて……だつたつすよね？」

「そうだよ、それを防ぐために、数多の並行世界から英雄・英傑の魂を集め、
エインヘルヤルにして、多次元宇宙を滅ぼそうとする悪と戦わなきゃいけないって。

何か良く分かんが、ラ○グースとかゲ○ターエンペラーみてえな

トンチキな存在がそのうち襲つてくるんだとよ」

「それ、柘榴達もやばくねーつすか？」

「いや、現実には被害が開始するまでまだ万単位、下手すりゃ億単位の年数がある。

逆に言えば、良くて億単位、悪けりゃ万単位の年数しか猶予が無いって事だが。

少なくとも俺達が生きてる間には何の関係もねえよ」

なお、地球誕生が約46億年前、ネアンデルタール人の登場が約50万年前である。オーデインのような神々の視点から見ればあつという間の事なのかもしれない。

柘榴と九十郎が星空を見上げる。

戦国時代の星々も、現代ニホンの星々も、変わらず夜空に瞬いていた。

天地が崩れ落ちるのではないかと憂いる事を杞憂と言うが、ロキは天地どころか時間と空間が、全ての多次元宇宙が一気に崩壊しかねない規模の戦いが起きるのだと説いていた。

それを回避するためには、オーデインのやり方が一番効果的で、効率的だとも。

「何にせよ、いくら世界を救うためだからって、

俺が惚れた女をハンバーグにするような方法は流石になあ……

いや、どっちかと言えば改造人間か？」

「どっちも大して変わらねーっす」

「ああ、違ういな」

柘榴と九十郎が2人で草むらに座り込む。

満点の星空、ビールに、分厚いベーコンのバーベキュー串、そして青草の匂い、虫や蛙の鳴き声……平和で、平穏な、心地良い空気がそこにはあった。

「世界の危機はオーデインに頑張ってもらおうとして。」

戦いは終わった、柘榴達は勝った、それで良いじゃねーっすか」

「そうだな、オーデインならどうにかするさ、知らんけど」

オーデインは今この瞬間も世界崩壊の危機に立ち向かうべく、精力的に活動を続けているだろう。

無数に存在する並行異世界に手勢を送り込み、数多の英雄・英傑の魂を収奪し、エインヘルヤルを生み出し続けているだろう。

今もどこかの並行異世界で、その世界の上杉謙信や武田信玄、前田利家達が殺され、魂を奪われ、改造されているだろう。

だがそんな事は九十郎達には知ったこっちゃないのだ。

仲村往水他2名が決死の覚悟で奇襲して、諸葛孔明が必死こいて和睦交渉をまとめ、この世界は平和になった。

新田劍丞や北郷一刀が生まれ育った現代日本、秋月八雲や斎藤九十郎が生まれ育った現代ニホン、そして犬子や美空達が生まれ育った戦国ニホン……この3つの並行世界に対し、オーデインは絶対に手出し、口出しをしないと確約した。

しかし、その3つ以外の並行世界に手出ししない事、英雄・英傑の魂を奪わない事、世界崩壊の危機に立ち向かう事を止める事は、オーデインは約束していない。

当然、孔明もそれに気づいていたが、和睦交渉の俎上に上げるような真似は最後までしなかった。

「だとしたら、柘榴達の戦いは根本的な解決にはなつてねーつて事つすね」

「そうなる。だけど孔明は言つてたよ、多次元宇宙の破滅への対策を止めるとか、英雄の魂をこれ以上集めるなつて要求を通すには、

もつともつと圧倒的で壊滅的な勝ち方をしないとイケないつて。

もう本当に全滅か屈服かの2択を迫るような状況にまで追い込むしか無いつてな」

「しかし現状、柘榴達にそこまでの戦力は無い……つて、事つすよね？」

「そうそう、だからオーデインには俺達の世界に手を出すなどだけ約束させたよ。

多次元宇宙の破滅はオーデインに頑張つてもらつて、

他の並行世界の英雄・英傑の魂の収奪の方は、

その世界の上杉謙信や織田信長に頑張つてもらおう」

「あつはつはつはつ、他力本願ここに極まりつすね」

「後は野となれ山となれえーつ!!」

「なれえーつす!」

柘榴と九十郎はジョッキをカーンと鳴らすと、それぞれビールを飲み干した。

そして手元のビール瓶からジョッキに追加を注ごうとして……

「ありや、全部飲んじまったか」

「今日はガブガブ呑むつすねえ」

「最近美空に付き合わされてたからなあ、アイツはペース早すぎなんだよ」

「御大将が酒を断つたら3日でスルメみてえに干からびるつすよ」

「はっはっはっ、かもな」

柘榴と九十郎がゲラゲラ笑いながら酒のお替りをもらおうと近くの仮設テントに向かおうとする。

仮にも教育施設だというのに普通に酒類を提供する場所が設営されている事へのツツコミは不要である。

ここは大江戸学園だ、それ以上の説明は必要ない。

「へえ、誰が何日で干からびるって？」

……と、そこに地獄の悪鬼すらも震えあがるような重圧が来た。

「……柘榴、俺の代わりに振り向いてくれ。ぶっちゃけ後ろを見たくない」

「九十郎、死ぬ時は一緒つすよ」

柘榴は九十郎の肩をがっしと掴んで道ずれにしようとする。

「や、やめろ柘榴！ 話せば分かる！」

「たぶん話せば分かってくれるっすから一緒に謝るっすよおっ!!」

そして2人が意を決して振り向くと……ゴゴゴゴッ!! つと無駄に迫力のある空気が共に、何の意味も無く背後に護法五神を浮かび上がらせ、ゲ○タードラゴンかガ○バスターの如く仁王立ちをする美空がいた。

「はあい九十郎、大事な話があるからって会合を途中で切り上げてきた

主君に対して何か言うべき事は無いかしら？」

「主君じゃねえよ、主君の主君だ」

「今そこ気にするトコじゃねーっすよー」

美空が明らかに不機嫌そうな顔でのっしのっしと近づいてくる。

護法五神達はノリノリで迫力を演出していた。

「九十郎お、こういう時どうすりゃ良いっすか!？」

「このままじゃ柘榴達キツイお仕置きっすっよー」

「酒だ！ 酒を渡せ！ そうすりゃだいたい何とかなる！」

「おお、それは妙案……って、さっき全部呑じまったっす！」

「ほほう！ ど・う・や・ら・アンタ達は、

酒さえ出してりや何でも許してもらえと思っっているようねえ！

さつきから他人をアル中呼ばわりし腐って！

禁酒くらいやろうと思えばいつでもできるわよ！

やる必要性を感じないだけで！」

「……なんて言ってるが、どう思う？」

「100パー無理っす！」

柘榴は力強く断言した。

「ふんがぁーっ!!」

……結果、美空の逆鱗に触れて柘榴と九十郎はゲンコツ3発の刑に処された。

「……で、会合って何の話だ？ 抜けても大丈夫だったのか？」

身体だけは頑丈な柘榴と九十郎は何事も無かったかのように話し始める。

しっかりと美空のご機嫌取りとして上等なワインを注ぐのも忘れない。

支払いは戦国時代・佐渡の金山で採れた砂金……要するに美空持ちである。

「織田、松平、今川、武田、北条、そして長尾のトップが集まっているのよ。」

今川と武田は勢力としては壊滅してるけど、今なお色々と影響力はある。

これからどういふ風に動くかとか、戦乱の世をどうしたいとか、

そういった事を話し合う場があったのよ」

「じゃあ光璃もいたのか？」

「ある意味、最重要人物よ。」

こっちの世界の銃火器を仕入れられる闇ルートを保持してるもの。

この世界の武器は戦国時代の武器とは比べものにならないから。

光璃と友好関係を築く事に成功すれば、そのまま天下統一できるわよ。もつとも

……」

「もつとも……何つすか？」

美空は他に誰も聞いていないか慎重に周囲を見渡し、念のためにと護法五神達に見張りを命じ、柘榴と九十郎の耳元にてひそひそ声で話す。

「……ロシアがウクライナに攻め込んだ影響で、闇ルートの大部分が潰れたって」

「あく……そういや、光璃が使う武器って大体ロシア系だったな。」

どつかから仕入れてんだと思ってたが、あの国だったか」

「え、大丈夫つすかそれ？ オーディンとの戦いが終わったら、

こっちの世界の武器で戦乱の世を終わらせるって言ってたつすよね？」

「使える闇ルートが全部無くなった訳じゃないから、

武器の仕入れはできるみたいだけど、世界的に武器需要が高まつてるから、

今までより数は少ない、値段は高いで大変かもって」

「戦略の練り直しが必要つすねえ……」

「戦国乱世終結の10年計画が20年、30年計画になるだけよ、大した事は無いわ」
そこまで話した所で美空は御家流を解除して護法五神を戻し、ひそひそ声をやめた。

「……今の話、機密事項だから絶対に漏らしては駄目よ」

「オーケイオーケイ、特に劍丞には聞かせられねえわ」

「なので、雫にはこつちの世界に留まってもらう事にしたわ」

「失言するから？」

美空は何も言わずにニコリと笑った。

大江戸学園のどこかで雫が『心外!!』とでも言いたげな顔になった。

「こつちに留まるって、どういう名目で残すつすか？」

「留学生って事で、大江戸学園に編入してもらう事にしたわ。」

生徒会には根回し済み、あの娘まだX5歳だから丁度良いでしょ」

※この作品の登場人物は全員20歳以上です。

学生を編入させるために校長や理事長ではなく生徒会への根回しが必要な所が大江戸学園である。

「……さて、この話はおしまい！」

次は九十郎の番よ、私にどうしても聞かせたいって話は何かしら？」

「あ、ああ……その事なんだけど……な……」

九十郎が言い難そうに頬を掻く。

何度が深呼吸をして、両手を閉じて開いてを繰り返して、意を決して口を開く。

「美空、柘榴……すまん、俺は……俺はこの世界に残りたい」

美空と柘榴が顔を見合わせる。

「この世界って……ど、どういう事っすか!？」

「待ちなさい柘榴、落ち着いて。私と柘榴に話したい事って……これなの?」

九十郎は重苦しい表情でこくりと頷いた。

「え……あ……そん、な……」

柘榴がガタガタと震え始める。

正直、九十郎から別れを告げられるなんて考えていなかった。

これからもずっとずっと一緒に暮らしていけると思っていた。

青天の霹靂とは正に今の状況を指す言葉だろう。

「柘榴が悪かったっす!」

この前の戦いでも今回の戦いでも全然役に立たなくて済まなかったっすうっ!

悪い所があるなら直すっすから! だからあっ!!」

「わわあっ!! ちよっと待った、ちよっと待った!」

ずっとじゃない! ずっとこつちじゃないからなっ!

一年ちよつと、一年ちよつとだけ待っててくれっ!!」

泣きつく柘榴、そして慌てて弁明を始める九十郎。

傍から見ている分には痴話喧嘩のようである。

「い、一年ちよつと……?」

「ああ成程、卒業までつて事ね」

何を言っているのか分からずキョトンとした表情で固まる柘榴。

一方、美空は期間を言われた瞬間、九十郎が何をしたくてこの世界に……大江戸学園に残りたいのかを直感的に理解していた。

「頼む美空、頼む柘榴。」

俺を少しだけ……:具体的には1年ちよつとの間だけ、こつちの世界に居させてくれ。

久々にダチ公に会って、久々に大江戸学園のクソみてえな空気を吸って、

またあいつらと一緒にバカをやりにえって思っちゃったんだ。

あいつらと一緒に授業を受けて、バカ騒ぎをして、テストを受けて、卒業してえ。

あいつらと一緒に卒業式をして、卒業証書を貰って、それから……

それから美空や柘榴と共に生きる、共に戦う。だから……頼む」

そして九十郎は自らの思いの丈を打ち明けた。

……

……

……

「はあ……寂しい……九十郎に会いてーっすよ……」

ある日の春日山城、柘榴は石垣に腰掛けながら青空を見上げていた。

この青空の下に……この世界に斎藤九十郎はいない、大江戸学園も無い、そう考えると胸の中が寂しさと切なさで一杯になった。

現代二ホンと戦国時代を繋ぐポータルは停止した。

ずっと繋ぎっぱなしにするには莫大な電力が費やされるからだ。

ポータルは1ヶ月に1度、約10分間だけ2つの世界を繋いでくれる。

僅か10分の通話と、ついでに送られてくるビデオレターだけが、今の柘榴と九十郎の繋がりの中であった。

その僅かな繋がりには、柘榴の寂しさを癒すどころか、いつそ悪化させているように思えてならない。

九十郎に会いたい、機械越しではない声を聞きたい、その温もりを確かめたいという欲求が日に日に増しているのが分かった。

「柘榴、なあ〜に拗ねてるのよ。元氣出しなさいな、貴女らしくない」

柘榴の主君、長尾景虎・通称美空が隣に座る。

「こしばらく、目に見えて元気を無くしている柘榴の事を気にかけているのだ。

「御大将おゝ、九十郎成分が不足してるっす、元氣出ねえっすよおゝ」

「はいはい、九十郎が卒業証書を貰ってくるまでの辛抱よ。

私も我慢してるのだから、貴女も我慢しなさいな」

「犬子や粉雪が羨ましいっす。 毎日九十郎と一緒にいれて」

「毎日毎日補修と追試に追われてるって話だけど。

九十郎との時間が作れないって嘆いていたわ」

「一二三以外はっすけどね」

犬子は前田利家で、粉雪は山県昌景、雫は黒田官兵衛だ。

ニホン史に名を残す戦国武将である彼女達の地頭は決して悪くないが、それでも現代ニホンのトップエリートを集めた大江戸学園の授業について行くのは至難の業だ。

それ故に犬子も、粉雪も、雫ですら何度も何度も赤点を取り、落第回避のために補修や追試を受ける羽目になっている。

一方、真田昌幸こと一二三はカンニングと裏取引で赤点を回避している。

カンニングや裏取引を行い側も生徒であれば、取り締まる側も生徒で、大江戸学園的には証拠を掴ませないカンニングや裏取引は完全に合法である。

生徒の自主性を尊重するという名目で頭のイカれた事を普通に容認している所が大

江戸学園である。

「あくあ、柘榴も大江戸学園に行けば良かったかもっすよ」

「貴女47歳でしょ、あの学園じゃあ流石に浮くと思うけど」

「年齢は言いっこ無しっすよ！ それを言ったら戦争っすよ！」

※この作品に登場する人物は全員20歳以上です。

「御大将、柘榴は……柘榴は九十郎の正妻で本当に良いっすかね？」

柘榴は暗い暗い顔でそう呟く。

「何を言ってるのよ、九十郎はいつだって貴女が正妻だって言っているでしょ」

「それは……そうかもっすけど……」

美空は当然の事だという顔だが、柘榴は納得していない様子だ。

「あの時……蘭丸との戦いで……柘榴は何の役に立たなかったっすよ……」

「はあ!? 何言ってるの!？」

軍勢ごと一瞬で洗脳するようなインチキ能力が相手だったのよ。

あんなの相手にどうしろって言うの？

考える限りの対策はしたけど、それでも偶然に偶然が重なってようやく勝ったの。

貴女達をあえて洗脳させたのだって、超能力の使い過ぎで疲弊させるため。

貴女はしっかりと役に立っていたわ」

美空はやたら早口でそう語る。

大勢の味方をあえて洗脳させて、好きでもない男とのセックスを強要した負い目が、今なお美空を苦しめている。

「でも……でも、犬子は……犬子は蘭丸の洗脳を跳ね除けたつすよ。

柘榴にはできなかつたつす、柘榴には無理だつたつす。なのに……」

柘榴の額から汗が落ちる。

脳裏に浮かぶのは、今まで見た事の無い表情で犬子が笄を握り、眼球に突き立て、脳漿を掻き混ぜ、絶命させたあの瞬間だ（第170話）。

あの時、犬子は嗤っていた。

人殺しを心底楽しんでるかのような笑みを浮かべていた。

明らかに常軌を逸していて、明らかに正気を喪っていた。

狂気としか表現しえないような恐ろしい表情だった。

だがしかし……だがしかし、犬子はあの時、九十郎以外の男を拒んだのだ。

九十郎以外の男の妻になる事を拒んだのだ。

それなのに柘榴は……

「柘榴は何もできなかつたつす、何もしなかつたつす。

犬子や詩乃が抵抗を続けているというのに、柘榴は見るだけだつたつす。

人殺しはやってはいけない事だって、戦いに……セックスに負けたのだから、黙って従わなければとだけ考えて、犬子達を見送っちまったつすよ」

ぼたり、ぼたり、と汗が落ちる。

柘榴は己の情けなさに怒り、憤り、そして同時に悔やんでいた。

「言いたか無いけど、蘭丸の洗脳は本当に強力だったのよ。」

あいつの洗脳に抗えなかったのは貴女だけじゃない、恥だなんて思う必要は無いのよ。

増してや、それが九十郎の正妻に何の関係も……」

「じゃあ覚えているつすか？ 柘榴が鬼になりかけた時の事を」

柘榴が美空の言葉を遮った。

その言葉は一見平坦なようで、語気に微かな怒りが混じっているのを美空はしっかりと感じ取っていた。

「柘榴が……鬼に……？」

美空は一瞬、何を言っているのか分からなかった。

柘榴が言わんとしている出来事を思い出すのに、たつぷり十秒はかかった。

そして……

「あつ……言われてみればあつたわね、あの時か……」

「御大将にとつちや言われるまで思い出せねー出来事つか……」

「あ、いや待って！ 覚えてたわ！ 超覚えてたわっ!!」

ただちよつと最近色々あり過ぎて……」

美空が慌てて弁明するが、柘榴の表情はやたら重苦しく、やつちまつたと軽く後悔する。

かつて柘榴と粉雪は鬼に襲われ、敗れ、強姦された事があつた、確かにあつた。

それは空と名月に越後長尾家の後継者たる地位を競わせるべく、剣丞に怯え、卑屈になる九十郎を救うべく、大きな模擬戦を行わせた。

越後のあらゆる者達の耳目が模擬戦に集められ、密かに近づきつつあつた鬼の集団に気付くのが遅れ……結果、柘榴や粉雪を含めた大勢の者達が鬼に襲われる結果になつたのだ（第104話）。

そしてこの話はこれで終わりではない。

この時に子宮に流し込まれた瘴気とでも呼ぶべき魔性の気が柘榴と粉雪に悪影響を与え、性欲を異常に増加させると共に、性的な行為を行えば瘴気の力が増し、最悪の場合鬼へと変貌してしまうと聞かされたのだ（第113話）。

そして柘榴と粉雪はそれぞれ約3ヶ月の禁欲生活を開始して……

「ほ、ほら、アレだつて最終的に禁欲して、瘴気を追い出せたんだから良いじゃない！

鬼にやられたのは采配を誤った私の責任！

誰も柘榴が正妻に相応しくないだなんて言えやしないわ！」

美空が冷や汗を流しながら柘榴を持ち上げる。

後先を考えずにフオローをする。

追いつめられると頭を空っぽにして突っ走るのは長尾景虎の長所であるが、同時に短所でもある。

あの日、あの時何があつたか、どんな経緯を辿つて柘榴が瘴気を克服したのか、そういう細々とした所を十分に思い出さないまま、行き当たりばつたりのフオローを試みていた。

今回はそれが思い切り裏目に出てしまう。

「御大将に山寺に押し込まれて、何日も監視されて、ようやく瘴気を追い出せたつすよ。

柘榴一人じゃムラムラした気持ちを抑えられなくて。

瘴気が強くなるって分かっていながら何度も何度もオナつて。それで……」

柘榴が慟哭していた。

口調は静かで、大声で怒鳴るようなものではない。

ただ美空は確かに、柘榴の嘆きと悲しみを、自身に対する怒りを、憤りを感じ取つた。

美空はそんな柘榴の声を聞き、震える肩を見て、大粒の涙を蓄えた目尻を見て、ようやく後の時何が起こしたのかを完全に思い出した（第122話）。

「（私の馬鹿っ！ 大まぬけっ！ どうやったらあんな事を忘れられるのよっ!?!）」

美空は事の重大さを……柘榴は本気で思い悩んでいると悟って、迂闊な自分を叱責する。

「いや……あの……ほ、ほら、私も自分の意思じや禁酒できなかつたし……

えっと、そのう……だから、要するに……

そうそう、酒を買っては買っては捨てさせる賽の河原みたいな事をさせちやつて……」

美空は必死に頭を回転させながらどうにかこうにか慰めと励ましの言葉を捻り出そうとしていたが、自分でも分かる位に説得力は皆無であった。

「粉雪は自分の意思で耐えてたつすよ、柘榴にはそれができなかつたつす。

いけない事だつて、鬼になつちまうつて知つていながら、

ムラムラする度に自慰に耽つて、どんどん状況を悪化させたつす。

拳句の果てに九十郎以外の男に股を開いて！ 跨つて！

あんあん喘ぎながら腰を振つて！」

「やめなさい柘榴！ それ以上続けるなつ！」

ついに美空の方が耐え切れなくなって叫んだ。

静かな朝の空気に怒声が響き渡る。

近くを歩いていたら通行人がぎよつとした表情になり、そそくさと立ち去っていくのが見えた。

「……やめなさい柘榴、貴女は九十郎の正妻よ。」

九十郎がそれを望んでいる、それで十分でしょう?」

美空は大声を出すな、声を荒げさせるなど自分に言い聞かせながら話を続ける。

人払いも何もしていない城内だ、政務をするなり、物資を運ぶなりといった理由で城内で動く人間は何人もいる。

柘榴の醜聞を第三者に聞かせる訳にはいかず、いつそこの話を今すぐ打ち切ってしまう
いたい気持ちすらあった。

「柘榴はあの時の事、まだ九十郎に詫びてねーっすよ。」

瘴気に負けて、意思が弱くて、他の男に抱かれて……

まだごめんの一言だって言えてねーっす!

粉雪は自分で耐えて、瘴気を跳ね除けたのに!」

「だからやめなさい! 粉雪は粉雪、貴女は貴女よ!」

「結局……結局柘榴は愛が足りてねーっすよ。」

犬子よりも、粉雪よりも、九十郎が好きだつて気持ちが悪つてゐるつすよ。
なのに柘榴は九十郎の正妻で……」

「……………」

自嘲する柘榴に、美空は何も言えなくなる。

美空もまた、九十郎を愛する女の一人である。

あの地獄のような蘭丸戦の少し後に九十郎に想いを告げて、自らの処女を捧げた女である（おまけ5）。

自分が正式な九十郎の嫁になれば、柘榴を正妻の座から引きずり下ろす事になりかねないからと、時々身体を重ねるだけの関係に甘んじている女である。

表面上は正妻という立場に興味が無いように装っているが……それでも、愛する男の一番になりたいという欲求はあつた。

九十郎の正妻になりたい……そんな欲望が、欲求が、俯く柘榴を前にして美空の心中でざわめきだした。

「(なれる……今ここで柘榴に身を引かせれば、私は九十郎の正妻になれる。

九十郎の一番の妻になれる)」

美空はそう確信した。

そして同時に、こんな好機は九十郎達が揃つて大江戸学園にいる今以外にはあり得な

い事も分かった……分かってしまった。

「(今を逃せばきつと……きつと私は正妻にはなれない。

九十郎の妻を名乗る事すら一生できない……柘榴がいる限り……

今ここで柘榴を排除しない限り……)」

どくん、と心臓が高鳴った。

今ここで、柘榴に身を引くようにと告げれば……いた、そんなハッキリと告げる必要
すらない、しばらくの間九十郎と距離を取って頭を冷やすように告げるだけで、柘榴を
正妻の座から引きずり下ろす事は十分可能だと思つた。

それ程までに今の柘榴は弱弱しく見えた。

だがしかし、いやだからこそ、美空は……

「……柘榴、安心なさい。貴女は九十郎の正妻よ。

九十郎がそれを望んでいる限り、私は全力で貴女を守る、私は全力で貴女の味方をす
る」

……美空は自分でも驚く程にあっさりと、九十郎の正妻になれる可能性を捨て去つ
た。

「お、御大将お……」

柘榴は目尻に大きな涙を蓄えていた。

その表情には覇気が無く、若干ながら鼻水すら出ていた。

そんな柘榴の弱々しい表情をいつそ愛おしいとすら感じてしまい、美空は思わずくすりと笑った。

「御大将お！ 笑うなんてひでーつすよお！ 柘榴は本気で悩んでるつす！」

「九十郎が卒業証書を持って帰ってきたら、全力で謝つちやいなさい。」

意思が弱くてごめんなさいってね。

九十郎が『許す』と言ったら柘榴は引き続き九十郎の正妻。

もし『許さない』って言った時は『私のパンチを受けてみる』って3発ブン殴るわ

「いやいやいや、殴つちや拙いつすよ！」

「良いのよ！ こんなに真剣に悩んでる柘榴を許さない九十郎が悪い！」

その後は2人で離婚失恋残念飲みよ、浴びる様に飲んで酔い潰れちやいましょう」

「なんつーモン記念するつすかあっ?!」

「柘榴を許さないクソ男なんてこつちから願ひ下げよ。」

2人で離縁状と絶縁状を叩きつけちやいましょう」

「へ？ 御大将も絶縁するつすか？」

「ええ、そのつもり。 だつてあり得ないもの。」

九十郎は絶対に貴女を手放しはしないし、他の女を正妻にする事も無い。

私は確信しているの。

この予想を外したら絶縁状の1通や2通、喜んで書いてやるわ。

ああ、私には男を見る目が無かったらうってね」

「お、御大将まで付き合う必要なんてねえっすよ!」

「何よ、私の失恋残念会をしようって時に、一緒に飲んでほくれないの？」

そ、そんな薄情な部下だったなんて思わなかったわ」

美空はわざとらしく『よよよ』と泣き真似をし始める。

それがただの泣き真似だという事は柘榴にも分かっていたが、敬愛する主君に道化のような事をさせてしまった事に柘榴は困惑する。

「……御大将は正妻になれねーっすよ、本当にそれで良いっすか？」

「構わないわよ、そんなの」

美空は少しも考える事無く即答した。

「柘榴が……ただの柘榴が、上杉謙信や前田利家を押しのけても良いっすか？」

「歴史書のネームバリューって奴？ そんなの気にしてるのは九十郎だけよ。」

その九十郎が柘榴が良いって言っているのだから、観念して正妻をやりなさいな」

美空はケラケラと笑いながらそう答えた。

「九十郎、あの顔の割に妙にモテるっすから……」

もしかしたらこれから嫁が増えて、柘榴よりも有名だったり、名族だったりしたら……」

柘榴があり得るかもしれない未来に不安を感じ、陰鬱な表情になる。

「柘榴、この長尾景虎が……」

いいえ、二ホン史の教科書に名前が残る大英雄・上杉謙信様が

貴女の味方になると言っているのよ、それじゃ不足なのかしら？」

「んな事ねーっすよ！」

柘榴は慌てて首を横に振った。

「私はこれから、未来の武器を使って日ノ本から戦争を根絶するわ！」

戦国の世を終わらせて、戦に怯えながら生きている全ての民に平穏な日々をもたらす

！」

美空はすつくと立って高らかに叫んだ。

「乱世を終わらせれば、私は名実ともに日ノ本を救った大英雄よ！」

地位も権力もいくらかでも転がり込んでくるわ。

もしも柘榴が正妻に相応しくないなんていう奴がいたら、

その地位と権力を総動員して叩き潰すわ！」

「お、御大将……」

柘榴は思った。

美空ならば……どんな無理無茶無謀も押し通し、柘榴達に夢と希望と誇りを与え続けた長尾景虎であれば、それもできるかもしれないと。

柘榴の目に微かな希望の光が宿るのを見て、美空はさらに演説を続ける。

「仮に、仮によ、これから九十郎が新しい女を作ったと仮定して」

ネタバレ・作ります。

「私や柘榴に何の相談も無く妻を増やすなんてありえないでしょ！」

ネタバレ・何の相談も無く妻が増えます。

「万が一、私達の知らない間に新しい妻ができたとして、

柘榴を正妻として立てない性格の悪い女を、九十郎が選ぶ訳が無いわ！」

ネタバレ・普通に正妻の座を狙ってきます。

「さらに億が一、新しい女が自分こそ正妻に相応しいって言い出したとしても、

その時は私の地位と権力のパワーで叩き潰してやるわっ！」

上杉謙信の権力でもどうにもできない奴なんて、そうはいないわよ」

ネタバレ・イギリス海軍中将とインカ帝国皇帝と蜀漢の丞相が来ます。

「さらにさらに兆が一、私も、犬子も、粉雪だって貴女を正妻って認めている。

私は上杉謙信で、犬子は上杉謙信、粉雪は山県昌景よ。

ニホン史に名を残すような英雄が束でかかっても太刀打ちできないような奴が、九十郎に惚れる可能性なんて皆無よ。

それこそ世界史の教科書に載るようなビックネームでも来ない限りね」

ネタバレ・世界史の教科書に名前が載るビックネーム『フランシス・ドレイク』と『ワイナ・カパック』と『諸葛亮孔明』が来ます。

「おお、そう考えるうちよつとは気が晴れてきたつすよ！」

柘榴もまた立ち上がる。

今なお九十郎の正妻に相応しいのかという疑念はある。

陰鬱な気分も完全に晴れた訳では無い。

しかしそれでも、敬愛する主君にここまで言われて、ここまで力強く励まされて、いつまでも膝をついたままではいられなかった。

これから起きる過酷な運命を柘榴は知らない。

これから起きる強烈な試練を美空は知らない。

だがしかし、だがそれでも、2人はこうして立ち上がり、青空の下で希望ある未来を
目指そうと誓ったのだ。

そして……

「……銃声？」

「したつすね、今日は射撃訓練の日じゃねーっすけど」
……この日、共産主義革命軍を名乗る集団の襲撃を受け、春日山城はまたもや炎上する
のであった。

犬子と柘榴と一二三と九十郎おまけ10 『省略された幕間シリーズ・一二三の場合（後編）』

一二三のボーナス改竄（未遂）事件とコンドームに穴あけ事件（既遂）から暫しの時が流れる。

美空や柘榴達がいる世界で共産主義革命軍が蜂起し、孔明と九十郎が異世界を繋ぐポータルに半ば無理矢理飛び込んだ（最終回）。

そして柳宮十兵衛が大江戸学園の美女剣士達を集め、対天草四郎のための協力を募り……九十郎以外の男、もといふたなり魔人に抱かれるのを嫌がった犬子が逃げた日（おまけ6）、犬子と雫と一二三が密かに結託し、柳宮十兵衛達が負けた時に備えての籠城戦の準備を始めた日（おまけ8）から約3ヶ月後のことである。

「勉強が身に入らなあいつ!!」

「何でこんな時まで試験勉強しなきゃいけないんだぜっ!!」

犬子と粉雪の割と切実な叫び声が女子寮に響き渡る。

「泣いても笑っても来週の試験は無くなりませんよ。」

また赤点を取らないように対策あるのみです」

雫がため息をつきながら授業中に取ったノートと問題集を机に並べる。

おぼけには試験も何にも無いが、大江戸学園には試験がある。

大小さまざまな理不尽がまかり通る奇妙な学園ではあるものの、なんやかんやで『超』のつくエリート校であり、毎年毎年入学志願者が絶えず、無事に卒業すれば社会的な成功が約束される学園である。

クソみたいな要素がこれでもかかってくらいにあるくせに入学志願者は多い所も大江戸学園の恐ろしい所である。

さておき、そんな超エリート校なだけあつて授業の進行は速く、内容は難解で、試験も厳しく採点される。

犬子は前田利家で、粉雪は山県昌景だ。地頭は決して悪くない。

しかしそれでも、戦国時代に生まれ育ち、基礎的な科学や数学、教養に大きなハンデがある点は否めず、赤点、補習、そして追試の連続になつてしまつていた。

一緒に入学した黒田官兵衛こと雫ですら赤点ギリギリの科目がいくつもある。

だから犬子と粉雪、雫の3人は放課後に女子寮や図書館等に集まり、互いに勉強を教え合つて留年回避に努めているのだ。

「やつほ、差し入れ持つてきたよ。いやあ、今日も精が出るねえ」

そんな3人の元に、呑気な顔した一二三がチョコ最中の袋を持ってくる。

毎回毎回必死こいて赤点回避をしている3人と違い、一二三は特に努力する様子も無く常に平均点に近い成績を取っている。

「糖分！ 糖分をくれなんだぜ！ もう頭を使いすぎて脳が糖分を欲しているんだぜ！」

「はいはい、全員分買って来たから慌てない慌てない」

「いつもすみません、ご馳走になります」

「気にしない、気にしない」

「……結構頻繁に差し入れてくれるけど、お金足りてるの？」

一二三ってアルバイトとかそんなにしてないよね？」

犬子が差し入れのチョコ最中を口にしながらちよつとした疑問を投げかける。

大江戸学園では、学園内でのみ通用する通貨『エン』によって大体の物は購入できる……というか、食料や生活必需品を含めてありとあらゆるものを『エン』で購入しなければならぬため、生徒達は普段の授業とは別に何かしらの労働をして『エン』を稼がなければならない。

勉強時間を多く確保するため、アルバイトは最小限にする必要がある犬子達は、物凄い節制生活を続ける事でギリギリ生活を成り立たせている。

そしてドケチで有名な前田利家こと犬子や、儉約家で知られる黒田官兵衛こと雫はこの節制生活に難なく対応しているものの、割と良い家の生まれで儉約慣れもしていない山県昌景こと粉雪は結構苦戦していた。

……が、一二三に関しては儉約生活もアルバイト三昧もしていない様子だったので、犬子は疑問に思ったのだ。

「……それはまあ、M資金だね」

一二三は犬子の疑念を誤魔化した。

実際の所、試験の殆ど全部を教師との裏取引やカンニングで乗り越えている一二三だ、金稼ぎでも当然のように不正かつ不法な手段を連発している。

もつとも、大江戸学園では不法を働くのも取り締まるのも生徒である。

北町、南町奉行所や火付盗賊改方の生徒が見つけれなかった不法行為は、大江戸学園では全くの合法……要するに大江戸学園ではバレなきや犯罪じゃないのである。

こんな恐ろしい不文律が普通にまかり通っているのが大江戸学園の笑える所である。

「はいこの話やめましょう！ 勉強、勉強！ 学生の本分は勉強ですよ！」

そしてもう一つ、雫は一二三が危うい橋を渡りまくっていると薄々感づいていた。

だからこういう方向に話が行きそうになると、巻き込まれてたまるかとばかりに話を逸らそうとするのである。

「雫がそう言うなら良いけどさあ……」

「良いじゃないですかM資金での何でも。」

誰だって他人には秘密にしたい儲け話の一つや二つありますよ。

私も最近、目薬を作って売ったりしてますから」

「あれ？ 雫って目薬なんて作れたの？」

「私の家、元は薬屋なんですよ。」

戦国時代の目薬なんて大した効き目なんてないんですけど、

黒田官兵衛のネームバリューもあってそれなりに売れています。

珍珠膏を塗れば眼が冴える、眼が冴えれば頭も冴えるって」

「え、本当？ だったら犬子にも使わせてよ」

「あ、誇大広告ですから信じないでくださいいね」

なお、大江戸学園には景品表示法も消費者契約法も存在しない。

「そういう金に繋がる逸話がある奴が羨ましいんだぜ。」

山県昌景にはそういうの無いから、コンビニでレジ打ってるんだぜ」

「アレは大変だよねえ……拘束時間長いし、覚える事多いし、シフトが不規則だし」

「ある所から借りちゃえば？ どうせ卒業までの短い付き合いなんだし、

やろうと思えば踏み倒せるでしょ」

「悪事の片棒を担がされるから嫌」

「色街に叩きこまれるのは簡便なんだぜ」

犬子と粉雪がそれぞれ一二三の提案を却下する。

大江戸学園の借金取達も踏み倒しのリスクはしっかりと認識しており、債務者が借金を普通に返すのを何もせず待っているのは少数派だ。

彼らあるいは彼女らに弱みを握られ、肉体的にキツイ仕事をやらさせるのはまだマシンな方、犯罪の手伝いをさせられる、エロ動画に出演させられる、果てはいわゆるセックス産業の店で強制労働までありうるのが大江戸学園の日常である。

学園という言葉に真つ向から喧嘩を売つてするような状況が頻発する所が、大江戸学園の恐ろしい所である。

何にせよ、九十郎の妻である犬子、九十郎という婚約者がいる粉雪にとって、大江戸学園の借金取り達は近づきたくない存在なのだ。

「さあさあ、皆さんそろそろ勉強に戻りましょう。」

今日の授業の範囲の復習も、次の試験の対策もまだ途上なのですから」

「はい」

「乖う、愚かなあたいを助けてくれなんだぜ。」

「この微分法つてのが全然分かんねえんだぜ。」

「ええっと、微分法、微分法……」

私も完全に理解しているとは言いがたいのですが……要するにですね……」

そうして犬子達3人はそれぞれ分からない所を教え合いながら試験対策に勤しんでいた。

「さあ、それじゃこつちも進められる範囲で進めますか」

一方、ハナツからまともな手段で試験を突破する気が一切無い一二三は教科書や問題集に触れようともしない。

この世界で手に入れたノートパソコンを開くと、なにやらカタカタとタイピングを始めた。

「ふんふん、ふんふん、猫のふん」

苦しそうに教科書と睨めつことを続ける犬子達を尻目に、一二三は鼻歌交じりで楽しそうに何かをしていた。

そしてしばらくの間は苦しむ犬子達、楽しそうな一二三という場面が続いた。

犬子達は邪魔するなら帰れと言いたい表情だったが、ついさつきお菓子の差し入れを受け取った手前、口には出せずに勉強を続ける。

「一二三、さつきから何やってるの？」

……ふと、犬子がそんな疑問を投げかける。

「ああ、これ？ 何だと思う？」

「……もしかして、天草四郎対策の続きだったりする？」

犬子は少し考え込み、そう答える。

天草四郎対策というのは、犬子が提案し、雫と一二三が参加している裏工作で、柳宮十兵衛達が天草四郎に負けた場合に備え、避難や態勢の立て直しを図るための拠点を（大江戸学園生徒会には内緒で）準備するというものだ（おまけ7、おまけ8）。

一二三が僅かな時間を惜しんで人助けに注力するような性格じゃないような気もしたが、他には特に何も思い浮かばなかったので、半ば当てずっぽうの気持ちで犬子は答えた。

「いいや、残念ながらそれじゃない。まあ、あつちは7と8割終わってるからね。

天草四郎がいつ襲ってくるか知らないけれど、

明日か明後日かという事でも無ければ十分間に合うよ」

「天草四郎対策って何なんだぜ？」

犬子、アレとの戦いは参加したくないって言ってただろ（おまけ6）」

「何って、粉雪が負けた時の備えだけだ」

「え？ あたいら負けるって思われてたのか」

「そうは言わないけど、万一は考えとこうよって事。

魔人ってお○んちんみたいなのがくつついてて、

しかも超能力を使ったら性欲が増すんでしょ。

負けたら絶対に悲惨な事になるだろうから、今の内に逃げ込める場所を作ってるの」

「わ、犬子……あたいらのために……」

ちよつと薄情だなど思っていた友人の思わぬ援護に、粉雪は感動の涙を流す。

「まあ、犬子達が巻き込まれないようにするのが主目的だけど」

「そのためにオーデインとの戦いで使われなかった、

バリアーマシンや銃火器を無断持ち出しをしてるけれどね」

「いくら学園の平穩のためとはいえ、ちよつと心配になる位に法を犯していますよね」

「よし、あたいは何も聞かなかった。バレても共犯にはしないでくれなんだぜ」

粉雪の涙は一瞬で引っ込んだ。

そして犬子達3人は試験対策に戻り、一二三は鼻歌交じりでタイピングを再開した。

犬子達は邪魔するなら帰れと言いたい表情だったが、ついさつきお菓子の差し入れを受け取った手前、口には出せずに勉学を続ける。

「……そもそも、もうすぐ天草四郎がこの学園で暴れ出すって分かっているのに、

どうして授業も試験も免除されねえんだぜ」

粉雪が愚痴交じりにそんな疑問を呈する。

「共産主義革命軍とかが出てきて戦国時代では美空様が危ないのに、

九十郎はあつちで苦しんでるかもしれないのにポータルは故障中。

こんな状態で勉強しろって言われても身に入らないよね、正直さ」

犬子も不機嫌そうに教科書を睨みながらそう呟く。

「気にしていても仕方がありません。九十郎さんは次元の壁を隔てた異世界ですから、

ポータルが動かなければ何もできません。

代わりのポータルをあちら側に送れるようになるまで時間がかかるとの事ですし、

異世界と繋げやすい時期、繋げにくい時期というものもあると聞きます。

いざという時にしっかりと動けるように、今は授業について行く事に集中しましょう」

「雫の言う事は正しいよ、正しいけどさあ……」

「感情が納得できねえぜ……」

犬子と粉雪がはあつとため息をついた。

そして犬子達3人は試験対策に戻り、一二三は鼻歌交じりでタイピングを再開した。

犬子達は邪魔するなら帰れと言いたい表情だったが、ついさつきお菓子の差し入れを受け取った手前、口には出せずに勉学を続ける。

「……で、一二三は結局何をやってるの？」

「あ、やっぱ気になる？」

「悪巧みの準備だったりする？ それなら聞かないけど」

「悪巧みじゃないさ、むしろ九十郎のためになる事だとも」

「おおつ、珍しく一二三が人様の役に立つ事をするのぜ？」

「珍しいとは心外だなあ。」

「私はいつだって世のため人のため、寝る間も惜しんで、身を粉にして……」

「嘘だ」

「嘘だぜ」

「騙されませんよ」

犬子達3人が口を揃えて一二三の白々しい台詞を否定した。

「まあ、ちよくくつとばかし利己的な部分もあるかもしれないけれど、

九十郎が好きだつて気持ちはあるとも、それなりにね」

「はいはい、それで結局何をやってたの？」

「では見たまえ、世の中をアツと言わせる真田昌幸必勝の策を」

そう言うとい二三はノートパソコンをクルツと反転させ、画面を犬子達の方へ向け

た。

「え……？　何これ？　小説？　台本？」

「犬子と九十郎の会話……みたいだぜ？」

「あ、本当だ。言われてみればこういう場面あったなあ。」

前に話したんだよね、一二三と会う前にこんな事があったんだよって」

「え、それはちよつと興味ありますね」

「後で雫にも教えてあげるよ。」

それより、犬子の思い出話を文章にしてるみたいだけど、

これが九十郎に何の関係があるの？」

「これが九十郎のためになるのか？」

「九十郎は以前から何度も言ってるだろう。自分みたいな名も無い一般人が、

前田利家とか上杉謙信みたいなビッグネームと愛し合っても良いのだろうかって」

「うん、今でも時々言うね」

「私達は気にしなくても良いと思うのですけどね」

「雫はお嫁さんでも恋人でも無いでしょ」

「今はそうですけど！　好きって伝えても全然相手にしてくれてませんけど！

いつかきつと……きつと……」

「あ……し、雫、個人的には応援してるぜ」

「ありがとうございます粉雪さん。 ええ、諦めませんとも。 私は黒田官兵衛です。

黒田官兵衛はどんな窮地もしぶとく生き延びて、最後の最後まで決して諦めせんから」

「犬子は、これ以上お嫁さんが増えるの嬉しくないんだけどね……

犬子を愛してもらえる時間が減ってしまうから。 あっ、何か急に心配になってきた。

九十郎あつちの世界でお嫁さん増やしてないかなあ……」

ネタバレ・増やします。

「でも……こうやって昔の話を思い返せるようにするのは、ちよつと良いかもね」

「そうだろう、そうだろう、これ完成したら世間に公開するからそのつもりでね」

「……え？」

「……なんだぜ？」

「……これ、を？」

瞬間、犬子達3人が硬直する。

そして争うようにマウスを握り、急いで一二三が書いた文章に目を通す。

「ちよ、ちよつと待って！ 公開するの!?! これを!?!」

「あたいが鬼に犯された話とか（第104話）、

犬子が剣丞に抱かれた話とか（第74話）思いつ切り書いてあるんだぜっ!!
しかもやたらと煽情的にっ!!」

「あわわっ!？」

私が九十郎さんに裸で迫った時の事も書いてあるうっ?!」（第114話、115話）
「私は思うんだよ。九十郎があっちの世界に転生した事で、あの時代に、

あの世界の日ノ本に与えた影響は決して小さくないと。

だからルイス・フロイスの『日本記』のように、太田牛一の『信長公記』のように、
九十郎が何を想い、どんな行動をしたかを記録して後世に残せば、

何十年、いや何百年もすれば前田利家や上杉謙信にも匹敵する有名人になる!」

「そうかもしれないですけどっ! そうかもしれないですけどっ!」

せめて私の失言癖はもっと割り引いて書いてくださいよおっ!!

ああ! 蘭丸戦の時の失言（172話）も書いてあるっ!？」

「雫はまだ良いよ! 犬子達は洗脳されて、誰とも分らない男に抱かれるわ、

イカされるわ、全裸で土下座までさせられたんだよ!」（第168話）

「いや待て……この文書、よく見たらやたらと九十郎に辛辣なんだぜ。

『だから貴様は九十郎なのだ』って言葉、もう何回出てきたか分からねえぜ」

「ああ、それね、そこは『でもそこが好き、私の愛しい旦那様』って書きたかった所。

そんな事を書いたら流石に公平さとか信憑性とか疑われると思って、

一括変換で『だから貴様は九十郎なのだ』に変えといたんだよ」

「気にするとこそこのなの!?!」

「もつと別に気にすべきところあるんだぜっ!!」

「ああ! 蘭丸との戦いからオーティンとの戦いまでが省略されてますっ!?!」

「ええっ!? アレ削っちゃうの!?!」

「だってだって、呂布とかロキとかに振り回されて、良いトコ全然無かったんだモン」

「『モン』じゃないよ! 可愛く言っても可愛く無いよ!」

「おいおい、真田兄弟の事件(第120話)も数行で終わってるんだぜ……」

「え、あの甲斐の国を震撼させた事件がたった数行で……う?」

「あの事件、もつとドロドロして、グチャグチャして、

おまけにグダグダだったんだぜ……」

要するに名探偵のいない金〇一少年の事件簿風の連続密室猟奇殺人事件(謎の怪人に襲われた風の演出つき)である。

「どうやってあの大事件を数行で……ええつと……」

意訳『ブチ殺しました』と……え、何ですかこれ?」

「あの事件の犯人はお前だったのかだぜ!?!」

「もう時効でしょ」

2010年の刑事訴訟法の改正により、殺人の公訴時効は廃止されている。

「母親と姉2人をあんな猟奇的に殺したのかよお前……」

ちよ、ちよつと怖くなってきたんだぜ」

「おかげで今は武藤ではなく真田です。」

お屋形様に死んでいただくには、真田家で抱えてる忍者がどうしても必要だったから
さ。

つい殺っちゃったんだぜ、ごめんねだぜ、今は反省してるのだけ」

「他人の口癖をパクんなあつ!!」

「一二三が犯人だったならさ、犯行の種明かしとかは書かないの?」

「もう一回使うかもしれないから書かない」

「おいやめろ! 本気でやめるんだぜっ!」

もうあんな悲惨で凄惨な事件は二度と勘弁なんだぜっ!!」

かつて一二三が施したホラー演出は、死体慣れしている粉雪ですら震え上がる程の出来
来だったようだ。

「まあこの際、一二三が自分の醜聞に繋がる所を書いてないのには目を瞑るよ」

「歴史書というより創作小説のようになっていいるのにも目を瞑りましょう」

「こんなのが世に出たら九十郎の評価がどうなるか、全然想像つかないのも良しとするぜ」

犬子達はもうどうにでもなくれという気持ちでパソコン上に展開されたファイルを閉じていく。

そして九十郎の伝記がまとめられたフォルダに……伝記のタイトルに気がついた。

「犬子と九十郎……？」

「ああ、それ？ 何年か前に放送されてた大河ドラマに引っ掛けてみた。 どうかかな？」

「どうかなって……まあ、悪くは無いけど……」

ちよつと不機嫌そうだった犬子の表情がいくらか和らぐ。

一二三は内心『チョロいな』と思っっているが、表情には出さない。

「いや、でも九十郎の正妻は柘榴でしょ。 柘榴の名前で出した方が良いんじゃない？」

「じゃあ『犬子と柘榴と九十郎』にしよう」

一二三がカタカタとキーボードを叩き、フォルダ名を変更した。

「一二三の名前は入れなくても良いの？ 一二三も九十郎のお嫁さんじゃない」

「おや、そうかい？ では『犬子と柘榴と一二三と九十郎』にしようか」

一二三がカタカタとキーボードを叩き、フォルダ名を変更した。

「ちよつと待ったあ！ だったらあたいの名前を入れるべきだぜっ！

今はまだ九十郎の嫁じゃないけど、卒業と同時に結婚する約束をした婚約者なんだぜ
！」

「それでは『犬子と柘榴と一二三と粉雪と九十郎』と……」

一二三がカタカタとキーボードを叩き、フォルダ名を変更した。

「だったら美空様も入れない？ 九十郎の事が好きだって何度か言ってたし、

たぶん九十郎も……うん、九十郎も美空様の事が好きだと思ってるよ、きつと」

「ならば『犬子と柘榴と一二三と粉雪と美空と九十郎』だね」

一二三がカタカタとキーボードを叩き、フォルダ名を変更した。

「あ、あのう……できれば私の名前も……」

「雫は恋人でも何でもありませんよ」

「雫は恋人でも何でもありませんよ」

犬子と一二三に即座に否定され、雫はがっくりと崩れ落ちた。

「ええ、そうですね……ええ、そうですね……」

いつか絶対に想いを遂げて見せますから、ううう……」

「し、雫、その……何だ……あたいは応援してるからな、雫の事」

そして新しくつけられた題名『犬子と柘榴と一二三と粉雪と美空と九十郎』の文字を
まじまじと見つめて、犬子と一二三は顔を見合わせる。

「……ねえ、一二三」

「……そうだね、犬子」

犬子と一二三……九十郎を想い、九十郎に想われる2人の嫁が、この時確かに通じ合った。

「長すぎるから減らそう」

「長すぎるから削ろうか」

こうして九十郎の伝記の題名は『犬子と柘榴と一二三と九十郎』になった。

孔明と九十郎が戦国時代での大冒険を終え、修繕されたポータルにより帰還するのは、それからもう少し後のことである。

また、天草四郎が6人の魔人と共に大江戸学園に舞い戻り、学園全体を巻き込んだ大騒動を引き起こすのであるが……それもまた別のお話である。

孔明と九十郎おまけ 1 1 『忙しい人のための超ダイジェスト孔明と九十郎』

大江戸学園のポータルを使い、閉じかけた次元間ゲートを無理矢理押し通って戦国時代に舞い戻った九十郎。

近くで茶を飲んでいただけだったのに巻き込まれた諸葛孔明！

無茶な事をやったせいでぶっ壊れるポータル！

そして戦国時代では現代ニホンの武器を奪って決起した共産主義革命軍に城を囲まれ、美空と柘榴の命は風前の灯であった。

「うおおおおおーっ!! ボンタンボンタンボンタンボンタン

ボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンッ!!」

NSV重機関銃対ボンタン投擲。

いくら上杉謙信でもこれだけ装備に差があつては対抗困難、彼女達の死は刻一刻と迫っていた。

「ああ、駄目……駄目え……声が出ない、どうしても声が出ない……

嫌だ！ 嫌だあつ！ 誰か止めて！ 誰かこの人達を止めてえつ！

誰でも良いから！　お願い、お願い……このままじゃ、美空姉さまが……
お義母さんが死んじやうよお……」

共産主義革命軍のトップに担ぎ上げられた空。

彼女は蘭丸戦のストレスで失語症になり、どこまでもどこまでも暴走する共産主義シンパ達を止められなかった。

燃え上がる春日山城。

次々と届く越軍の将達の……空にとつての大切な家族が討ち死にしたとの報告。

「嫌あつ!!　こんなのやだあつ!!　死んじやう!　皆が死んじやうよおつ!!」

誰かつ!　誰か来てつ!　誰か助けてえつ!!」

そんな時……共産主義革命軍の元に一通の手紙が届いた。

『ゴールドマンとシンバーマンは仲がいいから実現しないと思うけど、
戦つたらどつちが強いのか? (意訳)』

共産主義革命軍に届いた一通の手紙は諸葛孔明の仕組んだ罠であった。

共産主義革命軍は空をトップに担ぎ上げておきながら誰一人として空の言葉を聞くともしなかつた連中だ。

共産主義の理念に感銘を受け、民草の幸福を願って参加した者がいた。

空と名月の後継者争いの結果に不満を抱き、美空や名月を恨んでいる者がいた。単純に暴れたいだけの者もいた。

そんなその場の都合で結びついた烏合の集の中で、心から共産主義を信じていた者達が周囲に噛みつく！

そして始まる内ゲバ！ 内ゲバ！ 内ゲバ！

共産主義革命軍の中で内部粛正の嵐が巻き起こり、敵に討たれる前に味方に撃たれて死亡する者が続出、全力で身内と戦いながら、形式だけ越軍と戦う集団と化した。

敵が目の前にいる状態で仲間割れ……その好機を見逃す程、長尾美空景虎は……上杉謙信は甘くない。

「越後長尾家の存亡はこの一戦にあり！ 皆の者！ 毘沙門天の旗に続けえっ!!」

僅かに残った兵力を総動員し、決死の覚悟で挑んだ奇襲戦法が見事に決まる。

共産主義革命軍から空を奪還する事に成功した。

しかし、この勝利はこれから始まる孔明と九十郎の大冒険の序章に過ぎなかつた。だいたい九十郎のせいで日ノ本に訪れる混乱！ 混沌！ 大波乱！

果たして孔明は、九十郎は、この大ピンチを乗り切る事は出来るのか!?
ネタバレ・できます。

次回！ 孔明と九十郎『共產主義十一向宗Ⅱ地獄』にご期待ください！

頑張れ孔明！ 負けるな九十郎！ 日ノ本の運命は君達にかかっているぞ。

……

……

……

一方その頃、天草四郎は新たな武芸者を魔人にしていた。

「能島村上水軍の大將！ 村上武吉！ どうだどうだ！」

いきなりビックネームを仲間にできたぞ、流石はボク！ これは幸先が良いぞ〜

「いや……村上水軍って、武芸者というより、船乗りなのですが……」

「綾那君、綾那君、キミは視野が狭いねえ」

「むむつ、もしや何か考えがあるのでですか!？」

「その通り！ 正直アテにしてた宮本武蔵は若すぎて役に立ちそうもないし、

ニホン国内にこだわる必要も無い！ これから世界進出だ！

グローバル化の時代！ ワールドワイド展開の時代だよ！」

「おお！ 船を使って異国へ旅立つのですか!？」

「そうその通り！ 行くぞ世界、待つてろよ柳宮十兵衛えっ!!」

選りすぐりの武芸者を魔人にして！ お前をやっつけて！

ぐちよぐちよになるまで犯してやるからなあ〜っ!!」

天草四郎と魔人達は元気に仲間集めに邁進していた。

……

……

……

かくして美空や柘榴達の窮地を救った孔明と九十郎。

これにて一見落着、後はポータルを修理して帰るだけ……とはならなかった。

「この前蹴散らした共産主義革命軍が、

一向宗と結びついて日ノ本全土に飛び火しているわ」

壊滅一步手前の越軍では、空を奪還するのまでが限界であった。

トップを喪った共産主義革命軍は日ノ本中に離散し、この世を共産主義の楽園に作り

変えようと画策していた。

運悪く西では大阪城建設のため、石山本願寺の立ち退き交渉が行われていた。

いくら鬼との戦いに必要だと言っても、本願寺教団の本山から立ち退けと言われては

不満を抱き反発する者も多く、そこに共産主義思想と現代ニホンの最新武器という劇薬

が投下された事で一気に爆発。

一向一揆の火と共産主義革命の火が悪魔合体、炎となった共産主義一向一揆は日ノ本の全てを巻き込んだ大混乱へと発展していた。

この窮地に九十郎はどうするのか!?

このピンチに孔明はどう立ち向かうのか!?

「武力鎮圧しか無いでしょう。早急に、かつ迅速に押さえつけましょう」

「あの……孔明? 他人の話聞いてたか?」

ニホン中の大名が同盟を組んでもできるかどうか怪しいぞ」

「日本国内の兵力だけで考えるからですよ。」

足りないならよそから借りて来れば良いんです」

「よ、よそから……よそからって、具体的にどこから?」

そしてその時、美空達の元に外国の船団が漂着したとの報告が入る。

旗艦の名はゴールデン・ハインド!

船団の指揮を執る者の名はフランシス・ドレイク!

いかなる歴史の偶然か、九十郎が歴史に与えた影響がバタフライエフェクトを巻き起こしたのか、ドレイク艦隊の世界一周の時期、航路が盛大にズレ、九十郎達の目の前までやって来たのだ。

「日英同盟を組みます」

「……は？」

「イングランドに行き、女王エリザベス1世と会見して同盟を結びます」

「はああつ!? いやいやいやいや！」

馬鹿じゃねえの!? 頭イカれてんじゃねえの!?

ここは赤壁じゃねえし、日英同盟にや気が早すぎるぞっ!?

かくして孔明と九十郎はゴールデン・ハインド号に乗り込み、イングランドを目指すこととなった。

孔明と九十郎は気が早すぎる日英同盟（本来の歴史では1902年）を結ぶことができるのか!?

ネタバレ・結べます。

遠くイングランドから共産主義一向一揆を制圧する兵を借りる事はできるのか!?
ネタバレ・借りれます。

次回！ ドレイクと孔明と九十郎『いぎ出航！ 世界一周の旅路！』にご期待ください。

戦えドレイク！ 頑張れ孔明！ 負けるな九十郎！ 日ノ本の運命は君達にかかっているぞ。

「……って、なんで俺も連れてかれてんだよ!? 一人で行けよおっ！」

「貴方が英検一級で、私は英語を読めないし話せないからです」

「お前なら言葉通じなくても何とかなるって！ 一人で頑張れよ孔明えっ!!」

「私をこの時代まで連れて来た責任、取ってもらいますからね（邪悪な笑顔）」

「ちくしよおおおっ!!」

……

……

……

一方その頃、天草四郎は新たな武芸者を魔人にしていた。

「世界一周で有名なフェルディナンド・マゼラン！」

凄いでボク！ 村上武吉以上のビックネームを魔人にできるなんて！

世界史の教科書じゃ世界一周中に現地民と戦って死んだって書いてあるのに、

しぶとく生きてたなんて本当に驚きだったよ！」

「う〜ん……船乗りと船乗りで、船乗りがダブってしまってるのです。

有名なのはともかく、これで本当に柳宮十兵衛に勝てるのですか？」

「良いんだよっ!! 正直に言っつて世界の海を舐めてた、

村上水軍だけの力じゃこれ以上航海を続けるのは難しい。

だけど世界の海を知っているマゼラン提督がいれば、

さらに旅を続けて凄いい武芸者を仲間にするに違いない！」

「次はちゃんと武芸者を仲間にするのですよ……」

「行くぞ世界、待つてろよ柳宮十兵衛えっ！」

選りすぐりの武芸者を魔人にして！ お前をやっつけて！

ぐちよぐちよになるまで犯してやるからなあく〜っ!!」

天草四郎と魔人達は元気に仲間集めに邁進していた。

……

……

……

かくして、ドレイクと孔明と九十郎の長い長い旅路が始まった。

途中海賊に襲撃されたり、イスラム圏の国家に難癖をつけられたり、孔明が媚薬を盛られて強姦一步手前の大ピンチになったりしたが、なんやかんやなんやかんやでイング

ランドに到着し、女王エリザベス一世との会見に成功した孔明と九十郎。

しかし、呆れる程に広い太平洋を横断するか、イスラム教国の勢力圏を通過しなければ辿り着けない日ノ本まで兵を出せと言われては、エリザベス女王もそう簡単には領けない。

そこに炸裂する孔明の大論陣！ 滅茶苦茶頑張って英訳する九十郎！

しかしエリザベス女王も世界史の教科書に載る英傑の一人、相手が諸葛亮孔明であろうと一歩も引かない！ そして滅茶苦茶頑張って和訳する九十郎！

佐渡の砂金を使った賄賂攻勢を開始する孔明！ 後ろ暗い話に巻き込まれて冷や汗を垂らしながら英訳する九十郎！

何日も何日も続く論戦に次ぐ論戦！ 疲労と心労でやせ細っていく九十郎！ ドレイクに同情される九十郎！ ついに気力と体力の限界が来てぶっ倒れる九十郎！ なんやかんやでドレイクと孔明に介抱される九十郎！

そしてついにエリザベス女王の説得が成功しかかったその時……イングラント王室に激震が走る。

宗教問題やネーデルランド介入、そして前スコットランド女王メアリー・スチュアートの処刑で関係が悪化していたスペインからの宣戦布告。

スペイン無敵艦隊を差し向けて海上封鎖を目論んだのだ。

敵は当時最強の海洋国家スペイン!

もう日ノ本への派兵どころか、国家存亡の危機である!

どうする孔明!? どうするドレイク!? どうする九十郎!?

「焼きます」

「……焼くって、何を?」

「スペイン艦隊です」

「す、スペイン艦隊を……」

「スペイン無敵艦隊を全部焼き払って勝ちますっ!!」

「おいおいおいおい! ここは赤壁じゃねえんだぞっ!」

かくして始まるドレイクと孔明と九十郎による大火計作戦!

ドレイクと孔明と九十郎は紀元前から使い古された火計なんぞでスペイン無敵艦隊を撃退できるのか!?

ネタバレ・勝ちます。

イングランド王室との同盟は結べるのか!?
ネタバレ・できます。

次回! ドレイクと孔明と九十郎『アルマダの海戦』にご期待ください。

戦えドレイク! 頑張れ孔明! 負けるな九十郎! 日ノ本の運命は君達にかかっているぞ。

……

……

……

一方その頃、天草四郎は新たななる武芸者を魔人にしていた。

「海洋国家スペインが誇る名提督ディエゴ・フロレス・デ・ヴァルデス!

イングランドとの戦いに負けて国に帰り難いって言ってたから、

魔人にして仲間にしたぞおっ!」

「う〜ん……船乗りと船乗りと船乗りで、また船乗りがダブってしまってるのです。

いつになつたら武芸者が来るのですか?」

「これで本当おくに柳宮十兵衛に勝てるのですか?」

「ああ、うん、流石にちよつと無計画過ぎたね。」

再起して次こそはドレイクに勝ちたいっていうリベンジ精神が気に入っちゃって。

忍法・魔界転生が使えるのは後二回だけだし、次こそは武芸者を仲間にするよ」

「次こそは本当に武芸者を仲間にするのですよ……」

「行くぞ世界、待つてろよ柳宮十兵衛えっ！」

選りすぐりの武芸者を魔人にして！ お前をやつつけて！

ぐちよぐちよになるまで犯してやるからなあ〜っ!!」

天草四郎と魔人達は元気に仲間集めに邁進していた。

……

……

……

かくして、なんやかんやでスペイン艦隊無敵艦隊は壊滅した。

開戦前夜、死を覚悟したドレイクが最後の思い出にと九十郎を押し倒したり、自分には全く分からない言語（英語）で愛を語り合う（ように見えた）2人を見た孔明が色々な意味で迷走したり、これが海賊流の戦い方だとばかりにスペインの軍船に乗り込んでチャンバラする羽目になったりと色々あったが、とにかくドレイクと孔明と九十郎は勝利した。

「……でもな孔明、スペイン語の通訳まで俺にやらせるのはどうかと思っただぞ」

「同じヨーロッパの言語でしたし、

九十郎さんなら立派にやり遂げると信じていましたよ（笑顔）」

「無茶言うなよおっ！ 殆どぶつつけ本番で通訳させんなよおっ!？」

しかもお前、途中から凄い早口になるし、

古代中国の故事成語連発するしで、滅茶苦茶大変だったんだぞっ!!」

「九十郎さんなら立派にやり遂げると信じていましたよ（邪悪な笑顔）」

「孔明め、無理矢理こっちの世界に連れて来たの根に持つてるな……」

九十郎は死ぬほど苦労したが、それでも勝利の立役者となった事で日英同盟交渉も大きく進展し、共産主義一向衆鎮圧のために日ノ本への派兵を約束させた。

とはいえ海外遠征、それも世界の反対まで兵を送るとなれば相当な準備が必要になる。

国を挙げての遠征準備にイングランド全体が大あらわである。

一方、ちよつと暇になった孔明と九十郎は日ノ本からでは見えなかつた世界情勢について学び始める。

そして現代ニホンあるいは現代日本の歴史と大きく離れた出来事を知った。

「フランシスコ・ピサロ、コンキスタドールに……失敗!？」

「……え？ インカ帝国つて滅んでねえの?」

「むしろヨーロッパの技術や知識を貪欲に吸収して、

過去に無い発展をしつつあるみたいですね……」

いかなる歴史の偶然か、バタフライエフェクトか、剣丞が生まれた世界でも九十郎が生まれた世界でも滅亡していたインカ帝国は、なんとこの世界では滅んでいなかった。

ピサロはコンキスタドールに失敗して行方不明、そしてインカ帝国の皇帝ワイナ・カパックは今なお存命中であった。

「新大陸には無かった疫病が大量に流入して滅んだんじゃないかかったか？」

ほら、コロンプス交換って奴で。

この時代の船って現代じゃありえねえくらいに不潔で不衛生だからな」

「国全体に狂ったように水道と水洗便所を作って疫病の蔓延を食い止めたみたいです。」

あまりにもトイレが多すぎるから、

ヨーロッパの人達はカパック皇帝をベ○キマンって呼んでるとか」

「そのうちカパックがキレて攻め込んでくるんじゃないやねえの？」

さておき、イングランドから日ノ本に派兵するにあたって、最大の懸念点は航路の確保である。

アフリカ大陸を回ってインド洋を横断する東回り航路は、途中でキリスト教国と対立するイスラム国家の勢力圏を通過する必要があり、大小さまざまな軋轢や妨害が予想される。

一方、南アメリカ大陸を回って太平洋を横断する西回り航路は、途中で水や食料を補給する拠点が無く、広すぎる太平洋を越える前に深刻な食糧難が予想される。

ドレイク船団はたった5隻の船団であったので必要とされる物資が少なく、ギリギリ水や食料の補給に成功したものの、共產主義一向衆を武力鎮圧できるだけの規模の兵力を運ぶとなると必要とされる物資は多くなり、補給の難易度も格段に跳ね上がるのだ。

八方塞がりかとドレイクや九十郎が頭を抱えたその時、諸葛孔明に悪魔的発想がひらめいた。

「……天下三分します」

「……は？」

「日ノ本、イングリランド、そしてインカ帝国で大同盟を組み、天下を三分割します」

「気でも狂ったのか孔明えっ!? 今は三国志の時代じゃねえし、

ワイナ・カパックが強いのはC O v i l i z a t i o n だけだぞっ!」

かくして、孔明のゴリ押しにより急遽組まれるインカ帝国行き外交使節団!

1494年のトルデシヤス条約、1529年のサラゴサ条約により、スペイン・ポルトガル間の条約で世界の支配権が勝手に定められた事もあったが、今度は諸葛孔明が日ノ本、イングランド、インカ帝国の三国で似たような事をしようというのだ！しかし、インカ帝国はフランシスコ・ピサロが色々やらかしたせいでヨーロッパのキリスト教国に良い印象は抱いていない！

いや、いつそ恨んでいると言っても過言では無かった！

果たして孔明にワイナ・カパックの怒りや恨みを氷解させる妙案はあるのか!?

ネタバレ・ありませんでした。

日ノ本、イングランド、インカ帝国の大同盟は結べるのか!?

ネタバレ・できません。

次回！ ドレイクと孔明と九十郎『新大陸』にご期待ください。

戦えドレイク！ 頑張れ孔明！ 負けるな九十郎！ 日ノ本の運命は君達にかかってるぞ。

……

……

……

一方その頃、天草四郎は新たななる武芸者を魔人にしていた。

「はあくつはつはつはつはあつ!! 今度の魔人は凄いとつ!!」

世界史の教科書に載ってるビッグネーム……フランススコ・ピサロだあつ!!」

「うくん……船乗りと船乗りと船乗りと船乗りで、

またまた船乗りがダブってしまってるのです。

ポーカーならフォーカードですけど、

綾那達が探しているのは柳宮十兵衛と戦えるような武芸者なのですよ。

これで本当に本当おおおおうくに、柳宮十兵衛に勝つ気なのですか?」

「……ごめん、何かテンション上がっちゃって。

インカ帝国に叩き出されて、復讐したいっていうリベンジ精神も気に入っちゃって

や。

忍法・魔界転生も次で最後だし、最後の一人は絶対に絶対に武芸者にするよ」

「どうせ次も船乗りなのです、船乗りのファイブカードが完成するのですよ……」

「行くぞ世界、待ってるよ柳宮十兵衛えつ!!」

選りすぐりの武芸者を魔人にして! お前をやっつけて!

ぐちよぐちよになるまで犯してやるからなあ〜つ!!」

天草四郎と魔人達は元気に仲間集めに邁進していた。

……

.....

.....

インカ帝国との同盟交渉は、当然のように難航した。

フランシスコ・ピサロによる攻撃、コロンブス交換による疫病の蔓延、そしてヨーロッパから次々やってきては、現地民を奴隷扱いする、キリスト教的価値観を押し付けて異教徒を様々な残虐行為で苦しめる……そういった様々な積み重ねがインカ帝国の皇帝ワイナ・カパックの態度を硬化させていた。

「案の定と言うか、ある意味当然と言うか、

イングラント王室の連中は苦戦してゐてえだな」

「しかし、日本人はヨーロッパ人ではありません。」

肌の色が違う、使う言葉も違う、キリスト教の価値観も持たず、

新大陸の征服、現地民の誘拐、奴隷化もしていません」

「そこが狙い目か」

「はい、今は粘り強く何度でも対話を続けます。

信を得られた頃合いを見て、利を持って説き伏せましょう。

なので翻訳の方は頑張ってくださいね」

「インカ帝国の言語をぶっつけ本番で通訳させるお前の神経が信じられんよ、俺は」

「同じアメリカ大陸の言語ですからどうかになりますよ（笑顔）」

「うん、英語ってイギリスの言語だからな、ユーラシア大陸が発祥。」

人類誕生の頃から全然交流の無い新大陸の言語とは全然似てねえんだよ」

「九十郎さんなら立派にやり遂げると信じていますよ（邪悪な笑顔）」

「孔明め、無理矢理こっちの世界に連れて来たの根に持つてるな……」

こうして始まるインカ帝国の人々との交流！

互いの文化を語り合い、互いの歴史を語り合い、異国の品々を交換し合い……少しづつ、しかし確実にワイナ・カパックの荒んだ心は和らいでいき、孔明と九十郎に心を開くようになっていった！

途中、現地住民を拉致して奴隷にしようとした西洋人を（直接ブチ殺すと後で外交問題になるので）石兵八陣のちよつとした応用で迷子にしてやったり、神殿の奉納した黄金や宝玉を勝手に持ち去ろうとした西洋人を（誰が殺したかバレると外交問題になるので）名探偵のいない金〇一少年の事件簿風の連続密室猟奇殺人事件（謎の怪人に襲われた風の演出つき）に巻き込んで追い返したりして、九十郎達とワイナ・カパックの距離は近づいていった！

こうして全てが上手くいくかと思われたその時……事件が起きた！

「……あ、やっべ誤訳した。」

これじゃ俺個人がワイナ・カパックに求婚してるみてえじゃねえか」

……九十郎が翻訳をミスったのだ！

かつて諸葛孔明が馬謖に街亭防衛を任せて盛大に失敗したのと同じように、孟達に内乱を起こすように仕向けて見事に失敗したのと同じように、九十郎ならインカ帝国の言語・通称ケチュア語の翻訳も十分やれると過大評価して無茶ぶりし、見事に失敗したのだ……と、いう事にしておこうと後に孔明は語っている。

この時、九十郎が翻訳をミスった本当の原因については、ここでは語らない事にする。「ま、まあ、外交使節団の翻訳担当がいきなり皇帝陛下を口説き始めても、

どうせ誰も本気にしないだろ。

素直に誤訳ですごめんなさいって……いや、黙つてりやバレやしねえかな……」

「おい九十郎、何やら町が騒がしいのだが、何か知らないか？（英語で喋ってます）」

「ドレイクか？ いや、俺は何もしてないぞ、本当だぞ（英語）」

「……その顔は何か心当たりがある顔だな？ 何を知っている？」

早く話せばそれだけ女王陛下の慈悲もあるぞ（英語）」

「おいおい、俺が何かやらかした前提で話すなよ。

ちよつと翻訳ミスっただけで騒ぎになるような真似はしてねえよ。

騒がしいってどういう感じだよ？ 殺気立ってるのか？（英語）」

「いや、敵意や害意の類は感じられん。

むしろ喜ばしいという感じがあるな、皆で着飾って、街も飾り立てていた（英語）」
ドレイクと九十郎がワイナ・カパックから提供された宿舎の窓から外を見る。

「おーおー、旗だの横断幕だの出てるなあ。昨日まで無かったよな、ああいうの（英語）」

「何と書いてあるんだ？（英語）」

「お前らも少しはこっちの言葉を覚えろよな……（英語）」

「嫌だ、面倒臭い。九十郎が一生私の面倒を見てくれ（英語）」

「はいはい分かったよ。訳してやるからちよつと待て（英語）」

九十郎がノートペラペラめくりながら横断幕の文字を翻訳する。

当然ながら、ケチュア語の辞書なんて物は存在しない。

九十郎が持っているのはイングランド王室の伝手で集められるだけ集めたインカ帝国に関する資料から言語学的な部分を抜き出して写本したお手製のノートである。

現代ニホンのトップエリートを集める大江戸学園の入学試験を通過するだけあつて、九十郎の地頭は決して悪くない。

ぶつつけ本番でスペイン語やケチュア語の通訳をやらされて、片手で数えられる程にしか誤訳をしていないのは、九十郎の地頭が珍しく役に立ったためかもしれない。

そして数十秒後……九十郎が翻訳用のノートをばさつと落としました。

膝をガタガタと震わせて、冷や汗が止めどなく流れていた。

「おい、何をやらかした？（英語）」

「け……けけ、けっこ……結婚おめでとうございます、皇帝陛下……だと？（震え声）」

「日本語で言われても分からん！ 英語で言え、英語で！（英語）」

「結婚おめでとうございます、皇帝陛下……（英語・震え声）」

「おや、ワイナ・カパックが結婚か。それはめでたい事だな。」

それで、それならどうしてお前が震えるのだろうか？（英語）」

「あ、いや……ちよつと翻訳ミスってだな……（英語・震え声）」

かくして、翻訳に失敗してワイナ・カパックに求婚してしまった九十郎！

大いなる勘違いによってインカ帝国は国を挙げての結婚祝いムードになってしまう

！

「ちよつと待つて!? ちよつと待つて!? お願いだから待つて!?」

なんでワイナ・カパックの好感度こんなに高いの!?

俺何かやつた!? 俺、また何かやつちやいましたあつ!?（日本語）」

混乱する九十郎！

「ふざけるなあつ!! 九十郎は私の夫だぞ！」

こんな婚姻は無効だ！ 重婚じゃないかっ!! (英語)

「いやお前の夫でもねえよっ!! (英語)」

憤るドレイク!

右往左往している内にどんどん進んでいく結婚式の準備!

進退窮まった2人が駆け込んだ先は……

「孔明えっ! 助けて孔明えっ!! (日本語)」

「朱里! なんとかしろっ!! (英語)」

……駆け込んだ先は諸葛孔明のものであった。

「え? 婚姻すれば良いのでは? (日本語)」

「いやいやいやいや、流石に無茶だろ!? ワイナ・カパックだぞ!

何でインカ帝国の皇帝陛下が高々一通訳と結婚するんだよ!?

意味が分からねえし笑えねえよっ!?! (日本語)」

「……にこっつ (無駄に良い笑顔)」

「こ、孔明……お前、まさか……（日本語）」

「まあまあ、婚姻同盟なんて紀元前から使い古されてきた手じゃないですか。時間をかければかけるだけ日本の国土が荒れてしまいますし、

たぶんこれが一番早いと思います（日本語）」

「孔明でめええっ!!（日本語）」

「おい！ 2人共何を話している!? 私にも分かるように話せっ!!（英語）」

かくして訪れる九十郎ご一行空中分解の危機！

果たして九十郎はワイナ・カパックとの婚姻を回避できるのか!?

ネタバレ・駄目でした。

果たして九十郎はワイナ・カパックのま〇こをカパックしてしまうのか!?

ネタバレ・ヤツちやいました。

果たしてワイナ・カパックを説き伏せ、日ノ本、イングラント、インカ帝国の大同盟は結べるのか。

ネタバレ・できました。

次回！ カパックとドレイクと孔明と九十郎『九十郎の大脱走』にご期待ください。

進めカパック！ 戦えドレイク！ 頑張れ孔明！ 負けるな九十郎！ 日ノ本の運

命は君達にかかっているぞ。

……
……
……

一方その頃、天草四郎は新たな武芸者を魔人にしていた。

「これが最後の忍法・魔界転生おっ！　これが最後の魔人っ!!」

世界史の教科書に間違い無く乗る超々ビッグネーム……

その名はレオナルド・ダ・ヴィンチだあっ!!」

「ついに……ついに船乗り以外が仲間になったのです!!」

成長したのですね、綾那は感動しているのです！」

「やだなあ、いくらなんでも船乗りのファイブカードを揃える程の馬鹿じゃ無いって」

「物凄いわばあちゃんだったのですけど、大丈夫なのですか？」

「そこだけは問題無い。」

私の忍法・魔界転生は対象の肉体を全盛期の年代で再生させるからね。

うん、そこだけは問題無いよ、そこ『だけ』は」

「……で、戦えるのですか？」

「えっとね……あの有名なモナ・リザとか、最後の晩餐を描いた凄い人でね。

プロペラとかパラシユートとか戦車とかの設計とかもやってて、

様々な分野に手を伸ばした万能の天才と呼ばれていて……」

「……で、戦えるのですか?」

「……む、無理じゃないかな」

綾那と天草四郎との間で痛々しい沈黙が流れた。

「とにかくっ! 選りすぐりの武芸者……武芸者じゃないけど、

とにかく魔人は集めたぞ! 待つてろよ柳宮十兵衛えっ! お前をやつつけて!

ぐちよぐちよになるまで犯してやるからなあ〜っ!!」

「もう綾那が全員やつつけるしかないのですよ……」

こうして天草四郎の魔人集めの旅は終わり、一行は江戸城に設置されたポータルを指して出航した。

……

……

……

共産主義一向衆の武力鎮圧は、意外な程に上手くいった。

九十郎達がヨーロッパや新大陸でグダグダやつてる間に劍丞が日ノ本を駆けずり回り、有力大名達を説き伏せて同盟関係を結び、現代ニホンの武器を有する共産主義一向衆を相手に劣勢ながらも粘り強く抗戦を続けていた。

そこにインカ帝国の全面協力によって補給問題を解決した英国海軍の船団が現れ、共産主義一向衆に向けて大砲を一斉射！

さらに船内からはインカ帝国の伝統の戦装束に身を包んだ戦士達が現れる！

意味の分からない装束の戦死達が、意味の分からない言語で雄たけびを上げながら突撃してくる姿に、基本信心深いと言うか、迷信に影響を受けやすい共産主義一向衆を恐れおののかせた！

さらにさらに！ 一足先に日ノ本に戻っていた天草四郎と愉快な仲間達も加勢し、その恐るべき超能力によって共産主義一向衆を蹴散らしていった！

さらにさらにさらに！ 忍法・魔界転生によって魔人と化したレオナルド・ダ・ヴィンチが超頑張って破損した次元間ポータルの修繕に成功！

再び戦国時代と大江戸学園を繋ぐ次元の扉が開通したのだ！

「勝ったッ！ 第三部完！」

こうして戦国時代で起きた全ての問題に解決の目途が立ち、元の世界への帰還も可能になり、全てが終わったか終わったかに思えた。

全てが終わわり、後はそれぞれの日常に回帰していくだけだと誰もが思った。

「じゃあ、ボク達は一足先に大江戸学園に帰ってるね」

「おう、ポータル直してくれて本当に助かった」

「お礼ならボクにじゃなくて、ダ・ヴィンチに言つてあげて」

「しかし何でレオナルド・ダ・ヴィンチが生きてたんだろうな。」

「確か生没年1452年から1519年だったろ？ とつくの昔に死んでなきやおかしいだろ」

「理由は良く分からないけど、

ボクらの世界よりも遅く生まれて、長生きもしてみたい。何か心当たりとかある？」

「うーん……まあ、ワイナ・カパックが生きてた時点で今更かもなあ……

あいつもあいつで本来は死んでなきやおかしし」

「まあまあ、おかげでボクらも元の世界に帰れるんだから良しって事でね。」

「細かい事は気にしない、気にしない」

「そうだジェロニモ、犬子達に手紙を書いたから渡しておいてくれ。」

「こつちでどういう事があつたか、大体書いておいた。」

「後処理とか色々あるから俺が戻れるのは一ヶ月後になると思うが、

必ず戻ること心配すんなって」

「分かった、ちゃんと渡しておくよ」

九十郎が天草四郎に手紙を渡す。

天草四郎はこれから大江戸学園執行部を襲撃して柳宮十兵衛を強姦しようとしている犯罪者予備軍であるが、九十郎は基本的にクズなので気にしていない。

「じゃあ柳宮十兵衛へのリベンジマッチ、頑張れよ。」

パートタイム火付盗賊改方として大っぴらに応援はできねえけどな、

あのいけ好かない柳宮に吠えツラかかせるのは中々面白そうだって思ってるよ」

いつそ内心では勝ってほしいとすら思っていた。

倫理観ゼロどころかマイナスである。

だから貴様は九十郎なのだ。

「何なら、キミが戻って来るまでリベンジマッチは待つていようか?」

「それはやめとけ、俺も立場上止めに入らにやならなくなるし、

あの柳宮十兵衛相手につけ入る隙を晒す事にもなりかねん。

やるならポータルが直った今のタイミングがベストだろ?」

「そうかい? そうかもね。」

それなら……お言葉に甘えて、思いつきりブチかましてくるよ。

この時代、この世界を駆け回って集めてきたボクの最強メンバーでねっ!!」

そして天草四郎は忍法・魔界転生で魔人化させたこの時代の英雄・英傑達を呼び集める。

本多忠勝！

↑戦国最強と畏られる猛将

村上武吉！

↑船乗り

フェルディナンド・マゼラン！

↑船乗り

デイエゴ・フロレス・デ・ヴァルデス！

↑船乗り

フランシスコ・ピサロ！

↑船乗り

レオナルド・ダ・ヴィンチ！

↑芸術家、科学者、技術者

「……何度見ても最強には程遠い面子なのです」

本多忠勝こと綾那は既に負け戦ムードである。

「綾那、もうこうなったらキミだけが頼りだよ。頑張って」

「やるだけやりますけど、負けても綾那のせいにはしないでほしいのですよ」

こうして天草四郎と愉快な仲間達は次元間ゲートを通り大江戸学園へと戻っていった。

九十郎達も次にポータルが開く1ヶ月以内に共産主義一向衆との戦いの後処理を済ませようと気合を入れ直す。

そして……

……

……

.....

天草四郎によるリベンジマッチ！

後に第二次魔界転生事件と呼ばれる戦いがついに始まった！

ポータルを再起動し、次元間ゲートが開いた直後に大江戸城に突撃！

戦国時代側にポータルを直せる人物がいるとは想像できないだろうという天草四郎

の予測は見事に当たり、柳宮十兵衛の意表を衝く事には成功した！

意表を衝く事『には』成功した！

「すみませ〜ん、柳宮十兵衛さんいませんか〜？」

え？ 今日に来てない？ じゃあ、どこに……分らない？

しょうがない、本人に電話して聞くか……」

そして天草四郎はガラケーを取り出して柳宮十兵衛の番号をプッシュする。

「あ、十兵衛？ ボクだよ、ジエロニモ。」

そうそう、ポータル直ったから帰ってきちゃった。

それはそうと今から魔人連れてキミを襲撃しようと思ってるんだけど、今どこ？

え、本土にいるの!?! しょうがないなあ〜、いつ戻るの？

土曜日ね、じゃあ土曜日にどっかで待ち合わせしよう」

……と、いう訳で当の本人に襲撃を知らせてしまったため、奇襲効果は消え失せた。

綾那は『これはもう駄目かもしれないのです』と言いたげな味わい深い表情になっていた。

……

……

……

天草四郎によるリベンジマッチ！

後に第二次魔界転生事件と呼ばれる戦いがやつと始まった！

柳宮十兵衛が戻って来るまで、エン（大江戸学園内で流通している通貨）を稼ぐためにコンビニやファミレスでアルバイトに勤しむ魔人達の姿は実に滑稽だったが、とにかく戦いは始まった！

これでも一応は大江戸学園の生徒である天草四郎はともかく、他6名の魔人達はいわゆる不法侵入者になるのだが、それでも普通にアルバイトができる所が大江戸学園の笑えるところである。

「行くぞ柳宮十兵衛えっ!! これが戦国時代で集めてきたボクの最強メンバー!!」

この人数で袋叩きにすればいくらキミでもひとたまりも無いだろっ!!」

「ジェロニモ、最強の後にカッコ笑いつて付けるの忘れてるのですよ」

「最強メンバーなのっ!! 誰が何と言おうがこれが最強なのっ!!」

「おお、怖い怖い。怖いからこちらも増援を呼ぶとしようか」

柳宮十兵衛が呼子を鳴らすと、近くに隠れていた徳河吉音、徳河詠美、大岡想、遠山朱金、長谷河平良、鬼島桃子、そして粉雪が次々と駆け付けて来る。

合計8名の大江戸学園の剣客達が天草四郎と6人の魔人達を取り囲んだ。

「……なっ?! 助っ人を呼ぶなんて卑怯だぞおっ!!」

天草四郎は自分の事を棚に上げて柳宮十兵衛を非難した。

「問答無用っ! 覚悟おっ!!」

しかし、柳宮十兵衛と7人の剣客達は聞く耳を持たずに天草四郎達に飛び掛かる。

そして大江戸学園では日常茶飯事ともいえる混戦、乱戦、チャンバラが始まった。

本多忠勝・通称綾那はまさに三面六臂のような大暴れをしたが、他のメンバーは陸に上がった河童ならぬ陸に上がった船乗りとそもそも殴り合いに向いてない芸術家兼技術者、あつという間に大江戸学園の剣客達にボコボコされ、次々と倒れ伏し、魔人ち〇こに経文コンドームを被せられ、逆レ〇プされていった。

こっちは18禁版ではないで詳細は省くが、まるでエロ漫画のような情景の中で、魔人達は次から次へと魔人エキスをヌキ取られ、人間に戻されていった。

天草四郎は柳宮十兵衛との一騎打ちで手一杯、その間に綾那の元に残り7人の剣客達が殺到し、ついに綾那までもが組み伏せられてしまう。

いくら本多忠勝が強いと言っても、いくら魔人化により超能力に目覚めていても、現代二ホンのトップエリートを集めた大江戸学園の上澄み中の上澄みとも言える7人の剣客達が同時に来られてはひとたまりも無かったのだ。

そしてエロ漫画のような光景が再び繰り返され、綾那もまた魔人工キスをヌキ取られ、人間へと戻される。

「はあ……はあ……くそお、何でそんなに強いんだよお、柳宮十兵衛え……」

「ぜえ、ぜえ、ふう……悪いな、ここまでして私の身体を求められて、

悪い気はせんのだが……諦めろ！ 私にレズッ気は無いつ!!」

柳宮十兵衛の一喝が、柳宮十兵衛の剣閃が、天草四郎を捉えた。

勝負あり……である。

こちらは18禁版ではないので細かい描写は省くが、天草四郎も他の魔人達と同じく、魔人から人間に戻す行為が始まる。

「お前が望んだ結果では無かろうが……」

努力賞くらいはくれてやる、これで満足しておけ」

こちらは18禁版ではないので詳細は省くが、行為の相手は柳宮十兵衛だ。

「ああ、嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ……こんなの望んでいない、こんなのは嫌だ。

ボクはキミに組み伏せられたいんじゃない、組み伏せたいんだ。

ボクはキミに犯されたんじゃない、犯したいんだ。

キミのその何が起きてても変わらない堅物顔をぐちゃぐちゃにしてやりたいんだ」
エロ漫画のような情景の中で、天草四郎はうわ言のように嫌だ嫌だと繰り返す。

「分かった分かった、分かったから早く人間に戻ろうな」

「違う……違う！ 違う違う！ 違う違う違ううっ!! 分かってない！

キミは私の心を何一つとして分かってない！ 見ていない！

見ようともしていないっ!! ボクはキミに勝ちたい！ キミだから！

柳宮十兵衛だから勝ちたい！ 柳宮十兵衛に勝ちたいっ！ 勝ちたいんだあっ!!」

最後の瞬間は着実に近づいていた。

綾那達6人の魔人と同じように魔人ち〇こから魔人エキスをヌキ出され、人間に戻る

時は刻一刻と近づいていた。

しかし……

「嫌だあっ!! 嫌だあっ!! このまま終わるなんて嫌だあっ!!」

このままイカされるなんて嫌だあっ!! ボクはまだ何一つできていない!

まだ何も成し遂げちゃいないんだあっ!! ボクは……ボクはあっ!!」

天草四郎が叫ぶ、魂の底から絞り出すように叫ぶ。

身体の奥底に眠る力の全てを絞り出すように、魂の炎を燃やし尽くすように叫ぶ。

しかし、叫ぶ程度でこの劣勢極まりない戦況を逆転できる程、世の中は甘くない。

世の中は甘くは無いのだ……天草四郎が普通の人間であれば。

柳宮十兵衛は見誤っていた。

柳宮十兵衛は知らなかった。

柳宮十兵衛は気づかなかった。

かつて天草四郎が試作型ポータルを使いって戦国時代へ逃げ延びた時、戦国時代生きる天草四郎と、大江戸学園の天草四郎の魂が融合し、1つの肉体に2人分の魂が混在する状態になった（おまけ6）。

サイキックとはすなわち魂のパワーだ、魂が2人分あれば、そのパワーも2倍になる。今までは2人分の魂が上手く混ざり合っていなかった故に、1人分のパワーしか引き出せていなかったのだ。

しかしこの時、この瞬間、柳宮十兵衛に勝ちたいという妄執にも似た強い想いが、強すぎる想いが2人分の魂の統合を促し、天草四郎のサイキック能力を2倍に……いや、

それ以上に強化した。

そして柳宮十兵衛が用意した経文コンドームは、普通の能力の魔人であれば十分に抑え込むだけの性能があつたが、2人分の魂を持ち、通常の2倍以上のパワーを持った超魔人を抑えるだけの性能は無い。

「ボクは……ボクは……勝ちたい！ 勝ちたい！ 勝たああああーいっ!!!」

柳宮十兵衛が異変に気付いたその直後……天草四郎の魔人ち〇こを包んでいた経文コンドームがバラバラに千切れてしまった。

……

……

……

「……ジェロニモの奴、やりやがった」

江戸城に設置されたポータルの前で、斎藤九十郎が苦々しい表情で項垂れていた。

戦国時代と大江戸学園を繋ぐ次元間ゲートは、1ヶ月に1度、約10分間しか開かない。
ない。

ずっと繋ぎっぱなしにすると、ニホン経済に悪影響を与えかねない程に膨大なエネルギーを使ってしまうからだ（最終回）。

そして今日は天草四郎と愉快的な仲間達が大江戸学園に戻ってから1ヶ月後、もう一度

次元間ポータルが開く予定の日だ。

「要するに犬子達が大ピンチって話っすよね？」

「ああ、そうだよ」

約1週間前、ほんの一瞬だけ次元間ポータルが開いた。

開いた時間は本当に一瞬で、人や物を通す事は不可能な時間……短い電子メールを一通分送るのが限界の、本当に本当に短い時間だった。

その一瞬の時間で、九十郎のデバイスが一二三からのメールを受信した。

そのメールには、驚くべき事がいくつも書かれていた。

柳宮十兵衛が天草四郎と愉快的な仲間達をボコボコにして、あと一歩の所まで追いつめた。

最後の最後で天草四郎が謎の超パワーに目覚めて、逆に柳宮十兵衛達を蹴散らし、柳宮十兵衛を強姦した。

天草四郎はその後暴走し、理性を喪い、大江戸学園を徘徊し、女の子を見ればすぐさま押し倒して強姦する危険な存在になってしまった。

大江戸学園の剣客達が何度か戦いを挑んだが、まるで歯が立たずに負け続けている。

妊娠率100%の魔人ち○ぽを振るい、女を犯す度にセ○ジュニアのような天草四郎の分身が増え、天草四郎自身の力も増していき、強姦件数は日を追うごとに増えている。

ついには学園全体に非常事態宣言が出され、犬子達は事前に用意していた防衛拠点・通常風雲真田城に立て籠もり、天草四郎及び天草ジュニア達の攻撃に耐え忍んでいる状態だ。

……一三三からのメールには、要約するとこのような事が書かれていたのだ。

「……このままじゃ犬子達まであいつにやられるのも時間の問題だ。

その前に俺達がかするしかねえ」

江戸城のポータルの前には、九十郎が集めた対天草四郎戦のための助っ人達がいた。

「犬子を、一三三を、粉雪を守りてえ。いや……俺の嫁を守るのも大事なんだが、

それ以上にジエロニモを、俺のダチ公を止めてやりてえ。

あいつは目についた女を無差別に襲うような危険な奴じゃねえ。

何が起きたかは分からねえが、暴走して、自分で自分を止められねえんだ」

九十郎は天草四郎を想い、ギョツと拳を握り締める。

「美空」

「まあ、良いんじゃない。

1週間で集められるだけ集めたこの兵力で、天草四郎をボッコボコにしちゃいましょう」

「柘榴」

「御大将がやるって言うなら、犬子達を助けるためなら、

この柿崎景家、いかなる艱難辛苦も厭わねーっすよ！」

「ドレイク」

「はっ、海賊の持ち物に手を出す事がどれほど愚かな事か、

天草四郎とかいうのにたっぷりと思いい知らせてやろうじやないか（英語）」

「カパック」

「置いていこうなんて言ったら、本気で恨みますよ。私の夫の物は、私の物と同義です。」

インカの王として、完膚無きまでに叩き潰してしまいますから（ケチュア語）」

「それと……孔明」

「……………」

孔明は無言のままそっぽを向いている。

「孔明え!? 孔明さん!? 諸葛孔明さん!?!」

「朱里と呼ぶまで返事しません」

「ええ……その話まだすんの?」

誤魔化すような態度に、孔明が深々とため息をついた。

「……………2回も私を抱いた癖に」

「わっーっ！ わあーっ！ その話は無し！ その話は後でゆっくりしよう！

後で土下座でも何でもするから今だけはやめてくれえっ!!」

「……土下座なんて欲しくくないですよ、もう」

孔明はぶくーっつと頬をふぐのように膨らませている。

「朱里、九十郎を困らせるのはその辺にしときなさい。」

九十郎の女関係の清算は犬子達を助けた後でゆっくりとしましょう」

「そーっすね、柘榴達に何の相談もせずに嫁を増やした九十郎には

色々と言いたい事があるっすけど、それは犬子達も交えてゆっくりじっくりとするっす」

「……いや、あの、マジですまん」

九十郎の未来は早くもお先真っ暗である。

だから貴様は九十郎なのだ。

そんな事を話している間に、大江戸学園と戦国時代を繋ぐ次元間ポータルが開かれる時間になった。

「美空、柘榴、ドレイク、カパック、しゅ……孔明。行くぞおっ!!」

かくして大江戸学園を揺るがす大事件、第二次魔界転生事件に九十郎達が参戦する！
果たして九十郎は犬子達の窮地を救う事はできるのか!?

ネタバレ・救います。

果たして暴走する天草四郎を止める事はできるのか!?

ネタバレ・勝ちます。

次回！ カパックとドレイクと孔明と九十郎『珍しく間に合う救援』にご期待ください。

進めカパック！ 戦えドレイク！ 頑張れ孔明！ 負けるな九十郎！ 大江戸学園の運命は君達にかかっているぞ。

……

……

……

大江戸学園へ舞い戻り、天草ジュニア達をほぼ全滅させ、陥落寸前だった風雲真田城の救援に成功した九十郎達であったが、天草四郎は文字通り桁違いの強さだった。

大江戸学園の名だたる剣客達が力を尽くし、戦国時代の名将・知将達が知恵を尽くしてもなお、その恐るべき超能力に対抗する事はできなかった。

1人、また1人と力尽き、組み伏せられ、強姦されていく中で、諸葛孔明とワイナ・カパックが最後の賭けに出る。

だがしかし……抵抗も空しく、ついに孔明すらも天草四郎に強姦されてしまう。

こちらは18禁版ではないので詳細は省くが、ここまで頑強に抵抗してきた孔明を、三国時代最強の軍師である孔明をついに犯したのだと勝ち誇る天草四郎。

その高笑いが学園中に木霊したその時……

「……ああ、安心しました」

……孔明はそう言つて安堵したのだ。

「何だ……何が起きているんだ!? どうして孕まない!? どうして!？」

「いくら妊娠率100%の魔人ち〇こと言つても、

動く死体を妊娠させるのは無理だったようですな。

さつきから貴女がヘコヘコと腰を振っていた相手はとつくの昔に死んでいた。

魂を生贄に捧げた、動く死体に過ぎなかつたんです」

「な、何いつ!？」

「そしてもう一つ、時間稼ぎに付き合つてくれてありがとうございます。」

私とカパックさんが用意した切り札は、

発動さえすれば強力ですが物凄く時間がかかるんです。

だから誰かが身体を張つて、時間を稼ぐ必要があります……」

そして孔明は、懐から2枚の呪符……いや、2枚のカードを取り出した。

「私は既に! このカードの効果を発動させていたっ!！」

諸葛孔明、フランシス・ドレイク、そしてワイナ・カパックを示す駒を、国内組に相対するように並べる。

「九十郎さんの妻としての序列で争いが起き、亀裂が生じています……」

この亀裂を押し広げ、決定的なものにして、争いを起こさせる……

国内組が勝つにせよ、海外組が勝つにせよ、

醜い争いを続ける皆に九十郎さんは愛想を尽かすのは必定。

そして誰も信じられなくなり、誰も愛せなくなった九十郎さんに私が優しく……

くつくつく……ふはははははあっ!! はあーっはっはっははあっ!!

そして私が! 黒田官兵衛が最後の最後に笑ってみせますっ!!」

そして雫が悪者っぽい笑い声を響かせていた。

あんまり似合わないその有様は、一向に進まない九十郎との仲に対する彼女の焦りが

呼んだものなのかもしれない。

とはいえ雫の裏工作は最後の最後の一押しに過ぎない。

国内組、海外組の軋轢は彼女が何かをするまでもなく深刻なものになっていた。

「私が九十郎のたった一人の妻だ。」

極東のイエローモンキー共と同等だなどと認められるか（全自動翻訳機装着済み）」

「インカの皇帝として、国家の象徴として、序列に関しては譲れません。」

事実婚の1人や2人は黙認しますが、

正式な妻としての身分は諦めてください（全自動翻訳機装着済み）」

フランシス・ドレイクもワイナ・カパックも自分こそ九十郎の1番の妻……正妻だと
言つて譲らない。

しかもドレイクに関してはキリスト教的価値観で一夫多妻にすら否定的だ。

「ドレイクさん。九十郎がさ、今日の晩御飯は皆が好きなものにしてくれるつて。

一緒に食べようよ」

「何のつもりだ？ 和解……でも求めているのか、イヌところ」

「九十郎の事が好きになつたんでしょ？ 一緒に旅をして楽しかつたんでしょ？」

この楽しい時間がいつまでも続けば良いのにつて思つたんでしょ？

分かるよ、犬子も同じだったから。本当はさ、犬子も同じ事を考えてるから。

九十郎と2人で浪人生活していた頃が凄く楽しくて、凄く懐かしくて、

もう一度あの頃に戻りたいつて思つた事は、1度や2度じゃない」

「……………」

「でもね、ドレイクさん。犬子はね……辛い事も、楽しい事も、悲しい事も、

嬉しい事も、九十郎との思い出つて、皆と分かち合いたいとも思つてる。

これだつて犬子の偽りの無い本心だよ。

ドレイクさんだつて九十郎が選んだお嫁さんなんだから。

これから家族になる人だから」

「ふ……そいつは叶わん願いだな。『九十郎』は私がもらう……!!」

『分かち合おう』とは思わないの？」

『『独占』だ』

『『殺し合い』になるよ』

『何を今さら』

こうした幾度かの話し合いの末……ついに犬子の目が人殺しのそれになる。

自分から九十郎を奪おうとする者は、例え神でも許さない。

かつて拾阿弥を斬殺し（第7話）、かつて罪の無い織田兵達を殺戮した（第168話）、人殺しの目をしていた。

「後からしゃしゃり出た連中がふざけた事を言うじゃないわよ！」

九十郎の正妻は柘榴よ！ これに関しちや騎士様でも皇帝様でも譲る気は無いわつ
！

「いや、あの……正直、柘榴は本当に九十郎の正妻で良いのかつて思つて……」

「そう思つても今は言うんじゃないんだぜっ！」

犬子以外の国内組も正妻は柘榴だと譲ろうとしない。

しかも当の本人が『自分なんか九十郎の正妻で良いのだろうか?』と揺らいでいるのが話をややこしくしていた。

九十郎の正妻の座を巡る軋轢は日を追うごとに激しさを増していき、いつしか血を血で洗うような惨劇にさえなりかねない、危険な状態になりつつあった。

「もう面倒臭いから殴り合いで決めちゃおうよ。

最後まで立ってた人が正妻で良いんじゃない?」

そしてついに、そんな一二三の斜め上の提案に全員が頷いてしまう。

かくして始まった齋藤九十郎の正妻戦争!

果たして九十郎の正妻の座を勝ち取るのは誰になるのか!?

ネタバレ・柘榴です。

果たして雫の悪巧みは成功するのだろうか!?

ネタバレ・駄目でした。

次回! カパックとドレイクと孔明と九十郎『正妻戦争』にご期待ください。

進めカパック！ 戦えドレイク！ 頑張れ孔明！ 負けるな九十郎！ 大江戸学園の運命は君達にかかっているぞ。

……

……

……

正妻戦争は初っ端からグダグダになった。

開幕直後に一二三が国内組を裏切り、犬子、柘榴、粉雪、美空が轟沈。

ほぼ同時に孔明が海外組を裏切り、ドレイクとカパックがKOされた。

「一二三ばーんちー！」

「孔明きーつくー！」

ラ○キーマンかなと見間違うようなへなへなパンチとよわよわキックが炸裂する。

一二三も孔明も全くの無傷である。

「とうっ！ 下駄投げっ!!」

一二三の下駄が未来に向かって（具体的には明後日の方向に）飛んだ。

「はああっ！ 軍師ビームっ!!」

孔明の羽扇からビームが……出なかった。

一二三も孔明も全くの無傷である。

「お前ら……夕飯作つてるから、あんまり埃を立てるなよ」

そんな2人のじやれ合いを横目に見ながら、九十郎はため息をつく。

本当に血で血を洗う惨劇になったら止めに入ろうと思つていたものの、死人が出かねない程の強硬派だった犬子とドレイクが倒れた時点で九十郎は勝負の行方に興味を失い、全員分の食事の用意を始めていた。

国内組にも海外組にも愛想を尽かす程に勝負を泥沼化させようとした雫の思惑も、この時点で粉碎されている。

凄惨な殺し合いを回避してくれた2人を感謝したい気持ちもありつつ、孔明はともかく一二三に感謝するのは癪だなという気持ちもあつた。

諸葛孔明は敵の中に内通者を仕込むのが得意技だ。

その諸葛孔明を相手に、表裏比興と書いてクソヤロウと読む真田昌幸をぶつけるのはハナツから無謀だったのかもしれない。

この後、夕食ができるまでに決着がつかず、一二三と孔明の同着優勝という事で正妻戦争は幕を下ろす。

「犬子……生きてるか？」

ケツにカ〇チョークくんが突き刺さったドレイクがのっそりと起き上がる。

「何？ 第二ラウンドって言うのなら相手になるよ」

犬子のケツにもカ〇チョーくんが突き刺さっていた。

「次か……もし次があるのなら……」

「そうだね、次があるなら……」

「次はあの2人は抜きでやろう」

「次はあの2人は抜きでやろう」

何かを通じ合ったドレイクと犬子が、がっちり握手をした。

2人の視線の先では、仲良くじやれ合っている一二三と孔明、そして悪巧みが破綻した事を悟って頭を抱えている雫の姿があった。

例え前田利家とフランシス・ドレイクがチャンバラを初めても、その2人の尻にカ〇チョー君が突き刺さっても、何故か仲直りをして、大江戸学園ではよくある光景である。

大江戸学園に冒険の種は尽きまじ！

経験点と成長点を受け取り、次の冒険に備えるのだ！

優勝者の権利として一二三と孔明が九十郎にご褒美エツチを要求し、九十郎は孔明を初めて『朱里』と呼べるようになるのだが……それはまた別のお話である。